

あさおん・オブ・ザ・デッド

夢野ベル子

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、ボクが目を覚ますと最高にかわいい女の子になった。ヤッターかわいいかわいい！ でもそれだけじゃなくて、外ではゾンビハザードも起こってた。やばいよやばいよー！ その後なんやかんやあってボクはゾンビに襲われないらしいということがわかって一安心。そしてボクは唐突に天才的ひらめきを成し遂げたのだ。

そうだ——、終末だしTSゲーム配信しよう。

この物語は、あさおんでゾンビで配信な、全部盛りの作品になる予定です。

一章はゾンビモノのお約束を踏襲した人間たちの観察日記。二章は配信でアイドル化していく主人公に焦点を当てています。三章はミステリー風味、政治風味。四章は最初強く当たって後は流れで！

目次

あさおんゾンビと佐賀編

イラストとキャラクターシート 1

ハザードレベル 1 9

ハザードレベル 2 26

ハザードレベル 3 36

ハザードレベル 4 47

ハザードレベル 5 57

ハザードレベル 6 69

ハザードレベル 7 81

ハザードレベル 8 92

ハザードレベル 9 106

ハザードレベル 10 116

ハザードレベル 11 127

ハザードレベル 12 138

ハザードレベル 13 150

ハザードレベル 14 167

ハザードレベル 15 180

ハザードレベル 16 193

ハザードレベル 17 206

ハザードレベル 18 219

ハザードレベル 19 230

ハザードレベル 20 241

ハザードレベル 21 251

ハザードレベル 22 269

ハザードレベル 4 6	ハザードレベル 4 5	ハザードレベル 4 4	ハザードレベル 4 3	ハザードレベル 4 2	ハザードレベル 4 1	ハザードレベル 4 0	ハザードレベル 3 9	ハザードレベル 3 8	ハザードレベル 3 7	ハザードレベル 3 6	ハザードレベル 3 5	ハザードレベル 3 4	ハザードレベル 3 3	ハザードレベル 3 2	ハザードレベル 3 1	ハザードレベル 3 0	ハザードレベル 2 9	ハザードレベル 2 8	配信編		ハザードレベル 2 7	ハザードレベル 2 6	ハザードレベル 2 5	ハザードレベル 2 4	ハザードレベル 2 3
595	581	570	556	542	529	517	504	483	470	458	443	431	416	402	390	379	366	351			333	318	307	294	280

町役場編

ハザードレベル70	928
ハザードレベル69	918
ハザードレベル68	905
ハザードレベル67	893
ハザードレベル66	879
ハザードレベル65	864
ハザードレベル64	852
ハザードレベル63	837
ハザードレベル62	824
ハザードレベル61	812
ハザードレベル60	801
ハザードレベル59	786
ハザードレベル58	768
ハザードレベル57	754
ハザードレベル56	743
ハザードレベル55	728
ハザードレベル54	714
ハザードレベル53	699
ハザードレベル52	682
ハザードレベル51	668
ハザードレベル50	655
ハザードレベル49	641
ハザードレベル48	628
ハザードレベル47	611

ハザードレベル 9 5
ハザードレベル 9 4
ハザードレベル 9 3
ハザードレベル 9 2
ハザードレベル 9 1
ハザードレベル 9 0
ハザードレベル 8 9
ハザードレベル 8 8
ハザードレベル 8 7
ハザードレベル 8 6
ハザードレベル 8 5
ハザードレベル 8 4
ハザードレベル 8 3
ハザードレベル 8 2
ハザードレベル 8 1
ハザードレベル 8 0
ハザードレベル 7 9
ハザードレベル 7 8
ハザードレベル 7 7
ハザードレベル 7 6
ハザードレベル 7 5
ハザードレベル 7 4
ハザードレベル 7 3
ハザードレベル 7 2
ハザードレベル 7 1

12631252123912251208119111671154114211301119110910981083106910551043103110161005 992 980 968 954 939

ハザードレベル 119
ハザードレベル 118
ハザードレベル 117
ハザードレベル 116
ハザードレベル 115
ハザードレベル 114
ハザードレベル 113
ハザードレベル 112
ハザードレベル 111
ハザードレベル 110
ハザードレベル 109
ハザードレベル 108
ハザードレベル 107
ハザードレベル 106
ハザードレベル 105
ハザードレベル 104

朝焼けの新世界編

ハザードレベル 103
ハザードレベル 102
ハザードレベル 101
ハザードレベル 100
ハザードレベル 99
ハザードレベル 98
ハザードレベル 97
ハザードレベル 96

1586157315601544152515121500149014781462144814351421140513921379 13631354134013241312129912861274

ハザードレベル 1 4 3
ハザードレベル 1 4 2
ハザードレベル 1 4 1
ハザードレベル 1 4 0
ハザードレベル 1 3 9
ハザードレベル 1 3 8
ハザードレベル 1 3 7
ハザードレベル 1 3 6
ハローワールド編
ハザードレベル 1 3 5
ハザードレベル 1 3 4
ハザードレベル 1 3 3
ハザードレベル 1 3 2
ハザードレベル 1 3 1
ハザードレベル 1 3 0
ハザードレベル 1 2 9
ハザードレベル 1 2 8
ハザードレベル 1 2 7
ハザードレベル 1 2 6
ハザードレベル 1 2 5
ハザードレベル 1 2 4
ハザードレベル 1 2 3
ハザードレベル 1 2 2
ハザードレベル 1 2 1
ハザードレベル 1 2 0

19011887187318611846183018191807

1790177717661753174117281716170416921676166216501634161916091596

ハザードレベル 1 5 4
ハザードレベル 1 5 3
ハザードレベル 1 5 2
ハザードレベル 1 5 1
ハザードレベル 1 5 0
ハザードレベル 1 4 9
ハザードレベル 1 4 8
ハザードレベル 1 4 7
ハザードレベル 1 4 6
ハザードレベル 1 4 5
ハザードレベル 1 4 4

20502035202320111995197819681957194119261913

あさおんゾンビと佐賀編

イラストとキャラクターシート

本作品でイラストをいただいていたしまいました。

感謝感激です。

おあ様より「緋色」夏服バージョン。

腕については飯田さんらしいです。主人公の対比で犯罪臭がすごい。
主人公のほわつとした様子が描かれています。

おあ様より「緋色」冬服バージョン。

かわいらしく描いていただき、本当にありがとうございます！

★配信編★

ようやく突入ということで、

おあ様より『終末配信者ヒーローちゃん』いただきました。

ありがとうございます！

動画欄でのコメントが『TSロリ配信者らしい』感じます。

終末でもカワイイを求めるのが人間のサガだと思う。

アンニュイな感じで、人間を見定める緋色。
お皆様よりいただきました。
挿絵としても使わせていただいております。

ついでに、備忘録的なキャラクターシートを置いておきます。
ネタバレ要素は、あらすじの時点で既に明らかなので、特に気にすることは
ありません。

夜月緋色（やづきひいろ）

今作の主人公。

ゾンビランドが流行っているというただそれだけの理由で佐賀在住
になった。

プラチナブロンドと紅いおめめが特徴的なTSロリ。小学五年生
程度の容姿。

性転換女子の当たり前の権利として、愛され系の超絶美少女。

その実、ぶっちゃけゾンビ。

そのため、ゾンビに襲われない。ゾンビを操れたりする。周りの汚
染率が高まるにつれて急速にレベルアップ中。

男でも女でもなく人間でもゾンビでもないふわっとしている存在
感。

他人のクオリアを信じているため、「人間」には譲歩しているつも
り。

上峰雄大（かみみねゆうだい）

主人公の親友ポジ。

物語を駆動させるためというただそれだけの理由で札幌に飛ばさ

れた。

ハイスペックではあるが、普通の人間。

神埼命（かんぎきみこと）

福岡在中 福岡の高校に通う3年生。

わりと丁寧口調で、亜麻色サイドテール。パソコンに詳しい理系少女。

きつと配信についても手伝ってくれるはず。

緋色のことをヒーローだと考えている節があり、わりと妄信している。

好きな人がたまたま女の子になっただけの百合系女子。

飯田人吉（いいだ・ひとよし）

おっさん。今年40。

常盤恵美（ときわ・えみ）

エミちゃん。黒髪パツツンの正統派日本人美少女。

小学六年生 半ゾンビ化済み。

ほとんど動かず、代謝も少なめなため、黙っていると等身大のお人形さんみたいな感じ。触るとほのかに温かい。

常盤恭治（ときわ・きょうじ）

高校二年生。金髪細マッチョ。元野球部所属。お坊ちやまだと言われるのがいやで、あえて不良をきどっている。妹には優しいお兄ちゃんだった。

ゾンビお姉さん（ぞんびおねえさん）

緋色のヘルプにいの一番にかけつけた、ふんわり柔らかなお姉さん。おっぱい大きめ。クオリアがあるかは不明であるが、きつとご主人さまの緋色のことが大好きなメイドさんになるに違いない。

大門政継（だいもん・まさつぐ）

元自衛官。ゾンビ化現象が始まったと同時に、大量の武器をもつてとんずら。混乱時だったのでバレてはいない。自分の王国を作ろうと考えている。

姫野来栖（ひめの・くるす）

自分がかわいいと思ってる系女子。かわいいもの好きでもあるので、緋色のことも嫌いではないが、自分のほうが大事。大門と恭治に媚を売っているが、恭治がエミにかかりきりになり、次第にエミがうとましくなる。エミがゾンビであるということもエミ憎しの原因に。

小杉豹太（こすぎ・ひょうた）

ひよろ長めがね。23歳のホームセンター店長。命のことが好きだが、大門が狙っていると考え、手が出せない。自分のポジションを考えながら発言する合理的なタイプ。

配信編

嬉野乙葉（うれしの・おとは）

国民的アイドルグループのひとり。デースが口調だがキャラを作っていて、本当は超ド級の陰キヤ。西欧人とのハーフらしく金髪碧眼の美少女。捨て子だったが今のお父さんには育ててもらった恩を感じている。鬱になるなら今のうちがひそかな合言葉。

乙葉の父

怪しい宗教団体である魔瑠魔瑠教の神父（住職？）さん。ワナビ時代に趣味で書いていた小説が今の状況に酷似していたことから、自分を予言者と勘違いしちやっただのたただのおっさん。緋色のことを天使であると信じている。乙葉の養父としては比較的まとも。

ピンクさん

もといピンクちゃん8歳。日米共同の科学者集団に所属している。ヒロちゃんにアプローチするために一週間足らずで日本語を習得するほど頭がいい。ピンク色のショートカット。本名はファースト

ネームとファミリネームをあわせるとMOMOちゃん。なのでピ
ンク。

幼女先輩

FPSがやたらと得意なプログラマー。チート能力持ちの緋色に
匹敵する程度のエイム能力を持ち、それ以外にも状況判断能力・環境
適応能力等ある意味別種のチート持ち。元自衛隊で本名は『小山内』。
いまでは復帰して一尉の地位にある。

ぷにくら様

FPSを趣味でずっとやっていたアマゲーマー。ゾンビハザード
が起きてもゲームがやめられなかった人。ヒロちゃん動画を見始め
てからは、その傾向が強くなった。

ぼっち

ハンドルネームのとおりひとりぼっちな男子大学生。ゾンビハ
ザード後はアパートに引きこもってネットで暇をつぶしていたが、い
よいよ食糧がなくなり自殺を図るところを緋色に助けられた。本人
は否定しているがロリコンである。

太宰こころ

図書館にこもっていた文学少女。一応ノーマルだが隠れ百合であ
る可能性も。ゾンビハザードが起こった際にいっしょにいた百合少
女の平岡鏡子にプッシュユされまくりなし崩し的にいたしてしまった。
これももうわかんねえな。

平岡鏡子

相手がノンケでもかまわずくつちまった百合少女。ふわふわして
いる性格だが、ゾンビハザードが起こっていつ死ぬともわからない状
況で、封印していた心を解放してしまった系女子。

五十嵐喜代徳

恵美の家で出会った高校生男子。弟とともにゾンビハザード後の
世界をサバイブしていた。

五十嵐新太

男の娘。見た目は美少女小学生だが生物学的な性別は男。ヒロ友
のひとり。

久我春人

自衛隊。三尉。緋色を打倒すればゾンビハザードが終息すると考えている。その実、家族がゾンビ化して撃ち殺してしまった後にゾンビから回復させる能力を持つ緋色の存在を知り、なぜもつと早くにあらわれなかったのかとほとんど八つ当たりに近い憎悪を抱いている。

入間清輝

久我と同じく緋色排斥一派のひとり。幼女先輩や久我にとっては上司にあたる。

町役場編

女将さん

本名、多々良明子。古式ゆかしい温泉宿の女将さん。早くに夫をなくして、ひとりで子育てをしてきた。最近反抗期の娘に手を焼いている。

大山正子

不良っぽい容姿をしているが地毛。確かに負けん気は強いが、案外普通の子である。中二だが中二病ではない。

昭川和美（委員長）

めがねっこ。温泉湯煙殺人事件の当事者のひとり。中二だが中二病ではない。早成と一番仲がよく、こわがりな早成をよくかばっている。中二だが中二病ではない。

平野早成（さな）

かなりのこわがり。客観的に見ればいろいろと周りに迷惑をかけているが故意ではない。平穏な世界ではマスコットの存在でも、極限的な状況では何かと厳しい。中二だが中二病ではない。

多々良令子（娘）・・女将さんのひとり娘で、ゾンビハザード時に早成をかばいゾンビになってしまった。無事、緋色の力で回復してきたが、ゾンビのときに人肉をモグモグしちゃった件でひと悶着ある。パティシエになるのが夢。中二だが中二病ではない。

杵島未宇（きしま・みう）

耳が聞こえない10歳くらいの女の子。ヒロ友。

湯崎蓮（ゆざき・れん）

探索班のひとり。実は元ダンサーだったりするがその技を披露する機会はおそらくない。

ゲンさん

探索班のリーダー的人。初老。

葛井明彦（くずい・あきひこ）

町役場の町長。本当の町長の息子。びっちりとした7:3分の狐目の怪しさ満点の男で30歳くらい。元ニートだが陰キャというわけではない。

萌美おばあさん

ワンちゃんを飼っている。ワンちゃんの名前は五郎丸（特に意味のない設定）。

足を悪くしており、要支援状態。極限的なゾンビワールドではわりと厳しい状態ともいえる。

辺田（へた）

町役場に救済されたひとり。何かと湯崎と衝突するクレーマー。

イスカリオテのジュディ

日米共同の経済会議議長を務める若干13歳の少女。

黒髪黒目で日本人っぽい配色だが、顔のつくりは人形めいている。いわゆるラスボス。

朝焼けの新世界編

ピンクママさん

ドクターピンクのママ。涼やかな蒼の混ざった銀髪。年齢からするとどう考えても30代のはずが20代に見えるほど若々しい。主人公曰く、雪女みたいな感じ。

江戸原首相

眼鏡をかけた白髪混じりの政治家にしては若い日本の首相。ゾンビハザードによって閣僚崩壊した後に、合法的に後を継いだ御仁。べつに悪い人ではないが、日本人らしく少々押しには弱い。主人公が日本に現れたことから、日本の救世主のように感じている。

本郷撫子

まだ20代半ば。閣僚崩壊時に首相の秘書になる。幼女先輩の後輩。元自衛隊員。有能なできる人であり、首相とは親娘みたいな関係。ダメなお父さんをしかりつける娘みtainなポジション。シヨタ好き。

アメリカ・デフォルトマン

アメリカ合衆国大統領の娘。11歳。

金髪碧眼のお嬢様で、少々強引なところがあるが普通のお子様。日本語が話せる程度には才気抜群。ついでに胸部も抜群。

トミー・デフォルトマン

アメリカ大統領。40歳。眼鏡をかけて髭もしや濃い茶髪のイケメン。蒼いスーツを着こなしている。主人公に対しては国益のために利用したい気持ちもあるが、基本的には協調路線。

ゾイ・トゥリトトリ・ビットリオ

年齢10歳の小国の姫君。ジュデツカの手先。褐色肌に白銀の髪と薄い水色のような瞳をしている。

ハザードレベル1

突然だけど、「あさおん」って言葉知ってるかな？

知らないなら仕方ない。

今後のこともあるし覚えておいてほしい。

|||||

あさおん

『朝』になったら『女』の子になっていたというTS（性転換）の一種。

その言葉を縮めてあさおんと呼称する。

TSには薬物や手術、超常現象などいろいろな理由があるが、

あさおんの場合、理由はない。理由なきTS。だが、そこが美しい

！

|||||

そう。

ボクは朝起きたら女の子になっていた。理由なんてわからない。

それがあさおんの様式美だしね。

なんだか身体の調子があってもよくて、はじけるみたいなエネルギー

ギーがあるなあって感じで、ふわふわしてて、完璧で、それで

「んーっ」って伸びをしたときの鈴鳴りの声で気づいた。

なんだかとっても女の子な声。

視線を少しだけ下げると生来の日本人で黒髪であるはずが、絹糸も

かくやっというほど細くてキラキラしたプラチナブロンドの色をして

ていた。ていうか伸びまくっていた。モップみたいにモサモサして

た。これは世に言うファンタジックな髪形、腰ぐらいまでの長さがあ

るスーパードロングヘアというやつですな。

そして極めつけは姿見。ボクの部屋は何の変哲もない男の子の部

屋なんだけど、今はわりと珍しいCD入れ兼全身姿見があつて、それ

で見してみた。

あ、ヤッター！　かわいい！　かわいい！

見た目は小学生くらい。身長は140センチ前後。

胸は小学生準拠な感じの幼げな少女がそこにいる。男はキャラクターを胸でしか認識しないとかいわれてるけど、いやほんとそうでした。でもこれがいい。

これこそが完璧。

もう絶対に均整がとれた身体というのはこういうことを言うんだろうな。

不自然な巨乳とか、ましてやロリ顔巨乳とか害悪極まりないと思います。（個人差があります）

瞳の色はレッドエメラルドっていうのかな、なんとというか夜空の昏さと血のような紅さが混合したような不思議なコク？　のある瞳をしていた。

着ている服がクリーム色とネズミ色したフリースじゃなければ、もっと可愛かっただろうけど、だぼだぼしていて、これはこれでかわいい。

ていうか、顔だけで可愛い。全身あますところなく可愛さ成分で溢れてるけど、ともかく語彙力低くってごめんね。

ボクがかわいいっていう感覚よりはまだなんとなく他人みたいなのところもあつて、瞳の中にボクがいましたって感じがして（哲学）、

ともかく。なんだか。

吸いこまれそう。

ふへへ。

かわいい。なんだろう。こんな勝利確定やん。ボク正義になっちゃった。

「ボクかわいい」

もう、最高にかわいい。ソシヤゲでいったらSSRを飛び越えてSSSSSRくらいじゃないかな。世界人口70億分の1をひきあてちゃった感がある。

ちなみにそんなボクは何の変哲もない佐賀県K町に住む大学二年生。

でも今はアイドルユニットの超絶美少女といっても通じる容姿。

あー、もう永遠に鏡を見つづけられそう。

そんなこんなで、三十分くらいはじっと鏡を見続けていたんだけど、ふとした拍子に我に返った。

いや、それにしてもなんでボク女の子になってるんでしょ。

「まあかわいいからいいんだけど」

あさおんの掟だといわれればそれまでだけど、なんらかの理由がほしいのも確かだ。例えばマッドサイエンティストな妹がいれば、不思議な薬で一発美少女なんてのも一応納得がいくところなんだけど……。

ボクってはつきり言って引きこもり気味。

友達なんて数人しかいないし、親は高校に上がる頃に死んだしなあ。

ぼっちはつらいぜ。でも今は美少女、ひとりでもハッピーシユガーライフっ。

やつふーっ！

ちなみに今、大学は夏休み。

言うまでもないけど、大学の夏休みはぼっちにとって超暇だ。

友達の雄大は夏休みには北海道に行くって言って、ボクは面倒くさがってついていかなかった。

だから、いまはひとり。

なぜ女の子になったのかはわからない。

そういえば、一週間くらい前のニュースで、なんたら彗星というのが最接近するとかニュースで言った気がするけど、そのせいかなー。

どうでもいいか。

それで、なんとなくな感じで、いつもの日常のようにパソコンのディスプレイの電源をつけて、気の向くままにいろいろ触ってみる。

ちなみに、PCの電源はつけっぱです。

いまどきの大学生っていったらスマホだけとかなんだろうけどさ。ボクってわりとチームのゲームとかもしてるからね。

あ、でもテレビ。てめーはダメだ。国営放送の怖い人たちが取り立てに来ちゃう。そんなわけで、家の中にはテレビはない。けれどパソコンはある。

そんな状況だった。

それにしても、どこのニュースも代わり映えしないな。

どこもかしこも。ゾンビのことが書いてる。ちよつとは気合入れていろいろバラエティ豊かにしろよ、なんて思ったり。

「えっと。こっちでは人食いウイルスのパンデミック。で、こっちはゾンビ対策でボールは有用か否か？　ゾンビーフを食べた友人がゾンビになって草も生えない。香水つけたらゾンビに追われた件。かゆうま日記の書き方。ふうーん……って、なにこれ！」

ふぁ？　ゾンビ？

世の中の流行はゾンビハザードなの？

エイプリルフルはまだ先だよね？

ボク一日眠っていただけだよね？　あれ？　違うの？

パソコンのカレンダーを見てみると、ボクが寝ていたのは……えっと、8月3日の朝か夜かわからない真夜中の4時くらいまでゲームやってて、今が……8月5日の朝8時だから。

ボクが眠ってから28時間後？　なのかな。どう考えても寝すぎでしょボク。

まあ28日後とかそんなんじゃないやなくて、ちよつと安心したけど。

そんなに時間経ってないみたいだけど、えーつとパンデミックってあれだよな。

ゾンビにかまれたらゾンビになってしまう。倍々ゲームが増えていくっていうあれ。

ボク、こう見えてゾンビスキーでもあるからわかるんだけど、だいたい、28時間も経過したら、外はゾンビだらけなのかもしれない。

あの……、神様。ボクのあさおんライフはどうなるんでしょう。

百合的にいちやいちやしたり、男の子に迫られてドキドキしたり、着せ替え人形みたいにされてきゃっきやうふふしたりするハッピーライフは？

ゾンビハザードが起きた世界で、そんな甘ったるいことができるのか。

それがボクにとっての喫緊の課題だった。
ボク女の子おおお。

☆Ⅱ

あー、ゾンビの声がするー！

そしてボクはこれを華麗にスルー！
つてできるか！

閉め切ったカーテンを、スカートをまくりあげるようにして、窓を少しだけ開けて、おそろおそろ外の様子をチラつとうかがったけれど、道を歩いている人影はなかった。

どこかから聞こえてくる奇妙なうなり声も、夏の陽炎に溶かされていてよく聞こえない。本当にゾンビランドになっちゃったのかな。
佐賀……。

再び窓を閉めるボク。

この町はぶっちゃけスーパーど田舎だ。田園風景が広がっているとかそういうのじゃないけど、どれくらい田舎かというと、某有名なショッピングモールがついこの間撤退しちゃって買い物難民が発生しちゃってるくらい田舎だ。大学まで原付ぶつとばしても30分は余裕でかかるそんな場所だ。愛すべき佐賀ランドの中でも陸の孤島感あるかなー。

要するに住宅地なんだけど、それ以外なんもない場所。ほんとだったら大学の近くにアパート借りたほうがよかったんだけど、クツソ安い物件がここにしかなかったんだよね。

だから——、このあたりがどういう状況に置かれているのかまったくわからない。そもそも、ネットのよくわからない情報だけじゃ信頼できない。

でも、外に出るなんて怖いことできない。

こういうときは政府の公式ページが一番ソースとして確かだと

思つて、調べてみたらすぐに見つかった。

厚生労働省直下のところに、『暴力衝動性、多機能不全障害、反社会性人格障害を複合的に発症させる未知の細菌あるいはウイルスについて』とかなんとか書いてあった。

なんだよ。細菌あるいはウイルスつて、素人のボクでもわかるけど、天と地ほど違うぞ。

まるで、犯人は20代から30代もしくは40代から50代の犯行みたいな曖昧さだな。少なくともゾンビの一匹や二匹を捌いたり、血液チューチューしたりしてるんなら、発生原因がウイルスか細菌かぐらいはわかってもいいはずなのに……。

つまり、よくわかってないってことなんだろう。

ジョージ・A・ロメロ監督のオールタイプゾンビってことかな？

|||||

ジョージ・A・ロメロ監督

言わずと知れたゾンビの生みの親。

ロメロ監督のゾンビはゆったりした動き。脳を破壊しなければ停止しない。

食人する。一応5年程度で腐るという設定もあるようだが、当時のメイク技術が発達しておらず、紫色に肌を塗るだけのものだったため今ごろのゾンビもののような腐ってる感があまりない。なんとというか人形めいてる感じ。そして、ロメロ監督のゾンビ作品ではゾンビが発生した理由が、あさおんと同じく特にないのである！ 小説版では彗星がうんぬんと書かれているが、それはフェイクで本当は無い。したがって、ウイルスとか細菌とかではなく、理由は不明のままである。理由無きゾンビ。だがそこが美しい！

|||||

枝ページを見ていくと、分かっていることは少ないみたいだ。

曰く、彗星が近づいたときに全人類の十パーセント〜三十パーセン

トが発症。

曰く、現在のところ空気感染した例は見受けられない。

曰く、発症した患者は肌が土気色になり、代謝がほぼおこなわれな
い。

曰く、知能は昆虫程度並みになり本能的な動きをおこなう。

曰く、その本能とは食欲であり、食欲の対象は罹患していない人間
に向かう。

曰く、患者に噛まれたり、爪などで傷つけられた場合、感染する。

曰く、感染から発症までの時間は一定ではない。噛まれて十秒ほど
の例も。

曰く、患者に襲われ正当防衛をおこなう場合、脳を一撃するのが良
い。

あー、やっぱりオールドタイプかなあというのがボクの感想。

いくつかのクリップ映像もあがっていたから見てみたんだけど、昨
日の今日の話だからか、鎖につながれたゾンビは生氣のない表情と顔
色が死ぬほど悪い以外はべつに凄惨ってほどではなかった。簡単に
いえば人形みたいな感じだったんだ。

銃を持った人がゾンビの前を歩くと、ゾンビもそれに釣られてのろ
のろと歩く。

歩くスピードについては、のろのろからちよつと早歩き程度で、全
速力で走ってくるタイプじゃないみたい。

このあたり、全速力で疲れなく走ってくるんじゃ、たぶん人間はす
ぐ全滅しちゃうよね。でも、突然隣に寝ていた人がゾンビになってい
たなんてぞつとする。

たとえノロノロな動きでも、ゾンビガチャではずれ引いた人は大変
だ。

だって、愛しい人がゾンビになってしまったっていた、あるいは自分自
身が寝て起きたらゾンビになってしまったかもしれないんだ。

夫婦で配偶者がとか、子どもがそうになっていたら、ほとんど抵抗は
できないだろうし……。

今もネットは生きてるみたいだけど、情報を手に入れる間もなく噛

まれてしまってる人は多いんじゃないかな。

幸いにして、今の日本は独居の人が多くて、確か30パーくらいの人がひとりぐらしみたいだけど。

孤独な人はゾンビになりにくいなんて俗説もあるけれど、もしかすると本当にそうなのかもしれないね。

ぼ、ボクは完全なぼっちじゃないよ。

ちゃんと友達いるし。

ボクはスマホで数件しか登録していない番号のひとつに電話をかける。かける前にわかったけど、雄大からも、命ちゃんからも電話がかかってきていた。メールも何件も。

とりあえず……。

友達の雄大かな。命ちゃんは後輩だし、気になるところだけど、気の置けないといったらやっぱり同性の雄大のほうがいいからね。

いまはTSしているという脳内セルフツツコミは聞こえないことにした。

PPRRRRRRRRRRRRRRRRRRRRRRRRRR

P!

つながった。よかった。

「おい。緋色か?」

「はい。ボク緋色ブス……」

突然ですが、ボクの名前は夜月やづきひいろ緋色。

実のところ男だったときから、スカレットちゃんとか呼ばれたりしてた。

中二病って言わないでね。若干気にしてるんで。

今のボクには似合いますすぎる名前かなーなんて思ったり。

「あ? なんだ、おまえの声が小学生女兒みたいな幼気な声に聞こえるんだが」

「気のせいだよ。ゾンビハザードのせいじゃない?」

「そうか。そっちは大丈夫なのか?」

「ボクは大丈夫だよ。雄大のほうは大丈夫なの」

「こっちは北海道の寒いところにいるからな。いまは周りにゾンビど

ころか人もいやしねえ。ていうか寒い……」

「あの、食べ物とか大丈夫なの？」

「ああ、こっちは一週間分くらいのお食糧はあるから大丈夫だ。おまえんとこのころのほうこそ大丈夫か？ まだ電気は通ってるようだが」

「気にしてくれたの？ うれしい」

雄大は言葉は雑だけど、心はあつたかな奴だ。

「おまえ、なにそれ、誘惑してんの？」

「え、な、なにいつてんのさ」

「オレの聞き間違いなのか、めちやくちやかわいく聞こえるんだが。特に『うれしい』のとき、かわいすぎた」

「あたまん中、ゾンビウイルスに冒されてんじやないの」

「いやー、なんか背筋のあたりがゾクゾクするような心とろかすボイスしてるぞ。おまえ、まさか、あさおんとかしちやつてるんじやないだろうな」

「そそそそそんなわけないでしょ。もう切るよっ」

「お、おいちよつと待てよ」

「なにさ」

「これからどうするつもりなんだ」

「どうしよう……」

いや本当にどうしよう。

家の中にはろくなものがない。食料品だって冷蔵庫の中には何一つ入ってない。マヨネーズだけしか入ってないよ！ どうせ料理オンチだよ！

「ともかく状況がわからないうちは家から出るなよ」

「でも、ボクの家、食糧もなにもないんですけど」

「オレが傍にいれば食糧分けてやるんだがな」

トウシク。

ヤバイな。雄大。

その名のとおり、でっかい心を持ってやがる。

ボクが女の子だったらほれてたよ。

って、今のボクは女の子だったーっ！

「ち、違います。ボクは女の子が好きなんですう！」

「はあ？ 食糧の話からなんで女の子の話になるんだよ」

「あ、あれだよ。女の子は砂糖菓子みたいな味がするんだよ」

「食べたことあんのかよ」

「あるよ」

ペろりと自分の腕を舐めてみました。

なんか甘かったです。

うむ。女の子の主成分はやはり砂糖菓子でまちがいないな。

ハッピーハッピー。

「と、ともかく雄大が無事ならよかったよ。こっちはこっちでなんとかしてみるから切るね」

「ああ、わかった。それと、命のほうにも電話かけてくれるか。こっちからかけてみたんだけど通じないんだよ」

「ん。わかった」

そんなわけで電話を切った。

どうやら雄大のほうは人が少ないところにいるらしい。あいつ山登りするっていったからなあ。どこの山なのかは聞いてないけど。電話が通じるってことは、そこまで高いところじゃないのかな。

命みことちゃんについてはボクも心配だった。ほぼ引きこもりかけてました系のボクにしたって、後輩のことが気にならないわけがない。

でも、ボクが電話をかけても、コール音が鳴るばかりで誰も出なかった。

☆
☆

とりあえず、やることがなくなっちゃった。

部屋の中は冷房がきいていて快適だし、まだ電気は生きている。プロジェクトゾンボイドというゲームだと、電気はいずれ尽きちゃうけど、現実ではどうなんだろうね。

佐賀の場合は、原兎が近いから、もしかしたら長持ちするんじゃないかという淡い期待もある。

でも。今のままだと結局ジリ貧なことは間違いない。

今は28時間も寝てた割りにはそんなにおなかはすいていないけど、ずっとこの部屋にいるわけにもいかないし、いずれはどこかにいかないといけない。

政府の公式ページには各エリアの避難場所が決まっていたけれど、ここからだとなんかの小学校みたいだ。距離は二キロ程度。たいしたことのない距離だけど、もしもゾンビがいたらと思うと、永遠のようにも思えるし……、実際、ゾンビモノだと避難場所は、感染者がひとりでもいたらアウトなわけで、非常にリスクが高いといえた。

あまり行く気はしないなあ。

どうせなら近くのコンビニとかのほうがいいかな？

まずはできることを探さないか。

そういえば、災害時の対策の基本はお風呂場に水を張ることだったな。死ぬほど安アパートのここでも、お部屋の中にお風呂はある。

ちっちゃいけどね。

いまのボクなら余裕のサイズですよ。

でも、災害時にお風呂に入るんじゃないやなくて、飲み水とか身体を軽く拭いたりするために使うんじゃないやなかったかな。

蛇口をひねると水はまだ普通に出てた。

よし、これなら水をためておくこともできるな。そのうちガスも電気も水もとまっちゃうんだろうけど。

賢いボクはきちんと災害対策ができる子なんです。

そして、ふと、お風呂場の鏡が目に入る。

さらさらの髪と解像度高すぎなつるつるのお肌。そして、神秘的な赤色をたたえるぱっちりおめめ。

少しジト目してみると、なんだか猛烈にかわいい。

そして、ボクは思った。

そうだな——、お風呂に入ろう。

災害対策はどうしたと思わないでほしい。お風呂場の水なんてもう一回貯めればいいと思ったのもあるし、いまのボクの体に興味があつたのも確かだ。

さっそくお湯のほうに切り替えて、ボクはふうんふうんと鼻歌交じりでパソコンのところに戻る。

お湯がたまるまではもう少し時間がかかるから、匿名掲示板でも覗いてみよう。

なんでゾンビハザードが起こってるのに、こんなに余裕なのかボクにもよくわからない。ともかく身体と心が安定している感じなんだよね。

いまのいままで感じていなかった完璧な感覚というか――、パズルのピースが埋まっているような完成度の高さというか。そんな精神の安定を感じてる。

「えっと、いまのうちに情報弱者的な立ち位置のボクができることは……」

そう。なんといっても28時間も寝ていたボクは情報に飢えている。このあたりの状況もわからないままだし。いまはゾンビの気配すら感じないけど、何をどうしたら良いか知りたかった。

だから、ボクは匿名掲示板に新規スレッドを立ててみた。

「悲報」起きたらゾンビハザード起きてた「へるぷ！」

立てちゃった。実を言うとスレッド立てたの初めてだからドキドキする。

みんなどんなふうに反応してくれるかな。

1 : 名無しのゾンビ : 20XX (土) XX : XX

おとといゲームで寝落ちして、起きたら28時間も経ってて、いまゾンビハザードが起きてるって知りました。どうしたらいいか教えてください。

2 : 名無しのゾンビ : 20XX (土) XX : XX

起きたら起きてたってところが最高に頭悪い小学生並の文章

3 : 名無しのゾンビ : 20XX (土) XX : XX

総合質問スレに逝け。

4 : 名無しのゾンビ : 20XX (土) XX : XX

マジレスすると、ひとりかどうかで変わってくる。ひとりなら、家

にいる限りはひとまずは安全だ。ゾンビどもはドアを開けるほどの知能が残っていないみたいだからな。家族と暮らしている場合、28時間も経過していて起こしにもこないということは、ゾンビになつて可能性が高い。気をつける。あと物音を立てたり、光を漏らしたりするな。あいつら目も耳もそれなりにいいみたいだぞ。

5 : 名無しのゾンビ : 20 X X (土) X X : X X
4 ニキがかっこよすぎて惚れた

6 : 名無しのゾンビ : 20 X X (土) X X : X X
1 です。ひとり暮らしなので大丈夫です。

7 : 名無しのゾンビ : 20 X X (土) X X : X X
◇ 1 そうかよかったな。

8 : 名無しのゾンビ : 20 X X (土) X X : X X

あのさあ。オレ部屋の中で引きこもりしてたんだけど……、リビングからうなり声が聞こえてくるんだけど。母ちゃん昨晚からご飯もってきてくれなくなったんだけど。その場合どうしたらええの？
リビングだけにリビングゲッドなの？

9 : 名無しのゾンビ : 20 X X (土) X X : X X

あー……

10 : 名無しのゾンビ : 20 X X (土) X X : X X
ゾンゾンしてきた

11 : 名無しのゾンビ : 20 X X (土) X X : X X
強く生きろ

12 : 名無しのゾンビ : 20 X X (土) X X : X X
リビングだけにリビングゲッドに誰か反応してやれ

13 : 名無しのゾンビ : 20 X X (土) X X : X X
ゾンビ映画よろしく誰か家族の頭、かちわったやついるか？

14 : 名無しのゾンビ : 20 X X (土) X X : X X
オレ氏。親父殿の後頭部を金属バットで一撃す。目が合ったら躊躇

躊躇してしまうと思ったから、背後からぶん殴ってやったわ。◇ 8 も覚悟決めんとあかんで。

15 : 名無しのゾンビ : 20 X X (土) X X : X X

母ちゃん……オレをひとりで育ててくれたのにできねえよ。菓子と水分は部屋の中に溜めこんでるから、特效薬できるまで粘ってみる

16 :名無しのゾンビ:20XX(土)XX:XX

今のまま待ってたら救助が来るってフラグだからな……

17 :名無しのゾンビ:20XX(土)XX:XX

実際、原因わかっていないんだろ

18 :名無しのゾンビ:20XX(土)XX:XX

細菌かウイルスかもわからんらしい

19 :名無しのゾンビ:20XX(土)XX:XX

1じゃないけど、これからどうすりゃいいんだろうな。避難場所とか人だらけで全滅するのがオチだろ。かといって家に引きこもってたら餓死する。いまのところネットできるけど、電気が落ちたら暇で死にそう

20 :名無しのゾンビ:20XX(土)XX:XX

ゾンビなんてないさ。ゾンビなんてウソさ。寝ぼけた人が見間違えたのさ

21 :名無しのゾンビ:20XX(土)XX:XX

ゾンビはドア開けられないんだろ。ゾンビ化は朝方だったから、ほとんど屋内なんじゃないか？ 自衛隊とか警察が各個撃破してけば余裕

22 :名無しのゾンビ:20XX(土)XX:XX

バカジャネーノ。ゾンビは馬鹿だが馬鹿力だよ。あいつら人間を見つけると脳のリミッターがはずれてるから、普通のドアぐらい破壊してくるぞ

23 :名無しのゾンビ:20XX(土)XX:XX

マジかよ。おいおい死んだわ〜8

最後に一言残して逝けや

24 :名無しのゾンビ:20XX(土)XX:XX

辛辣う

25 :名無しのゾンビ:20XX(土)XX:XX

8です。自分の部屋二階なんです。

闘わなければ生き残れない

3 8 : 名無しのゾンビ : 2 0 X X (土) X X : X X

そと、ちよつとしずかになた

そとで、うなりごえ

おや、いまだになき

3 9 : 名無しのゾンビ : 2 0 X X (土) X X : X X

煽ってるつみんながうらやましい

さつき、鳴き声でおやになまえよばれた

4 0 : 名無しのゾンビ : 2 0 X X (土) X X : X X

すっかりしろ。ゾンビは名前を呼んだりしない。おまえがゾンビ
になったら、天国の母ちゃんが悲しむぞ。

4 1 : 名無しのゾンビ : 2 0 X X (土) X X : X X

そーいやゾンビって生きてるのかな

4 2 : 名無しのゾンビ : 2 0 X X (土) X X : X X

深呼吸したらカナリ落ち着いてきた。

4 3 : 名無しのゾンビ : 2 0 X X (土) X X : X X

音を立てずに何かでドアの前ふさいだほうがいいぞ。バリケード
を築け

4 4 : 名無しのゾンビ : 2 0 X X (土) X X : X X

またきた

4 5 : 名無しのゾンビ : 2 0 X X (土) X X : X X

かぎのおとが

おやがかぎわたしや

もうだめぽ

その後、8さんが書きこむことはなかった。

スレッドは伸び続けてるけど、ボクが聞きたかったことはあまり聞
けなかったなあという感じ。なんだかセンサーシヨナルでドキドキ
する感じだったけれども、ボクはそこまでショックを受けなかった。

ボクの心はさざなみが少し起こっただけで、誰かがゾンビになった
としても、それはそれでしかたないというような気持ちだった。

いや——しかたないというよりも……。

んー。なんだろう。

あ、お風呂が溢れちゃってる。そろそろお風呂に入ろうっと。

ボクはすぐに浮かびかけていたおぼろげな気持ちを捨てて、着ている服を脱ぎ去った。

ハザードレベル2

「はあ……それにしてもやっぱりかわいい」

まっしろで細い腕をグツと伸ばし、お風呂場の鏡に手のひらをピツタリくつつける。

朝起きてからずっと顔見てたけど、顔だけじゃなく、全身全霊で美少女してます。実を言うかね。フッフ……知ってた！ 知ってました！

もう、なんというか美少女というのはオーラちから力で、美少女だってわかるからね。たとえ後姿しか見えなくても、指先しかチラ見せしてなくても、真の美少女は美少女だとわかるものだど、ボクは思う。

クソダサイフリースで滅殺されていたんだろうな。

服を着ていない今の状態のほうがまるで美術品のように綺麗でかわい。

あー、このあとめちやくちや着飾りたい。

とはいえ――、

いまのボクの紅い瞳には男の視線としての欲望の色は映っていないように思う。

朝起きた頃より、精神が身体になじんできている感覚がある。

――これがボクである。

という、しっかりした認識ができてきてるみたい。

少し恥ずかしい気持ちはある。膨らみは足りてないかもしれないけれど、男だつたときとははつきりと異なる胸とか、少しでもくびれてるおなかのあたりとか、陶器みたいな真つ白な肌とか、完璧な角度としかいいようがない鎖骨まわりとか、産毛すら生えていないんだか柔らかくておいしそうに見える脇とか、そういうのを認識すると、自分の肢体に欲情するわけではないけれども、女の子になっちゃつてるといふ感覚があつて恥ずかしい。

ひゃー。こんなかわいい女の子が裸で立ってたら、絶対襲われちゃうよね。

なんて倒錯的なことを考えたり。

ボクは案外変態なのかもしれない。

細いけれども柔らかな足をピンつと伸ばして、そろりそろりとお風呂に浸かる。

「あーあ。女の子になったら肌の感覚が鋭くなってるのかな」

なんだか、蕩けそう。

結構なボリユームのお月様のように淡い金色をした髪の毛が浴槽に浮かんでいた。なんだか川副町のほうの『のり』みたい。ご飯を巻くほうのね。

田舎の代名詞で、特段何の名産もないといわれている佐賀ランドだけど、わりといろんな食べ物がとれることを知っておいてほしいのでした。まる。

それにしても、この髪わりとうつとうしいな。

浴槽から立ち上がると、肌に吸いついて面倒くさい。男だったときは短髪で、シャンプーなんかちよつとでよかったのに、いまではちいさな手のひらに三回は出して、その白濁の液体をベタベタと髪の毛にデコレートしなければならなかった。全然卑猥じゃないからね。シャンプーだし。

面倒くさくなったボクは、髪の毛といっしょに身体のほうも洗う。ちなみにもこまでも自堕落なボクは、身体を洗うときにスポンジとかを使ったりはしない。手のひらで十分。女の子の柔肌だとスポンジでゴシゴシすると痛いとかいうし、これはこれでよかったのかもしれない。

お肌のほうは、まるで防水スプレーをかけた傘みたいに水たまを弾いている。お肌のキメが細かいせいかな。ともかく、洗っていくと、いままで別に汗とかかいてなかったけれど、綺麗になっていってる感じがして好き。かわいいものがさらに磨かれてかわいくなっていくことに対する快感とリラックスした環境にすっかり満足してしまつた。

自堕落でやる気のない半分ニートな感じのボクだけど、お風呂だけは毎日入ってたからね。

髪の毛と身体についたシャンプーをシャワーで完全に洗い流すと、

ボクはもう一度湯船につかった。

「あー、生き返るー」

でも、外はゾンビだらけなのだった。死が蔓延しておられるぞ……。

ぶくぶくぶくぶく。

☆Ⅱ

とりあえず、今後お風呂に入れなくなるかもしれないというのは非常に心苦しいものがあつたけれど、ボクは賢い子ですから、もう一度お風呂場を洗ってから、水を張りなおしましたよ。

お湯が出るうちは、毎日お風呂に入ろうかと思うけど、水も電気も止まったらどうしたらいいんだろうね。

そして、アパート内を全裸で歩き、うろろろとするボク。

「着るものどうしようかな……」

部屋の中はガンガン冷房をかけているし、外はめっちゃくちや暑いに違くない。若干引きこもり体質なボクは、コンビニとか大学の講義のときぐらいしか外に行かないから、家ではちよつと厚めの服を着ている。それがさつきまで来ていたフリースなわけだけど……。

少しくらいはおしやれをしないと考えてしまう。

せっかくかわいい女の子になったのだから、そのほうがいいに決まっている。これはボクが、というよりもRPGとかで自キャラにいいものを着せたいという心境なのかもしれない。

どうせなら野郎のケツより、かわいい女の子の後姿を見てたいという例のアレだ。

しかし、哀しいかな——、うちには当然のことながら小学生女兒に似合う服などあろうはずもなかった。

「あさおんするのを予想して、かわいい服をひとつぐらい買つとくべきだった」

とりあえずなんとなくでも着れるTシャツに体育のときだけ着るハーフパンツをあわせてみた。裾は……だしたほうがいいかな。

シャツは男だったときのだからか、ふともものところくらいまである。上手い具合に調整してつと。

うーん。

なーんか……かわいい……のだが微妙。

ボクにはもともと女装癖はなかったけれど、こんなにもかわいさが爆発していると、やっぱり伝説の白ワンピとか、フレアスカートとか、女児力高めの装備をしてみたい。

うーん、しまむら行ったら死ぬかな。

洋服買いに行つて死ぬとかアホすぎてさすがにダメだろう。

気づくとお昼近くになっていた。まる三十時間近く食事をしていないことになる。さすがにおなかがすいてきた。

「なにかなかったかな」

冷蔵庫の中を調べると、自己申告したとおり、マヨネーズとか醤油ぐらいしかなかった。

ん。奥のほうになんかある……。あ、見てはいけないものだ。それは、およそ数ヶ月ぶりに発掘された本当に腐ってしまった納豆だった。

捨てよう。それにしても、納豆はこういうふうにならぬから発酵しているものだけれども、本格的に腐るのは環境にもよるけど一週間くらいかな。常温では。冷蔵庫の中でも腐るんだねえ……。はは。

ゾンビはどうなんだろうと思わなくもない。

ピックアップされた彗星でゾンビになった人は、まったく傷もないから腐敗菌が入りこむつてこともあまりなさそうだし、代謝もほとんどしていないということは、たぶん体温も低いと思う。

腐らないのかな？　そもそも死んでいるのか生きているのかもわからないんだから、調べようがないけど。

普通、人が死んだらドライアイスとかで凍らせて遺体が傷まないようにするらしいけど、まさかそこまで冷え冷えになつてるわけでもないだろう。

さつきカーテンから覗いた外の様子では、太陽は照りつけているし、温度は三十度を超えている。きつと、腐るはず。

そんな感じで楽観的に考えるボク。

あー、でもおなかすいた。

なんか他にないのかな。台所スペースの隅々まで探す。と、ひとつだけカツプ麺が見つかった。これも魔界入りしている。消費期限を一年以上経過。背に腹は代えられないから、最終的には食べないといけないかもだけど、昔これくらい消費期限を過ぎたやつを食べたときには、やっぱりおなか痛くなっちゃった。

今の終末ゾンビ世界で食中毒とか洒落にならないし、やめておいたほうがいいだろう。

というわけで——、つまるところまともな食べ物がないことが判明しました。

どうしよう……。

☆Ⅱ

結論。どうしようもない。

今のボクの身体は驚くくらい軽くて、ぴよんぴよん跳ね回ることができそうなくらいエネルギーに溢れてるけれど、外がもしもゾンビだらけになっているとしたら、小学生女兒が生き残れるとも思えない。

かといって、警察や自衛隊がやってきて、ボクを救ってくれるかという、それも怪しい。

同じアパートの扉を叩きまくって、助けを請うのはどうだろう。

それもなんだか怖い気がした。

ボクはたぶん人間のことあまり好きではないのだと思う。だからこそ友達が少ないわけだし、引きこもり体質なわけだ。

だから……人と会話するのが怖いところがある。べつにまったく会話ができないとか、目を見て話せないとか、そういうんじゃないけど、会話するときには人の気持ちに配慮したりとか、相手はこっちのことなんかこれっぽっちも配慮してくれなかったりとか、そういうふうなグダグダ考えてしまうと、会話すること自体が損な気がして嫌なんだ。

一言でいえば、人間関係がわずらわしい。
というのが、本音のところなのかもしれない。

「あー、でも」

いまのボクなら愛されキャラにもなれるとは思う。
天使みたいな愛くるしい容姿に小学生高学年程度のかわいい盛り。
まともな社会なら庇護対象だといえるだろう。

いまのボクなら陰キャならぬ淫キャになれたりして……ふいひひ。
ただ、それはあくまで社会がまとも機能していたらの話だ。ゾン
ビが溢れた世界だと、人間が一番怖いというのが常識だ。

映画、『ゾンビ』では、モールで安全を確保していた生存者たちが最
後に略奪者に襲われてしまう。ごついバイクに乗った北斗の拳の
ヒヤツハーさんみたいな人たちだ。

日本人は礼儀正しいとは言われているけど、さすがに社会の機能が
麻痺している状況では、どんな態度をとられるかはわからない。

ないとは思いたいけど、ロリコンに捕まって、ノクターンな展開も
ありえる。

さすがにTS陵辱展開は勘弁してほしいところです。

健全にあさおんしたいです。

ボクはベッドにごろんと横になり、ちよつと涙目になっていた。

「はあ……おにぎり食べたい」

誰かおにぎり持ってきてくれないかな。昆布と高菜がいいな。

すごい美人のお姉さんが優しく「緋色ちゃん。ご飯よー」的に持つ
てきてくれるとお可。

そんな感じで益体もないことを考えながら、ボクはベッドのところ
でちいさく丸くなった。

☆Ⅱ

ボクはふと目を覚ました。

また寝ちやってたらしい。おなかすきすぎて寝れないかと思った
けれどもそんなこともなく、普通に幼女つぽく電池が切れたみたい

一瞬で意識がなくなつてた。

カーテンを閉め切つた部屋は既に薄暗く、何時だろうとボクは寝ぼけ眼で考える。

「ふあああああああ」

うーんつと伸び。

ボクはあいかわらず美少女の身体らしい。

ドライヤーできちんと乾かさなかつたせいでモサモサになつてしまった髪が哀れなくらい爆発している。これ、もしかして手入れするの大変なんじゃね……つて覚醒しきれない頭で考える。

と、そのとき。

ピンポンと、玄関のほうからはじける音が聞こえた。

「ふえ。なんだろう……」

ボクの部屋に来るのは友達の雄大か、後輩の命ちゃんか、あるいは国営放送の怖い人か、新聞か宗教の人くらいしかない。

基本は居留守を使っている。

て、いうか……。

ぞわりとした感覚がボクの中にかめぐる。

ボクは一瞬で覚醒した。

もしかして、ぞ、ゾンビなのかな？

ゾンビが呼び鈴を鳴らすというイメージはあまりない。どちらかというと窓や扉を全体重かけて叩きまくるというイメージだ。映画でもゲームでもだいたいそんな感じ。

ボクとしては知性のある行動のほうが当然好ましい。

さつきは人間が嫌いみたいなこと思ってたけど、ゾンビよりは人間のほうがいいよ。当然でしょ。人間はあまり噛まないからね。

ボクはおそろおそろドアのところ近く。

呼び鈴は最初に鳴つたときから、何度も何度も鳴っている。繰り返すように一定周期。それが逆に怖かった。

なんだか機械的で、もし仮に人間だったとしてもサイコパスじみていると思つたからだ。

そして、呼吸を殺して――、

覗き穴からこつそり覗いてみた。

そこには、ゾンビがいた。

うん。ゾンビだよね？

生気のない紫色をした肌。焦点のあつてない瞳。口元はだらしなく開かれ、うーうーと小さくうなっている。

決定的なのは夏だからしかたないのだろうが、着ている服がシーズルーといえますか、こう、なんといえますか、えっちな下着的なやつだったことだ。

外がいくらゾンビだらけとはいえ、こんな格好でわざわざ外を出歩く人間はいないだろう。

羞恥心のない。心そのものがないゾンビでない限りは。

はい、確定です。ゾンビです。

てか、ゾンビって呼び鈴ならせるのか。知性あるゾンビっていうのもゾンビものでは少数いたりするけど、いきなり特殊ゾンビとエンカウトするなんてどうすれば……ってどうしようもないよ。

そして——、そしてボクは唯一できることをした。

つまり——、とどのつまり——、

誰でもどこでもできるほとんど唯一の人間的な行為。

お祈りをした。

(あつち行つてええ~~~~~)

ボクのお祈りが通じたのか、それとも息を殺して人間的な反応がなかったせいなのかはわからないけれども、ゾンビはせわしなくきよろきよろと視線を動かしたかと思うと、視界の外にはずれていった。

それから何分か、何十分か、ボクは玄関のところに行った。

心臓がバクバクいつてる。

ボクは玄関のチェーンをかけて、あえて鍵をはずした。

ゾンビが目の前にいるかどうか確認しないのも怖い気がしたから。

下手すると、ホラー映画ではよくありがちな、手がドアの隙間から「こんにちわ」してくる可能性もあったけど、あれから変なうなり声はしないし、たぶん大丈夫だと思う。

ほら、ゴキブリかなにかを見つけたときに、絶対に退治しないと眠りたくないじゃない。あんな感じ。

そんなわけで、恐る恐るドアを少し開ける。角度的に外を見るには厳しかったんで、手鏡を部屋からとってきて、それをチェーンの隙間から差し入れた。右よし、左よし。大丈夫みたい。

ボクの部屋は二階建てのアパートの二階にあつて、ちようど階段に通じる廊下の真ん中ぐらいに位置している。

一階に通じる階段は廊下の両端にある。どこか他の部屋にでも行つてない限り、ゾンビは一階におりたのだろう。

ゾンビつて階段をのぼりにくいというパターンが多いけど、のぼれないつてわけじゃないからね。

|||||

ゾンビは階段が苦手

学園黙示録でゾンビは階段を上り下りにくいとされる。しかし、まったく移動できないわけではないので、慢心はダメ。絶対。ちなみにゲームバイオハザードにおいては初期ではゾンビは階段を登りおりにできなかつたが、その後、階段も移動するようになった。映画バイオハザードにおいてもかなりのスピードで階段を駆け上つているので、ゾンビが階段苦手というのは、いまだきのゾンビでは適用されないともいえるかもしれない。

|||||

手鏡の角度を何度か変えてみると、視界の隅になにやら黒い物体が目に入った。それは墜ちた手のひらでした——とかだったらびっくりしていただろうけど、そんなことはなかった。

「おんぎんりっ。」

ちよつと怖かつたけど、チェーンをはずして、ボクは身体を小さくして、こつそりちよびつとだけ、外にでてみた。

それを手にとつてみる。

「やっぱりおにぎりだ」

しかも、ボクが食べたかった昆布と高菜味。コンビニから今まきにお届けしましたって感じでいつものとおりビニール梱包されているやつだった。中身も特にぐちやぐちやになっていないわけではないし、たぶん食べるのは大丈夫そう。

それにしても――、

なんでこんな廊下のところにおにぎりが落ちてるんだろう。

腑に落ちない気持ちのまま、でもおなかはすいてたから、ボクはお部屋の中に持って帰ることにした。

ハザードレベル3

結論から先に述べよう。

ボクはゾンビに襲われなくなっていた。

それどころかある程度操ることができるようになった。

あれからボクは持ち帰ったおにぎりを食べた。30時間ぶりに食べたおにぎりは身体にしみわたるといいうか、とてもおいしかった。身体が小さくなってしまうたせいで満腹度も高かったしね。

それで、ふと思っただのは、これってボクが美人なお姉さんにおにぎりもってきてほしいって考えてたせいかなって――。

だとすれば、話は早く、今度はサンドイッチでもお願いすればいい。

すぐに試してみた。

両の手を軽く握って、ベッドの上でぺたんこ座りして、うんうん唸る。

(サンドイッチ……サンドイッチもってきてお姉さん)

さっきの綺麗なゾンビさんが再来することをひたすら祈った。

すると、約三十分後くらいあと、また呼び鈴が鳴った。

「ひゃん」

二回目だけど、ちよつとだけびっくりしちやった。

でも今度はさっきみたいなのドキドキはもうない。なぜだかわからないけれども、ボクには『そうだろうな』という確信めいたものがある。

ボクはゾンビを操れる。

だから、軽い足音を響かせてすぐに玄関に向かった。

怖かったから、チェーンはまだかけっぱなしだったけど。

覗き穴から覗いてみると、さっきの美人ゾンビさんだ。扇情的な姿をしているけれども、そこには意志の輝きみたいなものがない。でっかくて動くフィギュアみたいなものだから、よくよく見てみるとかわいらしくも感じる。

そう感じるの、少しずつ不安が払拭されているせいかもしれないな

い。

名前も知らない美人なお姉さんだけど、それは『人間』じゃなくて、だから相手のことを考えなくて好き勝手していいんだという気持ち。共感性に欠けた傲慢な考え方だけど——、いまはそういう気持ちで勝った。

「お姉さん。サンドイッチ持ってきてくれた？」

ボクはチェーンはかけたまま、ドアを少し開けて聞いてみた。

お姉さんズンビはボクの声が確実に聞こえているはずだけど、特に暴れたりする様子はない。きよとんとした不思議そうな反応をしている。

「サンドイッチあるならちようだい？」

ボクはかわいらしくおねだりしてみた。

少し怖かったけれども、部屋のこつち側に受け皿となる手をさしだし受け取る体勢を作る。すると、お姉さんズンビは開いた隙間から青白い手を差し入れてきた。

ちよつとドキドキするけど、その手のひらにはやっぱり予想どおりサンドイッチが握られていて、ボクは配達人から受け取るみたいにサンドイッチをゲットした。

「ありがとう」

まったくもって素敵。

ボクはどうやらこの終末世界においてチート能力を持っているらしい。

チートとはもともとゲーム用語で、ズルとかそういう意味みたいだけど、ズンビが溢れた世界でズンビを意のままに操れるなんて、チート以外のなにもでもない。

よく小説やアニメの異世界転生ものとかでチート能力とかは必須になってくるんだけど、チートって基本的には『何かを獲得する』という能力よりは『何かを回避する』という守勢の能力だと思っただよね。

例えば、主人公が立身出世していくとかいう物語だったら、チートは獲得する方向に働くんだけど、最近の異世界転生ものは復讐譚とか

そういうのじやない限りは、わずらわしいストレスをなくすために働いているように思うのです。

つまり、何が言いたいかというところ。

ボクはこれから思いつきりノーストレスでスローライフなゾンビ世界を生き抜くんだということ。

大学の講義もないし、面倒くさい人間関係を構築していかなくていいし、もつと言え、将来仕事をするために必要な社交性なんかも必要ない。

ただ、だらだら過ごしていてもなんとかなりそう。

そのことにボクは圧倒的な安心と幸福感を得たのだった。で、今に至る。

ボクはそれから後もいろいろとお姉さんゾンビで実験することにした。ゾンビを操れるという感覚は、少しずつボクの中ではつきりとしたものになりつつある。

いままで尻尾がなかったのに突然尻尾が生えたみたいなの。

いままで羽がなかったのに突然羽が生えたみたいなの。

そんな奇妙な感覚だったけれども、ボクとお姉さんゾンビには、太くて見えないパイプのようなものができていて、ボクは思考で操っているとわけてはなくて、より正確を期すならば、ゾンビをゾンビたらしめているソフトウェアを書き換えているような、そんな感覚だ。

まあ、考えればそのように動いてくれるんだけど、ずっとそういうふうな思考をしつづけなければならぬというわけではないみたい。

例えば、ゾンビお姉さんに右手をあげてほしいと思ったとして、ずっと右手をあげてというイメージを持っていなくてはいけないわけではなく、『右手をあげて』という命令を走らせておけば、変更がない限りはそのような動きをするという感じ。

うーん。ボクにはなにがどうしてなのかはさっぱりだけど――。

パソコンのプログラマーみたいな感じなのかな。

命ちゃんがそういうの詳しくあったから、教えてもらえれば何ができるかはつきりするだろうけど。

他にも何ができて何ができないかは、できるだけはつきりさせとか

ないといけない。あたりまえだが「空を飛んで」とかは無理みたいだし、複雑な命令もこなせるのかも検証しなければならぬ。

とりあえずまだ怖いので、お姉さんゾンビには廊下の端、階段のそばあたりまで下がってもらった。

彼我の距離は五メートルほど。

ボクは外にいる。

心臓がドキドキしてきた。

あたりは夕暮れから夜に移り変わろうとしている黄昏時。

いつもと異なるのは周りの家が電気を消しているところも多いということだ。いつもより薄暗いはずだけど、ボクにはなぜだかひとつひとつの家の輪郭がしっかりと見えた。

どうやら夜目が利いているらしい。どうしてなのかはわからないけれども、暗視スコップをつけたみたいにくつきりはつきり見える。

男だったときとの見え方の違いにわずかな混乱が生じたけれど、ゾンビが操れることに比べたらたいしたことないと思った。

意識を再びゾンビお姉さんに移す。

ボクがその場にとどまっているように命じたので、お姉さんは微動だにしない。

いや、ちよつとは動いているけどね。

ボクは一步近づく。

急に襲われやしないか正直ビクビクしていたけれど、お姉さんゾンビにはそんな様子はない。あー、とかうーとか小さくうなるだけで、お行儀良くその場にとどまっている。

また一步近づく。

「お姉さん。ボクを襲わないでね」

お姉さんゾンビは喋ることができない。『わかりました』と言ってみるよう念じてみたけれど、うーうー唸るばかりでうまく話せないみたい。何かを話そうとはしているみたいだけど。

これはボクの方が未熟なせいなのか、ゾンビ側にその能力がないせいなのかはわからない。

そしていよいよ手を伸ばせば届く距離まで来た。

ここまできても襲われないというのなら大丈夫かな。
よし……。

じゃあ——、しようか。

何をつて？

いかがわしいことじゃないよ。

人差し指を伸ばして——伸ばして。

ETごっこ。うーんネタが古すぎた。

まあともかく、接触しても特に大丈夫そう。

お姉さんゾンビの右手に接触。

は、初めて女の人と手をつないじやった。ゾンビだけど。ゾンビだ
けど！

お姉さんの指先はマネキンみたいにひんやりしてたけれど、ボクが
指先にグツと力を入れると、わずかに弾力がかえってくる。

当たり前だけど、人間の肌の感覚だ。

代謝がほとんどないけれど、死後硬直をしているようには思えな
い。

ゾンビお姉さんの瞳はレジンのような人形めいた光を放っていた
けれど、意志や意思の存在はわかりようもなかった。

次にボクはその場から動かず『適当なゾンビ』がこちらに来るこ
を願った。

いまはまだ曖昧な感覚だけど、なんとなく周りにゾンビが数体いる
気配がわかる。そいつらがボクのところ近くに近づいてきているのもわ
かった。

「うん。今」

ボクの言葉とほぼ同時に『適当なゾンビ』さんが現われた。仕事帰
りのサラリーマンなのか。ネクタイもしていない少しだらしない格
好のスーツ姿だった。

こちらに来るように命じたものの、ボクはそれ以降の命令はしてい
ない。

命令が終わったたらどうなるのか知りたかったからだ。

通常は——、たぶん人間を探しているとか、生前の行動をなぞるこ

とが多いのがお約束なんだけど。

ちなみに万が一に襲われるということも考えられたけど、感覚的にはそれは絶対にはないと感じていた。

「ボクは認識したゾンビを支配できるのかも？」

ゾンビマスター的な？

それにしてもどういうふうな原理でボクのお願いというか命令と
いうか、そういう意思が伝わってるんだろう。

ボクの脳みそから電磁波でも出てるのかな。

美人お姉さんゾンビとサラリーマンゾンビの二体が周りにいても、
そしてサラリーマンゾンビには特に命令を下していなくても、ボクが
襲われることはなかった。

その場にとどまるように命じているお姉さんゾンビのほうは特に
動きはないけれど、サラリーマンゾンビのほうはフラフラとしていた
かと思うと、ボクの隣をすり抜けて、隣の部屋の前を行ったり来たり
していた。

「あー、うん。そういうこと」

たぶん、隣の家には人間がいるのかな。サラリーマンゾンビはやが
て何かに気づいたのか、激しくドアを叩き始めた。

うなり声も激しくなり、力強く殴りつけるようにドアを叩いてい
る。

すると、周りからゾンビが少しずつ集まってくる感覚がした。

家の中からは焦ったような、そんな息遣いが聞こえてくる。

すぐくはつきりと――。

そして、それに反応するみたいに、サラリーマンゾンビは興奮しま
くってる。

あの、これってヤバイ感じかも。

顔も知らないお隣さんだけど、さすがに最初の一体はボクが呼んだ
ようなものだし、ボクのせいで誰かが死ぬのは寝覚めが悪い。

「えっと。やめてね？」

ボクははつきりと声に出して伝えた。

ゾンビにはそもそも最初から人間を襲うようにインプットされて

いる。そのコードとボクの命令のどちらが優先するかはわからなかった。

だめだったらしょうがないかな——。

なんていう投げやりな心境だったけれど、どうやらお隣さんは運がよかつたらしい。ボクの命令が優先し、サラリーマンゾンビはドアを叩くのをやめた。

他のゾンビも散るように命じたら、気配が遠ざかるのを感じた。

「大丈夫みたいだね。えっと、じゃあ、お姉さんは適当なところで待っててね。また呼ぶかもしれないし。サラリーマンさんはもう帰っていいよ」

そんなわけで、ひとまず実験終了ということにした。

☆Ⅱ

明くる朝。

ボクはいつもどおりに、右手を天頂に伸ばすようにして伸びをし、「ふわああああ」とだらしないあくびをしてから、しばらくぼーっとしている。あいかかわらず、カーテンは閉めっぱなしで暗い部屋。

エアコンは弱設定でかけっぱなし。まだ電気はついてるみたい。

洗面所でひとまず顔を洗い、歯磨きをする。

うん。すつきり。

「あー、それにしても、髪の毛がスーパーサイヤ人みたいになってるな」

これ、どうやって整えればいいんだろう。

ロングヘアはお手入れが大変だと、風の噂で聞いていたけれど本当だったんだね。

でも、ロングヘアって女の子ならではの髪型な感じもするし、切ってしまうのはちょっともったいないな。

そもそも、ボクって——髪の毛切ったりしたら生えてこないかもしれないし。

そう、さすがのボクもね、考えたわけですよ。

——もしかしてゾンビなのかな
って。

誰がって、言うまでもないけどボクがです。

もしかしたらゾンビの上位種とかそういう存在なのかもしれないけど、ゾンビの延長上にいるのはまちがいないと思う。

つまり、ボクがゾンビに襲われないのは、ゾンビのお仲間だからかもしれない。

ゾンビって基本的には死んでるし、腐っていくといわれてるから、ボクもそのうち腐っちゃうのかななんて、かすかに不安に思ったんだ。

でも、ゾンビと違う点も結構多いんだよな。

まず、ボクは呼吸している。成分分析しているわけじゃないからわからないけど、普通に酸素吸って、二酸化炭素を排出しているように思う。

次に、体温がある。体温計で測ってみたけど、平熱より少し低いかなということ、人間の範疇だった。

|||||

ゾンビの体温は低い

ゾン美少女な作品『さんかれあ』では、体温がなかったり、『がつこ
うぐらし』ではゾンビウイルスに罹患した少女の体温が低くなったり
する。体温が低いということは代謝がゼロに近づくということであ
り、腐りにくくなるということを意味している。ちなみに人間が死亡
した場合、冬場であつても二週間程度で腐って溶ける。ゾンビと人間
の戦いは籠城戦に至ることが多いので、ゾンビ側に長持ちしてもらわ
なければ困るのである。

|||||

心臓も鼓動があるし、瞳孔散大もしていない。

そして、かわいい。

圧倒的にかわいい。大正義な状態。

うーん、ゾン美少女という線も儂げで悪くはないと思うけど、どちらかという生きている要素が強いかな。

あ、もうひとつ忘れてた。

はい。あれです。おトイレ事情です。男から女になったことで根本にあるものがなくなっただので、勝手が違ったけれど、少なくとも人間的な行為は必要なようだった。ゾン美少女な作品だと、排泄しないというものもあったと思う。

けど、昭和のアイドルじゃないんだから、食べたら出さないと身体に悪いよね。美少女でもそれはもう当たり前だと思うんです。

逆に人間っぽくなくなったのはどんなことかな。

まず、力——単純な筋力だけど、これは少しずつ強くなってる気がする。明らかに筋肉量が足りてないはずなのに、スチールの缶がアルミ缶みたいにグチャツとつぶれてしまった。

もしかしたら脳のリミッターみたいなのがはずれてるせいかもしれない。いわゆる火事場の馬鹿力的なやつだ。

だとしたら、あまり無理はしないほうがいいのかな。

でも、どう見ても小学生女児が出せるパワーじゃないように思うんだよね。明らかに人間やめてるってほどでもないから、まだなんともいえないんだけど。

それと、他には夜目が利くようになったこと。昨日の段階で、気づいていたから、ために夜中に電気もつけずにいたけど、完全にまっくらな中でも、くつきりと物が見えた。

うーん。これだけだとボクっていったいなんだらうと思う。

まあいいか。

いろいろ変わったところも多いけれど、ボクはボクだ。

適当にパソコンの置かれた机に座り、適当にネットしながら、それからボクはお姉さんゾンビをデリバリーした。

何十分か待っていると、お姉さんが来た気配がしたので、ボクは玄関に行つて鍵を開けた。

「ど、ど、ど、ど」

は、初めて知らない女の人をお家の中に入れちゃった。

あ、ちなみに後輩の命ちゃんはノーカンです。なんかこう妹感があつてね。ボクには実妹はいなかったけれど、たいしてドキドキもしないのですよ。そんなことを伝えたら、命ちゃんはなぜかガツカリした表情になつていたけど。遅れてきた思春期かな。

お姉さんゾンビはあいかわらず美人だ。風塵にさらされているので、いずれは腐つちやうかもしれないし、もしかすると肌にダメージとか蓄積しているかもしれないけれど、ざっと見る限りはやっぱり綺麗なお人形さんという印象しかない。

そ、そのうちお風呂とかに入れちゃったりして。

そんないかがわしいことを考えつつ、ボクはパソコンのところの椅子に座る。

ゾンビお姉さんは洗面台のところからブラシを抜き取つてそれからボクの髪をとかし始めた。当然ながらボクがお願いした結果だ。

モシャモシャした髪をどうにかしたかったのもあるし、ある程度曖昧な命じ方でも大丈夫なのか知れたかったからだ。

(お姉さんの知ってるやり方でお願いします)

こんな感じ。

髪の毛を丁寧にとかされていると、すごく気持ちいい。お姉さんの手さばきには一切の淀みがなく、やっぱり脳みそに蓄えてる知識をもとに行動しているみたい。ゾンビウイルス的な何かはその知識を参照して、いまの行動に結びついているのかも。

お姉さんの右手がボクの髪の毛の一房を手にとり、軽い感覚でブラシが通り抜けていく。モサモサしているけど、ボクの髪質は悪くなく、ブラシが途中で引つかかかったりはしない。

髪の毛がとかされる時にわずかに感じる、シュツシュという鋭い音。

髪の毛ごしに伝わる微細な感触。

それらが混合して、男だったときには感じたことのないムズムズとした感覚が生じた。おなかの奥とかが熱くなってくるような変な気分。

よく漫画とかで、頭をなでられただけで惚れてしまう女の子キャラ

とかいたけど、それって科学的にも正しいのかもしれない。

あー、気持ちいい……。

ふわふわしちゃう。

そうして、意識を飛ばして、気づいたときには――、

ボクはリボンを頭の両サイドにつけていた。紅いバラのように広がるリボンが、プラチナブロンドにわずかな彩りを添えている。

どこから持ってきたんだろう。

ていうか、お姉さんの趣味なのかな？

ツインテール……。

ハザードレベル4

なぜか髪型がツインテールになってしまった。

わずかな手入れだけで、髪の毛は艶々になって、電灯の光をわずかに反射している。天使のわつか。キューティクル。すごい。ボク。かわいい。最強。

ちなみに電灯を使っているけれども、外は思いつきり昼だ。

カーテンを開けるのがわずらわしいんだよね。

それはボクの心を表しているようでもある。ある程度の光をさえぎってはいるけれど、完全に遮断しているわけではない。

ボクが振り向くと、ゾンビなお姉さんは物も言わずにボクと視線を合わせた。

不思議な距離感。

ボクはお姉さんには一切の心がないことを知って安心する。

お姉さんの反応パターンはわずかに生前の残滓をにおわせるけれど。

ボクが見えない糸で操ってるに過ぎない。

とても、綺麗。

だって、なにも余計なものが付着していないから。

そんなわけでボクはうれしくなった。

「ねえ。お姉さん」

ボクは物言わぬ軀に声をかける。

「ツインテール好きなの？」

当然答えなんて返ってこない。

でもまあ——、この髪型も悪くはない。幼げな様子と美しさが奇妙に同居しているというか、ふわつとしている尾っぽの部分が、手持ち無沙汰のときに触ると気持ちよさそうというか。

そう、こんな感じで。

「ね。撫でて。撫でて」

お姉さんにせがむボク。

お姉さんに意思なんてないんだから、当然ボクの意識のとおり撫

でしてくれる。うん。悪くない感覚。

すごく気持ちいい。

右手に握った手鏡の中のボクは、征服者らしい笑みを浮かべている。

「征服で思い出したんだけど、ボクに似あう制服って何かないかな」

言葉足らずでもボクが望んでいることは、つまり心で描いた『それらしい感じ』というのは、お姉さんに言うまでもなく伝わっている。

いまのボクに似合いそうなのはお嬢様系小学校の制服みたいな感じだと思う。

具体的にいうと、某艦船美少女ゲームにでてくる合法と非合法の狭間にあるような年齢の子が着ている感じの服だ。

「あ、でもいいよ。今はまだね。だっておなかすいたし」

コンビニやスーパーに行ってみるのはどうだろう。

ボクにはゾンビに襲われないというアドバンテージがあるけれど、当然のことながら人間を操る能力はない。

ボクの最大の敵は暴徒と化した人間だと思う。

自分勝手に、傲慢で、自我が肥大化した、つまり余計なものが付着したやつら。

そんなやつらに襲われたら、ボクはひとたまりもない。

筋力は強くなってるけど、身体は小さいし、長い手足で攻撃されたり、あるいは武器を使われたりしたら危ない。

こんなにかわいい美少女を攻撃するなんてありえないとは思って、世の中変な人も多いしね。気をつけないと。

ゾイの構えで、ボクは気合を入れる。

でもまだゾンビハザードが起こって数日だしな。たぶん、そんなに変なことにはならないんじゃないかな。まだ『人間』はそんなに逸脱していない頃だと思う。

長編化したパニック映画とかの肝は、主人公が少しずつ常識とか倫理とかを書き換えられていくことにあると思うんだけど、最初の数日間でききなり銃を乱射しまくったり、食べ物を強奪したりするパターンは少ない。

日本の場合には銃社会でもないし、いまいち危機感はないと思うし、たぶん、いまならまだ大丈夫だろうと思う。

ネットでも書いてあったけど、ゾンビのほとんどはまだ家の中に閉じ込められているだろうし――。

だったらゾンビをいっぱい解放しちゃえ、という悪魔のささやきが聞こえた気がした。ボクで感覚で、ゾンビの認識範囲はどんどん広がっているように感じる。今では、ボクを中心に数キロ先くらいまでなら、ゾンビがどこにいるのか、なんとなくわかる。

うーん、ゾンビを家からたくさん外に出せば、ボク自身の生存率はあがるかもしれない。一匹ではよわよわなゾンビも数がたくさん集まれば脅威だしね。

戦いは数だよお姉さん！

お姉さんは「がう？」と小さく唸った。生前の知識にもひっかかることのない言葉だったのかもしれない。

でもさー。わりと人のことなんかどうでもよいつて思ってるボクでも、さすがに人類を滅ぼしてしまえなんてことまでは思っではないよ。

自分が人間だって感覚はあるしね。

そんなわけで第一次コンビニ遠征に向かうぞー。

☆Ⅱ

ぺったん。ぺったん。

さて、いまボクはおよそ百メートル先にあるコンビニに向かっている。

靴はサイズがあわなくて諦めた。いま履いてるのはサンダルだ。でもこれもサイズが合わないから、かなり微妙な速度しかでない。

コンビニは歩いたらそれなりの距離なんだけど、さすがに原付を使うほどではないといった微妙に使いづらいそんな位置にある。

この町は某大手ショッピングモールが撤退してから、衰退の一途をたどっている。コンビニもさ……、ぶつちやけ23時に閉まつちやう

んだよね。

アパートを出て、久しぶりに陽光を浴びると、めっちゃまぶしかった。

吸血鬼ではないから灰にはならないけど、引きこもりにとってはだいたいそんなもんだよね。はは……。はあ。

でも、なんというか。

いまのボクは最強でもあると思う。

こんなにもかわいらしくて、誰からも愛されそうな容姿だし。

いまのボクは自信たっぷりにはボクはかわいいと主張できる。

ボクが人と会いたくなかったのは、ひとえにボク自身に対する自信のなさの表れだったから——、今もそういうところはあるかもしれないけれど、少しは怖くないよ。

ていうか——。

今は最強の陣形だしね。

そんなわけで今の布陣を確認しよう。

はい、先頭に立っているのはたぶんプロレスラーでもやってそうな身長が190近くある巨体のゾンビさん。その巨体で様々な攻撃を防いでくれそうです。

真ん中に立っているのは、渋い感じのイケメンおじさんゾンビで、ちよつと昔のちよい悪親父みたいな感じ。その左右には、ちやら男ゾンビとギャルゾンビ。

そして、後ろに立っているのがボク。

みんな高身長だから、ボクはほとんど目立たない。というか、物理的に真正面からは見えない。

本当は輪形陣というか、ボクを真ん中にすえたほうがいいような気がする。

だって、一番後ろって、背後から襲われたときに一番危ないし……。でも、由緒正しい歴史ある陣形なんだ。きっと、この方がいいに決まってる。

まあ、いざというときに逃げ出しやすい陣形でもあるかなと思う。ちなみにお姉さんゾンビはボクの家の中で待っててもらうことに

した。

外ではセミが大合唱している。

でも、公園や小学校から聞こえてくるはずの子どもたちの声は聞こえない。それどころか人間の気配がないかののように、住宅街はどこもかしこもシンと静まりかえっている。

濃淡のはつきりしている電柱の影から、ボクのいたアパートを見上げると、少しだけ息遣いが聞こえたような気がした。

そういやお隣さんってまだ生きているよね。

当然、ゾンビから隠れているということは人間だろうし。

まあ、食糧がなくなったら外に出ざるを得ないから、そのとき鉢合わせるかもしれない。ゾンビハザードが起こってから大分時間は経ってる。

そろそろ、住民達も外に出る頃かもしれない。

そう考えると、ボクがいま外に出てるのは絶妙なタイミングかもしれないね。

危険を顧みずに外に出るには、まだまだ時間が経過していない頃でもあるし、コンビニも荒らされていないといいなあ。

道路は細長くて車一台がやっと通れるくらいの幅しかない。

しかもまっすぐにはなまってなくてゆらゆらと蛇行するような感じ。両サイドは家のブロックがあるし、もしもボクが普通の人間なら、ゾンビにでくわしたときに逃げ道が少ないからすぐに詰みそう。

ボク以外の人が歩いている気配はない。人間の気配はボクにはゾンビほどわからないけど、それでもゾンビたちがそわそわしていないからわかる。たぶんお家にまだ引きこもっているのだと思う。

それで、ゾンビのほうはというと。

これはまばらにいる感じ。わずか百メートルほどの距離ではあるけれども、路地のところからひよっこり現れたり、ずっと向こう側をよたよたと歩いていたり、それくらいの人口密度だ。

そもそも高齢化著しい佐賀ランドじゃ、これぐらいがいいところだよ。関東圏でいったら茨城。群馬あたりというか。人に出会う確率がそれほどない。

それでも、数体は見かけた。
で——、ついにそのときが来た。

まあ外に行くからには絶対にそのときが来るとは思ってたけど、いままでのゾンビは彗星到来時に外傷なく、つまりゾンビに噛まれることなくゾンビになった死体だから、綺麗だったんだけど、フ拉里と現れたそいつはゾンビにわき腹を噛まれてた。そこからホルモンのなものが縄跳びができそうなくらい飛び出して、それでも動く様子がちよつとグロかった。

映画と現実じゃ、臨場感が全然違う。

けれど、そんなゾンビもやっぱボクの中ではゾンビだという認識があつて、変な感じだけとお仲間な気分もしたりして、そこまで気持ち悪いという感覚はしなかった。

コンビニに到着した。

電気はついてる。けれど、人の気配はしない。誰もいない。

ゾンビたちを適当に外で待たせて、コンビニの中に足を踏み入れる。

窓が割れたり、扉が壊されたりはしていないけど。

「あー、やっぱりちよつと遅かったか」

コンビニは荒らされていた。

誰かが持ち去つたのか食料品がだいぶ少なくなっている。

おにぎりもお弁当も全滅だ。わずかに残っているのは鮭トバとかそういうおつまみ的なやつと、アイスの類だけだった。

「おなかすいちゃう……」

ゾンビお姉さんの食糧探索能力って実は高かったのかな。どこから持ってきたのかはわからないけど。またお姉さんに頼もうかな。

ひとまず、電気が通ってるからアイスくらいは食べられるだろう。

コンビニの奥まったところにあるアイスケース。

今のボクの身長じゃ、わりとギリギリの高さにあつて、見れないわけじゃないけど、中央付近にあるアイスがとれない。

ぴよんとケースに張りつき、ボクはじたばたともがくように動く。

アイスケースの中央には、食べかさのあるアイス——モナカが置か

れていて、それをとろうとしているんだけど、なかなかとれない。他のアイスとかも雑多に混ぜこまれて商品陳列としては非常にまずい状態になっている。

たぶん、全部持っていてでも溶けちゃうだろうから、缶詰とかご飯になりそうなものから先にとっていったんだらうと思う。

「あうー。うーん。あーっ！」

ボクはゾンビのような声をあげて必死に手を伸ばす。トレジャーハンターがお宝に手を伸ばすときのように必死だ。

これならゾンビにとってももらったほうが楽かもしれない。ボクの身長ってたぶん140センチ前後しかなくて、圧倒的に戦力が足りないのだ。

「うーん、もー」

手を伸ばす。もがくもがく。

あとちよつと……。あとちよつとだよ。

そうして、あと少しでお目当てのモナカに手が届くと思った瞬間。

——ボクの身体が突然宙に浮いた。

え？　と思う間もなく、ボクは首を後ろにまわす。

ボクの華奢な身体には、おおきな大人の腕が脇のところから差し込まれ、そして次の瞬間には、からみこんでくるように顎のあたりを押しさえこまれた。

ちらりと見た姿は、誰なのか判別できなかった。

なぜって。彼——体つきから察するに男の人——は、黒いヘルメットを被っていて、真夏だというのに、厚手のジャンパーに軍手をはめた肌を出さない完全防備の姿だったからだ。

「あ、あ、あああ？」

驚きのあまりに何も言い返すことができず、ボクは幼女に抱きかかえられるぬいぐるみのような感じで（もちろん、この場合のぬいぐるみはボク自身のことだ）そのまま宙を浮きながら、バックヤードにお持ち帰りされた。

あゝ、クリアリングをちゃんとしとくんだった。

いまさら後悔してもおそい。

(ちよ、ちよっと、ちよっとまってえ！)

声を出そうにもがくがくゆれてる状態では、舌をかみそうで難しい。

男は一瞬だけ片手になって、バックヤードのスタッフルームへの扉を開け、ボクはその部屋の中に引きずりこまれた。

抗議の声をあげようと、ボクは口を開きかける。

が——、そこでどこかから取り出したゴルフボールみたいな形のかせ——確かボールギャグとかいうえっちな感じのあれを口にはめられていた。

「もぎゅーもぎゅー」

口の形が開いたままになって、うまく話せない。

ど、どどどどどうしよう。

それから男は少し安心したのか、床に敷かれたマットの上にボクのことを放り投げた。いくらマットの上からだとはいえ、それなりに硬い。

接触の瞬間に、背中とおしりのあたりを衝撃が襲い、軽く意識が遠のく。

視界のあちらこちらでお星様が回ってる。

男はゆっくりとした動きでロープを手近づいてきた。

抵抗らしい抵抗もできずに、両の手が後ろ手に縛られた。

ヘルメット男はボクの身体を隅々まで見渡すように首を振って、それからようやく、その黒光りして威圧感のあるヘルメットを脱いだ。

「ふうはああああ」と男の人。

汗はただらだら。顔はまんまるくてごま塩頭の四十歳くらいの男の人だ。

ボクは必死に首を振る。

「うーうーっ！」

「もしかして、僕ちん、世界一かわいいゾンビ見つけちゃったかも」

彼が言ってるのはまごうことなき『独り言』である。

まわりに人間がいらないからこそ出る素の言葉。

何を期待しているのか、鼻のあたりがぶくうつと膨らんでニヤニヤ

している。

ゾンビじゃないですう。

ゾンビじゃありませんー。

世界一かわいいっていうところは認めてもいいけど……。

そう言いたいところだけど、ボールギャグって思った以上に声を出せない。くぐもった、それこそゾンビのような声しか出せなかった。

男は、たぶんボクのことをゾンビだと誤解している。確かにボクは北欧とかロシアにいそうなほど色白だけどゾンビみたいに目は落ち窪んでいないし、瞳は混濁してないし、めちやくちやかわいいこのボクをゾンビと間違えるなんてありえねえ。

ボクはマットの上を青虫みたいにウニョウニョ進む。

「むう~~~~~~~~つ。むう~~~~~~~~つ」

遅々たる歩みだった。ボクの時速はゾンビにすら満たない。

男はすぐにボクの足をつかんだ。

ゾンビ映画でよくあるように、ボクの足は容赦なく引っ張られ、そして――、

舐められた！ ぞわん。

鳥肌たっちゃったよ！ 男は飽きもせず、ボクの右足を磨きこむみたいに上下にこするように触ってる。

そういう気持ちになるのもわからないではないけれど、いまのボクは男の人からしてみれば、ゾンビで――、だからモノみたいに扱ってもいい存在で、それが少し怖かった。

「足かわいいな」

男の目には明らかに欲望の焰が燃え盛ってるように見えた。

やだー。気持ちわるい。気持ち悪い。ゾンビよりもずっと気持ち悪いよ。

足をじたばたしてみても、無駄なあがきで、サンダルはもともとガバガバなサイズだったせい、簡単に脱げてしまっただけ。

「ああ、女児の抵抗って感じで興奮する」

「むう~~~~~~~~つ」

「ぐっへへ」

これって。そうだよね。あれだよね。

ボクは脳内でしつかりと認識する。これから起こることを予想してプルプルと身体が震えてきちゃった。

そう——。

「さあ、脱ぎ脱ぎしましょうねえくくくくへあああはあああつ」
やべえぞ！ レイプだ！

ハザードレベル5

男は血走った瞳で、ボクの肢体を足から顔の方まで見つめていた。

「僕ちん、女の子山脈に登頂するであります」

なにかわけのわからないことを言っている。正直なところ、どうすればいいのかわからない。

いくら少しだけ力が強くなっていたって、後ろ手に縛られていたらパワーは半減。

ポールギヤグのせいがかみつくこともできない。

比較的自由になるのは足だけ。

「おへそかわええな」

おへそ見られた。見られちゃった！

ただそれだけなのに猛烈に恥ずかしい。

男は右手でボクのシャツをまくり上げていた。左手はボクの足をつかんでいる。

そろりそろりとシャツがあがっていく。

ダメ。それ以上はダメ。

サイズ的にもダブルエーな感じのボクは見られてもそこまでシヨックではないけれども、このままいけば確実に胸まで見られてしまう。

それはなんか嫌だった。

おへそに気を取られているうちに、自由になっている方の左足で、男の胸のあたりを押し返す。

腕の四倍ほどの力があると言われている脚力は、あっさりと男を引き離れた。

ていうか、狭いバックヤードの壁際までぶつとんだ。

「ぐえ」

男は車につぶされたカエルみたいな声を出して、頭を左右に振った。

「すごいな……。ゾンビ化したらやっぱ力が強くなるんだな」

そんな独り言をつぶやいて、男は奥に置いてあった段ボールからこ

そごそとロープを取り出す。
たぶん足も拘束する気だ。

粘ついた男の笑顔。

笑顔って、歯をむき出しにした攻撃的な表情だって言われているけど、今、その意味がよくわかる。

こんなにも動物的で、野蛮で、ゾンビよりも本能的な表情をボクは見たことがなかった。

だって、人って社会的生活を営む上で、誰もがいい人の仮面をかぶっているから。

にじりよってくる姿が本当に怖い。コワイよ。いやだよッ！

ボクの視界が激しくにじむ。ボクはついに泣いてしまっていた。

女の子になって、とても精神が安定していて、万能感があつて、ボクはとてもハッピーだったのに。

男の人に——人間に、好き勝手に扱われてしまう。いいようにされてしまうというのが悔しくて、悲しくて、涙が止まらなかった。

そんなボクのこころの動きなんて、おかまいなしに。

ボクの生白い足だけ見つめて——。

男はとびかかってくる。

ボクの動体視力は、はつきり言つて男の動きをスローモーションのようにゆっくりと見せるほど、すさまじく進化していた。

男の指先から、呼吸、筋肉の動きまではつきりとわかるほど。

精神的にはボロボロだったけれど、その厚手の軍手で覆われた指先を、ボクは足でつまむことができた。

男が飛びかかってきた勢いを殺さず、そのまま、引き寄せるようにして、足で投げる。

男はまるでダンゴ虫のようにごろごろと転がり、今度は反対側に叩きつけられた。

「つてえなあ。おい——」

男は激昂する。嫌なことがあったときのよう。思い通りにいかないことに。

怒りを隠そうともしない。

なぜなら、相手はただのゾンビだから。ボクはモノを考えず、言葉を発しない、ただのゾンビに過ぎないから。

それがたまらなく嫌だった。

女の子として傷つけられることよりもずっと、ずっと、ボクという存在が顧みられることが嫌だったんだ。

そして——、だから、ボクは精一杯の主張として男を——にらんだ。にらみつけた。

「あ……」

必然的に男とボクは初めて目をあわすことになる。

「……」

男は無言だ。何かを迷っているような、そんな視線。

そして、たつぷり三十秒ほど経過。

「あの……、もしかして人間であらせられますか？」

ボクは猛烈にうなずくのだった。

★Ⅱ（ボクは男の話聞く。飛ばしてもいいよ。はいカット）

私、飯田人吉（いいだ・ひとよし）は、今年で40歳……はあ、年とつたな自分。

え、僕ちんじやないのかって？

人前で、そんな人称使うのって頭おかしくないかな。うん。まあそういうことで……。

40歳にもなつて僕とかちよつと恥ずかしいからね。まあ昔は僕って言つてたけどさ。

緋色ちゃんくらいの年ごろの子は想像もできないだろうけれども、おじさんにも小学生の頃があつてね、その頃からクラスの女の子には、飯田くんはいい人ねって言われていたんだよ。

名前が「いい」だ「ひと」よしだから「いいひと」ってね。

いいひとつって便利な言葉でね、とりあえずのところ、あなたは仲間だったり友達だったりはするけれども、特別ではない、オンリーワンではない、誰からも選ばれることはないってことなんだ。

この社会で、私は特に必要とされなかったなー。
ロスジェネレーション世代って知ってるかな。

おじさんくらいの年代のことをそう呼ぶんだけど、ちょうど派遣とか非正規とかそういう働き方もありますよって有名になってきた頃だったんだ。私も若いときはそんな言葉に騙されてね。バイトをやりながら、自由にいろいろな仕事を経験して、自分のやりたいように生きて、ゆくゆくは結婚して、幸せな家庭を持ちたいという、そんなささやかな、自分の身の丈にあった人生を望んでいたんだよ。

でも、そうはならなかったなー。

非正規っていうのは正常な規格ではないってことなんだ。この社会で正しく求められている普通という規格からはずれてるってことなんだよ。

緋色ちゃんは学校でいじめとかを見かけたことあるかな。

君くらいかわいかったら、そんなキタナイものから遠ざけられているかもしれないね。

ロスジェネ世代はいじめられているんだ。日本というこの国から。他の全部の世代からもね。

どういうことかというところ、ロスジェネは非正規が多くて、いったんルートをはずれた人間は、この社会からつまはじきにされちゃうんだ。

特に40にもなってくると、転職すら難しくてね。

正規雇用されたことがない人間は、ルートからはずれた産業廃棄物扱い、要らない人間扱いってわけ。

それで、どうにかこうにか去年の暮れだったかな、前に働いてた会社の伝手で、ようやく正社員になれてね……。

あのときはうれしかったなー。

思わずスズメの涙くらいの貯金20万円を全部引きだして、パチンコ行っちゃった。全額負けただけど。

それでもね。

ボーナスも退職金もなくて、みなし残業、サービス残業も当たり前前の職場だったけれど、ようやく努力すれば報われるのかなと思いだし

てきたんだよ。

やっぱりダメだったなー。

私の仕事はいわゆる事務職っていつてね。いろんな連絡事項とか、そういうものを作る仕事だったんだよ。

それで、こんな容姿だからかな。女子には嫌われてね。なんか、後ろに立ってたってだけで、セクハラだって言われて大変だったよ。

特にひどかったのは、私のことを嫌っていた女子のうちのひとり、上司と不倫関係でね、その現場をたまたま私が見たせいなのかどうなのかは知らないけど、上司といっしょになって、私を会社から追い出そうとしたんだ。

私はべつに恋愛は自由だと思うし、不倫は悪いことだけど、わざわざそんなことを言いふらすようなことはしない。

でも、ダメだったなー。私は心のどこかが欠陥品なのかもしれない。それこそ、心が非正規品なのかもしれない。

だから、上司にごますって、もつと忖度していれば、あんなことにはならなかったかもしれない。

さつきも言ったとおり、私は事務の仕事をしていて、会社の重要な書類に印鑑を押すこともあるんだけど、あるひとつの書類が、決裁も得ずに私が勝手に押したことになるってんだ。

会社はたぶん薄々気づいていたんだろうけれども、今まで数々の実績をあげてきて会社にとって重要な上司と、ポツと出のいくらでも替えの利くうだつの上がない私を天秤にかけたんだ。

選ばれなかったなー。

まあ、当然だけど、私は会社に捨てられたんだ。損害賠償まで請求されるといっておまけつきでね。

で、実家の佐賀に帰ってきて、この小さなコンビニでバイトをして、日々を食いつないで生きていたんだ。

何と言えいいだろう……。

私は、結婚願望が普通にあるというか、誰かに選ばれたいと思っっているんだ。

人間にはいろいろな生き方があって、お金が好きな人や、結婚なん

かしたくないって人もいて、それはそれでいいと思うけれども、私は人が生きる意味というか、価値といったものは、結局のところ子どもを作ることにあると思うんだよ。

それは、いわば、私自身が欠陥品であることを否定したいがための衝動かもしれない。

けれど——、幸せな家庭を持ちたいというのが私のささやかな夢だったんだ。

日々……、なんだろうな。

緋色ちゃんはゲームとかするかな。

ん。するんだ。

じゃあ、わかるかな。スリップダメージって。

そう、スリップダメージなんだよ。

日々、毒に冒されているかのように、少しずつその身が削れていつている感覚がするんだ。

コンビニの店員がべつに悪いわけじゃない。

でも、私は私が欲しいものがこの先ずっと手に入らないのだろうなとも思っている。

なぜなら——。今まで誰かに好かれたことなんてないからな。

日々のむなしさをごまかすために、ゲームとかアニメとかそんな趣味に没頭しているけれども、時々すごくむなしくなるんだよね。

でも、私が毒に冒されているとすれば、リジエネをかけるしかない。

だから私は、日々の癒しに、萌え四コマ漫画みたいなかわいらしい女の子がただ日常を謳歌する作品が好きだった。

みんな、かわいくて、仲良しで、毎日のちよつとした出来事に一喜一憂して、心の底から尊いと思えたよ。

絶対に私が入りこむことができない聖域。

だから、尊いのもかもしれない。

なぜこんな話をしているかだって？

ごめんね。緋色ちゃんにはつまらない話だったね。

どうしてこんなことしたのって言われたから、おじさんなりに理由を考えてみたんだよ。

いや、考えてみたというより、考えていたことを話している感じがな。

久しぶりに人と話をした気がしてね。うれしかったのかもしれない。

そうだね、どうしてもと言われると難しいんだけどさ。

数日前、深夜のコンビニで人が来ないときには、バックヤードに引っ込んでるんだけど、スマホをいじっていたら、ゾンビ現象のニュースが流れてね。最初はフェイクニュースだと思ったけど、いくつもの同じ情報が流れるんで、これはマジでヤバいと思ったんだ。

それで急いで、私はコンビニの食品とかをバックヤードに移しながら考えた。

これはチャンスなのかもしれないって——。

だって、ゾンビになってしまえば、死んでしまえば、すべてゼロだ。私は、いままで虐げられてきたっていう被害者意識が強くて、マイナススタートだったんだから、マイナスがゼロになるだけでももうけもの。

正直なところ、みんなが私と同じように不幸になるなら、私の不幸や怨みや辛みが伝わるのなら、悪くないって思ったね。

そういった負の精神でつながることができれば、いままで社会の外に置かれていた私も、ようやく社会の一員になれると思ったから。

だから——、だからなんだよ。

☆
☆

「だからって何がですか？」

と、ボクは手首をすりすりしながら聞いた。

ロープは既にはずされているけど、ちよつと痛い。

どうしてボクに変なことしたので聞いてただけで——なっげーわ。

いきなりペラペラとしゃべりだして、本当もうわけわかんないよ！

「だから、うん。つまり、私はね……いままで不可侵だったカワイイモノに手を出したいと思ったんだ」

うん？ ん??

「ぶつちやけ、せつかく世界も崩壊したことだし、小学生女兒とセツクスしたいって思ったんだ」

最後の最後に、今までの哲学的思考をぶち壊しちゃってるよ！
ていうか、結局そこかよ！

「あの……」

「なんだい。緋色ちゃん」

「控えめに言つて最低です……」

「控えめに言わなかつたら？」

「ロリコンは死んだほうがいいと思います」

「ですよー。あ、いまの目好き。かわいい。その蔑んだゴミを見るような目。もつとして」

「真面目なのか不真面目なのかはつきりしてください」

「まあ、それはそうだよね……。正直、ゾンビだらけになって精神的に参っているんだ」

確かに憔悴しているように見えた。

食料品はたくさんあっても、周りがゾンビだらけで危険な状態だったら、気は休まらなかつたのかもしれない。

ボクの足を舐めた件については、非常に遺憾の気持ち強いけれども——、しかも真正のロリコンだけれども。

——飯田さんはその名前のとおりいい人なのかもしれない。

だって、いくらボクが人間だったと気づいたからって、こんな世界なら、そのままイケナイ事をし続けても、誰からも咎められる恐れはないわけだし。

ボクが泣いてたのに気づいて、すぐにやめてくれて、今も正座して、必死に言い訳をしているのを見ると、そこまで憎むことはできなかった。

でも、足を舐めたことについては許さないけど。おへそを見たのもね！

「にしても、緋色ちゃんって容姿だけじゃなくて、名前もかわいいね」「え、そうですか？」

むふん？

ゾンビにはできない褒めるといふ行為に、ボクはくすぐったさを感じていた。

容姿には絶対の自信がある。

もうそこらのアイドルなんて目じゃないレベルでかわいいし。

でも名前？

夜月緋色ってそんなにかわいいかな。

うーん。スカーレットちゃんがかわいい？

「名前がかわいいってよくわからないです」

「ほら、あれだよ」

「ん？」

「イニシャルがね」

「イニシャル。YとHがどうかしたんですか？」

夜月のYに。

緋色のH。

なにかかわいいんだろう。全然わからん。

やっぱりロリコンだからボクのことを口説いているのでは？

ボクは訝しんだ。

小首をこてんと傾げて疑問への答えを待っていると、飯田さんは二

ヤつと油っぽく笑う。

「ん。だって、イニシャルだと、わいえっちだからね」

「セクハラかよー！」

ボクは思わず叫んでいた。

|||||

佐賀言語 わい

ゾンビとは関係ないが、プロゴルファー猿においては「わいは猿や。プロゴルファー猿や」で始まる。ここでいうところの『わい』とは私のことである。しかしながら、佐賀方面あるいは九州北部地方における「わい」とは、あなたのことである。これめっっちゃ混乱するから気

をつけてね。しかし、他人のことを「わい」と呼ぶのは、かなりぶしつけで、基本的にはかなり気を置けない友人どうしなどの場合に限られる。ニュアンス的には「おまえ」に近い。もしも旅行などで佐賀などに訪れたときにいきなり「わいどっからきたとや」「みたいな言い方はたぶんほとんどしないと思われる。

|||||

☆

「えっちなのはいけないと思いますし、えっちいの嫌いです」

「おお。ダブルインカム」

「意味不明です」

「しかし、緋色ちゃんってどうやってここまで来たの。ゾンビだらけで外は危ないよ」

「あー……」

そーいや考えてなかった。

外を出るというのは比較的理由はつけやすい。

家族がゾンビになったとか、食糧がなくなったりとか、そんな理由ならだれでも思いつくし、そんなに変じやない。

でも、このあたりは細い道路も多くて、ゾンビにつかまりやすいのも確かだ。

まさかゾンビに襲われないなんて言えるはずもない。

よくてワクチンでできるまでモルモット。下手すりゃ解剖だろうし……。

ボクがぐるぐると悩んでいると、飯田さんはなんだか勝手に納得して、うんうんとうなずいていた。

「なるほどつらかったね」

いや、つらいどころかワクワク遠足気分だったんですが……。

なんてことは言えるはずもない。

ハグしようとしてきたので、とりあえず遠慮しておいた。

目に見えて落ちこむ飯田さん。いい年した大人が涙目にならなくてもいいじゃない。

「そういえば、さっきの話なんですけど」

「ん、なんだい？」

「おじさんが、小学生と……、そのえつちなことをしたいって話です」
「おお。小学生女兒から、そんなことを言われると、な、なんか興奮するな」

無視だ。無視。ちよつと甘やかすとすぐ調子にのるタイプだな。

「あのですね。ボクが聞きたいのは、どうしてゾンビなのかなってことなんですけど」

「うん？」

「どうして、生身の生きてる小学生女兒を探さないで、ゾンビを捕獲しようと思ったんです？」

「あー、それはやっぱり怖かったからな」

「なにがです？」

「他人が怖かったから」

「ボクのことも怖い？」

「うん。怖い」

蔑んでとか言ってるくせに、本当はその存在を認めてほしいらしい。

なんて、わがままで、ボクとちよつと似てるなって思った。

だから――、

「おじさん。さっき、どうやってここまで来たのかって聞いたよね」

「うん。そうだね」

「あれ、ゾンビのふりをしてきたんだよ。ゾンビのふりしたら襲われないんだ」

|||||

ゾンビのふり

ゾンビのふりをしてゾンビ避けをする作品も存在する。

『シヨーン・オブ・ザ・デッド』及び『ウォーキングデッド』などである。

基本的なやり方はゾンビ肉をベタベタと身体に塗ったくっつけて臭いを消すという方法。

当然のことながら猛烈な異臭に包まれ、着ている服は血まみれになる。

大丈夫。すぐ慣れます……。

ハザードレベル6

ボクは飯田さんに、ゾンビのふりをすれば襲われないと伝えた。

ゾンビものでは少なからずある作戦のうちのひとつだけども、現実的に考えるとかなり怖い。その作戦が成功するか否かというのは、実際の検証をしなければならぬわけで、つまり、ゾンビの大群にその身をさらす必要があるからだ。

もしも、一匹のゾンビの前でゾンビのふりをしたところで——、それはゾンビ一匹に効くということぐらいしかわからないってわけだね。たとえば鉄条網にゾンビの大群が張りついていて、そこでなら試すのも可能かもしれないけれど、かなり特殊な状況だと思う。

飯田さんもそのあたりのことはかなり懐疑的だったのか、いぶかしげな視線でボクのことを見ている。だいたい、顔、足、上腕あたり、足、顔、顔って感じで、胸のあたりはあまり見ないのがロリコンの特徴なのかもしれない。

ふともものあたりが好きなの？

あの……視線だけでセクハラってわりとありえますよ。ええ。

ボクは元男って感覚もあるんで、わからなくもないですけど。

そういう視線にはわりと寛容だと思いたいけれど。

しつこいとさすがにちよつとヤダ。

じー。

こちらがジト目で反撃すると、飯田さんはたじろいだ。

「……………」

「ともかく！ 五分くらい待っててください」

「あ、ちよ……………」

飯田さんが止める前に、ボクはスタッフルームを飛び出して、コンビニのお店側に向かった。

飯田さんはゾンビを恐れているのか、こちらに来ない。

視線をはずす——、それがなによりも重要だ。

ボクは原理不明の力を使ってゾンビたちを操り、人間を襲うなど命令することで、飯田さんを外に連れ出すことができる。

けれど、それはボクの方が飯田さんにバレる恐れもあるってことだ。

それは怖い。

なにかのはずみで、例えば大きなコミュニティやそのほかの生き残り団体に遭遇したときに、飯田さんがその情報をネタにすることも考えられるからだ。

ボクを生贄にするって感じだね。

もちろん、飯田さんが話していた自分の来歴からすると、社会からの生贄になつてきたという感覚はあると思うし、他人を害することを極端に恐れているように思うけれども。

でも――。

人の心はマイク口秒ごとに移りかわっていくものだと思う。

心があるから、故意も発生する。

要するに、ボクのしようとしていることは、とんでもなく馬鹿なことなんだけど、でもね……、馬鹿でも不合理でも、したいと思ったことをしてみようとするのが心だと思う。

ボクはほんのちよつとだけ縁をもった飯田さんのことを……、えつと……、なんて表現すればいいのか傲慢にもというか、上から目線というか、助けたいと思っちゃった。

正座しながら、泣きそうな顔をしながら「ごめんなさい」って大人のひとが謝っていたのを見て、本当のところはギョって抱きしめてあげたいような気持ちも湧いたんだ。

冷静に考えるとやべえなボク。

もしかしてバブみ発揮してない？　ちっちゃな母性が芽生えちやつてない？

うー。ボクは男って感覚もあるから恥ずかしいぞ。

まあ、実際にそんなことをしちゃうと、誤解されて何が起こるかわからないからしなかつたけど。

ともあれ――。

ボクの方針としては、ほんの少しボク自身の生存確率を下げても、飯田さんのために何かしようかなというようなそんな気分。

大事なものは『ほんの少し』ってところ。大幅に生存確率を下げる『ボクがゾンビを操れる』という事実は伏せておかなければならない。

そのためには……。

ボクは、店内の商品陳列棚を適当に物色する。

あつ。あつた！

そんなに探す必要はなかった。ボクが見つけたのは旅行のときとかで使う、手のひらサイズの消臭剤『リフレツシユシユ』だ。水色のかわいらしいプラスチックにノズルスプレーがついている。

シユツシユって感じで吹きかけるタイプだね。

商品は開封されていない状態のビニールで覆われていたけれど、ひん剥いて、ゴミ箱に捨てた。

それから、バックヤードに戻ると、飯田さんは盛大に心配してくれた。

「緋色ちゃん。危ないよ……ごくたまにだけどゾンビが店内に入ってくることもあるんだから」

「大丈夫ですよ。ボクがとりにいったのはこれです」

ドラえもんみたいな感じで、ボクはハーフパンツのポケットの中から、さっそくりフレツシユシユを取り出した。

「えっと、それは。ここでも売ってるような消臭剤に見えるんだけど」

そうだよ。ここでも売ってるような消臭剤だよ。

なんていえるはずもなく、ボクはしたり顔で述べる。

「ちがいます。さっきおじさんさんに襲われたときに落としてみたみたいなんで拾いにいったんです」

「う……、それはすみません」

「いいですよ。そのことは半分くらいは許しました。で、これはですね。リフレツシユシユが主成分ではあるんですが、ボクが独自にブレンドした対ゾンビ用消臭剤なんです。これを吹きかけてゾンビっぽい動きをするとあら不思議、なぜかゾンビに襲われなくなります」

嘘をつくときは堂々と。

そして真実を混ぜると良いとされる。

ボクは詐欺師でもなんでもないので、実のところドキドキしていた

けれど、ゾンビに襲われないってところは真実だからいいよね？

「それが本当なら……、私としては緋色ちゃんが精製方法を公開すればゾンビ被害もかなり減ると思うんだが」

「えっと……、ブレンドっていつても、実はいろいろと混ぜたからもう一度同じ効果があるのを作れるかわかんないです……」

「そうか。だったら、このことは隠していたほうがいいな。おじさん以外の悪い大人だったら、緋色ちゃんに無理やりもう一度作るように言うかもしれないからね」

「といって、飯田さんはボクの頭を撫でた。」

「う~~~~~、事案！」

でも、その動機は半分以上は優しさでできていると考えたと無碍にできない。なんかズルイ。これが大人のやり方か。

「でもいいのかな。その消臭剤が一回こっきりの奇跡の産物なら、かなり貴重だろう」

「いいですよ。また作れるかもしれませんし」

「ああ……そういうことか」

「なんだろう。すぐに飯田さんは納得した表情をしていた。」

「いや、人間は怖いからな。ゾンビなんかよりもずっと」

「ん？」

人間は怖い。

つまり、ボクが怖いってこと？

違うな。

たぶんだけど、ボクが本当は何度でもゾンビ避けスプレーを作れると思っっているんだろう。けど、それをもし公表してしまうと、事実上ゾンビの脅威はなくなる。それだけだったらハッピーエンドなんだけど、今度は人間どうしのみにくい争いが始まってしまうかもしれない。

今はまだゾンビハザードが発生してから数日しか経過していないから比較的穏やかだけど、この先、完全に社会が崩壊する可能性もあるんだ。

もちろん、社会が崩壊しないと信じて公開するのもひとつの手では

あるんだよ。

でも思い出してほしい。

このゾンビハザードは人災ではないんだ。

ある日彗星が近づいて、なにかよくわからない理由でゾンビ化した。だったら、この先もまた大量の人類がゾンビ化するかもしれない。

ゾンビ避けスプレーが周知されても、社会や政治や人の倫理が崩壊しないとは限らない。

だから——、ゾンビに襲われないというのは、絶対のアドバンテージになる。

本当は誰にも教えないほうが望ましい。

けれど、ボクは飯田さんに教えてしまった。

そのことを飯田さんも悟って——、だから、ボクがスプレーのブレンド方法を知っているけれども教えないというふう考えたのだから。

ややこしい。

ともかく、飯田さんはボクがゾンビ避けスプレーの作り方を知っているけれど教えないと考えているってこと！ で、それでいいと思っっているってこと！

OK。

「それにしても緋色ちゃんって、もしかして天才なのかな？」

「え？」

「君ぐらいの年齢の子どもは、もう少し、なんとかフワフワした喋り方をするものだよ。小学生マイスターの私が言うんだ。まちがいない」

「そうですか……ありがとうございます？」

感謝を述べていいのか微妙。

でも、まあそうだよ。ボクは小学生女児に見えるけれどもこれでも大学生なんだし。

「実際何年生なのかな？ 私の見立てでは小学五年生くらいかな。小学生マイスターの私が言うんだからまちがいない」

「えつと……、はい。そんな感じで」

大学二年生なんだよなあ……。まあそれはいい。どうせそんなことを言ってもしかたないし、いまは重要なことではない。

「それでおじさん」

ボクはあらためてマットのところへぺたんこ座りして、飯田さんに向き直る。

「も、もしかして私のことをパパと呼びたいのかな？」

「うん。死んで」

「すごいな。そのジト目。本当にクセになる。あまあまボイスで死んでというのもポイント高いわー。はかどるー」

なにがはかどるといえるのだろう。まあいいや、話を進めよう……。

「ボクがなぜこのスプレーをおじさんに教えたかというんですね。おじさんに自分の夢をかなえてもらいたいって考えたからです」

「夢？ 私の夢なんてもう……」

「さっき言ってたじゃないですか。小学生女兒と……。そのごによごによしたいつて」

「させてくれるんですか!？」

「させねーよ。この変態!」

「ありがとうございます!」

「キモイ」

「ふひっ」

だめだこいつ。なに言ってもうれしいみたい。

「あー、ともかくですね。このスプレーを使うと、ゾンビに襲われなくなるわけです。ここまではOK?」

「OK」

ズドン。

ショットガンを撃つ動作をする飯田さん。

「ゾンビに襲われないってことは比較的移動も簡単です。例えば近くにある小学校に向かうこともできますし、そこでお好みのゾンビを捕獲してくれるのもたやすいんじゃないかって……」

ボクは言葉を区切る。

飯田さんの顔がわかりやすいくらいに希望に満ち溢れていた。
うーん。ちよろい。

☆
||

いろいろ準備をしなければならぬということ、ひとまず明日向かうことになった。ボクはリフレッシュシユを一吹きしてから、スタツフルームを後にした。

最後にカツ麺とおにぎりをもらった。

おにぎりはスタツフルームにおいてあった小さな冷蔵庫の中に入ってたみたいで、ひんやりとしていた。

ひんやりおにぎりはヤダなあ。でもすぐに悪くなっちゃうだろうし、しかたなかったのだろう。

そんなわけでお家に帰ってきました。

「ただいまー」

お姉さんゾンビは茫洋とした眼差しでボクを出迎えてくれる。

おかえりといってくれないのはちよつと寂しいけど、ボクのほうにゆらゆらと本能的にかな、近づいてきてくれるのはうれしかった。

ポイポイってサンダルを脱ぎ捨てて、

「お姉さんボク疲れたよー」

ごろんとベッドに横になるボク。

いや本当に疲れちゃった。久しぶりに外にでたのもそうだけど、あれだけ他人と会話するのがもうね……気力ゲージをゴリゴリ削られちゃった。

飯田さんはいい人だし、比較的人当たりもいいほうだし、ボクと同じく陰キヤなので、たいして気を張らなくていいほうだと思うけれど、でもやつぱり人と会話して、相手が何を考えているのだろうと想像しながら話すと疲れるよ。

そこんところいくと、お姉さんは優秀だね。

なにも言わないで、ボクのお気持ちちつてやつを受け止めてくれる。

はあ~~~~~、お姉さん好き好き。

それはただのお気に入りのお人形に対して感情移入しているにすぎないのかもしれない。

でも同じ空間と時間を過ごしていると、少しずつ愛着が湧くのはとても人間的だと思う。

ボクはやっぱ人間だよなー。

そんなわけで、ベッドのところでお姉さんにはひざまくらをしてもらった。

肉体的疲れとは無縁そんな美少女ボディだけど、精神的な疲れを癒すためには、そういうのが是非とも必要だったんだ。

お気に入りの音楽をかけて、リラックスしながら軽く頭を撫でてもらう。

「あまやかして。お姉さんもつとあまやかして！」

赤ちゃんプレイしても恥ずかしくないよ。

だって、いまはひとりだし。

お姉さんは自動機械人形みたいなものだ。

そういえば、高齢者の多いここ佐賀でも、介護は機械にしてもらったほうがいいという意見が強かったみたいだね。

なぜなら——、人間に介護してもらうのは恥ずかしいから。

その意見はすぐわかる。

人間は人間の視線が怖いんだと思う。もちろん、人間と触れ合ったり、会話したりするのがすごく好きな人がいることもわかる。

でも、それは心の一番表層の部分なんじゃないかな。

物理的に言えば、前頭葉とか——そういうところあたりの。

もつと奥深くにあるワニ脳とか呼ばれているところ、最も本能的な部分においては、最優先されるのは自分だ。

自分以外の異物は『悪』であるというのがエレメンタルモデルということになる。それが人間の本性——。

だから、人間は人間に介護されたくない。

のかも——。

まあ、科学的考証とかなないからね。わりと適当に考えてるだけ。お姉さんゾンビは何を考えてるのかな。

普通のゾンビは、同じくワニ脳だけが残った状態——、端的に言えば食欲のみが残り、他の高次欲求はもとより、睡眠欲やら性欲も含めて減退しているように思う。

観察する限りは走性といって——虫とかが夏場に飛んで火にいる状態になるように、高度で複雑なことはできないように思える。

でも——、ボクが命令したら、ちゃんと力加減を調整することもできるし、ある程度のコントロールもできるんだよなあ。いまはほどいているけど、ツインテールとか作れたわけだし。

ごろんとうつぶせになって、僕はお姉さんのふとももに顔をうずめる。

べつにえつちな気分なんじゃなくて、お姉さんがもしも何かを考えているのだとしたら、その心というものを見逃さないようにしたかったからだ。

お姉さんをちよつとでも感じるように、ボクはそのままお姉さんを押し倒す。

お姉さんはいままで膝枕をしてくれていたから、ちようどくの字に足が折られたままれたまま、背骨が宙に浮く感じになってしまった。

見た目的にきつそうなので、足をきちんと伸ばしてもらって添い寝状態になる。

お姉さんはやっぱりマグロ状態。

薄くて透けて見える下着からは、青白い肌がちらりと覗いていて、胸のあたりには動きがなかった。

呼吸はしていない。もしくはかなり小さいのか。

ボクはお姉さんに抱きついたまま、お姉さん成分を鼻腔いっぱいに入れた。

エアコンはつけっぱなしで、かなり冷え冷え状態にはしているけれど、腐っていないかちよつと心配だったんだ。

でも、いい匂いがする。

ボクがゾンビもどきだからかもしれないけど。

バナラみたいなの、頭の中がハッピーになるそんな匂いだ。

女の子の匂いって感じ。

「お姉さん腐っちゃわないでね」

「うが？」

胸のあたりに耳を押しつけてみても、やっぱり心臓の鼓動は感じない。

お姉さんは生きているのか生きていないのか。

考えているのか考えていないのか。

それはわからない。

だって、ボクはボクの心の限りにおいてしか他人を知りえないし、ボクの脳というフィルターを通してしか他人とは会えないのだから。まあそれってゾンビだろうが人間だろうが変わらないんだけどね。相手がそころを持つているかどうか、それはわからないんだよ。

それらしい振る舞いをしてるかどうかでしか判断できないわけだし。

だから、ボクにとっては人間もゾンビもAIも、結局のところ変わらない。ただ好ましいか好ましくないか。ボクの趣味によって、ボクの中の序列が決まる。

それでいいんじゃないかな……。

☆
||

お風呂に入って、適当に行儀悪くベッドのところでおにぎりをパクついていたら、突然スマホが鳴った。ゾンビお姉さんにスマホを机のところから持ってきてもらおう。雄大からだ。

「よう。生きてるか」

「うん。生きてるよ」

「あー、あいかわらずなんかすげえ幼女ボイスに聞こえるな」

「えー、そんなことないよ。ゾンビのうなり声のせいで耳がおかしくなってるんじゃないの？」

「そうかあ？ まあいいや。まだ電話が通じるか心配だったんで電話したんだが、そっちはどうだ？」

「えーっと、まず命ちゃんに電話は通じなかったよ。でも伝え損ねて

たんだけど、ボクが起きる前には電話かかってきてたから、彗星接近時にはゾンビにはなつてなかったみたい」

「そうか。命にはこっちからも電話してるんだけどな。あいかわらず通じない。ああでも……無理に探そうとするなよ」

「うん……」

命ちゃんは後輩だけど、高校三年生なんだ。いろいろと説明すると面倒くさいので省略するけど、もともと雄大のほうが命ちゃんと親戚で、ボクは友達の友達システムによって、命ちゃんとも遊んでいたりして感じ。

で、この高校が確か福岡にあるんだよね。

交通機関とか道路がどうなってるかにもよるんだけど、一朝一夕に行ける距離ではないし、そもそもゾンビハザード当時にどこにいたかもわからない。

「ねえ。雄大」

「なんだ？」

「死なないでよ。ボク、雄大が死んだら哀しいから」

「おう。緋色も生きろよ」

「うん、わかった」

「緋色は素直すぎて心配だなー」

「なにをーっ！ ボクだつていろいろ考えてるんだよ！ その……あのね……ボクが素直なのは雄大だからだよ！ 親友だから……」

「……そういうとこだぞ、おまえ」

「え？ どういうことー」

きよとん系主人公ではないけれど、雄大の反応がよくわからん。

「まあ、適度に信じ、適度に警戒しろ。人間もゾンビもな」

「うん。雄大もね」

「ああ、そうするよ。さてつと……、周りにはゾンビが四十匹程度か。いけるな——」

「ええ!? 大丈夫なの?」

「ああ、バイクで突っ切るから大丈夫だ。じゃあな」

本当に大丈夫なのかな。

ゾンビならボクが近くにいればどうとでもなるんだけど。

まあ、雄大はボクと違って、なんでもできるやつだから大丈夫だとは思う。

でも、見えないところで何かが起こるといふことに、ボクはトラウマがある。

「まあ……考えてもしかたないか」

ボクはお姉さんを抱きまくらにして、一日を終えた。

ハザードレベル7

朝になりました。

お姉さんを抱き枕状態にして眠ったんだけど、なんか癒し効果がすごい。ほんのり甘い香り、ひやつこい感覚がマッチングしてて、ちょうどいい。

そういやエジプトでは人間の肌のほうが外気温より冷たいから、ぴつたりと肌をくつつけることで人間クーラーとしての性能を発揮したんだって。

いまのお姉さんはゾンビ化してて、死体らしいヒンヤリ感が漂ってるので、なおさらゾンビクーラーとしては最適だ。電気が来なくなつたときは期待したい。

ていうか——、ゾンビって眠らなくてもいいから通常は目もあけっぱなしなんだけど、さすがに視線というのは気になるものなんだね。睡眠時には目をつぶってもらおうようお願いしちゃったよ。

ベッドのところで、うーんと伸びをして、ボクは日課となつた歯磨き顔洗いをする。すつきりさっぱり。

朝ごはんでも食べようかなと思うけど、そこまで必要でないようにも感じている。いまのボクは男だったときに比べて低燃費らしい。

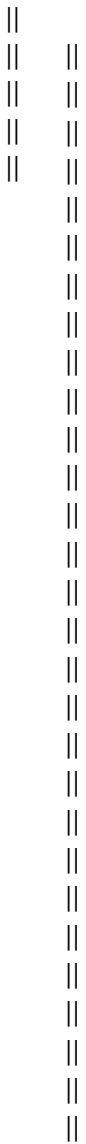
とはいえ——、何も食べないのも味気ないかな。

そんな感じでもらつてきてた適当な缶詰をあけて、パクつくことにする。定番中の定番であるツナ缶だ。ちよつとだけ醤油をたらして、パクつ。

ん。いけるね。

「ねえ。お姉さんも食べてみる？」

人間もゾンビも臓器の形としてはほとんど変わりはないはずだから、人間を食べることができればなら、他のものも食べることができはず。



ゾンビは人間しか食べないのか？

ゾンビ映画の巨匠、ロメロ監督の『サバイバル・オブ・ザ・デッド』では、ゾンビを一種の病気であると捉えて、いつか治る可能性を信じ、ゾンビたちと共存しようとしている一派がいる。その一派が考えたのが、ゾンビ以外の馬を食べさせるということだった。最後の最後にはゾンビが馬を食べるシーンが映される。ロメロ監督の作品はゾンビを基軸にした寓話であると考えられるので、これもまたひとつの寓話なのだろう。ロメロ監督にとって、ゾンビとは大衆のことであり、人間社会そのものをあらわしている。

|||||

ツナ缶をお箸でつまみ、お姉さんの口のあたりに持つていつてみる。

今は少しだけコントロールをはずして、ゾンビの本能にお任せ。

うーん。首をゆらゆらと左右に振って、なんだろうって感じで見るな。

どうやら食べ物として理解していないみたい。

でも、さすがに謎の原理でゾンビになったとはいえ、光合成をしているわけでもないだろうし、エネルギーがいると思うんだよね。

ボクとしては、お姉さんが動かなくなるのは嫌なただけ……。

人間を食べさせるわけにもいかないし……。

「しかたないなあ。はい」

口をあけるように命じて、ボクはツナを放りこんだ。

よしよし。

少しの間、変な感じに咀嚼していたけど、そのうちゴクリとのみこんだ。

「うん。食べた食べた。えらいえらい」

少しだけ罪悪感というか。

無理やり食べさせているようで、いやな感じもしたけれど、でも、ゾンビなんだから、そもそも快・不快とか、嫌とか好きとか、そういう感覚はないと思う。

ボクが勝手にそう思ってるだけで、本当はいろいろと考えてるのかもしれないけれど。

「ねえ。お姉さん。もっと食べてね。もしも嫌なら、そういう意思表示をしてね？」

意思を表示しないと、その意思を認めないというのもよくないことだろう。

いちおう、口の中にほうりこんだあとは、吐き出してもいいように命令を解除しているけど、よくわかってない可能性もあるなあ。

でも、結局、この世界においては今も昔も意思を表示できなければ奴隷になるだけだ。ゾンビのもともとの語源はブードゥーゾンビって言うって、人間が死体を奴隷のように扱ったというオカルトからきてるらしいし。

せめて、意思がなく、理性がなく、心がないなら。

ボクはお姉さんの所有者として、彼女のメンテナンスを心がけようと思う。

「さつてと……。飯田さんのことは別にどうでもいいんだけど、そろそろ洋服がワンパターンになってきたなあ。どうしよう」

お姉さんになにか適当な洋服を持ってきてもらおうかな。

今日は一日小学校だし、その間、お姉さんを待機させとくのももつたない。

遠征してもらおう。

頭を丁寧にとかさねながら、ボクはそんなことを思う。

心はいっぱしのゾンビマスターだ。

振り返りながら、いいよねって同意をとりつけると、お姉さんは「んあ？」と首を傾けた。

こういう動作は意思があるように思えるんだけどね。

ちなみに今日はなぜかポニーテールになりました。

お姉さん、わりと多趣味。

「緋色ちゃん。本当に大丈夫なんだろうね……。信じてないわけではないが」

コンビニについたら、飯田さんはすっかり怖気づいていた。

ゾンビがうろついているなかを小学生女兒に見えるボクが突っ切ってきているのだから少しは信じてほしい。

「おじさん。このままここにいても夢はかなえられないよ」

「うう……。わかっちゃいるんだ。でも、正直なところ、緋色ちゃんが時々会いにきてくれるならそれでもいいかなって。君はかわいいし魅力的だ」

「え、かわ？ えへ。えへへ。まあボクはかわいいけどね。でも、おじさんは自分の思い通りになるゾンビ人形がほしいんでしょ」

「まあ……。そりゃあ、そうだが。私は誰かと心を通わせたいとも思っているんだ。ゾンビじゃ、それは無理だからね」

心を通わせるというのが下半身直結じゃなければ、許せるんだけどね。

ボクははつきりと拒絶の意思表示をする。

「い・や・で・す！ ボクはおじさんのことを半分は許してないんだからね」

「悪かったと思ってる。でも緋色ちゃんのことを、あのときはゾンビだと勘違いしていたんだよ」

「どこらへんがゾンビだと思ったの？」

「うーうー言いながら、アイスを漁っているところとか……」

「あー。まあそうかもね」

「背後とかに無頓着すぎるんだよ。ゾンビに襲われない確信があったんだろうけど、普通はもつとビクビクしながら探すもんだよ。私だって、バックヤードから店内に行くときでさえ、緊張しすぎて自分の心臓の音がうるさかったぐらいなんだから」

「うー。気をつけます」

「うん。そうしたほうがいい」

飯田さんは分厚い唇を歪めて笑った。

殴りたいその笑顔。いや、悪い人じゃないんだ。ほんと。

でもさあ。なにかにつけてスキンシップとろうとしてくるところが、年頃の娘にかまいたい父親のような感じで、ちよつとうざい。

ボクは気分を変えるように、リフレツシユシユを肩下げカバンから取り出した。

そう、今日のボクはカバン装備。

なにかにつけて無防備、無装備すぎたボクは、ついに道具袋を装備することを覚えたのだった！

……遅すぎるって言わないでね。

ちなみにこの肩提げカバンは正直なところかわいくない。

大学の講義のときにも使っていた黒色の無骨なやつで、いまの小学生女児的な体型にはミスマツチ。

でも、わりと分量入るし、何も持っていないよりはマシだろう。

今回の小学校遠征では、もしかしたら手に入るかもしれない物資の補給も兼ねている。飯田さんとはそういう話をした。手に入れた物資は完全な折半を約束している。お部屋の中で飼う予定のゾンビ小学生以外はね。

「さて。そろそろ出発しましょうか」

ボクは自分にリフレツシユシユをかけ、それから同じように飯田さんにも一吹きする。ラベンダーの淡い匂いがあたりに広がった。

ちよつとだけ男臭かった部屋の中がちよつとだけいい匂いに。

まあ——、このバックヤードではお風呂に入れないからね。ボディーペーパーとかで身体を拭いたりはしてたみたいだけど、やっぱり限界があるらしい。

ボクは毎日お風呂に入るつもりだけどね！

「それで、これからどうするんだい」

「うん。まずは腕を少し上げます」

「こんな感じかな」

そう、両の腕をつきだして——、

「それから、足をひきずるように歩きます」

「こんな感じかな」

そう、ブギウギを踊ってるみたいに——、

「で、顔は死んでる感じで」

「こんな感じかな」

そう、まるで豚さんが地面に埋められてるみたいだに――、

「完璧じゃん。どこからどう見てもゾンビムーブだよ！ おじさん！」

「そ、そうかな。しかし、これは……、腕がわりと疲れるね」

「腕は疲れたらおろしてもいいですよ。まあ適当だし」

「そ、そうなのか……。しかし、このゾンビ避けスプレーの効果はどれくらい持つのだろうか」

「一日は持つかなー？」

効果設定なんてあつてないようなものだから適当だ。

あまり長すぎてもありがたみがないし、逆に短すぎてもなんども吹きかけないといけないので面倒くさい。

とりあえず一日ぐらいが妥当だろう。

「じゃあ、ホントにいこっー」

ボクは飯田さんとともに出発した。

向かう先は近所の小学校。ここから歩いて三十分くらいの距離だ。

ゾンビムーブだと、もつとかかるかもしれない。

途中で面倒くさくなったら普通に歩いて大丈夫ってことにしよう。

デモンストレーション用にゾンビさんは適当に配置していた。

コンビ二前の細い通路に数体。

飯田さんがわかりやすいくらいに顔を引きつらせていた。

「しっ。静かに……」

声をあげないようにボクは指示する。

べつに声をあげようが、大声で歌おうが、裸になってサンバを踊ろうがゾンビが襲ってくることはないけど、こう言っておかないと、飯田さんが何をするかわからないからね。

しかたがないけれど――、場をコントロールさせてもらう。

飯田さんはボクのいいつけを守り、両の手で口元を押さえた。ああ、美少女がやってたら様になるんだけどね。

それから先ほどのゾンビムーブを思い出したのか、手を口元から話して、獲物を求めるかのような動きになる。

悪くないね。ボクもそんな感じで……。あーうー。
ゾンビモード！

☆Ⅱ

正直、5分もたなかつたよ……。

ゾンビモードはテンションがもたない。あーうー言いながら、ノロノロ歩くのって逆に疲れる。

結局、ボクはゾンビを通り道から遠ざけて、大丈夫なように装って、普通に歩くことを提案した。

飯田さんもたつた数分で腕がプルプルしていたから、その提案はわたり船だったのだろう。すぐにうなずいてくれた。

今度は潜入モノのゲームみたいに小走りで目標に近づく。

障害物となるゾンビは周りにいないから、わりと早い。サイズの合わないサンダルのせいであまりスピードが出せないけれど、ボク自身は息が切れることもないし、どこまでもダッシュできそう。

まあ――、

ちらりと後ろのほうに目をやると、死ぬほど汗まみれのつゆだく状態になった飯田さんがいるんだけど。

「ま、待って……。ハアハア……。おじさんくらいの……。年齢になると……。ハアハア……。無理。不整脈が」

「はあ……。わかりました。ゆっくりいきましよう」
それでも、そんなに距離は離れていない。

十時くらいに出発したボクたちは、きっかり三十分後には目標地点に到達していた。

小学校はシンと静まり返っていた。いつもは聞こえるはずの子どもの達の喧騒が聞こえない。聞こえてくるのは遠くに反響しているようなセミの声と、どこかから聞こえてくるゾンビのうなり声だ。

どことなく少し甲高い。子どもゾンビいるかな？

重い鉄製の校門は大人が通れるくらいにわずかな隙間が開いており、壁の壁面に真新しい赤い血がべったりとついている。

その隣に手形。サイズからして大人かな。

逃げこんだか。脱出しようとしたかはわからないけれど、小学校の中もゾンビだらけな予感がする。

よっしゃ！ とボクは思った。

飯田さんの目標確保ができる。

チラッと横に視線をやると、飯田さんは手のあとを見て、がくがく震えてる。

なんだよう……。ゾンビに襲われなかったのは証明したじゃん。

「おじさん。ボクたちはゾンビに襲われる心配はないですから、大丈夫ですよ」

「ん。ああ……。そうだね。でも、この『手』の人はどうなったんだろうって思ってるね。その人の痛みとかを想像してしまうともうダメなんだ。小学校の予防注射のときも、自分の身体に刺さるときよりも前のクラスメイトが顔をしかめているときのほうが痛みを感じるタイプだったんだよ」

「そうなんだ」

ボクはそこまではなかったな。

他人にまったく共感しないってわけじゃないけれど、他人の痛み——『そのような感じ』というのは、絶対に伝わらないって思ってるから。

ボクの痛みはボクのもの。

他人の痛みは他人のもの。

そんなふうに考えてる。心が冷たいのかもしれない。

気を取り直して、飯田さんは学校の中に足を踏み入れた。ボクもあとに続く。

ボクのゾンビサーチ能力によると、学校の中には百人以上のゾンビがいる。校庭にはちらほらと十数体程度。

校内のほうが圧倒的に多いみたい。

ゾンビは脳内に蓄えている情報に従って、生前の生活をトレースし

ようにする性質がある。

真夜中から早朝にかけてゾンビ化した子ども達が学校に登校しているのだろう。

考えるとわりとヘビーだよな。

飯田さんが言った共感性を無理やり発揮してみると——わかるけどさ。

この学校の中にゾンビ小学生が登校している理由は、下記のようなパターンに分けることができる。

親がゾンビ化して子どもがゾンビ化し、子どもが登校するのを止める者がいなかった。

親がゾンビ化せず子どもがゾンビ化したが、子どもが登校するのを止められなかった。

親がゾンビ化して子どもがゾンビ化しなかったが、親から噛まれてゾンビ化した。

親がゾンビ化して子どもがゾンビ化しなかったが、親から逃げ出した先でゾンビ化した。

親がゾンビ化せず子どももゾンビ化しなかったが、その後ゾンビに襲われ、子どものほうはゾンビになってしまい登校した。

どのパターンも救われないなあ。

ただ、思うんだけど——、もしも、親が死んでないパターンで飯田さんがお持ち帰りした場合、その人はゾンビとはいえ、娘が帰ってこないことになるわけで。

うーん。あまりよくないような気がするかも？

ま、まあいいか。考えてもしかたないことだし、多かれ少なかれ夢をかなえるってことは誰かの夢を踏みつけにしてるってことさ！（開き直り）

☆Ⅱ

まずは校庭から見てもわることになった。

大方のゾンビ少女はパジャマを着ている。

たまに洋服を着ているゾンビ少女もいるけど、その子は真っ白い布地がトマトケチャップでもこぼしたかのように赤くそまっていた。たぶん、内臓もはみでちやってるだろうし、飯田さんのお好みではないだろう。

内臓に興奮する変態でもない限りは……。

それでも綺麗なゾンビも何体かいた。

でも、一流のブリーダーか何かのように、飯田さんは首を縦に振らない。

「少し低学年すぎてね。私的にはアウトなんだ」

見た目的には小学一年生か二年生ってところかな。

あれだとダメなんだ。ロリコンってよくわからない。

「あの、おじさん的には何年生くらいがいいんですか」

「えっと、小学四年生から六年生がいいかな」

せまつ。

ストライクゾーンせますぎませんか？

「ああ……、もちろん現実的な結婚ということを夢見ていた私には、妥協ラインというものもあるよ。小学生と結婚できないのなら、べつに私に触ることを許してくれて、子どもが作れる年齢だったら、お婆さんでもかまわないさ……」

さよですか……。

ともかく、飯田さんの美的感覚というかなんというか、妥協を許さない年齢ゾーンというのは小学校高学年みたい。ヤバ。ボクの見たい目思いつきりストライクゾーンじゃん。ひええ。

ほのかに危険を感じつつ、少しだけ飯田さんから距離をとるのだった。

「あ、危ないよ。緋色ちゃん。あまり離れないほうがいい」

「あっはい……」

所詮は大人の前では無力な子どもなのよね。

まあ実年齢的に言えば、ボクも大人なんだけど。

とりあえず校庭をひととおり見終わったので、今度は校内だ。

昇降口——いわゆる下駄箱のところから校内に侵入する。

ここも扉に鍵はかかってなかった。

校内に侵入すると、中は暗く、電気がついていない。

外の光が入ってきてるから明るいけれど、下駄箱の付近は薄暗い。夜目のきくボクはいいけど、飯田さんの視界だとあまり見えないだろう。スマホのライトをつけたがっていたけど、さすがにそれはやめたほうがいいと思うな。普通なら死んでる。

小学生男子のゾンビが靴箱のあたりでうろろうろしていた。

避けるスペースもないので、飯田さんは真っ青だ。

だって距離的に言えば、3メートルくらいしか離れていない。もしも襲いかかられたらと思うと気が気でないのだろう。

「しばらくじっとしておきましょう」

ボクは小声で指示する。

それから、ゾンビに、奥の校内のほうに向かって行くように指示をだした。

もーっ！ 人間もゾンビも操らないといけないなんて忙しいよ。

ゾンビが去ったあと。

その場で固まってしまった飯田さんの代わりに、ボクは下駄箱の奥側に向かう。

チラつと覗く動作をし、それからハンドサインでこっちに来るように指示する。

飯田さんは腰が抜けたようなふにやふにやの動きでこっちにやってきた。

「緋色ちゃん怖くないの。すごいね」

「……怖くないわけじゃないでしょ？」

「ああ、こんなときでもジト目最高」

「はあ……、ほらさっさといきますよ」

せつかくここまで来たんだし、いまさら帰るわけにもいかない。ボクは精神的に疲れるのを感じながら校内に歩みを進めた。

ハザードレベル8

校舎の内部はエアコンもついてないのに、暗い影が斜めに走っていて、少しだけヒンヤリしていた。

廊下の幅は四メートルはあるね。ボクが通っていた小学校は幅が一メートルくらいしかない極狭の廊下だったのに、学校によってずいぶん違うようだ。

これくらい広ければ、ゾンビと行き交うことになっても、そこまで圧迫感はない。

「ねえ。飯田さん。しっかり見てよお」

飯田さんはまんまるな巨体をちぢこませて、ひいひい言いながらボクについてきている。顔をそらしてゾンビを見ようともしない。

「ひい……ころ……殺される」

「大丈夫ですって、ほらこうやって引っ張っても大丈夫だし」

ボクはそこらにいたボクより小さなゾンビちゃん（小学一年生）の手を引いて、そのまま飯田さんの身体にピタっとくっつけた。

「ひ、ひえ」

まるで虫をくっつけられた少女みたいな声だ。

少女はボクだけど……。

「飯田さん。思ったよりもゾンビ避けスプレーが効いているみたいだよ」

「わかってる……。頭ではわかっているんだが、どうにも怖いんだよ」
「そんなに怖がってたらゾンビ捕獲なんてできないと思うんだけど……」

「それは……、そうだな。確かに」

ぶつぶつとなにやらつぶやいていたかと思うと、ようやく決心がついたのか、ゾンビを真正面から捉えることにしたようだ。

飯田さんが目を血走らせて、ゾンビ少女を見る。見る。見る。

「みた……みたぞ。私の趣味ではないが」

「高学年は二階か三階かな」

階段にはゾンビが少しだけ溜まっていた。やっぱりゾンビって階

段登るの遅いんだね。下のほうで溜まっていたので、ほんのちよつとだけトンと背中を押して、ボクはゾンビを脇に追いやった。

二階に上がると、プレートには三年、四年と書かれてある。

日がよく当たるせいか、電気がついていなくても十分まぶしい。もしかしたら、バリケードのひとつでもあるかなと思っただけけれど、そんなことはなかった。

みんな、元気に死んでいる。

教室をひとつひとつ確認していく。スライド式のドアは小学生でも空けやすいようになっていけるけれど、さすがに夜間は閉まるはず。つまり、ドアが開いてなければ、中にゾンビはいないはずだ。

けれど予想に反して閉まっていた教室の中にはゾンビが数体固まっていた。綺麗に並べられていたはずの机は、ゾンビが無造作に動いたせいか、ぐちゃぐちゃになっている。

地面に座りこんでいてなにかしている。

えーつと？

うーんと？

ああ、お食事中でしたか。

小学三年生くらいと思しきゾンビが、フライドチキンみたいな感じで喰らいついているのは、大人の女性の腕だった。

はみだした骨がピンク色にテラリと光り、おいしそうにむしゃぶりついている。

おそらく先生だったのだろう、その女の人は体中を引き裂かれてほとんど原型が残っていなかった。

ゾンビ同士のとりあい。無表情に機械的にポリポリと指先を食べ続けるもの。大食いの子もいるらしく、完全に骨になったものをそれでもなおガリガリと食べ続けているゾンビもいた。ほかにも玩具のように腸をこねこねして無邪気な感じに遊んでいたりと、とんでもなくグロい。

「にげこんだ先で追い詰められたというのは鍵がかかっているのが変だし……、噛まれた人がゾンビを誘いこんで、類が及ばないように閉めたとかかな」

「う……」

飯田さんは口元を押さえて何かを我慢している。吐いたらもう置いて帰っちゃおうかな……。

「えっと」応聞きますけど、この中にはお目当ての子はいますか？」
ブンブンと首を横に振る飯田さん。

まあそうだよね……。

教室のドアは案外開いているところが多かった。ボクはそろりとスライドドアを開ける。

ゾンビはやっぱりにいることが多く、最初に見たグロ教室とは違い、みんな教室の中を思い思いにうろついている。

なかには行儀よく椅子に座っている子もいたり様々だ。
「教壇には女の先生が立っていた。」

まだ20代の若い先生だと思うけれど、残念ながら顔の半分が食いちぎられていて、赤黒いお肉が覗かせている。

その先生は、アアアいいながら、ゾンビ小学生たちに何かを語りかけていた。

ボクがドアを開けたことで、一瞬こちらのほうを向いたけど、すぐに興味を失ったかのように元の動きに戻る。

ボクはそつ閉じた。
「まあ、ドアを開けるまでもなく、ここから覗き見れるわけですし、どうぞ」

「あ、ああ、わかったよ」

飯田さんを前に押し出し、確認してもらおう。

「いちおう、その……キープで」

「はいはい」

もうボクの態度もかなり投げやりだ。

そんな感じで、六年生の教室まで全部見てまわった。

「どうですか？」

「うーん。けっして悪くないんだが、こう心臓をわしづかみにされるような可愛い子はいなかったな」

「もう、これ以上はいないと思うんだけど」

屋上への扉は閉まっていたし、ゾンビのいる気配はない。

あとは体育館だけど、こちらには数体いるみたい。

だけど、教室の中だけでも結構な数を見てまわったし、いまさらって感じだ。

「あの、どうします?」

と、ボクは確認をする。もし、ここにお目当てのゾンビ小学生がないのであれば、もう他の小学校を探すしかない。ちよつと遠出になるけどないわけじゃないからね。ボクはもう面倒くさくなってきたけど。

「うーん。もうちよつと見てまわってもいいかな」

「はいはい」

飯田さんがもう一度教室の中を物色する。

ボクは物憂げな表情で、生暖かくその様子を伺っていた。

どうして——、こんなに必死なんだろうな。

どうせ、みんな死ぬのに。

あれ?

んん?

どうして、いまボクは死ぬって考えたのかな。

ボクには飯田さんを殺そうという意思はない。

もちろん、いますぐにでもゾンビへの攻撃停止命令を解けば、飯田さんは噛まれて一巻の終わりだけど。

死ぬ?

まあ——、人間はいつか死ぬ。

それはまちがいないけれど……。

自分の中に湧いた思考にうまいぐあいに言葉を当てはめることができない。

まあいつか。

ボクはゾンビのように思考停止することを選んだ。

しばらくうろついていると、飯田さんは諦めたように頭を振った。

「だめだな。帰ろうか」

「うーん。わかりました——、じゃあ、給食施設に向かいましょうか」

そこならもしかしたら食料品が残っているかもしれないという判断だ。

視線を転じて、掲示板に目を走らせる。

マップか何かがあれば面倒くさくなかっただろうけど、そもそも給食施設があるとすればだいたいは一階だろうし、すぐにわかるだろう。

それでふと気づく。

かすかな——反応。

視線が向いたわずかな先には、掃除用具入れかなにかのロッカーが置いてあつて、そこからほんのわずかな気配がした。

なんでそんなところから、なんて疑問が湧くが、気にしていてもしようがない。

ボクはすぐにロッカーを開けた。

「うおっ……お、おう、女の子だ」

飯田さんが驚いたような声を出している。

ボクはなかにゾンビがいるのがわかっていたからビツクリという意味での驚きはしなかつたけれど……、少なからず驚いたのは、その女の子が正統派の日本人美少女だったからだ。

年の頃は12歳くらい。

品の良い制服のような洋服を着ていて、その上から夏だというのに厚手のカーデイガンを羽織っている。

見た目はいいところのお嬢さんという感じ。

髪型はパツツンとしていて、濡れたような淡く光る闇色の髪。そして同じく黒曜石のような瞳が遠く宇宙の果てを見つめるように、こちらを見返してきている。

外傷はない。

ボクは女の子の身体を観察した。足もおなかにも特に傷はない。でも、夜着でもないから、この子はゾンビに襲われた確率が高い。

あ、少しカーデイガンが破れている。

脱がせてみると、上手い具合にというべきなのか、不幸にというべきなのか、手首のあたりにほんの少しだけ歯形がついていた。

「あれ？」

でも、ギリギリ貫通する程度だったせいとか、赤黒い跡はなく、その華奢な身体にはほんの少しだけ押し込まれたような痕しかついてなかった。

(かさぶたみたいになってる?)

ゾンビも自動修復機能がついているんだ。生命の神秘というか死体の神秘というか、奇妙な感動を覚えながら、ボクは脱がせていたカーデイガンをもたせていく。

自然と密着する感じになる。顔がわずか三十センチほどの距離。身長も近いからかな。この子なら、たぶん——飯田さんも満足するだろう。

それぐらい、恐ろしいほどに均整がとれている。

ゾンビだけど美少女オーラがすごい。

「あ。もうちょっと待ってね。ちゃんと着せるから」

問われているわけでもないのに、ボクはその女の子に声をかけ、

それから——

不意に。

目があった。

あ………れ？

いままでゾンビなお姉さんやそのほかのゾンビとも目があったり、動きを視線で追いかけられたりしたことはあるけれど、そういうような偶発的なものではなく、明確な意思のようなものを感じた。

意識が………引っ張られる。

★
||

その日は空が明るかったのを覚えている。

私は真夜中まで夜更かしして、家の屋上に天体望遠鏡を置いて、お兄ちゃんといっしょに、彗星がたなびく様子を見ていた。

空は青白く光っていて、ほうき星は尻尾のように長く伸びて、夜空に星の粒子が降りそそいでいるみたいだった。

私は、綺麗だなって思ってた。

こころの中が感動でいっぱいになって、もう六年生にもなるのに泣いてしまった。

だからかな。

おなががいっぱいになったときに眠くなるみたいなのに、わたしはそのまま望遠鏡を覗きこんだまま、眠ってしまったんだ。

それが終わりの始まりとも知らずに。

「恵美……恵美……起きろー！」

遠くでサイレンの音が鳴っていた。

目が覚めると、私は自分のお部屋で寝かされていて、お兄ちゃんは焦ったように声をはりあげている。

「んん。どうしたの？」

「恵美。テロリストがたくさん近くで暴れてるらしい。いまずぐ家を出なきゃならない。荷物を準備してくれるか？」

私はお兄ちゃんの言ってることの意味が理解できなかった。

テロリストなんて遠い外国の話で、私には関係のないことだと思っていたから。けれど、お兄ちゃんの額には目に見えるほどの汗が浮かんでいて、握りこぶしが震えているのが見て取れた。その必死な様子に、私はうなずかなくちやいけなと思った。

すると、ほつとしたのか、お兄ちゃんは床においてあったバットを手にとって、部屋の外にでていく。そのとき、バットには部屋が暗くてよくわからなかったけれど——見慣れない黒い痕がついているように見えて、私は無意識に腕の筋肉に力が入るのを感じた。

サイレンの音が鳴り止まない。

どこか遠くから叫び声があがっている。

どうしよう。どうしよう。どうしよう。

何が起こったのかもわからないまま、私の中の不安が風船のように膨らんでいく。ともかく——、お兄ちゃんに言われたとおりにしなくちゃ。

だから私は言われたとおりに着替えて、最低限の着替えをリュックにつめた。お兄ちゃんは部屋の外で待っていた。

「恵美。できるだけ厚い服を着とけ」

「え、暑いよ」

「頼む」

必死の表情。いままで私をからかったりしながらも、優しかったお兄ちゃんは、このときばかりは余裕がない笑みを浮かべていた。私は冬用のカーデイガンを羽織る。夏だし、少し汗ばんでしまうくらい暑い。

「ねえ……、お兄ちゃん。お母さんとお父さんは？」

廊下を出ると、お兄ちゃんは片手にバットを握り、もう片方の手で私の手を引いていく。

寝室には向かわない。お父さんとお母さんが寝ている部屋を横目に、お兄ちゃんは玄関に向かおうとする。

私は抵抗した。

「お兄ちゃん！ お母さんとお父さんを置いていくの!？」

お兄ちゃんは私の言葉を無視して歩みを進める。

どうして？ どうして聞こえないふりをするの。

玄関口は光が灯っていて、バットについた黒い痕が赤い血だと気づいた。

イツタイ誰ノ血ナンダロウ……。

心臓が痛いぐらいに鳴っている。お兄ちゃんは黙ったままだ。

「お兄ちゃん……」

「くるんだ。恵美……なあ、頼むよ」

懇願するようなお兄ちゃんの声。

でも、そのとき——、ドンと寝室のドアを叩く音が聞こえた。

やっぱり、お母さんもお父さんも生きている。

そのときの私はそんなことを思っ——、寝室に向かって駆け出す。お兄ちゃんが焦ったような声をあげたけど、今度、無視するのは私の番だった。

ガチャリ。

やけに重苦しい感じがして、ドアがゆっくりと開け放たれていく。

「ひっ……」

そして、月明かりに照らされた暗い部屋の中では、なにかよくわからないマネキン人形みたいなのが転がっていて、それが——誰のものなのかはつきりと理解してしまって、けれど心は理解したくなくて、私はその場で立ちすくんだ。

お母さんが死んでいた。

頭が割れて、中からクリーム色をしたぐちゃぐちゃとしたものが飛び出ている。

光を失った瞳は、ずっと遠くを見ているようで、なにも映していない。

その視界は突然塞がれた。

すつと横から現れたのは、お父さんだった。

「おと……」

うさん。というとした。

いや違う。

それはもうお父さんじゃなかった。

優しく、ときどき私がわがままをいってもなんでも聞いてくれるお父さんじゃなくなっていた。

お父さんだったモノは私をただの食べ物と見定めて襲いかかってきた。

私はその場で目をつぶり、すんと腰をおとしてしまう。

「うおおおおおおおおあああー!」

横から駆け寄ってきたお兄ちゃんがバットをふりまわし、お父さんの形をしたそいつにヒットする。

首が変なふうに折れ曲がり、ごきごきと嫌な音を響かせながら、再びたちあがろうとするそいつ。

お兄ちゃんは叫びながら——泣きながら、そいつの脳天にバットを振り下ろした……。

★
||

家の前では逃げ惑う人たちがいた。

大きな道路は車が何台も止まり、そのうち一台が街路樹に衝突したのか、火と煙を吹いている。

私はお兄ちゃんに引きずられるように走った。

どこをどう走ったのかは覚えていないけれど、気づくと見慣れた私に通う小学校の前に来ていた。

校門の前にはジャージ姿の体育の熊谷先生がいて、私たちを迎え入れてくれた。

「お前たち。無事か」

「はい……」

お兄ちゃんは力なく答える。

「はやく中に入れ。ここももう持たん」

揺らめくようにやつらが現われる。

何十にも何百人にも膨れ上がってる。たぶん、外に餌が溢れてるから、やつらもたくさん出てきてるんだ。

私とお兄ちゃんはすぐに校門の内側に入り、それを見届けた熊谷先生は、校門を閉めた。

「まって。まってくれー。オレも中に入れてくれ!!」

突然やつらの大群の中から、ひとりの男の人が飛び出してきた。痩せた大人の人だった。肩をかばうように走っていて、やつらとそんなに走るスピードが変わらない。

「いそげー」

熊谷先生は叫び、再び扉を開け放つ。

ギリギリの距離。

やつらが迫り、男の人は必死に駆けている。波が押し寄せるみたいに四方八方からやつらが来て、男の人との距離をつめる。

このままじゃ捕まっちゃう。

熊谷先生が手に持った竹刀を突き出した。

やつらの先頭にいたソイツは、先生の突きを受けて後ろに吹っ飛んだ。

右手でかつぐようにして、なんとか校門の中に入り、お兄ちゃんと数人の大人たちで校門を急いで閉める。

「ふう……助かりました！」

その男の人は額の汗をぬぐい、それから力なく笑った。

「大丈夫か」

「ええ……痛みはそんなにありませんし」

「やつら、スライドさせる知能はないみたいだな……」

学校の校門は鉄製の重い作りをしていて、横にスライドさせて開けるようになっていて。それなのにやつらは校門に向かって手を突き出すばかりで、横に開けるといふ発想がないらしかった。

「鍵を閉めたいところだが、あいつらが腕を伸ばしていると危険だな。ひとまずはこれで様子を見るしかあるまい」

そんなやりとりを聞きながら、お兄ちゃんのほうを見上げてみると、とても思いつめた顔をしていた。

私たちは体育館に集まった。人数は百人くらいかもしれない。クラスメイトも何人かいたけれど、家族といっしょにいたから、声をかけづらかった。

みんな、ここに来るまでに、何か大事なものを失くしてしまったのだろう。

不意に、心の中にぼつかりと穴が開いたような、そんな心もとない感覚がした。

周りから聞こえるすすり泣く声に釣られて、思い出さないようにしていたさっきのシーンが再生される。

お母さん……お父さん……。

「嫌ああああああああああああああああああああああ」

突然の絶叫が響き渡った。

見ると、体育館の隅にいた友達のユウちゃんが首元を、ユウちゃんのお父さんに食べられていた。

「いだああい。おとうさあん。やめでええええええ」
もがき続けるユウちゃん。

周りの大人は必死に引き剥がそうとするけれど、ユウちゃんの身体からは力が失われ、パタリと力なく垂れ下がる。

ユウちゃんのお父さんはさっきまでいっしょに逃げていたのにな

んで。

「感染しているんだ。ゾンビといっしょなんだ」

お兄ちゃんが独り言をつぶやく。ゾンビ？ それって映画とかの？

ざわつき始める館内。

ユウちゃんが——ゆらりと起き上がった。

「いくぞ。恵美。ここも危険だ」

「でも、どこにっ！」

外も危険。ここも危険。逃げる場所なんてどこにもない。

でも、それはお兄ちゃんも同じだったのかもしれない。

ともかく、ここじゃないどこかへ。

私とお兄ちゃんは騒ぎの中からいち早く逃げ出して校内に向かった。後ろからは既にやつらになってしまった幾人かが、体育館から現われる姿が見えた。

「あ、は、はははははは。なんだよそれ。マジでゾンビかよ」

あの熊谷先生に助けられた男の人が、狂気に爛々と瞳を輝かせ、狂い笑いながら、駆け出していく。

その先は——、校門だった。

男は地獄に引きずりこまれる亡者のように、校門から伸びるゾンビに捕まってしまったが、そのまま身体を倒すようにして、門を少しだけ開けた。

そこから先はゾンビの影に見えなくなってしまいよくわからなかった。

ただ、男の人は奇妙なほどに安心しきった表情をしていて、逆に不気味に思えた。

校内にゾンビが溢れる。

暗い校舎内では、走ってくる人、生きている人、ゾンビが入り混じり、誰が誰だかわからない。

怒号と悲鳴と唸り声が同時に上がり、息が切れた。

どうして——生きているんだろう。

どうして、生きているんだろう。

お父さんもお母さんも死んだのに。どうして私はまだ生きているんだろう。

酸素が足りなくて朦朧とする意識の中で、私はお兄ちゃんに手をひかれて走る。

走る――。

お兄ちゃんも私も危険から逃れるという本能に従って、上を目指すぐらいしか頭になかった。

走る――、

階段を駆け上がるときに筋肉が痙攣し、私は転んでしまった。もう走れない。

お兄ちゃんは振り返り、絶望の表情になる。

私が立ち上がると、そこには友達のユウちゃんが虚ろな目で私を見ていて、こつちにおいでと誘っているようだった。

気づくと私は、ユウちゃんに噛まれていた。

カーデイガンを通して、注射のときのような鋭い痛みが襲ってくる。

また、あのおきみたいにお兄ちゃんがバットを振るった。ユウちゃんは頭蓋骨の形が変な風に曲がって、それから動かなくなった。

私も……、そうなっちゃうのかな。

破れたカーデイガンを私は見つめる。

「お兄ちゃん……」

「いくぞ」

そのときのお兄ちゃん表情は、まるでお母さんに叱られたときみたいに、変な風に歪んでいた。

廊下の暗がりの中から、ゾンビが迫ってきている。

屋上への扉は閉まっているはずだし、これ以上先はない。

もう、終わりだ。

なにもかも。

お兄ちゃんは廊下の真ん中あたりで止まって、膝をついた。

「恵美。このままじゃ……どっちも捕まっちゃう。だからさ」

ああ……、そうなんだって思った。

お兄ちゃんは私を見捨てるほかなくて、でも見捨てるという明確な行為をすることができなくて、ロツカーに隠れているように言ったのだと思う。

「必ず迎えに来るから……だから、恵美、待つてくれ」

最後に聞いた言葉が、私には『許してくれ』といってるように聞こえた。

だから、私は精一杯の笑顔で。

笑みを浮かべて、送り出した。

暗闇に閉ざされた視界の中で、お兄ちゃんが必死に戦っている。生きようとしている。生きてほしいと思った。私のわがままかな。

腕の辺りからは冷たい感覚が立ち上ってきて、私の視界は徐々に暗くなっていく。あまり痛くはないのが救いかもしれない。こんなひとりぼっちの空間で死んでいくのが救いかもしれない。

ゾンビに食べられなくて――、人を食べなくてよかったと思うから。

ハザードレベル9

「——ちゃん。緋色ちゃん！」

「ふえ、ふえあ？」

気づくとボクは飯田さんに話しかけられていた。

ここが学校で、ボクはロッカーの中に純和風美少女——エミちゃん（仮）を見つけて、それから……。

なんだったんだろう。

あのイメージは。

まるで、ボクがこの娘になりかわって、追体験したみたいな。

夢——。ドリーム？

まどろみから起きるときみたいに、意識がはつきりとしなない。

けれど、いまボクにはわかったことがある。

エミちゃんは、たぶん、ゾンビじゃない。

ゾンビに意識はない——と思う。少なくともボクにはそう思える。けれど、この娘には明確な意思が存在している。

だから、ゾンビではない。

簡単な論理だ。

もちろん、エミちゃんがボクと同じくなんらかの特殊なゾンビという線も考えられるけれども、ともかく通常のうなり声をあげるだけのゾンビとはまったく違う存在なのは確かだ。

だから、確かめなくちゃいけない。

ボクはエミちゃんに抱きついて、その小さな胸に耳をぴったりとくっつけた。

ロリコンじゃないよ！ だってボク自身がロリだしね！

「尊い……」

尊いじゃねえよ。

あ、やっぱり——。

ボクの疑問は確信に変わる。

「飯田さん。この子。生きてます」

「えっ？ どういうこと？」

「心臓の音が聞こえます」

「ふむ……」

「あ、飯田さんはこっちで確かめてね」

おもむろにボクと同じように胸に耳を近づけようとしたので、ボクはエミちゃんの手をとって、飯田さんに渡した。もちろん、脈をみてもらうためだ。

飯田さんは若干残念な表情になりながらも、エミちゃんの脈を確かめる。

「ああ、ほんとだ。脈がある……ていうか、そもそもゾンビに脈ないの？」

「ないですよ。試したことありますから」

お姉さんに密着したときに何度も確かめている。

普通なら危険すぎてできないけれど、ゾンビ避けスプレーが効力を発揮していると思われるから、まさかボク自身がゾンビマスターだとは思わないだろう。

エミちゃんについては——、とても浅いが呼吸している。このロッカーで数日間過ごしていたわけだけど、それでも死んでいないのは、やっぱり、正常ではないからなんだろう。本来なら、ロッカーの中は蒸し風呂状態でとても生きてはいられないはずだ。

ゾンビではないけど、人間でもない……。

つまり、エミちゃんはゾンビと人間の中間存在となって、ロッカーにたたずんでいた。

生きることもなく、死ぬこともなく。

ただ、このままだといずれは朽ちてしまっていたらう。

日本人美少女として完成されている造形だけれども、お姉さんゾンビみたいに柔らかかヒンヤリ人形って感じではなく、触るとほんのり暖かい……。

その唇は水分が足りないのか、少し荒れてしまっている。

ボクはバッグの中から500ミリリットルのペットボトルを取り出し、エミちゃんの口もとにあてた。エミちゃんは飲むとうとしない。

水は、硬く閉ざされた口元から、重力に任せるまま落ちた。

うーん。どうして、エミちゃんは動かないんだろう。

そもそも、ゾンビがなぜ動くのかという永遠の謎があるから、曖昧なんだけど、もしかすると、ゾンビ化しても意識というか心というものはあるのかもしれない。

この意識や心を『生』だとすると、ゾンビ化は『死』だ。

ボクははじめ、死に塗りつぶされて生は消えたと思っていた。

死という新たなプログラムが生になりかわって肉体を駆動する。

だからゾンビは動くのだと、そう思っていた。

でも、そうじゃないのかもしれない。

生と死は人間という現象の両面であり、いまは死が表側にきて、生が裏側に隠れている。だから心が無いように見えるだけで、本当は、からだの奥底に人間の心とかが残っているのかも。

エミちゃんがゾンビ化しても動かないのは、ゾンビと人間の狭間にあって、生と死が膠着状態だからかな？

だとすれば——、天秤を傾ければいいのかもね。

ボクはエミちゃんのゾンビサイドに命令して、無理やり飲ませようとする。

わずかに抵抗するような感覚がある。

なんだか変な感じ。

水の中を泳ぐときのような、そんな感覚だった。

なんか……嫌な予感がする。

これ以上『押したら』壊れそうな、そんな感覚だ。

ボクはいつたんエミちゃんのコントロールをとり、唇の筋肉あたりを動かすように意識を集中した。

いままでのように、ゾンビを雑に動かすようにはいかない。

だって、それはプログラムの部分的な改鑄だ。

それも——、それすらも抵抗があったけれど、エミちゃん自身が水をのみたいと思っていたのか、ボクの意識のあずかり知らぬところで、薄紅色の唇が動く気配を感じる。

「お水のみたかったんだね」

エミちゃんの唇はわずかに開かれ、わずかだったけど、白い喉元に

透明な水がながれこんだ。ごくりと嚥下する喉。白くて……やわらかそうで。

——すごくおいしそう。

あれ？　いますごく変態チックなこと考えてなかった？

内心で焦りながらも、ボクはエミちゃんの首元から目が離せない。そうか。この子はゾンビではないんだ。だから、これはまだ、ボクのモノじゃない。心臓が早鐘を打っている。

はやく所有したいな。

ボクがわずかでも噛みついたりすれば、たちまちのうちに『死』が彼女を覆い、人間としての『生』は抵抗力を失うだろう。ボクってたぶん、キャリアだろうし。キャリアという考え方は、ゾンビがウィルスであるという、そういう思想に基づくものだけでも、おそらくその推測はまちがっていないと思う。

ボクはゾンビっぽくないけどゾンビみたいなものだろうし。

だから、ボクに噛まれたりひつかかれたりしたら、たぶん、その人はゾンビになっちゃう。あるいは、ボクみたいにゾンビっぽくないゾンビになるのかな？

どっちなんだろう。

けれどひとつだけはつきりしていることがある。人間的なものを完全に消してしまえば、ゾンビになったエミちゃんはある種の完成をみることになる。

きつと、ソレはものすごく綺麗で。

それはとても甘美なことに思えた。

ボクの唇がエミちゃんの首元に吸い寄せられるように近づき——。「この子、お持ち帰りしてもいいのだろうか……その、めちゃくちゃかわいいな。そこのジュニアアイドルよりもかわいいというか。清楚というか」

飯田さんの困ったような声に、ボクは唐突に我にかえった。

なんなんだろう。さつきから、変な考えが多いぞ。

「えつと、そうですね。この子が生きているならつれてかえって、ご飯とか食べさせたほうがいいと思います」

だって生きてるんだしね。

生きてるなら食べなきゃ。ゾンビもおそらくエネルギーという意味では補給したほうがいいんだろうけれど、そういうレベルではなく、人間って毎日食べないとおなかしちゃうし、かわいそう。

エミちゃんが生きていくためには、食べさせないといけない。

ゾンビ化させるのは簡単だ。たぶん、エミちゃんの生が弱まれば、死のほうに天秤が傾く。一度傾きが大きくなれば、ゾンビ化まったなしだろう。

ボク的にはどっちでもいいけれど……。

「しかし、この子。ゾンビよりも動かないな。つれてかえるのも大変そうだ」

「そうですね……」

今の彼女はゾンビ化するかどうかの瀬戸際だ。

現状を維持するだけでもせいっぱいなんだろう。

時間が経過したら、人間側が勝つのかゾンビ側が勝つのかはわからないけれど。

やむをえないな……

エミちゃんの心的領域を侵食しないように、気をつけながら、ゾンビを駆動するプログラムを両手両足にだけ注力して、コントロールする。

糸で吊られた操り人形のように、エミちゃんのからだがかククときこちなく動く。

「え？ 動いてる？」

飯田さんが緊張した声をあげた。

「動きますよ。だって生きてるんだから」

ボクはエミちゃんの右手をとって、そのまま歩く。

歩く動作を精密に操りながら、自分の身体も操るといのがなかなか至難。

だって、これはボクの意味でほとんどコントロールしなければならぬから。

でも、脳みそごとのとっとなってしまったら、たぶん二度と元には戻ら

ないだろうし、行動制御にだけ特化しないと危険だ。

逆に——、ゾンビウイルス的な何かをボク力で完全に沈静化させたらどうなるんだろう。さっきの生と死の論理でいえば、死が翳り、今度は生が表にあらわれるということになりそうだけど。

ボクはゾンビを人間に戻す力があるのかな？

「でもま——、積極的に人間に戻すこともないかなー」

そもそも、ボクはエミちゃんのことを何も知らないし、言葉を交わしたことすらないし、知り合いですらない。

飯田さんとはなし崩し的にそれなりに仲良くなったかもしれないけれど、エミちゃんとも同じように仲良くなれるとは限らないんだし……、人と知り合うのは怖い。

「え、なにか言ったかい？」

「あ、うん。半分ゾンビでも襲われるかもしれないから、いちおう消臭しておいたほうがいいかなと思ひまして」

「そうだね」

はい。シュツシュ。

☆Ⅱ

コンビニに到着した。

飯田さんはマットの上に腰を下ろし、大きく息をしている。

たった二時間程度の遠征でも疲れちゃったみたいだ。

ほとんどボクのことなんか無視して、その場で上半身裸になって、タオルでござしござすつてる。

あの……ボク、少女なんですけど。

露出狂の気でもあるんだろうか……。

ボクは飯田さんを見無視して、エミちゃんの持ち物を調べることにした。

着ている服は、お金持ちな感じの外行きの洋服で、あまりサバイバルには向いてそうにない。ボクが見たイメージだと、お兄さんに急かされてって感じだったから、たぶん、一番好きな服を着てきたのかな

と思う。

その上から羽織っているカーディガンは今の季節には不釣合いだけど、これもまたクリーム色をした品の良い感じで、やっぱり育ちがよさそう。

イメージの中のお家の様子も結構な金持ちふうだったし、ボクのアンパルトとは大違いだったしね。

それと——、これが本命。

エミちゃんが背負っている小さなリュックだ。

中身はほとんど服だけだと分かっているけど、一応確認する。

うん。やっぱり中身はほとんど服だな。

一応、懐中電灯とか、ピンク色をした折りたたみ傘とか、絆創膏と風邪薬とか入ってたけれど、たいして重要なものではない。

少し重要なのは、スマホかな。電源は切れているけど、あとで充電でもしておくか。使えるかもしれないし。

で、なにが重要なのかっていうと……、

体操服が中に入っているからだ。

知つてのとおり、小学校の体操服には大方ゼッケンというものが装着されている。これだよ。これ。これがほしかったんだ。べつにボクが体操服萌えな奇特的な性癖を持っているというわけではなく——、「常盤恵美（ときわ・えみ）ちゃんか」
ボクが手にした体操服を見て、飯田さんが感慨深くうなずいている。

そう、こういうふうな情報は共有しておかないとね。

「エミちゃんですけど……これからどうしましょうか？」

ボクは聞いた。

「どうって？」

「エミちゃんは生きてます」

「うん。そうだね。ゾンビになりかけなのか、それともゾンビウイルスに抵抗力を持っているのか、わからないけど、普通のゾンビとは違うみたいだね」

「つまり、飯田さんの当初の目標であるゾンビな小学生には半分くら

いは当てはまってますけど、半分くらいは違うともいえますよね」

「ああ……、なるほどなるほど……、緋色ちゃんは私がこの子に無理やりイタすというか、そういうことを危惧しているわけだね」

「まー、そんな感じですよ」

「さすがにそんなことはしないよ。私はゾンビは生きていないと思っ
ている。だからこそ、好き勝手にしてもいいのではないかと考えてる
のであって、まだ人間の、小学生相手にそんなことは……うーん、ま
あしないよ」

ちよつと迷ったような声をださないでほしい。

「そもそもなんですけど、飯田さんがゾンビとヤツちやつたら感染す
るんじゃないですか？」

「さ、最近の小学生は進んでいるんだな。まあ……その……、ゴムぐら
いはつけようかなと思ってるけど、感染したらそのときはそのときつ
て感じかなー。そもそも、私は終わった人間なんだよ。いまさらゾン
ビになろうが、べつにいいかなーなんて」

「刹那的すぎますよ」

闇深案件とか勘弁してほしい。ほんと人間は面倒くさい。

「私は惰性で生きているからね。強いてというか、ものすごくがん
ばって生きようとか、そういうのはあまりないんだ。そりゃ……死ぬ
のは怖いけど、何も残せなかった私がただ単に消えるだけだしな」

「あーもう！　そういうこと言わないの！」

「でも……ねえ。正直なところ、君には未来がたっぷり残されている
だろう。おじさんはね、もう疲れたんだよ」

「疲れたわりには……エロには熱心だよね」

「まあ……本能だし」

……

静寂。

なんともいえない雰囲気がある部屋のなかに満ちる。

「ともかく、おじさんはわりと紳士的な対応をしているつもりだよ。
自暴自棄になっているわけではないし、他人を積極的に傷つけないわ
けでもないから、そこは信じてほしい」

「わかりました。じゃあ、おじさんを信じますけど……。エミちゃんの今後はどうしたらいいですか？　ボクがひきとつてもいいですけど」

子猫を拾ったみたいなの責任感、ボクのなかにもある。

エミちゃんが今後、人間に戻るかどうか定かではないけれど、ボク自身の能力を測るうえで、エミちゃんという特殊な存在は好都合だった。

「それなんだけどね……。緋色ちゃんは私のことを信じていると言ってくれたよね」

念押しするように聞いてくる飯田さん。

あ、これってもしかして――？

「その……もしよければなんだが、これからいつしよに暮らしていかないか」

「あー、うーん。そうきたかあ……」

「君はまだ小学生なんだし、誰か守ってくれる人が必要はずだよ。いくらゾンビに襲われないといったって限度があるだろう？　それに悪い大人に襲われるかもしれない。私はロリコンだが、だからこそ君を守ると心の底から思える。どうかな？」

少し悩む。

ボクはゾンビに襲われないし、それどころか操ることもできるし、力も強くなっている。容姿もとびきりかわいい超絶美少女で、べつに飯田さんといっしょに暮らしていかなくてもひとり生きていける。

懇願の表情にチクリと心が痛んだけど。

でも、ボクは飯田さんに心を開いているわけじゃない。

「おじさんのことは嫌いじゃないけど……。ボクはひとりがいいかな」「そうか……。そうか……。じゃあ、エミちゃんは私が面倒を見るよ」

また選ばれなかったか思ってるんだろうな。

飯田さんの顔には言い知れない諦めがこびりついている。

それから気まづくなつて、ボクはそろそろと立ち上がった。

お家に帰って、お姉さんに癒されたい。

「ときどきはこちらに来てくれるんだろう?」

「うん。そうだね。おじさんはゾンビ避けスプレーがなかったら、すぐに死にそうだし、エミちゃんのことにも気にかかるから、また来るよ」
「じゃあねと、手を振って、ボクは飯田さんとわかれた。」

ハザードレベル10

「お姉さん。ボクさあ。誰かといっしよには暮らせないよお」

そう言っつて、ボクはお姉さんの膝枕に顔をうずめている。
なにも問題はなかった。

だつて、お姉さんはゾンビですから。

わずらわしい人間関係なんて欠片も存在しない。

それどころか。絶妙といつていい距離感が存在する。

ボクが小学校遠征から帰つてくると、お姉さんも両の手いっぱい
洋服を持って帰つてきてた。

平均的な、あまり個性の見受けられない男性的な部屋に、色とりど
りの花が咲く。

お姉さん……、やっぱり多趣味だ。

そして、お姉さんつてもしかして少女趣味か何かなのかな。お姉さ
んの年は25歳くらいに見えるけれど、持ってきた服はボクにぴつた
りサイズで、なおかつかわいらしい。

夏に合った、肩紐のキャミソールにフリルつきのミニスカート。

いままでのシャツがなんだったのかというぐらい、めちやくちやか
わいい。ていうかボクかわいい。かわいい!!あゝゝゝゝもう、かわ
いすぎるよ。

そして見えないところも見つめていたいそんなあなたには――。

――なんとボクはついに美少女必須のパンツなるものを穿かんと
す。

ほいほいカプセルみたいになちっちゃなそれを見たときには、こんな
ん穿けるのかつて思つてたけど、しつとりとした生地は伸びる伸び
る。ボクのあるべきところにおさまつたら、いままで穿いていたトラ
ンクスはゴミ箱にシュート!

完璧だ。完璧すぎるよ!

いまのボクはかわいさだけで世界征服できる。

でも、ゾンビなお姉さんにはほめてもらえない……。

そこが少しだけ不満だった。

「えつと……お姉さん。ほめて!!」

「うーあ?」

ボクの頭をなでるお姉さん。

お姉さん。そうじゃない。

それは嫌いじゃないけど、そうじゃない。

ボクはもつと……、こうなんというか、感想を求めているんだ。主体的で自意識に溢れた、そんな行為を求めているのです。

ねえ。なんかないの？

ジトー。

「うーあ」

お姉さんがんばって。お姉さんなら、そのうち口が聞けるようになるよ。

まあ、それってボクがそういうふうプログラムできるようになってたっただけのことだけど。

ともかく、いまのボクは傷心気味なのだ。

なぜって……、まあべつにたいしたことじゃないけれど、飯田さんと少しギクシヤクしたからだと思う。

だから、お姉さんには思いつきり甘えるんだ!

さあ、お姉さんほめてよ。甘えさせてよ!

「あーう……」

そして、お姉さんはおもむろに手を上げて拍手した。

無音だった部屋の中に、パチパチと小さな音が鳴る。

まるで猿がシンバルを叩くおもちやみたいに一定間隔だ。

違う! そうじゃない!

ボクはベッドで不貞寝した。

☆Ⅱ

夕方になってノツソリとボクは起きだした。

「ふあああああ。エミちゃんのことにも気になるし、コンビニいこうかな」

ふたりには食糧が必要だろうし。

ボクはゾンビは操れるけれど、人間は操れない。コンビニの周辺からはゾンビを遠ざけたけど、それ以外のところに行ってしまうと、もうどうなるかわからないんだ。ボクはそれほど鋭敏には人間を察知できないからね。

エミちゃんのほうはかすかにわかるけど……。

「どうも、こんにちはっつと……」

コンビニのバックヤードに到着すると、飯田さんは笑顔で迎えてくれた。

ボクがもう来ないとか思ってたのかな。

そんなに薄情ではないつもりなんだけど。

「おじさん。エミちゃんはどうだった？」

スタッフルームに入りながらボクは尋ねた。

「それなんだけどね。あまり食べようとしななんだ」

かいたがいしくも食べさせようとしたらしい。

スタッフルームのマットの上には、エミちゃんがおとなしく座っていて、まるでビスクドールかなにかのようだった。その周りには、菓子パンの包装紙にほんのちよつと齧ったあとのあるクリームパン。

それとカップ麺がホカホカと湯気をたてている。

いかがわしいことをされた形跡はない。

けれど、エミちゃんは口を開くことすらしない。

「最初は食べたんだけどね」

「え？ どういうことですか」

「そのままの意味だよ。最初はそこにあるクリームパンを食べさせたんだけどね。すぐに食べなくなっちゃったんだ」

「それって……おなかいっぱいになっちゃったからじゃ」

「あ……、そうか。そうなのかな」

とはいえ、指先程度の齧りあと。

あきらかに少ない。

でも、半分ゾンビの彼女にとっては、これでも大量だったんだろうな。

そういやトイレはどうなんだろう。

「エミちゃん。トイレは大丈夫？」

ボクはエミちゃんに聞いた。

どうせ——、反応はないだろうけどね。

そんな投げやりな会話だったけど——。

「あ……」

ボクは目をまんまるくしていただろう。

エミちゃんはわずかに口を開き、明らかに意思を発していた。

「トイレ……我慢してたの？」

こくり、とうなずくエミちゃん。

なにこの娘、かわいい！

やっぱり男の人につれていってもらうのは嫌だったんだ。

ボクはエミちゃんのゾンビサイドを動かして立ち上がらせる。

人間サイドも抵抗してはいないみたいで、あっけなくエミちゃんは立ち上がった。ボクは両の手を引いて、エミちゃんを歩かせる。

コンビニのトイレは、バックヤードから出たところにある。開けたらすぐのところだけど、飯田さんもわりとびくびくしながら使っていたんだろうな。万全を期すなら全部バックヤード内で済ませていただろうけれど、悪臭がとんでもないことになっていただろう。さて、トイレである。

さて、トイレである。

冷静になって考えてみると、これってかなりいけないことなんじゃないだろうか。狭いトイレの中に、ふたりの小学生女兒、ひとりはニセモノだけど……。

「えつと、とりあえず脱がせるね」

ボクは無心になって、エミちゃんのスカートの中に手を差し入れて、するりとパンツだけをずり下げた。すごい犯罪チック。

すっと腰をおろして……。

じつと、エミちゃんがボクを見つめている。

あ、出ろってことか。

「わかりましたよ。お姫様」

ボクはすみやかにトイレをあとにした。

さすがに音を聞くような真似もできないので、しばらくは店内をうろろろすることにする。そういや——、身体は拭かなくてもいいのかな。

コンビニ内はエアコンが効いていて涼しいけど、学校内はそうではなかったし、あのロッカーの中で多少なりとも汗をかいていたはず。幸い半分ゾンビだからか、ほとんど臭わないけど、気持ち悪いはずだ。

せめてボディペーパーで拭くくらいはしてあげたほうがいいのかな。店内では百パーセントオフになった商品棚が陳列していて、ボディペーパーも当然存在する。

どうしようかな。

とりあえず、エミちゃん本人に聞いてみようか。少しずつだけど、人間らしい意思表示ができるようになってきてるみたいだし、聞けば嫌かどうかくらいはわかるだろう。

そんなわけで、トイレのドアをノックする。

エミちゃんの反応はないけど、特に抵抗感がない。あけても大丈夫ってことだろうか。

「あけるよー?」

ボクはそろりとドアを開けた。

すると、エミちゃんは既に立ち上がって、ぼんやりとした目でボクのほうを見ていた。ちよつとだけビビった。

この子はゾンビじゃないから、行動制御しない限りはどんなことをするかわからない。

「えつと、終わった?」

エミちゃんはおくんとおなずく。

「ちやんと、ウオシユレット使った?」

またもおくんとおなずく。

「えつと——、ボディペーパーとか持ってきたんだけど、からだ拭いとく?」

ジーつと見られてる感覚。

悩んでいるのだろうか。

ボクもTSしてなかったら、聞いてることはセクハラ犯罪事案そのものだからな。まあ、いまのボクなら外見上は問題ないだろうし、そもそも秩序が崩壊しつつある現状だと、誰がやっても犯罪にはならないとは思う。

こくん。

最後にはエミちゃんもうなずいた。

「じゃあ——、拭くよ?」

そつとほっぺたに手をあてて、首元から拭いていく。揮発性アルコールの類だから、あまりやりすぎると肌に悪そうだけど、老廃物をぬぐっていく感覚は気持ちいいはずだ。

ごしごしと丁寧に。首周りをぬぐう。白くて蠟燭みたいな滑らかを持つ肌が、こすられることで、ピンク色に染まった。

はあ……すごく綺麗。

食べちゃいたいなあ。

「ねえ。エミちゃん。ゾンビになっちゃおう?」

我ながら、ねつとりとした聞き方だった。

エミちゃんはわずかに身じろぎして、よわよわしい抵抗を示す。

「冗談だよ」

それにボクは小学生女兒に興奮するような変態さんじゃないからね!

ボクの趣味としては、断然綺麗なお姉さん系に決まっている。

自分のからだとしては、いまの状態がベストだけど、それはなんとするか——、なりたい自分と、見ていたい対象とは異なるということなんだ。

エミちゃんの肩に手をかけて、ゆっくり便器に腰掛けさせる。

慌てることなく、サスペンダー部分をずらして、胸元のボタンをひとつずつ上から順番にあけていく。

熱を帯びたようならんだ瞳がボクを射抜いていた。

袖の部分を脱がせるのはそれなりに苦労した。まるで等身大のお人形さんを着せかえしているような気分。

「はい。万歳して」

万歳エディションだった。

意味がわからないと思うけど、ボクもわからない。

だって、狭いトイレの中でふたりきりで、ボクは小学生女兒を脱がせている。

肌着を脱がせると正真正銘の上半身だけ脱いだエミちゃんが座っていて、ボクが立っているから、必然的に見下ろす形になって、エミちゃんは観察するようにボクを見ていた。

あともう少し幼ければ、なにも感じなかったんだけど、すらりと伸びた手足と蠱惑的で媚びるような視線に、ボクは体中が縫いとめられたかのように動かない。

細身のからだに、小さな胸。

小さくても、やっぱり女の子の胸。

目のやりどころに困ってしまう。

エミちゃんは――、なぜか手ブラ（手でブラジャーの意味だ。わけがわからないよ）して、胸を隠した。

いや、そちのほうがえつちです。

いくらボクが同じ年齢の同性に見えても、やっぱり恥ずかしいものは恥ずかしいということなんだろう。変に意識してもしょうがない。

エミちゃんの気持ちを汲んで、ボクはできるだけ手早く終わらせるように努める。手ブラ状態はやむなく解除して、左手で右手をとり、丁寧に拭いていく。

気持ちいいのかくすぐったいのか、時折跳ねるような感覚が伝わってくる。半分はゾンビ的な共感覚なのかもしれない。

手をあげてもらった状態で、汗をかきやすい脇のあたりから、わき腹まできちんとぬぐった。

ほっそりとしたおなかまわりをグルグルと円を描くように。

背中はまだしろいキャンバスみたいで、肌が白く輝いてるみたい。便器のところどころと方向回転している絵図からすれば、座り方が逆になっていて、なんかヤバイ。

完全にバツクな体制でした。

時折、肉感の薄い唇から、ゾンビ的な唸り声というか、なんという

か——、その……嬌声みたいに聞こえる声が漏れ出て、とてもいいことをしている気分になる。

ボクは念仏を唱えながら、きわめて事務的にやりきった。

上半身のあとは下半身だけど、さすがに女の子な部分はものすごい抵抗感があったので、やめとくことにした。エミちゃんが順調に回復すれば、そのうち自分でできるようになるだろうし、もしも回復しなければ、一回ぐらいはいっしょにお風呂に入ってもいいかもしれない。

そんなわけで下半身というのは、要するに下肢の部分のことだ。

靴下を片方ずつ脱がせ、足の指先から順調に綺麗にしていく。

さすがに足裏はくすぐったかったのか、多少ジタバタしたけれど、それ以外は特に抵抗感はない。

女の子のからだは男のものとはちがって、どこもかしこも曲線で構成されている。まっすぐに見える足もどうしてかとても柔らかかそう。淡い肌色にくるまれているみたいだからかな。

ふともものあたりまで綺麗にし終わって、ようやくボクは一息ついた。

眼下を見下ろすと、小学生女児が、スカートのみ装備した状態で、便器に身体をあずけて、フウフウと猫みたいに息をしている。

目は朦朧しているのか、とろみを帯びていて、白い陶磁のような肌は、全身を寒風摩擦されたみたいにピンク色が浮かび上がっていた。うーん。セーフ？

☆
Ⅱ

バックヤードに戻ると、飯田さんはなにやらしていた。

見ると、スマホをいじってるようだ。

あれはエミちゃんのかな。

「この子って、お金持ちの家の子だったんだね。フォルダの中にくっつか写真があって、見てみたら、いまだき屋上つきの一軒屋だよ。さすがに佐賀だといえ、すごい金持ちだ」

飯田さんが見せてくれたのは、いくつもの写真だった。たぶん、最近買い与えられたのだろう。

慣れない人がとりあえず周りのものを撮りまくるみたいに、家の中の様子が無秩序に映っている。

ボクのアパートとは四倍くらいはスペースをとっている玄関口。ボクの見たいイメージどおりの家で、玄関口からしてお金持ちって感じだ。

何人用だよっていうぐらい巨大なテレビが置かれたリビング。隣にはマッサージチェア。牛革の豪華そうなソファ。照明はシャンデリアのような形をしていて、床にはどこかの王族でも使ったようなカーペットが敷かれている。

二階。自分の部屋。かわいらしい女の子然とした部屋には魔法の国にいけそうなくらい巨大なタンス。

屋上――。

天体望遠鏡。

そして――、満天の星。

隣でおとなしく座っていたエミちゃんが軽く手を伸ばす。

星空を手に入れたい子どもみたいに。

飯田さんはエミちゃんによく見えるようスマホを突き出した。

ある写真のところで、エミちゃんが目を輝かせて、身をのりだす。

それは、金髪に頭を染めた高校生くらいの男の子だった。

――ボクがイメージで見たエミちゃんのお兄さんだ。

ゾンビのようにもがきながら、エミちゃんはスマホにとびつく。

飯田さんが驚いたようにかたまっていたが、エミちゃんは頓着することなく、スマホを見続けた。

「……オニイチャン」

それがエミちゃんがボクたちに発した最初の言葉になった。

☆
||

それから数日間は何事もない穏やかな日々が続いた。

エミちゃんは着実に人間らしい意識を取り戻しつつあるみたいだけど、すぐに人間らしく振舞える程度まで回復したわけではなかった。

あいかわらず、発する言葉は一言、二言くらいだし。なにかあつても「オニイチャン」くらいだ。

それが飯田さん的には何かのツボを刺激しているみたいだけど。

飯田さんは本当のお兄さんみたいに、エミちゃんの食事のお世話をし、ボクはトイレとかのお世話をする。

時々ボクが近所のスーパーとかから、食事を調達してきて運び入れたりして、少し安定してきた感じだ。

もちろん、お家でお姉さんに甘えたり、雄大に電話したり（いまは札幌から南下しつつあるらしい）、家でだらだらネットしたりはしたけれど、おおむね、前のニート生活に近づきつつある。

やっぱり、人生、こうでなくちゃ。

無理に生き急ぐ必要はないよね。

ボクは楽しくスキップしながらコンビニに向かう。

なぜかは知らないけれど、どんどん身体能力があがってるみたいで、ピョンとジャンプすれば、一メートル以上ある家の塀の上に乗ることができた。

まさかりアルランま2分の1ができるとは思わなかった。

あきらかにボクって成長している……。

からだは一ミリも成長していないのに、どうしてだろう。この身体のパフォーマンスをうまく引き出せるようになっていってるという感じなのか。それとも、ゾンビを操ることで、なんらかの経験値がたまっているってのか？

わからん。けど、悪いことじゃないし別にいいか。

平均台みたいに腕をふりふり、いつものコンビニに向かう。

それにしても、エミちゃんはどうなっていくんだろうね。いま平均台のようにわたっている、このブロック塀のように、人間であるということは結構危うい線のうえで成り立っているのかもしれない。

転落すれば——べつにゾンビになるだけじゃない。

普通じゃなくなるっていうのはわりとありうる話だと思う。

たとえば、人を殺してもなにも思わない殺人鬼とか。

そういうのは、薄皮一枚の差でしかないのかもしれない。

ピヨン。

と、ふたたびボクはジャンプして、飛び降りた。

コンビニまであと少し——。

そんな折。

突然、静か過ぎる青空に、なにか巨大な獣が咆哮したような音が響いた。

ホラー映画で、よく聞いたことのある音とは違っていただけで、明らかに人口的なそれは聞き間違いようもない。

コンビニの方角から聞こえてきたのは銃声だった。

ハザードレベル1

突然だけど、質問です！

目の前のコンビニから銃声が聞こえてきたときにどうすればよいでしょう。

どうすれば正しいかというより、どうすれば危険が少ないかの問題。

つまり、リスクヘッジってやつ。

見える危険を踏み抜かないようにするための知性。

具体的には——遠目から様子を見たり、気づかれないようにこっそり侵入したりすることだと思う。銃を使うことは、人間であるということだし、ゾンビは道具を使うことはあまりない。

|||||

ゾンビは道具を使うか

作品のテーマとして、ゾンビの知性を取り扱ってるものは多い。ロメロ監督の『死霊のえじき』では、博士がゾンビをボブと名づけて飼いならす。大尉は鎖でつながれたボブをバカにする。ラストあたりで、ボブの傍に銃が回り、それを手に取った。これはもしかして人を撃つものなのでは？ ボブは訝しんだ。そして大尉はボブによって撃たれるのである。ただのうすのろだと思えばかにしていると、思わぬ反撃を食らうのがゾンビなのだ。

|||||

人間は道具を使う。そして知性があり同属意識がある存在だ。けれど——。

人間だからって安全とは限らない。狂気にかまれていけば危険。銃を持っていけばなおさら。

ボクの場合、どちら寄りなんだろう。

ボクのころは、ゾンビなのか人間なのか。

数秒の間で答えなんてでるはずもなく。

ほとんど考えもせずに、部屋の中に突入した。

部屋の中を見ると、狭い室内には金髪の男の人が立っていて、飯田さんを見下ろしていた。

飯田さんはその巨体を小さくちぢませて震えている。

男がすばやく振り向いて、銃口をボクに合わせる。

確か軍用ショットガン。

レミントンとか呼ばれる映画とかでよく使われるスタンダードな散弾銃だ。

ショットガンはBB弾のような丸い弾をシエルの中につめて発射する。

近接での威力は熊でも一撃だといわれているくらいだし、ホラー映画ご用達の化け物退治専用銃ともいえるだろう。

威嚇として撃ったのか、天井には弾痕がいくつもついており、パラパラと剥離した天井板の欠片が落ちてきている。

いくらボクが超人的な力を持っているといっても、銃には勝てそうにない。ここでは避けるスペースもないし、狙われれば確実に殺される。

怖い、と思った。

その圧倒的な暴力の造形にボクは心臓がキュッと掴まれたみたいになった。

ていうか、幼女！ ボク幼女ですよ！

まったく敵意なんてないんだけど！

男の人はボクの姿を見て、一瞬戸惑ったみたいだった。

「え、女の子？」

「やめて……撃たないでえ」

ボク悪いゾンビじゃないよ。ぶるぶる。

男はあっけなく銃をおろした。

ていうか——この人は。

この人は……、

「エミちゃんのお兄さん？」

写真で見た姿のまま、エミちゃんのお兄さんが困惑していた。

「ごめんね。緋色ちゃん」

エミちゃんのお兄さん——常盤恭治というらしい——は、ボクに謝った。

常盤恭治（ときわ・きょうじ）。年齢は17歳。

なにかスポーツをしていたのかそれなりに筋肉がついていて、シユつとした身体づくりをしている。いわゆる細マッチョって感じかな。

もともと大学生だったボクからしてみたら、『恭治くん』あたりが呼び名としてはふさわしいかもしれない。でも外見を考えると、エミちゃんのお兄さんを縮めて、『お兄さん』のほうがいいかな？ どうなんだろうね。

ショットガンは既に肩紐でかけて、エミちゃんの傍に座っている。

このバックヤードって結構狭いから、四人もいると蒸し暑いね。エアコンは効いているけど、気分的に。

「私にも謝ってほしいんだが……」

冷や汗をぬぐいながら、非難の声をだしたのは飯田さんだ。

「おっさんは別だろ。エミの髪の毛に気安く触れやがって」

どうやら、ショットガン暴発に至ったのは、飯田さんがエミちゃんのお世話をしている一環で、髪の毛をブラシでとっていたのが原因らしい。

傍目から見ると、達磨みたいな男の人が、華奢な女の子に触っている情景だし、しかもそれが妹のこととなれば、激昂してもしようがないのかもしれない。

いや、冷静に考えたら、その程度で銃を撃つか？

切れる若者怖い。

そもそも、ゾンビもので銃を使うのは悪手だよな。

このあたりのゾンビは全部よそにやったから、撃つたのかもしれないけれど。

|||||

|||||

ゾンビと銃

ゾンビを蹴散らす武器として、遠距離攻撃は有能だ。噛まれたら終了なゾンビ相手に対して近づかずには排除できる武器は安全パイなのである。しかし、銃の場合、その大きな音がゾンビを引き寄せるといふことも考えられる。できることなら静かに倒すほうが無難だろう。例えば弓や投げナイフの類だ。珍しい武器としては、『フィスト・オブ・ジューザス』というショートフィルムで、キリストが魚を投げてゾンビを倒していた。わけがわからないよ！

|||||

「それで——、お兄さんはどうやってここまでできたんですか」

ボクは空気がこれ以上険悪にならないようにするために、話題を変えた。

「ああ、スマホだよ」

恭治くんがズボンのポケットから取り出したのは、何の変哲もないスマートフォンだった。たぶん、GPS機能をつかって、エミちゃんの持つてるスマホとつながってるんだろうと思う。文明の利器も捨てたもんじゃないね。そろそろ電気が終わりそうな予感もするけど、そうならないといいな。

「最初は小学校に行ってみんだ。……オレは……エミがゾンビになつてると思ってた。だから、ロッカーの中でそうなつてるなら……これで」

ショットガンを手にする恭治くん。

続けて言う。

「ロッカーの中に誰もいなかったとき、オレはほっとするのと同時に焦ったよ。どこにいったんだろうって思った。あのとき手を離さなければって本気で後悔した。スマホを調べてみたけど、電気が切れているのかどこにいるかもわからない。だから——、もう一度スマホの反応があったとき、奇跡だと思ったんだ」

「オニイチャン……」

恭治くんはエミちゃんと視線を合わせている。

エミちゃんはさつきから落ち着きない様子だ。だいぶ人間らしくなりつつあるエミちゃんにとって、お兄さんの登場は、さらに回復を促すかもしれない。

「恭治くん。エミちゃんはその……なんといえればいいか。ゾンビと人間の境界に立っているのだと思う」

飯田さんが神妙な面持ちで言った。

「そうか……。そうだよな。エミはあの時噛まれてたしな。でも、ゾンビになっちまったってわけじゃないんだな」

取り乱すかと思ったが、恭治くんは案外冷静だ。

飯田さんは恭治くんの反応を慎重に見極めながら言葉をつむぐ。

「エミちゃんは脈もあるし、体温も呼吸もある。量は少ないが食事もするし……。その……。私ではなく緋色ちゃんが手伝っているのだが排泄もしている」

まあ、ボクも半分くらいは男の精神が残っているという感覚があるけど、それは内緒。ここでボクが男でしたなんていったところで誰も得しないしね。ましてや、エミちゃんのことを半裸にひんむいて、めちゃくちゃ汗ふきまくって、ピンク色に染め上げたなんていえるはずもない。

「そうか……。そうですか。ありがとうございます」

恭治くんは飯田さんのことを見直したのか、言葉遣いが少しだけ丁寧になった。

今度はボクのほうに向き直り、

「緋色ちゃんも、手伝ってくれたんだろう。ありがとうな」

「いえいえ。ボクはその……。特には」

んー。こうやってストレートに感謝されるとなんか照れる。

もともとは、飯田さんの小学生狩り（文面的にやばすぎる）に付き合った結果だし、エミちゃんのお世話をしているのもなりゆきだしな。

「それで恭治くん。今後はどうするべきだろうか？」

「エミはオレが引き取ります」

「引き取るとは具体的には？」

「オレにはコレがありますから」

シヨットガンをポンと触る恭治くん。

「しかし、エミちゃんは半分ゾンビ状態のせいなのか、あまり動けないよ。緋色ちゃんにはよくなついているのか、少しは動けるようになるみたいだが」

飯田さん、よく見ているな。

自分に対する他人の拒絶感とかそういうのを読み取る能力は優れているのかも。

ボクが直接エミちゃんのゾンビ部分を操つてるとまでは悟られていないけど、気をつけないと危ないかもしれない。

「エミ。オレといっしょに行こうな」
さて、どうしようかな。

エミちゃんは自分で自分の身体をコントロールできない状態だ。

それはもう介護が必要なレベルで、ほんのわずか立ち上がったりとか、よたよたとゾンビのように少しの距離だけ歩くとかはできるみたいだけど、ボクがゾンビ部分を無理やり駆動させないかぎり、まともに動くことはできない。

いま、ここで立ち上がらせて、お兄さんについていくそぶりをしてもいいけれど、ボクが目の前にいなければ、そこまで精緻なコントロールはできないから意味がない。コンビニを出た後にボクがついていかなければ、その場で糸が切れた人形みたいになるだろう。

エミちゃんは混濁した眼差しで、ただ恭治くんのほうを見ていた。

恭治くんの顔が曇る。

「エミ……ダメなのか」

「背負っていくというのも危険だろう。エミちゃんは確実に回復している。少なくとも歩けるようになるまで、ここで静養しているのがいいんじゃないだろうか」と飯田さん。

「オレは……でも……」

年相応といたらいいのか。

どうにもならない現実には、恭治くんは葛藤しているようだった。しばらく時間が経った。

飯田さんとボクは、恭治くんの決断を待っている。

恭治くんがどこを拠点にしているかはわからないけれど、そこについていくという選択肢は、いまのところない。

なぜなら、ゾンビ避けスプレ어의存在が知られてしまうから。

当然のことながら、ゾンビ避けスプレーというのはボクのうそっぱちから出た産物なんだけど、もしそういったものがあると知られればどうなるだろうか。

ひとつはゾンビ避けスプレーを奪おうとするということが考えられる。

もちろん、そうやって奪われても、べつにそれはそれでいい。

ゾンビに囲まれて、それでそいつはオシマイだ。

銃があればある程度は自衛できるだろうけど、弾は有限だろうし。

問題は――。

このお兄さんがひとりじゃない確率が高いってことだよな。

だって、シヨットガンなんて武器、どう考えても自衛隊にしか置いてない。自衛隊の駐屯地は確かすぐ近くにあったけど、さすがにまだ全滅とかはしてないんじゃないかなあ。

だから、単純に恭治くんには自衛隊員の誰かの伝手みたいなのがあって、そこから武器を調達したんじゃないかと考えるのが自然だ。

もしも、ゾンビ避けスプレーを奪われて、その効力が嘘だとわかれば、ボクにそんな能力があるってバレちゃうかもしれない。

そうでなくても、短絡的な人間なら、逆恨みすることも考えられる。ボクたちがエミちゃんはどうやって合流したかということを考え

るのはいかにも不自然だし……、うーん、恭治くんがあまり考えない人だったらいいんだけど。どうだろうね。金髪の爽やか君って感じで、たぶん陽キャ。

ボク的にはちよつと苦手なタイプだ。タイプが違うから思考も読めない。

エミちゃんと同じ年代だからか、ボクに対してはめちやくちや柔らかい態度だけど。

「あー、どうするかな」

恭治くんがぽりぽりと頭をかいた。

それからスマホを取り出した。

「すいません。仲間と連絡とっていいいつすか」

「かまわないが……、できれば、この場所のことは知らせないでほしい」

飯田さんは略奪とかを恐れているんだろうな。

ゾンビ映画では、定番の状況だしね。

ここにある食べ物は、エミちゃんとボクを含めても、たぶん2、3ヶ月は持つと思う。

電気と水が切れたら、カップ麺系は厳しくなるけれども、それ以外の残ってるものは缶詰とか、だいたい保存が利く食糧ばかりだ。味に飽きてはくるけどね。

それが、もし、大きなコミュニティに属するってことになれば、そういう食糧をさしださなくてはならなくなるかもしれないし、悪ければ、全部一方的に取られてしまうことも考えられる。

恭治くんは、エミちゃんがここにいるから、そうだったことはさせないように努力するかもしれないけれど、他の人はわからない。

「わかりました」

恭治くんはそう言って、電話しはじめた。

バックヤードの外は危険だから、この場所で電話するしかない。

若干、気まずそうにスマホを手で覆い、声を小さくして連絡をとりあっている。

「あ、大門さん。オレです」

「恭治くん。無事だったか。心配したぞ」

ボクは強化された聴力で相手の声も聞き取ることができた。わりと便利な身体になったよね。ボク……。

大門と呼ばれた人は、たぶん若い精力に溢れた男の人の声だ。声質からは三十代から四十代くらい。飯田さんと同じようだが、声が硬

い。喉の筋肉がたぶん発達している。ということは全身の筋肉が発達しているということが予想される。体育会系かな。うわ。苦手っぽい。

「エミ……見つけました」

「……！ そうか。よかったな。それで処理は……したのか？」

驚き。

一瞬の思考の間隙。そして声の感じからは、一見すると温かみがあるように思える。しかし、どうにもうさんくさい。

この大門つて人は、どうして恭治くんをひとりで送り出したのだろう。

厄介払いだったのか。

それとも、エミちゃんのところに行くことを恭治くんが強行したのだろうか。

「いえ。違います。信じられないかもしれませんが、エミは生きてました」

「ゾンビではないんだな」

「はい。ゾンビじゃありません」

エミちゃんのことを視界に入れながら、恭治くんは頭を左右に振った。

たぶん、厳密にゾンビじゃないけど、ゾンビっぽいところもあるから、どう伝えるべきか悩んでいるんだろうと思う。

しかし、どのようなコミュニケーションであれ、ゾンビですなんて言っただけ入れられるわけがない。インフルエンザで学校に突入するようなものだし。ゾンビウイルス（仮）に罹患している患者を受け入れるところなんてないだろう。

恭治くんの悩みはそこに尽きるともいえる。

このコンピニで恭治くんが何日か置きにきてもいいんだろうけれども、ゾンビ避けスプレーの存在を知らない恭治くんからすれば、この場所はめちゃくちゃ不安定に見えるんだと思う。下手すると餓死の可能性もあるだろうしね。

つまり、コミュニケーションには帰りたい。

それが恭治くんの第一目標。
けれど、エミちゃんが半ゾンビであると知られるとまずい。
そんな感じか。

結局帰ったら、そこでエミちゃんの状態を知られると思うんだけど、どう考えてるんだろうな。それでもここで生存戦略考えるよりはマシだと思ったのか。

「そうか。よかったな……それですぐ帰ってくるんだろう？」

「いえそれが、エミが動けない状態なんです」

「噛まれてはいないんだな？」

「……ゾンビ化はしてません」

「なら、なぜ帰ってこない」

「その……ひどく衰弱していて、オレが背負っていければいいんですが。大門さんのほうで人手をだせませんか」

「うーむ。オレか小杉が迎えに行くほかないが……小杉は当てにならんし必然オレか……、恭治くん。きみは今どこにいるんだ。小学校か？」

「いえ、近くのコンビニです」

「ひとりか？」

「いえ、生存者がエミ以外に二名います。大門さんと同じぐらいの年齢の巨漢がひとり。もうひとりはエミと同じぐらいの年齢の女の子です。どうやらエミを保護してくれてたみたいで」

「……そうか。だったら、その男のほうに背負ってもらって、おまえが守りながらこっちに来るのはできそうにないか？」

無理そうですね？ 的な聞き方って、わりとズルいと思う。

そこには、一定の思考誘導が含まれているから。

恭治くんはまた悩んでいるみたいだった。

シヨットガンひとつで、この集団を守りきれるかを考えているのか
もしれない。

そして、ボクたちはいつしよに行くとは一言もいってない。

うーん……、ついていくという選択肢はそれはそれで面倒くさいと思ってしまう。こんなことを考えてしまうのも、ボクにはゾンビに襲

われるという危機感がないからだ。

はつきり言えば、お家に帰って、お姉さんといちゃいちゃしたい。人間関係って、すっごく面倒。

でも、ボクがもしゾンビに襲われる普通の少女だとしたら、そんなことを考えたりするのは不自然かもしれない。

普通だったら——、つまり自分の生存率を高めるといふ発想に基づくならば、ボクは大きなコミュニティに属したほうがいいし、大人についていくというのが合理的だ。

「なあ……、おっさん。緋色ちゃん。オレの仲間のところに来てもらえるか？」

電話はいつのまにか切ったらしく、恭治くんはボクたちのほうに振り向くと、そんなことを言ってきた。

どうしよう。

ハザードレベル12

恭治くんの問いかけはシンプルだ。
いわゆるコミユニティへのお誘い。

まさか、エミちゃんを送り届けて、はいさようならというわけには
いかなさうし、それなりに保護はしてもらえらると思う。

しかし、逆に言えば、それはなんらかの見返りを要求される可能性
も高い。

ありがちなのは、ここにある食糧。
そして、人手。

まさか今の段階で農業とかそういうのに手を出しているとは考え
られないし、コミユニティの規模にもよるけど、なんらかの労働力は
提供しないといけないかもしれない。ありがちなのは、食糧探索係と
かだけど、そうじゃなくても食事を用意したり、ノクターンな展開で
は女の人が男の人の性欲を発散させたりもするよね。やだー。

ボクの終末スローライフが崩れていく。
それはいやだけど、じゃあ拒否してここに残るといった場合はどう
なるかな。可能性として高いのは、恭治くんはいったん引くけど、こ
こに通うようになるってことかな。属しているコミユニティが
ヒヤツハー系の略奪上等な集団だったら、この場所はバレてるし、
襲われる可能性もあるかもしれない。

エミちゃんをいわば人質にしていることになるけど、他の人にとつ
ては会ったこともない他人である可能性が高いだろうし、恭治くん以
外には抑止力になりえない。

じゃあ、襲われたとして——、ボクが害される可能性はどのくらい
なんだろう。はつきり言って、めちやくちやプリティなボクだけど、
小児性愛者でもない限り、さすがに性欲の対象にはならないと思いた
い。

でも——、秩序が崩れた今の世界では、なにが起こっても不思議
じゃない。

例えば、人間を殴ってみたいなんていう、歪んだ暴力を発露させて

も変じやないんだ。

そんなふうにはボクがいろいろと混乱している」と――、

「恭治くん。少しいいかな」

飯田さんは大人っぽい静かな声を上げた。

飯田さんの言い分もまたシンプルだった。

少しの間、考える時間がほしいということ。そのためにボクとふたりきりで話させてほしいということだ。

その間は、バックヤードから出ていってもらうことになるけれども、トイレにこもっていれば、そこまで危険ではないということだ。得していた。確かに外にはゾンビ一匹も見かけていない状況だ。

恭治くんは、ショットガンを持っているし、渋々ながらも納得した。

で――、いま、飯田さんはボクに問いかける。

「緋色ちゃん。どうしようか」

さっきまでの落ち着いた様子はどこにもなく、小学生女児におどおどしながら話しかける大人の人がここにいた。

はあ……。なぜボクに聞くのかなあ……。

少しは大人っぽいなど見直したのに。

「飯田さんとしてはどのようにお考えですか？」

「うわっ。その塵芥を見るような目。素敵すぎるよ。もう最高にかわいいよ、そのジト目。緋色ちゃんがアイドルしてたらおじさん、速攻でブルーレイ10枚以上買っちゃうなあ」

「じー」

「ハアハア……」

「いい加減にしましょう」

「ハイ……」

とりあえず落ち着いて考えを整理しよう。

「まず、この場所にとどまった場合は、どのような危険があるでしょうか？」

「恭治くんの仲間が来て、エミちゃんは連れ去られるだろうね。その際に運が悪ければ、食糧を強奪。最悪な場合は、君はかわいいから、そのなんというかね……私みたいな口リコンがいるとヤバイと思うよ」

「そういうふうにも力説されても困るんですけど……」
いやマジで。

でも、小児性愛者でなくても、ボクの容姿がそれなりに人間の目を
楽しませるといふことをボク自身も知っている。ナルシストとかそ
ういう気もあるかもしれないけどさ、もう、わかっちゃうんだよね。

ボクは——、人間という存在のコアな部分をとるかすような『禁忌』
なんだって。ボクは確かに今は小さくて小学生みたいで、ロリな感じ
だけど、それでも圧倒的に禁断の果実と化している。

そんな本能の奥底に碇^{アンカー}を投げるような存在になってしまつてるつ
て、どうしようもなくわかるんだ。わかっちゃうんだよ。

ボクという意味や心を考えなければ、これって効率的なのかもしれ
ないね。ボクが犯されれば、ボクの中のゾンビウイルスは反対にその
人間を侵しつくす。

ほら簡単でしょ。

おことわりだけだね。ボクの男としての自意識がそういった増え
方を望まないというか。心は男なので、やっぱり女の子のほうがいい
よ。たぶん。

「ともかく——、ついていかなければ危険があるってことですね」

「そう。でもついていっても当然危険だと思う」

「ゾンビ避けスプレアの件ですか」

「そうだな。小学校にいたはずのエミちゃんがどうしてここにいたの
とか、どうやって連れて帰ってきたのとか、そのあたりをつつかれ
るとヤバイかもしれないな」

「みんなに最初からバラしちやえばどうですか？」

「うーん……、その場合、緋色ちゃんは永遠にゾンビ避けスプレアを量
産し続けなければならぬことに」

それはいやだな。

「あ、でも誰かに作り方とか教えればどうですか？」

もちろん嘘っぱちの適当なものになるけど、効かないものを渡すの
も怖い。どうすればいいかな。要するにゾンビ避けスプレアをかけ
ている人間を識別できればいいんだけど。そういったなんらかの目

印をもとに、識別できれば、ボクは周りのゾンビを操って、襲わないようにプログラムできる。

うーん……。なにかいい方法ないかな。

「君はそれでいいのかな？」

「それでって？」

「君が誰かにゾンビ避けスプレアの作り方を教えるってことは、君だけが持っている利益を損なうことになるってことだよ」

「あー、そうなりますね」

「この世界で、君が君らしく生きていくには、そういった力が必要なんじゃないかな」

「飯田さんは優しいですね」

「え？」

「そういったことをわざわざボクに教えなくてもいいじゃないですか。だって、飯田さんが飯田さんらしく生きるためには、ボクを好き勝手できるほうがいいんですよ」

「それは違うかな。私はできることなら、誰も傷つかないでほしいんだ。自分がロリコンで、こうなんというか少女の造形に憧れている気持ちがあるのは身に染みている。どうしようもない性ってやつさ。佐賀だけにね」

ひゆるりらー。

あれおかしいな。エアコンが妙に寒く感じるぞ。

「ど、ともかく、私としては緋色ちゃんみたいな『人間』を——、他人の心を傷つけないんだよ。それは私自身の弱さかもしれない」

「でも、ボクはいいですけど他の人は何もしないでいたら、飯田さんを傷つけるかもしれないよ」

「そうだね。そういうこともあるだろう。私のできる範囲で、私の知っている人は誰も傷つけさせたくはないな。もちろん、エミちゃんも君もその中に含まれるよ」

「ふうん……」

わりといい人だよな。

この人ってあまりブレないし。

そこはいいところだ。

ロリコンだけど。

「じゃあ、とりあえず結論を決めましょうか」

「残るか。残らないか、君が決めてくれると助かるよ」

決断したくないという尻込みも含まれるけど。

本来弱いボクの自由な選択というやつを尊重してくれてるのかも
しれない。

悩んだ末にボクは決める。

「ここを出たほうがいいでしょうね」

「その心は？」

「飯田さんが言ったとおりですよ。ここから出ないということになると、向こうからどのような攻撃を受けるかわからないですし、こちら
もエミちゃんの輸送作戦を手伝ったという実績ができるわけです。
合流するにしろ、そちらのほうが状況的にいいはずですよ」

「なるほどね。ゾンビ避けスプレーについてはどうする？」

「黙っていたほうがいいと思います。エミちゃんはフラフラと偶然こ
こに来た。そう言っておけば、反証もできないはずですよ」

「世の中、水掛け論だらけだね。確たる証拠がない以上は、私たちの
言い分も通るかもしれないね」

まあ危険がないわけではないけれど――。

「それに……」

「ん？」

「兄妹を引き離すのもどうかと思いますし……」

「そうだね」

飯田さんは優しげな表情を浮かべると、ボクの頭をポンポンと触つ
た。

だあかあ。あ。

そうやって、無遠慮に撫でるのやめてー。

んもう。

お姉さんとは全然ちがくて、ベトベトしててちよつといやだけど、
でもなんとなく気持ちよさを感じてしまうボクがいた。だから、手を

振り払えない。今のボクの力はたぶん飯田さんの三倍くらいは優にある。

でも、振りほどけないんだ。

ゾンビ的な無機質の撫で方も悪くないけれど、たまには、そう、たまにはだけど、人間らしい気遣いも悪くないと思ったから。

☆Ⅱ

エミちゃんは飯田さんが背負い、恭治くんがショットガンを持ちながら警戒する。そして、ボクはそんな二人にぴったりとくっついていく。

恭治くんはエミちゃんにボールギャグを装備させてもやむをえないって感じだったんだけど、飯田さんがべつにいいと言ったら、なにやら感動していた。

まあ、半分ゾンビなエミちゃんが首元に噛み付いてきたら、ザ・エンドってな感じなんだろうけど、飯田さん視点からはゾンビ避けスペーラーを出かける前にサツと一噴きしてきたから、そんなことはないと思っっている。

それでも怖いことは怖いだろうけど、そこはお人よしな面がでたんだろうな。これから先、恭治くんの仲間に会うときに、エミちゃんが半分ゾンビであると知られるとマズイし、恭治くんの立場も危うくなってしまう。

それを避けたのだと思う。それと自分なんてどうなつても——とか、そんなふうに思ってるんだろうなあ。面倒くさい。

さて、そんなわけで久しぶりの遠征です。

ゾンビハザードから約一週間ほど経過した町並みは、まだ驚くほど変わっていない。よくあるゾンビ映画とかのように、黒煙がもうもうと立ち上っていたり、車がどこかここで大破してたりとかはしていない。

とても静まり返った住宅街という雰囲気だ。

ここはボクの町でも大通りにあたる。もちろん、ゾンビは一匹もい

ないように避けてやった。わざわざショットガンの餌食にするのも
かわいそうだしね。

それでも、恭治くんは緊張しているのか、猛暑の日照りの中とはい
え、汗をびっしょりとかいて、シャツをじつくりと塗らしていた。

エミちゃんを担ぎながら歩いている飯田さんのほうも当然汗びっ
しょり。

ボクはわりと涼しげだけどね。

なにしろ緊張感もないし、今は麦わら帽子を装備している。夏と
いったらこれだよな！

飯田さんもかわいいって褒めてくれたし、恭治くんもいいんじゃない
かと言ったから正義だと思えます！

そんなわけで、ボクとしては悠長にダラダラと緊張感の欠片もなく
歩いていた。

「ゾンビいませんね」

「ああ……、ハザードのときは百匹以上いたんだが、もしかすると全部
小学校のほうにおびき寄せられているのかもな」

小学校への距離は、ここから通りを左に曲がって、ずっと行った先。
「ボクたちが向かう先は、どこなんです」

恭治くんは恭治くんではボクたちに向かう先を教えなかった。

ほとんどありえないことだと思うけど、飯田さんとボクが害する可
能性もなくはない。だから、情報を伝えることに躊躇したのかもしれない。
出発している今の状況でいまさらって感じだけど。

「もしかして町役場ですか？」

「違う。そっちはそっちで生き残りがたくさんいるみたいだけど、そ
こはオレがいるところよりも人が多くて自由がきかないんだ」

「ふうん？ 自由のために小さなコミュニティに属しているの？」

「難しい言葉を知ってるね。まあそうかな。役所のほうは最初に武器
になるものを取り上げられるみたいだし、エミを助けることができな
くなると思ってすぐに抜けたんだ。で、大門さんに会った」

「大門さんって？」

「実際に会ってみればわかるけど、自衛官だよ。いや、元自衛官といっ

たほうがいいかな」

「もう自衛官じゃなくなったの？」

「ああ。詳しくはわからないけど、自衛隊員はみんな首都に招集がかかったらしい、でも、大門さんはこの現場にいる人をひとりでも多く助けたいから、残ったってさ」

「いい人なの？」

「わかんないな。でも、あの人が武器を貸してくれたから、エミを助けにいったのは事実だ」

「そのことなだけで——、どうしてお兄さんはひとりでエミちゃんを探してたの。だれかに手伝ってって言えばいいのに」

我ながら小学生っぷりがすごい。

無垢な少女っぷりが今の身体にとてつもなくマッチしている。

ああ、腹黒小学生になれそう。

あれれーおかしいぞー。

「自分のことは自分でケリをつけないな……。それが大人だよ」

「お兄さんは大人なの？」

「たぶんね」

無駄口を叩いているうちに開けた場所にでた。

そういえば、ボクはちよつと前に、この町には畑はないと言ったな。

あれは嘘だ。

いや、嘘というか、嘘じゃないんだけどさ……。なんというか、通りを隔てて、住宅が密集しているエリアとそうじゃないエリアの差が激しいって感じなの。

だから、通りを一本隔てると、そこは広大な畑エリアが広がっていて、周りを見渡すことができる。

ずーっと遠くまで見渡せるから、実は住宅地よりも危険は少ないかもしれない。

ゾンビが畑にはいないのがまるわかりだからね。

「よし、大丈夫そうだな。ここからあっちの住宅密集地まではダツシュするぞ」

「ええ、百メートル以上はあるじゃないか」

飯田さんが非難の声をあげる。

なんとなく言わんとしていることはわかる。今は視界に入る限り、ゾンビの影は見当たらない。でも、もしも、この広大な畑のど真ん中で襲われたら、隠れる場所はない。ゾンビは人間の出す音や臭いで寄ってくるけど、わりとしつこいんだよね。だから、見つからないに越したことはないってことなのかもしれない。

冷静に考えると、ボクはエミちゃん情報でしかゾンビの戦闘力を見てないし、よくわかんないけど、ゾンビの長所はたぶん数としつこさだろう。

なので、たとえ一匹でも見つからないようにするというのが大事なかもしれないね。まあボクがここにいる時点で、全部無駄ではあるんだけど……。

百メートルを駆けると案の定、飯田さんは息もたえだえといった感じ。

恭治くんも少し汗をぬぐって、バックパックの側面に挿している500ミリペットボトルで給水した。

ボクも黒無地の肩提げカバンから水を取り出してちびちび飲んだ。ちなみにまったく疲れてない。

「よし。ここまで来たらあと少しだ」

「んー。この先にあるのはやっぱり町役場だと思っただけど」

「その近くにホームセンターがあるだろ」

「あるけど……」

この町って実をいうとあまり高い建物がない。もともと佐賀の平野部は柔らかくて、高い建物を建てると危険なんだよ。

それに土地なんていくらでも余ってるし。

問題は、ゾンビというのは階段が一般的には苦手とされていること。

つまり、高い建物はそれだけ安全を確保するに適しているんだけど、そういった建物がこの町には……、いや、はつきり言おう。この佐賀県にはほとんど無いってことなんだ！

そう考えると、一階構造だけど、スーパールとかを占拠したほうがま

だマシかもしれないね。それと、もう既に別のグループが占拠しているらしい町役場くらいしか防衛に適しているところが思いつかないよ。

「その……大丈夫なの？」

「ゾンビかい？ まあもつといいところに引つ越そうって計画はあるみたいだけど、それにはどこかめばしいところを見つけないといけな
いしな」

なんとなく察せられるのは、恭治くんのコミュニティもそんなに人がいるわけではなさそうってところ。

ホームセンターひとつを占拠するというのはたいしたものだけど、一夜の間に占拠してしまえば、ホームセンターそのものは、そんなにゾンビはいないということなのかもしれない。

畑が左側に見える道を進んでいくと、ようやく建物が見えてきた。引きこもりのボクも大学に通うときは横目に何度か見かけたこともある。

交差点のちょうど接するように位置している。

入り口は二箇所。その一箇所は車を三台ほど横に並べ、その奥には土嚢を積んで完全に塞いでいた。

もう一箇所も同じように塞いでいる。

「えと……どうやって入るんですか？」

「あれだよ」

恭治くんが指差した先には……脚立？

場違いなほどに銀色に輝いているのは、伸ばせばはしごにもなる二つ折りの脚立だった。

今ははしご状態で、地面に置かれている。

「なるほど。これを使うんだね」

「ああそうだよ」

恭治くんは脚立状態に戻して、扉にぴったりとくっつける。

先に行くよう促されたので、ボクは脚立を上った。本気出せばジャンプして飛び越せそうだったが、さすがに小学生として最強すぎるので自重しておいた。

そして、向こう側にはごく丁寧にも同じように脚立が置かれてあった。これを使って降りろということらしい。

何事もなく到着したあとは、飯田さんとエミちゃんだ。一步一步確かめるような動きだったけど、問題はなかった。

最後にショットガンを肩のほうにかけて、恭治くんが脚立を上る。そして、扉のところで脚立を引き上げて梯子状に戻して、地面に放った。

ガシヤンと比較的大きな声が鳴ったけれど、ゾンビが周りにいないのは確かめている。

「さて、いこうか……」

ボクたちはホームセンターの中へ入っていく。

☆
||

ホームセンター前では、みんなワクワクした気分になるものだと思う。う。

男の子だったら特にね。

だって、秘密基地を作るワクワク感って、男だったらいつまでも持ってるものだし、

——ボクは男の子。

と思うからだ。

最近のホームセンターはわりと高い天井に完全な地階構造。つまり、二階建てではなく、一階建て構造。しかも、完全なワンフロア。壁にさえぎられていない巨大なフロアが広がっているものだと思う。

でも、違った。

フロアはいくつものパーテーションを置いて、擬似的な小部屋を作っているみたい。

通路を擬似的に作って、快適に過ごせるようにしているんだ。

なんとも人間らしい文化的営みにボクはうれしくなってくる。

創意工夫というのは人間の専売特許で、ゾンビには無理だからね。

奥まったところには、リビングあるいは執務室と思しき部屋が作ら

れていて、そこに豪華な椅子に腰掛けている男がいた。

「さて……、よく来たな」

たぶん、この人が大門さんなんだろう。

自信に溢れる様子は、圧倒されるようであるし、なんとというかカリスマ性がある。

でも——、そんなことはどうでもよかった。

驚くべきことに——。

驚くべきことじゃないかもしれないけれども。

私的なことで、ボクはそれどころじゃなかったからだ。

大門さんが座る机の傍にはコミュニティの全員が立っている。

その中に、ボクの後輩。

命ちゃんがいたんだ。

「命ちゃん？」

ボクは思わず口にしていた。

ハザードレベル13

「命ちゃん?」

ボクは思わず声をかけていた。

豪華な机の隣に、自分の右手を左手でかき抱くような格好で立っていたのは、ボクの後輩であり、かわいい妹分である、神崎命（かんぎき・みこと）ちゃん。

ちなみに神崎の「崎」は長崎の「崎」とは異なるから注意が必要で
す。

書き間違えたら「ムツ。チガイマス!」と怒られること必至だ。

そんな彼女は、今年で高校三年生になる女の子。亜麻色の優しい色をした髪の毛がサイドテール状になっていて、少し釣り目で、女の子らしい華奢なラインをしていて……、着ている服は濃紺のブレザー。そして灰色のプリーツスカート。ちよつと短すぎないかっていうぐらいふとももが見えちゃってて、そんなえつちいの、ボク許しませんよ! 足に包帯なんて巻いちやってさ。遅れてきた中二病かな。

って、え? なにそれ包帯? 包帯巻いてるの? なんで!?

中二病なはずがない。

この過酷な世界での怪我は——即座に致命傷になりうるリスクなんだ。

ボクは血の気が引いていくのを感じた。

「け、怪我してるの!」

「えつと……だれかな? 知り合いじゃなかったと思うんだけど」

「ボクだよ。緋色。忘れたの?」

「え、緋色……先輩?」

ハテナ顔を浮かべる命ちゃん。

って、なにやってんだボク。

いまのボクって、男だったときはまったく別ものじゃん。女の子じゃん。女の子成分百パーセントじゃん。しかもロリだし。外見年齢ほぼ半分だし。

わかるわけがない。

でも、いまはそれどころじゃなくて……、怪我。怪我しちゃってるの!?

とても痛々しい。ゾンビ的な傷ではないみたいだけど、右の足首から膝のあたりまで、包帯でグルグル巻きにされている。

「大丈夫なの……それ」

「骨折とかじゃなくて、ただの打撲だからもうしばらくしたら普通に動けるようになると思う」

じーつと観察するような視線がボクに浴びせられている。

そりやそうだよね。

命ちゃんの知っているボク。

そして今のボク。

なにひとつ同じ要素はないんだから。

強いてあげれば、命ちゃんの名前を知っていたということが、ボクが緋色である証拠のひとつに挙げられるかもしれないけれど、それだけじゃ弱い。

ただのストーカー女兒かもしれないしね

いや、ボクは全然ストーカーじゃないけど。妹分に欲情するような変態でもないし！ 女子高生に欲情しても……変態？

「あとでお話しましょう」

ニコリと笑う命ちゃんの顔は、なぜだかとても邪悪に見えた。

逆らっちゃいけないやつだ、これ。

「アツハイ……」

ボクは是非もなくなさずくのでした。

☆
☆

「知り合いみたいだが、後でいいか?」

大門さんが聞き、命ちゃんはどうななく。

「では……まず、恭治くん。よくぞ無事に帰ってきた。オレは信じていたぞ」

大門さんは立ち上がり、恭治くんの肩に手を伸ばす。

恭治くんも照れながら「大門さんが銃を貸してくれたおかげです」
などと言っている。

なんだこの体育会系なノリ。

いまだきの高校生ってそんな感じなの？

ホモなの？

「エミちゃんを連れてきてくれたのは君か」

今度は飯田さんのほうに視線を向ける大門さん。

飯田さんは、まだエミちゃんを担いだ状態だから、肩で息をしている。飯田さんはそこらにあつた椅子にエミちゃんを座らせた。エミちゃんはお行儀よく、両の手を合わせてお人形のようにじっとしている。目は伏せておいてね。

「オレはここを取り仕切っている大門という。君は？」

「い、飯田人吉と申します！」

「そうか。飯田くん。よろしく頼む！」

グツと突き出される右手。

握手をするときに上腕二頭筋がこれ以上なく盛り上がり、ムワッと汗が水蒸気になってるみたいなの錯覚が起こる。

飯田さんの腕がぶにぶにして赤ちゃんみたいだよ。

そんな感じで、飯田さんにとつても苦手なタイプなのか、ひとしきり恐縮しているようだった。

「エミちゃんもあの状況の中、よくがんばったな」

「……」

大門さんは膝を地面についてエミちゃんと視線を合わせようとす
るが、当然拒否。ボクはエミちゃんを操作して、視線を下に向かせる。
こうしておけば、恐怖で心を閉じたという演出にもなるだろう。

「さて、最後に君だが、お名前を覚えてもらえるかな？」

小学生女児に対する態度は、わりと柔らかい。
筋肉モリモリのマッチョマンという属性だけで、ひたすら圧迫感あ
るけど、べつにそこまで変じゃなかった。

「夜月緋色です」

「緋色ちゃん。君もよくここまでたどり着いた。あとは心配しないで

もいい。オレが君達のような善良な市民は守ってあげるからな」

そして、もはや定番となったナデナデ。

というか、犬か猫みたいにワシヤワシヤと容赦なく撫でるのやめてー。

せっかくお姉さんにセットしてもらった綺麗な髪がボサボサになっちゃう。

「さて、ではこちら側の自己紹介をしよう。オレは大門政継。ゾンビハザードが起こる前までは自衛官をやっていた。次にオレの隣にいるひよろいのが小杉だ」

小杉さんは命ちゃんと同じ側のちょうど後ろのあたりに構えていた。

大門さんが評したように、ひよろ長い印象。身長が高くて、185センチくらいはありそう。そのわりにほとんど筋肉がついていない。

「小杉豹太です。みんな豹太じゃなくてひよろたと呼んでました。雇われですけど、いちおう、ここの店長やってました」

生気のないボソボソとした声だった。

案外ブラックだったのかな、ここのホームセンター。雇われていうぐらいだからそうなのかもね。

それにしても、この人もわりとボクのことをジロジロ見てくるな。なんというかそういう視線って無意識に感じ取れると言われているけど、それって本当だね。なんというか、ボクの顔とか手足とか、ほとんどないけど胸あたりとかを値踏みされている気がする。

小杉さん、おまえもか。まさかおまえも小児性愛者なのか。

なんて考えるけど、たぶん自意識過剰になっただけだよな。

えへへ。

「こっちのケバイ化粧をしているのが、姫野だ」

「ケバイってなによ。化粧は女の武装でしょ！」

わりと強く言い放ったのは20代前半くらいの女の人の人だ。大門さんが言ったとおり、化粧のにおいがニメートルくらい離れているボクのところまで飛んできている。いまだきのギャル系っていうのかな。ぴっちりしたスカートにふわっとした上着を着た若さの残るコー

デイトだ。

ちよつとだけがんばってる感があるけど内緒だ。

「私は姫野来栖（ひめの・くるす）っていうのよろしくね」
にこやかに手をさしだしてくる姫野さん。

ボクもおおずと手を差し出す。ゾンビなお姉さんからカウントすれば、女の人の手を握ったのはこれで二回目だ。命ちゃんはノーカ
ンね。

でも、あまり感動はできなかった。

なんというか、その笑顔がどこか作り物めいて見えたからだ。
それに――。

口の中で小さく「ガキかあ。まあ、ひめのんの敵じゃないかな」つ
て、安心する声色で呟くものだから、ボクとしては複雑な気持ちです。
ギスギスして、ホームセンターの中が最悪な空気になるのなんか望
んでないしね。エミちゃんと命ちゃんが無事なら最悪それでいいよ。
「あと、恭治くんことは知ってるな。うちの人員はまだこれだけだ。
一応、町役場の人間とも交流はあるが、いまのところ合流するつもり
はない」

なるほど、思ったとおり人員は少なかったな。

大門さん。小杉さん。姫野さん。命ちゃん。そして恭治くん。
たった五人のコミュニティだったわけだ。そこに、ボクとエミちゃん
と飯田さんをくわえても八人にしかならない。

このくらいの人数なら、まだ統制はとれやすいのかもしれない。

大門さんはしばらくみんなを見渡したあと、ゆつくりとうなずい
た。

「いまは休んでくれ――と言いたところだが、その前に新しいメン
バーには最初の仕事をしてもらおう」

「へ。仕事？」

飯田さんが間拔けな声をあげる。

ヤバイかもしれない。このあとのことがボクには予想ができる。

エミちゃんを見る。そして、隣に寄り添う恭治くんと視線があつ
た。

「二応、規則だ。みんながゾンビに噛まれていないか検分させてもらう」

大門さんが一方的に通告する。

それは有無を言わせない命令だった。

いやな気分にはなつたけど、これはやむをえないことかもしれない。

だって、コミュニティに招き入れるときに一番危険なのは、感染リスクだ。

でも——、どうしよう。エミちゃんの身体にはカサブタになつていくけど、まだバツチリ噛みあとが残ってるんだよな。

たぶん、見られたらばれるし……。どうするか。

「飯田くんは、オレと小杉が診よう。エミちゃんと緋色ちゃんは姫野と神崎で診てくれ」

案内されたのはバックヤードの更衣室だった。

ボクはできるだけ不自然にならないように、エミちゃんの右手を握って歩かせた。手を引いて歩いて見えるなら、人間っぽいアピールができると思つたからだ。

☆Ⅱ

ささて。

冷静っぽいアピールしているけれども、内心のボクはめちやくちやドキドキしていた。なにしろ、ボクの心は男である。

なんか最近幼女化してきてるなって予感はあるけど、それでも男だったという意識は十分に残している。

そんな中、女の人に、ましてやかわいがっていた妹分に、自分の裸をジロジロ見られるというのは、どういう気分だと思いますか！

答え——、

めつつつつつつつつつつちやくちやくちやくちつつ恥ずかしい!!

白熱灯のジジジという音だけがやけに大きく聞こえる更衣室の中

で、ボクは混乱の極みにある。このあと控えているエミちゃんの噛み痕問題なんか、頭の中から完全に蒸発していた。

ぶしゆう。って音がでちゃいそう。

「緋色ちゃん。はやくしてよね」

姫野さんはちよつと面倒くさそうに声を出す。

ボクのことを捉えかねている命ちゃんは、何かを観察しそこねないように、じつくりねっとりボクを見ている。

あ・あ・あ。

やだこれ。はずかし。はずかし。

「女どうしで、なにはずかしがってんの」

それは違うと思うものの、ボクの現実的な身体はあますところなく女の子であることを主張している。いままでひとりではまったく考えずにすませてきた、ボクの身体が本当にボクの所有物であるかという問題。

身体に対する接続詞は必ず、『ボク』の『身体』となるように、本来、主体による所有が約束されている。そんな約束事が、通常の因果関係を飛び越えて、本来とは異なる所有者の存在をほのめかすようなTS的事象が伴う場合、接続詞による所有概念は破れ、つまりボクではない誰かがこの身体を所有するという可能性に結びつく。したがってTSという概念操作は、心身二元論的な考え方を想起させ、より単純な言説でいえば、魂という存在を信じるといった、反科学的な宗教への墮落を意味しているのである。またそれ以外にも――。あばばばああああやだあ。恥ずかしいよ。やだよお。

「……ぱい。緋色……先輩？」

気づくと、命ちゃんが心配そうにこちらを見ていた。

ボクが混乱したままだと話が進まないよね。

「お着替え手伝いましょうか」

「あ、いや。大丈夫だよ……」

このままだと何か危険な気がして、ボクはようやく自分の洋服に手をかけた。

ボクの身体はボクのもの。

ボクの身体はボクのもの。

念仏のように唱えながら、一枚一枚脱いでいく。どうしよう。うしろめたさが全開だ。

あらわになつた胸は、ダブルエーな感じで、ほんのり膨らんでいるかなあ程度だけど、命ちゃんの凝視ともいつていい突き刺さるような視線に、なんか心もとなくなつて、手ブラ状態になつてしまった。

これはね……しかたないんです。

誰だつてTSしたらそうなるんです。もしもオレは絶対に手ブラなんかしないという人がいたら、TSして是非その雄姿を見せてください。

ボクには耐えられませんでした。

気づくと上半身裸になつたボクがいる。

まだまだ肉付きの薄い身体だけど、ほんのりとしたなだらかな稜線は、男の身体とは似ても似つかないものだし、誰が見たつて女の子だ。ポリウームのあるプラチナの髪の毛がいくつか肩をつたい、つるつるの肌を流れるようにさらつていく。ボクはちよつとだけ涙目になつている。

「……綺麗」

と、つぶやいたのは命ちゃんだ。

羞恥心がものすごい勢いで、電撃のように駆け上ってくる。

髪の毛が邪魔して見えない背中、命ちゃんがかきわけるようにして確かめてくれた。なんか、すごいペタペタ触ってくるのがくすぐったい。

首のあたりも、ちよつと体温が低い手で触れられると、ひやつこい感じがして、なんか声が漏れちゃいそうになる。

あの……なんで身体くつつけてくるの？

もう……もう……。

「あの……もういいよね？」

「え。下は？」と姫野さん。

「え、下……？」

今のボクはかなりの軽装だ。フレアスカートにサンダル。靴下す

ら履いてない。

これでも足りないの。

「いちおう、下も脱いでください。必要なことなんです」

命ちゃんも重ねて言う。なんか目が血走ってて怖いんだけど。レイジウィルスに冒されてないよね。

「わかったよ……」

男としてのプライドというか、それ以前に人間としての何か大事なものが失われていつている気がする今日このごろ。

天国のお母さん。お父さん。ボクはまたひとつ大人になりましたよ。

そんなわけで、ボクのおしりにぴったり吸いついていたパンツ。

そしてフレアスカート。

男らしく、すべて捨て去りました。

はーっはははー。なんかもうすっきりって感じ。今ならミニマリストの気分がわかるよ。世の中、断捨離だね。

心の中に光が溢れ、ボクは宇宙と合一するのを感じた。

まっばだかともいう。

くすん。

☆Ⅱ

とりあえず、ボクは試験をパスした。

当然だよ。ボクの身体は瑕ひとつない珠のようなお肌だし。

心はすっかりズタボロだけどさ……。

そんなわけで、次はエミちゃんの番となった。

ボクはあえて力を貸さず、姫野さんと命ちゃんがエミちゃんをひん剥く様を眺めるだけにとどめる。

えっと、なんだろう。

小学生の美少女が、美女と美少女ふたりに無理やり脱がされていつてる今の状況はなんと形容すればいいのだろう。

あえて言えば、日本が世界に誇る文化。

H E N T A I かな。

見た目からすると、ひたすらに背德的というか犯罪的というか。

児童ポル……げふんげふん。

しかし、これは違うと主張したい。もしも、ボクのことを単に小学生女兒がレズ的にあれやこれやされているのが好きなだけと勘違いする変態がいたとしたら、ボクは憤りのあまり、柱に頭を打ちつけて死ぬことを選ぶだろう。

そう——、これは賢いボクなりの戦略なんだ。

ボクがコントロールしない限り、エミちゃんはほとんど身体を動かさない。

エミちゃんが身体を動かさないというのは、ある意味人間的な要素の一つなんだよ。ゾンビは『死んでいても』身体を動かしてくるものだから、身体を動かさないという時点で、その定義からはずれているということになる。

それに傷痕。

これについては見つかった。

でも、これも言い訳がたつ。

「これってゾンビに噛まれたあとなんじゃ……」

姫野さんが青い顔で言う。その瞬間——、

「あー、これってエミちゃんが自分で噛んじやうんです」

「え、そうなの？」

「はい……。たぶん、トラウマになっちゃったんじゃないかな」

ボクはエミちゃんの身体を動かして、自分の腕に甘噛みするようにした。

「オニイチャン……」

おっと、これはファインプレー。

エミちゃんが自発的に声を出したことで、一応、ゾンビではないと証明されたみたいだ。

☆
||

甘かった。

甘噛みだから甘かったというんじゃないやなくて、大門さんの判断能力を甘く見ていた。姫野さんは見たままを報告したんだけど、それを聞いた大門さんは、念のためという理由ながら、エミちゃんを監禁することにしたんだ。

いずれにしろ看病が必要な状態のエミちゃんは動かせないから、実質的な行動制限は変わらないところであるけれども、そこには天と地ほどの違いがある。

エミちゃんの両手両足は、無残にも、痛々しくも、大きな縞々のロ―プで結ばれていたのだから。

恭治くんは顔を真っ赤にして、大門さんに食って掛かった。

しかし、大門さんは動じない。

「恭治くんは、オレと連絡をとったときに、わずかに言いよどんだ」
確かにあのとき、ゾンビに噛まれてはいないのかという問いに対して、恭治くんは真正面からは答えなかった。

その疑念が、まだ残っているということなんだろう。

「自傷痕ということだが、エミちゃんはゾンビだらけの小学校にいたのだろう。噛まれていないというのは奇跡のように思える。それに――、どうやってゾンビだらけの小学校を突っ切って、そのままに動けない身体でコンビニまで辿りついたんだ？」

「最後の力を振り絞ってコンビニまで行ったんじゃないですか」

恭治くんは明らかに不満の表情だった。

「飯田くん達とエミちゃんが合流した日からさかのぼると、三日程度は飲まず食わずということになる。大人でも水を飲まなければ発狂するレベルだぞ」

「だから、あんなふうになったんだと思います……」

「それはオレも残念に思う。しかし、あの傷がもしもゾンビに噛まれたものなら、エミちゃんは感染しているということになる。危険だ。隔離するという判断をせざるをえない」

「でも、エミはゾンビじゃありませんよ。あんなにおとなしいゾンビはいないじゃないですか」

「それはオレもそう思う。ゾンビになりかけか。本当に心が病んでしまっただけなのか。それはわからない。これからそれを見極める時間が必要なんだ。わかるな？」

いや、ぜんぜんわかんないんだけど。

組織の理論は、個人の保護にはむかないからね。言ってみれば、組織は個人を助けてくれるということはほとんどない。

その結果、エミちゃんは拘束されることになってしまった。

恭治くんは悔しさに顔をにじませながらも、大門さんの提案を受け入れざるを得なかった。

全体のため。

個人がないがしろにされた。

ありがちだよね。

大門さんのそれが建前なのか、本音なのかはわからない。

もしかしたら本当にみんなのためを思って、断腸の思いでエミちゃんを拘束したのかもしれないけれど、恭治くんは完全に納得しきっているわけではないようだ。

うーん。チート持ちのボクとしては、そういう組織をぶっ潰してやるといふ方向に舵を切りたくもあるんだけど、命ちゃんも怪我している今、このコミュニティに壊れてしまっても困る。

いまは静観しておくのが無難かな。

☆
||

リビングルーム兼執務室では、みんなして小さな歓迎会を開いてくれた。

ボクもいよいよパリピの仲間入りか。

知らない人とパーテイすることに、ちよつと気疲れしたけれど、命ちゃんもいるし、月並みな言葉だけど楽しかった。

そして、夜になった。歓迎会はお開きになって、みんな自分の部屋に帰っていく。

驚くべきことに、ホームセンター内には自室があるんだ。

パーテーションといってもほとんど壁のような仕様になっているそれは、なんとドアもついている優れもの。

四方を完全に隔離するかたちにすれば、ワンフロアの中にいくつも部屋を作れるみたい。

ボクは命ちゃんの部屋に招かれていた。

招く……というか、拉致されていた。

拉致というか未成年略取されていた。

いや、冗談だけどね。

ともかく、命ちゃんの部屋にボクは連れて行かれた。

——なぜか手を引かれて。

そういえば、命ちゃんが小学校くらいの時はボクのことをこうして引引っ張って、はやくはやくーってはしゃいで可愛かったな。

そのときの感覚とほとんど変わらないんだけど、今のボクはドナドナされている牛の気分だ。

ドアの前に到着。

そこで背中からみつくように命ちゃんの腕がまわされる。

身長差からいってしょうがないとはいえ、なぜかボクの身体はビクッと跳ねてしまった。見上げるように命ちゃんを見つめると、命ちゃんもボクのことを見つめている。わずかに微笑している顔つきは、なんだか無慈悲な月の女王めいていて怖い。なぜだろう。可愛い後輩のはずなんだけど。

ボク、捕食される側っていうイメージから抜け出せない。

「いちおうここが玄関なので、履いているものを脱いでください」
「わかった」

当然ながらワンルーム。トイレもお風呂もない部屋だけど、わりとスペースは広くて、9畳くらいはありそう。大きめのカーペットが地面に敷かれていて、ふかふかだ。

部屋の中にはソファがコの字になっていて、ローテーブルが配置されている。ドアのところで、どうぞと促されたから、ボクはソファに座った。

なぜか、鍵をかける命ちゃん。

「ん。なんで鍵かけるの？」

「女子高生ですからね。夜は危ないでしょう。クセなんです」
「ふうん」

ホームセンターは全体としては電気が落とされていて暗かったけれど、蛇のようにケーブルが地面を伝い、各々の部屋に電気を通して
いる。

ローテーブルの上にはおしゃれな電気スタンドが備えつけられていて、淡いオレンジ色の光を放っていた。

「さて、あなたは何者なんですか？」

「ボクは……緋色だけだ」

「私の知ってる緋色先輩ですか」

「うん。たぶん……」

そして沈黙。

薄明かりで灯された部屋の中は、相手の表情を幾重にも塗り替える魔性の空間だ。ボクは夜目がきくから、命ちゃんの顔もはっきり見え
たけれど、でもそれでも、やっぱり何を考えているかわからなかった。
「なんでかわいらしい女の子になってるんですか？」

「朝起きたら女の子になってた」

「そんな……こと」

「だって、朝起きたらゾンビだらけになってたんだよ。そういうこと
が起こってもおかしくないじゃん」

「まあ、それはそうですけど」

「命ちゃんこそなんで佐賀にいるの？ 福岡だったでしょ。住んでる
ところ」

「緋色先輩が心配だから、佐賀まで来たんです」

「どうやって？」

「バイクに乗って」

「ふわー。ゾンビハザードの中を突っ切ってきたの？ 危ないよ」

「高速道路なら大丈夫だと思いましたが。鳥栖ジャンクションからはも
のすごい渋滞でほとんど進めなくなりましたけど……、それと私がい
たのは、ちよつとの時間だったけど、福岡はたぶんもうダメですね。

リアル修羅の国になってますよ」

確かに日本の高速道路は、一般道からしてみれば隔離されている。ゾンビだらけになるのはまだ先のことだったんだらう。

「おじさんやおばさんは置いてきたの？」

「あの人たちは所詮他人ですから。どっちも一応人間のままでしたけど」

「ああ……そう」

まあそういう闇深案件はべつにいいんだけどね。

ボクのところにも真っ先に何も考えずに来るといふところが、かわいらしくもあり、呆れもあり、なんともいえない気分になってしまった。「先輩のところまであと少しだったんですけどね……。一般道はやっぱり危険でした。ゾンビとか気にせず突っ込んでくるから、最後には転倒してしまって……。このザマです。スマホも落としてしまいましたし」

痛々しい足の傷。

話を聞く限りじゃ、生きてるだけでも奇跡だ。

「見ますか？」

「え？ 何を？」

「私の身体です」

「ふえ、な、なにいつてんの？」

「あ、いえ、足の傷ですよ。私が緋色先輩の身体にゾンビ痕がないのを確かめたように、先輩も私の身体を検分する権利があるかな、と」

「ゾンビかそうじゃないかはべつにどうでもいいよ。でも、命ちゃんが痛くないか気になるから見せて」

「わかりました」

巻いてる包帯をしゅりしゅりしゅると、丁寧にとりはずし、命ちゃんはずかしく顔を赤らめる。なにそれ、罪悪感湧くから恥ずかしがらないですよ。こっちのほうも恥ずかしくなってくる。

でもそんな恥ずかしさもすぐに引っ込んだ。

命ちゃんの女の子らしい綺麗な足は、ゾンビのように青あざに侵されてきたから。もちろん、ゾンビ菌に侵されているわけじゃない。た

だの怪我だというのは見てわかる。

でも痛々しい。

「ようやくここ数日でまともに歩けるようになってきました」

「ほんとに大丈夫？」

「緋色お兄ちゃんが、痛いの痛いのしてくれたら治るかもしれません

——」

「なっ……」

それってものすごく恥ずかしいんですけど。

命ちゃんってクール顔というか、感情がほとんど顔に出ないから、本気なのか冗談なのか判別がつかない。

……。

「痛いの痛いのとんでけー」

「先輩……」

「はい……」

「それって、誘ってますよね」

「え？ なにをどうしたらそういう解釈になるの？」

「先輩がかわいすぎるのが悪いんですよ。そんなかわいらしい容姿で私の前に現れて、でもやっぱり先輩は先輩で……かっこよすぎるのが悪いんです」

「いや、その理屈はおかしい！」

「理屈じゃないですから！」

ライオン。

ライオンだ！

手負いの猛獣がボクに飛び掛ってきていた。

ヤバイ。これ。ヤバイ。

ボク、なぜか後輩に押し倒されている。

ソファのおかげで背中が痛くないけれど、両手が完全に命ちゃんの手でブロックされている。

なにがどうなってるのかわからないけれど、命ちゃんはやっぱり錯乱しているのかもしれない。こんな世界になって、それでもボクを先輩だと思って頼ってきて、でもボクは頼りない女の子になってしまっ

ていて、そんな心の中の葛藤が、こんな凶行に――。

ボクはひどく冷静に命ちゃんの行動を分析し、それから徐々に腕の筋肉をこめて命ちゃんの手を押し返した。まかりまちがってキスとかされたら大惨事だからね。ボクからゾンビウイルスに感染とか洒落にならない。

「え、この力は……」

「あのね。命ちゃん。ボクはこんな格好になってしまったけど、ちゃんとボクのままだよ。命ちゃんのことを守るから。先輩として……頼れるお兄ちゃんとしてがんばるから、そんなに確かめなくてもいいんだよ」

それからボクの薄い胸で、ぎゅっと命ちゃんの頭を抱きしめた。

「うーん。先輩が何か誤解している気がしますが、これはこれで――」

すごく吸い込まれてるんですけど。

最近のダイソンの掃除機ってすごいみたいな感じで、めちやくちや吸われてるんですけど……。

最近の女子高生は何を考えているのかわからない。

ハザードレベル14

後輩の女の子に久しぶりに会ったら、なぜか懐かれました。
よくわかんないよね。

しかも、新しい部屋がまだ改装中とかで、いつしよに寝ることになっただし。

これってボクが危険というより、命ちゃんのほうが危険なんじゃないかな。

ホームセンターに置いてあったベッドは、ホテルとかにあるような豪華なやつで、少女ふたりが入っても十分な大きさがある。

「先輩……ふへへ……かわいい……お人形さんみたい」

速攻で夢の世界に旅立った命ちゃん。

いつもクールだけど、内心はすごく素直な子なんだ。

鉄仮面のような無表情さと攻撃性も、身を守るための鎧で、いまの命ちゃんは純心無垢な女の子って感じ。

この子はこの子で不安なんだろうなと思う。

でも、これってすごくまずい状況なんじゃないかな。

もしも寝ぼけて……あるいは寝ぼけてなくてもちよつとした冗談で……、その……ボクに無理やりキスとかしたら感染しそうだよね。それはまずい。すぐくまずい。

命ちゃんを守ると誓ったのに、速攻でマモレナカッタとか洒落にならない。

|||||

キスで感染

映画『28週後……』では、レイジウイルスに感染しているものの発症しない、ある種の免疫を持っている妻とキスをし、夫のほうはあっさり感染、発症してしまう。夫の視点からすれば、妻は普通の人間に見えたけれども実は感染していたというパターンであり、夫は妻を愛していたが、その夫の手によって妻は殺されてしまうのである。ある種の悲劇とみることもできるだろう。経験的帰納法に従えば、ホラー

では90パーセント程度の確率でリア充はみじめにむごたらしく死ぬ。

|||||

では、命ちゃんにちゃんと話すべきだろうか。

聡い子なんで、言わなくても察しているかもしれないけれど、ボクの口からきちんと、

——ボク、ゾンビだよ。よろしくね。はあと。

とか言うべきだろうか。

普通だったらえんがちよ案件だよ。

ゾンビってばい菌だし。ばい菌はキタナイものだ。エミちゃんと同じように隔離されて拘束されてしまう。いや、命ちゃんがそんなことをするわけない。でもそうならない保証はない。

裏切られるというのも少し違うかもしれないけれど、ボクがボクであるということが受け入れられないかもしれない可能性がある。

——それはいやだな。

そんな思考を繰り返す。

結局、もやもやした気持ちのまま、ボクは眠れずにいる。

ほかにも言っていないことがある。

女の子になっっているのは隠し切れないからそのまま伝えなければ、ボクがゾンビに襲われないことや、ゾンビを操れることは、直接的には言っていない。

命ちゃんがボクの不利に動くとか思ってるんじゃないやなくて、単純に嫌われるかもしれないのが怖かったんだ。

キャミソールに短パン姿になったラフな格好の命ちゃん。

ボクは命ちゃんに抱き枕のような形でおなかのあたりをホールドされている。

背中あたりには高校生らしい柔らかな感触があたって、ボクは心臓の鼓動がそのまま伝わるんじゃないかと危惧した。

からみつく足。後頭部あたりから無理やり吸引されるボク。

あの……命さん。起きてないよね？

「ぐへへー。先輩成分……ほじゅー」

ヤバイ……。これは別の意味でヤバイよ。

今夜は寝かせないぞってスタイルですか。そうなんですか!?
うなんですかあゝゝゝゝゝゝゝつ!??!

そうになりました。

☆
☆

ピピピという音で、朦朧とした意識が覚醒するのを感じた。

枕元にある時計の音だった。

ホームセンターの中は薄暗いままだ。朝になってもそれは変わらない。

引きこもりのカーテンしめっぱなしのボクの部屋と同じく、あえて電気をつけたりはしないからだ。

ただ、真つ暗なままなのも怖いので、足元にはところどころランプがついている。入り口のところは分厚い遮光カーテンで覆っていて、光が漏れないようにしているようだ。

そんなわけで朝。

ボクは命ちゃんに抱きつかれっぱなしだったわけだけど、結局一睡もできなかった。ちよつと眠いけど、ゾンビ的特性なのか、徹夜でもそこまできつくはない。寝ようと思えばすぐにも寝落ちできそうだけどね。

まあ後輩の危険には代えられないので、今日お部屋ができるまでは我慢する。

「ふああああああっ」

ホールドされている腕を丁寧にはずし、ボクはうーんつと伸びをする。

ちよつとおへそが覗いちやつた。

「先輩……おはようございます」

命ちゃんが目を覚ました。

なんでボクの前にも目を覚ました。

「うん。おはよう。あのさ……命ちゃん」

「ん。なんですか？」

「冷静に考えて、みんなの前でその先輩ってヤバくない？」

「そうですか？　ちっちゃな先輩とか興奮しません？」

「興奮するのは一部の奇特定の趣味の人だけだと思っただけ」

「頼れる先輩感と甘やかなロリ成分が合わさり最強に見える……っ
！」

「みえねーよ！」

わけがわからない。

命ちゃんがいつものまにかロリコンになってました。

美少女高校生がロリコンとか業が深すぎるだろ。

お兄ちゃんはそんなふうに育てたおぼえはありませんよ！

「先輩限定なんですけどね……」

「いやまあそれはいいけど、やっぱり変でしょ」

「もう既にみんなの前で何度か言ってる気がしますけど」

「ずっと言い続けられるのはやっぱり違和感があるよ」

「わかりました。じゃあ、緋色ちゃんって呼びますよ」

「うん。お願い」

「あ、その『うん』ってところすごくかわいいです」

「……さよですか」

なんか、ボクが女の子になってからグイグイくるよね。この子。

☆
＝

朝になると恒例だけどボクの髪の毛がすごいことになっていた。

ボクって毎朝スーパーサイヤ人3になるんだよね。わかる？

まあいいんだけど、ともかく爆発しちゃうわけです。

それで、今、ボクはベッドに腰掛けて、命ちゃんに髪をといてもらっ

ている。

ブラシが通るたびに、どこからともなく湧き上がってくる眠気がすごい。

反則なぐらい気持ちいい。

「先輩。髪の毛……誰にといてもらってたんですか？」

突然、呟くように語りかける命ちゃん。

「え？」

「だって、ここにきたとき、すごく綺麗だったじゃないですか。誰かにしてもらってないと、あんなになりませんよ」

「ふ……ふにゅ……」

そんなことで、簡単にバレちゃうの？

女子力ってすごい。

まさかボクも、ゾンビなお姉さんにセットしてもらってましたなんて言えるはずもなく、ただただ、難聴のふりをしつづけるしかなかった。

「先輩が言いたくないってことはわかりました」

「う……うん。ごめんね。ちよつと言にくい事情があつてさ」

「まあいいです。しばらくは私がセットします。それで許してあげます」

え、これって許すとか許されるとかそういう次元の話なの？

よくわからないんだけど、ベッドのところで女の子座りしている命ちゃんを見返すと、その視線は絶対者の視線だった。逆らってもめしたない。

「ありがとう」

と、ボクは返す。

ボクとしても髪の毛がボンバー状態でみんなに見られたくないので、ちよつどよかったよ。家の中で待機状態のお姉さんには少しだけ申し訳ないけど。

髪の毛をセットしてもらいながら、ボクは暇な時間を情報交換にあてることにした。ボクが知っておくべきなのは、このコミュニティについてだろう。

ここにいるみんなの第一印象はクセは強そうだけど、まだ常識と倫理を保っているように見える。

「みんなの印象ですか……。難しいですね」

命ちゃんは少し考えているようだった。

まあ、ボクと同じであまり他人とコミュニケーションを積極的にとる子じゃないからね。無理ならいいんだけど。

「感覚的なものになりますが……。まず大門さんは体育会系ですよね」

「まあ、それはそうだね」

「筋肉好きそうですね」

「そうかもね……」

「あの人は、たぶん自分が好きなんだと思います」

「誰だってそうじゃないの？」

「だって、自衛隊員ですよ。軍隊じゃないけどほとんど軍隊じゃないですか。軍隊では、歯車であることが求められます。なのに、彼はここにいる」

「歯車じゃなくて、自分がトップになろうとしたってこと？」

「そうかもしれないんですけど」

「このコミュニケーションのトップになって何がしたいんだろう」

「単純に権力が好きなんじゃないですか」

「権力ねえ。たった7人を好き勝手動かせてもたいして意味ないと思うんだけど」

「それは、先輩や私が権力にあまり興味がないからですよ」

「そうかな。そうかもね」

命ちゃんの人物評価はわりと手厳しいな。

「次は、小杉さんですが、この方は率直に言って、あまり好きじゃないです」

「えー、そうなの？」

小杉豹太。

ひよろ長い20代前半の男の姿を思い出す。

自信のなさそうな様子だったけれど、悪い人には見えなかったけどな。

「あの人は、視線がちよつと気持ち悪い気がして……」
いわゆる生理的にダメってやつか。

そればかりは感情的なものだし、論理とか理性とかの展開じゃないからな。

なんともいえないよ。

命ちゃんのせいじゃないし、小杉さんのせいでもない気がするな。

「それだけじゃないです——」

「なにかあったの?」

「うまくいえないんですが、小杉さんは言い訳をする人だと思うんです。前に、常盤恭治さんが妹を助けに行くというときに、いっしょについていく人をつけるべきかという話題になったんです。小杉さんは、いの一番に拒否しました。もつともらしく、このことを最も知っているのは自分だからって——。ただそれだけのことなんですけど、なんとなく嫌だなと思ったんです」

「みんな自分のことが大事なのはしかたないと思うけど……」

「でも、先輩は私のことを守ってくれるんですよね」

「それはそうするよ」

「先輩は前のときもそうでしたけど、自分より私のことを優先しますよね」

「うーん。そう思ってるつもりだけど、それはたまたまボクの中の優先順位がそうなってっただけで……」

「その優先順位が問題なんじゃないですか」

「まあ……、そうかもね」

命ちゃんのいわんとして、こともわからないでもない。

ただ、保身をするのが人間だとも思う。

ボクは——、ボクの趣味において、単純に命ちゃんの価値をボク自身よりも上においているだけだ。

小杉さんがどういう価値基準を置いているかはわからないけど、自分の価値が最上だとして、だからといってそれが悪だとは思えない。

ただ、命ちゃんの趣味に合わなかっただけだ。

「姫野さんはどうなの?」

「姫野さんは普通の人って感じですよ」

「普通の人？」

「普通に自分のことがかわいいし、普通に男の人に媚びるし……、別に悪い人ではないけれどもいい人でもないという意味で、普通ですよ」

「よくわからないな……」

「普通の女ってことですよ」

「ますますわからん」

「女の子になったのにわからないんですか？」

「まだ初心者だもん」

「先輩がお子様っぽいですよ」

「お子様ってゆるーな！」

まったく。ボクがまるで……まるで幼女だって言われてるみたいだ。

こう見えても、命ちゃんよりも年上なのに。

「そうだ。恭治くんはどうなの？」

「常盤さんは、シスコンじゃないんですか」

「あー」

「まあ、それはその人の人柄どうこうって話じゃないですね。常盤さんは、たぶん自分の中にそれなりの正義というか、そういう基準がある人なんだと思います」

「そうかな？」

「ええ。ですから、たぶん——この事態に一番心を痛めているのは彼なんじゃないかって気がします」

「命ちゃんはどのなの？」

「私は——、そうですね。世界が滅んでくれてせいせいしていますよ」

☆
||

朝にはみんなが無事を確かめあうために、リビング兼執務室に集まることになっている。

執務室はホームセンターの奥まったところに一番スペースをとる

ように構えられていて、バックヤードにも一番近い。

大門さんはいつものように机に座って、オートマティックピストルを磨いていた。自衛隊からいくつか銃を持ってきたのかな。

「今日は部屋の改修をしてもらおうと思う。飯田くんと緋色ちゃんも一人部屋があつたほうがいいだろう」

「あの、私としては緋色ちゃんと同じ部屋でもいいですが……」

命ちゃんがそんな発言をするが、大門さんはじつと見つめたあと、首を横に振った。

「いや、やはりひとり一部屋は必須だろう。もしもの時の防衛という意味でも、ひとつの部屋にかたまっていないほうがいい」

そういうもんかな。

推理小説とかでは、ひとりになつたところを狙われるほうが多い気がするけど。

でもプロが言うならそうなのかもしれない。

あるいは、分散していたほうが徒党を組まれにくいとと思っているのかもしれない。例えば、ボクや飯田さん、そして恭治くんはコンビニからの新規参入者で、そういつたつながりがある。このつながりが派閥とか徒党につながれば、大門さんとしては管理がしにくいってことなのかもしれない。

管理という言葉を思い描くと、胸の奥がざわつくような感覚がした。

でも、命ちゃんの足の怪我が治るまでは、ここを動くわけにはいかないだろう。

「もう部屋の間取り自体はできている。あとはその部屋に生活必需品を運ぶだけだ。午前中いっぱいぐらいで、おそろく終わるだろう」

「今後のことはどうするんです？」と飯田さんが聞いた。

「このことを少し話しておくべきかもしれないな。まず、食糧事情だが、私が自衛隊駐屯基地から持ち帰つたものと、近所のスーパーやコンビニから集めたもので、今ここにいる者全員でも一ヶ月程度は持つ。太陽光パネルと蓄電池なんかもあつたから、屋上に設置すれば、電気がこなくなつても大丈夫だろう」

「ゾンビは駆逐できますかね」

「それはわからないな。まず、政府見解が正しければ、日本だけでも1000万人から3000万人近くはゾンビになっている。対して、自衛隊員は全国20万人だ。単純にこの自衛隊員数を戦闘員と考えても数が足りん」

「ほとんどのゾンビは家の中に閉じ込められてるって話ですけど」

「確かに。しかし、政府のお偉方が決めた方策は、まずは自分達のお膝元の確保だ。要するに首都、関東圏の制圧を目指している。よりもよって一番人口密集地である首都を解放しようとしているんだ。どれだけ時間がかかるか想像もつかん。その間、田舎のほうは打ち捨てられるという寸法だ」

「じゃあ、このゾンビが駆逐されるのはずっと先……」

「そうなるだろう。それに、今いるゾンビだけじゃないだろうしな」

「ゾンビに噛まれたらゾンビになるってことですか」

「それもあるが……、この世界のルールはもう変わってしまったんだよ」

大門さんが眼光に力をこめて言う。

その言葉に飯田さんはすっかりと射すくめられてしまったようだ。

そう——、ボクもね。

うすうす気づいていたんだけど。

この世界のゾンビになった人は一割とも三割と言われているけど、でも、ゾンビになっていない人も。

誰ひとり例外なく。

そう、老若男女かかわりなく、全員、みんな、みんな。

——感染している。

ゾンビウイルスに感染している。だから、死ねば、『生』に翳りが生じて、ゾンビになる。たとえ噛まれていなくても、ゾンビによって傷つけられていなくても、ゾンビウイルスがもたらす『死』に抵抗ができなくなれば、ゾンビになるんだ。

大門さんは机のところで指を組み、口元を隠すようにして続けた。

「日本で言えば、毎日3000人程度だ」

「え。なにが……？」

「死者だよ。もちろん、この数はどんどん減っていくだろうし、しかも戦闘力はそこまでない高齢者ゾンビだと思われるが、やつらはどんどん数を増していくんだ」

「そんな……」

「しかし！」

大門さんはとりわけ大きな声を出す。

「悲観し絶望するには早いとも思っている。ゾンビが増え続けるといつても、我々も奴らに対抗するだけの知恵と力をつけるだろうし——、奴らも無限に増え続けるわけじゃない。いずれ事態は沈静化するだろうと考えている。人間は強い。オレはそう信じている」

飯田さん他、みんなの中にほっとした空気が流れる。

へえ……。

わりとすっかりしているんだなと思った。

さつき聞いたばかりの命ちゃん人物評に照らして、大門さんを見つめる。

自分の王国を作りたいのか。

それとも、本当にこのちっぽけな町の住民のために残ったのか。

それはわからなかったけれど、決断をする人というのは、こういう緊急時には頼りになるのは確かだ。

一方、傍らにいる小杉さんは、あいかかわらず影が薄い。

小杉さんは大門さんの存在感の前ではかすんでいるようだったけれど、その視線の先には、命ちゃんがいた。

うーん。視線の矢印を伸ばしてみると、白い太ももあたりになるんだよね。

ボクが見ているのに気づくと、すぐに視線を逸らした。

狭い部屋だから偶然かなとも思うけど、あの視線って——。

でも男だったら、多少はしかたないよねって思うし、ボクだってそう。誰だってそうだと思うちゃう。

そんなんじや甘いよって言われそうだけど。

そんなこんなで、みんなして午前中はDIYすることになった。

DIY！ DIY！

それは……『DO IT YOURSELF』を意味する。

日曜大工をおしゃれな感じに言い直した言葉だ。

「飯田さん。このベッドはこの位置でいいっすか」と恭治くん。

「ああ、うん。こっちの角度がいいかな」

男の人たちで重いものは運ぶ。

たぶん、ボクも筋力的には大人に匹敵するというか、大人を凌駕するとは思うんだけど、あまり変な力を見せびらかしてもしょうがないからね。

もくもくと小物を運んだよ。

ゴミ箱。ハンガー。小さなテレビ。

なんとテレビはまだ使えます。

ビックリすることにはまだに放送してました。

しかも国营放送だけじゃなくて民放もまだやってます。いくつか放送中止のところもあるけれど、テレ東がアニメやってて感動した。

ちなみに放送しているのは何年か前に再放送していたムーミンだった。

スナフキン……かっこいいよね。

「電気とか、ネットとか……テレビとか……いつまで持つのかな？」

ボクは命ちゃんに聞いてみた。

「そうですね。ネットで情報を収集する限りでは、なぜかゾンビは電波塔とか、発電所とか、そういったインフラに直結する施設にはあまり近づかないようです」

「ふうん。そうなんだ」

それってボクが――。

ボクという無意識が、そうでありたいと願っているからかな。

人間もまだ捨てたもんじやないというか。

人間の文化や文明に心惹かれているものがあって、壊したくないって思っているからかな。

「ただ、いくらゾンビがそういう施設に近づかないからといっても限度はあると思います。例えば、佐賀には原発がありますよね。原発

には当然それを動かすだけのエネルギーが必要なわけです」

「ウランだっけ」

「そうです。それらは輸入で頼ってるわけですけど、今後日本まで運ばれるとは思えません。したがって、燃料がなくなっていくずれは停止します。原発の場合は、早めに停止させないとメルトダウンなどの危険もありますし、管理が出来なくなる前に完全停止させるということも考えられます」

「うーん。具体的にはどのくらいで止まりそうなの？」

「二ヶ月ぐらいでしょうか」

「えー、そのくらいなの」

不満である。

遺憾の意を表明したい。

ボクの場合、インターネットがないと生きられない世代なんです。

今もスマホ持ち歩いてるし……、最近はお気に入りの動画製作者さんがいなくなったり、更新停止したりしてるのが微妙に哀しい。

「先輩の困り顔って、なんだか反則ですよね……もつとめちやくちやにしたくなるというか」

「やめてよ。そんな怖いこというの」

「怒った顔もかわいいとか反則」

なんだよ。ボクは反則のカタマリか。

「ほら、あんたたちもつと手を動かしなさいよ」

姫野さんが呆れたように声を出した。

誠にごもつともなことだったので、ボクたちは「はーい」といって、すぐに仕事を再開した。

しかし、なぜだろう。

ボクの部屋がお姫様みたいなレースつきベッドで占領されているのは。

命ちゃんを見ると、ニヤッと笑って「先輩にはお似合いです」と言われた。

はかったな。

はかったな。命ちゃん！

ハザードレベル15

ちよつとしたトラブルはエミちゃんの部屋で起こった。

エミちゃんは今、倉庫とも呼べる一番端っこにある部屋で、手足をベッドに拘束されている。

幸いと言つていいのかはわからないけれど、ロープには余裕がある。

短く結んでいるわけではないから、もしも動かそうと思えば、それなりに手足を動かせる。

もちろん、沈降する潜水艦のようにほとんど動かないエミちゃんにとっては、どちらでもよかったのかもしれないけれど。

ともかく、エミちゃんのお部屋を改装して、それなりに過ごしやすい状況に整え、執務室にいったん集合したあと、大門さんが言ったんだ。

「エミちゃんのお世話は、女性たちで頼む」

わからなくもない。

エミちゃんは客観的に見れば、下の世話も自分でできない要介護状態で、男たちが身体に触るのはいろいろとまずい。

たとえば小学生であつても、花もはじらう乙女なのだし、もしも人間状態に復帰したときにエミちゃんがかわいそうでもある。

それに恭治くんはお兄さんだからいいかもしれないけれど、男には男の仕事があるということらしい。

そのほとんどはここにこもっているよりも比較にならないほど危険な仕事。

ゾンビのいる外で、いろんなものを調達してきたりする仕事だ。

ボクにはほとんど危険度ゼロといつていいゾンビランドでの調達任務だけど、その任務が一般的にいつて引きこもりでいるより遥かに危険なのはわかるし、だから、エミちゃんのお世話くらいしろというのは、納得できるところだった。

けれど、そんな男側の理論に納得できない人がいた。

姫野さんだ。

「いやよ私は。どうしてゾンビに感染しているかもしれない子の面倒を見なきゃいけないわけ。やるなら恭治くんがやればいいじゃない」
「恭治くんは、外での調達任務の際に同行してもらおう。ここにいる時間よりも長くなるかもしれない。君達三人にやってもらおうのが効率がいいんだ」

「でもー」

「この組織に属している以上は、みんな働いていてもらう」

「私は私なりに働いているでしょ」

「それは十分に理解しているつもりだ」

大門さんは少しだけ言葉の速度を緩めた。

命ちゃんが視線を落とす。

んー。なんだろうこの空気。

よくわかんないけど、命ちゃんから悪感情が漏れているような気がする。

ボクには発達した後輩センサーが備わっているからね。素直でクールで、外見からはわからなくてもボクにはわかる。

命ちゃんから漏れ出ているのは、明確な否認の感情だ。

あるいは忌避に近いかな。

「ねえ。どうしたの？」

命ちゃんのブレザーの袖部分を引っ張り、小声でボクは尋ねた。

「たいしたことじゃないです」

「そうなの？」

命ちゃんが視線を移した先には、バックヤードに続く通路があつて、そこには不自然な形で物置が置かれている。

スチール製のそれなりの重さのがっしりしたつくり、高さは二メートル、横幅は三メートルはある巨大な物置だ。

もしかしたらセーフハウスかなとも思ったけど、どこにも逃げ場がない状況でゾンビに襲われたら逆に危ないと思っていた。

なんか変なところにおいてるなあと思ってたけど。

ふむ……わからん。

ちよつと逡巡。

「あそこは比較的遮音性が高いらしいです」

「へー」

……あれ？

遮音性が高い物置でおこなう姫野さんがしているお仕事って？

まさか、銃の整備とかじゃないだろうしな。

えーっと。

あ！（察し）

もしかして、それって、人類史上最も古い歴史を持つ例のあのお仕事のことじゃないだろうか。

べつにそれが悪いとかいいとか、この壊れた世界でいうつもりはないけど、命ちゃんとしてはその点については清純といたらよいのか、高校生らしい清らかな観念を持つてるみたいで、その結果、姫野さんへの嫌悪感に至ったということかな。男が同じように命ちゃんも欲望の対象にするということに、本能的に恐怖を感じてもおかしくはなく、姫野さんを通じて、その恐怖心や嫌悪感などのマイナスイメージが噴き出しているということなのかもしれない。

でも――。

姫野さんとしては、逆に命ちゃんのほうが怠惰に見えているということも考えられる。

だから『私は私なりに』という言葉が出たのだろう。

「姫野さん。オレからもお願いします。エミのことを見てやってください」

恭治くんが頭を下げた。

「私は私のできることをしてるつもり。でも、そんな私を拒絶したのはあなたじゃないの。ここにきた当初は幽霊みたいな顔をしてたくせに。私が励ましてあげたのを忘れたの？」

「励ましてくれたのは感謝してます。でも……、エミがゾンビになってるかもしれないのに、そんな気分にはなれなかっただけです」

「私はそれで傷ついたので。わからないの？」

女のプライドがってこと？

えっと、当時の状況つてのが見てないのでなんともいえないけれ

ど、おそらくエミちゃんと別れたあと、恭治くんとしては妹を見捨てた罪悪感から絶望してたんだろうなとは思う。

そんな状態で、姫野さんは『仕事』をしようとした。でも恭治くんはそんな気にはなれなかった。ただ精神的に励まされたのは確かで、恭治くんとしても強くはいえないとか、そんな状況かな。

「すみません」

恭治くんは再び頭を下げた。

みるみるうちに姫野さんの顔が不機嫌一色に染まる。

「あんたって本当に妹のことしか頭にならないシスコンなのね」

「もう残された家族はエミしかいないんすよ。わかってください」

「それは恭治くんの都合でしょ。妹をゾンビにしてしまつて。今度は周りも危険にさらすつもり？ 自分のやったことこの責任もとれないの？」

恭治くんは押し黙った。唇をかんで激情を我慢している。

姫野さんにしてみれば、優しさも仕事の一環だということなのかもしれない。

だから、その対価を支払えと言いたいのだろう。けれど、恭治くんが選ぶのは常にエミちゃんだ。

ボクとしては優しさって無償のものだと思うんだけど、姫野さんにとってはそうではないらしい。優しさの対価を踏み倒されたと感じているってことかな。狡知とまでは言えない分、命ちゃんが評したとおり、姫野さんは普通だ。

「ともかく——、これは命令だ」

結局、強権を発動したのは大門さんだった。

「このルールはオレだ。嫌なら出て行つてもらおう」

有無を言わせない口調に、姫野さんも押し黙った。

「姫野にもエミちゃんのお世話をしてもらう。いいな？」

「わかったわよ！」

隠し切れないほどの憤懣が見て取れた。

ギスギスするのは嫌なだけだね。

ボクとしては、やっぱりひとりのほうが気楽だと思うのは、こう

な。小さなスリットがあつて、そこを通すと紙の裏に糊が塗られるの。

あとは適当な大きさに切り分けた紙を貼り付けていけば完成。絨毯とかの汚れを取るようなごろごろするローラーと同じ形のやつで紙を押さえつけければ均等に貼り付けられる。

「でも……なんでピンクなんだろうなー。おかしいなあ。おかしいなあ」

この身体には似合ってるかもしれないけど、なんだか落ち着かない気分。

まあいずれは慣れるかな――。

いや、壁の色ぐらい気にははいけない。

しばらくはここがボクの部屋だと思えば、薄暗い中でもワクワクしてくる。調達されたノートパソコンで動画サイトとかは見れるし、ベッドも、お姫様みたいな感じであることを除けば、スプリングも効いていて気持ちいい。

怠惰だ。

ボクは怠惰になるんだ。

うーん。怠惰ですなあ。

ともかく、あんなギスギスしたやりとりとか、何が楽しいんだろうねと思つちやう。

そういつたりリスクを抱えてまで、人と関係を持つとうとするのが陽キャつてやつで、まあ関係の持ち方はいろいろあるんだろうけど。

命ちゃんなんて、完全シャツアウト系ですよ。

ボクに対してはスライムかっつていうほどベタベタしてくるけど、たぶん男という性別に対しては、ものすごく拒否ってる気がする。

いや――、人間自体が嫌いなのかな。

今は命ちゃんのこととは置いておこう。ちよつと疲れたからお昼寝するねつて言つて、自分の部屋に引きこもつたのは数分前の出来事。命ちゃんも添い寝するとか言ってきたけど、きつちり断りました。

今後のことを考えると、ボクがまつさきにしなきゃいけないのは、命ちゃんのことではない。飯田さんへのフォロワーだ。

どうやら大門さんのイメージでは男たちは外に行くということになっっているみたいだし、飯田さんだけ内向きの仕事ということも考えられないだろう。あんな動きの鈍い巨体の飯田さんがゾンビ避けというチートなしで生き残れるとも思えない。

だとすれば、ゾンビ避けスプレーを——といたいけれど、いま一度思い出してみよう。飯田さんといっしょに行動しているときは、ボクがその場にいるからこそ、ゾンビに直接命令してゾンビ避け状態を作り出していったんだ。

今後、ボクは女の子なので、飯田さんといっしょに行くことはない。したがって、ゾンビ避け状態を作り出せない。

もちろん、大雑把にこのエリアからゾンビいなくなれってすることはできるけど、それをやっちゃうと行く先々で、ことごとくゾンビに遭遇しないということになって、きわめて不自然な状態になる。

ボクは遠隔において、飯田さんを識別できなくてはならない。

そんな方法があるのか。——あるのです。

といっても、試してみようかな程度のレベルだけどね。

「……唾液でいけるかな」

ポケットティッシュの上に、唾を落としてみる。

どうだろう。感覚的にボクはその唾を感知できている。どこにあるのかかすかにわかる。反応としてはやっぱりちよつと弱いけど、一応、ボクはボクを感知できるらしい。

つまり、他のゾンビとは明確に違う存在として、ボクは

——ボクの一部

を感知できる。

ボクというキャリアが持つ、ゾンビ上位互換のウィルスは、ゾンビウィルスとは異なるものとして探知できるということだ。

でもやっぱり、唾ではダメだな。

まったくもって弱い。数十メートルも離れると感知できなくなりそうな弱々しさしかない。いずれ、ボクのゾンビ的能力がアップすればもうすこしわかるようになるかもしれないけれど、いまはダメ。

次に試したのは髪の毛。

どうやら普通に伸びてるっぽいボクの髪の毛。

ゾンビだからハゲたらそのままかと思ってたけど、そうじゃなくて安心した。

いくらでも生えてくるなら切っても問題ない。

その髪の毛の一本を引つ張つて取った。ちよつと痛くて涙目になつちやつた。

結構な長さを誇る髪の毛を机の上において、蛇のようにグルグルとぐるを巻かせてみる。

が、ダメ。

髪の毛つて、ほとんどがたんぱく質で出来ていて、唾液よりはボク的な何かを感じ取れたけど、あまり変わらないみたい。

そもそも命ちゃん髪の毛の毛で吸引するのもあまりよくない気がしていたけど、これくらい汚染率なら大丈夫かなと思う。

みんな感染しているんだし、ほんの数ミクロンほどゾンビ成分が増えたところで変わらない。

だとすれば、もうボクに試せるのはあと一つしかない。

先ほど壁紙を適当な大きさに切り分けたカッターナイフ。その刃を一枚折つて、新しい刃にする。

はあ~~~~~。緊張する。

でも、そうしないよね。

ボクつてゾンビ化してから、一度も血を出していないけど、まさか緑色になってたりしないよね。

それはさすがに杞憂だった。

ボクの指先からしたたる血は人間だったときのまま赤い色をしていて、ポタポタとティッシュを染めていく。

濃密に感じるボクという気配。

わかるね。これだったら余裕でわかる。

そして取り出したるはお家から持ってきた何の変哲もない厄除けのお守り。

その袋の中に、血染めのティッシュを無理やり詰めこむ。

お守りの中を覗く人はいないだろうし、これでいいだろう。

できあがりです。
ちなみに切った箇所は数分もすれば血が止まっていた。
傷跡すらない。いつのまにやら再生能力持ちになっていたらしい。
まあ指先をちよつと切ったぐらいですからね。
どの程度の再生能力なのかはわからないけど。

☆Ⅱ

「飯田さん」

二時間ほどお昼寝したあと、ボクは飯田さんのお部屋を訪ねた。

「は、はい！ どうぞー」

ドアをノックしただけで、驚いた声を出す飯田さん。

見慣れない部屋で急にノックされたら驚くよね。

飯田さんの部屋は飯田さんの趣味でというか、指示で机がドアと逆方向に置かれている。誰が来たのかわからない作りになっていて、少し不安なんじゃないかと思うけど、この配置が一番逃げやすいから好みなのらしい。

それでボクがドアを開いたら、必然的に飯田さんの背中が目に入る。

椅子がぐるりと回転し、わずかに横になったときに、閉められつつあったノートパソコンの画面が目に入る。

たったコンマ数秒の出来事。

でも、ボクの強化された目は、微速度撮影のようにパソコンの画面を捉えていた。

見慣れた名前。

ボクに馴染みの深い名前。

検索エンジンで入力されていたのは『夜月緋色』の名前だ。

えっと、なんでボクの名前？

エゴサーチしたことすらないのに!?

ボクってやっぱり飯田さんに狙われてるの？

「ごー」

「な、なんだいい緋色ちゃん。突然きてジト目でにらんでくるなんて、なんのご褒美なんだろう」

「いま……ボクの名前を調べてませんでした?」

「え? あんな一瞬で……」

「ボク、そういうのはわかるんです」

「あ、ああ……もしかして瞬間記憶能力ってやつかな」

「ふえ? あ、うん。そんな感じのです」

瞬間記憶能力って、確かパッと見た記憶を、つぶさに覚えている能力のことですよ。そんな能力ないよ。

ボクってべつに頭の回転は普通だからね。

でも、飯田さんが納得顔をしていたんで、そのままうなずいてしまった。

「ごめんね。緋色ちゃん。勝手に調べちゃって」

「べつにいいですけど」

そもそも、ボクはただの平凡な大学生なんで、ググっても何もでないし。

「調べたのは、さつき命ちゃんが言ってたでしょ。緋色先輩って」

「んにゅ……」

恥ずかしいな。

やっぱり聞いてたんだ。

「それで思ったんだよ。緋色先輩って言われるぐらいだから、緋色ちゃんは命ちゃんの先輩にあたる人物。つまり、外国から留学してきた天才小学生、その実、大学生なんじゃないかってね」

確かに——、今のボクの容姿はプラチナブロンドで、赤いおめめのどこからどう見ても日本人ではない配色をしている。

でも、れっきとした日本人です。

なんてことは言えるはずもなく、「そうですー」と適当にお茶をにこすことにした。

「やっぱりそうなのか。で、ウイルス研究とか生物学研究なんかしちゃってるんじゃない?」

「え?」

「ゾンビ避けスプレーなんてものを開発できるなんて、偶然にしてもできすぎている。これは、おそらくその道のプロだと思ったんだよ……」

「はあ。そうですか」

偶然ゾンビマスターになっただけの、平凡な大学生なんですけど。

まあ、ガチャ運はよかったよね。ゾンビガチャで最高レアを引き当てたって意味では。

「残念ながら名前は見つからなかったけど、まだ年齢が年齢だし、どこかの研究機関の秘蔵っ子とかだったのかな」

「……そんな感じですよ」

いちいち否定するのも面倒くさい。

なんか目をキラキラさせてボクを見てくる飯田さんを見ると、夢を壊すのもかわいそうかなと思ったりした。

それに、この壊れた世界で、誰がどんな所属だったかなんてあまり意味のないことだ。飯田さんが、コンビニのバイト戦士であることも、同じように等価に意味がない。

そもそも――、

死ねば――。

死んでしまえば、みんな、『ボク』だ。

だから、いっしょだ。

「そうだ。飯田さん。ボク、新しい研究結果を発表いたします」

「えっと、何かな」

「飯田さんが今後外に行くときに、わざわざ一日一回スプレーしないで済むようにしました」

「おお……それはいい」

「これです」

ボクが飯田さんに見せたのは、さつき作ったお守りだ。

手渡しすると、飯田さんはブルブルと震えるほど感動していた。

「女の子に初めてプレゼントをもらっちゃった……。どうしよう。うれしすぎてもう死んでもいい」

「あの……死なないでください」

それからゾンビ避けお守りの効用を説明する。

ゾンビ避けお守り。その中に入っているのは当然ボクの血なのだけど、そんなことは知るよしはない。主成分は同じくゾンビ避けスプレーだと言っておく。

ただ、その拡散をごくごく抑えたつくりは、一ヶ月程度は持つだろうと述べた。

もちろん、補充はボクしかできないことにしておく。

「大事にしてね」

「ありがとう。緋色ちゃん」

「じゃあ」

言ってボクは自分の部屋に戻ろうとする。

「あ、ちよつと待って」

「うん？」

「このゾンビ避けお守りなんだけど、みんなの分は作れないのかな」

「それは必然的にボクが作ったものがゾンビを避ける効力があると知らしめてしまうことになりますけど……」

「そうだね……。それは困るよね。でも、ここの人たちはそんなに悪い人じゃないんじゃないかな。善良な人たちなんじゃないかなとも思うんだ」

「……さつきはわりとギスギスしてましたけど」

「そりゃ人間だから、そういうこともあるだろうけど、別に強いて傷つきあいたくて、そうしているわけじゃないと思うんだ」

「うーん。考えておきます。飯田さんもバレないように気をつけてくださいいね」

飯田さんの考えもわかるんだけど、下手すると、ボクってゾンビの中枢扱いされちゃう可能性もあるからね。

ゾンビ避けスプレーとかゾンビ避けお守りとかいろいろ飯田さんにあげてるけど、それは最初に飯田さんにあげようって決めたから、ボクなりの責任を貫いているだけだ。

まあ裏側の思考も少しいれるとすれば、飯田さんには既にバレているのだから、このままゾンビ避けスプレーなりを与えないということ

になると、飯田さんがみんなにバラすってこともなくはないと思っ
ている。

いやなこと考えてるなあボク。

飯田さんはおそらくはいい人なので、これまで見てきた限りでは、
ボクのこととも考えてくれているとは思う。

でも、そのいい人っていうのは、誰に対しても比較的平等にいい人
なんだよな。

だって、その根本にあるのは

——誰かを傷つける『自分』が怖いから。

なのだから。

だから、いい人ムーブとしてボクひとりを傷つける状況とみんなを
傷つける状況が折り重なったとき、どちらを選択するかまではわから
ない。

さっきのように、みんなにお守りを配ってほしいという考えにい
たってもおかしくはない。

まあそうなったらそうなったらでやむをえないか。

ボクはボクなりの主義を貫くだけだ。

自分のやったことの責任をとりつつ、命ちゃんやエミちゃんを助け
ようと思う。飯田さんはその次くらいというのが偽らざるボクの本
音。

ハザードレベル16

ホームセンターに来てから数日が経過していた。

「でさー。雄大聞いてよ。命ちゃん、ボクが着替えてるのにわざわざ部屋の中に入ってくるんだよ。おかしいでしょ」

「小学生くらいの時はよくそうしてたよな。たぶん、緋色のことを頼りにしてるんじゃないか」

ボクは雄大に電話をかけている。

命ちゃんの無事を聞いて、当然、雄大は喜んだ。

かわいい妹分なのは雄大にとっても同じで、最初から気にかけてたからな。

ボクといっしょにしていると聞いて、安心した面もあるんだと思う。

客観的には頼りないことこの上ないボクだけれども、でも雄大はボクのことを信頼してくれているんだ。

それがたまらなくうれしい。うれしい！　うれしいくくくくくっ！

雄大って本当に心が大きいやつだな。

そんな雄大はいま南下しつつあるみたいだけど、まだ北海道内みたい。

「命のこと、守ってやってくれよな」

「なにその死亡フラグみたいなの。危なくなる前にボクに電話してよね」

「お。オレがゾンビに囲まれたら、緋色がどうにかしてくれるのか」

「うん。なんでもするよ……。ボクにできることなら」

「ん。いま、なんでもするって」

「え？　なに？　吹雪いててよく聞こえない」

「ごほんごほん。なんでもない。おまえさ、なんか命よりも声かわいくねえか。そのスマホが壊れているかと思えば、命の声はそのままだったし。どういうトリックだよ」

「え、そうかな。気のせいだよ。きつと佐賀ランドの暑い気候と北海道の寒い気候が対消滅してメドローアなんだと思うよ」

「わけわかんねーけど、そういうことにしとくか……。じゃあまたな」
「うん♪」

いけないいけない。なぜか少女っぽく語尾に音符をつけてたぞ。
声がはねまくってて、まるで恋する少女のようだった。

でも、雄大にはボクが女の子になっているって言えてないんだよな。命ちゃんにはスマホを貸して、雄大と連絡をとってもらったけど、言わないでおいでくれるようお願いしてしまった。

なぜと言われてもよくわからない。

たぶん、自分の口から言うのが怖かったんだ。

徹底的変化――。

そう言っても過言ではないほど、ボクの身体は細胞ひとつとっても前とは異なる。ボク自身でさえも、ボクがボクであると同定できない。

もちろん、記憶の連続性とかはあるんだけどさ。

でも、推定ゾンビだしね……。

キスもできない身体なわけだし……。

はあ。

まあいい。気を取り直して今日も一日がんばるぞい。

☆Ⅱ

「今日はスーパーに遠征に行こうと思う」

大門さんがいよいよ告げた。

飯田さんの身体に緊張が走る。お守りは長い紐をつけて首からペ
ンダントのようにさげてもらっている。

「今日は――、飯田くんの動きをみたい。なので、オレと恭治くん、こ
の三人で向かいたい。小杉は留守を頼む。女性陣を守ってくれ」
「はい」「わかりました」「わかりました」

恭治くんと飯田さん、そしてワントンポ遅れて小杉さんが声を出
す。飯田さんはゾンビ避け効果を知っているけれど、やっぱり怖い
か、声が若干震えていた。

「まず、武器だが隠密製の高い消音ピストルを三丁用意した。いざと言うときのために、ショットガンとマシンガンも車に積んではいるが、緊急時以外は使うなよ」

ガンアクションとかでよく使うような腰巻きをあたふたと腰に巻く。胴まわりが大きいせいで苦労していたみただけで、飛行機のシートベルトのようになんか調整が利く様だ。

恭治くんが手伝って、なんとか装着。

その中に消音ピストルを入れた。なんだか筒みたいな装置が先っぽのところについていて、かなり銃身が長くなっている。たぶんその装置で音を殺すんだろう。潜入もののゲームとかだったら、わりと定番のシャルダンファってやつじゃないかな。より一般的な言い方をすれば、サプレッサーという言い方のほうがわかりやすいか。

ズシリとした重みに飯田さんの手が少し震えているみいだった。「弾がなくなったらどうするんです?」

飯田さんが怯えたように確認する。

「ゾンビに接近するのは愚の骨頂だが、確かに接近戦用の武器も必要だな。それについては、伝統的な武器を使う」

丸太かなって思ったら違った。

よくある鉄パイプを斜めに切り落とした簡易的な槍だ。

これならもし壊れてもいくらでも作れるというところが強みなんだろうと思う。

恭治くんの場合は、鉄製のバットも使ってるみたいだけど、ゾンビの頭をぶつたときまくってるせいかな、少し曲がっているような気がする。

「本来なら銃の練習もさせてやりたいところだが、あいにく弾がもつたない。飯田くんも使いどころは考えてくれ」

「わかりました」

外は、いつのまにやらゾンビが溢れていた。

ちよつと精神的に疲れてたら、すぐにコントロールからはずれちゃうから精進しないとね。まあこれはずっとゾンビがない状態を続けるのも不自然だったからちよつどいいんだと思う。

ゾンビは溢れているといっても、びっしり壁にくっつくほどの多さではなかった。

二箇所のバリケードにはゾンビ数匹程度かたまっている。それぐらいだ。子どものように腕を前につき伸ばして、車の天井部分をバンバン叩いている。登りたいみたいだけど、どうあがいてもゾンビには無理だ。

大門さんも恭治くんも慌てていないから、これくらいなら余裕があるんだろう。

「表のバリケードのところに溜まっているゾンビはどうするんですか？」

と、ボクは聞いた。

「おびき寄せ作戦を使おう」

|||||

おびき寄せ戦法

映画『ゾンビ』においては、ショッピングセンターの透明な強化ガラスの前でわざと音を出して、ゾンビをおびき寄せる場面がある。ゾンビは人間の出す音や姿におびき出される本能を持つため、一般的には罨を見破れずひきつけられる。もちろんおびき寄せる方は、バリケードなどで安全を確保した上でなければ危険である。

|||||

ボクたちは、車のバリケードの前で、ヒヤッハーしていた。

料理とかで使うお玉で、フライパンを叩く命ちゃん。

車をバンバン叩く恭治くん。その場で手を打ち鳴らす飯田さん。

姫野さんはやる気がなさそうに後ろのほうで腕を組んでいた。小杉さんも今日は外出ではないので、やる気がないみたい。

あ。小杉さんがボクに近づいてきて、なにやら手渡した。
なにこれ？

「防犯ブザー。君に似合ってると思って……」

自分で使えばいいんじゃないでしょうか。

うけど」

「いざというときに動けるかどうか。他人を助けようとするか。それとも自分の身を守ることを優先するか。そういった意味での行動パターンを見たいんだと思います」

「そっか」

「緋色先輩……緋色ちゃんとしてはどうですか？」

「飯田さんについて？」

「そうです。私は飯田さんに会ったばかりですし、緋色ちゃんの意見が聞きたいです」

「うーん。人が襲われているときにどういう動きをするかまではわからないかな。でも、自分に対する自己評価が低すぎるから、自分を守るという意識も薄いかもしれない」

「そうですか」

「あと、ロリコン」

「は？」

「あ、いや、ロリコンというか小さな女の子が好きっていうか。あ、大丈夫だよ。命ちゃんの年齢は対象外みたいだから。小学生の高学年くらいの女の子が好きなだけだからね」

「ほおう……素敵な趣味をお持ちのようですね」

その瞬間、命ちゃんの雰囲気が変わった。

絶対零度の眼差しでボクを睨んでくる。

正確にはボクを通して、今はここにいない飯田さんを。

ヤバイ。

なんだか知らないけれど、めちやくちや怒ってるみたいだ。

「緋色先輩」

「はい」

「飯田さんに何か変なことされてませんよね」

「大丈夫だよ。ちよつと襲われかけたくらいだし」

「襲われかけた？」

「あ、違う。ぜんぜん違う。ボクのことをゾンビだと勘違いしてただけ」

「ふうん。緋色先輩のことをゾンビだと思って襲うって、それってゾンビな小学生が好きってことですか」

「あー、うん。ちよつと違うような気がするよ……」
「おかしいな。」

言葉を紡げば紡ぐほど、飯田さんの立場が悪くなっている気がする。

命ちゃんの視線が突き刺さるようで痛い。

「緋色先輩は、自分がか弱い女の子になってるって自覚してください」「うん。わかったよ。そうする」

命ちゃんはボクのことか心配だったみたい。

ボクとしても、男の人にいいようにされるのは嫌だし、そこは自覚しているつもりだ。

「ところで」氷のような言葉だった。「襲われかけたって、どこまで？」

「あの……べつにたいしたことじゃないんだよ？」

「どこまでです？」

「おへそ見られたかなー」

「へえ……面白いですね。ほかには？」

「えつと……、足を舐められたかな。あ、違うかな。ちよびつと。ちよびつとだけだよ。ぜんぜん大丈夫だから」

「実に楽しそうなアトラクションですね」

「あはは。でもボクのことをゾンビだと思ってたみたいだし、悪気はなかったみたいなんだよ」

「舐められすぎです」

え？

と思ったら、命ちゃんは捕食者の素早い動きで、ボクの背後に回りこんでいた。催眠術とか超スピードとか、そんな動きじゃなかった。

ほっぺたのあたりに、生ぬるい感触。

な、舐められ。

ボク舐められちゃってるくくくつ!!!

この日。

ボクは後輩の美少女に舐められてしまいました。

物理的な意味で……。

「先輩って。無防備すぎるんですよね」

「あう。命ちゃん。やめてよ〜」

ほっぺたのあたりに変な感触がして、心の奥底がざわざわする。

「そんな感じだと、この先どうなるかわかりませんよ。みんなギリギリのところで一線を保ってるんです。タガがはずれたらどうなるかわかりません」

「それはそうかもしれないけど……」

「私だって、タガがはずれたら、緋色先輩になにするかわかりません」

「ひえ……」

「ナニするかわかりません」

なんで言い直したの？

「やだーっ！」

命ちゃんが一番危険だと思いました。

☆
||

女子勢の仕事はわりと忙しい。

家庭内の専業主婦の働きっぷりを給料に換算したら、案外サラリーマンと同じ程度は働いているという見解があったように思う。

ボクは姫野さんとともに、料理を作っていた。

お昼ご飯はミートソースを使ったスパゲティ。缶詰製品だけど、一度フライパンで暖めなおすと立派な手作りに早代わりする。

ちなみに、命ちゃんのほうはみんなの服を洗濯している。

洗濯は豪華にもドラム型の洗濯機を何台も利用している。乾かすのはさすがにゾンビがいる屋外は怖いので、屋内で除湿機を使ってるらしい。電気はいまのうちは使いまくりOKだから、三台くらい使って一気におこなってるみたい。

「緋色ちゃんって、学校の授業で料理とかしたことないの？」

「ふえ。えっと、その……はい」

なんだ。なにが悪かったんだ。

——スパゲティをあたためなおす。

それだけでなんの違いがあるというのだろう。

「フライパンの持ち方とか、長箸の使い方とか、てんでなっちやいないわ」

「えー。そうですか」

「そんなんじや、誰も振り向いてくれないわよ。女子力ひくひくすぎ」

「女子力ひくひく……」

なぜだろう。ボクの中の何かがダメージを受けている。

「でも、た……大切なのは愛情だし」

「男が愛情だけで振り向いてくれると思ってるの?」

「う……」

なぜか雄大の優しい笑顔が脳内に展開されてしまう。

違う。違うよ。ボクは男だし。関係ないし。

「精進します……」

ある意味、女子力マックスな姫野さんに、女の子レベル1のボクが敵うはずもない。頭を垂れて、敗北を告げるほかない。

「そう。じゃあ、あとはお願いね」

出来上がったスパゲティの皿をボクに渡す姫野さん。

エミちゃんのお世話はボクと命ちゃんと姫野さんの三人で当番になったけど、姫野さんとしてはあまり世話はしたくないようだ。

少なくとも今のところはボクに任せたいらしい。

とはいえ——、完全に放り投げているというわけでもなく、こうして料理とか洗濯とか、あるいは姫野さんしかしていない『仕事』とか、そういう意味では、彼女は彼女なりの精一杯をおこなっている。

ボクとしても、エミちゃんのこととは一番の気がかりであるし、ボクはエミちゃんの行く末がとても気になってるから、否やはない。

お皿を受け取り、エミちゃんの部屋に向かった。

エミちゃんは部屋の中でおとなしくしている。ほとんどベッドの上で、じつと寝たきり状態だ。ただ、時折思い出したかのように恭治くんのことを呼んだりする。「うーん。だいぶん、食べるようになったかな?」正直なところ、スパゲティはかなり難易度が高い。姫野さんはそのあたりの女子力も高くて、あえてぶつ切りにしている。

数センチほどに刻んでいるんだ。

なんでと思ったけど、こうして実際にエミちゃんに食べさせる際にはよくわかる。長いままだと絶対に口元からこぼれる。

だから、一口サイズがよかったんだ。

気づかなかったなあ――。

これは優しさかな。

それとも効率を求めてるだけなのかな。

エミちゃんとはできる限り接触したくないと思っている姫野さんは、ごくごく普通の感性の持ち主だと思う。

他人に共感するから、自分が痛いように相手が痛いと思って、優しくできる。

他人に共感するから、自分が痛いように相手が痛いと思って、残酷になれる。

実は、同じベクトル。

だから、ボクは結果しかみない。

少なくとも、ボクも命ちゃんもエミちゃんも困っていない。

「今のところはね」

「あ……」

「ん。どうしたのエミちゃん。お水飲みたい?」

「あ……り……が……と」

びっくりした。

エミちゃんが始めて感情を伝達したから。

それも、ボクに対して、感謝の気持ち。

ボクには子どもがいらないし、子どもを育てた覚えもないけれど、も

しかすると、子どもがいちばん最初に言葉を発したときの親の気持ちって、こんな感じなのかもしれない。

おなかの裏側あたりが、太陽で照らされたみたいにあつたかくなつて、いろんな人間のごちやごちやした感情が洗い流されていく感じがする。

すごい。人間って、こんなにすごいんだ！

感動して鳥肌が立っちゃった。

「命ちゃん。ちよつと来てー！ エミちゃんがすごいんだよ！」

ボクは命ちゃんの名前を呼んだ。

でも、数秒待っても誰も来なかった。あれ？ 変だね。

今のボクの声って、ホームセンター内に十分響き渡ったと思うんだけど。

いくら、隔離されている部屋の中とはいえ、パーテーションは天井まで開いているわけじゃない。

つまり、上のほうは空間が開いているわけで、声をあげれば必然響き渡る。

でも、誰も来ない。

姫野さんは、エミちゃんのお世話を怖がってるから来ないとして、どうして命ちゃんは来ないんだろう。

もしかして、お手洗い？

とりあえず、ボクは扉を開けて外に出てみた。

☆
☆

ボクはエミちゃんの部屋からそつと顔を出した。

ホームセンターの中には、今ボクとエミちゃん以外には、小杉さんと、姫野さんと命ちゃんがいる。

人間の位置関係はボクにはわからない。

でも、ほとんど人外の域に達しつつある聴力は、なんとなくだけで、みんなの位置を掴んでいた。

「えつと……、こつちかな」

命ちゃんの位置は、ちょうど執務室を抜けたバックヤードのあたり。いくつかある製品棚どうしに細長い紐を通して、洗濯干しをしているあたりだ。

ふたりの会話を拾いながら、そちらに近づいていく。

★
||

私、神崎命は洗い終わった洗濯物を紐にかけていた。

特に大変なのはシート。腕をピンと伸ばして、結構な高さに張つてある紐に、シートをかぶせていくのはとても骨が折れる。

それに比べれば、男もののパンツもシャツもべつにどうとも思わない。

それは単なる物体に過ぎないから。

昔のドイツの非道な実験で、誰かが言ったらしいが、人間は物質としてはせいぜい石鹼程度の役割しか果たせないらしい。

私もそう思う。

人間は物質としては、その程度の役割しか果たせない。

人間が人間として価値があるのは、誰かのために生きることによってだと思ふ。

つまり、物質としての人間ではなく、心とか、魂とか言われているものだ。

人は心を誰かに捧げることによって、初めて人になれるんだろうと思ふ。

それが私にとっては緋色先輩……、緋色お兄ちゃんだった。

かわいらしくなってしまう緋色お兄ちゃんのことを思う。お兄ちゃんは女の子になっちゃった。それでも、べつにかまわない。私はお兄ちゃんの物質に心惹かれたわけではないから。

あ、でも今のお兄ちゃんなら、いろいろ蹂躪できるかもしれない。手足を縛って、どこかに閉じ込めておいて、一生飼いつづけるっていうのはどうだろう。光の届かない暗い部屋の中で、娯楽も何もないと

ころに閉じこめ続けて気が狂いそうになったときに、私が手を差し伸べる。でも出してやらない。出してやらないけど、私だけがそのときだけは唯一の刺激だから、お兄ちゃんも閉じ込めた私のことが怖くてたまらないはずだけど、でもその恐怖の女王にすぎないの。いなくならないで命ちゃんってさすがに泣くよ。ああ素敵だ。五カ年計画で着実に進めよう。雄兄ちゃんには絶対に渡さない。絶対に。絶対にだ！

「あの……、命ちゃん」

突然、声をかけられた。

その声が、小杉さんのものだと気づき、私は反射的に身を硬くした。その場で振り向くと、ひよろ長い男が立っていて、その視線が私の胸や顔を見まわしているのを感じる。蛇のはいずるような感覚。

全身を放射能にさらしているような不気味な感覚に、ますます身体中の筋肉が硬くなっていくのを感じる。

ひとつ、小さなため息。

いや、ため息とさえいえないほどの小さな呼吸だ。

——男の視線が嫌。

それは単なる感性だから。

それを理由に拒絶はできない。

ただ、どうしても抑えることのできない体性感覚。

私は中学生の頃に、クラスの男にレイプされたことがある。

それは当然のことながら小杉さんではない。いくら視線がいやらしく感じたとしても、ただそれだけで断罪する理由にはならない。

男というカテゴリーを、アナロジとして展開すべきではない。

私というカテゴリーを、アノマリーとして展開すべきではない。

だから聞いた。

「なんの用ですか？」

私は自分の声が硬くなっているのを感じた。

ハザードレベル17

私——神埼命はシンプルな生き方を心がけている。

人間という存在は、物質としては炭素ユニットに過ぎないが、その心的な作用は複雑だ。

例えば立場。

例えば地位。

例えば縁故。

例えば本能。

例えば性癖。

例えば格律。

例えば感性。

様々な要因が重なり、行動の因果連鎖が起こる。行動の定量的な推測は、たとえ高度なAIであっても完全に予想することはできず、常に一定以上のバッファが必要になるだろう。

別に誰だってそうだろうが、他人の行動というのは偶^{コンティンジェンシー}発^性性に位置するということだ。より簡単に言えば予想がつかないということだ。

したがって、他人との接触は常にリスクになる。

このようなりスクに対処するためには、どのような生存戦略が一番適しているだろうか。私が採用しているシンプルな戦略は、人間を定義づけるということだ。色分けをして、白か黒か最初から判別してしまえばいい。

つまり、

——敵か、そうでないか。

小杉さんは、洗濯場の向こう側からやってきた。

ここは、両側が商品棚にふさがれていて、後方にはバックヤードに続く通路しかない。執務室にはいま誰もいないから、必然的に自分の部屋に戻るためには、小杉さんがいる通路側を通るのが最短になる。

執務室をいったん経由するという方法もあるが、それはきわめて不自然な後退であり、その行動自体が、彼を避けているという評価をさ

れてしまう。

わずか数メートル横を通り過ぎた方がいいか。

しかし、小杉さんの視線を見たときに、その距離感はリスクであると感じた。

いずれにしろ、私は「なんの用ですか」と聞いている。ボールは向こう側にある。投げ返されるのか。無視するのか。しかし、何かしらの会話と交渉を相手は望んでいるとみるべきだろう。

「あのさ……命ちゃんは緋色ちゃんの知り合い、なんだよね？」

小杉さんが確認するように聞いてきた。

「そうですよ」

べつに否定することでもない。

緋色先輩が、なぜか女の子になっていたとか、そういう奇妙な状況ではあるものの、それは今回の主題ではないだろう。

「君は、緋色ちゃんのお姉さんなの？」

「お姉さん……」

緋色先輩に、お姉ちゃんと言われる場面を想像する。

めっちゃイイ……。

あの庇護本能を刺激しまくる小さな身体で、『命お姉ちゃん』とか言われたら数秒で撃沈してしまう。ギューってしがみついてきて、お姉ちゃんボクにかまっつてとか言ってきたら、もうだめだ。無限にかまっつてしまいそう。

「命ちゃん？」

「あ……、そうですね。お姉さんというのはちよつと違いますが、小さな頃からの知り合いですよ」

「ふうん。そうなんだ」

小杉さんは小さく口の中でもごもごと呟いている。

何を考えているかわからない。この人は特に予想がつかない人だと思う。他の人に比べて、合理的でありすぎるのだろうか。

私と同じタイプだから、よくわかる。

つまるところ、単純な同属嫌悪である可能性もあるのだ。

慎重になりすぎなのかもしれない。

そう思つて、できるだけ軽い声を出す。

「いいですか？ 洗濯が終わつたんで、お部屋に帰りたんですけど」

「ああ……、べつにいいんだけどね」

淡々と。

「こんなことは言いたくないんだけど」

地面を見ながら、彼は言う。

こんなこと言いたくない？ それは『世間』がこう言ってるからという、私の血縁の言い分とまったく同じだ。

頭の中に冷たい焔がぶつ刺さつたような感覚に、自然、彼を睨みつけるような視線になる。一瞬、そうならないようにコントロールしなければという自省の念が湧いたが――、

「君たちはコミュニケーションに負担をかけすぎていると思わないかな……」

言い放たれた言葉に、そんなのは一ミクロンも配合すべきではないと考え直した。

「どういう、意味ですか？」

「君が庇護しているといつていい緋色ちゃんだけど、小学生の女の子ができることは限られるよね。そして緋色ちゃんが連れてきたエミちゃんなんか自分のことすらできないじゃないか」

「だから？」

「保護者じゃないの？ 君は」

「保護者でもいいですよ。だから何が言いたいんです？」

肩をすくめるような動作。

猫背でひよろ長い彼がそのような動作をすると、大きく動いて見えた。

丸められた身体から頭だけがこちらを向く。

ねぼつくような視線と目が合う。

「子どもの責任は親の責任だよ。それぐらいはわかるよね。君は親じゃないけど、こんな状況だ。緋色ちゃんやエミちゃんの行く末は君次第ってことになる」

「私なりに精一杯守るつもりです」

そう——どんな姿であれ、緋色先輩は私の味方だ。
ずっと昔から、ずっとずっと昔から。

複雑すぎた中学、高校時代からずっと変わらない、私にとっての真理に近い。

「どうやって守るのかな。いや、別に君が何もしていないというつもりはないよ。怪我している足で、料理や洗濯とか、君なりの精一杯をやってきたことは、理解しているつもりだ」

いまやすっかり根暗の擬態を投げ捨てて、有害な正義を彼は語っている。

「貢献が足りないって言いたいんですか」

「わかっているじゃないか」

敵——。

私の中で、小杉は敵になった。

すでに、冷静に戦力分析をしている。もしも、無理やり迫ってきたらどうするべきだろうか。横にあるバラ売りされている釘を投げつける？

考えながらも応答する。そうやって時間を稼ぐしかない。

「どうやって貢献しろって言いたいんです」

「わからないかな。姫野さんだっけしていることだよ……」

「大門さんは、そういうことに關して、無理を強いるような人ではないでしょう。あの『仕事』は姫野さんが自分でやりたいと言ったからやっただけです」

そう、これは小杉の独断だろう。

なぜなら、大門さんがいないときを狙って、わざわざ言ってきたからだ。

もしかすると、姫野さんがそういうことを始めたのも、小杉が何かそそのかしたのかもしれない。

「そういう言い方はよくないんじゃないかな。大門さんはこのコミュニティのリーダーだから、いろいろと大きな決断をしなければならぬ。瑣末なことは、僕みたいな参謀がやらないとね」

瑣末とききたか。

よりもよって、乙女の貞操を瑣末と――。

「こんなときだし――、コミュニケーションの存続のためには、みんなが一丸とならなくちゃいけないと思うんだよ」

「一丸と、ね……」

だから、身も心もひとつになろうって？

むしろ直球で、『性欲をもてあましているんで相手をしてくれ』と依頼されたほうがマシだと思った。

小杉の言い分はどこまでも独りよがりだが、どこまでも他人のせいになっている。社会のせいになっている。社会がそういうから。そういう世相だから。

だから、乙女の貞操など捨ててしまおうのが正しい。

そう言いたいらしい。

その粘着質的な論理構成が、気持ち悪いことこの上ない。

一步。ゆっくりとした歩調で、小杉が前に出る。

私も一步後退する。

足を怪我している私は、すぐに追いつかれてしまうだろう。

でも、生理的な嫌悪感から、いますぐにでも逃げたがっている。

「あなたとは一秒もいっしょにいたくありません」

「考えなおしてくれないかな……。一応、言っておくけど、このホームセンターの店長は僕なんだよ」

取り澄ました口調で言う小杉に、私はあきれていた。

ここは僕んだぞって？

僕の温情で住まわしてやってるんだからいうこと聞けって？

あまりにもバカさ加減に、自分もつられて頭が悪くなってくる気がする。

「こんな世界になったのに。所有権を主張するつもりですか？」

「そんなことは言っていない。ただ、人間らしくありたいと思ってるなら、周りのことをもっと考えたほうがいい。他人のことをね……」

「おことわりします」

「ただ飯喰らいを二人も抱えてるのに、悪いと思わないのかな？」

「ふ……ふふふ」

よりもよって、あの緋色先輩を——、そして物言えぬ辛い目にあつたエミちゃんを、ただ飯喰らい扱い。

あまりにも稚拙で独りよがりな表現に、逆に笑えてきた。

「なにがおかしい」

「いや……、いままでのやり取りは全部冗談だったということにしてあげようと思ひまして——」

小杉のタガはずれかかっていたが、いまだ肉体的にどうこうしようという気配はない。あくまで、自発的に身体を提供させようとしている。

この倫理も法律も崩壊した世界においての最後の一線。

それを——、踏み越えたら、人として終わりだ。

だから、その最後の機会を私は提供した。

小杉はまた一步近づく。

「冗談……なんかじゃない。こんな……、クソみたいな世界になつても、僕は大門さんにもこのホームセンターを拠出した！ 食糧だつて分け与えた！ みんなが住む場所を提供している！ 君は——、君はズルいじゃないか！」

襲われる——。

と思つた瞬間。

「どうしたの？」

緋色先輩のノンビリした声が聞こえた。

☆
||

殺意——。

ボク自身が襲われかけたときですら抱かなかつた、高濃度の黒いかたまりのような感情が、内面から湧きあがつて来るのを感じる。

殺してしまおうか。

ほんの、わずかな刺激で、動作で、そちらに傾くほどに感情のバランスがとれていない。小杉さんの背中が、この視界に入れてはいけな
いもののように感じる。

キタナイ肉のかたまりが、なにやらわめいている。命ちゃんが自分の恐怖心を押し殺しているのを感じる。

振り返った小杉さんの顔は、よくわからない激情でむちゃくちゃに歪み、暗いホームセンター内で、不気味な怪物のように見えた。でも。

まだ——、そう、まだ命ちゃんが対話している。

最後まで言葉を交わそうとしている状況であるならば、最後の一線を、小杉さんはまだ踏み越えていないと、判断すべきだろう。

言葉を交わそうとする限りは。

その言葉がいくら正義という仮面をまとまった悪意であったとしても。

有害な正しさを精液のように顔に塗りたくられたとしても——。まだ許してあげる。

「どうしたの？」

ボクはあえて間延びした声を出した。

小杉さんと命ちゃんの会話内容は全部聞こえていたけれど、あえてだ。

人間の怒り、激情、緊張は、実をいうと十秒程度しか持たない。

ボクが、ゆつくりと、時間をたっぷりかけて「どうしたの？」と問えば、それに答える間に、時間は経過する。

小杉さんが、「あ、いや……なんでも」と、小さな声になるのは早かった。

「ふうん。そう……、あ、命ちゃん。エミちゃんがすごいんだよ。来て！」

ボクは命ちゃんの手を引っ張って、子どもムーブ全開で、洗濯場を後にする。

命ちゃんの手が震えていた。

あとで殺そう。

ボクはそう判断するのでした。

エミちゃんのお部屋。

「ほら。エミちゃん。もう一回言つて。ね。ね」

「ヒ……イ……ロ……チャ……ン」

「うおおお。すごいよ。エミちゃんありがとう！ もう好き！ 大好きー！」

ギュつと小学生女兒に抱きついてしまうボク。

元大学生の男です。

「ウ……ウー」

ちよつとはしやぎすぎたかな。

エミちゃんが嫌そうな顔になったので、少し自重しようと思う。

同じ部屋にいる命ちゃんはさつきから一言もしやべっていない。

傷心モードに入っている命ちゃんにボクはなんて声をかけるべきだろうか。

「緋色先輩」

話しかけてきたのは意外にも命ちゃんのほうだった。

「なにかな」

「緋色先輩は先ほどのやりとりをどこまで聞いていたんですか」

「そうだね……。わりと全部？」

「そうですか……」

沈黙。

自分の殻に閉じこもってしまつて、何を考えているのかわからない。

でも、おそらく、命ちゃんは命ちゃんなりに、何かを考えて答えを出そうとしているのだと思う。

「先輩がどう思ってるかわかりませんが——」

「うん」

「私の中で、小杉豹太は敵として認識されました」

「そうなんだー。へー」

軽い応答をするボク。

ボクにとつてもかなり敵よりだけどね。ボクって、なんといつたら

いいか、命ちゃんみたいに敵とか味方とか、あまり考えないんだよね。わざわざ人と会話するときにごいつは敵だとか考えないよ。面倒くさい。

「先輩はゾンビについてどうお考えですか？」

いきなり話が飛ぶなあ。

この子って超天才児だから、話の余録である『接続詞』とかがいらぬ子なんだよね。

それは勝手におのおのが補完すればいいって考えみたいで。

だから、命ちゃんの言葉って、いわゆる凡人に合わせたサービス精神溢れるものなんだと思う。

そのサービス精神もいまはそんな余裕がないってところなのかな。

それにしてもゾンビねえ。

「ゾンビは機械みたいだね。自分の思考とか心とか、そういうものがない存在に思えるよ」

「先輩は、他人の思考や心があるってどうやって判断しているんですか？」

「えつとどうやってかな。うーん。そういう反応というか、人間っぽさでわかるんじゃないかな」

「先輩はチューリングテストって知ってますか？」

「知ってるよ」

|||||

チューリングテスト

チューリングさんという人が考え出したテスト。密室の中に、コンピュータか人間か、どちらかが入っている。通常言語のやりとりにおいて、外の人間はコンピュータか人間かを判断することになる。このテストに合格できれば、人間と同じ知性あるいは心があるかというところ。そういうわけではなく、単純に人間に近い振る舞いができるという判断テストに過ぎない。

|||||

「心はチューリングテストでは測れません。先輩のいうような人間っぽさでは心があるかどうかは証明不可能です」

「まあそうだよね」

「つまり、他者が心を持っているか、心を持っておらず人間っぽい振る舞いをするだけのゾンビなのかは、見分ける術はないということになります」

「仮に人間っぽい振る舞いをするゾンビがいればそうかもね」

「先輩はクオリアを信じていますか？」

クオリアというのは、意識や心のことだ。

命ちゃんの問いかけは、他者という存在を信じているのかという問いかけのように思えた。

ボクの答えは決まってる。

「ボクはクオリアを信じているよ」

でも、ちよつと考えたのは。

——ゾンビにもクオリアがあるって信じるべきなのかな。つてこと。

ボクは誰のクオリアも確かめる術はない。

人間であっても。ゾンビであっても。

そこにクオリアがあるのかはわからない。

ボクの一方的な所感によって、勝手に心のあるなしを決めているに過ぎない。

だから、ゾンビにも——心があるかもしれないね。

そういうことがいいなの？

「私は苛烈なんだと思います。優しい緋色先輩とは全然違って……、敵には心がないと思っています。いろいろなことを天文学的な数理式を走らせただけの、合理的な機械と同じです」

だから——と続ける。

「小杉は私にとってゾンビと同じです」

「なるほど……、じゃあボクもゾンビかな」

「緋色先輩はゾンビじゃありません！」

命ちゃんは泣いているみたいだった。

「つまり、合理的な命ちゃんは不合理にも主観において区別しているの？」

「そうですね……、私はそうしています」

命ちゃんはまっすぐな瞳でボクを見ていた。

「先輩——、誰かを選ぶってことは誰かを選ばないってことです。誰かを愛するってことは別の誰かを愛さないってことです」

うーん。女子高生から愛を語られると気恥ずかしいな。

でも言ってることはわりとシビアな世界観だ。

命ちゃんの中では、白と黒、敵と味方、そして——。

愛する人とそうでない人がはっきりと区別がついているんだろうな。

それはそれで綺麗な世界観だと思うんだけど、ボクとしては極論すぎるという気がしないでもない。

ボクって、女の子か男の子かも曖昧だし、ゾンビか人間かすら曖昧だ。

そんな灰色の存在が、はつきりと原色で峻別された世界をサバイブできるかといわれると怪しいものがある。

エミちゃんを挟んで、巨大ベッドの両端にいるボクと命ちゃん。

そして、命ちゃんがベッドの上を膝で移動し、ボクのほうに近づいてくる。

あの、エミちゃんがすごい見てるんですけど。

あ、そんなの関係ありませんか。はい。

「先輩……、私、先輩のこと愛してますからね」

「ふ、ふにゆう……そ、そんな真正面で言われると、すごくドキドキするんですけど。それに今のボク、まごうことなき女の子なんですけど」

「女とか男とか関係ないです。私は先輩を選んでるんです！ とつくの昔から。できれば……、先輩にも私を選んでもらいたいです」

これはケジメ案件では？

結局、答えがでないまま、ボクは逃亡することを選んだ。

使わせていただいたのはエミちゃんの身体です。

これは——ケジメ案件では？ いやマジで。

エミちゃんがトイレに行きたそうにしてるって理由で無理やり部屋を脱出したボク。残念そうな顔でボクを見送った命ちゃん。

これはケジメ案件では!?

「トイレ……ダイジョウブ……ダヨ……」

「あ、うん。知ってた」

エミちゃんが非難っぽい目で見つめてくる。

これって生爪剥いでごめんなさいするべきなのではないだろうか。

なんというか最低だ。

——愛してます。

ああああああ、頭がフットーしそうだよおおお。

「ビイロちゃん……ダイジョウブ?」

大丈夫じゃありませんっ!

エミちゃんをお部屋に帰す。ロープはかなり緩めにしておいた。

もう言葉も話せるし、ゾンビだと思われることはないだろう。そう思いたい。

命ちゃんは自分の部屋に帰ったみたいだ。小杉さんとは別の場所にいるみたいだし、とりあえず今は大丈夫だろう。

あとは飯田さんたちが帰るのを待つだけかな。

いろいろとあつたホームセンター内だけど、そんなときでも、ボクは別の場所にあるボクの一部を感じていた。

飯田さんに渡したボクの血液入りお守り。

主観的にはリーダーサイトみたいなのに、ゾンビがどこにいるのかわかり、かつボクの血液が別の光点として表示されている感じだ。

人間的な感覚じゃないんで、多少曖昧なところもあるけれど、ボクの近くにいるゾンビに、ボクの血液を持っている人間を襲わせない程度のコントロールはできる。

いまは帰りつつあるみたいだね。

スピードから、時速がわかるし、特に問題なさそうな感じ。

まあ小杉さんも大門さんが帰ってきたら無茶なことはいらないだろうし、命ちゃんにはあとでちゃんと考えて答えをだそう。恭治くんはエミちゃんが話せるってわかればうれしがるだろうな。

うん、世の中平和だ。なんとかなるよ。絶対大丈夫だよ。

そんなふうを考えていた時期がボクにもありました。

ハザードレベル18

大門さんたちが帰ってきた。

ボクもいましがたの命ちゃんのを愛してます宣言で火照ったほつぺたを冷まそうと元気な顔で出迎えたんだけど、なぜか飯田さんはこれ以上ないほどに落ちこんでいた。

顔色は悪く、ボクと一瞬目があつたんだけど、すぐに伏せてしまう。

——どうしたんだろう？

そう思っていると、大門さんはみんなを招集した。

緊急会議らしい。

「非常に喜ばしい報告と残念な報告の両方がある。どちらから聞きたい？」

大門さんは誰にというわけではなく、居残り組のボクたちをみまわして言った。

こんなときに、自分のことを参謀とかのたまっていた小杉さんはお前に出ようとする。

たぶん、発言をすると揚げ足をとられるとか、責任が発生するとかそういうことを考えているのだと思う。

こういう時は、なんの影響もないボクが言った方が速い。

「残念なほうから聞きたいです」

「ふむ……、実をいうと、喜ばしいこと残念なことはいずれも同じことなんだがな。この飯田くんにはゾンビに襲われないという特性があるらしい」

な、なんだってー!!

なんと衝撃の事実!

って、速攻バレーテラ。

なんでバレてるの？ 飯田さん。しっかりしてよ!

ボクは自然と飯田さんをジト目で見た。

ボクに見られていると感じたのか、飯田さんは青い顔をさらに青くして、身を縮ませている。

飯田さんがゾンビ避けできるという点については、ボクのこととはバ

ラしていないみたい。飯田さんの能力として、ゾンビ避けしているのか、それともゾンビ避けスプレーの存在まで伝えていいるのかは不明だ。飯田さんの特性とっているから、伝えてない可能性が高いが。いずれにしても、ゾンビ避けができるという事実自体は、コミュニケーションにとつて悪くないことだ。だって、そういう人がひとりでもいれば食糧調達もたやすくなるわけだし、ゾンビに襲われる危険自体がグツと減る。

だから、喜ばしいことと評したんだろう。

ただ、残念なこととも評しているのは、そのことを意図的に伝えなかったことに他ならない。

大門さんの視線はその意味で厳しいものがあるけれども、今後のことを考えれば、飯田さんを完全に無碍にするわけにもいかず、曖昧さが残る結果となったといったところか。

周りのみんなの表情を見てみる。

小杉さんは、あまり表情にでていない。合理的に考えれば、飯田さんを食糧調達係に任命してしまえば、コミュニケーション全体の安全性は高まり、ひいては自分の安全率も高まるとか、考えてそう。

姫野さんはやや怒りの方向。黙っていたということが単純に怒りの原因みたい。

命ちゃんは——ん。なぜか視線があつたら微笑まれた。

単純にどうでもいいって感じか？

発音なしで唇が動く。

「だ・い・す・き」

つて、ぶれないな命ちゃん。

ボクのこと以外をわりと意識的に切り捨てるからなこの子。

命ちゃんらしい超合理的な思考だけど、その思考の偏りつて逆に不合理的じゃないだろうか。

最後に——、恭治くんは少し申し訳なきさそうにしていた。

どうということなんだろう。

「恭治くん。そのときの状況を説明してくれるか」

大門さんが優しく問いかけると、

「ほら」

恭治くんは、静かに語り始めた。

★
||

自分はついていると思っっている。

こんな世界になっても、妹は生きてるし、オレも生きてる。

大門さんに出会えたのは本当にラッキーだったんだろうし、エミが、飯田さんに保護されていたのも本当に奇跡みたいなものだったの
だろうと思う。

最初は、ゾンビ化したエミの身体に無理やり触っているのだと思っ
て、飯田さんのことがロリコンペドネクロファイリアの変態野郎に見え
たんだが、緋色ちゃんの話聞いてると、勘違いだったと気づいた。

エミは生きていた。

けれど、誰が赤の他人の世話をしたいのだと思うのだろう。

エミの今の状態を、世の中の倫理とか常識とかの、今の世の中だっ
たら包装紙ごとゴミ箱につっこまれてるような修飾を取っ払って
言うのなら

——障害児

であるとしか言いようが無いのは明らかだった。

その対比でいえば、ゾンビなんか、うーうー唸るだけの障害者だし、
自分の意見もなにも言えないのは、認知症患者のようなもんだと思
う。

認知症患者だからといって、障害者だからといって、その人たちが
死ぬべきであるなんて非情なことを考えているわけじゃない。ただ、
そいつらが弱者であるのも事実で、弱者は自分が死にゆく状況に至る
ということにすら、何も言えないんだ。

エミもほとんどしゃべることができなくなっていた。

よくわからないけど、腹立たしかった。

どこのだれか知らないけれど、もしも神様ってやつがいたとした
ら、この世の中を、よくもまあ面白くもない壊し方をしたもんだなと

思った。

今の世の中は、まちがいをなく弱い者から死んでいってる世界だ。重篤な患者は、高度な治療が受けられないだろうし、要介護者は介護が受けられずに人知れず死んでいってるだろう。

自分の親の頭を金属バットで砕いたときに、それは仕方のないことだと思っていた。

エミがゾンビに噛まれたときに、この世界にはオレたちを助けてくれる優しい人なんてどこにもいないと思った。

でも、そうじゃない人もまだいた。

他人のことを、ただ弱くて死んでいくだけの人を気に掛けることができる人がいた。

要するに、飯田さんはいいい人らしい。

少々太り過ぎだと思っし、精神的には弱い部分もあるのだろうが、こんな世界になっても稀有なことに他人のことをよく考えている。

大門さんには野球部の顧問をしていた熊谷先生のような厳しさを感じていたが、飯田さんは単純に優しいのだと思う。

人には限界がないといって激励するのも優しさなら、人には限界があるといって慰めるのも優しさだ。

今までオレが触れたことのない優しさだった。そんな飯田さんは今、大きな身体をせいっぱい小さくして震えている。青ざめた顔と、まんまるい身体はさながらドラえもんのようなであったし、エミがドラえもんのことを好きだったなと思って、久しぶりに笑った。

「飯田さん。そんなにおびえなくても大丈夫ですよ」

「ああ……、恭治くんはずいぶん外に慣れてるんだね」

「そうっすね。ゾンビも何体も倒してますし、経験値溜まってるんじゃないっすか」

「油断してくれるなよ」

大門さんが車を運転しながら言った。

もちろん、油断するつもりなんかない。ゾンビはトロくて一体ならたいして強くないが、噛まれたり引っ搔かれたりすると感染する恐れがある。ウイルスか細菌かもわかっていないから、当然感染してし

まうともうどうしようもない。

要するに、ゾンビは即死攻撃持ちだから、油断はイコール死だ。油断するつもりはさらさらなかったが、ゾンビに慣れてきているというのも事実だ。そういうときが一番危ないとも思う。飯田さんは逆に緊張しすぎて危ないが、適度な緊張感というのがわりと難しい。そういった意味では、今回のステージは、ちょうどいい難易度かもしれない。

出かける先のスーパーは既に制圧しているといっている状態だ。一階部分は既に制圧し、入口部分のシャッターはおろしている。そこから侵入してくることはないだろう。

スーパーの近くで停車し、遠目からチラチラとスーパーの入口をうかがう。やはり、何匹かゾンビはいた。店内に入ろうとして、シャッターを叩いている。入口は二か所あるがどちらも破られた様子はない。

オレたちが入るのは裏口からだ。ゾンビに気づかれないようにこっそりと裏口のほうに回った。

スーパーの裏口は鉄製の重いドアだ。

鍵はかかってないが、ゾンビはノブをまわして開けるといいう知恵がない。あるいは偶然開けるといいうことも考えられなくはないが、ゾンビは生前の行為にしたがって節があるから、裏口にわざわざ来るようなゾンビも数が少ないんだ。

スーパーの中は電気がついていて明るい。

裏口の通路は幅数メートル、距離にして数十メートルほどで、両開きのドアを開けるとすぐに店内だ。地元の中で唯一といっているスーパーなので、結構な人数が利用していたが、今は当然のことながら誰もいない。このスーパーは食品売り場コーナーの他、雑貨コーナーなど、わりと幅のある商品を取り扱っている。地元でそういう店がないから、ある程度需要にこたえる必要があったんだろうと思う。

まずは三人で食品売り場コーナーにまわった。

既になまものは怪しい感じ。野菜はまだいけそうだ。悪くなりそうなものから先に回収し、缶詰などの日持ちするものは後回しにす

る。もちろん、とれるときにとっておくべきだが、バックパックに詰めこむにしろ限界がある。

ゾンビはのろいが、さすがに重量のあるバックパックを持ったままだと危険なのも確かだ。生存率との折り合いを見て、考えなければならぬ。

飯田さんはそこらじゅうで倒れ伏しているゾンビを見て戦々恐々としていたが、それらが既に物言わぬ完全な死体に成り果てていると気づいて、ようやく心に余裕が生まれてきたようだ。

「ゾンビいないですね」

「まあ既に一回制圧しているからな。本当はこの死体も片づけておきたいところなのだが、その暇がない。人手も足りないのでな」

「なるほど」

大門さんが言うように、撃ち殺したゾンビの数は十数体はいる。実はこのスーパ―はオレたちが来る前に一度誰かがいた形跡がある。おそらくは何人かそして何日か。どういう経緯をたどったかはわからないが、今はいない。それだけの話だ。もしかすると、オレたちが来ない間に、誰かがここを使ってるということも考えられたが、そうはなっていないらしい。

「あの……食糧以外には持って帰らないんですか」

飯田さんが突然思いついたかのように声をあげた。

「ん。何か欲しいものでもあるのか」と大門さん。

「えっと……、こんなことを言うと変に思われるかもしれませんが、緋色ちゃんとエミちゃんのために持って帰りたいものがあるんです」

「エミの？」

ほぼ寝たきり状態のエミに必要なものなんてあるのだろうか。

まさかとは思うが、オムツとか？

いや、緋色ちゃんがトイレには連れて行ってくれてるし、なぜか緋色ちゃんが手を引くときちゃんと立ち上がるから問題はないはず。わからないので困惑顔のまま続きを促す。

飯田さんはしばらく口をもごもごさせていたが、意を決したようにおずおずと切り出した。

「あの……、怒らないでくださいよ。ブラジャーです」

「は？ いや、なんでここぞ？」

「誤解しないで聞いていただきたいんですが、小学生高学年は成長期です。個人差はありますが、芽吹く前の草花のように、実は膨らみかけのおっぱいというのは、スレて痛いものですよね」

「なんでそんなこと知ってるんだよ……」

「一般的な知識です」

「エミはそんなこと言ったような覚えはないですけどね」

「それはですね、きつと恥ずかしかったからですよ。思春期の女の子っていうのは、自分の体が変わっていくことに戸惑いを感じたりもするんですよ。ご兄妹とはいえ、異性にはなかなか言い出しづらいことでしょうし、今、こんな世の中だから、余計言いにくいこともあるんじゃないですか」

「確かにそうかもしれないな。姫野から前に生理用品を頼まれたことがある。言われるまで気づかなかったこちらの落ち度だが、それからは欲しいものをメモにしてもらってる。エミちゃんも緋色ちゃんもまだ小学生だし、なおさら言い出しにくいことはあるだろう。我慢させている面はあるだろうな」

大門さんが納得したようにうなずく。

「そうなんですよ。小学生くらいの女の子の胸は男のそれと同じように見えるんですけども、全然違うんです。たとえば、まったく膨らんでいなくても、守り秘すべき花園です。スポーツブラでもいいから包ませてあげたいですね」

飯田さんはべつにロリコンではないだろうし、まさか小学生女兒がブラをつけている姿に興奮するような変態でもないだろう。世の中にはストッキングに欲情する変態もいるが、飯田さんはいい人のはずだ。

しかし、オレの中にチラリとよくない疑念が湧いた。

それは黒い濛々とした煙のようにオレの心の中に広がって消せなかった。

それは、

——こいつ、ロリコンじゃね

という飯田さんの名誉にも関わるクソゴミみたいな疑念だ。

ありえねーだろ。だって40にもなって娘みたいな年齢の子どもに欲情するとか、生物としておかしくねーか？ オレ自身にそういう趣味がないから、まったくもって想像できなかった。

だから、オレは慎重に質問することにした。

「なんで、ブラつけてないって知ってるんすか？」

「そりゃ……」言いよどむ飯田さん。「あの、言い方悪いけどエミちゃんの介護をしていたからね。少しは身体に触ってしまうからわかるよ」

「緋色ちゃんは？」

「あ……あ、その、あの子は無防備だからね。私たちも暑くなつてシャツをパタパタすることがあるだろう。緋色ちゃんは私のことをパパか何かだと勘違いしているのか、そんなことを目の前でやるんだもの。よくないよとは言ったんだけどね」

「そうすか」

確かに、エミは要介護状態だし、どうやっても大人の力で身体に触らないといけない面もあるだろう。それに緋色ちゃんが無防備なのは確かにそのとおりだと感じる。男に対する態度がとても気安く、ほとんど警戒心というものを感じない。子どもらしい無邪気さなのかもしれない。

——いや。違うだろ。

オレは嫌な想像をする。緋色ちゃんも言っではないが、飯田さんに会う前は一人だったわけだ。オレと同じように、親とわかれここにいる。小学生がひとりで、親の庇護から離れてここにいるんだ。

せいっぱいの愛想なのかもしれない。

飯田さんを親のように慕って、無防備な様を見せているのかもしれない。それがわざとだとすれば、とんだ小悪魔ぶりだが、たぶん、無意識だろうと思う。

無意識に——、誰かに守ってもらいたくて。

言いたいことも言えずに我慢しているのか。

だとすれば、その我慢を読み取った飯田さんは、すっかり父親らしいじゃないかと思った。

「飯田さんじゃないと普通気づかないですよ」

「あ、ははは。ですよー。というわけで、スポブラ見繕ってきます！」

照れ臭かったのか飯田さんが駆け出す。

「危ないですよー」

とオレは声をかけるのだが、飯田さんは止まらない。

大門さんのほうをチラリと見ると、首を動かして「行ってやれ」との答え、オレはうなずき、すぐに後を追った。

★
||

下着コーナーがあるスーパーというのも珍しいだろう。

正確にはスーパーと雑貨売り場が合体しているのかもしれない。

もちろん、下着ともなると男としてはなかなか立ち入れない領域だが、売ってあるのはもっぱら子供用の超激安の品物のようだ。

そこではブラジャーがごっそりワゴンの中に無造作に入っている。

四方せいぜい1m程度の小さなワゴンだが、そこに身体ごと突っ込んでかき分けている様は、はつきり言って変態的所業に見えた。

「飯田さ……」

そこでオレは戦慄すべき事態に気づく。

ゾンビがいた。どこかに隠れていたのだろう。

もういくばくも距離がない。

「飯田さんー」

オレの声に飯田さんが反応する。

しかし、逆だ。ゾンビはオレとは逆の方向から来ている。もう間に合わない！

オレは銃を構えた。

撃ち殺せるか。オレもほとんど銃の練習はしていない。そんなに重くはないはずの銃が、ひどく重く思えて、銃身がブレた。

手が震えている。

飯田さんの巨体に阻まれて狙いが定まららない。

「ひえ」

飯田さんが銃におびえて、その場にしゃがみこんだ。

だめだ。逃げろ！

もはや声すら出せず、オレは飯田さんがゾンビに噛まれると思い――、その場で立ち尽くす。

しかし、驚くべきことが起こった。

ゾンビは巨体を震わす飯田さんを完全にスルーし、こちらにのっそりと歩いてきていたのだ。

オレはゆっくりと後退する。

得体の知れない事態に困惑している。

どうして、飯田さんは襲われない？

いや、オレは襲われようとしてるのか？　いま目の前にいるゾンビはエミのように『半ゾンビ』で襲うつもりはないってことなのか？

いくつもの疑念が生じた。

が、やつの歩みは止まらない。

しまった！

気づくと、銃を掴まれていた。

クソ。離れない。

偶然だと思うが、ゾンビが握っているのは、銃のスライド部分だ。人間を襲うときの怪力でつかまれた銃身はスライドができない。つまり、弾が発射できない。

よしんば発射できたとして――。

揉み合いの状況ではゾンビの弱点である頭部を狙えない。

銃をつかんでいない方の腕が、オレの肩あたりに迫る。肉をえぐり、はらわたをつかみ出すほどの力で握られれば、待っているのは死だけだ。

数瞬の間、オレは動けない。

「う。ああああああああああっ！」

ゾンビの後方から声があがった。不格好で無理やりな叫び声をは

りあげている。

飯田さんがゾンビを後方から羽交い絞めにしていた。

オレはようやく我にかえり、銃を手から離す。

べつに銃じゃなくてもいい。ゾンビを殺すには頭部を一撃すればいいだけ。

手慣れた武器のほうが——手っ取りばやい。

バックパツクの横に挿してあった、使い慣れたバットを握りしめ裂帛の気合いをこめて振り下ろす。

鈍く、痺れるような衝撃が手のひらに伝わり、

——おっと、常盤選手。これはいい当たりだ。ホームラン。ホームランです！

場違いなことを考えながら、もう一撃。

ゾンビは動かなくなつた。

「ハア……ハア……どういう、ことですか」

飯田さんがいなければ死んでいたかもしれないという事実にもつと言えば眼前に迫つた死の恐怖に対して、オレは少なからず興奮していた。声色が八つ当たりのようになってしまっている。言うべきは「ありがとうございます」という言葉のはずだが、出てきたのは、非難するような声だった。

「どうして……黙ってたんですか」

飯田さんは、シルク製のスポブラを握りしめたまま、その場で土下座するみたいにくず折れた。

ハザードレベル19

恭治くんの話が終わった。

飯田さんが断首を待つ死刑囚みたいな様子な理由も、とりあえず理解した。

ていうか、なんでスポーツブラなんだろう……。

ボクの女児力をそんなに高めたいの？

あまり意識してなかったけど、ブラジャーなんてつけたら完全に女の子だよ。

かわいい女の子になれてうれしいのは本当だけど、ブラジャーはまだレベルが高いと思います。

ていうか……ブラジャーつけなきゃダメ？

胸のあたりを両手で触ってみるけど、『ある』というほどない。

しかし、ないわけではない。

なんだこれ哲学か。

命ちゃんを見てみると鼻のあたりを押さえていた。なんですか。

ボクのなになにそんなに気に食わないんですか。

ただ、飯田さんがうなだれているのは、もちろんスポーツブラの一件で、みんなにロリコンであることを疑われているからではない。

秘密の漏洩といたらいいか。

ゾンビに襲われないという能力をみんなに黙っていたという、その一点でもって断罪するか否かの瀬戸際にたたされているといえる。

聞いた話だと——、やっぱりボクのことは一言もでていない。

つまり、飯田さんはボクをかばったんだろうなと思うと、むずがゆい気持ちになってくる。

みんながみんな、様々な思惑を描いているせいか、台風の目のようにちやうど沈黙がその場に満ちていた。

誰が最初に口を開くか——、そんな状況だった。

数秒か、あるいは数十秒か。

長くも短くもない沈黙のあとに、口を開いたのはリーダーにあたる大門さんだ。

「飯田くん、君はゾンビに襲われない。それは間違いないな」

「はい……」

「そのような能力をどこでどうやって身に着けたんだ？」

沈黙。

「言いたくないのはわかる。しかし——、コミュニティ全体の秩序維持のためだ。教えてくれないと困るのだよ」

「……わかりません。気づいたらそのような能力があったようです」

「その能力に気付いたのはいつごろだ」

「ゾンビハザードが起こった直後……くらいですかね」

目を伏せ気味に、小さな声で答える飯田さん。

自信のなさげな様子に、しだいに周囲の怒気が高まっているのを感じる。

「君はエミちゃんとコンビニで出逢ったと言っていたが、実のところゾンビに襲われない君は、小学校にひとり悠々と赴き、偶然エミちゃんを見つけたのではないか？」

力強く飯田さんをにらみつける大門さん。

蛇ににらまれた蛙。いや蛇なんか目じやない気迫だ。生まれたての仔山羊が寒さで震えてるんじゃないかというぐらいのレベルで、飯田さんは小刻みに震えている。

「しかしそうになると、なぜ小学校に行ったのかという理由が必要になるが……」

「確かに行ききましたー！」

飯田さんの大仰な声。

まさか小学生女児ゾンビを物色しにいったなんて言えるはずもなく、飯田さんはひたいに汗を浮かべながら、言い訳を述べる。

「確かに……小学校に行きましたよ。あそこはゾンビが多かったから、私にとつて都合がよかったです。だって、給食とか残ってるかもしれないでしょう」

「なるほどな」大門さんは一応納得した。「しかし……、そうになると、緋色ちゃんはウソをついていたということになるか」

そうやってボクのことをジロっと見てくる大門さん。

まあボクは確かに、飯田さんといっしょにエミちゃんをコンビニで迎え入れたと証言している。

それが嘘だとバレちゃった。
てへっ。

命ちゃんのほうに視線をそらすと、「うん。かわいい」とリップシンク。

ボクはウソつきの悪い子だったんですけど、命ちゃんには関係ないらしい。

詰問は続く。

「その能力は誰かに付与できるのか？」

「できないと思います」

「ねえ。できればいいんだけどさ。わたし、もつとかわいい洋服が欲しいの。飯田さんだったら簡単にとってくれるんじゃない？」と姫野さん。

どうして自分のために何かするのが当然だと思っているんだろう。

もちろん、後で『仕事』をして、それを対価とするつもりかもしれないけれど、飯田さんのことを一顧だにしなかったのにこれだ。

「銃とかもほしいですよ。ゾンビに襲われない飯田さんとはともかく、みんなは普通に襲われるんですから用意してもらわなければ不公平です」と小杉さん。

不公平？

なにが不公平なんだろう。

まるで、ゾンビに襲われないのがズルいとても言いたげだ。

まあ、そりゃチート能力だから、普通にゾンビに襲われる可能性がある人にとっては不平等で納得できないかもしれないけれど、人間は生まれたときから死ぬときまで、与えられた条件下で生きるしかない。

その意味では、偶然だろうが必然だろうが手に入れた能力を發揮するのにズルいものもない。

単に僻みに近いだろう。

「オレ。飯田さんがエミを担いでくれたとき、すげえ人だなって思っ

てたんすよ。今は少し幻滅しました……」と恭治くん。

エミちゃんがゾンビになっているかもしれないのに担いでみせたのは、確かに感動的だったかもしれない。だから、それを裏切られたと感じるのは、わからないでもない。

でも——、飯田さんは少なくともエミちゃんを担いでここまでたどり着いたのは事実だし、そこにはほとんど親切心しかないよ。小学生女児の体に合法的に触れるとか思っていたかもしれないけれど。

ていうかさあ……。命ちゃんを除いて、みんなして——なんなんだろうな。

まるで罪人扱いだ。

飯田さんは確かにゾンビに襲われないことを黙っていたけど、それのなにか悪いんだろう。嘘をついてたわけではないし、それでみんなが不都合になるわけではない。

ただ、こうやって飯田さんを詰問しているのは、ただ単に——。

そう、ただ単に、自分勝手な理由なんじゃないの。

ゾンビのように冷たい視線が、いくつも飯田さんに突き刺さっている。

そこにいたのはボクだ。そこにいるのはボクだったんだ！

だから——。

みんなの前から一歩だけ引いた。

ボクの動きに吸い寄せられるようにみんなの視線が集まる。

なんかもう……。嫌いだ。

三日月のように薄く笑い、ボクは言う。

「あのさ。飯田さんがゾンビに襲われないんじゃないんだよ」

コマ数秒。

飯田さんが驚きあわてたように目を見開く。その後、みんなが追従するように顔の表情が変わるのがおもしろかった。命ちゃんだけは余裕の無表情だったけど、まあこの子はいつもの調子だ。

ボクはこの場を掌握しようと、さらに言葉をつむぐ。

「ボクがゾンビ避けスプレーを開発したんだ」

☆Ⅱ

「緋色ちゃん。どういうことか説明してもらえるかな」

大門さんは重々しく口を開く。

威圧しようとしてるみたいだけど、そんなの何も感じない。

だって、ボクはゾンビだから。

「べつにたいしたことじゃないです。偶然、ゾンビの研究をしていたら、ゾンビに襲われなくなる消臭スプレーを開発したんですよ。飯田さんには実験体になってもらってました」

ボクは鞆の中から、リフレッシュシユを取り出して、みんなの前に見せた。

みんなが食い入るように見つめ、物欲しそうに見ている。

「それをみんなに分け与えてもらえとうれしいのだが」

大門さんがやっぱり代表として声を出した。言ってる内容は無条件にゾンビ避けスプレーを差し出せという不平等条約もいいたところの話。

ボクが見た目小学生だからって甘く見ているんだろうか。

ボクはこう見えて——怒ってるんだ。

「え？ いやですけど」とボクは言った。

「な……」

まさか断られると思ってなかったのか大門さんが絶句している。

いい気味だ。

「そういう我がままを言うもんじゃない」

「我がまま？ なにが我がままなんです。ボクはボク力でゾンビ避けスプレーを作った。それはボク自身の力です。それをどう使おう

とボクの勝手でしょ」

「ここは小さいコミュニティだが立派な社会だ。みな、身を寄せ合つて助けあいながら生きている。君のような子どもの我がままが通用するほど甘くはない」

「言っておきますけど。このゾンビ避けスプレーは一本切りなんだよ。無制限に作れるわけじゃない。ボクにとってはこのゾンビ避けスプレーは生命線なの。ボクが自分の身を守るのが、そんなに我がままなことなの？ 大門さんたちは男にばかり銃を持たせて、女には武器を持たせてくれないじゃん！」

そう。このコミュニティのわずかな不平等と言えば、武器の配布だ。

大門さんは体育会系だからか、それとも古い考えの持ち主だからか、男が外で食糧を調達して、女は家事全般をとりしきるというような考えが根底にあった。

だから、女の子には誰ひとり銃を供給しなかった。

それは組織を安全に運営していくためにはやむを得ないことだったのかもしれないけれど、大門さんが生殺与奪の権利をすべて握るということも意味している。

大門さんはキレた。

小学生のボクに対して、大門さんは銃を向けた。

弾は入っていないかもしれない。ただの威嚇なのかもしれない。

でも、銃口はボクの胸のあたりを確実に狙っている。

「敵……」

命ちやんが静かに呟いた。

「ボクを殺して奪うつもりですか？」

大門さんは、少しだけ笑って銃をすぐに下した。

「君は……女の子だが男の子のようだな。オレにもあつたよ。そういう時がね。自分がなんでもできるし、なんでもなれるような気がしたものだ。だが、高校では体育教師に殴られ、自衛隊には上官にどやされた。オレは子どもだった。力が足りなかつたんだ。もつと力があればと思つたよ。妄想のなかで、何度も殴りつけたこともある。つい

この間、上官のほうはゾンビになってたんで、銃の実践練習の的になってもらったがね」

「暴力で誰かを動かすのがそんなに楽しいの？」

「そうは言っていない。ただ、他人に自分の運命を委ねたくなかっただけだ。誰かにいいようにされたくなければ、力を見せつけるしかない。それが今も昔も変わっていない人間のルールだ」

「それが人間の普遍的なルールだとしたら、人間なんて全部ゾンビになったほうがいいよ」

「君は、君の好きな人がゾンビになってもいいと思っているのか？」

大門さんは命ちゃんに今度は銃口を向けた。

あまり殺意は感じない。まるで朝の長編ドラマシリーズのような日常の一コマのように。

大門さんは自分の『力』を試したがっているようだった。

「たとえば、君が君の我がままを押し通したいとして——、それは誰かを不幸にするかもしれない。それは君が本当に望んでいることなのか」

「そりや……、嫌だけどね。ただ、ボクはゾンビじゃない。人間なんだ。だから、自分の考えていることや思っていることを大事にした。ただそれだけ。それが我がままなの？」

「ああ……我がままだよ」

「じゃあ、ゾンビみたいに生きろって？」

「すべてのことを自分でできるわけではないだろう。時には他人に委ねることも大事だ。君がゾンビ避けスプレーを作れたのは確かに君の力だろう。ただ、それをどのように使えば一番いい結果を生むかはまた別の問題だ。英雄にでもなりたいのかな？ いまどきの女の子なら……確かプリキュアか」

プリキュアはさすがに小学生高学年だと卒業している子も多いんじゃないかな。

卒業できない系のおじさんも多いみたいだけど。

命ちゃんのほうを見上げる。

命ちゃんは自分が銃で狙われているにも関わらず、ボクに対して微

笑んだ。

ボクに委ねてくれてた。それだけでボクは無限のパワーを得ているみたいに勇気づけられた。

「大門さんが言いたいこともわからないじゃないんだ。ボクだって子どもじゃないんだし、プリキュアみたいに正義の味方になりたいわけでもないよ。たださあ……、そうやって、みんなの為ってふりしなから、誰かの犠牲を強いるのが本当に嫌いってだけ！」

力無き正義ですらないよ。

単なるボクの趣味の問題だ。

ボクはボク自身を弱者だと思ってるつもりはないけれど、相手が自分のことを強者だと思って、だから弱者に対して何かを強いてもいいと思うのは、ボクの趣味にあわないうってだけ。

だから、ボクはいやだって言ったんだ。

「君はオレを誤解しているようだが、オレは誰も犠牲になってほしくないぞ。むしろ、守りたいと思っている。そのゾンビ避けスプレーがあれば、よりみんなを守れる。だから力を貸してほしいと言っているだけだ」

「だったら、ゾンビ避けスプレー自体はあげないけど、ボクが飯田さんのさっきのポジションみたいに、欲しいもの取ってきてあげるよ。それでどう？」

「小学生にできることは、たかがしれているだろう。大人のオレたちが扱うほうがよっぽどいい」

「話にならないよ」

話は平行線だ。ただ、ボクと決定的な関係が破綻するのは向こうとしても望んでいるわけではないみたいで、再び銃をおろして今度は傍らにいた恭治くんに話しかけた。

「恭治くん。君はどう思う？」

「オレは……緋色ちゃんから無理やり奪うのはどうかと思います」

「もしも、ゾンビ避けスプレーを持っていたら、君たちはゾンビに襲われず、エミちゃんも今ののように衰弱せずに済んだかもしれない」

「それは……そうかもしれないけど」

恭治くんは目を伏せた。

「緋色ちゃんがゾンビ避けスプレーを我々に開示しないのは、潜在的にこちらに損害を与えるに等しいと思いますね」と小杉さん。

「あんだ。子どもみたいに……って子どもだったか、我がまま言わないの」と姫野さん。

さつき、我がまま言っただけで自分の洋服をとって帰るように頼んでいたのは記憶の彼方にでも飛ばしてしまっているようだ。

「あの。みんな落ち着いてください。緋色ちゃんみたいな子どもに寄ってたかってひどいですよ。これじゃあ無理強いしていると言われてもしかたないと思います」と飯田さん。

「もう、この組織抜けてもいいですからね。ゾンビ避けスプレーがあるなら、私と先輩で愛の大脱出。その後は、ふたりきりで……えへ。えへへ」と命ちゃん。

あの、いまシリアスな場面のつもりなんですけど……。

なんだよこれ。

カオスすぎるでしょ。

とりあえず、今の状況だと……。

大門さん、姫野さん、小杉さんはボクのゾンビ避けスプレーをとりあげるべきという意見で、ボクと飯田さんと命ちゃんが抗議しているという形か。

恭治くんは迷ってるみたい。

でも……。

「エミちゃんを小学校から連れ出したのは、実験だったのかもしれないですね」

小杉さんが余計なひと言をいい、恭治くんの顔がゆがんだ。

「実験じゃないよ。エミちゃんは半分ゾンビみたいな状態だったから助けようと思っただけ」

「半分ゾンビだから、ゾンビ避けスプレーの実験に適していたんでしよう。普通のゾンビじゃ危険すぎますからね。小さな女の子で、おとなしい様子。実験には適してるように思います」

「そんなつもりはありません」

飯田さんが抗議する。

「人形みたいですしね。もしかしたら、お人形遊びのようなところもあつたんじゃないですか？」

「……」

絶句する飯田さん。

まあ、そんなところもあつたような気がするので、強くは言えないのかもしれない。

恭治くんは、ボクを見つめていた。

申し訳なさそうに。迷いのあるなかで、最後は――。

「緋色ちゃん。ごめん……、ゾンビ避けスプレーを大門さんに渡してくれないか」

ああ、そうなつちやうか。

ボクとしては、自分の意思はせいっぱい主張したつもりだったので、なんとなくガツカリした気分だった。

もともとホームセンターにいた人間たちには誰ひとり、ボクの言い分は通らなかつたのだから。

それはべつにいい。

彼らには彼らの論法や正義や倫理があるのだろうし、完全にブラッくな正義というわけではないと思うから。もともと理屈つていうのは百パーセントというのはなく、どちらがより正しいかのベターなところくらいがせいぜいだからね。

今回はたまたまボクの考え方は排斥されたってだけ。

その結果として、ボクが多数決に従わないという方策もあるし、コミュニケーションを抜けるという手もあるだろう。

ぶつちやけると、ゾンビ避けスプレーなんていくらでも渡していいんだよ。それでボクがなにかしら不利益を被るわけではないからね。もし、ゾンビ避け能力を駆使しているのがバレたら大変なことになるかもしれないけれど、スプレーがあるってだけならたいしたことじゃない。

ただ、大門さんや他のみんなにわからせたかっただけだ。

ちよつとみんな我がままになっているよつて。

そしたらボクのほうが我がままになっただけで……。

ああもういいや。めんどくさい。

ボクはゾンビ避けスプレーを放り投げた。

大門さんはそれを掴むと、ここ一番の笑顔を見せた。本当にどうしようもないな。

「ありがとう緋色ちゃん」

いまさらながら、偉いぞとか言ってくる小杉さん。

そして、よかつたわーなんて言ってる姫野さん。

なんだか笑えてくるなあ。本当にコミュニケーション抜けようかな。

ただ、飯田さんはおろおろしていたし、恭治くんも青い顔をしていました。

命ちゃんなんか研ぎ澄まされた刀みたいな表情になっていたよ。

うーん……。

どうしたものか。

ボクが気がかりなのは、エミちゃんかな。

エミちゃんこそ、この世界で一番純粹に戦っている子だと思うし、人間の凄味を見せつけられたからね。ボクとしては、エミちゃん行く末を見届けたいと思っている。

もう少しいようかな。

そんなことを思う今日この頃です。でも大門さんたちが死んでもボクしーらない。

ハザードレベル20

うーん。

どうしよう。ヤル気がまったくでない。

ボクはボクなりの善意でもって、みんなには接してきたつもりだったけれども、それをどう受け取るかというのは結局のところ、その人次第なんだと思う。

アンテナというか。

ボクはボクなりの気持ちを送信してるけれども、受信装置が壊れていたらダメだし。

逆に、送信の仕方がダメなのかもしれないし。

それはよくわからない。

結局、ボクはひとりで自分勝手にモヤつとしているだけなのかもしれないんだ。

だから——、いまのボクはお部屋の中で不貞寝モードです。

引きこもりともいう。

一応、さつきゾンビ避けスプレーを渡したことにより、コミュニケーション内におけるボクの貢献度は上がったみたいで、なにもしていない状況だけど、誰からも何も言われてない。子どもっぽい癩癩を起したとでも思われているんだろう。どうでもいいや。

「緋色先輩……、起きてますか」

ドアがノックされた。

命ちゃんの声だ。さすがに可愛い後輩の前では、素敵な先輩を演じたい。

そういう思いもあって、ボクは鉛のような身体を無理やり動かした。

のっそりとした動きは、さながらゾンビだ。

まあ、ボクゾンビだし、腐っててもしょうがないよね。

「なあに。命ちゃん」

「寝ぼけまなこをございごしごしこする姿が可愛さドストライクです！」

そっ閉じするボク。

「閉めないでください！」

「寝てたらちよつとはストレス解消になるかなって思っ、むりやり昼寝しようとしたんだけどね。イライラして寝れなかったよ」

正直なところ、あまり命ちゃんにも対応するだけの気力というか、そんなのが無いんだ。

命ちゃんはボクの表情をじつと見ていた。

すると、声色が透明な——真面目なものになった。

「先輩。お部屋の中、入ってよろしいですか」

「うん。いいよ」

命ちゃんをお部屋の中に通す。

命ちゃんにも少しだけ嫌われちゃったかな。嫌われたというか、なんか無理筋を通そうとする馬鹿な先輩に思われたかもしれない。

まるで子どもだなんて思うんだけど、ボクだって人並みにみんなに嫌われてるのかなって思うと、ちよつとは嫌な気になるんだ。

ボクはベッドに腰掛けて、アンニュイな感じ。

「夢い感じの先輩も可愛いですね」

「君のボクに対する最近の評価って、カワイイしか言っていないよね……」

「それ以外の言葉が浮かびませんから。私って素直なんですよ」

「知ってる」

「隣いいですか」

「うん」

命ちゃんはボクが座ってるすぐ隣に座った。

小指がふれあいそうなそんな距離。命ちゃんはボクにとってはおかしい後輩で妹みたいな存在だけど、さっき『愛してる』って言われたからか、なんだかドキドキする。

女の子っぽい細い指先を見て、それから頭一個分高い命ちゃんの顔を見上げる。

ほのかに香る甘い香り。

人間の女の子の匂いは甘いと思う。命ちゃんだからかな。生白い首元に歯を突き立てて食い破ったら、きつと想像を絶するほどにお

いいだろう。

ぐぐくりと生唾を呑みこむ。

これって意識してるっていうのかも。

「今日の先輩もかっこよかったですよ」

「そうかなー。結局、コミュニティを混乱させただけでもいえるし、なかなかうまくいかないものだよな」

「私としては、各々の努力が足りないだけのように思います」

「努力って？」

「なんとはいえいいか。自制心ですね。緩慢な恐怖によってタガが緩んでいるのだと思います。飛行機の内圧が耳を圧迫するように、ゾンビという恐怖がこころを圧迫しているんでしょう」

「だから、恐怖を一刻も早く緩和したかった？」

「そうです。なにがなんでもという気分だったでしょう。砂漠で乾いた人間の前で、水の入ったペットボトルをぶらさげるようなものです。ゾンビ避けスプレーなんてものを出されたら飛びつかざるをえない」

「まあそうだね」

「で、先輩はどうしたいんですか？」

「どうって？」

「このコミュニティにずっといたいですか。それとも抜きたいですか？」

「うーん。正直なところ、なんだか疲れちゃった。飯田さんや恭治くんはまだいいけど、大門さんたちとはやってけないなーって……」

「まあ、普通に敵認定でいいと思いますよ」

「敵ね……」

殺したり殺されたり。

そんなふうに簡単に割り切っちゃってもいいものなんだろうか。

命ちゃんの考え方はシンプルだけど、人間関係はそこまで理論的じゃないようにも思う。確かにさっきは大門さんたちと対立したけれど、時間が経過すれば、もしかしたら和解するかもしれない。

そんな可能性はないだろうか。

「ないですね」

「え？ なに命ちゃん。ボクのこころを読まないでよ」

「緋色先輩が何を考えてるかなんて、表情を見ていればわかります。間違っていましたか？」

「間違っていないけど……。普通できないよ」

「そうでもないですよ。人間の心なんてわりと簡単に類型化できますから、表情や言動を分析すれば、何を考えているかなんて確率分布の問題にすぎません」

「そういうもの？」

「そういうものです。試しに、今のわたしが何を考えてるか当ててみてください」

「えっと……。えっと……」

ポーカーフェイスの命ちゃんの表情は、外見からすると確かにわかりづらい。

高度な後輩センサーを有しているボクとしても、さすがに何を考えているかまではわからない。

おずおずと、ボクは言ってみる。

「ボクがカワイイとか？」

「ブー。違います。はずれですので、先輩の洋服を脱がせます」

「え？ え？ なにそれ。そんなの絶対おかしいよ！」

命ちゃんの指が、いつのまにか伸びていた。

キャミソールをめくられておへそが丸見えになっちゃったので、ボクは両手を使って必死に抵抗した。パワーがあつて本当によかった。命ちゃんよりは強いみたいだから、これ以上ご無体なことにはならない。

命ちゃんは、じゃれあつてるうちに飽きたのか、いったんは手を放した。

「先輩が必死に抵抗する姿は確かにカワイイですけどね」

「とんだ罰ゲームだよ」

「ちなみに正解は……。先輩にいたずらしたいでした！」
なんだよそれ。

ボクがまちがえる。⇒服を脱がせる。

ボクが正解する。⇒服を脱がせる。

隙を生じぬ二段構えじゃん。

「ボクが正解しても、もしかして大当たりとか言いながら脱がせようとするつもりだったとか?」

「さすが先輩です」

「褒められてもうれしくない!」

命ちゃんの高度な戦略には翻弄されっぱなしだ。

まあいいんだけどね。命ちゃんはたぶんボクのことを励ましてくれてるんだと思う。

「命ちゃん。ありがとうね」

「私はいっだって先輩の味方です。どこにいてもいっだって。それが永久不変の真理です」

「ボクは命ちゃんみたいになれないよ。割り切れないことが多すぎるんだ」

「先輩は先輩らしくこころのままに動けばいいと思います」

「命ちゃんの考え方は、それはそれで尊重するけど、ボクのことを盲信しすぎるのもよくないと思うよ。ボクは結構まちがったりするし、さっきのだってもつとうまいやり方があったかもしれないわけだし」

「先輩の負担にはならないようにします。もし、緋色先輩が間違っていて、私が先輩を信じて不利益をこうむっても運命だと思って受け入れます。緋色先輩を信じずに生きるより信じて死んだほうがいい」

極論お化けな命ちゃん。

でも、それだけ真剣ってことなんだろうな。

ボクは腕を必死に伸ばして、命ちゃんの頭を撫でる。

「命ちゃん。ありがとう」

「ぐ。これが伝説のバブみ……破壊力すごすぎ。私、先輩から生まれたいです」

なに言ってるんだらうこの子は……。子宮はあるけどさあ!

「あ、あのね。命さん。ちよつと目が怖いから離れて。離れてください!」

ススつと距離をとれば、
ススつと近づいてくる命ちゃん。
ベッドから立ち上がる隙も当然存在しない。
ボクがいま切実に欲してるのは、命ちゃん避けスプレーだった。

☆Ⅱ

「じゃあ、しばらくここにいてることでもいいんですね」
「はい……」

レイプ目で答えるボク。

いろんなところを舐められました。

ちなみに唇は大丈夫です。

感染確率の高い唇だけは絶対にダメだと思っし、そこは拒絶しまし
たよ。

偉いでしょボク……。

ほくほく顔で帰っていった命ちゃん。

ボクはまた不貞寝を再開する。身体中がベタベタするけど気にし
ない。コミュニティ内には、実のところお風呂もあるんだけど、今の
状態だと命ちゃんも一緒に入るとか言い出しかねないからやめてお
いたほうがいいに決まってる。ゾンビの出汁風呂とか、絶対にダメだ
と思います。まあ、汗くらいだとほとんど大丈夫みただけどさ。ボ
クってそこまで汗をかかない身体になってるし。でも貞操的な意味
でダメ。

元男のボクのほうが貞操の危機を感じるのはどうしてだろう。
考えちゃダメだ。

去り際に聞いた話だと、大規模な調達任務に向けて、コミュニティ
は動き出しているらしい。

ボクが投げ放ったゾンビ避けスプレーは一度近場で試されること
になったようだ。おそらくホームセンター前で試されるらしい。問
題なければ、そのまま物流センターに向かう。

そこで大型トラックを調達。食糧などを大量に運びこむようだ。

余裕があるなら自衛隊基地に再度向かい、銃を大量に奪取してくる算段になつてる。

「ホームセンター前なら、まあなんとかなるかな」

ゾンビ避けスプレーは単なるフェイクだから、それを振りかけたところで人間の位置がわかるわけではないけれど、ボクの聴力はそれなりに強くなつてるし、ゾンビ的な共感覚でなんとなく人間の位置がわかる。ゾンビが近付いていつてるなつていうのはわかるからね。

離れすぎるとわからなくなるけど。

だから、ホームセンター前で試すのは問題ないだろう。

あとは、ゾンビ避けをどうするか。いまさらボクの血液が入ったお守りを渡すのも変だし、この点は飯田さんを基点にして周囲から大きく遠ざけるしかないかな。

ボクとしては大門さんたちが死んだとしてもしようがないって感じもしてきてるんだけど、このコミュニティにいる以上は、ゾンビ避けスプレーにその効果があるって信じさせ続けなければならぬ。そうでなければ、最終的にボクという存在にいきあたつてしまう可能性がある。

ゾンビマスターなボクにね。

面倒くさいけど、しばらくはそうしよう。

ほとぼりが冷めたら——、お守りを渡してもいいかもしれない。

もしも未来に彼らのことを改めて信じていることができるようになったらだけど、コミュニティに属している限りは、ボクのほうから見限るといふことはあまりしたくない。

それがボクなりの最大限の譲歩であり誠意だ。

このコミュニティに残るのを決めたのは、結局のところ命ちゃんの怪我というのもあるけど、エミちゃんのことを気がかりだったというのが大きい。

「エミちゃんって抗体を獲得してるのかなあ……」

それはよくわからないけど、稀有な事例なのは間違いないだろう。

ともかく健気で偉いエミちゃんが必死にゾンビと戦つてるのを見ると、応援したくなる。ゾンビ避けスプレーのどさくさで伝えるのを

忘れていたけれど、エミちゃんが話せるようになったことをみんなに伝えるべきだったかな。

でもいまさらなにか言い出しづらいなあ……。

なんとはなしの気まぐれで、ボクはエミちゃんの様子を見に行くことにした。

☆Ⅱ

ボクはエミちゃんの部屋の前まで来ていた。

中には恭治ちゃんと姫野さんの気配がする。珍しいな姫野さんがエミちゃんの部屋にいるなんて。

一瞬、部屋の中に入ろうと思ったが、声の調子が剣呑だったから踏みとどまった。

「姫野さん。エミは猫じゃないんですよ」

「これがいいのよ。だって、エミちゃんってあまり口を動かさないうしよ。飲み込ませるには汁モノと混ぜたほうが都合がいいの」

ボクはそつと部屋を覗きこんでみる。

姫野さんはエミちゃんに昼食を食べさせようとしたみたいだ。ボクが部屋の中に引きこもってたから、一時的に姫野さんに命令がくだったのだろう。

それとも、ある程度は自発的なのかな。

姫野さんがやろうとしていたことは、いわゆる猫まんまつてやつで、インスタントの味噌汁とご飯を混ぜこんでから、食べさせようとしていたみたい。いやご飯だけじゃないな。全部だ。おかずとして用意していた数種類の缶詰も全部、流しこんでいる。エミちゃんは嫌そうに顔をしかめ、口元からスープがこぼれていた。

それを見た恭治くんが非難している。

「都合ってなんすか。それは姫野さんの都合でしょう」

「私はエミちゃんに食べさせてるのよ。それなのにそんな言い方をしなくてもいいじゃない!」

「それは感謝してます。でも、もう少しだけ配慮してもらえませんか」

おかずも。なにかも全部が全部。いっしょくたに口の中に入れてる。

まるきり効率重視の食べさせ方。

こんなんじや、味なんてわからないよね。

恭治くんの苛立ちにも正当性があるように思える。

対する姫野さんは、自分が善意でやってやってるのに、なぜ非難されなければならぬのかといった感じだ。怒りのあまり、厚塗りの化粧がひび割れるんじゃないかと思うほど、醜く顔が歪んでいた。

「恭治くん。さつき緋色ちゃんの話でわかったと思うけど、この子感染してるんでしょ」

「エミはゾンビじゃありません」

「ゾンビ避けスプレーでうまい具合にゾンビ的な攻撃性が減ってるっただけじゃないの?」

「嫌がってるじゃないですか。見てわからないんですか。エミには意思があります」

「心が残ってようがなんだろうが、この子がゾンビウイルスに冒されてるなら、危険なのは変わりないのよ。私は、そんな危険も承知で、この子のエサを作ってやってんの」

「いまなんて言いました? エサだと?」

恭治くんの顔が今度は怒りに染まった。

いままでためこんでいた憤懣がマグマのように噴きだしている。

「あ……まちがえたわ。そんなつもりじゃなかったの」

姫野さんがしおらしい声をだす。

「あの、怒らないでね。ゾンビ避けスプレーはきつと恭治くんたちが使うことになると思うわ。でも、私たちにはなんの予防策もないのよ。私怖くって……」

「あんたは自分のことばかりだな」

恭治くんの声は冷たいままだった。

「……恭治くんだって、そうじゃないの。男連中なんてみんなそうじゃないの!」

ヒステリックに叫ぶ姫野さん。

髪を振り乱し怒る様は、さながら怪力乱神か。なんて思ったりする今日このごろです。

「大門さんも、小杉さんも……あんたも、みんな命ちゃん命ちゃんつて、みんなのために身をささげてる私のことなんてすぐに抱ける予備くらいに思ってるんでしょ」

「オレはあんたを抱いてないし、そういうふうに見たことなんて一度もない」

「女なんて何もできないって言いながら何もさせないのが、あんたたちの手口なのよ。ただストレス解消に好きなきに抱かせればいいって思ってる。私は許してあげた！ 私は抱かれてあげた！ それなのにまだ私に求めるの？ なんてみんなそうなのよ。報われただけなの……、私は誰かに褒めてもらいたいだけなの」

ついに泣き始めてしまった姫野さん。

恭治くんはさすがに怒りの感情が吹き飛んだのか、優しく肩に手をかけた。

と——、ここで姫野さんが恭治くんの唇を奪う。

驚きに固まったのは一瞬。

恭治くんは姫野さんを押しつける。

「なにを考えてるんだ。あんたは」

「ねえ。抱いてよ……。抱きなさいよー！」

すげーな。まるでお昼のドラマを見ているみたいだ。

ていうか、これってリアル覗きなのでは？ なんかいたたまれない気分になってきた。

ふと視線を感じて、ちよつとだけ動かすと、エミちゃんと目があつた。

あ、どうも。

エミちゃんはいいかかわらずゾンビらしい無表情なお人形さんのようだったけれど、ボクにはわかった。これ、怒ってますよね？

エミちゃんはボクから視線をはずし、あいかかわらずお昼のドラマを繰り広げているふたりを冷たいまなざしで見つめていた。

その瞳の奥には昏い炎が宿っているみたいだった。

ハザードレベル21

エミちゃんのお部屋で繰り広げられた安っぽいメロドラマから離れ、ボクは自分の部屋に帰ろうとしていた。

「あ、緋色ちゃん……」

通路でばったり出会ったのは飯田さんだ。

申しわけなさそうな顔でボクのことを見て、それから口を開いた。

「その……、ゾンビ避けスプレーについて、あんな結果になって……本当に申し訳ない」

まるで、土下座でもしそうな勢いだ。

飯田さんがもしも、スポーツブラをとりになければ、こんな事態にはならなかったと思うけど、ボク自身は飯田さんに思うところは無い。

それどころか、あらためていい人だなと思ってる。

よければパパって一回ぐらいは呼んであげてもいいくらいだ。

「いいですよ。ゾンビがはびこってる世界です。いつかはバレたと思っていますし」

「しかし、君の生存率をさげてしまった」

「うーん。そうかもしれないけど、一応、コミュニティに守られてるという側面もウソじゃないですから、プラスマイナスはあるかもしれませんが、それも含めてしょうがない面もあると思います」

だって、人間が人間と接するのが生存率を下げるなんて――。

そんな考え方はどこか悲しいと思うからね。

「おじさんが恭治くんを助けようとしたのは偉いと思うよ」

恭治くんの話聞いた限りだと、ゾンビに襲われたとき、もしも飯田さんがそのまま放置したら、恭治くんは噛まれていたかもしれないんだ。

ゾンビ避けできることを知られるかもしれないというリスクを承知で助けたのは、人間らしい素敵なところだとボクは思う。

「おじさんはいい人だね。ううん。かわいいと思うよ」

飯田さんはきよんとしていた。

「かわいいのは君だと思っただが」

「むふん。おじさんっておだて上手だね。頭撫でてもいいよ」

「な、なんだか美人局みたいでこ、コワイな。突然、美少女から触ってもいいと言われるとか」

「美人局って?」

まあ知ってるけど。

「あ、いや、なんでもない……よ」

「ふうん。じゃあどうするの? ボクのこと撫でたい?」

「お、お願いします」

おずおずと伸ばされる手。

自分が誰かを傷つけるのを恐れている手だけど、まあボクの場合は強いし、人間じゃないし、半分くらいは女の子でもないから、少しは怖がらなくていいようにテストプレイぐらいはさせてあげてもいい。

「あ、それとゾンビ避けスプレーはバレたけどお守りのことはみんなには内緒ですよ」

「うん。ああ、わかってるよ」

「そのお守りの効力だけは保証するからね。飯田さんはゾンビには襲われない」

飯田さんは胸元にあるお守りを握りしめた。

そう、そのお守りはボクの飯田さんに対する精一杯だ。

たとえば、ボクがコミュニケーションを離れることになっても、飯田さんとわかることになっても、そのお守りの効力は永続させようと思う。

☆
||

ホームセンター前では、既にゾンビが大挙して押し寄せている。

バリケードを突破するほどの能力はないが、それはボクが眼前で抑えているからという面も大きい。ボク自身にもどうしようもできない無意識の『人間』に対する嫌悪感が、ゾンビという荒波となって押し寄せているようだった。

「数多くなってますね」

恭治くんが顔をしかめながら言った。

「ああ、そうだな。しかし、ゾンビ避けスプレーを試す機会でもあるな」

大門さんの声は弾んでいる。

まるで、新しいおもちゃを与えられた子どものようなのだ。

ゾンビを避ける能力——世が世なら英雄の力と言えるだろうし、大門さんは自分の力が拡大することに本能的な喜びを感じているようだ。

もちろん、そんなのはウソっぱちの能力なだけだ。

リフレツシユシユを一吹きし、大門さんは土囊を乗り越える。その先にある車の屋根に乗って、ゾンビの動きに変化がないかを観察していた。

ゾンビは車の上にいる大門さんに目もくれず、土囊の先にいるボクたちの方へと手を伸ばす。亡者の動きは大門さんをまるで空気のようにいないものとして扱う。

ニヤリと笑い、大門さんは車の屋根の中ごろまで伸ばされているゾンビの腕を踏んづけた。

なにもしてないのに、わりとひどい扱い。

ゾンビはべつに痛みを感じないからいいけど、踏んづけられ、射止められた状態になっても、やはり大門さんを襲う気配はなかった。

「すごいな。これは……」

大門さんが笑っている。

もちろん——、ここで襲いかかるといふ選択もなくてはならない。

今、目の前で起こっている事象は、すべてボクがコントロールしているからだ。

ボクは心のなかのどこかが冷めきっていたけれど、このコミュニケーションに守られている命ちゃんやエミちゃんや存在もあるし、求められるがままに人形師を演じた。

大門さんは車を降りて、ゾンビの大群の中を悠々と進む。

最初は警戒するようだった歩みもどんどん大胆になる。持っている鉄パイプで、意味もなくそこらを歩いていったゾンビを一撃し、昏倒

させた。

「よし。完璧だ。すごいぞこれは！」

大門さんは興奮していた。

もつと言えば、手に入れた力に酔い知れていた。

他の人たちは、ちよつと引いてたように思うけど、本人はおかまいなしだ。

「よし。おまえたちにもゾンビ避けスプレーをかけてやる！ 物流センターに向かうぞ！」

「あ、僕はまた留守番でいいですよ」

小杉さんはそんなことを言って、また辞退をした。

ゾンビに襲われないのは立証されたはずだけど、自分が調達してくるという力にはあまり固執していないようだ。

「トラックの積載量が減っちゃいますし、そもそもゾンビ避けスプレーも使いすぎないほうがいいでしょう」

「む。そうだな……、では、前回と同じく、恭治くん。飯田くん。そしてオレの三名で向かうとするか」

ゾンビが避けられるなら、べつに女の子を外に行かせてもいいと思うんだけど、やっぱり大門さんの中では、女は家のことでもやっていればいいという考えなのかな。まあ、ボクも命ちゃんも引きこもり体質だし、姫野さんは怖がつて外行かないし、エミちゃんに至ってはあまり動けないから、大門さんの言い分にもそれなりに理由があると思うけどね。

意気揚々と向かう三人を見送り、ボクはそつと溜息をついた。

☆Ⅱ

ゾンビがもがきあがくように、人間も生をもがきあがいている。

ゾンビがうめき声をあげるように、人間も慟哭したりする。

でも、人間とゾンビに違いがあるとするならば、それは選択するという力に他ならない。

運命を切り開いていく生きようとする意志こそが、人間とゾンビの

大きな差なのだと思う。

それだけ、決断するというのはエネルギーを使うことなんだ。できれば、人間は決断したくない生き物だと思う。

モラトリアムに、何も決めずすましておきたいし、明日できることは今日やらない。誰かを愛することは誰かを愛さないことだと命ちゃんは言ってたけれど、つまりそれこそが選択し決断するということなのだと思う。命ちゃんの生き方をすべての人間が適用することは不可能だと思うけれども、一振りの刀のように綺麗な生き方だ。

じゃあ、ボクはどうなんだろうな。

ボクって大学生をしてただけど、それって言ってみればほとんど惰性で、なんとなくそうなったというだけで、べつにこうしたいという意志があつたわけじゃないし、この道を行くんだって選択があつたわけじゃない。

ボクは何もしてこなかった。

何にもなろうとしなかった。

命ちゃんや雄大は大事な人だけど、本当の本当にオンリーワンな人っていなかったんだ。ボクという存在をまるごと投機してもいいと思えるような、そんな人をあえてつくらなかった。

つまり、ボクは選択してこなかった。

ボクはずっとずっとゾンビのように、生きてるのか死んでるのかもわからない生を送ってきたんだ。

だから――。

だから。

ボクは。

選択することに慣れてない。

☆Ⅱ

大門さんたちが出かけていったあと。

ボクは動画サイトを適当に見て、だらだらと過ごしていた。こんな世界になっても動画を作ったり、ボカロの音楽を作ったりしている人

はいる。

誰が見るかもわからないのに、ここに自分はいるよって宣言してるみたいだ。

そんな人間の儂い活動に、寂しさを紛らわせながら、ボクは今後のことを考えていた。

そして、なんとなく気分で立ち上がり——、
命ちゃんの部屋に行こうか、それともエミちゃんの部屋に向かおうか。

そんなことをぼんやりと思考しはじめたとき、それは起こった。

「あああああああああああああああああああああつ！」

絶叫だった。

幼い感じから、すぐにそれがエミちゃんの声だと気づいた。

「な、なに？」

ボクはすぐに立ち上がり、エミちゃんの部屋に向かう。

はつきり言つて、声の調子だけでわかった。

生命の危急を思わせるような、自分の存在を精一杯主張するような。全存在を賭したような。

ありふれた言い方をするならば。

——断末魔。

という言葉が脳内をかすめた。

最初の叫びのあと、今度は姫野さんのなにやら喚く声が聞こえる。
エミちゃんのほうもうなるような声をあげているから、べつに死んだとかそういうわけじゃないらしい。

でも、この声には心臓をわしづかみにするような興奮量がある。すぐに向かわなければ何か大変なことが起こるような気がした。

入り組んだ構造をしているホームセンターの中を進むのがもどかしい。

「緋色……先輩！」

エミちゃんの部屋まであと少し。

ちょうど、ホームセンターの中心あたりに位置する岐路にさしかかったときだった。

今度は命ちゃんのかぼそい声が聞こえた。

おそらくボクじゃないと聞こえなくらい小さな声。

それきり声は聞こえなくなったけれど、ボクの超人的な聴力は、命ちゃんの心音がこれ以上ない高まりをしているのを感じ取る。

近くには小杉さんの気配。

また、なのかもしれない。

小杉さんに襲われそうになった命ちゃんの様子がフラッシュバックする。

そして、ボクはその場にたちすくむ。

命ちゃんの言葉。

——誰かを愛することは誰かを愛さないことなんですよ。

だから、選択しなければならなかった。恋愛ゲームだったら、ここですら選んではいけない。あとでロールバックすればいい。

でも、人の生における選択は一度きりだ。

命ちゃんとエミちゃん。どっちもボクにとっては大事な存在だ。

危機が迫っている。選択しないという選択はこの場合、両方救えない最悪の選択だ。

ボクは、

ボクが選んだのは——。

★
||

僕はまちがっていない。

僕はよく、あなたは人の心がわからないとか

あなたは自分のことしか考えてないと言われたことがある。小学生のころから、中学生、高校生、果ては大人になってからも、しよつちゅう言われている。

もしかすると、人の心が根本的などころでわかっていない何らかの脳障害を抱えているのかもしれない。

だけど、僕が思うに。

誰だってそうだろう。

人には自己保全の本能が根ざしている。もともと脳という機関は自分のことが一番好きなナルシストだ。他人が死にかけているからといって、それが自分じゃなければどうだっていいというのが真実の脳の姿だ。

そうだとすれば、他人のことを考えろと主張する者こそ、一番自分のことしか考えていないんだ。

人のことを配慮しろとか他人の気持ちを考えろとか、よく言うてるやつら。

やつらは結局のところ「オレが一番強いんだからオレを配慮しろ」とか「オレには弱者の妹がいるのだから配慮しろ」というばかりで、その実、本当の他人である僕のことなんて考えていない。

だから、さ。

僕だって好き勝手したっていいだろう？

「また、何か用なんですか。小杉さん」

命ちゃんは、そのような俗世とは隔絶したような美しくかわいらしい少女だった。

例えば、白雪のような。

人に踏みしだかれる前の柔らかな白。

スカートから覗くふとももは誰にも触られたことがない雪のような白さを誇っていた。

僕は言う。

「そんなに冷たい声をださないでほしいな」

「前にも言ったとおり、私はあなたとは一秒もいつしよにいたくありません。すぐに私の目の前から消えてください」

「緋色ちゃんだけどさ……」

命ちゃんがピクリと反応した。いいぞ。

「あの子ってひどいよね。自分がゾンビに襲われない状況にありながら、それをみんなに黙っていたんだからさ」

「緋色せ……緋色ちゃんを悪く言わないでください」

命ちゃんは普段何事にも冷徹な、まるで機械か人形のような女の子だったが、緋色ちゃんのことになると声色が変わる。

まるで心を取り戻した人形のように、瞳を輝かせ、あたたかいまなざしになる。

だからこそつけ入ることができる。

他人に配慮するのは当然だからね。

「君は前に緋色ちゃんの保護者だと言ったよね」

「それが……なにか」

「言ったよねえ」

「だからなんなんです」

「僕はこうも言ったはずだ。子どもの責任は保護者の責任だとね。緋色ちゃんの不始末は君が補填する必要がある」

「緋色ちゃんは、ゾンビ避けスプレーを差し出しています。このコミュニケーションに十分な貢献をしているように思えますが？」

絶対零度というのも生ぬるい視線だ。

まるで、僕のことをゴミか、価値がないものを見るようなまなざしだった。

ふざけるな！

周りの人間は誰も僕のことを便利なやつだと考えている。割を食った人間の気持ちなんか考えていない。ひとりよがりで、自分勝手なゴミ屑はそっちのほうじゃないか。

「命ちゃん。いい加減にしてくれないかな」

「その銃はなんのつもりですか」

「大門さんも言ってたじゃないか。力だよ。僕は君に教えてあげようと思ってる。どれだけ君が僕に赦されているのか、守られているのか」

「反吐がでますね。撃ちたければ撃てばいいでしょう」

「撃てないでも思ってるのか！」

「大門さんもさすがに銃を撃つたら黙ってないでしょう」

「そんなのどうとでもなるさ……。なあ命ちゃん。僕は君のことが好きなんだよ。必死こいて媚びを売ってる姫野より、よっぽど綺麗な生き方をしている」

「狂ってますね」

「ああそっだよ。僕はもうすっかり狂ってるのかもしれない。もしかすると、君に拒絶されたら悲しさのあまり緋色ちゃんを殺しちゃうかもしれないし、君のことも傷つけちゃうかもしれないんだよ。かしこい君ならわかるだろう。どちらが賢明な判断か」

そのとき。ホームセンターに叫び声が響き渡った。

どこかのゾンビ娘が狂態をさらしているのだろう。

視線を戻し、命ちゃんを見つめる。

「……わかりました」

勝った！

僕は全身が震えるほどの歓喜に包まれるのを感じた。

僕は銃をおろし、命ちゃんに近づく。

と——、肩が熱かった。

焼けたような熱さを感じ、そちらに視線をやると、銀色をしたナイフが僕の肩に突き刺さっている。命ちゃんは何の情動も感じさせない鋼鉄のまなざしで、僕を敵と見定め、確実に狩ろうとしていた。

僕はよろめきながら後退し、銃を何発か撃つ。

「みことおお。いてええええええだろっがあああっ!! このクズが！
クソガキがあ！」

命は既に走りだし、背後の通路に駆けこんでいる。

執務室に向かい、立てこもるつもりだろう。

だが——開かない。

命はガチャガチャと何度か焦ったようにドアノブを回しているが、すぐに何かに気づいたらしくバックヤードのほうに逃げ出した。

僕は煮えくりかえった頭の中が、すつとペーミントのかおりに包まれるような清涼感を覚えた。あと数十秒ほどで命はおびえた姿をさらすだろう。その予期に。その近未来に。

歓喜が抑えきれない。

たいしたことではなかった。

洗濯場の背後にあるのは、執務室へ向かう通路と、その反対側のバックヤードに向かう通路しかない。

神崎命は機械のようにきっちりした性格をしていて、与えられた業

務を同じ時間にこなす。だから、僕は執務室に入って、ドアに鍵をかけておいた。

バックヤードにつながるドアは裏口から入って、鍵をかけておいた。

僕はこのホームセンターの店長だ。

やつはもう袋のネズミだ。

「さあ。鬼ごっこは終わりだよ。おとなしくしておけば、銃は使わない」

通路の間に追い詰められた命は、僕を視線で殺すかのようににらんでいた。

僕は楽しくなってくる。

「さつき銃を使ったから警戒しているのかな。これはしかたないよ。君がナイフを使ってくるから正当防衛したまでだ」

命は、きよろきよろと周りを見渡し、僕のことを見ようともしない。

一言も会話をかわそうとしない。

僕は肩の痛みが熱さに変わり、再び脳が煮たつを感じた。

「無視をするなよっ！」

「ねえ……」

その声は、心とろかすようなかわいらしさを有しているようだった。

だけど、僕にはなぜかそれが地獄の底から聞こえてくるようだった。

振り返ると、紅い眼が薄暗がりの中で光り、不敵にほほ笑む緋色ちゃんの姿があった。

☆
＝

「あのさあ……。おまえ、なにしてるの？」

「あ？」

「命ちゃんに、なに銃つきつけてんの？」

「こいつはね。僕にナイフを突き立てたんだよ。だから、教育だよ。」

大人としてね」

「わかった。もう黙れよ」

命ちゃんは通路の際で追い詰められていて、そんな命ちゃんにこいつは楽しそうに銃をつきつけていて、つまり、こいつは殺してもいいゴミだということとで決定した。

ボクの中で、完全に、無価値になった。

「大人に、黙れとか、そういう口を聞くのはよくないな。君にも教育が必要なようだね」

「……教育？」

「そもそも、君は人のことを考えられない配慮が足りない子だよ。みんながゾンビに震えているのに、君だけは、あのゾンビ避けスプレーを使って悠々自適な生活をしていたわけだ」

「知らないよ。おまえとボクとは関係がないだろ」

「同じ人間じゃないか」

「人間どうし博愛精神をもてつて？ お前のしてることはそれとは真逆じゃないか。暴力でどうしようしよとしないうちはまだ許せても、力で強引にねじふせるなら、それはもう人間としての価値がない」

「おまえもっ！ 僕を無価値だつていうのかよ！ メスガキが！ 殺すぞ！」

小杉はボクに銃を向けた。

完全にタガのはずれた小杉は、躊躇なく引き金をひいた。

銃弾の軌跡がスローモーションでみえる。

一発。二発。

地面をけり上げて、壁を伝うようにして、走る。

ちようど、いいところに怪我してたから、ボクは右の手のひらを小杉の肩に差し入れた。

おめでとう。ボクの初めてをあげるね。

「いってええー！ クソが……山猿かよ」

小杉は銃を持ち上げボクを狙う。

もう遅い。おまえはもう死んでいる。つていう雰囲気じゃないな。

怒りと憎悪と劣等感とどうにもならない他人という存在に、僕の脳はぐちゃぐちゃに混線していた。殺す。殺す。殺す。

無限の殺意が湧いてくる。殺す。

銃口を向けた。足や肩じゃない。人体の枢要部位に確実に狙いを定めた。

先ほどは有りえないほどのスピードだったが、もはや数メートルも離れていない。この距離で乱射すれば、絶対にはずれることはない。

オートマティックピストルの弾数は全部で16発。いままでで数発は撃ったが、あと十発程度は残っているだろう。

この距離で十発。

絶対にはずさない。おそろしく整った顔立ちの緋色をぶち殺すことに、わずかながらもつたいなさを感じたが、しかし、そういった綺麗なものを壊して、破壊してしまうことに、かさぶたを無理やり剥ぎ取るような下卑た快感が生じた。

ひ。ひ。ひ。

死ね！ おまえが悪いんだ。

「あ。銃はおろしてね」

場違いな声だった。

なにを言ってる？ 緋色は銃口を向けられても微風を受けたようにニコリと笑っている。

子どもだから殺さないとも思っているのか？

僕の腕が下りた。

あ？

僕の腕は僕のものなのに、なぜか思いどおりに動かなかった。

「残念。小杉さんの冒険はここで終わってしまった！」

無邪気にケラケラ笑う緋色。

なに、なにがどうなって、あ、れ。

よくわからない。

「あのね。言っただけ、ボクってゾンビなんだよね」
は？

何を言ってるんだ。こいつ。こんなゾンビがいるかよ。人間の言葉話して、人間らしく振舞い。体温もあり、物を食べ、笑う。まるきり人間だ。

しかし、僕の意識のなかで、その言葉の意味が急速に理解される。「おまえもゾンビにしてやろうか？」

ゾンビ。感染。ゾンビに。

僕はゾンビに。いや。うそだ。いやだ。

身体が動かない。意識がかすんでいく。いやだ。いやだああ。

死にたくない。いやだ。死にたくない。どうして僕が。いやだ。

ゾンビ。人間じゃなくなる。意識がなくなる。

僕がどうして。死にたくない。死にたくない。死にたくないよお

お。いやだ。助けて。助けてくれ。なんでもする。死にたくない。

怖い。助けてくれ。誰か。誰か。僕がなにをした。僕は虐げられて。

価値がない。助けて。いやだああ。ああ。意識が。薄れ。

怖い。ああ。冷たい。暗くて。何も見えなくて。

耳も聞こえなくて。暗い。水のように。体温がなくなて。

腐って。冷たくて。暑くて。サムイ。怖くて。誰か。誰か。死に

たくない。いやだ。誰も助けてくれな。痛い痛い痛い。崩れる。あ。

死にたく——。

☆
||

「うーん。終わった？」

パソコンのインストールが終わったみたいだ、そんな声色でボクは確認してみる。

うーむ。ボクってゾンビの上位種なんだよね。たぶんだけど。

そうすると、ボクの体に流れるゾンビウイルス的なものも当然、上位ウイルスということになる。

ノーマルなゾンビウイルスは下位に位置していて、ボクは一度ゾン

ビウイルスに対して、命令をくだしているというような感じになるかな。リモートコントロールなわけね。通常は。

★
||

☆
||

だから何が言いたいかというのと、ゾンビウイルスに比べて、ボクのウイルス——仮称、ヒロウイルスに感染した個体については、ボクの命令がよりダイレクトで届くってことになるわけですね。

★
||

☆
||

したがいまして、何が起こるかという——。

「あ……あれ？ なにが起こったんだ？」

と、小杉さんだったモノ。面倒くさいから小杉さんって呼ぶけれど。

中身はまるきり異なる。

ヒロウイルスに感染した個体は、ボクの中ではたいしたプログラムの必要なく、生前と同様の行動をとらせることができるみたい。こくなることは予測してなかったよ。もしだめだったら、普通に死体遺棄するしかなかったからね。まあそれでもよかったけれど。

「先輩。なにが起こってるんです？」

命ちゃんが警戒しながら近づいてきた。

「たいしたことないよ。ボク、ゾンビなんだ」

「そうなんですか。世界一かわいいゾンビですね」

「あの怖がったりとかは？」

「するわけないじゃないですか。たまたま愛した人がゾンビだっただけですよ」

＝＝＝
＝＝＝
＝

ゾンビとの恋愛

ゾンビとの恋愛を描いた作品といえば、『ウォーム・ボディーズ』だ。シャイなゾンビが人間に恋するという物語で、主人公は自分がゾンビだから価値が低いと思っているシャイガイである。ゾンビ主観で話が進むことから、この作品はロメロ系などのゾンビ襲われものとは趣が異なる。でも、主人公の初々しさが非常に良い作品。

＝＝＝
＝＝＝
＝＝＝
＝＝＝

「で、これは？」

命ちやんが指差した先は、ぼんやりと宙を見つめている小杉さん。

「小杉さんのなにか」

「ふむ……」

「小杉さんだった系の物体」

「おお……」

「あの、ふたりしてなに言ってるんですか？」と小杉さんの形をしたオブジェクト。



＝
＝

☆
＝
＝

「つまり、いまのコレはなんの情動も心も意識もないけれども生前とまったく同一の振る舞いをしている哲学的ゾンビということになるのですね」

「うん。そうだよ」

＝＝＝
＝＝＝
＝＝＝
＝＝＝

哲学的ゾンビ

生前とまったく同一の行動をおこなうが、クオリアが存在しない。

言ってみれば、超高性能のロボットのようなものだが、意識や心と呼ぶもの、つまりクオリアの存在は誰にも証明できないので、そもそもクオリアがないと言われてもそれは外部からはわからない。

＝＝＝＝＝

「でも、小杉さんが生きていて、単純に緋色先輩が催眠術か何かで操っているだけってことも考えられますね」

「うん。まあそれはそうだね。クオリアの有無なんて、神様の視点じゃないとわからないわけだし。ある意味、一番残酷な殺し方しちゃったかも……」

「先輩。ありがとうございます。私はたぶんあのままだったら、コレに犯されて殺されてましたから。先輩が罪悪感を抱いているのなら、私がコレ、処分しますよ」

ナイフを持って、にこやかに笑う命ちゃん。

ボクとしては、もう小杉さんは死んじやってるので、いまさら肉体を破壊しても意味がない。それに初めての殺人だったわけだけど、たいていダメージを受けているわけじゃないかな。

「べつにいいよ」

「コレについてはどういふうな行動制限をかけることができるんです」

「ボクたちの情報は漏らさないし、人間は襲わないし、食事もしていいし、生存に関わらない限りでは、自分勝手に行動してくれていいって感じ。ああそうだ。なんかあとあと面倒くさそうだから、このホームセンターからは誰かからいっしょに来てくれって言われないうり、ひとりでは出ないようにしようか」

★＝

☆＝

「まあそのあたりが妥当ですね」

「あとは、適当に血をふいて、通常業務に戻ってくださいーい」
「わかりました」と小杉さんは何事もなかったかのように自分の部屋に戻っていった。

それから後。

ボクは命ちゃんを選んだ結果について……、つまりエミちゃんを選ばなかった結果について、少なからず後悔することになる。

ハザードレベル22

一言で言えば、串刺し。

そう形容するほかない光景だった。

串刺し公ヴラド・ツエペシユは戦争で相手を殺したあと、その死体を貫いたらしいが、ここでいう串刺しは、あえて何かに喩えるのならば、キリストが十字架にかけられたあと、ロンギヌスの槍で貫かれるさまに似ている。

どこかそれが人形めいて見えるのは、そのような状態にあつてなお綺麗すぎたから。ほとんど物言わぬ少女が本当に物言わぬ存在になり、人形のようになってしまうていたから。

つまり――。

エミちゃんは――、鈍色をした鉄パイプで身体を中心あたり、ちょうど胸骨あたり、その内側に心臓があるあたりを貫かれていた。

着ていた洋服には真っ赤なバラが咲いたかのように鮮血が広がっていて、ベッドの端まで飛び散っている。

少女の肌の白さと、血の赤の対比。

それもまたひとつの絵画のような美しさがあつて、場違いなことに、ボクは綺麗だと思つてしまった。

両の手をしばっていたロープのうち、右手のほうははずれていたが、鉄パイプを抜こうとすることもなく、まるで何かを求めるかのように虚空へと伸ばしている。

その瞳は白内障にかかったかのように、ひどく混濁していて、口元からは軽い唸り声が漏れている。

誰の目からもあきらかなとおり、エミちゃんは死んでいた。いや、あるいはゾンビになつていたといふべきだろうか。

ホーム内に残っているのは、ボクと命ちゃん、そして小杉さんと姫野さんの四人、そして被害者のエミちゃんなので、小杉さんにアリバイがある以上は、当然この事態を引き起こしたのは姫野さんということになる。

けれど――。

「どうして？」

その問いは、部屋のすみっこで震えている姫野さんに対するものではない。

「どうして……？」

ここでの問いかけは、エミちゃんに対するものでもない。

「どうしてなんだよー！」

ボクが選んだから？

そういう因果はあるだろうけれど、ボクはすべての因果を鳥瞰するような神様のような視点は持っていない。

だから、この憤懣は。この怒りは。この悲しみは。

もしもいたらだけど、神様に対してのものだ。

「先輩。ひとまず……部屋をでましよう」

命ちゃんがボクを誘導するように言った。

確かにそのとおりかもしれない。

この殺人現場を保全するという意味あいでは正しい選択だ。あるいは、ボクはこの現場の犯人である姫野さんも怒りにまかせてゾンビにしてしまえばいいのかもしれないけれど、事情もわからないのに、ただそれだけで殺してしまうというのは、あまりにも杜撰に感じた。ボクは人を殺しちやつたかもしれないけれど、それだってちゃんとしたボクなりの基準というかモラルというか、そういうものにもとづいての行動であって、誰でもかれでもゾンビにしてしまえなんて思っているわけじゃない。

ひとりもふたりも同じだなんて思っているわけでもない。

ボクは殺人鬼ではない。

姫野さんを殺してもいい程度の憎悪は沸いたが——。しかし、道端のダンゴ虫のように身を小さくして、ガタガタと震えている姫野さんを見ると、どうしても、殺すという決断をするだけの閾値を越えない。このまま部屋をあとにして、みんなの帰りを待つのもいいけれど。でも……せめて。

「パイプ抜いてあげないとね……」

「ま、待ってー！」突然大きな声を出す姫野さん。「危険よ。そいつはゾ

ンビなんだから」

「ううん？ ゾンビにしたのは姫野さんじゃないの」

「ち、違う！ そいつが襲ってきたから」

「そのシーンは見てないからなんともいえないけど、でも、姫野さんとしては、エミちゃんが最初からゾンビだったってことで本当にいいの？」

「……っ」

姫野さんは絶句していた。

それもそのはず。

だって、エミちゃんがもともとゾンビだったとしたら、ゾンビに傷つけられたものはゾンビになってしまおうというのがこの世界のルールだからだ。

姫野さんは右腕のあたりを薄く引つかかれていた。

ひっかき傷は、右腕数センチ程度。

この暗いホームセンター内でも、ボクにはわかる。

人間の血の匂いは特にわかるんだ。

姫野さんの右腕は薄赤くにじんできて、血の匂いがわずかにする。ボクの見立てでは、エミちゃんは相当程度人間として回復していたから、ゾンビウイルスを駆逐できていたか、あるいはゾンビウイルスに対抗できるようになっていたとも考えられるので、姫野さんが引つかかれたからといって即座にゾンビになるわけではないと思う。

なんとなくだけど、姫野さんが負った傷程度ではギリギリ感染しないような気がする。だけど、それを教えてあげる義理はないし、ゾンビバレしないように伝える方法もわからない。

姫野さんにとっては、当然ながら感染したかもしれないという恐怖から震えていた。

どういう経緯で、エミちゃんを殺してしまったのかはわからない。

姫野さんが言うように、エミちゃんが襲ってきたのかもわからない。ただ見たままの事実でわかるのは、床に転がっている白い御椀状のお皿。その近くには、またいつかのよう猫まんま状態のおかずもご飯もなにかもいっしょくたになったようなスープがこぼれている。

エミちゃん……嫌がってたもんね。

あるいは、お兄ちゃんが姫野さんに苛められていると思ったのかもしれない。この部屋で姫野さんは無理やり恭治くんにキスをした。

その様子をじっと観察するように見つめていたエミちゃんには、ほのかな嫉妬心というか、よくわからないけれど、負の感情があったように思う。

今となつてはすべてが遅いことではあるけれど。

姫野さんが沈黙したままだったので、ボクはゾンビパワーで鉄パイプを引き抜いた。血が飛び出るなんてこともなく、ゾンビ的にある程度固化しているのか、本当に人形のような感覚だ。

ただ、胸の中心には浅黒い大きな傷跡ができていて、ひび割れた人形のようにも思えた。

「痛かったよね。エミちゃん……」

鉄パイプを抜いたあと、ボクはロープでエミちゃんの腕を縛りなおした。

エミちゃんがゾンビになつてもボクに襲つてこないのは当然として、ほとんど抵抗がなかったのは、わずかながら人間的な要素が残っているからだろうか。

どちらにしろ、自分のことで精一杯の姫野さんは、ボクが襲われないうちに気づきもしない。

「いやだ。ゾンビに……なりたくない……いやだ」

涙を浮かべながら姫野さんは壊れたテープレコーダのように何度も繰り返し返している。テープレコーダ持ったことないけどね。そういう比喻ってなんでか使っちゃうよね。

姫野さんの回復を待たせていてもしょうがないので、ボクと命ちゃんは部屋を出ようとする。

「ま、待って」

またも声を張り上げたのは姫野さんだ。

「なあに？」

と、ボクは聞いた。

「あの……お願い。みんなには黙っていてほしいの」

「なにを？ エミちゃんを殺しちゃったこと？ それとも姫野さんがゾンビになっちゃうかもしれないこと？」

姫野さんの瞳に憎悪の焰が宿るのがわかる。
わかっているよ。

ボクの言い方が悪いよね。

でも、ボクだっていらついてないわけじゃないんだ。

言うなれば、大事な宝物をむちゃくちゃにされてしまったような、そんな残念な気持ち。

復讐するは我にあり、とまでは言わない。

だって、それは恭治くんの権利だろうから。

ボクはあくまでエミちゃんのことがお気に入りで、エミちゃんが人間としての凄みを見せてくれたから感謝していたに過ぎないから。

「ねえ。姫野さん。こんな状況になってしまったんだし、他のみんなに隠し切るのは無理だと思うよ。それこそ——、エミちゃんはいまはまだ生きているかもしれないけれど、あるいは死にかけてるから積極的に襲ってこないかもしれないけれど、いずれ本格的にゾンビになっちゃうんじゃないかな。ゾンビだと知らずに近づくと危ないかもしれないでしょ」

「それは……っ」

「経緯はどうかであれ結果をもたらしたのは姫野さんなんだし、責任はとるべきじゃないかな」

姫野さんの表情がこわばった。

「私は悪くない！ この子が襲ってきたから！」

「だったら、みんなにそういえばいいでしょ」

「恭治くんに私、殺されてしまう」

銃を持つてるし、と小声でつけくわえる姫野さん。

まあ、確かにそういう可能性もなくはないかな。

「自分が正しいことをしたと思ってるんだったら、そう伝えるほかないでしょ」

どういうふうに解釈されるかは相手次第だけだね。

「事故……、そう事故だったのよ。ここまでするつもりはなかったの」

鉄パイプを心臓に生やすのが事故ね……。

「仮に事故だったとしても、事実をそっくりそのまま伝えるほかないでしょ」

「ふたりには、事故だったって証言してほしいの」

「ボクたちはそのとき現場にいなかったんだから、何もいえないよ」

「それくらいいいじゃない！ 私は生きているのよ。まだ死にたくない。誰にも殺されたくないの」

大粒の涙を浮かべ、姫野さんの厚化粧はボロボロに溶け出してしまふ。美醜感覚はこの際どうでもいいことなのかもしれないけれど、完璧にゾンビになってしまったエミちゃんよりも、正直なところいろいろと厳しい感じですよ。

「まあ……、姫野さんの気持ちもわからないではないけれど、ボクにも命ちゃんにもなんのメリットもないしね」

あえて突き放すように言った。

こうでもしないと、ダラダラと延々言い訳を聞くことになりそうだしね。

話は終わり。

ということ、ボクは部屋をあとにしようとする。

「あんたたちは……私がいたから身体を売らないですんだんじゃない！ あんたはメリットがないって言ったけど！ なんにも知らない小学生のガキだろうから教えてあげる。男はいつも女とセックスしたがるだけの猿なのよ。こんな世界になったんだから、あんたぐらの年頃の子だってひとつ間違えばそうなつてかもしれない。そこにあんたも！」

命ちゃんを指差すなよな。

ていうか、見た目小学生相手にわりと赤裸々に語りすぎじゃないですかね。

姫野さんの髪はかきむしったせい、縮れまくり、わりと哀れなことなっていた。

「私があんたたちのために文字通り身体を張ってあげてたの。少しは私のことも考えてくれていいじゃない」

「それは姫野さんが勝手にそう思ってたただけだよ。ボクはべつにそうしてほしいって頼んだ覚えはない」

「そうやって、大人が影でがんばってるのを知らないふりして利益をむさぼってるからガキなのよ。ぴーぴーさえずってさえいれば、ただかわいいだけでエサを運んでくれてると思ってるの。どいつも！こいつも！」

だから『エサ』だったわけね。

エミちゃんのご飯も。

「姫野さんが姫野さんなりにがんばってたっていうのはわかったよ。でも、姫野さんのしたことに対しては、ボクはボクなりの感謝しか返せないし、いまこの場で起きたことに関して嘘をつくほどのものじゃないかな」

ていうか、小児性愛者から迫られたら、もちろん抵抗するよ。拳で。

姫野さんの『仕事』はやっぱり彼女自身の選択の結果であって、ボクや命ちゃんに感謝を強制されるようなものじゃない。

「姫野さん。あきらめてよ」

「こいつ……」

姫野さんの綺麗なネイルアートがゆっくり近づくのが見えた。

避けるのは簡単だけど、あえてボクはされるがままにした。もしもボクが普通の人間だったら、姫野さんの爪が首元に食いこんで感染ということもありえるだろうけれど、万が一にもそんなことは起こりえないから安心です。

まあ、姫野さんは感染してないけど――。

「……」

命ちゃんが無言でナイフを構えるのが見えたけれど、この子アサシンでも目指してるのかな。姫野さんの背後から迫ってきてるから、ちようどボクからは丸見えの構図になって、首絞め状態でちよつと意識がぼわんとしてきたところに能面のような白い顔がめちやくちやこわいです。リノリウムの床を音もたてずに忍び寄るとか忍者か君は。

ボクは命ちゃんを手で制し、そのまま姫野さんの腕を掴んだ。

ゾンビパワーで無理やり引き離す。

ヒロウイルスに感染させてもよかったけれど、先にも言ったとおり、ボクには彼女の行く末を裁定するほどの権利というか関係性が無い。

ドンと軽く蹴り上げて、姫野さんの身体をパーテーション際まで吹っ飛ばした。

気絶もさせるとか、ボク優しいかも。

少なくとも寝ている間は、死の恐怖もないだろうから。

☆
☆

大門さんたちが帰ってきたのはそれから三十分後だった。

晴れやかな英雄の帰還。

けれど出迎えるのはボクと命ちゃんのふたりだけだ。

あ、小杉さんのなゾンビも一応出迎えてるよ。

見た目人間だし、枯れ木も山のなんとやらだ。

大門さんは大型トラックで、雑に数体のゾンビをひき殺しそのままホームセンターの入り口近くに横づけする。

いま停車している車数台を移動させないとトラックを横づけするのは難しい。荷物の搬入もこの状態だと結構厳しいものがあるかもしれない。

ひとまずは一抱えもある大きなデイパックをかついで、みんな帰ってきた。大門さんなんか、大きなデイパックを両肩に二つもかついでいる。肩に食いこんでいる様子からは、相当な重量があるんだろうなと思わせる。飯田さんはひいふういいながら、ボクの姿を見て手を振った。

「無事、帰還したみたいですね。どうしてゾンビを操って殺さなかったんですか」

「あのねえ。命ちゃん。ボクってそんなに外道に見えるかな」

「いえ、かわいさ全振りなんで外道ポイントはゼロですね。それはともかくとして、私の基準値としては大門さんもかなり敵よりのぎりぎ

りニュートラルって感じですよ。なんなら殺してもいいくらい」

「飯田さんと恭治くんは？」

「まあ、私と先輩の恋路を邪魔しないなら、生きてても別にかまわな
いって感じですよ」

「うーん……」

無慈悲すぎませんかね。

選ばれなかった者たちの末路って悲惨だ。

でも、選ばれたらしいボクはまだ命ちゃんを選んだわけじゃない。

そのあたり曖昧。

ボクはどこまでも決断したくなくて選択したくなくて、選択の結果、誰かが傷つくのが怖いんだと思う。

そして、それは飯田さんと同じく最終的には誰かを傷つけた自分のことが怖いのもかもしれない。

エミちゃんを選択しなかった結果、エミちゃんがゾンビのほうに引き戻されてしまったことは、既にそうなってしまったことであるし、どうしようもないことだけど、責任も少しは感じている。

正直なところ後悔があった。命ちゃんを助けに行つたことを後悔しているんじゃないかと、エミちゃんを救えなかったことを後悔しているんだ。

だから、恭治くんが晴れがましい顔で近づいてきたとき、ボクは急になにも言い出せなくなってしまうた。

「あの……」

「ん。緋色ちゃん。どうしたの」

ちくしょう。勇気だせよ。男だろ。

口下手にもほどがあるぞ。

「うん。何かほしいものがあるか聞きたいのかな。今日は大収穫だから——」

うれしそうな声で言う恭治くんにますます何もいえなくなつていくボク。

どうしよう。どうしよう。どうしよう。

「エミちゃんが姫野さんに刺されました」

横に視線をやると、命ちゃんが淡々と状況報告していた。

言い出せないボクの代わりに、あえて口を開いてくれたのだろう。

感謝の気持ちと、命ちゃんに対する申し訳なきが同時に湧いてくる。

ドサ。

デイパックが地面に降ろされる音が聞こえた。

そのときの恭治くんは怒りや憎悪や困惑やありとあらゆる感情が一瞬で混ざった形容しがたい表情になっていた。

ただ——、行動は早かった。

「エミ……」

恭治くんはスポーツ選手らしい身体能力で、地面をけりつけるようにホームセンター内に駆け出していった。

ボクたちがエミちゃんの部屋に入ると、このように形容するのが正しいのかはわからないけれども、エミちゃんは本格的に死んでいて、だらんと腕は力なく垂れて、うなり声もあげず死体のように目を瞑っていた。

恭治くんは、ゾンビになったエミちゃんに噛まれる恐れがあるにも関わらず、小さなエミちゃんの身体をかきいだいて、静かに泣いていた。

ゾンビになるプロセスは一度『死』をはさむ。

そうなることで、表にある『生』が裏側にひっこみ、『死』が顔を覗かせる。

エミちゃんはスツと瞳を開き、ゾンビの本能なのか自分のほうへ引き寄せるように恭治くんの顔を抱きこんだ。

それから——、エミちゃんの口が大きく開き、恭治くんの首元へ。

——生まれ。

ゾンビモノでありがちな家族に噛まれるとか勘弁です。

口をあけたままの状態でぼかんとしているエミちゃん。

大門さんは危険だと思ったのか、そつと恭治くんを引き離した。

エミちゃんへの悲しみは、一度距離をとることで、今度は憎しみの炎へと転換したらしく、恭治くんの顔が般若のように歪んでいく。

「ころしてやる……。ころしてやる。姫野！」

いつのまにか腰元から抜き出した拳銃を血がでるんじゃないかと思うほど握り締め、手元をブルブルと震わせている。

「おちつけ恭治くん」と大門さん。

「あいつは抵抗できないエミを殺したんだ。だったらオレも殺す！」

その発言とほぼ同時に。

大門さんは恭治くんを殴りつけた。

ものすごい音がして、恭治くんは床に昏倒した。

「落ち着けといっている。ともかく事態を把握しなければならん。勝手に殺したりすると秩序に関わる。わかったな！」

ビリビリと空間を震わすほど大喝し、大門さんは命令した。

恭治くんは殴られたことで、少し意識が飛んでいるせいか、興奮状態が若干治まったようだ。

大門さんは小杉さんに命じて、姫野さんを連れてくるように指示する。

姫野さんは自分の部屋に寝かせてあるけど、そろそろ起きてる頃だろう。

「銃は一度オレが預かっておく。いいな」

うなだれたまま何も言わない恭治くん。

大門さんはすばやく拳銃を奪い取った。

これで恭治くんが姫野さんを殺す手段は、ひとつ減った。

でも、胸のうちで膨らみきった殺意は消えそうにない。レイジウイルスに冒された人間のように、下手すると殴って殺そうとするかもしれない。

それほどに今の恭治くんは黒いオーラのようなものをまとっていた。

ハザードレベル23

姫野さんの言い訳は、まあカットしてもいいだろう。それはボクが聞いた話と大差がなかったし、恭治くんがどう感じるかも結局のところわからないからだ。

これもまたクオリア——感じ方の異なるわけで。

他人の感じ方自体は観察しようもないから、外部的に表出された表情や動作、口調の強弱、そのほかもろもろの反応パターンを見るほかない。

究極的には脳みそが見ている画像を外部出力してパソコンで見れるようになったとしても、それは脳の出力の結果を出しているだけであって、クオリアそのものを観察できるわけではない。

だけど、そんなこともべつに主題ではないだろう。

不毛な話。

ボクのふさふさな髪を分けてあげたいくらい不毛だ。

「す……ころす……」

要するに、恭治くんは殺意マシマシな状態だった。

牛井だったらつゆだくだよっていうくらいマシマシだ。呂律がまわっておらず、ゾンビのような唸り声をあげている。

もしも、銃が手元にあつたら恭治くんは姫野さんを撃っていただろう。

「波風を立てるな……恭治くん」

大門さんは軽くみんなを見回した。

静かな怒気を発し、この場を収めようとしているようだ。

「それで、姫野。君はエミちゃんに襲われ、正当防御をした。結果として、過剰になってしまったが、そこまではなかつた。そう言いたいわけだな」

「ええそうよ」

姫野さんは泣いてグチャグチャになってしまった化粧を完全に落としていて、まるで別モノの生き物みたいだったけど、むっつりと不機嫌そうな表情は化粧をしていたときとさほど変わらなかった。

「人殺し！ この人殺しが！」と恭治くん。

喚きたてるように言う恭治くんは、大門さんは「静かにしろ」と声を抑えて言う。

「平時であれば過剰防衛は刑の減免だ。無罪になるわけではない」

「あの子は……ゾンビだったのよ。ゾンビに対して殺人もなにもないわ！」

「エミは人間だ。そんなの見てればわかるだろ」

恭治くんは小刻みに身体を揺らしている。

おそろく――。

たぶんだけど、憎悪が身体の中から溢れ出そうになっていて、無意識にそんな行為をとっているのだろう。

「黙れといったはずだ」

と、大門さんは恭治くんは銃を向けた。

この人も案外タガがはずれかかっているのかもしれない。何度も繰り返される人間関係に疲れて、繊細に解決するだけの余力がなくなっている。

わかりやすい暴力に頼ってしまっている。

恭治くんは銃を向けられても少しもひるまず、大門さんをにらんだ。

「こいつを庇うんですか」

「違う。オレが裁定するといっているんだ。君はいま冷静になれていないだろう」

銃を向けながら冷静になれとか、めちやくちやじやないかな。

とはいえ――、強権に従うのは部活動では一般的なことだ。

ボクはスポーツとかしたことないからわからないけれど、誰かの指示に従うのが楽なことはわかる。

恭治くんは最愛の妹をなくし、疲れきっていた。

だから、最後には渋々と大門さんに従った。

「それでは聞くが……、姫野。君はエミちゃんを殺した。それは間違いないな」

「……確かにそうかもしれないけど。でも違うの。あの子はゾンビ

だったから」

「ゾンビかどうかは関係はない。君がエミちゃんを殺したかどうか。その行動を知りたいだけだ」

「たまたま鉄パイプが刺さっただけよ」

「刺したのはまちがいないんだな」

「それは……そうだけど」

「エミちゃんがゾンビかどうかは見極めているところだった。それを君は自決にも勝手に裁定してしまった。そういうことだな」

「そうじゃないわ！ 刺したのではなくて刺さったの！ 偶然よ」

「あんな長い得物を人につきたてるのに偶然もないと思うが。はつきり言っておくが君がどのような証言をしたかによって、君の行く末は決まる。気をつけて発言しろ」

「わたしは、べつに……殺したくてやったわけじゃないの。怖かったのよ」

「恐怖で命令違反をしたわけか」

「わたしはべつに自衛隊じゃないし、アンタの部下でもないわ！」

「ここにいる以上はオレの命令に従ってもらおう。最初に伝えているはずだ」

大門さんにとっては、自分の秩序を破壊されたことのほうが罪が重いらしい。人かゾンビか不明なエミちゃんを害したことよりも、自分の決定を勝手に覆されたことのほうが腹立たしい——そんな論法だった。

「なぜ腕を押さえてる？」

大門さんが聞いた。

確かに姫野さんは不自然にも左腕で右腕をカバーしていた。

気絶してからすぐに起こしにいったから、当然着替える暇もなかったんだと思う。大門さんはその庇うような仕草ですぐに気づいたみたい。

「姫野。その腕の傷はなんだ？」

もう一度聞く。逃げ口上を許さない鋭い声色だ。

「これは……」

姫野さんの口調には迷いが見て取れた。

もし正直に答えたら——、エミちゃんに傷つけられたと答えたら、姫野さんは感染していると思われるかもしれない。

逆に事故だと答えたら、エミちゃんに襲われたという話に信憑性がなくなる。もしくは自分の正当性が弱まる。

進退窮まっっている。

それで——結局。

姫野さんから出てきたのは、顔を真っ赤にしてただ喚き散らすことだけだ。

あまりにも意味のない言葉なので、脳内カットしまーす。

ひとしきり聞いたあと、大門さんは長いため息をついた。

「オレは仕事柄飛行機によく乗るのだが……」

大門さんは腕を組み、椅子を回転させた。

「どうしてもいらだたしいことがひとつあってだな。それは明らかに風邪を引いているにも関わらず、マスクもせず、遠慮なく咳こむ輩だ。飛行機という狭い空間の中で、他者に迷惑をかけることをなんとも思っていない。秩序を乱すことをなんとも思っていないゴミくずだ。もしも許されるならば、そいつを飛行機からひきずり降ろしてやりたいたいと思ったことだって何度もある」

「なによ……そんな、脅し……」

「脅しじゃない。今はそんな世の中だといってるんだ。姫野、その傷はなんだ。言ってみろ」

姫野さんは助けを求めるようにボクを見た。

もしかしたら、ボクになんらかの助け舟を出してほしいのかもしれない。

でも、ボクには姫野さんを助ける義理はなかった。

嘘をつくのも悪いことだというごくごく一般的な倫理感もある。

もちろん、それによって大門さんが姫野さんを排斥する理由は増えるわけだけど、その因果関係から、ボクはもうノータッチでいたい気分だった。

どうなろうと——関係ない。

エミちゃんを殺したことについて、ボク自身は糾弾するほどの正当な理由というものはないかもしれないけれど、あえて姫野さんを助ける理由もない。

「エミちゃんに噛まれたのか？」

「ち、違う。これは引つかかれただけよ」

「感染しているのか？」

「感染なんてしてない！ ねえ。お願い信じて」

姫野さんがすぎるように大門さんに近づく。

けれど、大門さんの態度は明確な拒否。

感染してるかもしれない人間を近づけるなんて、バカのことだからね。

オートマティックピストルは、姫野さんの胸のあたりを狙っていた。

姫野さんはビクっとその場で立ち止まり、それ以上進めなくなる。

「その態度が自分勝手だと言っているんだ！」

「違う。違うのよ。お願い。私、死にたくない。助けてよおお！」

細い声で姫野さんは言って、その場で床の上にくず折れた。

泣きはらした目からは涙がこぼれ、床をぬらしている。

その涙をキタナイものを見るように恭治くんは目を細めた。

「自業自得だ……死ねよ」

「いやあああつ！ じにだくないっ！」

大門さんは思案顔になった。

チラリと銃を見て、それから姫野さんを見た。

撃ち殺そうと思っっているのかはわからない。

銃から手を離そうとはしてないものの、引き金に指まではかかっていない。銃は執務室の豪華な机の上に置かれていて、その存在を静かに主張している。

それで、たっぷりと十秒ほど時間が経過した後。

「追放ということにするか……」

大門さんの結論がでた。

姫野さんが息を呑み、大門さんのいる机のほうに近づく。

しかし、後ろから恭治くんが羽交い絞めにした。既に大門さんは銃に手をかけて、姫野さんを狙っている。

少しでも近づけば撃つつもりだろう。

「これは温情だ。いますぐ撃ち殺すといってるわけではないのだからな。君はエミちゃんを殺し、しかもゾンビウイルスに感染しているかもしれない。組織にあだなす存在だ。そのような者をここに置いてはおけない」

「外にでたら死んじやうに決まってるじゃない！ 私を殺す気なの？」

確かに、事実上の死刑宣告に近いかもしれない。

姫野さんは追い出されないため、必死に大門さんに訴える。

「私もエミちゃんにみたいにしばらく閉じこめておけばいいでしょう！ 何も追い出さなくても……お願い。お願いよ」

「そういうことを言ってるんじゃない。君は、自分が感染しているかもしれないと思いつつ、そのことを隠そうとした。組織から守られているということを意識せず、自分だけ助かろうとしている。それが組織を崩壊させるといっている」

「なによ。私が感染してるからって——、抱けなくなったからって、それで、はいおしまいってわけ！」

「そう思いたければそう思っておけばいい。どちらにせよ、君を追い出すことは決定した。いま、この場で撃ち殺されないだけありがたいかと思え」

「死ぬ！ アンタなんかゾンビに食い殺されて死んでしまえ！ あんたらもよ。みんなして私をゾンビ扱いして！ こうなるのが嫌だから、私はあの子のことが嫌いだったの！ 恭治。おまえも妹のことばかり考えてるから、こうなるんだ。おまえも死ぬ！」

「だったら、オレがいますぐ殺してやろうか！」

恭治くんは激昂し、その場で羽交い絞めにしていた姫野さんを放り投げた。

柔道の技のかな。

細い身体の姫野さんは、高校生の体力に敵うはずもなかった。

硬い床に叩きつけられた姫野さんは、その場で「うっ」と呻き、動きを止めた。

「恭治くん。君が連れていってくれるか？」

大門さんが聞くと、恭治くんが嬉々として答える。

「はい。わかりました」

「やだ。やだやだ。お願い。やだ！ 助けて死にたくないっ！」

まるつきり子どものように、姫野さんは床の上でジタバタする。

そのあんまりといえばあんまりな様子をみんな冷めた視線で見つめていた。

でも――。

ひとりだけ違う人がいた。

「あの……、姫野さんが言うとおりで、ここはひとつ追い出さずに様子を見るというのはいかがなものでしょうか」

飯田さんがおずおずと声をあげた。

☆Ⅱ

「なにを言ってるのかわかりかねるが……。飯田くん。君はわたしの采配を間違つてると言いたいのかね」

わずかな怒りをにじませる大門さん。

飯田さんは両の手を小さく振りながら必死に否定する。

「いえいえ、そういうつもりじゃないですけど、事実関係の確認が取れてないじゃないですか。姫野さんは本当に感染しているかもしれないし、感染していないかもしれない」

わずかに目を見開いて姫野さんは飯田さんを見た。

自分を救ってくれる蜘蛛の糸が垂らされたようなものだし、そんなふうになるのかもしれないのかもね。

でも、姫野さんって飯田さんには特に興味はなさそうだったけどな。

大門さんはかぶりを振った。

「感染しているかしていないかはこの際どうでもいい。問題なのは、

姫野は自分のことを優先したということだ。オレがもしも感染したのなら、正直に皆に話すだろう。そして静かにその場を去るつもりだ」

「そんなふうに使われると考えて、姫野さんは隠そうとしたんじゃないですかね。事実もよく確認せず、ただ危険というだけで排斥してしまうと、あとあと、ちよつとした傷を負っただけで、ゾンビになるかもしれないといって殺さなければならなくなってしまいます。そちらのほうが組織力を弱めてしまうのでは？」

「君の貴重な意見は胸においておこう。だが、これはオレが決定したことだ」

「そんなに簡単に追い出したりしないでも、べつに危険はないでしょう。ゾンビに感染しているかもしれないといっても、姫野さんにはその兆候はないわけですし」

「ゾンビになる前のほうがむしろ危険なのだ。エイズに感染した人間があえて他の人間に感染させようとした例なんていくらでもあるだろう。姫野の危険性はゾンビウイルスに冒されているかもしれないということよりも、むしろ、自分のことを優先し、他者のことを省みないというその心性にある」

「大門さんだって、緋色ちゃんがあれだけ言ったのに、無理やりゾンビ避けスプレーを取り上げたじゃないですか！」

「いい加減にしろ。オレは組織のために有効活用しようと思ったただけだ。緋色ちゃんだって納得して渡してくれた。だろう？」

えっと、ボクですか？

あれを納得と言われてしまうと、銃をつきつけられて金を出せと言われてそのとおりに出したら納得という論法も通ってしまうような気がする。

でもまあ、飯田さんがこれ以上突っ込むとヤバイ気がしたので、

「まー、そういうことでいいですよ」

と、軽い感じで答えておいた。

「緋色ちゃん……それでいいのかい」

「いいですよ」

「飯田くん。君は君なりの正義を持っているのだろうが、君の言い分が組織にとつて危険だということはあるかね？」

言い聞かせるように大門さんが言った。飯田さんは納得できないのか口の中をもごもごさせている。元気が弱い飯田さんにとって、こんな体育会系な大門さんに口ごたえをするのはさぞかし勇気がいったらう。

「飯田さん。大門さんの言うとおりにしてください」

恭治くんの言葉に、飯田さんは何も言い返せなくなってしまった。

恭治くんは、いまや全権委任された大使のように、大門さんから力の象徴であるショットガンを得て、意気揚々と姫野さんを連行している。

正確に言えば、姫野さんは前を静かに歩かされ、その後ろをショットガンを構えた恭治くんが後ろで狙っている。

もしも、変な行動をとれば、それを理由に恭治くんは復讐を果たすつもりだろう。

「みんなして、ひどい……ひどいわ」

「知るかよ。さっさと歩け！」

さすがにこの状態でバカをするだけの勇気はないのか、姫野さんは身をすくめるようにしてトボトボと歩いている。

まるで魔女裁判で有罪判決をくらった魔女みたい。いまや自分を塗り固めていたプライドもすべて溶け出してしまって、未来に絶望してしまっている。

ひとりの女の子の未来を閉ざした人間が、自分自身の未来を閉ざされて絶望する様子に、ボクとしては特段なんの感想も抱かなかった。

飯田さんのようなあり方のほうが、人間としては上等だとは思いますが、ボクとしては姫野さんにそこまでする価値があるように思えない。

姫野さんがどのように感じたのかとか、どのように思ったのかとか、そんなものに一切興味がない。姫野さんのクオリアにそこまで価値があると思えない。

だから——、しょうがないという感覚が一番近い。

姫野さんが連れて行かれたのは外に出る際の、あの脚立が置かれたところだ。

例によつてバリケード前で騒いでゾンビを集め、脚立のそばにはいないようにしている。さすがにゾンビの渦の中に突き落とすという死刑方法ではなかったみたいだ。

「さつさと上げれよ」

「呪つてやる。あんたも……あんたたちもひとり残らずゾンビに食われてしまえ！　ゾンビになつてしまえ！」

姫野さんはボクたちをひとりひとり指差し、呪詛を叫び散らした。「いつかはなるさ。死んだらみんなゾンビになるんだからな。ほら行けよ」

場違いなことと思うのは死刑囚についてのこと。

日本の場合、死刑囚つて全員、絞首刑なわけだけど、そこにいたるには死の階段をのぼりつめるらしい。

今まさに脚立を一段一段のぼりつめている姫野さんは、死刑囚の歩みに似ている気がした。

絶望と呪いに満ちた視線は、見る者の恐怖を惹起させる。

あまり長く見ていていいものじゃないかもね。

「あの……せめて、せめてですが、ゾンビ避けスプレーをかけてあげたらどうですか？」

飯田さんがここでも優しさを見せた。

それは偽善かもしれないけれど、姫野さんにとっては偽善であろうがそうでなからうが、生存率に直接関わってくることだ。呪いの視線が、一瞬だけ輝きを取り戻し、すがるような懇願の目になった。

「ふむ……。まあいいだろう。ゾンビに襲われて戻つてこられても困るしな」

大門さんが言い、姫野さんにスプレーをふきかける。

あまり遠くまで行かれると、姫野さんがどこに行つたかわからなくなるから、ゾンビ避け効果はなくなっちゃうけど……、まあいいか。

飯田さんの優しさにならつて、せめて、見える範囲くらいはゾンビ避けしてあげよう。

「二度と帰ってくるなよ。この土地に帰ってきたら今度は殺すからな」

恭治くんとしては、本当はゾンビ避けスプレーもふきかけたくなかったのだろう。それが不当な主張だとは思わない。いまでも大門さんの決定につき従ってるのは、必死に殺意を抑えつけている結果だろうから。

「言っておくけど、あんたらも同罪だから。いまあんたらがしてることは殺人と同じよ。絶対に許さない……。こんなスプレーをふきかけたくらいで許されたと思わないで」

「おまえに許されようなんてまったく思っていないさ。さっさと行けよ」

恭治くんが銃をかまえると、姫野さんは壁の向こう側に飛び降りた。

夕闇に支配されかけている中を、姫野さんが必死で走っていく姿が見えた。

恭治くんの顔つきは空っぽだ。

復讐も一応は終わり、今の彼には何も無い。

だから空っぽ。

空虚な表情に、今にも消えそうに思ってしまう。

「元気をだすんだ。恭治くん……」

大門さんが恭治くんの肩に手をかけた。

しかし、恭治くんはうなだれたままだった。

大門さんは「ふむ」と小さく呟くと、みんなを見回した。

「少し元気がでる話をしてやろう」

「？」

大門さんはにこやかに笑いながら言う。みんな怪訝な表情になった。

なんだろう。この場で元気がでる話？

とっておきのギャグとか？ んなわけないか。

答えはすぐに出た。

「あのゾンビ避けスプレーはニセモノだ」

え？

えくくくくくくつ？

それって、えつと。えつと……。外道すぎませんか？

「そんな……人でなし」

飯田さんが声をあげるも、大門さんはどこ吹く風。

「これもやむをえないことだ。そもそも、ゾンビ避けスプレ어의存在は他のコミュニティに知られていいもんじゃない。追放するにしろ、その危険を除去せねばならん」

「だからって……姫野さんが殺されてしまいますよ」

「殺されていい。いや、むしろ殺されるべきだ」

「だったらなんで、こんな周りにくいことを」

確かにわざわざそんなことをしなくても、ゾンビのいる中に叩き落したほうが早いような気がする。

「弾がもつたないだろう。追放ではなくて銃殺するとなるとどうしても弾を使ってしまう。それに窮鼠が猫を噛むような事態も避けねばならん。追放といっておけば、あるいはゾンビスプレーをふきかけるといっておけば、こちらに襲いかかってくるといふこともないだろうと思っただ。飯田くんがあと数秒言わなかったらオレがゾンビ避けスプレーについて言及していただろう」

「もしも生き延びて他のコミュニティにかけこんだら？」

「他のコミュニティだってバカじゃない。創傷の有無くらいは確認する。姫野が感染していたらゲームオーバー。感染していなくても道中でゾンビに襲われたら同じくゲームオーバー。たどりついても狂人のたわごとと思われたら同じこと」

指折り数えていく大門さんの様子に、飯田さんは戦慄している。

ボクは、なるほど人間っていろいろ考えるんだなあと暢気に思ったけれど、命ちゃんなら、これくらいは考えていたかもね。

見てみると「好きです」。はいはい。わかりました。

大門さんは楽しげに自分の構想を語っている。

「仮にもしここが襲撃されることになっても問題ない。ここは近いうちには引き払う予定だ。もつと暮らしやすく、もつと広く、もつと大勢

の人間を収容できる場所を目指す」

自分の都合のいい人間だけ残す思想かなあ。

まあそれも自己保全の一種なんだろうけど、そうなたらついていく必要ないよね。というか、そもそもエミちゃんがゾンビになっちゃったら、ボクがここににいる意味ってないじゃん！

さつさと命ちゃんといっしょに外に出たほうがよさそう。

ついでに、飯田さんと恭治くんも連れて行っていいけど。恭治くんはどうだろうな。ゾンビになっちゃったエミちゃんを放っておいてどこかにいけるとも思えないけど。

ゾンビになったからボクにちょうだいって言ってもくれるわけないし。

うーん、どうしよう。

考えてる間に、すぐ近くでゾンビの動きが急に早くなるのを感じた。

赤い光点がいくつも一点に集まり、それからワラワラとうごめくのを感ずる。

人間はボクにとつてはステルス機と同じく見えない存在だけど、ゾンビはそうじゃない。ゾンビの密度差で、どこに人間がいるかはだいたいわかる。

姫野さん逃げてるな。

こつちに近づいてきてるみたいだけど、脚立をもう一度組み立てる時間はたぶんないだろうなあ。

「た、たずけ」

脚立のあたり、壁の向こう側にかろうじて指だけは見えた。

でも、そこまでだった。

姫野さんは地獄の亡者にひきずり降ろされ、それから絶叫が続いた。

グチャグチャと響く咀嚼音。

そして――。

「あははっ。はははっ。はははーっ」

夕闇に向かって、今日一番に快活な笑い声が響く。

恭治くんが狂い笑っていた。元気がでてよかったね。

ハザードレベル24

黄昏時。

オレンジ色の光に照らされて、ホームセンターは紅く輝いている。ボクはそれを綺麗だと思った。

他の人がそう思っているかは知らない。

ボクの中ではもうほとんどこのコミュニティに対しての未練は無くなっていった。べつに大門さんたちが嫌いというわけではないけれど、ボクはボクの大事なものの以外はほとんど曖昧な価値しか感得できない。

ボクと彼らを結びつけるのはきつと。

ボクと彼らが唯一共感できるのはきつと。

——『死』

に他ならない。

死とはなんだろう。

肉体の破壊だろうか。

脳髓が死に絶えることだろうか。

ボクは違うと思う。

死とは意識がなくなることだ。ボクがボクという存在を考えられなくなること。クオリアが絶滅することだ。

どんなに叡智きらめく人間であっても、死が意識の消失を意味するのであれば、その思考すら死に沈みゆくため、本質的に理解できる人間はいない。

死はボクであっても、ボクじゃない誰かであっても、人間であっても、ゾンビであっても、ブラックボックスとして大切に保管されている。

死んだあとのことなんか誰も説明できないでしょ？

だから、誰も彼も、死は恐怖の王として君臨することができる。

誰かの死を悼むことができる。

「まあ、そんなことを考えてもしようがないかな……」

ゾンビは既に散会し、楽しかったカーニバルも終わったようだ。

バリケードの外でうごめいているゾンビの数は、初日の比ではなく、既に数百体は外をうごめいている。まるで楽しかったパーティが名残惜しいとでもいうように、多くのゾンビたちがうぞうぞと歩いていた。

この状況については、ボク自身のよくないものがあふれ出しているのか、それとも単純に人間が集まっている気配を感じて集まってきているのかはわからない。

もう周りのゾンビについてはあえてコントロールしてないからね。目の前にいるのと、お守り以外はほとんど自然に任せている。

「先輩どうします?」

命ちゃんが聞いた。

そろそろこのコミュニティを脱出しようという話だろう。

この子にとっては、グレイゾーンに位置する人たちの価値が極端に低いからな。

まるで空素扱い。あつてもなくても関係ないって感じ。

敵でも味方でもない人のことは極端に思考力が下がって考えなくなる。そうするのが、生存に適しているというよりは、もしもそうなったとしても、『敵』になったら排斥すればいいって考えで、そうでない人間は彼女の中では無価値なんだよね。

あるいは、思考をギリギリまで研ぎ澄まして、余計なことは考えないようにしているのかな。その意味では人工的な視野狭窄というかそんな感じ。

今はボクに全振りしてるとかないよね。ちょっと怖いんだけど。

「今夜、出ようか? 足は大丈夫?」

ボクはあまり迷わずに言った。

「はい先輩。うれしいです。先輩の家、お邪魔していいですよね」

「いいよ」

「夜もいっしょに寝ていいんですよね」

「うん」

ゾンビお姉さんがお家で待ってるけど、まあそれはきちんと説明しないよね。

「先輩の初夜ゲットお！」

突然ガッツポーズになる命ちゃん。わけがわからないよ。

「えっとどういうこと？」

「だって、さつきいっしょに寝ていいって言いましたよね？」

「それは同じお家ですって意味で……」

「いっしょに寝ていいって言いましたよね」

「言ったけど違うよ！ もう怒るよ」

「残念です……」

めちやくちや残念そうな顔にならないでよ。

本当に意味わかんないよ。

「あー、でも大門さんには言わないほうがいいかもしれないね」

「そうですね。あの人はもうかなりタガがはずれかかっています」

「飯田さんと恭治くんはどうしようかな。ついてくるように言ったほうがいいかな」

「先輩の考えに付き従いますよ」

「ちよつとは考えてよ」

「考えてますよ。むしろたくさん考えすぎて、選ぶのに時間がかかりすぎるので、先輩にゆだねているんです」

「うーん……」

飯田さんは正直なところ、このコミュニケーションにそもそも合ってなかったんじゃないかなと思わなくもない。だから、飯田さんは連れて帰ってもいいんだけど、ロリコンだからなあ。ボクのお家来るとか若干危険な感じもしなくもない。

無理やり他者の意思を無視して襲う人じゃないってのは、わかったけどね。

さすがにそこは信頼したよ。

えっと、なんていうんだっけ。

こういうのを『紳士』って言うんじゃないかな

「飯田さんはいっしょに行こうって誘ってみるかな」

「なるほど。まあ、先輩のお家の隣とかに住ませたらどうですか？」

「あ、うん。そういうのもありかもね」

隣の家、そういえば誰か住んでる気配があったけど、今どうなってるんだろう。

まあ、そうじゃなくても、どこかの部屋はゾンビ化しているだろうし、そのゾンビには申しわけないけどどこかに行ってもらって、飯田さんを住まわせるというのが妥当かな。

「常盤さんはどうします？」

「恭治くんは……」

☆
Ⅱ

姫野さんがいなくなってしまうたので、必然的に夕食はボクと命ちゃんが作ることになった。

最後の晚餐といった感じがして、少しだけ物寂しい。

今さらながらだけど、姫野さんはべつに死ななくてもよかったんじゃないかなという思考が頭にもたげてくる。

それと、エミちゃん――。

胸の奥にじんわりと冷たいものが浸透していくような感覚。

やっぱり寂しいなと思っちゃう。

「あ、先輩。それ塩です。砂糖じゃありませんよ」

なんと!?

ボーっとしながら料理していたら、いつのまにやら塩対応。

これじゃあメシマズもやむなしだ。

ボクの女子力も低下の一途。

いや、だからなんだよって感じだけど。

「命ちゃん。ここから挽回する方法ってあるの？」

「先輩が、料理を作ったあとに、指でハートを描きながらおいしくなーれおいしくなーれって言えば、みんなおいしく食べてくれると思いますよ」

「ボク、メイド喫茶のメイドさんじゃないんだけど……」

「ほらほら、おいしくなーれおいしくなーれ」

「お、おいしくなーれ。おいしくなーれ」

パシヤリ。

スマホで撮影されちゃった。は、恥ずかしい。やめてっけていってもやめてくれないし。まったくもう。

あれ？ でも命ちゃんって、スマホ落としたんじや？

「あー、これは小杉さんですよ。もう彼にはいらぬものでしょうから失敬してきました」

「失敬って……命ちゃん。それって泥棒だよ」

「ゾンビは人間じゃないので、泥棒じゃありません」

「まあ理論的にはそうなんだろうけどさ。なんというか、あまりよくないよ」

|||||

ゾンビとお金

ゾンビモノではおそらくほとんどの場合、ポストアポカリプスの世界観となっていて、お金は意味をなさない。しかし、『アニメ』が『うぐらし』では、購買部でお金を支払ったりするシーンがある。これは彼女達なりの死者への弔いであり、礼である。失われた平和な世界への希求がそうさせている。

|||||

「まあ、先輩がどうしてもというのでしたら返してきますけど……」
命ちゃんが残念そうな顔になっている。

この子はボクに対してはめっちゃ素直だから、返してきてといえは、必ずそうすると思う。

でも、命ちゃんと連絡がとれなくなって心配したのも事実。

いつまで使えるか分からないけれど、平和な世界じゃないんだし、スマホくらいは持っていたほうがいいのかもれない。

「まあそのままでもいいよ。でも、きちんとお礼は言っただけね」

「ゾンビにお礼ですか？」

「うん。ボクもゾンビだし……。ね？」

「わかりました。小杉さんに後でお礼を言っておきます」

ボクはひどく矛盾しているのかもしれない。

小杉さんのクオリアを絶滅させたのはボクだ。いや、クオリアというのはいえないし、他人にあるかどうかはわからないものだから、その表現は正確ではないな。

単純に言えば、ボクは思考を封じた。

考えるな——と念じた。

考えなくても身体動作を完璧に演じることはできる。

だから、もしかしたら今の小杉さんは、まったく自分の思い通りに自分の身体を動かさず、ただ意識は残っているという可能性だってあるんだ。

どっちが正しいのだろう。

哲学だなやっぱり……。

☆Ⅱ

大門さんからの指示でなぜか今日の夕食は執務室で食べることになった。

執務室には大きな執務机があるけれど、それを使うのは大門さんだけだ。ボクたちは、地べたにシートを敷いて、そこで食べることになる。

なんだかピクニックみたいな感じだね。

小杉さんはゾンビだけど、ご飯は食べていい設定にしているから、当然ボクたちと同じように座っている。飯田さんは暗い顔だ。まだいっしょに行こうって伝えてないからな。この夕飯が終わったら伝えてあげよう。

恭治くんは考えこんでいる顔つき。夕飯時だけど、まだショットガンを傍らに置いている。なんだか自殺でもしそうな雰囲気だけど、一応夕飯に来たってことは大丈夫なのかな。

ちなみにボクと命ちゃんが作ったのはシュガートースト。

かなりハードボイルドな感じの仕上がりだけど、みんな黙々と食べていて何も言わない。

やっぱりみんな塩対応だよ命ちゃん！

おいしくなあれって言える雰囲気じゃないし……。執務室の中の雰囲気が悪いです。初日のような談笑もなく、ただ黙々と胃の中に流しこむ感じ。

そんなんだから、あつという間に食事は終わってしまった。

だけど、それで終わりはずがない。

大門さんがここにみんなを集めたのには、必ず理由がある。

あらかたみんなが食べ終わったのを見定めたのか、執務室の机、みんなより一段上の視線から、大門さんがおもむろに口を開いた。

「みんな座ったまま聞いてくれ。今日は不幸にも二名の人間が亡くなった」

ピクリと反応する恭治くん。

ひとりは加害者。ひとりは被害者。

ひとりは復讐の対象。ひとりは最愛の妹。

どちらがどうと言うまでも無いけど、恭治くんにとっては、心に刻み込まれた人物で、それらを両方いつぺんに失った。

人生の中でも最低の一日に違いない。

「オレが思うに、このような結果に至ったのは、ひとえに組織に対する意識に低さが原因だと思う。みなが自分のことではなく他者のことを考え、行動すれば、このような結末に至ることは防げたはずだ」

「組織が個人を守ってくれるんすか……」

その言葉に恭治くんの想いが凝縮されていた。

「当然だ。恭治くんは野球をしていたのだから。チームワークの大切さもわかっているはずだ。チームワークがうまくいかないと個々の失策が大きな損害へとつながる。チームワークが働いていれば、小さな失敗を防ぐことができる」

「けど……、オレにはよくわかんないです。なんでエミは死ななきやいけなかったんすか」

「自分勝手な行動、命令違反が原因だ」

「……」

恭治くんが辛そうに目を瞑った。

目を見開いたら涙がこぼれると思ったのかもしれない。

「恭治くん。エミちゃんに起こったことは不幸だが、我々はもつと強くなれる。もうこんなことは起こらない」

「でも、エミは生き返らない……」

「そうだな。残念だがそれが現実だ。だが、生き残った者たちは明日のことを考えねばならない。つらいだろうが……、それが生きるということだ」

言ってることはわからないでもないけど、今日家族を失って今日立ち直れてかなり厳しいこと言ってる気がするな。

「恭治くん。オレは君に期待している。これから先、おそらくこの組織はドンドン大きくなっていくだろう。ここぞというときにゾンビに襲われないんだ。ここより大きな組織に取り入ってもいい。そのとき、オレひとりでは到底無理だ。君の助けが必要だ」

「オレの助け？」

「そうだ。君には将来、オレの組織の幹部になってもらいたい。もちろん、恭治くんだけではない。ここにいる君達全員だ」

「オレ……、エミのために生きてたんですよ。親も死んで、家族といえるのはエミしかいなかった。なのに、そんなこと急に言われても……」

「強くなれ。恭治くん。亡くなった君のお父さんやお母さん。それとエミちゃんのことを思うなら、君はもつと強くならねばならん」

「それこそ……いま急にいわれてもわかんないっす……」

大門さんは眉間に皺を寄せた。そのまま、うなだれた恭治くんを睨みおろして何かを考えている。

不穏としか言いようが無い空気。

「なあ……。恭治くん。君は責任を果たすべき時が来ている。それはわかるな？」

「なんのことです？」

「エミちゃんのことだ。彼女はもはや完全にゾンビになっている。喋ることもできないし、外にいるゾンビたちと変わりない。夕食前に部屋を覗いてみたが、生者に対して腕をつきだす様は誰がどう見たって

ゾンビそのものだ」

だから——、と続いた。

「君はエミちゃんを処理しなければならぬ」

大門さんは力説した。

うわー。ガチのケジメ案件だよ。おそろく、大門さんは恭治くんに自ら手を下させることによって、自分の命令に忠実に従う部下を作りたいんだろうな。

「今じゃないとダメなんですか？」

「オレは君を送り出したときにも言ったはずだ。自分の責任は自分でとれとな……。君の家族のことは君の責任だ」

「確かにそのときは納得しました。だけど……実際に、失ってからまた手に入れて、それからまた失って……、オレにはどうしたらいいかわかんないですよ」

「その弱さも組織にとっては瑕疵になる」

「なんなんですか。組織って、大門さんは自分の王国を作りたいだけじゃないですか」

「そう興奮するな。オレは間違ったことを言ってるわけじゃない。考えてもみろ、エミちゃんは本当にゾンビになってしまった。それは君にもわかるだろう。そして、ゾンビは人の形をしているが人じゃない。君だって、何匹も銃やバットで屠ってきたじゃないか。今さらそれが人だったと君は認めるのか？」

「違う……」

それを認めてしまったら、恭治くんがいままでしてきたことは、姫野さんがやった殺人行為と同じことをしていたことになってしまう。だから、否定するほかない。

「そうだ。ゾンビは人じゃない。だから排除するほかない。たとえば、家族だろうが愛した人だろうが排除しなければ、組織が崩壊する」

「オレは……」

「待ってくださいいよ……。いくらなんでも今日それをやれっていうのは、あんまりじゃないですか。彼はまだ高校生ですよ」

飯田さんは優しい。

でも、その優しさが大門さんにとっては攻撃と同義になる。

「飯田くん。君はゾンビ避けスプレーを使つてのうのと生きていたからわからんのだろうが、この世界はそんなことを言つていられる状況じゃない」

「それは私にもわかりますよ……。確かに私はゾンビに直接襲われたことはありません。襲われないつてわかつてても怖さに震えてたくらいですからね。ただ……。大門さん、あなたのやり方は強引すぎる」
「強引？」

大門さんはピクリとまなじりを動かした。

「自分の思い通りにしたいつてのはわかります。そうしないとコミュニケーションの存続が危ういつてもわかりますけど……。ただ、誰だつて弱さを抱えてるんです。その弱さに少しは配慮してくれてもいいじゃないですか」

「弱い者に配慮か……。くだらないな。だいたい弱いといいながら、その弱さを盾にして自分の要望を押し通したいだけではないか。そうやって、組織全体に負担をかけて、内部から腐らしていく」

「そういう面も否定できませんけど、だからといって全部が全部押さえつけられても希望なんて持てません。希望がなければ生きていけない」

「希望とか理想とかそういうくだらない抽象的な理論の前に、ゾンビは実際に目の前に迫っている。飯田くん。君がいくら人間には希望が必要だ、配慮が必要だとわめいたところで、頬をはたかれたら痛い。ゾンビに噛まれたら死ぬ。その事実が変わらん」

「でも——」

「これ以上口を開くな……。飯田くん」

そして、銃。

これで何度目だろう。大門さんは飯田さんに銃を突きつけて、これ以上の議論は無意味だとばかりに拒絶した。

飯田さんは黒光りする銃口を見て、わずかに震えているけど、その目には反抗的な光が灯っていた。

「なんだ。言いたいことがあるのか」

「大門さん。あなたはまちがっています」
バン。

それは思ったよりも大きな音だった。

マズルフラッシュの光が、薄暗い間接照明で照らされた部屋の中を一瞬照らし出し、硝煙のにおいがあたりに漂う。

大門さんが撃ったのは――。

天井だった。

しかし、飯田さんは身を丸め、怯えていた。そりやそうだろう。あんな明確な悪意にさらされたことは、おそらく飯田さんの処世術の中ではほとんどありえないことだろうから。だって、飯田さんはできる限り誰も傷つけないでいたいという、いまどき陳腐なほどいい人ではないと思っていたから。

それは確かに最終的には誰かに嫌われることを忌避していたに過ぎないかもしれないけれど、それでも――、偽善でも――善は善だと思おう。

ここにきて、飯田さんはようやく自分の思ったことを本当に伝えようとしている。偽善ではなくて、素朴に感じたことを伝えようとしている。

だって、そうじゃなきゃ、ここまで大門さんには逆らわない。

それどころか小学生女兒に見えるボクにすら逆らわなかったんだよ？

飯田さんはただ優しいだけじゃなくて、なんとというか自分の意志を示し始めた。

「飯田くん。オレは撃てないんじゃない。撃たないだけだ。そのところを履き違えないでもらいたい。君の言動が組織にそぐわないのであれば、オレは躊躇なく撃つ」

ボクはまたかよって気持ちで、ほとんど呆れていたけれど、命ちゃんもこの場にいるし、下手に動くのも危ないし……ほんともうどうしたもんかって感じた。

こんなに簡単に銃を撃ちまくるんじゃないよ、おちおちいっしょにご飯も食べられないよ。最後の晚餐だと思って、最後までいっしょに食べ

ようと思ってたのさ。

「大門さん。やめてください」

恭治くんが叫んだ。

「君も黙れ。情弱な人間は組織には不要だ」

大門さんはそう言いながら、フッと力を抜いた。

さながら選挙でアピールするみたいに、一転笑顔になって、

「いま、君たちが葛藤しているのは殻を破ろうとしているからだろう。オレにも覚えがある。自分の殻に閉じこもっているうちは、きつと世界の大きさに気づかん。これから、オレ達が人間を救う英雄になっていく。ここで終わってしまってもいいのか？」

言う。

「恭治くん。君は確かに妹を失い、家族を失った。だとしたら自殺するのか。するなら勝手にしろ、オレはべつにかまわん。だが本当にそれでいいのか。もともと君の妹が死んだきつかけはゾンビだ。ゾンビどもを駆逐するための最終兵器はここにある。君が貢献してくれば、君に与えてもいい」

言う。

「飯田くん。君がどのような人生を送ってきたのかは知るよしもないが、オレにはなんとなくわかる。自分が割りを食ってきたと思ってるんだろう。自分が怠惰であり臆病者であることを理解していながら、それでもなんとかならないかと神様に祈っているのだろう。考えでもみる、その一発逆転の鍵はもうほとんど手元にある。あとは君がうなずくだけだ」

言う。

「緋色ちゃん。君は本当にすごいものを発明したね。世が世ならまちがいなくノーベル賞ものだ。いやそれ以上だろう。この発明をもつと拡大させれば、きつと世界はオレたちに頭を垂れるだろう。賞賛し、褒め称えるだろう。君はそうなりたくないかな」

いや、別になりたくないけどね……。

「というか、基点になっているのってボクのゾンビ避けスプレーなわけですね。」

それをもとに、大門さんは自分の手駒を増やしたいってわけか。さすがにこのスプレーが一本きりしか作れませんっていうのは怪しすぎる論法だろうしね。

案外飯田さんと同じく、ボクのことを天才科学者か何かだと思つて、研究させれば無限に作れるようになるとか夢想しているのかもしれない。

あー、早くお家に帰つてゾンビお姉さんとイチャイチャしたいよ。命ちゃんに殺されるかもしれないけど、そこは許してもらわなきゃ。ふんすつ。

みんな黙っていた。

重苦しい沈黙が満ちている。

大門さんの考え方はある意味では正しいと思う。

でも——、はつきり言つて、ボクは嫌いだ。

その嫌いという『感じ』がすべてだ。

「まったくどいつもこいつも……臆病者だな。これほど言つてもわからないか」

いらだたく机を爪でこつこつと叩く。

その音が沈黙に満ちた部屋の中でやけに響いて聞こえた。

「飯田くん……」

そして、ターゲットに定まったのは飯田さんだった。

「君は小児性愛者だろうか？」

は？。なんでそこ。

ハザードレベル25

「飯田くん。君は小児性愛者だろうか?」

まるで大人が子どもに言い聞かせるような。

そんな声色だった。

大門さんは浅黒く引き締まった身体をしていて全身が筋肉で包まれているような体軀をしている。

対して飯田さんは大門さんと同じぐらいの体積ではあるものの贅肉と脂肪だらけのぷよぷよした身体だ。

その身体は太った子どもを大きくしたようなものだし、床に座ったままの様子は叱られた子どもに見えた。

実際に、その言葉に一番震撼しているのは他ならぬ飯田さんだ。

まるでいたずらがばれた子どものように、あるいはそれ以上に動揺しまくっていた。

「あ、あああ、あの、な、なんのことでしよう」

「恥ずかしがらなくてもいい。君の視線はよく緋色ちゃんに向いている。普通なら女子高生の命ちゃんのほうに向くだろう。いかに人間に興味の幅があるかが、さすがに小学生に視線が向きすぎだ。最初は父親のような心境で接しているのかと思ったが、スポーツブラの一件で確信したよ。君は緋色ちゃんのような子どもが性的な意味で好きなのだろう」

あー、やっぱりね。

ていうか、ボクにブラジャーってまだ早いと思うんだよ。

単純にちっちゃな女の子があえて背伸びしてブラ的なものをつけるというそのイメージに興奮していただけなんて、ちよつと考えればまるわかりだったかもしれない。

「君は小学生に欲情する変態だ。違うかね?」

大門さんが重ねて聞いた。

「そうですけど……」

飯田さんは消え入るような声で素直に認めた。

その言葉を聞いた大門さんの口角があがった。

ニイと笑い、それから少し間が空く。

「問題ない」

それが大門さんが発した言葉だ。

「え？」

「問題ないと言った。そもそも、この壊れた世界で女に何ができる？

やれ男女同権だの、やれ女性の権利だの、やれ夫の年収は七百万以上なきや嫌だの。もはやなんの意味もない」

「まあ……世界は壊れましたけど」

「君は前の世界ではないがしろにされていると感じることはなかったか？」

「感じていましたけど」

「女に見向きもされなかっただろう」

「確かにそうですけど……」

「緋色ちゃんくらいの年齢の子どもと触れあいたかったのだろう。だが許されなかった。君は世界に排斥されていたから」

「否定はしませんけど……」

「これからはそうじゃない。オレが肯定してやる。いいか、男は——オレ達は女を守るだろう。それどころか人類の守護者になっていくだろう。そんな尊い戦士に向かって誰が逆らえる？ 誰が逆らっていい？ 答えは決まっている。誰も逆らってはならない。それがルールだ」

危険な思想だった。

「しかし、それは女性を蔑視しすぎなのでは……」

「弱い者が当然に守られるという思想はもはや滅びた。いや、べつに弱い者が死に絶えるべきだとは言っていない。ただオレが求めているのは、守られるなら守られるだけの礼儀が必要だということだ。弱者に求めているのは、英雄に対して従順でいるというだけのことだ」

「それを蔑視というんじゃない……」

「いい加減に素直になれ。君は子どもの柔肌に触れ、思うままに蹂躪したいと考えているのだろう。そうしていいといっているんだ」

「私は、そういう無理強いは……しません」

今にも泣き出しそうな目で、飯田さんは反論した。

「大門さん。変ですよ。さつきから……。オレ達、べつに大門さんに逆らおうとか考えてるわけじゃないです」

恭治くんは、大門さんと睨みあった。

「わかつているよ。恭治くん。さつきはすまなかつたな。オレはこれからのことに想いを馳せていただけだ。組織をこれから強くしていくためにはどうすればいいか、そして君が体験した不幸をこれ以上広がらないようにするためにはどうすればいいか考えていた」

大門さんの回答に納得いかないのか、恭治くんは何度も頭を振っている。

そんな恭治くんに対して、続けて大門さんは言った。

「もしも恭治くんが英雄的行為を続けるなら、ゾンビになつてしまつたエミちゃんを囲つていても納得してくれるかもしれないぞ」

「なにを言つて……」

大門さんの言葉に、恭治くんの言葉はそれ以上紡がれなかった。

「君がエミちゃんをそのままにしたいというのなら、それに見合うだけの貢献をおこなえばいい。そうすれば誰も文句は言わん。いや、オレが言わせん。ゾンビは人間ではないというのがオレの考えだが、その残滓にすがりたいというのもわからんではないからな。君の我がままも、君の貢献次第では許されるだろう」

単純な理論ともいえるかな。

これ以上ないほどシンプル。

いろいろと言葉を尽くしているけれど、大門さんが言いたいのはたつたひとつ。

——オレに従え。

これだけしか言つてない。

さつきはゾンビになつたエミちゃんを処理しろつて言ってるのに、舌の根も乾かないうちに、べつにそうしなくてもいいといつてる。逆らわなければ。

自分に逆らいさえしなければ何をしてもいいと言いたげな様子だ。オレが法だとしても言いたげな——。

恭治くんが黙ってしまったので、それで一応の説得は完了したと考えたのか、大門さんは再び飯田さんに向き直った。

「どうだ飯田くん。オレの言いたいことが身に染みただろう。オレたちはやりたいようにやってよいのだ。なんなら今から緋色ちゃんを犯してもいい。オレが許す」

えっと――。

え？

ボク犯されちゃうの？

「大門さん。何を言ってるんですか。私はそんなことしませんよ」

飯田さんはやっぱりそういうふうに着識的な答えを返したのだ。た。

ここまでくるとすごいなと思う。

ロリコンだけど、飯田さんはこの中で一番人間らしいよ。

「ふむ……。君の思考はよくわからんよ。小児性愛者なら子どもを犯してみたいと思ってるのだろう。なのに、そうしたくないといってるように思える」

「レイプなんてしませんよ。そんな非人間的なことしたくないんです」

「だが望んでいるのだろう」

「そりゃ下半身はそうかもしれないですけど、誰も傷つけないんです」

「それは君が臆病なだけだな。要するに――」大門さんは銃を飯田さんに突きつけながら言った。「君が求めているのはいつだって言い訳なわけだ。しかたなかったから、そうなってしまったから、逆らっていいことはないから。そういう無数の言い訳を必要としているわけだな」

大門さんは自分で勝手に納得して、勝手に話を進めている。

「いいだろう。オレが命令してやる。緋色ちゃんをこの場でレイプしろ。二度と生意気な口がきけないように犯しつくして、組織に従順になるように調教しろ！ 命令に逆らえば、おまえも殺す」

「あの一、ボクってわりとコミュニケーションに貢献してると思うんだけど、

それでもレイプされちやうの?」

意味がわからなかったんで、一応聞いてみた。

「嘘をついてただろう」

その一言で、ボクは何を言っても無駄だと悟った。

嘘っていうか黙っていただけなんだけどな。

それともエミちゃんがコンビニに来たっていう嘘?

そんなことでボクは犯されないとはいけないの?

まあいまさら何を言っても無駄だ。

大門さんは——、いや、大門は自分が正義だと思っている。

ボクはさつきと大門を殺してしまうべきなのかもしれないけれど

……、命ちゃんがそばにいる以上、下手な行動はとれない。

不自然にならないように立ち上がり、飯田さんと目を合わせる。

飯田さんは、まじまじとボクを見つめ、やっぱりボクの顔と足とふ

ともものあたりを重点的にねぶるよう視姦するさまは立派なロリコ

ンだと思う。

「ダメだ……私にはできない」

バンツ!

銃弾が放たれた。

今度は、飯田さんの足元近く。狙いは正確だ。

恭治くんの指がそろそろとショットガンに伸びる。

「恭治くん。不意に動くな。オレも正当防衛をしなくてはならなくなる」

大門は牽制するように言った。

それから飯田さんのほうに視線を流し、

「オレは嘘が嫌いなんだ。二度は言わんぞ。今度逆らえば本当に撃つ」

「や、やめてくください。あ、あ、あなたのことには逆らいません」

「じゃあ早く犯せ……この場で、オレが見える場所だな」

「それは……できかねます」

ヤバイ。

大門の目つきは本気だ。これ以上、逆らうと飯田さんが殺されてし

まう。

犯されるのは嫌だけど、飯田さんが死んでしまうのもいやだ。

照準がゆっくりと飯田さんに合わせられるにつれ、地震でも起きているのかというぐらい、飯田さんが震えていた。

「残念だよ。飯田くん」

「ちよつと待って！」

ボクは叫ぶように言った。今は止めなきや本当に撃ってた。

「なにかな。緋色ちゃん」

「ボクいいよ。おじさんとしても」

飯田さんのほうに向き直りボクは言う。

「緋色ちゃん……何を」

飯田さんが驚いたように目を見開いた。

ボクとしてはせいぜい男の人を興奮させるような媚態を見せるだけだ。

飯田さんの手をとって、頭をすりつけるように見上げる。

「べつにいいかなって思ってたからね」

すりすりすりすりすり。

腕のあたりの筋肉がこわばってくるのを感じる。

女の子が怖いというより、割れ物の陶器を扱うような感じだろうか。

自分が暴力装置として作動するのが怖いんだ。

飯田さんらしい。でも……、ボクはボクなりの精一杯の女子力で飯

田さんを陥落させる。

「おじさん。セックスしよ」

「はい……」

はえーよ！ もう少し粘ろうよ。3秒くらいしか経ってないよ！

しかたないか。ボクがかわいすぎたんだ。

そう思うことにしておく。

「ふ……ふはは。けなげだな緋色ちゃん」

大門が楽しそうに拍手をし、それから首で続きを促した。

「でも……、ボクもさすがにみんなの前とか嫌だよ。あっちにある物

置使わせてよ。いいでしょ」

今度は大門に媚を売るボク。

徐々に女子力が高まっている気がするぞ。

ちらりと命ちゃんを見ると、殺意マシマシ状態だったので、ボクは視線で静かにしているように訴えかけた。この子が暴走するとさらにややこしくなるからね。

「まあいいだろう——。好きに使え」

「うん。わかった」

大門の了承が得られたので、ボクは飯田さんの腕を引っ張って執務室を出た。

執務室からバックヤードへは少し大きめのパーテーションのドアがあつて、そこを開けば、十数メートル先に物置がある。

姫野さんが使っていたという物置。

仕事場。

物置という言い方をしているけれど、結構大きい。

スライド式のドア部分に手をそえて開くと、むわりとしたなんとも言いがたい空気がこちら側に流れこんできた。

物置の中には小さな電球が天井あたりに釣り下がっていて、中にはなんの変哲もない布団が敷かれたままになっている。

体重をかけていたのか敷かれっぱなしだったそれは、空気が抜けてぺらぺらになっていた。

ある種異様な空間に——、濃密な生の香りに圧倒されてしまう。

飯田さんも呆然と立ち尽くしている。

意を決して中に入り、飯田さんを引きこみ、それから物置のドアを閉めた。

そこは密室だった。

そして、大門の命令で飯田さんはボクを犯さなければならぬ。

あれ？

これって。

エロ本とかでよくあるセックスしないと出られない部屋なんじゃ……。

ふと横を見ると、飯田さんの股間はこれ以上ないほど膨らんでいた。

☆
||

「緋色ちゃんいいのかい？」

「なに期待しちゃってるんですか。この変態……っ」

ひとまず湿った布団の上に腰を下ろし、ボクはジト目で飯田さんを見るらんだ。

「うひ。いきなりのありがとうございます」

「というか、飯田さん。さっきのは危なかったですよ。ボクが止めないと本当に撃たれていたように思います」

「それはそうだな。あの人も最初は悪い人には見えなかったんだが、どうにもゾンビ避けスプレアの力に酔ってるらしい」

確かにそれはわかりやすい力だ。

ゾンビに襲われないというだけで物資は補充し放題。

施設の防衛にゾンビを利用したりもできる。

銃の調達なんかも容易になる。

わかりやすいチート能力。

だから、その力を自分のものと勘違いして、酔いしれているというのはいえる話だった。

そうになると、言ってみればボクのせいなのかな？

いや——、べつにゾンビ避けスプレーを使っても態度が変わらなかった人が目の前にいる。狂ったのは大門自身の属性だ。

「これからどうしようか……？」

コンビニにいた頃と同じく飯田さんがボクに対してゆだねるように聞いた。

「うーん……おじさん。それなんですけど」

「なんだい？」

「セックスってどれくらいの間するのかな？」

「あの……緋色ちゃんも察しているとは思いますが、私は童貞だよ。セッ

クスの時間なんて知ってるはずもない」

「そこはほら……友達に聞いたりとか」

「あいにく友達と呼べるような人がいなかったもので……」
「そうですか……」

いたたまれなかった。

ちなみにAVとかだどだいたい十分とか二十分だけど、あれはファンタジー説があるからなあ。

「まあいいや。それはそれとして、おじさん。適当な時間が経過したあとに物置を出て、大門さんに逆らわないようにしよう。それから……、ボクといっしょに来る？」

「え？」

「だからね。ボクといっしょにホームセンター出ようよ」

「私を誘ってくれているのかい」

「それ以外に捉えようがないと思うけど」

飯田さんはがっくりとうなだれるように下を向いた。

「いや……まいったな。嬉しいよ。初めて誰かに選ばれた気がする」

「じゃあ、いっしょに来るんだね？」

「ああ、私でよければいっしょに行かせてもらおうよ」

オンラインワンを選ぶという意味ではないかもしれないけれど、ボクはわりと飯田さんを買っているんだ。大門なんかよりずっとね。

だって、飯田さんは一番人間らしかったから。

他人を思いやる気持ちを誰よりも持っていたからね。

素敵抱いてとはならないけど、まあ……わりと好きだよ。

「ところでどこに？」

「ボクが住んでいたアパートだよ。めちゃくちゃ小さいけど、どこかは開いてるでしょ」

「まさか同棲！」

「しねえよ。ていうか、命ちゃんとも同棲しようかは迷いどころさんなのに、おじさんとは無理に決まってるでしょ」

「ううむ。残念だ。けど、命ちゃんといっしょのお部屋に住まないの？ 姉妹みたいに仲良しだったじゃないか」

「そこは迷いどころさん」

だいたいボクって他人といつしよに住めるのかというのと、そういう実感がないんだよね。ゾンビお姉さんはクオリアが無いから住んでもなんの支障もなかったけれど、やっぱり後輩で妹分でも気を使っちゃうよ。

「命ちゃんと同格なのか……。それはそれで感動だな」

「……飯田さんは命ちゃんの次くらいです」

「まあ、それでも誘ってくれただけ嬉しいよ」

飯田さんはこれ以上ない笑顔を返した。

ちよつとだけは、守ってもいいよ。その笑顔。

「じゃあ、今からヒンズースクワット。百回です」

「え？」

「してたって証拠作り。必要でしょ？」

汗かかないとね。

☆
＝

「からだ……。あつい。あついよおおお」

「ハア……。ハア……。もうらめえええ。死んじやう。死んじやう」

「逝く。逝く。逝っちゃう！」

「もう出ない。もう出ないのおおおお。んほおおおお」

「こわれるう。こわれるう。こわれちゃううううう！」

「うごいじやだめええええ。もうこれいじようはむりいいいい
！」

あ。これ全部飯田さんの声です。

ていうか、うるさい。出ないって何がだよ。汗かよ。

☆
＝

あれから二十分くらい軽い運動を試みたんだけど、どうしよう。

ボクって全然疲れないや。汗はうつすらとかいてるみたいだけど、体力的には全然大丈夫。ボクの体力は無限か？ ゾンビだしなー。体力的には無限に走り続けるゾンビとかもいるし、そういうもんなのかもしれない。

質量保存の法則とか考えると、どう考えてもおかしいんだけど、そもそもゾンビが死んでるのに動く時点で、そんなことを考えてもしょうがないと思う。謎のパワーが体中に満ち溢れてるのかもしれない。対して飯田さんのほうは、もう死んじゃいそうなくらい疲れていて。疲れすぎてなんというか賢者タイムみたいになってる。

まあ、理論的には男のほうが動くことが多いから、これはこれできるとかするしかないか。

本当は——もう少し準備ができるとは思う。

例えば、ゴミ箱に捨てられていたゴムから、なんというか……その中身を取り出して身体に塗りつけるとかさ。

それだと完全にヤツた、ヤツてやったぞって演出ができてパーフェクトな感じはするんだけど、さすがに無理です。ボクはまだ男の意識も残ってるし、いや別に女の子だってそうかもしれないけど、好きでもない人の体液を身体につけたくないよ。うん。やっぱ無理。

身体を拭くためのタオルとかも中に置いてあったから、それで拭いたって言い訳するしかないかな。

ボクのできることはあまりない。

汗だけの飯田さんを言い訳にするしかない。

検分するように飯田さんを見てみると、なんとはなしに目があつた。

セックスをしたわけじゃないけど、飯田さんはボクに選ばれたと思つて、穏やかな顔つきになっている。視線がいつもよりずっと優しい。

これからはお隣さんとして仲良くしていけるといいなと思う。それからボクたちは物置を出た。

ハザードレベル26

物置を出ると、執務室からバックヤード側に出る扉は開け放たれていて、何がおかしいのか大門はニタニタと気持ち悪く笑っていた。

ボクは寄り添うようにして飯田さんの影に隠れている。

いちおう、あれだ、初めての体験を装わないといけないから、ひよこひよこ歩きだ。股のあたりが痛いつていうからね。

「あれ？ みんなは？」

執務室の中には大門以外誰もいなかった。

命ちゃんも。恭治くんも。ついでに言えば、小杉さんもどきも。

大門は執務室の机にどっかりと腰を下ろし、いくつかの銃をキメの細かそうな布で磨いている。

「英雄たちには褒美をやらないとな」

「褒美？」

なんのこと？

「小杉には命ちゃんを好きにしたいと言った。なに……、妹のような緋色ちゃんががんばってるんだ。命ちゃんにもこれからはがんばってもらわないとな」

「ふうん……」

まるでティッシュペーパーが切れたんで、替えを用意したかのような口調だった。

二重の意味での侮辱。

姫野さんに対しての、命ちゃんに対しての。

女の子に対して、こいつは物のようになしか考えてない。

自らの危険を承知で守ろうとするのは悪くないとしても、守ってやったから何でもやっていいというのは、人の尊厳を踏みにじっている。

冷たいものが脳裏に湧いた。

それは錐のように鋭く、のこぎりのようにギザギザの殺意だ。

でも、ボクは我慢した。

下手に逆らうと、本当に撃ってきそうだし、もう会話すること自体

が苦痛だ。

それに小杉さんは例によってゾンビ状態で、ボクと命ちゃんに対してはロボット三原則のような振る舞いを強制しているから、特段の問題はないと思う。

|||||

ロボット三原則

SF作家アイザックアシモフが提唱したロボットの原理原則。以下のような条文を文理解釈することで成り立つ。『私はロボット』より。

第一条

ロボットは人間に危害を加えてはならない。また、その危険を看過することによって、人間に危害を及ぼしてはならない。

第二条

ロボットは人間にあたえられた命令に服従しなければならない。ただし、あたえられた命令が、第一条に反する場合は、この限りでない。

第三条

ロボットは、前掲第一条および第二条に反するおそれのないかぎり、自己をまもらなければならない。

|||||

意外と穴がある原理だけだね。例えば、危害ってなんぞやって難しくて、本来であれば、フレーム問題が生じてロボット側が判断できなくなってしまうそう。

でも、ゾンビの場合は、ある程度は曖昧でも大丈夫。

だって、ボクが根源的な無意識として機能しているからね。端的に言えば、小杉さんはボクの一部になっているというような感覚がある。

だから、フレーム問題は起こりえない。たぶん、小杉さんは命ちゃんを部屋につれていくことまでしかできてないと思う。いまこの場

を乗り切れば、何も失うものはない。

「恭治くんは？」

「エミちゃんと仲良くやっているだろう」

「そう……。じゃあ、もう今日はいいかな？ ボク疲れちゃったよ」

夜中に適当に荷物をまとめて出ていきたい。

そのまま出ちゃったら、ゾンビ避けスプレーの問題とかいろいろ放置することになるけど、知るかって感じ。

姫野さんにしたような仕打ちと同じく、大門がゾンビに囲まれて死ぬような事態になってもかまわない。あるいは後々大門さんと遭遇したときにヤバイことになりそうだけど、もう、いいかなと思ってる。潰してやるよ。エアパックをプチって潰すみたいに。

ボクと飯田さんは執務室の中を軽く会釈をして、通り抜けようとする――。

「飯田くん」

呼び止められた。

「は、はい」

「下世話なことを聞くようだが、本懐を遂げた気分はどうだ？」

「あ、あの、よかったです」

「そうか……。よかったな」

満足そうな笑み。

それから――、またも大門は銃口を飯田さんに向けた。

「なんで銃を向けるんです？」

飯田さんが後ろ手でボクを下がらせる。

巨体に阻まれてよく見えないが、邪悪な気配を感じた。

「君たちが悪いのだ。命令違反は正さねばならない」

「命令違反？」ボクは聞いた。「なにもしてないじゃないか」

「君たちは嘘をついた」

「う、嘘なんかついてません」

飯田さんが必死に弁解する。

でも、大門にとっては規定路線だったらしい。

「君たちはその物置で何もやってないだろ」

「そ、そんなことはないです」と飯田さん。

「そうだよ。めちやくちや……えつと気持ちよかったんだから？」とボク。

「下手な嘘はつかないでいい。緋色ちゃん。君はさすがにその年齢だとまだしたことはないだろう」

「……」

なにを言ってるんだこいつ。

まあ確かにしたことないけどさ。

「さつきまではそうだったよ。いまは大人になった気分」

「なら、この場で脱いで見せてみろ」

「なに考えてるんですか。大門さん。相手は小学生ですよ」

「その小学生相手に無理やりセックスしたのだろう。君は」

飯田さんは押し黙るしかなかった。

大門は飯田さんの意見を一顧だにせず、ボクを鋭く見下ろしたまま、銃口を交互に泳がせて遊んでいる。

そのままにらみ合うこと数瞬。

「君が非常に稀有な才能を持っているのは、あのゾンビ避けスプレーを作ったことからわかる。だが——、その才能ゆえに大人を見下し、傲慢になっていっているな。それは非常によくない。おおかた君は危なくなったらこの組織を抜けて、ひとりで——あるいは仲の良い数人を連れて逃げればいいと思っっているのだろう」

否定はしない。

ボクはもう大門のことはどうでもいい。

こんな砂上の楼閣になんの価値も見出せない。

この人はボクを——正確にはゾンビ避けスプレーを作れるボクを利用したいだけじゃないか。

「今はあなたの言うとおりにしているでしょ？　なにが不満なの？」

「そのすかした態度が気に食わん。大人をなめるな！」

「……あの、その……落ち着いてください。大門さん」

「オレは落ち着いている。飯田くん。君は哀れだよ。オレがせっかく欲望を満たす機会を——褒美を与えてやったというのに、それをふい

にしてしまったんだからな。そして、君は永遠にその欲望を果たせないまま死ぬことになる」

「ま、待ってよ。なにが不満なの？」

と、ボクは慌てて言った。

「嘘をついただろう。君たちは些細な嘘だと思っているが、上官に対する嘘は反逆罪と同じだ。殺されても文句は言えない」

飯田さんの背中が震えていた。

こいつ……。

こいつは——。

ボクは大門の狙いに気づいた。

「わかったよ。誓う。もう二度と嘘はつかないし、ゾンビ避けスプレーもあなたの言うとおりに作ります。だから許してください」

「ふん。ようやく素直になったか。いささか遅いが……。君が罪の意識を本当に感じているのなら、許してあげよう。この場で、オレの目の前で今度こそ飯田くんに犯されるならな」

言ってる言葉の意味を、脳が理解するのに時間がかかった。

……こいつは、人の情事を覗くのが趣味の変態か？

戸惑いの視線を飯田さんに向ける。

「大門さん……、私も緋色ちゃんも心から反省しています。だから、それだけはご勘弁ください」

「死にたいのか？」

「土下座でもなんでもします。だから——」

「上官の命令だといっているだろう。何度言わせれば気がすむ」

大事なものという意識はボクにもある。

純潔って、男だった意識があるボクとしては、とりわけなんというか神聖なものって意識があって、飯田さんのことは嫌いじゃないし、むしろ好きよりではあるけれども、捧げたいかといわれると違う。

でも、飯田さんの生命には——代えられないかな。

ボクの中で諦めに似た気持ちが湧いた。

大門は思い知らせたいんだと思う。ボクが二度と逆らわないように、反抗的な態度をとれないように、ただひたすら従順にゾンビ避け

スプレーを作り続けるように楔を打ちこみたいんだ。ボクの心を折り砕きたいんだ。

だから、大人に性を食い散らされるか。ボク自身の嘘で飯田さんが死ぬという二択を用意した。

飯田さんは生贄だった。

最初は飯田さん自身を付き従わせるための方策だと思っていたけれど、そうじゃない。最初から、一番の狙いはボクだったんだ。

「いいよ……しかたないよ。おじさん」

と、ボクは告げた。

「いや……、緋色ちゃん。そんなことはしなくていい」

静かな声だった。

飯田さんはしゃがみこみ、ボクの頭をひと撫でした。

その暖かな感触が離れると、ふと寂しい気持ちが湧く。

飯田さんは決然として言った。

「大門さん。私はあなたには従いません！」

「飯田くん。君は正直なところ自己の管理もできず、ぶくぶくと太った怠惰で価値の低い人間だと思っていたが、そのうえ計算もできない愚か者らしいな。オレは本当に殺すぞ」

「私は確かに周りからすれば劣ってる人間かもしれませんが。けれど、はつきりと確信しているが、あんたよりは数段マシだ！」

「待って！ 飯田さん。本当にお願いだから。大門さん。待ってください。飯田さんはちよつと精神的に不安定になってるだけなんだ。撃たないで！」

「飯田くん。君がここまで潔いとは思わなかったよ」

「やめてえええええ！」

そう、ボクは。

——思い知ることになる。

バンッ！

と、撃発音が響いた。

その音は思ったより軽く、部屋の中に木霊した。

ボクが隣を見ると、飯田さんの巨体はそこにはなく、冷たい床に倒

れこんでいる姿が見えた。飯田さんはボクを庇うようにして背中をこちらに向けていた。その背中には紅い斑点のような穴が二つ開いていて、そこからおびただしい血が流れている。ボクがあげたお守りが飯田さんの血で染まっっていく。

「なんでッー」

なんでだよ！

違う。わかっていた。大門はやっぱり思い知らせたいんだ。ボクが心の底では大門に付き従っていないから、こういう結果を招いたんだ。飯田さんが死んだのだと。

ボクの中に、おびただしい人間の悪意が侵食してくる。

逆流するような不快感。

「飯田くんはこう言ってはなんだが、あまり優秀な人材ではないからな。オレに何度か逆らっているし、たいして必要な人材でもなかった。惜しくない……いくらでも替えのきく、そんな存在だ」

「黙れ……」

「君が最初からオレの言うとおりにしておけば、こうはならなかった。すべての原因は君にある」

「黙れよー」

飯田さんはおまえなんかと違うよ。

輝くような断片を持っていた。肉にこびりついた余計な付着物なんかじゃなくて、小さいけれど優しい光を持っていたんだ！

ボクはボク自身の憎悪と殺意が脳内シナプスを焼ききるかのようにグルグルと体中を駆け巡り吐き出されるのを感じた。

溢れる。溢れる。溢れる。

たかが車程度の高さで作ったバリケードなんて押し流してしまえ。外では『ボク』がうごめいていた。

無数のそれらは、バリケードの近くで丸く小さくなり組体操の要領で、仲間の身体を踏み越えて洪水のように押し寄せる。

侵食しろ。侵食しろ。侵食しろ。

犯して。壊して。狂って。壊れる。

「なんだ？ 妙な雰囲気だな……。外が騒がしい」

大門が何かを言っている。

悪意に総体的に塗りつぶされたボクには、その音はただのノイズと同じだった。

★
||

「エミ……」

オレは大門さんからエミを見てくるよう促され、なんの意味もなく流されるままそうした。

オレは疲れていた。

まるでガス欠の車みたいだ。

心の中のガソリンがなくなったかのように、指一本動かすのも億劫だった。

失ったものは二度と戻らない。

今度は絶対に離さないと思っていたのに……。

エミはいまベッドに縛りつけられ、上半身だけを起こしてこちらに近づこうとしてきている。噛まれてもかまわないと思って頭を撫でてみたが、きよとんとした顔をして、噛もうともしない。ゾンビ避けスプレーがまだ効いているのかもしれない。

この世界は腐っている。

この世界は壊れている。

エミと同じような年齢の緋色ちゃんは、優しいと思っていた飯田さんに無理やり犯される。飯田さんは本意ではなかったのかもしれないが、理不尽な暴力に逆らえない。

男を嫌っていたと思う神埼はことさら嫌っていた小杉に抱かれるらしい。

どいつもこいつも——。

だけど、それを言うならゾンビになってしまったエミにすぎないオレも同じようなものだ。自分勝手にやりたいようにやっている。

「エミ……オレはどうしたらいいんだろうな」

大門さんに付き従うのは確かに楽な生き方だ。

なにもかもなくしてしまった自分が、唯一指針となるのは命令だ。それが誰かのためになるというのなら、誰かが失うのを防げるというのなら、文句はない。使い潰してくれていい。手駒になっていい。だけど——、大門さんのやりようは、緋色ちゃんを、神埼を消費している。

誰かを守るためというのはただの方便で、自分勝手にしたいだけだ。

緋色ちゃんが物置に連れていかれる様子がエミと重なった。

エミはなんていうだろうか。もしもゾンビじゃなかったら。オレにどうしてほしいだろうか。

エミが何かを捕食するように口を開く。その動きはただの本能に任せた自動行動なのかもしれない。でも。咀嚼するような唇の動きを見て——、心が震えるような気がした。

「そうか……。そうなんだな」

タ ス ケ テ ア ゲ テ

なあ。エミ。おまえはまだ生きてるって信じていいんだよな。

お兄ちゃんはおまえのお兄ちゃんできていいんだよな。

ただの見間違いかもしれない。身勝手な思いこみかもしれない。でも——。

大門さんをいまずぐにでも説得して、あんなことやめさせよう。なけなしの気合を奮い立たせ、オレはベッドから立ち上がる。

「お兄ちゃん。行ってくるよ。エミ……」

その時。

銃声が聞こえた。

念のためにショットガンを手に持ち、急いで執務室に駆けつけると、そこには飯田さんが物言わぬ死体になっていた。

その死体のそばに緋色ちゃんが座りこみ呆然自失となっている。

「なんなんすか……。これ」

「ああ、恭治くん。ちょうどよかった。外の様子が少し騒がしい。ゾンビ避けスプレーがあるから問題ないと思うが、ちよつと見てきてくれないか」

「大門さん！ これはなんなんすか！」

「ん？ ああ……、飯田くんのことか。残念ながら彼には反逆の意思ありと判断しオレが処分した」

「反逆……？」

「そうだ。組織に対する明確な反逆行為があった」

「組織じゃない。あんたに対する反逆だろう！」

「だったらどうした。おまえも逆らうのか」

オレはまだ信じていた。いくら人を撃ったとしても、それは何かの
はずみで——、そんな簡単に人を殺すわけがないと。

大門さんは、確かに多少強引なところがあるけれども、それは組織のためだといっている。それが八割くらい嘘だとしても残り二割くらいは本当だと思っていた。

少なくとも、組織に属している人間を簡単に殺してしまうような、そんな暴力的な人間ではないと思っていたんだ。

その認識は——認容は甘すぎた。

突然のマズルフラツシュ！

閃光のように不意に放たれた銃撃に、オレはなんら思考すらできず立ちすくむことしかできない。

死——。遅れてきた意識。

そのスローモーシヨンのような動きの中で、オレは見た。

飯田さんが壁のように立ちふさがり、オレの盾になってくれていた。

「なんだあ。飯田くん。ゾンビになったほうが動きがいいな」

続けざまに発砲され、飯田さんが倒れこむ。

オレはすぐさまパーテーシヨンの影に隠れこみ、ショットガンで反撃した。

大門は執務机の中に身を隠し、拳銃を水平撃ちしてくる。パーテーシヨンにいくつも穴が開き、閃光が明滅する。

「クソっ」

ポケットの中にいくつか弾を入れてるとはいえ、そう何発も持ち歩いてるわけじゃない。対して向こうは執務機の引き出しの中に、い

くつも銃を持っている。

このままだとジリ貧だ。

じゃあ逃げるか。オレひとりならそれもかまわないかもしれない。でも、緋色ちゃんもエミも、オレが逃げたら殺されるだろう。

「助けるって……誓ったもんな」

たぶん生涯でこれほど速さで駆けたことはないだろう。

思い出すのは県大会の最終回。

オレは三塁まで出塁していて、あと一点で逆転の状況。

チームは満身創痍で、きつと延長したら負ける。

バッターがぼてんヒットで、オレは駆けた。

あの時——以来。

全力で全身全霊をかけた、命を燃やし尽くすような走り。

最高に純粹になって、オレは走ることそのものになって——、

パーテーションの影から飛び出し、緋色ちゃんに腕を伸ばした。

★
||

「クソ……クソが……どいつもこいつも命令に逆らう。使えん」

オレ——大門政継が自衛官を目指したのは、それが明確な力だったからだ。この世界を支配している有象無象のやつらも、銃をつきつければ頭を垂れるしかない。学生だった頃のオレは単純にそのような考えていた。

しかし、実際には目には見えない力というものもあることを知った。

例えば権力。例えば金。例えば地位。例えば名誉だ。

それら無形の力は、銃のようなわかりやすい力とは違って、すぐに入るものではない。ガツチリと既得権益として保護されていて、それらを手に入れるには、自衛官という立場はむしろ邪魔ですらあった。

もんもんとした日々を過ごしていた。

この世界が壊れるまでは——。

この世界がゾンビに溢れたとき、オレはすべての力が銃という明確な形のあるものに束ねられるのを感じた。

つまり——オレは有形無形のすべての力を得たのだから、すべてを思い通りにしてよいはずだった。

誰が逆らえる？ 誰が逆らっていい？

ゾンビ避けスプレーも手元にある。何も恐れることはない。

だが、愚かにもこの世界の王たるオレに逆らうやつがいる。

恭治。飯田。緋色。どいつもこいつも——。

オレの命令に逆らう。逆らってよいはずがない。

力はここに結集しているのだから。オレこそが最も力を持っているのだから。

ぎしりと痛む右腕に、喩えようも無い怒りの感情が渦巻く。

なぜ思い通りにならない。

緋色は恭治に奪われ、右腕はやつのショットガンで怪我をした。幸いにして、執務机から跳ね返った勢いの落ちた弾だったので、吹き飛ばされるような事態にはなっていないが、王たるわが身が傷つけられるなど我慢ならない。

もつとも、恭治には致命傷を負わせた。

あの傷なら、すぐに死ぬだろう。そのあと緋色を再び手元に収めればいい。

口元がにやけるのを抑えきれない。

緋色はゾンビ避けスプレーを持っていない。だから、外に脱出することはできない。夕方には数百を超えるゾンビがひしめきあつていて、脱出などできそうになかった。そう……、ゾンビ避けスプレーがなければ不可能だ。

オレはロリコンではないが、緋色はレイプしてやろう。あの幼い身体に命令に逆らえないことを徹底的に刻みこまなければならない。

と、不意に——。

風のような気安さでゾンビがパーティーションのドアを開けて現われた。

「な、なんだ。侵入されているのか」

まさか緋色が脱出の際にバリケードをあけたのか。ゆつたりと動くゾンビに照準を合わせ、その頭を冷静に撃ち抜く。また現われた。パーテーションの奥をちらりと覗くと、何十体ものゾンビが連なっている。

「おいおい……」

オレはうんざりした気分になった。

いくらゾンビ避けスプレーで問題ないとはいえ、このホームセンター内がゾンビだらけになれば片付けるのが大変だ。

まあ……次の場所を探せばよいか。

そう考え、弾ももつたいないので、オレはゾンビを避けて外に向かうことにした。だが、オレが横を通り過ぎようとすると、ゾンビはくると方向をかえ襲ってきた。すかさず銃を撃つ。

なんだ？ どうしてだ。

ゾンビ避けスプレーが足りないのか。

吹きかける。ゾンビの動きはとまらない。

「ゾンビ避けスプレーが効かないだと……」

既に正面の外に向かう通路はゾンビが渋滞をなしていた。

オレはバックヤードに駆けこむ。

「クソ。クソ。クソおおおっ」

裏口から逃げられるかは賭けだ。しかし――。

「おいおい。なんだよ。小杉。バックヤードは開けとけっていっただろうがあああああああっ」

バックヤードで通じる唯一のドアはなぜか閉められていた。

鍵の管理は小杉に任せていたから、これは小杉の仕業だ。

あとで殺してやる！

振り返ると、既に執務室を通り抜け、ゾンビたちは津波のように押し寄せてきている。その先頭には頭を撃ちぬきそこなったのか、先ほどは倒れふしていたはずの飯田だった。じわりと、脇から汗が滑り落ちる。

……殺されるのか。オレが、ゾンビごときに。

持っている銃は短銃一丁のみ。

バンツ。

手が震えて、飯田の頭すら撃ちぬけない。

バンツ。

撃つ。焦る。もう逃げ場はない。

いよいよとなり、オレは銃をくわえこんだ。クソみたいなゲームだった。

こんなゲームはもうおしまいだ。

ゲームオーバー。終わり。ゲーム。終わり！ 死。終わりだ！！

ガチ。

「あ？」

その意味を理解するのに一瞬遅れた。弾切れだった。

「ああああああああああああ。やめろ。離せ！ 離せええええ」

飯田がオレの腕を掴む。

何本もの腕が伸びて、無遠慮にオレの身体を引きまわす。

押し倒され、爪が突き立てられ、顔に腹に足が化け物どもの怪力によつてねじ切られるのを感じた。

オレはもはや地位も名誉も権力も得るはずだった。

すべてを得て、王となって君臨するはずだった。

そのオレが——死ぬ。

「いやだああああ。いきでいだああああい！」

ゾンビどもは腹の中に手をつっこむとハラワタを出してかきわける。

かきわけ。

えひひひ。かきわけえびぴび。死ぬ死ぬ死ぬ。

いだだだだだだだ。やめろよー。あはは。

オレが二等分になって。

こんな。オレ。殺され。いやだいやだ。

身も心もグチャグチャになりつつある中で。

最後にふと湧いた正常な意識は——。

薄昏く輝く紅い瞳。

その端正な顔立ちが闇の中に浮かび、うつすらと笑って呟いた。

死ぬ—。

ハザードレベル27

からっぽ。

からっぽだった。

ボクの中に人間の悪意が流れ込んできて、その黒いモヤのようなものが逆流した。

憎悪が形になった。

だから、いまは誰も憎んでいない。

それがよいことなのかはわからない。

人間という種族に対する攻撃性は、からっぽになることでガス抜きされた。

けれど――。

憎悪というのは、他人と自分を分けるシールドのようなものでもあ
ると思う。憎悪がなくなってしまうたボクは細胞壁を失ったセルの
ように心もとない。

宇宙空間に裸身をさらしているようなものだから。

ひとり――たったひとりで宇宙空間をさまよう。

孤独の円盤。

「先輩……先輩！」

気づくと命ちゃんの顔が見えた。

「ここは？」

「まだ、ホームセンターの中です」

ボクは気絶していたみたいだ。命ちゃんに膝枕されていた。

身を起こして周りを見渡すと、ここが命ちゃんの部屋だとわかつた。

どうして――？

そんなふうに思いもするけど、なんとなく事態は把握していた。

飯田さん。いい人だったのに。死んじゃった。

たちまちのうちに、ボクの中に喪失感が広がる。

出会ってからまだ一ヶ月も経ってないけど、ボクは飯田さんを受け入れかけていた。隣に住んでもいいかなって思ってたくらいには好

きだった。

なのに死んでしまった。

自然と奥歯を噛み締めることになる。無意識に拳に力が入る。自分の身体がまるで自分のものでないようにコントロールできない。

「先輩……。私……。ごめんなさい」

命ちゃんに抱きしめられた。

なぜ謝るんだろう。べつに命ちゃんは悪いことをしていない。

強いて言えば――。

「私、他人が怖くて……。先輩以外の人を受け入れることができませんでした」

そう――、ただそれだけだ。

そして、それは別に悪いことじゃない。

孤独であることが罪なら、ボクは大罪を犯していることになる。

「命ちゃん……」

「先輩がこんなに傷つくなんて思わなくて、私、たぶんこうなるだろうなって予測していたのに、すべて放置してきました」

「もういいよ……。命ちゃん」

「姫野さんも飯田さんも死ぬことはなかった……。エミちゃんだって」

「そんなのはわからないじゃないか。君はボクよりずっと頭がいいけれど、人間が思い通りに動くななんて運次第なんだし」

「そうですね。それはそうかもしれない。でも、私は努力すらしませんでした。姫野さんや飯田さんが死んでも、べつにそれでも、かまわないって思っていたんです」

「君が誰を受け入れて誰を受け入れないかは、君の自由だから」

「でも、先輩は……。努力しようとしていたのに！」

「うん」ボクはうなずいた。「失敗しちゃったけどね」

「だから――、だから謝りたかったんです」

「やっぱり、命ちゃんが謝ることではないように思うけどな。命ちゃんがボクのことをいろいろと考えてくれることはありがたいけど、君が誰かを選択する自由があるように、ボクにもボクなりの自由があるわけだし」

「それはわかってます。でも、私は先輩のことも手伝わなかったことになります。さつきまで先輩は、目を開けていても、意識はここではないどこかに行ってしまったみたいになっていたんですよ！ 私が傷つけたせいだって思ったんです」

「ボクはどこにも行かないから」

ボクはポンポンと命ちゃんの頭をなでた。

この子は一見クールだけど、一皮向けば豆腐メンタルだからなあ。ボクより弱いんじゃないだろうか。

泣きはらしている命ちゃんを見ると、お兄ちゃんとして奮起しなければならぬと強く思う。

強く強く思う。

ボクはまだ人間を信じているから。

「先輩……それと……」

言いよどむ命ちゃん。

ボクは既に察している。このホームセンターで、いったいなにが起こったのか。意識はなくても無意識はあった。

ゾンビは集合的なボクの無意識そのものだから。

なにがあったか、なんとなくはわかる。

「恭治くんが撃たれたんだね」

「はい……」

「ボクを助けるために撃たれたみたい。飯田さんが殺されたショックで自分の殻に閉じこもっていたボクを恭治くんは引っ張り上げてくれたんだ」

そのあと、背負われていたのをうつすら覚えている。

白いシャツがイチゴジャムを塗りたくったように真っ赤に染まっ
ていて、おぼつかない足取りで、命ちゃんのもとまでたどり着いた。

それから、恭治くんがどこに向かったかはわからない。

ボクの無意識は、完全に大門さんをターゲットにしていたから、恭治くんがゾンビに襲われる心配はないと思うけど、あの傷だと助からない。

きつと……もう。

「命ちゃん。もうこのホームセンターにはボクたちしかいないよ。だからいつしよに行こう。今度は間違えないように」

「はい」

ボクたちは手をつないだ。

小学生くらいの時、命ちゃんはまだ小さくてボクと雄大のあとをよくついてきていた。

なにもないところでつまずいて泣いちゃったからボクは手をつないでお家に帰ったことを覚えている。

あのときのような――。

少しだけ照れくさかったけれど、それ以上に守るという気持ちが強かった小学生の頃を思い出す。

でも、あのときとは身長が逆転しちゃってるけどね！

☆Ⅱ

ホームセンターの中は、コミケの会場並みに混雑していた。

当然、ボクがいる以上、襲われる危険はないわけだけど、パーティーションで区切られた空間は思った以上に狭く、ボクはモーセのようにゾンビの海をかきわけて進まなくてはならなかった。

ゆれて、もまれて、ごっちゃになる。

まるで満員電車並のゾンビ密度。

みんな、後の人のことを考えないで、あとからあとからホームセンター内に侵入したから、そういうことになっているのだろうと思う。

もう襲つてもいい人はいないけど、祭りの後みたいに興奮量が保全されていて、まだみんな解散しないみたい。ゾンビがそんなことを思うわけもないけどね。ただの物理現象と同じ。

おかげで外まではほんのちよつとしか距離がないのに、ものすごく時間がかかる。ゾンビを操って、壁際まで追いやっても、人の波というのはなかなか掻き分けられない。

これだけゾンビが多いと、いまごろ大門さんの筋肉まみれの肉体は、なのはの同人誌みたいに完売状態だろう。徹底的に滅ぼすとあの

ときは思っちゃったからなあ。さすがに肉片ひとつも残ってないと、ゾンビにもなれないよ。

「縁日の時みたいですね」

ぼつりと命ちゃんが言った。

「そういえばそんなこともあったね……」

命ちゃんが中学に上がったばかりの頃だったと思うんだけど、地元で結構大きな縁日があつて、それが最後っていうんで大勢の人がきたんだ。

ボクはそのとき思春期真っ盛り。命ちゃんはかわいい妹分とはいえ、女の子と手をつなぐなんて恥ずかしくて、いつもは手をつないで縁日に行つてたのに、そのときだけは——、無意識に、一瞬だけ、ちよつとだけ……手を離しちやっただ。そして、命ちゃんは人波にさらわれてしまった。

ボクは後悔した。

ちっぽけなプライドなんかのために命ちゃんを離してしまったことを死ぬほど後悔した。雄大はいつしよになつて探してくれたけど、見つかったのは最後の花火が打ち上げ終わった後だった。

「でも……見つけてくれました」

「うん。でもいつしよに花火見たかつたな」

最後の花火。

もう二度と打ちあがらない花火。

最後の縁日。

失つた時間は戻らないし、過去の選択は取り消せない。

「先輩——」

「なに命ちゃん?」

ボクは振り向いた。

命ちゃんは軽く笑んでいて、その場から動かない。

「もしも……先輩が、私のことを少しでも想ってくれるなら……」

「えっと……? どうしたの?」

「もしも私を選んでくれるなら……」

「命ちゃん?」

「今度はもつと早く——」

え？　なんで……。

と、思うより早く。

「見つけてくださいね」

命ちやんと手が離れた。

周りの大人ゾンビより圧倒的に身長が足りないボクは、雑踏の中に飲み込まれてしまった命ちやんを見つけれられない。

——どうして？

命ちやんはゾンビに襲われないように設定しているけれど、縁日の時のような、言い知れない不安感で押しつぶされそうになる。

ボクは焦りながら、ゾンビの波を掻き分ける。

どうして手を離れたんだろう。

右の手のひらにわずかに残るぬくもりに、どうしてという疑問を反芻する。

——どうして？

ボクはその場で跳躍し、適当なゾンビさんの肩に片足を乗せた。

少しだけよろめくが、ボクの体重は軽い。満員電車で固定されているように、ゾンビの身体もゾンビ同士で固定しあっているから動かない。

でも見えない。

命ちやんは周りのゾンビよりも身長が低かった。

まだ高校生の女の子なんだ。

ボクの中では小学校の頃から変わらない庇護の対象。

ボクが守らなきゃいけないんだ。

「どけよー」

ゾンビたちを壁にぴったりと引つつかせボクは無理やり道を作った。

ようやく、それで人がひとり通れるくらいの細い道ができる。

そして——、その道の向こう側、わずか十数メートル先に彼女の姿が見えた。

命ちやんの手を引き、化け物のような顔つきでゾンビの道を逆走す

る彼女。

ボクが見たのは――、

「……生きてたんだ。姫野さん」

身体のあちこちが紅く染まった姫野さんの姿だった。

☆Ⅱ

パーティーシヨンの迷路を抜けた先。

袋小路で彼女は止まった。命ちゃんはブレザーごしにがつしりと腕をつかまれ動くことができない。

姫野さんは、デッドエンドに到達したのを悟ると、傍目からもわかるような大きなため息をつき、それからボクのほうをくると振り向いた。

怨みの目。

その瞳には間違いなく意思の光が灯っている。

ボクはなにか怒まれることをしただろうか。

姫野さんの心に寄り添えなかったといえ、それまでだけ。

そんなので怒まれたら、普通に生きていくことさえできない。

「姫野さん……あの……命ちゃんを離してください」

「……いやよ」

「どうしてです?」

「どうして? どうしてですって……。見なさいよ。この身体を、ゾンビにいたるところ噛まれて、綺麗なところが無いくらい。私は間違いなく感染しているわ」

そりやそうでしょうねと言える雰囲気ではなかった。

あの時とは違い、今の姫野さんはまちがいなく感染している。

塀の向こう側で姫野さんがどうなったのかは誰も確認していない。間違いなく襲われたのは確かだったから。死んでいるはずだったから。

あるいは、肉片ひとつ残らなくて当然なくらい周りはゾンビで満ちていた。

けど、ここにいる。姫野さんは生きてここに立っている。半死半生ながらゾンビになっていない。

姫野さんが食い殺されなかったのはなぜか。その理由はボクにもよくわからない。

ただ推測すれば、ボクはあのと時初めのうちはゾンビに襲わせないように考えていた。その直後に大門さんによるゾンビ避けスプレーが嘘だったことが発覚し、すぐに通常モードに切り替えただけだけど、ここでゾンビへの命令に混乱が生じたのかもしれない。

姫野さんがいま感染していてそれでもゾンビになっていないのも、もしかすると、ボクが抑制しているからなのか——？

人間を襲わないということを広大解釈すれば、ゾンビウイルスが人間の心的領域を侵すことも禁じていることになる。

「……気づいたら、私はひとりだったわ」

姫野さんは命ちゃんを羽交い絞めにしながら言った。

「なにを？」

「コミュニケーションを追い出され、ゾンビに追い立てられ、みんなが私を笑うの。汚いゾンビどもの手に触れられ、歯を突き立てられ、いいように弄繰りまわされて、私自身も汚らしく死んでいく。それで男どもが選ぶのはいつだって——、純真で無垢な綺麗で若い子なのよ」

姫野さんは頭をブンブンと振った。

何かを追い払うかのような仕草。

彼女は錯乱しているのかもしれない。

「姫野さん……そんなことやめて治療しよう」

もしかしたらの可能性だけど、ボクはゾンビウイルスを抑制できるのだとすれば、姫野さんを治療することができるかもしれない。

「そんな戯言。聞きたくない！ おまえは単に大好きなお姉ちゃんが感染するかもしれないから——私に感染させられるかもしれないから、耳触りのいい言葉を並べ立ててるだけだ！」

「……」

治療できる可能性はある。

けれど、姫野さんは耳を貸そうとしない。

命ちゃんは苦しそうに顔をしかめている。

頭一つ分身長の高い姫野さんに理性の吹き飛んだ力で羽交い絞めにされているんだ。苦しいに決まっている。

いくらボクが超人的なスピードをもっているとしても、この距離を一瞬でジャンプして詰めきれはるはずもない。なぜなら、姫野さんと命ちゃんの柔らかな首筋は、ほんのわずかな間隙しかないのだから。

「ボクが代わりになるよ。それで姫野さんの気が済むなら」

ボクはしおらしく言った。

「詐欺師が……。あんたは……ゾンビなんだろう！」

ボクは目を見開いた。

いままでのところ、ボクがゾンビであることを告げて生きているのは命ちゃんだけだ。それにしたって、黙っておく選択もあったかもしれないくらい。他の人にいたっては、ボク自身がゾンビだと気づかれるようなヘマはしていないはずだ。

でも、姫野さんの血走った瞳を見たときに気づいた。

姫野さんが気づいたのは、ボクが安全牌を切ったというその一点のみだろう。

息荒く、手負いの、いまにも死にそうな状態だからこそ、ボクがボクのことしか考えてないことを見抜いた。

気が触れたような思考だからこそ、真実にたどり着けた。

そんな感じなのかもしれない。

「姫野さん……ぶっめんね」

「な、なにを……」

「ボクは確かにゾンビかもしれないんだけどね。自分でもよくわからないんだ。ただ、姫野さんの言うとおりボクは命ちゃんさえ助かればいって思っちゃった。だから、ぶっめんなさい」

そう。

縁日の時の花火。

エミちゃんの死。

飯田さんがボクを守って死んだこと。

そんな後悔を二度としたくなくて、ボクは姫野さんを無意識に切り

捨ててしまった。

それは、悪いことではないと思う。

人は限りのある存在だから。

ボクはゾンビじゃなくて人なのだから。

誰も彼も救えるとは思ってない。

でも、切り捨てられた人にとってはどうなんだろう。

惨めで、哀しくて、孤独で、寂しくて。

誰かを道連れにしたいと思うほどには——、最悪な出来事なのだろう。

「姫野さん。ボクは自分がゾンビなのかは正直わからないんだけど、ゾンビを操る不思議な力を持っているのは確かだよ。だから、姫野さんのことも治療できるかもしれない」

「仮にそれが本当だったとしても、あんた達が私を見捨てたのは変わらない」

「悪かったと思ってます。姫野さんのことはよく知らなかったし、ボクは人見知りだから、最初から人に優しくするっていうのはできなかったんだ」

「おまえがゾンビを操ってるのが本当なら、あるとき私を襲ったのはあんたということになる。おまえは自分が思っている以上に残酷な化け物だよ」

「……まあそうかもね。でもあの時はゾンビの動きを通常モードにしていただけで、ボクが操って殺そうとしたわけじゃないよ」

「そんなの信じられるか！」

「ねえ。姫野さん。過去のことはひとまず置いておいてさ。早く治療したほうがいいんじゃないかな。そのままだと姫野さんはゾンビになっちゃうよ。ボクの力だって完全にゾンビになってしまった人を戻すより生きている人間を治療するほうが楽だと思うし、今は自分の身体のことを心配したほうがいいと思うよ」

「確かにね……」

「うん」

「あんたが言うとおり、私に残された時間は少ないみたい。さつきか

ら意識がグチャグチャになって、よくわからない虫が脳みその中をうごめいているみたいに感じるんだ。私が私じゃなくなっていく！
ああ……いやだ。いやだ」

「だから、治療しようよ……ね？」

「私は……おまえが……お前達が信じられない。だって……、だって、誰も助けてくれなかったじゃない。私をひとりぼっちにしないでよ！」

言葉が通じなかった。

同じ日本語を話しているはずなのに、どこまでも心の距離は遠く。姫野さんのクオリアは幾千万光年も離れているように感じる。

ボクの発信が悪いのか。

それとも彼女の受信が悪いのか。

そういうことを考えてしまう時点で、人間的にダメなのか。

いつそ、ゾンビになってしまえば完璧に操れるのに。

というふうを考えちゃう時点でダメダメなんだろうけど。

「ゾンビになるのはイヤ。あんな虫みたいな何も考えないモノになるのはイヤ。死にたくない。生きていたい。誰か……誰か……助けてよ」

「いい加減に……してもらえませんか」

苦しそうに顔を歪めながら命ちゃんが声を出す。

「聞いていれば、あれもイヤ。これもイヤ。緋色先輩が治療してあげると言ってるのに、それは信じられない。ひとりぼっちで死ぬのが怖いから誰かを道連れにする。あなたのやつてることはただの自分勝手ですよ」

「そうよ。そんなのわかってるわ！ でも……、誰もわかってくれなかった」

「わかりました」

そんな声はつきり聞こえた。

命ちゃんは――、

誰よりも怖がりなくせに、誰よりも勇猛果敢で、

誰よりも計算高いくせに、誰よりも向こう見ずで、

誰よりも寂しがりやなくせに、誰よりも孤高を望み、

誰よりも人間嫌いなくせに、誰よりも人間のことが好きで、

愛に厳しく、愛に飢えている、そんな子だ。

そして――、

いつだってボクを驚かせるのが上手い。

「噛んでいただいて結構です」

「は？」

「あなたがひとりでゾンビになるのがイヤだというのなら、私もなつてあげますよ。どうぞ首でも腕でも好きにしてください。その代わり――、緋色先輩の言葉を信じてあげてください。先輩は本気であなたを助けたがってます」

「命ちゃん！ ボクはゾンビから治療できるかもって言っただけど、絶対じゃないんだよ！」

「だからこそですよ。だからこそ、私はシンプルに生きたいんです。シンプルに二度同じ間違いは繰り返さない。先輩が人に歩み寄りというのなら、私はそれを助けます。私が他人を信じきれないせいで先輩が傷ついたなら、すぐさまそれを修正して私は人を信じます！ それが私、神埼命の生き方です！」

「……私は本気よ。そんなお涙頂戴の寸劇でやめるとでも思ったの？」

「いいえ。というか、どちらでもいいんです。私は先輩を信じていますから」

「あんたはゾンビを信じるの!?!」

「ゾンビだろうとそうでなかりうと、私は先輩を信じてます」

なにを言ってるんだらうこの子は。

ボクはそんなにたいした存在じゃない。

命ちゃんがボクのことを妄信するのは勝手だけど、でもそれはひどく重い信頼だった。

他人の心がわからないボクにとっては、いくら命ちゃんの言葉だって、完璧に百パーセント信頼できるものじゃないんだ。

この子は本気で打算ひとつなくゾンビになってもいいと考えてい

る。

そんなのはダメだ。

「あ……あ……ん。うん……そんなのはダメ」

いくつもの光景がフラッシュバックした。

いくつもの後悔が頭の中を駆け抜けた。

このホームセンターに来てから、ボクはいろいろと失った。ボクがお気に入りだった子、ボクがほんのちよつとだけ好きになった人。少しだけ育まれた人間関係。

全部大事だったのに壊れてしまった。

もう、何も失いたくなかった。

だから――。

「姫野さん……。もしも命ちゃんを噛んだら、ボクはあなたを殺すよ」

ボクはまた間違える。

命ちゃんほど頭がよくもなく、心の中に愛がないから。

化け物らしく酷薄に。

ゾンビらしく無慈悲に。

せいぜい、人間はむごたらしく殺してしまおう。

「それがおまえの本性かー」

姫野さんは頭を命ちゃんに近づけ噛もうとした。

――あーあ。

やっぱり、人間なんてそんなもんじゃないか。

姫野さんなんて自分のことばかりで他人になにひとつ譲歩しない

じゃないか。

「……もう、おまえはゾンビになっていいよ」

「あ。ぐっぐがああああああああああ」

ゾンビウイルスを沈静化させることができるのであれば、当然、その逆の活性化もさせることができる。

エミちゃんの時のように心的領域を積極的に破壊すればいいだけのこと。

噛まれていない人間はゾンビウイルスの量が足りないから、いきなりゾンビにさせることはできないだろうけれども、噛まれて、多量の

ゾンビウイルスに汚染されている姫野さんであれば、瞬間的にゾンビにすることができるとなってしまう。

そうすれば、ボクの所有物。

ボクの言うことにはなにひとつ逆らえないし、そもそも逆らうという意思が存在しなくなる。

そっちのほうが綺麗かもね。

「あぐがああ……いあ。ああ。あイヤ。死に。だぐ。抱かせてあげるから」

チラリと夢想するのは、ボクがもしも間違えずに選択していれば――

例えば、命ちゃんの愛に打たれて、姫野さんがボクの治療を受けることを選択していれば、違った結果になったかもしれない。

ボクは間違えた。

姫野さんはゾンビになった。

でも、姫野さんだったものは、ボクの所有物のはずだったものは、ボクの命令を無視して、意味もなく、わけもなく、理由もなく、どうしてか、なぜかはまるきり全然これっぽちも理解できないんだけど。

命ちゃん的首筋に噛みついた――。

☆
||

姫野さんだったモノには、すぐさま自分の首をねじ切るように命令した。

あのおときどうしてボクの命令に逆らうことができたのかはわからない。

永遠に不明のままだろう。ただ、その憎悪こそが、最後の一線でゾンビになりきる前に、事を成しえたのかもしれない。

ぐちりぐちりと三回半くらい回転したところで、ゴキリと嫌な音がして、姫野さんの身体は停止した。

血の噴水というわけにはいかなかった。ねじ切れる前に神経の連絡線が途絶えたのだろう。姫野さんだったものは頭を破壊されたわ

けではないから、まだ視線でこちらを追っている。うらみがましい視線に思えるのはボクの心がそう感じているからだ。そう思いこむことにする。

うらんでくれていいよ。でも、そっちだって——ひどいことしたじゃん。

ボクは命ちゃんの傍に駆け寄った。

「先輩……」

「ごめんね。命ちゃん……。ボク、また失敗しちゃったみたい」

「大丈夫ですよ。私は……信じてますから。先輩のことを私を救ってくれるヒーローだって……だから」

ゾンビウイルスは生来的に欲しがりなのだと思う。

誰かとくつつきたくて。

誰かといっしょになりたくて。

たぶんゾンビウイルスと呼称しているソレは、孤独なのだと思う。

だから、仲間を増やしたいんだ。

その本能を抑えこむのは——。

ボクが操っても至難。

リモートコントロールでは、今のボクにはゾンビ化を止めるほどのレベルが足りない。ボクの理性とボクの無意識の戦いとも言える。

もつと直接的な摂取しか無理そうだ。

つまり、ヒロウウイルスの摂取しか。

ボクは人差し指の一部を噛み切ると命ちゃんの唇の中に差し入れた。

意識が混濁しているのか、命ちゃんはボクの指をおしゃぶりのように、ちゅぱちゅぱと吸っている。

ヒロウウイルスは、ボクの中核ともいえる存在。

下位のゾンビウイルスなんか簡単に駆逐してしまえる。

ただ、今回は小杉さんのときのように、命ちゃんを哲学的ゾンビにしてしまうわけにはいかない。

命ちゃんを物言わぬゾンビにしてしまうことには——、ボクの所有物にしてしまうことには、一種の抗いがたい魅力があったけれども、

ボクはそれ以上に命ちゃんに生きていてほしかった。

ボクを信じてくれた命ちゃんを生かしたかった。

ボクは命ちゃんのクオリアを信じているから。

ボクは命ちゃんのクオリアが好きだから。

「先輩ついでにキスもお……」

「あのね。命ちゃん。シリアスな場面なんだよ。これ」

まあ、キスもついでにしておいた。

ヒイロウイルスは多量に摂取しておいたほうがいいからね。

でも人工呼吸みたいなもので、ノーカンです。

ボクのファーストキスはそんなに簡単にはあげません。

★
||

朝焼けが身体に染みるようだった。

「エミ……、お家に帰ろうな」

ホームセンターが遠く後ろに見える。

ここから家までは何キロあるだろう。

いつもは軽いエミの身体が、いまでは鉛でもかっついてるかのよう
に重い。

当たり前だ。

人の命は鉛よりも重い。

当然に決まっている。

でも、オレは――。

たぶん、死ぬだろう。

いや、絶対に確実に死ぬだろう。

銃弾はいくつも身体の中を埋まっていたり、容赦なく風穴を開けた
りしていたが、幸いなことに足と手だけは無事だった。

だから、エミを担いで、一応なりとも歩いていけている。

「最後はひどいことになっちゃったけどさ……」

オレは嘆息まじりに言った。

「オレ、ヒーローになれたと思っていいよな……」

なあ。エミ。

お兄ちゃん、がんばったよな。

あのとき、小学校の校舎の中で逃げ惑うしかなかったオレが、今日
はひとりの人間を救ったんだぜ。

お兄ちゃんはすごい、っていつも褒めてくれていたエミ。

今日もとびきりの特大ホームランを打った気分だ。

きつと——生きていたら、褒めてくれただろうな。

「ゾンビって生きてるのかな。だとしたら、オレとエミは生きてて、親
父たちは死んでるから、天国でも会えそうにないかな。ゾンビは死ん
でるって考えたほうが……いいかな」

視界がどんどん暗くなっていく。

燃えるような暁が田んぼの色を急速に染め上げていく。

そんな光景も、もうほとんど見えなくなっていく。

気がかりなのは、エミのことだ。

こいつはオレが死んだら一人さまようことになるんだろうなと思
うと、寂しい気持ちになる。

それはオレ自身もそうだ。

ゾンビになってしまったら、きつと親父みたいに母親をかみ殺すよ
うになる。愛も心も失ってしまう。

だから、きつとゾンビになったら離れ離れになるだろう。

孤独のうちに、何年もさまよい歩くことになるだろう。

「……エミ。ごめんな。お兄ちゃん、エミのこと守ってやれなくて」

「イ イヨ……」

「エミ……」

振り返ると、エミは口を閉じていて、いつもと同じく沈黙を守って
いた。

気のせい。死に際の幻想。

そんなものなのかもしれない。

でも——。

再び前を向いたとき首筋にヒヤリとした冷たい感覚がした。

それは要するにゾンビ避けスプレーの効果は切れただけの、ただの

物理的現象なのかもしれないけれど、小さく、甘く、オレはエミに噛まれていた。

きつと——、オレをひとりにさせないために、噛んでくれたのだろう。

ひとりじゃないと励まされてるみたいだった。

涙が止まらなかった。泣きながら歩いた。

「エミ……ありがとうな」

そうしてオレたち二人きりの兄妹は、朝焼けに融かされながら帰途についた。

配信編

ハザードレベル28

サメ映画って面白くね？

ボクは真理に到達してしまった。

なんというかボクってゾンビ映画好きなんだけど、サメ映画もすごく好きなんだ。

ゾンビ映画とサメ映画って、こうなんというか……ボクのクオリアを伝達するのがとても難しいんだけど、どことなく似ている気がする。

どこがといわれると難しいんだけど——ポイントとなるのは人間だ。

ゾンビもサメもそれぞれそのものが、物語を駆動するための小道具なんだけど人間そのものを周辺を埋めるようにして描写する装置になっている。裏側から人間を描くというような感じ。

つまり、ゾンビもサメもモンスターで人外で、でも人間と同じく凶暴で、ときには狡猾で、ときには人間に殺されたりして、そんな悲哀を持っているというところが似ていると思う。人外だけど人間っぽいってことね。

だから監督さんごとの人間観がわりとモロに内容に直結する。

ゾンビをただの障害物だと捉えたり、サメを自分が英雄になるための踏み台のように描くような人もいる一方、どことなく愛嬌があったり、愛情をこめたりできるようなそんな存在として描いたりすることもあるんだ。

サメは敵だけど、サメの気持ちになると、みんながボクを排斥してくるみたいで、そんな寂しさを覚えて、つまりサメに共感してしまつて、なにくそって思つてひとりふたりくらいかみ殺してみたり、それで最後にはやられちゃったり。一喜一憂して、楽しくて悲しくて……。

あーもう、たまらねえぜ。

シャークネードを一巻から五巻までひとり鑑賞会しちゃった！

時間を究極的にぜいたくに使っちゃったというような、この気持ち。

ねえ。わかる？

このボクの気持ちわかる!?

そして、同じ時間で違うサメ映画を見ていたら、また違った時間が過ごせただろうという淡いノスタルジーに似たメランコリックな気持ちも感じる！

反省しよう。ボクに人生という時間を与えてくれた両親に対して猛省しよう。

ボクはシャークネードのあとにシャークトパスを続けて視聴するという、なんというかある意味、濃厚なとんこつラーメンを頼むと同時に長崎ちゃんぽんも頼むといった炭水化物地獄のようなサメ地獄を味わっていた。一生のうちで最も濃厚なサメタイムだった。もうあたま中サメまみれや。

精神がサメもたれしている……うつぷ。

—— 閑話休題 ——。

ホームセンターから帰ってきたあと、ボクは反省した。作文用紙いっぱい『失敗した失敗した失敗した失敗した』と書いたあと、それをぐちゃぐちゃに丸めてゴミ箱に放り投げるくらいには反省した。

よくあること、ではある。

人間関係をまったく失敗しないで生きてこられた人間なんて、おそらく超豪運の人か、家から一步も出ない引きこもりか、あるいは物凄い天才かぐらいしかいないだろうし、ボクは普通の人間で、確率論的にありうる話として失敗したんだと思う。

世界はゾンビで満ちている。

ゾンビはボクたちの無意識だ。そして無意識とは言葉の前駆状態だ。

だから、ホームセンターでどんなことが起こり、ボクたちがどんな失敗したかという言葉はボクは持ちえない。無意識を語るというの

は、それだけ難しい。言い訳乙という言葉もまたありうるだろうけれども。ほならね、君がゾンビを操ってみろって話でしょ。そうボクは言いたいですけどね。

深淵を覗きこむものは逆に深淵から覗かれるとかなんとか偉い人が言ってたように思うから、結局のところ、ボクはボク自身のころもよくわかっていないということなのだと思う

ともかく、事実だけ述べると、ボクは失敗した。

人間関係をことごとく破綻させて、ただひとり、後輩で昔からの幼馴染でかわいい妹分の神埼命ちゃんだけ連れ帰って……いや、持ち逃げするように帰ってきたという苦い事実だ。

あれから命ちゃんはホームセンターで気絶してしまったから、ボクはお姫様抱っこしてアパートまで帰ってきた。いまはベッドで寝かせている。緋色先輩とキスしちゃったーうんぬんかんぬんと言いながら白いほっぺたが桃色に染まっているから、きつと幸せな夢でも見ているんだろう。

そして――。

もうひとつ。

「ご主人様♪ 今日の御召し物はなんにしましょうか」

ゾンビお姉さんが覚醒してしまいました。

☆
☆

ゾンビお姉さん。

それは綺麗なお姉さんにお世話されたいというボクの欲望がカタチとなって現れた存在だ。

正直なところ、ゾンビお姉さんには意識や心といったものが無いように思っていた。

だって、そうじゃないとボクは甘えられないから。いろいろと抑圧していた気持ちをぶつける相手として人形のようなゾンビお姉さんは本当に都合がよかったんだ。

ホームセンターからの苦い撤退のあと。

ボクはお姫様抱っこ状態で命ちゃんを家まで運んだ。

ホームセンターからボクの家までは歩いてもたいした距離じゃなかったし、ボクの力はかなりのところまでレベルアップしていたから、たいして辛くもなかった。

でも肉体的には疲れ知らずとはいえ、ボクの心は折れかかっていた。

息苦しいような人間関係にというより、うまくできなかった自分に、嫌気がさしていたんだ。

陰キヤにありがちな自分ってなんてダメなんだろう的なあれだ。

わかる人にはわかるあの状態だ。

それで、アパート二階への階段を上りきったところで。

ボクは——ふと見てしまった。

隣の部屋が空いていた。人間がいたっぽい隣の部屋。顔も知らない隣人の部屋。

その部屋のドアが開け放たれていて、隣人さんらしき男の人がゾンビになって出てきたのを見た時、ボクのなかではぶつぷりと何かが切れるような音がした。

命ちゃんをベッドに下したあと。

お部屋の中で待っていたゾンビお姉さんをボクは押し倒していた。

「なんでこうなっちゃうかなあ……」

それはもはや独り言でしかなく。

ただの無意識が口をついて出てきたに過ぎないものだった。

同時に、人間らしく人間っぽく、ボクはボクなりに思っていた事が堰を切ったように溢れ出すのを感じた。つまり、少し泣いちゃった。押し倒されたゾンビお姉さんはボクの涙をそのまま受け止める形になる。

そして、ぽたぽたと。

ボクの涙が数適口に入った瞬間。

ボクは捕獲された。

いや、捕食されたといつていいレベルだった。

正確にはだいしゅきホールドというのだろうか。ゾンビお姉さん

の手足はボクの体に絡みつき、それから無理やり今度はデーパーキス。

「むうううううう。むううううううう」と引き離そうとするんだけど、もはやゼロ距離になってしまったら、そして柔道の寝技みたいに完璧にハマってしまったら、もはやボクの手でも抜け出せなかった。

それで、ゾンビお姉さんは意識とか心とか、クオリアを感じさせるようなそんな存在になってしまった。なぜかボクのご主人様認定だけど、その理由も察しはつく。

ボクはたぶんゾンビの中でも特別な存在で、身体の中にはゾンビウイルスの上位版みたいな何かを持っている。それをボクは自分の前にちなんでヒロウイルスって名づけたんだけど、たぶんそれがゾンビお姉さんに作用したんだと思う。

いやーきついです。

ゾンビお姉さんにいったいどれだけ甘えたことか。

撫でて撫でてとせがんでみたり、無理やり褒めてほしいって承認欲求全開でお願いしてみたり、ゾンビお姉さんの前でフアツションショーやったり、今日はお姉ちゃんと一緒に寝るくく（甘え声）ごっこを試してみたり、好き好き大好き超愛してるって言ってみたり、そんなさまざまな羞恥エピソードが思い起こされるに至り、ボクはきわめて順当に恥ずか死んだ。

ある意味、ボクの心は終焉を迎えてしまった。

現実逃避へのシークエンスはそれから数十秒もたたないうちに行われた。

ボクはゾンビお姉さんに朝まで映画見るから、隣の部屋で待機するようにお願いし、それからたっぷりサメ映画を観てたんだ。いやあサメ映画って本当にいいですね。

サメだけにシャーク然としない？ 審議拒否。そんなの関係ねえ！

ああ……朝焼けがまぶしいよ。

「ご主人様？」

「あー、あの、ゾンビお姉さん？」

「はい。なんでしよう」

「とりあえず、ボクの名前は知ってる？」

「えっと……緋色ちゃん様？」

なんだその緋色ちゃん様って……。

「ボクは夜月緋色っていうんだけど。お姉さん名前は？」

「わたしは水前寺マナって言います。でもいつもどおりゾンビお姉さんでいいですよ♪」

「あ……うん。でもマナさんでいいかな」

「いいですよ。いつもどおりしゅきしゅきしてもいいですよ」

いっぱいちゅき。

じゃねーよ。ボクはそんなことしてな……してるか。

してるよ……。

すっかり覚えられておられる。いままでのことも全部。

「うん……それもいまはいいかな」

「じゃあ、さっそくですけれども、お召しものはいかがいたしましたでしょうか」

ゾンビお姉さんあらため、マナさんの手にはどこからか調達してきた女児用の服がたくさん握られている。はつきり言おう。すっげー似合いそう。それはまちがいない。

ボクの今の体型は小学生の女の子そのもので、小さくてかわいらしい。

超かわいいのは自負しているところだ。

でも、なんだろう。ちよつと嫌な予感がするんですけど……。

「お姉さんって、もしかしてですけど、小学生女児に欲情するようなタイプ？」

「そうですね」

「そうですか」

「ご主人様がわたし好みの超絶かわいい幼女で、わたし超ラッキーです♪」

なんというかストレートに自白されると、もう何も言えなくなっ

ちやうな。

「あの、ボクのことをなんでご主人様って呼ぶの？」

「それはですね。わたしの全身がそう感じてるんです。もう、めっちゃくちや心の底から押し倒したい……じゃなかった。お慕いしたい、そんな気持ちが湧いてくるんです」

特に必要がないと思つてたから描写してなかったけれど、今のマナさんってシースルーでスケスケのスケベ下着を着ているから、かなり目の毒だ。

「身体のなかに何か別物がいるようなそんな感じがしない？」

「うーん……わたしって元から小学生女児を飼いたいって思つていた変態さんですから、特に何か変わったって感じはしませんね」

「そうですか……。お願いだから襲つてこないでね」

「襲いませんよ。ご主人様に身も心も捧げてますから、ご主人様が嫌なことはしません。絶対服従です。この場で、ゾンビな盆踊りを披露しろつていうんだつたらすぐさま実行します」

ボクはマナさんのクオリアを破壊したいとは思つていない。

だから、その心には十全な自由を与えている。

でもそれつて本当に自由だといえるのかな。

たとえばボクが命令したら、すぐに自殺させることもできるのかも
しれない。

そもそも他人のクオリアは見えないのだから、お姉さんが人間っぽいふるまいをしているだけで、そういうふうに見えるだけで、その中身はまっくらなままということも考えられるんだ。

哲学的ゾンビな可能性は捨てきれない。

でも、それは誰であつてもそうなんだ。

お姉さんは変態さんみたいだけど、もともとボクを甘やかしてくれた存在で、そのふんわりした雰囲気は好ましいところなのは確か。

ボクにはお姉さんはいなかったからなあ。

「ん？」ご主人様がなにかわたしをサーチしてるような気がします」

「し、してないよ」

ボクはあわてて言った。お姉さんに対しては甘い対応になつちや

うな。ボクの弱い部分をさらけ出しちゃったからかもしれないけれど。

「あの今日はね。ちょっと眠いんだ。だから、このまま寝ようかなーなんて思うんだけど」

「なるほど。では添い寝させていただきますね」

「え、あの……いいよ。悪いし」

「なにが悪いものですか。むしろご褒美！」

「ボクの寝床用意してくれるだけでいいから……」

そう。ベッドには命ちゃんが寝ている。

一応、小さいボクなら隣りに寝るのは余裕なんだけど、それはほら、後輩とはいえ、女の子が寝てるのにそこに無理やりもぐりこむなんてできないよ。幼い頃はよくいっしょに寝てたけどね。

マナさんは押入れから毛布をひっぱりだしてきて、それを重ねて床に敷いてくれた。

これで簡易な寝床の完成。

「ささっ。どうぞぞ♪」

お姉さんがウエルカムモードにならなければね。

「あの、マナさんって隣りの部屋でずっと起きてたの？ それで眠いとか？」

「あ。はい。ずっと起きてましたよ。耳をぴったりと壁にくつつけてご主人様の吐息を聞くというのがとても甘美な体験でした」

「あ、そう……」

「ああ、その、ゴミ屑を睥睨するような視線。素敵……。ああ幼女様っ！」

「……ボクの命令が無いと寝ることもできないとかじゃないよね？」

「それはないですよ。わたしはわたしの『感じ』を持ってますから。例えば眠気を感じたら、普通に寝ます。もちろん、ご主人様が起きておけと言われれば、そうしますけど」

「寝ていいよ。でもどっちかといえば、そっちの命ちゃんといっしょのベッドで寝てほしいんだけど……。そういえば命ちゃんに対する認識はどんな感じなの？ ボクは無意識にマナさんをコントロー

ルしてるのかな。襲わないようにって」

「いえ。コントロールはないですね。その点については――、わたしと同じ仲間って感じででしょうか。なんというか、すごく同族意識を感じます。吸血鬼ものだったら同じご主人様を戴く眷属みたいな存在でしょうし」

「眷属ね……」

じゃあ、命ちゃんも同じく眷属か。

それはちよつと困るというか。

ボクは支配しちやつてるじゃないか。

「ご主人様。支配するのはお好きでないですか？」

「うーん……それはあんまり好きじゃないんだけど」

「でも、人間関係って依存が基本ですよ」

「そうかな？」

「そうですね。人という字を考えてください。左にいる人は右にいる人に支えられています。どう見たって左の人のほうが楽してるでしょう。左の人は右の人に依存しているんです」

「金八先生に怒られるよ」

「自立した対等な関係なんてほんのごく一部の人間だけだと思います」

「お姉さんは大人だね」

「大人になんてなりたくなかった。わたしは幼女になりたい。はやく幼女になりたい！」

綺麗なお姉さんは残念なお姉さんでした。

「まあ、いろいろと主義主張があるのはわかったよ。どうあがいても現状が変わるわけではないし、ヒイロウイルスを除去する方法もわからないしね」

できるだけ支配やコントロールをしないように気をつけるしかない。

ボクにできることはそれだけだ。

「ご主人様。でもですよ。わたしや命ちゃんはダイレクトな支配ですけど、ゾンビウイルススカッコ仮についても、ご主人様は操れるわ

けでしょう」

「うん。まあ」

「で、人間はみんなゾンビウイルスに感染している」

「……うん」

「だから程度問題とはいえ、ご主人様によってみんな操られてるんじゃないですか？」

「あ？」

そうなのかな。

人類全体はあの彗星のせいかどうかは知らないけれど、ゾンビ的な何かに既に感染してしまっている。人類全体が――。

だったら、人類は既にボク的手中に？

そんな馬鹿な。

「いやいや。ボクって殺されかけたりしてるし、嫌なことされたりしてるし。ボクが人類を支配しているっていうんだったら、そんなことが起きるなんておかしいじゃないか」

「それもご主人様が無意識に他人との接触を求めてる結果なのかもしれません。人は他人との紛争が起こつたり、嫌なことが起こつたり……そうして憎んだりしたときに、一番他者を感じ取れるものですか」

要するに、とマナさんは続けた。

「摩擦なんですよ。摩擦が起こると人間は人間を感じ取れる。もしも自分の言うことに絶対服従の存在がいたりしたら、何も感じないツルの人間関係だったら、ロボットを相手にしているのと同じでしょう？ そんなのはごめんだと、ご主人様は無意識に考え、そうして実行したとも考えられます」

「違うよ……」

そんな可能性はちよつと怖すぎる。

だって、それはこの宇宙にひとりぼっちで浮かんでいるのと何も変わらないじゃないか。

「独我論ってご存知ですか？」

「うん」

|||||||

独我論

我思う故に我ありという言葉は有名だが、その言葉が呪いとして反転すると独我論になる。自分の精神以外は、どんな存在も存在自体を疑いえるのであり、例えば、世界は既に滅びていて、他人は自分が見ている夢に過ぎないとしても、それを反証しえない。ものすごくカンタンに言えば、自分以外は誰もいないんじゃないかという思想。

|||||||

「では独我論の特効薬は？」

「ん？ なに？」

「セックスです！」

わが腕のなかで息絶えるが良いとでも言いたげな——。

そんな腕の開き方で、ボクを迎え入れようとしなくてください。

「わたし、ご主人様と摩擦したいです。こすりあいたいんです！」

「お姉さんは、隣りの部屋でひとり寂しく寝てください！」

「後生な！　せっかく、喜びを感じ取れるようになったというのに。モヤのかかったような意識から、光があふれ、ご主人様が幼女天使に見えたというのに。ああっ。ご主人様から見捨てられたら生きていけない」

手で顔を覆うのはいい手法だ。

でも、チラ見するのはやめたほうがいいと思う。

ボクは親指で出ていくように命じた。

しぶしぶながらもボクの命令には根本的などころでは逆らえないのか。それとも幼女の命令は喜んで受け取るただの変態なのかは知りようもなかったけれど、ともかく一時の静謐を得た。

さすがにボクも疲れちゃった。

でも——、独我論か。

ゾンビウイルスは世界中に蔓延しちやってる以上、ボクの延長であ

ろうなっと思って思う。

あれは——、ボクが小学生くらいの時だったかな。

雄大や命ちゃんはボクの友人で、当然一番長い付き合いだったけれども、小学生のときはボクもそれなりに人間関係を構築しようとして努力していて、だから、友人のひとりやふたりはできていた。

名前を思い出すのもちよつと難しいくらい淡い記憶だから、仮にその子とっておこう。

その子とボクは隣りの席で、クラスでよく話すようになっていた。サッカーが好きな普通のどこにでもいるような男の子で、ボクもその子と話をあわせようといういろいろと努力した。たいして興味もなかったサッカーの番組をみたり、選手やチームの名前を覚えたり、それなりの努力の結果、それなりに仲良くなっていた。

で、なんの気なしに。

ボクは「ボクたち親友でしょ」的なことを言ったと思う。

小学生くらいの記憶はボクにとっても遠くて、せつないぐらい遠くて、よく覚えていないんだけど、そのことだけははつきり覚えている。

その子は「親友ってそんなんじゃないよ」的なことを言って、鼻で笑った。

たぶん、その子にボクを傷つける意図はなかったと思う。

馬鹿にしたわけでもない。

ただ、その子の中ではボクはクラスでたまたま席が隣りになっただけで、一年か二年くらいの浅い付き合いで、ボクは親友と呼べるほどの間柄じゃなかったんだろう。

もしかしたら、ボクにとつての雄大のように、彼にとつての親友がまた別にいて、そういう評価に至ったのだと思う。

それから、ボクは少しだけ人と話すのが怖くなった。

友達だところから告げるのが怖くなったんだ。

で、そんなことを誰にも話せずにいたら、雄大に会ったときに、たまたま偶然なんだろうけれども、「親友だろ俺たち」的なことを言ってくれて、それでボクは泣いてしまった。

雄大は自分がなにかしでかして、それで泣かしたんじゃないかって
おろおろしていたんだけど。

そんなことも含めて、ボクが人間をまた信じることができたのは、
こいつのおかげなんだと思う。

「ねえ……雄大」

「どうしたよ。緋色。いつもどおり少女声に聞こえるが、今日は少し
沈んでるぞ」

「うん。きつと、サメ映画がボクのSAN値を削ったせいだと思う
……」

「で、どうしたんだ？ 言ってみ？」

「あのね。ボク、人間のことをどうしたら信じきれるのかな？」

「あー？ よくわからんぞ」

「違うな。えつと、どうしたら雄大みたいに人を思いやれるのかな」

「オレはべつに人を思いやってるなんて意識はないけどな」

「それが雄大のすごいところだよ」

「そうか。まあ、いいんだけど——。おまえが言う『人』っていうのは
誰か具体的な人なのか？」

「うーん。そういうわけじゃなくて、こう……概念的な感じの人だよ」

「抽象論としての人が」

「そうかも」

「人間不信ってやつか？ オレにはよくわからん感覚だが」

「そうかもね」

「おまえって数年置きに人間不信モードになるからな」

「そうだよね」

ずうううううううん。

雄大にはボクを傷つける意図はないとわかってるんだけど、ボクは
ボク自身の至らなさを骨の髄まで認識してしまつて、気が沈むのを抑
えきれない。

「でもまあ……。オレだって合わないやついるぜ。学校のアホ校長と
かき。バイト先の先輩風吹かしてくる馬鹿とかき。だから、たまたま
お前が会ったやつがお前に合わなかっただけなんじゃねーの？」

「そうかな?」

「わかんねーけどな。ただオレの経験からすればだ。合わないやつもいれば合うやつもいる。お前のことを好きだって言ってくれるやつだってこの世界にはたくさんいるだろうさ」

「うん……」

「だから、おまえが人間不信な自分をいやだって言うんだったら、たくさんの人に会ってみたらどうだ?」

「たくさんの人に会う?」

「それはすごく怖くて——、でもそうかもしれない。」

「独我論を打破するには、独りきりじゃ無理なのは決まっている。」

「まあ、無理にとは言わん。おまえの人間不信という実感を解消するには、おまえ自身がどうこうするしかないんだからな。オレは……つと、ようやく函館が見えてきた。緋色知ってるか。北海道の田舎は、道がぼこぼこで走りにくいっいたらありやしねえ」

「大丈夫なの?」

「まあゾンビも寒いと身体が動かないのか、比較的安全だな。もともと函館は坂の無い長崎みたいな感じだし、なんとなく土地勘は働く」

「気をつけてね」

「ああ。おまえも、がんばれよ」

「とうんく。」

「とうんく。」

「ああ……。うん。ボクがんばるよ。」

ハザードレベル29

「朝起きたら……男になっていました」

命ちゃんがむくりと起きだして言うには、そんな言葉だった。

意味がわからない。

ボクは確かに『あさおん』しているけれども、命ちゃんは元から女の子だった。

まさか、朝になったら男になっていたという『あさおと?』しているのか。

そんな展開聞いたことないけど。

もちろん見た目は変わっていない。

命ちゃんは亜麻色のサイドテールに、雪みたいなまつしろでキメの細かい肌。

ちよつと釣り目で、女子高生らしいBなのかCなのか判然としないけど、それなりにある胸。華奢な身体のラインとあいまって、これ以上なく女の子している。

それもとびきりかわいらしい女の子。

も、もしかして、女の子の身体だけど、下腹部のみが生えているという、あの伝説のフタナリとかいうやつなのだろうか。

ゾンビ化の恐ろしい効用に、ボクは戦慄を禁じ得ない。

「どういう意味なのかな?」

ボクは聞いてみた。

「いえ、言ってみただけです」

「あ、そう……」

「私が男だったら、あるいは男でなくても生えていたら、速攻で緋色先輩の初夜ゲットしているんですけどね。きつとかかわいらしい声で……鳴かせてみせよう緋色ちゃん!」

「や、ヤダー!」

後輩が躊躇なさすぎて怖い。

「まあそれは冗談です。正確には、朝起きるとライバルが増えてました、正しいような気がします。強敵の気配を感じるんです。先輩の

隣りにいる人、誰ですか？」

「はぁーい♪」

まるで、サザエさんのいくらちゃんのような声で返事をするゾンビお姉さんである。

よいしょって感じで、ベッドのうえに乗っかり、命ちゃんのほうを向くマナさん。

大人の余裕って感じ。

純真無垢なふんわりとした雰囲気、命ちゃんもなんだか氣勢がそがれている様子。

ボクは説明することにした——けど、これが難しい。

だって、ゾンビお姉さんとの関係なんてこれといってない。ただ綺麗なお姉さんがお世話してくれるとうれしいな程度の、そんな気分で生み出された存在だから。

「えっと、この人はマナさんって言って……なんていうか」

「ご主人様に飼われたペットです♪」

「飼ってないよ！」

お姉さんのスケスケ下着もあいまって、ボクは変態お姉さんを飼う変態女兒になっちゃおう。

小首を傾げて、お姉さんは疑問顔だ。

なにその顔。

ボクが全然わかってないみたいなき感じじゃん。

「飼ってましたよね？ ご主人様。いやがるわたしの口の中にむりやりグチャグチャでトロトロになった物を流しこみましたよね。わたし涙を目に浮かべえづきながら飲みこんだんですよ。あんなに大きな——」

ツナ缶。

「わたし、食べたくないって思ってたのに、何も言えないのを利用して、よく噛んでごっくんするようにご主人様に強要されました」

「マナさん。そのとても誤解を招くような言い方やめてくれないかな……」

確かにゾンビお姉さんだった時に、無理やりツナ缶とか食べさせた

りもしたけどさ。

「緋色先輩に食べさせてもらうなんて、うらやましい……っ。先輩、私にも！ 私にも食べさせてください」

「命ちゃんは自分で食べようね」

なんだよ。これ、百合レズばかりじゃねーか。

レズはホモで、つまりここはホモの巣窟か。

ボクの貞操が危ない。

「あの……ご主人様。食べ物で思い出したんですけど」

と、マナさんがふと思いついたように言った。

「ん。なに？」

「わたし、おなかすきました」

「えっと、適当になにか作って食べたら？」

一応、ホームセンターから肩提げバッグに入る程度の食糧は持つてきた。

あとから取りにいてもいいだろう。ボクはゾンビで、あまり食べなくても大丈夫みたいだけど、他のゾンビと違っていいのか人間と違っていいのか、ともかく、ゾンビお姉さんや命ちゃんがどの程度食糧を必要とするのかは知らない。

「あー。ご主人様。わたしってほらゾンビだったじゃないですか」

「うん。そうだね？」

何かを期待するようなまなざしに、ボクは半ば疑問をこめた応答をするしかない。

「ご主人様の成分が必要だと思っんです」

「はっ？」

「だあかあらあ♪ ご主人様の成分を補充しないとゾンビにまた戻っちゃうかもしれません。そういう意味でのおながすいたんです」

「本当に？」

「本当にです」

ケガレを知らない眼だった。

昔小学校の頃、ご近所さんが飼っていたチワワあたりがこんな目をしていたなと思います。

しかし——、え、ボクってお姉さんとキスしないといけないの？
そういうことだよね？

ボクの成分を補充するって、そういうことだよね？
まさか噛まれないといけないの？

「あ。ああああああつ！ いだだだだだだだ！」

いきなり苦痛の声を出したのは命ちゃんだ。

「ど、どうしたの？ 命ちゃん」

「先輩。わ、わたしもです。わたしも先輩の成分が足りないみたいで、
全身がバラバラになりそうなほど痛いです」

「本当なんだよね?! ねえ！」

「本当です」と、綺麗すぎる二重奏だった。

ふたりはともにボクの寝ている小さなベッドに正座して、聖女のよ
うに指を組んでいる。

それで、うるうると瞳をにじませ、それから口を突きだしている。

さながら、小鳥が親鳥のエサを待っているような——。

そんな敬虔な様子だった。

幼女とのキスに必死すぎるだろ君たち。ボクは幼女だというつも
りは毛頭ないけどね。

「……ゾンビお姉さんはべつにあれだよね。もともとゾンビだったん
だから、元に戻ってもまた今の状態に復帰できるわけだし我慢できる
よね」

「そんなんっ！」

「命ちゃんはボクにウソをつくような子じゃないよね」
「う……」

ふたりをバツサリ切り捨てると、なんだろう。ダブルがつくりポー
ズが展開されている。

女子高生と綺麗なお姉さんが四つん這いになっているという図柄。
はつきり言って怪しき満点だった。

「あの一。お姉さんも命ちゃんも、他の部屋に住まない？ このア
パートいまは結構ガラガラだよ。なんと家賃は驚きの無料提供！
ガス光熱費もなんとタダ！ おめでとう！」

「そんなご無体な!」先輩見捨てないでください!」

「……三人で住むにはどう考えても狭すぎでしょ。そもそも寝る場所だって……ってそこ! ボクの枕をかがないのっ」

命ちゃんは、自然な動作でボクの枕を吸引していた。

わりと男だったときの成分も残っていると思うんだけど、命ちゃんにとってはどっちでもいいらしい。夏の虫が光に誘因されるみたいに、ふらふらとマナさんのほうも命ちゃんの吸ってる枕の反対側に鼻を近づけてダブル吸引状態になる。なんか危ないクスリでも吸ってるんじゃないかってくらい恍惚の表情になっていくふたり。

ダメだこいつら……。はやくなんとかしないと。

なんかむずがゆい。

まるでボク自身が吸われているみたい。

だれか、この変態さんたちを追い出してください。

「あー。先輩の匂い好き好きーっ」

「甘いです。すごく甘いです。この匂いだけでご飯三杯はいける」

成分補充——されちやつてるのかもしれない。

「寝る場所については、確かに三人は厳しいかもしれませんが」

ひとしきり吸引したあと、命ちゃんが冷静な顔になって言った。

さっきの崩れきった顔を見ると、なんだかなと思っただけど、会話が成り立つだけマシだ。

「いっそ、ベッドを取り払って床で寝るのはどうでしょう」

「先輩を挟んで?」

「サンドイッチ状態です♪」

「天才か」

あんたら仲良しか。

意気投合というのかなんというか、ボクのことに対する意見と違いますか趣味と違いますか、つまりは好きって感情が命ちゃんとマナさんを結びつけているみたいだった。

これがマナさんのいう眷属効果なのかはわからない。

「いやいや……冷静に考えておかしいでしょ。ボクはベッドで寝たいの。ひとりで!」

「先輩を抱っこしたいだけの人生だった」

「ご主人様と同衾したいだけの人生だった」

「わかるー」

うなづきあうふたり。

君たちの人生価値基準っていったいなんなのさ。

ともかく——ボクは他人と一緒に寝るっていうのはちよつとどうかなと思っちゃう感じ。正直寝れなくてね。他者の心を強く意識しちゃうんだと思う。

ゾンビお姉さんが物言わぬ人形みたいな状態だったら、まだありえるんだらうけど。

「昼間はこの部屋に遊びにきてもいいからさ。夜はそれぞれ別の部屋で寝てよ」

「うーん。わかりました。でも私だって、いままで他人だった人の気配が残る部屋には住みづらい感覚があるんですよ。慣れるまでというか精神的なお引越しをするまでは時間がかかるかもしれない。わたしは緋色先輩以外の他人はあまり寄せつけたくないんです」

そう返す命ちゃんに、ボクもうなづく。

それは、わかる気がするから。

アパートはいつのまにかボクたちを除いてもぬけの殻になっていた。

そのほとんどはゾンビに襲われるか、ゾンビになってしまっていたか、あるいはどこか外に行ってしまったみたいだけど、前の住人が住んでいたときのままになっているからね。なんとなく嫌な気分がしてもしようがない。

「いつそ。家を変えろというのはいかがです?」

マナさんの提案もわからなくはないけど。

「うーん。住み慣れたアパートだからね。ボクとしてもそのままがいかな」

今のところはね。

まだここに来てからそれほど時間が経っているわけではないけれど、はじめて自分の居場所というものを自分自身で作り上げたんだ。

簡単に手放したくはない。

これはボクの偽らざる気持ち。

「実際のところ、この場所もあの場所も、どこもかしこもご主人様のものですよ。ご主人様のお好きなどころに住まわれたらいいと思います」

人間は——、ゾンビで汚染された地域には住みにくいだろう。

ゾンビがたくさんいる場所は、全部ボクの占有地だと言えなくもない。

マナさんの言ってることは、頭では理解できるんだけど、場所に限らず、なにかしらの概念を所有しているという感覚は、その概念に対するアクセスしやすさで決まると思う。

つまり、愛着——。

ボクがボクのものだと本当の意味で感じることはできるのは、ボクがそれに対して愛着を抱くことができるからだ。

だから、ボクの家は、いまのところはやっぱりこのアパートかな。

☆Ⅱ

ボクたちはのんびりと歩いてホームセンターに向かっていた。

行きかうゾンビたちは、当然のことながらボクたちを完全スルー状態。

ゾンビお姉さんもといマナさんはともかく、命ちゃんはもしかして襲われるかなとも思ったけれど、そんなことはなかった。

立派なゾンビにおなりになって……。

ある意味ボクって命ちゃんを守れなかったのかなと思う。

少なくとも人間として生かすことはできなかったな。

いや——。

よく考えれば、命ちゃんだけじゃなく誰ひとりとして人間を人間のままでは救えてない。

「先輩が私をマモレナカッタ顔してますね」

「う……」

マインドリーディングスキル（ボク限定）は相変わらずか。

「先輩が気に病む必要はないですよ。そもそもゾンビになつてもいいと言つたのは私ですし、その言葉にウソや偽りは一切含まれていませんから」

「でもゾンビには心がないかもしれないとボクは思つてる。命ちゃんが本当は死んでるかもしれないと思うと怖いんだ」

「そもそも生きてる人間だつてそうですよ。なにを考えているのかわからない人たちがばかりですし、ゾンビより危険な人間はたくさんいます」

「それは、うん。わかるけどさ……。だつて、今ここで行きかつてるゾンビさんたちと本質的には変わらないつてことになるでしょ」

すれ違うゾンビさんたち。

今日も元気に通勤しようとしているのか。いつかどこかで見たと
うなサラリーマンゾンビさんがふらふらと歩いてた。その足をひ
きずつたような生気を感じさせない歩き方は、正直なところまったく
心があるとは思えない。

その同値としてボクたちがいるとすれば、命ちゃんも生きている頃
と姿かたちは変わらないけれども、心をなくしてしまつているという
可能性があるんだ。

「かまいませんよ先輩。私が先輩にとって物言わぬお人形だと思われ
ても……。私は先輩を思い続けます。先輩のお気に入りのお人形だ
と思われれば、それだけでうれしいです」

レーザービームのようにまつすぐな言葉が飛来する。

「命ちゃんはお人形じゃないよ」

だつて、こんなにもクオリアを感じるからね。

伸ばされた指の意図をボクは命ちゃんのこころだと思つてつない
だ。

昔ながらの手の感触に、ボクは少し安心する。

「尊いです。姉妹のように仲良しさんなおふたりがとても尊いです
！」

後ろのほうでおとなしくしていたマナさんが、口元に手をあててな

ぜか感動していた。

ゾンビお姉さんだったときのほうが、正直奥ゆかしかったななんて思いもするけど、マナさんってすごく明るい性格で癒されちゃうなあ。

「あ、今度はご主人様がわたしをサーチしてます！　ねぶるようにわたしを値踏みしてます！」

「してないよー！」

そんなわけでグダグダのんびんだらりと会話しながら、ホームセンターに到着。

実際、数日しか経ってないので、ホームセンターはあのときのままで。違うのはもう中には人間が誰もいないこと。みんないなくなっってしまった。

外見は変わってないけれど、中身は決定的に変わってしまった様子に、ボクは心の中が冷え込んでくる気がした。

「あー……とりあえず。トラックから食料とか運ぼうか。マナさんの服もあるかもよ」

「わたしはご主人様のお洋服のほうが自分の服より百倍興味あります！」

「毎日同じもの着っぱなしはキタナイ感じがするかなあ」

「ガーン」

ガーンを口で言う人、はじめて見たよ……。

まあともかく、落ちこんでいてもしょうがない。ボクは元気。

「ところで先輩」

「ん？　なに命ちゃん」

「ホームセンターの中には、必要物資以外にもいろいろと置いてありますよね？」

含みを持たせた言い方に、ボクもピンときた。

そうだよな。さんざんボクたちを危険にさらした銃がたくさん放置されているはずだ。

その多くは執務室の机のなかに保管されていたようだけれども、他にも金庫やロッカーの中にくつかあるみたいだった。

それらを回収したほうがいいのかどうか。

「銃についてだよ。どうしようか」

「私たちにとってゾンビは敵ではないです。むしろ有利な環境といえますか、地勢のようなものでしょう。私たちの敵は人間です。したがって、人間に対する武器として銃は持っていたほうがいいと思います」

まあ——確かに、このホームセンターでボクたちの敵にまわったのは人間だった。

あのとき、ボクや命ちゃんや銃を持っていれば、せめて威嚇できれば死なないで済んだ人もいるかもしれない。ボクのゾンビ的な能力は、銃よりもずっと暴力的で残忍だから。

マナさんを見てみる。

ホームセンターでの出来事を知らないマナさんだったら、違う意見が聞けるかもしれない。

「ん。ご主人様がわたしをサーチ！」

やっぱり聞くのやめようかな……。

でも、命ちゃんやボクを盲信しているところがあるし、違った意見というのは、それはそれで他者という存在を感じさせるものだ。

「ねえ。マナさん」

「ん。なんでしよう。このマナお姉さんにわかることなら、なんでも聞いてください」

「じゃあ聞くけど、ホームセンターのなかに銃があるんだけど、どう思う？」

「どうとは？」

「ボクたちは銃を拾っておくべきかなってことだけど」

「やめておいたほうがいいでしょう。ゾンビお姉さんのいうことはいつでも正しいのです！」

お姉さん。すごくお姉さんっぽくないよ。

でも幼げではないふっくらした胸に手をあてて、えっへんとエラそうに答える様子がボクにはとても好ましく思えた。

「あの、どうしてか聞いていいかな」

「根本的なところで、ご主人様が人間に対してどう振舞いたいかという問題ですね」

「というところ——？」

「命ちやんもご主人様もちょっと人間に対して不信感があるように思います。わたしは普通に自分が人間だっという意識でいますし、もしも人間にあっても普通に同族だっと思うと思います。ご主人様はどうですか？ 人間はゾンビじゃなくて、自分はゾンビだから違う存在ですか？」

違う存在。

異なる者に対する恐怖。

——異類恐怖症^{ゼノフォビア}

ボクはゾンビで、人間じゃなくて。

だから、人間に怖がられるかもしれない。

他人から恐れられ、うとまれ、排斥されるかもしれない。

べつにそれはゾンビだから人間だからという種族間の違いじゃなくても、きつと他人であれば他人には他人の考えがあつて、ボクとは違つて、そのこと自体が軋轢を生むかもしれない。

ボクは人間が怖かつた。

それは命ちやんもそうなのかもしれない。

コミュニケーション障害とまではいわないけど、ゾンビつてうーうー唸るだけで自分の気持ちを全然伝えようとしないところがあるからね。

「ご主人様は、こころの底では人間を信じたいと思つているはずですよ」

「そうかな」

「そうですね。わたしはもともとゾンビだからか、ご主人様と深いレベルでつながっている気がするんです。だからわかります。ご主人様は人間と仲良しになりたいんです。この世界でともに生きていく隣人になりたいんです。できれば幸せとか何か大事なものを共有していく同志になりたいんです！」

だから、と続いた。

——銃はいりません。

マナさんの言葉は、ボクの心にすんと落ちた気がした。そうかー。ボクって誰かと仲良くなりたいたいのか。

雄大の言葉はマナさんの言葉と被るような気がする。

人と仲良くするにはどうしたいいんだらう。

人を信じるためにはどうすればいいんだらう。

簡単なことだった。

人は出逢わなければそもそも仲良くすることも信じることもできない。

人間関係をスタートさせなければ、どんな関係も発生しようがないからだ。

「ねえ。命ちゃん。マナさん」

「はい」「どうしました?」

「ボク、思いついたんだけど……」

そう、それは本当にどうしようもない紆余曲折の末、ボクがたどりついた答え。

これからボクは多くの人にボクを知ってもらおう。

その小さくて大きな一歩。

に、なればいいなと思っている。

「ボク、出会い系アプリ使ってみようと思うんだけど?」

「はい!」

ふたりの声が妙にハモってた。

え？　ボクなにかおかしいこと言いました？　(きよとん)

ハザードレベル30

もちろん、速攻で却下されました。

出会い系アプリ。なにがそんなに悪いのかな。使ったことはないけれど、その名前のおり、誰かが誰かと出会うためには最適だと思うし、こんな世界になったのだから。人が人と出会う手段としてはこれ以上ない手段だと思うのだけど。

「出会い系アプリを小学生みたいな先輩が使うとか、絶対にハイエース案件に決まってるじゃないですか」

え？ ハイエースってなに？　なんか車の名前でそんなのあったような気がするけど。

「うーん。ご主人様が出会い系アプリ使ってたなら、速攻で課金しちやいそうです。廃課金必至！」

課金ってなに？

ボク自分のこと超ウルトラレアだとは思ってるけど、出会い系アプリって課金要素あるの？

「これはわかってませんね」

「ええ、いけません」

「緋色先輩はすぐにくろろつと騙される、チヨロイン粹ですよ」

「出会ってニコマで即メス落ちしてそうです。知らない男の人にお菓子あげるからってついていっっちゃダメですよ」

「なんだよ。ふたりして、ボクは……えつと、男ごころに詳しいんだから！」

だって元男だし。

男を手玉にとるくらい簡単だし。

よゆうだよ。そんなの。

「そもそも、出会い系アプリってどんなものか知ってるんですか？」

命ちゃんの冷静な一言に、ボクはちよつとだけ動揺を隠せない。

なぜなら陰キャで引きこもりなボクは、人間とのコミュニケーションツールをことごとく脳内にインストールしてこなかったから。

いま流行りのらいん？とかつぶやいたー？とか、いんすたハエ？と

かあまり知らない。匿名掲示板にスレッドを立てたのだから、つい最近という始末。

一方的に鑑賞する系統のは大丈夫なんだけど、双方向性を持つツールは苦手というパターン。

だから、当然——出会い系アプリというのがなんとなく……こう、すごく効率的に人と知り合えるぐらいのイメージしかない。

「出会い系アプリを背伸びして使おうとする幼女……。尊い」

なんだよ。お姉さんまでボクをバカにして。

「ボク、マナお姉さんのいうとおり人間を好きになる努力がしたいんだけど」

「ああ……。ご主人様が天使すぎる件」

「本気なんだけど」

「風船のようにふくらんでいくほっぺが素敵です……。あ、ごほん。本気で嫌がってますね。えっと、真面目に答えますと、出会い系アプリって結婚を前提にお付き合いとかが、一番まともなパターンで、その次は単に肉体的な接触を持ちたいというよくないパターン。もっと悪いパターンは、ご主人様みたいな幼い子どもと援助な交際をしたという最悪パターンにわかれます」

援助な交際って……。

あれですか。お金を渡して、えっちなことをしちゃうというあれですか？

ボクはショックを受けていた。

お姉さんじゃないけど、口でガンンと言いそうだ。

「先輩。自分の可愛さがちよつとバカかとアホかとしてレベルだということを自覚してくださいね。すぐお持ちかえりされちゃいますよ」

「ゾンビだらけだし……。お持ち帰りされないし」

「じゃあ、そもそも出会えないじゃないですか」

「う……」

そうなのか。

出会い系アプリじゃ出会えないのか。

「でもご主人様」

マナさんが口元に人差し指を当てて言う。

「いい線いつてるかもしれないよ。ご主人様が人と出会いたいとか人を好きになりたいというのであれば、アイドルになればいいんです」

「アイドル……？」

「そうです。アイドルでゾンビマスターなご主人様。略してアイマスなご主人様。素敵です」

「ネットでアイドル……。そっか。配信か。配信すればいいんだ！」

なんとも素晴らしい考え。

アイドルなボクってというのは、ちよつと考えもつかないけれど、みんなにボクを知ってもらおうという意味では、動画とかを投稿するのが一番早い。

いま流行のユーチューバーなら——ボクきつとみんなに知ってもらえるよね。

ゾンビだらけの世界でも、ネットも電気もまだ生きている。

食糧を大量に備蓄した引きこもりなら、もしかしたら動画サイトとかを回っている人もまだいるかもしれない。

だって、世界には70億人も人が住んでいて、そのうち7億とか20億とかがゾンビになったとしても、50億以上の人がいるんだし。

まだ間に合うよね。

「先輩。それはあまりよくないと思いますよ」

「え？ 命ちゃんは反対なの？」

「反対です。出会い系アプリよりはマシだとはいえ、配信なんかしたってこんな世界で誰が見るって言うんです？ 見る人がいたとしても終末世界を諦観した、いわば怠惰な人たち。心が弱い人たちばかりです。そんな人たちに好きになってもらったって、なんの意味があるんです？」

「それは……わからないじゃないか。ボクはまだ誰とも出会えてないんだし、知ってもいない。だから、その人たちのことを知りたいから、わかりたいから配信しようと思ってるんだよ」

「無駄ですよ」

「ボクはそうは思わない」

「先輩。考え直してください。私は……先輩のことを誰よりも想っています。たとえば、七十億の人間が先輩のことを好きだって言っても、その70億の想いに勝てると思ってるんです！ だから——」

私を選んでください。

そう言いたげな視線だった。

命ちゃんは自分の想いを全部賭けることができる子だし、自分のいのちすら惜しくないと思っている。

ボクだけを欲しいといってくるのはすごく嬉しい。

でも——。

「配信なんかしてファンが増えたとしても、そんなファンなんて、ただの知り合い以下の人間ですよ。ホームセンターで出会った人たちよりも薄い関係です。ネットとリアルという壁が防御してくれる面もありますけど、また先輩が傷つくかもしれないですよ！」

「それはそうだけどさ。愛着って、ひとつの対象に絞らないといけな
いってわけでもないと思うんだ」

例えば、ボクはゾンビ映画のどれが一番好きなんていうことはあまり決められない。上位10位くらいはわかるけどね。

もちろん命ちゃんの言うこともわかるよ。いわゆる、フツーって生き方を考えたら、結婚して子どもを産んで家庭を持つってというのが一番いいって考え方が多数派なのはまちがいで、だからこそ人間は増え続けているわけだよね。

だから、『結婚』する程度には、人は人を選ばなければならぬ。

70億人と結婚しますとか意味不明なのは間違いないから。

人は人を好きになるっていつても、限界がある。

でもさ。ネットでの不特定多数とのつながりは確かに感情的なつながりは薄いかもしれないけど、その薄さはゼロじゃないんだ。ゼロじゃなければ、その薄さもきつと意味がある。

人間が好き。

って胸張って言えるくらいにはなりたい。

「どうしてですか？ どうしてそんな他人に構おうとするんです？」
「どうしてかな。マナさんの言葉じゃないけど、まだボクは人間のこ
とを同志だっと思ってる部分があるからかも」

「敵だらけだったじゃないですか」

「味方もいたよ」

そもそもこんな世界になる前でも。

若干の引きこもりで、陰キャで、あまり人とかかわりがないボク
でも、さすがにコンビニには行くし、スーパーで買い物したりはす
し、そんなときにボクはほんのわずかながら人とのつながりを感じて
いた。

誰かに選ばれなくても誰かを選ばなくても、ボクが人間である以
上、人間という総体はボクを見捨てることはなかった。コンビニの店
員さんに物を売るのが拒否されたことはないからね。

だから、そんな人間たちのことをちよつとは知りたいたいと思ってもい
いじゃないか、とボクは考えたんだ。

「はいはい。命ちゃん。女の子の嫉妬はかわいいだけですよ〜」

マナさんがどこか抜けた声を出した。

「私、そんな子どもじゃありません！」

「ご主人様はこれから全人類ハーレム化粧計画を遂行していくのですか
ら、ちよつと配信して、みんなのアイドルになるぐらいでワタワタし
ていたら始まりませんよ♪」

「マナさん……ボク、そんななろう系主人公みたいな感じじゃないと
思うんだけど」

|||||

なろう系主人公

超巨大小説投稿サイト『小説家になろう』において、最大公約数的
な主人公の造形。端的に言えば『チート』と『ハーレム』持ちな主人
公である。チートとは他のキャラクターが持つていないような超常
の力を指し、ハーレムとは多数の女の子を囲う程度の意味に捉えれば
いい。俯瞰的に眺めてみれば、金、暴力、セックスというわかりやす

い欲望をかなえやすいキャラクターなので、揶揄的に用いられることもある。この小説の主人公つてなろう系っぽいですねwとか書くと、悪意がなくとも作者にブロックされることもあるので注意しよう。

|||||

「冷静に考えれば、わたしと命ちゃんつてご主人様の奴隷みたいなものですよし」

「う……」

「女の子を奴隷落ちさせてからの——、ナデナデパンケーキで落とすとかご主人様外道です。このなろう系主人公様♪」

「やめてー！」

でも、否定できない面もあるんだよな。

命ちゃんもマナさんもボクにとつては、ヒロウイルス感染者で、ボクがダイレクトに所有している所有物のような感覚がある。

その感覚に陶醉していないかというところ——、ほんのちよっぴりでも歓喜の気持ちが無いかという嘘になる。

命ちゃんもマナさんもボクにとつては愛着のあるキャラだから。

うーん。罪深い。

「ともかく、ご主人様が配信したいというのであれば、それをどうリスクマネジメントしていくかを考えるのが、わたしたちの仕事ですよ。命ちゃん」

「……マナさんの言ってることはわかります。私だって、先輩のしたいことはさせてあげたいって気持ちはあります。でも危険なんですよ。だって、先輩はゾンビなんですから」

「世界一かわいいゾンビさんです。かわいいは正義なので問題ありません」

しばし、にらみ合う二人。

それから数秒後。これみよがしなため息とともに折れたのは命ちゃんだった。

「わかりましたよ。絶対伸びないと思うんですけどね……」

不吉なこと言わないでよ。命ちゃん。

正直、ボクが受け入れられるかなんて、わかりようもなく、これ以上なく不安なんだから。

☆Ⅱ

それから数日間は、表面上はやる気をだした命ちゃんの指示に従って奔走する日々が続いた。

ボクのことになると勝手に思考力が下がる命ちゃんだけど、それ以外のところはボクには想像もできない天才だからね。

きつとボクには考えもつかないリスクマネジメントを考えているんだろう。

具体的にやった行為は、電気屋やパソコン巡り。

そこらに乗り捨ててあった車をマナさんが運転してくれて、のんびりと観光するように佐賀市まで探しにいった。佐賀市だけに。探しに……。

審議は拒否しない。佐賀市はでかいと思われがちだけど、実際のところは鳥栖市にすら負けていると思わなくも無い。

鳥栖は名誉福岡、久留米は実質佐賀と呼ばれているのが、このあたりの鉄の掟だからね。異論は認める。

実際、鳥栖のほうにぎわってるし、本当は鳥栖のほうがよかつたかもしれないんだ。ただ、鳥栖方面への道は高速道路への道だから、車が詰まっているらしくて、下道も動けなくなるらしい。

ゾンビに襲われなくても、車が詰まって途中で帰るのはいやだったから、佐賀市のほうにしたんだ。

ともかく、電気屋とパソコン屋さんをめぐって、ボクにはよくわからない機材を次々と車まで運んでいく命ちゃん。後ろから特に意味もなくマナさんに抱っこされるボク。

配信環境としては、ハード面が弱いのもかもしれない。そのあたり全然わからないからね。後輩にさせっぱなしというのも悪いんだけど、こればかりはボクにはどうしようもない。

で、帰宅――。

「じゃあ、ご褒美ください」

「えつと……ご褒美つてなに？ ナデナデパンケーキ？」

「ああ、先輩のためにこれだけがんばったのに、そんな奴隷少女みたいな扱いでなんとかなると思ってるんですね」

「ち、違うよ。なに？」

「いっしょにお風呂入りませんか？」

「え、いやです」

無理です。

だって、そもそもお風呂のサイズが結構小さいんだ。

アパートの一人暮らしの浴槽なんてたかが知れている。それは命ちゃんもわかってはいるはず。必然的にふたりでお風呂に入るとなると、ひとりが洗っている間にひとりが湯船につかるという方法しかない。

あるいは——、身体を重ね合わせるようにするしか。

ボクは妹のような命ちゃんの身体に欲情するような変態じゃないけれども、うら若き乙女が、そういうふうに他人に簡単に肌を許すとかあつちやダメだと思っんです。

「むしろ間違いが起こってもいいんですけど」

「命ちゃん。ボクはこう見えても、命ちゃんのお兄ちゃんだっていう意識もあるんだからね。そういうことを言っちやダメです」

「残念です……」

「えつと、ご主人様って、男の子さんだったんですか？」

きよとんとした表情のマナさん。

そういや、ボクが元男って知っているのは命ちゃんだけだったか。

「うん。そうなんだよね。幼女スキーなお姉さんとしては幻滅したかな？」

「それは別にどうでもいいんですけど。でも……、ご主人様って全然男の子っぽくないですよね」

「えっつ」

「だって、すごくかわいらしいですよ。お姉ちゃんに甘えてきた姿なんて、稀に見る幼女レベルでした。もうわたし、ゾンビだけであと少

しで人間になりそうなくらい熱いパトスがかけめぐってましたから」「ち、違うよ。それは男……！　そう母性を求めるのは男のサガなの！」

「ふうん？　おっぱいに触りたいですか？　いいですよ……お姉さんはいつでもウエルカムですから」

いまのManaさんはようやく下着姿から脱却し、ノースリーブニットに膝丈スカートを着ている。驚異の胸囲が周りのグリッド線を盛り上げるように押し出しており、全身からほとばしるゆるふわなオーラがすさまじいことになっている。

なんとというかさ……。

柔らかそうなもの。

包みたい系なのです。

「ご主人様が少しだけ甘えたい気持ちでわたしをサーチしている！」

「し、してないし……」

「してないのですか？　母性に甘えたい男の子じゃなかったんですかあ？」

「う。ボクは男だったときの意識もあるけど、女の子みたいな感覚もあるの」

「なるほど……おねシヨタでありながらおねロリとか最高かよ、です」

「先輩……、それはそれとしてご褒美くれないますか？」

Manaさんも命ちゃんもグイグイくるし。

ボクどうすればいいんだよ。

「アニメとかで中だるみしてきた6話くらいで意味もなくお風呂回とか挟むじゃないですか。それと同じように近くの温泉に行けばよいのでは？」

「さすがManaさん……やはり天才か」

「わかった。わかったから。でも今は行かない。いいね」

「はい。言質とりました！　絶対ですよ。絶対絶対ですよ先輩」

「ついに幼女とお風呂に入れる日が来たんですね。わたし、幼女とお風呂に入るために保母さんになりたかったんですよ……。日本生きろ！」

「いまは行かないっていつてるのに……」
これってもしかしてハーレムなのでは？
ボクはいぶかしんだ。

☆Ⅱ

命ちゃんが天才であるということは、言葉通りの意味で、字義としては知っているところだけれども、その意味を把握することは凡人であるボクにはできない。

ボクたち凡人はいつだって天才に劣後する。

その意味を後から解釈してわかりやすく噛み砕いてから理解するしかないんだ。

そこには『ボク』がいた。

バーチャルだけど、かなりのところをリアルに似せたボク。

紅いぱっちりおめめに腰ほどの長さのあるプラチナブロンド。キュロットスカートにキャミソール。そして、今回からは薄手のパーカー装備。

装着すると——、ネコミミ型。

リアルのボクも同じパーカーを装着するよう強要されたのはなぜなのか。

つまり、アバターというやつなんだろう。

カメラの前で、ツイット手をあげると、画面の中のボクも手をあげる。

はつきり言おう。

リアルのボクもかわいいけれど、このアバターも相当にかわいい。かわいいかわいいうつ。

すつごくかわいく作ってくれてありがとう命ちゃん！

とは思っててもいえない。恥ずかしいし。

もともとかなりファンタジックな色合いをしているボクだけど、アバター化してアニメ調になったのなら、むしろよくなじんでいる気がする。

3Dモデリングとか、センシングとかした様子はなかったから、おそらく見たままをそのまま描き移したとかそんな感じなのだろう。まるでプロ並。

カメラがボクの表情を読み取ると、画面内のボクも同じような表情になる。普通はアバターに何種類かの顔のパターンを読み込ませてあるんだろうけれども、ピクセル単位で調整されてませんか？

「念のためですよ。身バレだけは絶対に避けたいといけませんし、先輩の姿を大多数の前にさらすなんて絶対にダメです」

「命ちゃんが、ご主人様を守る騎士みたいですねー。それもまたよきかな〜」

アバターを作ったのはボクを守るためか。

確かにバーチャルな存在のほうが、もしも万が一があつたときに守ってくれる。

ボクのアバターは命ちゃんが作ってくれた鎧のようなものだ。

「ありがとう。命ちゃん」

これで——、準備はできた。

さあ始めよう。

バーチャルユーザーバーにボクはなる！

ハザードレベル31

ボクは弱い人間だ。

とても弱い人間。

だって、自分の意志で始めたこの行為——配信ですら、最初はどうやってやっていけばいいかわからずに、戸惑っている。

そんな戸惑いを見抜かれたのか、マナお姉さんには最初はできることからタスクブレイクしていけばよいといわれた。

タスクブレイクというのは、要するに戦略、戦術、戦闘といったような感じで、やらなくてはいけないことを、断片化していくようなイメージ。

自分が把握できないくらい大きなプロジェクトは小さなできることをつみあげていくっていう当たり前のことだよな。

でもそんな当たり前のことに気づかない人は多い。

ボクはともかく『面白い』配信をして、みんなに気に入ってもらえたらいいなって思っていた。でも、そんな曖昧な気持ちじゃ、なにをどうやっていけばいいかなんてわからないし、ボクはそんなに頭がいわけじゃないから、適当にやってもつぶれてしまうのは目に見えている。

お姉さんの言葉にはすごく救われた。

ありがとって言ったら、ご褒美くださいって言われたけど、なにすればいいんだろう。

それに気になるのは。

お姉さん、いったいなんの仕事をしていたんだろう。

そう疑問を投げかけたら、この世界の『虚』を動かす仕事ですって言われたんだけど、虚ってなんだ虚って……ドラグスレイブでも撃つのか、それとも今はエクスプロージョンのほうが新しいか、ともかく。

お姉さんが謎です。

そんなわけで最初の配信はボクができそうなこと。

そして、ボクが一番したいことをすべきだった。

ボクの配信はボクと誰かが知り合うためのものだから、なにをすべきかは決まっている。

——自己紹介だ。

もちろん、バーチャルユーチューバーというのは、ボク自身を見せるものではない。例えば、他の配信者は役柄になりきっているし、演者ともいえるだろう。でも、それでもボク自身もわりと漏れ出るものだと思うっている。だから、自己紹介はまごうことなき自己紹介だ。

ボクは緋色。

でも、バーチャルなので、語感が似ている『ヒーローちゃん』にした。

スカーレットちゃんでもよかったんだけど、ボクは昔からヒーローちゃんとも呼ばれていたからね。

カウントダウンをしていく画面を横目に見ながら、心臓がかつてないほどドキドキしている。ゾンビなのに心臓が……ああ、ばくばくばくばく。

そして、ついにその瞬間が訪れた。

「えっと……ごほん。あーあーあー、マイク大丈夫かな」

恋愛ドラマでも使われるような軽いBGMを背景に、ボクの声が全世界に配信されていく。

参加者は……えっと、十名くらいはいるみたい。

「終末世界にようこそ。ボクは終末配信者ヒーローちゃんだよ。みんなよろしくね」

『わこつ』『うっそだろおまえ。新しいブイチューバーキター！』『終末世界だけど動画視聴やめられない』『英雄ちゃん？』『ボクっ娘かよ……最高かよ』

「えっと。えっと。えへ……わこつもらっちゃった！ えへ」

わこつ。枠取りお疲れ様って意味で、つまり動画配信ようこそみたいな意味合いで、そんな何気ない言葉が嬉しい。

「えっとね。それでね。今日はボクのこと知ってもらおうと思って、後輩ちゃんにテロップを流してもらおうようになってるの。それで、ボクが答えるって形式で自己紹介しようと思ってるんだ！」

『ふうーん』『どうせおっさんだぞ』『王道を往く自己紹介』

「おっさんじゃないやい。えっと、じゃあ始めるね」

斜め後ろに立っている命ちゃんに視線で合図を送る。

命ちゃんは持っているノートパソコンを使って何かを打ち込んだ。

——新人、配信者 ヒーローちゃんの恥じらい——

えっと。はい。ピンク色の柄杓で囲ったそんな表題。

打ち合わせでは、テロップで簡単な問いを投げかけるから、

ソレに答えればいいって話だったけど。

わりと凝ってるよね。たった数日でモデリング完成させる腕とい

い、この子、妙なこだわりがあるような。

——今日はよろしくおねがいします——

「よろしくおねがいします」

ボクはその場で全身全霊の挨拶をする。ちよこんと座ったボクがお辞儀する。

誰かが言った。

挨拶は魔法の言葉であると。

それにブイチューバーがアイドル属性を持っているのなら、挨拶をはずすことはできない。

|||||

ゾンビと挨拶

ゾンビアイドルアニメ『ゾンビランドサガ』においては、プロデューサーがことあるごとに挨拶の重要性を説く。アイドルにおいては、他者とコミュニケーションをとるのが一等大事であり、その基本となるのが挨拶であるからだ。一日一万回ほど挨拶すれば、音を置き去りにする挨拶が可能になるかもしれない。

|||||

——緊張してる？——

「ちよ、ちよっとだけ緊張してるけど……大丈夫だよ。ボク元気」

『あざとい』『あざとい』『あざとーす』『アザトース』『窓に窓に！』『な

んだこれかわいすぎか』

——始めにお名前をよろしく願います——

「えっと、さつきも言ったけど、ボクはヒーロー。終末配信者のヒーローちゃんだよ。よろしく願います」

——年齢教えてくれるかな?——

「えっと……えっと、年齢は11歳だと思います」

——11歳? 小学生かな?——

「うん……学生です」

小学生というほどの勇気がないので、学生という言葉でごまかした。

『ガタッ(急に立ちあがる)』『ガタッ』『ガタッ』『小学生ブイチューバーが誕生した?』『嘘だぞ。おっさんだぞ』

——身長と体重は?——

「身長は142センチ。体重は……もう少し仲良くなったら教えてあげるね」

ペロって舌だしすると、アバターもすっかり同じ動作を返してくれる。

なにげにすごくない? この技術。

『てへぺろしてるブイチューバー初めて見た』『舐められたい』『これは嘘をついている味だぜゲームされたい』『幼女ぺろぺろしたい』『おいやめろ』

おいやめろ……。

それにしてもなんかこのテロップ変じやない?

ブイチューバーって身長とか体重とか言う必要あるの?

——今なんかやってんの? 身体柔らかそうだね——

「特にはやってないですけど……、トウレーニングはし、やっています」

——好きな人はいるの?——

え?

それ関係あるの?

答えなきやダメ?

「えっと、今はいません」

——今は？ 昔はいたんだ——

「昔もないよ！ えっと、あのね。ボク配信して、みんなにいい褒めてもらいたいな。それでみんなにボクのこと好きになってもらって、ボクもみんなのこと好きになりたいんだ！」

それが偽りのないボクの気持ち。

ね。命ちゃん。わかってよ。そんなにいじわるな質問しないで。

後ろをちよつとだけ振り向いて、ボクは命ちゃんに視線で問いかける。

命ちゃんは少しだけ嘆息したように見えた。

——なんでユーチューバーを始めたの？——

「ユーチューバーならたくさんの人に知ってもらえるって思ったからかな」

——ユーチューブはよく見るの？——

「うん。見るよ。配信系もよく見るかな」

指先でゆらゆらというんな動画を思い描く。

そんな何気ない女の子っぽい仕草もアバターは正確に描き出していく。

——初めてユーチューブ見たのはどんな動画？——

えーっと。

どんな動画だったかな。

正直覚えていない。

「えーっと、転生したスライムを女の子がプニプニする動画です プニプニって……」

——それは、お勉強で？——

なんの勉強だよと思わなくもないけれど。

問われたら答えるしかない。

「勉強です！ きつと勉強です！」

——ヒーローちゃんのチャームポイントを教えてください——

「えーっと。えっと……鎖骨ですかね？」

女の子歴一ヶ月未満のボクには難しすぎる質問でした。

なんとなくこれかな的場所を答えたけど、あつてるでしょうか。

『鎖骨アピールする幼女』『エッツツツツ！』『どうせおっさんだぞ』『幼女声で鎖骨アピする幼女ユーチューバー』

——ちよつと立ってみようか——
「はい」

命ちゃんのセッティングしたカメラはパソコンの上部に設置されていて、そこから見下ろすようになっていて。

ボクが立ち上がったって、ボクの全身を引きで映すことができる。

カメラは無音でボクを見つめているけれど、なんだか全身が歯がゆいようなむずがゆさを感じる。

見られてるって羞恥心と見られたいっていう欲望がグルグルとブレンドされる。

——服かわいいね——

「ありがとうございます。ネコミミー♪」

『幼女でネコミミーとかあざとさ越えてる』『ネコミミーって言うところ好き』『ボクっ娘でネコミミーで小学生とか属性ぶちこみすぎ』『ゾンゾンしてきた』

——猫さんの真似してみて——

「にゃんにゃん♪」

ネコミミパーカーを装備した状態で、ボクは握り手を前に突き出し、定番の台詞を吐く。やべーぞ。これ羞恥で人間が死ねるのならとつくの昔に死んでる自信がある。

——もつと可愛く——

「もつと……とか嘘でしょ」

——できますよね。もつと可愛く——

「うにやー。にやーにやー。にやあ」

『死』『おいおい致命傷で済んだわ』『ネコミミー』

——これからなにをしていきたいですか——

「たとえばー。ゾンビに怯えるみんなを安眠させたいです」

——じゃあ、一緒に寝ます？ 先輩——

「あ、はい……一緒にですか？」

——言質ゲット——

「そんな意味じゃないです。やめてください」

ブンブンと手を振って否定する。

否定しておかないと後でなにが起こるかわからない。

『どう見てもAVチューバー』『後輩ちゃんの性別が気になる』『ペロ……これは女ですわ。百合ですわ』

「後輩ちゃんは……女の子だけど、ときどき暴走するんだ。これからもいろいろと手伝ってもらうからみんな大目に見てね」

『なんだよ。百合かよ。ズボン下ろしました』『百合が嫌いな人間なんていない(暴論)』『うそだぞ。おっさんだぞ』『後輩もついでにおっさんでホモだぞ』『おいやめろ』

バーチャルユーチューバーの宿命だよな。

アバターは所詮アバターって感じもするし。

みんなボクが女の子だっていうのも半信半疑みたい。

はちみつが溶けたみたい甘い幼女ボイスしているけど、実は男でも練習すれば出せるようになるらしい。両声類とかなんとか、そういうのを動画で見て驚いた覚えがある。

——最後に視聴者のみなさんに一言お願いします——

「えっと、いろいろと初心者だけど、ボクこれから毎日配信していくから、みんなよければ見てね。ゲームとか好きな音楽うたったりとかいろいろしていききたいんだ。あと……身体とゾンビに気をつけてね。それじゃあ、バイバーイ！」

『明日も見るぞ』『生きる希望ができた』『どうせおっさんだぞ』『こんなかわいいおっさんがいるかよ』『オレは幼女だと信じてる』『すここここ』『この子の特色がなんなのかよくわからなかった』『ゾンビになっても視聴する』

そんなわけで、ボクの初回配信は終わった。最後にはちよつとだけ伸びて三十人くらいは来てた。こんな終末世界でも視聴者さんいたよー。うれしい！

それにいままで生きていた中でいっちゃん緊張した。今も心臓がばっこんばっこん言ってるのが聞こえそう。

とりあえず成功とっていいのかな。

なんかいろいろ言われたけど、興味は持ってもらえたみたいだし。でも、なんだろう。

ボクはボク自身を素直に見せているはずなのに、それでもやっぱり完璧なボクっていうのは伝えられないものなんだね。

どこか誤解と誤読が生じているというか。

そんなものなのかな？

よくわかんにやいにやあ。

☆Ⅱ

ボクは初心者ブイチューバー。

そんなボクが初回配信の後にやることといたら――、

エゴサーチに決まってるだろお！

エゴサーチっていうのは、自分自身を検索することだ。

ぶっちゃけ承認欲求がありまくりだからこそ、投げ銭どころか資本主義自体もぶっこわれ気味な終末世界でブイチューバーなんてものをやろうとしているんだ。

褒められたいっていう欲求がなきゃやってないよね。

生き死にが関係なくなってしまったゾンビだからこそ、そんな余裕が生まれちゃうのかもしれないけどさあ。

でも視聴者さんいたよ。なんとなくまだ余裕ありそうな感じだったし。単に凄惨な状況を忘れようとしているだけなのかな。

「うーん。エゴサーチにはあまりひっかかってないみたい」

「終末世界ですしね」と命ちゃんの冷静な返し。

「でも、ほら……こっちの現役アイドルの生配信は、いまでも1万件以上再生されているんだよ。ボクとほとんど同じ時間に配信されてるでしょ。終末とか関係ねえ。ボクが単に弱いだけだ！」

ちくせう。

「……嬉野乙葉？　これって国民的アイドルグループのひとりですよ。ね。一山いくらのこんな子が好きなんですか？　そういえば好きな人いますかって聞いたときに少し言いよどみましたよね？　先輩ど

ういうことなんですか?」

「お、おちついて命ちゃん」

「先輩と同時期に配信しているアイドルなんてまだまだたくさんいますよ。こっちには先輩と同じくゾンビだらけになっても更新しているバーチャルユーチューバーだっています。なのになぜ生配信者と比べたんです?」

「佐賀出身のアイドルだからだよ!」

乙葉ちゃんは命ちゃんの言うとおり、国民的アイドルグループに所属していたひとり。わが愛すべき国土、佐賀県出身のアイドルだ。

ウェーブのかかった金髪ぎみの髪の毛。青空のような碧眼。愛くるしいリップ。ドイツ人と日本人のハーフで、命ちゃんと同じ現役高校生だか現役中学生かどっちかだったかな。15歳くらいだったよ
うな。

実は地元で売れる前に駅前でライブをやっていたのを見たこと
あったりして——、ちよつとだけ追いかけていた。

べつに好きとか嫌いとかじゃなくて、なんとというか、お隣さんがが
んばってるなーってだけ。ほんとにそれだけだ。ほんとだよ!

命ちゃんにらんでこないで。

「ふうん……そうですか。まあいいでしょう。ともかく、前からの
ファンがいる場合と、後発組ではどうしたって見られる数が少ないで
しょう。特にたくさんの人に見てもらおうような現象をバズると言っ
たりするんですが……、バズるためには、露出度がモノをいいます」
「露出度?」

「つまり、広告ですね。単に動画を載せるだけの先輩と、いろいろなメ
ディアに載っていたアイドルじゃ、はなから知名度が違うんですよ」
「どうやったらみんなに見てもらえるようになるのかな」

「先輩はかわいらしいので、それなりに見てもらえるような可能性も
あると思います。広告については——終末世界なので難しいで
しょうね。大きな広告会社だったらもしかするとそれなりに機能し
ている可能性はあるかもしれませんが、ゾンビだらけの世界で出社す
るバカはいないでしょう」

「まあそうだよね」

つまり、ボクを広告する手段はないってこと。

いま、配信が出来ただけでも奇跡みたいなものだ。

ボクは純粹に配信だけでたくさんの人に見ていかれるようにならなくてはならない。これは動画の質を直接的に問いかけるという意味ではいいのかもしれないけれど、最初の時点でスタートダッシュがモノをいう情報社会においては、なんというか、ボクって最悪なほど出遅れてないだろうか。

少しかだけ先発している人たちのことをズルいつて思っちゃおう。

ボクだって、ゾンビだらけになる前に配信してたら、もつと見てもらえたかもしれないし、広告する方法だってたくさんあったかもしれないのに。

あれ？

でも、さつきボクと触れ合ってくれた何十人かの人たちだけでもべつにいいんじゃないかな？ 名前を知らない人たち。もしその何十人かが、何百とか何千とかなったところで、やっぱり知らない人たちなわけだし、命ちゃんみたいに大事な存在になるとは思えない。

命ちゃんの言葉は正しい……のかな？

でも、視聴者さんの数が、動画配信中に少し増えたとき、ボクは正直なところ、裸のところで言うのと、うれしかった。

単純にうれしかったんだ。

もつと、ボクをみてほしい。そう思ったんだ。

おかしいかな。露出狂の変態幼女のかなボク。

「ご主人様が意気消沈しているのもそれはそれで乙なものです……。あの、髪の毛ツインテールにして、これはツインテールの髪の毛であって乙じゃないんだからねゲームしていいですか」

「台詞が長いよ……マナさん」

べつにいやがる理由もないので、マナさんに髪の毛をツインテにしてもらいながら、ボクは考える。

どうやったら面白くて楽しい動画にできるのかなあ。

「少なくとも広告方法はたくさんあるはずですよ。例えば、残存して

いるSNSを使って、できる限り露出度を高めるといいうのは必要だと思います」

命ちゃんがパソコンの画面にいろんなSNSを見せてくれた。

SNS——ソーシャルネットワークサービス。ボクがさつき言ったライン?とかツブライター?とかインスタバエル?とかもそれらしい。

「えっと、ゾンビさんといっしょに暮らしてるなう? とか眩げばいいの?」

「先輩。いまどきなうとか使ってる人いませんよ」

「そうなのなう……」

「どうしよう。先輩が私を誘ってる」

「誘ってないよ。むぐっ」

命ちゃんに抱きつかれてしまった。

でもまあそのあたりも含めてやれることをやっていくしかないんだよね。

「そうです。バズりに不思議のバズりあります。なにかやってくればそのうち当たるかもしれません」

「そんなもんかなあ」

「わたしみたいな眷属さんをいっぱい増やすといいですよ」

マナさんはふんわり調子で言葉を紡ぐ。

「眷属って?」

「インフルエンサーですよ」

「インフルエンザ?」

ボクって確かにゾンビだけど、病原菌扱いはけっこうひどい。

でもそうじゃないみたい。

マナさんはフリフリと頭を横に振って、柔らかく否定する。

「インフルエンサー。つまり、情報を拡散してくれる最初のファンのことです」

「最初のファン……ボクのことを最初に好きになってくれた人?」

「そうです。リアルではわたし達ですけど、配信で最初に好きになってくれた人が、あの中にいるかが肝ですね。わたしとしてはご主人様

が顔見せしたら一発でバズりそうだと思いますけど」

「んー。それはちよつと怖いかも」

それに、命ちゃんがせつかくボクのために作ってくれたアバターを無駄にしたくない。抱きしめられたままの状態だったので、上目遣いでジツと命ちゃんを見つめると、命ちゃんからも視線が返ってきた。

「ベッドにいくというサインですか」

「違うって……。あの、ボクね。命ちゃんのことには大事に思ってるからね。たくさんの人に見てもらえるようになって、そこは変わらないから、心配しないで見守っててください」

「……先輩はズルいですよ。私を選んでくれるかどうか答えを言わないままなんですから」

それは本当に悪いことだと思ってる。

でも、ボクという存在の輪郭は本当に曖昧なんだ。

命ちゃんのことが好きだったり、雄大のことが好きだったりするのは本当なんだけど、ボクは人間だったときのままじゃない。

ゾンビで⇄人間で

男で⇄女で

多数の人に好かれようとして、誰かひとりを選ぼうともしている。

原色のどぎつい極論が、混ざり合うことなく反発しているから。

ボクはボクのクオリアすら見えない。

ボクは誰が好きなんだろう。

ハザードレベル32

「はい。今日も始まりました。終末配信者のヒーローちゃんだよ。では早速、ゲームをしていこうと思うんだけど、みんな大丈夫かな？いろいろと考えたんだけど、今のボクの心境からするとやつぱりコレ。最初のゲームはプラグ因子に決まってるよなあ」

解説しよう。

プラグ因子とは、あなたが世界で始めて生まれたウイルスとか細菌とか粘菌とかになって、最初の感染者を出したところから始まる感染シミュレートゲームです。

アクション性はほとんどないので、ボクのパワーアップした反射速度とかを活かす機会はほとんどというか、まったくないだろうと思う。

ボクって即応性は強いけど、演算能力があるわけではないからね。

このゲームに必要なのは予測する力だ。

『1コマ』『開幕不謹慎』『ウイルスの蔓延した世界でウイルスゲーをやる終末ゲーマー』『英雄ちゃんだと思ったら人類を滅ぼす悪魔だった？』『悪魔っ娘、最高かよ』

「もちろん、ボクが選択するのはゾンビウイルスだよ。こんな世界になっちゃってるから、みんな思うところあるかもしれないけど、ボクとしてはゾンビウイルスの気持ちになってみようと思うんだ……変かもしれないけど付き合ってるね」

『変』『変』『変じゃないよ』『かわいい』『変……つまり小学生の変態。ひらめいた』『終末で配信始める時点で変』『そんな配信者を見ている俺らも変』『変態どうし仲良くしようね』『おう。おまえとイチヤイチャしたかったんだよ』『アッー！』

なにやっつてんだこいつら……。

「えっと、じゃあ始めまーす」

変だっって言われるのはわかってる。

でも、ボクとしてはこのゲームから始めたかったんだ。

ボクとしては——どっち側なのか。

ウイルスとして人類を滅ぼしたいと思っているのか。それとも人類として、誰にも死なないでほしいと思っっているのか。

見極めたかった。

たかがゲーム。されどゲーム。

ボクはボクを知るためにゲームする。

「ゾンビウイルスの名前は、ボクの名前をモジって『ヒーロウイルス』ってことにします」

画面内にはウニウニうとうごめく『ボク』。

こういうふうにはわかりやすく映像に捉えられるんだったら、ボクを撲滅するのも簡単だったんだろうけど、いまだに政府はウイルスか細菌かもわからないみたい。電子顕微鏡にすら映らない粒子レベルの何か、細胞内に浸透しているのかもしれないって話を書いてたけど、正直そういう物理的な話はどうでもいい。

ボクが知りたいのはボクのクオリアだ。

「初手はやっぱりエジプトだよなー」

『お、やってんじゃーん』『初手エジプトは基本』『エジプトは隣接している国が多いしな』『インドのほうがよくね?』『インド人を右に』『ヒロちゃん初見』

「あ、初見さんいらっしやい。ヒロちゃんってボクのこと?」

『ヒーローちゃんだといにくくって。あだ名。だめですか?』

「ん。あだ名つけてもらっちゃった……もちろんいいよ!」

『天使再臨』『ヒーローちゃんはヒロちゃん?』『んのところがち』『守りたいこの笑顔』『守りたい笑顔の天使が人類を滅ぼしてってる』

あは。

ボク、さっそくあだ名つけられちゃった。

それだけのことだけど、めちやくちや嬉しい!

みんなとの距離が少し縮まった気がするから。

「よしっ。オレンジバブル出た。どんどんポイント稼いでいくぞ!」

ボクは人類を滅ぼすことにする!

このゲームの肝は、初手で人間に見つからないことにある。

それとゾンビウイルスだけの特殊勝利っていうのがあって、普通の

ウイルスとか細菌だと人類側の特效薬完成と同時に敗北確定なんだけど、ゾンビだけはそうはならない。だって、ゾンビだもん。お薬完成したからってウゾウゾうごめいているゾンビがいなくなるわけじゃないでしょ。

そういうことだ。

「あー、もう発見されちゃった!」

人間にヒイロウイルスが発見された。

あまりにも無情なる即落ちヒイロウイルス。

「もう少し忍ばませんか。ニンニン」

『ゾンビは発見されやすいってそれ一番言われてるから』『発見されたときにピョンって椅子の上で跳ねるのかわいい』『かわいい天使に滅ぼされるなら本望』『ヒロちゃん様あ』『ゾンゾンしてきた』『ニンニンしてきた』

「落ち着け。まだ慌てるような時間じゃない!」

『生きろ』『むしろ敗北を覚えろ』『ヒーローちゃんを敗北させたい』『ヒロちゃん様をくつころさせたい』『ちよつと涙目になってる。すごい細かいモーシヨンだな』

「ともかく、ポイント貯めなきや」

ヒイロウイルスを改造するためのDNAポイントは感染とともに自動的に溜まっていく。他にはボトル型のアイコンが時折現われるから、それをタイミングよくクリックすることでも少しだけ増える。

感染とともに自動的に溜まっていくということは、逆に言えば、感染力を高めるとポイントはどんどん増えるということだ。ポイントは使って感染力を高めたりもできるんだけど、使った分ポイントは減る。

肝心なのはポイントを使うタイミング。これに尽きる。

「唾液。高温耐性。高温耐性2獲得! 感染。感染。感染だ! ふっははは。ボクのウイルスは圧倒的ではないか」

『ノリノリで草』『正体あらわしたね』『くっそ。人類になすすべはないのか』『止まるんじやねえぞ……』『なんだよ。結構当たんじやねえか』『キボウノハナ〜』

「ポイントは大分溜まっている。同じくらい研究ポイントも溜まっているけど、これならいける。お、Z戦士があらわれやがった！」

『Z戦士?』『ドラゴボ?』『たぶんZCOMという対ゾンビ部隊のことを言ってるんだと思うぞ』『ヒロちゃんウイルスを駆逐する?』『ヒロちゃんを陵辱する?』

「Z戦士はほっておくと、どんどんゾンビを減らされちゃうんだ。このままだとボクのゾンビがいなくなっちゃう」

『ヒロちゃんのゾンビになりたい』『お兄さんがゾンビですよ』『ゾンゾンしてきた』『私がゾンビです』

「くそ。堕ちろ。堕ちろよ。あー。硬いよ。うううっ」

Z戦士達に対して、ゾンビ部隊を大量に送りこむも、既に鉄壁の守り状態でなかなか堕ちない。

このままだとゾンビが死んじゃう!

ゾンビが……。ボクのゾンビが死んじゃう!

ゾンビが死ぬとか意味わかんないけど、ともかく全滅させられちゃう。

「ポイント使って……。いや、まだ……。まだ早い」

『ほおおん?』『間に合う感じなん?』『わりとギリギリだな。見つかるのが早すぎた』『症状使ってゾンビ強化すべき』

「そう。このゲームはゾンビを強化できるんだ。ラスアスで言ったら、ランナーとかブーマーとか、そんな感じの強いゾンビ状態にすれば、攻撃力があがって、Z戦士をぶち殺せるよ!」

『殺せるよって無邪気に言う小学生が怖い』『こわかわいい』『ちよつと前だったら放送禁止用語は一発でバンもあり得たんだがな』『人類は衰退しました』

「そろそろポイントが溜まった。いまだ! やっちやえ!」

『一転攻勢』『ヒロちゃんに侵食されてる』『ヒロちゃんに侵されている』『小学生の女の子に侵されてる』『やっちやった! (意味深)』『おまえら自重しろ。パンツ脱ぎました』

「おりや!」

ついに。ついに。ボクのゾンビ部隊がZ戦士を完膚なきまでに破

壊した。

「いひひ。やった。やつつけたよ！ ボクの大勝利！」

真っ赤に真っ赤に染まっていく世界。

ボクというウイルスに染まっていく世界。

世界にはゾンビが満ち溢れ、人間は一人残らず絶滅した。

やったね。

『ヒロちゃんが楽しげでなにより』『人類絶滅しちゃったかー』『どうせみんないなくなる』『ああ……』

あれ？

なんかコメントがちよっと沈んでない？

目の前には真っ赤に染まった紅い点がウズウズと動いている。

ボク……やっちゃいました？

いや、マジで。

ノリで始めたゲーム配信だけど、終末世界なのに人類滅ぼしちゃつてどうするのって感じてしょ。虚構を楽しんでる人たちに現実をさらけ出しちゃつてる感あるような。

「あ……あの、ボク、みんなのこと好きだからね。人類滅ぼさないから」

『ほんまかいな？』『人類はヒロちゃん様の前にひれ伏すのです』『私がゾンビです』『すべてが幼女になる幼女ウイルスだったらよかったのにな』『ヒーローちゃん恐ろしい子』

「えっと。こわくないよ。ボクこわくないよ？」

『ロリ聖母配信者？』『ママ』『ママ』『バブみも完備なヒロちゃん』『ゾンビの気持ち分かったの？』

『ゾンビの気持ちはよくわからなかったなー。でも人類がボクを滅ぼそうとするのは寂しかったかも』

『すっかりゾンビ心を会得されとる』『ひとりぼっちは寂しいもんな』『英雄はいつだって孤独なのさ』『ヒロちゃんが寂しがる顔がかわいい』『マモレナカツタ』『笑顔になって』

「えへ。ありがとうね。今度はもっとうまくやるから……またよければ見てください。じゃあねー」

深夜のテンションって怖い。

まあ面白いお月さまが空にかかっている夜だった。

月って、ルナっていうでしょ。そしてルナティックって狂気って意味だから、よく言われているように少しテンションが変になるものなのかもしれない。

なんとはなしに寂しくなって、速攻でゲーム配信を始めてしまった。

そんな真夜中なのにも関わらず、昨日と同じくらいの人が集まったのは、たぶん、みんな同じような生活スタイルをしているからだと思う。

きつとみんな狭くて暑苦しいところか、薄暗くて涼しいところか。

ともかく——ひとり部屋で暮らしている人が多いのだろう。

みんなといっしょにコミュニティを形成しているところだと、なかなか動画配信を見る勇氣はないだろうし、深夜だともっとそうだろうと思う。

ボクは少し寝苦しさを感じて、ヒンヤリなゾンビお姉さんもいなくなっちゃったし眠れなくなったんで、勝手にひとりで配信しはじめちゃったんだ。

命ちゃんが言うにはちゃんと計画をたてて、ツブヤイターで告知してから、毎週毎日同じ時間に配信するのがいいってことだったけど、衝動的にやっちゃった。

しかも、プレイしたゲームが、ゾンビウイルス側の視点に立ったゲーム。

視聴者のみんなのことを一ミリも考えてない。自分勝手なボク。

だめだくくくくくくく。

そんな沈んだ気持ちのまま、ボクは冷蔵庫を適当に漁る。

冷たい飲み物を飲もうと思ったんだけど、なんとなく気分的にはカラが飲みたい。理由は特にないんだけどね。

机の上の財布を引っ張り出して、ボクはアパートをそろりそろりと抜け出す。命ちゃんもマナさんも寝てると思うけど、起こしてしまうのは悪いしね。

アパートから五分ほど歩いたところにある自販機はもう補充されることはないけれど、電気はまだ来ているから、冷や冷やのダカラが飲めると思う。

ゾンビはたぶん夜はあまり活動的にはならない。人間を見つけない限りはね。

もちろん、ボクは見つかっても人間じゃないからノーカンだ。

夜にランニングしている人と行き交うみたいなのに、こやかに手を振って、それで終わりだ。

「あー、夜はまだ涼しくていいなー」

配信で熱がこもっていたのか、夜風にさらされると冷まされていくようで気持ちいい。小さな虫の音がどこか遠くから聞こえてきて、ゾンビのかすかなうなり声と混ざって、合唱しているみたい。

「静かだな……」

夜目が利くボクだけど、誰もいないとそれはそれで寂しい。

いつもは近くに何人かは見えるゾンビさんたちも、今日はひとりもない。

近くにいないのかな？

結局、大通り(この町で言うところの一番大きな道という意味だ)に出て、自販機でダカラを買うまで、誰ともすれ違わなかった。

ふむ？

小首をかしげてボクは虚空をジッと見つめる。夜だけど曇天なのか、空の昏さはなにか得体の知れない混沌というドレスをまとっているようで、いつもとは違うそんな感じがする。

——よくわかんないけど変な気配がするかな。

と、そのとき。

キューギョルルというタイヤの摩擦音とともに、ドンという鈍い音が静かな夜に響き渡った。

この音が何かはボクにでもすぐわかる。

車の音。つまり、人間が発する音だ。

ゾンビが周りにいなかったのは、この人間を追っていたからだろう。車に乗っている人間には追いつけないものの、人間の発生させる音が完全に聞こえなくなるまで、何百メートルも何キロでも追いつけるのがゾンビだ。

ゾンビたちが集まる気配がする。

その集まっている方向を見ると、およそここから数キロほど先。大きな交差点があるあたりみたい。

そして、いま、その車は停止してしまっている。

その人間の行く末は火を見るよりも明らかだ。

気づくとボクは駆け出していた！

ゲームみたいな結末にはしたくなかったし――。

そんなことは考えたくもなかった。

☆
||

いつのまにかボクはまたレベルアップしていたみたい。

身体能力は明らかに人間のレベルを超えて、ボクは風のような速さで駆けている。どれくらいのスピードかかってというと、家の屋根を跳躍して飛び越えられる程度。

このままボクが成長しつづけければ、いずれは――空も飛べそうだな。

なんて思えるほど。

どうしてこんな物理法則を無視するような挙動ができるのか、ボクにはよくわからなかったし、説明することもできないけれど、なんとなく、そんな予感がする。

ボクは素粒子なんだろう。

こんな開放感に溢れた夜なのに、眼下では絶望に近い怒号が響き渡っている。

見ると、その車はありふれた軽自動車で、電柱にぶつかって、ボンネットが大きくへこんでいる。もう二度と走ることはない様子。

それで、その中にはハンドルを握り締めたままの20代くらいの男性と、後ろの席に座っている同じく20代くらいの女性。そして、女性の手にはまだ生まれたばかりの赤ちゃんが抱っこされていた。おくるみで包まれた赤ちゃんがかわいい。小さくて真っ赤なおててを必死に母親のほうに差し向けている。

周りがいなければ、ありふれた家族の光景。

周りは――、ゾンビは既に家族の周りを取り囲んでいた。

車から一歩でも外に出たらその瞬間にゾンビに食べられてしまう。

いわゆる詰みの状態。

女の人が男の人になにやらわめいている。

聞きたくないけど、聞こえてしまう。

「あなたの運転が下手クソだから、こんなところに止まっちゃうのよ！」

「おまえがもっと急げって言うからだろ！」

「事故ってたら意味ないじゃない！」

「うるせえ！ おまえがもっといいところがあるかもしれないっていうから！」

「あんたも同意したじゃん！」

目は血走り、ギラギラと夜闇のなかで光っていた。

どこかで見た炭素原子の中に余計なものが付着した『人間』という存在だ。見慣れた光景にボクはしばらくなりゆきを見守ることにする。

よいしょって、屋根に腰掛けて。

ゾンビは適当に窓でも叩かせて。

バンバン バンバンバン。

少しでも互いを思いやれるのなら、助けてあげようかななんて思いながら、ボクはふたりを観察した。

「クソ……クソ。こんなところで死にたくないよう！」

「あんた、外出て行ってゾンビを蹴散らしてきなさいよ」

「そんなの無理に決まってるだろ！ おまえがいけよ！」

「結婚式で愛してるって言ったじゃん。これからふたりで幸せになろうって言ったじゃん。あれ嘘だったの？」

「嘘とかじゃねーよ。あんときは本気でそう思ってたよ。でもおまえって子どもできたらそっちにかかりきりじゃねーか。最初にあそこから抜け出したのだから、子持ちの女は蔑視されるとかそんな理由だろ！ ふざけんじゃねーよ」

「私があそこで軽く見られたのは、あんたが不甲斐ないからでしょー！」

「なんだよ！ だったらいいよ。おまえを守る義理もクソもない。勝手にしろ」

「勝手にしろって、なによ。もうどうせここでみんな終わりでしょ。あんたがひとりであれば、わたし達は助かるの。そんな簡単なこともわからないの？」

「イヤだって言ってるんだよ。オレのことなんてちつとも考えてない奴のためにどうして死ななきゃならないんだよ。だいたいおまえ、ここを抜ける前にリーダーに色目使ってたよな。オレのことも子どものこと邪魔だって思ってたんじゃないのか？」

「バカじゃないの？ だったら最初から抜け出してなんかいないし！」

「色目が効かなかったから抜け出してきたんだろ」

「こんのっ……」

車内は興奮のるつぽ。

超エキサイティングって感じ。

これって会話しているんだよね？

後部座席から身を乗り出して、殴り始める若奥様。

反対に殴り返す若旦那様。

捨て置かれた赤ちゃん泣き始めてしまう。

でも、車内がどうであれ、事態が好転するわけではない。

ひとしきり暴れて、ふたりは肩で息をするようになった。

車内は今度は喧騒とは異なる不思議な音で満ちていて、具体的にはふたりの荒い息と、赤ちゃんの泣き声とゾンビが窓をぺちぺち叩く音しか聞こえない。これってわりとパワー調整してますからね？ 本気でやってたらもう車の窓ガラスぐらいとつくに割られている。

「……」

「……」

ふたりが視線を合わせる。

愛の交信であれば綺麗だと思う。

けれど、それはそんなものじゃなくて……無言の談合だった。

つまり――。

うすうすそうなるんじゃないかとは思っていたけれども、もしも彼らが本当に自分のことしか考えていないのなら、そうならざるをえないとは推論できたことだけでも。

信じたくはなかった。

彼らが出した結論は明々白々だった。

彼ら自身が生み出した宝物は――ふたりの若い夫婦が生んだ小さな命は。

つまり赤ちゃんは窓ガラスを少し空けたところから、投げ捨てられてしまった。

危なかったんで、とつきにゾンビのひとりに抱っこさせたけど――

「あーあ。これはひどいです。マイナス百億点ですねー」

リアルモノノケ姫状態かよ。

脳みそがねじれ狂いそうな気持ちがある。無意識に握った屋根の縁はバキバキと音を立てて崩れていた。怒りじゃない。失望に近い。

ボクはこういう人間が嫌いなんだと思う。

はつきり言えば、こんな人間が何人死のうがどうでもいい。

こんな人間のクオリアをボクは信じない。

クオリアを信じないということは、それはモノと同じで、いくら破壊してもまったく痛痒を感じない。つまり、死ねという意味すら意味

がない。

そんな言葉をかけるほどの価値すらない。

「あー。でも……」

でもさ。

今日はいいいことがあったんだ。

ボクのあだ名『ヒロちゃん』ってつけられちゃった。

だから、たぶんおまえたちじゃないけど――。

おまえじゃない誰かのために殺さないで置いてあげる。

ボクは音もなく屋根から自由落下し、小さく雪のようにふわりと着地した。

重力を少し制御できているみたい。

ボクはゾンビさんから赤ちゃんを受け取り、無言のまま、車のドアを開け――鍵がかかっていたので、無理やり鍵を破壊して開けた。助手席のドアは大きな音を立てながら、はじけ飛ぶように転がっていった。

「あけて」

後部座席も破壊するのはどうかと思ったので、ボクは指差す。

奥さんのほうが震えながら動こうとしないので、ボクはもう一度同じ言葉を繰り返す。

「あけて」

今度は急に動き出したロボットのようになり、鍵を開けてくれた。

小さく静かにボクは扉を開ける。

「出て」

啞然としているふたり。

ドアという身を守るべき盾がなくなっただけで、ふたりは呆然としたままボクの言葉につき従った。ふたりからしたら、ボクは理解のできない、名状しがたい存在といったところかもしれない。ゾンビを付き従わせている化け物なのだから。

ボクはゾンビから受け取った赤ちゃんを抱っこしながら言う。

「かえしてほしい？」

ふたりはシシオドシみたいは何度も何度もうなずいた。

ボクには理解できない。それはひどく矛盾している解答だ。彼らは自分らの命が惜しくて赤ちゃんを捨てたのに、今はそれを取り戻したいと言っている。

「どうして？ いらぬから捨てたんじやないの？」

「死にたくなかったから」

男のほうがかくように言葉を発した。

なるほど——それは本能に根ざした素直な言葉みたい。

嘘をつかなかったということプラス1点。

ボクが人にあだ名をつけてもらったというバフ補正を一兆倍に設定して、プラス一兆点くらいにしておいてあげる。

傲慢ですみませんね。ゾンビなもので。

本当は、ボクの自分勝手な満足のために、この子を殺したらお前達を見逃してあげるくらいのテストはしてもいいのかもしれない。

でも今日は月が綺麗だから、これでおしまい。

「はい」

赤ちゃんはお母さんのほうに返した。

お母さんのほうは少し声をあげて泣いていた。

「こっちの道をずっと行けば、町役場があるよ。そこにはまだ人がいるみたいだから守ってもらえるんじゃないかな」

「あんたは何者なんだ？」

「あのね。この幸運が何度も続くと思わないほうがいいよ。だって、今日のゾンビはたまたま機嫌がよかっただけで、今度は普通におまえたちを襲うかもしれないんだからね」

「ごくりと唾を飲みこみ、ふたりと赤ちゃんは宵闇の中を駆けていった。」

ゾンビたちはまるで見送るようにその場に立ち尽くしている。

ボクが彼らに名乗らなかつたのは、すぐく当たり前の理由だ。

子どもを捨てるようなお前達なんかと、

——友達になりたくないから。

当たり前でしょ？

ボクはピヨンと跳躍して、屋根を伝って帰った。

あ、ちゃんとゾンビさんたちは解散させましたよ。さすがに一度逃がしておいて、また襲わせるとか意味わかんないからね。

ハザードレベル33

真夜中に徘徊した代償は、真昼間までの惰眠だった。

「ふああああああああんんんんんむう」

のびます。のびます。

まあ、どうせ時間だけはたっぷりある。

スマホがチカチカ光ってて、命ちゃんとマナさんから死ぬほど着信入ってたけど、しようがないよね。

だって眠たかったんだもん。

そんなこんなで、ゆるゆると起きだすと、ちょうどいいタイミングで電話が鳴った。命ちゃんかなって思ったけど違う。雄大だ。

「よっ。元気してるか?」

「元気に決まってるよ。だってこんなに空は青くて……、太陽は暖かくボクを照らし出してくれるんだから」

「おまえ、部屋んなか、閉めきってるだろ」

「んむー。まあそこは気分ってことでね」

「なんかいつもより少しだけ元気がいいな」

「いつもボクは元気だよ。そっちはどうなの」

「一応、函館までは来たんだがな……北斗駅ってところから青函トンネル抜けるのが難しそうだ」

「青函トンネルって青森に抜けるあの?」

「それしか陸路はねーだろ。海峡横断するだけの体力はさすがにないからな」

「確かにね……でも、青函トンネルってまっくらなんじゃないの?」

「たぶん列車は動いてないし、そこまで柵はあるから大丈夫だとは思うんだが……怖いっちゃ怖いな。途中でゾンビに遭遇したら逃げ場がないし」

「あのさあ……ボクがそっち行こうか?」

「お、引きこもりが出陣か」

「んもう。そうやって茶化さないでよ。ボクのほうが生存能力は高いと思うよ」

「まあ……そうかもしれないがな。親友に動いてもらうほどのことじゃないさ」

「雄大がゾンビに襲われないか心配だよ」

「……ありがとうな。でもおまえも無理すんなよ」
「うん」

「あ、ところでき。おまえ、配信とか見てたよな」

「え、あ、うん？ そうだね。それがどうかしたの」

「最近、夜とか暇でさ……配信とか見てるんだけど、こんな終末のときに配信始めたアホアホな小学生がいるみたいなんだよ。小学生っていうのは自称かもしれねーけどな。バーチャルだし」

「へ、へえ……」

き、奇遇だな。

最近、終末配信者を名乗る小学生を演じた覚えがあるよ。

世の中は広いもんだなあ。

ググってみた限りは、ゾンビハザード後に新たに出てきた配信者さんはいなかったけどなあ。ボクの探し方が足りなかったみたい。

「その名も、終末配信者ヒーローちゃん。なんかおまえに名前も雰囲気も似ているんだよな。面白そうだから後で見るといいぞ」

っておい。やっぱりボクかよ。ピンポイントでボクを見つげるとかさすが雄大だな。そんな問題じゃないか。あれもこれも見られていたとかヤバイよ。でも雄大っぽいコメントはなかったからアーカイブで見たのかな。

「う、うん……わかった」

と、動揺を隠せないボク。顔がすごく熱くなってきた。

「そういえば、今のおまえにちよつと声も似てた気がするな」

「き、気のせいじゃないかな。きつと函館のボコボコの地面が雄大の耳の耐久度を削ってるんだよー」

「そっかな……、いまのおまえの声みたいに——かわいかったぞ。姿も仕草も女の子してたしなー。たぶんあれは完璧に幼女だわ」

「ほ、ボク幼女じゃないし」

「ん？ おまえじゃなくてヒーローちゃんのことだぞ」

「し、知ってるし……」

「絶対カワイイと思うから見てみなー」

ボンッ。

顔が噴火したみたい。

かわいいつて——言われちゃった。

いや前にも何度か『声』について言われている気がするけど、ヒーローちゃんとしてのボクをかわいいと見定められたのは初めてで、ほんとどボクじゃん。

右手を伸ばすと、真っ白くて染みひとつなくて小さい手のひらが見える。

小学生みたいな女の子の手。

「あの雄大。君っていつからロリコンになったのかな」

「なんだ。なんだ。嫉妬か。オレは緋色一筋だぜ」

「ホモかよー。このバカっ！」

「ははは。冗談だよ。冗談。引きこもりの親友のことが心配でなー」

「最近は少し外にいけるようになったよ」

「ゾンビだらけなのにすごいな」

「雄大も外を出歩いてこっちに向かってこようとしているじゃん」

「まあ、な。案外佐賀と同じで人口少ないからな。ゾンビも少ないし、バイクもあるし、特に問題は感じてないな」

「油断しないでよね。ボク、雄大がゾンビになったらイヤだからね」

「もしも遠隔地でゾンビになっちゃったら見つけることができないから。」

飯田さんもエミちゃんもどこかに行っちゃってて、ボクにはゾンビを総体としてしか捉えられない。

幼い頃に風船を離してしまったような寂しい気持ち。

雄大はボクのものじゃないけど……離したくない。

「緋色。おまえもゾンビになるなよな」

「うん……」

絶賛、ゾンビ中だけど。もうまちがいなく完璧に人外だけど。

そんなこと言えるわけなかった。

今のボクの姿を見たら、雄大はなんていうのかな。案外かわいいとかいいそうだけど――。

「あ、あと命のこともよろしくな」

「命ちゃんは元気だよ。大丈夫」

ボクに欲情する元気な変態だしね。

雄大との電話を切ったあと、ボクはなんだか元気になっていた。精神的充電っていうのかな。

雄大と話すとエネルギーが充填される気がするんだ。

でも、少しだけ罪悪感と寂しい気持ちも湧いた。

ボクが女の子になったって、ゾンビになってしまったって、きつと実際に出会うまで伝えることができそうにない。

「さつとと……今日も配信しようかな」

その前に命ちゃんとマナさんをこの部屋に呼ばないとね。

☆
||

命ちゃんとマナさんをお部屋に呼んだら、なぜか確保されました。

まさに『確保』といっていいだろう。

今のボクは命ちゃんの膝の上に乗せられている。

身動きひとつとれず、身をよじって非難の目で見てみると、なぜか不敵な顔をされました。

マナさんは台所のところで、なにやら作っている。

お昼時だからね。昼食を作ってくれているのかな。ボクにはないスキルなので正直うれしい。

「先輩が起きださないから、心配しました」

「うん。ごめんね……」

「昨日の夜、ひとりでお散歩してましたよね」

あ、ばれてる。

音をたてないように気をつけたんだけどね。

狭くて古いアパートだ。防音設計じゃないし、深夜にワイワイやってたらそりゃバレるよね。こっそりゲーム配信なんて難しいのかも

しれない。

「あの、うん……」

「小学生みたいに見える先輩が夜ひとりで出歩くとか危険です」

「そうかな。むしろゾンビだらけの世界だし、安全だと思っただけ」

「そんなところを闊歩する人間ともし出会ったら危険でしょう？」

「お昼だから安全ってわけでもないと思うんだけど」

「私たちを呼ばないのが危険なんです。ゾンビとして覚醒したばかりですけど、私は先輩の盾くらいにはなれるつもりです。先輩がひとりのほうがいいのかなって思っただけ、私すごくすごく我慢したんですよ！」

「わ、わかったから。無意識に鯖折りしてるから！ 中身でちやうでちやう！」

命ちゃんも完全にゾンビパワーを得ているらしく、シートベルトのようにボクの腰にまわした腕に力をこめるものだから、まったくもって抜け出せる気がしなかった。実はそんなに痛くはなかったけれど、貞操的な意味では危険。

「ああ、ジャストフィット感がすごい……」

「命ちゃん、そろそろ離してください」

ジャストフィット。

その言葉の意味どおり、ボクのほうはボクのほうで命ちゃんの柔らかい部分が背中に当たっているわけで、正直なところ体中が緊張に満ちていた。

「もう少し先輩成分を感じないと無理です」

「ねえ。君たちって本当にボクの成分とかが必要なわけじゃないよね？」

「そうですね。先輩とイチヤイチャしたいだけです」

「命ちゃん……」

いまのボクは小学生並の身長と体重だからいいけど。

先輩として元男として、後輩で妹分な命ちゃんに乗るとか、めっちゃくちや恥ずかしいんですけど。

確かに、命ちゃんのおとももってすべすべしてて、その吸いつくよ

うな肌にピタツと乗るのは悪くない感触だし、男としての精神にざわつきがないといえは嘘になる。でもだからこそ、幼女扱いされるのが不満です。

「あの……ボク、男なんだけど」

「ヤダー。先輩にオソワレチャウー。ダレカタスケテー」

完璧な棒読みだった。どうあがいても絶望なのね。

「命ちゃん。ボクだってひとりになりたいときがあるんだよ。だからって命ちゃんのことをないがしろにしているわけじゃないから、それだけはわかってね」

「そうですね……」

わわっ。

脇のところに手を差し入れられて――。

ボクの身体はくるりと反対側を向いた。

あえて、描写するのが難しいから使うけど、これっていわゆる対面座位。

命ちゃんの顔がち、近い。近い。

腰のあたりに手が添えられていて、これ以上離れることができないし、ちよつとした動きでキスしちやいそうな距離だ。

「あの……。命ちゃん？」

「私は先輩を愛してます」

「う、うん。それは聞いたよ」

「愛が誰かを選択することだということも言いました」

「それも聞いた」

「つまり、先輩を独占したいって想いがあるんです」

「独占欲……？」

「先輩といっしょにいたいんです。片時も離れたくないです」

「物理的に近ければいいってわけでもないと思うんだけど」

「物理的な近さもかなり有用ですよ」

あの残った右手を恋人つなぎしてくるのやめてください。

たぶん、ゾンビじゃなかったら手汗がひどかっただろう。

いまのボクはすべすべお肌。

女子高生と手をつないでもなんとというか綺麗な感じがする絵図だとは思う、けど。FPSでみたら命ちゃんの顔が近くて、小さい吐息がすぐく耳に響いてきて、少しずつ顔が近づいていって――。

「あ〜〜。ご主人様と命ちゃんがイチャイチャしてる！ こんなの実質セックスじゃないですか」

救いとなったのはマナさんの声だった。

虚となった一瞬を見計らって、ボクは命ちゃんの膝から脱出。

立ち上がって、マナさんの手からお皿を受け取った。

「うわ。すつごく大きなパンケーキだね」

「ご主人様をナデナデパンケーキして逆に落としてみよう作戦です」

「ナデナデは別にしてもいいけど……。あまりベタベタ触ってこないでね」

「あ……。あ。ナデナデしてもいいって言われちゃいました。どうしよう。今日をナデナデ記念日にすればいいですか?」

なんだそのナデナデ記念日って。

「しつかし……。これだけデカイと、カロリーすごそう」

パンケーキはなんと五段重ねになっている。

たっぷりと蜂蜜もかけられていて、なんだか甘そう。

「みんなの分は?」

「ありますよー」

マナさんがお皿をふたつほど台所から持ってきた。

そこには普通サイズのソレだ。

つまり、一段だけのパンケーキ。

「あの、これっておかしくない? ボクだけ五段とかぷくぷく太っちゃう」

「いっぱい食べるご主人様が好きです!」

「いや、マナさん……。あのね」

「ハムスターみたいにがんばって食べる姿がすごくかわいいです!」

「ボク、小動物じゃないんだけど」

「小学生ならいっぱい食べないと大きくなれませんよ。ご主人様は幼女のままのほうがいいですけど! 幼女のままのほうがいいですけ

ど！ 幼女のママ！ ああ、甘美……」

「いや、いっぱい食べるといっても限度がありそうな……。それにそもそもボクって成長しているのかもよくわからないし。ゾンビって成長するの？」

「それはわかりません。そもそも普通のゾンビさんたちとわたしたちも違う存在なのかもしれませんし。ただ、普通のゾンビさんたちはほとんど腐敗しませんよね」

「まあ確かにね」

噛まれたところから腐敗菌が侵入しているはずだけど、もう一週間以上経っているのに周りのゾンビさんは腐ったりしていない。

もうゾンビウイルスの謎パワーで腐敗が抑えられているとしか言いようが無い。ほかのゾンビ作品とかでは腐敗で人類側が時間切れを狙うという戦法も使えたけれど、たぶんこれ何年経っても腐り落ちそうにないよ。

「それに、ゾンビさんたちって食べなくても相当長持ちしそうですね」

マナさんがほっぺたに手を当てて上を見つめている。

そのとぼけた感じが、またふんわり感をかもしだしてる。

「エネルギー保存の法則ってどうなってるんだろう」

「ゾンビウイルス的なものが、ものすごくエネルギーを蓄えているのではっ」

「なるほど……」

マナさんってふんわりしてるけど頭いいなー。

さすが、世の中の『虚』を動かすだけの人物だ。

謎だけど。

「ともかく——、こんなにたくさん食べられないし、ボク太るかかわかんないけど、今の状態がベストな感じなんですけど」

「お残しは大丈夫ですよ。最近の給食では、虐待とかの問題もあるせいか食べ残しはOKなんですけど、昔は食べきるまではお昼休みに入れないとありましたねー」

「ふうん」

まあボクはそういう好き嫌いはいあまりなかったからわからないけど。

どうだったかな。

「先輩——、私達は自分の体調管理をしっかりしていかなければなりません」

命ちゃんがキリっとした声をだした。

「まあ確かにね。ボクたちがゾンビである以上、ボクたちの身体を誰かに見せるわけにもいかないし、自己管理は必須かもしれないな」

「ええ、だから、Wiiの例のアレを配信しましょう」

「例のアレ？」

あのハードって、板みたいなのの上に乗って、リモコンみたいなのをぶん回すゲームが多かったよね。

「私達って基本引きこもりじゃないですか」

「う、うん。まあ……今は人類みんなが引きこもりだよ」

「運動不足だと思っんですよね」

「なるほど……」

昨日は数キロメートルを一分くらいで駆け抜けたけど。

まあ、普段動かないのは確かだ。

「あのハードって自己管理含めて運動不足を解消することが出来る画期的なゲームがあるんです」

「ふうん。知らなかったよ。据え置きハードはしてなかったからなあ」

そもそもWiiに限らず据え置きハードはテレビとの接続が前提になってくるから、テレビのないこの部屋ではゲームできない。

「次回までに用意しておきますね」

「この部屋にもついにテレビがくるのかー」

まあ、言うまでも無いけど、百パーセントOFFですよ。

☆
＝

命ちゃんとマナさんは別室に行ってもらった。

やっぱり、人の目があると恥ずかしいしね。機材トラブルは遠隔でもOKだから、隣の部屋でも十分だ。

マイクチェックOK。

雄大や命ちゃんたちに見られてるって意識すると、少し恥ずかしいけど、ボクはボクを見てもらいたいって思ってるのも確かで、だからきつと、配信はボクのやりたかったことだ。

「にやーす！ 今日始まりました。終末配信者のヒーローちゃんだよ。ヒロちゃんって呼んでもいいよ。いろいろと考えていたんだけど、今日はボクがプログラマーだってことをみなさんに見せつけたいと思います」

『にやーす』『出カワ』『カワイイの天才児』『イキイキキルヒロちゃん』『プログラマー？』『なにすんの？』

「今日するゲームはこれ——、【左のために死ね】をします」

『なんぞ？』『えるしってるか小学生は英語が読めない』『なるほど邦訳か』『右じゃだめなんですか？』『インド人を右に！』『おまえ、前回はいただろ』

「えつと、このゲームもゾンビゲーだよね。でも今回は！ 人類側！

ボク人類としてゾンビと戦うよ！」

ゲーム自体は非常にオーソドックスなFPSゲーです。

FPSというのは、一人称視点ってことね。

そして、このゲームはマルチプレイでもある。基本的には四人一組でチームとなって、ゴールを目指す感じ。

つまり、このゲームではゾンビは障害物であって、ホラーじゃない。ゾンビどもをなぎ倒しながら進む爽快感がメインかな。

「サーバー立てたからよければきてね。名前はヒーローちゃんサーバーだよ」

そのあたりは命ちゃんが全部やってくれました！

不甲斐ない先輩でごめんね。

『いまだ。のりこめ』『小学生の（鯖の）中に入るう』『処せ』『手馴れてんな。もしかしてガチ勢？』『いままで、ヒロちゃん見たことないけど？』

「あ、いままではぼっちプレイしてました……配信始めたから、みんなといっしょにプレイしようかなって思ってた……がんばりました」

『泣かないで』『しょんぼり顔』『かわいそうかわいい』『おひとり様かよ』『お兄さんといっしょにゲームしようね』『通報しました』

精神的な引きこもりだったからしようがないよね。

まだ軽度だとは思っけど。

「あ、ぼっちさんこんにちわ。ぶにくら様さんこんにちわ。みんな早いな。あ、幼女先輩さんこんにちわ？ アイちゃんさんこんにちわ」「負けた」「敗北」「幼女先輩……幼女先輩じゃないか」「誰？」「デッドラとかピュビジとかで常に最上位ランクを維持してる凄腕ゲーマーだよ」「それほどのものではありませんよ」「いるしー」

えー、そんなすごい人がボクの動画に来てくれたの？

配信見てたっていつでも、だいたい芸人枠というかアイドル枠とつか、そういうのが多かったから、ガチ勢っていうのがどれくらいのものなのかよくわからない。

今回ボクが選択したのは、みんなにはボクの声が聞こえるけど、みんなの声は聞かないってタイプ。

いきなり知らない人と会話して、連携するとかボクには難易度高すぎるしね。

「さー、やるぞ。正直なところぼっちプレイヤーだからみんなへの指示っていうのがよくわからないんだ。高度の柔軟性を維持しつつ臨機応変に対応してください」

『プランBでいこう』『幼女先輩がいる時点で余裕だな』『お手並み拝見』『終末なのにゲーム見てるオレ』『そんなオレ君を見てるオレ』『オレくんどうしてここに？』

幼女先輩という人がただけすごいのかわからないけど、ボクだって負けてはないはずなんだ。ぼっちプレイしかしてなかったけど、このゲームに触れてる時間はそれなりに長いし、基本的な動作は標準的なFPSといえる。その仕様もFPSの原則にのっとっている。

例えば、このゲームはゾンビがダッシュで襲ってくるわけだけども、ヘッドショットが設定として存在する。

高速移動するゾンビだし、AKとか火力のある武器が手元にあるからほとんど乱射すれば済む話だけど、要するにヘッドショットだと一撃必殺になるんだ。

だから――。

ボクは人外レベルに達した反射スピードで、ゾンビの頭をスナイプする。

『うめえ』『パッド使ってる時点で素人ゲーマーだと思ってた』『マジでプロゲーマーかよ』『ビューティフォー……』『え、全部ワンショットワンキル?』『チート使ってるじゃね?』『いや照準、完全にあわしてるぞ』

「ふふん。これは余裕ってやつなんだからね。本当はマウス使ったほうが早いんだ!」

そうFPSゲーでマウスを使わないのは、はっきり言ってハンデといってもいい。だって、マウスだと照準を合わせるスピードが段違いだから。

それでもあえてゲームパッドを使ってるのは、こうやって魅せ普するためにはかならない。

「えへ。えへへ。どうだ。すごいだろ! みんな褒めて褒めて! 全力で褒めていいんだよ!」

『素敵抱いて』『イキイキヒロちゃん』『イキル小学生』『すごいねーえらいねー』『裏でこつそりゾンビ虐殺しまくってる幼女先輩もすごかったり』『すごい方向性が人間離れしてる件』

まあ確かにゲーム攻略の組み立て方とかは素人そのものなボク。

幼女先輩のプレイを見てみると、ここぞというときに火炎瓶投げたり、囲まれてしまつて物量に押しつぶされそうになつたボクをさりげなく助けたりと、なんていうかプレイそのものがうまい。

ボクって単純に戦闘力が高いだけなんじゃ……。

と思わなくもないけど、プロゲーマーを名乗った以上は、人間越えした戦闘力で、戦術や戦略を凌駕する!

「ん。この音って……」

『アリだー！』『ブーマーだな』『ほおーん。それって強いん？』『立ち回り下手糞だとすぐ落ちる』『それでも幼女先輩……幼女先輩なら』『ヒロちゃん期待されてなくて草』

「ぼっちゃんどこにいるの？　ぶにくら様いつのまにかやられちゃってんじゃん！　ボクをひとりにしないでよ。アイちゃんさんボクを守って！」

『草』『お、姫プか？』『姫プする配信者の鑑にして、プロゲーマーのクズ』『アイちゃん死亡』『いま、アイちゃん前に立たして敵もろとも撃つてなかったか？』『フレンドリイファイアありの設定だから』『背中バカスカ撃たれてて草』

「アイちゃんさんの雄姿は無駄にしないよ！」

画面の前に、敬礼するボク。

『祖国ってる』『ああ祖国だな』『さりげなく自分のやったことを不問にするところ本当大好き』『ヒーローちゃんのために死ねたのなら本望です』『あ、おかえりー』

「よし。ブーマーはとりあえず倒せたね。幼女先輩。どっちに進めばいいか教えてください！　先行してくれるとうれしいなー」

幼女先輩は迷いなく突き進んでいく。

ボクもその後が続く。セーフハウスまであと少しだ。

『媚びていくスタイル』『戦闘力だけがとりえの小学生』『ヒロちゃん様がかわいければそれでいい』『幼女先輩がたのもしすぎる』『ぼっちゃんこいつたんだよ？』『幼女ふたりでプレイ……ひらめいた』『ひらめくな』

ボクにはまだ経験が足りない。

人と話すのもそうだけど、ゲームも単純にプレイするだけなら力押しでなんとかかなっても、研ぎ澄まされたゲーマーとしての勘みたいなものがないみたい。

ゾンビを一撃で確殺できる程度の精密な動きはできても――。

やっぱり判断力とか、総合的な力は全然ダメ。

幼女先輩は本当にすごい。

なにがすごいって一概には言えないんだけど、ともかく人間がここまでできるようになるってところがすごい。

幼女先輩の肩を見ていると、そんな素直な賞賛の想いしか浮かばなかった。

そして、ついに――。

「ごおーる……」

『かわいかった(小並感)』『好き(直球)』『楽しそうにプレイするなあ』『ぼっちいつのまにか死んでた』『いやはやなかなかにおもしろい方です。基本スペックがまったく違います』『幼女先輩もおかえり』

「あの……最初にボク、プロゲーマーとかいったけど、やっぱり取り消します。幼女先輩とかの動き見てたら、なんだか自称するのが恥ずかしくなっちゃって」

『照れる小学生』『顔真つ赤モーションとかどうやってるんだよ』『あざとい選手権ならプロだよ』『エンタメ枠ならプロでしょ』『毎秒配信して』

「うん。みんな見てくれてありがとう。それじゃあそろそろ終わろうかな』

『終わらないで』『いかないで』『いかないで』『ママ』『ヒロちゃんの顔が見れなくなるのが辛い』『現実にもゾンビ確殺する幼女がいればなあ』『配信予定教えてほしい』

「配信の予定は、明日もたぶん昼くらいになりそうかな。次も楽しい配信を目指すからね。バイバーイ」

今日も配信終わり。多いのか少ないのかよくわからないけど、いつのまにやら百名くらいの人が出てきた。数字だけを冷静に見てもピンと来ないけど、これって百名の人にボクのことを知ってもらえたってことだよ。

あらためて考えるとすごい……。恥ずかしいけど、うれしい。

ゾンビだらけの世界でゾンビゲーをやるボク。

でも今回は人類側だった。

人類は勝利したよ。

みんなきつと本当の生活は大変なんだと思う。

食糧のこととか、未来への不安とか。ゾンビへの恐怖とか。それでも――。

そんななかでも。

ボクの配信が好きて言ってくれるのなら、ボクはそんなみんなに何を返していけるのかな。

ハザードレベル34

静かな夜。

ボクの意識はまどろみの中に沈んでいた。

優しい月明かりに照らされて、久方ぶりにカーテンは開け放たれている。

エアコンも切って、今日は熱帯夜でもなくて、心地いい気温。

たまにはこういう日もある。

「んゆ……」

ころんと横になる。

ボクの身体は女の子になってコンパクトになったから、小さなベッドで寝返りを打つてもまったく問題ない。余裕のサイズですよ。

ふわふわの意識。

睡魔の手招き。

覚醒には程遠い意識の狭間。

ゾンビって意識がない存在だとされているけれども、実際にはどうなんだろう。こうやって、眠りにいるときも意識がなくなるわけだし。

そもそも意識がない状態のほうが正常で、意識がある、つまり覚醒している状態のほうが異常なこと——。

むにや。むにや。

「失礼いたしましたあす……」

おかしいな。

この部屋には当然ボクしかいないはずなのに、なぜか命ちゃんの声が聞こえる気がする。そういえば昨日、配信中に部屋の外に行く代わりに、『いつか』お泊まりしたいとかいつてたけど、もしかして……。

むにやあん。

「先輩の寝顔……かわいいです」

「むにや？」

「ほっぺつつついてもいいですよね」

ほっぺ？

ほっぺとはなんだろう（哲学）。

そんなこともわからないぐらい哲学だ。

ボクの意識は既に睡眠下にあつて、無意識の支配下にある。
ぷにっ。

あう？　なんか変な感触をほっぺに感じる。

そうか、これがほっぺぷにぷになのか。

「とても刺激的な感触です……。ああ、幸せはここにあつた！」

ふにふに。

ふにふに。

なんだかくすぐつたいです。

「身をよじる先輩がかわいすぎて死にそう……。でも、これで終わりではありませんよ」

????

なんだろう。今日は胸元をボタンでとめるタイプのパジャマを着て寝てただけど、そのボタンがひとつひとつ開かれていつているよ
うな——。

そして、ピトって胸のあたりに冷やっこい感覚。

「みなさま。聞こえますか。はあ……。生きててよかった」

『とくとく』『とつくんとつくん』『とうんく』『ママみ』『いけないこと
してる気分』『おかあさーん』『小学生ユーチューバーの鼓動を感じる』『
ちよつと心臓早くね？』『子どもらしい胸の高鳴り』『全力で録音し
た』『ふう……。』

「って——、なにしてんの!？」

必然的な結果として、ボクは飛び起きることになった。

胸の前をかき抱くようにして、ガード。

命ちゃんの手には見慣れぬ……。いやある意味、稀によくある程度に
見慣れている冷たい物体が握られていた。

風邪のときにお世話になる。

「なにその聴診器……。そしてカメラ」

一瞬でその意味を理解した。

ボクの超聴覚がカメラのハムノイズを捉える。

カメラは無情にも回っていて、ブルートウスか何かの原理でパソコンにつながっているのだろう。

バーチャルなままだけだ。

バーチャルなボクだけだ。

でも、今回の恥ずかしさはその比じゃない。

ボクの胸にさつきまで聴診器が当てられていて、それをこうなにかよくわからない機械につないで全力配信しちやってる！

全国の皆様にボクの胸の音が聞かれちやってる！

「視聴者さんはえてしてサプライズを求めているし、配信者の素顔っていうのを求めているものなんですよ」

「なんで、は、配信しちやってるの？」

「今は昔。寝起きを襲う不埒な番組があつたとか」

「そんな番組もあつた気がするけど、ボクの寝起き動画とかなんで撮られちやってるわけ？」

「絶賛配信中です」

「やめてよ。み……後輩ちゃん」

とつきに自分の口を手で覆って、名前を出すのは避けたけど、それで配信がとまるわけじゃない。

机の上を見てみると、みんなのコメントが流れていた。

『後輩ちゃんナイス』『すやすやヒロちゃん』『かわいさの周波数』『録音しました』『拡散希望』『配布希望』『みんなの安眠を守るとか言ってたけどこのことじゃったか』『お兄ちゃんと一緒に寝ようね』『おう、お兄ちゃんオレといっしょに寝ようや』『アッー』

「やめ、やめろー！」

「ひとりでゾンビだらけの世界をお散歩した罰です」

『まじで？』『この幼女強すぎひん？』『ゾンビだらけの世界をひとり散歩する幼女がいるらしい』『うわよう、よつよい』

「ち。違うよ。ボクそんな無謀な子じゃないし」

『謎のエイム力でゾンビを撃ち殺していった可能性』『幼女を襲うゾンビがいるわけねーだろ』『でも、ヒーローちゃんなら襲ってみたいかも？』『↑ボコオッ』

「後輩ちゃん。お昼はいいけど夜は入ってこないでって言ったでしょ」

「先輩はお泊りしていいっていいました」

「言ったけど……。違うだろお！」

「いつと言つてない以上、今日でもいいはずですよ」

『後輩ちゃんのヤンデレ度数が高い』『後輩ちゃんってヒーローちゃんより小さいの?』『声の感じからすると、おねロリにしか聞こえない』『後輩ちゃんもかなり若い声に聞こえる』『どうせ、みんなおっさんだぞ』『この声でおっさんだったら逆にすごいわ』

「ともかく! 勝手に寝姿撮らないで!」

「むう……。わがままですね。先輩は」

「どつちがだよ!」

むしろどこかわがままな要素あった?

ボクわがままだった?

そういえば、ちよつと前に、ボクつてわがままだつて言われたことがあるけど、それつて正しい評価だったのか。

『急にテンションさがるヒロちゃん』『引きこもり特有のムーブ』『クソ雑魚メンタル』『豆腐よりやわらかなメンタル』『ぼんぼん痛くなつてきた?』

「痛くないよ! つていうか、みんなこんなサブライズじゃなくて、ボクのすごく計算された天才的動画を見てよ!」

『やはりイキるか』『引きこもり特有のイキリムーブ』『ぼんぼん痛い?』『生理きてる?』『おいやめろ』

「生理はまだです……」

『k t k r』『ハアハア……』『幼女はここにいたんだ!』『すううううううううううう』『すううううううううううう』『オレサマヨウジヨマルカヅリ』

「セクハラ! セクハラだかんね!」

「先輩が顔真っ赤にしてる様が配信できて、私はとても満足です」

「やめてね!」

深夜のテンションでおかしくなつてしまったけれど。

とりあえず、配信は適当なところで切り上げた。

みんな満足してくれたようだなにより……。じゃないよ！

さすがにボクは怒りました。

必ず、かの邪智暴虐の後輩ちゃんを除かなければならぬと決意しました。

「命ちゃん。あのね。世界がこんなになってしまってもやっていいことと悪いことがあると思うんだ」

「確かに一理ありますね」

「一理どころか百理はあるよ！」

「でもですね。先輩。よく考えてください」

命ちゃんはベッドに正座しながら、ツイと視線をあげて言う。

「最近、マナさんばかりに髪をいじらせて、私とのスキンシップが減ってる気がしませんか？」

「いや、べつに？」

「わたしも先輩で遊びたいです！」

「接続詞まちがってるよね。ねえ!？」

「先輩が——他人のクオリアを感じたいって言うから」

突然真面目な調子になる命ちゃん。

「え？」

「私が無茶をやれば、少しは感じてくれるかなって思ってたんです」

「確かに全国の視聴者様にボクの心音を聴かれるとは思わなかったよ。びっくりサプライズだよ。びっくりするほどユートピアだよ」

「少しはクオリア、感じ取れましたか？」

「みことちゃん！」

ボクは命ちゃんのほっぺを両手で引っ張った。

「いふあいれふ」

「あのね。ちよつとは反省しようね？」

「ふあふああります」

「よろしい」

ボクは命ちゃんのほっぺたから手を離した。

「まったく……。ボクといっしょに寝たいなんて、命ちゃんはちっちゃ

い頃から全然変わってないね」

「先輩一筋ですからね」

「むう……」

そういわれるとむずがゆい。

感じていた怒りも霧散していく。

なんといつてもずつと昔からの幼馴染だ。

命ちゃんが時々無茶をするのは、ボクのためを思ってたど知っていない。

ボクが絶対に望まないであろう寝姿配信をあえてすることで、きつと、蛍の光みたいに、淡く自分がここにいるって主張したかったんだろう。

愛しい光——ではある。

ボクに抱きついてきて、生心音のほうがいいとか言っただけなれば。

「先輩とまたいつしよに寝たいです」

「変なことしなければいいよ」

「やった！」と小さくガッツポーズ。

ボクって命ちゃんに甘すぎなのではないだろうか。

ひとりっこだと、幼馴染に甘くなる傾向——。あると思います。

☆Ⅱ

お昼になった。

あれから例によつてマナさんたちと買い物に出かけ、テレビといくつかのゲームハードを手に入れました。テレビはでっかいサイズでもいいといわれたけど、ボクの部屋にマッチしているのはひとり用だ。

十七インチサイズの普通のテレビを部屋の隅っこに設置。ついでにテレビ台も設置。

いままでパソコンゲーばかりやってきたから、正直なところ据え置きゲームのプレイヤーとしての力は初心者そのものだと思う。さ

さすがにゲーム人生そのものは長いから、まるつきり触ったことのない人よりはマシだと思っけどね。

でも、べつにプロゲーマーってわけじゃないんだ。

いわゆる初見プレイっていうのもおもしろいんじゃないかな。

特にバーチャルだと、ボクという虚構であつて虚構でないようなそんな曖昧な存在を知ってもらうためにいいと思う。

初見だと素がでるからね。

鼓動音は素をさらしすぎてる気がするけど、それはともかくとして。

「どきんっ！ 今朝のことはみんな全力で忘れてゲームをしようね」

『命の脈動感じました』『ヒロちゃん鼓動音 mp3』『ヒロちゃん寝姿 mp4』『スクショ撮影しました！』『掲示板にお晒ししました』

『地味にバイノーラル録音で撈りました』

「ううっ」

アーカイブ残してなかったのに。

『泣いちゃった？』『消したほうがいい？』『ヒーローちゃんがいやならアップしてるの消すよ？』『おまえら小学生泣かせるとか最低だな。DLしたけど』『運営の管理能力下がってるんだからおまえらやめてさしあげろ』

「みんなやさしいな」

そう思うと、心が晴れる気がする。

「えっと、は、恥ずかしいけど……だいぶん、恥ずかしいんだけど、みんながボクのいろんな姿みたいっていうのなら、それでいいよ」

『見たい！』『えちえちな姿を見せてください！』『天使顔』『可愛いこと』『可愛いがすぎますぞ』『どうせおっさんだぞ』

んん。

くすぐつたい。

こうなんというか、全力で肯定されている感がすごくて、自分がお姫様にでもなったような気分だ。あれ？ それでよかったんだっけ。

「ま、まあ、いいや。えっと、今日するゲームはこれ使つてやるよ。これ」

取り出したるは体重計のようなそれ。

世界で一番売れている体重計とも呼ばれるれっきとしたゲームのコントローラーだ。

カメラは全体を俯瞰するようにして、ボクはコントローラーが精密にできるようにするため靴下を脱いだ。

『オレが乗ったら壊れたやつだ』『ご家族様用ゲーだぞ』『おひとり様ご案内します』『やめろその言葉はオレに効く……』『なにをするの?』『ヒロちゃんのおみ足』『足ペろペろ』『靴下脱ぐモーションも完備とか、まちがいでなくこのモデル作ったやつは天才』『ただの足フェチだろ』

「えつとね……今からするゲームは【おまえにフィット】だよ」

『直訳定期』『フィットをフィットできなかつた不具合』『あー、これかー』『はじめての非ゾンビゲーじゃね?』『おまえゾンビ以外もできたんか……』『いつもと違う系統だね』

「えつと、このゲームはね。後輩ちゃんに薦められたんだ。みんなもゾンビだらけの世界で、健康管理難しいでしょ。身体を動かせるならお部屋の中でも動かしたほうがいいよ」

『あつ（察し）』『後輩ちゃん@策士』『身体を動かしたらゾンビに気づかれたぞ』『ゾンビに気づかれてゾンビに襲われたぞ』『ゾンビに噛まれたらすげー痛かつたぞ』『ゾンビ兄貴は成仏してね』『そういやこの子の部屋ってどうなってるんだ?』『どつかのスタジオなんじゃね?』『ふつーにゾンビに気づかれそうだったらやめようね』

命ちゃんが策士っていうのはよくわかんないけど、なんか変なゲームだったりしないよね。例えばエッチな仕様とか……。でもそれはないか。

ご家族様用というかパリピ用というか、そんなイメージがあるこのゲームハードでは、R18なゲームは発売されていないはず。

「じゃあ、はじめるね」

——ハジメマシテ。ワタクシ、ハイパーウェーイボードといいマス

——ハイパーボツとでもお呼びクダサイ。——
ふにふに動く体重計ちゃんがかわいい。

字幕の台詞もファンシーだし、これからがんばっていくぞって気分になるね。

「よろしくねー」

軽い気持ちで答える。

【YES】【はい】

の選択肢がでてたので、とりあえず【YES】を選択した。

すると、いきなり体重計ちゃんは体型はそのままに、足と腕だけがムキムキの状態になった。

なにこれ。ぜんぜんかわいくないんだけど。

いやほんと。なにこれ……。

幼女にトラウマ絶対植えつけるマンかよ。

ムキムキ体重計は言った。

——これから毎日、オマエの健康を管理スル！——

——話し掛けられた時以外口を開くな——

——口でクソたれる前と後に“サー”と言え——

——分かったか ウジ虫ども——

いきなり語気つえーな。

「サー。イエスサー」

とりあえず答えて先に進める。

——オマエにバランスと姿勢の関係について教えてやる——

【聞かない】【聞く】

選択肢が現われたのでボクは迷わず聞かないを選択した。

「だれが聞くかよ」

『機械には強いヒーローちゃん』『つよつよガール』『機械にしかマウン
トとれない系幼女』『うそだぞ。内心ドキドキしてるぞ』『ドキドキ
ガール』『おっさんがつよガール』『オマエがおっさんだ』『かわいいけ
ればなんでもいい』

——いいか。このゲームにはゆがみを改善する訓練が入っている

——貴様ら雌豚が おれの訓練に生き残れたら各人が兵器となる

いや、そんな筋肉ゴリラにはなりたくないんですけど。

いまでも車のドアを無理やり破壊する程度にはゴリラだけど、謎のパワーのおかげか、見た目はプニっとしたままだ。

——では、訓練の前に身体測定をおこなう——

——へちやむくれ顔。名前は？——

「サー。ヒーローちゃん。サー」

——英雄のヒーローか？——

「サー。イエス。サー」

なんだ。なにげにすごいなこのAI。このところAIの進化はさまざまいって聞いてたけど、ここまで会話が成り立つものなんだ。

——気品のある名前だな。王族か？——

「サー。ノー。サー」

——名前が気に食わん。おまえは白玉団子と呼ぶ。いい名だろ——

「サー。イエス。サー」

なにこれ？

白玉……団子だと。

ボクの配色的にはあってるような気がしないでもないけど。

『白玉団子ちゃん』『白玉ちゃん』『ヒーローちゃんは白玉ちゃん？』『このAIなにげにあだ名つけるの上手いからな。オレなんかほほえみデブだぜ……』『ほほえみデブ草』『白玉デブちゃんじゃなくてよかったです』

——身長は？——

「えつと……142センチです。サー」

——まるで、子猫ちゃんのような小ささだな。サバ読んでるだろ——

「サー。ノー。サー」

『ちっちゃいな。マジで小学生かよ』『142センチとか小学生五年生クラスの身長』『小学生女児平均値がスツとでてくるオレくんが怖い』『どうせちっちゃなおっさんだぞ』『身長は自己申告制だから……身長は』

——生まれた年は？——

「えつと……」

大学生のボクじゃなくて、ユーチューバーとしての架空の年齢から逆算する。

小学五年生の設定だと、確か10歳か11歳くらいだからね。今年の年数から、10とか11マイナスに引いた値を設定した。

『小学生だよね？』『オレは幼女だと信じてる』『自己申告定期』『せいねんがっぴおぼえててえらいね』『サバ読んで偉い』

——からだ測定——

——オレサマを平らなところに置いて電源ボタンを押せ——

——降りた状態で押せ。分かったか。白玉団子——

「サー。イエス……イエス」

——ゲームパッドをもって乗れ！——

「よし……」

『ごくり』『おみ足で踏みたい』『ふみふみ』『もしかしてこれはエツツツツ』『体重ばれない？』『ばれるぞ』『ヒロちゃんが踏んでるの普通に体重計だしな。あとはわかるな』

ん？

そうなの？

「えつと……だからどうしたの？」

『ん？』『どうした？』『無垢シチュ？』『体重バレすんぞ？』

「体重バレたらなにかあるの？」

よくわからん……。

そもそもボクの体重はさつき計ってみたけど、めっちゃ軽いねーくらいしか思わなかったし、みんなに知られてもべつに変な数値じゃないし？

『これは天使の可能性』『小学生並の体重じゃなかったらバレちゃうよ？』『ヒーローちゃんの設定が壊れる。壊れるっ』『ヒロちゃんがほほえみデブだとヤダー』『おっさんがおっさんになる日』

なんだ。

みんな、本当にボクのことを小学生並の女の子と思っていたわけ

じゃないのか。

ふむ……。

冷静に考えるまでもなく今のボクは小学生並の体重なのでまったく問題ないな。

あ？　もしかして、命ちゃんって体重バレ羞恥を狙ってたのか。

残念だけど、ボクは普通に男の子としての精神を有しているので、自分の体重が晒されてもまったく羞恥心を感じない。

それに女の子の体重なんてよくわからなかったし、べつにこれが普通かなと思うし。

命ちゃん敗れたり！

はい。でました。

体重30キロジャスト。

『はい天使確定』『なんだただの美少女か』『オレの体重の半分もないぞ』『むしろ三分の一だぞ』『ちっちゃくてかわいい』『小学生並の体重感』『軽すぎてお兄さんがもう少し食べさせてあげたい』『ガリでもないぞ。普通だ』

むふん。

どうやらわかってもらえたようですね？

「じゃあ、次いきまーす」

そのあとは普通にゲームを楽しみました！

ハザードレベル35

人類史上、こんなに多くの人の捌け口になったシステムはない。なんのことかというところ、SNS中でも特に短文に特化したシステムを持つ『ツブヤイター』である。

ツブヤイター。

はつきり言つて、みんなで好き勝手に泥んこ遊びをしているようなもので、それはそれで楽しいんだけど、炎上とかが怖い気もする。

アカウント自体はメールがあれば誰でも取れるし、始めるのは簡単だ。

だけど、いままでやってなかったのは、単純にボクがコミュニケーションすることに対して忌避する感情があったからだろうと思う。そんなに毎日呟くことくない？

「えっと……今日からツブヤイターはじめますっ……」

定番の台詞を入れて、とりあえず様子見。

反応なし。

と、とりあえずもう一つ呟いてみよう。

「今日の配信は夜の10時からにしようと思います」

反応なし。

「みんなどんなゲームが好きなのかな？」

反応なし。

なんだ。この世界から排斥されているかのような焦燥感。

これだよ。これがいやだったんだよ。

いろんなSNSを駆使しまくっているんだったらともかく、終末世界でいきなりツブヤイター始めてみても、乗り遅れている感が半端ない。

みんな読んでくれない。うひひ。ちくしょう。世界よ滅べ。

と――。

フォロワーがひとり増えていた。

感動をありがとう！

世界滅んじやダメ。キャンセルキャンセル。世界愛してる！

覗いてみると『ぼっちさん』。

ボクの配信を見てくれた人だ。

うれしすぎて、ありがとうりプライ送ってみる。

これでいいのか？ 機能が多すぎてよくわかんないよ！

それに——。このツブヤイターで本当に視聴者さん増えるのかな？

「うーん。これからフォロワーを増やしていくにはどうしたらいいんだろう」

「みんなわりとそれどころじゃないと思いますよ〜〜」

「わわ。マナさん」

突然、髪の毛を一房握られたので、ビツクリした。

後ろを振り返るとにこやか笑顔のマナさんだ。今日は先にボクの部屋に来たのはマナさんみたいだね。って、朝の六時だよ？ ちよつと早くないですか？

それにそれどころじゃないってどういう意味？

「結構、つぶやいている人多いけど」

「よく内容を見てください。他の人のつぶやきを観察するのも一手ですよ」

フォロワーの人——ぼっちさんのつぶやきつぶりを覗いてみる。

——小学生バーチャルユーチューバーヒロちゃんかわいすぎワロタ——

——久々にワロタ——

——体重軽すぎだろ。リアル小学生か——

「ほら、昨日の配信だよ。これ」

なぜだか誇らしい気分になってボクは画面を指差す。

マナさんは妖艶な眼差しで、パイパイと頭を揺らし、それからボクの右手に手を添えて、マウスを操作していく。

お姉さんがそんなお姉さん力を発揮するとドキドキしてしまいます。す。

時間に見れば数十秒もほど。

まわされるマウスとともに、ぼっちさんの最初につぶやいた日に到

着した。

地面にフワリと降りるように、マウスの中ボタンはそれ以上の回転をやめた。

ぼっちさんがツブヤイター始めたのもわりと最近なのか？

ゾンビハザードが起こった次の日くらいから始めたみたい。

つまり、まだ一週間とちよつと。

発言数は700近い。つまり、一日に100近くつぶやいていることに。

これって多いほうなのかな？ それとも普通？

外に出られない毎日が日曜日状態だったら、人間はそれぐらい眩くの？

ボクは斜め後ろで微笑むマナさんを見る。

どうやら黙って読めということらしい。

——さみしい——

——世界で僕はひとりぼっちだ——

——親と連絡がつかなくなった——

——もう生きていないかもしれない——

——友人もいない——

——隣の人が出て行った。直後、ゾンビに襲われる音が響いた——

——ぽんぽん痛い——

——ぽんぽんペイン——

——マジ腹痛がとまらない——

——水道止まってなくてよかった——

——防災訓練グッズ買って置いてよかった——

——災害のレベルが違いすぎる件——

——二週間くらいは持つかな——

——少しずつ食糧がなくなっていく——

——少しずつ命が削られていってる——

——死ぬのは怖い——

——ひとりで死ぬのは怖い——

——こんなことなら友人くらい作っておくんだった——

——死にたくない——
——死にたくない——
——死にたい——
——ゾンビ二行ってみた。ゾンビがたくさんいた——
——死ぬかと思った——
——やっぱ死ぬのは怖い——
——乾パン飽きた——
——肉くいてえ——
——誰かの声が聞きたい——
——ピザくいてえ——
——僕は佐賀県のK町に住んでいます。誰か近くにいませんか？——

誰か。誰か。

そんな眩きが幾千も幾万も眩かれているのだと思う。

「ご主人様。これがこの世界の『虚ろ』というものです」

「マナさんはネット関係の仕事をしていたの？」

「そうです。いろいろとご指導させていただきましたわ。ご主人様にも愛の手ほどきしちやいたいです♪」

「やめようね……。ただでさえうちには変態さんになってしまった後輩がいるんだから」

「命ちゃんは不安なんだと思いますよ。ご主人さまにクオリアを否定されて、それでもいいとは言ってましたけど、内心としてはウサギちゃんのようには震えていたんだと思います」

「そうかなー」

「そうですよ」

命ちゃんはボクなんかよりずっと心が強いように思うけど、でもそれもボクの視点でそう見えるっただけで、本当のところはわからない。い。

ぼっちさんがボクの配信を見て楽しんでくれていたのは確かだと思いたいけど、このツブヤイターのつぶやきのように、本当は沈んでいく心を必死に思い出さないようにしていたのかもしれない。

「まあ、あれですよ……。この人も、ご主人様を多かれ少なかれ愛しているわけですよ」

「あ、あいしっ？」

「比較の問題ですけどね。ある程度の愛着がなければ、ご主人様をフォロワーなんてしませんし、配信を見ようとも思わないでしょう。それも愛ですよ」

「うん……」

「ただ、命ちゃんは、ご主人様を溺愛してるわけですから、その対比としてこの程度の愛は愛にあらず、相対的には憎悪ということになるのでしょうか」

「極論お化けがここにもいたよ……」

「むしろ現実に近いですよ。愛と憎悪の間には断絶はなく、グラデーシヨンのような感情量の違いがあるのみです。愛しさあまつて憎さ百倍というでしょう」

「まあそういう言い方もあるけどさ。じゃあ、命ちゃんにとってはこの人はボクに対する愛が足りないってことになるの？」

「そうですね。ただ、これはわたしの推測であることをお忘れなく」

「うん……」

それにしても、ぼっちさん案外近くにいたね？

普通個人情報をつづバイターでバラすなんてことはないはずだけど、もうなりふり構ってられないのか、番地までご丁寧に晒してた。

精神的余裕はあまりなさげな感じもする。

「ご主人様。まさかとは思いますが、この方に会いに行こうとか考えてませんかよ。さすがにそれをしたら超絶かわいい小学生美少女でも脳みそゆるふわすぎますよ」

「するわけないじゃん。さすがに危険すぎるよ。ボクの正体がばれたりしてもよくないわけだし」

そうはいうものの――。

ぼっちさん。

ボクの視聴者さん。

そろそろおななすいている頃かもしれない。

そう思うと何かしてあげたいと思うのも人情だ。

「ご主人様。ひとりの人間を救ったところで——それはただの自己満足ですよ」

「わかつてるよ……」

そんなのはわかつてる。

こんなゾンビだらけの世界で配信を始めたのも突き詰めれば、

ボクの自己満だ。

ボクがかろうじて人を救えたといえるのは、夜中にたまたま機嫌がよくて、ちよつとした気まぐれで人を助けたときぐらい。

そんな偶然性は、ボクの在り方とはほとんど無関係だ。

「……マナさん」

「はい」

「マナさんは前にボクが人間を好きになるよう促していたようだけど。アレってどういう意味なのかな」

「べつに促していたわけではありませんよ。ご主人様の意に沿っただけですよ」

「意ね……ボクの意識はどこにあるのかな」

「ご主人様は人間がお好きなのだと思いますよ。もちろん、これもわたしが生きた想像にすぎませんが、たぶんあつてると思いますよ」

「うーん。ほんわかしちゃうな」

「みんなゾンビになっちゃえばいいと思いますよ」

「さりげに外道なあ……」

それと、マナさんのお胸様がさりげなく背中に当たっています。

☆
＝

できれば寄り添いたいと思う。

自己満足でも、そうじゃなくても、誰かが不安になっているのなら、できればゾンビを消し去ってしまいたい。

でも、それができていないということは、ボクは心のどこかでは人

間を信じきれないということなのかもしれない。

「考えてもしかたないか……配信と同じで、とりあえず始めてみよう」

ボクは意識を配信モードに切り替える。

ツブヤイターの効果か、時間指定していたからか、既に百人近くの人待機していた。

「やっぴー。今日も始まりました。終末配信者のヒーローちゃんだよ！」

『出カワ』『小学生がこんな夜遅くにゲームしちやいけません』『お兄ちゃんといっしょにスヤスヤ動画とろうね』『むしろ夜行性の可能性も』

「夜行性じゃないよ！ 昼ぐらいまで寝ちやうことあるけどね」

『ヒロちゃんがニートになっちゃう』『オレたちもニート』『人類総ニート計画』『ゾンビたちは働きものだなあ』『正直、これくらいしか楽しみがない』

「今日はね……ボクからのプレゼントなんだけどさ……えっと……その」

『なんだ？』『恥ずかしがってる？』『どうしたの？ キスする？』『小学生の恥じらい』『ヒーローちゃん顔真つ赤やん』『投げ銭が有効なら万札お布施したんだが』『ヒロちゃんに五万円あげたい』『小学生……五万円……ふひ』『おい。誰かこいつを世界からBANしろ』

「あのね。ちよつと恥ずかしいけど。歌とか唄ってみようかななんて——」

『うほ。美少女の歌』『録音準備できました』『配布準備できました』『クリアボイスだからどんな歌でも歌えそうだね』『萌え萌えきゅーん』『そ、そんなにたいしたものじゃないよ。あ、ぼっちさんツブヤイターでのフォロワーありがとうございます。あ、アイちゃんさんもまた動画視聴ありがとうございます』

幼女先輩はいないみたいだけど、彼は生粋のゲーマーだ。

たまたまたFPSゲーしてたから覗いてみたって感じなんだろう。

視聴者さんの名前を呼んでみたのは、そのほうが次も見えてくれるかなっていうちよつと裏側の考えもある。

でも、それ以上に、名前を覚えたつていうことをアピールしたい。

『うらやま』『わ、わ、名前を呼んでいただけましたか』『ヒーローちゃんに名前を呼ばれて……ウレシイウレシイ』『嫉妬の炎が燃え上がる』『あとで校舎裏な』『校舎裏ねーよ』『学校はゾンビだらけだぞ』

「もー。みんな喧嘩しないで。ね?」

『天使じゃねーか』『みんなの愛称つけないの?』『最近。母性ができたと噂のヒロちゃん』『最近母乳がと空見』『オレも空見』『でもヒロちゃん様の搾乳ならちよつと見たいかも』『↑ボコオ!』

「愛称かー。どうしようかな。みんなどんなのがいい?」

|||||

バーチャルユーチューバーと視聴者の愛称

バーチャルユーチューバーにとつて視聴者とはパトロンであり、同じアイドルを信仰し、一体感を有する仲間である。仲間内の呼称が定着することで、結束力はアップ! そのユーチューバーに属しているという感覚が強くなり、宗教観が増すのである。いわば、アイドル化のための一歩とも言える。

|||||

『ヒーローちゃんが英雄だから、オレたちはモブでいいよ』『むしろヒーローちゃんに駆逐されるゾンビでいいよ』『モブゾンビ』『ゾンとも』『モブとも』『ヒロ友』『終末藹々倶楽部民』『ヒロちゃんスコスコ隊』『ヒーローちゃんがロリなら、オレらはロリコンだろうが』『おれたちやロリコン』『おれたちやロリコン』『おれたちやロリコン』

「もー。本当にロリコンって呼ぶよ!」

『すみませんでした』『でもロリコンってののしられるのもイヤかも……』『おまえ天才かよ』『お兄ちゃんって呼ばれるのどう?』『おまえも天才かよ……』『パパは?』『パパー。オレを養ってー』『いやどす』『オレくんはオレが養ってやろうな』『アッー!』

みんなはしゃいでるなー。

こんな流れになるのは予想できなかったけど、みんな一生懸命考え

てくれているみたいで、なんだかカワイイ。

「えへ。えっと、うーん。どうしようかな」

『ごくり』『ロリコンに決定か?』『パパ』『お兄ちゃん』『ミジンコでもいいよ』『みんなが素敵な名前になってもお前だけミジンコな』『そんなあ』

「決めたよ！　じゃあ、みんなのことはヒロ友って呼ぶよ」

だって、ボクの友達だから。

ちよつと薄い関係だけど、この関係は嘘じゃない。

コンマの世界かもしれないけれども。

ピコグラムの重さかもしれないけれども。

質量のある関係なんだ。

「みんな。ボクの友達ってことでいいよね」

『おk』『とびつきの笑顔いただきました』『もういつそ生の顔見せて』『おまえ……そりゃルール違反だぞ』『ガチ恋してもいいんですよね?』『小学生に恋したら犯罪だぞ』『違うぞ。犯罪じゃないぞ。事実だぞ』

「えっと、べつにね……本当は素のユーチューバーしようと思ってたくらいだから、顔を晒してもいいとは思ってるんだけど」

『マジか』『どうせ美少女』『死ぬほどかわいいんだろ。知ってる』『美少女が解像度上がるだけ』『小学生のリアル生配信……アリです』

「でも、やっぱりまだ恥ずかしいって思うし。みんなをガツカリさせちゃわないか心配だから、このままいくね」

『おう。どっちでもいいぞ』『おまえはおまえの道に行くがよい……』『配信いつまでできるかわからんから、今のうちに生顔さらしてくれー』『冥土のみやげにお願いしますじゃ』

「ん……。考えとくね」

『考えておく(考えておくとは言っていない)』『もう存在自体が好き』『お兄ちゃんと呼んでくれ』『パパは大きな会社の社長だったんだよ』『↑もう意味ねーよなあ』

「前置きが長くなっちゃったけど、それじゃあそろそろ唄おうかな?」「急に唄うよ?』『最近はプリキュアも変身しながら唄うんだぞ』『違う

ぞ。うたいながら変身するんだぞ』『つまり、ヒロちゃんも歌いながら脱ぎ出す可能性が微レ存』

「えーっと、テストス。本当はいろいろ考えたんだけどね。みんなが安眠できるようにって思ってる。だから、シユールベルトの子守歌。唄います」

『小学生ご用達子守唄』『バブみすぐくね?』『ZZZZZZ』『ZZZZZZ』『ZZZZZZ』『なんかねむZZZZZZ』『なんだこんな歌で寝ZZZZZZZZZZ』『ママーバブー』

ボクの歌声って透明感はあるけれど、線は細すぎるし、取り立てて歌唱力があるわけではないと思う。

でも。

もしかしたら――。

ゾンビ的な謎パワーで、ゾンビを沈静化できるかもしれない。

ボクの中にある名状しがたい昏い泉。

静まりたまえー。

そんな気持ちで唄った。

歌声が響いたのは狭い部屋。それと数百人の視聴者たち。

誰も試す人はいないかもしれない。でも……。

「あのさ……。もしかしたらこの歌でゾンビが沈静化するかもしれないから、もうどうしようもなくなってきたときだけ試してみてね。もうゾンビに追い込まれてどうしようもなくなってきたときだけだよ! いいね?」

『は?』『なに天使が天使言語を呟いてるの?』『うんわかったー(白痴)』『ママ大好きー』『ママは小学五年生』『ゾンビを歌でぶつ殺せるの?』『ヤックデカルチャー』『嘘だぞ。試したら死んだぞ』『失敗したらゾンビになるから、成功例だけヒロ友に伝えられるぞ!』

「あ、あんまり期待しないでね。遠隔はちよつと難しい……たぶん』『急に陰キャムーブするところスコ』『結局、ダチヨウ倶楽部的なフリなのか?』『試すときには死んでる可能性もある予感』『超速で録音した』『今夜はこれ聞きながら寝るゾンゾン』『ウーアー(ゾンビ特有のうなり声)』

ボクがゾンビを操るのは、ゾンビに対してプログラムを打ちこんでいるみたいなもの。このプログラムの打ちこみは――。

ヒロウイルス 百点中一万点くらい。計測不能。

ゾンビを直接目の前で操る。百点中九十点くらい。タイムラグなく精密に操れます。

声で操る。百点中。五十点くらい。

なにがどうやってというのがわからないからなんともいえないけど。

やっぱりクオリアに手を加えているという感じなのかもしれない。

光り輝く断片にそっと手を触れるようなイメージ。

そのクリスタルのような表面に、よくわからない係数を書き加えるような。

そんな感覚。

声で操れるかは、だから、わりと賭けに近い。

みんな遠くに離れているかもしれないし。ボクの意識はほぼ介入しないわけだから。でも、少しぐらいは動きが鈍くなるかもしれない。

そんな曖昧な感覚だ。

だからみんなが試すとしても、本当に危急の時だけって伝えた。

もし、普通の日常生活で試して効かなくても……。まあしかたないっていうか。あいつは人の話を聞かないからなっただけで、後から、誰でもゾンビから復活できるくらいレベルアップしたら戻してあげようかな、なんて考えてます。

ゆるーい。救世物語が、誰にも気取られることなくふんわりと始まっていく。

そんな感じですよ。

☆Ⅱ

配信が終わった。

なんだかいつのまにか五百人くらいを突破していたけど、小学生並

の体重だつてバレてから急に増えたのなんだろう。

日本人的な感性からすると、小学生は正義なのか？

そんなわけで、寝る前にいつものようにネットで適当にエゴサーチしている、不意にツブヤイターからDMが来た。

アイちゃんからだ。

『夜分すみません……少々お尋ねしたいのですが、もしかしてあなた様は——』

ボクは言葉を失った。

文字通りの意味で、心臓が止まるかと思った。

血が引いたのか押し寄せたのかわからない。

書かれている文字が目の中に突き刺さったような気分だった。

ボクは夜を駆ける。

屋根。飛ぶ。跳んで。跳んで。飛び。一瞬だけ空間をすべるように飛び越えるような感覚がして。

それくらい混乱してて、時間間隔がめちゃくちゃになって。

それで、辿りついた。

ボクのアパートからほんの少しの距離。

時間にして、三十秒もかかっていないけど、水の中を泳ぐときみたいに空間を掻きわけて進むのがもどかしく感じた。

そこにいた人物を見て、ボクは視界がブレるのを感じる。

『もしかして、あなた様は私とコンビニで会った緋色様ではございませんか？』

『バーチャルな存在なので偶然かと思ったのですが、そのお声が私の知り合いにとてもよく似ているのです』

『私の名前は飯田といいます。偶然の一致でしたら、誠に恐縮ですが

……お聞き流してください。そうでなければ、ご返答をお願いします』
『ボクだよー』

超速でタイピングしたんだ。

見慣れたコンビ二の前で待っていたのは、アイちゃんこと飯田さんだった。

飯田さんはあの時、大門さんに撃たれて死んだはずだ。ボクはゾンビになった飯田さんの姿を見ているし、そのあとは恭治くんを手を引かれて意識が沈降していたからよくわからないけど、いなくなっていたはずなんだ。

でも、そんなのどうでもいい。

「おじさん……いー」

映画のワンシーンみたいにボクは飯田さんに抱きついた。

誰よりも人間らしい飯田さんとまた会えて。

ほんとうにほんとうにうれしい。

「おっと……、緋色ちゃん。いつもどおりパワー全開だね」

「う……。う。ぐす……。おじさん。どこか行っちゃってたからあ……」

どうしよう。

「こんな。小学生みたいな。涙がとまらない。」

「おじさん。どうして生きてるの？」

「なかなか辛辣……いや、哲学的な質問だね」

「うん。よく考えたら、おじさんってゾンビになっていたよね」

「私がゾンビになっっていない理由は緋色ちゃん自身が一番知っているんじゃないかな」

飯田さんの首元にぶらさがってるのは――。

ボクがあげたお守りだ。

その中にはヒイロウイルスがたっぷり含まれたボクの血液が入っている。

「あのとき。私は大門に撃たれて死んだ。けど、倒れふしたとき、私の血液は上手い具合にこのお守りを浸すことになったんだ。そして……この傷。この傷が良い！」

シャツをまくりあげて見せてくれたのは、大門さんにあとから撃たれた銃痕。

でもそれすらももう塞がりかけている。

ともかく、最初に背中を撃たれたあと、今度は前面を撃たれた飯田さんは、その傷跡からボクの血液を吸収したのだろう。

あ、小学生の前でシャツをめくりあげてる姿が犯罪的なのでやめてください。

ともかく――。

そうか……。

ボクの血が飯田さんに吸収されるまで、それだけ長い時間がかかったのは、ボクの血液の浸透の問題だ。

「ふと意識が戻ったときには、私はどことも知れないところを歩いていたよ。そして、なんとなく察した」

そう。

ボクは飯田さんに伝えてこなかった。

ずっと。最初から最後まで言わなかったことがある。

「ボクがゾンビだってわかっちゃったんだね」

「ああ……そうだよ。でもそれは問題じゃない！」

「え？ そうなの？ じゃあなにが問題なの？」

「自分の今の状態がゾンビであるということはだよ。私は自分の信条としてゾンビな小学生にご無体を働くことができなくなってしまったんだ！」

飯田さん視点だと、自分がゾンビになって、そうやって思考や意思のある存在になっていいるのだから、他のゾンビ小学生もそうなる可能性があるって考えたのだろう。

その可能性が以上は――。

つまり他人のクオリアを信じざるを得なくなったからには――。

その意思を無視することを飯田さんは望まない。

自分が殺されてもその信条を貫いた人だからね。

言葉の重みが違うよ。

ボクはいつもどおりの飯田さんに、泣き笑いになってしまった。

そしてふと思う。

もしも。

もしもだよ。

ボクが配信してなかったら、飯田さんと再会できなかったかもしれないんだ。

飯田さんはボクの家がどこにあるか知らないままだったし、ボクのほうは飯田さんが生きているなんて知らなかった。

配信もSNSも誰かに届くかもしれないって信じて、瓶詰めの手紙を投げかけるようなもので、世界で一番孤独な行為だと思う。

それぐらいの確率。

それぐらいの奇跡で。

誰もがそんなの偶然だっていうだろう。

でも、今日届いたんだ。

「えっと……おじさん」

ボクはいつかの約束を果たすために唇を開く。

さながら人間のように言葉をつむぐために。

さながらゾンビのように誰かといっしょにいたいから。

まあ、いずれにしろ。

隣人に向ける言葉としては、この台詞がふさわしいかもしれない。

「いっしょに帰ろうー！」

と、ボクは言った。

ハザードレベル36

「ご、ご主人様が男の方を拾ってくるなんて……ガーン」

すごい勢いで飛び出したから、さすがにバレてるかなと思ったけど、案の定、飯田さんと戻ってきたら、マナさんと命ちゃんはボクの部屋で待っていた。

「マナさん。この人は飯田さんって言って、ボクの友達なの」

「おうふ。ご主人様の瞳がキラキラしてて、本当に友達だと思っっているのが伝わる」

「いやはや、失礼いたします。あ、命ちゃんも久しぶり」と飯田さん。

「お久しぶりです。飯田さん」

命ちゃんは飯田さんに対する警戒というか緊張が少しだけはあるみたい。

この子はそもそも男の人が苦手だからしょうがない。

でもこれでも飯田さんに対する態度は軟らかいほうだ。きつと、ゾンビ的な連帯感が支えているのかもしれない。一通り互いの紹介を済ませて、ボクはおもむろに口を開く。

議題は当然、飯田さんに住んでもらっていいか。

同棲じゃないよ。同じアパートにね。飯田さんの家はご近所なので、ゾンビに襲われなくなった飯田さんはべつにそのまま元の家に住んでもらってもいいと思う。

でも、ちよつとでも近くに住んでもらいたいなー的なの？

ごく普通の感情だよ。恋愛とかそういうんじゃないからね。世界がゾンビだらけになったせいで、経済的負担はゼロだし、ボクたちは無限に物資を調達できるから、人間のようにせっぱつまった状況じゃない。ただ、ボクはわがままにもボクが好ましいと感じる人に近くにいるほしだけ。

それだけなんだ。

飯田さんもいいって言ってくれたし。

「えーつと。マナさんも命ちゃんもいいかな。飯田さんにはこのアパートに住んでもらおうと思うんだけど」

「ご主人様が求めておられるのでしたら、それでいいと思いますよ」
わりとあつさりなマナさん。

ボクのことをご主人様というだけあって、強く言えば大丈夫だと思っていたけど、本当にあつさりだ。大丈夫なのかな。内心は嫌だつてことないかな？

「本当にいいんだね。飯田さんは実際には男の人に見えるけど実は女の子だったとか、そういうことじゃないんだよ」

「あのですね。さすがのわたしも雄んなの子は厳しいものがあります」

「おんなのこと？」

「男の娘の逆で、姿かたちは男の方に見えるけれども実は性別女性という属性のキャラです」

「聞いたことないな」

男の娘っていうのはわりと有名だよな。

美少女という外貌に男という属性を付加したのが男の娘。

その逆が雄んなの子つてことか。それってボーイッシュとかそういうこと？

「わたしが思うに、美少女というのは性別ではないのです」

「え、少女つて言うからには女の子限定なんじゃ？」

「違います。美少女つていうのは妖精さんなんです。性別なんて凌駕しています。ご主人様みたいな容貌の方を美少女つていうんです。つまり、もしも仮にご主人様の性別が男の子さんであつて、男の娘であつても美少女です。わたしは美少女が好きなのであつて女の子が好きなわけじゃないんですよ」

うーむ。美少女美少女と連呼されると、むずがゆいような気分になつてしまう。

「つまり外見重視つてこと？」

「ルッキズムなんて、みんなそうですよ。わたしはただ……、ご主人様の愛くるしいおめめとか、ほっそりした腕のラインとか、ちっちゃくてペろペろしたくなるあんよとかが大好きなだけの変態さんです」

「それつて一般的に言うところのロリコンなのでは？」

「そうとも言っ」

「実をいうと、飯田さんもロリコンなんだよね」

「恐縮です」

いや恐縮されても意味がわからんような。

「私も緋色ちゃんの神秘的な髪の毛とか、月の女神様が小さくなったような貌つきとか、父性を刺激するような愛くるしさとか、そういうのが好きでたまらないですね」

飯田さんもロリコンらしく、ボクの容貌を褒めてくれた。

とてつもなく恥ずかしいような。

「ご主人様の爪ってかわいいですよ。ネイルアートをしているわけでもないのに貝殻みたいにちよこんって指に載ってるみたいで。写真で指先だけ見せられても、あ、この子美少女だってわかる自信があります」

ボクは猫みたいに手を握って爪を隠した。

マナさんってそんなところまで見ていたんだね……。

「緋色ちゃんって、なんというかとてもバランスがとれていると思う。黄金の比率というか、成長しきっていない未成熟な身体なのに、とてつもなく均整がとれていて、総合的に勘案しなければ到底推し量れないような、さりとて印象批評で収まらない芸術的な価値があるように感じる」

「ご主人様のおみとかすごくかわいらしいです。いつかおみみの垢をとってさしあげたいなーと常々思っているんですけど、特に外耳の部分を優しく綿棒でなぞってあげたい」

「目に見える少女という形だけにとどまらず、それが生命ある存在として躍動するとき、とてつもない感動を覚える。例えば、なにげなく伸びをするときに見える脇とか、白く軟らかい平面体がゆらゆらと動くときに、私はとてつもない戦慄を覚えたものだ」

「ご主人様の鎖骨がエロい」

「緋色ちゃんがときどき自分の髪の毛を持って、自前でツインテールを作ったりする様子が、とてもほほえましい」

「猫耳パーカー着てたときには死になりました。感動しすぎ」

て」

「私もそうになりました。緋色ちゃんが画面内にいるという感動もありましたが……」

「わたしたちとても仲よくなれそうですね」

「いやはや恐縮です」

ボクをつまみに、謎のロリコン談義を始めるふたり。

なんだろう。とてつもなく恥ずかしいんだけど。

「あの先輩」命ちゃんにフレアスカートをつかまれた。「私は先輩が好きなのであって、この人たちみたいにロリコンじゃありませんからね。いわばヒロコンです」

「それも意味わかんないんだけど」

とりあえず、飯田さんがアパートに住むことになりました。

場所は一階です。

☆
||

引越しというほどのこともなかった。

飯田さんの家はべつにそのままにしておいてもよくて、そのお家からパソコンとか愛用品を車に乗つけてきて適当に配置しただけ。

飯田さんのお家にも一応ついていったけど、ボクと同じような安アパートだったよ。

案の定というかなんというか、みんないなくなっていたけど……。

人にも会わなかった。

行きかうはゾンビばかりってね。

さしてお引越し完了ということで、ひと段落ついたあと。

ボクは飯田さんと話したいことがあるって言って、命ちゃんとマナさんには部屋に帰ってもらった。

ふたりきり。

ボク自身は飯田さんがいくらロリコンだとはいえ襲われる心配とかは考えてないけど。命ちゃんとマナさんが素直に帰ったのは、ヒイロウイルス感染者はボクに本質的には所有されていると考えている

からかもしれない。

そんな気はないけど、そうなってしまっているというか。

「飯田さん」

椅子に座って、ノートパソコンの設定をしていた飯田さんの背中にべったりとのっかかるボク。

なんとというか大きくて安心感あるよ。

ロリコンだけだね。

「おうふ。緋色ちゃん。私はロリコンなのだから、その技は効く……」

「あのね。いくつか聞きたいことあるんだけど」

「ん。なにかな？」

くるりと椅子を回転させ、ボクに向きなおる飯田さん。

ボクは適当にベッドに腰掛けた。

「えっと……、まず飯田さんの精神状態なんだけど、ボクに逆らえないとか、ボクの言うことはなんでも聞かなきゃとか思っていないよね？」
「うーん。特にそういうのは感じないな。しかしそれは確かめようもないと思うんだが。例えば、君は私の腕をあやつって自らの首を絞めるということはできるだろうが……、それは物理的にコントロールできるといふことを示すだけで、私の精神の自由とはなんら関係がない」

そう、そのとおり。

ボクが何を言ったって、そういうふうにはボクの無意識が言わせている可能性があるんだ。

でも、飯田さんのクオリアをボクは感じてるけどね。信じてるとも言う。

「ただ——」

「ただ？」

「君の動画を見つけたのはたまたまだとは思うんだが、ほんの少しなんとなく導かれるようにクリックした感じはしたかな」

「飯田さんに会いたかったからね」

「おもはゆいな。私も君に会いたかったよ」

かああああつ。って顔が赤くなる感じ。

くそう。ボクも照れくさいよ。

「あとね。もうひとつ聞いたかったことがあったんだけど……」

「ん。なんだい」

「その、ボクの配信を見てどう思った？」

「どうとは？ 普通に面白かったよ」

「ボクは、あのホームセンターで人間ってなんて自分勝手なんだろうって思ったんだ。でも、だからってみんながゾンビになれなんて思わない。それは雑すぎる意見だし……人間には人間の論理があるだろうから。人間の気持ち。感じ方。今のゾンビがあふれた世界をどう思ってるのか。そういうのが聞きたくて配信を始めたんだ」

「うーむ。緋色ちゃんがかかなり人外マインドしてるな」

「え？ そうなの？」

自分ではそうは思ってたんだけど。むしろ、すごく人間よりな考えというか。

だって、人間って、自分のことを棚にあげて、『人類滅べ』とか『人間なんて所詮そんなもの』とか言うじゃん。

それと何が違うの？

「まあ、緋色ちゃんの考えは置いておいて、ホームセンターでのみんなの行動は確かにエゴが強くあらわれてたかな。生死がかかってるから当然だろうと思う。おそらくみんなゾンビだらけの世界じゃなければ、ああいう結果にはならなかっただろう」

「そうだね。ボクもそれは思った。あのホームセンターでの出来事は、あまりにも特殊すぎて、それが人間だって言い切るのちよつとどうかなって思ったんだ。もつと、人間らしい人間に触れたかったというか。だから配信を試してみたの」

「ネットも物理も陸続きの世界ではあるわけだから、私はどちらも同じ人間だと思うよ」

銃を握った人間の顔。

憎しみや怒りでゆがんだ顔。

それらを思い浮かべると、配信でワイワイやってるみんなと同じ存在だとは思えない。

肉体的な接触がそういうふうにゆがめてしまうのかな。

つまり、暴力でどうにかできてしまうという距離感が人間をいびつにするのか？

「どれだけ手を伸ばしても触れられないという距離感は逆に救いなのかもしれないな」

飯田さんが手を伸ばす。

ベッドに座っているボクには手が届かない。

ボクも手を伸ばしてみただけど。やっぱり届かない。それはそれで寂しい。

マナさんが言うように、ボクはみんなとの摩擦もほしい。みんなとのつながりを感じたい。

だからボクは思っていたことを素直に告げることにした。

「あのね。おじさん……」

飯田さんは優しくうなずいてくれる。

「ボク、ピザーラお届けしたいんだけど」

「はっ？」

☆＝

「つまり緋色ちゃんは視聴者のぼっちさんに対してピザをお届けしたいと」

「う、うん。そういうこと。もちろん、ただの自己満足だってことはわかってるんだ。でも、ボクのことを好きだって言ってくれる人がおなかすいているかもって考えると、なにかしてあげたいなって思ったんだ。しないほうがいいかな？」

「触れられる距離に近づくとというのは、それだけ危険も増すということだよ」

「それはわかってる」

あのホームセンターのように、暴力が届く範囲に近づくとということとは、同じように人間の見たくない部分も見えてしまうかもしれない。

薄く引き伸ばされた繋がりがくらいが、一番洗練されていて人間の理

性を感じ取れる絶妙な距離なのかもしれない。

「ボクは人間にベタベタ触りたいだけのビッチなのかな」

「ロリビッチとか最高か」

「え？」

「あ、いや。真面目な話をすると……、君が好かれようと思ってそうするのなら、それは偽善だけれども、偽善も心のうちを見せずに一生抱えていけば善だというのが私の信条だな。飢えた人に対して、エサをやるような気分で食事を与えても、廃棄処分予定の弁当をただ与えるだけに過ぎなくても、その内心を見せずにただ施しを続けたら、その人は聖人と呼ばれるようになるだろうし、誰も傷つかないならそれでよいと思う」

「うん。ありがとう。飯田さんはやっぱりいい人だね」

「それぐらいしかとりえがないと言われたこともあるよ……」

いたたまれない。

でも、飯田さんの言葉でボクの意味はかたまった。

やっぱり、ぼっちさんにピザをお届けするんだ。完全な自己満足だけれどね。それに、ボク自身の人外ムーブも結構極まってきた感じがするから、ちよつと危険な感じもするけど。

ゾイの構えで。

「やるぞ」

「わたしも手伝おう」

「え？ 手伝ってくれるの？」

飯田さんはニヤリと笑った。

「こう見えて、仮面ライダーにはあこがれていたんだ」

★
||

ぽんぽん減った。

ああー、腹減った……。減ったよ……。

腹が減ると人間みじめになる。そのことを骨の髄まで痛感した。僕の自尊心はすりきれてミイラみたいにひからびている。

もう乾パンも食い尽くしたし、他の食糧も食べつくした。

水だけで既に二日過ぎている。糖分が足りなくてもともとガリガリだった身体はスカスカの寒天のようになってしまった。

水で空腹をごまかそうとした結果、下痢になった。

それでまた体力を奪われた。

六畳一間の小さな部屋には、僕以外の誰もいない。

こんなことなら、誰か友人を作るべきだったかもしれない。でも無理だっただろう。隣人と話をしたことすらない僕だ。小学生のころから陰キヤで、高校生のときから便所飯を極めていた。そんな僕が誰かと友人になるなんてできたとも思えない。

つまり——、結末はいつだって因果応報で。

自業自得としかいえないようがない。

わかっている。わかっていた。いままでは仲間とつるんだり、友人と馬鹿騒ぎやってるやつらを横目に見ながら、あいつらのようになりたくはないと思っていたから。

僕はあいつらとは違うという言葉を魔法のように唱えて、ちっぽけな自尊心を満足させていた。

中学生のころ、近所のツタヤで魔法少女のアニメを借りていたのをクラスメイトに見つかって、僕はさらしあげの対象にあった。あいつ変態なんだぜ。マジキモインですけど。

近づくなよロリコン。

へらへらと笑いながらクラスメイトの誰かが言った。みんなが同じように僕を嘲笑の対象とした。

べつにロリコンというわけじゃなかった。僕が見ていたのは魔法少女の中でも結構ハードなもので、ストーリーは練りに練られている、夢見る少女の物語というわけじゃなくて、普通の女兒が見ているようなアニメじゃなかった。

それはたぶんクラスメイトのうち幾人かは知っていたと思う。でも、あのとときの僕はみんなで弄るには最適で、誰もかばうほどの価値が僕にはなくて、わかりやすい攻撃してもいい対象として『ロリコン』という言葉は共有しやすいラベルだったのだろうと思う。

おまえたちが見ている人気のドラマと、僕の見ているアニメの何がそんなに違うんだ。

そういう憤りもあつたけれども、数の暴力にはかなわない。僕の口がいくらうまくてもきつと、大多数を納得させることはできなかつただろうし、そんなものを中学生男子が見るのは変だというみんな視線に僕は打ちのめされた。

僕は変態ロリコンになった。

だから、誰とも口を利かなくなった。

幸いなことに人間は、年を経るごとに、少しずつ独りでいることを許される。

小学生のころは集団下校が当たり前だったけれど、中学生からは独りで帰れるようになるし、大学生になればもつと孤独でいることができる。

僕はみんながくだらないコミュニケーションに時間を費やしている間に勉強に時間を割いていたから、それなりにいい大学に合格した。

素晴らしいことに大学生活では友達を作らなくても誰も何も言わない。先生が三人で組をつくってなんて言ってきたりもしないし、どうしてあなたは友達を作らないんですかねってことも言わない。親とも離れて暮らしたから、人付き合いについてもやかましく言われることもなくなった。

人間は本質的に独りじゃないかと思う。

だって、人は独りで生まれて、独りで生きて、独りで死ぬじゃないか。

人は独りでは生きられないなんて言う人がいるけど、ここで僕は現に、現実的に、厳密な意味で

——独りで生きている。

そのリアルに裏打ちされている以上、僕の論理は絶対的に正しい。

僕は独りで生きて、誰とも結婚せずに、老いて好きなアニメを見ながら死んでいくのだろう。そう思っていた。

でも僕の死は思っていたよりも早いらしい。避難場所に行くだけ

の体力は残っているとは思えない。

ふと、僕はあの殺してしまいたいほど憎悪したクラスメイトたちのことを思い出す。

僕のなかで捨象した級友どもを思い出す。

あのとときのクラスメイトはどこでなにをしているのだろうか。

みんなゾンビになってしまったのだろうか。

誰でもいいから人に会いたかった。

僕はひとりぼっちのまま死んでいく。

ひとりで終わっていく恐怖に心が引き裂かれそうになる。

僕は畳に爪をたてた。寂しくて心が痛い。

動画の配信で顔も知らない人とワイワイ騒ぐのは、きっと誰かと会いたかったからだ。

いままで要らないと決めつけてきたもの。

人は誰かが傍にいないと生きていけないんじゃないかと思ったからだ。

終末配信者のヒーローちゃんは、僕にとっては本当に救世主みたいなものだった。

誰とも繋がれなかった僕が、みんなといっしょになって馬鹿騒ぎしてるみたいで。

終わっていく世界が、廃園する遊園地みたいで。

最後に光りかがやいている観覧車みたいで。

寂しくて痛いほど寂しくて綺麗に思った。

おなかすいた。

畳の上をさながらゾンビのように這いずり、僕は最後の力を振り絞って立ち上がる。

「あーあ、これで終わりか……」

きつと、餓死は僕には耐えられないだろう。僕の前が崩

壊してしまう。

ゾンビになるのとどっちが苦しいかなんて、馬鹿な考えが思いついてしまう。

だから――、

僕がガスの元栓を開けても、しかたないと思ってください。

ある意味、これは最後の賭けなのかもしれない。

人生最後の賭け。

次第に充満していく一酸化炭素。

空気よりも軽いそれは畳につっぷしている僕の身体にゆつくりと染みわたり意識を混濁させる。

つまり僕は。

僕が死ぬ前に――。

一酸化炭素が部屋に充満する前に、見知らぬ愛らしい女の子が「お兄ちゃん♪」って 玄関からお邪魔してくることに、生死を賭したのだ。

・
・
・

マジで来ました。

ハザードレベル37

前回までのあらすじ。

まあなんやかんやあつて、視聴者さんのひとり【ぼっち】さんの下に向かうボクでした。

ちなみにドアの前でかわいらしく「お兄ちゃん♪」と呼んだのには理由がある。

ゾンビだらけの世界で、ボクも体験したことだけど、ドアベルを鳴らす存在は思ったよりも怖い。

まずはゾンビがまちがって押した可能性があるし、そうでなくても襲撃してきた人間が油断させるために、呼び鈴を鳴らした可能性があるからだ。

いや、誰も来るはずのないひとりぼっちな存在なら……、そもそも誰かが来るという可能性自体が低く、だから本能的に怖いということが考えられる。ボクがそうでした。

だから、あえての「お兄ちゃん♪」

こんなにもかわいらしい妹声で呼ばれたら、ほいほいドアを開けること必至。

ボクは相手を油断させるために擬態したのである。
恥ずかしくなんかない。

でも――。

「あれ？ 反応なくない？」

ボクはおかしいなと思って振り返る。

そこには、フルフェイスヘルメットをかぶり、黒いライダーズーツに身を包み、やたらとハアハアと息の荒い飯田さんがいた。夏の陽光で蒸れてるんだらうなあ。

なぜそんな恰好になっているのかというと、物理的に人に会うんだし、とりあえずボクを守るためらしい。確かに威圧感がすさまじい。そんな飯田さんが小首をかしげる。

まるで化け物がボクというか弱い生物を品定めしているようだ。

「ハアハア……」

「開けてみようかなー?」

「ハアハア……もうここまでできたんだし、緋色ちゃんの好きにするといいよ」

んー。

とりあえず、鍵開けちゃおうか。

もし鍵をぶっこわしたところで、ゾンビが入ってくることはない。

コミュニケーション（物理）を敢行しよう。

「お兄ちゃん♪」

ばきつ。

そんな感じで、ドアを無理やり開けてボクは中に入った。

とたんに感じる異様な臭気。

「くさっ」

なにこれ？

変なおい……。

そして畳につつぶしている男の人。

「緋色ちゃん。ガスだ!」

ボクと飯田さんはあわてて部屋の窓を開け放った。

幸いなことに男の人の意識は若干混濁しているものの、脈のほうはまだはつきりしていて命に別状はなさそうだった。

もしも一分でも遅れていたら大変なことになっていただろう。

うーん。

やっぱり見えないところで、こうやってゾンビになってしまう例もあるのかもしれないな。

それはそれでボクとしてはいいんだけど、やっぱり人間じゃないとボクの視聴者にはなれないから困る。

普通のゾンビだとキーボード打ちこめないし。

とりあえず、ボクは男の人をひぎまくらして回復するのを待つことにした。こういうときって頭を少し上げたほうがいいんだよね？

「緋色ちゃんのひぎまくら。ハアハア……ふともも」

飯田さんが何か言ってる。

確かにいまのボクはふとももが見えるくらいのミニを履いている。

それが飯田さん的には何かを刺激したらしい。

「されたい？」

「されたいです」

「考えときます……」

「ハアハア……」

★
||

柔らかなマシユマロというか、弾力のあるコンニャクというか、そんな得体のしれない、しかしまったく不快ではないなにかフワリとしたものに頭が乗せられている。

なんだろう——。

ガス中毒になっている僕は意識が混濁していて、手探りでそれをまさぐった。あたまのうえに手をもっていくようなイメージだ。柔らかな曲線。つるつるの吸いつくような手触り。

「ひゃ。ひゃん」

なにかすさまじくかわいらしい声が頭上から聞こえる。

仰向け状態だった僕は、ころりと転がりうつぶせに。

冷たくてすべすべしている。クセになる手触り。無限に触つていたい。

「あ、あのお……なにしてんの？」

「ん？」

そして覚醒。

僕が目を見開くと、そこには天使がいた。

いや——、そう形容せざるをえないほど現実離れた美少女がいた。

髪の毛は月夜に輝く絹糸のようであつたし、瞳は宝石のように輝いている。すべての顔のパーツがあるべきところにおさまり、いままで見てきたどんな女の子よりもかわいい。

小さくてかわいい十歳くらいの女の子。

外国人みたいな配色だけど不思議と日本人みたいな顔つきもして

いる。平均的——というべきなのだろうか。人類の完全平均値。黄金配率がそこにある。

こんなことを言うと、世の女子を敵にまわすだろうが。

この子が高級フランス料理だとすれば、周りにいた女子はイモの煮っ転がしだわ。

容姿差別？

うっせー。思想信条の自由だ。ばかやろう！

それと神様ごめん。

さつきロリコンじゃないとか独白してきたけど、僕ロリコンだったわ。

思想信条を変えてロリコンになるわ。

かわいすぎるだろこの子。ああ、かわいい。抱きしめたい。

でも触れると壊れそうで触れない。

禁じられた愛だわ。ボンジョヴィだわ。

ってかなんだ？　なんでこんな子が僕の部屋にいるんだ。

確か僕はガス自殺を図り——。

ああなるほど。

「ここは天国ですか。異世界転生の準備室ですね」

「異世界転生？」

「皆までおっしやられなくてもわかっております。えつと……容姿はオッドアイの超イケメンで、ステータスはとりま全マックス。不老はいいけど不死は逆にコワイしなしの方向で。能力は王の財宝と東方のキャラがもっている程度の能力を創造する程度の能力でお願いします」

「……あー」

なんだろう。美少女がジト目になっている。

そのなまあつたかい視線もまた心地よい。

「あとできれば、美少女だらけの世界がいいから、艦これとかの世界にいきたいな」

「あのね。ぼっちさんはまだ死んでないよ」

「えっ？」

「え？」

「もしかして、モニタリングですか？」

「ちがうって」

「それかドツキリ？　もしかしてゾンビだらけになったのもドツキリで……」

ほのかな期待感。ひとりぼっちどころかトウルーマンシヨウだったというオチ。

つまり視聴者のみんなに僕の生活は覗きみられていたという話。

もちろん人権侵害はなはだしいが、それでも僕が心の底から思い知った、畳をかきむしりたくなるような孤独感よりはマシに思えた。しかし、それはすぐに裏切られた。

「それも違います。普通にゾンビはうごめいているよ」

「そうですか……。あなたは誰ですか？」

「ボク？」

くるりと回転して、かわいい。世界が滅んでもかわいい。にこつと笑って、かわいい。ゾンビだらけでもかわいい。

「ボクは終末配信者ヒーローちゃんだよ」

速攻で信者になりました。

☆Ⅱ

ボクは飯田さんにも持ってもらうていたピザを受け取り、それを電子レンジにかけた。

はつきり言おう。ボクの料理スキルはクソ雑魚なめくじだ。ミジンコ並みだ。

世の配信者が女子力を発揮しておいしい料理を作っていたとしても、ボクにはそれはできない。

だけどき。

視聴者さんの前で、美少女なボクを作るんらいいでしょ？

ぼっちはさんはさつきから畳の上で正座をして神妙にしている。

もしかして隣りに座ったフルフェイスな飯田さんが怖いのかも。

「この人なんですか」と聞いてきたから、護衛って答えたけど、それで納得してくれたかな。

ボクは一見すればかわい小学生にしか見えないから、ゾンビだらけの世界を闊歩するだけの能力がないように思われる。

そうすると、ぼっちさんに変に思われてしまうかもしれない。威圧感すさまじい仮面ライダー状態の飯田さんがいれば、ああこの人がゾンビを追い払ったんだなって推測が成り立つから、それで相殺しようって考えです。

はい。そもそも会わないほうがいいって話ですね。でもいいじゃん。お父さんそれは言わない約束でしょ。

チン♪ と小気味よい音をたてて、電子レンジが鳴る。

どうやら終わったみたい。

「はい。ぼっちさんが食べたがってたピザだよ」

まあそこらのコンビニで冷凍されていたなんの変哲もないピザだけど、乾パンばかり食べてる状況じゃ、アツアツのピザはそれなりにおいしく感じるはず……。感じるよね？

「えっとこれを僕のために」

「うん」

「どうして?」

「えっと、ボクのフォローになってくれたでしょ」

「あ、うん。そういうえば……したような」

「ピザ食べたいって呟いてたでしょ」

「それだけのことで……」

「ボクうれしかったんだ。はじめてフォローしてくれて。はじめて動画配信見てくれて」

「だからピザを? こんな危険な世界を僕のために運んでくれたのか」

「ん。まあそんなに危険でもないんだけどね。飯田さんもいるし」

「ハアハア……」と飯田さん。

先ほどから部屋の隅っこで腕を組んで、一言もしゃべっていない。「そういうわけです」

ぼっちさんは愕然としているみたいだった。ピザを食べたいだなんて、そんなことを呟いたのがよほど黒歴史だったのか、顔を伏せて夏なのに冬みたいに震えている。

「……まだ冷凍状態だよ。ヒーローちゃん……」

「え。嘘？ マジで？」

そんな馬鹿な……。ボクの料理レベルはマイナス方向に振り切れてないか？

ま、まあいいや。通常時の料理は命ちゃんやmanaさんにもしてもらえばいいし。

ボクが料理を作る必要はない。

「ご。ごめん。ぼっちさん。ボク料理がへたくそで……」

「はは……固いな……歯がたたないわ……」

すみません。泣くほどまずかったですか。いたたまれないんですけど。

とりあえず、残りのピザをあたたためなおした。うーん。ピザつんつんするわけにもいかないし、あそうだ、ちよつと切り分けて食べてみるか。

ちよつとはしたくないけど、少し端っこを切り分けて食べてみる。

うん。おいしい！

さすがに温めるだけならボクでも余裕だね。さつきはちよつと失敗したけど。

「はい。大丈夫だよ」

「ありがとう」

☆Ⅱ

ピザを食べてもらったあと。

ボクは畳の上で、あぐらをかいている。まあ、いつもいつもぺたんこ座りだと疲れるんだよ。女の子だからかわいい姿勢ってあるかもしれないけどさ。

ちなみにスカートの構造上、あぐら状態でも案外パンツは見えますん。

なんとなく視線を感じるけど、この頃はそれもしようがないかなーなんて思い始めています。

はい。

「えっと、ぼっちさん。今日は満足してくれた？」

「うん。ありがとう」

「でき。こんなんじや足りないのはボクだってわかってるんだ。ぼっちさんにはいくつか選択肢があると思う。ボクはそれを全力でサポートするからね」

「どうしてここまでしてくれるの？ ただヒーローちゃんの動画を見ただけで？」

「ヒロ友だし」

「いつのまにかぼっちじゃなくなってたんだな……僕は」

また泣くし。

もしかしてボクって傷をえぐるのがうまいフレンズ？

ぼっちさん、その名のとおり人付き合いが下手そうだからな。

「どうすればいいか教えてほしい」

「あのね。選択肢としては二つかな。ぼっちさんはこのままこのアパートに住み続けるという方法があるよ。飯田さんにアパートの目の前にトラックをとめてもらっただけで、なかには食糧がたくさん入ってる。たぶん、ぼっちさんだけだったら数力月は持つんじゃないかな。たまには遊びにくるし……」

「もうひとつの選択は？」

「ぼっちさんがぼっちさんじゃなくなっちゃうけど、どこか人間がたくさんいるコミュニティに向かうのがいいんじゃないかな。大きなところでは町役場とかに集まってるみたい。ボクが安全かつスピーディーに連れて行ってあげるよ」

ボクとしてはどっちでもいい。

正直なところ数力月に一回食糧を供給するのはちよつと面倒くさいかもしれないけれど。

ボクの貴重な視聴者さんを失うわけにはいかないし。

そもそもゾンビだらけでまともな視聴者さんの母数が少ないし

……。

町役場に行つて、結局コミュニティが崩壊してゾンビになつちやうという結末も考えられなくはないけど、そのときはそのときでしかたないとも思つてる。

こう考えてしまうのも、ボクにとってはぼっちさんがゾンビになるのはべつにたいしたことじゃないと思つてるからかもしれない。

だって、ゾンビになつても最悪、ヒイロウイルスをぶちこめば復活できるんだし。

いやもちろん、その人にとってはゾンビになるのは嫌だろうなと思ふよ？

そのくらいはいくらボクでもわかります。

マグロはおいしいけどマグロ自身にとってはべつにおいしくもなるともないというのと同じ論理だ。土屋先生もそう言つてる。

でも、ゾンビになればちよつと死んじゃうだけで、耐久性抜群だし、パワーアップできるし、たぶん不死性がある程度は獲得するし、それになによりゾンビにこれ以上襲われることはなくなる。

いいことづくめじゃん。

そんな感じで、どっちでもいいかなと考えていた。

ぼっちさんは少しの間考え、告解する信徒のように口を開いた。

「僕はひとりぼっちだったんだ」

「うん。それはハンドルネームからそうだろうなとは思っていたよ」

「だから人は独りで生きられると思つてた」

「今でもボクつてわりとそう考えてるけど」

「でも、ヒーローちゃんが来てくれて考え方が変わったよ。人は独りで生きられるかもしれないけど、独りよりは誰かといっしょにいたほうが楽しい……こともあるって」

そうだね。

そのくらいふわつとした結論がボクたちにはふさわしいかもしれない。

ゾンビになつてしまうほどみんなに迎合しているわけでもなく。

本当の英雄のように独り孤独に戦うほどでもない。

ボクたちはゆるく連帯している。

それでいいんじゃないかなと思った。

「じゃあ、とりあえず町役場の傍まで送るね」

「お願いします」

☆Ⅱ

そんなわけで町役場までぼっちゃんを送り届けました。

もちろん、ゾンビに襲われることもない安全安心な旅路です。

去り際に、運転を飯田さんからぼっちゃんに代わってもらって、それからボクと飯田さんはトラックを降りた。

いつしよに来ないかって誘われたけど、正直なところボクはまだ怖いんだ。

あのホームセンターみたいに、ボクはゾンビよりも人間が怖い。

そんなところに送りこむボクもボクだけど、いまの距離感ぐらいがボクにはちょうど心地いい。

それが許されているのはボクがゾンビだからだ。

ボクにはぼっちゃんほどの勇気もない。

ただ、ぼっちゃんにはトラックの物資をあげたから、それをコミュニケーションに配ればそれなりの評価してもらえるんじゃないかと思う。

しきりに感謝されていたけど、ちよつと恥ずかしい。

さて、今日も配信しますか。

「にやはろー。今日も始まりました。終末配信者のヒーローちゃんだよー」

『にやはろー』『にゃんぱすー』『ヒロちゃんが今日もかわいい』『おまえのことが好きだったんだよ！』『オレはオレくんのが好きだぞ』『アッー！』

「今日するゲームはこれ。【ゾンビあなた】。いちおうFPSゲームではあるんだけど、対戦とかそういうんじゃないやなくて、ひたすらゾンビを撲殺しながら、ミッションをクリアしていくアクションゲームみたいな感じかな。銃も使うけどメイン武器は棍棒ね」

『またゾンビゲーかよ』『おまえがゾンビになるんだよ』『ゾンビゲーでハードゲー』『ハード……ゲイ?』『いつからホモの巣だと勘違いしていた?』『一発噛まれたら終わりのオワタ式ゲーです』

「さあ。始まりました。開幕ダッシュで研究者のもとに向かいます」
ヒロ友の一人が言っていたけど、このゲームはある意味オワタ式だ。

オワタ式というのは、一発でもダメージを食らうと死ぬゲームのことで、このゲームもそれにあたる。だってゾンビだしね。ゾンビに噛まれたら死ぬ。

どうあがいても絶望。

そんなの常識だ。だがそれが良い。デイモールト良い。

一発でも噛まれたら殺されるという緊張感は手に汗握る展開になるし、集中していないとすぐに落ちる。もちろん、再スタートはできるけど、死んだキャラは二度と生き返ることはない。

むしろ、リスタートしたときにゾンビとなって襲ってくるんだ。

「撲殺。撲殺う」

ゾンビの頭を陥没させながら、慎重かつ大胆に突き進む。

『ヒーローちゃんのエイム力関係ない系?』『撲殺天使ヒーローちゃん』『引きつつ攻撃するときのマウス操作はうまいな』『小学生のおててに握られるマウスが羨ましい』『なんていうか……その下品なんです……』『吉良がいるぞ』『おてて民は処せ』

おてて見られても問題ないよ。

ゲームは滞りなく進み、ひとまず研究者のところまで到達。

ガラスで隔てた安全なところで、プレイヤーはお使いを頼まれる。

「ゾンビものではこういうすべてをわかっています的な研究者っているよね」

『いるいる』『おるわー』『ウイルスの生みの親だったりするよね』『むしろ、ヒロちゃんを生みたいわ』『ヒロちゃんから生まれたいわ』『こんなかわいい女の子に生まれたかったわ』『現実のゾンビには黒幕がいなかったよ』『くろまぐー』

「ボク、ゾンビじゃないよ!」

いやゾンビだけどね。

まあ、黒幕がわかりやすい人間じゃないのは確かだよな。さすがに彗星をどうこうするような科学力はいまの人間にはないだろうし、たぶん自然現象というかそんなのに近いんじゃないかな。

「ねえ。みんなはゾンビってなんだと思う?」

『腐った死体』『あなたの妄想ではないでしょうか?』『彗星に乗ってきたバイオモンスター』『ジーザス』『地獄の釜が開いたせいで現世に押し寄せてきた死者』『ホモ』

「彗星が流れた日にゾンビハザードが始まったのは確かだよな。パンスペルミア仮説っていうんだけど、彗星が地球生命の起源とする考えもあるみたい」

『頭よしよしヒロちゃん?』『やっぱりジーザスじゃねーか』『ジーザス?』『恐怖のバイオモンスター』『ドレミファミレドミ?』『おっさんだらけの配信好き』『なんのこと言ってるのか全然わからん』『ゾンビも彗星由来の生命?』『つまりどういうことだつてばよ』

「つまり、ゾンビとはエイリアンであるという説だよ」

『宇宙ゴキブリ?』『エイドリアーン』『宇宙卵生みつけられちゃう?』『ヒーローちゃん。卵。ひらめいた』『無理無理無理産めない』『すぐ下ネタに走っちゃう子はしまっちゃんおうねえ』『やめろ。やめてくれ……』

「まあ、あの名作映画とはちよつと違うかもしれないけど、ゾンビが地球外生命体だとすれば、人間は初めてこの宇宙に独りきりじゃないと証明されたわけだよな」

『侵略されちゃってますよ』『イカ娘みたいにかわいかったらよかったんだけどな』『やっぱり幼女になるウイルスだったらよかった』『ふうむ。ゾンビに対してのシンパシーを感じる』『ヒロちゃんゾンビ説』『あ、あーつと。えつと。なんというかゾンビにはゾンビの考えがあつてさ。それがうまく人間に伝わってないというか、そんな感じなんだけど』

『βみたいな感じか?』『意思疎通できない系?』『ゾンビコミュ症説』

？』『ヒーローちゃんぼっち説』『僕もぼっち……』『仲良くしようね』『うん』『おまえらコメ欄でいちやいちやすんな』

「えっと、あ、ぼっちさんこんにちわ。今日もありがとう」

『やっぱおまえいらねえわ』『名前覚えられて羨ましい』『おまえはゾンビになってこい』『はは……』

「もう喧嘩しないでね。あと、ぼっちさん」

ボクは人差し指を口元に持って行って、

「あのことは、しいーだよ」

『なんだかわいすぎか』『え、なにがあつたの？』『夏休み明けのちよつと大人になったヒロちゃんなの？』

「フフ。秘密です！」

『ぼっちマジで頃||suあああ』『うあああああ』『パルパルパルパルパルパル』『妬まし』『ぼっち何があつた!?!』『えっと秘密です。ヒロちゃんがそう言うなら墓場まで抱えて』

『ヒロちゃんに何かされたい』『ヒーローちゃんの秘密を知りたい』
まあ、ぼっちさんについては、ボクがゾンビだつていう秘密がバレたわけじゃないから。

単なる超強い幼女が護衛を引きつれて、会いにいったつてただけだから、それがバレても問題ないと思う。

ただ、ぼっちさんだけ特別扱いすぎたかなつて気もするし、ここはちよつとお手当てをという考えです。

配信を終えたあとも、ぼっちさんがコメントでぼこぼこにされてたけど——。

ボクしーらない。フフ。

ハザードレベル38

「せんばあい」

「ん？ なに命ちゃん」

「おっぱい揉ませてください」

「開幕セクハラ！」

いきなりなに言ってるんだ、この子は……。

ボクは腕をクロスして胸のあたりをガードする。

なんか恥ずかしいぞ。

男だっという意識もあるけど、女の子だっという意識もあるし。

ともかく狙われてるってわかったら、守りたくなるのが人の意識だ。

「そんなに警戒しないでくださいよ」

「いや、普通するよね」

「じゃあ、先輩のとつくんとつくんをもう一度聞きたいです」

「なにを言ってるんだね君は……」

鼓動音を全国の皆様に聴かれた恥ずかしさは今でも忘れない。

だいたい女の子どうしてベタベタしすぎだと思うんですよね。

命ちゃんのなかでは、ボクはまだ男なのかもしれないし、それには少しうれしさも感じるけどさあ。

ボクって基本、見た目女の子じゃん。

もしかして女の子がいいの？

ジトー。

「だいたい、先輩が悪いんですよ」

「え？ なにが」

「飯田さんところっそり出かけたたり、わたしたちに内緒でどこかにいったかと思えば、視聴者助けに行ってたみたいですし。無防備を飛び越えてなにを考えてるのかって話ですよ。ゾンビだってバレてもいいんですか？」

「う」

バレバレでしたか。

まあ、確かに同じアパートに住んでるし、ボクたち以外の人間の気配は周辺にはいないみたいだし、命ちゃんはボクの配信をかかさず視聴しているみたいだし、それはしようがない。

でも、ボクにだって精神の自由といえますか、そういうものがあるんです！

「ゾンビだつてバレるようにはしてないし」

「情報が流れないようにせっかくバーチャルな感じにしたのに、リアル天使として機動しちゃったら、もう守れませんかよ」

「天使とかじゃないし。ボクは人間らしくやりたいようにやっただけ」

「やりたいようにやっちゃうタイプなんですネ」

「そ、そうだよ」

「わりと本能重視なんですネ」

「命ちゃんも同じでしょ」

「確かに」

命ちゃんはそつと溜息をついた。

「案外そのあたりはマナさんのほうがブレーキ効いてますよね」

「あの人は大人だからね。まあボクも年齢から言えば大人なはずなんですけど」

「最近の先輩は完全に幼女化してますけどね。なんですかあの『ボク』じゃない。フフ』って、かわいいすぎか」

「うう……。ボクじゃないっ！」

「かわいいすぎか」

「でも、ぼっちさんが助かったんだからそれでいいじゃん」

「先輩がそれでいいならいいんですけどね。私やマナさんを連れていかなかったのも、女の子は守るべきっていう先輩の男心でしょうし……」

う。バレてましたか。

まあ、そりやそうだよ。命ちゃんは大事な後輩で、ボクにとっては妹みたいな存在なんだ。そして——マモレナカタ。

いや、命ちゃんには意識があるから、完全に喪失したわけじゃない

けれども。

ゾンビになっちゃった。

そんな罪の意識がボクにはある。

「先輩。私がゾンビになったからって、そんなのたいしたことじゃないですよ」

「そうかな。一般的にはゾンビは意識がないように思えるし、今の命ちゃんに心や意識があるというのは信じてるけど……、そうなるかもしれないなかったんだよ」

「先輩……わかりました」

すくつと立ち上がる命ちゃん。

しなやかな体躯がすつと伸びて、まるで野生の美しい獣のようだった。

「デートしましょう」

「え？ うん……わかりました」

えっと、ゾンビバレとかいいの？

不用意に外を出歩くとか、ゾンビバレの第一歩な感じもするけど。

「そんなのどうでもいいんです」

いいんかい。

「視聴者様だつて言ってますよ。ゾンビとか世界の終わりとかよりヒロちゃんの後輩ちゃんがイチヤイチャしてる姿が見たいって」

「言ってるかなあ……」

「私もそろそろバーチャルな存在になろうかと思えます」

「え、命ちゃんもデビューするの？」

「先輩だけだと危なっかしくて見てられませんからね」

いやいや……。命ちゃんもボクのことになると暴走するよね。

ホームセンターでの命ちゃんのムーブってわりと危なっかしい感じがしたんだけど。天才なはずなのに、ボクに対しては妥協とか計算がないせいだ。

でも、そんなこともいえないのである。

なぜなら、ボクが自由にさせてもらっている以上、命ちゃんも自由に振舞うべきだつて考えがあるから。

それが、こころだつて思うから。

★
||

くだらない小説ほど、くだらない自己紹介から始まるものだと思う。

太宰の人間失格なんて、あれはダメな例の典型。

『恥の多い生涯を送って来ました』

『自分には、人間の生活というものが、見当つかないのです』

オマエが恥の多い生涯を送ってきたとか読者には関係ないし、今の時代ならブラバ確定だ。そもそもオマエは人間だろうが、人間なのに人間の生活が見当つかないとは何事だ。

なんて思う。

いや今でこそ使い古された出だしではあるが当時は画期的だったのだろう。

——例えばメロスが激怒したなんて何度同じような使い方をされたことか。

次が読みたくなるようなそんな出だしだったのだろうとは思う。技巧的な上手さは言うまでもない。

ただ、その精神性——というか。人間の捉え方が気に食わない。

自分を人間ではないと規定することで、「わたし」が宇宙にたつたひとりであるとか声高にわめいている。ここである人間というのは、世間とか社会とか、要するに人間総体のことであつて、具体的な生物学的人間のことじゃない。

孤独感といえはいだろうか。

子どもがお母さんから離れたときに、わんわん泣き喚くものといっしよだ。

おててをつなぎたい。

人肌のぬくもりを感じたい。

そんな素朴な願望だ。

だけど、それこそが——。

そのくだらなさこそが、太宰のぬめつとした「人間」に対する感受性であり、生暖かさともいうべきなのかもしれない。

その言葉の根源は、

——僕にかまってください

という一文にある。

たったそれだけのことを言いたいがために、300ページも費やしている。

太宰の小説は読んでも寂しさがある。

でも、ほのかに希望のようなものが灯っていて、それは人間という存在に対する作者の距離感だろう。

わたしという存在を極小にして、卑屈で、くだらなくて、いまずぐ死んだほうがよいようなものにして、そんな存在がどこかで救われることを信じている。

人間に赦されることを信じている。

人間に対して、そんなダメでどうしようもない自分がどこかで無限に受容されることを望んでいる。

そんな女神様みたいな人間がどこかにいると信じている。

信じるのは勝手だ。

人間が他者に対して何かを求めるのも勝手だ。

その各々の勝手さが化学的に混ぜ合わされたときに、わかりあえたという幻想が生まれる。寂しさで響きあっているようなもの。

こんなゾンビだらけの世界で。

いつ死ぬかもわからないような世界で。

誰かといっしょにいたかった。ただそれだけの理由。

わたしが——平岡鏡子と肌を合わせているのも、かような理由による。

★
||

「休憩室にエアコンあってよかったね。わたし汗かいたやつたー。あー、こころちゃんもタオルいる？ 汗かきっぱなしだと風邪ひい

ちやうよ」

図書館の片隅にある小さな休憩室は生活感に溢れている。

その休憩室にはたった二人しかいなかった。

つまり、わたしと彼女——平岡鏡子である。鏡子は、陰気なわたしと違い、クラスの中では比較的陽気なキャラで通っていた。まんまるでクリクリとした瞳。ふわふわとした髪の毛。ナチュラルメイクでそんなにけぼくもないけど、快活で明るく、美少女然とした女の子。

肌はつきぬけるような透明感。抱きしめたくなるような華奢な体躯。

瑞々しい肌が白いシーツの上に覗いた。

ああ、くだらない描写。わたしが編集だったら一瞬で没にする。

こんな小説的な、美少女描写になんの意味があるんだろう。ともかく、わたしが思うに彼女は『キレイ』だ。それだけでいい。それだけで。

キレイでかわいい女の子。

一方のわたし——太宰ころろ——は陰気なキャラだった。生まれてこの方、化粧なんかしていない。クラスの中ではいじめられているわけではなかったけれど、常に教室でひとり黙々と小説を読んでいるようなキャラ。プチ貞子とか呼ばれたこともある。陰気な本の虫だったわけである。

それがラノベとか漫画とかだったらまだみんなといくつか共通の話題ができたかもしれない。

でも、そんなことはなかった。

わたしが好きなのは純文学だったから。古臭くてカビでも生えそうなそんな趣味だったから。こころ菌が生えるとかいつて、小学生くらいの時にクラスの男子が騒いでいたけれど、わたしは特に何も思わなかった。

べつに純文学を読んでいる自分が高尚だとか偉いとかそんなことは考えたことはなかったけれど、クラスの男子は正直、客観的に考えてもくだらないアホさ加減だったし、物理的ではないただの中傷にな

んの痛痒も感じなかったからだ。

いないのといっしょ。

人間未満の存在。言ってみれば、海辺にでかけたときにふじつぽを見かけて、何も思わないのといっしょ。

ちよつと気持ち悪いかなと思つて避けたりすることはあつても、積極的に関わろうとは思わない。

あと、女子には別に苛められていたわけではないから、わたしは少なくとも精神的に逃げ場所があつた。

それはクラスの中心にいた鏡子のおかげだったのかもしれない。

鏡子は積極的に友達を作つてこなかったわたしにグイグイと迫ってきた女の子だった。クラスの委員長が先生に頼まれて仲良くなるとか、クラスの全員に好かれる陽気な『わたし』を演じるためとかそういうんじゃない。

単に人間が好きという自然なキャラクターなのだろう。

小学校から中学、高校一年になる今日までずっとといっしょにいたわけだから、もう十年以上付き合いがあることになる。それだけいれば、鏡子のキャラというものは、さすがに理解しているつもりだし、向こうもわたしのことをそれなりに理解しているはずだ。

誓つて言うが、こんなことになるまで、わたしは彼女としたことはなかつた。

一応は幼馴染にあたるのだろうし、それなりに仲がよかったが、趣味はまったく合わないし、根本的な思想が違う。

わたしが好きな太宰や芥川を貸しても、鏡子は五秒でダウンしてしまふし、鏡子が好きな隣国の王子様にわけもわからず愛される話とか読んでも、これシンデレラとなにが違うんですかと思わなかつた。

この小さくもないこじんまりとした町営図書館に閉じ込められてしまったのも、ほとんど偶然の産物によるところが大きい。

夏休みに入る直前、国語の先生がなにをとちくるつたのか文学作品の感想文を書けという宿題を出した。高校ではあるものの地元の公立のような立ち位置に近かつたから、ノリが中学校のままだったのだ

ろう。

わたしが何か貸してあげてもよかったのだが、鏡子はもつと短いやつを求めた。

ごんぎつねとかダメ？　って聞いてきたときには頭を抱えたくなったが、ともかく自分の感受性に少しでもひつかかるもののほうが書きやすいだろうと思ったわたしは、図書館に行くことを薦めた。

図書館は、人間が作り出した建造物の中でもとりわけ人工物という感じがする。もちろん、どんな建物であれ、人の手が加えられている以上は、人工物であるのは論を待たない。ただ、図書館は生活から切り離された空間だ。本で埋めつくされた空間は、それだけで人類が蓄えてきた知の重みを伝えさせてくれる。

人の、人による、人のための空間だ。

ただ台無しだったのは、鏡子はそういつた知の重みなんてものには興味がなく、図書館のバックヤード、つまり裏側が見たいということだった。

なんのことはなく、わたしがこの図書館の館長の縁者であることから、一日だけ休憩室に泊りこみたいと言いだしたのだ。

わたしのおじさんはどこかの役所に定年まで仕えていたらしく、そのあと天下りといったらいいか、この図書館長に収まったらしい。

本来は当然いけないことなのだが、こつそりと休憩室を使う分には問題ないと言ってくれた。

もちろん、その時は――、たった一日だけのことだと思っていた。

ゾンビハザードが起こるまでは。

★
||

セックスの経緯とか知りたいやつがいるかわからないが、一応書いておく。

何日も閉じ込められることになったわたしたちは、ひとまず図書館を閉めきりゾンビが入ってこないようにしたあと、すぐに休憩室の中にある食べ物をかき集めた。水は出たし、問題になるのは食糧だった

からだ。

おじさんは案外マメな性格だったのか、あるいはかわいい姪のために用意してくれたのか、冷凍庫の中にはタツパの中にご飯が大量に入っていた。

それとお菓子の類は大量にあった。

さすがに図書館の本があるスペースには何も無い。

どんなに切り詰めたところで一週間くらいしか持たないだろう。

そんな予期に、わたしが陰鬱な気持ちになっていると――。

「ねえ。こころちゃん」

「なに鏡子」

振り向くと鏡子がポックリーという例のあの細長い棒状の食べ物を口に加えていた。

「なに?」

「むー」

「ほんとになに?」

カリカリとハムスターのように食べたあと、鏡子は抗議めいた声をあげる。

「ポックリーゲームだよ。知らないの?」

「知らない」

「ポックリーを両端から食べていくゲーム」

「それになんの意味があるわけ?」

「キスしちやいそうでドキドキするでしょ」

「女同士でそんなのして何の意味があるの?」

「わたしはこころちゃんとしたらドキドキするけどな」

「は?」

意味がわからなかった。

いや――、違う。本当は心のどこかでわかっていたと思う。

彼女はよくマリみてみたい、文学的に見ればエスと呼ばれる――
今で言えば、百合小説とかも好きそうだったから。

ただ、フィクションはフィクションとしてリアルはリアルとして峻別できるものだし、百合小説が好きだからといって百合というわけで

はない。

性癖として女が好きというのは、一足飛びな結論だと思っていた。エス——シスターの頭文字からとったらしい百合小説の前身は、あくまで擬似的な姉妹関係にほのかな恋愛感情を混ぜたものであるし、どちらかといえばプラトニックな関係が求められる。

百合も同じく——、基本的にはベタベタしたものじゃない。女心というのは、わたしにだってあるし、それはふやけたガラスのようなものだ。

柔らかなガラス。

だから、恋愛感情というものを突き刺すように形にしない。情動を放射しない。

オイルヒーターみたいにやんわりと伝わるような観念だと思っ
ている。

つまり、書いてみても——、よく伝わるかはわからない。

わかりやすいような告白とか、そういうものはなくて——。
単に、ちよつと唇と唇が触れてしまった。

追突事故のようなものだと思う。

結局、わからないまま押し流されてしまったというのが一番、答えを
表しているかもしれない。

わたしが彼女としたとしても、わたしのなかに彼女を好きだとい
う明確な感情は生じなかった。

そもそもわたしは情動で生きるタイプではない。男の殺人はどこ
までいっても計画的で女の殺人はどこまでいっても情動であるとか
いう偏見めいた記述をどこかで見かけたことがあるが、それも所詮は
個性によって生じる偏差でしかないだろうし、わたしはわたしであ
る。

人が人を好きになる話は文学でもいくつもあるけれども、それは異
世界の出来事と同じであって、わたしの現実の中では排斥されてい
る。

きっと、わたしはそういうものとは無縁な読者でいたいのだと思
う。

だとしたら、わたしは彼女にレイプされたのだろうか。そうではない。あれは合意の産物だった。

人間が生身の身体で生きていて、その人なりの人生を送っている以上、きつと純粋な読者というものも存在しないのだろう。

★
Ⅱ

「どうにか、なる」

彼女が太宰の『葉』という短編と同じような言葉を布団の中で呟いたとき、わたしは思わず笑ってしまった。

「なにがどうにかなるの?」

「ゾンビハザードも終わって、みんな元の生活に戻って。私とこころちゃんはいつしよの大学に通って。幸せに暮らすの」

「どこにそんな根拠があるの?」

「根拠なんかないよ。願望」

「夢見る少女じゃいられないんだよ」

「わたしたち少女だよ。まだ高校一年生なんだよ」

「でも、世の中はゾンビで溢れてる」

「それもきつと警察官の人とか、自衛隊の人とかがやつつけてくれるよ」

「ひとまずのところ……、食糧がなくなりそうなんだけど、それはどうにかなるって言えば、どうにかなるの?」

「どちらかといえば、マッチ売りの少女のような感じじゃないだろうか。」

「どう見ても死に際の幻に近い。」

「もー。夢がないな。こころちゃんは」

「わたしには現実がないんだ」

「どちらかというね。」

「そんなどうでもいいことはどうでもいいとして——。」

食糧がないというのはとてもまずい。人間には幻想が必要だし、魔法も必要だとは思いますが、しかし、とある宗教家も言っているではない

か。

人はパンのみに生きるにあらず。

パンだけで生きているわけじゃないってことはパンはいるってことだ。

おわかり？

いくら、鏡子がゆるふわの魔法少女になれそうな精神をしていたとしても、食糧がなければ生きていけないことくらいはわかっているはず。

いままで一週間以上。

籠城生活をしてきたわけであるが、まったくもって進展してこなかった。

誰も助けにこなかった。

だったら、自分達でなんとかするしかない。

陰キャのわたしがそう決意するぐらいには現実的に差し迫っている状況だというのに、鏡子はいいかわらずのほほんとしている。

「ゾンビ倒すのって辞書がいいかな？ 前々から思ってたんだよね。辞書って鈍器に最適だって」

「あのね。そんなリーチが短い武器だと殺されるよ」

掃除ロツカーの中にモップがあったから、その柄の部分はどうにかこうにか取り外し、槍のようにしてみた。

それをふたつ作り、ふたりで近くのスーパーまで突貫した。

事実。

ただの事実として。

平岡鏡子の掲げた幻想主義は、脆くも現実の前に崩れ去った。

白くておわんのような彼女の肩には、ゾンビの歯型がついていた。

スーパーはほとんどの食料品が腐っていて変な臭いがしたし、かろうじて持ち帰ってきたのは、キャラメルを数個ほど。

鏡子のもとから白い肌をさらに青白くさせて夏だというのに布団の中でガタガタ震えている。

ゾンビに噛まれた人たちがどうなるかはインターネットで調べて知っている。

例外なく、一日から数日のうちにゾンビになる。
物言わぬ軀として、人を襲うようになる。

「どうにか……なるよ」

この期におよんで。

彼女は――、平岡鏡子は笑いながらわたしに言うのである。

わたしは彼女に恋をしているわけではない。

わたしは彼女にいささかも心を砕いているわけではない。

それなりに友達だったし。

それなりに同じ時を過ごしたし。

それなりに触れ合ってもきたけれど。

肌を合わせたのは事故のようなもので、なんの心の交わりもなかつ

たはずだ。

つまり、わたしは生まれてこの方、誰も心の内側に誰かを入れたこ

とはなかったし、孤独のうちに生きてきた。

なのに。

「泣かないでこころちゃん……」

「わたしは泣いてなんかないっ!」

なんでこんなに心が張り裂けそうなんだろう。

なんでこんなに心が痛いんだろう。

「こころちゃん。元気だして」

「あんだこそ元気になりなさいよ。ゾンビウイルスなんかには負ける
な」

「うーん。それはちよつと無理そうかな……。すごい勢いで力が入ら
なくなってくるの。意識もぼやけてきちゃってるし。痛みがないの
が救いかな、でももう、えっちできなくなっちゃったね」

「そんなこと……」

「ごめんね。こころちゃん……。私、わがままだったよね」

「なにが」

「だって、こころちゃんはべつにえっちとかしたくなかったでしょ。

私のことも好きでも嫌いでもなかった」

「そりゃ……。そうだけど」

「そこは嘘でも好きでしたって言って欲しかったな。でも、こころちゃんらしいかもね。素直で」

「わたしはわたしにしかねないから」

「みんなそうだよ。せめて最後までいい自分らしく生きていたいんだと思うよ。こんな世界になっちゃったから、私、チャンスだっと思っちゃったの」

「チャンス？」

「もつと、こころちゃんに近づきたかったの」

「わたしなんかと？」

「こころちゃんはキレイだよ。かわいくて小さくてすごく好き。長く黒い髪の毛も好き。本をめくっているときの指先も好き。本を読んでいるときの静かな様子も好き。わたしなんかとか言っちゃダメ」
「でも……。わたしは他人の心がわからない。自分の心すらわからないのに」

「こころちゃんは文学少女でしょ。きつと、私なんかよりずっと、いい言葉を当てはめることができるよ。だから……」

作者がこのときどのような気持ちだったか——答えなさい。

自分を好きだと言ってくれた同性の女の子がもうあとわずか死にゆくときの気持ちを答えなさい。

「ころして」と願われたときの気持ちを。

答えなさい！

いくら考えても答えはでない。

青に染まっていく顔。

この世界のゾンビは腐っているようなやつもいるが、ほとんどは死蟻のように人形めいている。

きつと、鏡子もきれいなまま動き出すのだろう。

少女の姿のまま永遠に彷徨い続けるのだろう。

わたしは、どうしたらいいだろうか。

いつそ、人間でいるときに、彼女をひと思いに殺すべきなのか。

それとも、わたしもいつしよに死ぬべきなのか。

生きるべきか死ぬべきかなんて、バカらしい問いかけだと思ってい

た。

けど、今なら、その意味が満腔を通じて理解できる。

わたしは結局、選んでこなかった人間なんだ。現実から逃避して虚構の世界に逃げこんでいた。遊びで生きてきたようなものだ。ずっと不真面目に生きてきたようなものだ。

そんな人間が、本当の人生を予習も復習もなく生きてきたわたしが、答えを出せるはずもない！

わたしは休憩室の扉を閉めた。

ここでもわたしは逃げたのだ。

そのとき――。図書館の扉が大きく開け放たれる音が響いた。

☆Ⅱ

「は？ 女の子がいるんですけど」

怯えた様子でこちらを伺っているのは命ちゃんと同じくらいの年頃の女の子だ。

黒髪ストレートが肩口まで伸びていて、どことなく幼げで陶器のように綺麗。

シャープな美しさというのかな。

エミちゃんを大人にしたらこんな感じになるだろうなって感じ。

化粧とかしてないのに、ものすごく整ってるせいで、化粧とかいらなさそう。

一言でいえば、美人さん。

「先輩。中に人間がいる可能性もあるっていったじゃないですか」

「だって、外はゾンビだらけだったし」

そんなところに人間がいるとは思わなかったんだもん。

やっちゃったもんはしょうがない。

「あ、あの、あなた達は何？ ゾンビは……」

「ゾンビは入ってこないよ。ゾンビ避けスプレーを開発してるからー」

もう投げやりモードなボクです。

そもそもゾンビさんが傍らにいるのに、言い訳もクソもないというか。

どうせ言い訳してもこの状況を取りつくろうだけの理由なんてないというか。

命ちやんなら何かうまい言い訳が思いつくかもしれないけど、この子はボクがいると、基本なにもしない子だからね。

先輩がしたいようにというのが基本スタイルというか。そのため、ボクがなにか行動を起こすのを待っていることが多いんだ。

「さて。そんなわけで、ボクたちはゾンビには襲われません。君も含めてね」

「は、はあ……」

「嘘じゃないのはわかるよね。ご近所さんみたいにフレンドリイに肩を組めたりもするぐらいだからね」

ポンポンって、そこらにいたゾンビの背中を叩き、ボクはもう一度彼女に向き直る。命ちやんがどう思っているかは知らないけれど、ボクは彼女をゾンビに襲わせたりするつもりはない。

最近のボクはわりと気分がいいんです。

「あの！　じゃあ……解毒剤は持ってますか？」

「解毒剤って？」

「友達がゾンビに噛まれたんです」

「あー。なるほど」

「このご時勢だし、よくあることだよな。」

うんうん。よくある。

「あるといえばあるかなー」

なにしろヒロウウイルスをぶちこめば一発だ。

でも、問題はヒロウウイルス感染者は漏れなくゾンビだという事実。そこらにいるゾンビとは違うかもしれないけど、少なくとも人間じゃないような感じ。

「とりあえず患者さんのところに連れてってください」

「いいんですか先輩。この人は敵ではないですけど味方でもないですよ」

「いいんだよ」

なんとなく命ちゃんを助けられなかった代償行為なんていえない。

「先輩の行動理念ってわりとガバガバですよ」

「そ、そんなことないよ」

「まあ……いいですけど。それもまた先輩のしたいことなんですよ」

「うん」

★
||

ご都合主義の神様というやつは、小説ではご法度とされている。

デウス・エクス・マキナ。

機械仕掛けの神様が、物語上のいろんな矛盾を、神様のせいだからという一言で解決するアレだ。

そんなの夢落ちとかと同レベル。

プロットもクソもない。

でも、現実というやつはいつだってそんな都合のいい奇跡も確率的には存在するし、ありえるという話なんだろう。

図書館の扉を蹴破ってやってきたのは、そんな神様めいた美貌を持つ少女だった。赤ん坊のように肌がすべすべの、白い卵のように小さな女の子。

小学生くらいに見える。

彼女は鼻歌まじりにここにやってきて、単に気晴らしにあるいは、人類の積み重ねてきた文化をつまみ食いするために来た天使のようだった。

それぐらい現実離れしている存在。

傍らにいる女子高生姿の女の子は、まだ人間っぽいといえたけれど、彼女は本当に幻想の存在のように曖昧だ。

「あー、うーん。これはゾンビウイルスに冒されていますねー」

どう見ても適当な触診をしたようにしか見えないが、彼女がゾンビに襲われないのはその場で目撃している。

彼女の自己申告が正しければ、ゾンビ避けスプレーなるものを開発した天才科学者なのだろうし、適当すぎる触診もきつと意味があるのだろう。

「いやあ。うーん。どうしようかなー」

くるとこちらに振り返り、

「あの……うーん。ボクの見立てだと、非常に高度な治療が必要になるみたいなんだよね。だから、その、ちよつと外に出てつてもらえるとうれしいな」

「はい」

意味がわからなかったがわたしに拒否権はない。

今にも死にかけている鏡子に治療の可能性があるなら、奇跡に賭けるしかない。ゾンビに襲われないという奇跡を体現した目の前の白い少女なら、もしかしたらという思いもある。

地獄で蜘蛛の糸を垂らされたカンダタもこのような思いだったのだろうか。果てしなく細く頼りない糸。

けど——。それしかないのだ。

わたしとともに、高校生くらいの少女がついてきた。

彼女は監視役なのかもしれない。

しばらくは無言のままだ。

彼女は休憩室への扉を背にして、まるで天使を守るガーディアンのようにだった。

「あなたは、彼女のことを好きなんですか？」

彼女とは平岡鏡子のことだろう。

わたしにはわからない。そういう感情を名づけることができなかったから。

「わかりません」

「でも、ゾンビにはなってほしくないんでしょう」

「それはそうですけど」

「だったら、それなりに執着しているということになる」

「そうなんでしょうか」

「まあ、私が勝手に推測してるだけですけどね」

「確かに」わたしは言う。「わたしは彼女といっしょに本を読みたいと思ってきました」

独りで読むというのが読書の基本だけれども。

たまには、誰かといっしょに読みたいと思っていたのも事実だ。

その意味では、わたしは彼女に執着している。

ゾンビは本を読めない。わたしは鏡子といっしょに本が読みたい。だから、生きていてほしい。

好きか嫌いかすらわからないけれど、それだけは確かだ。

☆Ⅱ

ゾンビウイルス的な何かに冒された人を人間のまま生還させることができるのかというと、わりとできる。

というか、できちゃったという感じが一番近い。

傷跡を舐めたりすることもなく、そつと手を触れて、ちよつとゾンビウイルスに沈静化してもらおう。

そうすると人間が本来持つてる治癒力で回復してくる。

エミちゃんの経験が役にたった。

ゾンビになりきっていないなら、ボクの手でどうとでもなる。

青白かった顔には血の気が指し、この子は人間としての生を取り戻す。

ヒイロウイルスにも冒されていないから、彼女は人間のまま。

でもまあ抗体ができたわけでもない。

ゾンビウイルスに命じたのは、アポトーシス。つまり自壊だ。

今のボクだと目の前にいる人間にしかできないけれど、いずれレベルアップしたらもっと広範囲にできるようになるかもしれない。

「だけど、ゾンビが減るのもそれはそれで問題かな……」

だって、ボクはゾンビで、人間じゃない。

ゾンビが減るってことは『ボク』が減るってことでもあって、それはボクの生存に深く関わる。

そこまで人間に譲歩しないといけないのかな？

そこまで人間に寄り添わないといけないのかな？

人間は好きだけど。

ボクはゾンビで人間じゃない。

わからない。

少しの間考えてると、高校生くらいの女の子はうつすらと目を開けた。

「あ。天使様？」

「ハローワールド。でもボクは天使じゃないけどね」

そのあと、文学少女とゆるふわな女の子は、いつしよに脱出した。

夕暮れ時のすべてを溶かすような色合いのなか、彼女達は特に見つめあうこともなく、触れ合うでもなく、でもいつしよの方向に向かって歩きだした。

お決まりのパターンだけど、ボクはゾンビたちを退けてふたりを町役場に送り届けたわけだ。

彼女達は特に生活に必要な雑貨を持っていくことは出来なかったけど、その代わり人間がいままで作り上げた叡智の結晶を持っていた。

つまり、本。

たくさんの本をリュックいっぱい詰めていった。

「うーん……先輩が人間に甘すぎる気がします」

命ちゃんは役場にふたりが保護されたあと、帰り道でそんなことを言った。

「そうかな。ボクとしてはきわめて公平にジャッジしたつもりなんだけど」

「彼女達は何もしてないですよね」

「そうだけどき……でも、人間が減びちやったら新しい本も生み出されなくなっちゃうよね」

ボクとしてはそれが不満なんだ。

だって、こんなにもまばゆい光を放っているクオリアの結晶だよ。ボクの手元には、報酬としてもらった小さな本の断片がある。いまままでに書いていた彼女の日記がUSBの中に入っている。

図書館のパソコンで見せてもらったけど、柔らかなガラスのようで、とてもきれいだった。ふやふやであやふやだけど、それでも言葉の力で削りだそうとしたクオリアの欠片だ。

とてもキレイで、こんなにも価値があるものが永久に消え去ってしまふなんて、嫌なんだよ。それが理由だ。

「まあ、私のスタンスは今も昔も変わりません。先輩がそれでいいなら、それでいいです」

「だとしたら、ボクは選択する」

本よ、あれってね。

遠い未来に向かって、ボクは言葉を投げかけた。

ハザードレベル39

きみはまだ本当のキョンシーを知らない！

突然だけど、ボクはキョンシー映画も好きなんだよね。

キョンシーを知らない？

またまたく。嘘でしょ。

え、マジで知らないの？

え、いや、うそ。やだー。

キョンシー知らないのが許されるのは小学生までだよww

いやいや草を生やしている場合ではない。

ゾンビ映画スキーとしてはキョンシーも捨て置くわけにはいかな
いんだ。

なぜなら、キョンシーとゾンビって共通項も多いからね。

知らない人のために説明しておこう。

|||||

キョンシー

中国の死体が動き出して人を襲うようになったアヤカシ的存在。
ゾンビというよりは実は吸血鬼に似ており、光に弱い。もちごめに弱
い。位牌で見えなくなる。息を止めてる間は人間の姿がみえないな
どなどいろいろな制限がついている。しかし、噛まれたり傷をつけら
れたりするとキョンシーになってしまうところや、理性の削ら
れ具合は絶妙にゾンビに近い。日本で有名になったのは幽幻道士と
霊幻道士からである。

|||||

ちなみにボクとしては幽玄道士のほうがライトでお勧め。

テンテンのかわいさに圧倒された視聴者さんも多いはずだし、そも
そもキョンシーも手をつきだして、ボムンボムンってジャンプしてく
る姿がなんかコミカル。

それと、キョンシーのいいところって、きつと『息を止めてる間は

襲われない』という設定の妙にあると思うんだよね。

ああ、もうたまらねーぜ。

キョンシーのことなら無限に語れる自信がある。

テレビの前で、テンテンといっしょになって息を止めていた子も多
いんじゃないかな。あ、もちろんオンタイムではなくてちゃんと借り
てきて見た系です。後追いつてやつです。

そもそもロメロゾンビも息が長い作品だしね。

「そんなわけで、今日は中国ゾンビ2やっていきます」

『熱い開幕キョンシー語り』『おまえ実はおっさんだろ』『でもテンテン
がかわいいのは同意する』『ヒロちゃんアヒル踊りやって』『ゾンビに
なるよりはキョンシーのほうがマシかな』『2なのに1がないぞ』
「ぐわっぐわっ。うそだよ。やらないよ！」

『はいかわいい』『かわE』『素敵抱いて』『鳥になれ』『オレの人生はゾ
ンビ時々キョンシー。いいねっ！ いい人生だよっ！』『それって人
生終わってないか？』『これファミコン？』

「ファミコンだよっ！ このゲームはアドベンチャーパートとアク
シオンパートにわかれてるんだ。まずはアドベンチャーパートから
だね」

ドラクエ3とかの画面を思い出してもらおうとわかりやすい。

町とかの様子が見下ろすかたちで描かれている。

画面中央にはドット絵の主人公がいて、それを動かす感じ。

最初はアクション性はないので、ボクの指裁きはまったく関係がな
い。

関係があるのはあふれ出るキョンシー愛だけだ！

『なにこれノーヒントかよ』『全部必要なアイテムだぞ』『詰みゲーの詰
みゲーたるゆえん』『ていうかテンテンは？』『テンテンはお寺でケー
キねだつてくるビッチ』『あたりまえだよなあ』

「いまの時代は便利になったよね。ちよつと検索すればすぐに答えが
でてくるんだもん。まあボクの場合は一マスずつ調べたけどね！」

『やだかっこE』『狂気を感じる』『ヒーローちゃんやつぱりゾンビ説』
『ゾンビでもない』一マスずつ調べるなんてできねえ』『さくさくプレ

イだな』『もしかしてヒロちゃんRTAしようとしてるの?』

「あ。うん。そうだよ。今日はRTA……つまり、リアルタイムアタック中なんだ。世界新を狙ってやるぜ!」

『かっこかわE』『世界一位走者ひとり』『おいやめろ』『実際問題、世界滅びかけでRTAとか……そのとても個性的だね』『個性的とか人間味って言葉をつけたらどんな罵倒も許される説やめろ』『でもかわEだろ』『変な言葉が流行ってるな』『ヒロちゃんがかわいくて僕うれP』『天使なのはほぼ確定』『あー。この子がヒロちゃんかあ』

「初見さんいらっしやい。楽しんでみてってね」

流れていくコメント欄を横目にボクは必死にキャラを動かしていく。

RTAに必要なのはチャートとブレないところだ。

チャートというのは、まずこれをやって次にあれをしてという必要な行動を順番に書き記したものだ。

「えっと、次はこうして……はい。ここで稼ぎに入ります」

塔みたいなどころではキョンシーが左右から出てくる。

キャラから見れば、前後ね。

一体ずつだから焦らなければ問題なく処理できる。

稼ぎがしやすいし、なによりここで二十体倒すと必要アイテムがでてくるんだ。

リズムカルに倒していかないかね。

前。後ろ。前。後ろ。

前後。前後。前後お。

『ようやく戦闘パートか』『チャートは書いてるの?』『キョンシーぴよんぴよん跳ねてるな。これがオリジナルキョンシー……』『わりと難しかった覚えがあるんだがなあ』『誰もつつこまないけど、なんでテンテン操作できないわけ。はー、つつかえ。僕はテンテンが操作したかったの!』『お前はスイカ頭だろ』

「チャートは書いてるよ。キョンシーかわいいよね。ぴよんぴよん跳ねてるのがなんかいいの」

椅子の上でちよつとだけ跳ねてみる。

もちろんコントローラーは握ったままだ。世界新がかかっているからね。

『かわいいのはお前だ』『ああキョンシーがびよんびよんするんじやあ』『椅子の上でちよつとだけびよんびよんするのかかわいい』『この動き……トキか』『誰か下のほうだけ隠して今のところを五分間くらい引き伸ばして』『なんに使うつもりなんですかねえ……』

なにに使うつもりなんだよ。いやほんと。

でも、いまはそんなことより操作に忙しい。

世の実況者は実況しながらRTAを狙ったりする猛者もいるらしいけど、さすがにそれは難しい。手癖で何とかなる部分はあっても、どうしても頭を使う部分はあるから。

「えっと、タイムは犠牲になるけど、ここから賭博屋に向かってお金貯めるね」

ちなみに賭博屋でやってるのはいわゆるサイコロ丁半。

偶数と奇数。

そのどちらかかを当てるゲームだ。

でも、さっきの稼ぎで運があがっているボクは確実に勝てる。

『逆境賭博少女ヒーローちゃん』『倍プッシュだ！』『なんで勝てるの？』

目押しなの？』『運がMAXだと百パー勝てる』『なんだよ……結構あたんじゃねーか』『ぎわざわ……』

「で、稼いだお金で武器を買ったり防具を買ったり」

このあたりは普通のRPGに近い感じだね。

ただ、ボスごとに弱点属性があるから、時短のためには必須となる。

「ここからは戦闘三昧だからね。眠たいヒトは寝ててもいいよー」

『あー、このレトロゲーが詰みゲーと呼ばれる原因は……』『えっと、ずっとこんな調子なの？』『アリアハンでレベルを上げ続けるみたいなの』『確かに眠くなってくるな』

「いつもここらで眠くなってくるんだよね……」

『わかるわ』『ゾンビでも眠くなってくるわ』『ゾンビニキは成仏しろ』『変わらない戦闘シーン。色違いのボス。ほとんど変わらないスクロール画面』『もうこうなったらヒロちゃんなんか面白いこと言っ』

「え……おもしろいこと？ うーん」

いきなりのフリっていうのにはボクは弱い。

そもそも機転がきくような性格でもないし、あふれ出るチート能力でなんとかなってるけど、考える力みたいなのはほとんど変わってないしなあ。

「えつと……後輩ちゃんがそろそろ参加したいって言ってるんだけど、みんなはどう思う？」

『ふあ。マジで？』『小学生よりもっと小さい女の子？』『後輩ちゃんはどう考えても高校生くらいの子だぞ。夜這い配信の視線の高さでいたいわかる』『ヒーローちゃんの身長が142センチだとすれば、後輩ちゃんは155くらいじゃないか？』『オレ君の分析力が少し怖い』『おねロリとか最高かよ』『ヒーローちゃんはちっちゃい先輩なの？』

うんうん。

わりと好評のようだ。

命ちゃんが配信に参加してくれるのは、この行為自体に賛同してくれているみたいでうれしい。

命ちゃんがみんなに受け入れられるんだったら、それもうれしい。

命ちゃんって、べつに世界が滅びてもいいと思ってる節があるし、ボク以上に人間不信があるからね。

みんなが友達になってくれればいいなと思ってる。

「さて……いよいよ大ボスです」

『わりと早いな』『なにこのグチャつとしたアレな姿は』『強いのか？ あ弱いのか』『なんだこれ端に追い詰められて連打されとるだけやんけ』『くっそ雑魚な大ボス』『おいおい瞬殺だよ』『ダンジョンの奥まったところにいるだけのただの雑魚』

「あは。まあそうだよな。このボスはぶつちやけ弱いよ。ここまで来れる人なら楽勝なんじゃないかな」

『ようやくエンディングが見れるんやなって……』『甘いな』『おいおいパーティーはこれからや』『ふあ？ なんやこれ』

そう……。このゲームには四人のプレイヤーキャラクターがいる。

そのうちのひとりが終わったただけだ。

そして、まだ三人のプレイヤーが未到達のまま残されている。

この意味わかるな？

『うそだろ。全クリ……するのさ』『いやああああああ。またあの作業を見せ続けられるのいやああああ』『SAN値ゼロ』『ヒーローちゃんの瞳が深海の魚のような腐った目に』『ヤンでるヒロちゃんイイ……』『みんなクリアしないとテンテンに大嫌い宣言されてて草』『テンテンが悪女にしか見えない』

「さあ……絶望を始めよう」

さすがにカットします。

ナイスカットという声が聞こえた気がした。

そして、それから三倍ほどの時間が経ち、ようやく訪れるエンディング。

そこには文字で書かれている。

都に修行に向かった四人を見送るテンテン。

バイバイ。みんな帰ってきてね。

『ふあ。おま……ちよ……そのもう少しなんとかならんかったのか』『ヒーローちゃんが真っ白に燃え尽きてる』『テンテンに踊らされるだけのゲームだったな』『幼女の言うことを聞く幼女……』『バカゲーすぎる』『次はスーパーモンキーをよろしくお願いします』『おいやめろ』世界新は出なかったけど、達成感があったよ。ちよつと疲れたー。

※

「とても」終末配信者ヒーローちゃんを語るスレ「かわE」

【自己紹介】の頃。

1 : 名無しのファン : 20XX (土) XX : XX

終末世界を切り開く希望の光。小学生配信者ヒーローちゃんにつ

いて語ろう。

2 : 名無しのファン : 20XX (土) XX : XX
隣ではゾンビがうなり声あげてるのにおめでてーな。女子どもは
すっこんでろ。

3 : 名無しのファン : 20XX (土) XX : XX

この子商業ではないんだよね？趣味でやってるの？

4 : 名無しのファン : 20XX (土) XX : XX

趣味でしかありえんだろ。ほとんどは避難中だぞ。

5 : 名無しのファン : 20XX (土) XX : XX

声が幼くて、なんか聞いてると気持ちいいな。

6 : 名無しのファン : 20XX (土) XX : XX

自己紹介がなんかエロい。

7 : 名無しのファン : 20XX (土) XX : XX

年齢11歳？ うそだろオマエ……オマエ……その最高じゃない

か。

8 : 名無しのファン : 20XX (土) XX : XX

冷静に考えろ。鎖骨アピールする幼女とかいるか？ 答えはそう

いうことだ。

9 : 名無しのファン : 20XX (土) XX : XX

どうせおっさんだぞ。

10 : 名無しのファン : 20XX (土) XX : XX

いや声からして男ってことはないだろ。ないよな？

11 : 名無しのファン : 20XX (土) XX : XX

世の中には両声類という人種がおつてだな。

12 : 名無しのファン : 20XX (土) XX : XX

さすがにあの声は無理。

13 : 名無しのファン : 20XX (土) XX : XX

美少女検定一級のオレは美少女だと確信してる。

14 : 名無しのファン : 20XX (土) XX : XX

世界の終わりに天使降臨か。

15 : 名無しのファン : 20XX (土) XX : XX

ゾンビだらけの世界じゃなけりや。もつと見られたかもしれんがな。

【プラグ因子】の頃。

27 : 名無しのファン : 20XX (土) XX : XX
悪魔じゃ。悪魔がおる。

28 : 名無しのファン : 20XX (土) XX : XX

まああれだよな。どうせ配信元ももう管理とかやってられんだろ。不謹慎ゲーもクソもないと思うがな。

29 : 名無しのファン : 20XX (土) XX : XX

小学生なんだし、ちよつとオイタしてもしようがなくね？

30 : 名無しのファン : 20XX (土) XX : XX

親の話を一切しないヒーローちゃん。つまりそういうことだ。

31 : 名無しのファン : 20XX (土) XX : XX

今も配信してるアイドルならいるけどな。嬉野乙葉とか。

32 : 名無しのファン : 20XX (土) XX : XX

まあこんな世界で承認欲求満たすっていつてもな。業が深いよな。

33 : 名無しのファン : 20XX (土) XX : XX

おそらくヒーロー氏は、ゾンビに対する恐怖心があるのだと思う。そのゾンビへの過度の恐怖が、ウイルスそのものへと成り代わることで恐怖を覆滅しようとした。その結果のあの、ゾンビの気持ちになりたい発言なのではないか。我々が死を恐れるとき、死を厭う感情はしばしば死そのものに成り代わることで克服しようとする。その衝動性が自殺などの行為に結びつくこともあるが、そうでなくても死への欲動という意味では誰しもがもっているものだ。

34 : 名無しのファン : 20XX (土) XX : XX
なげーわ。寝てた。

35 : 名無しのファン : 20XX (土) XX : XX
ヒロちゃんがかわいければそれでいい。

36 : 名無しのファン : 20XX (土) XX : XX
動画大音量で聞いてたら、隣の部屋から壁ドンされたんだけど

……。

37 : 名無しのファン : 20XX (土) XX : XX

あつ (察し)。

38 : 名無しのファン : 20XX (土) XX : XX

ゾンゾンしてきた。

39 : 名無しのファン : 20XX (土) XX : XX

あれほど物音には注意しろっていつたのに。おまえは愚図だから。

40 : 名無しのファン : 20XX (土) XX : XX

誰かがドアを猛烈に叩いてるんだけど。

41 : 名無しのファン : 20XX (土) XX : XX

ネタだよな？

42 : 名無しのファン : 20XX (土) XX : XX

ガチなんだけど。

43 : 名無しのファン : 20XX (土) XX : XX

オレンジバブルでうれしがつてるヒロちゃんかわいい。

44 : 名無しのファン : 20XX (土) XX : XX

ニンニン

45 : 名無しのファン : 20XX (土) XX : XX

ニンシン？

46 : 名無しのファン : 20XX (土) XX : XX

ママになっちゃおう？

47 : 名無しのファン : 20XX (土) XX : XX

誰か42にレスしてやれよ。あ……シンニとか縁起悪いなw オマ

エも忍べよw

48 : 名無しのファン : 20XX (土) XX : XX

誰か助けてくださいあ。

49 : 名無しのファン : 20XX (土) XX : XX

堕ちろよってという声が凜として好き。

50 : 名無しのファン : 20XX (土) XX : XX

誰かが元気にドアをバンバン叩いてるんですけど！
51：名無しのファン：20XX（土）XX：XX
落ちろ。落ちたな。

52：名無しのファン：20XX（土）XX：XX
落ち着け42。

俺もほんの数日前には引きこもりだった。

母親の脛をかじるだけのクズだった。

でも今は立派に独り立ちしている。

死にたくなければ武器をとれ。

ドアの前にバリケードを築くのもいい。

53：名無しのファン：20XX（土）XX：XX

◇52

がんばってみます。

54：名無しのファン：20XX（土）XX：XX

Z戦士滅ぼしてご満悦なヒーローちゃんかわいい。

55：名無しのファン：20XX（土）XX：XX

人類を滅ぼしてご満悦な幼女様。こわかわいい。

56：名無しのファン：20XX（土）XX：XX

人類を滅ぼしてご満悦な幼女様。こわかわいい。

57：名無しのファン：20XX（土）XX：XX

人類は滅ぼさない宣言を出してくださいましたよ。ヒロちゃん様。

58：名無しのファン：20XX（土）XX：XX

よかったよかった。あ、42は元気でね。

59：名無しのファン：20XX（土）XX：XX

なんかよくわからないんですが……。

ゾンビが去っていきました。

60：名無しのファン：20XX（土）XX：XX

静かにしとつたら、そのうちどこかいくこともあるで？

61：名無しのファン：20XX（土）XX：XX

あ、いや。おはずかしながら気が動転してまして、動画は大音量のままでした。

6 2 : 名無しのファン : 2 0 X X (土) X X : X X
4 2 が全力で自殺しにいつて草しか生えない。
6 3 : 名無しのファン : 2 0 X X (土) X X : X X
運がよかつたな。

6 4 : 名無しのファン : 2 0 X X (土) X X : X X
ヒロちゃんがバブみ発揮してて生きるのが辛い。

【左のために死ぬ】の頃。

1 2 7 : 名無しのファン : 2 0 X X (土) X X : X X
なんだただの天才か。

1 2 8 : 名無しのファン : 2 0 X X (土) X X : X X
人間の反応スピード越えてるよな。

1 2 9 : 名無しのファン : 2 0 X X (土) X X : X X
じわじわファンが増えててうれしい……うれしい。

1 3 0 : 名無しのファン : 2 0 X X (土) X X : X X
でも現実味ないよな。こんな子現実におらんで。

1 3 1 : 名無しのファン : 2 0 X X (土) X X : X X
バーチャルだしな……。

1 3 2 : 名無しのファン : 2 0 X X (土) X X : X X
おまえらなに言ってるんだよ。ヒーローちゃんは実際に居るぞ。

1 3 3 : 名無しのファン : 2 0 X X (土) X X : X X
幼女先輩がカッコいい。名前以外はカッコいい。

1 3 4 : 名無しのファン : 2 0 X X (土) X X : X X
ヒーローちゃんはどこらへんに住んでるのかな？

1 3 5 : 名無しのファン : 2 0 X X (土) X X : X X
おい。幼女の情報に触れるとか、おまえ消されるぞ。

1 3 6 : 名無しのファン : 2 0 X X (土) X X : X X
たぶんだけど、イントネーションとかから考えるに九州北部にいた

ことがあるか、いまいると思う。バックパックを『からう』とか言つてただろ。

137：名無しのファン：20XX（土）XX：XX
ゾンビだらけのこのご時勢に、小学生配信者の身元を探る変態がいるらしい。

138：名無しのファン：20XX（土）XX：XX
実は私……。

そういつた【資格】を持っているので、ガチで調べようとしたんですが。一瞬で弾かれまして……。たぶんあれはウイザード級ってやつなんだと思います。

139：名無しのファン：20XX（土）XX：XX
（ロリコンが）いたぞおお！ いたぞおおお！

140：名無しのファン：20XX（土）XX：XX

あ、実際に行こうとか会いたいとかそんなんじゃないですよ。

141：名無しのファン：20XX（土）XX：XX
そうか。わかった。氏ね。

142：名無しのファン：20XX（土）XX：XX

∨ 140はゾンビになってしまえばいいと思うの。

143：名無しのファン：20XX（土）XX：XX

すいませんでした。マジ出来心だったんです。あれからなぜかヒロちゃんの動画を生配信で見れなくなっちゃいました。ゆるしてください。もう一度みたいです。ヒロちゃんが希望だったんです。

144：名無しのファン：20XX（土）XX：XX

これは後輩ちゃんを怒らせたパターン。

145：名無しのファン：20XX（土）XX：XX

ヒロちゃんはいるよ。ここにいますよ。

146：名無しのファン：20XX（土）XX：XX

ヒロちゃんならオレの隣で……。あれ？ おかしいな。これ以上書きこめない。

147：名無しのファン：20XX（土）XX：XX

あの子に似ていたな。

148：名無しのファン：20XX（土）XX：XX

現実にあんなかわいい子いたらビビるわ。

149 : 名無しのファン : 20XX (土) XX : XX
現実にはロシアか北欧系美少女やろうな。
150 : 名無しのファン : 20XX (土) XX : XX
143 はアーカイブは見れるのか? 温情だな。
151 : 名無しのファン : 20XX (土) XX : XX
マジでごめんなさい。

ハザードレベル40

男の趣味。女の趣味。

そんな分け方に意味はないと思うんだけど、傾向分析としてありうる話だと思わない？

「ね。飯田さん。そう思うでしょ？」

「突然なんの話だい？」

飯田さんは、自分の部屋でレトロゲーをやっていた。

ボクがプレイしたのが幽玄導士のほうだとすれば、飯田さんがやっていたのは霊幻導士のほうだ。

こつちもボクにとっては懐かしい。

小学生くらいのときにお父さんが持っていたファミコンでしていたからね。

ベターつと飯田さんの背中に貼りつき、わりと大きめのテレビ画面を見る。

「信頼してくれるのはうれしいんだが、私みたいなロリコンにくつつくのは危険だよ」

「ゾンビだし大丈夫」

「いや、その理屈は……まあいいんだが」

飯田さんつて、言うまでもないけどゾンビだから、そこらの電器店で大きなテレビを調達するのたやすい。

いまでは、ご近所から適当なゲームやDVDを見繕ってきて、人間たちがいままで蓄積してきた文化を消費している。

ゾンビは勤勉だけど、ボクたちはノンビリしてる。

本気で試験もなんにもない状態だからなあ。そもそも大学は休みだし仕事もないし。

省エネモードになってるのか、あまり食べなくても大丈夫。

そうなると趣味に走るしかない。

新たな文化文明知識などを作り出すだけの余力がないというのは非常にもつたいたいなく感じるけれど、ボクや飯田さんが趣味的なことでノンビリ暮らしていけるのは、ゾンビだからという面が大きい

と思う。

それはそれとして――。

ボクの趣味であるゲーム全般なんだけど、やっぱり命ちゃんもマナさんも女の子だからか、そのあたりはあまり好きではないみたいなんだよね。

嫌いじゃないけど好きじゃないって感じ。

ボクがやってるから、時々応援してくれるけど、それはボクのことが好きなんであってゲームが好きってわけじゃないというか。

言ってるで恥ずかしいな。

ともかく、そういうわけで、男の飯田さんとは趣味が合う部分が大きい。自分の意思としては、時々幼女モードになってるのも意識しないわけじゃないけど、やっぱり基本は男だって意識も強いからね。特に趣味の面については、まあ漫画とかゲームとか、そのあたりが好きなんです。

そもそも現代社会は多様性を肯定する社会。

多趣味なのが許される世界だから、漫画ゲーム好きが、イコール男の趣味とも思わないけど、こんな世界で同じ趣味を共有できる人が近くに住んでるってだけでうれしい。

「おじさんってどんなゲームが好きなんだっけ」

「私のゲーム歴はわりと長いからな。例えば、RPGは言うに及ばず、シミュレーション、箱庭ゲー。ストIIが流行ったころは対戦格闘もやったし、最近はそのシャゲもやってたよ」

「スチーム系は？」

「あまりやらなかったな。そもそも私はコミュ症なんでね。最近のチームはわりとコミュニケーションをとるものが多いじゃないか。なかなか厳しいものがあるよ」

「でも、そのシャゲだって、ソーシャルゲーでしょ？」

「ソーシャルって社会って意味だから、コミュニケーションするんじゃないかな？」

「最近のそのシャゲデザインは基本的に長くプレイしてもらいたいから、ソロプレイでもなんとかなるようなゲームデザインになってるも

のが多いよ。まあなんらかのチームとかを結成するものもあるんだけど、私は所属はしないな」

「ふうん。まあボクもぼっちプレイが多いかな」

あまりコミュニケーションとか取らずに、もくもくとプレイできるほうが好き。

壺に入ったおじさんが山登りするゲームとか。

うーん、そう考えると、ボクって配信者としてはあまりレベルが高くないな。

「もう少し配信向けのゲームを発掘したほうがいいかな。いつのまにかゾンビゲーばかりになってるし、なんかすごく偏りがあるような気がする」

「配信をしようとしたのは、君が人間不信から立ち直りたかったからだろう」

「うん」

「そうやってコミュニケーションをとろうとする勇氣はとても偉いと思うよ」

撫でられてしまった。

うーん。マンダム。

いや、違うけど……こうやって認められるとうれしい。

ただ、飯田さんもゾンビになってしまったってわけで、ボクが無意識にそういう状況を作りだしている可能性がある。

飯田さんは操り人形で——、ボクがそうやって動かして。

ボクは独りの可能性も。

「緋色ちゃん？」

「あ、うん。ボク、気になることがあるんだけど」

気になるというよりは、夏休みに残っていた宿題みたいな？

☆Ⅱ

宗旨替え。

かつての考えを否定し、新たな考えに染まること。

首尾一貫性がないとか、優柔不断とかそういう否定的な面もあると思うけど、ボクとしては思い立ったが吉日といえますか、そういうことを言いたいわけです。

「つまり？」

「ボクはゾンビになってなぜかエイム力が上がりました」

「FPSでヘッドショット決めまくっていたからね」

「実は、ボクって……銃が好きです」

「なるほど、美少女に銃か。悪くない」

「男の子みたいって思わないの？」

「ミリオタ女子は確かに数は少ないかもしれないがいけないわけじゃないし、君みたいな女の子に無骨な銃というのは、非常に似合ってると思うよ。これは戦闘美少女の系譜で、斉藤先生によれば、ファリツクガールと呼ばれていてだね……そもそも、少女というのはファルスの統制が低い存在として既定されているわけだが、銃や剣といった戦闘力が、彼女達をファルスの存在として投射するんだ。つまり……そのことから察するに……よって……したがって……」

「なんか知らないけど熱く語りだした飯田さん。」

「なんだか意識がもうろうとしてきた。」

「しかし暑い。」

飯田さんは例のフルフェイスに黒のジャンパーを着て、ふうふう言いながらついてきてくれる。

セミの鳴き声がアスファルトに響きわたり、猛烈な熱気で空気が揺らめいていた。

「車を使うほどの距離じゃなかった。」

「なにしろ、ボクが向かっているのは例のホームセンターだからだ。」

「かつて、ここでマナさんには銃は要らないって言われました」

「ふむ。あの人は緋色ちゃんがそれで傷つくかもしれないのが怖かったのだろうね」

「でも、ボクは銃の造形とか、洗練された形とか、そういうのは好きなの。別にモデルガンとか集めてたわけじゃないけどね」

「君は銃で脅されたりしたわけだけど、大丈夫なのかい」

「トラウマとかそういうのは、あまり感じないかも……」

ゾンビになってから、ある意味ずぶとくなつたのかもしれない。

「つまり、おもちゃとして銃を手元に置きたいとか？」

「うん。まあそれもあるけど、やっぱりある程度時勢に流されるんじゃないかって、自分で自分のことは守れるようにとか、みんなのことは守れるようにとか、そんなことも思うんだけど」

つまり、ちよつとは力もいるよねというか。

「うーん。どちらかというと、人間不信から少し回復してきて、人間の持つ力に興味が出始めたようにも思うんだが……」

「ん？」

「かわいいから、まあいいか」

飯田さんがフルフェイス越しにモニャモニャ言ってもよくわからないよ。

ホームセンターは閑散としていた。車で作ったバリケードは津波のようなゾンビの力で押し広げられていて、あの時の衝動がいかに強かつたのかがわかる。

それと、ゾンビつてわりと底力があるんだね。

ボクが中にいたときには、バリケードを破壊することはできなかつたみたいだけど、一気に押し寄せたら、こういうふうにもできるのか。「人間の気配はしないかなあ。よくわからないけど、ゾンビも中に少しはいるから……。うん、たぶん大丈夫みたい」

大きく開けた玄関口からは、薄暗い店内が垣間見える。うろついている数人のゾンビさんたち。

興奮状態ではないから、みんなぼーっと突っ立っている。

この人たちはたまたまここにいたのか、それとも居残り組なのかはわからない。

奥に進んでいく。

銃があるのは、執務室と呼ばれていたところ。裏口にも一番近い場所だ。

その部屋のロッカーとか、机の中に銃はたくさんあった。

たぶん、デイパックで満載できるぐらいはあつたんじゃないかな。

飯田さんはきよろきよろと周りを見渡している。

ほんの数日前なのに、懐かしんでいるのか。それとも自分が殺されたところだから怖いのかな。

と——、ぼったり出逢ったのは、小杉さんだ。

「あ、緋色ちゃん。久しぶり……」

あいかわらず陰気に背をまるめて、こちらをうかがうような視線の20台男性である。

ホームセンターでは、ちよつとしたいざこざがあつて、ボクが哲学的ゾンビにってしまった人です。哲学的ゾンビとは、生きてるときとまったく行動は変わらないけれども、意識がまったく存在のことを言う。

つまり、ボクは小杉さんの心を破壊しちゃったわけだから、ある意味殺しちゃった相手でもある。

びつくりしたのは飯田さんだ。

「わ、え？　なに、小杉さん生きておられるのですか？」

「おじさんって、ここで殺されてからの記憶ってなかったの？」

「ああ、そうだね。うっすらとは覚えてるんだが、どうも記憶は曖昧だね」

「そうなんだ」

マナさんはわりとはつきり覚えていたみたいだし、そのあたりは個人差かな。

飯田さんの場合は最後あたりはわりとガンガン撃たれていたし、肉体的ダメージも関わってるのかもしれない。

と、まあそれはそれとして、小杉さんのことは説明しておこう。

ボクは飯田さんに、小杉さんをゾンビにした過程も含めてすべて説明した。

「つまり、小杉さんは、今、普通に生きてるように見えるけれどもゾンビ状態なわけか」

「そうだよ」

「で、もしかすると、小杉さんを回復できるかとか考えてるのかな？」
ボクは頭を横に振った。

死んだ人はやっぱり生き返らないんじゃないかなあ。

「ボクの血を投与すれば生き返るかもしれないけど、そもそも意識や心と呼ばれているものって見えないわけだから、今の小杉さんも生きてるかもしれないし、死んでるかもしれないし、それはわからないよね?。」

「人間に戻したくない?。」

「うん。ボクってわりと薄情なんだ」

「いやまあ、命ちゃんを殺されそうになったというのであれば、やむを得ないかもしれない。私は直接その場に居合わせたわけではないからわからないが」

「その節は大変申し訳ございませんでした」

と、ボクは言わせているかもしれないわけで、プログラムは自動的であり、ボクの無意識によって操作されている。

小杉さんが何を考えているかはまったく理解できないし、仮に命ちゃんやボクを害するような心性まで回復するとしたら、それは嫌だなと思ってしまう。

ボクがゾンビにした際に課した制約は、人を傷つけないことと、このホームセンターから出ないことだ。それ以外は生前の通りに行動してもいい。人を傷つけないというのはかなり曖昧な言葉だけど、ボクが思うところの人を傷つける行為という意味で、例えば、暴力行為だけじゃなくて、暴言もある程度は抑えているように思う。ふわっとした感覚だけだね。

「これからも小杉さんはここに?。」と飯田さんは聞いた。

「うん」

「永遠にずっと?。」

「うん」

「餓死するまで?。」

「もう死んでるよ」

ボクの中ではね。

飯田さんはそこで立ち尽くしていた。

ボクには飯田さんの心も見えないわけだけど、でも、飯田さんが何

を思っているかはわかる。

殺してあげようとか、あるいは自分の血の中にヒロウイルスが含まれているだろうから、それを分け与えてあげようとか、あるいは、ボクを説得しようとしているのかもしれない。

少なくとも小杉さんのことを考えているのはわかる。

「緋色ちゃん」

「なにかな？」

「せめて、彼をホームセンターから解放してあげないか？」

「べつにそれでもいいですよ。だって、小杉さんだったオブリエクトがどう動いても、いまさらって感じですし——。ただこれから先、わりと理性的だった小杉さんならきつと役場にいくんじゃないかなって思っています」

つまり。

「食糧事情がどうなのかはわかりませんが、結構な人数がいるかもしれないし、小杉さんがいけば、食糧は余計に消費しちゃいます」
「確かにそれはあるかもしれないね」

「それに、小杉さんはゾンビに襲われません。ゾンビなんだから」

「そう言われればそうだね。つまり、人間の英雄として祭り上げられる可能性もあるわけか」

「そうですね」

それで、その結果起こったのが、あのホームセンターでの悲劇だ。ゾンビ避けスプレーの場合は、誰にでも塗布できるわかりやすい力だったからこそ、力におぼれるということがあったのだろうけれども、個人の力だったらどうなるのかな。

みんな飯田さんがゾンビに襲われない力を持っていると思っただときは、飯田さんにいろいろとがんばってもらおうとしてたけど、そうなるのかもしれない。

いずれにしろ——、小杉さんを巡ってのいざこざが起る可能性が高いんじゃないかな。

そりゃこういうご時世だし、人間が何人が集まっていると、争いは生じると思うけど……。

「小杉さんにはずっと独りで放浪の旅にでもらいましょうか」

つまり、小杉さんには、ホームセンターから出てもいいかわりに、コミュニティに属さないという制約を新たに課した。

飯田さんが気にするから、ちよつとだけ宗旨替えしたけど、はつきりいうと小杉さんのことなんかどうでもいいんだ。

「ついでに言うと。姫野さんもいるよ」

またまた飯田さんがびつくりしていた。

姫野さんも小杉さんと同じように、ボクがゾンビにしてしまった人だ。

ゾンビに咬まれて自暴自棄になった姫野さんは、命ちゃんをゾンビウイルスに感染させようとした。

結果として、ボクは姫野さんの中のゾンビウイルスを活性化させて、一気にゾンビ化させてしまった。最後は首をトリプルアクセルさせて、そこらに放置。

あ、いたいた。

普通にそこらの通路に倒れたまま。

首はねじ切れることなく、ただ神経のどこかが断線しているのか動けない状態だ。

「かわいいそうに」

飯田さんが言う言葉に、多少は肯定する部分も生じる。

最後の行為以外に関しては、わがままではあつたけれども自衛の意味合いが強く、自分の命が大事なものは、誰だって同じだからだ。

飯田さんはやっぱりここでもいい人で、トリプルアクセルを決めていた首を元に戻してあげた。

ゾンビは頭部を破壊されない限りは、相当に再生能力も強い。

「緋色ちゃん。姫野さんはなんでここでゾンビになつてるのかな」

「ゾンビまみれになつたあと、復讐かなにか知らないけど、ここにやつてきて命ちゃんを害そうとしたからゾンビにしました」

「回復させるつもりは？」

「うーん。小杉さんよりはマシかな程度なんで、飯田さんが決めてよ」「わ、私が？」

「うん。たまにはボクじゃなくて飯田さんが決めてほしいな」

だって飯田さんって、いつも自分は選択してこなかったとか。決断してこなかったとか。

選ばれなかったとか、そんなことばかり言うんだもん。

ゾンビになつて多少吹っ切れたのか、最近はそうでもないみたいだけど、ボクだけじゃなくて、飯田さんも決めてほしい。

飯田さんの心があるって確認させてほしいんだ。

「じゃあ……。生き返らせてほしい」

「人間として？ ゾンビとして？ あ、人間として生き返らせたい場合は注意が必要だよ。首がねじ切れる寸前だったんだから、たぶんいま戻したら死にます。よくて半身不随かも」

「ゾンビでもいいから生き返らせてくれないかな」

「飯田さんって姫野さんのことが好きだったの？」

「いや、違うよ。私は生粋のロリコンだ。20歳を越えたら私の守備範囲からは外れて、場外ホームラン状態だよ」

「じゃあ、なんで助けようとするの？」

「他人事じゃなかったんだ。他人から虐げられているとか、社会から虐げられているとか、それで自分はこうならなければならぬという強迫観念とか、そういうのはわかる気がするんだ」

「……まあいいよ」

ボクは超強化された力で手のひらを薄く引き裂いて、流れ出る血をポタポタと姫野さんの口の中に入れた。

ゾンビウイルスの上位存在であるヒイロウイルスは回復能力にも秀でている。

姫野さんの首のあたりはなめらかな肌を取り戻し、瞳には理性の光が戻ってきた。

「あ……」

そして、ボクに対する恐怖の色も見える。

正直なところ、悪くないと思った。

マナさんみたいに、いきなり崇拜状態だと、そっちのほうが怖いからね。

マナさんは単に幼女崇拜論者だったのだと信じたい。

つまり、ヒイロウイルスはボクにとって都合のよい奴隷を作り出すシステムじゃないと信じたかった。それを証明することはできないけれど、恐怖するということは、ボクに対して反発して反発してることだから、それはそれでうれしい。

他者との摩擦が他者を感じさせてくれる。

「落ち着いてください。 姫野さん」

飯田さんはその場にしゃがみこみ、優しい声色で言った。

姫野さんはボクの姿を見て震えている。

「え、あ……助けて、わたし死にたくない。 殺されたくない！」

「誰もあなたを殺したりしませんよ」

飯田さんは自分の姿が恐れられていると思ったのか、ヘルメットを脱いだ。

「え、飯田……さん」

「はい。 飯田ですが？」

「飯田さん！ わたし怖い！」

「う、うお。 姫野さん」

姫野さんが突然飯田さんに抱きついた。

いや、まあわからないでもないけどさ。 そもそも姫野さんはそういうふうには誰かに優しくしてもらわないと心の平衡が保てないタイプなんだと思う。

飯田さんは姫野さんがホームセンターから追い出されようとしたときにかばったりもしてたし、今、ここで恐怖の大王なボクがいる状態で、唯一頼れそうな知り合いの男が目の前にいて、ともかく頼りたくてたまらなかつたのだと思う。

でも——、べつたりとくつついて、さすがに狼狽しながらも、ロリコンだとはいいつつも、女の人に頼られるのは悪い気はしないらしく、飯田さんはだらしのない顔になっていた。

幼子をあやすように背中をポンポンと優しく叩く飯田さん。

姫野さんは泣きはらした目で、ついには飯田さんにキスマでしてしまふ。

飯田さんの目が見開かれ硬直しつつも、ついには腕をだらんとおろして、されるがままになってしまった。

「なにこれ……」

なんだかすぐくモヤッとしました！

ハザードレベル41

イングラムと聞いて何を思い出すでしょう。

はい。30代以上の人はたぶんロボット警察アニメパトレイバーを思い出すかな。

それも好きだけどね。

イングラムのいいところは清潔感のある線だろう。

本当にありそうなりアルな造形と少し丸い形が好きといえば好き。

でも、今回はそうじゃないんだ。

もう少し時代が下ると、バトルロワイアルの桐山が装備していたサブマシンガンを思い出す人が多いんじゃないかな。

黒いカステラ箱みたいな余計な装飾を取っ払ったフォルムに取っ手がついただけのもの。

その無骨なデザインが逆にいい。

本当はウージーとかのほうがまだ武器としては集弾性能が高いらしくて、産廃扱いされることもあるとかなんとか。

実際、毎分950発というすさまじいスピードで弾丸を射出するそれは、連射する際にどうしても腕を跳ね上げさせてしまう。

つまり、最初の数発はともかくとして、腕の筋肉が弱いとそれだけ徐々に狙いが上向いてしまうんだ。

まあ、今のボクならゾンビ筋肉で余裕ですけどね！

そんなわけで、今日のボクはホクホク顔で銃をお持ち帰りして、それをヒロ友のみんなに自慢しているのです！

ああー、このボクの趣味を全力全開で開陳する快感がたまらない。ボクって露出狂だったのかも。

ちなみに通常のバーチャルユーチューバーであれば、現実の物体をバーチャル化しないといけないから、データ入力が必要なんだけど、命ちゃんの謎の知識で構成されたボクの配信環境は即座に物体をバーチャルデータとして置換できる。

つまり、イングラムだろうが、ベレッタだろうが、スカーだろうが、すぐに皆様にお見せすることができなのです。すごいよ命ちゃん。

「はー。イングラムかつこいい」

『本物?』『ヒーローちゃんが本当に英雄を目指す話?』『ぱらぱらららら』

『よくわからないバトロワをする話なの?』『CGIゲームか……なにもかも懐かしい』『知っているのか雷電』『お人形さんの代わりに銃を持ってご満悦な少女』『ほほえまー』

「えへ。本物だからね。とあるルートで手に入れたんだ。銃刀法違反だけど多目に見てね」

『社会が崩壊しているので無罪』『少女なので無罪』『ゾンビ好きなので無罪』『カワイイので無罪』『銃はあかんでしょ。銃は』『弾なしならまあ……』『幼女にタマがあるわけねーよなあ』『珠のようにかわいい女の子ならわかる』『いや実際、銃は危ないんじゃないかな。保護者は?』

「うーん。ボクには保護者はいないけど、お姉さんみたいな人には一応言ったよ。まあ、ボクが持つておきたいならそれでもいいって言ってくれたし」

『闇深案件?』『お姉さんがいるの?』『まあこんな世の中だしな……』『かわいい女の子だけで暮らしているとか……』『ごくり』『絶対いい匂い』『そんな空間』『オレも混ぜつつちやおうかな』『オレくんはこっちでしよ』『ようこそ男だらけのパラダイスへ』『アッー!』

あいかわらず楽しそうだなと思いつつながら、ボクはほんの数時間前のことを思い起こす。銃は単なる趣味のもので、ボクの生活水準になんら影響を及ぼすところではないけれども、

もちろん、ボクが持ち帰ったのは、それだけじゃない。

姫野さんもいっしょに帰ってきた。

あれから飯田さんにべったりだった姫野さんは、結局アパートについてくることになった。ボクへの恐怖と飯田さんへの思慕をターゲットした結果だったのか、ある意味の苦渋の決断だったのだろうけれども、ボクとしてはもう許したよ。

だって、ボクは飯田さんを選択を委ねて、飯田さんが助けてほしって言ったからね。友達のお願いは聞くのが道理ってもんでしょ。

姫野さんが飯田さんにべったりなのは、正直なところ、『ボクのだぞ』というか……、うーん……うまく言語化できないんだけど、男女とか関係なく、友人を取られたって気持ち湧いて、どうしようもなくモヤッとしたけど、飯田さんが他の人に慕われているのは素直にうれしいよ。ボクも飯田さんのことが好きだからね。

姫野さんは相変わらずボクのが怖いらしくてほとんど視線すら合わせなかったけれど、命ちゃんにはしおらしく謝っていた。

それがボクに対する恐怖ゆえか、それともゾンビになったことで恐怖することがほとんどなくなつて余裕が生まれたせいなのかはわからない。

でも、まあ……。

形式上は謝つたわけだし、命ちゃんは心底どうでもよさげだったけど、謝罪を受け入れていたから、それでよいことにしたんだ。

「さてさて、みんなを安心させるために一応言っておくけど、弾は入ってないよ。空の弾倉を使っているから安心だからね」

『さすが幼女。かわいいだけでなくかしこい』『かしこいだけでなくかわいい』『でも万が一ってあるからなあ』『ゾンビだらけの世界だし、自衛の手段ぐらい持つていてもいいんじゃないやね?』『銃撃ったらゾンビ集まってくるぞ』『集まってくるぞ』『困まれてカプカプされるぞ』『カプカプかわいいなあ。凄惨だけだな!』

「ボクはかしこいので大丈夫なんですよ」
胸にそつと手を添えてバツチこい。

まあ、ゾンビが寄ってきてきても大丈夫ではあるんだけどね。

『ほう』『ここでイキルか』『イキル小学生』『僕は生きる。君はイキル』『審議不要』『ヒロちゃんが時々ムフンって顔するのが好き』

「お次の紹介は、これです。スミス&ウェッソンSW9。スミス&ウェッソンといえば、マグナムのほうが有名だけど、こういうオートマチックピストルも普通にカッコいいよね」

『ちっちゃいおててにおつきな銃』『おててかわいいな』『かわいいのは本体では?』『ボブは略』

「ちなみに日本の警察はよくナンブっていうリボルバーを装備してい

るっていうけど、今では普通にオートマが標準装備だからね」

『へえ』『かしい小学生』『頭よしよし?』『頭なでなでしたい』『銃に詳しい小学生。アニメ知識かな?』『幼女ハンター?』『幼女ハンターだと危ない意味になるだろ!』『幼女にハントされたい』

ふふふ。みんなボクの圧倒的知識量に驚いているな。

なんだか気分がいいぞ。

銃といえば、やっぱりリロードタイムだよね!

サイドのボタンを押して、弾倉を取り出す。うん。空の弾倉だ。

銃をスライドさせて、リロードタイム。

リロードタイムでこんなにも息吹が……。リボルバーじゃないけど、この瞬間の興奮はきつと男のときの意識のままだ。マグチェンジ。ガチャつという音ともに、弾倉を装着する。指と銃がダンスを踊るみたいに。

右手で銃を握り、左手は添えるだけ。

狙いは、君たちだ。

「ばぁーんー」

画面に向かってボクは引き金を引く。

と——、突然部屋の中に爆音が響きわたり、一瞬、マズルフラッシュの光で部屋がまばゆく光った。

ボクの強化された動体視力は、銃の先端から回転射出される高速物体を知覚する。

あーッ!!! って心の中のどこかが叫んだけれど、さすがにボクも先に行く銃弾を見送るしかなかった。去り行く電車を見送るような寂しさで、やっちゃまった感が相互に湧いてくるが、もはやどうしようもない。

秒速300メートルを越えるスピードで放たれた弾丸は、一直線に画面に向かい、当然のことながら、デイスプレイを撃ち抜いて、部屋の壁に穴をうがち、かつ跳弾したところで止まった。

薬きょうがころころと転がり、ボクは呆然としている。

なんで?

なんで銃が発射されるの?

なんで？

『え、なんの音？』『ばぁーんでハートを撃ち抜かれた（物理）』『モデルガンでも持つてるかと思ったら本当の銃じゃったか』『あらやだ』『空弾倉なのになんで？』『弾倉を入れた状態でスライドさせると、一発が銃内に残るんだよ』『チャンバー内に残ってたのね』『ばぁーん！』『おいおい液晶死んだわ』

ど真ん中を撃ち抜かれても、わずかに映像を出力している根性の液晶。

そこから伝えられた真実は、とても残酷で……。バスンバスンという音とともに、液晶が最後の命の花火を散らしている。

「あ~~~~~ッ そうだった！ ボクとしたことが！」

『頭よわわ？』『頭抱えるヒロちゃん』『処す？ 処す？』『これは後輩ちゃんも激おこなのでは？』『銃の取り扱いには十分ご注意ください』『い』

ブツン。

液晶の画面が真っ暗になる。

パソコン本体が壊れたわけじゃないけど、これじゃ配信できないよ。

「命ちやーん！ へるーぷ!!!」

☆

五分後。

瞬く間に予備の液晶を持ってきて交換をおこなってくれた命ちやん。

そして、ボクは肩から『反省中』のボードを下げている。

「あ、みんな……ごめんなさい……くすん。くすん。ほんとにイキつて……すみませんでした」

『ガチ泣きしてる』『いいんじゃないよ。誰にだって失敗はある』『泣いてるヒロちゃんが一番かわいい』『かわいそうで抜ける』『なにを抜けるん

ですかねえ』『かわいいそうなのは抜けないだろ！ いい加減にしろ』『おまえらまとめて後輩ちゃんにはあーん（永久）されるぞ』『くすん……あれから、ものすごおく、ものすごおく、後輩ちゃんに怒られました』

『ああ……』『残念ながら順当』『お兄さんが慰めてあげるから』『パパが慰めてあげるから』『慰メックスしたい』『おいやめろ。後輩ちゃんに消されるぞ』『反省するだけエライわ』

そしてボクの背後から覗きこむ影。

命ちゃんだ。

銃が暴発したことに對しては、危ないからってすごく怒ってたけど、いまは通常モードに戻ってる。無表情でクールな美少女。

亜麻色髪のボクの自慢の後輩。

そんな彼女はいまバーチャルな存在として投影されている。

「はじめまして、後輩ちゃんです。先輩がお世話になっております」

『うほ。後輩ちゃんも美人』『高校生くらい？』『高校生くらいの後輩がいる小学生くらいの先輩？』『百合の波動を感じる』『なんだ百合かよ。さっさとちゅっちゅしろ』

「ちゅっちゅはしてもいいですけど、先輩が嫌がるのでNGです。あと、あまりにも扇情的なことを言うと、この世から抹殺しますのでよろしくお願い申し上げます」

『ひえ……』『さきほどは申し訳ございませんでした』『死ぬ変態って言ってください』『後輩ちゃんもかわいいよ。ヒロちゃんもかわいいからダブルかわいい』

命ちゃんのことを受け入れられたみたいで、ボクとしては満足です。

「後輩ちゃん。今日はなにをして遊ぶ？」

「そうですね。先輩とえっちなこととして遊びたいです」

『ざわ……』『ざわざわ……』『えっちなことに興味がある年頃』『おねロリなの？』『あなた鯛が曲がっていいよ』『おい、興奮しすぎて魚になってるぞ』『よし、いいぞやれ』

「するわけないでしょう。変態ですか。あなたたち」

『ありがとうございます！』『変態です！ もつとののしつてください！』『クスでゴミ虫なわたくしどもにもつと光を！』『まちがいなくヒロちゃんが後輩ちゃんの尻にしかれている』『幼女だものね』『後輩ちゃんとヒーローちゃんの間にはまりたい』『オレくん病院から抜け出しちゃダメじゃない』

「今日は、先輩の反省会も兼ねて女の子の遊びをします」

「ふえ？ 女の子の遊びってなに？」

ボクぜんぜんわかんないんだけど。

正直、いつのまにか視聴者が増えて千人くらいになつてみんなの前で、ボクのまったく知らない遊びとかしたくないんだけど。

男だったのがバレるとか、それもなんかヤダ。

「先輩の不安そうな顔がそそる」

『幼女の不安な顔がそそる』『怯える君が一番好き』『ホラー配信やろうよ』『ホラーはいいかも』『ゾンビゲームもホラーの一種だぞ』『ゾンビは若干違うだろ！ いい加減にしろ』『好きな女の子にいたずらしたい小学生男子か』『女の子の遊びってなんだろうな？』『ゴム跳びとかじゃね？』『プリキュアごっこ？』

「も、もしかして生着替えとかじゃないよね」

ホームセンターで裸にひんむかれた記憶がよみがえる。

あのとときの命ちゃんはボクがボクであるという確信はなかったけれど、今のボクはボクだという確信があるわけで……、つまりあのとキよりひどくなる恐れがある。

「変態に先輩の恥ずかしい姿を見せるわけないじゃないですか」

命ちゃんは、人差し指でボクの顔の輪郭をなぞる。

ぞわんとした感覚。

そして、あの伝説の顎クイをされてしまった。乙女ゲームにありがちな顎クイを後輩である命ちゃんに。

乙女みたいにされてしまったんだ。

『ふつくしい』『なんだやっぱり百合かよ』『そのままポックリーなしのポックリーゲームしようぜ』『それってただのちゅっちゅじゃないか。最高かよ』『顔真っ赤なヒロちゃんがかわいい』『天使ふたり……何事

も起きないはずがなく』『配信事故起きちやう?』『合体事故起きちやう?』

「な……なにをするの?」

ボクはまな板の上の鯉な気持ちで聞いた。

対する命ちゃんの答えは淡々と。

「化粧です」

へ?

化粧?

うーん……よくわからん。

☆
||

命ちゃんはもともと美人で、まだ高校生だし、化粧なんてしないでもとてもかわいらしい女の子だとボクは思っている。

つまり、化粧経験値なんて皆無に等しく、ボクの化粧を施すだけの能力もほとんどないんじゃないかと思った。

でも、命ちゃんも生粋の女の子。

それに高校生にもなって化粧のひとつもしていないなんてことは考えられないし、たぶん、やろうと思えばできるんだろう。天才少女だし、命ちゃんはやろうと思えば、わりと結構なんでもできちやうたイブなんだ。

致命的なほどに何もしないという選択を選びがちだけど。

ボクのことに関しては、その消極性はあてはまらない。

「さて……今日のキャンバスは最高級の素材です。リキッドホワイトを塗ったような明るい白の柔肌。おモチのように弾力があって、ハア……とてもキレイです」

「あの、後輩ちゃん。ちょっと近いんだけど」

命ちゃんは息がかかるくらい距離に顔を近づけ、両の手で顔をふわふわとなぞっていく。その絶妙なタッチにボクは背筋がゾクゾクとしてきた。

唇をゆつくりとしたスピードでなぞられる。

親指がぐいぐいと押しつけられる。

むぐ。ちよつとだけ口の中に入っちゃった。

汚いよつて抗議の意味をこめて、命ちゃんを睨んでみたけど、どこ吹く風。

むしろ、うつすらと笑つて楽しそうだ。

これも反省会成分が入っているのかな。

だったらおとなしくしとかないといけないのかもしれない。

「お肌の調子もとてもいいみたいですね。赤ちゃんみたいにぷるぷるで……、白雪のようです」

「後輩ちゃん……あの、変なことしないでね」

「変なことはしませんよ。単に化粧するだけですし」

「ほんとに?」

「ほんとですよ。えつちな化粧とか意味わからないでしょ」

「むー。信じるからね」

『ちよつとムスつてしてるのもかわいいな』『ガチだろこれ』『ヤバイなんか興奮してきた』『全裸待機』『信じて化粧を任せたロリぷに幼女がガチレズ後輩ちゃんの変態化粧にドハマリしてアへ顔ピース配信をすることになるなんて……』『どんな状況だよそれ』

「さて……、わりと真面目にいきますからね。まずは……目をつむつてください」

「き、キスとかしないよね」

「しませんよ。信じてください」

『やめろ罨だ』『どうせみんなちゅちゅになる』『こんなカワイイ子が目の前にいて目をつむつてキスしないわけないよなあ』『全力でスクショした』『画面に近づいて……あっあっ』

「まずは大まかな方針ですけど、昨日帰ってきた人みたいにケバケバしい化粧は当然、先輩にはあいません。なのでナチュラルメイクをうつすらとしますね」

うん?

よくわかんないけど、うつすらメイクつてことはわかったよ。

「最初にコットンに大量の化粧水をつけます。それから先輩のちつ

ちやなお顔に叩きつける！」

ぴしっ。ぴしっ。ぴしっ。

ぴしっ。ぴしっ。ぴしっ。

あう。案外痛いんだけど気持ちいいというか、普通にほっぺをしばき倒されるというか、そんな感じだ。

ティッシュをとる音がして、顔にそっと当てられる。

顔中が水浸し状態だったから、たぶんこれで余計な水分をとってるんだらう。

「白玉みたいな肌ですから、美白液はいらなさそうですが……、一応塗っておきましょうかね」

ぬりぬりぬりぬりぬりぬり。

ぬりぬりぬりぬりぬりぬり。

すごく丁寧に肌がこすられていって、ちよつと気持ちいい。

化粧って言うより顔のマッサージというか。

そんな刺激もあるのかもしれない。

『なんか真面目マッサージに通じるものがあるな』『なんだここにもママがいたのかよ』『インドマッサージとかも好き』『寝ている女の子に化粧する動画』『はー、ぺちぺち音がたまらん』

「次は——、乳液ですね。ムラがでないように均一になるように塗っていきます。先輩の肌って吸いついてくるみたいで、触ってて気持ちいいです」

「あの……ボクの柔肌堪能されちゃってない？　こんなにたくさん塗りたくる必要あるの？」

「甘いですね先輩。まだ先輩は幼女といってもいい年齢だからこれくらいで十分ですけど、本当の化粧はこんなもんじゃないですよ」

「ていうか、後輩ちゃんも化粧してないよね！」

「私はされるよりもするほうが好きなんです」

『後輩ちゃんのタチ宣言』『まあどう考えてもヒロちゃんのほうが受けだよな』『小学生はさすがに非合法』『まあ、実際は優しいお姉さんなんじゃね？』『ヒロちゃんが先輩ぶっててかわいいな』

「はい。口を開いているとお化粧できませんよ。お次は化粧下地で

す。夏ですしどうしても汗をかいたら、これを塗って化粧が落ちないようにする効果があります。また、紫外線をカットする効果もありますから塗っておいて損はないですよ」

ボクはゾンビだから、紫外線でダメージとか受けたくないと思います。じゃないと、外を元気に歩き回ってるゾンビさんはすぐに腐って溶けちゃうと思うし。

でも、命ちゃんはそんなことおかまいなしに、ボクというキャンパスを自分色に染めていく。

「最後にファンデを塗って今日は終わりにしましょうかね」

パタパタ。パタパタ。

パタパタ。パタパタ。

水みたいなファンデ。そういうのもあるのか？

正直なところボクって、ふわふわのやつをほつぺたに叩くようなイメージしかないんだけど、本当に今日は顔に液体をぬりまくるだけだよね。

でも、順番とか、量とか、つけ方だけでも、もうわからん。

「化粧ってめんどくさいね」

「世の中の女性の大半もそう思ってると思いますよ」

「じゃあ、なんで？」

「決まってるじゃないですか。かわいくなりたいからですよ。ほら」

命ちゃんの謎技術でもたされたバーチャルなボクは、ちゃんと化粧顔になっていた。

命ちゃんの前だと自省しているけど、正直なところめちゃんこかわいい。幼げな中に色香があって、いつもより透明感を増した肌が輝いている。

すごくかわいい。かわいい!?

なにこれ。これがボク？ 伝説級じゃない？

ありがとう。命ちゃんすごくボクをかわいくしてくれてありがとう！

って言いたいところだけど、後輩ちゃんだから自省した。

「ん。まあまあかな」

なんて言ったりして。

『二マニマしててかわいい』『これは自分のかわいさを知ってる顔』『女になったヒロちゃん』『ほへー。変わるもんやな』『バーチャルなのになんて変わるの？ 天才なの？』『後輩ちゃんもご満悦』『この後、めちやくちや化粧した』

そんな感じで、ボクの女子力は少しだけアップしたのです。

女の子の趣味って謎が多いなあ。

☆
||

今日の配信はたぶんマナさんも楽しめたのかななんて思ったりもする。

化粧をして少しだけキレイになったボクをマナお姉さんに見てもらいたい。

いつもお世話になってるからね。

ボクにお食事を作ってくれるのもほとんどマナさんだし、いろんな意味で大事にしてくれてると思う。

そんなマナさんはご近所に買出し(意味深)に出かけてるのでした。なんのことはなく、普通に百パーセントオフの食糧調達とか洋服とかいろいろなものを調達しにいってる。

交通的などころで言えば、飯田さんや姫野さんも運転はできるみたいだけど、今日は帰ってきたばかりで、家の整理中。

ボクは運転免許証は持ってないし、命ちゃんは二輪だけという珍しいタイプ。

必然的にマナさんが足を持つてる唯一の人ということになったのです。

まあ、ボクがついていってもよかったんだけど、今日は食糧だけということ、たいした量もないということ、ひとりで出かけていったのです。

それにしても遅いな。

そろそろ近所の食糧も尽きかけてるのかもしれない。

遠出したのかなー。

なんて思っているとおなじみの車の音が階下に聞こえた。

ボクは窓を開けて、手を振る。

マナさんは太陽のようにまぶしい笑顔で手を振りかえしてくれた。

「ご主人様あ~~~~~~~~♪ あ、かわいい！ 化粧してますね!!」

この距離でわかるんだ。マナさんある意味すごいな。

「おかえりマナさん。今日はなんかいいことでもあったの？ 声がい

つもよりも明るいね？」

「はい。いい拾いモノしちやいましたー」

なんだろう。

テレビか何かかな。それともボクに着せるためのかわいい洋服

だったりして。

マナさんが車の後部座席を開けて、一抱えもあるソレを持ち上げ

る。

って、エミちゃんじゃん！

アアア言いながら、マナさんにお姫様抱っこされてるの、どう見

てもエミちゃんだよね？

「すんごい美少女ゾンビ見つけちゃいました~~~~♪」

とびきり笑顔のお姉さん。

きつと世が世なら、男の大半をとりこにするような無邪気な笑顔

だ。

でも、ボクはそれどころじゃない。

恭治くんはどこーっ!?

ハザードレベル42

「うーん。人間として生還させるのは難しそうかなあ？」

マナさんが字義どおりの意味でお持ち帰りしてきたエミちゃんのことだ。

エミちゃんは今、マナさんのお部屋のベッドに寝かされていて、おとなしくしている。

「というか、させている。」

「もしも、ボクがコントロールをやめたら、腕を前につきだしてゾンビムーブを始めるだろう。」

「ご主人様が突然、ゾンビな美少女をひん剥きはじめるからビックリしました」

「いや、ビックリしたのはこっちだよ」

ひん剥いたのは小学生女児の身体に興味があるからでは、もちろんない。

エミちゃんの身体には姫野さんが突き刺した鉄パイプの穴が開いていて、その傷がどうなっているか知りたかったからだ。

ゾンビといっても顔色が少し悪くて、瞳の色に輝きがないくらいで、見た目的にはそんなに人間と変わりない。

そして、ゾンビにはある程度の再生能力が備わっている。ヒロウウイルス感染者ほど劇的な回復力ではないけれど、もしもうまくいけば、人間として生き返らせるということができるんじゃないかと思っただんだ。ゾンビウイルスをボクのコントロールで死滅させることによつてね。

対してヒロウウイルスはボク自身だからか、どうも消せないっぽいんだよね。つまり、ヒロウゾンビとでもいったらいいか、ボクに感染するとボク自身でも取り消しようがないみたい。

不可逆的な反応になってしまっている。

ただ、いまさら人間に戻したところでゾンビだらけの世界を生き残れるかという問題もあるし、さらに言えば――。

傷は痛々しかった。確かに突き刺した穴は塞がっているけど、傷跡

が残ってしまったている。

女の子としてはキレイな身体のほうがいいんじゃないだろうか。それにもし傷が心臓にまで達していたら、生き返らせたときに死んでしまうということも考えられる。ゾンビウイルス的なので機能的な意味での生存を下支えしている状況なので今度は完全に停止する。

もう生き返ることはない。

ゾンビウイルスを消滅させる方法での回復は危険だ。

「つまり、選択肢はないってことか」

「ご主人様。私、この子を飼いたいですっ！」

「いや、飼っちゃダメだからね」

確かにマナさん好みの女の子ではあると思う。

正統派の日本人美少女という感じで、清楚で可憐だ。12歳の幼げな顔。そして黒髪ロング。瞳はパツチリしてて、どこを見ているかわからない視線はお人形さんのような印象を抱かせる。

「この子は、ボクの知り合いだからね」

「はえー。てつきりご主人様がこの子をお気に入りになさって、ご自身のモノにされるのかと思いました。夜な夜なゾンビ少女をお人形さんみたいを抱っこしていつしよに眠るとか最高かよ、です」

「うん。ボクはマナさんの中でどんな変態さんなんだろうね」

というか、自分基準で考えるのやめて。

人類はみんなマナさんみたいなロリコンじゃないんだから。

「とりあえず、ヒイロウイルスを与えてみるね」

「あ、お待ちください」

「ん？ なに」

「ご主人様のウイルスなら、わたしの中にもあるんですよ」

「んー。そうだね。今のマナさんの中にも、ヒイロウイルスはあるみたい。なんとなくだけど感じるよ」

距離が遠すぎたり、特に意識していないとそこまでは感じないけど、ちゃんと意識すれば、マナさんの中にも『ボク』を感じる。

ヒイロウイルスは『ボク』の中核的存在であり、『ボク』そのもので

あるから、相当に距離が離れていない限りは、その位置と量を特定できる。

「わたしの中にご主人様の素が、ぴよこぴよこと元気よく跳ね回っているんですね♪ あ…………ご主人様を感じる」

「うん…………まあそうなんだろうけど、変態的な物言いはやめてね」

「ご主人様で満たされちゃってるんですね」

「ボクの血液ほどは濃くはないけど…………」

そもそも、マナさんは血液ではなくてボクの涙と唾液から感染したタイプ。もともと親和性というか、ボクに感応するレベルが高かったから、人間っぽくなったのかもしれない。

いったいどれくらいの量があれば、ボクに感染するんだろう。

「ゾンビウイルスがご主人様に駆逐されればそれでよし、そうじゃなくても、ゾンビウイルスは残存するわけですから、補修を受けることが可能ですよ」

「うーん」

まあ、そうかもね。

つまり、マナさんが言いたいのは、先にマナさんがエミちゃんに感染を試みて、その後変化がなければ、ボク自身が感染させればいいと言いたいのだろう。

ゾンビウイルスはヒロウイルスに打ち勝つことはない。

これはもう何度も臨床しているから確定だろう。ただ、ゾンビウイルスもだけど、『人間』そのものの抵抗力から、感染しないギリギリの量というものは存在する。引つかかれただけじゃ、感染しない場合もあるからだ。

ヒロウイルスもゾンビウイルスの上位種ではあるけれども、その延長上にあるのなら、『人間』の抵抗力によって感染させられないということはありうるかもしれない。

特にエミちゃんの場合は、半ゾンビ状態でわりと粘ったからね。

「まあやってみてよ」

「やった。合法的に幼女にキスできる♪」

「え？ あ…………マナさん？」

「はい。なんででしょう」

「血を与えるんじゃないの？」

「え、違いますよ。こんなかわいい女の子が目の前にいるんですよ。なぜキスしないでいられるんですか？」

「むしろ、なんでマナさんがきよとんつて顔するんだろう……」

キスでもたぶん感染はするんだろうけど、それでヒロウイルスに感染するには相当程度の量が必要になるんじゃないかな。幼女のことが大好きな、感染させられたい系のゆるふわお姉さんは別として。

「感染するまで、少女の唇をねぶるように味わえるわけですね。役得役得う♪」

「やめたげてよお……」

エミちゃんが復帰したときにトラウマが残りそう。

ヒロウイルスに感染しきつたあとの記憶の状態は、命ちゃんやマナさんを見る限りは原則維持されると見たほうがいいだろう。飯田さんはあやふやな状態みたいだけど、それは身体の損傷が激しかったからかもしれない。

ともかく、美女に長時間変態的なキスをされまくっていると恐怖以外のなものでもない。男心が残ってるボクでさえ怖いものだから、普通の少女であるエミちゃんはきつとガクブルものだ。

「血でお願いします」

「えー」

ものすごく残念そうな顔になるマナさん。

いや、そこは残念がるところじゃないでしょ。

ただし、マナさんはボクのことをご主人様と標榜するだけあって、ボクが言ったことには逆らうことはない。

台所から切れ味鋭い包丁を持ってきて、マナさんはちよんと指先を切った。

ぷくつと膨れる赤のカタマリ。

それをエミちゃんの口の中に差し入れて、まるで赤ちゃんに授乳する母親みたいな顔になった。

変態的な言動さえなければ、わりと母性はあるよね。

「む。いま、ご主人様がわたしに抱っこされたいって思ってるような」
「思っでないけどね」

油断するとこれだけだ。

ボク自身が血を与えたときよりはずいぶんと時間がかかって、五分くらい経つてからようやく頬に朱色がさしはじめた。

血の気が戻り、胸のところにある傷はたちどころにすべすべの肌になる。

傷が残らなくてよかった。

そしてようやく――。

エミちゃんは恵美ちゃんに進化しました。

まあ、ゾンビも人間もボクにとってはどちらもたいした差はないんじゃないかと思いはじめているけれども、やっぱり、意思がある存在というのはそれだけで心があつたかくなる。

「お兄ちゃん！」

と、第一声はいつかのときと同じで。

恵美ちゃんは本当にお兄ちゃんのことを好きなんだなって思わせ
てくれる。

それこそが、光り輝くこころの断片だと思う。

「ハローワールド。ボクは緋色だけど覚えてるかな？」

「え。緋色ちゃん？ 私……確かユウちゃんに噛まれて、それから……意識がぼんやりとしてて。緋色ちゃんにいろいろしてもらって……。そうだ。お兄ちゃんはどうなったの？」

恵美ちゃんは慌てていた。

無理もない。覚醒したら訳のわからないところにポンつと意識だけが浮上して、今に至るわけだからね。ゾンビ状態というのは、こころが封印された状態のようだから、記憶には残っていても、そこに通常付随しているはずの情動がないのだと思う。恵美ちゃんの場合はもうすこし複雑で半分くらいは情動もあつたのかもしれないけれども。

「落ち着いて聞いてね。恵美ちゃん。こっちにいるマナさんが恵美ちゃんを連れてきてくれたんだけど、恭治くんは見当たらなかったん

だ」

「ごめんなさい。恵美ちゃん。わたし恭治くんのこと知らなかったんです」

マナさんが言ったとおり、ボクはホームセンターでの出来事をほとんどマナさんに伝えてこなかった。

凄惨といってもいいあの場所のことを、ふんわりしたお姉さんに伝えづらかったというのものもあるし、もはやただのゾンビにまぎれてしまった二人と出会うなんて、ほとんどありえない確率だと思ったからというのもある。

つまり——、ボクが情報伝達をしなかったミス。

ボクがお姉さんとながらうとしなかったミス。

そして、恵美ちゃんや恭治くんのことを諦めちゃったのが原因だ。

「お姉さんは悪くないんだよ」

「あ、ご主人様がおねえさんって久しぶりに言ってくれた♪」

「やっぱりちよつとは反省してください」

「はい。反省してます」

ペこりと素直に謝るマナさんにボクは何も言えなくなってしまう。

恵美ちゃんは事態についていけないのか、おろおろしている。

「えつとね。恵美ちゃんが今、ゾンビ状態から解放されているのはなぜかはわかるかな？」

ベッドでペタンコ座りして、恵美ちゃんは左上を睨むようにして思考する。

「えつと。緋色ちゃんがゾンビの高位種で、私のなかのゾンビウイルスが駆逐されたから？」

「そうだよ。だから、今の君はゾンビでもないし人間でもない。あえていえば、ハイロゾンビなんだよね」

「えつと、ご主人様。ひとつわたしから恵美ちゃんに質問いいですか！」

ビシッと手をあげるお姉さん。

かわいいんだけど、年上なんで、微妙にドキドキしちゃうね。

今もネグリジェみたいな露出度高い格好しているし、女子力は姫野

さんといいい勝負だ。

「どうぞ。 マナさん」

「えっと、 恵美ちゃん。 よく聞いてください」

「はい」

「まず、 着ているお洋服を脱ぎましようか」

「えっと……。 えっと……」

ちらちらとボクとマナさんを交互に見る恵美ちゃん。

わかるよ。 こんな変態さんでごめんね。

「マナさんが何を言いたいのかぜんぜんわからないんだけど」

ボクが代理で答えてあげた。

「ご主人様。 実をいうとわたしはすぐく気になることがありまして」

「はいどうぞ。 被告人マナさん」

「わたしは恵美ちゃんに血液をチューチューさせましたよね」

「そうですね。 往時であれば非常に危険な行為ですが、 緊急避難が認められるでしょう。 それがなにか？」

「吸血鬼みたいな感じであれば、 血を与えたら子じやないですか。 つまり、ご主人様の命令権もあるんでしようけど、 わたしも親になって恵美ちゃんにいろいろとアブナイお願いとかできちゃったりしないかなーって」

なるほど……。

ギルティだよ！

このお姉さん、 最初から狙ってやがった！

ボクじゃなくて自分で血を与えたのは、 そういった命令を自分の気に入った口りにしたかったからなのね。

なんという邪悪。 吐き気を催す邪悪だ。

「あ、ご主人様がほんとに怒ってる……。 ごめんなさい」

「すぐに謝るなら最初からしない」

「ごもっとも」

「それと人のこころを勝手にいじらないでよ。 これはボクのお姉さんへのお願いだからね」

「わかりました。 ご主人様は優しいです♪」

まあ、ボクも無意識に誰かを操ってるのかもしれないし、人のことは言えないけどね。ただ、さつき恵美ちゃんが困惑しながらも命令に従わなかったのは、やはり意志というものは踏みつけにされても、ねじ伏せられても、きつとどこかで抵抗するということなのかもしれない。

まあ、お姉さんは心の底では無理やり従わせる意志はなかったのかもしれないし、そのあたりはわからないけどね。

マナさんってボクにもだけど、なんだか子ども一般に甘そうだしなあ。

「ん。ご主人様がわたしをチヨロインだと思ってサーチしている!？」
「してません」

☆
||

「マナさん。ここらへんで恭治くんは見かけたの?」

「いえ。金髪の子ですよね? いなかったと思いますけど、正直なところ幼女以外はそんなに興味もないのでわからないです」

「そんな……」

恵美ちゃんは沈んだ顔になっている。

マナさんは慌てた。

「あ、違います。違いますよ。たぶん、わたしの記憶が正しければ金髪の子はいなかったと思いますね」

ボクとマナさんと恵美ちゃんは、軽自動車に乗って外にでかけている。

もちろん、目的は恭治くんを探すためだ。

最初に探したのは、恵美ちゃんを拾ったところあたりだけど、そこは佐賀市に向かう線路沿いの大通りで、ゾンビはまばらに歩いている。

ひとりひとり見ていつてるけど、恭治くんはいない。
人間の気配なし。

ハイブリッドの静かなエンジン音以外は、セミの音。

うだる暑さといういつものパターンだ。

「はー。そろそろ秋にならないかなー」

「秋になったらいろいろとおいしいものが食べられますからね」

ボクとマナさんは明るく話す。

というのも、車内の雰囲気を一掃させたかったから。

さつきから悲壮の顔で、外をじつと覗いているのは恵美ちゃんだ。

恭治くんが見つからずに焦っているのだろう。

ボクの能力はゾンビを個性としては識別できない。

ゾンビは液体的であり、量的なものだ。

その意味では、どことなく『ヒロ友』という概念と近いものがあるかもしれない。でも、そういった個性がない名無しのまじわりでも、ボクは結構人間を好きになっただけだね。

「恭治くんのスマホとかで探すのはどうかな？」

恭治くんが恵美ちゃんを見つけたのは、スマホのGPS機能だった。恵美ちゃんはパーカーの中に自分のスマホを入れていた。恭治くんが入れてくれたのだろう。恭治くん自身のスマホはどこにも見つからなかったから、本人が持っていると思う。

「無理だよ。もう時間経ちすぎてるから、たぶん電池切れちゃってる」

恵美ちゃんが泣きそうな顔で言った。

さすがに見た目年齢的には近くても、本来の年齢的には半分くらいの子に泣かれると、心が痛いものがある。

ボクとしてもなんとかして恭治くんを見つけないんだけど手がかりらしい手がかりがない状態だ。

恵美ちゃんのスマホは電源が落ちていたし、恭治くんのも落ちてると考えるのが妥当かもしれない。

「ひとつひとつ思い当たるところを探すしかないね」

「お願いします」

恵美ちゃんは窓ガラスにそつと手を触れて、溶けているように言った。寂しそうで切なそうで見えていられない。もしもこのまま見つからなかったら、恵美ちゃんはずっと一人のままだ。

誰かを思いやるというのは、孤独を知る者にとっては巧妙な罠なの

だろうと思う。きっと考えないようにしていた古傷を思い出すようなもので――、忘れていた花粉症を再発させるようなもので、その思いが自分が本当は孤独な存在だということを思い出させてしまうから。

だって、人は死ぬ。

ボクの両親も死んだ。誰かを好きになっても、誰かを死ぬほど愛したとしても、文字通り死んでしまえば、別れてしまう。二度と逢うことはできない。

想いなんてものは宙ぶらりんになってしまう。

お父さんもお母さんも死んで、ボクは空っぽになってしまった。

寂しくて寂しくてたまらないんだけど、その想いで胸が膨らんで爆発しそうなのに、何もできないままなんだ。

もしも神様なんてものがこの世界にいたとするなら、人間に愛する機能をつけたのは失敗なんじゃないかなって思う。

ボクは恵美ちゃんの隣に座っているけれど、手を伸ばすことすらできず反対側の風景を眺めるばかりだった。

ホームセンターの近くまで来た。

ゾンビはまだまばらにいるけれど、ホームセンター内のゾンビはいつのまにかいなくなっている。

祭りの後といった風情。

こうやって、人がいなくなった施設は廃墟になっていく。人がいなくなつた世界はきつとキレイで、最後にはボクも消えて、星だけが残るのかもしれない。

寂しいな――。

当然、恭治くんの姿もない。彼が人間のまま生還しているという可能性は非常に低いだろうと思う。体中に銃弾による穴が開いていたように思うし、きつと出血で死んでいる。

死ねばゾンビになっている。

そもそも彼が生きていたら、恵美ちゃんを独りにさせないだろう。

「ホームセンターの中にはゾンビはいないみたいだね」

「今度はここから恵美ちゃんがいたところまで走らせてみましょう」

か」

「うん。お願い」

ゆっくりとしたスピードで車は走る。

恵美ちゃんがいたところは驚くべきことに、そこから数キロも離れた先だった。傷ついたからだでそこまで恭治くんが運んできたのか、それとも恵美ちゃん自身がゾンビだったときに歩行してきたかはわからないけれども、ゾンビの秩序なき行進は思った以上の移動距離をもたらすみたい。

こんなに広がりがあると、もつと先に進んでいるかもしれないし、引き戻ってるかもしれないし、どこか人間のコミュニティを見つけて襲っているかもしれない。

「恵美ちゃん。なにか心当たりはない？」

「わからないよ……」

嗚咽が混じった声。

本当の12歳には、異常な事態が連続していて、ほとんど脳みそはグチャグチャの状態なのだろう。まだ車の中でおとなしくしている分、気丈なふるまいを見せているくらいだ。

「お家に帰りましょうか？」

「え、マナさん。もう諦めちゃうの。早いよ！」

「ではなくて、恵美ちゃんのお家とかに行くのはどうでしょうか？」

「あ、なるほど！ それだよ！ きつと恭治くんはお家に帰ってるんじゃないかな」

「そうかも。お兄ちゃんに背負われているときに、お家に帰ろうって言うって気がする」

もしかして……いや、きつとそうに違いない。

あの妹想いの恭治くんのことだ。お家で恵美ちゃんの帰りを待っている。

さすがに小学六年ともなれば自分の住所くらいは覚えているもので、ボクたちは五分も車を走らせると、すぐに恵美ちゃんの家についた。

いくつかの道路が車でふさがれていたから時間がかかったけれど、

ゾンビたちが障害になりえないボクたちにとっては、たいした問題じゃなかった。

大きな家だった。

周りの家より二周りほど大きく、金持ちの家って感じ。

こんな田舎の金持ち——なんてちよつと穿った見方をしちゃうけど、それでも十分にすごい。それに金持ちらしいゴテゴテさじゃなくて、どちらかといえば品が良い感じ。

田舎ってどこもかしこも同じような感じになっちゃうものだと思うけれど、わずかに都会の雰囲気を感じさせてくれて、新鮮な感じがした。

「恵美ちゃん。ここでまちがいない？」

恵美ちゃんはこくりとうなずく。

後部座席のシートベルトを丁寧にはずし、車から一步踏み出す。

そのまなざしは決意に満ちている。

「お兄ちゃん……！」

恵美ちゃんは半開きになったドアを開け放ち、暗い家の中に入っていく。

ボクとマナさんも続いた。

ゾンビなボクたちはわりと暗い中でもモノがよく見える。だから、薄暗い室内でもナイトビジョンゴーグルをつけているみたいに、夜目が利いた。

……どうしよう。

ここで悪い知らせがある。

いや、もうどうせ数秒後にはわかることだ。

わざわざ知らせるまでもない。

家の中にゾンビの気配がしなかった。

ひとりもない。

恵美ちゃんが駆け出し去っていったけれど、ボクは確認の意味でいくつかの部屋のドアを開ける。

ひとつのドアを開けると、誰かの遺体がふたつ、折り重なるように倒れていた。たぶん恵美ちゃんの両親なのだと思う。

ふたりとも頭のあたりが陥没していて、虫が湧いていた。ハエも何十匹も飛んでいて……あたりを我が物顔で飛びまわっている。

とても気持ち悪かった。

死体が、ではなく——。

死体にたかるといふ行為。死を蹂躪するといふ行為が——まるでゾンビめいていて。いや、こいつらも、小さいけれど、ゾンビ？

じゃないな。

ぜんぜんゾンビの気配を感じない。

小さくてもゾンビであれば、これだけ近ければ感じるはずだ。

ハエはゾンビにならないってことかな。

まあ、冷静に考えたらこんな小さな虫がゾンビになって襲ってくるとか、人間滅亡待ったなしって感じがするしね。

でも——気持ち悪いな。

下等か上等かで生き物を選び分けてはいけないって思うけど。

なんだか、ボクのお気に入りである恵美ちゃんのご両親に、ハエがたかっているというのが、正直言って不快だった。

だから——。

ボクは右手人差し指を地面に向けて軽く振る。

ハエは落ちた。一匹残らず。

急に発生した重力場に引きずられて、飛んでいられなかったからだ。ボクの周りを飛んでこなかったのはおそらく、無意識にシールドしてしまっていたからだろう。

「あれれ。ご主人様っていつのまにか超能力使えるようになってたんですねー。ハンドパワー♪」

「ちよっと前からできるかなっていう感覚はしてたよ」

「そのうち空も飛べちゃったりして？」

「たぶんできるようになるかもね」
でも、ボクにはまだよくわからないことやできないこともたくさんある。

ロールプレイングゲームみたいに着実にレベルアップしていつて
るけれども、

人のこころはわかりづらいし、コミュニケーション能力は万年回線不通。それどころかボク自身のこころすらどこにあるのかわからない。

ゾンビになって思い知ったのは、なにができるかではなくて、むしろなにができないかだ。ボクの手はちいさくて、できればみんなと仲良くなりたいんだけど、そうはならなくて、恵美ちゃんみたいな小さな女の子を笑顔にすることすらできない。無様なほどに無力で。いくら超常の力を持っていても、意味が無い。

それに――。

「いやあああああああああああ！ おにいちゃああああああん！」

例えば、部屋の外で響いた恵美ちゃんの声。

その理由をボクは知りえなかった。

ハザードレベル43

「恵美ちゃん?」

まちがいになく恵美ちゃんの声が聞こえた。

絶叫に近かった。危急を知らせる声だともいえる。

「どうしたんでしょう?」

「わかんないけど、マナさんはここでじっとしててね」

「わかりました」

普段おっとりしているマナさんも少し焦燥の顔をしている。

そうすると不思議なことにボクの心臓も早鐘を打つ。

嫌な予感――。

この家の中にゾンビの気配はしない。

だから、『お兄ちゃん』の意味がもしも恭治くんのことを指しているのであれば、本当の死体になって、生きていないということが考えられる。

そして――もう一つは。

お兄ちゃん助けて! という意味の場合だ。

ボクはマナさんに選んでもらったかわいらしいウエストポーチの中から無骨な拳銃を取り出した。

ちっちゃいボクにはお似合いのデリンジャーという銃だ。デリンジャーの発祥は護身にある。必要以上に殺傷能力がなく、さりとして銃は銃だから威嚇としての効果は高い。

銃を装備したのは、いままでの経験からとつさに必要なのかなと考えたから。

思い起こせば人間との邂逅で多いのは、ボクの資格好から侮られることが多いということだ。なにしろ見た目が小学生女児だからね。そりゃあなんとでもなると思っちゃうよ。

反撃されないとすれば、人は増長する。

あえて言えば、逆勘違い系ってやつかな。ボクってわりと人間よりも強いと思うんだけど、見た目は弱そうだし。そうなると交渉もうまくいかないというか。パワーバランスが崩れやすいのだと思う。

銃はいいかもね。抑止力として……。
あまり好きじゃない考え方だけど。

恵美ちゃんの声が聞こえたのは二階だった。

ボクは階段を静かにかけあがり、いったんそこで身をかがめる。

「静かにしろよ」

と、野太い声が聞こえた。

わずかに身じろぐのような気配がする。恵美ちゃんが抵抗しているのかもしれない。最初の声以外はくぐもったような音しか聞こえてこない。

二階にあがると、細い廊下が続いていて、全部で五つくらいの部屋が左右に散らばっている。声が聞こえた方向からわかる。

半開きになっているドアからは、恵美ちゃんの気配がする。

ボクは息を殺した。

わずかに重力を操って音をたてずに歩く。

横目に映るドアにトイレの文字が見えた。金持ちって二階にトイレがあるんだ、と場違いなことを考えながら進む。

部屋の前に着いた。

少し呼吸を整える。

中に人間がいるのはまちがいない。ボクにとってはゾンビなんかよりもよっぽど危険な相手。もちろん、すぐにそうやって敵認定するのは問題があるけれど、だからといって油断していい理由にはならない。

ボク単体だったらわりとなんとかなると思うんだけど。

ゾンビになったばかりの恵美ちゃんはまだそんなに力も強くないだろうし、大人の力には敵わないだろう。

だから慎重に行動する必要があった。

「ゾンビが寄ってきちゃうだろ……静かにしてくれ」

そして、ドアからこっそりと部屋の様子をうかがう。

見ると、そこには高校生くらいの男の子と、小さな女の子がいた。年の頃はひとりは18歳くらいで、まだ大学生にはなっていないみたいな感じ。もうひとりはボクと同じくらいの女の子。恵美ちゃんと

同じくらい年齢だ。

ちょうど、恭治くんと恵美ちゃんと同じくらいの年頃だといえる。なぜかふたりとも室内なのに白い安全ヘルメットをかぶっていた。高校生らしいブレザーに、女の子のほうは女兒用セーラー服。

涙を目に浮かべながら事態を見つめていて、小さなウサギのように思えた。

そのうちの高校生くらいの男が恵美ちゃんを羽交い絞めにして、口元を押さえていた。

恵美ちゃんは涙目になって、足をじたばたさせている。

これは危険だ……。

恵美ちゃんではなく男性のほうが。

恵美ちゃんに噛まれたら漏れなくゾンビ化するからね。とはいえ、小杉さんにやったみたいに関心を殺そうとしなければ、ヒロウイルス感染者は単に力が強くなって、ゾンビに襲われないという特性を得るだけだ。

そしてボクに逆らえなくなる——わけだけど。

ボクとしてはまったく見知らぬ人をヒロゾンビにしたくはない。

「恵美ちゃんから離れて」

ボクはできるだけ驚かさないように柔らかく言った。

銃口は恵美ちゃんを羽交い絞めにしていてる方の男に向けた。

正確には——腕のあたり。

「女の子がまたきやがった」

「え？」と女の子。

「なんだ。銃……か？ 本物か？」と高校生男子。

「本物だよ。ゆっくり離れて」

高校生男子は、恵美ちゃんからそつと手を離れた。

恵美ちゃんが泣きながらボクに抱きついてくる。

「緋色ちゃん……っ」

雛鳥みたいな感覚。守護らねばという決意を固く抱く。マナさんの気持ち少しわかっちゃった。

「まあそれはそれとして……。こんにちわ。ボクは緋色っていうんだ

けど、おふたりはどんな関係で？」

ふたりは顔を見合わせた。

「オレは五十嵐喜代徳。水鏡高校の三年。こいつはオレの弟で五十嵐新太だ」

「新太です」

え？

弟……なの？

スカート履いてるんだけど。しかも、めちやくちや似合ってるんだけど。

いわゆる性別不詳の男の娘って感じかな。

スカートを握ってもじもじしてるのがなんかかわいらしいんだけど。

弟なんだよね？

新太ちゃんはじろじろとボクを見ていた。

しげしげと観察されている気がする。

顔とか足とか、目はあわせてないんだけど、なんだか見られてる感じ。

アメリカかどこかのルールでは女の子を五秒以上直視したらセクハラになるんじゃないかってっけ。

なんだろう。この子もロリコンじゃないよね？

小学生くらいの見た目だし、その年齢の子がボクくらいの小学生を好きになったとしてもロリコンとはいえないかもしれないけど――。

いちおうの性別が男らしいので、少し警戒してしまう。

「あの……」

「はい？」

「もしかして終末配信者のヒーローちゃんだよな？」

「え？」

ドツキーン。

いつのまにか視聴者の数は五千人くらいになってたけど、佐賀県内にボクの視聴者さんがいるなんて。うそだろ。うわー。うわー。

はわわわ。はわわわわわ。

どうしたらいいんだろう。

ぼっちさんのときは、ボクのほうから能動的に出かけていったから心の準備ができてただけだけど、こんな偶発的な遭遇だと、準備もなにもない。

顔が熱くなってくる。

「ブイチューバーのヒロちゃんだよね？　ボク、ファンです」

まっすぐな言葉だった。曇ったり淀んだりするところのない気持ちのよい一言。挨拶は魔法だという言葉があるけれど、魔法みたいにボクの心臓がわしづかみにされる。

ファンとの偶発的遭遇。

好きですっていつてもらえたに等しい状況。

うれしい。とてもうれしい。ボクってちよろすぎるのかもしれないけれど、誰かに好きって言ってもらえたらうれしくなるのは自然でしょ！

視聴者様が見てる！

な、なにか答えなきや。

「あ、ありがとうございます！

噛んだ。

☆
||

「ふむふむ。ご主人様のファンですか〜。それは御目が高い」

マナさんがご主人様呼びするのが、なんだか恥ずかしい。

ボクは下手すると親子ほどに年が離れてるお姉さんに、ご主人様呼びさせてる痛い子みたいじゃないか。

「このご時勢に世界がまだ終わってないんだなと思うと、なんだか安心するんですよ」と新太ちゃん。新太くんって呼んだほうがいいんだろうか。謎だ。

容貌はめちやくちやかわいらしい女の子なのに、わりと、こうなんというか達観してる観があるな。

「なるほどなるほど……。ご主人様の容貌は世界で一番かわいらしい

ですからね。攻撃性を欠片も感じさせないという意味で安心感を抱くのは当然だと思います。あとで恵美ちゃんの赤ランドセルをきちんときっちり装備してもらいたい♪ 無限に記録に残したいです」

しないけどね……。

実のところマナさんはボクが何かそういう両手が塞がれないのなかなかって聞いたたら、最初に新品の赤ランドセルをうれしそうに持ってきて装備させようとした経緯がある。ウエストポーチはいわゆる補欠だったんだよね。

赤備えなご主人様が最強すぎるとか、意味がわかんないし、ゾンビだらけの世界を赤ランドセル背負って闊歩する小学生とかもつと意味がわからない。

そういつたわけで、赤ランは絶対拒否です。

「ボク、みんなしてガヤガヤしているのが好きなんですよね」

と新太ちゃん。

「わかりみが深い。みんなご主人様の作り出すヌクモリテイ空間に抱かれてしまえばいいと思います♪ みんなIQひくひくでゾンビになっちゃえばいいと思います」

なんかその言い方だと、ボクのIQもひくひくみたいだよね!?

「この子はアイドルかなにかやってんのか?」とお兄さん。

「あ、そうなんだよ。ゾンビハザードが起こったあとに唯一現われた新人バーチャルユーチューバーとして有名なんだ」

「ばあちゃん? まだ若いだろうが」

「お兄ちゃん……」

バーチャルユーチューバーはオタ向けコンテンツなのは確かです。

とはいえ、門戸は常に解放されていますよ!

男も女も高齢者も赤ちゃんも関係ありません。みんなファンになっちゃえという心境です。

貪欲なヒロちゃんです。

そんなわけで――。

みんなして、いったん部屋の中に集まったわけです。

ここはどうやら恭治くんのお部屋らしい。

よく見ると、男の子の部屋って感じがどこことなくしているし、恵美ちゃんもだからその部屋に帰ってきてるかもしれないって思ったんだろう。

残念ながら恭治くんはいなかった。

そして、五十嵐さんと新太ちゃんのふたりはゾンビに追われながらも偶然この家に逃げこんできたらしい。

「デケエ家だから、食糧もあるかと思ったんだ」

「どうせ死ぬなら一度くらいはいい家で暮らしてみたいって、お兄ちゃん言ってたじゃない」

「誰だっけそうだろう。ゾンビになるくらいなら、その前に自分のところに素直になるって言ったのはお前のほうだろうが」

「しようがないよ。なにかがまちがって——男に生まれてきたんだし。ボクはわりとかわいいほうだし」

「どうせ親も先生もゾンビになっちまったしな……いいんじゃないか？」

「うん。そうだね」

しみりしてしまった。

しかし、それ以上に悲痛の表情なのが恵美ちゃんだ。

さつきから体育座りをしていて、一言もしゃべってない。

「恵美ちゃん。恭治くんは帰ってきてないけど、また探すから。見つけ出すまで諦めないから元気だして」

「そうじゃないの」

恵美ちゃんは首を振った。

「なにか気になることでもあるの?」

「私……嫌な子だって思って」

「うん?」

「五十嵐さんも新太ちゃんも悪くないのに。お兄ちゃんの部屋を使ってるのを見て、やだなって思ったの。だって、ここはお兄ちゃんの部屋なのに! わたしのお家なのになって!」

「そういうことか……」

所有という概念は、この世界では綻びかけている。

モノを所有するというのは資本主義世界においては絶対の法則なわけだけど、その資本主義自体が壊れかけている今では、誰かが所有するというのは事実上の占有状態以外にありえない。

この家はボクのものなんて言葉はもう意味がない。

そのことは恵美ちゃんもわかってはいるのだろう。

だけど、恵美ちゃんもこの家に対する思い入れがあるのだろうし、そこに勝手に侵入されているのが嫌だったのだと思う。

むしろ、そういうことを素直に吐露してくれるところが、たまらなくかわいらしい。小学生らしい清らかな思考をしている。

「くっそかわいいですね。ご主人様」

「うん。そうだね」

とりあえず泣き止むまで頭を撫でてみた。

さらさらの黒髪はなんだか撫でがいがあって、高級シルクを触るときみだいに気持ちいい。ボクも結構撫でられているけど、その心理がわかった感じ。

「なんだかすまねえな」

五十嵐さんはおずおずと言った。

「いえ、おふたりは悪くないですよ。恵美ちゃんは感情の行く場をなくしちゃったんだと思います」

それに――。

正直なところ、恵美ちゃんもわかってると思うけれども――。

恵美ちゃんには亡くなった両親の遺体を見せたくない。

恭治くんを見つけるためにこの家に来たのはいいけれど、ボクがもしも恭治くんたちにもっと早く逢えていれば、恭治くんは両親を殺さずに済んだかもしれないんだ。

現実のご都合主義のように上手くはいかない。

死は――『どうしようもない現実』の代表づらしてやってくる。

ボクは恵美ちゃんには怨まれたくなかった。

だから、恵美ちゃんにはこの家ではなく、ボクの住んでいるアパートで兄妹仲良く暮らしてほしかった。

「ご主人様。おふたりにはどうしていただきます?」

「そうだね。やっぱり町役場かなあ」

今のところ近場で、人がたくさん住んで安全そうなところってそこくらいしか知らない。

「ちよつと待つてくれ。ゾンビはどうするつもりなんだ? この家にたどり着くまでに、何回か死にかけたぞ。正直、女子供でどうにかできるとは思えないし……あまり迷惑はかけたくない」

「それは、なんとかなるよ。ボクってゾンビに襲われないスプレーを開発したからね」

「なん……だと」

いや、その驚き方はちよつと……。

ウエストポーチから取り出したのは、いつもの消臭スプレーだ。

「これでゾンビに襲われなくして、役場まで安全に送り届けます」

「ガチで、ヒーローちゃんはヒーローちゃんなんだね」

新太ちゃんがひとりで勝手に納得してるけど、ボクとしても打算の気持ちが強いんだ。なぜって、恵美ちゃんはこの家がまた誰も住んでない状態になれば納得してくれるだろうし、ふたりももつと安全な場所にいけるなら文句はでないだろう。

ついでに役場のキャパ的にもトラックに食糧満載でいけばとりあえずのところは問題ないと思う。

「こんなこともあろうかと……」

マナさん曰く、いつか脱出するときのためとか、いぎというときのために食糧などの生活用品満載トラックはいくつか用意しているらしい。

マナさんって段取りつけるの上手いよね。

そんなわけで、話がまとまるのは早かった。

☆
||

とある道路のなんでもないとところで、軽自動車からトラックに乗り換え、ボクたちはみんな役場の近くまで来ていた。

「おまえたちは来ないのか？」

五十嵐さんがそんなことを言ってくれた。

「ヒーローちゃんたちも来ればいいのに」

新太ちゃんも名残惜しそうだ。

ただ、ボクとしては人間との距離感はとても難しい。

ホームセンターのときは、自壊といつてもいいけれど、その発端となったのはゾンビ避けスプレーのせいだし。

ボクってトラブルメーカー気質があるのかもしれない。

だからさ――。

「うーん。今はやめとくね」

「でも……。ゾンビ避けスプレーとかをもっと広めたら」

「新太よさないか。この子にも事情があるんだろう」

「なんだかもったいない感じがして……」

「ゾンビを避けることができるってのは強みだろうが、同時に人間どもがワラワラと寄ってくることもあるんだろ」

ボクは意味深に微笑むのみ。

核心としては、ボクがゾンビの親玉だつてことだけどね。

「本当に残念だなあ……。あの、今日のことって配信のときに言ってもいいですか？」

「うーん。ダメ！」

「ゾンビ避けできるとか、そういうんじゃないで、生ヒロちゃんに逢つたつてみんなに自慢したいな。こんなかわいい子に逢えたなんて、ボクすごくラッキーだし、誰かに知ってもらいたいよ」

「それもダメ……」

赤面するボク。

みんなに自慢されるとか、羞恥プレイそのものじゃん。

配信は公平であるべきだと思うよ。

幾人かは名前覚えただけどき。

「なんで？」

「新太！ おまえ、女の子相手に食い下がりがりすぎだぞー！」

「でも。こんなチャンスめつたにないよ。きつと、ヒロちゃんは世が

世なら売れまくってると思うけどな。今はゾンビだらけだから、視聴者五千人くらいだけど……。本来ならきつと十万人は越えてると思う」

「ありがとう」

褒められると素直にうれしいボクです。

だが——男だ。

「あー、ヒロちゃんがすごくかわいいな。ボクもヒロちゃんみたいにかわいい女の子として生まれたかったなあ」

「おまえも十分かわいいだろうが」

「お兄ちゃん、ありがとう。だからボクの自慢のお兄ちゃんなんだ。ボクのいいところをわかってくれ」

クソほほえましいな。

いかついお兄ちゃんはやっぱり弟に優しいし、女の子みたいな弟さんは兄のことを慕っている。

性別は、そんなに重要じゃないみたい。

とりあえず、ボクは新太ちゃんの手を握った。

「ボクのことを好きでいてくれてありがとう。えーっと、配信中には、ボクに逢ったこととかは別に言ってもいいよ」

「やったぜー」

見た目はマジで女の子なんだけど、このときばかりはちよつとだけ男の子っぽい感じでした。

「ご主人様が順調に小悪魔ムーブしてるようだなによりです」

「うっ」

マナさんに指摘されてしまい、ボクはしばらく自問自答することになった。

そんなに小悪魔してたかな。

最後の別れ際にボクは聞いてみる。

「あのさ。この子——、恵美ちゃんのお兄さんが行方不明なんだけど、家の前に来たことない？ 金髪のお兄さんみたいな高校生くらいの男の子なんだけど」

「あー……そうだな」

五十嵐さんは少しだけ考えていた。

そして本当に自然な感じで言うには、

「そいつは……『いっしょに帰ろう』って言ったんだろ。だったらひとりで勝手に帰るなんてことはないんじゃないか？」

その言葉は、とてもシンプルな構成だった。

複雑なことはなにひとつなく、とてつもなく単純。

いっしょに。

帰る。

そうだよ。確かにそうだ。ひとりで先に帰るわけがないんだ。恵美ちゃんのこと大事で大事でたまらない恭治くんが勝手にひとりで帰るわけがない。

ゾンビの意識は朦朧としているから、たぶん不意に近くにいた恵美ちゃんが消えたみたいないな感じだったんだろうけど、そうだったら――

「きつと意地でも探しまくるだろ」

五十嵐さんは新太ちゃんの頭をポンとひとなでする。

「オレもそうする。誰だって、妹や弟がひとりで泣いてるかもしれないって思ったら、そうするさ。それが兄だからな」

ボクはひとりっこだから、よくわからないけれど、五十嵐さんに体重を預けている新太ちゃんは信頼も根こそぎ預けてるみたいだった。

そうなんだろうと思う。

「お兄ちゃんは私を探してくれてるのかなあ……」

恵美ちゃんはぼろぼろと泣いてしまった。

「ああ、そうに決まっている」

優しく、でも力強く五十嵐さんは言った。

お兄ちゃんは本当に強いな……。

人間って、こんなにも強いのか。

ボクはウエストポーチをちらりと見る。

――人の想いは銃なんかよりもずっと強い。

ゾンビなんかよりもずっと強い。

だから、ゾンビウイルスなんか支配されずに、恭治くんも恵美

ちゃんを探し続けてると思う。

そうだよね。

ボクたちは恭治くんを探していたけれど、そうじゃないんだ。

恭治くんが恵美ちゃんを探しているというのが答えだったんだ。

ふたりを見送ったあと、行く先は決まっていた。

きっと、恭治くんはあそこにいる。

☆Ⅱ

死に絶えたかのような町並みをボクたちは進んだ。

人の気配がまったくない死の町並みは、ゾンビであるボクたちにとってはそれなりにぎやかだ。

人の世のように熱はなく。

死者というほどには冷めてもいない。

そんな中間の曖昧で中途半端な生を生きているけれど、ボクも恵美ちゃんも少なくとも人を思いやる心を持っている。

ついたのは恵美ちゃんが通ってる学校。

あの、ゾンビだらけの小学校だ。

恵美ちゃんはもう泣いていなかった。泣く暇があるくらいなら、恵美ちゃんは努力する人間だった。

嘆き崩れるより、自分が追い求めたものを、本当にほしいものを手に入れるために意志を貫く人間だった。

まだ小学生なのに。

その凜とした眼差しは、たぶんどんな人間よりも決然としてキレイだ。

本当に人間はバカみたいにキレイだ。

星のように一直線に降り注ぎ、気づいたらどこかに行ってしまう。泣きたくなるほど儂い。

階段を上がる。

沈黙が満ちた。

確信というほどに確信があるわけではない。

ボクには致命的なほどに他人の心を感じ取る能力がない。推測と計算と経験によつて、ある程度の予測はできるけれども、他者が一息に理解し納得できるほどには——心というものを信じきれない。

けれど恵美ちゃんは違つた。

恵美ちゃんはほのかに微笑んでいた。

まだわずかに十と二年しか生きていないのに、予言者みたいに恭治くんがそこにいるという確信があるみたいだった。

恵美ちゃんがいたロッカーに。

果たして、扉は開け放たれた。シユレインガールの猫のように不確定だった未来は確定した。恭治くんはそこにいた。

なぜ、とか。どうやって、とか。

そういう疑問が湧くけれども、きつと瑣末なことなんだろう。

恭治くんは土気色をした身体で、瞳はどこを見つめているかもしれないが、なんの意志も感じさせないほどにわけのわからない呻き声を上げていたが、そこにいたのは揺るがせない事実だった。

恵美ちゃんがそこにいるかもしれないと思つて待つていたのだろうか。

ボクが横目に見ると、恵美ちゃんの肩は震えていた。

全身が震える。

「お兄ちゃん……ただいまただいまただいまあ」

恵美ちゃんは恭治くんに抱きついた。

ここは恵美ちゃんや恭治くんの家じゃないけど。

恵美ちゃんの言葉はきつと正しいだろう。

なぜなら、恭治くんはずつと恵美ちゃんと言葉を交わすのを待つていたのだろうし、恵美ちゃんはようやく自分の帰還を知らせることができたのだから。

ただいまであつて。

だったら、おかえりって言わせてあげたいよね。

ハローワールド。ボクは恭治くんに問いかけた。

ハザードレベル44

思えばボクは周囲から浮いている子どもだった。

実際に、今のボクも浮いている。物理的にね。

場所はなんでもない路地。人の気配はないゾンビがたくさんたむろしている道をボクは進んでいる。プカプカと浮かびながら進んでいる。足をパタパタ動かしちゃう。でも、手や足をつかって浮いているわけではないし、進んでいるわけではない。空を飛んでいるとも言いがたい状態。つまるところただのモーションだ。

数十センチ地面の上をただよい、空中遊泳している。

理論は正直なところわからない。命ちゃんに話してもよくわからなかった。

でも感覚的などころはわかる。

念動力の類ではなく、もつと具体的な『ボク』自身による重力の操作。

石にも岩にも世界のすべてにボクを浸透させ、ボクで汚染し、ボクによって干渉する。ボクの干渉を受けているのは全生物だけでなく、全無機物も含まれる。

あの彗星の降り注いだ日から、もう少しで三週間ほど経過する。

その間に、周囲のハザードレベルは上がり、ボクのこの星に対する汚染も広がり続けている。

ホームグラウンド化。

星の植民地化が進んでいる。

いくつかの石もふわふわと周りに浮いていた。

くるくると回転するようにボクの周りを囲っている。

別に意味なんかなく、シールドでもなんでもないけれど、練習にはなるよねって話。

意思の力で、モノを動かす経験なんていままでなかったから、ボクには慣れないものだった。なんというか不可視の触手が動いている感覚なんだけど、実際に触手を動かしているというよりは、コントローラーを使って複雑なコマンドを動かしているような感覚なんだ

よね。

ボク自身を浮かしているのも、ボクの中にあるボクを操作しているように、肉体を直接動かすのとはちよつと違うボタンを押してるみたい。

けれど、この感覚は間違いなく楽しい。

空気を踏み台にしてジャンプしてみたり、すべるように滑空したり

空を浮かぶ感覚は慣れないけれど、本当に楽しい。

でも、あまり高く飛びすぎると怖いので、まだ練習中なのです。

飛翔と呼べるにはほど遠いかな。

「そんなわけなんだけど」

振り向くと、恭治くんがムスつとした顔をしていた。

手にはショットガンを握り、ボクを見返してきている。銃口は地面に向けている。

今は空気に浮かんでいる風船みたいな状態だから、恭治くんと視線の高さは同じぐらいだ。

あれから恭治くんは当然のことながらゾンビ状態から復帰した。

いまでは人間のようにモノを考え、意思を持ち、それから生きていく。

問題となるのは——確執。

ボクとしては過去のことは水に流してほしいんだけど、恵美ちゃんを殺したこともある姫野さんのことがどうしても許せないらしく、いつしよのアパートに住むのは嫌だと言ってきたわけです。

恵美ちゃんの家に戻るとというのが恭治くんの主張だった。

それはわからなくもないけれど、ボクとしてはできればみんな仲良くしてほしいわけです。同じヒイロゾンビ仲間なのだし。

あえて言えば彼らは『ボク』に近い。

ボクに一番汚染されているヒトたちだから。

「緋色ちゃん。恵美を助けてくれたことや、オレを助けてくれたことは本当にありがたく思ってる。でもそれとこれとは話は別だ。あいつは恵美を傷つけた。そんなやつといっしよにはいられない」

「恭治くんの言いたいこともわかるんだけど、事実上、今の恭治くんたちは人間でもないし、いわばヒイロゾンビみたいな感じなんだよね。ゾンビにも襲われないし、パワーも人間より上だし、最終的にヒイロウイルスに馴染んでしまえば、ゾンビ並の耐久力にもなる」

つまり——化け物。

端的に言えばそういうことだ。

そして、ボクたちは一人残らずそういう存在になってしまっている。

「もしも、恵美ちゃんと恭治くんがお家に帰ったとして、人間たちに襲われたときに対処できるかという問題はあるよね？」

「ゾンビになってるかなんて見た目からはわからないだろ。襲ってくるやつらはどこにでもいるかもしれない。人間やゾンビに関わらず邪魔だといって銃を撃ってくることだってあるかもしれない。ただ、姫野は——あいつには前科がある。だから、今知ってるなかではあいつが一番危険だ」

「うん。まあ……それもわかる。姫野さんのやったことはボクとしてもまちがってると思うよ。ただ、それも怖かったからだと思うんだよね。自分がゾンビになってしまうかもしれない。モノ言わぬ、思考のない存在になってしまうことの怖さがあつたんじゃないかな」

恭治くんには直接的には言わないけれど、あのとときの状況は、ある種の正当防衛的側面があることも否定できないと思う。

だから許せとまではいわないけれど——。

「緋色ちゃんは最初からゾンビにならないわけだし——、ゾンビよりも上位の存在なんだろ。オレたち『人間』のことは本当にはわからないよ」

恭治くんの目はボクを浮いているものとして捉えていた。

もつと言えば、異物を見る目。

いまの自分がゾンビになっているという認識はあるのだろうかけれども、まだ自意識を取り戻したばかりだし、そう思うのも無理はないかもしれない。

「ボクとしても、ボクの特徴が完全にわかってるわけではないから怖

いんだ」

「どういうことだ？」

「例えば、ボクの周りにいる子たちは、今のところ不調はないみたいだけど、ボクの傍にいないとどんな不調が現われるかわからないし、恵美ちゃんにいたっては血を与えたのはボクではなくてマナさんだし、今後も定期的に血が必要ってなったときに困らないかな」

もちろん、とボクはつけくわえる。

「恭治くんと恵美ちゃんのお家は知ってるから、時々は定期的に会いにくつもりだけどさ。例えばの話。ヒロウイルスがあるとき消滅してしまつて、君たちがただの死体になってしまうなんてことも考えられる。一分一秒を争うような事態も生じるかもしれない」

おそらくその可能性は低いと思う。

ヒロウイルスはゾンビウイルスと同じく増殖する。

ボクの感染領域は世界中を覆いつつある。

自然に消滅するなんてことはありえない。

でも、半ば嘘かもしれないけれど、恭治くんと恵美ちゃんにはボクのアパートについてほしかった。

なぜといたら難しいんだけど。

ボクとしてはやり直したかったからだ。あのホームセンターでの悲劇を繰り返したくないというか。

浅ましいことを言えば、ボクが原因で起こったことではないにしても、ゾンビがいるという状況がゆえに生じたことは間違いないから、今度は間違えたくなかった。

つまりは——贖罪。

ボクは恭治くんや恵美ちゃんを護りたいわけですよ。

ボクは浮いた状態から地面に降りたつ。

「どうかな。恭治くん。損はさせないつもりだし、姫野さんにはもう二度と同じようなことはさせないから」

姫野さんの恐怖は、ヒロゾンビになったことでかなりのところは抑制されていると思う。なにしろ、ボクの場合だけど、精神の安定力があるからね。完璧に調律されてる。みんなの無意識も若干影響を

受けているはずだ。

「言いたいことはわかったけど……感情的に納得するのは難しいかな」

「うん。いまはそれでいいよ」

「だいたい今日び、同じアパートに住んでるからってだけで、ご近所づきあいがあるとも限らないしね。姫野さんと恭治くんがギクシヤクしててもそこはしょうがないというか、ボクとしても残念に思うけれども強制はしないよ。」

「ただもう一度チャンスがほしいんだ。」

「今後いつしよに生きていくというチャンスをね。」

☆Ⅱ

「食人の性質はないよな?」

恭治くんの言葉にボクは面食らう。

「うーん。ゾンビだと確かに人間ってエサみたいな感じだけだよ。」

「どちらかというところボクという存在が広がっていくことに対する快感みたいなのはあるかもしれない。配信とかでファンが増えるとかの感覚と同じでさ。」

「ただ直接的に同化したという感覚は薄れてきてるかな。」

「ボク、あんまり人間とか食べたくないよ。おいしそうじゃないし。恭治くんだって誰かを食べたいと思う?」

「いや、ないな。ていうか、緋色ちゃんつてもっと幼い感じがしたけ

ど、素だと結構精神年齢高そうだな」

「ボクって大学生だよ。恭治くんと年そんなに変わらない」

「マジか」

「驚いてる。フフ。最近のボクは幼女扱いされたり、幼女っぽいムーブしてたり、果てはガバガバ行動規範みたいに言われたりしたけれど、いろいろと考えてる結果なんだからね。」

「なんかというか、ゾンビだからか女の子になったからかはわからないけれど、精神の構造が多層的になってる気がするんだよね。マルチタ

スク思考というか、そりやそうだよ。ゾンビという無数のセンサーが周りに広がっていて、ボクはそれらのセンサーに対して、無意識にしろ指令を出しているわけだから。

ボク自身としては、男は単線タイプな思考経路をしていて、集中特化には長けてる面があると思う。言ってみれば貫く力が強いというか。

逆に女の子はあらゆる感覚が敏感なんです。

「それにしても恵美と仲よいよな」

「そ、そりや女の子どうしだし」

「なるほどな……」

うーむ。元男ということとは黙っておこうかな。

恵美ちゃんがゾンビだったときに上半身裸にしたり、着替えさせたり、トイレ介助したりと、いろいろやっちゃってるからな。

恵美ちゃんは自分の身体すら動かせない状態だったからしょうがないとはいえ、ボクとしては罪悪感もあるわけ。

これからはご兄妹仲良く暮らしていただければ幸いです。

「緋色ちゃんのスタンスはどうなってるんだ？」

「スタンスって？」

「人間に対するスタンスだ。恵美に聞いたんだが最近配信もしてるらしいな」

「仲良くなりたいとは思ってるよ」

「だったら、ゾンビからすぐに人間に戻したらいいんじゃないか」

「遠隔で戻すにはレベルが足りないみたいだし、ひとりひとりゾンビに戻していくのも時間かかるしなあ。それにゾンビの数が少なくなると、一匹残らず駆逐されちゃうかもしれないよ。ボクたちも含めて」

「人間をそれなりに脅威とは考えているんだな」

「ボクはそんなに頭、お花畑じゃないと思います」

「オレとしては人間が一番こわいと思う」

恭治くんが歯を食いしばった。もういなくなってしまった人だけど、大門さんのことを考えているのだろう。恭治くんは最後には大門

さんに何発も弾丸を撃ちこまれて死んだわけだし、直接の死因はゾンビではなく人間だ。

人間の害意が一番怖いというのはわからないでもない。

「だいたい、こんなふうにならざるに外を気軽に歩くのもどうかと思うぞ」

同年代だとわかつたからか、恭治くんの言葉が気安なものになる。

それはそれでうれしい。ボクとしても年が近い同性の友達という感覚がある。飯田さんは年が離れすぎているし、他のみんなは女の子だしな。飯田さんなんか恭治くんが生き返ったときは、涙流しながら喜んでたしね。

金髪でイケメンで細マッチョな恭治くんは、わりと女の子にモテるタイプだろうな。うんうん。

そういうときはこういう言葉がいいに決まってる。

「ボクを護つてくれるんでしょ」

ボクはとびつきりの笑顔で言った。

「ば、バカ……空浮いてる女の子を護れるかよ。逆だろ」

「それもそうか。恭治くんが死んだら恵美ちゃんを悲しむから護つてあげるね」

「オレはそんなに弱くない……つもりだ」

おー、ツンデレじゃね？

と、ボクは思った。

☆
☆

せつかく外に出たんだから、ボクたちは生活物資でも持って帰ろうと思ってる。狙い目になるのは、大通りのゾンビが多いところだ。郊外のコンビニとかスーパーとかは軒並み全滅してると思ったほうがいい。

三週間ほどで、人間にもそれなりの動きがあったようだ。

餓死の恐怖は耐え難いものがある。ゾンビにかみ殺される恐怖よりも大きいかもしれない。それは人間が『選択した』結果の後悔より『選択しなかった』結果の後悔のほうが大きいからだ。

三週間もあれば、家の中にこもりきりというわけにはいかなくなる。

その結果、ゾンビの仲間入りした人もいるだろう。

大通りにはまばらにゾンビがいるけれど、明らかにこのごろは増えている気がする。避難所とかにうまくいけた人はともかくとして、もう既にゾンビのほうが優勢になっているのかもしれない。

具体的な数はわからないけれど、ゾンビはどんどん数を増やしていくし、人はどんどん減っていくわけだからね。ボクみたいな特殊例でもない限り。

そんなわけで、名も無いごろつきといったらいいか、武闘派といったらいいか、わかりやすく言えば北斗の拳のヒヤッハーさんみたいな人たちに囲まれているのは、運がいいといえるのだろうか？ あるいは運が悪いほうなのかな。

こういった事態になったのには、十分ほど前に話をさかのぼらなければならぬ。

☆Ⅱ

ほとんどのめぼしいものはデイパックの中に入れて、今日の収穫はいくつかのカップ麺と、缶詰を少し、500ミリリットルのペットボトルの水を何個かといったところで、もう帰ろうかということになった。

本格的に探索するなら、やっぱり車とかできたほうがいいしね。

今日は単に恭治くんと話したかっただけで、探索は付録のようなもの。コロコロとかについてたおまけみたいな感じにすぎない。

まあそれなりに思っているところは聞けてよかったよ。

恭治くんは人間を脅威とみなし、それなりに攻撃的などころがあるけれど、ボクにはそれが恵美ちゃんとかを護る盾になる面もあるから、一概に否定できないところだと思う。

言うまでも無いけれども、人間というのは総体的に見れば戦闘種族だ。とりあえずのところ、食べられないものはほとんどないし、雑食

性で、他の種族を選び好みし、嫌いな生物は駆逐しようとする。

恭治くんは人間の本性に近いってことだ。

そして、それは彼なりの正義があるってことも意味している。

誰かの正義が誰かの不正義みたいな言葉遊びじゃなくてね。

ちゃんとした、宇宙の絶対法則としての正義があるんじゃないかな。

いや、これも——言葉遊びか。

ともかくそんなわけで、少し彼と話ができてボクは満足です。

「緋色ちゃん。止まってくれ」

「ん。なに？」

「あそこのゲーセンだけど、なんかゾンビが集まってないか？」

ゲームセンター。

このごろ場末の小さなゲームセンターはめつきり姿を見かけなくなったけれど、ここ佐賀はわりと田舎なので、逆に生き残っているパターンがある。まちがってもボウリング場とかに併設されているデカイやつを思い浮かべてはいけない。

地元の高校生や大学生が通う。ちよつと薄暗い店内。

タバコOKだったところもあって、このご時勢に店内はや二臭かったり、死ぬほど古い格闘ゲームとかがおいてあったりする。

もちろん、引きこもり体質なボクはほとんど行ったことありません。

友達の雄大に誘われて無理やり連れてこられたこともあるけど、正直なところなんか怖かったし、二度と行くかと思つたものです。

そのゲームセンターは路地裏に入りかけてる微妙な立地のところに立っていて、なんのデザイン性もない立方体のような作りをしていた。ドアはなんかの事務所みたいにスライド式で、両側からぴつたりと閉められている。

そこに何人かのゾンビが店内を伺うように、ドアに張りついていた。

確信はないけど、なにかを探しているような感覚。

ふうむ。

ゾンビは店内にはいないみたい。
つまり——、そういうことですね。たぶん人が中にいるんだろうな。

「人間が中にいるんじゃないかな？」とボクは言った。

「助けなくていいの？」

「べつにどつちでもいいんだ」

だって、仮に中の人がかまれてゾンビになっても、食い散らかされない限りは、ひとまず元に戻すことは可能だからね。正確にはヒイロゾンビとして意思や心があるように見えるというだけのことだけど、ボクにとっては人間と大差はないというか、心があるように見える。

つまり、中にいる彼らを助けるといふ選択肢は、ないわけじゃないけれど、そこまで積極的に動くほどのことでもない。彼らの恐怖を想像することはできるけれども、なんてことはないよ。ゾンビなんて。ちよつと噛まれてみなよ、と言いたい。え、ダメですか？　そうですか。

「恭治くんとしてはどうなの？」

「べつに……、さつきも言ったとおり、オレは人間のほうが怖いと思ってるし、接触する必要はないんじゃないか？」

「じゃあ、無視しよう」

そういうことになった。

けれど——。ボクたちが退散する前に、屋上からのつそりと黒い影が出たかと思うと、かなり大口徑のライフル銃で、ゾンビを撃ち始めたんだ。

さすがにボクもびっくりして、両耳をふさいでしまった。

恭治くんも同じだったが、さすがにその人影に向けて銃をかまえることはしなかった。彼が狙ったのはあきららかにボクたちではなく、ゾンビだったから。

ゾンビの幾人かは哀れにも二度と物言わぬ軀になってしまった。

もう彼らが生き返ることはない。

「おい。おまえら。ゾンビが来る前に中に入れ」

下のドアが開いて、まだ若い二十代くらいの男がボクたちを手招い

た。

つまり、これはボクたちの姿を見かけて助けてくれようとしたってことだよね。

ゾンビに襲われることのないボクたちは当然、そんな行為に意味はないわけだけど、人の好意を無碍にするのも気が引けた。

「誘われるように店内に入り――」。

そこで四方八方から銃を突きつけられることになったわけです。はい。ヒヤッハーさんでしたとき。回想おしまい。

ハザードレベル45

「ねえ。どういうこと?」

ボクは適当に聞いてみた。まだ一応ボクの勘違いという可能性もあるからね。知らない人間は人間であつても怖い。つまり、ボクたちのことを知らない彼らはボクたちのことが怖い。

例えば、見た目超。プリティなボクも、もしかするとサイコパスのナチュラルボーンキラーかもしれないし、恭治くんなんかショットガン持つてるからね。

今も恭治くんは刺すような視線で周りを睨みまわしているけれど、こんな事態になったのはホイホイついていったボクの責任だ。ごめんなさい。ボク、配信で気が緩んでたみたい。

もう、人間のルールというか常識はここまで変わっているなんて思わなかった。

「おい、その男。そのショットガンは本物だよな。銃口をおろせ」

ボクの目の前にいた背格好の大きな男が言った。ぎつと見ただけでも、八人以上が回りを取り囲んでいる。恭治くんも下手に動くことはできない。店内はゲームのデモプレイの音楽と光が溢れていて、薄暗いディスプレイみたいな雰囲気だ。

ヨガフレイムとか聞こえたから、このご時勢にストツツ置いてあるよ。すげー。

恭治くんは男のひとりにショットガンを取り上げられ、ニット帽のお兄さんに背中にリボルバー銃を突きつけられていた。

ボクはポーチの中にデリンジャーを入れてるだけで、見た目丸腰だったから、特に何も言われることはなかった。

「こいつ……すげえかわいいな」

「ガキじゃねーか」

「でも久しぶりだからな。べつにガキでもよくね?」

「すげーかわいい。オレ好み。生きててよかった」

「おまえロリコンかよ」

「どうせみんなやるんだろ。だったらいつしよじゃねえかよ」

頬の緩みを隠しきれていない。下卑た視線がボクの太ももとか、二の腕とか、顔とかを舐るように見ている。

ぶしつけに男の腕が伸びてきたので、ボクはひよいっと躲わす。数ミリ程度の紙一重の回避だったので、「あれ？」と疑問の声があがった。

ていうか、おさわり禁止ですよ。

それにボクはまだ最初に疑問に答えてもらってない。

「あの一、なにしたいの？」

と、ボクはもう一度聞いた。

「頭お花畑ちゃんかよ。この状況でもわかんねーのか？」

「言葉が通じないゾンビかと思っちゃったよ。話せるなら話して？」

一応、言い分は聞いてあげるからさ……」

「なめた口きくんじゃねーよ。ガキが。いいか、オレたちはこの世界を生き残ったエリートなんだよ。ビビッて家の中でブルっちまってる腰抜けとは違う。ゾンビが溢れたときにまっさきにオレたちがしたのなんだと思う？」

「えー、陵辱とか？」

「ちげーよ。武器だよ。武器をかき集めたんだ」

「手に持つてるのって本物？」

「ああ、そうだよ。自衛隊の駐屯地が近くにあるだろ。何人かは犠牲になったけど、生き残ったのが俺らだ。いいかいお嬢ちゃん。いいことを教えてやる」

髭面の太った男が言う。

「所詮、この世は弱肉強食だ」

「人間なら、もっと高尚なこと言えないの？ 例えば倫理とか道徳と

か、法律とか——情けは人のなんとやらとか」

「知るかよ。倫理や道徳で飯が食えるか」

「それって、政治家の人もよく言ってるよね。おじさんは政治家に向いてるかもね。もう政治とかなくなっちゃったかもしれないけどさ」「バカにしてんのかよ！」

結構本気なレベルの（もちろん人間の大人のという意味だけど）平

手が迫ってきている。ボクのほつぺたをぶつたたいて生意気な口を利けなくしてしまおうという判断らしい。横にいる恭治くんが前に出るのを感じたけど、ボクはあえてみんなよりも先に動いた。

男の手を途中で握った。

「いでっ……」

本当はねじきる程度はできそうだけど、適当なところで離れた。

どうせ——同じだ。

行き着くところはすべて同じ。

「うーん。つまり、ここにいるみんなはボクみたいな弱そうな人間を襲って、食糧とかを得ているってこと？」

「そうだよー」「武器も持ってるみたいだったからな。それはオレたちにとつちや生命線だ」「女にも飢えてたからな。女はあまり外に出やがらねえし……」「あー、くっそかわええな」「おまえ本当にロリコンだったのな」

「えっと、最後通告しておくけど、ボクは実を言うためつちや強いですよ。みんなたぶん死んじゃうかも」

「拳法でもならってるのかな?」「どれくらい強いのかお兄さんに教えてくれよ」「抵抗してくれるほうがオレ好みだわ」「はやくあつちの休憩室いこうぜ」「男はどうする?」

「あー、いらねえよ」

そんな軽い物言いだった。

パンツという撃発音が響いた。

暗かった店内は明滅した光に満たされ、恭治くんは驚きに目を見開いている。背中からゼロ距離で撃たれた恭治くんはかなり大きな穴をおなか側に開けてしまっていた。

「あ……」

真っ赤に染まる。すぐ横にいたボクの頬にも赤くて生ぬるい液体がかかった。

そして恭治くんはそのまま地面に倒れる。

慣れていないんだ。

恭治くんはゾンビ状態である自分に慣れていない。

だから、その程度の傷がもはや傷ではないことに気づいていないんだろう。

人間だったときのクセみたいなのが抜け切らないことってよくあることだからね。

それにしてもこいつらって、笑っちゃいそうなくらい外道で、逆にわかりやすい。ここまでシンプルな生き方だと逆に哲学的なのかなとすら感じてしまう。

じゃあ、彼らの哲学に——『弱肉強食』に従ってみようかな。

この悪意と自己尊厳で凝り固まった人間未満の存在をどう処分したらいいだろうか。弱肉にしても煮ても焼いても食えそうにないし、そもそも食べる気すら起こらない。

飯田さんが殺されたときみたいになボクはさほど怒りというものを覚えていない。だって、彼らの行動理念について、ボクは毛ほども価値を感じていないから。

いてもいなくても同じ存在だから。

恭治くんを傷つけたという一点のみでもって、その活動を停止させる程度にはゴミクズの存在だなと感じてるけれど。それだけだ。

こんな感覚——は、よく知っている。
虚しい。

——ストターのFIGHT!という音が遠くで聞こえた。

「お兄ちゃん死んじゃったね。ひひっ」

「元から死んでるよ」

ボキっという鈍い音が近くで響いた。ボクが誰かの腕を握りつぶしたからだ。

「あああああぎやあああああああ」

絶叫がうるさいなと思った。強いて似ているとすればセミの音が輪唱しているような、そんな感じのうるささ。その場でうずくまった男を蹴り上げ、十メートルくらいぶっ飛ばす。ゲームの筐体にぶち当たった男は画面を突き破った状態で止まった。

周囲の怒号と、ボクに対して銃を構える気配がする。

ボクは身を低くして、いくつかの銃弾を躲わす。同時にウエスト

ポーチから銃を取り出して、適当に二連射した。

ひとつは誰かの肩にあたり、ひとつはふともを貫いた。火力が全然足りないね。

そもその話、こうやってフレンドリィファイヤをしてしまう位置関係に陣取るのはどうかと思う。

みんなそれを怖がってわずかに躊躇しているし、ボクに対して有効な攻撃を加えられていない。

とりあえず、そこらの銃をすばやくもぎとり、肩を負傷した男に連射してみた。

「ばぁーん！ ばぁーん！ ばぁーん！」

ん。今回は完璧！ これは終わり。

もうひとりの銃弾が髪の毛を掠めた。回転するようにびよんと飛び上がって、首のあたりにチョップ。けびつという変な音がして、その人は首が変な形にずれたまま地面に倒れふした。

今度は別の意味で男達の動きが鈍くなっている。

恐怖——。彼らにとってみれば、得体の知れない化け物と対峙しているのだから、さぞ、恐ろしいだろう。でも、人間らしさを今最も感じてるんじゃないかな。

ボクとしては、お気に入りのマナさんから選んでもらった服が血だらけになるのがちよつと心苦しい。あとで怒られちゃうかな。いや悲しむかな。

そっちのほうがボクには恐怖だ。

その間にもボクはもうひとりの腕を無造作に握って、鞭をしならせるような感じで、

「やめっ」

人体を持ち上げコンクリートの床に叩きつけた！

頭蓋から身体からグチャ。グチャと銃に匹敵するほどの大音量が響き、二回ほどやるととりあえず動かなくなった。これは終わった。次。

「ひいひい。いやだ。助けて。助けてください」

ニット帽を被った若いお兄さんが失禁しながらガタガタ震えてい

た。

「ボクとしてはどっちでもいいんだけどさ……、恭治くんもやりた
いんだって」

そのニット帽のお兄さんは恭治くんに後ろからつかまれていた。
いつのまにか取り戻したショットガンを背中からゴリつと押し当て
られ、お兄さんの顔はこれ以上なく青く染まる。

「ごめんなさい。あやまりま——」

ドンという音に、ボクはちよっぴりビツクリしてしまふ。

腸が花火みたいにとびちるんだもん。さすがにねえ。

残ったふたりが同時に店の出口に駆け出す。ボクは適当に筐体の
ひとつを持ち上げて、エイッと投げつけた。ひとりはそれに当たった
けど、もう片方はお店の外に脱出成功したみたい。

恐怖のせいかわり方が変。

適当な銃で撃つてもいいんだけど——。

筐体の一部がコンクリートに叩きつけられて瓦礫になっている。

ボクはそれらを浮かして、男に向かつて叩きつけた。言ってみれば
天然のショットガンみたいな感じかな。タイルみたいな大きさのそ
れが身体中にあたって、男はバランスを崩して倒れた。

「うあつ——」

「ゾンビさんご飯ですよー」

あとはもう見る必要もない。

店内に残ったひとりが夏だというのに冬みたいに震えていた。

ボクがゆらりと振り向き小首をかしげると、恐怖のあまり弛緩し
きった顔のまま、オートマティックピストルをボクに向けた。

ボクはじつと見つめる。

「試してみてもいいかもしれないよね」

何をというと、極微量のゾンビウイルスでどこまで人の行動を制御
できるか。ゾンビを操れるのと同じレベルでは無理っぽい。でも、躊
躇という感情を極大化することはできる。鉛を握っているかのよう
に銃を重く感じるだろう。

ガタガタと銃口が震えているけれども、彼の引き金は引かせない。

「なんなんだよ！ おま、こんなの聞いてねえよ。こんなのがいるなんて」

「ごめんなさい」

ボクは素直に謝ることにする。言っただけでなかったからね。

「ボク、ゾンビなんです」

蒼白な顔がさらに青白くなっていくのを見て——、ボクはにこりと笑う。

周囲は既に惨憺たる状況で、文明らしい文明は火花が散って消えてしまった。あるいは赤よりも赤い、わりとよく滑るような液体で覆われてしまっていた。

「し、死にたくない……」

太ももを撃ち抜かれた男は、じきに出血多量で死ぬだろう。

「介錯してやろうか？」

恭治くんはおそらくまるきり百パーセントの善意からそう言った。人間は死ねばゾンビになるのだから、頭を破壊しない限りいつかの時に復活再生させることはできる。

だから、ボクは頭部を完全破壊するようなことはしなかった。

ちよつと画面に突っ込んだ最初の人はやばかったけど、見てみたら大丈夫。無事死んでるけど、頭までグチャツとはなってる。

ふう……。

それから五分後に男が死んでゾンビになって元気に動き出したのを確認したら——忘れてはならないもうひとり。

★
||

「あいつらはしやぎすぎじやないか？」

オレが見張りをやっているのはやつらの使い走りだからじゃない。オレはオレしか信用しないからだ。

誰だつてこんな世界になれば寄り添いたくなる。それはわからななくてもない。だが、きつと、裏切られる。

蹂躪される。

いいようにされる。

戦争を考えてみればいい。

なぜ戦争が起こるのか。

人間は他人を殺したい生物だからだ。

自分のいいように他人を扱いたい生物だからだ。

自分のことしか考えず、他者を思いやる心なんてものは存在しない。存在するのは他者を思いやれる優しい人であるというステータスだけ。

そのステータスがほしいがために、皆が優しい人を演じている。

食虫植物の花を考えてみればいい。例えばラフレシアという妖花を。虫を誘いこむために花弁は妖しい色香を放っている。それと同じで、皆優しさの擬態をしているにすぎないのだ。

チラリと、先ほどの少女の姿が思い浮かぶ。

妖花というのはああいう娘のことを言うのだろう。華奢で天使のように無垢で穢れのない少女。しかし、その俗世からの穢れから隔絶している様が、妖しいように思われた。

そんな夢想も——オレの娘のことが思い浮かんだからかもしれない。

死んだ娘。

さきほどの少女はオレの娘と同じくらいの年齢だった。

いまごろ少女は幼い性を裂開され、やつらの慰み者になっているだろう。

もはやそのことにはいかなる感情も抱かない。

オレの娘は人間に裏切られ死んだ。

ゾンビになった娘を撃ち殺したとき、オレのころもどこかで氷河期の氷のように凍てついてしまった。何も感じなくなつた。どんなにクソみたいな犯罪行為に加担していても何も感じない。オレは生きているのか？

そんなオレが同じような本性のやつらといっしょにいるというのはお笑い草のなにもでもない。

どうでもよかった。

他人なんか信用するものじゃないし、いつしよにいるからといってオレはやつらと組んでいるとか、仲間であるとかいう意識はない。やつ等はただの戦力にすぎない。ここでオレが見張りをしているのも、バカで考える力もないやつらが、こんなゾンビだらけの街中で狂態をさらしているのが原因だ。

どちらもピエロ。

やつらが最後の一匹になるまでせいぜい最後まで見届けてやろうという気分だ。

と――、店の中から、ひとりが飛び出し、ゾンビの餌食になった。訳のわからない事態に、自然と奥歯を噛み締めることになる。それから額に汗。

異様な事態に久方ぶりの緊張感を覚えていた。

「下に下がるか」

「いやその必要はないよ」

振り向くと、天使がいた。

いや、そういうオカルト染みた言い方はオレの好みじゃない。だが、そうとしか形容できない。

先ほどの少女がふわりふわりと空を浮かんでいたのだ。

その微笑に、本能的な恐怖を感じ、オレは銃口を向けた。

一秒のロスもなく発射する。

「わわっ」

銃弾は反れた。はずしたのかと思ったが、違う。

なんらかの不可視の力で防がれた？

オレはすぐさまリロードする。このスナイパーライフルは一発のリロードタイムが遅い。その代わりに、貫通力は通常の拳銃の比ではない。

火力はある。

だが、もはや致命的とも言っていない時間だったようだ。

少女は一瞬で距離をつめ、オレから玩具を取り上げるみたいに銃を持ち上げた。

銃身部分を粘土細工をこねまわすみたいに曲げて、地面に叩きつけ

る。

腰元に拳銃があるが、まったく勝てる気がしない。

ふん。なんだこいつは。ゾンビの親玉か？

「なあ……オマエさん。階下のやつらは皆殺しにしたのか？」

「うん。皆殺し」

「はは……ははははは。そいつはいい」

「なにがおかしいの？ よくわかんないんだけど」

「オレの娘はあいつらみたいなのやつらに殺されたんだ」

きよとんとした顔をしていた。

説明しなければよくわからないだろう。

「あいつらって、あのヒヤツハー系？ な下に居た人たちのことだよ
ね」

「そうだ。あいつら自身じゃないがな」

「ますます意味わかんないんだけど？」

ウエストポーチからミス&ウエツソンを取り出し、ころころともてあそぶようにしながら、少女は言った。

オレが死ぬのは規定路線なのだろう。それはべつにいい。

ただ、死ぬ前にこの不思議な少女に説明くらいはしてあげたい気分だった。

「ゾンビハザードが起こったとき、オレは娘といっしょに郊外に逃げ出した。家は街中であって、ゾンビの数は多かった。けれど、オレは運がよかったんだろう。警察官の仕事をしていたし、銃も運よく手に入れることができた。カバン一杯分ぐらいは持っていったよ」

オレは話を続ける――。

手に入れた銃を使って、オレは娘を護りながら逃げまわった。ゾンビに襲われながらも噛まれることもなく、傷ひとつなく逃げ切れたのは単純に運がよかったからだろう。

なんとかか山の中にあるログハウスみたいなところにほうほうの体でたどり着いたとき、オレと娘の体力は限界だった。

なにしろ車を使っても、銃をつかっても、音が引き寄せてしまう。だから、体力勝負で走るしかない。

山の中腹までくれば、人はおらず、ゾンビもいないという考えだった。

そこには人がいた。

男が五人。ワンダーフォーゲル部の集まりらしい。みんな容姿は普通だ。誰一人狂態を演じるような男たちには見えなかった。

やつらはオレと娘を暖かく迎え入れ、オレは疲れと緊張から一時的に解放され、泥のように眠っていた。

娘は——やつらに犯されていた。

月灯りがわずかに灯る暗い夜に、窓辺に娘のシルエットが映った。狂乱の彼方に銃を撃つ音が聞こえる。

もがくような声と腕を突き出すような動きが影に映った。

はしやぐような笑い声。

やつらはオレの持ってきた銃を奪い、首をつった娘に——ゾンビになった私の娘に無邪気に銃弾を撃ちこんでいたのだ。

ゾンビは頭を一撃されない限り活動を停止することはない。与えられた玩具が早々に壊れないのを、やつらは喜んでいるようだった。

娘は裸だった。

「そいつらは殺したの?」

「ああ、殺したよ」

「まだ殺し足りなかった? ボクが代わりに殺しちやつてごめんね。おじさん」

「ふん。いいさ。所詮、オレも同じ穴の貉だしな」

オレは溜息をついた。

復讐の第二幕もあつけなく終わり。オレの人生も終わり。

たいした未練もない。

「殺してほしい?」

「ああ……殺してくれ」

「わかったよ」

少女がすたすたと近づいてくる。

オレを殺すという明確な意思があるはずなのに、彼女の表情に悲痛さはない。比較的言葉は通じていたはずだが、やはり化け物か。

至近の距離に少女が近づく。手を伸ばせば届く距離になって、少女の端正な顔立ちが、恐ろしく人間離れをしていて、吸い込まれるようなルビーのような瞳に釘付けになる。本能的な恐怖。死への恐怖。

少女は滅びの天使なのか？

オレは——、目をつむり。

目の前にきた少女に銃口を向けた。

「くそつたれの神様によろしくな！」

オレは引き金を引いた。

☆Ⅱ

「びつくりしたよ」

銃弾はボクの目の前で静止していた。

原理がわからないものを感覚的に使っているだけだから、わりと怖い。不可視のシールドのようなもので覆ってるように見えるけど、本当は銃のほうに浸透させた『ボク』が自律行動制御御の一環として運動エネルギーを死滅させたただだからね。たぶん、そんな感じですよ。どんな感じだって言われても説明できませんのであしからず。

わかりやすく言えば弾ちゃん止まって！とお願いした感じなんだけどね。

それにしても神様によろしくって、ボクは神様の関係者じゃないんだけど、この人は何を勘違いしているんだろう。

もはやがっくりとうなだれて、けだるそうにこちらを見ている。

「世の中は理不尽だな」

「そうだね。まあわかるよ」

生きたくないって言う人を強いて生かす意味はあるのかな。

安楽死とかにもつながってやることだけど、殺人だよ。普通に。

まあさっきの殺人とどこが違うのかといわれると話は難しいんだけど。

ヒヤッハーさんたちは弱肉強食という彼らの流儀に合わせた結果、ああいうふうな結末になったわけだけど、ボクの目の前にいる自殺し

たがってる人にはなんともいえない感じだよ。

たぶんすべてがどうでもいいと思つて、自分の死すらどうでもいいと思つてそう。

娘さんが死んだということ、この世界がクソゲーと化しちやつたとか、そういう感じなんだと思う。

ボクとしてはそれならそれでいいよと思うんだけど――。

こころというものを完全に消し去ってしまうことに関してはやっぱり抵抗がある。だからいつかの時のためにバックアップはとっておきたい。

だから。

ボクは躊躇なく銃を撃った。

できるだけ痛くないように、でも頭以外の重要な器官を狙つて。わりと難しい。ただの拳銃だとなかなか人間は死なないみたい。

「ありが……」

十発以上撃つて、ようやく彼は終わった。

数分後にはむくりと起き上がり、元気に歩き出した。

「そーいや名前聞くの忘れてた」

まあいいか。正直なところ生きる気力もない人に興味も湧かないよ。

神様というか運命を呪っているだけの人にそれほどの価値は感じない。

できれば、こーう前向きに元気に生きてほしいものです。今のゾンビ状態な彼とか元気があつて大変よろしい。歩みを止めない不屈の精神。どこまでも生き抜くぞというネバーギブアップなところとか、生きてるときより素敵！

特にゾンビは自殺なんかしないからね。よきかな。

ボクはふわふわと空中を浮いて一階に降り立つ。階下では恭治くんが待っていてくれた。

「さあ帰ろう」

「にしても、銃で撃たれても死なないなんてな」

恭治くんは自分の身体をペタペタと触っていた。

銃撃で穴が開いたおなかもふさがり、いまではすっかりシツクス
バックに割れた腹筋が見える。血は失ってるはずだから、鉄分はとつ
たほうがいいと思う。

それと――。

「頭撃たれたら死ぬからね」

「試したのか？」

「ゾンビもののお約束だしね」

さてと。帰ったら配信しよつと。

ゲームオーバー。

ハザードレベル 46

そう言えば、雄大から最近連絡がないな。

ボクは唐突に思った。

ピンチのときには電話してって言ってるから、ピンチじゃないんだらうけれど、青函トンネルは抜けられたんだろうか。

ボクは気になって、電話してみた。

P R

「あれ？ おかしいな」

おかけになった電話番号は電波の届かないところにいるって言われちゃったよ。

うーん。もしかして、いまトンネルを抜けようとしているのかな。

少し心配。

まあ、雄大のことだ。きつと、いまトンネルを抜けようとしているんだと思う。

トンネルの中は、電車の通る道だから、人が入れないようにしてるはず。

だから、ゾンビもないはずって言ってたし。

バイクで移動してれば問題ないはずだ。

「だよね？ 命ちゃん」

命ちゃんは今日もボクの部屋に遊びに来ていた。

最近ほぼ日参なので、小学生の頃に戻った感がある。

あいかわらずボクにベタベタしてくる命ちゃんだけど、今日は大きなソファに寝転がってリラックスしていた。肩ひもズレてるよ？

「雄兄いのことですから、べつに心配はしてませんけど、新幹線でも三十分くらいはかかりますからね。だいたい50キロメートルの距離です。少し『く』の字に折りたたまれてるように海底側に向かって突き進み、今度は地上へ上がるように勾配を登っていきます」

「ふうん」

五十キロといったら、歩いても一日くらいで走破できる距離だよ
ね。

「雄兄いなら勝手にピンチになって勝手に助かりますよ。きつと」
なんて投げやりな。

「命ちゃんは心配じゃないの?」

「心配に決まってるじゃないですか。でも心配してもしかたないですよね」

「そうだね」

「心配してどうにかなるならいくらでも心配しますけど、そうじゃないなら自分ができるところをしたらほうがマシです」

「自分ができるところ……」

ボクが近くにいれば、雄大を助けることはできると思う。

例えば、ゾンビを操って襲わせないようにしたり、ゾンビウイルスを除去したり、最後の最後にはヒイロウイルスに感染させて、ボクのお仲間にしちゃったり。

でも、距離が離れていたらボクの力はかなり減殺される。

どこまでのことができて、どこまでのことができないのかが曖昧だ。

「そう言えば前の配信で、先輩は歌をうたってゾンビを沈静できるか試そうとしましたよね」

「あー、うん。あれね。結局、どこまで効果があったかはわからないけどね」

「いちおう、私ためしてみましたよ」

「え、うそ?」

いつのまにやったんだろう。まあ、命ちゃんだって自分の生活があるだろうし、四六時中ボクといっしょにいるわけじゃないからな。

ゾンビライフ的には誰かといっしょに行くのを推奨しているけれど、それも絶対のルールってわけじゃない。ゾンビがいれば、そのゾンビたちが護衛になってくれる面もあるし。

「私も先輩ほどではないですけど、ある程度はゾンビが操れるようですよ」

「へえ。そうなんだね」

「それでこのアパートの裏手のあたりに、適当にゾンビを集めてみま

した」

「ふむふむ」

「それで例の先輩の歌を聞かせてみたんですけど」

「なんだか恥ずかしいな」

まあ配信している以上、プライバシーもクソもあるかよって話だけ
ど。

「見事に動きが鈍くなりましたね」

「ゾンビってもともと動きは鈍いんじゃないかな」

「そうですね。本当のところはエサがないとわかりようもないんですが……、感覚的には命令待ちといいますか、待機状態になってるようでした。ただし、先輩の声が聞こえる範囲じゃないと効果がないよう
ですし、歌が終わるとすぐに活動再開しちゃってましたけどね」

「逃げる時間が稼げるくらいかな」

「まあそういうことです。あとは先輩が楽器を使った場合にはどうなるのかとか知りたいですね。ゾンビはいったい先輩の何に反応しているんでしょう」

「そんなのボクにもわからないよ」

だいたい物を浮かしたり、ボク自身が浮いたりしてるのも謎だし。

明らかにウイルスとか細菌ってレベルじゃねーぞって話で。

「私にはなんとなく理解できませんけどね」

すたすたとボクのほうに歩いてくる命ちゃん。

ボクは勉強机に座っていて、ソファからの距離はわずか一メートル
かそこらしかない。

見下ろされる形になる。

うん？　なんか顔が怖いんですけど。

「み、命ちゃん。顔が近い近いよ。むぎゅ」

突然キスされちゃいました。

デープではないけれど、ほっぺたとかじゃなくて普通にキスで
す。

いったいなんなんですかこの子は!?

「ふう……」

「ふう、じゃないよ！ どうしたの命ちゃん」

「ゾンビは先輩そのものを求めてるんだと思います」

「ボクそのものを？」

「そうです」

やや冷たい指先が、ボクの二の腕あたりに添えられて、少しずつ上がっていく。

手触りを確かめるようにゆっくりと。

肩のあたりまで到達した指は、今度はボクのほっぺたに向かった。すりすり。

肌の感覚を確かめるように、命ちゃんの手のひらが何度も行き来する。

ボクはふるふる震えちやう。

「んにゆ。なにすんの命ちゃん」

「感覚的なものなので正しいかどうかわかりませんが、おそらくヒイロウイルス自体は私たちやゾンビにとって禁断の果実みたいなものです」

「禁断の果実って、リンゴみたいなの？」

「そうですね。知恵の実とかそういうのと同じく……生存には必要ないのですけれども、甘美で、おいしそうで、人を魅了してやまないものです」

またキスされちゃった。

み、命ちゃん。

ちよつと、その、嫌じゃないけど。なんかくすぐったい感じなんですけど。

「わかりますか。先輩」

「わ、わかりません！」

今日はマナさんもないし、他の人も遊びに来てないし。

つまり、ボク……襲われそうで怖いです。

というか、もう襲われちゃってると言ってもいいのでは!?

「少なくとも私にとってヒイロウイルスは至高の嗜好品ですね」

至高の嗜好品って、もしかしてギャグで言ってるのか？

いや違う。目がマジだ。

「み、命ちゃん。怒るよ！」

「先輩、考えてもみてください」

「なに？」

「マズローの三大欲求つてあるじゃないですか」

「あるけどさ……確か、食欲、性欲、睡眠欲だっけ」

「私としてはそこに緋色欲をつけたしたい」

「命ちゃんの場合、ほとんど性欲だよね？」

「性欲でもなんでもいいんですよ。生理的なレベルで私は先輩を欲求してるんです」

「性欲もてあましてるよね？」

「いま確信したんですけど、先輩とキスすると死ぬほど気持ちいいです。これってキスが気持ちいいというものもあるんですけど、それ以外にもたぶん物理的に関係ありますよ。なにか先輩的な成分を補充しているんだと思います」

「血がほしいの？」

「できれば欲しいくらいです」

「命ちゃんが吸血鬼になっちゃった」

「血じゃなくてもいいです。先輩の体液ほしいです。もっと体液交換したいです」

「変態っぽく言わないで」

ギラギラした瞳が怖いです。

なんか変だよ。今日の命ちゃん。

「先輩は自分がどれだけ甘いのかわかっていませんね」

「うーん。そうかなあ」

「こんなゾンビだらけの世界で、こんなかわいい女の子が歩いていたら、そりゃ襲いたくなりますよ。いくら私がネット方面で防いでも、リアルの行動は防ぎきれません。前にも言いましたよね」

命ちゃんが心配していたのはボクのことだったのか。

こんなふうに擬似的に何度も襲ってみせるのは——キスもわりとアウト気味だとは思っただけど、先日、人間に襲われたことを言っ

るんだろう。血まみれの姿で帰還したボクは、すぐにマナさんと命ちゃんのふたりがかりでひん剥かれて、お風呂に入れられてしまった。

べつに怪我してたわけじゃないから、たいしたことじゃなかったんだけど、それでもふたりに心配をかけたのは確かだ。

確かにこの前のゲームセンターでの出来事は、ボクもうかつだったと思うよ。

でも、人間がどんな行動をするかってわからないし、その自由を制限したくはないんだ。

それにボク自身の行動も縛られたくない。

「そう思うんだけど……」

「先輩はもともと人間の自由を侵害しない方向で動いてますけど、できればコントロールしたほうが互いに損害が生じないで済むのではないでしょうか」

「人間のこころを勝手にいじるのはよくないよ」

「こころそのものを物理的に動かすのではなく——、例えば、人の恐怖や希望や、いろいろな感情を操って、導いてあげたらどうですか？」

「それは洗脳っていうんだよ。命ちゃん」

それもボク的にはNOなんです。そもそも導くって、上位の存在みたいにナチュラルに捉えているけど、ボクはそんな高尚な存在じゃないよ。ただの人間だ。あるいはただのゾンビだ。

そこらへんを闊歩しているゾンビとそんなに変わらない。

すごく幻想的で甘い考えかもしれないけれど、できれば、みんな仲良く、手をとりあつて、笑い合つて、のんびり暮らしていけたらいいなつて思ってる。

先日はさりげなく十人近くの人間を殺しちゃったけど。

「先輩がそれでいいならそれでいいんですけどね」

ちゅ。

と、つえばむようなキス。

躊躇くらしいしてください。

「熟れたトマトみたいな色になる先輩がかわいいですね。私みたいに

したいようにしてしまう人間がどんどん出てくると思いますよ。それでもいいんですか?」

「なるようにしかならないよ」

「じゃあ……、先輩。私となるようになりませんか?」

「ふえ?」

「私といっしょに気持ちよくなりませんか?」

「ふえええええええ」

命ちゃん、ついに覚醒するの巻?

ドキドキしちゃう。

べつに命ちゃんのこととは嫌いじゃないし。

お兄ちゃんは妹みたいな命ちゃんに欲情したりはしない——とはいえ。

中学生くらいになった頃から、命ちゃんがすごく女の子として魅力的になってきたのも事実だ。

ドキドキしたのも一度や二度のことじゃない。

「さあ、先輩……。いっしょに間違えましょう」
なにを間違えるというのでせうか。

☆
||

ふわわ。ふわわ。

とてもきもちいいです。

体中がプカプカ浮いているみたい。

この感覚。ものすごく久しぶり。

「ふむ……わりと、自分で自分がコントロールできなくなるみたいですね」

命ちゃんも顔が紅かった。

白い肌に朱がさして、とろんとした瞳をしている。

まだ命ちゃんは高校生なのに、こんなことしていいのだろうか。

飲酒——。

そう、飲酒だった。

ストゼロと呼ばれる高アルコール度数の酎ハイを何本か開けてしまっていた。

世界は既に崩れていて、ボクたちはいろんなくびきから解き放たれてしまっている。

だから、高校生の命ちゃんがお酒を飲んだとしても、それをとがめる人はいない。

「命ちゃん。なんだかすごくボク……ハイってやつんだけど。酎ハイだけに。酎ハイだけに！」

ハハハハハ。

やばい。激ウマギャグじゃない？

「先輩がお酒酔うとこんな感じなんですね。かわいいです。先輩」

酎ハイだけに。ちゆうです。

ちゆう。んむ。ちゆうです。

命ちゃんの顔が近くて、ボクはお膝の上に乗っかっている。

「ああつ。すごい。脳みそかき回される感じ。わたし生きててよかった」

ボクをキメてしまう命ちゃん。

ボクをキメるってすごいパワーワードだな。

ともかく、お酒を飲んでキスするとすごく気持ちいい感じ。

「命ちゃんはかわいいな」

よしよししてあげる。

すると、命ちゃんもボクに身体を預けてくれた。

うん。いい子。

たまらんね。後輩として、妹分として、こんなに素直な子はそうはいないよ。

そんなわけでテンションがあがってきたボクは、その場で命ちゃんをポイッと投げ捨てて、配信することにした。うん。配信しよう。配信。ツブヤイターで告知して、定例じゃないゲリラ配信だ！

「ああ、先輩ひどいです」

「なに言ってるの命ちゃん。この気持ちをはやくみんなに伝えなくちやー！」

「にやろーん。みんな元気してる？」

『なんだいきなり始まった？』『元気してるぞ』『なんだか白いお肌がピンク色じゃない？』『風邪ひいてない大丈夫？』『ヒロちゃんがなんか色っぽい感じ？』

うむ。みんなボクのことをよく見てくれているな。

めざといぞ。

「みんな大好き」

『唐突に告白された件』『オレの妹がかわいすぎる』『いつからお兄ちゃんだと勘違いしてた？』『私の娘がかわいすぎる』『いつからパパだと勘違いしてた？』『そろそろ古参面してもいいよな？』『最近モリモリ視聴者増えてるな』

そう、ボクの視聴者さんなんだけど、このごろはなぜか伸びまくってる。

みんな生活とか苦しいだろうに、よく生存に関係のない配信とか見てるなー。

ふふ。ぶにぶにでございます。

「みんなボクの配信を見てくれてありがとう。顔紅いのはさつきお酒飲んだせいかもしれないな」

『マジか』『小学生がお酒飲んじゃいけません』『酔っぱらってるのか』『幼女が酔っぱらうとか世も末だわ』『ヒロちゃん、大丈夫？』『ええい。後輩ちゃんは何をやってるんだ』

「実を言うとボクは大人なんです。だからお酒を飲んでも大丈夫！」

『ヒロちゃんは合法だった？』『ヒーローちゃんは合法』『合法……好きです』『おい。いきなり小学生相手に告白すんな』『酔っぱらいの戯言は聞いてはいけない』

「むう……みんな信じてないな」

『こんなにかわいい子が合法ロリなわけがない』『ヒロちゃんは普通に超絶美少女だぞ』『普通に小学生くらいの女の子だよな』『体重30キ

ロだし』『実際あったことあるし』『マジかよ』『お前、謎の美少女スレ知らないのかよ』

ん？

謎の美少女スレって何？

「なーに？ 謎の美少女スレって」

『ヒロちゃん。有名になってるよ』『S県方面で何人かがヒロちゃんに会ってるみたいだけど？』『ゾンビ避けスプレー開発した天才科学者』『天才美少女とか最高かよ』『ヒロちゃんのお歌を聞かせたらゾンビから逃げられました』『ヒーローちゃんが英雄になりつつある件』

「えー、試した人いるんだ？」

お酒のせいで、頭がぐるぐるしてきた。

あんまりよく考えられないよ。命ちゃんどうにかしてっと思うんだけど、ダメだ。命ちゃんはボクのベッドで、ボクの枕に顔をうずめて、グースカ寝ていた。

URLが提示されたので、とりあえずそこに飛んでみる。

スレッド名は……。

【天使？】佐賀に舞い降りた謎の美少女について議論するスレ【ゾンビ？】

1 : 名無しの美少女 : 20XX (月) XX : XX

最近、佐賀のあたりで天使みたいな美少女が出没しているんだけど、知っている人いるか？

2 : 名無しの美少女 : 20XX (月) XX : XX

おまえ、あたま中ゾンビかよ？

3 : 名無しの美少女 : 20XX (月) XX : XX

天使って具体的にどんな？ アイドルみたいな？

4 : 名無しの美少女 : 20XX (月) XX : XX

容貌としてはプラチナブロンドのロングヘア。小学生くらい。ルビーアイらしい。

5 : 名無しの美少女 : 20XX (月) XX : XX

妄想がすぎますぞ

6 : 名無しの美少女 : 20XX (月) XX : XX
ソースだせよ! ソース!

7 : 名無しの美少女 : 20XX (月) XX : XX
ゾンビに噛まれて頭おかしくなったの?

8 : 名無しの美少女 : 20XX (月) XX : XX
美少女アイドルに会えないのツライ

9 : 名無しの美少女 : 20XX (月) XX : XX
はよ出せやソース! この無能が!

10 : 名無しの美少女 : 20XX (月) XX : XX
ウェブカメラにアクセスした画像がこっちにある。
角度的な問題で顔は見れないが。

11 : 名無しの美少女 : 20XX (月) XX : XX
マジかよ。おまえすげえな。

12 : 名無しの美少女 : 20XX (月) XX : XX
後ろ姿だけでも美少女だとわかる。有能!

13 : 名無しの美少女 : 20XX (月) XX : XX
手のひらぐるぐるんワロタw

周りにゾンビいるな。なにこれ? この子ゾンビなの?

14 : 名無しの美少女 : 20XX (月) XX : XX
その子だけ、ブレてるだろ。明らかにゾンビより速い。

というか、カクカクしてる動画がもう一個あってだな。
明らかに世界新記録ねえそうなスピード出してるぞ。

ニンジャガールかもしれん。

15 : 名無しの美少女 : 20XX (月) XX : XX
ゾンビに襲われない美少女とか夢想がすぎますぞwww

16 : 名無しの美少女 : 20XX (月) XX : XX
この子つてもしかしてバーチャルユーチューバーのヒロちゃん?

17 : 名無しの美少女 : 20XX (月) XX : XX
なに? ヒロちゃんって。

18 : 名無しの美少女 : 20XX (月) XX : XX
ご存知ないのですか? 彼女こそ終末から配信を始め、バーチャル

ユーチューバー界を駆け上がっている終末配信者ヒーローちゃんです。ちなみに小学生。かわいい。

19 : 名無しの美少女 : 20 XX (月) XX : XX
ゾンビ好きなただのかわいい小学生だろ。知ってる。

20 : 名無しの美少女 : 20 XX (月) XX : XX
おまえらロリコンだな。オレも知ってるよ。

21 : 名無しの美少女 : 20 XX (月) XX : XX
いつのまにかヒロ友だらけじゃねーか。

オレもだけど。

22 : 名無しの美少女 : 20 XX (火) XX : XX
で、そのバーチャルユーチューバーが謎の美少女の正体なの？

23 : 名無しの美少女 : 20 XX (月) XX : XX

小学生の女の子を詮索するとか、ここは恐ろしいインターネットです
すね

24 : 名無しの美少女 : 20 XX (月) XX : XX

ゾンビに襲われないのが本当なら希望がみえてくるな

25 : 名無しの美少女 : 20 XX (月) XX : XX

ゾンビに襲われたところを変な女の子に助けられたことならある。

26 : 名無しの美少女 : 20 XX (月) XX : XX

マ？ 詳しく。

27 : 名無しの美少女 : 20 XX (月) XX : XX

車で逃げようとしたら普通に事故って追い詰められた。

ゾンビに囲まれて死にそうになつたら助けてくれた。

車のドアを手づかみで破壊してたぞ。

ゾンビよりもその子のほうが怖いと思った。

28 : 名無しの美少女 : 20 XX (月) XX : XX

ボスゾンビなんじゃね？

29 : 名無しの美少女 : 20 XX (月) XX : XX

車のドア破壊ってソースあんのかよ

30 : 名無しの美少女 : 20 XX (月) XX : XX

証拠はないけど、オレも妻も子どもも生きてる。

夢とか幻とかじゃないのは確かだ。

うーん。

これってあの夜の時のことだよな。

確かボクにあだ名がつけられてうれしかった日に、たまたま親子水入らずで絶賛ゾンビに襲われてた人たちを見つけて、助けたことがある。

しかし、ネットの時代って本当にすごいな。

ゾンビだらけの世界で、実際に行き来ができなくても、情報を飛び交わせることはできるんだ。

汗がコメカミあたりをたらりと垂れた気がした。

ど、どうしよう。

ボクのこと半ばバレちゃってる？

どこまでバレてるんだろう。

『ヒロちゃんが固まっちゃった』『思いっきり焦ってらっしやる』『身バレが怖いんじゃない？』『僕は配信をやめちゃわないか心配です』『でもそろそろ電気も切れそうだな。そっちのほうに心配だよ』『配信見れなくなるのヤダー！』『ヒロちゃん様だけが希望なんです』『お願いやめないで。いい子にするから』

「へへ……こりやまた……」

せっかくみんなに見てもらえるようになったんだから簡単に配信はやめたくない。

でも、ボクが万が一ゾンビだとバレるのも怖い。

そんなボクがとつた行動は――。

「みんな、ボクのことをその謎の美少女さんとか思ってるみたいだけど、ひ、人違いじゃないかな。こんな、怪力とか持ってないし――ふ、ふへへ」

あ、ヤバイ。

なんか気持ち悪くなってきた。

逆流してきたアルコールさんが、皆様の前にお目見えしたがってる。

『なんだこの大根ちゃんは』『ヒロちゃんは大根ちゃん』『白いしな。全体的に』『白玉団子ちゃんだしな』『かわいければそれでよい。それでよいのじゃ』『ゾンビ避けスプレーってマ？ オレン家に一本届けてくんね？』『ゾンビ避けスプレーはブラフでゾンビなんじゃね？』『ヒロちゃんゾンビ説は最初のころからあったからなー』『でもヒロちゃんなら食べられてみたいかも』『むしろ、ヒロちゃんを食べたい』『あれ？ ヒロちゃんの顔が真っ青になってね？』『お気持ちが悪うございますか？』『お身体に触りますぞ』『変態にしか聞こえない』

「あ、あの……ちよつと、久しぶりのアルコールで、ボク、ダメみたい。ちよつと離席するね」

うぷ。

げ、限界。

とりあえず、ボクはトイレに駆けこんで、ナイアガラ滝を現出させた。

吐いたら少しスッキリした。

ゾンビボディの意外な弱点。それはアルコールだった？

普通に飲み過ぎただけだ。

ともかく、ボクが謎の美少女だということだけはバレちゃいけない。

もうバレバレな気がするけれど、バーチャルな存在であるヒーローちゃんは、いまここにいるボクと一致することはそんなにはないはずだ。

何人かはリアルなボクに会ってるはずだけど、提示されたウェブカメラの映像は粗いから一致することはたぶんないと信じた。

それに、ボクに会った人たちは、比較的穏当な関係を結べたと思ってるから、ボクの不利益になるようなことはあんまり言わないんじゃないかな。

甘い考えかな。

ぐるぐるするよ。頭が痛いような気がする。

「ああ……みんなごめんね。なんだか二日酔いになっちゃったみたい」

『大丈夫？』『おまえらがいろいろ言うからだぞ。幼女はそつと愛でるもの』『幼女はそつと愛でるもの。名言やな』『わたしロリコンになります』『でもさ。ゾンビ避けスプレーとかあるんだったら配ってほしくね？』『簡単に配れるようなもんじゃないんだろ。それくらい察しろ』『おまえらヒロちゃんがバーチャルな存在だつてこと忘れすぎ』『おちつけ、俺たちはひとつだ』『ヒロちゃん様にみんなひれ伏せばいい』

「みんなにもう一度いっておくけど、この謎の美少女さんはボクじゃないからね」

『わかってる』『そういうことだな』『理解した』『でもヒロちゃん気をつけてね』『ヒロちゃんがゾンビ美少女でもヒロ友はやめない』『だからそれやめろつていってんだよ。バカ』『ヒロちゃんは小学生のただのかわいい女の子』『あ、でもみんなヒロちゃんボイスでゾンビがおとなしくなるのは本当だからな。鉄柵のあるところでオレ試してみたんだわ』『どう考えてもゾンビ避けスプレーとかいうレベルじゃねーぞ』『謎の美少女じゃなくてもすぐくね？』『やつぱり天使説を推したいわ』

ダメだ。

どうにも話の流れをコントロールできない。

ん？ コントロール。そうか。ボクって人間のこころをいじりたくないって思ってたけど、配信をしていると、多少なりとも人のこころをいじってるんだ。

洗脳して自分が有利なように押し流そうとしてしまってる面があるのかもしれない。

でも、こうやって川が氾濫するように、人の心も暴れ狂う寸前なのは――。

悪くないとも思った。

ボクよりも人間の心のほうが強いってことだから。

そして人のこころは見えていて楽しいから。わくわくするから。クオリアがスパークしている。みんながボクという孤独な円盤を見つめてワイワイ騒いでいる。

花火が綺麗なのは、みんながその花火を見つめるからだ。

花火が綺麗だからじゃない。

ひとつのことにみんなが心をあわせるというのは、きつと花火よりも綺麗なことなんだ。

それはいいんだけど――。

『こっちのURLにヒーローちゃんもとい謎の美少女動画まとめられてるぞ』『え、これ、マジか』『最新の動画ヒロちゃんもとい謎の美少女、完璧に浮いてるじえねーか。完全に天使』『くっそ。後ろ姿しか見えねえ。カメラ仕事しろ』『街頭の固定カメラに無理言うな』『後ろ姿で確実に美少女とわかる天使仕様』『やべえ。超能力かよ』『合成じゃないの?』『ウェブカメラはリアルタイム出力だから、合成できません』

ごまかしきれるかが心配です……。

ハザードレベル47

パンデミック。

ヤバイ。パンデミックだ。

ゾンビとかそんなじゃなくて、情報のパンデミック。

つまりは——炎上。

燃え盛る炎のように、鉄火場のように、熱狂がこの場を支配していた。

『ヒロちゃんがいけばゾンビ怖くない?』『ヒロちゃん様どうぞ弱き我らをお救いください』『幼女に救われるオレら』『どうやったら声でゾンビ避けできるの?』『ゾンビだから?』『ちげーよ。悪魔の首魁だから追い出せた理論は、大工の小せがれが開いた宗教でも否定されてるぞ』『全力不謹慎』『宗教の話はNG』『もうどうせBANなんかされねーよ』『我らをお救いください』

「あの……みんな、もうちよつとおちっこ?」

『はい。落ち着いてます』『落ち着いて幼女の声に耳を傾けるのじゃ』『天使さま』『これが落ち着いていられるかよ』『歌試してみました』『これで外に出られるんじゃない?』『動きが鈍くなるだけだから過信は禁物』『スマホで歌流しながら探索すればいいんじゃない?』『こうなりや残った物資は早いもの勝ちだよ』『そうやって出て行ったやつほど戻ってくる確率は低い』『お隣さんは初っ端それで死んだわ』『ヒロちゃん自身はゾンビがなんで落ち着くかは知ってるの?』『知ってたふうではあつたが』

「うーんと……その、ゾンビがなんで落ち着くかは謎です。謎パワーです」

『謎パワーで視聴者数がもりもり増えてます』『ゾンビみたいな増殖率だな』『ヒロちゃん佐賀に居るの? 他の県には来ないの?』『いままでない活気だな。どこに潜んでたんだよ』『隣の家に住んでるゾンビがおとなしくなりました』『私、ゾンビに噛まれたあとヒロちゃん様に治療してもらったんだ』『ちよつと流れ早すぎんよ』『あ、今なんか重要情報流れてね? こっこの板に書きこんでくれないか』『うん

わかったー』

あれ？

いま、一瞬知覚できたのって、図書館で会ったあの子かな。文字がありえないぐらいのスピードで流れていってるけれど、強化された視覚ならギリギリで追いつける。

思い出されるのは、たいした昔でもない。一週間かそこら前の出来事。

ボクは気まぐれにゾンビに噛まれた子を治してあげた。

べつに黙ってるように言った覚えはないんだけど、少しずつ情報が補完されていってるような。

謎の美少女スレのほうには、その子が図書館に逃げこんだ経緯から丁寧に書きこんでる。

ゾンビに噛まれたことやゾンビになりかけたことや、もうひとりいた女の子のことが好きなこととか。死ぬことよりその女の子をひとり残すのが怖かったとか、意識がなくなったあと、どんな具合で治ったのかとか、手のひら触れてハンドパワーとか、ボクが天使みたいに見えたとか、気持ちのおもむくままに書かれてある。高校生らしい文体で――。

777 : 名無しの美少女:20XX(月)XX:XX
ゾンビってゆうのわ。

英語で「zombie」逆から読むと。

「eibmoz」えいぶもず？ そう。いみわかんない。

もうマジ無理。メシアしょ・・・

心が折れそうになった。

いやもうマジ無理なんですけど。

メシア再臨とか騒いでる人たち。追従するコメントの伸びがすごいことになっている。あつという間にスレッドが消費されていく。たらりと背中を冷たい汗がつたう。

心臓がバクバク言ってる。

どうしよう。どうしたらこの場を収めることができるんだろう。

というか、この後、自衛隊とか米軍とかがこのアパートに攻めてきたりしないよね。ボク、モルモットになるの嫌なんだけど。

ずっと血液をしぼりとられたりしないよね？

さすがにボクの戦闘力でも、自衛隊と真正面から戦って勝てるとは思えない。もっともっと強くなればわからないけれども、つい最近でもスナイパーライフルの銃弾をギリギリ反らせるくらいが限界だった。

空もゆっくりとしか飛べないし、歩いてるのとあまり変わらない。

軍隊に見つかったら——ヤバイかも。

だ、大丈夫なはずだ。

命ちゃんは超天才児。

いまは、ボクのニオイが染み付いた枕を吸引しながら幸せそうに寝ているけど、きつと起きたらなんとかしてくれるはず。

それにネットというシールドがある以上は、リアルでのボクにたどり着くことはそれほどないと思っっている。ボクは厳密には顔バレしていない。

記録情報に残ってはいないはずだ。街頭カメラは正直盲点だったけど、幸いなことに後姿とかしか撮られていないみたいだし、顔を見せた人たちには写真とかビデオで撮られたことはないと思う。

命ちゃんの技術力は、いくつかのスレッドを見るだけでもわかるとおり、ボクの身バレを防いでくれてるみたいだ。

あとは——、この場を無難に収める方法を教えてほしい。

みこえもーん！

「後輩ちゃん。起きて。ねえ起きてー！」

「ん。んうう。どうしたんですか」

よかった。ようやく起きてくれた。

命ちゃんは目をごしごしこすって、こちらに近づいてくる。

スタスタと歩いてきて、ほとんど無意識のような見とれるほど自然な動作で。

んちゅ。

って、キスうう。

全国の視聴者さんの前でキスしちゃだめええ。

『なんだよ百合かよ。ズボンはもう脱いでました』『はあはあ……涙目になってるヒロちゃんがかわいすぎて』『後輩ちゃんが寝ぼけてキスした線も……ないか。ありや普段から相当ヤツてる』『おいおいマジかよ』『小学生に迫るのは普通に犯罪だと思えます』『イリーガルユースオブハンズ』

「うらやましーでしよー！」

命ちゃんは、一見してわかるくらい目が据わってました。

お酒抜けきってない。

アルコール臭がすさまじい。やはりストゼロ500ミリ缶を三本は危険すぎたか。というか、命ちゃんつてもしかして初めてだったのかな。

「先輩はだれにもわたさないんだからー！」

ボクを傍らに抱きながら、命ちゃんが全世界に宣言した。

視聴者数はいつのまにやら3万人を突破しようとしており、短期間で増殖している。まさにパンデミック。爆発的に感染している。

「あの、後輩ちゃん……、そのボクの身バレがですね」

「大丈夫ですよ。ここのセキュリティアランスはペンタゴン並にはしています。外部から侵入することはまずできません」

「でも、リアル……あのですね。謎の美少女さんがですね」

「あー、なるほど。ポンコツかわいいを狙ってるんですね。わかります」

「いや、わかってないよね？」

カタカタといくつかのスレッドとウェブカメラを見始める命ちゃん。

欺瞞活動にいそしんでらっしゃるのでしょいか。

「ふむ……ふむ……なるほどヒロ友さんたちはウェブストーリーカーでしたか。やることない引きこもりたちばかりだから、美少女とかをカメラで追い回してるんですね。最低です。一度ゾンビになって頭を

冷やしたほうがいいのでは？」

み、命ちゃん様？

『後輩ちゃんに最低ですともつと言われたいだけの人生だった』『ヒーローちゃんが寛容なので新鮮です』『ウエブカメラで謎の少女を追い回したのはオレじゃないからな』『オレでもないぞ』『オレだよ』『オマエはBANされたはずじゃ』『トリックだよ』

「いつときますが嘘つきもBANしちゃいますよ。本当に先輩の居所を狙ったゴミクズ虫は永久にBANしましたんで」

ちよつとだけ言葉が荒くなつてない？

鼻息が荒くて、目が怖いです。

『嘘です。ごめんなさい』『ゆるして』『みんなヒロちゃんのことを大好き』『幼女には触れずの誓いをたてている』『オレは純粹にヒロちゃん
の配信が楽しみなだけの人生』『まー、あと少しで終わると思えば天才
的にかわいい生物を眺めたくなるよな』『メシア様だったら、普通に
会つてみたいんですけど』『信心不足。幼女は会えたら奇跡。はぐメ
タみたいなものと思ひましょう』『でもオマエの人生経験値は腐った
死体にも劣るけどな』『なんだあてめえ』

「あの、みんな仲良くね。後輩ちゃんも穏便にいこ。セーフティにさ。セーフティ大事だよ」

「先輩のかわいさは暴発クラスですけどね。神様がかわいさに全振りしちやいましたけど何かつて言つてる気がします」

『いつライフラインとまるかわかんないから』『政府もなにしているかわからんしな』『助けてくれメシア様』『ヒロちゃん様ならヒロちゃん様ならきつとなんとかしてくれる』『ダレカタスケター』『うーあー』『ゾンビがまぎれこんでるぞ。処せ』

あまり効を奏さない。

みんな興奮してるから——、誰もボク of 言葉に耳を貸していないよ
うな気がする。

ボクは少し寂しさを感じた。

「まあいざとなつたら福岡に行きましょう！ ノートパソコンからでも配信環境は作れますよ」

「え、そんなレベル？」

「ふたりで愛の逃避行も悪くないです！」

『おお、今度はわが県にも来てくれるのか』『Come also to my country』『おいおい外国人も来てるじゃん』『これは国と田舎をかけた高度なギャグなのでは？』『後輩ちゃんが躊躇なさすぎて草』『配信してくれるならどこでもいいよ』『ゾンビはどうするの？』

「そもそも、一介の女の子にゾンビをどうにかするとかしないとか求めるほうが間違ってます。あなたたちはヒロ友でしょう。だったら友達に利益を求めるのはそもそもおかしいんですよ！」

命ちゃんが言ってることは、すごく正しいとは思うんだよ。

友達にもいろいろあって、ヒロ友は配信の時だけの緩い連帯だし、生死を共に分かつレベルかといわれるとそういうわけではない。

例えば、ヒロ友のひとりと命ちゃんのどちらか一方だけ助けることができるといわれたら、命ちゃんを選んじやうと思う。

でも、そうじゃないなら、まったく知らない人よりヒロ友のほうを優しくしたいし、こちらに好意をもってくれるなら好意を返したいと思う。人間としてごく当たり前の感情だと思うんだけど。

「ゾンビについてはひとまず置いておくとして……。ボクとしてはみんなと仲良くしたいと思ってるよ。ボクの歌がなぜかよくわからなけれど、ゾンビ避けに役立つなら、時々唄うのはべつにやぶさかじゃないというか」

「本当に先輩は甘いですね」

いつもジト目するのはボクのほうだったけど、今回ばかりは命ちゃんのほうがジト目でボクを見すえていた。

ボクの考えは確かに自分で言うのもなんだけど甘いのもかもしれない。

ゾンビ避け技能というのは、このゾンビに溢れた世界じゃ、特A級のスキルだと思う。限定的にだけゾンビに襲われる確率を下げることができるし、最終的には文明を取り戻す力になるかもしれない。

みんなそのチート能力に熱狂して――。

少し複雑な気分だった。

ボクはマイクをミュートにする。

みんな好き勝手にコメントしている。こちらの動画は停めていない。いまは無音の映画みたいにボクたちが口パクしているように見えるはずだ。

「命ちゃん」

「はい。なんですか。先輩」

「少しは酔いは冷めた？」

「そうですね。少し頭痛が痛いです。IQが五千くらい下がった気分ですよ」

「大丈夫そうだね」

「でも、先輩が甘々なのは本当ですよ。人間に対する接し方がものすごく甘いです。なんでそこまで人間に尽くすのかよくわかりません」「尽くしてるって感覚はないんだけど……」

「バーチャルユーチューバーもアイドルですからね。アイドルは偶像という意味です。つまり、みんなの祈りの対象ですよ。みんな先輩を見ているわけではないんです」

「そうかもね」

アイドルをやっているという感覚はなかった。

だってボクなんてそういう訓練を受けたわけでもなければ、発声練習すらやったことがない。トークもうまいわけじゃない。ただ、ちよつとゾンビ能力に長けただけの、ただの一般人だ。まあ死ぬほどかわいいのは認める。

アイドルだとしたら――。

ボクもなんとなくわかる。アイドルはその人自身と知り合えるわけじゃないって。アイドルになったボクという形でしか知り合えないわけで、それはボクであってボクじゃない。

都合のいいキャラクターというか。

なんといえればいいんだろう。

ビートルズっていう超有名なロックバンドがあるんだけど、昔は今ほどライブ環境が整っていないから、ファンの人たちの歓声で彼らの

歌がかき消されてしまうこともあったんだって。

ただ、彼らが歌ってるってだけで熱狂して、歌なんか誰も聞いてない。

ボクというチートが注目されるにつれて――。

ボク自身のことを見てくれる人は減っていくのかもしれない。

「そんなに寂しそうな顔をするくらいなら最初から配信しなきゃいいのに」

「でも、ゾンビなボクもボクだし！」

ペルソナ被ってるのが人間でしょうが！

「ああもう。かわいすぎるでしょー」

ぎゅーってされちゃう。

コメント欄が騒がしくなっている気がするけど、抱きつかれてるせいで、そちらを見れない。

「ともかくだよ。ボクのスタンスは最初から変わらないよ。ネットで済む範囲ならヒロ友の期待にはこたえるし、ちよつとは配信もしたいです」

「ゾンビ特効についての解説メインになってもいいんですか？」

「それは……、うーん。ボク自身も自分の力についてよくわかってないし、わからないことはわからないとしか答えようがないよ。実験したいっていうんだったら、それに付き合っただけあげる感じ。例えばアニソン唄ってとかだったら唄ってあげてもいいけど、その効果がどうなるかはボクにはわかりません。結果に責任も持ちません」

「先輩の身体を求める変態がでてくるかもしれないよ」

「目の前にいる命ちゃんが一番怖いんだけど……」

「人体実験したいという人が出るかもしれないって話です」

「見つからなければ問題ない。大丈夫だよ。命ちゃんのおかげで、顔バレはしていないし――。バーチャルユーチューバーはなんだかんと言ってもアニメ顔なんだから」

「つまり、いざとなったら逃げるということでもいいんですね」

「うん……」

まあできれば逃げたくはないよ。

このアパートも気に入ってるんだ。狭くて古くて、駅まで微妙に遠いけど、ボクにとっては初めてのパーソナルスペースだったから。

「まあ、先輩には他の道もあるように思いますがね」

「え、なに？」

「先輩が本当に望んでいるのかがよくわからないので言いません」

「思わせぶりな……」

「先輩がヒロ友ばかりに優しくするからです」

ボクはヒロ友に優しいのかな？

命ちゃんやこのアパートに住むことになったみんなのほうを究極的には選んでいるような気もするけれども。

名前も知らない誰かのために、ボクは名前を知ってる誰かを犠牲にしたいくない。

そしてその選択肢はすぐに訪れた。

☆
||

P R

ボクのスマホが机の上で震えていた。雄大からだ。

いまだに配信は続いているけれども、ミュートになっているし、少しはいいだろう。命ちゃんに了承をとったら、軽くうなずいていた。

「雄大！」

「ハア……ハア……よう、親友」

明らかに疲れたような声だった。

今しがた全速力で走ってきたかのような、そんな声。

バイクの音はしない。静かな環境。

海が近いのか波の音が聞こえる。

かすかにスマホが拾うのは聞きなれたゾンビのうなり声。

赤ん坊の喃語のように意味のない言葉未満のうめき声が風に乗って運ばれてきている。そして身近に感じる雄大の声。

どうしたんだろう。

「ねえ。どうしたの？」

「トンネルの中……も、ゾンビが紛れ込んでな……ハアハア……バイクはダメになっちゃまうし、ゾンビどもには追いかけられるしで、散々だよ」

「怪我してないの？」

「あー」

どくん。と心臓の音が聞こえた気がした。

「噛まれちゃったよ」

「なんだよ……冗談言うなよ」

歯の奥がわけもわからず鳴った。

ゾンビになること自体は、ボク的能力からすればたいしたことはないかもしれない。ゾンビ状態から復帰させることは可能だし、時間が経たないうちであれば、ヒロウイルスを注入しなくてもまっさらな状態にリセットできる。

けれど、雄大がいるのはずっと遠くで、ボクは雄大を見つけることができるかわからない。青森だけに限っても、広すぎるし、ゾンビは多すぎる。

恵美ちゃんみたいな幸運がずっと続くとも思えない。

つまり、永遠に雄大がどこか行っちゃう。

「ヤダー！ ヤダー！ ヤダー！ 雄大ヤダーよ！」

「どうにもお前の声が幼女の声……つうか。ヒロちゃんの声に聞こえるんだが。後輩ちゃんは命みたいな声だしよ。どうなってんだ？ マジで」

「ゾンビに感染してるせいで耳がおかしくなってるんだよ」

ボクの中からぼたぼたと涙が流れた。

命ちゃんは——、ボクの様子を察して、一瞬身を強張らせた。

そして、険しい顔でボクを見つめる。

「先輩。雄兄いが……」

「うん……。ねえ。雄大。噛まれたのって本当なの？ 勘違いだったりしない？」

「勘違いだったらいいんだが、バッチリ噛まれてるな。わりとガッツリ腕を噛まれて血も出てる。おまけにゾンビどもがトンネル近くで

うじやうじや沸いて出てな。あと数分で到達って寸法だ。少なく見積もっても絶望的状况ってやつだな」

「なんでそんなに軽いのさ」

「最後に親友と話せたからな——スマホもよく壊れなかったと思うぜ。ハア……命のことよろしく頼むな。あいつオマエのことが本当に好きみたいだからよ……」

「いやだ。また三人でバカみたいに遊ぼうよ」

「そうできたらいいんだけどな……。ひとりで山登りに行ったのが間違いだっただけかな」

「ボクが行かないって言ったから」

「それもいいんじゃないし。オレたちも大学卒業したら、きっと、違う仕事をするだろ」

「ボクは卒業できるかわかんなかったよ」

「そんなことはねーさ。オマエは人間のことが信じられないっていいながらも、立ち直ったじゃんか」

「雄大のおかげだよ」

「そういつてくれるのはうれしいけどな。それはオマエの力だけ」

「なんでそんなふうにキレイにまとめようとすの！」

ボクは怒りにも似た感情を抱いていた。雄大が簡単に諦めるのがいらだたしかつたからだ。

けど、どうすればいい。

スマホで——、ゾンビを散らして。それは可能だろう。

でも、噛まれてたらもう意味は……。

思考がぐるぐるとぐるを巻いて、意味をなさなくなっている。

身体がガタガタと小刻みに震えた。

「じゃあ切るわ。さすがに親友に断末魔を聞かせるのも忍びないからな」

「待って！ 雄大、ボクまだ——話してないことがあるんだ」

「なんだよ。親友。時間切れまであと数十秒くらいだけ」

「ボクね——」

——女の子になっちゃったんだよ。

世界は緋色に染まっていた。

目に見えない素粒子が世界を覆って、血のように紅く、真紅よりも紅く、世界を染め上げている。物理的に紅いわけじゃないけれど、地球はもう青くない。

ボクのエゴに汚染されている。

ボクの意識が距離を無視してある程度の影響をゾンビに及ぼせるのは、ボク自身の浸透能力によるところが大きい。

まがまがしいほどに巨大な緋色が世界を覆っていた。

中枢であるボクが臨在しているところほど汚染濃度が濃いため、緋色の世界に染まっている。

彼我の絶対的な距離は——、ボクのパーソナルスペースの問題だ。

つまり、極簡単に言えば、ボクのこころ次第。

ボクの気合次第で、汚染濃度は変わる。

「緋色。おまえ今なんて言った？」

「難聴系主人公はいまどき流行らないよ」

「いや、マジで聞こえなかったんだけど。ノイズが激しい。今も嵐みたいになってる」

なるほど、それは一理あるかもしれない。

ボクが今やろうとしていることは、スマホという小さな媒体を通じての、ボクの浸透だ。ヒロウウイルスは、スマホを通じて送ることができる。

と思う。

厳密にはヒロウウイルスは既に世界を覆っているんだけど、ボクはそれを意識することで濃度を上げることができるんだ。

その伝送がノイズみたいになっていないのかもしれない。

ちよつと振り返ってみると、高出力のアフターバーナーみたいなのに、ボクの背中から緋色の粒子が巻き散らかされていた。

稲妻のようなプラズマが空間にはじけて、時折、空間を揺らしている。

風もいっしょに巻き起こってるみたいで、物理に干渉する光のようだ。

命ちゃんが手をかざして片目をつむっていた。

これが原因かな。

「電子系統が壊れかけてます。先輩」

「そうなの？」

「はい。配信も停められません。プログラムが高速で書き換わってるみたい。もしかすると、バーチャルなプログラムがはずれてしまうかもしれません」

「しようがないよ」

ボクは言う。

ボクはヒロ友には裏切られたことはない。むしろ揺籃のようにボクを甘やかしてくれた空間だったと思う。

でも——、ボクは雄大を手放せない。

ヒロ友を犠牲にしてでも、ボクが配信者として終わってしまったも、やっぱり雄大のことを切り捨てるなんて選択は始めからなかったんだ。

「雄大。スマホをビデオ通話にして」

「おう。したぞ。つてうお、なんだこの美少女」

「ボクだけど」

「緋色か？」

「うん」

「こりやまた……すげえ、美少女だな。ゾンビウイルスに冒されて目までおかしくなっちゃったか」

「黙っててごめんね」

「いや、うん。そうだな。すげーかわいいとしか」

「ふへへ……」

まあボクがかわいいのは、当然、誰もが認めるところではありますけど？

いけないいけない。つい雄大に褒められてうれしくなったけど、高出力モードはそんなに長く持たない気がする。

「雄大。スマホをゾンビたちの目の前にかざして」

「おう。やったぞー！」

「みんなどっか行って!!」

ボクはひととき大きな声で命じた。

緋色の翼が咆哮するように震えた。

ヒロウイルスが紅い世界を作り出す。比喩的な表現だけどね。

効果は抜群だ。

なにせ、今のボクは雄大のスマホを中心にヒロウイルスの濃度をあげている。

目の前で命じているのと同じだから、ゾンビたちの動きも手に取るようにわかる。

「すげえな。ゾンビがどっか行っちゃったぞ。でもオレは……」

「ゾンビウイルスは消すよ。はい消えた」

「は？ 意味がわからんのだが」

「ボクにもよくわからん」

そもそも分かっていたら、人間の誰かに教えて同じようにやってもらうよ。

ゾンビウイルスとヒロウイルスの関係は主従関係なんだろうけど、いったいどうしてそういうふうな位階が設定されているのかとか、謎以外のなものでもない。

でも、雄大が無事ならそれでいい。

「雄大。生きて帰ってきてね。待ってるから」

「お、おう。ともかく、お前は緋色なんだよな」

「うん。ボクは緋色」

「ならいいよ。帰ったらまた朝まで駄弁ろうぜ」

「うん。いっぱい話そー！」

「あのさ——」

ビデオ通話で、雄大が照れるように頬をかく。

「オマエ、ヒロちゃんなの?」

「えっと、そ、そうだけど?」

「前、話してたからわかると思うんだけど、オレ、ヒロ友なんだわ」

「あ……はい」

な、なんだ。この気恥ずかしさは。

とても恥ずかしい。なにしろ、推しまくられたあとに、実はそれボクでしたって展開だからね。これで恥ずかしくなかつたらなにが恥ずかしいのかって感覚で。女の子になったことがバレたことよりもある意味恥ずかしいぞ。

「そっちに戻るまで配信は見続けるからさ。やめんなよ」

「う、うん。配信がんばります」

「よし。なら——、安心だ」

なにが安心なのかはわからないけれど、ボクは雄大と約束してしまっただけ。

だったら続けるしかないだろう。

さっきのボクはやっぱりよくない考えでした。

なにかを切り捨てないとなにかを得られないなんて、命ちゃん的なサバイバル思考であって、ボクらしくない気がする。

最近、殺伐としてきたから、ちよつと考え方がよくない方になってしまっていたのかもしれないね。ラブ&ピース。平和が一番だよ。

うん。ボクは配信をやめなくていい。

「ね。命ちゃん」

「ダメです。先輩」

「え?」

「バーチャルプログラムが壊れました」

見ると、画面外では大騒ぎ。

もはや乱痴気めいたコメントがひしめいていた。

『約束された勝利の美少女』『謎の美少女様ああ』『ヒロちゃんが天使みたいにふわってなって』『ああああ目が目がああ』『こんなかわい

い生物がいるなんて』『生物名』かわいいで登録お願いします』『もうこんな天使に決まってるよね』『ていうか、あの光の翼みたいな何なん?』『バーチャルよりかわいいユーチューバー』『ガチ恋してもいいよね』『小学生に恋するなんてみんなロリコンかよ。オレもロリコンになろつと』『妹よ。また一段とかわいくなつたな』『元ポツチです。これは生配信が解禁されたってことでいいんですかね』『アイちゃんです。さすがに大丈夫ですかね』

ふう。おーけい。おーけい。

おちつけ。おつけつ。

あ、言えてない。内心で言えてないってヤバない?

ボクの最大出力時間はおよそ五分も満たないみたい。

かくんと糸が切れたみたいになった。

今、みんなの前で顔をさらしているのが、なんだかすごく恥ずかしい。

『お顔が真っ赤?』『ヒーローちゃんが真っ赤』『紅白でめでたくね?』『血が通ってるからやつぱりゾンビじゃねーよな?』『ヒロちゃんかわいいよヒロちゃん』『ロリコンウイルスには罹患しそう』『もうさ。ロリコンでよくね?』『ゾンビ避けもできるし』『天使様……我らをお導きください』

「えつと、ボクは……超能力者だったりして……ふ。ふへへ」

『超能力が使える天使?』『美少女で超能力者ですか』『もうなんでもいいんじゃない。かわいいけりや』『うちの県にも来てくれ』『ヒロちゃんがきてくれるんならどこの国の大統領でも百万ドルくらいならポイントだしてくれそう』『ヒロちゃんどこにすんだ』『あれ?』『今コメント消された?』『顔バレしたから、住所特定班が動き出しそうじゃね?』『後輩ちゃんがものすごい勢いでタイピングしてるな……』『でも、この映像からすつと、国のおエライさんに狙われそう』『気をつけてヒロちゃん』

「ダメですね。ゾンビと同じで数の原理に押し切られてしまいます。

先輩。適当なところで配信を切ってください」

「う、うんわかった」

雄大に認めてもらった配信だから、名残惜しいけど。

いったんは切ることにする。

「えっと、そんなわけで、ボク……配信やめないよ。じゃあね。バイバイ！」

『いかないで』『もつとお話ししようよ』『ヒロちゃん様あ』『なんか怪しい宗教じみてきたな』『ゾンビになってもヒロちゃんの隣なら大丈夫っぽい気がする』『だからって仲良しになろうとかすんなよ』『好きだから見るつてのが基本スタンスだろ』『ヒーローちゃんは、何度もいつとるじやろ。仲良くしなさいと』

「そうだよ。みんな仲良く楽しんでくれたらうれしいな」

その日は最終的にヒロ友の数が5万人まで増えた。

クリックするたびに登録数が爆発的に増えていって、得体の知れない数字の化け物みたいに思えて、最初はうれしかったんだけど、妙な焦燥感を覚えた。

それはコントロールできなくなっていくボクという虚像に対する恐怖だったのかもしれない。

ネットの炎上は怖い。マナさんに聞いたら、正確には炎上ではなく単にバズっただけということだったけど、ボクへの興味が三百六十度、いろんな方向に向いているのが怖くもある。

本当はいますぐにでもアパートを出たほうがいいのかもしれない。でも——。

もう少しで電気も切れる。ネットも寸断される。かもしれない。先のこととはわからないけど、そうなる算段が強い。

そうしたら、雄大と会えなくなっちゃう。

雄大はここを目指しているんだから。

だからボクは動けなかったんだ。もしかしたらという可能性を考えながら、ジワリジワリと特定されていくことに怯えながらも、

——あの人たちがアパートに来るまで。

ボクは動かないことを選んだ。

ハザードレベル48

顔バレした。

そりやもう盛大に光を撒き散らしながら天使っぽい演出つきで顔バレした。

顔バレがイコール身バレではないと思ってる。

身バレっていうのは住所特定とかそういうのも含むものだから。

ゾンビだらけの世界で、なかなか住んでる場所までは特定できないものだし、街頭カメラとかの映像で大きく佐賀のどこかに住んでることとはわかってきつとバレないんじゃないかなろうか。

あれから、ボクの配信の登録者数はあつという間に10万人を突破してしまった。たった三日だよ。三日。顔バレ配信から一瞬で5万人くらい追加されちゃったことになる。

もちろん、純粋な意味でのヒロ友じゃないんだろかなとは思ってる。

だって、ゾンビに対抗する能力を持った少女だしね。

まさか顔バレしてかわいかったから登録してみたみたいなロリコンはないと思うんだよね。

ボクとしては——、できれば純粋にボクといっしょに配信を楽しんでくれる人がいいなと思う。

ゾンビ避け少女とかメシアとか天使とか、そういうふうにはボクを呼ぶ人たちは、本当の意味でのボクを見ていない。

もちろん、それもボクの要素のひとつではある。

そういう属性をもっているのもボク。

きつと純粋な意味でのボクそのものはボク自身ですら見えないのだし、他者にはもつと見えないものだ。

だから、裸心を晒したいなんていうのは、そもそもおこがましい願いなものかもしれない。

でも、最初の頃の配信はきつと——。

今よりもつと純粋だったかなって思うんだ。

「マンネリかな」

「ご主人様あ。何事も続けていたらそりや飽きますよ」

マナさんはいつもの柔らかな口調でいいながら、テーブルのところにパンケーキを置いた。はちみつたっぷりで甘ったるそう。

笑点の座布団みたいに五段重ねになっているそれはボクのちっちゃな胃では、全部入りきることはない。

「いつもパンケーキじゃ飽きるのと同じです」

「うーん。そうかなー」

「そうですよ。でもご主人様がちっちゃなお口でがんばって食べてる姿なら、無限に見続けても飽きなさそうですよね♪」

はふはふ。ぱくぱく。

うん。やっぱりマナさんの作る料理はおいしいなー。

それに、ゾンビお姉さんだし。

ボクが一番仲良くできたゾンビさんだし。

マナさんって素敵な大人の女性って感じた。

姫野さんも大人なんだけど、あの人はボクのことをまだ怖がってるからなー。

「ん。ご主人様がわたしのことを視姦している？」

「ただ見てただけだけど……」

「わたしはご主人様をいつも視姦してますけどね！」

堂々と言うのは、ある意味すがすがしいというか、なんとというか。

でもまあ、ボクの見目がいいのはボクも認識してるところではありますけど？

ふふん。

「ゾンビ利権のために見ている人多そうだよね」

「そりやそうですよ。人間、なにかしら自分に利益がないと見ません。読みません。フォロワーしません」

「そうだよね」

それはなんというか——寂しくはあるけど。しかたないのかもしれない。

純粋な交わりって難しいよ。

「ご主人様知ってましたか？」

そつと両の手をあわせて、ボクに聞くマナさん。

「なにを？」

「ツブヤイターのフォロワー数の増やし方なんですけど」

「うん。気づいたら10万件に増えてたんだけど。怖いよね」

「通常はそうやって増えることはまずないんですよ」

「え、そうなの？」

「そうなのです。通常はフォロワーしたらフォロワーするっていうフォロワー返しは基本なんです。そうやってフォロワー返しをしていくと、フォロワーのフォロワーがつながりを求めて寄ってくるんですよ」

「ふうん」

「つまり、人間なにごとも一歩一歩なんです。急速にわかりあえるってことはないのです」

「お姉さんの言うとおりかも」

「ああ、ご主人様がわたしを認めてくださったのですね」

「ボクはわりと、マナさんのことを大人だっと思ってるよ」

ロリコン趣味であることを除けばだけど。

「だったら、そのよいのでしょうか」

「え、なにが？」

「わたしも命ちゃんみたく、その、き、キスをしちやっても」

「それはだめです」

命ちゃんとのキスもボクは一度だっつて了承したつもりはない。

なし崩し的にやっちゃったりはしてるけど、あれは命ちゃん曰く補

給だ。

つまり、ヒロウイルス依存症であつて、キスしたかったのが理由じゃないのではないかと思ってる。

そう、命ちゃんはヒロウイルス依存症患者なのだ。

「なら——、わたしも。わたしも依存症です。ああ、苦しい。苦しい。ゾンビになっちゃやう。ご主人様。早くキスを！ 間に合わなくなつても知らんぞー♪」

床にねっころがって、ジタバタともがくマナさん。

20代半ばのお胸の大きな美人のお姉さんです。

お姉さんはどこで人としての道を踏み外しちゃったんだろう。

人類進化の系譜を夢想し、ボクは遠い目になった。

「あ、マナさん。そういうえば命ちゃんがネットのシールドの仕方について相談があるみたいだよ。あとで命ちゃんのお部屋に行つてくたさい」

「はい。わかりました」

ちよつと残念そうだけど、すぐく返事はいいんだよなあ。

ボクが無意識に命じているからではないと思いたい。

「えつと、マナさん……いつもありがとうね」

ボクは普段のお礼もこめて言った。

「うひゃ。ひゃあああ。ご主人様がかわいすぎる件つ。できれば卑小なるわが身に祝福のキスをプリーズ！」

「残念なお姉さんだよね……」

とはいいつつも、ボクも感謝の気持ちに嘘はない。

ほっぺたに軽い親愛の情をこめたキスをした。

すると、お姉さんはそのままぶつ倒れてピクピクと痙攣していた。

幸せが限度を越えたのだろうか。

ボクはお姉さんをまたいで他の人に会いに行くことにしたのだった。

☆
☆

ところで、この世界において、倫理や法律が既に崩れてしまっているのは、もはや言うまでもないことだと思う。

とはいえ——。

とはいえである。

恭治くんと恵美ちゃんが同じ部屋で暮らしているのはどうかと思うんだ。

このアパートの作りは、ワンルーム。

さすがに四畳半とかいう作りではないものの、お部屋を区切ったりはしていないんだ。ベッドに恵美ちゃん。その下に恭治くんが布団

を敷いているとはいえ、彼我の距離はほんの指間。

恵美ちゃんも12歳。

まさか妹のことが大事でたまらない恭治くんのことだから、間違いなんて起こるはずもなからうが、情操教育上、あまりよろしくないんじゃないかなと思う。

恵美ちゃんはベッドのところでタブレットを使って、なにかしていた。

って、ボクじゃん。

絶賛、ボクのアーカイブを上映中じゃん。

「あ、あの。恵美ちゃんこんにちわ。恭治くんも」

「緋色ちゃんこんにちわ。すごい人気だよ！」

にこって笑いかけてくる恵美ちゃん。

なにこの子、天使なの？

ボクも言われ慣れてる感のある『天使』だけど、やっぱり生粋のJ Sは一味違うな。抱きしめたいぞ恵美ちゃん。卑猥な意味はなく。

「緋色ちゃん。おまえ、自重って言葉知ってるか？」

「むう。ボクもいろいろと事情があるんだよ」

「そうだよお兄ちゃん。緋色ちゃんを悪く言わないで！」

「お、おう。わかったからそんなに怒るなよ」

恵美ちゃんってわりと快活だと思う。

優等生風味な容姿なんだけど、陽キャ成分多めというか明るいというか、お兄ちゃんの前では素の表情を晒していて、心地いい感じ。

人間やつぱり素直が一番だよな。

それだけにボクも思うところがある。

ボクが配信をしたのは、きつとボクの素直な心だし。

人間との距離感も今の状況が一番好ましいと思っっている。

でも、人間は人間のほうできつといういろいろと考えるだろうし、どんどんとボクに注目が集まっているのも確かだ。

だから——、伝えておかなくてはならない。

ボクはボクのがまままでふたりをこのアパートにとどめおくように仕向けたけれど、このままだと危険かもしれないんだ。

「ねえ、ふたりとも。危ないと思ったら恵美ちゃんの家で避難してもいいからね。ここに人間が大挙して押し寄せてくるってことだってありえるし」

ふたりは顔を見合わせた。

ボクが何を言っているのかわからないはずはないだろう。

あれだけ目立ってしまったんだ。

ホームセンターの二の舞にならないとも限らない。

「緋色ちゃん」

じつとボクを見つめてくる恵美ちゃん。

彼女の透徹とした眼差しは、凜としていて涼やかだ。

ボクが後ろ暗い気持ちになっていると、やっぱり恵美ちゃんって陽キヤなんだなあと思っちゃう。

「私はお兄ちゃんを助けてもらって、緋色ちゃんには本当に感謝してるんだよ」

「うん」

「だから、そんなこと言っちゃダメ！」

「うん……うん？」

「いっしょにいなきやダメだよ」

「そうかなー」

「そうだよ！」

論理がよくわからない。

でも、小学生らしい気迫のようなものを感じる。

そもそも、恵美ちゃんみたいな子どもにも全力で言い切られると、大人なボクとしましてはですね、あまり逆らえないのです。

「まあ……、いざとなったらゾンビ集めて追い返せばいいだろ」

恭治くんも恵美ちゃんには逆らえないんだろうなあ。

こんなにも天使なんでもんね。

「それはあんまりやらないほうがいいって命ちゃんは言ってたよ。なにしろ、こんななんの変哲もないアパートのまわりにゾンビがいたら明らかにおかしいからね」

「それもそうだな……。じゃあ、バレないように引きこもってるしか

ないな。ほとぼりが冷めるまでってやつだ」

「うん。わかってる」

「でも、配信は続けてほしいな」と恵美ちゃん。

もしかして恵美ちゃんもヒロ友なのかな。

「配信は続けるけど、今やっちゃうと、いろいろとまずいような気がする」

「大丈夫だよ。だって、ここに住んでるってバレたわけじゃないんでしょ」

「まあ、完全にはバレてないと思うけど」

ただ、時間の問題かもしれない。

べつに秘匿回線を使ってるわけじゃないから、おおぎっぱな住所はわかるだろうし、街頭カメラをいくつか駆使すれば、ボクがどこらへんに住んでいるか特定するのは不可能じゃないだろう。

問題は、その調べた誰かさんが、ゾンビを掻き分けて来れるのかってことだけど、まあ——たぶん、普通の人間じゃ無理だ。

佐賀は田舎で人口が少ないけれど、このあたりは道が狭い。

少ない数のゾンビでもすぐに囲まれてしまう。

ボクのところまでやってきたらやってきたで、おそらく無傷ということはあるんじゃないかな。

「緋色ちゃんの配信みたいなあ」
うっ。

純真無垢な眼差し攻撃。胸のあたりで指を組んで祈るようになっている。

恵美ちゃんはアイドル並の容姿で、とてつもなくかわいらしい。

そんな子がボクに対して全力でお願いをしてくるという事実。

「しょ、しょうがないなあ……、ふへへ、ちよっと考えてみるね」
ボクはふたりの部屋を後にしたのだった。

☆
＝

飯田さんと姫野さんにも同じような説明したけど、姫野さんがおど

おどしているんで、そこそこで切り上げて自分の部屋に戻ってきました。

飯田さん曰く、ボクとはお隣さんだから勝手に出て行くことはないらしい。

もう一度死んでるから、余生だから、ボクの行く末を傍で見届けたらしい。

ポンポンって撫でられてしまった。
くそう。うれしいぞ。

でも、言うまでも無いことだけど、ゾンビ化してしまっている飯田さんたちは二度とゾンビ化することはない。耐久力はゾンビ並みだけど、今度殺されたら本当の死だ。

そう考えると、ゾンビ化する前の人間たちはボクの視点でいえば残機がふたつある状態ともいえる。

人間がゾンビ化するというのは、きつと人間視点では死ぬのと同義なんだろうけど、ボクからすれば残機を一機失ったに過ぎない。

「さつてと……命ちゃん。そろそろ配信してもいい?」

「小学生にほだされる小学生」

「うっ……」

「恵美ちゃんかわいいですもんね」

「かわいいよ。妹みたいな感覚かな」

背格好はほぼいっしょなんだけどね。

ときどきはボクの部屋にやってきて、いっしょにご飯とか食べたりする。お風呂にもいっしょに入りたいたいってきたときは最近の小学生って積極的と思ったけど。冷静に考えれば、ボクって小学生の女の子だったわ。

「それであれだけ先日焦ってたのに、すぐに配信しちゃうんですね」

「ふ、ふへへ……それは言わないお約束ってやつですよ。命さまあ」

「まあいいですよ。セキュリティレベルはあげておきました。今日はバーチャルな先輩でやるんですか? それとも生配信するんですか?」

「生配信ってリアルなボクでもいいの? 危なくない?」

「既に掲示板とかで拡散しちゃってるんで、いまさらという感じですよ。住んでいるところがバレないようにカーテンとかは締め切ったほうがいいですけどね。背景とかからバレる可能性がありますから」「ふうん。どうしようかな……」

ヒロ友に限らずだけど、視聴者はきつと配信者のことを知りたいのだと思う。正確にはキャラクターを掴みたいというか、配信ごとに明らかになる知っていくという過程を楽しんでいる。

それはボクも同じで、配信者ごとに視聴者の属性は異なるように思うし、ボクはボクでヒロ友のことを知っていくという過程がうれしい。

仲良くなってるのは確かだと思う。

新規さんが増えて、また知り合いレベルから始めないといけない人も多いかもしれないけれど、古参な人たちがボクの配信における『作法』みたいなのを定着化させている。

「顔バレしちやってるし、今日は生のほうでいこうかな」

「わかりました。背景描写だけ、リアルタイムでトリミングしちゃいますね」

「よくわかんないけど、命ちゃんにまかせるよ。ありがとう」

既にツブヤイターで時間告知をしていて、待機列は二万人以上になっっている。

アイドルがバックヤードから出て行くときってこんな気持ちかなかな。
ドキドキがとまらない。

「やつほー。終末配信者のヒーローちゃんだよ。みんな元気してた？」

『うああああああ。今日もリアルヒロちゃんだ』『お可愛いこと』『アーカイブの再生が止まらないんだけど』『うちの妹はやつぱりかわいいな』『お兄ちゃん、病院から抜け出したらダメって言ったでしょ』『好き』『今日もヒロちゃんのお歌でゾンビ避けできたよ』

「うん。みんな元気そうだね。えっと、今日はゲームとか歌とかじゃなくて、みんなの疑問に答えていこうかなと思うんだ。ボクについて

知りたいこととかあったら、ドシドシ質問してね。あ、でも答えにくい質問はスルーします」

ツブヤイターのほうには質問箱を用意している。

もう既に200以上の質問が来ているけれど、捉えきれぬ限りではコメントの質問も拾っていいのかな。

超高速でコメントが流れていってて、とてもじゃないけど全部は追いきれそうにないけど。

『超能力みせて』『ヒロちゃんのスリーサイズが知りたい』『恋人とかいますか?』『ゾンビ避け能力に気づいたのはいつ?』『超能力つて生まれたときから持ってたの?』『ヒロちゃんにどうやったら会えますか?』

「えっと、超能力についてはある日気づいたら覚醒しました。今ではほらこのとおり……」

机の上の消しゴムとシャープペンシルをふわふわと浮かせる。

自分で言うのもなんだけど、結構うまくなったな。

『マジックじゃないよね』『いつつわんだほー』『ああメシア様あ』『ゾンビ避けもこの力でやってるのか?』『全世界からゾンビを消滅させてくれ』『むしろ、ゾンビから回復できる力があるなら、みんな人間に戻してほしい』

「ゾンビから人間に戻すというのは、目の前にいないとたぶん無理なんだ」

雄大を治したのは、ヒロ友のみんなにはバレていない。

無音の映像で、誰かと電話で話していたことくらいしかわからないはずだ。

それに、あれはたぶんボクのテンション次第なところがある。

雄大はボクにとっても特別な——大事な友達で、だから遠隔でのウイルス操作ができたのだと思う。

普通の知りもしない人を映像だけ見て、はい回復というわけにはいかないよ。

そこまでボクの力は万能じゃない。

『オレの母ちゃんをゾンビから戻してほしい』『妹を戻して』『父親の頭

たたきわってたら回復はもう無理ですか?』『どう考えても救世主だよなあ』『ヒロちゃん自身は家族いないの?』

「ゾンビから戻すのは、時間が経ってボクのレベルが上がればもしかしたら広範囲で可能になるかも。でもいまは無理なんだ。ごめんね。あと——、頭を叩き割っちゃったら、もう……」

そう。頭を叩き割るということは、ゾンビとしての仮初の生すらなくなり、完全に死亡しているということだ。ここに、ヒーロゾンビも頭を撃ち抜かれたら死ぬんじゃないかとボクが考える根拠がある。

不思議なことに、死体からはゾンビウイルスの気配が消える。本当のウイルスだったら身体に残留しそうなものだけど、そうはなっていない。

仮に死体をついばむカラスとかネズミがいても、ゾンビカラスとかゾンビネズミにならないのはたぶんそういう理由からだろう。

死体からはウイルスは散逸するということだ。

『ヒロちゃんを信じてゾンビには黙って噛まれろってことだな』『死体全部食われたらさすがに回復できんくね?』『腸がびろーんでも回復できますか?』『顔半分がなくなってるけど回復できるの?』『親父……』

「実を言うと、ボクは回復魔法も使えるんだ。だから、頭を破壊されていない限りはたぶん大丈夫だと思う」

もちろん、この場合はヒーロウイルスを感染させる方法だ。

どこまで回復できるかは試したことがないからわからないけれど、身体中穴だらけでもすぐに回復できる程度には力がこめられている。

質量保存の法則とかどうなってるのか謎だけど、ボクの血液とかヒーロウイルスにはそれだけのエネルギーがあるのだろう。

下半身がなくなってる這いずり状態でも回復できるのかは知らない。

たぶんできるかな。

「あと……、ボクの家族は後輩ちゃんとかお姉さんとか、ボクといっしょに住んでる人たちだよ。血がつながってる家族はいないかな」

『おう……』『こんな小さな子がひとりかよ』『お兄ちゃんがお兄ちゃん

になってあげるね』『オレもお兄ちゃんになつてやる』『わたしがパパだぞー』『やったねヒロちゃん家族が増えるよ』『おいやめろ』

「ふへへ。みんながいるから寂しくないよ」

『ゾンビとはいったいどういう存在なのか貴殿の意見を求む』『なんだこいつら。ヒロ友じゃねえな』『政府のエライ人なんじゃね?』『ゾンビってなんなんだろうな。確かに』『ゾンビはゾンビだろ』

「ゾンビはエイリアンなんじゃないかな」

前に配信で言ったとおり、パンスペルミア仮説、彗星からの生命起源説だ。

思考経路が人間の知覚範囲を超えているため、言語化できていないだけのよう思う。

そういうふうな感じで滔々と語った。

『我々がゾンビウイルスを知覚できないのはなぜか貴殿の意見を求む』

「素粒子レベルにちっちゃいんじゃないかな」

粒であり波である光のように、波動の存在として空間に寄生する生命というか。

『なぜそれを貴殿が知覚できるのか?』

「えっと……超能力?」

『やべえ。なんだか圧力がすげえぞ』『科学者がいる感じ?』『ひとりだけ質問してズルイぞ。ヒロちゃんの好きな食べ物はなんですか?』

『小学生並の質問』

『波動存在として同一位相の存在を感知しているというのか?』

「好きな食べ物はえっとね……パンケーキです」

『かわいい』『かわいい』『女の子』『好き』『天使ですよね。知ってます』

『ゾンビウイルスが波動存在だとすれば、貴殿はフェイズシフトによって位相中和しているのか?』『おまえだけ質問の毛色違いすぎて草』『でも科学者なら知りたいのもわかるしなー』『ゾンビ対策になるならいいんじゃない。答えるのはヒロちゃんだし』

「フェイズ……えっと、わかんない。後輩ちゃん。フェイズシフトって何?」

「クラッキングが十二箇所から来てますね。それやめろっていつてくれませんか？ そうしたら答えてあげますとお伝えください」

「えっと……クラックするのやめてくれたら答えてあげるって」

『心証を損ねたのであれば申し訳ない。こちらでおこなっているのは3箇所のみだ。我々のところは停止する』『ナチュラルにクラッキンググしてて草』『俺らみたいに純粹にヒロちゃんの配信を楽しめんのかねえ』『ヒロちゃんのおろおろする顔がかわいくてドキドキする』『はあ。もうゾンビになってもいいや』

命ちゃんはうなずいた。

「いいでしょう。フェイズシフトとは位相転移のことです。波に同じ位相の波をぶつけると消滅するでしょう。そういうことをしているのかって聞いているんですよ」

「えっと……わかんないよ。単に消えてって思ってるだけだし」

『自覚がないということは貴殿は自己の力を解明しているわけではないのか？』

「ボクはただの小学生ですしおすし！」

『ですしおすしとか懐』『お顔が真っ赤でかわいい』『小学生相手に大人気ないぞ政府』『ていうか、マジで日本政府なん？』『生きてたのかおまえ』『自衛隊は関東方面行ってるからなあ』

『貴殿はゾンビなのか？』

「ちがいますー！」

とりあえず全力で否定しておきました。

ハザードレベル49

ゾンビの朝は早い。

このごろ、とても多くなってしまった質問箱の中身に答えていつて
いるからだ。

質問に返信するのは義務ではないけれど、なにかしらアクションを
起こすというのはとても勇気がいる行為だとボクは知っている。

配信をするときのドキドキ感と同じくらい、視聴者さんも質問する
ときに答えが返ってくるかドキドキしているに違いない。

だから、ボクもできるだけ返していけたらと思っている。

このごろは物理的に厳しく、返信するのはわりと時間がかかる。

——質問数は2000を優に越えている。

そして質問箱の質問は多岐にわたる。例えば——。

『ヒロちゃんのスリーサイズを教えてください』
教えないよっ。

おかしいでしょ。小学生のスリーサイズを知ってどうしようとい
うのだろう。言うまでもないけれど、ボクは胸とかあまり成長してい
ないし、寸胴鍋みたいな感じだ。悪く言えば、手も足もゴボウみたい
な細さだし、全体的に白いし、なにが知りたいのかは謎だった。

もう少し真面目なところになると——。

『ゾンビウイルスに感染したあと回復したとして副作用はありますか
?』

この人ゾンビに噛まれたのかなと思っただらそんなこともなくて、ゾ
ンビから回復したらEDになるんじゃないかが心配だった模様。

ゾンビは血流がなくなると考えられているから、局部の血も滞るん
じやないかって考えてみたい。確かにゾンビコメディ漫画でそん
な描写あつたけどさあ。

|||||

インポ・オブ・ザ・デッド

漫画『ゾンビフルライフ』における根源的な設定。ゾンビに噛まれ

たあとに抗ウイルス薬ができて人間並の思考を取り戻した主人公は、血流がないためにあそこも勃たなくなってしまうたのである。ある意味、渾身の自虐ネタともいえる。

|||||

うーん。微妙にセクハラ質問じゃないよね。

ボクも元男だし、事の重大性はわからなくもない。でも飯田さんや恭治くんに勃起できますかと聞くのはちよつと無理です。恥ずかしい。

命ちゃんに判断を丸投げしたら首をひねってました。アウトかセーフか微妙どころさんだったみたいです。

続きましてご紹介いたしますのは、アウトの事例。

『ヒロちゃんのアへ顔ダブルピースが見たいです』

命ちゃんは×ねって言いながら、速攻BANしてました。

残念ながらしかたのない処置だと思われまます。

そんなこんなでだいたいの選り分けができてきた。

外国からも質問が来ていて、ゾンビ対策的な質問がほとんどだ。

その筆頭はやっぱ先駆者である三日前の科学者さん。

例の科学者っぽい人は『ピンク』さんを名乗っていた。

ヒロ友の間では、通称ドクターピンクと呼ばれている。

謎の人だけど、なんだか日本人っぽくないんだよな。

ものすごく学術的で硬い文章だ。本人といくつかやりとりをしたところ、所属的には日本らしいけど、大本は米国にあって、その日本支部らしい。詳しくは分からなかったけど、どこかの研究機関出身らしく微妙な立ち位置らしい。最初にボクを見つけてきたのは、ピンクさん自身みたい。

ピンクさんは情熱的な人だ。

知識欲という意味で。

『貴殿はゾンビ避けができるかとあるが、そのほかの行為をとらせることは可能なのか』

「操れるよ」

ピンクさんはダイレクトメッセージも頻繁に送ってくるようになった。

みんな謙虚なのか、あまりツブヤイターのDM機能は使わないようにしているみたいだけど、ピンクさんだけは例外だ。

命ちやんは国家権力枠ということで、一応特別扱いしたほうがいいという意見みたい。少なくとも雄大がこっちに戻ってくるまでの間、時間稼ぎとして少し飴を与えていたほうがいいとのこと。

打算というのも人間らしいコミュニケーションではあるかな。ボクは打算的な人間というのはわりと好きだ。暴力的な人間よりもよっぽど知恵を使っているといえるし、人間らしいといえるから。

『人間も操れるのか?』

「程度問題だね。ゾンビウイルスをボクは操れるわけだけど、みんな感染はしているからね。それが多くなるとゾンビになるって感じ」

『我々も一人残らず感染しているということか』

「そうだよ。おめでとう。みんなゾンビファミリーだね」

『ファミリー? 貴殿はゾンビを同胞として捉えているのか?』

「まあ、もともと人間だし?」

『やはり貴殿はゾンビ……』

「ちがいます!」

すぐにボクをゾンビ扱いするのはどうかと思うよ。

むしろ、ゾンビも人間もたいした違いはない。

ただ数が多いか少ないかだけだ。

思考能力に差があるように見えるけれども、それはヒイロウイルスに感染すれば問題ない。つまり、ボクがレベルアップすればいずれは全部解決する。

単に思考能力の差が、ゾンビと人間の違いであるというのなら、たいした違いはない。

そういう思考をもとに、ボクはピンクさんに逆に質問してみた。

「ピンクさんはゾンビと人間ってなにが違うと思ってるの?」

『ゾンビに同胞はいないと考えられる』

「群れているじゃん」

『単純な密度の問題を同胞とは呼ばない。仲間・家族——畢竟、同胞とは心の連帯であるが、ゾンビにそのようなものはないと確信している。したがって、人間がゾンビを駆逐するのはたやすい。時間の問題である』

「確かにいつしよにうろろしているだけじゃ友達とは言わないかな」

『そのとおり。貴殿は友達という概念を知っている。つまり人間であると推測される』

「まあね」

『貴殿は人間が好きか？』

「好きだと思うよ」

好きじゃないとピンクさんに付き合う義理もなければ、配信を始めることもなかっただろうし、それが誰かに承認されたいという病だとしても、いまさらそれを止めるなんてできないよねって話。

『最終的にゾンビをすべて人間に回復できるとしたら、貴殿はそうするの？』

「そうするかも？」

『なぜ疑問系なのか？』

「よくわからないから」

『貴殿にはプレコックス感が見られない。貴殿は平凡な人間的感覚を有しているように思われる』

「ぶれっこつくすかん？」

『統合精神失調症者に見られるような特有の相貌である。ゾンビは意識レベルが極めて低いため、統合精神失調症者特有の相貌、すなわちプレコックス感が見受けられる』

「ボクを診断してらってわけ？」

『申し訳ない。そうするように』上からは言われている』

「いいよ。ピンクさんもヒロ友だもんね。ちなみに診断ってどんなふうにするの？」

『わたしは、患者に対すると、Schizophrenie か否かの“あたり”を探る。Nichts Schizophrenie

s なら organisch か symptomatic
hへと探索を進めていく」

「は?」

『申し訳ない。貴殿は小学生だったか。知識レベルや言動からかんがみ、少なくとも中学生レベルの平均的知能レベルを有していると思われることから、貴殿の聡明さを大きく見積もっていた』

「えつと……中学生レベル?」

『もしかすると高校生レベルに達しているかもしれない。称揚や媚ではない。その年齢にして素晴らしい知見と知能レベルである。いわゆる天才である』

いや……、あの、ボク大学生なんですけど。

専門家レベルの観察だとボクの知能って中学生レベルなんですよか。

あはは……すごい。

いいもん。ボクは配信では小学生なんだもん。くすん。

『簡単に言えば、体型のバランス、頭部と大部の均整、脊柱の湾曲、頭蓋骨の形、首の張り、口蓋の高さ、歯牙歯列の欠損融合等を貴殿の動画から読み取っている』

「ふ……ふーん。そうなんだ。でも、ゾンビが波動存在だっけ? なら、物理学者でもつれてきたほうがいいんじゃないかな」

『当然、ピンクの背後にはそういう専門家も控えている』
「へえ」

全身嘗め回されてるみたいな感覚。

ボクの配信を血眼になって一フレーム単位で見ているんだろうな。ある意味、ヒロ友の中でもかなり濃い趣味をしている。

でもね。ピンクさんはたぶん心理的な方面に強いのか、なぜかあまり不快じゃないんだよな。

例えば、こんな一文。

『我々は友達になれるのだろうか?』
「なれるよ」

少なくともボクはそう信じたからこそ、手を伸ばしているわけだ

し。

政府から、アレをしてくれコレをしてくれという要望にもできるだけこたえることにしている。

ピンクさんってなんだかかわいいんだよね。ロボットみたいな精確すぎる受け答えをしているんだけど、命ちゃんに少し似ている感じ。

『シスターと呼んでよいか?』

「ん? よくわかんないけどいいよ」

ブラザーみたいな感じの意味かな。

ほら、よく外国映画とかで黒人さんとかが言ってるじゃん。

ブラザーって。親愛の情をこめた言葉だと思うし、それと同じような感覚でシスターかな。ボクって女の子だしね。シスターであつてるといふか。

やっぱりピンクさんは外国の人だよな。

『ありがとう。マイシスター。いつかあなたの許に向かってもよいだろうか』

「もちろんいいよ。でも、住所がバレるといろいろ困るから、ランデブーポイントを決めてからのほうがいいかもね」

『了解した。マイシスター』

なんだか、命ちゃんの亜種みたいな感じだなあ。

ほほえましい波動を感じるのはなぜだろう。

☆
||

ふわりとボクは、ビルの屋上に降り立つ。

前にも言ったとおり、佐賀には高い建物はないけれど、さすがに三階程度の高さの建物は存在している。

名もわからない診療所。高さはたいしたことない。せいぜい30メートルに届くかどうか程度。

その上にボクは降り立ち――。

命ちゃんをふわふわと浮かせて、その場にゆつくりと下ろす。

なにをしているのかといわれると、外での配信ができるかのテストだ。

「命ちゃんも自分で飛べたりしないのかなあ」

「わかりません。そのうち是可以できるようになるかもしれないませんが、どういう原理で物理現象を克服しているのか。重力という絶対の法則を打ち破っているのかわかりませんから」

「いや、そのあたりは感覚的な問題で、ひゅっとして、うによんってすれば簡単にできたりしないかな」

「……先輩が感覚派なのは昔から知ってました」

なんで、死んだ魚みたいな目になるんだろう。

確かに、モノを浮かせるなんて魔法みたいな力、おいそれと他者に伝達できるものじゃないとは思いますが、最初から諦めてたら何事もできないと思うんだけどな。

「私はべつに空を飛べなくてもまったたく困らないと思ってますからね」

「うーん。ふわふわって飛んできると気持ちいいんだけどなあ」

実際に腰のあたりからプカプカと浮かんで、命ちゃんの傍まで近づいてみる。

ガシッと顔をつかまれ。

「んむ」

という間に、キスされてしまいました。

ボクはジト目になる。

もういまさら何も言わないけど、命ちゃんはボクに遠慮がなさすぎる。

「は……はあ……すご……。先輩成分きもちよすぎ……」

「命ちゃんはそろそろボク依存症から脱却しないとまずいと思います」

だって、ボクの成分を補充したあとの命ちゃんって、危ないクスリをキメましたって感じで、ぼわんとしてるんだもん。若干怖いです。

「もう先輩なしで生きられない身体になってしまいました」

「はいはい。もういいから、早くセッティングして」

そう——これは実験なんだ。

ピンクさんから提唱された、ゾンビ避けの実験。

ボクの歌がゾンビ避けに使えることはたぶん数十万人には知られるところとなつているけれど、歌以外になにが効くのか、一番効率が高いのはなんなのか知りたいらしい。

「やっぱりボクとしてはギターだよ！」

だって、ギターって——偏見かもしれないけれど男の楽器って感じるじゃん。ボクは元男として、これはずすことはできないよ。

ギターを弾いたことはないけど、そこはエアギターでなんとかしてみろしかない。

ビルの屋上で、配信環境を整えてもらつて、ボクは今日の配信を始める準備をする。具体的にはスカートのすそをなおしたり……、きよろきよろと周りをみまわしたり、チラチラと命ちゃんのやつてることを見守つたりしている。

カメラマンは命ちゃんだ。ハンディカメラだけど高性能らしい。

大体の機材は電池で動くポータブルなものだけど、さすがにギター関連はいくつかの発電装置が必要みたい。診療所の屋上には時計塔みたいな梯子になつているところがあつて、鳥が入らないように緑色の網がかけられている。

「機能的にはあそこにも電気来てるみたいですね」

ボクはふわふわと浮いて、中をのぞいてみた。

中は四畳半もないこじんまりとした作りで、いくつかの電源盤みたいなのがついている。ゲームみたいに簡単そうじゃない。命ちゃんも普通に梯子を上つてきて、すぐになにやらしていた。最後に長いケーブルにつないで解決。さすが命ちゃん。

これで準備OK。

「はろわー。終末配信者のヒーローちゃんだよ」

『今日もかわいい生ヒロちゃん』『あいかわらず天使』『今日も天使でかわいい』『どこどここー?』『どこかの屋上かな?』『天使だから余裕だね。どこかの屋上でも』

「今日はゾンビ沈静化にどんな楽器が一番効くのか試してみようと思

います。手始めはこれ……、ギターだよ！」

『ギター少女っていいよね』『フェンダーのストラトかな』『渋い選択だな』『Z03じゃないのか?』『象さん?』『外で弾く分にはそれしかないっつーか』『レスポールは?』『どうせなら百万円くらいするギターを死ぬまで借りてくればいいのにな』『本物だったらそれくらいするぞ』

コメントにもあったように、本当は象さんとかのほうがよかったかもしれない。

象さんならアンプ内臓だから余計な装備が増えないで済む。でもそれでもフェンダーのストラトキヤスターを選んだのは、なんかギターの本に、これの音がいいと書いてあったから。

ニワカでごめんさい。

でも配信にはいい音が必須なんだよ。

バーチャルユーチューバーにも音が劣化するのが嫌でボイスチェンジャーは使わないって信条の人がいて、なるほどそうだねと思ったんだ。

ボクも趣味で始めた配信だけど、既に十万人を超える視聴者さんがいる。

平均PVは百万を超え、ぶっちぎりの一位だ。

ゾンビ避けできなかつたらここまではいかなかっただろうけど、みんなにはいい音を聞いてほしい。

『マイシスターの協力を感謝する』『は? ドクターピンクがなんか言ってるんだけど』『マイシスター?』『お姉さま?』『ムキムキのマッチョが妹よって言ってるのかもしれないぞ』『どちらにしても許せぬ』『黙れ。凡人ども。ピンクはマイシスターの了承を得ている』

「あー。ピンクさん。煽らないでね」

『了解した。マイシスター。凡愚どもは無視しよう』『ピンク……おまえ。すっかりヒロちゃんのこと大好きっ娘じゃねえか』『たぶん八歳くらいの幼女だろ。ピンク』『ピンクは淫乱』『ヒロちゃんがピンクに優しく嫉妬』

「ともかくはじめのよ。といっても、ボクはギターについては素人な

んだけどね。さつきギターの攻略本読んできたからなんとかなるかなー」

身体能力の高さでなんとかなると信じた。

ギターは肩紐にかけたまま、ボクはギターの初心者向け書籍を手取る。

世に言うエアギターとかはすごく簡単そうに弾いてるようになるけど、結構複雑な感じ。

たぶん、単発の音源を弾いていくというのは初心者のボクには難しいかもしれない。本を地面に置いてつと……。

最初はやっぱり和音からだ。

和音はCとかDとかよくわからないけれど、決められたポジションに指を置いて、そのまま全部かき鳴らせばいいらしい。

まずはC。

ここから始める人が多いはずだ。本にもそう書いてあった！

ポローンと音はいい感じ。

『まあこれはな』『ギターは誰がひいてもギターだからな』『そういや全然関係ないんだけど衛星から追尾とかされてないの?』『お外で配信はヤバそうではあるよな』『我々はヒロちゃんと協力関係を築きたいと思っっている。そのような活動はしていない』『ピンクが媚び媚びじゃねーか』

「衛星からの追尾はできないようにしておきました」

「さすが後輩ちゃん」

「先輩のためです。でも先輩も素粒子なら別に私に頼らなくてもそのくらいできるのでは?」

「うーん。まあできるんだろうけど、ボクがやっちゃうと大雑把だから落としちゃうかもしれないし。衛星落としたらみんな困ったりしない? お天気予報がわからなくなっちゃう」

「先輩がお天気予報に多大なる関心を寄せていることがわかりました」

『お天使キャスター』『ヒロちゃんはスマホの天気予報のために全力を出す女の子』『ゾンビより明日雨が降らないかが大事な美少女』『マイ

シスター。人間のことにもつと関心を払ってくれ』

「だ、大丈夫だよ。ほらギター実験続けるよ」

「ギターをかき鳴らす先輩がかわいい件」

『わかる』『わかる』『理解する』『わかるけど、ゾンビ避け実験なんだから、ゾンビにもカメラ向けろよw』『ヒロちゃん様が今日もかわいい』『需要』『需要と供給』『アダムスミスの神の見えざる手!』

「後輩ちゃん。ゾンビにもカメラ向けてよ」

草生やされちゃったけど、言ってることは正しいよね。

ボクを見てても意味ないというか。

命ちゃんはチラつと下を撮影していた。

「うーん。ギターだと効き目が薄いみたいですね」

「やつぱり、誰が弾いてもギターはギターだからかな」

「それと単発の音ではあまり意味がないのかもしれないかも」

「わかった。もうちよつとがんばってみるね。C……D……うーうー」

「どうしたんですか。先輩？ そんな襲いたくなるような涙目になって」

「あの……あのね。Fに指が届かないんだけど」

Fコードを弾くためには、人差し指で弦を全部押さえる動作が必要になる。

ボクの指は年相応というか小学生並だった。

つまり——届かない。

「先輩ががんばってる姿がかっこかわいいです」

『ああ……』『手首をスナップさせろ』『小学生用のギターをもつてこいよお』『できなくはないんだろうけどな』『ライトハンドでもしてればいいんじゃない?』『できないくって涙目になるとこスコ』

「そもそもボクって……なにかの音楽を弾きたいんだけど」

「昨日はじめてギターを触った先輩がいきなり歌にあわせて演奏ですか?」

「できないかな」

「デューパープルあたりならできるかもしれないね」

「ああ、でつでつでーつてとこね」

『できるのか?』『ていうかギター初めて触ったのかよw』『ヒロちゃんは小学生だぞ』『何ヶ月か練習すればなんとかなるんじゃないかね?』『マイシスター。おそらくギターはあまり効き目がないようだ』

ちくしよう。素人特有のなんの確信もない思い込みで、簡単に弾けるようになると思っていたよ。

「先輩、ギター貸してください」

「ん。後輩ちゃん? え、カメラいいの?」

カメラは地面に落として、命ちゃんが映らないようにする。

「あ、べつに映してもらってもいいですよ」

「顔バレしちゃう……」

命ちゃんはボクが顔バレしたときもだけど、背後に隠れていて顔バレはしていない。わざわざみんなの前に顔を晒す意味はないと思うんだけど。

「いいんです」

ギターを受け渡したあと、命ちゃんは柔らかに微笑んだ。

ふうむ……。

もしかして、顔バレを自分もすることで、アイドルユニットになるうとしているな。恐るべし命ちゃん。

ボクはカメラに命ちゃんを映した。

『ふお。この子が後輩ちゃん?』『ええやん』『ふーん。高校生くらい?』『やっぱり百合じゃねえか。やべえぞ』『前回のバーチャルなキスって、つまりこの子とヒロちゃんがやったんだよな』

「後輩ちゃんです。お目汚しですが……わたしも多少はゾンビを操れます」

『ふあ?』『マ?』『どういうことだつてばよ』『後輩ちゃんもゾンビ?』『ヒロちゃんから感染したんじゃないかね?』『天使ウイルスが感染』『後輩ちゃんもかわいいよ後輩ちゃん』『卑しい豚って呼んでください』『ヒロちゃんがちっちゃな先輩でかわいすぎるって事に気づいた』

命ちゃん……。

ボクの悪目立ちを防ぐために、自分も押し出すことにしたのか。

ああ、ボクのバカ。

いまさら遅いけど、命ちゃんも顔バレしたら、狙われちゃうかもしれない。

ボクの中には後悔しかなかったけれど、命ちゃんは最初から決意していたのだろう。まったく後悔の念というのは見られない。

むしろ、やってやったという爽快さのようなものが顔には現れていた。

「とりあえず、ギターを弾いてみます」

屋上の縁に立ち、命ちゃんが颯爽とギターを弾き始める。

てか、ウマ。なにこれ……。

『ライトハンド?』『これはひどい』『なんやこの子天才か』『後輩ちゃんも天才美少女かよ』『はー。すごい』『ていうか何を弾いてるの?』『プッチーニ』『誰も寝てはならぬ?』『ギターアレンジですね』

天壤を駆け抜けるような音楽。

すごいな命ちゃん。羨望という感覚しか湧かないよ。

一瞬、目があつて、視線で下を映すように言われた。

だから映してみたんだけど——。ふむ。変わりはないみたいだね。

ゾンビにギター音源は効かないことがはつきりした。

「ありがとうございます。はい。先輩」

『88888』『ギター歴何年くらいだろ』『マジですげえな。ゾンビじゃなくてもやっていけるだろ』『こいつはすげえや』『ヒロちゃんとのコラボもいいけど、ソロでチャンネル立ち上げてほしい』

「うん。ありがとうございます。後輩ちゃん」

ギターを受け取る。うーむ。ギターはボクには難しいみたい。

驚くべきことに、ボクが知る限りでは命ちゃんはギターを持ったことはない。もしかしたら福岡のお家にこっそり持っているかもしれないけれど、雄大からもそんな話がでたことはなかった気がする。

つまり——どんなことでもほんのちよつと触っただけでできてしまう。

たぶん、昨日ボクから借りてちよつと弾いたのが最初だって話。

天才としか言いようが無い。

むむう。先輩としての威厳が。

ボクとしては命ちゃんが天才なのは知ってるから、べ、べつにいいんだけど。

ほら、同じことをしちゃうと、ボクの平凡さが目立つちゃうといひかなんというか。嫉妬。嫉妬だよ。ちくしょう。

命ちゃんがすごすぎる。

対してボクは――。ボクができることと言ったら。

デーデン。デーデン。デーデン。デーデン。

なんとはなしに弾きつつける。

「先輩……サメのテーマをギターで流すのはどうかと思います」

「そ、そうだね……ボクも反省しました」

今回の配信ではギターだけじゃなくて、いろいろ持ってきたんだ。まだまだ続きます。

ハザードレベル50

引き続き。

ボクは命ちゃんといっしょに、とある診療所の屋上に来ている。地上はゾンビだらけで、人間の気配はない。

「さて、次は何を試そうかな」

実を言えば、今日はいろいろなものを持ってきている。

ギターはわりと重かったけど、小さいところでは、小学生が吹くようなりコーダーとか、ハーモニカとか、オカリナなんかもある。

ふと手に取ったりコーダーは、余計な装飾がついておらず肌色一色のシンプルなやつだ。ボクはそれを手に取り――、少し覚えていたドの音を出してみる。

あむつてくわえて。唇を添えて吹いてみた。

うむ。さすがにボクもリコーダーくらいは吹けるよ。

命ちゃんがボクにカメラを向けたので、吹いたままの姿勢で小首を傾げた。

「先輩。それって誘ってますよね？」

「え。なにが？」

意味がよくわかんない。

『小学生なヒロちゃんがいつもより小学生』『リコーダーと幼女』『学校の時に好きな子のリコーダー舐めたことあるわ』『は？』『後輩ちゃんこいつです』『おまわりさん。変態がいます』『はよBANしろ。間に合わなくなっても知らんぞ』『ヤダ。BANはやめて許して。出来心だったんです』『ジャパニーズは、やはり変態だな』

「少しは気持ちわかりますから執行猶予をあげます。先輩がわたしに笛を渡してくれればの話ですけど」

「え。どうしてそんな話になってるの？」

なんで命ちゃんにボクが吹いた笛を渡すの？

間接キスとか狙ってるの？

なんできよとんとした顔してるんだろう。

「実験は多角的かつ多面的におこなわなければなりません」

命ちゃんは真面目な顔をして言った。

「ボクが一番ゾンビ避けできると思うんだけど……」

「ヒロ友のひとりかBANされちゃいますよ。どうするんですか」
命ちゃんはやるもやらないタイプ。

ボクとしてはヒロ友を人質にとられたらやむをえない。

しかたなしにリコーダーをわたす。

「やった」

途端にうれしさのはじけるような顔になる命ちゃん。

「いや……。うん。まあいいけどあまり変なことしないでね」

「しませんよ。ちょっと眺めすがめつするだけです。私は好きな女の子のリコーダーを舐めるような変態じゃありませんので」

「それはいいけどさあ……」

ちなみに、リコーダーのゾンビ避け効力はそこそこといった感じだ。歌のように強力には効かない。歌は録音したものでもそこそこ効いているから、やっぱりボクの吐息が重要なものかと思って思う。

ギターのようにボクの吐息がまったく関係ない系統の楽器はほとんどゾンビ避けに意味をなさないみたい。ハーモニカもオカリナもリコーダーと同じぐらいで、タンバリンみたいな楽器はギターと同じぐらいで、あまり効き目がよくない。

「先輩のかわいらしい唇から漏れでてる音というのが重要なのかも？」

「うん。なんか変態っぽいよ。後輩ちゃん」

『でもヒーローちゃんの唇に吸い寄せられてる感はあるよな』『オレがゾンビでもそうなるわ』『弦楽器も打楽器もダメなのか』『口をつけるような楽器がいいってことだな』『でもそもそも歌が効果あるんだから、べつに楽器とか試さなくてもよくね?』『違うだろ。一番知りたいのは距離だよ』『いつも歌ばかりじゃ飽きるというのもあるんじゃない?』『寝る前にはヒロちゃんずララバイをかかさず聞いてますが何か?』『へびロテしてますが何か?』『ヒロ友にも多少は目端がきくものがあるようだな。ピンクも感心した』『毒ピンにはめられちった』

ドクターピンクは毒ピンとも略されているのでした。

でもなんとなくわかるよ。

距離というのは大事だ。

ボクの歌唱力というか音量ってそこまででもないから、距離範囲が低いんだよね。大音量で流すと音が割れちゃうし、もしも楽器でOKなら、もつと広範囲に効力が及ぶことになる。

ピンクさんはたぶんそれを狙っているんじゃないかな。

「続きましては、えっとトランペットです。ボク、これも演奏したことないんだけど、吹けるかわかんないなあ」

金属質のそれは、黄金色に輝いていて、とてもキレイ。

湾曲した部分と直線的な組み合わせが人間的でボクは好き。

でも、トランペットって、実をいうと素人を寄せ付けないところがあるように思う。まともに音を出すだけでも習熟が必要だっていうし、人生で一回も触ったことのないボクがうまく吹けるのかは謎だ。すうっと息を吸って。

気合をこめて吹いてみます！

鳴らない。ふしゅーっていう変な音がするだけで全然鳴らないよ！

『顔真っ赤にしながらがんばってるヒロちゃんがかわいい』『OH……ジーズ』『滅びの天使』『いなごが湧いてこないか心配です』『いなご？』『某宗教の第五のラツパですね』『日本人は無宗教なのではないか？』『わりと雑食なのは認める』『終末だし、かわいい天使にすがりたいのは認める』『死にたいと思っても死ぬことができず……切に死を望んでも死のほうに逃げていく』『それってゾンビじゃん』『天使様……我らをお助けください』『最後のラツパが鳴ると死者は復活して朽ちない者とされ、わたしたちは変えられる。予言のとおりだ』『外人さんのこたあオラわかんねえ』

ヒロ友がなにやらよくわからないことで灼熱した議論に突入している。

でもボクはそれどころじゃない。

鳴らないんだけど！

「あまり力まないほうがいいですよ。ふにゅってして、しゅわっと吹

けば、簡単に音はでます」

「そんな感覚的な話じゃ全然わかんないよ！」

「先輩……」

命ちゃんはずごく理不尽だと思えます。

そんな感覚的な話で伝わるわけないじゃん。まったくもう。

ふう。プオー。

気が抜けたのがよかったのか、なぜか音が出た。

OH……ジーザス。

結果はリコーダーとそれほど変わらないみたいだけど、リコーダーよりは大きな音がでる。

でも、できれば——。

そう、できればなんだけど、おそらくピンクさんが望んでいるのは生活になじむような音源なんだと思う。

例えばの話で想像できるんだけど、四六時中ボクの子守唄とかが流れてると、いくらなんでもわずらわしく感じるんじゃないかな。

いくつかバリエーションを作って、それでゾンビ避けができれば、人間にとっては有利なんだと思う。

トランペットはどこかの宗教にとってなじみが深かったのか、一部の人に興味を引いたみたいだけど、一番いいのは聞こえない音だ。

今回、ピンクさんから強く要望されたのは、人間には聞こえず、しかし長距離・広範囲で影響を及ぼせるような可能性のある、そんな『楽器』だった。

正確に言えば楽器じゃない。

小さな指先程度の長さしかないそれは『犬笛』と呼ばれている。

ボクの持つている犬笛はスライドみたいなのがついていて、周波数のある程度変えられるみたいだけど、可聴域ギリギリの按配が難しい。

聞こえる音だとかかなり遠くまで届くみたい。

そして人間の可聴域外にすると、モスキート音のように人間には聞こえなくなる。

ただ問題があって、高周波の音は、音の波のいつたりきたりが激し

いから、エネルギーがすぐに減衰しちゃうんだって。つまり遠くまで聞こえない。

おそらくピンクさんの意図としては放送設備とかを使ったものになるから、距離的にはそこまでいらなかな。出力をあげれば届く距離は長くなるはずだし。あんまりやりすぎると振動になりそうだけど……。

そのあたりはピンクさんにお任せです。

犬笛には演奏技術は必要ない。息を吸って吐くだけだ。

キーンという音が鳴っているのがわかる。ボクの強化された聴力だと犬笛の音も感知できるみたい。

「後輩ちゃん。聞こえる？」

「聞こえませんね。先輩がかわいいということしかわかりません」

「ボクには聞こえるんだけどな」

「わたしのレベルが低いからだと思います」

「じゃあ、後輩ちゃんのレベルがあがればいずれ聞こえるようになる？」

「かと思えます。しかし、残念ですね。本命の犬笛はどうやらゾンビにも聞こえないようです」

ビルの下にいるゾンビたちを見てみると、確かにまったく動きがないようだった。

『なるほど犬笛か』『ピンクの思惑が当たれば拠点確保は簡単だったろうな』『ヒロちゃんずララバイでよくね？』『だから距離が足りねえって言ってるだろうが』『ヘビロテでも限界はあるよな』『幼女の歌声が世界にとどろく』『夜中昼間問わず流し続けてますがなにか？』『マジかよ。こいつはすげえ』『え、ヒロ友だったら余裕だろ？』

「んー。ごめんなさい。犬笛が効力ありなら、もう少しみんなの生活圏を確保できたんだろうけど、いまのところは、いくつかバリエーションを持たせるくらいしかできないみたい」

『ピンクはヒロちゃんに多大な感謝を寄せている』『オレたちのためにいろいろやってくれているのは知ってる。マジでありがとう』『好き(直球)』『希望があるだけで違うわ』『ゾンビに噛まれても大丈夫』『い

や実際、人間に戻せるという話が本当だとして、噛まれそうになつたらどうすればいいんだ?』『黙って噛まれればいいんじゃないかね?』『さすがにそれは怖いぞ』

ボクとしては何も言えないな。

確かにボクはゾンビから人間に回復する手段を持っているけれども、だれでもかれでも人間に戻せばいいとは思っていないから。

人間が勝手に助かる分にはいいと思うけど、いつか人間とゾンビの利益が相反することが考えられる。

そのとき、ボクはどうすればいいんだろう。

『何も楽器に縛られる必要はない』『サイレン@全部ヒロちゃんとかも』『ゴルフのボールが飛んでいったときのファーでもいいんじゃないかね?』『ヒロちゃんのえちえちな声が聞きたいです』『は?(マジぎれ)』『後輩ちゃん奴です』

「ん。矯正が必要ならわたしがしてあげましょうか」

とてもにこやかな命ちゃんだった。

『すみません。ゆるしてください』『BANされてもお前のことは二秒くらいは忘れないよ』『小学生のえちえちな声を求めるとか……オレも嫌なんでもないです』『ともかく、遠くまで届く声ならファーがいいぞ』『ふあ?』

「ふあー?」

犬笛が効かないのは、可聴域がどうこうというよりはボク自身が犬笛を人間には聞こえないものだと思ってるからかもしれない。

本当はヒロウイルスの浸透作用によってゾンビを操ってるわけだから、犬笛だろうがなんだろうが関係ないと思うんだよね。

ギターだっていつかは効くようになるかもしれない。

でも、ボクはボクの喉というか肉体以上には楽器も犬笛も使えていないってことだと思う。

だから、今のところは声だけでなんとかするほかない。

ボクは屋上の縁に立った。

ゾンビ的パワーで喉をきゅつと締めて、できるだけ高い音を出すようにする。

山彦みたいに両の手で傘をつくって。

「ファー！」

「——っ！」

「——！」

「！」

キインと音が響いている。

たぶん、人間の可聴域を超えた音がでているみたい。

命ちゃんはうるさそうにはしていないから、人間の可聴域を超えた音になっている。

伝えたプログラムは、どこか行けというもの。

できるだけシンプルなほうが伝わりやすいからね。

『いま超能力を使ったのか？』『ん。毒ピンが何か言ってる』『音の分析でもしてるんじゃない？』『見ろよゾンビが去っていった』

命ちゃんが建物の下を撮影していた。

ゾンビたちはみんな建物から離れて、道路の向こう側へ歩き出している。

うまくいったかな。

『ヒロちゃんから人間の可聴域を超える音が出ていた』『当然だろ。みんなヒロちゃんヒロちゃん言うってるけど、英雄だぞ』『ヒーローちゃんだからな』『天使だからそれぐらいできるに決まってるだろ』『ヒロちゃんボイスロイドつくろうぜ』

みんなわりと無茶言ってるけど、なんだかコメントがうれしそう。

これで、少なくとも放送設備があるところは、だいぶ安全になったかな。

ボクの”お仕事”も果たせたようだなにより。

とりあえず……。

「ブイ」

「あ、先輩がかわいい」

すかさずハンディカメラを向ける命ちゃん。

ちよっとだけ恥ずかしいので、ちよきちよきしてしまった。

『ブイサインするヒロちゃんがかわいすぎる件』『ブイブイ言わせてる

な』『審議』『アウト』『アウト』『セーフだろ』『これで人間の勝利がまた一歩近づく。ヒロちゃんの献身にピンクは感謝の意を表する』

ピンクさんも喜んでるみたいだし、ボクとしてもうれしいよ。

実をいうと、半分くらいは自分のためだったりもするんだけどね。どうせ顔バレしてるし、ゾンビ避けできる超能力少女だとバレてる今の状況だと、人間と協調路線でいたほうがいい。

人間に肩入れしすぎて、いずれボクが排斥されるということも考えられるけど、配信しているなかで、ヒロ友はボクを甘やかしてくれたから、できるなら仲良くしたいんだ。

それとすつごく即物的なんだけど、これで発電所とか護ってください。お願いしますという気持ちもこめてる。配信がしたいし、ゾンビ映画はみたいし、つまるところ電気大事。電気様がないと生きていけないのです。

ゾンビや人間よりも、ボクは退屈のほうが恐ろしいのです。

☆
☆

しばらくは適当な楽器を練習してみたんだけど、ボクは自分で思っている以上に不器用なようでした。まったく弾ける気配がない。対して命ちゃんはなんでもかんでも即座にプロ並に弾きこなす。

練習量とかの問題じゃない。

ボクはついには楽器を放り出して、ビルの縁で足をプラプラさせている。

そしたら、命ちゃんがノートパソコン片手に近づいてきた。

「先輩のボイスでゾンビ難民を救出するスレとかができたみたいですね」

「え、どういうこと？」

「あくまで民間なのでどこまでうまくいくかはわかりませんが……」

命ちゃんが見せてくれたのはパソコンの画面だ。

あれから一時間くらいしか経ってないのに、ヒロ友の誰かがスレッドを立てたみたいだ。仕事が速いね。生存にかかわりが深いから当

然だとも言えるけど。

1 : 名無しのヒロ友 : 20XX (土) XX : XX
ゾンビ避けできる美少女小学生ヒロちゃんのボイスで救出したい。
ゾンビ難民になってるやついるか? ちなオレは埼玉県民なんで首都圏限定な。

2 : 名無しのヒロ友 : 20XX (土) XX : XX
ヒロちゃんって誰?

3 : 名無しのヒロ友 : 20XX (土) XX : XX
厚生労働省のHP覗いてみる

4 : 名無しのヒロ友 : 20XX (土) XX : XX
おい。厚生労働省のページ。ハッキングされてんの?

ゾンビ対策ページに、なんか小学生くらいのかわいい女の子が写真つきで解説されてるんだがwwwwww日本は炉理魂国家だとは思っていたがさすがに草生えるwwwwww

5 : 名無しのヒロ友 : 20XX (土) XX : XX
国家が推奨してる対ゾンビ兵器、それが終末配信者ヒーローちゃんだ

6 : 名無しのヒロ友 : 20XX (土) XX : XX
ヒーローちゃんとかギャグで言ってるのでござるかwwwwww

7 : 名無しのヒロ友 : 20XX (土) XX : XX
いやマジだつて。空飛んで、超能力使って、歌を歌ったらゾンビは沈静化する。

別におまえが信じなくてゾンビになろうが知ったこつちやないがな。

ちなみにゾンビウイルスから回復することもできるから、オマエがゾンビになつても運がよけりや助かるかもしれん。

8 : 名無しのヒロ友 : 20XX (土) XX : XX
エイプリルフルは遠いのでござるよwwwwww

9 : 名無しのヒロ友 : 20XX (土) XX : XX
こいつマジであかんやつや。触らんどこい。

10 :名無しのヒロ友:20XX(土)XX:XX

1だが、ヒロ友ならわかっていると思うが、ヒロちゃんの声は本当に効く。で、場合によってはポータブルな音を流せる機械がなくて脱出できないやつもいると思っただが、助けが必要なやつはいるか？

11 :名無しのヒロ友:20XX(土)XX:XX

オレ、デスクトップだけだわ。家の周辺はヒロちゃんずララバイでゾンビ避けできてるんだが、食糧調達のとくに毎回死にそうになる。でも、オレんち福岡なんだよなあ。ヒロちゃんが福岡に来てくれることを毎日祈ってる。

12 :名無しのヒロ友:20XX(土)XX:XX

福岡ならオレと同じ県だな。どのへん？

13 :名無しのヒロ友:20XX(土)XX:XX

宇美町

14 :名無しのヒロ友:20XX(土)XX:XX

近いじゃん。こっちのメールアドレスに住所送ってくれば行くぜ。

15 :名無しのヒロ友:20XX(土)XX:XX

助かるわ。でも食糧もないし、いくらヒロちゃんボイス集あっても危険だぞ。ある程度動きは緩慢になるが、人間が近づいたら襲ってこないってほど無効化できてるわけじゃないしな。

16 :名無しのヒロ友:20XX(土)XX:XX

オレんところの避難所では、さつき話しあいで、朝はヒロちゃんのラジオ体操から始まって、昼はサイレン@全部ヒロちゃんを適度に流して、夕方はヒロちゃんの蛍の光で終わることが決定したわ。これで安眠確定。

17 :名無しのヒロ友:20XX(土)XX:XX

あ、おまえらマジで言ってるのw

ほんとに？

18 :名無しのヒロ友:20XX(土)XX:XX

◇17

嘘を嘘と見抜けないやつは……死ぬ

逆に言えば、真実を真実と見抜けないやつも……ゾンビになるほかない。

19 : 名無しのヒロ友 : 20 X X (土) X X : X X
草ボウボウだったやつが、急に単芝になってて笑える

20 : 名無しのヒロ友 : 20 X X (土) X X : X X

あの……すみませんでした。

みんな冗談言ってると思って。

この子すごくかわいいですね。アーカイブ見ようと思います。

21 : 名無しのヒロ友 : 20 X X (土) X X : X X

ヒロちゃんが天使すぎて速攻で荒らしが改心するの凶

22 : 名無しのヒロ友 : 20 X X (土) X X : X X

めっちゃ早口で言ってる。

23 : 名無しのヒロ友 : 20 X X (土) X X : X X

で、∠ 20は救出はいらんのか？

24 : 名無しのヒロ友 : 20 X X (土) X X : X X

あ、大丈夫です。ありがとうございます。自分、シエルターみたいなところにいるんで、一年くらいは問題ないです。そんな事態になつてるとは露知らず……。お恥ずかしい限り。

25 : 名無しのヒロ友 : 20 X X (土) X X : X X

ゾンビ避け効果はヒロちゃん曰く50パーセントくらいの確率らしいから油断はできないが、何人かで徒党を組んでいけばほぼ大丈夫だ。避難所の誰かを誘ってそっち行ってみるよ。

26 : 名無しのヒロ友 : 20 X X (土) X X : X X

本当にありがとう。やべえ。マジで涙出てきた。

27 : 名無しのヒロ友 : 20 X X (土) X X : X X

やべえな。オレたちマジでヒーローの友達みたいなことしてるんじゃない？

「なんかうれしいな」

ボクを基点にして、なんとかゾンビだらけの世界を生き残ろうとしている。

ピンクさんも言ってたけど、こころの連帯はゾンビにはできない。ボクはボクのノードを自分の生存に有利なように動かしているだけで、ゾンビさんたちと友達なわけではないから。

「いろいろと危険なことも増えますが、先輩がうれしそうでなによりです」

「後輩ちゃんもありがとうね。さつきは顔バレしなくてもよかったのに」

「ふ」

「ふ?」

「ふへへ。先輩に褒められました」

「だらしない顔になってる」

「今日は先輩のお口のついたリコーダーももらえたし、良い一日でした」

「うん。まあ……あげたのは本当だから何もいわないけどね」

あとで練習と称して舐められそうな気がするけど、それも何も言わないことにする。自分のお部屋でやるぶんには自由だしね。ちよつとゾワンつてするけど。

「じゃあ、そろそろ配信を終わろうかなと思います」

『待つて』『やめないで』『ヒロちゃん様あ』『いかないで』『待つてくれ！ ヒロちゃん』

みんな名残惜しそうにしてくれてる。うれしいな。

つて、あれ? 今のピンクさんかな。ピンクさんもめっちゃ高速でヒロ友になじんでるけど、さすがに待つてくれの重みが違う。ボクのこととはゾンビ対策のパートナーとして捉えてる節があるからね。

「どうしたの? ピンクさん」

『ヒロちゃんの声を分析していると、可聴域にかすかに異音が聞こえる』

ん?!

ボクの聴力は既に人間の域を超えている。

でも、ボクの意識は人間のときのままだ。つまり、教室の先生の声

みたいに、聞こえてはいるけれども、意識の外に置いてる音も多い。そうじゃないと聞こえすぎてしまってわずらわしいから。

意識すると——、確かに聞こえてきた。

羽音みたいな小さな音。

『おそろしく光学迷彩と消音機能を搭載した軍用の——』

ドローン。

いつのまにか、ボクたちは多数のドローンに囲まれているみたいだった。

ハザードレベル51

ドローンというのは、小型のヘリっぽいやつだという認識がある。大きさはマチマチで、手のひらに収まるサイズから人間の子どもくらいのサイズまで様々だ。

たぶん、戦闘力という意味ではほとんど意味がないだろう。

主な用途は偵察だろうから。

現に今のボクたちも、空撮されているだけで、変な攻撃を受けているわけじゃない。

「光学迷彩とか消音とかどういうふうにやってんのかなあ」

「光学迷彩っていうとゲームとかにありますが、簡単ですよ。超小型カメラで撮影した背後の画像を前面の液晶に映せばいいんです」
なんとなく仕組みは理解できる。

でも、ゲームみたいに完璧じゃないから、継ぎ目とか見えるよね？
それにカメラで撮影した画像を前面に映すということは、機械的にはタイムラグが発生するから、なんか揺らめいて見えるかもしれない。ただ、夏の照り返しで空気がゆらめいている今の状況だと、あまりそういうのは気にならない。

セミの声もあいかかわらずうるさいし、欺瞞活動はそこそこうまくいってるみたいだね。

でも、それも意識していなかった場合に限られる。

じつと目をこらして見ると、確かにいるわいるわ。

二十か三十くらいのドローンが上空からボクたちを狙っている。

盗撮するなんて趣味が悪いよ。

「音がしないのはなんでだろう」

もともとドローンというのはミツバチという意味だったはず。
ぶううううんっていう甲高い音がするはずなのに、ほとんど聞こえない。

ドローンの特性上、プロペラを覆ったら飛べないはずで、覆えない以上は音がでるはずだ。

「軍用というのは民間の二十年くらい先に行くはずですからね。完全

無音のドローンもあるのかもしれませんが」

ふうん。そんなものなのかな。そうだ。ピンクさんは何か知ってるかな？

『わりとロートルな技術だが飛行船のようにガスで浮いている超小型タイプだろう』『ピンクのくせに格好いいぞ』『さすピン』『飛行船タイプとかあるのか。おっせえだろうな』『速度はでないがステルス性は高そう』『持続性もあるだろうな』『UFOみたいに謎の力で浮いているのかと思った』『冷静に考えればヒロちゃんも謎パワーで浮いてるしな』

「あ、ピンクさんありがとう」

そうか。飛行船タイプで静かに浮いているのか。

ドローンの音はほとんどプロペラの音だろうし、きつと、プロペラの回転率を落として静かに近づいてきたのかなと思う。

姿が見えないのと音が聞こえないのはわかったけど、これって日常だったら普通に幼女を盗撮する変態だね。ボクが幼女かどうかというのは議論の余地があるけれど。

きつと、ボクの家を探ってるんだらうな。

でもここはボクの住んでる町じゃない。佐賀でもかなりはずれのほう。

ボクの航行スピードってわりと早くなってるからね。そのうちドラゴンボール並みに速くなりそう。でもまだ怖いから電柱の少し上空をうろちよろ飛んでいます。なので、いくらボクの住んでるところを探ろうとしても無駄だ。

「ピンクさんのほうからやめてって言ってもらうことは可能ですか？」

ボクはピンクさんに問いかけてみた。

なんらかの機関に所属していて、日本政府ともそれなりにつながりがあるというピンクさん。

今回のドローンもたぶん軍用って言うことから政府関係だろうし、言ってもらえたらどうにかならないかな。

『それはおそらく無理だろう。政府も一枚岩ではない』『ピンクなんで

そこであきらめんだよ』『できるできるやればできるって』『頑張れ頑張れできる絶対できる頑張れもつとやれるって』『気持ちの問題だ頑張れ頑張れそこだ!』『もつと熱くなれよおおおおお』

『ヒロ友たちがなに言ってるのかわからん』『毒ピンってマジで外国人だったんだな……』『しかし、うざったいな』『少女を盗撮するとか口リコンの風上にも置けん』『おまえロリコンだったのかよ』『いや好きだった子がたまたまロリだっただけだ』『みんなそう言うんだよ』『ヒロ友はみんなロリコン?』『察しがいい子は嫌いだよ』

「うーん。ともかく無理ってことね」

『そもそもどこの所属かもわからないとどうしようもない』『そういえばそうだよな』『厚労省とかじゃないの?』『防衛省あたりかも』『どこかの金持ちがヒロちゃんをゲットしたいだけだったりして』『この配信見てるだろうから呼びかけてみたら?』『ヒロちゃんにお願いされるとかウラヤマシス』

「そうだね。まずは挨拶が基本だよね。こんにちわ!」

とりあえず空中に向かつて手を振ってみる。

『脇』『おいおまえ……』『でも無邪気に手を振る姿も』『絵になるよな』『もうすっかりゾンビだよオレら……』

う……。ちよつと恥ずかしいな。

今のボクは例によって袖のない服を着ている。

「先輩。こいつBANしときますか?」

命ちゃんはニコって笑って画面を指差しました。

ターゲットは脇と一言書いただけのヒロ友だ。

「そのくらいでBANしちゃダメだよ」

そういう目で見ている部分があるのはわかるし、問題にならない程度にうまく話をつないでいかないと。

ちなみに、ドローンのほうは遠巻きにボクを見ているだけで特に反応はなかった。対応が遅い政府とかの大きな組織だと、態度が変わるのに時間がかかるってことなのかもしれない。

「ねえ。ボクのこと追いかけるのやめてよ」

姿は見えずとも意識したら視線を感じる。

カメラのぶしつけな視線。

なんだか少しイライラしてきた。

「もうー。全然わかってくれないみたい」

「配信が終わったあとに、こっそり家までついてくる気だったのかも
しれません。ガス式だったら、浮いているだけならそこまで電池を使
いませんし、きっと航続距離も相当長いでしょう」

「ふうん……」

って、それは困る。

ボクのアパートがバレたら、連行されて変な実験されちゃうかもし
れない。

ボクだけじゃなくて、飯田さんたちも危ない。恵美ちゃんも。

「どうにかしてお引取り願いたいんだけど」

「ぶっこわしたらどうですか?」

「そんな過激なことできないよ」

「どうしてです。あいつらのやってることは敵対行動ですよ」

「見てるだけだよ」

「見ているだけといいますが、敵情視察も立派な戦争行為でしょう」

うーん。

命ちゃんはわりと過激だからな。

他人を敵か味方でわけけるシンプルな思考をしているせいか、あつと
いう間に裁定が下ってしまう。今回のドローンについてはアウト
だったみたいだ。

「みんなの意見はどうかかな?」

『というか、ヒロちゃんは壊せるのか?』『超能力でぶっ壊すの壮快そ
う』『やっっちゃえヒロちゃん!』『破壊せよ』『準備は一任するわ』『警
告は既におこなっているからやっっちゃえばいいんじゃないね?』

「ドローンは脆そうだし、精密機械だから簡単に壊せると思うよ」

『その力のことも知りたいのだが……』『やつらもヒロちゃんの力知り
たがってるんじゃない』『毒ピンに限らず科学者ならそうだよ』『力を使
うのを待ってる可能性もあり』『なんだ。じゃあぶっこわしていいっ
てことじゃん』

「ふむふむ」

コメントだと意見が揺らめいている感じだな。

壊してもかまわないって意見が多数派みたいだけど。

「後輩ちゃん。アンケートとりたいんだけど……」

「先輩らしいですね。でもみんなが破壊するなって言ったらそうするんですか」

「参考にするだけだよ」

「ならいいです。はいどうぞ」

ものの数秒でアンケートは表示された。

命ちゃんは仕事が速いな。破壊するか破壊しないかの二択です。

配信はボクの意見に寄ったカタチになるだろうけど、ボクはみんなのせいにするつもりはない。破壊するにしろ放置するにしろ、ボクの行動はボクが決める。

アンケートの結果は破壊するが78パーセントでした。

うーむ。ボクとしては暴力的行為がない限りはできるだけ対話したいと思ってるんだけど、みんなはわりと短絡的だな。

でもコメントにもあったとおり、ドローンの目的はボクの超能力がどれほどのものかを知りたいだけなのかもしれないし、あわよくば捕獲しようと考えてるのかもしれないから、ついてこられても困る。

「こわすよ？ 一応、カウントするからね。10……9……8……もし破壊されなくなったら姿を見せてくれるか、配信に書きこんでね」

『お？』『ヤバイな。アレがはかどる』『ゼロゼロゼロで落とされるドローンたち……』『えちえち加工職人さんはまだですか』『小学生には早すぎる』『なにが早すぎるんですかねえ』『で、でますよ』『おいおまえら後輩ちゃんに消されるぞ』『え、お風呂のカウントダウンだよな？』『そうだぞ。お風呂のカウントダウンだぞ』『KENZENだな』『そうだよな』『でも小学生のお風呂で興奮するのもアウトなんじゃ……』

ヒロ友たちはあいかわらずノリがよかった。

「7……6……5……4……」

『音と映像を解析する限りではなんら前兆が見られない』『超能力を科学で解析してもしようがないだろ』『素粒子うんぬんって言ってたし、現代科学じゃ無理なんじゃ』『そのうち時空転移とか超究武神覇斬とかなでできるようになりそう』『オレはニーベルヴァレステイが好き』『シンプルにかめはめ波で』『あ……また天使の羽』『幻想的すぎる』『夜のほう映えそうかな』

高出力モードになると、背中あたりからヒロウイルスが駄々漏れになるみたい。見た目的には『光』そのものだけど、それがなんなのかはよくわかんない。

「3……2……1……」

『はえー。やっぱりヒロちゃんは天使やったんやなって』『天使に怒られるとか、ドローンたちうらやましい』『で、ピンクはこれ解析できてるの？』

『ド・ブロイ波による波動関数の書き換えによって物質の属性を上書きしているのではないかと思われる。理論上は時空転移も可能であるが、しかしそのためには莫大なエネルギーが必要になる。それこそブラックホールがひとつたつはできるほどの』

『なげーよ三行で説明しろ』『ヒロちゃんが光っててかわいくてすごい』『ピンク、おまえ結構言えるじゃねえか』『年末にはヒロちゃんのカウントダウンで終わりたいわ』『世界は終わらない』

「0！」

瞬間――。

ドローンは爆ぜた。単純に墜落させたほうが楽だったけれど、ボクに手をだしたほうが危ないよって伝えたほうがいいと思って、おもいきり派手にやった。

『爆発？ 燃烧させた？』『ピンク解説しろ！』『ピンクの扱い方が雑w。でも早く説明してね』『ドヤ顔なヒロちゃんがかわいすぎて困る』『はあ。ドキがムネムネする』『おそろくだが、空気を摩擦しドローンを浮かせているガスに着火させたのだろう』『はえー。ヒロちゃんは小学生なのに頭よしよしだな』『よしよしって頭なでてあげたい』

ふふふ。もつと褒めて。

ドローンはガスで浮いているって聞いたから、ドツカンさせるのが簡単だって思ったんだ。ゾンビモノではわりとお約束の爆発物です。遠くから観察している本命がいるかなって思ったけど、ボクが感知する限りではないみたい。

といっても、視覚や聴覚が上がったといっても、そんなに化け物めいてはいないから、ずっと遠くで狙っていたらわからないかもしれない。

☆
＝

「えっと、今日はみんなに助けてもらって本当にうれしかったよ。ありがとう。じゃあまたね！」

『おつかれー』『さすがに二度目の行かないでは言わないでおいでやる』『ツンデレさんかよ』『今日もかわいかったー』『天使さま我々をお導きください』『滅びの天使様』『変な人たちには気をつけるんだよ』『うん。きをつけるね』

っというわけで、配信はいったん終わり。

ボクは命ちゃんにありがとうと声をかける。

「先輩のお役にたてたのなら幸いです。でも、問題はこれからですね」「ん？ なにか問題あるの？」

「先輩は見える範囲のドローンを破壊してみたみたいですが、ずっと遠くでスナイパーみたいに狙っている奴がいなくても限りません」

「うん。そうだね。でも、これから尾行する場合、たぶん、くつついてくるよね？ ボクたちの移動スピードが速ければプロペラをたくさん回すから音がでる。そしたら、たぶんステルス性がなくなって気づくと思う」

「ドローンならそうでしょうね」

ドローンなら？

どういうことだろう。

「先輩。ドローンはいったいどこからやってきたんでしょうね。ドローンの航続距離はさしたるものではありません。せいぜい数キロ

圏内です」

「つまりどういうこと？」

「装甲車なりなんなりがすぐ近くにいますということになります」

「なるほどね。すぐ近くにいますのかな。ゾンビセンサー的にひっかからないから、うまいこと隠れているね。でもそれでも空を飛べるボクたちを追いかけてはこれないと思うんだけど」

「地上部隊としてはそうでしょう……ですが」

そう、パラパラララという音が聞こえてきた。ドローンなんかとは比べ物にならないくらい大きな音だ。おそらくはどこかの屋上で待機していて、いつでも発進できるようにしていたのだろう。

こちらにどんどん近づいてきている。

地上からは装甲車組、空からはヘリか。準備いいよね。というか、ボクがちんたらやつてる間に、バレないようにちよつとずつ近づいてきてたのかな。

「ボクがヘリでも落とせるって見せつけたはずなのにな……」

あまりそういうことは考えていないんだろうか。

それとも上からの指示は絶対で、部下は死ぬってわかっててもそうせざるをえないとか？

モヤモヤとした黒い感情が湧くような気がした。

ボクはヒトと仲良くしたいだけなのに、政府なのかなんなのか知らないけど、全然わかってくれない。

「性急すぎますよね。先輩はあれだけ譲歩しているのに、ドローン飛ばしてくるやつらは何を考えてるんでしょう。何も考えてないのでしょうか」

ヘリは損害を考えてなのか、たった一機だけだ。

もう姿が見えるくらい近づいてきている。

あと数分もあればこちらの上空にたどりつくだろう。

装甲車組の気配はないけれど、どうしたらいいかな？

「ねえ。命ちゃん。ボク、ちよつと抗議してこようと思うんだけど」

「あの、先輩……危険ですよ。今のうちにここをできるだけ離れたほうがいいんじゃないですか？」

「でも、ここから離れてもへりはついてくるでしょ」

「じゃあ、ドローンのように破壊してしまうかですね」

「へりを落とすちゃったら中の人はゾンビにもなれないと思うよ」

それは本当の殺人だし、ボクとしてはあまりやりたくはない。

「そのなになが問題なんですか？」

ぷ……プレコックス感が漂っておられる。ある種の悟りの境地にドン引きだよ。

さすがにいのちは大事にしたほうがいいと思うなあ。

ゾンビになったら戻せるという余裕はあるけど、そうじゃなかったら復活させるのは無理なんだからね。

しばらくジト目で見ていたら、命ちゃんは何かもお見通しとばかりに、ひそやかな溜息をついた。

「いざとなったらへりを落としてきてください。緋色お兄ちゃん。私を守ってくださいね」

ボクの精神的負担を減らそうとしてくれているのかな。命ちゃんは本当に健気だ。微塵も自分のことを考えてない。だからといってボク以外の誰かのことも少しは考えてほしいと思うけど。世界にはボクと命ちゃんと雄大しかいないってわけじゃないんだからさ。

「命ちゃんのこと是最優先で守るよ」

「先輩自身のことでも大事にしてください」

「わかった」

ボクは相槌を打ちつつ、ふわりと空中へ浮かび上がった。

命ちゃんの頭をそつと撫でて、ボクはへりの近くまで飛んでいく。

プロペラに触ったらいくらなんでもミンチにされちゃうから数十メートル先で止まった。向こうもボクがこちらにやってくると思っただけで止まったのか、ホバリングしてその場に浮かんでいる。

近くで見るとわりと大きい。黒塗りの機体はやっぱり軍用なんだなって思わせるし、何人も屈強な男が中にいそう。

騒音がすごい。耳をふさいでいないとうるさいくらい大きな音がしている。

これだとボクの声も伝わらない。

そろりそろりと近づいて、ボクはヘリのパイロットがいるあたりにへばりつく。

パイロットの人は驚いているみたいだった。

とりあえず、開けてほしい。

ボクは側面のドアを指差して、開けるように祈りをこめた。

パイロットさん驚愕の表情のままガン無視。

そりやそうだよ。いくらなんでも現実的じゃないというか、ボクみたいな人間がヘリに張りついた場合の対処法なんてさすがに練習していないに違いない。

でも、このヘリ高そうだし、さすがに車みたいにドアをぶっこわしたら修理代が半端ないことになりそう。いまさらな話だけど、穩便を自称してきている以上、あまりモノを壊さないほうがいい。

そんなわけでジト目でパイロットさんとにらめっこをしていたんだけど、ようやくボクの意味が伝わったのか側面のドアが開いた。

捕獲の危険性ももちろんあるけれど、せっかく開けてくれたんだ。

飛びこまなければ、何も変わらない。正直な話、知らない人に話しかけるのはいまだにドキドキする。ヒロ友みたいに距離があるわけでもない。しかもボクに敵意を持っているかもしれない人たちだ。

でも——何人かのヒロ友に会ったけど、みんないい人たちだった。

だから、ボクは信じてみようと思う。

ボクはできるだけ笑顔を意識しながら、面接に向かうような気持ちで「失礼しまーす」とヘリに乗りこんだ。

☆
Ⅱ

結論から言おう。

ボクはいきなり銃をつきつけられることもなく、きわめて平和的にヘリの中に滞在している。用意された椅子に座ると、対面にいる人物はニコリと笑う。

あふあ……。

なんだろう。この子。かわいすぎるんですけど。

肌はきめ細かい粒子のようだし。金色の髪の毛は光を反射してまぶしく映っている。ゆるふわのウェーブに薄くて蒼い双眸は涼やかな宝石みたい。

いや、そんなのはどうだっていい。

心臓のドキドキが止まらない。だって、だってボクの目の前にいるのは真正正銘のアイドル——嬉野乙葉ちゃんだったからだ。超激烈にかわいい。

ボクのかわいさもなかなかのものだという自負はあるけど、やっぱりボクとしては自分の身体に欲情するような変態じゃないからね。

普通にかわいい女の子を見るのが好きです。あれ、それって変なのかな。わ、わからぬ。あたまがグルグルしてきた。

「ヒロちゃんに会えてうれしいデース」

あ、動画といっしょで、デース系少女なんだね。愛くるしいリップから漏れ出る声も透き通るような音をしていて、日本人とドイツ人のハーフらしいかんばせはなんといか透明な存在感を放っている。

雄大は演技なんじゃねって言ってたけど、まぶしすぎる笑顔がニセモノなわけがない。指先が細くて着てる服が、国民的なポピュラーな曲のPVに使われてたやつ。チェック柄のスカートに全体的に赤を基調とした服がすごく似合ってる。

かわいいなという感想しか湧かなかった。

命ちゃんは妹的なかわいさだけど、乙葉ちゃんはアイドルとしての可愛さがあると思う。つまりかわいい。うん。かわいいよ。

「乙葉ちゃんだよね？」

「そうデースよ」

乙葉ちゃんの背後に控えているのは屈強な自衛隊員だ。銃は持っていないけど、いわゆる休めの姿勢でふたりが物静かに立っている。銃を持ってないのはボクと敵対しないためかな？

はあ……なんか逆に緊張してきた。

こんな、国民的アイドルと話す機会なんて、人生で初めてだし。

佐賀出身のローカルアイドルだったときから、かわいいなと思ってたから。あ、かわいいなって言っても、なんとというか本当にアイドル

ルとしてのかawaiiさであって、身勝手に一方的にそう思ってただけ。ライブとかにも行ったことないし、ただ、動画とか見てただけだ。だからボクが言える言葉はただひとつ。

「あの……配信動画いつも楽しく見させていただいていますっ！」
声がうわずつてしまった。

乙葉ちゃんはクスリと微笑み、ボクの座ってるほうへ自然な動作で席を移した。ち、近いです。あわわわ。アイドルが。腕があた。あたって。

体温がみるみるうちに上がっていくのを感じる。ぷしゅうってヒイロウイルスが放出されなかが心配だ。

「初めて、生ヒロちゃん見マシタが、とてもカワイイデス」

OH……ジーザス。

ボクは乙葉ちゃんに抱きつかれていた。

ボクの142センチしかない身長からはわりと高身長な乙葉ちゃんのちようど胸の部分が当たる。あ、あああ。当たってますよ。ああああああ。あああああ。語彙力低下中。

「お、乙葉ちゃん……」

「苦しかったデスか？ ごめんナサイ！」

「ううん。苦しかったというか、そのなんというか……」

うまく言葉がでてこない。

乙葉ちゃんと違って、ボクはニセモノの女の子だし、男としての意識もかなり残ってると思う。妹に欲情するお兄ちゃんはいないという理論からは、命ちゃんにそういう気持ちを抱いたりすることはない、清廉潔白な自制心があったんだけど、好き勝手にかわいって言うっていい存在である乙葉ちゃんには、そのままストレートに欲望を押しつけてもいいよねと思ってしまう。

だって、アイドルだし。

アイドルはかわいいといわれる仕事なわけだし。

そーいや今のボクも同じようなことをしているんだった。

何十秒経つてもドキドキは収まらないけど、呼吸を整えてボクは聞く。

「あの、乙葉ちゃんは どうしてボクに会いにきたの？」

考えればわかることだけど、誰かエライ人に言われてきたのかなって思う。さすがにボクでもそれぐらいはわかる。だって、乙葉ちゃんがボクに会いに来る理由なんてさっぱり思いつかない。同じ配信をしているという共通点はあるけれども、ボクは彼女にダイレクトメッセージを送ったり、なんらかの縁があつたわけでもない。けれど、乙葉ちゃんはまぶしい笑顔をボクに向けた。

百パーセントアイドルな乙葉ちゃんの笑顔は兵器じみた攻撃力を誇っている。

「コラボしたかったのデス！」

「コラボ？」

「そうデス。ヒロちゃんとワタシとでコラボ配信しましょう」

驚き戸惑うボクに対し、乙葉ちゃんは細い指先をボクの指先にからめてきた。

こ、恋人つなぎ？

「こ、コラボ配信ってどんなことするのかなあ」

「お歌を歌ったり、好きなゲームをいっしょにしたり、するのデス」

乙葉ちゃんといっしょに配信。

……………ふあー、すごく楽しそう。

「ぼ、ボクなんかがいっしょに配信してもいいのかな」

「なにイッテルデスか。いまやワタシの動画の十倍は再生数伸びてマース」

「それは……ゾンビ利権のおかげで、乙葉ちゃんみたいにみんなを楽しませる能力が高いわけじゃないよ」

「大丈夫デース。みんなを楽しませる方法はワタシが教えてアゲマスから。手取り足取り教えるデース」

「手取り……足取り」

変な想像をしてしまった。なんだかすごく距離が近くて、ボクのとともには乙葉ちゃんの左手が乗っていて、クラクラしてしまう。

「どうデスか。きつと楽しいデスよ」

「うん。します」

気づいたらボクは了承していました。

ハザードレベル52

悠然と空の彼方に去っていくへりをボクは見送った。

いや〜。めちゃんこ可愛かったなあ乙葉ちゃん。あんな美少女を見たのってボク以来だわ。

コラボの約束は二週間後。

今日、ボクがいたところに迎えに来てくれるようお願いした。

さすがに、ボクの住んでるアパートまで来てもらったら、身バレどころの話じゃないんで、そこは最低条件だった。

人類との戦争になるような気配もないし、ボクだけが行けばたいして危険にさらされるわけもない。そもそも、ボクのレベルもかなり上がっている感じがするし、そろそろ対人兵器じゃどうしようもないところまで来てるんじゃないかな。

「慢心」

う。

「環境の違い……」

うううっ。

命ちゃんに、そんな感じで伝えたら、ものすごくジト目でボクのことを見ていた。

「先輩って、もしかして警戒とかなさらないタイプですか？」

「け、警戒はしてるよ。だから住んでるところは教えてないし」

「コラボ配信にかこつけて、いろいろ実験されちゃうかもしれないよ」

「そういう気配を感じたらすぐに逃げかえってくるよ。ボクって対人戦闘力はかなり強いからね。もう自衛隊にもひとりふたりだったら余裕で勝てるし」

「戦闘でどうこうというより、懐柔策でこようとしているから怖いんですが。先輩って、ちょっと優しくされただけでコロっといっちゃうタイプですか？ チョロイン枠なんですか？」

命ちゃんの言葉がいつもより辛辣だ。

「チョロインじゃないよ。人類と協調路線っていうのは悪くないって

命ちゃんも言ってたじゃん」

「協調というレベルを超えている気がします。あくまでこちらのコントロールのもと、情報を小出しにしていくという話だったはずです」
「向こうがいつしよに配信したいって提案して、ボクがそれを承諾したんだから、本質的にはいまままでと変わらないはずだよ」

「その配信がネットを通じてのものだったらよかったんですけどね。コラボ配信ってどこかで生配信するってことでしょう。あのどこにでもいるようなアイドルの隣りで愛想をふりまくってことですよ。危険です」

「機材がそろってるテレビ局でするんだって！　すごいよね」

命ちゃんがぱちくりとまばたきをした。

ボクってそんなにおかしなこと言ってるかな。

「先輩って大学に入ってから精神的引きこもりになってたと思うんですけど」

「うん。まあ確かにそうだけど、それがなにか？」

「最新機材で生配信をアイドルとするって、先輩の引きこもり癖はなおったんですか？」

「配信していくうちにちよつとは慣れたよ」

ボクが精神的引きこもりになっていたのは、べつに孤独になりたかったからじゃない。ひとりきりでいることは孤独を余計に感じると思うかもしれないけれど、ボクとしてはあまり知らない人と話を合わせて、自分を調整して、そうやって会話をすることが面倒くさかったんだ。

だって、それはボクじゃない。

会話をしているのは紛れも無くボクだけど、他者との間でたいして面白みもない話をして笑っているのは、ボクじゃない。

だから——、余計に孤独を感じて。

ひとりきりでいるほうが、よっぽどマシだった。

それだけのこと。

本当のところは、配信も現実での人間関係といささかも変わるところはないのかもしれない。ボクはあいかかわらず仮面をかぶってるわ

けだし、みんなが好きなヒロちゃんを演じている部分もある。

でも、それでも、ヒロ友は基本的には匿名であるし特定の誰かではないから、ボクはボクらしく振舞える部分大きい。

配信は——ヒロ友と触れ合うのは、巨大な他者と触れ合うみたいだった。ボクは『彼ら』と比べるとちっぽけな存在で、だからこそ、ボクは宇宙みたいに大きくなれた気がする。

巨大な——つながり。

おおきなひとつに。

ボクは小さいからこそ大きくなれた。

だから今は寂しくないんだ。

「結局、先輩は他人のクオリアを信じていないってことじゃないんですか？」

命ちゃんは冷たく言い放った。

クオリア——人間が持っている『感じ方』のこと。

つまり、こころのことと言い換えてもいい。

ボクは命ちゃんがクオリアを持っているか確信が持てないと言ったことがある。それは誰の視点からみてもそうだ。

人間はそれぞれが一人称的な視点しか有しない。

したがって、他者のこころは見えない。

でも、今のボクなら自信をもって言える。

「信じてるよ」

「本当にですか」

命ちゃんが陰気な声で呟くように言った。

「本当だよ」

「だったらなぜ、あんなアイドル風情を選んで、私を選んでくれないんですか」

「えつと……、ボクは乙葉ちゃんを選んだとかそういうつもりはないんですが。単に配信仲間としていっしょにコラボしましょうねって言ったただだよ。ぜんぜん選んだとかそういうんじゃないんだよ。信じて」

「素敵ですね。コラボ」

「うん！ すっごく楽しい」

「……………はあ」

すごく重そうな溜息。

憂鬱そうな表情。

そして、命ちゃんはおもむろに屋上のドアを開けた。

え？ つと思つたボクは、命ちゃんに声をかける。

「あ、あの命ちゃん。どこに行こうとしているの？」

「帰るんですけど何か？」

「ボク……送るけど。ほら、地上部隊がまだ近くにいるかもしれない……。乙葉ちゃんに聞いたんだけど、ドローンは違う人たちなんだって。まだ外は危ないかもしれないんだ」

「いいですよ。先輩はひとりで帰ってください。わたしもひとりで帰ります」

「どうしてそんなこと言うの？」

屋上から階段を降り、ゾンビ溢れる診療所内をスタスタと歩く命ちゃん。

とても怒ってるっぽい。

ボクの歩幅は命ちゃんよりも狭く、追いつくのに小走りになってしまふ。

いつもは少し速度を緩めてくれる命ちゃんだけど、ボクを一顧だにせず、前だけを見つめて歩きつづけている。

ゾンビのひとりが道をふさいだんで、えいっと横にやって命ちゃんを追い続ける。ゾンビはフラフラとしているから、それだけのことも横転してしまう。

ゆったりとした動きの高齢者ゾンビだった。ごめんなさい。手をひいて立たせてあげた。ゾンビだけど、なんとなく感謝されてる気がする。マッチポンプなんだけど、まあいいや。

とりあえず今は命ちゃんを優先しないと。すぐにどっかに行っちゃおう。

一階に降りたところでようやく追いついた。

「命ちゃん。待ってよ」

ボクは命ちゃんの手をとった。

ゾンビパワーで筋力マシマシなボク。当然、命ちゃんも同じくらいのパワーだけど今は離す気はない。一度、それで痛い目を見ているからね。いや、二度か。

ともかく——、離さないよ。

命ちゃんは瞑目し、静かに言った。

「先輩はヒイロウイルスを世界に広げて、それでみんな”緋色”にしてしまつて、ひとりじゃないって言ってるだけなんじゃないですか」「そんなことないよ」

「わたしも先輩のお気に入りの中のゾンビに過ぎないんじゃないですか」

「そんなことないって……。ボクは今も命ちゃんのことは大事な後輩だと思ってるよ」

「後輩にすぎないんですね」

「大事な人だつて思ってるよ」

ボクはすぐさま言いなおす。

なぜかそうしないと、とんでもないことが起こりそうな気がしたからだ。

下手すると命ちゃんがヤンデレさんになっちゃおう。

「大事な人」

「そう、ボクのなかの特別な人なのは間違いないよ」

命ちゃんの無表情な仮面が一瞬だけピクリと動いた気がした。

ボクは慎重に言葉を選ぶ。

「命ちゃんのおかげで配信もできたし、ボクもやりたいことやれてるし、本当に感謝しているよ。ありがとう」

肩がぴくりと動く。

「命ちゃんがボクを好きだつて言ってくれたこともすごくうれしかったよ」

びくびく動く。

「命ちゃんがいつしよにいてくれないとボク寂しいな」

びくびくびく動く。

よし。いける。いけるぞー！

ボクは全身全霊をかけて命ちゃんに微笑む。

「命ちゃん、大好きだよ」

身長がたりないから、ふわりと浮き上がって。

ちゅ。

つて、軽くキス。

認めよう。これはボクのまぎれもないファーストキスだ。

気持ち的にね。

でも、これはいわゆるガールズラブってやつじゃないだろうか。ガワだけみればそうだけど、ボクは男だったわけで、精神的にはノーマルラブなのかな。わからぬ。

と——。命ちゃんを見ると、ふるふる震えていた。

「先輩。私も大好きです！」

なんとというかサメだ。サメが獲物を追いかけて最後に捕食する瞬間だ。

せめて予兆がほしかった。

ボクは地面に押し倒されて、たつぷりとヒロウイルスを搾取されました。

☆Ⅱ

外に出ると、装甲車ではなく何の変哲もないバスにところどころトゲトゲとか、ごつつい鉄板とか、鉄格子みたいなのとか、いろいろ追加した感じのやつが建物のすぐ近くに停車していた。

既にゾンビで囲まれていて、こりやどうしたものかなと思ったけど、側面から飛び出したのは……なんとノコギリ。

回転電動式の丸い形をしたノコギリで、ギザギザの強烈なやつだ。それがバスにとりついていているゾンビたちを、ちようどお腹のあたりで分割した。

窓には血と肉が飛び散り、すさまじい有様になっている。

当然、それだけの爆音を出していると、ゾンビもすぐに寄ってくる。ゾンビを踏み越えてゾンビが這いよる。

問題なのは、バスはそこまで走破性能が高くないということだ。ボクの配信に気をとられたのか、あるいはそうではないのかはわからないけれども、止まっていたのが悪かったのだろう。ゾンビの死体を踏み越えるほどの動力が出せない。

つまり——立ち往生というやつだった。

「あれがドローン組かな？」

「おそらくはそうだと思いますが、どうします先輩？」

ボクと命ちゃんは手をつないでお家に帰ろうとしている。

一階まで降りちゃったから、そのまま空に浮き上がって、帰宅するつもりだったんだ。

離さないとは思ったけど、さつきから離してくれそうにない。

そつと力を緩めて、離脱を試みる。無理。速攻で力をこめてくる。

「あの、命ちゃん……あの人たちを助けにいかうかなって思うんだけど」

「え、あんなの放っておいてもつと先輩とイチャイチャしたいです」

「ドローン組は軍用だったから、軍属じゃないの？　政府勢だから優遇したほうがいいって命ちゃん言ってたじゃん」

「光学迷彩と消音機能がついているからそう思っただけで、実際には既存の発明の組み合わせですからね。わりとどうにでもなるというか、わたしでも作れます。そもそも、あのバスを見たらたいした技術レベルでもないみたいですね」

つまり——、民間人レベルということらしい。

じゃあ、乙葉ちゃんはどうかというと、軍用へりはさすがに装えないから本当の軍属だ。

乙葉ちゃんは真実、ドローンとは無関係だったということになる。

それはうれしいお知らせかな。

ただ、ボクに墜とされる可能性とかを考えなかったのかなとは思っただけ。

いままでのボクの行動パターンから分析されてるのかな。直接的な暴力をふるわれない限りは、わりと好きにしろよって思うタイプなのは確かだ。他人に関して無頓着なんだよね。

そういうボクの精神を配信から読み取ってる可能性はある。

少なくとも、ピンクさんあたりはしてそう。

ただ——、ドローン組はさすがに雑だった。

それだけのことだ。

「なんらかの政治的な組織に属している可能性はありますけどね。いずれにしてもたいした人たちではありません。ドローン組は私たちにとっては敵です」

「そういうふうには敵をいっぱい作っちゃうと、さすがにハイスペックな命ちゃんでも立ち行かなくなるよ。ボクとしてはそれが心配だな」
「そうでしょうか。本当の敵は味方面してやってくるんですよ。人間は曖昧な存在だから、最初は誰だって敵なのか味方なのかわかりません。だから厄介なんです。最初から敵か味方か見定めておけば、そういうややこしい事態はなくなります」

「ボクがいちばん曖昧でちゃんぽらんとしてて、訳がわからない存在だと思っただけだね」

「先輩は違います!」

「そうかな。どうして女の子になったのかもわからないの?」

「だって先輩は私と付き合ってくださいるんですよ」

「えっと、付き合うっていつ言っただけ」

「え?」

「え?」

しばし沈黙。数十メートル先ではゾンビが百か二百くらいはつらなつて列をなし、改造バスを取り囲んでいる。中から怒声が聞こえるが、ボクたちはそんなのそっちのけでラブコメしていた。

「先輩。さっき私のこと好きだって言ってくれましたよね」

「う、うん。言っただけ?」

「つまり、私を選んでくれたのだと思ったのですが、違うのですか?」
命ちゃんの瞳の光彩が徐々に失われていってる。

いかん。これじゃ闇堕ちしちゃう。

「あ、あの、好きなのは本当だよ」

その間もゾンビさんたち、バスの窓をバンバン叩く。

中の人たちが「うおおおおおつ」「回転のこぎりがもう使えなくなった。次の刃をもつてこい」「少女を確保できれば、ゾンビ避けできるんじゃないのかよ」「前方のドアのあたりがヤバイ」「横転しそうだ」「ちくしょう。銃をつかえ!」「弾はあまりないぞ!」「いいからやれよ早く!」と忙しそうに対応している。

命ちゃんがじつとボクを見定める。

目をそらしちゃダメだ。

バンバンバン。

銃撃の音が夏の夕空に響きわたる。そろそろ秋が近づいてきたのか、ツクツクホウシとのコラボを奏でていた。短銃しかないんじゃない焼石に水かな。いくら装甲車並に硬いとはいえ、いずれは突破される。うちのゾンビさんたちは強いですよ。

って、今は命ちゃんだ。

「先輩。私は先輩にならず全てをささげたいと思います」

「うん。その気持ちはありがたいよ」

「じゃあ何が不満なんですか？ あのアイドル？ それとも雄兄い？」

なんでそこで雄大がでてくるんだろ？

「そんなんじゃないよ、ボクは付き合おうっていうのはよくわからないからだよ。逆に聞けど命ちゃんにとって付き合おうってなんなの？」

「……わかりません」

「そうなんだ。じゃあ、ボクと命ちゃんはいっしょだね」

ゾンビさんたち『あーあーあー』と大合唱になる。

ものすごい力でバスを揺さぶって、中を揺らしている。

あ、バスが横転した。

ついに立ち往生が確定した。

バスを背景にしながら、命ちゃんは泣きそうな顔になっていた。「でも、私は先輩のことがこの世で一番大事なんです。それは本当です。だから先輩にも私が一番でいてほしい。先輩の一番になりたいんです!」

命ちゃんはかわいいボクの後輩で、幼馴染で、それで妹のような存

在だ。

命ちゃんのこと大事なのは確かで、それはゆるぎないボクの気持ち。

でも、選ぶとか選ばないとかいう話になると、とたんに曖昧になる。ボクは命ちゃんに誠実であろうとすればするほど、彼女を傷つけてしまう。

どうすればいいんだろう。

ウソをつくべきなのだろうか。

いいよつて。付き合うよつて軽い感じに返事して。

命ちゃんのことを一番大事にするねつて言ったらいいんだろうか。

男だったら貫くような意思の強さで、断定することができると思う。そんなのは幻想かもしれないけれど、ボクはあさおんしてから今日始めてボクのところがだいぶん変化していることを自認していた。

こんなにもフワフワしているなんて思わなかった。

ボクの答えを待っている命ちゃん。無言のままのボク。

ゾンビはあいかわらずうるさくて、人間たちは必死の抵抗をしている。

「おい、こつちきて助けてくれよ」「ヒーロー様。お助けください！」

「いやだ。いやだ死にたくない。食われたくないよう！」「おまえがゾンビ避け少女拉致ればこの世界の王者になれるつていうから付き従ったのに話が違うじゃないか」「うるせえ、お前らがあの子が降りてくるまで待つつていうからこうなつたんだろうがカスが！」「おい、フロントガラスが破られそうだぞ！」

そろそろ時間切れ。

人間たちはゾンビに追いつめられ、もう少しで全滅するだろう。

押し寄せるゾンビはボクの無意識なのかな。

他者との摩擦によって生じるストレス。

それは大好きな命ちゃんでも例外じゃない。

みんな”緋色”になつてしまえばいいというのは、他人を受け入れることで、そうであるならば命ちゃんと付き合うつてことこそが、他

者を認めないってことにならないだろうか。

「命ちゃん……ボクは」

バンっ——。

破れかぶれの一発が命ちゃんに偶然飛来した。

ボクのゾンビ化された知覚は銃撃が命ちゃんの頭蓋に到達することを正確に予測し、それはまぎれもない二度目の死をもたらすものと確信した。

刹那——、ボクは9ミリパラベラムにヒイロウイルスを浸透させ、その運動能力を奪った。

ギリギリのところまで銃弾は止まり、ちらりと命ちゃんは後ろを振り返る。

「先輩。ありがとうございます。それで答えはいただけるんですか？」

あの、銃弾。止めたんだけど。

そんなのどうでもいいって感じで、じつとボクをみつめてくる命ちゃん。いまは世の中のすべての事象がどうでもよくなっている。ボクの言葉以外はなんの価値も見出していない。

自分の命さえも——。さっき追いついてて本当によかった。もし一歩まちがえば命ちゃんは危なかったかもしれない。

「先輩？」

それよりも答えのほうが大事なんですか。やっぱり。

バスのフロントガラスが破れた。

「ひいひい。いやだーっ！」「おまえ前行けよ」「いやだ。いやだ。いやだ。」「こんなことになるなら避難所にこもっとけばよかった」「助けて下さい。お願いします。助けて。いやだ！」「こんなところで死にたくない」「なにもしてないなにもまだ」

ボクはそんな人間たちの悲鳴を聞きながら——。

「人がわかりあうのには時間がかかるって思うんだ」

と、言った。

我ながら玉虫色もいいところな回答だけど、これが今の本当の気持ち。

だいたい、ボクも命ちゃんもゾンビなんだし、もしかすると寿命なんてものはないのかもしれない。だったら、少しくらいは時間をかけた方がいいんじゃないかな。

「ぎゃあ。噛まれ噛まれた」「ああああああああっ」「死ぬ死ぬう」「こっち来いよ。殺してやる!」「死にたくない死にたくない死にたくない」「うあああ。やだあああああ!!」

あいかわらずBGMはうるさかったけど、ボクは命ちゃんから視線をはずさない。

命ちゃんもボクを見ている。

「ボクに時間をくれないかな」

「先輩は本当にしかたのない人ですね」

命ちゃんにとっては事実上振ったも同然だったかもしれない。それでも、最後には優しい視線に戻っていた。本当に悪いと思ってる。でも、ウソもつきたくないし、命ちゃんのこと大事な人なのは間違いないんだ。

ボクの答えは、いまのボクのこころをできるだけ精確に切り取ったもの。

輪郭だけはせめて明確にしておこうとしたものだ。

「先輩の気持ちが本当だっていうのはわかりました。私が先輩のクオリアを信じているように、先輩は私のクオリアを信じてくれているんですね」

「うん。そうだよ」

「だから——、待ちます」

「お願い」

「はい。お願いされました」

涙がポロリと一筋流れ、命ちゃんはくるりと後ろを向く。泣かしてしまつた。すごい罪悪感だ。それとバスの人たちはどうしよう。

とかなんとか考えてたら——。

ゾンビたちの動きを止まつた。命ちゃんが止めたんだ。

どうして? 命ちゃんにとって彼らは敵で、どうでもいい存在だつたはずだ。

「彼らも人間で——、クオリアを持っていると先輩が信じているからです」

ボクの言葉を命ちゃんがおもんばかってくれたのか。

敵はゾンビといっしょで心が無いと言っていた命ちゃんが、ボクの言葉を信じて、他人を信じてくれたのかな。そうだとうれしい。

バスの中にいる人たちは肉体的にも精神的にも疲労困憊の様子ではあったけど、なんとか生きていた。噛まれた人は数名。それでも腕くらいだ。

とりあえずゾンビたちを外に出し、みんな横転したバスから出てくるように伝える。

多少のレベルアップで、ボクもエリアヒールが使えるようになっていたみたい。わざわざ手を触れなくても、近くにいればゾンビウイルスを除去するのはたやすくなっている。ここらにいる百人近いゾンビも人間に戻せるとは思うんだけど、それはそれで元ゾンビさんたちの行き場に困るから戻したりしない。

拾ってきた猫に対して責任が生じるのと同じ理論だ。

とりあえず、ドローン組は自分たちのねぐらくらいは確保できる野性味あふれる人たちなので、今回だけは大目に見よう。ボクたちに対してストーキングしたことも含めて。

彼らドローン組は、みんな古式ゆかしい土下座の姿勢でボクに対してかしくまっている。まあ周りを見渡せば、いまだに百人近いゾンビたちが周りを囲ってる状況だからね。

そんななかボクはゾンビたちを操ってる主なわけだから、恐怖されもするだろう。

それぐらいはわかってるんだ。ボクもきちんと理解している。

そのまま震えられていても困るから、とりあえずリーダー格の人にボクは声をかけることにした。20代になったばかりのバンダナまいた男だ。

「あの……、ボクのことストーキングするのやめてほしいんだけど」

「もちろん。そのようにいたします」

「さつき、バスからボクたちのこと拉致ろうとしていたみたいなこと

が聞こえてきたんだけど」

「アイドルのおっかけみたいな感じですよ」

「そっかー」

アイドルのおっかけならしょうがないかな。

ボクってアイドル状態なんだなあ。ふひひ。ちよつとだけ気分がいいぞ。

「ヒロちゃんの配信は見続けてもかまわないでしょうか」

「うん。それはいいよ。配信はボクが好きでやってることだからね」

「先輩がやつぱりチヨロイン……」

「チヨロインじゃないよ！」

ともかく――、

ドローン組が逃げる時間を稼ぐために、ボクはゾンビの動きを強制的に止めることにした。

「一時間くらいはここのゾンビは動かないようにしました。その間にどこかに逃げたらいいよ」

「ありがとうございます」「ヒロちゃんマジ天使」「天使様あ」「もういつそゾンビになってもいい」「ヒロちゃん様に土下座できるってオレらヒロ友に自慢できるんじゃないかね?」「おまえ、ドローンで盗撮してたってバレたらボコられるに決まってるだろ」「ヒロちゃんを盗撮した写真いくつかデータ残ってる」「あとでちよつとまわしてくれ」

抱き合って喜んだり、ボクを拝んだりする人たち。

「写真データは没収します。それと一時間内に逃げないと次はないですよ」

命ちゃんの冷徹なひと言に、みんな青ざめた顔をしていた。一時間もあれば十分だとは思いますが、確かに乗り物もないし、危険な状況なのは間違いない。ボクたちがここにいるのも、どこに逃げるか相談しづらいだろうし、早くおいとましたほうがいいかな。

「じゃあ、帰るね」

ボクはみんなに手を振って、命ちゃんとともに空を舞った。

みんなわりと長い間、手を振りかえしてくれた。

時間は……二時間くらいは延長しておいてあげよう。

まあ、今回のドローン盗撮事件は、ちよつと過激なファンもいるってことだよね。

ボクも結構アイドルしてるじゃないかと思うと、なんだか恥ずかしいようなこそばゆいような気持ちになってくる。

そうアイドルだよ！

乙葉ちゃんのことを思いだし、口角があがるのがとまらない。

実はアイドルコラボっていうものにあこがれていたんです。

二週間後が本当に楽しみ！

★
||

アメージンググレイス。

天使の軽やかな歌声に、わたしはパイプオルガン——ふうの音に似せた電子オルガンを弾いている。無垢で罪のない声に、わたしのつむぐ電子的な音が絡まり、神の恵みへと昇華する。

わたしは天使様のおみ足へ口づけるほどの価値もないが、しかし、天使はそのような取るに足らないものにも微笑みかけてくださるだろう。

滅びの時は来たれり。

滅びとはおそらく人の死を予言したものだ。

いろいろな書物にも書かれている滅びとは、避けられぬ死を具象化したものだ。

確かに死は訪れる。誰にでも平等に。

永遠に生き続ける存在などいない。いままではそうであった。そういままでは。

しかし、世界は変わる。滅び生まれ変わる。

二週間後。

天使様は再臨されるという。

ああ——、歓喜。歓喜。歓喜。

こころのうちに歓喜の念が生じるのを抑えきれない。祝福されなかった者たち。

虐げられた者たち。

神を信じ、ついに救われなかった者たちが、復活の時を迎えるのだ。千年王国を実現し——、我らは素粒子の存在として甦る。

ヒロちゃん様あ。我らを御救いください！

実寸大まで引き延ばされたヒロちゃん様のポスターにすがりつき、そのおみ足に口づける。わたしのいまおこなっていることは厳密な意味で宗教的行為であり、俗世間で溢れるような変態的行為ではない。ましてや性的対象として天使様を見ているなどということはありえない。

そのような誤解をされたらわたしは即座に自分の首を掻き切つて自ら死ぬことを選ぶだろう。いや、それは許されていない行為だ。

ともあれ、ケガレなき白くぷにぷにとした曲線に口づけていくと、たまらずわたしのなかの信仰心が溢れていく。陶酔。ただ陶酔。だが、ぶしつけにドアがノックされた。

陶酔から急速に現実に取り戻され、はらわたが引きちぎられるほどの怒りが湧いたが、しかし、感情とはコントロールすべきものだ。自分も他者もすべからず。

わたしは気をとりなおして居住まいを正し、電子オルガンの前に座りなおしてから、入るように声をかけた。

「計画はうまくいきました」

乙葉が帰ってきたか。

報告は既にラインで受け取っている。

『（ハ、▽、＊）b やったよ』という感じだ。あいかかわらずノリが軽い。高校生にもなれば少しは落ち着くと思ったがまったくそんなことはない。

とりあえずノリで『（ハ、D、）ギター』と返してしまっただが、やはりラインというものは情報共有が速すぎてイマイチよくない。

しかし、どうしてこうも間が悪いのだろうか。

彼女はとても優秀なのだが、わたしに似て間が悪い。

まるで世界から嫌われているかのようだ。

「乙葉。私はいま天使様の声に伴奏をつけるのに忙しい。報告は後に

しなさい」

「わかりました……。お父さん」

外面とネット以外のときダウンナー系すぎないか、娘よ。

ハザードレベル53

コラボ配信については、すぐに掲示板とかツブヤイターのリツイート機能で、めっちゃくちゃバズりました。

全てのヒロ友たちが見守っているのは言うまでもないところだけど、それ以外にもいろいろと見守られている感じがします。世界中からアクセスされているみたいです。

それはべつにいいんだけど、怖いのは配信中に襲われることかな。

誰が襲ってくるかなんてわからないけど、予測するとすれば過激派な政府や得体のしれない科学者や怪しい宗教団体や、特に危険なのは暴徒化した一般市民かな。

もしもだけど、ボクと乙葉ちゃんがコラボ配信しているところに徒党を組んで乗り込んできたらどうなるだろう。

ボクを排除すればゾンビがみんなおとなしくなるとか考えてる人中にはいるだろうし、それでもなくても拉致って実験材料にしたいと考えてる怪しい科学者とかもいるはずだ。

勝てるとは思わなかったけど、ゾンビがのろくても人間に勝てちゃったりするように、数は力になりうる。知恵を働かせるというのも人間の特性だ。結集した集合知はボクなんか及びもつかないほど巨大だ。

配信していて気づいたんだ。

ヒロ友という小さなコミュニティでさえも、ボクが知らないことをたくさん知ってる。

すぐくマイナーで誰も知らないだろうなっつてことでも知っている人がいて、人間という集合体はどれだけ知識と知恵を集積しているんだろうって。

ネットはその集合知を目に見える力に変える。

例えば、ボクの弱点とかを議論したりするかもしれない。

もちろん、ボクが住んでる場所がバレたりするのもまずい。

ゾンビ荘に住んでいるみんなの居場所がなくなっちゃう。

まあみんなは顔バレしているわけではないし、こつそりとどこかに避難すればどうとでもなると思う。例えばボクと命ちゃんは他県

に出て行って、マナさんあたりに留守をお願いすれば、雄大の回収も
なんとかなるかなと思っている。

いざとなったら逃げるしかないよね。

そんなわけで、あと一週間とちよつとでコラボ配信。

それまでの間に、忙しくしていたのはボクではなく――。

大変申し訳ないんだけど、マナさんと命ちゃんだった。

「まさかご主人様が、ここまでお子様のなかわいらしい理想主義者だ
とは思いませんでした」

「え、そうかな。マナさんから見て、ボクって子どもっぽいかな」

「ご主人様の幼女指数が高くて、わたし的には大満足です」

「なに、その幼女指数って……」

あいかわらず楽しそうにロリコンしてるなこの人。

でも、ボクを守るためにいろいろと奔走してくれているみたい。ボ
クにはパソコンの深淵はわからないし、できることといたらワード
で論文もどきを書いたりとか、エクセルで升目を作って、お絵描きす
るくらいだ。いまもマナさんはカタカタと高速でノートパソコンの
キーボードを打っている。見た目だけならできるビジネスウーマ
ンって感じで、少しあこがれちゃう。

それに比べてボクは――。

「も……もしかしてだけど、マナさんのようにボクってポンコツなんです
か？」

マナさんは一瞬こちらを振り返り、そつと目をそらした。

ねえ。それって。ねえ！

「お姉さん。ボクの目を見てください！」

「す、すぐるような目で見てくる幼女！　ここが桃源郷か！」

「ボクの問いに答えてくださいよ」

「えつと……、その、ご主人様は人間味にあふれてると思いますよ」

「人間味って言葉、ほんと便利だよね」

「ミスも愛嬌♪」

「かわいければなんでも許されるなんて思っていないよね」

「いいじゃないですか。ポンコツも個性です」

「やっぱり、ポンコツなんだ……」

面と向かって言われるとわりときつい。

ふんわりしているけど、マナさんも命ちゃんと同じで頭がいいんだよね。

「でも、ボク……コラボ配信しなかったんだもん」

「ハアハア……だもんって……だもんって……かわいすぎるでしょお」

「ボクも確かに警戒心が足らなかつたって思ってるよ。でも、歩み寄りたいんだよ。ボクといっしょに何かしたいって言うのなら答えてあげたいだけなんだよ。わかって、マナお姉さん」

「わかっていますよ」

すべてを包みこむような慈愛の視線だった。

でもよく見ると、ボクの顔、胸、足をあますことなく見てくる変態の視線だった。

うー。もじもじしちゃう。素足をこすりあわせて、ちよつともじもじ。

「由々しき事態です。ご主人様を飼いたいと思う変態がでてくるかもしれません。幼女のごことが大好きで大好きでたまらない変態さんですよっ！」

それはもしかしてあなたのことではないでしょうか。

「そうならないためにいろいろしてくれてるんだよね」

わりと丸投げなボク。

乙葉ちゃんが所属している組織との直接的な交渉はマナさんと命ちゃんのふたりでおこなってくれている。

まず速攻で却下されたのは単独でのこのこ出かけていくことだ。

「かもねぎですよね」

「まあ……それはわかるけど」

つまり、ゾンビ対策兵器扱されているボクが手に入るということは、ゾンビだらけのこの世界では、とても価値があるってこと。価値があるものを奪いたいと思うのが人間だ。

相手の陣地深くに入れば、当然、そういった危険も伴う。

「最低でもふたりでしょうね。あ、わたしのことも連れていっていいですよ」

「マナさんは顔バレしてないし、わざわざヒロ友たちに知られる必要はないよ」

「飯田さんみたいにフルフェイスヘルメットを装着すればいいんじゃないでしょうか」

「あやしすぎるでしょ」

「なんなら鉄仮面でもいいですよ」

「あやしさに磨きがかかると思うんですけど」

ゾンビなハザードでもそんな敵がいたような。

マナさんって、女性らしい体格をしているし、フルフェイスが似合わないのは確かだ。

「抑止力的に考えれば、飯田さんに頼むのがいいのかなあ」

「まあ男の人もいたほうがいいでしょうね。ヒロ友たちにはどう思われるのかという問題がありそうですけど」

うーむ。

そうなんだよな。いまのボクの位置づけがいつのまにやらアイドルっぽい感じになってるのは否めない。そこに男の人の気配があると、こう……いろいろと問題があるように思わなくもない。飯田さんがネット上でボコボコにされる未来が見える。

が——、そこは映さないようにお願いすればいいかな。

飯田さんがいいよって言うてくれたらの話だけど。

☆
＝

「いよ」

飯田さんがいい人すぎてボクは怖い。

考える間もなく即答だった。

でもホームセンターでは飯田さんはいい人すぎて死んじゃったわけ、そう考えると、今回のボクの行動は飯田さんを再び危険にさらすものだと思う。

ほんとにいいの？

少し心配になって、ボクは上目遣いに飯田さんを見る。

のっそりと動き出し、ボクの頭をなでる飯田さん。

むうん。むうん。

今日もいい感じですよ。

飯田さんはマナさんと同じくロリコンなんだけど、男の人だから、少しボクに対する遠慮があるんだよね。その塩梅がとてもいい。

それと、父性というか——なんというか性欲もないわけじゃないんだけど、それ以外の優しさがあるというか。

ボクも男だったときがあるからわかるんだけど、男の人の優しさと女の人の優しさには違いがあるように思うんだよね。

それは何って言われると困るんだけど。

「あんだ。飯田さんの善意につけこんで、ひどくない？」

非難の声が耳に届いた。

最近、飯田さんの部屋に入り浸っているらしい姫野さんだった。

少しはボクに対する恐怖心も薄らいできたのか、気安い態度になっている。

そのほうがボクは好きだけどね。

「姫野さんの言うとおりなんだけど……、このままだとボクだけじゃなくて命ちゃんも危険になっちゃうんだ」

ボクが単独でいくのはマナさんと命ちゃんに却下されている。

そうになると、命ちゃんは絶対になにがなんでもついてくる。

ボクとしては命ちゃんの危険を少しでも減らしたかった。

ボディガードがついているという事実が是非とも必要だった。

「飯田さんには関係ないでしょう」

「まあ確かに……、ボクの都合だね」

「あんたは、私達より強いんだから、ひとりでなんとかしなさいよ」

姫野さんの言葉は正しい。

ボクは飯田さんに甘えてる。飯田さんの中では無限に優しい人って感じだから、つつい甘い甘えちゃうんだけど、きつと、どこかでお父さんっぽいところを感じてるからかな。

ぺたーって大きな背中にくつつくと、あつたかくて安心するのは確かです。

「まあまあまあ、姫野さん。落ち着いて」
話に割って入ったのは飯田さんだ。

「人吉さん……。あなたは優しい人だから」

姫野さんがうるうるとした瞳で飯田さんの肩にそっと手をかける。
なんだかドラマのワンシーンみたい。

ていうかいつのまに名前呼び!?

飯田さんも姫野さんのことはべつに嫌いではないらしく、肩に置かれた姫野さんに手にそっと手を添える。

見つめあうふたり。

ボクはどうすれば。

そんなボクの気持ちを察してくれたのか、三秒後には、飯田さんはボクのほうに向き直ってくれた。

「私は私の意思で緋色ちゃんを助けたいと思っっているわけだから、緋色ちゃんがそこに罪悪感を覚えたりする必要はないよ」

「うん……」

「それに姫野さん。これは緋色ちゃんだけの問題でもないよ。同じゾンビ仲間として助け合うほうがいいに決まってる」

「お目付け役ってことなのね?」と姫野さん。

飯田さんのことを本気で心配しているみたい。

姫野さんはいわゆる普通の人だから、普通に他人のことが心配にもなったりする。むしろ、飯田さんのほうが極端なのかもしれない。

「そうじゃなくて……。仲間として助け合うべきじゃないかって言ってるんだ」

飯田さんにいわれて、胸の奥がきゅーって掴まれるような気持ちになる。

年齢が倍ぐらい離れてるし、ボクは飯田さんにとって庇護対象なのかもしれないけれど、はじめて雄大や命ちゃん以外と友達になれたのは飯田さんだったから。

飯田さんが仲間だって言ってくれて、本当にうれしい。

「ありがとう。おじさん」

「いやだから、例えば、この子が死んだら私達も死ぬとかそういう感じなわけ？ 巷で噂のボスゾンビらしいじゃないの」

姫野さんの反応のほうが標準的かなと思う。

マナさんも命ちゃんもボクにべつたりで、頭はいいけど極端なように思うんだよね。ここでは慎重で普通な姫野さんのほうが参考になる。

「ボクはボスゾンビじゃないけどね……」

「まぎれもなくゾンビでしょうが」

反証のしようがない。

「うーん。ゾンビは群体だけど、吸血鬼みたいに階級はないから、真祖が倒れたら下位は全滅するみたいな設定はないと思うんだけどな」

群れているけど、ただ集まっているだけのな？

ただ、飯田さんは友達だし仲間だって言ってくれたし、ボクの一人遊びじゃなければ、つまり飯田さんを無意識に操ってそう言わせたのでなければ、ボクたちはゾンビだけどゾンビじゃない。

少なくとも群れることができるというか……。

ボクが万が一撃破されたらどうなるのかな。

ヒロウイルスが消える？ そしたら飯田さんや姫野さんはどうなるんだろう。体内のヒロウイルスが消える？ それとも残存する？

ヒロウイルスが消えたら死んじゃう？ それとも人間として生き返る？

まったく予想がつかないな。

ひとつだけ確かなのは、命ちゃんを除いて、みんな一度死んでるってことだ。死んでゾンビになってから、ヒロウイルスによつて復活している。

おさらいのために一度復習するよ。

飯田さん——銃弾にて胸を撃たれて死亡。

恵美ちゃん——姫野さんにて胸を刺され死亡。

恭治くん——銃弾にて出血多量にて死亡。

姫野さん——ゾンビに噛まれて死亡。

マナさん——最初からゾンビ。

命ちゃん——ゾンビに噛まれているけど、死亡する前にヒロウイ
ルスに感染。

こうして考えてみると、命ちゃんだけ死んでないよね。ゾンビにな
る前にヒロゾンビになっちゃった感じか。いまの命ちゃんがゾン
ビを操れるのはまちがえないし、人間のままではないのは確かだ。
それにゾンビウイルスもどうなるかわかんない。みんなゾンビウ
イルスが消え去ってくれば人間側としてはいいんだろうけど、こっ
ちも予測がつかない。

うーん。わからん！

ボクは考えるのを諦めた。

「あんたが死んだらこっちも死ぬとかじゃなきゃいいのよ。わたしと
飯田さんは人知れずこっそり暮らしていただけだから」

「うん。ボクとしてもそうしてくれると助かります」

「あんたって、他の人が危険になるかもしれないのに、そうまでして、
あのアイドルとコラボ配信したいの？ アイドルに憧れてる系なわ
け？」

「アイドルに憧れてるってわけじゃないよ。乙葉ちゃんのこととはかわ
いくなって思うけど」

「アイドルに憧れる女の子ってなんかいいな……」

飯田さんの感想はわからなくもないけど、今のボクってそうか、そ
ういうふうに見られるのか。命ちゃんはボクの男だったときのこと
を知っているから、乙葉ちゃんがかわいいとか言ったら、水を吐くフ
グみたいにほっぺたがふくらむけど、知らない人が見たら『自分がア
イドルになりたい系女子』に見られちゃうんだ。

うーん。複雑。

ボクとしては配信してアイドルになるっていうのは、みんなからち
やほやさされたいというのはあったかもしれないけど、女の子としてと
いうより、ボクはボクとしてそう思われたいって感じだった。あれ。
でも容姿を褒められるのは嫌いじゃないし。えつと。えつと……。

どういふことなんだろう。

ともかく姫野さんの警戒する『ボクが死んだらみんな死ぬかもしれない問題』について考えよう。

考え方はあまりブレているわけじゃない。ガバガバではあるけれど、ボクの考えは最初のと時から変わっていない。

みんなと仲良くなりたい。ただこれだけだ。

つまり愛だよ。愛。

乙葉ちゃんがかわいすぎて、いつしよに配信したら楽しいとか、乙葉ちゃんめちゃんこかわいくて近くで持ち歌うたってくれないかなとか、そんな安易な考えでホイホイうなずいたわけではない！

仮にそのような軽挙妄動な幼女に見られたら嘔飯ものだ。

切腹だよ。切腹。

今のボクなら切腹芸も可能かもしれない。ゾンビだけに。

「配信にしろアイドルにしろ……、ボクとしては人間との関係を考えてないといけないといつも常々考えてるんです」

「ふうん。それで？」

姫野さんは視線も声色も冷たい。

くっ。気おされたらダメだ。

ただのアイドルにホイホイされちゃった系幼女になってしまう。

「このままいくとゾンビが勝利するか人間が勝利するかはわからないけど、ボクとしては人間に滅んでほしくないし、かといってボクたちが実験動物みたいな扱いをされるのも避けたいんだ」

「あんた、既にあれ歌えだのこれ弾いてだの、実験動物扱いじゃないの」

「違うよ。それはそれ。これはこれってやつ。ボクはきちんとみんなの要望を聞いて叶えられるのをお願いを聞いてあげただけ」

「うまい具合に共存する道を見極めたいってことなのね？」

「そうです。そうです」

「人間が滅ぶまで待ってたほうがあんたとしては楽だったんじゃないの？」

「え、嫌だよ」

「なにが嫌なのよ。配信できなくなるのが嫌なの？ みんなに褒めてもらって、カワイイって言ってもらえなくなるのが嫌なの？」

自分がかわいいって言ってもらえないってことで、精神的に追い詰められていた姫野さんだからこそその質問だな。

正直なところ、みんなにカワイイといわれるのはたまらなく気持ちいいです。

それは否定しない。

でも、ボクとしてはみんなのクオリアの集合体である人類文化自体を滅ぼしたくないんだ。

「みんなが褒めてくれなくてもいいよ。だれかはボクを否定してもいいよ」

「褒められたほうがうれしいでしょうに」

「まあ、そうだね。総体的には肯定されたほうがいいけど、否定的な意見も少しは出るだろうし、そこはまあしょうがない感じ。でも引きこもってたら誰にも会えないし、ボクは誰かと会いたかったんだよ」

姫野さんはじつとボクを見ていた。

いろいろと衝突も多かった姫野さんだし、ボクもこの人のことは嫌いな部分もある。でも、この人はこの人なりの価値観で考えているのだからなというのがわかる。ボクは姫野さんの心も信じてるから。

「まあいいんじゃないの……」

それが姫野さんの最終的な判断だった。

「ありがとう姫野さん」

「ただし！ 飯田さんのことを連れていくというのなら、あんたが全力で守りなさいよ」

「うん。わかったよ」

「小学生の緋色ちゃんに守られるとか。おじさん困っちゃうな……まるでラノベの主人公みたいで」

頭をかいて照れた様子の飯田さん。

そんな飯田さんを少しかわいいと思ったのは内緒だ。

外部の意見も取り入れてみた。

筆頭はピンクさんだ。やっぱりこの人は政府の機関の人だけあって、政治的な能力が高いように思う。

ゾンビ荘のみんなはわりと個人的能力が高いせいか、ごり押ししようとする傾向があつて政治的な能力は低いんだよねえ。マナさんだけは例外だけだ。

繊細さがほしいです。

『それでマイシスター。相談とはコラボ配信についてであつているだろうか?』

「うん。そのとおり。ボクとしてはどんな危険があるのかよくわからなくて、とりあえずひとりでは行かないし、後輩ちゃん以外に男の人も連れていこうかなと思つてるんだけど」

『おとああj』

ん? なんだろう。誤字かな。

『失礼。とりみあしあ』

んん?

『失礼。いや、キーボードの調子が少しおかしいようだ。男の人を書かれてあるが、この方はマイシスターにとつてどういう方なのか、情報を求む。あ、もちろん、書き込みたくなければそれでもかまわない。個人情報の流出には気をつけるべきである』

「家族かな?」

そんな感じですよ。

仲間でもいいかもしれないけど。

『なるほど。家族か。家族。マイシスターにも家族がいたのか。ふうむ家族。実に興味深い概念だ。家族なのだね?』

念押しするように聞いてくるピンクさん。

ボクのことを謎なゾンビ美少女と思つてるだろうから、家族がいるかどうかって結構な大事な情報なのかもしれないね。ゾンビ半分。超能力少女半分って感じかな。

「血はつながってないけどね」

『cf g c f g c f g c c c c c f x d f』

なんだろう。この意味不明な羅列は。

英語の単語かと思ったけど、キーボードを力いっぱい拳で殴りつけたみたいな感じだ。両手をつかってクラッシュするみたいに。

それから三十秒後くらいは無言だった。

ピンクさんってキーボード打つのいつもは速いのになんでだろ？

家族ゾンビがいると思ったら、単なる義理だと知ってガツカリしたのかな。

あ、またピンクさんからだ。

『つかぬことを聞くが』

「はいどうぞー？」

『血がつかぬがってないのに家族ということとは、ヒロちゃんはその年で結婚とかしてるわわああっけえではないですよ？ まいしすた？』

なんかまたキーボードの調子がおかしいみたい。

いつもは誤字ひとつないキレイなタイピングを彷彿とさせる文字使いなのに。

さすがに政府関係者もいいキーボードを用意できなくなってきたのかな。

で、意味は、つと。

ふむふむ。見た目小学生のボクが誰かと結婚していると思ったというわけか。

これはあれだな。ピンクさんとしてはボクという未知の生物が増えるかもしれないって思ってるんであるらうな。

さすがピンク。そこに気づくとはやりよる。

あー、でもあれだよな。人類的に言えば、種の増加であることは確かかも。

飯田さんもボクの血を与えてヒロゾンビになっっているわけだし。結婚という言い方だと、確かにボクは誰ともしていない。

でも、そこを言いたいわけじゃないだろう。

ピンクさんとしては、人類にとって脅威といってもいい新種のゾンビが増えないかが心配なんじゃないかろうか。

素直に言うべきなのか。

うーん。どっちにしろ男の人がボクといっしょに住んでるって時点で、めちやくちや怪しいだろうし、ここは素直に言うべきかな。

「ボクは誰とも結婚してませんよ。でも、その男の人はある意味ボクと交わっちゃったかな。ピンクさんが恐れてるとおり、ボクの子どもが増えちやったみたいなものかも」

あれ？

返事がこないな。ショックだったのかな。まあそうだよ。ボクが見境なく人類以外の種族を増やしていると知ったら、人類科学者としては絶望もするだろう。でもボクは見境なく増やしたつもりはない。みんなゾンビ化してて心が見えなくなってたから、みんなのことが好きだったから回復させただけだ。

あ、きたきた。

『誤解をなくすためにいま一度確認したいのだが、具体的にどのようにして交わったのだ？ そのつまり暗喩というか。ある種のメタファ的な物言いであって、精神的な交わりとかそういうことを言ってるのだろうか？』

義理の家族というかそういうことをいいたいのかな。

でも文脈からは明らかかとおり、ボクという種族がどうやって増えているのかが知りたいことに違いはない。

だとすれば答えはひとつ。

ボクの血でも涙でも唾でもいいんだけど、おそらくは体液を摂取したらヒイロゾンビになるのだと思う。

「交わるという言い方だとわかりにくいよね。まあ、わりとノーマルなやり方だけど、体液を体の中にとりこめばいいんだよ」

『マイシスター。それはよくない』

え？

『このような世界で倫理を問うのはまったくもってあほらしい行為だと思うが、だからこそ人間は人間らしくあるべきだと思う。マイシスターのやったことはあまり褒められたものではない。やってしまったことはしようがないが、その身を穢すようなことはやめてほしい。』

頼む。お願いだ。後生だから。お願いやめてマジで』

すごく人類愛に溢れてるなピンクさん。

倫理。確かに人類側の倫理感からすれば、ヒロゾンビを量産するのはよくないことだ。ボクが人類側に立って協調路線を貫くなら、絶対にやめておいたほうがいいことの一つ。

でも……。ボクも反論のひとつも言いたい。

「同意があればいいんじゃないかなあ」

『同意など無効に決まってる』

即答だった。うーん。ここは引いておいたほうがよさそうだ。ピンクさんと喧嘩はしたくないし、人類ともそうだ。ボクは人類協調路線ゾンビなのだから。

『マイシスター。自傷はよくないことだ』

ボクが少し迷っていたのを感じたのか、ピンクさんはさらなる追撃の言葉を書きこむ。

自傷……？

って思ったけど、なるほどそうか。ピンクさんは類稀なる観察眼で、ボクが血を与えるときに手を薄く引き裂いたりすることも察したに違いない。

お見事としか言いようが無い。

「たしかに血が出るし、ちよつと痛いし、あまりしないようにするね」

『ああ……。頼む。ちなみに愛してるのか？』

「愛といえば愛だけど……。うーん。たぶん好きくらいかな？ 友達感覚だよ」

飯田さんには悪いけど、家族愛みたいな感じ。友愛に近いけど、友愛よりはちよつと深い感覚。でも恋愛ではないのは確かだと思う。

『友達感覚でそういうことをするのはピンクとしては非常に遺憾の想いが強い』

遺憾砲が出てしまいましたか。

日本のお家芸だと思っていたよ。

でも、どういうことだろうな。恋愛感情がないのにヒロゾンビを増やすのがよくないって。逆に考えれば、恋愛感情があればヒロゾ

ンビが増えてもいいのか？ ピンクさんの倫理感覚がよくわからなくなってきた。

とりあえず、ピンクさんの意見を最大限取り入れよう。

「ピンクさんの言いたいことわかったよ。ともかくボクはあまり家族を増やさないほうがいいってことだよね」

『ああ、あと五年は少なくとも待ったほうがいい』

五年待てばヒイロゾンビ増やしてもいいの？

ピンクさんってわりとゾンビに理解があるなあ。人類の敵になるかもしれない存在を増やしてもいいなんて、なかなか人類側からはいえない発言だよ。どういう基準でいいのかよくわかんなかったけど。同意があってもダメらしいし……。うーん。頭のいい人が考えてることってやっぱりわからん。

・
・
・

そのあと、ボクのツブヤイターの記録を確認していた命ちゃんにより、めちやくちや訂正文を書かされました。

ハザードレベル54

さて、約束の日になりました。

今日まで電気もネットも消えてないってことは、たぶんボクの歌が響き渡ってるのかもしれない。あるいはボクとの接点を消さないために、政府関係者が必死こいて発電しているのかな。

すこし恥ずかし案件だけど、通常なら1ヶ月もすれば電気は止まるって命ちゃんと言ってたと思うから、ほっとしたよ。

そもそも電気もネットも使えなくなったら配信とか意味なくなっちゃおうし。

でもまあ、いまはそんなことより乙葉ちゃんだ。

ボクの脳内分布率では、乙葉ちゃんのうっとりするほどきれいな蒼い瞳が90パーセントくらいをしめている。千年に一度のスーパースーパードルだっていわれてるけど、ボクもそう思う。

乙葉ちゃんとの配信コラボ。楽しみすぎてドキドキする。

ちなみに、ピンクさんたちの話の結果、場所の指定はこちらからすることにした。敵か味方もわからない、どんな組織とつながってるかもわからないところにホイホイついていくとか、誘拐されるの待たなしだと考えられるからだ。たとえ乙葉ちゃんが超かわいとしても、バックにいるのがなんなのかは謎だからね。軍用ヘリを使ってたけど軍とは限らないわけで。乙葉ちゃんのことを信じたとしても、他の人がなにか策謀をめぐらしているかもしれない。

そこはアイドルホイホイされるだけの少女ではないと知っていただこう！

ちなみに誘拐というのは、この場合、字義通りの意味ね。

誘って、かどわかすということ。

ボクを力づくでかどわかすのはなかなか難しいから、手練手管が必要になるだろうと予想される。そもそも、ボクを閉じこめておくとかできるのかなという問題もあるけれど、他者であるところの人間の知恵は予想がつかない。

そもそも——ボクってなにが弱点なんだ。アイドル？

「先輩。そろそろつきますよ」

命ちゃんが振り返った。いま命ちゃんはバイクにまたがってボクを後ろに乗せている。夏だしボクが前方に風避けのシールドを展開すれば、ライダースーツとかを着る必要もない。ヘルメットすら着用していない。

たとえ放り出されても余裕だと思う。

一方、ライダーっぽい格好なのは、例によって飯田さんだ。

黒塗りのフルフェイスを被り、厚手のジャンパーに黒い手袋。めちゃくちゃ暑いだろうけど、我慢してもらおうしかない。顔バレはボクと命ちゃんだけでいい。

飯田さんはバイクの免許は持ってなかったけど、普通免許は持ってて原付は運転できるみたい。

原付の制限速度は——まあこの際いいとして、最高速度は60キロくらいだろうか。必然的に飯田さんにあわせる形になる。

ここ二週間で、ボクたちがおこなったのは場所の選定だ。バイクと原付が停めたところ。

そこは大きな建物——ではなく、わりとこじんまりとしたライブハウスだ。入り口は何の変哲もない普通の門構え。いわゆる地下アイドルとかがいそうなそんなところ。べつになんでもよかったんだけど、乙葉ちゃんとツブヤイターで直接やりとりをする中で、やっぱりそれなりの設備はほしいってことになったんだ。

唄うための設備。

つまり、全国のアイドルの頂点にたつ——嬉野乙葉ちゃんの生歌が聞ける！

ゾンビ配信してて本当によかった！

「なんか、先輩が生きててよかった！みたいな顔をしてる……」

「み、命ちゃん。そんなことないよ。ボクはようやく、なんというか、その、人間との融和がですね。進んでですね、うれしかったんです。平和最高っ！」

全力のエへ顔ダブルピース。

「本音は？」

「乙葉ちゃんがかわいすぎるー！」

「先輩」

スツと肩に手を置かれました。

ハイライトを失った瞳がボクを貫いています。

いかん。これは……ヤンデレ化してしまう。命ちゃんがヤンデレ化して夜も眠れなくなっちゃう。

「あ、あの……。命ちゃんのほうが百倍かわいいよ」

「そんなお世辞なんていらさないですよ」

「ほんとほんと。命ちゃんかわいいヤッター！」

じーっとボクを観察する命ちゃん。

ボクは命ちゃんに精一杯の笑顔を向けて応答する。

夏だからか、冷たい汗が背筋を流れるが気のせいだ。

「アイドルに憧れてるだけだよ。ボクって配信好きだからさ」

「ふうん……配信が好きだけで、アイドルが好きなのではないんですね？」

「そうそのとおり！　そもそも乙葉ちゃんなんて一回あつただけなんだから好きも嫌いもないよ。命ちゃんのごことは大好きだよ。本当に」

「もう一回」

「えつと……大好きだよ？」

「もう一回」

「大好き」

「まあいいです。先輩がやりたいことを止めようとは思いませんから」

納得はしてないが、ひとまずは矛を収めてくれた。

助かった感が強い。

場の空気が弛緩したのを感じたのか、空気を呼んで気配を消していた飯田さんが近づいてきた。少し苦笑しているみたい。

「この場所は相手側にはわかるのかな？」

「大丈夫だと思うよ」

ライブハウスの目の前には地方にありがちな無駄に大きな駐車場があつて、打ち捨てられた車がたくさん停まっていた。

ボクはそれらの車を浮かせて、ヘリが停まるスペースを作り出し、乙葉ちゃんが無事ここに来れるように準備を始める。

こういったライブハウスは佐賀市内にもいくつかあるんだけど、乙葉ちゃんを迎え入れる準備は極力秘密裏におこなう必要があったから、ヘリを停めるスペースを作る作業はそのままにやっている。

空中に浮かせることのできる重量は、今のところ車数台分ぐらいが限界みたい。

浮かせて置いて。浮かせて置いて。浮かせて置いて。

車を端に寄せていく。

浮かせるのは物理的に動かすよりやっぱりちよつと疲れるみたい。息があがるほどではないけど、パワーと集中力が落ちてる。

やむなく、ボクは物理作戦に切り替えることにした。目の前にある軽自動車をボクは躊躇なく蹴り上げる！

ボコンっという大きな音を立てて、映画のスタントシーンみたいに車が宙を舞う。よし。こんな感じでいいだろう。ボクは次々と車を蹴り上げて同じように端に寄せていった。

残りの作業は——バリケード作り。

駐車場からライブハウスまでは、道路一つ分だ。

適当に車でのバリケードを作って、ゾンビの侵入を物理的に遮断した。

ボクがゾンビ避けをできるから無意味だと思われるかもしれないけど、相手方からしてみれば、ゾンビを操って襲わせるということもできるわけだから、互いに歩みよるためには、そうしたほうがよかった。

でも、こちらも無抵抗というわけではない。

飯田さんがショルダーバッグから取り出したのは恭治くんから借りてきたショットガンだ。もちろん、このことは乙葉ちゃんには伝えている。代わりに乙葉ちゃんたちも銃を持ってきてもいいよと言える。

どうせ、銃なんかボクには効かないし——。

怯えて縮こまつてるより、むしろ堂々としたほうが互いに被害が少

ないんじゃないかと思うんだ。ホームセンターのときは、ボクは弱く見られすぎた。

ボクが本当に人間のことを考えるなら、もっと強くならなくちゃいけない。

☆Ⅱ

「ワオ！ これ全部、ヒロちゃんが準備してくれたデス？」

ヘリから降りてきた乙葉ちゃんは、まぎれもなくアイドルでありスターであり、星のようにキラキラ輝いていた。

周りの車が不自然に転がってる状況に驚いているのだろうと思う。

「いちおう、ヘリが停めやすいようにしてみましたよ」

「サンキューデス！」

乙葉ちゃんが抱きついてきた。

絶妙に乙葉ちゃんの胸がボクの顔にフィットしているんですが。

「あ、あばばば……」

「あ、苦しかったデスカ？」

「先輩に私の許可なく触らないでください」

命ちゃんが表情をまったく変えずに、乙葉ちゃんを引き剥がす。

乙葉ちゃんは「OH……」といいながらも特に抵抗らしい抵抗はなかった。

「後輩ちゃん。乙葉ちゃんに乱暴しないでね」

「先輩がもう少し油断しなければ避けられたはずですよ」

「まあそうかもしれないけど」

アイドルが走りよってくるなんて、ボクの人生で初めての出来事なんだから、避けられなくてもしかたないと思う。

でも、それを命ちゃんに伝えても、なんだか危険な結果に終わりそうなので、そのまま流すことにした。

あらためて振り返ってみると、乙葉ちゃんは命ちゃんに押しつけられても、ケロっとしている。細かいことは気にしない性格なのかな。よかった。

「乙葉ちゃん。後輩ちゃんがごめんね」

「ヒロちゃんと後輩ちゃん。ホント仲良しさんデスネ」

「うん。そうなんだ。だから大目に見てください」

「もちろん。オーケーデス！」

輝く笑顔は太陽のようで、ボクはなんだかクラクラしてしまう。

はあ。もうこの子かわいすぎだろ。

命ちゃんがかわいくないとかそういうわけじゃないけどさ。みんなを魅了する術をこの子は知っているように思う。

それは顔のつくりだけじゃない。表情や声の調子や、一挙手一投足が誰かを惹きつけるための魅力に溢れてるんだ。

そばに立ってるだけで、アイドル力の違いを見せつけられている気分だ。

★
||

正直、疲れる。

わたし、嬉野乙葉に課せられたミッションは小学生くらいの女の子、終末配信者ヒーローちゃんを籠絡することだった。

小学生——女の子——籠絡。

訳わかんない。わたしも女の子なんですけど。

小学生の女の子にわたしって需要あるんだろうか……。お父さんの頼みじゃなかったから、こんなことは絶対にしなかつただろう。

確かに、ヒーローちゃんの動画をいくつか見ていると、わたしの名前が頻繁にあがる。終末に配信やっててエライとか、いつも楽しい配信しててボクもがんばるとかかわいらしい自然な笑顔をふりまいて配信している。

裏表のない真実の顔。

演技を知らない子どもっぽい素直さは、わたしが捨ててきたものだった。

わたしは配信を楽しんでいたことはない。仕事を楽しいと思つたことはない。ファンが増えたり、いいねされたり、かわいいといっ

てもらえたりしても、べつにどうだってよかった。ブルーレイが何千枚売れようとも関係ない。稼いだお金も全部お父さんに預けている。楽しいなんてどこにもない。

楽しい演技ならいくらでもできる。人を喜ばす仕草。表情。動作は幼い頃から叩き込まれて無意識にいくらでもやれる。

しかし、それはわたしにとっては装着し慣れた仮面に過ぎない。

★
||

十五年前、わたしは暗闇の中にいた。

わたしを生んだだけの存在は、わたしのことが不要だったらしい。

記憶は曖昧で、なにもかもあやふやだったが、突然光の世界から暗闇の中に入ったのは覚えている。

まったき闇。

黒一色で塗りつぶされた空間。

わたしは手を伸ばした。でもどこにも突き当たらない。

張り裂けるように泣き叫んでも誰にも届かない。

なんのことはない。

生まれたばかりのわたしはどこかの廃れて限界集落のようになってしまった駅の一角にあるコインロッカーの中に突っ込まれたというだけのことだ。

鉄で囲まれた冷たい檻の中で、わたしは朽ちはててもおかしくはなかった。

寒いとても寒い。冬の頃だったと思う。

赤ちゃんのころのことをそんなに鮮明に覚えてるはずがないと思われるかもしれないが、わたしはずっと覚えてる。闇に包まれる恐怖を。捨てられる寂しさを。凍えるような寒さを。

いま、わたしはアイドルになって――。

みんながわたしを見ている。

配信で、みんなが楽しんでくれている。

けれど、それは永久不変のものではなく――いつか去りゆくもの

だ。

くだらない世界のくだらない出来事。

幼稚園の頃は、ただ髪の色と瞳の色が違うというだけで、間違ってるかのように扱われた。飢えたり、暴力を振るわれたり、命の危険があったわけではないけれど、お父さんとその時はまだ生きていたお母さんとも色が違うから——みんな子どもごころに自然と”そう”なんだと察して——

だから蔑まれた。

幼稚園の頃のわたしは、努力が足りなかったのだと思う。

餓死の恐怖さえ知ってるわたしが、知らないはずがなかったのに愚かだった。本当に愚かだった。怠惰だった。怠惰であった結果、その罰を受けたのだ。

みんなから蔑まれ、孤立したのは、わたしが愚かだったからだ。

つまり、幼稚園生活を通じて、わたしは心の底から理解した。

人はアンコンデイショナルな愛を得られるわけではない。

口を開けていけば、誰かが愛を運んでくれるわけではない。

愛されるための努力をしなければならぬ。愛されなければ死んでしまう。嫌われてしまったら殺されてしまう。冷たく孤独な闇の中で溶かされてしまう。

愛されなければ死ぬ。

わたしは成長するにつれて世渡りだけはうまくなっていった。周りの誰に対しても心を配りまわり、貴賓のように扱い、自分自身は馬鹿を演じた。

人間は、自分より頭がいい人間を赦さない。

人間は、自分より優れた人間を赦さない。

人間は、自分より幸せな人間を赦さない。

わたしは少しずつ学んでいく。

でも、どうしようもできないこともある。

顔——。

わたしはかわいいらしい。そんなことになんの価値も見出せないが、しかし、これは純然たる事実として、わたしの人生に大きな影を

落とした。

今となつては名前に触れるのも少し痛くて——、だから”あの子”とだけ呼ぶが、こんなわたしにも幼稚園の頃から親友と呼べる子がいた。わたしが両親と髪の色が違つても、態度が変わらない数少ない友達だった。

小学生高学年にあがる頃。

あの子とわたしはまだ親友で、周りも少しずつわたしを認めはじめた頃だった。

特に男子のわたしを見る目が少し変わつてきたように思う。

腫れ物を触るような、異物を見る目から、珍しい宝石を眺めるような視線に変わりつつあった。その変調はきつと外貌に対する評価に他ならない。

つまり、顔だ。

そして、いつかの時。

どういうことなのかはわたしにもさっぱりわからないのだけれども、男の子のひとりがわたしに告白した。今になって思えば小学生にしてはませてるなどか、もしかしたらなにかのくだらない冗談だったのかなとも思うのだが、その告白は、偶然あの子にも目撃されていた。そして態度が冷たくなった。よそよそしくなった。

あの子がわたしに告白してきた男の子のことを好きだったのだと察した。

怖い。見放される恐怖が全身を貫き、動悸で眩暈がした。

あの子を傷つけるつもりはなかった。

あの子から嫌われる態度をとるつもりはなかった。

もしも可能であるなら、わたしはこころを抉り出してでも見せたかった。

あの子に嫌われるくらいなら、わたしはなんだったしていただろう。

当然、謝罪した。

わたしは、その男の子のことを好きでも嫌いでもないということ伝えて伝えた。

けれど、わたしの言葉は、その子の好きなものに価値を認めないと

いうことでもあるから、きつと赦せなかったのだろう。

泣きはらした目で。

いや、憎悪すらこもった目で。

彼女はわたしに対して呪いの言葉を言い放った。

「みなしごのくせに！」

わたしは呼吸が止まったかのように感じた。消え去りたかった。あの子に否定されて、わたしは自分自身に対する気持ち悪さに耐えられなかった。ますますに誰かに殺してもらいたかった。そんな価値すらないだろうけれども。

呆然と立ち尽くすわたしを置いて、あの子は去っていった。

あの子とはそれきりになってしまった。

同じクラスで顔をあわせることすら怖くなって——、わたしはアイドル業に逃げた。

たったひとりのたった一言で生じた魂の瑕に対する代償として、わたしは誰でもいいから認めてほしかった。わたしのこころなんてどうでもいい。わたしの顔だけでもいいから、ただ誰かに、ここにいてよいと、この世界に生きていていいと言われたかった。

わたしはみんなの奴隷あいつらになりたかった。

そんな浅ましい動機。

楽しいはずがない。楽しいことなんてない。

いつか嫌われるんじゃないかと、恐怖ばかりが募っていく。

わたしを育ててくれた、お父さんにも。

いつか捨てられるんじゃないかって。

★
||

「乙葉ちゃん。チェックして」

幼き滅びの天使（お父さん命名）のヒロちゃんは、両の手を広げて、ライブハウスをわたしに自慢しているみたいだ。いわゆるドヤ顔をしていて、アイドルのわたしをも惹きつけるほどかわいらしい。

もちろん、ライブハウス自体はヒロちゃんのものではないし、用意

した機材も、どこかから調達してきたものだろう。

いっしょに遊ぶための玩具を友達に自慢している子どももみただい。褒められるのを待っているみたいな無垢な様子に複雑な気持ちになる。

表情が凍らないように、微笑の仮面をとりつける。

おそらくわたしは、ヒロちゃんのように奔放な存在が羨ましいんだと思う。

わたしは、誰かに嫌われないために、誰かに好かれるために、こんなにも抑制しているのという憤りの気持ちがあるのだと思う。

ヒロちゃんはこの世界で唯一好き勝手にゾンビを操れる存在だ。

その存在価値はわたしなんかと比べ物にならない。もしも、わたしとヒロちゃんのどちらか一方が死に、どちらか一方が生きるという状況になっても、みんなはヒロちゃんを選ぶだろう。

つまり、ヒロちゃんは誰からも、無条件に愛される。

アンコンデイショナルに、ただゾンビを操れるという特殊能力を持つているという、ただそれだけを理由に愛される。

嫉妬の炎がくすぶる。

でも、ヒロちゃんはわたしがそんな想いを抱いているなんて、つゆほども考えてないだろう。わたしは暗闇の中から生還したときから、ずっとわたしを認めてくれる人を探していた。

そんなわたしだからこそ、ヒロちゃんの瞳が嘘をついていないことはわかる。

わたしのことをアイドルとして好きなのだろうな——とも思う。

キラキラしたルビーのような瞳が、わたしをじっと見つめている。

「みなさんチェックお願いデース」

おつきの元自衛隊の人に指示し、機材のチェックをお願いする。軍用ヘリに乗っていたのは全部で十人程度。お父さんが教祖をしている、魔瑠魔瑠教の信者さんでもある。

今回は滅びの天使に直接会えるチャンスだということ、意気込みも高い。

てきぱきと動いている。

「乙葉ちゃんに言われたとおりのものは集めたよ」

「ありがとうデース！ ヒロちゃんはすごいデスネ」

「えへへ。がんばりました」

「私も先輩に言われてがんばりましたよ」

「うん。ありがとう。後輩ちゃんもがんばってくれたよね」

隣に控えているのは高校生くらいの後輩ちゃんだ。

彼女もかなり謎な存在でもある。見た目小学生のヒロちゃんに対して先輩というモノ言いをしているし、それはキャラプレイにしては堂にいつている。

わたしが思うに——、本当に心の底から先輩として慕っている感じだ。

お父さんからのミツシヨンは、ヒロちゃんを籠絡することだが、そのためには後輩ちゃんは邪魔になるかもしれない。

籠絡——と一言でいっても、その具体的中身としては、結局のところ、わたしたちがいる本拠地に呼びたいという、ふんわりした目標だったが、後輩ちゃんの硬い態度を見ると、それすらもNOといわれる可能性が高い。

貫くような視線でわたしを見てくる後輩ちゃん。

わたしは鍛えぬかれた営業スマイルで応える。

「先輩がやるといったからには邪魔はしませんけど、先輩を失望させるような真似だけはしないでくださいね」

「もちろんデース」

「もう。後輩ちゃんもそんなこと言わないで仲良くしようよ。これからいっしょに遊ぶんだから、楽しもう」

楽しむ——。

そんなことができるのだろうか。

思考に黒いものが混ざったのは一瞬。

わたしはお父さんに嫌われないために、気を引き締める。

気になるのは後輩ちゃんだけではない。三日前くらいに連絡がきた『男の人』も無視できる存在ではない。今もすみっこのほうで、フルフェイスのヘルメットと、ジャンパーを着ている巨漢だ。肩口には

軍用ショットガンをかけて、静かに腕を組んでいる。

得体の知れない存在感。

彼は肩で大きく息をしていた。

まるで化け物がうなっているようにも思える。

足がすくむような思いもしたが、おそらくはその人もヒロちゃんの奴隷的な存在なのだろう。

見た目に惑わされてはいけけないのは頭ではわかっている。

しかし、わかりやすいのは見た目のほうだ。

彼は――。

ライブハウス内を睥睨し、油断なくこちらをうかがっている。

わたしには知りようもないが、自衛隊よりも強いのだろうか。元自衛隊員のみんなは、彼の気配を背中に感じ、緊張しているように思えた。

しかし本当に恐ろしいのは――。

目の前にいるかわいらしい少女のほうかもしれぬのだ。

わたしをチラリチラリと視界にいれている少女。

自分の視線に気づかれていないと考えている男の人のように、ヒロちゃんはわりと露骨にわたしのことをジロジロと眺めている。

まるで、欲望にぬれた男の人と同じみたい。

いや――小学生の女の子がそんなことを考えてるはずもなく、単純に憧れの視線なのだろう。

「どうしたのデスか？」と聞いてみた。

「え、うん。あの……乙葉ちゃんかわいいなって思ってた」

「ヒロちゃんのほうがカワイイデスよ」

「え、そ、そうかな。ふへへ。ありがとう！ アイドルに褒められちゃった」

ニマニマ笑う様子も、かわいらしい。

素直にカワイイと思ったのは事実だ。

「乙葉ちゃん。今日はいっぱい遊ぼうね！」

「そうデスネ」

既に、ヒロちゃんのわたしに対する好感度は激高のような気がする

が、さてどうやって攻略しようか。

無邪気な天使と楽しそうに談笑しながら。

——わたしは冷たく思考をめぐらせる。

ハザードレベル55

ライブハウスの裏方には、シャワールームがある。

ボクがいま何をしているかというのと、禊である。お清めの何かだ。

まあたいして汗をかかない体質になっているとはいえ、あれだけ車を浮かせたり、蹴ったり、移動してきたんで、埃っぽくなってしまっているし、せつかくの乙葉ちゃんとの配信だし、ボクとしてはキレイにしたかったんだ。

つまり、これはボクのわがまま。

乙葉ちゃんは驚いていたけど、まあそれはそうだろうね。敵性勢力がいるかもしれないなかでシャワーを浴びるとか、どこのホラー映画だって話で、不用意すぎる。乙葉ちゃんのことを信頼しているよって伝える点ではいいかもしれないけど、もしかしたらただのアホの子と思われちゃうかもしれない。

でも——それでも。

なんというか、推しの子の前では、入念に手を洗って握手する気持ち。

わかりますでしょうか。

さすがに、飯田さんにはシャワールームの前で守ってもらおうようにお願いしたけどね。ボクがシャワー浴びたいっていったら、飯田さんだけでなく、自衛隊服着た人たちの息も荒くなってたけどなぜでしょうか。もしかして……ロリコン？

そんなわけないよね。

蛇口をひねり、温水になるまで待つ。最初は水がでるから身体の表面をシールドで覆った。肌ではなく膜のようなものが薄皮一枚で水をはじいていく。冷たさは微塵も感じない。

だから、シャワー口は壁にかけたままで十分。

いつのまにやら傘がいらないう子になってましたか、ボク。

もうそろそろいいかな。

シールド状態を解除すると、生白い肢体をシャワーの温水が伝って

いく。

汗も汚れも流れおちていくと気持ちいい。

まちがいはなく男だったときは肌感覚が違う。

本当はお風呂に入りたかったけど、シャワーでも少しはリラックスできる。

ほんととはね、ちよつと緊張してたんだ。

こんな世界にでもならなきゃまちがいはなく接点なんかなかった、スーパーアイドルといっしょに配信できるなんて、想像もしてなかったことだからね。

期待と緊張でドキドキがとまらない。ボクは無い胸に手を当てて静まるように言い聞かせてる。

ちなみに、命ちゃんが入ってこようとしたけど、遠慮してもらったよ。

小さい頃は確かにいっしょにお風呂とか入ってたけどさあ。

もう高校生だし、ボクは大人だし……恥ずかしすぎるでしょ。

「先輩になら見られてもいいのに」

「いやいや、それはさすがに——って、命ちゃん!」

背後から聞こえたのは命ちゃんの声だった。

シャワールームは、下が数十センチ開いている簡素な作りで、西部劇のバーみたいなのに、ちよつと手で押しただけで開く仕切りしかない。

顔だけ振り向くと、その仕切りの向こう側に命ちゃんが顔をだしていた。

身体は仕切りのせいで見えないけれど、何も着てないみたい。

裸を見られる恥ずかしさもあるけれど、裸を見ちやうかもしれない

恥ずかしさもあります。

「命ちゃんダメだよ。そんな……はしたない」

「ふふ。先輩が焦ってる。かわいい」

「焦るよ。そりゃ……。と、ともかく、シャワー浴びたいならそっちがあいてるでしょ。そっち使ってよ」

仕切り上になってるシャワールーム。

ボク以外には使っていないから、あいてるところはあと四つくらいあ

る。

「というか、隣使えばいいじゃん。」

「先輩といっしょのシャワー浴びたいです」

「だめ。それはさすがに恥ずかしすぎるよ……」

ボクはくるりと回転して、壁を見つめる。

壁をただひたすらに見つめる。仕切り戸が開く小さな音。

ボクの肩がぴくんと跳ねる。

や、ヤバイよ。

命ちゃんの気配が近づいて、吐息が首のあたりにかかった。

「先輩……」

「み、命ちゃん怒るよ！」

「怒られてもいいです」

「外にたくさん人いるよ！ 変なことしてるって思われちゃう」

「べつにいいじゃないですか。スツキリしてから配信しましょう」

なにがどうスツキリするんですかねえ!?

肩とそしておなかにまわされる手。

シャワーで温まってきていた身体と対比してひんやりしていた。

ボクは身動きがとれない。とりようがない。だって、もし振り向い

たらそこには裸の命ちゃんが立っているわけで、男として、兄のよう

な存在として、見ちゃいけない気がした。

「先輩ならいいのに」

「ダメ……」

「OH……、ヒロちゃんと後輩ちゃん。仲良しさんデース」

ふあ？

新たな乱入者の声。

もちろん、声だけですぐにわかる。乙葉ちゃんだ。

シャワールームによく反響する透き通るような甘いボイス。

ボクは一瞬で想像してしまった。全国のアイドルの頂点にたつ国民的グループ。そのなかでも一番人気な乙葉ちゃんが、桃色の肌をさらしている様を。

ごくり――。

自然と唾をのみこむボク。

「先輩はやっぱり、あの金太郎飴みたいなアイドルのことが好きなんですね」

「金太郎飴なんかじゃないよ。乙葉ちゃんが一番キラキラしてたし」「ふうん。一番……ですか」

後ろから底冷えする声が届いてくる。

命ちゃんがまた、ヤンデレ化している。

あわわ。おへそのあたりを這うように触る左手が怖い。

「あの、違うよ……。ちよつと、ほら、アイドルの裸とか見ちゃったらダメかなあつて思つて」

「ダメじゃないデス。女の子どうしデスカラ、なんの問題もありません」

乙葉ちゃんの声は少し楽しそうに近づいてきている。

仕切り戸の向こう側。わずか数メートルほどの距離に乙葉ちゃんがいる。

きつと、なにも着ていない。

だって、ここはシャワールームなのだから。

あわわわ。

小さな仕切りが開く音。

命ちゃんが振り返つて乙葉ちゃんと対峙しているのが気配でわかる。

「あなた、邪魔です」

対する命ちゃんは直球すぎた。

「そんなこと言わないでもいいじゃないですか」

ほとんどシャワーにかき消されるほどの小さな声。乙葉ちゃん？

「それが地ですか？ 私の先輩に粉かけてたんですね」

「ち、違いマース！」

「いまさら取り繕わないでください」

「み、命ちゃん……だめだよ。そういうことは言わないで」

「先輩はわたしよりアイドルのほうがいいんですね」

「だから違うって！」

命ちゃんは全然わかってくれない。

そんなイライラもあって、ボクはとっさに振り向いてしまった。
って、あ。

目の前に広がる肌色。ちょうど、命ちゃんの胸のあたりに視線が
いって、ボクは変に意識してはいけないと目を伏せて……伏せちゃだ
め。

ともかく、目をつむって。ああああ。ああああ。

「先輩。私のことを見てください」

「そ、そういうの、露出狂っていうんじゃないかな」

「ヒロちゃんは女の子が好きなのデスカ？」

「乙葉ちゃんもよくわからないこと言うね！ 後輩ちゃんのこととは人
として好きなかただけでありまして……」

「私は先輩のことが肉欲の対象としても好きですよ！」

「だったら、わたしもヒロちゃんの肉奴隷になってもかまいません」

ボクの手が……両の手が引っ張られる。

なにか柔らかいものに押し当てられる。唇の感触が両腕の肩口あ
たりにあたる感触。もみくちゃに。

「どいてください」

「いやデース」

「あなたは先輩自身を見てるわけじゃなくて、ただゾンビ避けできる
先輩を籠絡したいだけでしょー！」

「ち、違いマース。純粹に、ヒロちゃんに興味があるデース！」

「あ、あの、ふたりとも喧嘩しないで。ボクをとりあわないで！」

肌と肌のぶつかりあい。

水滴のぴちやぴちやと跳ねる音。

「じゃあ、ニンゲンやめられますか？ 私は先輩のためならゾンビに
だってなれますー！」

「あうっ」

命ちゃんには正面から抱きつかれた、手をピンと伸ばしているけ
ど、真正面から伝わる肌の感覚。そして、おそろおそろ目を開けると
――。

命ちゃんの濡れた顔が迫ってきていた。いろんな意味で濡れた顔。唇と唇が重なる。

むうう。

「ぶはっ。どうですか。先輩にキスしたらあなたはゾンビになります。そんな覚悟がありますか？」

「キスしたら……感染するんですか？」

「そうですね。でも私のように意思がある存在になれるとは限りません。もしかしたらそこらにいるゾンビみたいに心のない存在になってしまうかもしれない。それでも先輩といっしょにいたいと思うんですか？ あなたはそれだけの覚悟をもって先輩と接触しようとしているんですか？」

「ヒロちゃんはゾンビなんですか」

「ええ……。そうですね。先輩と接触するというのは感染の危険があるということです。籠絡なんて甘い考えで接触しないでください。それとも——」

——ニンゲンやめますか？

「ボクは乙葉ちゃんを感染させるつもりはないんだけどな」

「先輩にその気がなくても、この子はどう考えてもハニートラップしかけようとしてたじやないですか。ボディタッチは基本ですし、下手すると、挨拶とか言ってキスだっしてしてくるかもしれません。いま、そうしようとしてましたよ」

「そうか。このままだと乙葉ちゃんがなにかの拍子に、ボクの体液を摂取してしまいそうだから、あえて情報をだしたのか。」

それとも、乙葉ちゃんの真意を探ろうとしているのかな。

乙葉ちゃんのほうを見る。あいかわらず、愛くるしい微笑だけど少し困惑しているように見えた。

そして——白い乙女の柔肌。

近くには命ちゃんの。

身体ごとびったりと押しつけられてるボクは、もう……もう……。もう……もう……。ぷしゅう。

「あ、先輩？ 先輩！ 先輩！」

「ヒロちゃん？　おう……マジですか」
のぼせました。

☆
||

肌色地獄でした。

シャワールーム前の脱衣室で、ボクはベンチに横たわってる。
タオルだけの状態で、命ちゃんに膝枕してもらってる。

「はい。冷たいお水デース」

「あ、ありがと！　乙葉ちゃん」

乙葉ちゃんは既に服を着ていた。

残念だなんて思っていない。思っていないからね。

ボクは起き上がってコップを受け取り、ゆっくりと水を飲み干す。
ひゃあ。キンキンに冷えてやがる。

火照った身体には、まさに神の水だよね。うますぎるっ。

「はい。先輩。アウト」

横から命ちゃんにコップを取り上げられてしまった。

「へ？　どうして」

「さつきキスで感染するって言いましたからね。さつそくですよ」

コップの縁をなぞる命ちゃん。

よくわかんないんだけど。

「コップについた先輩の唾液をかすめとろうとしたんでしょ」

「えー。違うよね？　乙葉ちゃん」

「違いマース」

なんで小声なんでしょうか。

微笑は変わらずだったけど、ちらりと視線を逸らしたし。

「わりとボク。唾液ぐらいだったらいくらでもあげてもいいと思ってるんだけど。さすがに危険性がわかってるなら摂取しようとは思えないでしょ？」

「最初は小さな要求をして、少しずつ大きな要求になっていくんです」
「違いマース……」

うわ。蚊の鳴くような声。

「えつと、乙葉ちゃん気にしないでね。後輩ちゃんは心配性なんだ。唾液の中のヒロウイルスはそんなに強くないから、ほっとけば霧散するよ」

血はわりと残存するんだけどね。

それと霧散というのは誤解される言い方かもしれないけど、表面的にはそういう表現のほうがわかりやすい。

ヒロウイルスは無くなったわけじゃない。素粒子だから今の科学力じゃ感知できないだけ。非活性状態という表現のほうがいいかな。

たぶん、唾は時間経過とともにゾンビ化させるほどのパワーが消えちゃうんだと思う。どうしてなのかはわからないけど、感染力は時間とともになくなる。ウイルスそのものは残ってるのかもしれないけど、人間を変態させるほどの力は残ってない。

ゾンビウイルスに人類みんな感染しているけどゾンビにならない状態と同じで、素粒子としておそらく残存はしているんだろうけど、人間をゾンビにする力はなくなるんだ。

どのくらいでなくなるのかは不明だけど、人間をヒロゾンビ化するには直接マウスとウマウスで経口摂取しないと難しいんじゃないかな。

「ヒロウイルス？ なんですかそれ」

乙葉ちゃんがすぐく流暢に日本語を話した。

「あ、うん。ボクが勝手に名づけただけなんだけど、ゾンビウイルスよりも上位のウイルスなんだと思う。たぶん」

「正直にイイマス。わたし、お父さんにあなたのこと、調べるよう頼まれマシタ。だから、ヒロちゃん汁……いっぱい欲しいです」

ヒロちゃん汁とはいったい……。

搾り取られちゃうの？

「そんな、私でも言えない変態的なことよく口に出せましたね。馬鹿を演じて、ノリでいいよって言われるのを期待するとか。アイドルは詐欺師なんですか？ 先輩の人柄につけこんで最低です」

う。まさに、今いいよって言いそうになってしまった。

ヒロちゃん汁ってなんだろうって思ったけど、べつに唾液だろうが血液だろうが、研究したいっていうならすればいいと思う。ボク自身がモルモットにならないなら、どうだっていい。

ゾンビを完全に駆逐されたら、モルモットになっちゃうかもしれないけど、その前にボクが強くなれば問題ない気がしてきてるんだよね。

ボクがゾンビ化してからおよそ一ヶ月。

ボクの戦闘力は既にスナイパーライフルの銃弾くらいなら受け止めることができるレベルに達している。そろそろロケットランチャーでも大丈夫そう。

この星にゾンビウイルスやヒロウイルスが広がるにつれて、少しずつボクのパワーが増してきている。

ゾンビが駆逐されても、ヒロウイルスは無機物にも感染するから、ボクの力は多少弱まるだろうけど、消えることはないと思う。唯物論的なすべての原子に寄生しているんだから、ゾンビの死体も物質であることに変わりはないってわけだね。だから――。

「まあ、唾液くらいはいいんじゃないかなあ」

というのが、ボクの結論です。

アイドルの唾液は高く売れるらしいけど、ボクの唾液ってどれくらいで売れるんだろう。成分的には素粒子的にヒロウイルスが多く含まれてるけど、たぶん普通の唾と変わらないと思うんだけど。そんなことを言ってみたら――。

「垂涎の的に決まってるじゃないですか。百億円出しても買いますよ」

命ちゃんはさらりとすごい金額を出してくる。

「う、そうなの？」

「だとオモイマス。とはいえ、お金の価値がいまどれほど残っているかは疑問デスガ」

乙葉ちゃんも同じ感想らしい。

百億円とか言われてもよくわからないけど、

「先輩。ともかく安売りだけはしないでくださいね。下手すると、先輩とセックスしたら永遠の命が手に入るとか、そういう流れになりかねませんから」

「えー、こんなちんちくりんな身体に欲情するの？」

「わかってない。先輩はぜんぜんわかってない」

タオル姿の命ちゃんが全力で否定する。

うーん。ボクとしては命ちゃんのほうが魅力的なんだけどな。

まあ、カワイイとは思っただけだね。

ボク自身の可愛さはアイドルにも匹敵するほどだと思ってるけど、なんというか生々しいものじゃなくて、猫みたいな可愛がられ方をするものだと思うてる。

周りがロリコンばかりで勘違いしそうになるけど、たぶん、本来なら、ボクってそこまで性欲の対象には……ならないよね？

「神格化されてしまうということですよ。天使とか呼ばれてるでしょう」

「たしかにヒロちゃんは天使だと思っマシタ」

乙葉ちゃんのほうが天使っぽいんだけど。ボク的には。

「超常の存在と交わることで、自らも人間を超える存在になりたいと願うのは、歴史的にはいくらでも例があります。私だって先輩が許してくれるのなら、いくらでも交わりたいです」

「交わりたいてってそんな……もっと強くなりたいの？」

「そうではなくてですね……」

そんなガツカリするような目で見なくてもいいじゃない。ボクだってそれくらいわかってるよ！ 命ちゃんが何を望んでるかくらいわかってる。

ただ、それを言うのは、はずかしいのっ！

「ヒロちゃんが女の子のことが好きなら……、わたし、ヒロちゃんのものになってもイイデス。ちよつとくらいエッチなこともしていいデスヨ」

「ま、マジですか」

乙葉ちゃんの真剣な瞳。

さりげない動作でベンチに座り、ボクの右手を両の手で包むようにしている。

鼻腔をくすぐるのは、甘ったるい女の子の匂い。

乙葉ちゃんのこと——ボクのものにしちゃっても、いいのかな？
なんて……。

「先輩！ そんなに簡単にホイホイされしないでください！」

ベンチの反対側にいる命ちゃんに、首をグキッとされた。

痛い。下手すると、ボクは永眠するところだった。

「あ、あの、そんなこと思うわけないじゃない。ふふ。ボク、お、女の子だし」

「そうですね。先輩はたまたま好きな子が私だけの人ですよ
ね」

「う、うん。まあそうかな」

「ちよっと待つデス」

グキ。

あう、今度は乙葉ちゃんだ。

「わたしのことはどうナンデスか？」

「すごく魅力的だと思います……はい」

「ヒロちゃんの使徒になるのが必要ナラ、何の問題もナイデス。その
覚悟はできてマース」

「乙葉ちゃんはもう少し自分を大切にしたらほうがいいんじゃないか
な」

「大丈夫デス。ゾンビになってもかまいマセン。ヒロちゃんなら、わ
たしを大事にしてくれそうだし……」

「ええっつ。ほ、ほんとにいいの。乙葉ちゃん」

「先輩っ」

グキっ。

命ちゃんだ。

「私はもう身も心も先輩に捧げてます。ぽっと出のアイドル風情にな
に誘惑されてるんですか。私との十数年来の思い出はどうなるん
ですか」

「わ、わかってるよ。ちよつと、言ってみただけだし。乙葉ちゃんは紛れも無い人間で、そんな簡単にヒイロウイルスに感染させたらダメだって、きちんとわかってるから」

「人間側が同意しているのにダメなんデスカ」

く、首が……。

ついに、命ちゃんと乙葉ちゃんの両方に持たれてる。

大岡裁きのように、ふたりして全力で振り向かせようと力をこめている。

ボクが普通の小学生だったらヤバかったな。ゾンビ小学生じゃないや万が一が起こっていたよ……。

ともかく、ふたりの気迫がすごい。

魂のぶつかりあいを感じる。

こんなにもクオリアを感じたことはなかった。

「ちよつと聞いてー！」

ボクはふたりから脱出するために立ち上がった。

「あ」「あ」

ふたりしてそんな寂しそうな顔しないでよ。

ボクが悪いことしてるみたいじゃないか。

「えつとね。そろそろ着替えようよ。ヒイロウイルスについてはボクが伝えられることは伝えるし。配信の後でもいいじゃない。乙葉ちゃんもそれでいいよね」

「もちろんデース」

「後輩ちゃんもそれでいい？」

「わかりました」

渋々ながら頷く命ちゃん。

ようやく落ち着いたみたい。

エキサイティングしたせいか、いろいろとベタついてしまった肌を見て、ボクは大きな溜息をつく。これはもう一度、汗を流したほうがよさげかな。

やれやれ、ボクはシャワーした。

まさか女の子のことが好きだとは思わなかった。

お父さんの書いた予言めいた本のとおりになりつつある。だったら、わたしの価値もあるということだ。

わたしがゾンビになれば、ヒロちゃんはわたしを認めてくれるかもしれない。わたしが認められれば、お父さんはきつと喜んでくれる。人をゾンビに変える素粒子。

そんなものがあるのかないのかはわからない。

けれど、後輩ちゃんが使徒であり、ヒロちゃんが主上であるというのなら、話の展開としては納得できる。

まさしく——先輩なわけだ。

ゾンビ的な意味での先輩。

ただ、ゾンビ的なのというのが、イメージ的には悪いかもしれないので、魔瑠魔瑠教的には『人を天使に変える聖霊』であるといえるだろう。

聖体拝領——、あるいは血脈相承。

どっちの言葉を使うのかな。

お父さんの宗教はぶっちゃけ西洋宗教のパクリな面も多いのだけれども、実際はお寺さんだった小さな宗教法人を買い叩いたことで引き継いでいる。

日本的な宗教を引継ぎ、西洋的に変容させたという感じなので、ちゃんぽんみたいになってる。

いい意味、和洋折衷。

悪い意味、カオス。

つまり、そういうこと。

まあ、わたし自身は宗教にはそこまで興味はない。お父さんが教祖をしているから、わたしも影ながら応援しているってだけ。実のところ芸能関係はそのあたりは結構、緩くてべつに新興宗教に属しているからって、特になにかをいわれたことはない。プロフィール上では書いても書かなくてもいいし、この国の憲法上は、『何を信じているかを

言わない』という自由も保障されている。

宗教法人がバックにあっても、それはお金儲けのためにしているんだらうなと思われる、ガチでやってるとは誰も思わないというのも背景にあるのだと思う。

お父さんは、わりとガチでやってる系ではあつたけど……。

まさか、ここにきて本当に予言どおりになるとは思わなかった。

それは驚きだ。

ヒロちゃんは本当に天使なのだろうか。

「乙葉ちゃん。どうかかなー?」

控え室のドアから、チラッと顔を出し、エヘ顔しながら入ってきたのは、わたしが所属していたアイドルグループの服を着こなしているヒロちゃんだった。

赤を基調とした服。そこらのアイドルを遥かに凌駕する魅力値。

アイドルとしての経験が教えてくれる。おそらく、ゾンビでなくても、天使でなくても、ヒロちゃんはトップアイドルになれるだけの逸材だろう。

「すごくカワイイデス!」

「えへ。ありがとう! 乙葉ちゃんもその服。卒業式とかの時に歌われる定番の曲のときのやつだよね」

「そうデース」

「ボクに合う服ってどうやって用意してくれたの?」

「アイドルは成長期なので、実をいうと予備のサイズがたくさんアルデス」

「へえ……えへ」

くるりくるりと回転しながら、自分に魔法がかかったみたいにはにかむヒロちゃん。わたしが男なら一発で籠絡されそうな恐ろしいほどの愛されざからを感じる。

とくん。と胸が高鳴った気がした。

わたしのことを好きだといってくれたヒロちゃん。

じんわりと、心が温かくなってくる。

誰かに直接的に欲しいと言われたことはなかった。

配信で何万人の人に見られて、何万人の人に褒められても、それは空虚な言葉だと思う。

なぜなら、その言葉は無限の距離があつて――。

あの暗闇の中に閉じこめられていたわたしには届かないから。

でも、手の届く範囲なら。

「ヒロちゃん。今日はよろしくお願いシマース」

「うん。よろしくね」

わたしは、自然と握手した。

握りしめた手のひらから、暖かさが伝わるような気がした。

ハザードレベル56

「ヒロ友のみんな。ハローワールド！ ついに現役アイドルの乙葉ちゃんとのコラボ配信が始まったよ。間近で見たら乙葉ちゃんすごくすごかわいよ。緊張する〜っ。えっと、みんな、今日は楽しんで見てください」

「楽しんでいってクダサーイ」「ヒロ友たちがお行儀よくしてることを期待します」

ついに――、

ボクの観客者数は大台の百万人を突破してしまった。

そして、今も増え続けている。

みるみるうちにカウンターが増え続ける。

全世界の残存人類50億（推定）を考えれば、もしかすると百万人というのはまだまだな数値なのかもしれないけれど、ネットにつながってない人もいるし、いまもボクという存在を認知できる人は限られる。

言うまでもないけれど、純粋にボクをボクとして見てくれる人、つまりゲームしたり、あれこれしたりしている様子をいっしょに楽しんでいる人は”少数派”になってしまった。

ほとんどは、きつとゾンビをどうにかしてほしいと願ってる人たち。

政府関係者。どこかの国のエライ人。科学者。宗教の人。エトセトラ。

つまりは、普通の人ということになる。

でも、それでもいいと思ってる。

もしかすると、ゾンビをどうにかできる目途が立てば――。

人間の文化を取り戻せるという希望が戻れば、ボクはたいして必要じゃなくなつて、またゲームしたり、歌を唄ったり、純粋に楽しんでくれる人だけが残るのかなと思うから。

今のところは、ヒロ友に貴賤なしだ。

そんなことを言ったら、命ちゃんには甘いつて言われそうだけど。

『ピンクは……ピンクはそこに来たかった!』『ヒロちゃんが国民的アイドルの衣装着てる!』『ヒーローちゃんそこ替われ』『乙葉ちゃんそこ替わって』『ふたりの間に挟まれたい』『後輩ちゃん好き派は少数だよ』『乙葉ちゃんもあいかわらず殺人的にかわいいな』『なんだよ。かわいいのバーゲンセールかよ。配信ってレベルじゃねーぞ』『ていうか、コメント流れるの早すぎる』『配信場所は特定できそうにないな』『どこかの放送局みたいなのかな』『佐賀班特定はよ』『音源にこだわってるなら放送局だが、ライブハウスとか?』『エノズっぽい。それともレジンかな。たぶん改装してるのかわからん』『掲示板で特定禁止って決めただろうが!』

『ピンクさんも来てくれたんだ。ありがとう。いつか誘うから待っててね。あとこの場所、特定できても来ないほうがいいよ。周りはゾンビで固めちゃった』

『ゾンビシールドかよ』『さすが天使様』『ヒロちゃんに集まってるオレらがむしろゾンビ?』『ゾンビにめちゃくちゃにされちゃう』『ゾンビに噛まれても行きたい人いるんじゃないか?』『みんな静まれ。おちついて配信に耳を傾けるのじゃ』『ピンクは誘われた。勝利した。勝利した! よっしやああああああ』『ピンクがうるさい』『日本語うまくなったよな。ピンク』『毒ピンのくせに生意気な』『ピンクは所詮、アイドルに負けたヒロ友の敗北者じゃけえ』『ハアハア……敗北者?』

取り消せよ……今の言葉!』『ピンクのなじみ方がエグイ』

実をいうと、このコラボ配信に来たがった人は多い。

ピンクさんだけでなく、ツブヤイター社のエライ人。ユーチューブのエライ人。システム貸してるんだから、招待してほしいという子どもっぽい理論を語る大人な人たち。あとは海外の大物アーティストが乙葉ちゃんよりもへたくそな日本語でビデオレターを送ってきたり。ボクの好きな漫画を描いてる先生からサインとともに会いたいというメールが届いたり。他にもいろんな国の大統領やら大臣やら、大企業の社長さんやら、実際に行くから会いたいと言ってくれた人は多い。

もちろん、友好的な意味で。

ボクを確保するとか、独り占めするとか言い出したら、みんなに全力で潰されそうな勢いだった。実際、どこかの小さな環境保護団体がボクを狩るとか言い出して、三日もしないうちに物理的にすりつぶされてしまったみたい。空気を読む能力って生存に必須だよねって思っています。合掌。

ボクに友好的で、かつエライ人たちには今回ご遠慮いただいた。

ボクには配信を純粹に楽しみたいって気持ちも残ってて、だから、対ゾンビ能力としてボクに期待している人たちには、こぼれ球みたいな情報で満足してもらおうって思ったんだ。

「実をいうと、わたしのほうにもたくさんの方々熱烈なファンレター届いたデス」

「へえそうなんだ」

乙葉ちゃん側はいつてみれば、人類代表みたいになってるわけで、そういった意味では、こうしろあしろっていう熱いメールが届いている可能性はあるな。まあ乙葉ちゃん側は、ここに十人くらいの人がいるのを見ても、仲間がたくさんいるから、そういった処理も物量的に問題ないのかもしれない。

「みんなヒロちゃんのことを大好きナンデスネ」

「そうかな。えへへ。みんなありがとう」

『守りたい。この笑顔』『このごろ表情が柔らかくなったな』『女の子してるなと思うぜ』『ゾンビ配信しようぜ』『プラグ因子で人類滅ぼして笑ってた頃を思い出す』『おいやめろ』『実際、この配信で何が変わるんだろうな』『乙葉ちゃんに期待するしかない』『っーか、今から何やるんだ?』

「みんなには何をするのか言っただけ、まずは――」

引き継ぐように乙葉ちゃんに視線を合わせる。

「そうデス。まずはインタビュ―、ウイズ、エンジェルちゃんデスネ」

『インタビュ―ウイズエンジェルちゃん?』『いい語路が思い浮かばなかったんだろう』『ていうか、インタビュ―ウイズゾンビちゃんなんじゃ……』『ヒロちゃんはゾンビじゃねえって言ってるだろ』『これだ

から童貞は』『は？』『ヒロちゃんがゾンビでも愛するのは可能』『どつちかというと天使のほうがいい』『インタビューって、ヒロちゃんはOKしたのかな』『OKしなけりや答えないだろ』

「みんなが知りたいことがよくわからなくて、対面だともっとうまく伝わるかなと思ってOKしました。乙葉ちゃんよろしくお願いします。後輩ちゃんもフォローよろしくね」

「ハイ」「わかりました」

座り方の並びとしては、乙葉ちゃん、ボク、命ちゃんというふうになつている。シャワールームでの大岡裁きを思い出させる配置なので、少しだけ緊張するけど、どっちもボクの好きな子なんで、そういう意味では悪い気はしない。ボクも元男として両手に花なのは、やっぱりうれしいから。

「サテサテ何からお聞きシマシヨウ……。まずは、ヒロちゃんの正体はナンナノでしょうか。私自身は天使サマだと思ってるのデスガ、地上は楽しいデスカ？ 人間は生きていていいですか？」

『うおおおお。いきなり核心ついた質問』『は？ 天使だろ。なに言ってるんだ』『ただの小学生のかわいい女の子』『ヒロちゃんはヒロちゃんだろ(きよとん)』『ゾンビでもかわいいけりやオーケー』『ゾンビにはみえねーよな実際』『超能力少女だという自己申告をみんな忘れてるぞ！』

「天使とかそんな御大層なものじゃないのは確かなんだけど、人間はもちろん生きていていいに決まってるよ。ボクは……。うーん、ボクってなんなんだろう」

「自分でもよくわからないデスカ？」

「みんなも薄々感づいていると思うんだけど、ボクは彗星が降り注いだ日に、こんなふうになっちゃったわけで」

ボクは自分が持っている小さなマイクをフワフワと浮かせた。もういまさらこの程度ではみんな驚かないだろうけど、乙葉ちゃんと自衛隊の人たちはビックリしている。

「目の前で見るとすごいデス」

よいしょ。

マイクを空中キャッチ。

アイドルっぽいなど、少しだけ気持ちいい。

「ありがとう。で、あの日にゾンビがたくさん生まれたことはみんな知ってるよね。だから、ボク自身もボクがゾンビなんじゃないかって、そんなふう考えていたんだ。でも、ゾンビってそもそもなんだろう」

「ゾンビはうすのーろで、人間を襲うデス。で、噛まれたらゾンビの仲間入りするデス。知能はあまりありません。一説によると、昆虫並の知能だと言われてマース。ロボットみたいに人間だった頃の習性を引き継ぐところが、昆虫っぽいのだと思ひマース」

こ、昆虫並みの知能ですか。

「ま、まあ、ボクはそこまで頭悪くないと自負してますけどね」

「ん？ あ、はい。そうデスね。ヒロちゃんはすごく頭のいい小学生デース」

小学生レベルと言われてるみたいで、チクチク心が痛いけど、それは置いておこう。

「じゃあ、ゾンビって生きているのかな。死んでるのかな？」

「ヒロちゃんによって治せる可能性があるなら、病人になるのだと思ひマース。あるいは死んでるのだとしたら、死者蘇生していることになるから、ヒロちゃんは神様デース」

「だから神様とか、そんなんじゃないよ。ゾンビになった人も生きてるか死んでるか曖昧な状態なんだと思う。ゾンビウイルスに感染したら、呼吸もしていないし、心臓止まってるし、瞳孔も散大してるし、死んでるよね」

「死んだら、みんなゾンビの仲間入りデース。それは客観的事実デース」

「でも、ボクがゾンビウイルスを除去したら、生き返るんだ。だから、ゾンビは生死が重ねあわされてる存在なんだと思う」

「単純に死体をヒロちゃんが復活させてると思わないのデスカ？」

「心臓をパーンしてたり、頭がぶつとばされてるのを生き返すのは無理だから、復活ではなくて、ゾンビウイルスを除去しているだけか

なあって」

「どうやって、除去しているのですか？」

「感覚的には、ゾンビウイルスに向かって自壊しろって命令してる感じかな」

「つまり、悪魔を追い出している天使様？」

「うーん」

そういうことではないと思うのだけど、うまく伝わらない。

ボクが悩んでいると――。

「あなたは誰ですか？」

と、命ちゃんが質問した。ボクではなく、視線は乙葉ちゃんに向いている。

乙葉ちゃんはマイクを握りしめて答える。

「わたしは嬉野乙葉デス」

「そういうことです」

それで命ちゃんは黙ってしまった。

乙葉ちゃんも二の句が継げずに同じく沈黙。

ボクも微妙な空気にどう答えたものかわからない。

突然生じた沈黙の空間に、ボクは内心焦りまくる。

謎の禅問答とか、インタビュっぽくはないし、配信にも適さないと
思うんだけど。

『どういうことだってばよ』『後輩ちゃんが若干怒ってるぽい？』『乙葉ちゃんばかり大好きな先輩にベタベタして嫉妬したんじゃ？』『哲学的な問いだからな』『おまえは誰だって乙葉ちゃんと言った』『ボクはボクだよって答えるしかないってことだろ』『はー、ヒロちゃんかわええ（聞いてない）』『ピンクはマイシスターだ。そう呼んでいいと言ってくれた』『は？』『ヒロちゃんはヒロちゃんだよ』『ぼっちもそう思います』

そうか。超速で流れるコメントを拾っていると、なんとなく理解でき
たよ。

乙葉ちゃんの質問は、どこまでも細かく質問できるし、どこまでも
追及できるようなものだった。

ボクはわりとなんでもオープンにしていいたいと思ってるけど、それは、相手方にとっては知りたい答えをきくまで再チャレンジができるってことだ。

あまりしつこいと心証を悪くするだろうけど、少しずつ質問をズラしていけば問題ない。

つまり、誘導だった。

乙葉ちゃんってボクを天使にしたいのかな？

天使のイメーজは一般的に悪くないから、ボクのことを嫌ってないのはわかるんだけど。

「乙葉ちゃん。質問に答えるね。ボクはボクだよ。そして、ボクはたぶん人間だと思う」

「わかりマシタ」

それから他愛のない質問が続いた。

——配信をはじめたきっかけはなんデスカ——

(ゾンビライフで暇だったからとか言えない)

——配信をはじめたばかりの心境はどうデシタ？

(まだ一ヶ月くらいしか経ってないけど、前は緊張してたかな)

——好きな食べ物は何デスカ以外に何かありマスカ——

(わりと甘党になっている)

「甘党だと太りマース。気をつけないといけませーん」

「うん。まあそうだけど、ボクって体重30キロだし。わりと軽めだと思っただけ」

「体重計に乗ってる配信みました。恐ろしくてわたしにはできませーん」

「え、乙葉ちゃんすごくほっさいよ」

どこからどう見ても太っているようには見えない。

「日頃の努力デース。女の子にとって体重の話題は禁句デース。後輩ちゃんもそうなはずデース」

「そうなの？」

命ちゃんのほうを見ると、フルフルと頭を横に振って否定。

「先輩になら、恥ずかしいとこいくら見られてもかまいません。先輩がそうしろというのなら、わたしは全世界に自分の体重を申告してもかまいません」

死にそうな顔で、歯をくいしばり、口を開きかける命ちゃん。

「あー、待って待って。言わなくていいから」

「そうですか」

命ちゃんはやっぱりほっとしてるみたいだった。

そういえば、あの体重配信って、そもそもは命ちゃんの奸計だったんじゃないか。つけたつけ。

命ちゃん恐ろしい子。

自分がされて嫌なことはしないように言っただけ聞かせねば……。お兄ちゃんとして当然のこと。

「体重については、ヒロちゃんの身長からするとちよつと軽すぎだとおもいマス。だから、今は甘いものをいっぱい食べてもいいかもしれません」

「うん。いっぱい食べさせてくれる人がいるから大丈夫」

「でも——、もしかすると?」

じーっと乙葉ちゃんに見つめられている。

アイドルの目力ってすごいな。観察されているような、そんな感覚。

「どうしたの乙葉ちゃん」

「ヒロちゃんは超能力をつかって自分を浮かせてたという線も考えられマス」

「うーん」

あの頃はまだそこまで重力制御はできてなかったように思う。

もちろん、無意識に力を使っただけというところは考えられるけど、心の底から、体重とかに興味なかったから、たぶんそんなことはないだろう。

「超能力使ってないよ」

「本当デスカ?」

「本当だよ?」

『小学生の体重に興味がある乙葉ちゃん』『あの頃はバーチャルだっただろうが』『こんなかでバーチャルヒロちゃんに興味ある人いますか？』『オレ、バーチャル派』『生ヒロちゃんがいいに決まってるだろ』『お、戦争か？』『どっちでもいい派は少数ですかね？』『見た目かわいければたとえ体重1トンでも問題ないよ』

「じゃあ、調べマース」

「え？」

乙葉ちゃんが急に立ち上がり——、体重計でも持つてくるのかなと思つてたら、ボクの背後に回った。

そのまま、脇に手を通して持ち上げられちゃった。咄嗟に命ちゃんに視線をやると、こちらをにらんできている。完全にお怒りのご様子で、あとでご機嫌をとらなくちゃ、いろいろとヤバそう。

「お、軽……くはないですね」

そりやそうだよ。いくら軽いといっても、ボクは30キロある。

肉体年齢的には年上でも、乙葉ちゃんはまだ15歳の女の子。

ボクを抱えられるほどの筋力はない。

「お、乙葉ちゃん。重いでしょ。えいっ」

ボクは超能力を使って自身の体重を軽くした。

「フフ。軽くなりマシタ。すっぽり腕の中に収まるサイズ。たまりません」

「あわわわわわわ」

ボク、お姫様抱っこされ中。

乙葉ちゃんみたいなアイドルに、そんなことをされるなんて夢にも思わなかった。

細い腕が背中にまわされていて、側面にちよつと柔らかいものがあったって。

顔が近い。

ぽわーんってしてくる。

乙葉ちゃんの瞳もうるうるしている。

「視聴者の皆さんのために実況しマスが……、ヒロちゃん、とてもいい匂いデス」

仕様だ。

力を隠す必要はないし、むしろ隠さないほうがボクに手出しをしにくいと思わせることができてるお得だ。

車をぶっ飛ばせるパワーを持つボクにとって、簡易的な握力計なんかで測りきれはるはずもない。

もしもテレビスタジオだったら、いろいろと用意していたんだろうけど、ポータブルなやつじゃ限界があるよね。

あっさり針は振りきれて、そのまま握ってるところをぐにやりをへし曲げた。

「人間超えてマスネ」

「まあ、パワーだけはあるよ」

——ヒーローという名前に由来はありマスか——

(元の名前がバレる。英雄にあこがれてと答えた)

——好きなヒーローはいるのデスか——

(特にないけど、無いと答えたら矛盾してるから、適当に仮面ライダーの名前を答えた)

「プリキュアが好きなんだと思ってマシタ」

それだと、ヒーローじゃなくてヒロインかなあと思ったりもするけど、日本語的な意味のヒーローは性別はあまり関係ないかもしれない。

名前を文字っただけのヒーローちゃんだけど、少しはボク以外の人間のことも考えていたと思う。

世の為人の為ってやつ。偽善っぽいけど、それでもいいかなって。

——これから世の中にどのようなアピールをしていきたいデスか？——

自分ができてることをしていきたくって答えた。

まぎれもない本心だ。

ハザードレベル57

軽いインタビューが終わって、ゾンビを操れる謎の美少女としての役割はいったんは終了。いまは休憩室にこもっている。

乙葉ちゃんはお父さんに報告ということで離席し、ここにいるのは命ちゃんと飯田さんだ。お化粧台に座って身体を休めている。本来だったらお化粧なおしとかするんだろうけど、ボクも命ちゃんもお化粧しない派だから、ただ水分補給して身体を休めるくらいだった。

一番は気疲れかな。

やっぱり百万人が見ていると思うと、緊張感が半端ない。

精神的に疲れちゃう。思わず周辺のゾンビも騒がしくなっちゃうほど。

飯田さんなんかハアハア息をしてつらそうだ。たちっぱなしだったからね。

配信は、三十分後に再開の予定。

もちろん、まだまだ聞きたいことはあるだろうけど、いまさら焦ってもしょうがないんじゃないかな。

結局、人間側の聞きたいことは、ゾンビをどうにかできるかということ、人間がそのためにどう動けばいいかを探ることだと思う。

要するに、人間側が勝利するためにはどうすればいいかという問い。

人間がこの先生きのこるためにはどうするかという方法論だ。

正直、ボクにもよくわからないよ。どうすれば一番いいのかわからない。

文明は——どうなんだろう。

時間切れはどのくらいで起こるんだろう。

一ヶ月ほど経過して、正直なところ文明は“壊死”しつつある。

ゾンビで殺される恐怖が、人間同士のいさかいを生んだり、ゾンビにかまれて殺されたり、そういうのも文明に直接的なダメージを与えたのはまちがいない。

でも、そんなことより、ゾンビから隠れるためにお金や人や物の流

れが止まっているのがヤバイ。

佐賀と福岡をつなぐ国道はことごとく大量の車で塞がってしまったし、行く先々ではゾンビシールドで覆われている。

いくら自衛隊とかががんばったところで、原子力エネルギーの素であるウランは外国から入ってくるとは思えない。

ボクはそこまで超広範囲にわたってゾンビを操ることはできないから。

つまり、きつといつか電気が止まる。ネットが停まる。

ボクの歌声で多少のゾンビ避けができて、根本的なところでの限界値がある。

食糧についても、同じく厳しい状況じゃないかな。

人間はゾンビと違って食べないと生きていけない。

日本の食糧自給率は、そもそもものところたいしたことないし、文明力が落ちている状況では当然さらに落ちこんでいるに違いない。

例えばのんびり農家でもやろうと思つて、トラクターとか動かしたら、ゾンビがわらわら寄ってくるから農業どころではないつて話。あるいはトラクターを動かすための燃料が手に入らなくなってくる。

であるとする、一割から三割くらいの間がゾンビになったとして、残りの人間にいきわたるだけのパイがないんじゃないかな。食べ物物の総量が絶対的に足りなくなつてくるんじゃないかな。缶詰とかレーションとか、そういう保存食糧を食べつくしたら、少ない物資をめぐつて争いが起こる。

行き着く先は餓死か、戦争か、ゾンビにかまれておしまい。

その前に文明が壊死する。

歌を聞けるような状況じゃなくなる。

ボクや命ちゃんのようなヒイロゾンビは、なんか謎パワーによつてそこまで食べなくても大丈夫なんだけど、それでも人間的習慣が残存しているから、まったく何も食べないでいるのは辛い。

歌を聞けなくなったたり、人間の文明を享受できないのも辛い。

歌、聞けないの嫌だなあ。

配信できないの嫌だなあ。

人間側からしたらめちやくちや緊迫感ないだろうけど、ボクの本心はそこにある。そのためだったら多少危険でも、人間に文明を取り戻したい。

「ねえ。命ちゃん。電気とネットってまだ持つのかな」

「わかりません。九州内の電気はおそらく佐賀に集中するぐらいのこととはしているかもしれませんね。けど、根本的なところで、原子力や火力発電には燃料がいるわけですから、外国からの輸入に頼ってる以上、限界はあります」

「自衛隊とかが、ボクの歌を使つて……」

「無理ですね。タンカーがそもそも来ません」

「じゃあ、いずれは？」

「いずれは配信できなくなります。それがいつのことはわかりませんが、もうまもなくでしょうね」

「ずっと続ける方法はないの？」

「太陽光発電や水力、風力発電なら永続性が見こめます。しかし、ヒロ友のほとんどは接続ができなくなるでしょう」

「そうなんだ……」

せつかく、ボクの配信を見てくれてるのに、物理的に遮断されちゃどうしようもない。

寂しいなって思った。

「緋色ちゃん。気落ちすることはないよ。きつといままでやってきたことは無駄にはならないさ」

飯田さんが優しい声をかけてくれた。

フルフェイスにジャンパー姿の飯田さんは、おそらく汗ダラダラで、水分がなければ干からびてしまうだろう。

「ありがとう。はいおじさん。お水」

ペットボトルの水に、ストローを突き刺して渡した。

フルフェイスの前面を開けて、猛烈な勢いで吸いこむ飯田さん。

蒸し焼き状態だったんだね。

「ありがとう。緋色ちゃん」

「おじさん。ずっと立ちっぱなしで辛くない？ 座って見てもいい

よ」

そもそも、自衛隊な服を着ている人たちも、最初は飯田さんの姿にビビッてたみたいだけど、配信が始まったら、みんな喰らいつくみたいにボクのほうばかり見てたしね。

実は隠れヒロ友なのって思ったくらいだ。

あるいはロリコンだったりしないよね。

「わたしとしては、緋色ちゃんを守るためにここに来たからね。今日は配信が終わるまで油断しないつもりでいるよ」

「うん」

わずか十名程度とはいえ、みんながみんな同じ考えを持つてるとは限らないからね。あの中にボクを狩ってしまおうという人がいないとも限らない。

ボクの情報がないうちにそんなことをしても無意味かどうかかわからないから、普通の人だったらそんなことはしないとも思えるけど、気まぐれなのが人間だし、すべての来歴を見れるわけでもないから——そこは油断しちやいけないんだと思う。

——アイドルホイホイされてる時点で説得力ないかもしれないけど。

★
||

「お父さん。疲れました」

お父さんに対してはわりと素直なわたしです。

階段の隅っこ。スマホ。誰もいない。

鬱になるなら今のうち。鬱になるなら今のうち。

はあ……鬱になると落ち着く。

わたしって躁鬱病の気があるような気がする。

『お、おい。乙葉。大丈夫か？ しっかりしろ』

お父さんが慌てた様子で応答してくれるけど、焦った声を聞くのもすごく落ち着く。

そもそもの話。

わたしの本質はダウンナー系。

光属性じゃないのは、わかりきってる。どっちかという闇属性でも闇というほどかっこよくもないから影属性かな。日陰者だ。パツキンの美少女してるけど、こんな目立つ色嫌だ。

はあ……消えたい。

100万人もの前で配信する経験はさすがになかった。もりもり増えて、いまではたぶん200万人。

数でどうこうというわけではないけれど、全人類が天使な少女からなんらかの譲歩を引き出そうとしている。

その人類代表としてわたしが立っている。

15歳のただのアイドルが、大統領よりすごい立場に立ってしまったている。

ゲロ吐きそう。

失敗したら、全人類の敵。裏切り者。いらぬ子扱い。

お父さんにも嫌われちゃう。

「荷が重いです」

『そんなことはない。乙葉は立派にやれている!』

「わたし、やらかしてないですか?」

『問題ない。あの天使様をお姫様抱っこするアドリブは素晴らしかった。まるで宗教的絵画が顕現したかのようだった! ああ……:歓喜。歓喜。歓喜っ! またヒロちゃん様コレクションが増えたのだ。こんなに嬉しいことはないっ!』

「よかったですね。お父さん……」

確かに、ヒロちゃんの近くだと、少しだけ自分らしく振舞えるような気がする。ヒロちゃんもおそらく本質的にはわたしと同じく陰キヤダと思うからだ。小学生だけど、どこかしら人間を信じきれない部分がある。

信じたい——というまっすぐな光のような視線も感じるけど。

たぶん、不思議な力を持っているがゆえに、人間から隠れて生きてきたのかもしれない。あの彗星が降り注いだ審判の日に、ヒロちゃんは自分の力が覚醒したと言っていたけれど、人間であるという自己申

告が正しいとすれば——、ひとりの普通の女の子だとすれば、生きるために闇を抱えて生きてきたとしてもおかしくはない。

例えば、どこかの超能力研究所で虐待まがいの研究に従事させられてきたとか。

そんな可能性もくはない。

ヒロちゃんは、私達人間と同じく、ある程度の嘘をつけるのだ。

『ともかく——、我々の住む教会までいらしていただくのだ。そのほかは些事。ゾンビなどあとでどうとでもなる』

「後輩ちゃんがいるので、なかなか説得する機会もありません。銃を持つている男の人もいますし……」

『うむ……使徒である後輩ちゃん様のご不興も買うべきではないな。しかし、ヒロちゃん様にとって、我々が有益であることを訴えるしかない。預言もそう言ってる』

「それってお父さんが書いた本ですよね」

『ああそうだ。預言には、我々の訴えが認められ、ヒロちゃん様はお傍に仕えることをお赦しになるのだ。乙葉よ。すべてはおまえの働きにかかっている！』

ゲロ吐きそう。

お父さんの期待が重過ぎる。

「ゾンビ避けできるヒロちゃんに差し上げられるものは何もないと思うのですが。食糧だってその気になればどこから調達するのは可能でしょうし……、むしろ人間なんか滅びたほうがヒロちゃんにとっては有用なのでは？」

『なにを言ってる乙葉。ヒロちゃん様はおまえのことが相当お気に召したようじゃないか。気づかなかったのか？』

「え？」

それは——、確かにそうかもしれない。

でも、それは天使の気まぐれのようなもので、一時の奇跡で、すぐに失われる可能性があるもの。

それでも、嬉しかった。

かわいいと言ってもらえて、いつしよに配信できて嬉しいと言って

もらえて、こころの中が暖かくなったのは確かだ。

『ヒロちゃん様はお気に召した者を使徒とされる。おまえは今、使徒候補ぐらいにはなっているだろうな』

「そう、なんででしょうか……」

『うむ。まちがいない。預言書にはそう書いてある』

「お父さんが書いたものですよね……」

『そうだが？』

お父さんがワナビ時代に書いた預言書。ワナビとは、小説家になりたくてもなれないそんな素人のことを言う。

お父さんはワナビだった。小説家になりたくてもなれない人だった。

書いた小説は、ありきたりな救世小説。

今の状況に非常に近似しているけれど、偶然じゃないだろうか。

そんなことを言ったらお父さんに嫌われるから言わないけれど、わたしがヒロちゃんに嫌われて、目的を達成できなくてもお父さんは絶望しそうだ。

きつと、自分が書いた預言書を心の底から信じているのだろうか――

実際にゾンビはうごめいているのだから。

☆
☆

「さて、二時間目が始まりました。みんなバテてない？ 大丈夫？」

『大丈夫だ。問題ない』『一番いい配信を頼む』『ヒロちゃん成分を吸ってむしろ元気になりました』『ヒロちゃんウィキが充実した一時間だった』『三十分で編集し終わってるのな』『厚労省のページも更新されました』『マ？』『マ』『ママ？』『なぜかヒロちゃんの好きなものが書かれてる件』『パンケーキ』『アイドル』『仮面ライダー』『ごちゃ混ぜだな』『ていうか男の子っぽい感じ？』『厚労省もマメだな』『ゾンビ対策は更新されていないわけだが』

「あいかわらず元気でよかった。じゃあ、二時間目なんだけど、そろそ

ろみんなと楽しむために……」

ざわつくコメント欄。

最近はほとんどやってこなかったからね。

「ゲーム配信をするよ」

『キター！』『ゾンビ避けよりも大事なこと』『それがゲーム』『世界が滅んでもゲームやめられないよな』『できればもっとゾンビについて語ってほしいのだが』『黙れ政府関係者』『ゾンビよりもゲームが大事』『にわかがいるな』『ピンクとしては、政府関係者には黙ってるって言いたい』『ピンク偉いぞ』『毒ピンもたまにはいいこと言うな』『本音は？』『ピンクもヒロちゃんと遊びたい』『おい……』『わかる』『わかりみが深い』『それな』

「うん。いいよ。みんなで遊ぼうね。今回するゲームは——、『ゾンビ』。もともとバトロワ系のさきがけとなったゲームで、その後スタンドアロン化されたんだけど、ピュビジやらが人気になってオンラインで帰ってきたゲームなんだ」

どんなゲームかといえば、簡単に言えば、ゾンビという動く障害物があるバトロワなんだけどね。孤島で100人でバトロワといえば、だいたいの人がイメージできるんじゃないかな。

でもこのゲームの特徴的なところは、やっぱりゾンビだ。

ゾンビは銃に寄ってくる。でもプレイヤーキャラは銃じゃないと倒せない。

ゾンビも倒さないと危ない。でもプレイヤーに居場所がバレちゃうし、弾も尽きる可能性がでてくる。

その絶妙な塩梅がこのゲームを面白くしてる。

四人までのチームプレイも可能で、今回は命ちゃんと乙葉ちゃんの3人チームを作る予定だ。本当はあとひとり誰か入れたほうがチーム力はあがるんだけど、これだけ視聴者さんがいるとなかなかひとりは決められないかも。

『やっぱりゾンビゲーが好きなのね』『このゲームもゾンビゲーか』『ちよつと待て、これって百人が参加できるゲームだよね』『参加したい』『百万人中の百人か。余裕だな』『ヒロちゃんとゲームできるチャ

ンス』『ピンクもヒロちゃんのチームになりたい』『私もヒロちゃんのチームになりたいんだ』『うお……幼女先輩じゃないか。生きていたのか』『最近復職していてね。忙しかったんだよ』

幼女先輩、またきてくれたんだ。うれしいな。最初の頃に、FPS系のゲームをやったときに助けてくれた偉大なる配信の先輩。

無駄のない動きで、ゾンビをバタバタとなぎ倒していく技量は、まぎれもなくゲームのプロだった。

人間離れた動体視力でエイム力を高めたボクよりも、よっぽどゲームに精通している。もちろん、味方になってくれれば心強いことこの上ない。

ピンクさんのほうは、アメリカと日本の共同事業的な何かの研究者。政府組織に片足つつこんでいる特務機関みたいな感じらしい。めちやくちや頭がよくて、いろんな戦略を考えてくれると思う。きつと心強いアドバイザーになってくれるはず。

ボクが直接DMして呼べば、どちらかは選べるけど、どうしよう。あまり迷ってる暇もなく、ボクは一瞬だけ躊躇する。

前にホームセンターで恵美ちゃんのもとに駆けつけるか、命ちゃんのもとに駆けつけるか迷ったことがある。迷った結果のあの出来事。凄惨な結果に終わってしまったあの時のことを思い出してしまった。

でも、あの時みたいに深刻なことじゃないんだ。ゲームだもん。気楽にいこう。

「えつと……、じゃあ、ピンクさんにチームになってもらおうかな」「やった。やった！　ピンクは勝った！　うれしくて泣きそう』『よかったなピンク』『ピンクの日頃の努力が報われたのか』『幼女先輩の敗北』『はは。嫌われてしまいましたか』

「幼女先輩を嫌ったわけじゃないからね。ボク、幼女先輩と戦ってみたいんだ」

『ほう……プログラマーに対してイキるか』『マイシスターはやくはやく』『ピンクが嬉しさにぴよんぴよん跳ねてる感じがほほえましい』『三十代のおっさんだぞ』『外国人は感情がダイレクトだよなあ』『なる

ほど。ヒロちゃんは私と戦ってみたいですか。腕がなりますね』『幼女先輩はいつもソロ勝ちしてるだろ』『四人チームプレイでソロ勝ちって……』『幼女先輩が本気になったくらいヒロちゃんでも厳しくない?』『これは観戦だけでも楽しみ。ゾンビ感染だけに』『審議不要』『ヒロちゃん負けないで!』

もちろん負けるつもりなんてない。

ボクも楽しみだ。

幼女先輩が弾き飛ばされちゃう可能性もあるけど、百万人が一斉にゲームに接続するわけじゃないと思う。単純に配信を見ているだけの人もいるだろうし、ゲームをプレイしながら配信も見るというのは、なかなか至難の技だ。

それといざとなったら、ボクがみんなに声かけして、幼女先輩が接続するまで、ちよつと待ってって言うてみようと思う。それでどれだけの人が待ってくれるかはわからないけど、やらないよりはマシかな。

そんなわけで、最初は普通に接続――。

☆Ⅱ

ぶわん、ぱつ。

真っ白いパラシュートが膨らんだ音。

わわっ。みんなよりかなり早く開いちゃった。

なんというミス。

素敵すぎる遊覧浮遊。パラシュート開いた状態だとどんなにがんばっても、落下スピードはあがらない。

「先輩。このゲーム。パラシュートは自動で開かれるみたいですよ」

「え。ほんと? どうしよう」

「流れに身を任せるしかありません」

『ピンクはヒロちゃんにくっついてる』

みんな、ボクがパラシュートを開くと同時に、ほぼ同じタイミングで開いてくれた。でもこれって、地面に落ちるのが遅くなってアイテ

ムをとれなくなっちゃわらないかな。

「ごめんみんな。いきなりハンデになっちゃった」

『やっぱり……ヒロちゃんを……ポンコツ……最高やな』『ポンコツじゃないよ。ただのかわいい小学生だよ』『ピンクが羨ましい。ピンクになりたい』『オマエはせいぜいドドメ色だよ』『わりと僻地だし、武器もないが敵も少ないぞ。悪くない選択じゃね?』『そもそも超絶姫プレイになりやせんか』

地面に尽くまでにコメントを眺めていると、なんだか気になる言葉が目についた。

——超絶姫プレイ。

つまり、みんな一丸となつて、ボクがトップになるために尽くしてくれるという接待プレイだ。

そんなの楽しくない。

「ボクとしてはみんなちゃんとバトロワしてくれるほうが楽しいかな」

「先輩がどうこう言つても、インセンティブないと始まりませんよ」

「えー、じゃあ、ボクを倒した人は、なんでも好きな言葉を言わせることができるっていうのはどうかな?」

『ざわ……』『ざわざわ……』『オレ、ヒロちゃんにお兄ちゃんおつきしてつて』『あ、相棒が突然ヘッドシヨ喰らつて、相棒。相棒っ!』『おいおい死んだわ。あいつ』『ヒロちゃんに好きな言葉を言ってもらうのもいいが幼女先輩を打倒したくもあるな』『キルレシオがえぐえぐな幼女先輩。今日も独りで殺しまくりなんだろうなあ……』

幼女先輩。参加できたみたいだね。

やっぱりソロで倒しまくりなのかな。

すごいなあ。

と、横を見ると、乙葉ちゃんが真面目な顔でこちらを覗いていた。画面の中のアバターではなくて、リアルなボクをまじまじと見ている。

「ん。いまなんでもスルってイイマシタヨネ?」

「お、乙葉ちゃん、笑顔がなんだか怖いんだけど」

ついでに言えば、

ゲームの中の乙葉ちゃんが飛びながら、こすりつけるようにボクに重なってくるんだけど。

この人、地面に降り立った瞬間を狙ってませんかね。

対するピンクさんが乙葉ちゃんを押しやる。さながら姫を守る騎士のような動き。うーん。ピンクさんも普通にゲームうまいな。

『なんでもするじゃない。なんでも言うだ。アイドル』

「む。ピンクさんに叱られマシタ」

「同じチームの人は無効です！」

ボクは声を張り上げる。

もう少しで地面に落ちる。その前に言っておかないと、命ちゃんや乙葉ちゃんに瞬殺されそうだ。

まだ武器も拾ってないのにフレンドリイファイアで殺されるなんて嫌だよ。

「先輩がチキンでガツカリです」

「まったくデース。同じチームとしてやる気が失せマース」

『ピンクは……ピンクも……なにかご褒美』

「じゃあ、トップチームになったら、ボクができることならなんでもするよ」

『ん。いまなんでもするって』

「今度はピンクが天井してマース」

「先輩。本気ですか？」

命ちゃんが驚いている。

そんなにおかしなこと言ったかな。

「先輩の一日モルモット券を要求されたらそれに応えるつもりですか？」

「モルモットはさすがにいやかな。でも、みんなとなら一日中いっしょにいるぐらいならいいよ」

「その言葉に二言はないですね」

「ないよ」

命ちゃんの瞳がキラリンと光ったような気がした。

「わたしのいる場所に招待してもいいデス？」

「もちろん」

『ピンクもマイシスターに会いにいつでもいいか』
「いいよ」

乙葉ちゃんも。画面の向こうにいるからわからないけどピンクさんも。

みんなの気迫というのかな。気配が変わった。

だらけた雰囲気から、一瞬で歴戦の勇者になった。

——ような気がする。

ただ、みんなと会うぐらいならいつでもいいけどね。

もう知らない仲じゃないんだし。モルモットだけは勘弁だけど。

地面に降り立ったあと、ボクは状況確認をおこなうために、キーボードをカチカチしていた。マルチプレイは正直なところ苦手で、ボクはあまりやったことはない。このゲームもそれほど精通しているわけじゃないんだ。

一応、がんばって一週間くらいは練習したけど。

そんなわけで、ひとり悪戦苦闘していると、いつのまにやらぼつんと独りになっていた。みんな地面に降り立つまではすぐ近くにいたのに、さっそくどこかにアイテム収集しにいったのかな。

ちらりとリアルで横を見ると、命ちゃんからはちよつと待つてくださいとのこと。

ボク何もしないでもいいの？

そして気づくと、ボクの前に銃とか、バックパックとか、ヘルメットレベル3、防弾チョッキレベル3、最強と名高いアサルトライフル。赤ブルに包帯などなど。やたらめったら装備が置かれていた。みんなもそれなりの装備にはなってるけど、ピンクさんとかクロスボウしかないんだけど。

どう考えても、最弱のボクに最強のアイテムが集められているんだけど。

あれ？

これって姫プなんじゃ。

『姫。私も貢ぎとうござる』『ハーレム状態なわけで』『でもヒロちゃんも女の子だからハーレムじゃないだろ』『じゃあ、逆ハーか?』『百合ハーじゃね?』『姫プしてーなオレもなあ』『つーか、ヒロちゃんズのほのぼのプレイの横で、幼女先輩が独りで既に十人くらいキルしてて草』『やばすぎるだろ。あの人』『さすがプロゲーマー』

独りで10キル!? 開始から十分も経ってないよ。

やっぱり幼女先輩は別格の強さだ。

いまのガチガチの装備でも勝てるかはわからない。そもそも動体視力ぐらいいしリアルでの有利な要素はないし、幼女先輩のほうが経験値は高いんだし。

最強の敵、幼女先輩を倒すにはこれぐらいの装備じゃないとね。ボクは用意してもらった装備をいそいそと着込み、用意してもらった四駆に乗りこむ。

途中でようやくでてきたゾンビたちをひき殺し、ピンクさんは無言でクロスボウでヘッドショットする。無音で殺しまくるのうまいね。

そして、やっぱり姫プレイだよね!?

そんなことを思いながら、やる気に満ち満ちた鼻息荒い連中を引き連れて、ボクは幼女先輩を打倒しに向かうのでした。

ハザードレベル58

車は田園地帯を抜けて都市部に入ろうとしている。

このゲームにはあまり高い建物はない。せいぜいが三階建てくらいの古典的な家が散発的にちらほらとある感じ。密集地帯ではなくオーストラリアかアメリカの荒涼とした砂漠の町みたい。

100名のバトロワなゲームで、高い建物とかがあると、プレイヤーどうしが探さなければならぬ空間が広がりすぎるし、プレイヤーたちは次々に試合をしたいから、サクサクつと殺し合いをしてもらわないと困るということなんだと思う。

また芋プレイ——つまり、お芋さんのように地面に埋まっているというか、どこかに引きこもるプレイも許されていない。

時間が経過するにつれて、ゾンビハザードのエリアが拡大していつて、そのエリアに立ち入ると、ゾンビウイルスに冒されてしまいダメージを受けるという仕組みだ。

ハザードエリアについてはランダムに決まるから、運がよければずっと動かなくても済むけど、逆に次々と居場所を変えていく必要がある場合もある。

ボクたちの戦略は——。
転戦。

ともかく動くことだった。いきあたりばったりとも言う。

ハンドルを握っているのは命ちゃん。

行き先を決めるのも命ちゃん。

命ちゃんのみこころ次第。命ちゃんのハンドルさばきにかかっている。

というか、さつきからガタガタ車体はかなり揺れている。明らかにスピードのだしすぎだ。

大丈夫なの？

信じていいんだよね。命ちゃん。

「どこに向かっているの」

「ひとまずは芋プレイできそうなところですかね」

「このゲームは同じ場所に長居はできないようになってるんだよ」

「知っています。それでも、このゲームはキル数を競うものではありません。最後まで生き残っていれば勝ちなんです。生き残って……勝利すれば、先輩と、ぐふふ……」

「えっと、はい。わかりました」

なんか命ちゃんが女の子がしちやいけな顔になってる。

最近はこのなのぼっかだけど、大丈夫だろうか。

お兄ちゃんとしては本当に心配です。

「わたしとしても、戦うよりは引きこもってるほうがいいと思いマース」

乙葉ちゃんが同意を示し、

『ピンクも異論はない』

ピンクさんも引き継ぐ。

多数決は大事だね。

今のボクは姫プレイの真っ最中。

お姫様はただ座ってるのが仕事だ。

それに、命ちゃんの立てた作戦は確かに悪くない。

どんなに強くても、戦闘というのはなにが起こるかわからないもんね。

だったら戦う回数を減らしたほうが生存確率はあがるに決まってる。

「じゃあ、どこか——」

その時だった。

「ヒヤッハー！ 新鮮なヒロちゃんを見つけたぜっ」

丘の向こう側に四人の人影。

モヒカン頭なアバターが太陽をバックに立っていた。

こっちは市街地に入っただけ、佐賀のようにまばらにしか家はない。

傾斜のある丘から撃たれれば、こちらとしてもどうしようもない。家の中に逃げこんでもいいかもしれないけど、結局、ボクを打倒しようとしているんだったら、ジリ貧になるのは目に見えている。

「芋プレイはもう少し先になりそうですね」

命ちゃんがアクセルを踏みこむ。

ぱらららららと銃弾が散発的に撃ち込まれた。後部座席に乗っているボクはまだ大丈夫だけど、命ちゃんの隣に座っていた乙葉ちゃんは少しダメージを受けたみたいだ。リアルだったら大惨事だけど、一応、車は防御にもなるから、撃たれても即死はしない。でも運転中は回復もできない。

ゲームなんだけど、乙葉ちゃんは「うっ」と呻いて、逆に撃ち返している。

「ヒロちゃんに、生きててえらいねって言うてもらうんだ!」とモヒきん。

生きててえらいねって……、まあ確かにゾンビだらけの今日このごろ、生きてるだけでもエライけどさ。

モヒなアバターさんはゲーム内チャットでそんなことを言ってる。

このゲームで数少ないコミュニケーションツール。近くにいる会話が画面の下あたりに書きだされる。それでいろいろとコミュニケーションもとれるんだけど、配信中のみんなのコメントも見ながらだという忙い忙しい。パソコンは二台あって、ゲームしながら脇見プレイしてるんだ。

『モヒにヒロちゃんが襲われてる』『配信画面見て場所特定されてるんじゃない』『配信しながらゲームしているから、それはしょうがない』『こんなに広いのにかかるもんなの?』『普通にわかる』『芋れないじゃん』『ヒロ友はそんなズルいことしない!』『でもヒロちゃんにえらいねって褒めてもらえるなら……』『悪魔の誘惑やめろ』

「プレイ中は見ないで。ボクの声は聞いてもいいけどね」

釘を刺しておく。

『はい。わかりました』『おまえはプレイしてねーだろ』『見ないでつてところだけをですね。切り取ってますね』『ヒロちゃんのかわいいお顔を見ながらプレイしたい欲望』『わかる』『わかりみ』『ピンクもそう思います』『だから、オマエはプレイしながらコメント打つなよw』『ピンクは仲間だから問題ない』『ゲームがおぎなりになってる件』

「ピンクさんも禁止」

『わかったマイシスター。ゲームに集中する』

彼我の距離は200メートルを切っていた。

ほんの数秒ほどの時間で——零になる。

ボクはその超人的なゾンビ能力で、数秒を微速度として捉えていた。

だからといって、車に乗っているボクにとっては、なんの意味もなかったけど。

ただ、コマ送りで空中にぶつとぶモヒさんたちが面白くはあつたかな。

ふたりのモヒさんはそれで空中に飛び即死した。

ボクは車から身を乗り出して残党を狩ろうとする。

「あ、先輩は座っててください」

「え？」

「ただ、そこがかわいらしく座ってください」

「ボクもプレイしたいんだけど」

「相手は幼女先輩ですよ。体力を温存していたほうがいいでしょう。

露払いはわたしたちが引き受けます」

うーん。そういう戦略もありなのかな。

命ちゃんの顔を見ると、こくりとうなずいた。

命ちゃんがそういう戦略をたてたというのなら、大将としてはジツと座ってるのが仕事かな。

車はモヒさんをふたり轢いたあと、すぐに直角ドリフトの要領で停まった。

ピンクさんと乙葉ちゃんが車を降りて掃射する。って、ピンクさんクロスボウだけじゃん。

それでも、モヒさんは仲間を回復させようとしていたため、動きがなかった。クロスボウは頭に吸い込まれるようにして当たり、一撃でしとめた。

乙葉ちゃんが持つてるアサルトライフルで残りのモヒさんをしとめ、チームは全滅。余裕でボクたちは勝ったみたい。

ボクなんもしてないけど。

☆
＝

「いもいも……ボクは芋になるんだ」

『ヒロちゃんのいもいもしき』『妹っばさあるしな』『お兄ちゃんは妹がかわいすぎて辛い』『わたしの娘だぞっ!』『で、芋ってるわけだが、配信としてはどうなんだ』

ハザードエリアにもかかってない中心部あたりについたボクたちは、絶賛引きこもり中だ。

ちなみに車は置いてきた。

ハッキリ言つてこの戦いにはついてこれそうもない。

というのは冗談で、車を置いていると芋ってるのがバレバレになるから適当なところで乗り捨ててきたんだ。

配信としては戦闘の派手さはないけれども、ボクとしては知的な活動こそが配信の妙だと思つているのですよ。

つまり――。

「ボクとしてはここらで幼女先輩をどうやって攻略するか戦略を練りたいわけですよ。あ、もちろん、戦略についてはみんなには教えないからね! ゲーム内チャットだけでおこないます」

ゲーム内チャットは、距離が近くなければ他の人に漏れることはない。

チーム内だけでおこなえるチャットもあるから、これを使えば幼女先輩に作戦がバレることもないだろう。

でも、ヒロ友のみんなも会話に参加しないとつまらないだろうしな――。

「ちよつとズルいかもしいけど、みんなには幼女先輩のこと教えてもらつてもいいかな。自分のことを知つていて相手のことを知つていれば絶対に勝てるつて孫子さんも言っていたし」

言つてみればラスボスの情報を知らないで初見プレイするのは無謀つてこと。

『ヒロちゃんがかしこい』『かしこい小学生』『幼女先輩はそれでいいのか?』『フェアプレイではないが、まず勝てそうにないから』『幼女先輩の返事聞いてからのほうがいいんじゃない?』

幼女先輩の返事か。

さつき、プレイヤーは配信画面見ないでつて言ったから、幼女先輩も見ないでくれていると思う。幼女先輩は卑怯な人じゃないからね。むしろボクのほうが卑怯かもしれない。

「えつと、幼女先輩。配信画面見えちゃってもいいんでお返事ください。幼女先輩のことみんなに聞いてもいいですか」

『もちろん。かまいませんよ。情報を収集するのも立派な戦略行為です。情報を拾われてしまったのなら、それは相手が自分を上回っているだけのことですよ』

幼女先輩、カツコいい。

「ありがとうございます。幼女先輩のおゆるしが出たんで、みんな教えてね」

『といつてもなあ』『だいたいにおいて万遍なく超強い』『剣劇系でジャスガ率が90パー以上』『マジかよ。人間の反射スピード越えてないか?』『テトリスでレベル33を達成している』『なにがどうすごいのかわからない』『格闘対戦系では一ラウンド目は遊ぶ』『遊んでいるんじゃない』『相手の力量を見極めてるだけだぞ』

なんか、幼女先輩の伝説の話題になってるんだけど。

これだと、単に強そうってことぐらいしかわからない。

「こういうバトロワ系では何か情報ないのかな。得意な武器とか、得意な距離とかさ」

『満遍なく使う』『手榴弾とかどうしてかわからないけど場所察知されて投げこんでくる』『フライパンのみで1位になったこともあるらしい』『カルボナーラ作りながら勝ったこともあるらしい』『手と足でひとりふたりプレイして勝利』『なんか強すぎて、気づいたらキルされること多くてなあ』『でも、一番はやっぱアレじゃね?』『だよなーアレだよなー』

みんなが口にするアレって?..

答えはすぐに出た。

『『『スナイパーライフル』』』』』

幼女先輩が最も得意とする武器はスナイパーライフルだった。

どこかで待ち構えていて長距離から狙撃する。

そういう戦闘スタイルが一番得意らしい。

「なるほど、こいつは——ゾンビVSスナイパーというやつですね」

ボクはとりすました顔でそう言った。

『ぎわ……』『こいつはやべえぞ』『ヒロちゃんがゾンビ好きだとわかる一幕』『しかし、いくらゾンビ好きでもそれは』『なにになに？』『ゾンビ映画だよ知らないのか？』『オレもヒロちゃんに感化されてゾンビ映画みまくってるけどさすがに知らない』『まあ、物は試しだ。見てくれ』『Z級映画を強制的に視聴させる拷問があるらしい』『十時間以上寝たあとに見ただけ寝たわ』『むしろ寝れない』『人生が三万日だとして、一日24時間だから、72万時間。そのうち貴重な2時間を使う意味を考えろ』『アッハイ』

|||||

ゾンビVSスナイパー

ゾンビVSスナイパーという邦題だが、スナイパーは登場しない。

もう一度言う。このゾンビ映画にスナイパーは登場しない。

|||||

|||||

「幼女先輩ってどれくらいスナイパーとしてすごいのか」

『難しいところだな。気づいたら撃たれて』『気づいたらキルされるからわからん』『見えない』『ビューティフォー』とか言いようが無い』『あ……ありのまま 今 起こった事を話すぜ！』『ワンショットでチームが全滅した』『な……何を言っているのか わからねーと思うが、おれも 何をされたのか わからなかった……』『どういこと？』『四枚抜きされたのか？』『スナイパーライフルは貫通力あるから、ゲーム的にはありえない話でもないがさすがすぎるだろw』『ヒロちゃんもすごいけど、幼女先輩には勝てなさそう』

確かに勝てなさそう。

というか、四人が一直線に並んだ一瞬を撃ち抜くってどんな技能なんだろう。

偏差射撃とか、そういうレベルを越えてる。

「ま、まあ、ゲームはた、楽しむものだし」

『エンジョイ勢なヒロちゃん』『一度はプロゲーマーを名乗っておきながら日和る配信者がいるらしい』『小学生らしくて大変かわいらしいと思います』『幼女先輩のちっちゃなお胸を借りるつもりでいけばいいさ』『おっさんだぞ』『幼女と名乗ってるから幼女に決まってる』

なんとなく流れとしては、たったひとりの幼女先輩をみんなで打倒する流れになったみたい。プレイヤーさんたちはどう考えてるかはわからないけど、最後に立ちふさがるのはたぶん幼女先輩だろう。

勝てるのかな。

ヒロ友のみんなにはいったんチーム内会議に入ることとを告げ、ボクたちはサークルになってゲーム内チャットをおこなう。

「後輩ちゃん。乙葉ちゃん。ピンクさん。みんながんばろうね。なにかいい作戦はないかな」

『ピンクとしては、大人のくせに幼女を名乗るとかおこがましいにも程があると思う。幼女というのはヒロちゃんくらいの年齢にこそふさわしい』

「それは単に幼女先輩をデイスってるだけなんじゃ……」

「わたしとしては、このまま四人で生き残るといいとおもいマース」

乙葉ちゃんが何か思いついたみたい。

「その心は？」

「ひとりが撃たれてる隙に、こちらが攻撃をしかけマース。相手は死にマース」

「なるほどね」

作戦ともいえない作戦だけど、乙葉ちゃんのやり方は確かに理にかなってる。

戦いは数だからね。

ただ、幼女先輩にそんな単純なパワープレイが効くのかっていう問

題はある。

舐めてるわけじゃないけど、幼女先輩と戦った経験はボクにはないし、みんなにも無いからね。プロゲーマーでもなんでもないボクらにできることはたかが知れていると思っただろうがよきさうだ。

最後に命ちゃん。

「みなさん忘れてらっしゃるかもしれませんが、このゲームにはゾンビがいます。幼女先輩だって人間ですから、スナイパーライフルを撃つたらゾンビに襲われるはずですよ。ずっと同じ場所にいつづけるのは非常に困難だといえます」

「ふむふむ。それはそうだね。ゾンビは銃の音に反応するし——スナイパーライフルは強力な武器だから、すごい音がするだろうしね」

「ええ。なので、幼女先輩が動いたときにこちらから攻撃をしかけるというのはどうでしょうか。さすがに幼女先輩も人の子でしょうから、芋ってないときは隙ができるのでは？」

『ちよつと待て。どうやってその動きとやらを捉えるつもりだ。不用意に近づけばこちらのほうこそ隙になってしまうぞ』

ピンクさんの考え、ごもつとも。

このゲーム。足音とか銃声とかわりと遠くまで聞こえるけど、それは向こうも同じ条件だ。可聴域外の音が設定されているわけでもない。つまり、ゲーム的に音がどこまで伝わるかということが設定されていない、その距離はどんなプレイヤーでも一様になってる。そうじゃないと平等じゃないからね。

だから、ボクの耳がいくら人外の領域に達していたとしても、ゲームでは関係がない。

「配信ですよ」

「配信？　もしかして、ヒロ友のみんなにどこでやられたから聞かなくていい？　さすがにそれはズルすぎるよ」

「そうではありません。私達が配信の状況を確認して、そこからコメントを拾うのはしょうがないことです。カメラ写りを気にしないアイドルがいますか？」

ちらりと横を見ると、命ちゃんが危機迫る様子でタイピングしてい

た。

そんなに——ボクとデートしたいの？

「わたしとしてもそう思いマース。偶然、配信の画面から情報が得られてしまったとしても、それはやむをえないことデース」

「うーん。なにか釈然としないものを感じるような」

『ピンクとしては正々堂々戦ったほうが良いと思う。ヒロちゃんとしてはどうなのだろうか。その点にわずかでもひっかかりを覚えたら楽しめないのではないだろうか。後味がよくないとか、そういう心理は人間として大事な要素だ』

ピンクさんはやっぱり大人だなあと思う。

確かに、もし万が一命ちゃんの言う方法で勝っても、いまいち喜べないんじゃないかな。

「勝つために全力を尽くすの、何が悪いというんですか？ ガチで勝ちに行くなら、これぐらいしないでするか。幼女先輩だって全力を尽くしてるはずです。私や先輩の声を聞いて、情報を仕入れてると思いますよ」

『プレイヤーたちは配信画面を見ないようにお願いしているのに、我々だけ確認するというのもどうかと思う。もちろん、配信中なヒロちゃんは配信画面を見ざるをえないのもわかるが、ゲーム内のことをゲーム外に持ちこむべきじゃない』

「ピンクさんだって、勝ちたいでしょう？ 憧れのヒロちゃんと一日デートできるんですよ」

『ううむ。それは……間違ってると思う』

「なに寝ぼけたこと言ってるんですか。目的のためなら私はなんだってします。なんだってできます。先輩のためなら」

『それがヒロちゃんのためにならないと言ってる』

「だったら、ここでチーム解消ですね！」

「後輩ちゃんおちついて」

ボクはふたりが喧嘩しそうな雰囲気になったので、話に割って入った。

「私は落ち着いていますか？」

いやいや、落ち着いてないでしょ。

「無意識に配信画面が目に入っちゃうのはしょうがないとして、やっぱりゲーム内のことはゲーム内で済ませようよ」

「わかりました。では、ゲーム内の残り人数から推測して動きましよう」

すぐに代替案を提示する命ちゃん。

最初から思いついてたんだろうな。ただ、最初に提示した案より確実性は劣る。

本当に幼女先輩が倒したのかはわからないからだ。

ただ、残り人数が少なくなってくれば、幼女先輩に倒された可能性も高くなるから、まったく無策で突っ込むよりはマシだろう。

「じゃあ、残り人数が10人を切ったら動こうか」

みんな頷いてくれた。

「あ、それと先輩。もうひとつ作戦があります」

命ちゃんの奇策。

幼女先輩に通じるかなあ。

★
||

幼女のような軽やかなところで、先輩のような篤実を積んでいきたい。

そんな気持ちから生まれたのが幼女先輩というハンドルネームだった。

そう、私は幼女先輩である。人前でハンドルネームを明かすのは少しばかり恥ずかしいところではあるかな。

私は退役自衛官であり、現プロゲーマーであり、そしてこのごろ復職した。

まあ半ば強制的だったが、武器もない一般人よりは武器を持つてる自衛官のほうがまだ生存確率が高いと思えば復職したのだから、半ばわたしの意思であるともいえる。

私が防衛大を卒業し、自衛官になったのは、なんとなくサイババル

とかそういうものに興味があつたからだ。

銃を撃つ反動。

ジャングルの中で生存しうるほどのサバイバル能力。
生きるか死ぬかの極限のライン。

そういう生の現実つてやつに憧れていたのは確かだ。

実際のところは、面倒くさいと思うことが多かった。自衛官は好き
勝手にできる仕事はない。一切ない。本当だ。嘘だと思うのなら公
民の教科書を開いてみるといい。

誰もが一度は聞いたことがあると思うが、自衛隊はシビリアンコン
トロール、すなわち文民によって統制されているからだ。自衛隊に最
終的な命令を下すのは、内閣総理大臣で、内閣総理大臣を選ぶのは国
会で、国会を選ぶのは国民だ。

なによりも国民の思し召し次第。銃弾一発撃つことすら好き勝手
にできない。

私としてはそういう息苦しさもまた、リアルっぽくて心地よくは
あつたのだが、さすがに二年ほどすると、すべてが面倒くさくなつて
やめてしまった。結果としてのゲーマーだが、これはわたしの性格に
あつていたのでと思う。

「小山内一尉。なにやってるんですか」

突然、声をかけられた。そこは——鉄塔だった。

夕闇がそろそろ地平線を溶かす頃。私は鉄塔の高いところに登り、
気ままにヒロちゃんの配信を傍受している。こっそりと持ち込んだ
折りたたみの椅子に折りたたみの学校机みたいなやつ。ノートパソ
コン。鉄塔の横つ面から電気を拝借。

この場所が完璧。なにもかもそろつていて、それでいて人が居な
い。

要するに、ギリギリWifiが届く距離だったんだよ。

穴場だと思つたのにな。

目ざといやつはいつだってどこかしらいるものだ。

特に楽しみな時間を奪う奴というのはどこにだっている。好事魔
多し。本人は無意識にしろ、トラブルを運んでくるといふやつはどこ

にだっている。

だから、私としてはできるだけ穏便にことを運ぼうとする。本人は無意識なんだからな。悪く扱うつもりはないさ。

振り向くと、まだ若い声。三尉の位にいる久我くんだった。年の頃は二十ほど。防衛大を経過することなく、直接自衛隊に志願してきた生粋の兵士ともいえる。

私がいるところは、佐賀にある小さな原発で、そもそもそういうインフラ施設はどういうわけかわからないがゾンビは避ける傾向にある。ヒロちゃんの歌声もあれば、ゾンビはほとんど寄ってこない。私がノートパソコンを使って、少しばかり趣味に興じてもまったく問題はないところだろう。

サボリといえバサボリなのだろうけれども、終末くらいは好きにさせてほしい。

そもそも退役したわたしを引っ張り出したのは政府であり、わたしとしては自衛官に戻っただけでも感謝してほしいところだ。有給もなく連続勤務一ヶ月。そろそろブラック企業として訴えるぞ。ブラック国家か。

ので——わたしは彼に微笑みかけながら言った。(なにも敵を作る必要はない。敵を作るのは殺し合いでは愚作だからな)

「久我三尉。わたしは、いま休憩時間だ」

「第一種警戒態勢ですよ？　休憩時間なんてないはずですが」

「八時間も立ちっぱなしというのも疲れるだろう。ここにはゾンビは来ないよ」

「それでゲーム配信ですか？」

ふうむ。どうやら、彼はわたしの正体を知っているらしい。

いくつかのゲーム大会に出場して、顔出ししているから、やむをえないことではあるのだが、久我くんはそういつたことに詳しくそうではない。休日の趣味は何かと聞いたら筋トレとか答えてるやつだ。

となると、教えたやつがいるということになる。

そして、ピンと来た。個人情報保護なんて考えてもいなさそうなやつ。

「隊長殿はわたしのことが嫌いなのかな？」

「よくわかりませんね。ただ、ゾンビに媚へつらって生きあがくやつらのことはお嫌いだと思いますよ」

「あの少女と我々は共に生きる道を探るべきだと思うがね」

「あの少女？ あの生白いゾンビのことですか」

「ああ、そのとおりだが」

ヒロちゃんって言えよクソが、と思っても言わない。

大人だからね。

久我三尉は背筋を伸ばし、棒きれのように屹立している。

「自分は、あのゾンビは打破すべきだと考えます」

「ふうん。その心は？」

「あのゾンビが適当なことを吹聴するあまり、自衛隊は翻弄されてます。ついには、くだんのゾンビの言を入れて、ゾンビに銃弾を撃つべからずという命令もでる有様です」

久我三尉は苦い顔をしていた。

彼は一ヶ月ほど前に家族を射殺していた。

いまさら、ヒロちゃんの力によってゾンビから回復できるといったところで、遅きに失するということなのだろう。

ただ、それをひとりの少女の責任とするのも間違っていると思う。ヒロちゃんが自分の能力を隠していたかは微妙なところだが、たとえばそうだとすると、今の状況で自分の能力を披露するというのが、どんなにか勇氣にいたることだったか。

「ゾンビが病人であるならば殺すべからずというのは当然だと思いが」

「そのせいで我々は危険に晒されています」

「ここにはほとんどゾンビはやってこないよ」

「ここだけの問題じゃありません。世界中のどこにでもやつらはいるじゃないですか。いまさら後だしジャンケンで、ゾンビから回復できると言われて納得できるはずがありません。そんな都合のよい話があっという間はあがない」

「その気持ちはわかる。だが、運命とはいっだって皮肉なものだと思

わらないか？ ヒロちゃんだって、望んでそうしたわけではないだろう」

「よくわかりませんね。世界は悪意に満ち溢れている。そのゾンビがどうして人間のことを滅ぼそうとしていると思わないんですか？

我々はうすのろのゾンビどもを駆逐できる程度の戦闘力はあるはずですよ。上の命令さえなければ勝てたはずなのに」

「ひとりの少女の言葉程度で変わる運命なら、始めからそうだったのだろうさ」

「そうは思いませんね。あんな早歩きしかできない連中。武器を持つた俺たちなら殺すのは簡単だ。どんなに馬鹿力だって、銃に勝てるはずがない」

「まあ、それはそうかもしれないけどね。ただ彗星が降りそそいだ日になぜゾンビになってしまう人とそうでない人がいるのか、いまだにわかっていないじゃないか。銃で撃ち殺して行って、またゾンビが現れて、また撃ち殺して——、そうやってみんないなくなってしまうたら意味がないよ」

「ようやく混乱から立ち直って、さあいざ反撃だというタイミングで、ゾンビを治せる、ゾンビを避けられる。みんな平和に仲良しごっこをしようとか、まるで悪魔の甘言だ。虫唾が走る邪悪だ。そう思わないんですか？」

「わたしが見るかぎり、彼女は少なくとも普通の女の子のように思えたがね。それに彼女の理想が実現されれば、それは人間にとっても望ましい未来じゃないか」

「このままだと人間に滅ぼされるから、一計を案じただけですよ。ゾンビは弱い。油断しなければ、混乱しなければ、十分に勝てる」

「彼女の瞳を見ると、そういった薄汚い策謀とは距離を置いたものだと思うが、どうだろう」

「一尉は、あの化け物の外貌に騙されてるだけです」

「ふふ……まあそうかもしれないな。ヒロちゃんかわいいもんな」

「馬鹿な」

不快の顔。

どうやら彼と分かり合うには、少しばかり時間がかかるらしい。

彼は氷のような表情で言った。

「小山内一尉。さきほど撤収命令ができましたよ。私はそれをお伝えしに参ったんです」

「撤収？ 佐賀内の電気を消す気か？」

民間人はおそらく余剰の電気で生きていると思われる。今から徐々に寒くなっていくにつれ、暖をとるにも、なにをするにも電気は必須だ。

特に、ヒロちゃんからゾンビを退ける力を得るには、いましばらくの時間が必要だった。彼女と共存し、信頼関係を醸成するだけの時間が、あとほんのわずかだが必要だった。

それを撤収だと？ 馬鹿な。いまこのタイミングでか。

わたしが抗議の視線を送ると久我は顔を歪ませていた。

「残念だったですね。もう少しで奴のデマゴーグも終わりだ」

「馬鹿げてるな。上は現場を知らないのか？」

「それが国民の総意つてやつなんでしょう。国会は国民の意思を集約した機関だ。おエライさんたちは、それをさらに煮詰めた機関だ。いい加減、煮立って素材を台無しにしてるかもしれないけどね。ゾンビハザードが起こる前も起こった後も、この国の大衆なんて何も変わっちゃいないんだ」

「馬鹿げてるな本当に」

「馬鹿でもなんでも、国の命令を聞くのが自衛官の存在意義でしょう」

「久我三尉。君はそうまでして彼女を殺したいのかい」

「命令ができればそうしてますよ」

「撤収はいつだ？」

「二時間後ですよ」

「こいつ、私に黙っていたな。」

このタイミングで――、最後の配信に合わせて、絆を断ち切るつもりか。

ヒロちゃんの人間に対する信頼を失わせて、相互不信に陥らせ、民意を傾かせる。いまさら民意もクソもないが、国の上層部の意思決定

を揺らがせる程度はできるはずだ。

それが久我の真の狙い。

いや、久我だけではないだろう。ゾンビによって親しい人を失った者たちの悲願なのかもしれない。隊長——人間のやつも絡んでるのか？

「いまさら、あなたがなにをしようと思駄です。撤収命令は既に下されました。わかりましたかあ。幼女先輩。ははははははッ」

久我は悠然と去っていった。

「クソ……っ！」

ガンと鉄塔が鳴る。

いまさら政治的なやりとりをどうこういったところで遅い。

人間の総体意思は撤収しろと言ってる。

つまり、ゾンビとは仲良くするなってことだ。

ふざけんなバーカ。

こちらら自衛隊に戻ってくれって言われたからしかたなくきてやったんだ。馬鹿なヘッドの言うことなんて聞く義理はない。いますぐ退職届を提出してやる。

「——でも。どうすっかな」

ヒロちゃんは画面の中で、いつも以上にキラキラと笑っていた。

大好きなアイドルと配信できて、心の底から嬉しそうだ。

目的を見誤るな。

撤収するとかしないとか、そんなことはどうでもいい。

ただ、どう伝えるのが問題だ。

あと二時間後に君は死ぬ——、そのように告知するドクターがいたとして、そいつは名医だと言えるだろうか。

私はただ漫然と、もうあと二時間もすれば配信できなくなると伝えるだけでいいのか？

「幼女のように軽やかな心で、先輩のように篤実に」

あと二時間でやるしかない。私は私のできることをする。プロゲーマーとして、配信の先輩として、なによりも人生の先輩として。

彼女にできるかぎりのことをしてあげたい。ただそれだけだ。

意識を切り替えプロゲーマーらしく――。
人間の”強さ”を教えてあげよう。

ハザードレベル59

幼女先輩との最後の戦いに向けて、ボクらは英気を養ってる。もとい、芋プレイをしている。

なにもかも順調そのもので、ハザードエリアもボクたちが芋ってる家には範囲及ばず。しかも、なぜか敵も来ない。

「もしかしてだけど、みんな幼女先輩との戦いに向けてボクに忖度……」

忖度とは、言うまでもないことだけど、高度な政治的配慮のことを言う。

『察しのいい幼女は……好きだよ』『忖度といふかなんというか』『大丈夫だ。画面は見えていない。ただヒロちゃんがお家の中にいるのはまるわかりだから』『幼女先輩との直接対決を見てみたくはある』『俺らは普通に探してるけどどこなのかさっぱりわからん』『幼女を探すとか変態かよ』『だったら国のみんなはヒロちゃん探してる変態ってことに』『厚労省も探してる』『ていうか厚労省のページにヒロちゃん専用問い合わせボタンあるんだけどww』『真っ赤な背景に黄色の文字で、ヒロちゃん様はこちらからアクセスしてくださいww』

「え。厚労省も探してるの?」
知らなかった。

厚労省にはボクの動画を切り取った画像が張られてるらしいけど、恥ずかしかつたんで見ていない。そもそも個人情報とか肖像権的にどうなんだろう。あ、ゾンビに人権はないですか。そうですか。

しかし、厚労省にボク専用のボタンがあるとは――。

そんなにアクセスしてほしいの?

まあそりやそうか。

『ていうか、このままいくとヤバイぞ』『ああ、おそらくこのままいくとあのパターンだな』『マジかー。幼女先輩勝ちやうな』『え? なんだ古参がなにか言ってるぽい?』『エリアの閉じられ方が稀によくあるパターン』『あぁー』『うろろうろしてたら死んだわ。幼女先輩っぽいな』

「みんなどうしたの？」

このままいくとなにがヤバイんだろう。

ボクはリアルで左右を向いて、命ちゃんと乙葉ちゃんにアドバイスを求める。

「わかりません。このゲームのことは触りぐらいしか知りませんし」

「右に同じデース」

『ピンクも知らない』

そうだよね。

ゲームのことを知ってるのはみんなのほうだ。

配信画面を見てみると、すぐに答えは出た。

『麦畑』

なるほど——。

ハザードマップの塞がり方から、最終決戦地が麦畑になりそうってことを言ってるわけか。なるほどな。麦畑はヤバイ。

オンラインゲームをほとんどやっていないボクでも、他の人の配信動画を見て知っている。

最終エリアになると、ほとんど彼我の距離はなくなるわけだけど、麦畑は匍匐しているとほとんど姿を隠せるんだ。

つまり、スナイパーの独壇場。わずかな気配で正確に相手の位置を知る能力に長けたスナイパーならなおさら。

幼女先輩の位置を探る前にこちらが全滅なんてこともありうる。

なにもない平地だったら、撃ちあいをすれば勝てるかもしれないけれど、各個撃破されれば意味がない。

とすれば——。

「最終エリアになる前に出たほうがいいかな」

最初の作戦では残り十人くらいになるのを待って、幼女先輩が移動中を狙うというものだった。

でも、もしも最終エリアがほぼ確定なら、そこでもう待ってるかもしれないんだ。いや時間が経てば経つほどその可能性は高まる。だって幼女先輩はプロのゲーマーなんだから。みんなが知ってることを知らないはずがない。

エリアのパターン解析なんてのもしてるはずだ。

『必ずそうなるとは限らんぞ』『幼女先輩と幼女が麦畑で戯れる。なんかいいな』『ライ麦畑で捕まえて』『おーい待てよー』『うふふ捕まえてごらんさーい！』『オレくん捕まえた！』『アッー！』

まあ確かにエリアがどう狭まってくるかなんて誰にもわかりようがない。

ただみんなのなんとなくの勘みたいなものから、そうなるんじゃないかと予想しているだけだ。でもきつとそうなるだろうな。

ボクのいままでの経験からすると、ヒロ友のみんなは頭がいい。ちよつとお調子ものだけど、頭がよくて経験深くて、ボクよりいろんなことを知ってる。

だから——みんなと話すのが楽しいんだし。

だから——人間は滅ばないで欲しいって思うんだ。

「そろそろ出よう。ライ麦畑で待ち構えよう」

否はなかった。稲じゃなくて麦だしね。なんちゃって。

なんちゃって……。

声に出してないからセーフ。

「先輩……」

なんでボクを哀れむような視線で見てるの、命ちやん……。

☆
☆

残り人数は20人程度。

予定より早く芋状態から出荷されちゃった。その分、油断してはならない。

まばらな家が立ち並ぶ住宅街をこつそりと出発し、ボクたちが向かうのは東だ。なだらかな丘といったらしいのかな。

木立がぼつんぽつんと立ち並ぶなんの障害物もないエリア。足元には底の浅い草しか生えてなくて、そこを抜けるとライ麦畑のエリアにつながる。

「しかし——、ヤバイですね」

ボクの傍らをガードしている命ちゃんが言った。

「なにがヤバイの？ トイレ？」

「違います！ なにが哀しくて全国のお茶のの前で羞恥プレイをしなくちゃいけないんですか。それは先輩の役目でしょう」

いかん。目がマジだ。命ちゃんの声が緊張感で包まれてるっぽいから、ちよつと力が抜けるように冗談を言ったんだけど……。

「ごめんなさい」

素直に謝るボクでした。

「で、なにがヤバイの？」

「ここはなんの障害物もありません。待ち伏せにはもってこいです」

なるほど、だからさつきからピンクさんと乙葉ちゃんがツーマンセルで索敵しているのか。ピンクさんもいつのまにやら装備を整え、いまでは立派な兵士に。

それにしても、障害がないのが障害だなんて、まるで将棋だな。

「ともかく注意深く進むしかないよ」

ボクはあいかわらず姫プ中。

ゲーム開始してから銃一発すら撃ってない。芋プしながらの姫プだからしょうがないのかもしれないけど、いい加減ボクもなにかしたくなってきた。なにかないかな。敵とか敵とか敵とか。

幼女先輩との戦いに備えるのもいいけど、なんの考えもなしに撃ちまくりたい。

だってゲームだもん。

よく考えたら、ボクのチームが勝って得するのは命ちゃんたちであって、ボクじゃない。そりゃ、ボクも勝ったらうれしいけどさ。

一番は今を楽しむことだと思うよ。

そんなわけでお姫様は終わり。ボクもたたかいます！

ボクができることといったら、今のところはみんなの後方で周囲に警戒することぐらいだけど、ゾンビ的な超知覚がゲーム上では働かないから、なんとなくどこかしくはある。ゴム手袋を装着して針に糸を通すようなもどかしさ。

なんといつても、ボクって現実世界での知覚能力は既に人間を超え

てるから、周囲の人間の息遣いとか、ゾンビの数とか、ヒロウイルスの浸透力でわかつちやうからね。でもゲームだとそういう知覚能力が制限されちゃってるから、素の視力の良さぐらいしか役に立たない。

ここは、長年の素人ゲーマーとしての勘だけが頼りだ。

ボクは傾斜の緩やかな丘の上を警戒する。待ち伏せるとしたら、そちら側だから。特に聴覚に注意。ゲーム的に制限があるとはいえ、わりと広範囲に設定されているらしい音のほうが見覚情報よりも多い。

あれ、なんか変な音がするような。

ボクはキャラクターをきよろきよろさせて、どちら方向からの音が見極めようとする。うーん。前？

「違う後ろみたい。ゾンビだよ」

まだ数匹程度。ボクたちの背後からわらわらと湧いてきている。

このゲームの唯一のNPC。ただの障害物と見る向きもあるけれど、今の状況で交戦するのはまずい。このゲームのゾンビも現実世界と同じく人間の発する音に敏感だ。特に銃はまずい。今のボクたちはゾンビを屠るのに最適な鈍器とかは持ってない。幼女先輩との対決ばかりを考えていたのが間違いだったのか。

どうしよう。

『むしろそのほうがよくないか？』

ピンクさんの意見は真逆だった。

ボクとしては迫るゾンビが怖いけれど、ゾンビが盾になってくれるから、後背を気にすることがなくなるからというのがその理由らしかった。

『そう思うのだがどうだろう』

「なるほど、さすがドクターピンクさん」

『それに——、後輩ちゃんの奇策もできそうな状況に近づいてきているな』

命ちゃんの奇策はいくつかあって、そのうちひとつがゾンビトレインだ。

要はスナイパーみたいな一撃必殺の武器はゾンビだらけのバトル

フィールドでは不利だということ。混戦になってしまえば、精密なワ
ンショットよりも乱射するほうが強い。

つまり、四人そろっていているボクらにも勝ちの目が出てくるというこ
とだ。

「このままゾンビを引き連れていけば勝てるかも?」

「しかし、少し早すぎますね。このままだと大量にゾンビを引き連れ
た状態で麦畑に突入することに」

命ちゃんの意見もごもつとも。

「じゃあどうすれば?」

「クロスボウで間引きしながら進むのはどうデス?」

なるほど、ピンクさんはまだクロスボウを捨ててない。そしてクロ
スボウならサイレントキルができる。ゾンビは増えない。

これなら——いける。

そう喜んだのもつかの間だった。

ボクの超発達した、それこそプロゲーマーも凌駕する動体視力は、
真っ青な空をほんの豆粒みたいな小ささで飛来するソレを捉えた。

ボクたちに当てるつもりもないただの一撃。

空の高いところで、ドオオンと大きな音と光が出た。

攻撃能力は皆無だけど、画面が真っ白になって、一切の操作が効か
なくなる。

まさか閃光手榴弾?

もう幼女先輩が先についてたの?

勾配のあるところとはいえ、ボクたちのすぐ近くまで投げる技術は
本物。

でも——、幼女先輩なら、さくつとスナイプしてそうだけど。

光が収まったとき、幸いなことに誰ひとり攻撃は受けてなかった。
でも、チームの中心になつていているボクが動かなかつたせいか、みんな
も先行して突っ切ることはできなかつたみたい。

ゾンビは後ろにいて、前に進むしかない。

いつそ、後ろに戻つて、ゾンビをまずは全滅させたほうがいいのか
?

ダメだ。閃光手榴弾の音と光は特大級で、ゾンビもどこからかワラワラと湧いてきてしまっている。もう麦畑をノーダメージで迂回できるとは思えない。

「先輩、どうしましょうか」

「後輩ちゃん。何か考えて」

「先輩、丸投げはちよつと……」

「ま、丸投げじゃないよ。これはあれだよ。高度な柔軟性を維持しつつ適宜最適な行動をとってほしいってことで、そういう指示だつてことで、丸投げじゃないよ」

「今の状況だと、前方に潜んでいる敵はおそらく幼女先輩ではないですね。地の利を得たとして攻撃してきたのだと思います。ダメージングレンジが、この距離ではないことからすると、スナイプ能力が低い武器しか持ってない可能性が高いですね。それか数が少ないか」

「ふむふむ。で、どうすればいいの?」

「この状況ではたいした作戦はたてられませんが、扇形に展開して、丘の上にたどり着いたら側面攻撃というのはどうですかね」

「それだと誰かが攻撃されちゃわない?」

「……」

命ちゃんは無表情のまま考えている。

天才的な頭脳を持つ命ちゃんは計算能力も高い。でも、基本的に頭のスペックがいいだけで、作戦立案とか学んでいるわけじゃないからなあ。

それでもボクが作戦をたてるよりは、絶対にいいものができるって確信があるけどね。頭よわよわじゃないよ! こういうふうに入を信頼することも必要だつてことだ。

「残り人数が10名ですか。これは……やはり、広がりながら進むのが一番マシなような気がします」

「その心は?」

ゾンビさんたち迫る。もうそろそろこの場に留まっているのはまづそう。

「わたしたちを迎え撃とうとしているのがマックス4人のチームだと

したら、わたしたちと幼女先輩も加えて9名です。いくら幼女先輩でも大量のゾンビをかきわけて進むのは骨が折れるはずですから、後ろから来ることはほぼないかと。そうなると地図上で言えば、ここかこのどちらから麦畑に侵入するはずで……」

命ちゃんがリアルで地図を提示する。隣プレイだからこそできる芸当だけど、ちよつとお行儀が悪い。

まあそれは置いておいて、なるほど要するに幼女先輩と進行中にかち合うのを恐れたわけか。最善は麦畑で迎え撃つことで、ゾンビも入り乱れての乱戦に持ち込むこと。

そのためには麦畑エリアの前のこのエリアで迎え撃ってくる敵を倒さないといけないってことになるわけか。

当然、地の利を得たぞつて向こうは主張しているわけで、誰かは倒されちゃうかもしれないけど、やむをえない。まあこれはゲームなんだし、チームとして勝てばいいわけだから、一番効率的なプレイなんだろう。

命ちゃんの場合——現実でもそんな感じにしそうだけど。

「じゃあ、そういうことでいいですね」

「了解デース」

『ピンクも了解した』

「うん」

そして、みんな突貫していく。

でも、みんな広がらなかつた。話と違うんですけど！

「あ、あのどうしてみんなボクにくつついてくるの?」

これじゃ、おしくらまんじゅうみたいじゃん。集弾性の高い武器で狙われたら元も子もないよ。

「私は先輩をお守りしなければなりませんので」

「ヒロちゃんはわたしが守りマース」

『ピンクも守護る!』

あれ?.

「あの、さっきの後輩ちゃんの作戦は?」

ボクはリアルで口を開いた。さすがに前進しながらのチャットは

難しい。

命ちゃんも乙葉ちゃんも隣でプレイしているし、ピンクさんは配信を聞いているから、これで伝わるはずだ。

「私は作戦立案者として、先輩をお守りしなければなりませんから」「たまたま進行方向が同じだっただけデース」

『ピンクも右に同じ』

ピンクさんプレイしながらチャットするのなにげに上手いな。

もしかして中の人二人プレイとかしてないよね？

丘の頂がどんどん近づいてきている。もはやこのままの勢いでつつきるしかない。ゲームだもん。多少の無茶も許されるよね。

ヒュツ。と風を切り裂く音がした。

足元の近くに数発。

「SMGの音ですね。こちらが一撃でやられる装備ではないです。しかも——これなら、もしかすると想像どおりに」

命ちゃんが隣でリアル通信。

確かにSMGはこのゲームでは中距離武器としては微妙どころさんだ。

はつきり言えば、ないよりはマシ程度。

拳銃よりはちよつとはいいかな程度で、武器としては弱い部類に入る。

もしかしてボクたちを油断させるためにあえてという線もなくはないけど、こんなにもアホまるだしの塊になって進んでいるのに、強力な集弾性のある武器で攻撃しない理由はない。

理由がないということは、アサルトライフルみたいな武器は持ってないってことだ。

「このまま一気に進むよ」

チームリーダーらしくボクはキメ顔でそう言った。

左右前からぎゅうぎゅうされながら、ようやく丘の上にたどり着く。

いない。

誰の姿も見えない。慎重かつ最速の動きで丘の下を見まわす。

いた！

なだらかな急勾配を駆け抜けているのは一台のワゴン車だ。白い巨体を左右に揺らしながら、アクセルいっぱい去っていく。

「やはり、ぼっちでしたか……」

「後輩ちゃん。その言葉はボクに効く……」

でも、まあ命ちゃんの言葉の端々からはそんな気はしてた。

相手チームは、おそらく麦畑前の最終防衛ラインを敷いていたんだ。

それはおそらくボクたち対策ではなくて、幼女先輩対策。

そのためには四人いるチームを四方向にわけるしかない。あるいは、二人二人に分けて、二方向だったのかもしれないけど、いずれにしても、幼女先輩にライ麦畑エリアに侵入されたらヤバイと考えたんだろう。

だったら、二つの防衛線をしいたほうがいい。

麦畑エリア前と、そして集結後の二度だ。

「みんなゲームプレイうまいなあ」

誰ひとり欠けてないけど、ことごとく上をいかれてる気がする。

「不甲斐ない後輩ですみません」

「後輩ちゃんが悪いんじゃないよ！ だってこのゲームしたのほとんど初見と同じでしょ。みんなこのゲームを毎日のようにやりこんで、いろいろと戦術も研究されてるはずなんだよ。むしろいままで生き残ってるほうがおかしいくらいなんだよ」

「しかし、向こうのチームにはこちらの侵入方向がバレてるわけデース。これはかなり不利な戦いが予測されマース」

乙葉ちゃんの言うこともその通りだと思う。

『ここから下にくだるまではこちらも無防備だが、相手も集結するのに時間がかかるんじゃないか？ それに幼女先輩の侵入方向こそ知りたいたろうから、配置を変えない可能性もある』

なるほど幼女先輩は概念だけで相手の戦術を動かすか。

まるで孔明だな。

いやまあなんでもいいんだけど。

「じゃあ、さっさと降りたほうがいいってことだよね」

『そうなるな』

背後を振り返ってみてみると、ゾンビが勾配をゆっくりとしたスピードで上がってきている。時間はあと少ししかない。

残りは、10名。

★
||

当てられなかった。

いや、能力的な問題じゃない。いくら不利な状況でも、いくら射程距離が短いSMGでも、あれだけ見通しのいい場所なら、数発程度は当てられたはずだ。

当てられなかったのは心理的な問題だ。

なぜって、そりゃ決まってるだろ。

相手はあのヒーローちゃんだ。

配信中の笑顔とか思い出しちゃうと、もう手が震えてしまって、あの笑顔がもし崩れたらと思うと怖くなってしまって、できなかつたんだ。

もしも——。

もしもだけど、

ここで幼女先輩と一戦も交えることなくヒロちゃん達を全滅させちまって——

『ボクを攻撃するなんてひどいよ。絶交する』

とか言われたら、たぶんオレは立ち直れない。すぐさま回線切つてLANケーブルで首吊つて死ぬ。いや、オレン家、無線LANだけでも。そういう気分になるのは必定だ。

だから尻尾を巻いて逃げちまった。

ヒロちゃんはそんなこと言わない、とは思ってる。

思ってるんだが、でも思ってることと実際にやることは別だろ？

真面目にゲームプレイしてねとか、超絶姫プは禁止とか言つてたし、単純にゲームを楽しみたいのがヒロちゃんの御心だとしても、ど

うしてもいろいろと想像しちゃうんだ。嫌われたらどうしようとか、できれば好かれたいなとか。

ファンとして当然の心理だろ？

実をいうと、ヒロちゃんとおレは縁がある。

向こうが覚えているかもわからないけれど、配信で同じサーバーに接続したのは、実はこれが二度目だ。

何を隠そう、ぶにくら様とはおレのことなのだ。（ハザードレベル

33参照）

誰も知らないって言いそうだな。

いまでは二百万人になってしまっているヒロ友。

常時接続数も上手い具合に散らしてらしいが、こんな状況で二度目のチャンスが巡ってくるなんて運命を感じる。

たった一ヶ月ほど前のことだけど、あの頃のヒロちゃんはただのゾンビ好きな配信者で、おレは単純に終末世界でやることなく、なにか面白いことはないかな程度の動機で、たまたまヒロちゃんのことを見つけたんだ。

ただの現実逃避といわれればそうなのかもしれない。

世界にはゾンビと死と裏切りが溢れていて、毎回近くのコンビニに行くだけで死にかける世界だ。

人の形をしたものを、破壊するときの手の平に残る感触。

残りの食糧が少なくなっていくときの絶望感。

お隣さんが泥棒に入ってきて、おレが撃退したら、子どもが腹をすかしてるからよこすのが人間だ、人間以下の畜生め死ぬと悪態をついてくる。

そのあとはゾンビが集まってきて、そいつが引き連れてきたことがわかったり、そいつとそいつの子どもが無事ゾンビに食べられたり。

そんなのばっかだった。

きつと、心が壊れかけていたんだと思う。

そんなときに、楽しいことを思い出させてくれたヒロちゃんは、べつにゾンビ避け能力がなくても、おレの中では天使だったんだ。

もう二百万分の一になってしまったけど、おレは胸を張ってこう言

いたい。

オレはヒロちゃん古参勢だぞと。

きつと、今回もまた幼女先輩という巨大な影の前では、石の裏にいるダンゴ虫並の存在だろう。

ヒロちゃんにとつては、オレはネームドになれるほどの価値はないだろう。

それでも——、一矢報いたい。

そのためには、英雄的行為を成し遂げなければならぬだろう。どこの中二病つて話だけど、敵はドラゴンよりも凶悪だ。

なんせキルレシオ世界一位。

伝説的プロゲーマーだからな。

でもそんなことより、あのヒロちゃんに名前を覚えられているというのが羨ますぎる。嫉妬が炎として見えるなら、オレの嫉妬はフライパン山だ。めらめらと燃え盛ってる。

なのにあいつは——、取り澄ました感じの態度でいけすかない。

あああッ。褒められてーよ。ヒロちゃんにがんばったねとか、ありがとうとか言われてーよ！

そんなわけで、幼女、倒す！

車のアクセルをふかし、適当なところで乗り捨てる。

車なんていらねーんだよッ！

もしかしたら既にヒロちゃんたちにはバレてるかもしれないが、オレたちの作戦は単純だった。この麦畑のエリアが最終エリアになるかもしれないと悟ったオレたちは早々と占拠した。ちようど近くにいたことが効を奏したんだ。

そして、仲間は四方を守るように配置した。

戦力の分散は愚考だが、幸いなことにこの麦畑エリアはちようど盆地のようになっている、北は傾斜の強い山、西は丘陵、東は海で、南は平地になっている。

要害というやつだ。守りやすい地形だ。

仮に倒しきれなくても、一撃を加えれば、必ず進行速度は緩くなるし、進行方向がわかるから、索敵困難な麦畑では絶対の有利になる。

エリアの狭まり具合を考えると、残り時間は少ない。

幼女先輩はまだエリアに来ないのか？

まさかここに来るまでに倒れたということはありえないだろうが

『そちら異常はないか？』

オレは仲間に通信を試みた。

『こちら東、異常なし。ボート音とかもしないな』

『こちら北。特に異常——あ、撃たれてる撃たれてる！ クソどこからだよ』

幼女先輩は北か。

なら、戦力を北に集中させればいいか。

いや——、ちよつと待て。

いま、ヒロちゃんたちが4名残存しているのはさつきチラ見して確認した。

そしてオレらは全員生き残ってる。

残存人数は10人。

本当にそいつは幼女先輩なのか？

一撃で四枚抜きするようなやつが、たったひとりに数十秒も時間をかけてるのか？ いやもちろん、幼女先輩も人である以上、自然の要害が思った以上に効果的だったということはあるが……。

『北。戦況を報告せよ』

『わかった。やつは麓あたりから撃ってきてるんだ。でも、そこからの距離だと人間なんてほとんど豆粒だぞ。こつちが覗きこんだ瞬間に撃たれる。つまりこつちの顔がばつちり見えてるってことだ。素直にヤバイ』

『武器は？』

『わかんねーよ。たぶん、スナイパーライフルなんじゃねーか？』

『投擲武器を使え』

『了解した』

投擲武器なら、ゆみなりに攻撃できるので顔を出す必要はない。もちろん、姿も見ないで攻撃が当たるかという点、まず無理だろうが、牽

制ぐらいにはなるんじゃないか？ 常識はずれにもほどがある。

しかし——、これはおそらく幼女先輩だろう。

麓と山の頂上あたりにいるとなると、ほとんどドットレベルでしか人の姿は映らない。そんなところから攻撃してくるなんて幼女先輩ぐらいしかできない。

『よし、北に向かうぞ！』

『東。了解した。まー、このまま海眺めてても暇だったからなー』

東からの応答。

さすがの幼女先輩も海からは来れなかったということか。

ボートを運転しながらだと撃てないからな。

残りの一名が気になるところではあるが——、幼女先輩を排除するのが最優先だ。

ん？

南はどうした？

『おい。南。応答はどうした』

応答が来ない。トイレにでも行ってるのかと思い、画面を見つめることコンマ数秒。

オレはあることに気づいて驚愕する。

10名だった残存人数はいつのまにやら9名になっていた。

南がやられていた。

ハザードレベル60

敵がいなくなってしまうたので、ボクたちはさっさと移動することにした。

とはいえ、待ち伏せの可能性が高いので、あまり大胆に移動するのは得策じゃない。ピンクさんの提案で、ひし形の陣形を取って周囲を警戒している。

みんな、真剣そのものだ。

「先輩、このまま襲撃されることなく麦畑にたどり着いたら、南側に寄せるようにジリジリ移動しませんか？」

「その心は？」

「もちろん居場所がバレないようにするためです」

「匍匐で移動してたら危険じゃない？」

「ノーリスクノーリターンですよ」

うーむ。

ここまで狭いエリアになってしまえば、もはや相手がどこに隠れているかはわからないし、いつ襲撃を受けるかはわからないか。匍匐だと動きがワントンポ遅れてしまうし、こっちはほとんど麦しか見えな。黄金の絨毯にはばまれてしまう。そういったデメリットはあるものの、ただのカカシみたいに突っ立っているよりはマシだ。

少しでも生存率をあげるという意味で賛成だった。

「でも、幼女先輩が南側にいたらどうするんデース？」

チラつと横を見ると、あいかわらさずかわいらしい乙葉ちゃんが、ぽわつとした声を出している。でも、その疑問は鋭い。

ボクたちがいる麦畑の西側は、幼女先輩が来ることはほとんどないだろう。ゾンビがジリジリと迫ってきているし、そこを抜けてくるとは考えにくい。

じゃあ、北、東、南のいずれかの方向から幼女先輩は来るということになるんだけど、さっき命ちゃん指差し確認してくれたとおり、東はたぶんありえない。

このゲームってボートに乗っていると銃を撃てないからね。

一方的に撃たれまわることになって不利すぎるし、接岸した瞬間が最も危険だから。

つまり、北か南。

でも、地図を見る限りじゃ、南は平原で幼女先輩にとっては相対的に不利だ。物量作戦が一番効くのが南側ということになるからね。例えば、チームプレイしている四人組が全員で南側で待ち構えていたら、さすがに幼女先輩でも厳しいんじゃないかな。

だって、相手は物陰に隠れながら——例えば、車とかを盾にしながら攻撃できるわけだけど、幼女先輩は麦畑エリアに到達するためには、そこにいる敵を排除しなければならぬから。そのためには銃を撃つ。そうするとゾンビが寄ってくる。それに禁止エリアにかかる可能性も。

車で急行突破とかもできなくはないだろうけど、四方からアサルトライフルで撃たれば、フロントガラスごと撃破される可能性が高い。重要なのは、車を運転しながらは銃を撃てないってこと。助手席とかに座ってる人は撃てるんだけど、運転手は撃てないんだ。これはシステムのできないから幼女先輩も例外じゃない。

さつき命ちゃんがモヒさんたちにやったみたいに車でひき殺すとかはできるんだけど、終盤戦で装備がそろってる連中相手だとちよつと悪手。

幼女先輩がそんなわかりやすい作戦を立てると思えないけどね。

幼女先輩がもしも南側で交戦しているとすれば、どうするか。

命ちゃんの答えはシンプルだった。

「もしも、幼女先輩と交戦中なら、助勢します」

「相手チームを先に倒したほうがよくないかな?」

と、ボクは聞く。

答えたのは命ちゃんではなく——、

『ピンクとしては、幼女先輩を先に倒したほうがよいと思うぞ』

「どうして?」

『幼女先輩が強いからだ』

わかるー。

というか、幼女先輩って本気で1人対100人でも勝てそうだよ
ね。

勝率という意味では、普通のゲーマー四人と戦うほうがまだ勝ち目
があるのかなんというか。

「もしも、幼女先輩がいなかったらどうするの？」

「必然的に北から来る可能性が高いですが、その場合は彼らに期待す
るほうがいいでしょうね。幼女先輩が無傷だと辛いですが、いくらか
はダメージを受けていることを期待するしか……」

命ちゃんの智謀を持つてしても、このあたりが一番勝率の高い方法
論だったのだろう。

命ちゃんの提案に対しても否はない。天井はしないよ。

ボクだつてちゃんと学ぶんだ。

「じゃあ、いもいも動くね」

芋ではなくて、芋虫みたいにいもいも動く。

匍匐前進ッ！

★
||

さて困ったことになった。

素人ゲーマーのオレにとつては、幼女先輩の思考は遥か高みにある
といつていい。それでも、オレだつてモラトリアムの時間をたくさん
使つてゲームばっかしてたんだ。

はつきり言えば、ゲームも音楽と似ていて練習すればするほどうま
くなる。もちろん能力的な限界もあるから、オレは早々にプロになる
のは無理だと思つていたけれど、費やした時間だけは膨大だ。

親から与えられた時間をたっぷり使つて——、たぶん本当の大人に
なつたら、使えなくなつてしまう時間をたっぷり使つて、オレはゲー
ムという平均的社会人から見ればまったく意味のない遊びに熱中し
た。

罪悪感はあるんだ。親に対する罪悪感。社会に対する罪悪感。そ
れと自分自身に対する罪悪感。イライラとした焦りに似た気持ちな

なんていくらでもある。こんなゲームにマジになっちゃってどうすんのって思ったことだつてないとは言えない。

でも、何かに熱中することが、悪いことばかりとは思いたくない。ゲームは確かに虚構だが、そのゲームに熱中しているオレの気持ちは本物だから。

その時間がまったく通用しないなんて思いたくない。

過ごしてきた時間が無為だったなんて。

生きてきた甲斐がなかったなんて。

誰だつて思いたくないはずなんだ。

ただのデータにすぎなくても、いつかはなくなってしまふものでも。

オレにとってはゲームをする時間はかけがえのないものだったから。

感傷的すぎるか？

そんなオセンチなものじゃないけどな。

ただ誰にだつて否定されたくない時間つていうのはある。

ただそれだけの話。

その証明のために、幼女先輩を倒す。

そのためには、考えなくては——いけないのだが……。

思考がうまくまとまらない。

北と南いずれかが幼女先輩である現状、北はその技量からして幼女先輩だろうと思われる。

しかし、南は平地で比較的警戒がしやすい。

オレに一言も連絡なしにやられるか普通。いや——偶然ヘッドショットなんてこともなくはないだろう。

事実だけに目を向ければ、北はほんの点にしか見えない顔を正確に狙つてくる凄腕スナイパー。南は得体の知れない謎のアサシンつてところだが、南のほうはまだありえる話ではある。麦畑前の平地エリアはスナイパーにとっては限界距離でもなんでもなく、およそ500メートル程度の十分にスナイプ可能な距離だからだ。もっとも——、車を遮蔽物にしながら警戒しているやつを真正面から撃ちぬく技量

が必要ということになるが。

可能性だけに限れば、北は幼女先輩、南はやはりプロ並の実力ということになるだろうな。

それで、だ。

オレはどちらに向かうべきなのかというのが問題だ。

東にいた仲間はいま北に急行している。オレはちょうど真ん中あたりで立ち止まっている。おそらくヒロちゃんたちはオレたちの待ち伏せを考え、麦畑に入ったあたりで匍匐移動しているはずだ。

北に行くべきか？

微妙な判断にはなるが、やはり幼女先輩を先に倒すべきだろう。

相手の位置がおぼろげながらもわかる今の状況しか勝てる見込みはない。

北だ！ 幼女先輩を倒す！

★
||

勾配を背にして、東と北の仲間はまだ生き残っていた。

北のやつはかろうじてという感じだけだな。既に何度かヘッドショットがまさされてるらしい。普通なら死ぬが、ゲーム的にはヘルメットがなければ即死だったというやつだ。

冗談っぽく言ったが、レベル3のヘルメットなら、ギリで耐えられるというゲームのシステム上の話。

もちろん、治療薬は尽きてるだろう。ポーション頼みで生きていけない。

「状況は？」

「つらみ」

「つらたん」

「余裕ありそうだな。おまえら……。で、なにしてんだ。交戦中じゃなかったのかよ」

「無理だべ。だってこっちは全然あたらねーし」と東。

「顔出したらやられるんだから、ゾンビ来るまで待ったほうがいいっ

て」と北。

「時間切れを狙うってことか」とオレ。

それもひとつの手かなとは思う。

相手もあれだけバンバン撃ってるんだ。ゾンビがかなり寄ってきてるはずだ。このまま圧死するのを待てばいいというのはわからなくてもない。

だが、そんな消極策で本当に勝てるのか？

相手はあの幼女先輩だぞ。

「オレには、幼女先輩の手のひらの上という感じがする」

「だったらオマエだってこいよ」

当然の反応だった。

でも顔を出したら即座に狙われる今の状況だと、どうしようもない。

沈黙が落ちた。結局、とりうる手段は最初からひとつだけだったんだ。待つしかない。そしてゾンビが幼女先輩を押し出すのを待つしかない。

猛烈に嫌な予感がするが、オレにはその予感を塗りつぶすだけの實力はない。ただの素人ゲーマーだから、やれることは限られる。

たったひとつだけ有利な点があるとすれば、銃を構えていない状態だと、このゲームはTPSであるということだ。TPSとはキャラクターの背中から撮影しているような視点のことをいう。だから、それを利用すれば遮蔽物に隠れつつ、敵の姿を捉えることができる。

いやもうひとつ有利な点はあったな……。

幼女先輩はひとりで、こっちは仲間がいるってことだ。

「幼女先輩がこちらに向かってきたら、全員で特攻をかけよう」

「まー、それしかないしな」

「リーダーが一番最初にキルされそう」

「うっせえ」

握ってるコントローラーが汗ですべりそうなくらいだった。

幼女先輩と戦ったことは何度かある。殺した数がナンバーワンだった幼女先輩には、当然殺された人も多いつてことだ。ゲームを長

い時間プレイする人間ならおのずと出会う。

幼女先輩は強い——というのはいまさらのことだが、その強さはとでもシンプルだ。シンプルに強い。

そのいずれもオーソドックスなチートの能力による。

チートというとゲーム的には侮蔑に当たるからそんなことは言わないが、そう思えるくらい神業としか言いようがないエイムのスピード、判断力、そしてゲームの知識に長けているんだ。

おそらく、幼女先輩が採る戦略は単純——。

ただ、ひたすら進軍し、こちらが照準を合わせる前に引き金を引く。それだけのことだ。

この意味がわかるか？

三人が撃つ前に三人に照準を合わせることができるとか——アホらしいと思うだろ。でも、それができるのが幼女先輩だ。

こちらができるのは人並に当たる距離までひきつけること。それしかない。

☆Ⅱ

芋虫みたいな行進から早幾年。というほど時間は経ってないけど、もうかれこれ数分はこの状態だ。だいぶん、南のほうに移動している気がする。

「みんな、ストロップ！」

ボクはみんなに声をかけた。

「どうしたデース？」と乙葉ちゃん。

「あの、そろそろ南側に到着したのに人いなくない？」

「幼女先輩が来たのは北側からだったということでしょうね。ここにいたチームの人たちはやられたか、それとも北に向かったか」

命ちゃんはあいかわらず冷静な分析だ。

「どうしたらいいのかな」

「そうですね……。ヒロ友のみんなに聞いてみるのはどうですか？」

配信画面を見るのは、若干、反則気味になるかもしれないので自重

してただけけど、みんなといっしょに楽しむのも目的だからね。今回は例外。ボクルール適用！ みんな許してくれるよね。

「じゃあ、みんなに聞くけど、これからどうすればいいと思う？」

『ヒロちゃん民主主義』『サーチ&デストロイ！』『エンジョイ&エキサイティング』『あー、匍匐解除して、しやがみの姿勢なら見えないまま遠くが見渡せるぞ』『匍匐のままのがよくね？ 幼女先輩に狙撃されるぞ』『だからしやがみでも見えねーって』『ヒロちゃんを撃つとか幼女先輩のファンやめます』

みんなの意見をざっと見ると、ふむふむ。

「しやがみの姿勢になるといいのか。そうしてみようかな」

っと、ボタンを押して——あれ、しやがみってどうするんだっけ？

Zボタンかな。

『おっと、ここで棒立ちプレイ』『姫プならぬ舐めプ？』『ヒロちゃん痛恨のミス！』『立ち上がれー立ち上がれーヒロちゃん！』『おいおい死んだわ』『ほんこつかわいいよ』『はよしやがめwwwwCボタン押しwwww』『ヒロちゃんが撃たれちゃう!!』『やめて撃たないで！幼女先輩やめて』

あわわわわ。

お、おち、おちつけ……。おちついてCを押せばいいだけだ。

ゾンビパワーでキーボードを破壊しないように優しく。

そのとき、蒼い空に、ターンという甲高い音が木霊した。

ボクの前方からだろうか。

弾が通過するとき现实的にもよく聞く風切り音。

ね、狙われております。おります！

「落ち着いてください。先輩」

命ちゃんが手を伸ばして、ボクのキーボードを押してくれた。

「あう……。ありがとう。後輩ちゃん……」

さすがにこれには申し訳ない気持ちでいっぱいです。

申し訳ない。不甲斐ない先輩で申し訳ない。

『これは伝説の介護プレイじゃな』『しやがむボタンもひとりで押せないヒロちゃん』『ヒロちゃんかわいいよヒロちゃん』『完全にちよんぼ

やしな……』『小学生だから仕方ないと思います』『地上に舞い降りたばかりの天使だからしょうがない説』『今のは温情じゃね?』『獲物の前で舌なめずりするのとは三流だぜ。幼女先輩じゃなくね?』『かもなー』

幼女先輩じゃないもうひとりか。

ここまで生き残ってることから考えても、相当強いんだろうな。

まあ、幼女先輩ならボクが立ち上がった瞬間に終わってただろうから、ある意味、運がよかったのか?

「先輩のミスが帳消しになるわけじゃないですけどね」

「うっ……」

命ちゃんが少しばかりボクに厳しくなってる気がする今日このごろです。

昔は素直な女の子だったのに。

「ともかく、移動しないとまずいですね。しゃがみ移動で少しでも距離を稼ぎましょう」

しかし、その時間は無かった。

また銃声が鳴った。パタパタと雨が葉っぱを打ち据えるような音。

ヒュッと風を切り裂く音が耳元を通過した。

散発的な音だから、たぶんアサルトライフルに消音機とスナイパーサイトをとりつけた装備だろう。

ボクたちがいるあたりをおおざっぱに狙っている。向こうがいる方向が全然つかめない。

みんながボクの周囲を固めて、盾になってくれる。

ダメージは不可避だった。

ヘッドショットではないから一撃死ではないにしろ、少ないダメージが入る。このままじゃ、ジリ貧だ。

「戦おうよー」

『ピンクとしては囮作戦を提案したい』

『囮作戦?』と、ボクはチャットで答える。

さすがにリアルで口を開くとバレちゃうからね。

『ここでひとりが残り応戦する。その間に残りはしゃがみ移動で微妙

に位置を変える。相手としては見えてる敵を減らしたいだろうから、きつと囿に食いつくだろう』

『それなら、みんなで移動したほうが良くない?』

『いや、ヒロちゃんといっしょにいたいという思いから、べったりくっついていたが、冷静に考えると勝率をあげるだけなら、周囲に展開したほうがいいぞ』

まあ確かに――。

ていうか、それって最初、命ちゃんが提案してたけど、みんなが蹴つたんじゃなかったっけ。

でもここにきて、ついにピンクさんも本気を出したということだろう。

『待つてくだサーイ。それならここで残るのはわたしのほうがいいはずデース』

『どうして?』

『わたしが一番イラナイ子だからデース』

いきなりイラナイ子宣言されちゃったよ……。

『乙葉ちゃんはイラナイ子なんかじゃないよ』

そうチャットにうちこむと、なんだか妙な熱視線を感じる。

横を見ると、乙葉ちゃんがうるうるると涙でにじむ瞳でボクを見ていた。

いや、そこまで感動すること言っただけ?

『ピンクとしては、提案者である自分が囿になりたい』

ピンクさんがかつこいいいな。

でも、そうさせてしまってもいいものなのか。このゲーム、死んでしまうとチャットはできなくなる。リアルで近くにいる乙葉ちゃんと命ちゃんはべつとして、ピンクさんとはいったんコミュニケーションをとれなくなっちゃうんだ。

それが少し寂しい感じも。

『ヒロちゃんは何も問題なく、見てこいピンクと命じればいい』

『それは死亡フラグだよ……ピンクさん』

『ピンクもただで死ぬつもりはない。さっきのヒロちゃんみたいに立

ち上がったあとにはすぐにしやがむつもりだ』

ピンクさんの悲愴の覚悟——なのかな。

ともかく自分が囿になることには矜持があるらしい。

『じゃあ、お願いするね』

『任された。一度……言ってみたかったんだ』

え、なにを？

『ここはピンクに任せて、先に行け！』

それも死亡フラグだよ……ピンクさん。

ハザードレベル61

ピンクさんの犠牲は無駄にしない！（死亡前提）

ボクたちは、麦畑を北側に向けて匍匐を開始する。

その間も銃撃は散発的に続いている。麦畑のおかげで向こう側もヘッドショットが狙えるほど正確な狙いではないけれど、方向だけはバツチりばれてる。

ピンクさんがついに立ち上がり、適当に手榴弾を投げた。

ところで手榴弾って、しゅりゅうだんと呼んだり、てりゅうだんと呼んだりするけど、どっちが正しい呼び方なんだろうね。なんとなく、てりゅうだん呼びのほうがプロっぽいけど。

答えはどっちでもいいらしい。

ピンクさんが時間を稼いでいるうちにボクたちも動かなくてはならない。

『ごつちだー！』

ピンクさんがゲーム内チャットで叫ぶ！

もちろん、相手にも伝わってるはずだ。

タン、タタタとアサルトライフルが響き、ピンクさんの身体から血しぶきが舞った。少なくともダメージ。ピンクさんも負けじと反撃する。

相手の居場所はなんとなく撃たれた方向からわかる。けど、向こうと違って正確な位置まではわからない。ただの牽制だ。

数秒後、ドンつという音とともに手榴弾が破碎。衝撃はたいしたことはない。

なぜなら、投げ入れた手榴弾は——スモークグレネード。

煙が周りに散布されて空間を覆い尽くすタイプだからだ。

ピンクさんが近くを駆ける音がする。

ボクたちもこれを機にゆつくりとだが移動を続ける。

ピンクさんは南側に駆けて——。

ボクたちはやや北側のあたりで待機。

うー、緊張する。霧みたいないない煙にまかれて何も見えなくなる。

その間も、銃撃は続き――。

仲間内だけに伝わるチャットで、ピンクさんから通信が入った。たぶん、ゲーム内で短い距離だけ伝わるチャットは、キャラがしゃべってる設定で、仲間内だけで伝わるチャットは通信機で話してる設定なんだろうな。

『ヒロちゃん』

『ピンクさん大丈夫なの?』

『一応、適当なところで伏せた。かなりダメージを受けたが、なんとかピンクは死ななかつたぞ』

『良かった』

『ああ……これで、状況はイーブンだ。あとはヒロちゃんの健闘を祈る』

『あの、ピンクさん死にそうな感じなんだけど、大丈夫なんだよね?』
『あと数十秒程度は大丈夫かもしれないが――おそらく持たないだろう』

『え、どうして? 相手からも隠れたんだよね』

『ああ……だが騒がしくすぎた』

ボクは気づく。

いつのまにか、ゾンビ特有のうなり声が近くでしていることに。

いよいよ他エリアからもゾンビが集まってきたらしい。

このゲームって優勝しても、その後ゾンビに食べられちゃってるよね……。

それはそれとして、ピンクさんが言いたいことはわかった。

いま、ボクたちは麦畑に隠れてる。ゾンビも視界は人間と同じだから、すぐには見つからないけれども、ピンクさんは銃撃を何度もおこなった。

音をたてすぎた。

だから――、ゾンビに居場所がばれてる。

『ピンクは、ヒロちゃんと遊べてうれしかった』

『ピンクさん……』

『ピンク消えるのか?』『毒ピンはいいやつだったよ』『ピンクがナディ

アみたいに慌てふためくの希望』『おいみんなのトラウマはやめろ』『ゾンビだらけの戦場。これは持久戦かな』『ピンクの漢っぷりよ』

配信画面を見ると、ヒロ友のみんなもピンクさんの奮闘ぶりをたたえていた。

『ボクもうれしかったよ！ また遊ぼうね（死亡前提）』

『了解した。マイシスター。ピンクはヒロちゃんと遊ぶためにいろいろと勉強したんだ。だから、こういうときのお約束も知ってる！』

お約束にすっかり強くなってしまったピンクさん。

最初は科学的な知見でゾンビのことばかり話していた気がするけれど、打ち解けるにつれて、いろいろなことを話したり相談してたりしていた。

外国の科学者さん。

いまではボクの友人だ。

『地獄で会おうぜ。ベイベ』

ドオオオオオン。

という、すごい音が聞こえてきた。

手持ちの手榴弾を全部使ったの最後の特攻だ。

おそらく敵がいるあたりに向かって最後のダッシュを試みたのだろう。

ピンクさんとはまたいくらでもいつでもゲームできるし、これで終わりってわけでもないと思うけど、やっぱり、少し寂しいな。

相手は一発も反撃しなかった。ただ、手榴弾を投げて大きな音をだした。ピンクさんは、必然的にゾンビに囲まれることになった。棍棒みたいな対ゾンビ兵器を持ってないピンクさんになすすべはない。映画みたいにあサルトライフルを撃ちまくっても囲まれて終わりだ。

『嫌だあーっ!! ピンクはまだ死にたくない!!』

あ、やっぱりそっちも押さえてたのね。

ピンクさん——死亡。

残り8名。

★
||

ターミネーターかよ。

北側の麓から、幼女先輩がやってくる。

ただ悠然と。ただ漫然と。ただひたすらに、朝の散歩をするみたいに気軽な調子で。なんの障害物もない山肌をこちらに向かって歩いてきているんだ。

「クソ。舐めやがって！」と東が悪態をついた。

「威圧感がすさまじすぎるだろ。笑えてきたわ」と北。

確かにそう思うわな。

じわりじわりと壁が迫ってくるようなものだ。幼女先輩の背後には、大量のゾンビの群れ。

まさしく押し出されたわけだ。オレたちが意図したとおり。

いや、あれが押し出されたといえるか？

まるで、魔王の足取りだぞ。ゾンビの歩行速度は例によって遅いから、歩いていても追いつかれることはない。

それでも背後から大量のゾンビが迫ってきていたら、普通はもっと焦るだろ。

ましてやこっちは複数人待ち構えてる状況でだぞ。

残り200メートル。100メートル。

鼻歌まじりに歩いていっているような足取り。

「いいか。残り50になったら、オレとオマエで特攻をかける」

オレが指示を出したのは、東のほう。北のやつはもうボロボロで身体のどこにでも当たったら死にそうだからな。

一発ヘッドショットかまされてもギリギリ死なないで済むオレたちふたりが盾になり、その間に投擲武器でも投げてもらっていたほうがいい。

ただオレたちも即死亡にはならないとはいえ、ヘッドショットを喰らったら数十秒間はその場で気絶扱いになる。気絶といつてもはいつくばつての移動はできるが、これもゲーム的な都合だ。ただ、その数十秒はもはや致命的といえるだろう。回復する間もなくやられてしまう。

「それでいいか？」

「それしかねーだろ」

「ヒロちゃんに大好きって言われたかったぜ……」

「なんで死ぬの前提なんだよ」

まあこんなシチュエーションめつたにない。対幼女先輩戦でも珍しい。

それだけ、幼女先輩も今回の戦いに力を入れているってことか。

オレだって——気持ちは負けてない。

90。80。70。

TPSの視点で、反対側の斜面に隠れながら相手を視界に入れる。

胃や心臓がきゅつと縮まって、こめかみのあたりが熱を持つ。

心臓のリズムが早い。

ド、ド、ド、ド、ド。

オレはこの場から一步も動いていないのに、全速力で走ったときみたいに、肩で大きく息をしていた。緊張感で死にそうだ。

60。

もう相手の姿は完全に射程範囲に入っている。

オレたち素人でも十分に殺傷できる範囲。これなら、超人的なエイム力なんていらぬ。ただひたすらに——、やみくもに撃ちまくるだけだ。

そして——。

オレは、あつと息をのんだ。

唾がねばついていて、うまくのみこめない。

奴は、あとわずかの距離で、オレたちが特攻をかけようとする手前で、急に立ち止まったんだ。

「……剣の達人とかがさ」東がぼそりとつぶやく。「こっちが攻撃しようかなというギリギリのところ、すつと退いたりすることがあるんだよ。まさにそんな感じじゃね？」

「こんなときになに言ってるんだ？」と北。

「いや、あそこで停止するって普通できないだろ。逃げたくてたまらんわ」

「いまのこの状況のほうが絶対的に有利なんだ。見てみる、あいつの背後にはゾンビが迫ってる。もうあとわずか数十秒も待っていれば、なにもしなくてもゾンビに飲み込まれて奴は終わりだ」

「けどよ。あそこで立ち止まる意味ってなんかあんのかなあ」

確かに、それはそうだ。

こちらに対していずれは攻撃をしかけなければ——、この場所を突破できなければ幼女先輩に勝利はない。

時間は、奴にとって不利に働く。

なのに何故立ち止まる。

ゾクリとした。脳がアドレナリンを放出しているのがわかった。それはオレ自身もよくわからない、言葉にできない何か第六感のようなもの。

長年のゲームの勘としかいいようのない感覚だ。

「後ろだ！」

無意識にオレは叫んでいた。

同時にオレたちは銃声を聞いた。もう飽きるほど聞き慣れたアサルトライフルのダルルルルルルという音。弾丸がシャワーのように降り注いだ。

瀕死の状態だった北が一瞬にして死亡し、オレと東はもうほとんど無茶苦茶にころがる石のように、岩肌隠れた。

わずか数秒で戦況は変わっていた。

意識がほとんどなかった背後から撃たれたんだ。反撃なんて出来ようはずもない。岩肌隠れたことでかろうじて全滅は免れたが、絶望感と自分に対する無力感がひどい。おそらくは東も同じような感想を抱いてるはずだ。

「ちくしよう。なんでこんなときに邪魔が入るんだよ……」

「幼女先輩だ」

「あん？」

「後ろから仕掛けてきたのも幼女先輩だよ」

「うそだろ。ニキヤラ同時プレイか。あれって単なる噂じゃなかったのかよ」

「噂じゃねえよ」

少なくとも長年ゲームをやってるやつならみんな知っていた。そこに思い至らなかつたのは、オレのミスだ。クソ。状況は最悪だ。

北側に対する有利なポジションは無くなり、オレたちは挟撃されている。

どんなに幼女先輩がチート染みた攻撃力を持っていったって、さすがに複数人の攻撃を受ければノーダメージはありえないはずなんだ。

幼女先輩の心理的誘導に完全にハマってしまった。攻撃しても勝てないんじゃないかと思わされていた。

もう今にも北側の山頂から、幼女先輩が顔を覗かせて、オレたちは圧殺されてしまう。こんにちわ死ね。あるいは——、死ぬがよい、か。ちくしよう、馬鹿にしやがって。こんなところで死ぬるかよ。

「反撃するぞこのやろう」

「どうやって?」

「まずはスモークを炊く。それで南側から見えなくなったところで、最初に北にいるやつを速攻で倒す」

「返す刀で南側を討つというわけか」

「ああ」

もちろん、そんなのは理想論に過ぎないのはわかっている。

スモークを炊いたところで煙が晴れるまでに稼げる距離はたかが知れている。相手からはだいたいの方向性がわかるのに対して、北側のやつがどう動いたかわからない。

つまり、サツカーのPK戦みたいなのに、こっちは向こうが北西方面か、北東方面か、あるいは正面からくるのかわかりようがないってことだ。

対して向こう側からはわかってる。エイム力の差もあるが、それ以外にも情報面で負けている。最初から勝負になっていない。北側のやつの装備がスナイパーライフル以外に持ってないという可能性もあるだろうが、そんな楽観論では勝てるはずもないだろう。最悪を想定するならアサルトライフル持ち、岩肌から山頂部までは指間の距

離しかない。

近距離であれば、馬鹿でも当たるアサルトライフルだが、ほんのわずかなエイム力の差が如実にあらわれるともいえる。

「どうするんだ？」

「決め打ちするしかない」

まさにサツカーのPK戦と同じだ。だいたいの方向を予測して、最初から決めておかないと勝負にすらならないだろう。

迷っていたら、ダメだ。

モラトリウムはもうおしまいにならないと――。

「いくぞ」

相方にスモークを北側に向かって投擲してもらい、煙で真正面が見えなくなつたところで駆け出す。

南側の幼女先輩から当然の権利のように撃たれまくつたが知るか。

運悪く、腕が跳ね上げ――「うっ」というキャラのうめき声があたり響いた。続く銃撃、オレたちはジグザグに機動しながら、山頂に到達。

わずか二秒後に、そのまま真正面に向かってエイムをあわせる。

頼む、いてくれ！

オレの儂い祈りが届いたのか、奴は真正面にいた。

ただし、距離が近い。奴はもうあとわずかですべて山頂に到達しうるほどの距離だった。顔が見えるくらいの、5メートルも離れていないところにいたんだ。

こちらにも向こうも接敵の可能性は頭の中にあつた。オレの人生の中で、これほど集中したときは無いと断言できる。時間が水の中を進むようにゆっくりと感じられ、静寂とした山中で、聴覚器官を通じて銃声を聞いた。

オレは――あえて徒手になつた。

この距離ならCQCが使える。このゲームで接近しているときのみ使えるコマンド入力式の攻撃方法だ。

簡単に言えば、画面上にあらわれる矢印を順番どおりに入力していつて、相手より早く入力し終わると攻撃が成功する。柔道の投げ技

みたいに地面に叩きつけることができるんだ。

「現われた矢印は全部で五つ。

仕掛ける側のほうがワントンポ速いのは必定。

裂帛の気合をこめて、キーボードが壊れるんじゃないかと思うほどのスピードで叩きつけた。

が、——三つ目を入力したあたりで、幼女先輩は既に入力を終わっていた。

入力スピードも超一流かよ。

背中を地面に叩きつけられ、オレは数秒の硬直状態に陥る。

勝負には負けた。

能力的には天と地ほどの開きがある。

だが、わずか一秒。

その格闘戦で一秒は時間をとられた。

それだけあれば、問題ないだろう——。プロじゃなくても、普通の人間でも……、このゲームに死ぬほど時間を割いてきたんだからな。

「うおおおおおおおおおおおおおっ！」

東のやつがめちやくちやに銃を乱射した。

超近接であれば素人だろうがなんだろうが、絶対に当たる距離で、一秒も硬直しているんだ。

当てるのは難しくない。

火線がいくつも突き刺さり、ゆらりと奴の身体が倒れるのを見た。やった！

幼女先輩だつて無敵の超人じゃないのがわかった。

それだけでも収穫だ。

「やったぜー！」

東のやつが喜悦の声をあげる。きつと画面越しにガッツポーズしてるだろう。短いながらも、そんな喜びがにじんてる文面だった。

つかの間。

その次の瞬間には、タタタタタという甲高い音が耳元で響いた。ヘッドホン越しに伝わってくる残響。

知ってたさ。

オレの傍に立っていた相方は、あつけないほど棒切れみたいに簡単に倒れ伏した。そうだよな。あんたは北側を切り捨てて、南側のキアラを寄せてくるはずだもんな。切り捨てるスピードがとてつもなく早い。

幼女先輩は早々に北側に見切りをつけて、南側のほうに注力したんだ。

オレは倒れていて動けない。

硬直が解けるまではあと数秒はかかる。

もう運命は決した。

とつさに考えたのは、生きあがいてもいいのかもしれない——ということだ。

みつともなくても、見苦しくても。

他人にとつてはどうでもいい身の上話をする——。

オレには両親がいて、大学の入学金も生活費も払ってくれていて、オレはなにひとつ憂うことなく、大学生生活を満喫できたんだ。

そんな両親と、あの日を境に連絡がとれなくなっちゃった。

もちろん、考えなくてもわかる。ゾンビになってるんだろう。

きつと、いまでもうなり声をあげて、思考の停止した状態で、オレの帰りを待っているんだろうと思う。

もしも、優勝してヒロちゃんに——『ゾンビから人間にもどれ』といってもらえたら、両親を治せるんじゃないか。なんでも好きな言葉を言ってもらえる権利。誰がとは言っていない。そんな魔法の言葉をヒロちゃんは持っている。きつと優しいヒロちゃんのことだ。ごり押しすればもしかしたら、そんなこともありえるかもしれない。

そんな淡い期待があったのも確かだ。

無駄な時間が無駄じゃなかったと、そう自分に言い聞かせたいだけかもしれない。親元から独り暮らしを始めただけで大人になったと思いきんでた自分が、何かひとつでも自分の力だけで達成できたと報告したかっただけかもしれない。

そんなガキっぼい思考——。

幼女先輩は聞く限り、独り身で大人だ。

きつと、このゲームにも彼なりの矜持で参加しているんだろうが、身を引いてもらうことはできるんじゃないか……。

そんな独りよがりな考え——。

オレはただ、いままでの自分を否定されたくないから、そんな考えを持つちまつてる。

でも、それでも——。

オレはキーボードに手を置いたまま、じつと耐え忍んでいた。

胸の奥から言葉が飛び出していきそうなのを、ただこらえていた。

オレにも意地があつたから。

ゲームは遊びだからこそ、純粋なまま置いておきたかったから。

画面いっぱいには幼女先輩の姿が映つた。

終わり、だ。

オレは耐えたぞ。少なくとも卑怯な真似はせずに、全力で幼女先輩と戦つた。

最後の一秒。

オレはキーボードに打ち込む。

懇願の言葉ではなく——。

「あんた、強かつたよ」

ただの賞賛の言葉だ。

わずかに身じろぎし、来るとは思つてなかつた返答がきた。

「ありがとう。君も強かつた」

………こうして、オレの戦いは終わった。

★
||

はじめてプロにかけてもらった言葉は案外、そつけなく、でも親切で、寂しさと悔しさも湧いたけど、また、ゲームをしたいと強く思つた。

だつてさ、プロに強かつたといわれたんだぜ。

リップサービスかもしれないけどさ。

無駄な時間じゃなかつたって思つてもいいよな？

『いやー、やられちゃったー』『おつかれー』『どっちも幼女先輩だったってマ?』『マジマジ』『うっそだろおまえ。幼女先輩どうやってプレイしてるんだよ』『そりゃ、手と足に決まってるだろ』『そのうち口とかでもプレイして三人キャラプレイとかしそう』『人間わざじゃねえだろwww』

配信のコメント欄では、みんながオレを暖かく迎えてくれた。

既に仲間が状況を説明しているみたいだ。

まあ、あんな神業プレイされたら、みんな驚くよな。

ヒロ友のみんながゲーマーってわけでもないから、幼女先輩のすごさを始めて体験したやつも多いだろう。

そのとき唐突に、

「幼女先輩って二キャラプレイだったの?」

ふわりと、

天使がオレに舞い降りた。

いや、正確には天使の声。ヒロちゃんの声だ。

「ぶにくら様さん、おひさです。今日もいっしょにゲームしてくれたんですね。ありがとうございます。うれしいです」

覚えてて、くれたんだなって。

そう思うと、胸の奥が熱くなるような気がした。

「ぶにくら様さんがひとり打倒してくれたおかげで、勝つ目ができたよ。ボク、幼女先輩に勝つからね。ちゃんと見ててね!」

その時、本当に無駄じゃなかったって思ったんだ。

ハザードレベル62

最終決戦だった。

「幼女先輩がいまいるのは間違いなく北側だよね」

ボクはアサルトライフルから手を離して、ふたりを仰ぎ見る。

「ここまでできたら後は優勝までがんばりましょう」

と、命ちゃん。

いつものクールな調子とはほんのちよつと違う。

自信に溢れてるってわけでもないけれど、本当に幼女先輩に勝つつもりなんだ。

「わたしにはヒロちゃんをお家にお連れする使命がありマース」

同じく乙葉ちゃん。

こちらもお上気した顔で、興奮しているみたい。

白人の血が半分混じってるせいかな、抜けるようなほっぺたが赤くなっている。

「そうだね」とボクはうんうん頷いた。「ボクたちは素人の集団なんだから、できることをやろう」

命ちゃんのゾンビ戦略によって、周りはゾンビがぽつぽつとうごめいている。

あまり派手な動きはできないし、最後の銃撃戦はきつと一瞬だろう。

あとは——『奇策』。

命ちゃんが思いついた作戦のひとつだけど、こちらはどうまくいくかな。

わからない。

でも、手を抜くつもりはない。

ボクたちはピンクさんの助言に従い、既に散開している。

北側に向けて、扇形に広がり、少しでも死亡リスクを減らしている。

飽和攻撃が一番重要だ。

でも、向こうの位置がわからない。

こちらだってしやがみの姿勢だから、わからないはずだ。

動けば、麦畑がほんのちよつと不自然に動くだろうけど、動かなければ問題ないはず。

ゾンビがボクのそば、ほんの数メートル先をうろついていた。特に動きが早くなつた様子はない。

「最終エリアに入りました。あと五分で勝負がつきます」

『なんか緊張してきたぜ』『なんでオレ君が緊張するの?』『幼女先輩と直接対決とか榮譽みたいなもんだからな』『われらがヒロちゃんなら……ヒロちゃんなら』『あふれ出る才能で神エイムはできるだろうけどその他が普通だから……』『むしろポンコツだから……』『冷静に考えたら、ヒロちゃん何もしていなくね?』『バトロワだからよくあることだ』『幼女先輩ひとりで五十人くらいキルしてね?』『幼女先輩にはよくあることだ』『幼女先輩という異能生存体』

なんだよそれ。

幼女先輩、あなたは殺しすぎた。

そのとき——、不思議なことが起こつた。

いや不思議でもなんでもなし、太陽の使者でもなんでもなし。でも奇妙なことに——この状況で命ちゃんが動いた。

その場で立ち上がり、ダッシュで北側に向かつたんだ。

普通の対戦相手だったら三対一の状況。

エリアが塞がれるまで持久戦のほうがいいに決まつてる。

でも、そんな消極策だと勝てない。

これが最後の奇策。

命ちゃん最後の奇策——。

それは——。

狭いエリア内でのさらなるゾンビトレイン。

投擲武器を北側に投げて、ゾンビ避けを著しく困難にする。

タンつという甲高い音が響いた。

命ちゃんが一撃でヘッドショットを受けた。当然の権利のようにヘッドショット決めるのどうかしてるけど、幼女先輩なら仕方ない。

命ちゃんは気絶状態になって事実上の交戦能力をうしなつた。

コマ数秒。

命ちゃんはもはや自分のいのちを勝利の天秤へとかけている。

「2時の方向です。アイドル。早く！」

乙葉ちゃんもスクッと立ち上がり、さらに投擲武器を投げる。瞬時に撃たれた。

本来なら持つてるグレネード系は全部投げる予定だったけど、一投するのが限界だった。

ふたりが気絶状態になった。あとはもう一撃ずつ加えればふたりは死亡する。

当然そうするだろうと思っていた。

でも、幼女先輩はその場に居続けることができなかつたらしい。身を潜めていた麦の海原を越えて、いよいよこちらに向かつてきている。

数十人規模のゾンビの群れをアサルトライフルで片付け――

ボクはここでエイムをあわせ、ん？

けしつぶような何かボクの目の前に転がってきていた。

「グレネード!?… 何こで？」

ボクがいるあたりをなんとなく扇形の陣形から逆算された？

瞬間的な判断で、転がりまわり、ボクはその場を飛びのいた。

ドオオオオンという音が近くで巻き起こる。

間一髪だった。プロテクターレベル3がなければ少なくないダメージを負っていただろう。例によって、ガチガチに装備を固めている姫プレイじゃなければ、今で終わってたかもしれない。

でも――。

こちらを探し回っていたゾンビたちが、一斉にこっちを向いた。

幼女先輩と同じ状況になったといえる。

必死に近くのゾンビたちを排撃する。

こちらはまだ数は多くない。冷静に排除すれば、こっちのほうが先に攻撃できるはずだ！

『ああ、やっぱりゾンビ風呂は最高やなって』『こうなってくると、近くにいるゾンビをまずは排除しないとさっつくり食われるからな』『幼女先輩の無双っぷり』『ヒロちゃんもなかなかがんばってるな』『後輩

ちやんたちが先にゾンビたちをひきつけたからだぞ』『これは攻撃態勢が整うの、ほぼ同時か』『熱い展開』『どつちが早く照準合わせて撃つかってやつか』『エイム力だけならヒロちゃん最強説あるからな』『謎のエイム力か』

そう、エイム力だけなら――。

ゲーム自体はさほどうまくないボクでも、ゾンビになったことで素の能力は引き上げられている。その最たるものが、動体視力。

いまの手榴弾が投げ入れられたのだって、普通の人はたぶん音で気づく。

でもボクは見て避けるの余裕でした。

そして、身体制御能力もあがっている。

精細なエイムも可能だ。

これだけなら、幼女先輩にも引きをとらないと思っている。けれど――。

あ、と思った。

最後のゾンビを倒しきった後、いざ幼女先輩に視界を合わせて最後の一撃を算段していたら、向こうはもう倒し終わった後だった。

倍ぐらいは向こうのほうが多かったはずなのに。

やられちゃう！

また、あの甲高いスナイパーライフルの音が聞こえ――。

ボクは死を覚悟する。

「あれ？・死んでない」

『幼女先輩が場を整えました』『後輩ちゃんと乙葉ちゃん死亡確定』『べつにヒロちゃん撃つても勝てたんじゃね？』『仲間が全員気絶状態になれば必然的に終了だしな』『ああ……幼女先輩がゆつくりと歩いてきてる』『ゾンビうごめく麦畑で天使みたいなヒロちゃんと悪魔みたいな幼女先輩が最終決戦』『控えめに言って神回やな』

そして、幼女先輩はぴたりとその場で足を止める。

もはや、身を隠すとか戦略とかそういうのはなくなった。

いろいろと幼女先輩におもんばかってもらった結果かもしれないけれど、ようやくここまで来れたんだ。

あとは――。

「そのキレイな顔をぶつとばしてやるからなあ」

『ここに来て悪役台詞は草』『ヒロちゃんが小学生並の悪態をついておられる』『先生に言いつけますよ』『小学生らしい素直な態度じゃねえか』『どっちかというところあつさり倒される雑魚の台詞』『ヒロちゃんは小悪魔の素質あるよ』『お兄ちゃんはヒロちゃんの将来が心配です』『勝利を！』『ピンクはヒロちゃんの勝利を信じてる！』『先輩勝ってください』『わたしもヒロちゃんが勝つと信じてマース』

みんなが応援してくれてる。

ほんのわずかな間の、幻みたいな関係かもしれないけど。

ボクはみんなから応援してもらって、後押ししてもらって、ゾンビとは異なる連帯を感じていた。

そう、こういうのをなんていうか。知ってる――。

負ける気がしない。

あ、ヤバ。フラグだわそれ。

絶対に勝つ！

これぐらいでいいんだよ！

「いくぞおー！おーっ！」

『いかないで』『STAY』『いきなり止めるなww』『最後の一撃は』『せつない』『どっちが早撃ちできるかっていう単純勝負』『現実世界もゾンビだらけなのになんでゾンビ配信見てるんだろうな』『唐突に我に帰るなよw』『この速さなら言える！』『ヒロちゃん大好き！』『オレもオレくんのこと好きだよ』『アッー！』

ゾンビ特有の超集中でもって、いまある既存の時間を緩やかにする。

これはもしかしたら特異的な時間操作も入ってるのかもしれない。

水の中にいるみたいに時間がゆっくりなって、幼女先輩の腕がわずかずつ上がっていくのをボクは知覚する。

これならボクのほうが速い！

ボクは映画マトリックスみたい超反応でマウスを操作した。

幼女先輩の頭蓋にエイム。

あとは、左クリックを押す！

押せ！ 勝った！

「あ？」

カチリという音が無常にも響いた。

いまだ加速装置をつかったみたいにゆっくりとした知覚状態だったボクは、だからこそ、その状態に恐怖した。

ゾンビに足をつかまれていたんだ。

たった一匹倒し損ねたゾンビに足をつかまれて、”ふりほどぎ”の動作に入ってしまったっていた。

こんな——、こんなところで。

ゾンビさんに裏切られるなんて。

当然、そんな大チャンスを幼女先輩が逃すはずもなく、最後はあつけない幕切れを迎えた。

『あーあ』『ゲームのゾンビは厳しかったよ』『普段ゾンビを操れるからこそその慢心』『エイムだけならギリ勝ってた気がするんだけど』『明日があるさ』『ヒロちゃんの初めてのバトロワを見てよかった』『え、一回で終わり。二回戦あるだろ当然』

「みんな、お疲れ様ー。二回戦はちよつと疲れたらから休憩してからにするね。あと、幼女先輩優勝おめでとうございます！」

みんなすぐにでも二回戦を始めたそうだったが、案外いいところまでいけたからボクとしては満足です。

☆
||

みんなで、ゲームプレイの感想を言い合ったり、みんなのプレイを振り返ったりしているのも楽しい時間だった。

こんなに多くの人と楽しい時間を共有したのは、あとにも先にも初めてだ。

いろいろあって、人間不信になったボクだけど、やっぱり、ボクには命ちゃんや雄大だけじゃなくてさ、みんなも必要なんだ。

名前も知らないけど、なんとなくいつしよの時間を共有できる人た

ちとして、ヒロ友のみんなが必要なんだ。

それはきつと独りよがりな喜びなんだろうけど。

一瞬だけの激しい花火のようなうれしきというよりも、鈍い喜びが充満している感覚。誰かといっしょに楽しさを共有できるって楽しいよ！

ボクはそんなことを思っていた。

『ところで優勝商品はいつもらえるのかな？』

にぎやかなワイワイとした配信画面の中で、幼女先輩が控えめにコメントを書いてくれる。今回の優勝者。悔しいけど、その実力の前では素直に賞賛の気持ちしか湧いてこない。

ほんの冗談で言った『好きな言葉を言う』という商品だけど、幼女先輩もほしかったのかな。

そうだと、少しだけ恥ずかしいけどうれしいな。

「えっと、いつでもいいですよ。幼女先輩が言ってほしい言葉ってなんでしょうか」

『わたしがヒロちゃんに望むのは、ある質問をして、ソレに対する答えかな。答え方は自由でいい。感じたままに答えてくれればいい』

「うーん？ どうぞ」

よくわからなかった。

でも、なににせよボクは素直な気持ちで答えるだけだ。べつに幼女先輩が優勝しなくても、そうするしかないしね。

『質問は簡単だよ。君はこれからも配信を続けたいかな？』

予測していたよりもシンプルな質問だった。

ボクは配信者としてもまだまだヒヨコ状態で、たまたまゾンビ能力がみんなに求められてるからこそ見られてるだけの一発屋に過ぎないと思う。

きつと、ゾンビがない世界なら、ボクは無名のままだったろうなとも思う。

でも、それでも――。

「ボクは続けたいです。みんなといっしょに楽しみたいです」

『なんやこれ天使がおる』『ガチ恋』『ガチ恋』『きらめくような笑顔が

まぶしすぎる件』『もういまから外に飛び出していつてすぐに抱きしめたい』『おっさんゾンビに抱きしめられるだけだぞ』『天使様 天使様 天使様!』『あやしい宗教団体はNG』『はやくゾンビを人間に戻す技術を教えてくれ』『そもそも幼女先輩が聞くべきはゾンビを人間に戻す方法だった?』『いや、幼女先輩は正しいことを聞いたと思うけどなー』『ピンクもそう思います』

みんなもいろいろ考えてるんだろうと思う。

ボクだって、できることならゾンビを人間に戻したいんだけど。

いまのところボクにできるのは周辺のゾンビウイルスを死滅させることだけで、日本どころか佐賀県のゾンビを駆逐することすらできない。

幼女先輩にゾンビ浄化の方法論を聞かれてもきつと答えきれなかったと思う。

「こんな感じでいいんですか? 幼女先輩」

『ああ、その答えが聞けただけでも満足だよ。大切なのは君の考えだからね。いくら、環境を整えたところで、君にその意思がなければなんの意味もない。ゾンビハザードから人間を救うのだって、君がそう思わないと意味がないんだ』

「ボクの考え?」

『そうだ。とどのつまり、君が人間のことを滅ぼしたくないと強く願えばそうなるだろうし、人間なんて滅んで当然だと思えば、きつとこのままゾンビに押しつぶされてしまうだろう』

「人間はゾンビよりも強いと思うけど。幼女先輩も死ぬほど強いし」というか、幼女先輩が百人もいれば、ゾンビ一億くらい余裕で倒せませんかね。

それは言いすぎかもしれないけどさ。

『ゾンビは先ほどのゲームにおける障害物みたいなもので、本当は人間どうしのほうが怖いよ』

書いてはなかったけれど、人間どうしの殺し合いという言葉が透けて見える気がした。そしてそれはボクもわかっていることだ。

「そうかもしれない」とボクは答えた。

ホームセンターでの、みんなの言い分。
みんなの軋轢。

人間どうしのいさかい。

そういうのもボクは見てきたし、感じてきた。

ゾンビが最終的に侵入してきたのは結果で、みんなが死んだのはゾンビじゃなくて人間同士の抗争が原因だ。

『楽しい配信で空気の読めない発言をするようで悪いが——、人と争うのはいつだって人だ』

「ボクもそう思います」

『でも平和になりたいと願うのもまた人間だからね』

「幼女先輩は大人ですね」

幼女先輩ってハンドルネームだけど、その応答はいつだって落ちついた大人の人を思わせた。そもそも大人の冷静な判断能力がないとあそこまで戦闘能力が極まってないと思うけどね。

『わたしなんてまだまだひよっこもいいところだよ。でも君のような子どもが他人の幸せを願えるのなら、大人としてかっこつけたいとは思うね』

「幼女先輩はかっこいいですよ。実際」

『幼女先輩がヒロちゃんにかっこいいといわれて嫉妬』『ピンクも嫉妬』『ピンク、おまえは休め……』『実際、最強チートキャラだよな。幼女先輩』『幼女先輩という名前はアレだけどな』『まあ幼女というのは最強なのは否めない』

『かっこいい大人にはなりたいと思ってるけどね。実際、わたしはただ独り身だし、どこか自分が大人になりきれしていない部分があると思うんだ』

「そんなもんなのかな。ボクにはよくわからない感覚」

『大人の仕事は君みたいなのがキラキラしたまま生きていけることだ』

つけくわえるように、言う。

『いい国っていうのは子どもが笑ってる国だよ』

それはボクもそう思う——。

ゾンビがはびこってる今のこの世界じゃ、子どもは外で遊べない。子どもの笑い声のかわりにゾンビのうなり声。

いい国とはいえないかもしれない。

『そんなわけでそろそろ落ちるよ。配信については続けてほしい。その意思は持ち続けてほしい。あとは大人の側はそれを全力でサポートするだけだ』

ふわりとにじませるような幼女先輩の言葉。

細心の注意が払われて、なおかつヘッドショットのように鋭い言葉がなげかけられているような気がした。

ボクだって生粋の小学生じゃないんだから、多少は世の中の機微がわかる。

幼女先輩はボクが人間不信に陥るのを心配しているんだろう。

それに配信中はたくさんの人が見ている。

その影響力も大きい。

混乱を望んでいない幼女先輩の配慮というものが、言葉の端々に見えた。

一抹の不安があったけど、ボクは直接的に聞くのは避けた。

きつと聞いたところでもろくな結果にはならないだろうし、そう考えたからこそ幼女先輩もあえて言わないでいるんだろうから。

派閥争いでも起こってるのかなと思う。

ここに来る前にマナさんにも言われてただけど、ボクという存在に対しては結局利権として捉えるか、排斥対象として捉えるかに二分されるんじゃないかって話。純粹にゲーム配信を見たいという人はマイナーで、ほとんどがゾンビ的な事柄に収束する。

幼女先輩はきつとボクのことを純粹に心配してくれてるんだと思う。

配信する場っていうのは思った以上に繊細で、もう配信できないと言われたら、きつとみんな萎えてしまう。

意思確認と決意はもう済んだんだ。

だったら、ボクはこれ以上、幼女先輩に問いかけるべきじゃない。

『じゃあ、そろそろ大人は仕事に戻るよ』

「幼女先輩。ありがとうございます！　また来てくださいね」
少しだけ遅延する。

その間に、幼女先輩が何を考えていたのかはわからない。

でも、答えはたった二文字。

「ああ」という答えのみだ。

★
＝

「さすがに余暇の時間に配信してただけで銃をつきつけられるとは思わなかったよ。自衛隊はもっとホワイトなイメージがあっただがね」

「スパイ行為じゃないんですかね」

「じゃあ、わたしのコメントのどこがどう問題だったのか指摘してもらえると助かるがね」

ここから撤退するとか、配信ができなくなるとか、電気がこなくなるとか、そういう作戦行動に関わることはまったく言っていない。

ただ、配信をファンとして続けてほしいといってるだけだ。

なにも問題はなからう。

きつと、久我くんはわたしが不用意な発言をするのをおそらく監視でもしていたのだろうがね。

それにわたしとしてはもはや伝えるべきことは伝えた。

あと、わたしができることはわたしのコネを最大限使って、上層部にゆさぶりをかけることだろう。

端的に言えば、今の状況は単なる人間どうしのみにくい派閥争いに違いはない。ゾンビが絡んでるだけで、ゾンビは蚊帳の外だ。ましてや国の宝である子どもなんて、まったく関係はないさ。

☆
＝

最後には乙葉ちゃんといっしょに歌を唄うことになっている。

こころの中では、さっきの幼女先輩の様子が気にかかるところだけ

ど、心配したところでしかたない。

まさかボクを直接的に拉致するってこともあるのかな。

でも、この場所は比較的安全だし、自衛隊の人がへりなりで近づいたらさすがに音でわかる。

そのためのもったくの初見の場所。ライブハウスなわけだし。

いざとなれば、みんなで撤収すればいいだけの話だ。

電気を停止するという線もあるのかな。

そんな馬鹿なっつて話でもあるけどさ。だって、ボクの声ってゾンビ避けに効果があるって実証済みなんだよ。厚労省だつてそう言うてるくらいだ。

もちろん、少なくとも人がネットに通じる設備もない状況で取り残されてるかもしれないけど、そうでない人にとっては、ボクの声は生命線のはず。

そうすると、電気切れでボクの声や歌を流せなくなったら、多くの人はゾンビになっちゃわないかな。

チラリと命ちゃんを見てみると、あいかわらずクールでわかりにくい表情だったけど、なんとなく幼女先輩の言動の意図するところに気づいているんじゃないかと思う。

対して、乙葉ちゃんは――

「どうしたですか。ヒロちゃん」

「ううん。なんでもないよ。乙葉ちゃんはどの角度で見てもかわいいね」

「ありがとうデース。でも、ヒロちゃんもかわいいデース」

どうやら乙葉ちゃんはわかっていない模様。

いや、もしかしたらわかっているのかもしれないけど、気づかないフリって線もあるのかなあ。

顔の表情や声の調子がわかる対面と違って、幼女先輩とは文字のやりとりしかしてないからなあ。なんとなくあのホームセンターでの出来事とか、そういう危険な状況、人同士の争いを経験してきてないとわからないような気もするんだよね。

だから、ボクは――、そのまま配信を続けることにした。

大ヒットを飛ばした有名曲を乙葉ちゃんとデュエットする。命
ちゃんはギター演奏だ。
いよいよファイナーレが近づいていた。

ハザードレベル63

乙葉ちゃんとの歌に入る前に、最後の休憩を挟むことにした。

幼女先輩との戦いは集中力を結構消耗したからね。もしかしたら緋色の翼が漏れ出ちやつたかもしれない。

そのくらい集中した。

だから肉体的にどうこうというよりは精神的に疲れちやつたのは確かだ。

それに――、やっぱり誰かに嫌われてるかもって考えると、少し胸の奥がざわつく感じがする。

休憩室に戻り、ペットボトルの水をひとのみ。

このペットボトルも乙葉ちゃんにあげたら喜びそうだけど、命ちゃんに叱られたくないからやめとこう。

ちゃんと自前のポシエツトの中に入れて持ち帰るんだ。

えらいでしょ。

例によつて、乙葉ちゃんはお父さんに報告ということでもどこかに行ってしまったし、命ちゃんも優勝できなかつたせいかわ沈している。

ボクもぼんやりと空中を見つめて、今後のことに思いを馳せていた。

そこで――。

ぴろりんとスマホから音がした。

見ると、ツブヤイターを通じたダイレクトメッセージで、ピンクさんからだ。

『ヒロちゃん。さきほどの幼女先輩の言動なのだが、少しいいだろうか』

『ん。何ですか』

『ピンクは生粋の日本人ではないので数週間前に初めて日本語を覚えただんだ』

『へえ……つてすごいな。ピンクさん』

たぶん、研究者として頭がいいんだろうけど、脳みその違いを感じ

てならない。ボクは十年以上学んでも英語ひとつ話せるようにならなかったんだけど。

『いや、ピンクの言語能力はさほど高くはない。だから、ヒロちゃんに確かめてもらいたい。幼女先輩は、確か自衛官だったと思うのだが、少し抑制的に書いているようではなかったか?』

『うーん。たぶん、そんな感じ。きつと、ボクを捉えるか電気を消すかして、配信をさせないようにしてるんじゃないかな』

『ヒロちゃんの配信が見れなくなるなんてヤダ!』

ヤダって……。大のおとなが言う台詞じゃないと思うんだけど。

まあすごくうれしいけどさ。

『ありがとうピンクさん』

『ピンクはヒロちゃんのファンとして、配信は続けてほしい。ゾンビとか関係なく、できるならずっと見ていたい』

『本当にありがとう』

スマホでフリックするとき、指が震えちゃったよ。

こんなにも素直で純粋な意見というのは、外国人特有のものだと思う。

日本人て奥ゆかしいとか言われてるけど、自分の意見をしまいこんじゃう傾向にあるからね。そのせいで、いつまで経っても忖度しあって、なにひとつ決まらないんだ。

『よく考えたら、今電気が消えたら連絡もとりあえなく——』

『うーん。それは大丈夫だと思うけど。ボクにとってはゾンビは障害物になりえないし、例えば、電気が来てる地域まで行けばいいだけでしょ。日本全域を暗くするってのはありえないと思うし』

『確かにそうだ。ピンク安心するの巻』

『ピンクさんの染まり方がえぐい』

『朱に交われれば紅くなるという。ピンクだってヒーローちゃんに交わって、緋色に染まっているのかもしれない』

ドキッとしたり。

名前がバレたのかなって思ったから。

『ボクはそんなに日本文化を継承しているわけではないと思うんだけ

ど……』

『ヒロちゃん。ひとつ教えてほしい。もちろん言いたくなくればかまわない』

『うん。なにかな?』

『ヒロちゃんは日本人なのか?』

『心の遺伝子的には日本人だと思うけど』

『なるほど……なんとなくだがわかった気がする』

ピンクさんの謎思考。

ボクよりずっと頭のいいピンクさんは、命ちゃんと同じくいろいろと知ってることも多い。ボクなんかふんわりと、感覚的に生きているからなあ。

人間が何を考え、何をしたいかなんてよくわからない。

だって、論理的に考えれば、電気を消すなんて意味がない。ボクに配信をさせたくないというのは種族的に異なる可能性があるボクを排斥したいということであらう。でも、どっちかという泳がせておいたほうがいいと思うんだよね。

さつきも言ったとおり、佐賀の電気を消したって、ボクは本州に渡るのなんか簡単にできるし、いまボクがいるところが佐賀だってわかってるのだから、ボクが佐賀から去らないからに過ぎないから。

ボクは雄大とどこかで待ち合わせでもして——例えば、新岩国のクソ寂れた駅で待ち合わせでもすれば、それでいいはずなんだ。

はつきり言おう。

ボクは、人間に信頼してもらうために、あえて動かなかった。

もちろん、雄大に”帰ってきてもらう”というのも大きいし、ヒイロゾンビ化したみんなを放っておいてどこかに旅立つというのも無責任な気がしたからっていうのもあるけど。

それ以上に、ボクが佐賀からどこかに行ってしまったら、人間側がボクを見失ったら怖いかなって思ったから。

ゾンビと人間の力関係は絶妙だ。

確かに幼女先輩の言うとおり、ゾンビは障害物程度にしかなりえないのかもしれない。

ゾンビ対策マニュアルにも書いてあったんだけど、歩くゾンビはすぐに滅ぼされてしまう。

ボクのゾンビは歩くというほど遅くはないけど、全力疾走というほど早くもない。そんな塩梅なせいか、おそらく油断しなければ、最初から撃滅するという腹積もりなら、他の国のことはわからないけど少なくとも日本は多大な犠牲は払いつつも、ゾンビを倒しきるのは可能なんじゃないかなと思ってる。

ゾンビという恐怖を完全に消し去るために、ボクを排除するというのはわからない話ではない。

たとえばボクにその気がなくても、人間にとって異なる種族に滅ぼされそうになってるのは初体験だろうから、必要以上に怖がってる可能性はある。

「おそらくは——日本は踊らされたんでしょうね」

ぽつりと呟くように述べたのは命ちゃんだ。

命ちゃんも気づいてるふうだったからな。でも、日本が踊らされたって？

「どういうこと命ちゃん」

「幼女先輩が知っていた配信が続けられないという事実。これはおそらくは自衛隊がそのように動くということなのでしょう。自衛隊を動かしているのは現在はまだ政府のようです』

だから——、と続く。

そして、手元のスマホに映るピンクさんもほとんど同時に同じ結論を出していた。日本を踊らしているのは、正確に言えば政府に脅しをかけてるのは。

「アメリカですよ」

「違う国なのにどうして言うこと聞けって言えるのかな。貿易とかも停まってるはずなのに」

「その停まってる貿易というか物資輸送を解禁するというエサをちらつかせたのか。それともゾンビからの解放にかこつけて、日本を第二の米国にしようとしたのかはわかりませんがね。植民地化されることを恐れて——ゾンビなんかよりも他の人間に支配されるのを

恐れて、その要求を呑んだってことなのかも」

ゾンビはただの障害物で——、主役じゃない。

人間が一番怖がってるのは、やっぱり人間だったってこと？

『アメリカが主導なのか。この国の黒幕がいるのかはわからない。アメリカを手引きした誰かがいるかもしれないから。ただ、いずれにしろ日本としては——』

「この国の上層部はともかく責任をとりたくない人間ばかりですから、ゾンビが仮に人間だったとすると、自国民を殺す命令をしたことになります。それは都合が悪い事実だったはずです」

ピンクさんと命ちゃんはまたもや意見の一致をみた。

ふたりは情報を共有しあってるわけではないのに、まるで魔法みたいだ。

ボク、おいてけぼりです。

「えっと、待つて待つて……ピンクさんとも話をしないと、時間差があつて難しいよ。ピンクさん、電話したいんですけどいいですか？」
『会話していいの？』

うわ。なんかキラキラしている感じが見える。

「先輩。携帯番号が向こうに知れると、いろいろとまずいです。そこから来歴やら居場所やらすべてバレる恐れがあります。ここはわたしのスマホで会話してください」

あー、そういうえば、命ちゃんが使ってるスマホって小杉さんのものだったね。

確かにこれならバレることはないかも。

「じゃあそうしようかな」

べつにピンクさんを信頼していないってわけじゃない。

ただ、なにかもさらけ出すのが人付き合いとして正しいのかっていうとそういうわけでもないと思う。

「こっちの電話番号にかけてみてください」

と、命ちゃんのスマホの番号を伝えた。

すぐに連絡があった。

ピンクさんからのビデオコール。

「はい、終末配信者のヒーローちゃんだよー」

とりあえず、いつもの名乗りをあげてみた。

ピンクさんもヒロ友達だし、お約束って大事。

「ピンクはピンクだ」

哲学的言辞とともに、画面に現われたのは幼女。

うん。幼女です。

ボクも少なくとも小学五年生程度の容姿をしているし、ある意味幼女といえるかもしれないけれど、ピンクさんはどこからどうみても、小学生の低学年に見えた。

おそらくは染めたのであろうショートカットの髪の毛は鮮やかなピンク色をしていて、薄い金色のおめめがこちらを見据えている。頭の上には大きめな帽子をかぶっていて、ドクターらしくちっちゃな白衣を着ている。

あ、かわいい。ピンクちゃんかわいい。

命ちゃんはまったく驚いてなかったみたいだけど、なんでだろう。ボク以外のことはどうでもいいのか。それとも最初から察していたのかな。いや、会話文だけで相手の年齢がわかるとかニュータイプじゃないんだからさすがにありえないか。

まあいい。

それよりも……。

「えっと、年いくつかな？」

ボクはえつちなビデオみたいにピンクさんに聞いた。

「ピンクは8歳だ」

「マジで？」

というか、超天才児なんじゃ……。

「マジだ。ピンクはヒロちゃんとそんなに年は違わない」

「8歳で研究者とか、どこかのニュースサイトに載りそうなものだけど」

「ピンクは箱入り娘だから」

なるほど……。

いやまあソレは置いておいて。

「結局のところ、アメリカが黒幕だとして、電気を止めたあとにどうするつもりなのかな？」

「きつと、悪者は全部日本ということにして、マッチポンプ的にアメリカが救世主になるつもりなんだと思う。RPG的に言えば、ヒロちゃんがお姫様で、アメリカは筋肉モリモリのマッチョマンの変態だ」
アメリカってピンクさんの自国だよな。

そんな変態呼ばわりしてほんとにいいの。

「じゃあ、ある日突然ボクのアパートに来て、助けにきたぞ、ついでに電気も復旧した！ とか言ってくるの？」

「その可能性もあるだろう。ヒロちゃんを陥れた日本よりもわが国に招致したいとか言ってくる可能性もある。あとはヒロちゃんのゾンビ避け能力とかを他国に切り売りするだろうな」

「つまりボクや後輩ちゃんを攻撃する可能性は低いつてことかな」

「それは……」

ピンクさん——あるいはピンクちゃんは端正な顔を歪ませていた。

「先輩。可能性としては弱いものを人質にとるとというのが手っ取り早いと思います。たとえば、私とか」

命ちゃんの言葉は、少なくとも衝撃を持ってボクに伝わった。

確かに、今の銃撃すらふさいじやうボクより、まだ人間的なレベルに留まってる命ちゃんのほうが人質になりやすい。

もしくは——、ボクと仲良しになったピンクさんや乙葉ちゃんもその可能性はある。

「ピンクとしては、ヒロちゃんは一時的に佐賀から退避したほうがよいと思う」

それは配信もやめちゃって、人間との交流を断ち切るってことだ。

嫌だった。せつかくここまで来れたのに。たくさんの人に見てもらってたのに、すべて放り投げてしまって、ボクだけ逃げていいのかな。

ボクには他人に対する責任はほとんどないかもしれないけど、それでも、配信を始めたのはボクの意味で、ボクはボクの意味に対する責

任があるように思う。

「あくまで一時的だ。アメリカの動きがここまで活発になつていてということであれば、きつと、それなりの準備が完了している」

「どういう準備？」

「ヒロちゃんの居場所を大きなエリアとしては特定しているかもしれない」

「もうこの国に来てるの？」

「同盟国だからな。ゾンビハザードに見舞われてるお友達を助けるというのはお題目としては十分だ」

ピンクさんは西洋人らしく肩をすくめて見せた。

小さな肩がちよつともちあがると、めつちやシリアスなことを話してはるはずなのに、ほほえましくなってくるのはなぜだろう。

「ともかく——だ。ピンクとしては、これ以上佐賀に留まるのは危険だと思う」

「逃げたくはないな」

ボク自身が実験対象になつたりするのは、ある程度は許容できる。命ちゃんたちが害されるのは絶対に許せないけれど、でも今いるところから逃げ出したって、きつといつまで経つても終わらない。

だって、ボクっていくらでもゾンビを生み出せるからね。

その気になれば、このライブハウスにいる人間を、ひとり残らずゾンビにすることだってできる。

人間と本気で殺し合いをすることになれば——、最終的にボクが死ぬか、人間が全滅するかということになってしまう。

そんなのは嫌だ。

人間側の論理は——お願いの仕方は、それなりにわかっているつもりだ。だって、ボクもほんの少し前は人間だったのだし、いまでもボク自身のこのころのありようは人間そのものだと思っっているからね。

違うって誰かに言われちゃうかもしれないけど、ボク自身はそう思ってる。

だから、ボクは人間を滅ぼしたくない。

人間を滅ぼすつてことは、ボク自身を滅ぼすつてことでもあるんだ

から。

「絡め手できているわけですから、人質というのは可能性としては低いと思いますけどね」とは命ちゃん。

「そうだね。ボクはただちよつとみんなといっしょにゲームとか配信とか楽しみたいだけなんだけどね」

「先輩は歩く宝石みたいな存在になってしまってるんです。もしも――先輩の願いをかなえるなら、ひとつだけ方法がありますよ」

命ちゃんが月のような優しい微笑みを浮かべた。

でも、知つてのとおり。

月は無慈悲な夜の女王だ。

「言いたいことはわかるよ」

きつと、命ちゃんが言いたいのは、ゾンビ利権を分散化させることだろう。

でも、それは……。

画面の中にいる小さなピンクさんを見る。

そこまで踏ん切りはつかないよ。

だから、ボクはそれ以上、言葉を続けなかった。

「ピンクさん、今日もアドバイスありがとう。佐賀から離れるかはちよつと検討してみるね」

「マイシスターが、日本の政治家みたいなこと言ってる……」

「善処いたします。ご検討させていただきます」

「つまりそれは絶対にそうしないという言葉だと受け取っていいんだな?」

ぶんすか怒ってるようなピンクさん。

「臨機応変に対応はするつもり」

「場当たり的すぎるような気もするが……、ピンクもできるだけ牽制したい。そういう状況になったら、ピンクを呼んでほしい。あるいは今でもいいぞ。秒で駆けつける!」

「うん。わかった。ありがとうピンクさん」

「それはいま来いという解釈でいいのか?」

「違います」横から割って入ったのは命ちゃんだ。「少なくともあなた

の行動は先輩のためになるようなものばかりではありません。あなたやあなた自身の組織こそがマッチポンプをしていないという保証はありません」

「後輩ちゃんー!」

命ちゃんの言い分もわかってはいたけれど、いまさらって感じた。

ボクはピンクさんの人柄を知ってるし——、だいたいにおいて幼女に悪い子はいないよ。うん……。激甘ですかね。

でも、予想外というかなんというか、命ちゃんの言葉を受容したのはピンクさんのほうだった。

「確かに、ピンクにはそういう可能性を覆せるだけの反証を持たない。だから、提案というかたちでしかヒロちゃんの意思を確認するほかないんだ」

「ボクはピンクさんのことは信頼しているよ」

幼女だからというわけじゃなくて——、いままで数週間だけとき、ちゃんと言葉を交わしてきたんだし。

「マイシスターに会いたい。会ってナデナデしてほしい」

命ちゃん亜種。

そんな言葉が喉からでかかったけど、なんとかかすんでのところ飲みこむのでした。

☆Ⅱ

結局、ボクの出した結論は、いままでどおり何かが起こるまでは時勢に流されてみようかなということだった。

ボクを確保する手合いが現われたら、そのときは全力で戦うほかないだろうし、人間の総体としては、ボクを滅ぼしたいとまでは思っていないと信じたい。

「ヒロちゃん。緊張してるデスか?」

乙葉ちゃんはステージの上のボクが緊張していると思ったのか、柔らかな言葉をかけてくれた。

「緊張はしてるかも。だって、本当のアイドルといっしょに歌を唄う

なんて初めてだし、ボクは下手っぴだし」

「技術的なところはたいした問題じゃありません。ヒロちゃんの歌で救われた人も多いはずデース」

「ゾンビ的にはそうかもしれないけど」

「精神的にも救われた人は多いはずですよ。ヒロちゃんの歌は誰かを思いやる歌ですから」

ライトに照らされて、曲のイントロが始まる。

ギターのサウンドは軽快で、命ちゃんの超絶プレイが光る。

ボクは——、たとえこの先配信が続けられなくなっても、いまここに集っているヒロ友のみんなに、精一杯のボクの気持ちを伝えたかった。

『ヒロちゃんが楽しそうだなにより』『結局、今回も神回だったな』『ああ、あと少しで終わっちゃう』『終わらねえよ！』『このスピードなら言える、ヒロちゃんはワシが育てた』『おじいちゃんご飯はさつき食べたでしょ』『乙葉ちゃんもいつもよりなんか楽しそう』『天使のデューエツト最強すぎるだろ』

ピタって手をあわせて。

クルツてターンして。

マイクは握ったままだけど、ストIIのブランカみたいに空中で何度も回転してみたり。

乙葉ちゃんを浮かせて、ボクも浮いて。

くるくる空中を回転機動してみたり。

『ヒロちゃんはしゃぎすぎ』『ゾンビだらけの世界じゃなきや、ロツクとイリユージョンをかけあわせたエンタメやってそう』『親方、空から美少女が』『見え……見え……』『残念ながら、スカートは鉄壁だ』

そして——歌は盛り上がり。

突然、闇の中に消えた。

★
||

少し憂いを帯びた顔をしたヒロちゃん。

そして、男の子のように何か強い決意を秘めたヒロちゃん。
年下の女の子なのに、なぜかドキドキしてしまう。

きつと、それは、わたし嬉野乙葉の魂の瑕疵のせいだろうと思う。
わたしは、望まれなかった子どもだから。

イラナイと言われて、（実際に言われたわけじゃないけれども）親に
捨てられた子どもだから。

つめたくて暗いロッカーの中に突っこまれた。

そんなわたしのことを、必要だといってくれたヒロちゃんに性別と
か、そういう枠組を超えて、ただひたすらに信望したい気持ちが湧い
た。

なんの宗教も神様も信じていないわたしが、ただ、なにげないたつ
た一言だけで救われた気がしたから。

ふわふわと不思議な力で宙に浮いて、わたしは必死に歌を紡ぐ。

そして――歌は盛り上がり。

突然、闇が襲ってきた。

ド……ド……ド……ド……ド……ド……ド……

つめたい闇。わたしは、この年になっても小さな豆電球を消して眠
ることができなかつた。ちいさい頃からそれはかわらず、いまでもそ
うだ。

闇が怖い。

自分という存在がのみこまれそうで、身近に死を感じる。

誰にも存在を認められることなく、ただ空虚な黒い空間に吸い込ま
れていくみたいで。

ただ――、ド……ド……ド……ド……ド……ド……ド……

鼓動音がやけに大きく聞こえた。

手が、足が、歯が、震え。

立ってられない。

怖い。怖い。怖い。

誰か――、助けて。

助けてください。お願いします。誰か――。

「大丈夫。乙葉ちゃん？」

うずくまり、無力な子どものように震えていたわたしに天使の音が投げかけられた。目をふさぎ——闇をただのくらやみだと思いこもうとしていたわたしは、まぶたを開いた瞬間に、すさまじい光の奔流を見た。

そこには——天使がいた。

誰がなんといおうと、この奇跡は、わたしのもの。

誰が否定しようと、この奇跡を、わたしは生涯忘れないだろう。

緋色の光を背中のあたりから放出させ、光の粒子があたりを照らし出している。

ヒロちゃんはそれから、光を放出しながら、なにやら力をおくりこむ。

ブンという音がして、電気が復旧した。

『え。なに演出？』『突然確変ですか？』『佐賀在住のオレくん。突然の停電に見舞われるも無事復旧する』『こちら福岡。同じく停電。ヤバイ』『岡山は無事でした』『え、これってもしかしてついに来たのか。停電が』『終わりの始まり』『もともとゾンビだらけの時点で終わってはいただろ』『いま、復旧してるのってヒロちゃんの謎パワーのおかげ？』

すべてを悟りきったように、ヒロちゃんは幻想的な顔つきで、配信画面を見つめている。

わたしは自分が泣いていることに初めて気づいた。

「あー、ごほん。みんなごめんね。どうやら電気が止まっちゃったみたい」

『そんなあ』『ゾンビ避けできない真のサバイバルが始まる……』『太陽光発電はワンチャンあるんじゃないやね？』『発電所は自衛隊が最優先で守ってるんじゃないのかよ』『燃料切れなんじゃないやね？』『これから配信見れなくなるんじゃないや……』『うそだろ……もうおしまいだ』『日本オワタ』『日本終了のお知らせ』『いやだあ。やめないで』

「ボクが電気を供給し続けるのは無理なんだよね。でも——配信はやめないよ。できる状況になったら再開するから、みんな待っていてくれるかな」

希望を――。

ゾンビだらけの世界で、ヒロちゃんの声が響き渡ることはもうなくなるのかもしれない。少なくとも九州は完全に電気が停止したようだ。

『九州から脱出して配信を続けてくれ』『佐賀民です。ヒロちゃんが本州にいつてもいつかゾンビから治してもらえればいいかなって』『おい死ぬな』『福岡在住だけど、山口県まで抜ければワンチャンあるのかな』『九州は下手すると全滅するぞ』『太陽光発電とか水力発電してる施設にいますぐ駆け込め。ヒロちゃんズボイスを大音量で流せ』『食糧的に厳しいだろ』『終わりかな……いままで楽しかったよ』

ヒロちゃんに悪意を向ける人は誰ひとりいない。

ただ肃々と滅びを受け入れている。

でも、違う。

ヒロちゃんはそんなの望んでいない。

「生きてください」

気づいたら、わたしは声を張り上げていた。

何万。何十万の人の前で、わたしは本当のこころをさらけ出していた。

みんなの前で裸のこころを晒すのは怖い。

みんなのこころは、暗闇のように見えないから。

でも、みんなが絶望しきってしまったら、ヒロちゃんがやってきたことが不意になってしまう。そんなのはダメだ。

「あきらめないでください。みんな疲れきってるかもしれませんが。食べ物がないって怖いかもしれません。でも、ヒロちゃんはここにいます。ヒロちゃんはみなさんといっしょに楽しい時間を過ごしたいと思ってるんです！」

そうですよね？

視線をあわせると、ヒロちゃんはこくと頷いてくれた。

『まあいざとなったらゾンビ待機だよ』『頭ぶつとばされん限り、いつかは人間に戻るんだろ』『死な安の精神で生きていきますわ』『小型発電機はあるからまだやれるで』『配信また見れるようになるまで

耐え忍ぶ』『ゾンゾンしてきた』『次の配信まで生き抜きたい所存』『ヒロちゃんの最高の笑顔を最後に見たいです』

「みんな待っててね」

太陽のように輝く笑顔。

そのとたんに闇は消えた。

今夜は豆電球をつけないでも眠れそう。

おそらく人生でも二度はない奇跡を体験しながら、わたしはそんな卑近なことを考えていた。

町役場編

ハザードレベル64

あれから――

九州全域ほぼまっくら状態になってから、ボクはみんなの待つゾンビ荘に帰ってきていた。乙葉ちゃんはボクをぎゅうぎゅう抱きしめながら絶対ついていく宣言をしたのだけれども、それはそれで問題があるので辞退した。

ゾンビ荘のみんなの存在がバレるのもちよっと困る。

乙葉ちゃんを信頼できないうんぬんの問題じゃなくて、なんとというか……みんながボクと同じアパートに暮らしているなら、自分もいつしよじゃないと嫌だとかいいような感じがしたんで。つまりそれは乙葉ちゃんのヒロゾンビ化の危機でもあるので（バッチこいとか本人はいいそうだけど）丁重にお断りした。

だから乙葉ちゃんについては、一度は帰ってもらおうことにしたんだ。けっして、命ちゃんの突き刺さるような視線が怖かったのが理由じゃない。

泣きながらボクにすがりつくる乙葉ちゃん。もう駄々をこねるってレベルじゃねーぞって感じで、なりふり構わず、ボクにべったりだった。

結局最後は命ちゃんに引き離されて、必ず会いに行くということにしぶしぶながらも帰ったという感じだ。

その際に、電話番号の連絡交換をした。

……けど、ネット回線自体も電気に依存するから、佐賀周辺では電話が通じない。

配信も当然できないし、ボクのほうは乙葉ちゃんのいるところを教えてもらったけど、福岡のあたりまで行かなきゃならないから、ちよつと足が伸びにくい。また、飯田さんに護衛になってもらうっていうのも手だけど……原付でいくと、車だらけの高速道路を抜けてい

くのはきつと時間がかかるかもしれない。

ピンクさんもといピンクちゃんの話だと、今回の停電の黒幕はアメリカって話で、そのアメリカの人たちがマッチポンプ的にボクのところに来るらしいけど、今のところはそんな気配もない。もうあれから一週間くらい経つのにね。

つまり——暇だ。

アイスが溶けちゃうみたいなのに、ボクは溶けてる。なにもすることがない。

ていうか、無情にもアイス全滅。アイス一個もくえねえ!!

9月もそろそろ終わりかけ。抜けるような秋の空が迫ってきて、そこまで過ごしにくい季節ではないけれど、冬になったら寒いだろうな。北海道みたいに凍死する人っていうのはそこまではないだろうけどさ。やつぱり、人間電気が必要だよ。

電気が無ければ——。

漫画や小説を読んで、昔ながらのポータブルCDプレイヤーで電池交換しながら音楽を聴くとか、バッテリーをつないだDVDプレイヤーで映画みるとか、そんな感じの娯楽しかない。

暇だ。

暇……。暇。暇。暇！

ああッ!!

「ねえ。マナさん。なにかないの？」

ボクはお部屋の中で、なぜかボクを膝上に乗せているマナさんに聞いた。

マナさんはゾンビなお姉さんで、ボクの食事とか身の回りのお世話をしてくれる奇特な人だ。

ロリコンで美少女好きな……危篤な人だ。

まあ、そうはいつでもマナさんのことは嫌いではないボクである。いまはちよつと暑苦しいけど。

「衛星インターネットとかならできなくもないですけど、残念ながら誰がそういう契約をしているのかわかりませんしねー。しかもそういう契約している人の回線を奪ってもバレバレになっちゃうのでマ

ズイでしょうね」

「んむー」

やっぱりネットは無理なのか。

やるなら、九州を越えて山口県に行かなきゃいけない。

「はあ……。いま、わたしは最高に楽しいですけどね」

ホクホク顔のManaさんである。

「それはManaさんが楽しいだけで、ボクは全然楽しくないんですけど」

「ご主人様は、確か男の子さんだったんですよね」

「え？ うん。そうだけど」

「男の子さんだったということは、今の状況に多少なりとも楽しさを
感じているのでは？」

「ん？ なんで」

「なんでって、少し傷ついちゃいます。わたしってそんなに魅力な
いですか」

「Manaさんは普通に美人なお姉さんだと思ってるけど？」

「ああ、いつのまにやらご主人様の精神に男の子っぽさがなくなつて
しまったのですね。ほろり」

「え？」

「え？ まさかお気づきでない？」

「そ、そんなことないよ」

そうだよ。ボクって普通に男だったって意識あるし。

でも、冷静に考えたら――。

ほんの少し前までは、20代半ばのお姉さんの膝の上に乗るとい
う異常事態に対して、もつとあわてふためいていたはずだ。

ボクって、精神が幼女化してる？

ま、まさかね。はは。そんなはずがないよ。

「ボク男だし」

「棒読みさんですね」

「ゆっくりしていつてね」

「かわいすぎますね」

「でもさ、ゾンビか人間かという問題のほうが大きくて、男とか女とか

そういう枠組がすごく小さいことに思えちゃうんだけど。男でも女でもたいして違わくない？ ゾンビにモグモグされたら肉塊という意味でいっしょだし」

「なるほど、男でも女でもイケちゃう口なんですわね」

「なんでそんな話になるのさ」

「ご主人様が順調にご主人様と化している今、男も女も関係なく愛してくださるとするのは、下々の者にとっては非常に重要だと思います」

「だから、そういうふうの下々の者とか考えたことないって」

上級国民か。

「アイドルって、みんなに崇め奉られてるように思うんですけどね。ヒロちゃんの人気はとどまることを知らず、いまでは数百万人規模のファンがいます。もしもヒロ友のみんなにひざまずいて椅子になつてと言えば、佐賀から福岡くらいまでは地面に下りないで歩けるかもしれないよ」

「ボク浮けるもん。人間椅子なんていらさないよ」

「ふ、ふぐつ。わたしのご主人様がかわいすぎる件」

「そんな、なろう小説のタイトルみたいなこと言わないでよ」

「でもまあ、なんにせよ。ご主人様はちよつと駆け抜けて気が抜けたらちよつとじゃないでしょうかと。最近はちよつとスライムみたいに溶けちよつてますしね」

「アイスも食べられない生活だとツライです」

マナさんはそのあたりすごくよくしてくれてると思う。

電気が使えない生活でも、ガスコンロとかを使って、おいしい料理をいつも作ってくれるし。

ただ、物の腐り方がヤバイ。

小型の発電機とかをあれから探してきて、なんとか設置したんだけど、防音でもなんでもないこのアパートでは、ものすごい騒音が周りに響き渡ってしまい、違和感あることこの上なかった。

つまり、このアパートで発電機を使うことは、ボクはここにいるよとみんなに伝えてるようなもので断念するしかなかった。

かといつて、どこか他のアパートに住む気にもならないんだよねえ。

「ご主人様。しかたありませんね」

うん？

ボクを宝物みたいにそつとソファに置くマナさん。

それから、ごそごそとバックから取り出したのは、白いモヤを放つてるハーゲンダッツだ。冷気でひんやりしている。やべえぞ。バナラだ。ボクがさりげに一番好きって言ったのを覚えておいてくれたのかな。

「え、どうしたのこれ」

「すぐそばに置いてあるトラックの中をですね。氷室のような状態にして、そこでアイスを保存してるんです。小型の発電機も少々使ってますんで、だいぶん持ちますよ」

「ありがとうございます！ マナさん」

「お礼にチューでもいいですよ」

「えー」

「アイスいららないんですか？」

「マナさんはそんなこと言わないよね」

「さてどうでしょうか。大人は目的のためならなんでもしちやいまずからね」

あー。アイスを高々と掲げてしまうマナさん。

ボクはびよんびよんした。

「うぐふつ。ご主人様はわたしを萌え殺そうとしてるんですか」

「えー。そんなことしないけど」

「じゃあ、キス以外なら何をしてくださるんです？」

「んー」

ボクはしばし考える。

マナさんって基本、ボクがすることならなんでも嬉しそうなんだよな。

「じゃあ、あの……温泉にでも入りにいこうか」

ちよつと前に、マナさんといっしょにお風呂に入るといふ約束をし

た。

ボクは毎日、お風呂に入らないと気持ち悪くてしようがないし、今の状態だと断水状態だから困るんだよね。

そのうち五右衛門風呂に挑戦しようかなと思ってるんだけど、それも準備が必要だ。

いまは水で濡らしたタオルで全身を拭いたりしてるけど、一度、命ちゃんに見つかってひどいことになったから、普通にお風呂入りたい……。いや、もっとひどいことになるか？

でも、お風呂ならさわいじやダメっていいやすいし、命ちゃんも根は素直な子だから聞いてくれると思う。

温泉はいいかもしれない。

ボクたちが温泉に入るなら、やっぱり天然のに限るよね。

どこか電気が通つてるところまで行ったほうがいいかなあ。

九州全域停電だと本州に渡らないとダメかな。

「温泉……」主人様の入った温泉……ふへへ」

「マナさん。できれば九州内で入りたいんだけど」

「温泉に入るだけなら、どこか適当に作れますよ。でも、できるなら温泉施設でゆつくりしたいですね」

ボクもそう思う。

でも、温泉施設ということになると電気は必須だ。

「九州内だと厳しいのかな」

「そうですねえ……水力発電があるところならもしかするとつとてころでしょうか」

「九州は全部停電しているんじゃないの？」

「水力発電は川の流れとかでタービンを回すわけですから、べつに急に電気が生まれなくなるわけじゃありませんよ。ただ余剰がないから周りにまで電気をいきわたらせることができないだけです」

つまり、いままで電気が来てたのは、あくまで余剰エネルギーだったってわけね。

火力とか原子力とかに比べると、得られるエネルギーは少ないだろうし、水力だつてやっぱり人の手を加えなきゃいけない。

九州内から自衛隊とか人が完全にいなくなってるんだと、結局水力発電だろうと厳しいと思うんだけど。

「逆にいえば、適当に水力発電の管理能力がある人をゾンビにでもしてしまつて、永遠に管理してもらえれば一発で問題解決です」
マナさんの案が、思ったよりもエグイ。

確かにゾンビさんから生前の記憶というか、技術というか、そういうものをひっぱつてこれるボクなら、水力発電の知識に長けた人を適当にひっぱつてくるだけで、そのあたりは自動的にできたりするだろうけど。

あんまりといえばあんまりだね。

それに、同じような感じで原子力とか火力とかも可能なのかな。

問題は、やっぱり燃料か。

「温泉に入りたいたいだけなら、ホテルや旅館についている天然由来のつてやつがいいですよ。いくつかピックアップしておきますね♪」

「うん。おねがいしまーす」

☆Ⅱ

やってきました温泉施設。

いやー、温泉大国だけあって、べつに佐賀でも普通に温泉あるね。とはいえ、今はほとんどの設備が停まつてる状態だろうけど。

いくら天然温泉だとはいえ、ポンプによる配管設備が動かないと、お湯の流動性がなくなるから、温泉としての機能が働かない。

そのせいで、熱かつたりぬるかつたり、適温にならない可能性が高い。

否！

断じて否！

そんなことでどうする。

日本人なら温泉に入らなくてどうする。

そう思ったボクは、やっぱりここでもご都合主義的にヒイロウイルスパワーを使うことにしました。ピンクさんが言っていたとおり、ヒ

イロウイルスは物体の特性を上書きできる。

つまり、お湯を適温にするくらいいたやすい。

ボクがちよつと疲れるぐらいで、特にデメリットもない。

あえて言えば、ヒイロ温泉はもれなくヒイロゾンビ化しちゃう可能性があるってことかな。

まあいいよね。いまはもう温泉に入る人なんていないし。それに血液に比べたら感染性能はそれほど高くない。そうじゃないと、ヒイロウイルス駄々漏れ状態になるたびに周りが感染しちゃうからね。ヒイロまみれな温泉入りたいですか？

まあいいさ。ともかくいまは温泉だ！

「先輩がニヤニヤしてますね。私の裸でも想像してたんですか」「しないよー」

そもそも、妹分である命ちゃんに性的な興奮を覚えることはない。そこんところははつきりさせてもらおう。

「まあいいですけどね。今日は三人ですし、のんびりしましょう」「わりとご主人様は律儀ですよ。まさかあのときのフラグがいまになって成立するとは」

まあ特に約束の履行ということを考えてたわけじゃない。

ただ、他のみんなも誘ったんだけど、今日ついてきたのは命ちゃんとマナさんだけだった。恵美ちゃんは温泉好きかなと思ってたら、外が怖いとか言い出してるし、人が多くいるところが苦手なのかな。恵美ちゃんがいかなければ恭治くんもいかなしいし、飯田さんは男ひとりがついていくというのもちよつとって感じで、今回は辞退した。姫野さんも言うに及ばず。

結果、三人で来ることになったよ。

温泉施設は、マナさんの運転する軽自動車でわずか二十分くらいのところにある。

わりとボクン家からも近かった。

いままで行ったことすらなかったけどね。引きこもりがひとり温泉とかありえないし。

雄大から誘われたことあるけど、家でゲームするほうが好きだった

からべつにいいって思ってた。

宗旨替えしたのは、もしかすると配信のおかげかもしれない。

たくさんの人間と、バーチャルな空間とはいえ交流したおかげで、積極性がでてきたとか。

あるいは――。

女の子になって温泉に入るのが好きになっちゃったとか？

長風呂するしねー。

なんて、思ったり。

温泉施設の駐車場は車が数十台は停車できそうな大きな平地で、田舎あるあるな土地を贅沢に使っている作り。べつにそこに停める必要はないだろうけど、マナさんは律儀に停めた。

温泉設備はホテルと温泉が別棟になっていて、ホテルのほうが背が高い。

温泉そのものは和風なたたずまいをしていて、ちようど旅館みたいな雰囲気だ。

たぶん、温泉に浸かったあとは、ホテルで休みたいな使い方をすることになってたんじゃないかな。

まばらにいるゾンビさんたち。

人間の気配はとりあえずのところないけど、ボクの人間認識能力はさほど高くないからね。

まだ油断はできないよ。

「先輩。温泉施設ですが、中に人間がいる可能性は？」

「うーん。中にはゾンビはいないね。人間はわからないよ」

温泉設備は普通の横開きする扉だ。

重々しくもなく、普通に力でこじ開けることができそうな感じ。

「鍵かかっていますね」

マナさんが扉に手をかけた。まあゾンビハザードから逃れるときに、普通に閉めたとも考えられるけど、人間が中に残ってる可能性とかもあるからな。

「どうしようか」

「ご主人様が近くにいれば、負ける気がしない♪」

「いや、それは敗北フラグだから」

「真面目に考えれば、わたしたちが一番楽でかつ安全な方法って、まずは適当にゾンビさんたちを何十人か連れてきて”お掃除”させればいいんじゃないかと思えます」

そして、中に人がいてもゾンビになるから大丈夫ってわけね。

あいかわらずエグイ。

「マナさんがすごく効率重視なのはわかったけど、中の人にとってはひどくない？」

「中の人などいない♪」

「いや……はい、まあいいや。ともかく、ボクが先に行くからね」

扉はただの鍵がかかっているだけだ。握力がゾンビパワーでえぐえぐなことになってるボクは、あっさり鍵を破壊できた。不法侵入してごめんなさい。

で、扉を抜けると、鉄製のロッカーとかが斜めに倒してあって、いくつかの机とかがバリケードのように廊下への道をふさいでいた。当然、中は電気が通ってなくて暗いけど、ボクは夜目が利くから問題ない。

机のくみ上げ方を見るに、どうやら上部が五十センチくらい空いていて、人が通れるようになってる。

これってやつぱり、中に人いるかなあ。

でも、いまはもういないってことも考えられるし、微妙どころかな。あれから二カ月くらい経過しているわけだし、二カ月間も持つような食糧があるのかって話。

それに、もしも人間がいたところで――。

ボクはもう普通の人間には負けない気がする。ミサイルでも降ってきたらわからないけどね。

そんなわけで、二段重ねになっていた机に脚をかけて、ボクは匍匐するように上のところを通る。

ストットと降りたところで、突きつけられたのは、モップをやりみたいに改造したやつだった。

手がふさがるのを恐れたのか、懐中電灯を安全ヘルメットにガム

テープで貼って、何かのスポーツで使うようなプロテクターで固めた女の子たち三人。

まだ小さい。中学生くらいかな。着てる服はよれよれになっていてけどセーラー服で、

ひとりはよくも悪くも普通というかちよつと不良っぽい感じの子。ひとりはメガネをかけた委員長タイプ。ひとりは気弱そうなおどおどしているタイプの子だった。

まあよくあることだよね……。

表情についていえば、暗闇の中でライトを下から照らすと、どんな美少女も恐怖顔になったりするじゃない。あんな感じ。

みんなたぶん素の状態ではかわいらしい感じなんだろうけど、ボクという異物が侵入してきたことにいら立ってるのか、あるいは長らく続いてきたゾンビライフに疲れてるのか、心の余裕みたいなものが感じられなかった。

当然——、そんな精神状態だと、ボクに対して安易に攻撃するとう選択もありうると思う。中学生くらいの女の子に対して暴力をふるうなんて、ボクにとつてはありえないことだけど、攻撃してきたらさすがに無抵抗というわけにもいかないし、どうしよう。

いちおう、見た目小学生なボクだけど、扉を破壊して不法侵入してきたのはこちらのほうだ。

つまり、悪いのはこっち。

無言のまま、しばしの間、時間が経過する。

「扉こわしちゃってごめんなさい」

ボクはおずおずと切り出した。罪深い子羊ムーブです。でも、正直なところ扉を壊してもたいした問題じゃないと思ってるけどね。ゾンビは遠ざけることできるし、ここの人たちがもつとちゃんとした避難場所に行きたいっていうならつれていってもいいし。

「どうして侵入してきたの？ ゾンビから逃げてきたの？」

委員長タイプがようやく口を開く。

「えっと、温泉に入りたくて」

「はー。」

三人の女の子はポカンとしていた。

温泉に入りたいなんて、このご時世じゃ気が狂ってると思われてもしかたない。

もちろん、ゾンビ避けできる終末配信者でなければの話で、この三人はボクのことを知らないんだと思った。中学生くらいになれば、スマホぐらい持ってそうだけど、ユーチューブは見ない系の女子なのかもしれない。

いろいろと考えてたら、JCズたちの後ろから、まだ三十代くらいかな。

美人な着物を着た女の人がこちらにやってきた。

誰だろう。

「どうやら強盗ではなかったみたいですね。かわいらしいお客様？ お名前をおうかがいしてもよろしいでしょうか」

優雅といってもよい所作。

この温泉施設の女将さんなのかな。

とりあえず温泉入れそうならそれでいいや。

「緋色です」

「おひとり様ですか」

う、心に來る言葉はやめてほしい。

「あとふたりくらい後ろにいます」

「なるほど……、おまえたち、お客様をお通ししてください」

後ろからついてきた命ちゃんとマナさんも合流し、ボクたちは客間へと通された。

ハザードレベル65

温泉施設内は暗く、懐中電灯がところどころに置かれている。

足元をイルミネーションみたいに照らすことで、できるだけ暗闇を払っている。そうしないと、ゾンビ映画では、死亡フラグだからね。もちろん、ゾンビであるボクにはあてはまらない。

暗い中でもぼつちり見えてる。命ちゃんやマナさんも同じだと思う。ヒイロゾンビのスペックは高い。

通された客間は純和風といった感じで、畳の優しい匂いがした。ここも当然暗い。

でも、オドオドしている自信なさげな女の子が、先行してマッチをつかった。

膝について、火をつけたのは行灯だ。

四角くて、白い紙が張られた時代劇とかで使われてそうなやつ。中には長い蠟燭が入っていて、わりと長い時間持つらしい。

淡い光だった。

あるいは緩い灯りとも言えいいのか、電気の光とはまた違った趣がある。

薄暗くはあるけれど、ボクたちをお客様として扱うってどういう意味なんだろう。言葉どおりの意味というのは、あまりにも人間を善意面だけで見すぎかな。

利益——というのもので動くのが基本だと思う。

その際たるものは、自分のいのち。

自分が生存するというのが第一であり、優先度の高い事柄だ。

もちろん、他人のいのちを助けたり、なにかしらの矜持を優先させることもあるのが人間だろうと思うけれど、それは例外的だからこそ尊いのだろう。

つまり、なにがいたいかという、あやしくね？ってこと。

命ちゃんをチラ見してみると——。

「あ、先輩が私を見てますね。これはそろそろ温泉に入って、私の裸をねぶるように見たいという欲望の現われですか？」

「ちがうよー！」

なんなんだこの子は。いつもの命ちゃんか。

えっと、マナさんは？

「む。ご主人様がわたしを見てますね。これはそろそろ温泉に入つて、えっちなことをしてもOKという流れですか？」

「マナさんが変態だということを思い出させてくれてありがとう」

「いいえどういたしまして」

ボクたちのコントを見て、女将さん風の女の人がフッと笑った。

「なにやら楽しいな関係のようですね」

「あ、はい。いろいろと楽しいな関係です」

考えるまでもないけど、一番ちいさなボクのことを先輩といったり、ご主人様といったり、ボクは高校生や大人の女性をはべらしている少女という、怪しき満点の存在だった。

でもきつと、なにかの冗談だと思われてるんだろうな。

畳で女の子座りすると、マナさんと命ちゃんが両隣に座った。兩人ともボクにしつかり密着しているのはなぜでしょうか。わりとスペースあるんですけど。

対面で正座しているのは女将さんだ。

「申し遅れました。わたしは当温泉施設の女将をやっております。多々良明子と申します」

三つ指ついでというやつだ。ものすごく綺麗な姿勢だった。

「ボクは緋色です」

さつき言っただけど一応ね。

「水前寺マナです」

マナさんわりとボク以外には普通にできるんだよな。幼女的なやりとりがなければ、わりと普通だ。

「命です」

命ちゃん声のみごとに沈んでる。命ちゃんだけに。

人見知りだからしょうがないよね。

とか思ったら、ボクのほうに傾いて——傾いて体重かけてる。

「み、命ちゃん。ボクが悪かったから」

「先輩が変なこと考えてもすぐにわかるんですからね」

だったら、最初に考えた、この人たちって変じゃないかなーっていう思考にも答えてほしかったな。

「少しは先輩をみならおうと思ったから——」

と、命ちゃんは呟いた。

ふむん。きつと、ボクの状態が少しは命ちゃんにも染み付いてきたってことかな。ボクって、わりと人当たりはよいほうだと思ってる。ゾンビという特性があるせいかもしれないけど、つまり、チートにおんぶに抱っこされてる安心感のせいかもしれないけど、こちらに害意がなければ、そりゃ人並の態度をとるよ。

こちらからいきなり攻撃したり、敵意をむき出しにしたり、ましてやみんなゾンビにしてしまえなんて思ってる。

とはいえ、利益——、生存という利益に限らず、人間が何か自分の大事な価値観を守るために、他者に利益を欲するのも当然だと思ってる。たとえば、女将さんの背後で座って、疲れた表情をしている三人の女子中学生たち。彼女達は当然のことながら平和な国であれば、労働の対象年齢ではない。

けれど、いまのご時勢、生き残るために、女将さんの部下のような形で働いているのかもしれない。自分の生存のために、労働という対価を支払ってる。

プロテクターと安全ヘルメットをつけた彼女達の姿を見て、ボクはそう結論づけた。まあ、勝手な予想だけどね。

ゾンビだらけの世界じゃ、サバイバル能力高くないとやってけないもんね。この温泉施設は、水も豊富だろうし、それなりに引きこもるには有用なのかもしれない。

侵入者が来なければ——。

そう、ヒヤッハーさんみたいな略奪者がこなければの話だ。

いまのボクたちは平和面した侵入者といってもおかしくない。普通なら、さっさと出て行けといわれてもおかしくない。相手の立場からすればだけど。

女将さんがすごくいい人って考え方もあるだろうけど、たぶんボク

が幼すぎたんで、様子見しているってところだろう。

だから――、

ボクは交渉することにした。

「えっと、ボクたち温泉に入りきたんです。さつきもいきましたけど」

女将さんはじつと聞いたまま、静かにうなずいた。

うう。手ごわそうだ。こちらに不用意に情報を渡さないというのは、交渉役としてはやりづらい。

「温泉入りたくないなあ……」

思わず幼女になってしまうボク。媚び媚びでも許してください。

害意はないのはわかってもらえると思う。

「温泉ですか……」

じわっと浸透するような言い方だった。

わずかに顎をひいて、ボクをじつと見つめてくる。

威圧感が増していく。

「えっと、温泉に入らせてくれたら――、物資補給とかなら手伝えますよ。場合によっては護衛とかもできるかも。ボクたち強いし」

「護衛ですか？」

いぶかしげにボクを見る女将さん。

そりやそうだよね。ボクって見た目は完全に幼女だし、幼女が護衛とかなんの冗談だって話だ。ボクの配信を見てない一般の人の反応としてはすごく当然だと思う。

だから、もはやチートでゴリ押しするしかない。

わかってたけど、ボクは交渉ってあまり得意じゃない。

「ボクはゾンビに襲われないという特性を持ってるんです」

「ゾンビに襲われない？」

女子中学生たちが息をのむのがわかった。瞳の中にわずかに希望がもった。まあ本当としたら、どこか他の場所に移るのも可能だし、場合によっては物資補給もできるしね。

もちろん、ボクが嘘をついている可能性もあるわけだけど、そんなすぐにバレる嘘をついてもしかたないところだ。

「もちろん、証明もできます。適当なゾンビさんの傍を通ってみせてもいいですよ」

「それが本当だとしたら——、他の避難場所に連れていってくれたりも」

委員長タイプの子が口を開き、とつさに口元を手で隠すような動作をした。

女将さんは委員長タイプの子のほうに一瞬、視線をはわせ——それからボクのほうに向きなおる。

「お客様がゾンビに襲われないというのは、お二方ですか」
「そうです」

「仮に私たちが外に出たいという場合、私たちも襲われなくなるのでしょうか」

「うん。そうだよ」

「それを証明することはできますか?」

「いいよ」

ボクはみんなに外に出るように促した。

ゾンビ避けを証明することぐらい簡単だ。外に出れば、まばらにだけゾンビはいる。

女子中学生ズは、一週間近く暗い建物の中に捉えられていたせい、まぶしそうに手でひさしを作っていた。あ、おどおどしている女の子は建物から出てこない。

「どうしたの?」

って聞いてみても、フルフルと首を横に振っている。

外にでるのが怖いのか。それとも単純にゾンビが怖いのか。

おそらくはゾンビ——。

現実的なゾンビは夏の暑さにも耐え抜き、特に腐った様子もないグロなしゾンビなんだけど、その生気のない顔つきや、こちらを見てくるおちくぼんだ目は、見えて怖いというのもわからなくはない。

ゆったりとした動きで、ゾンビさんを適当にこちらに呼ぶ。

ボクもすたすたとちかづいて、ゾンビタッチ。

はい。大丈夫ですよ。

「すごい、本当にゾンビ避けしてる……」

委員長なメガネさんがびっくりしていた。不良少女のほうも同様だ。

女将さんは表情筋があまり働いていないのか、ほとんど変化はなかった。

その代わり、女将さんはこちらに近づいてきた。

ゾンビがまだいるのに、勇気があるな。大丈夫だったこと、少しは信じてくれたのかな。

「本当にゾンビに襲われませんね」

「うん。ボクは超能力少女だからね」

配信設定だけだ。

まあ、ゾンビ避けも超能力なのは間違いない。

「ゾンビに襲われないのは、お客様の特性ですか？」

「そうです」

「誰かにその力を分け与えたりはできるのですか？」

「一度死んで運がよければ」

本当は無制限にできるけどね。周りをヒーロゾンビだらけにするのはNGだと思うんです。

仮にヒーロウイルス——素粒子というかエネルギーのカタマリの特性が、物事の定常化に寄与するものだとすれば、ボクたちゾンビには致命的ともいえる欠点があることになる。

それは——人間じゃなくなるとか、そんなんじゃなくて、もしかすると子どもができないとかそういうこともありうるんじゃないかということ。

ゾンビは知ってのとおり死んでるから、成長しないってことも考えられる。

もちろん、頭を撃ち抜かれたら活動を停止するわけだけど、いくら身体が丈夫になっても、なんらかの事故とか、そういうので、少しずつ数が減っていくということはありうるだろう。

つまり——、ヒーロゾンビだけだと、いつかは滅びるかもしれない。かもしれないというのは、ピンクさんのやりとりのひとつで、た

だの仮説だけだね。

ボクという存在については、ボク自身も知らないことが多い。そもそも、まだ、なんといえればいいのか。月のものが来てないので。来てないのは永遠に來ないのかもしれないし、わからないのです。

ゾンビになったときの状態で固定化されているかもしれないということで――。

ちなみに、セクハラ発言だけどやむをえず命ちゃんには来ているか聞いたこともあるよ。

その時の命ちゃんの様子は、筆舌に尽くしがたい怖さがあつたけど、結論だけを述べると、ありますとのことだった。

ゾンビという時間の固定化は、ある程度線分の時間の中での固定化なのかもしれない。

なんてことを全部ピンクさんがつらつらと言っていました！

「で、どうでしょう。ボクたち温泉入っていいですか？」

べつにここじゃないどこかでもいいけどね。

温泉なんていくらでもあるし、最悪山の中の源泉湧いているところを掘り進めてもいいくらい。

まあ、ボクとしては他生の縁というやつも感じるから、女将さんたちがどこかに行きたいのであれば、手伝うのはやぶさかではない。

「温泉に入るのはかまいませんよ。ここはちいさな温泉施設ですが、もともと地元の方の憩の場になることを目指してまいりましたし、もとより来る者を拒まずというのがこのような施設の道理ですから」

「やった！ありがとうございます。あ、でも温度とか大丈夫なのかな」

温度調整をもしもヒイロウイルスで行った場合、その温泉が汚染されちゃう可能性がある。

「特に問題ございません。源泉かけ流しの状態で適温です。お肌もうるおう美人湯ですよ」

「へー」

美人湯とかはどうでもいいけど、ともかく入れるというのはうれし

い。

「お礼は、物資補給がいい？ それとも、町役場にでも行きますか？
たくさんの方がそこに集まってるみたいだけど」

時折、ボクの歌声が流れてくるので微妙に恥ずかしいです。

「そのあたりはおいおい……。まずは温泉に入られたらどうですか」
話が早くて助かるね。

☆
||

かぼーん。

つて、アニメとかの効果音で流れそうなそんな感じの風景だ。

脱衣室で服を脱ぎ、マナさんの胸のふくらみがただの幻想ではない
ことを確認した。

ボクはいの一番に速攻で服を脱いで、速攻で浴室へと向かいまし
た。

いや——、正確には向かおうとしたところで、マナさんがつしり
と腕をつかまれてしまい、ついでに命ちゃんにも反対の腕をつかまれ
てしまい、グレイ型宇宙人よろしく、再度脱衣室に連れ戻されてしま
いました。

ちなみにボクの貧層な身体はタオル一枚もまとつてない状態なの
で、とつても恥ずかしいです。

で、その場で、なぜかストリップショーをみせつけられるはめに
なってしまった。

せめて、ということボクはタオルをまきつけて、脱衣室の壁のあ
たりに置かれていたちよつとした椅子に腰かけて、目をそらしてはダ
メらしい。

意味わかんない。

命ちゃんもいそいそと服を脱いでるし。みずみずしい肌は白を基
調とした色合いに、ほんのり朱色がさして、ボクに見られて楽しいの
？ 露出狂なの？

命ちゃんってそろそろ女子高も卒業しそうな年頃だから、普通に

ちゃんと女の子だけどさあ。

やっぱりボクの中には妹分という意識が強くて、幼いころからの延長線上にしかないので、興奮するかしないかでいったら微妙どころさ
んだ。

というか、ボクはなぜ、妹分の裸体をガン見しながら冷静に分析しているのだろうか……。

他方で、マナさんについては、やはり見慣れた身体ではないせいもあって、ヤバい。

そして、戦闘力が違いすぎる。

圧倒的ではないか……。何がとは言わないけど。ちなみにボクの戦闘力は皆無に近いです。ほんのちよつとだけあるといえはあるので、戦闘力たったの5かゴミめといわれても納得の大きさ。

「ふふ。ご主人様がわたしのおっぱいを見てますね。どうですかあ」
ひらひらしているブラジャーを右手でプラプラさせて、おしげもなく裸体（上半身）をさらすマナさん。

ヤバい。

「わわ。マナさん、温泉施設ではしゃぐのはNGだよ」

「そんなこというご主人様はこうです♪」

ブラジャー。ボクの目で眼鏡風にかけられるの巻。

「ふつくらぶらじやーボクにアタック！」

「んーんー。ハロゲン元素。ハロゲン元素」

そう。

ハロゲン元素はF, Cl, Br, I, Atなので、語呂合わせで、そういうふう覚えていたんだ。

人間焦ると、妙なことを口走ってしまうことってあるよね。

「照れたご主人様もかわいいです。食べちゃいたいですね」

「み、命ちゃん助けて。マナさんに襲われる」

「淑女協定を結んでるので無理です」

命ちゃんからはにべもない言葉。

「なにその淑女協定って」

「マナさんとわたしで、先輩をおいしくいただくという協定です」

「なにそれ。ボクの意志は？」

「鬻るといふ漢字は男女男と書いたり、あるいは女男女と書いたりするらしいけど、女女女だったらどうなるんだろう。姦しいとしかいえない。」

「ご主人様がもしもほんのちよつとでもわたしといいことしたいと思つたら、すぐにおつしやつてくださいね。ご主人様の忠実なるしもべとして、すぐにその願いを叶えますから」

「いや、ボクそんなことしたくないし」

「たぶん、精神と肉体にズレが生じてるのだと思う。」

男としての精神は確かに今の状態に桃色の発想をしてしまうけれども、肉体的にはたいして興奮しているわけじゃない。この微妙さはきつとクオリアにも似ていて、ボクの『感じ方』だから、誰にも伝えようがない。

「わたしはご主人様と合体したいですけどね。命ちゃんもそうでしょう」

「一万年と二千年前から愛してます」と命ちゃん。

「前世なのそれ？」

「私はもともとアトランティスの戦士で、先輩は姫様でした」

「二十年後くらいに掘り起こされて黒歴史になるようなやつだ」

「まあ冗談はさておき、先輩って肉体的にはやっぱり女の子なんですね」

「うん？ うん……」

「でも、私としては先輩が草食系でも全然問題ないです。草食系を食べるのはいつだって肉食系なんですから。先輩を食べるのは言わば必然です。世の中の摂理なんです」

「マナさん。命ちゃんが怖い。助けて！」

「淑女協定があるので無理で〜す♪」

あかん。これ詰んでる。

湯船につかる。はあ~~~~~たまらんね。

日本人なら温泉だろうがという、わけのわからない鉄の意思でもってここまでできたけど、確かにそうだね。やっぱ、温泉最高。

よくファンタジー小説とかで温泉に浸かったり、温泉掘ったり、ともかく毎日お風呂に入るために尽力する異世界転生主人公がいたりするけどさ。

温泉に入って、魂の疲れというかそういうのを洗い流して、生まれ変わるようなそんな感覚。やみつきになりますわ。

はああ~~~~~

さっきのアレはなかったことになった。

なにしろボクは湯船につかり、リーンカーネーションしたのだ。生まれ変わったのだ。

そう、なにをどうされたのかとか、そんなのは一切ない。

R18問題は無いと思っていただけこう。

うう~~~~~

旅の恥はかき捨ててというから、あえて追加事項を言うと、もちろんボクの身体はふたりがかりで洗われましたよ。スポンジとかないから、手で。

わりと入念に。

髪の毛はシャンプーとコンディショナーをしたあとは、タオルでぐるぐる巻きにしてもらってる。こうしないと、わかめ状態になるからね。

ふい……。一応、約束は果たせたかな。

って、マナさん。なんでハンディカメラでボクを撮影しているの？

盗撮ってレベルじゃねーぞ。これ。訴えてやる！

「なにしてるのかな〜マナさん」

「REC」

はは。ワロス。

さすがにボクも怒ってもいいよね。

「待ってください。ご主人様」

「なんですか。変態ロリコンお姉さん」

「あ、その言葉とてもいい……もつとののしつていただけるといろいろとはかどります」

「そう……もう、カメラ壊してもいいってことだよね？」

「あ、あ、待ってください。ご主人様、主張したいところはそこではなく……」

「ん？ なに」

ボク、睨みをきかせます。

効果をまったく感じないけど、やらないよりはマシかな。

「ご主人様はゾンビ映画が好きなのでしょう」

「うん。無類のゾンビ好きだと自負しているよ。かつてはすべてのゾンビ映画を見ようと決意したこともあった……」

若気のいたりというやつだ。

「では、こういうハンディカメラの特質を活かしたゾンビ映画といえ
ば？」

はっ……。なるほど。あれか。

|||||

REC/レック

ゾンビ映画の中でも特殊な視点、つまりはカメラを持った一人称視点での作品。カメラのブレやキャラクターの息遣いが臨場感を増す。恐怖演出は抜群だ。アパートという閉鎖空間での出来事なので、このあたりは好き好きがあるかもしれないが、ゾンビが単品で出てくることが多い。ゾンビがたくさんでてきて囲まれて絶望するという展開はない。その代わり、カメラの暗視機能を使って闇の中でゾンビがゆっくりと迫ってきたりと、この作品の影響を受けた作品も多いのではないか。

|||||

って、べつにゾンビ映画だからってなんなんだよ。

撮影許可が下りるとでも思ってるの？

「いますぐ戻ってきてください。じやないと壊します」

「え〜」

「もう二度とマナさんとお風呂入らない」

「わかりました。しっかりと目に焼きつけておきます」

「すごい速さで戻って行った。」

でも目には焼きつけるつもりなんだね。べつにそれはいいけどさ。

ハンディカメラのデータはあとで消すように言っておかないとね。

しばらくは湯船の中で、じんわりとお湯がしみ込んでいくのを楽し

んでいた。

ふう。

やっぱり落ちつく。そうだよ。みんなボクに興奮しないで、お湯にはゆったりつかるべきだと思います。

命ちやんはわりと落ち着いているから、そのあたりは安心だね。

付き合いが長いから、ボクがいやがることは基本的にしない。マナさんもそうだけど、命ちやんの場合は経験値が違うからね。なにしろ小さなころからいっしょにいたし。

変にドキドキしない。

「さて、先輩の先ほどの問いに答えましょう」

「ん？ なんのこと命ちやん」

「先ほどの人たちがあやしいって話です」

「ああ、べつにどうでもいいかなー」

もう温泉入れたし、本当にどうでもいい。なにか物資が欲しいっていったら、何回までは助けますとあって、好きなものリストでも書いてもらえばいいし、緊急避難場所に行きたいというのであれば、護衛してあげてもいい。

温泉にはそれだけの価値がある。

昔は入湯するのもその地域の人たちの許可が必要だったって聞くし、そもそも異物であるボクらを受け入れてくれたんだ。無碍にする気はない。

「私としては、少し危険な感じがしますね」

「ふうん。どのへんが？」

「女子中学生たちの焦りというか不安のようなものを感じました」

「でも、それってゾンビにいつ襲われるかもしれないって恐怖があるからでしょ。ボクたちは襲われないからそのあたり鈍感になつてるのかもしれないけれど、普通なら怖いんじゃないかな。マナさんはどう思う？」

ボクは脱衣室から戻ってきたマナさんに聞いてみることにした。

意見はたくさん聞いたほうがいいからね。

「そうですね〜。ちよつと育ちすぎてるかな、と」

「幼女指数のことじゃねーよ！」

まったくもう。マナさんはブレないな。

「やっぱり、ご主人様くらいの年齢が一番好きです。小学生は最高だぜ！」

「ボク……小学生じゃないんだけどね」

「真面目なところ、ご主人様の戦闘力数——お胸の大きさはなくて、実際の本当の戦闘力でいえば、銃撃にも耐えきるところなのでしょうから、彼女達がなにを考えてなにをしてこようとも無意味だと思いませんね。ちよつとどうかなと思うのが、毒とか睡眠薬とかでしようけど、その気になればヒイロウイルスで消せるんじゃないですか？」

まあ……それは確かにね。

いくら相手がボクたちより数の有利があるといっても、ボクは彼女達四人を相手どつても楽勝だ。

毒とか睡眠薬についてはアルコールとかでよっぱらい状態になつたりもするから微妙どころだけど、あれはヒイロウイルスでどうしようとしなかつたからというのものもあるからね。

つまり、ボクたちに毒は効かない。

と、思います。

「そもそも論でいえば、ボクたちは彼女達にとって有益な存在のはずだから、そう簡単に害するとう結論にはならないと思うんだけど」
「んー。論理的思考に従えばそうですね。人間っていうのは必ずしも論理的でないですからね。もう世界が壊れてから二カ月近く経つわけですし、常識的に考えてっていうのは通用しなくなつてきているんじゃないですか」

「うーん……」

ヒロ友たちは少なくとも人間らしさを保有してたように思う。

とはいえ、他方で、ヒヤツハーさんたちに遭遇したりと、かなり危険な目にもあつてきてる。

どっちが人間の姿なのかといえれば、どっちもだと捉えるべきなんだろうと思う。

人間って、よくわからない。

ハザードレベル66

「ふう……」

ボクたちは温泉施設に来ている。

そこで出会ったのは三人の女子中学生と女将さん。

湯船にゆったり浸かりながら、ボクはふと考える。

——三人はどんな関係で？

というやつだ。

女将さんはわかるんだけどね。

温泉施設といっても、微妙に、なんというかレジャー感覚なやつじゃなくて、それなりに古めかしいといったらんだけど古式ゆかしい感じの施設。

寂れた遊園地みたいな感じで、でもそんなに拡張高いって感じもなくて、たぶん地元の人を通っていたんだろうなって思わせる。

この温泉施設には女将さんがいてもぜんぜんおかしくない。

だから違和感はなかった。

でも、女子中学生の三人組って——。

なんだろうな。仲良しなのかどうなのかが微妙な感じだ。

たとえば、家族がゾンビ化して家から脱出してきたというパターンはあるかもしれない。

あるいは——。

ボクは思いません。ゾンビハザードが始まったとき、学校は夏休みだったはずだ。だから、余暇を楽しむためにここに来たんだと思う。でも、なんでセーラー服なのかな。余暇を楽しむというのなら私服でもいいはずなのにね。

余暇じゃなくて学校行事の一環とかかな。

「んん。ご主人様がぼんやり何かを考えてらっしゃいますね」

マナさんがボクの対面に座っている。

正確には浴槽はプールというほどではないけれども、それなりの広さがある。対面に座っているといっても、数メートルほどは離れている。ちなみに命ちゃんは隣だ。といっても、こちらもそれなりに距離

は離れてるから、必要以上にドキドキはしない。

マナさんはきれいなお姉さんだけど、変態性欲に支配されたロリコンであって、ボクは捕食される側だから、いまいちえっちな気分で見たりはしないんだよなあ。

見た目だけなら……見た目だけなら！

「ご主人様になんだかひどいことを思われてる気がする……」

「げふんげふん。そんなことないよ」

当然のことながら、浴室は暗い。

電池式なのか、ランプの明かりがほんのりと灯り、やさしく辺りを照らし出している。風情があるし、温泉って感じがして、これはこれで好きだ。

たぶん、あの人たちもきつとここに入っているんだろうな。

身奇麗にしていたから、なんとなくわかる。

「あの三人の中学生たち——どんな関係なんだろう」

と、ボクはなんととはなしに言った。

「ふうむ。気になりますか」

「うん。それなりには気になるかな」

「ご主人様はもしかしてロリコン……じゃないですよ？」

「違います。同属みたいにいわないですよ」

「ご主人様自身がロリですもんね」

「うん。まあ……」

自分の身体が小学生並に縮んだことは否定しようがないし、基本的にマナさんは外貌重視だ。ボクの対面に座っているのも、きつとボクを視界に入れるため。

若干、身の危険を感じなくもないけど、マナさんはボクのいやがることはしない。ゾンビ的な謎の連携能力で悟っているのか、それとも大人としての経験値がなせる業なのか、ボクのこころの動きって、マナさんには筒抜けな気がする。

「む。またご主人様がわたしのことを興味深げに見ている気がする」

ほらね。

ボクは笑い、そして隣にいる命ちゃんにも聞くことにした。

いろんな意見を聞くっていうのは、危機回避には大事だよ。人を避けるばかりが危機回避じゃない。

「女子中学生どうしはきつと知り合いでしょうね。あまり属性的には被っていないように思えますけど、同じ制服を着てましたし、きつと同じ小学校から同じ中学校にあがったんでしょう」

「女の子って同じってことをすごく重視すると思ったんだけど、そんなことないのかな」

三人の印象は結構バラバラだ。

ひとりは不良っぽい感じ。べつに80年代の不良少女ってほどではないんだけど、目つきが鋭くて、やや赤みがあった髪の色をしていて、なんとか粗暴そうな感じ。

ひとりは委員長タイプ。めがねをかけてるから勝手にそう思ってるだけだと思うんだけど、真面目そうな印象だった。

最後のひとりは、おどおどしている感じで、それが素なのかはわからないけど、他人をこわがってるみたいに見えた。陰キヤなのはボクもなので、なんとなく親近感が湧く。

最初の不良っぽいのがなんとなく印象的に他のふたりとはタイプが違うんだよなあ。まあそれは勝手なボクの印象なだけであって、実は一番清楚だったのが不良ちゃんだということもありえるけど。

ただ、もう温泉に入ったことだし、正直なところを言えば別にどうでもいい。

報酬の話はあとまわしにしてしまったけれど、それも今のボクたちにとってはたいしたことじゃない。

そもそも、見捨てる見捨てないでいったら主導権はこちらにあるわけだし……。そう考えてしまうのは、少しばかり酷薄かもしれないけれど。

ふう……。暑くなってきた。

「そろそろあがろうか」

「え。もうですか?」

隣の命ちゃんが名残惜しそうに言った。

「温泉まだ入ってたいの?」

「せっかくの温泉ですし、先輩の隣にもつといたいです」

素直なところは命ちゃんのいいところだ。

でも、温泉に浸かりすぎてもふやけそう。

ボクは湯船から立ち上がり、どこか涼しいところはないか探した。

「あー、露天もあるんだ」

見ると、隅のほうから外にいけるようになっていた。スライド式の透明なドアがついていて、すぐ入れるみたいだ。

いってみようかな？

「ご主人様。露天風呂に向かわれるのですか？」

「うん。けどなんでうれしそうなの？」

マナさんは笑顔をこぼしている。

「薄暗いところよりは明るいところで、ご主人様の裸を見たいですからね」

「そうですか……」

まあどこに入ろうと自由ではあるし、ボクは人の自由というのを束縛するのは嫌いだ。自分がそうされるのが大嫌いだからというのが理由。

で、結局みんな露天風呂のほうに向かうことになった。

ガラリとプラスチックか何かでできた透明なドアを開けると、突き抜けるような蒼穹が目に入る。

「秋空だよねえ……そろそろ」

「幼女ごころと秋の空」とマナさん。

幼女ごころってなんだろう。

「思えば夏から始まったゾンビハザードだけど、みんなそろそろ大変な時期かもしれないよね」

「わたしとしてはご主人様のこぶりなおしりを観察するのに大変です」

「マナさんの場合、大変というより変態だよね……」

「真面目なことを申し上げますと、食糧という点では厳しい状況になりつつあるでしょうね。日本の食糧自給率は悪くないほうですけど、それも電気が前提ですしねえ」

つまり、九州内だと食糧自給すら辛いつてことだ。

例えばとあるゾンビ映画だと、牧場とか農場にたてこもったりする。

そこはスーパー銭湯ならぬスーパーど田舎で、ゾンビもちらほらとしか出現しない。害獣をけちらす要領でときたまゾンビを蹴散らし、そして、細々と食糧を生産するということは、なくはないと思う。

でも、電気がなければどうだろう。

このように水が湧いてくるところはいいだろうけど、そうじゃないところだったら、蛇口をひねっても断水状態になりかねない。

ちなみに、ボクのアパートで一番難儀しているのはトイレ。

二階まで水があがってこないからね。

ヒロウイルスによる浸透力で無理やりくみ上げたりしてるけど、こんなことに超能力つかってどうすんのって感じた。

「電気ってやっぱり大事だよね」

そろりと足さきを伸ばして、お湯に浸かる。

露天風呂も中のお風呂と同じで薬効成分とかは同じだろうけど開放感が違う。

残念ながら、周りは木の柵で覆われていて、景色とかは見ることができないけれど、見上げると切り取られたような空が見えて、それはそれでいいなあと思いました（小学生並の感想）。

「ふい……」

「ゾンビ成分が溶け出しそうな声がかわいらしいですね」

「大丈夫だよ。ヒロウイルスは溶け出したりしてないし」

汗とか唾液じゃ、あまり感染力は高くない。そこにヒロウイルス自体はあるけれど、ゾンビ化するだけの感染力を失ってしまう。

マナさんは涙からヒロゾンビ化したわけだけど、それはマナさんが既にゾンビだったからだと思う。人間はウイルスに対して多少の抵抗力があるみたい。

「ちよつと熱いかな。あまり長風呂してるとゆでだこになっちゃう」

「温度調整ができてないですからね」

命ちゃんが微笑をまじえていった。

いつもより口調が柔らかいのは温泉の薬効成分がきいたのかもしれない。

「温度調整しなくてもちょうどいい温度だったっていったけど？」

「入れないレベルじゃないですけど、本来なら水をもう少し足してぬるめに設定するはずですよ」

「やっぱり温度調整はするんだね」

「まあ、そのウリが熱湯風呂だったら、話は別でしょうが……」

そんなところは少ないってことか。

ボクとしてもぬるま湯みたいな優しい感じのところが好きだけだね。

やっぱり、電気は必要かあ。

でも、ボクがヒイロウイルスを垂れ流してしまうと、さすがに温泉が汚染されてしまう気がする。すぐに散逸するだろうけど、汗とかが洗い流されるってレベルじゃない。ここの温度調整機能を使うにはどれくらいのパワーが必要かによるな……。

「温度調整の機械をヒイロウイルスに直接感染させればいけるかな」

「可能でしょうが、わざわざそこまですることもないと思います」

「ここに一度しか来ないんだったらそうだろうけど、何回かは来ることになるだろうしね」

すぐに避難したいというのでなければ、物資を渡すことになるだろうし、そうでなくても、ここは電気を使わなくても入れる温泉施設。

何回かは来たいなと思ってる。アパートのすぐ近くだし。

「ボイラー室みたいなどころで、ご主人様が”んツ”って力んでいる姿を想像するだけでご飯三杯はいけます」

「manaさんが何を言ってるかわからない」

いや本当に。

でも、そんな感じになるのかな。もしも温度調整をしようとするだけだ。

ボイラー室か機械室かわからないけど、そこで力をいれっぱなしにしないといけないのが難点だね。恒常的に電気を作るための設備が必要だ。

「んー。めんどうくさいな」

いちいち地下かどこかにいつて——それからまた戻ってきて、元の木阿弥になつてゐる可能性もあるしなあ。

ボクは意識を下に移す。

ボイラー室の場所を女将さんに聞いてみようかな。

とたんに、ボクはふと気づく。

あれ？

「ご主人様どうかされましたか？」

マナさんはボクの顔を見て、すぐに聞いてきた。

「地下にゾンビがいるみたい」

「まあゾンビモノでは定番ですよ。地下探索とか、そこで突然の遭遇戦とか」

「そういうものかな？」

「そういうものですよ」

違うと思うけど。

確かに、地下道とかを探索するとか、脱出路にマンホール下の下水道とかを使つたりすることはあるだろうけど、ここの施設の地下にすぎないだろうからね。

「おおかた、ゾンビになつた人がいて閉じ込められたかたちになつたんじゃないかな。わざわざ倒す必要もないしさ」

「すぐ近くにゾンビがいるのにはですか？」

命ちゃんが不思議そうに聞く。

「まあ、地下にいるつてことは家族とか従業員の人なんだろうし、閉じ込めておけるのなら閉じ込めておきたいつてところなんじゃ？」

「それならわかります」

「うん」

まあ、地下にゾンビがいようがいまいが、そもそもゾンビに襲われないボクたちには関係ないところだ。

地下の人をゾンビから戻すというのも温泉の代価にはなりそうだけど、どうしよう。もしその人が人間的に生存できないほど損傷していたらヒーロゾンビにするしかなくなるけど、アパートのみんなと

違って、好き勝手にほんぽん増やすのは——やめたほうがいいよね。
まあそれも交渉次第か。

もうそろそろ限界が近かったボクは、お風呂をあがって、石畳のところに腰掛けることにした。

「ご主人様が無防備すぎて、わたしとしては少々心配です」

いまのボクはタオルもつけてないし、そう思われるのも無理のないところかもしれない。でも、こんな小学生のからだに欲情するのは、目の前の変態お姉さんだけだろうし、お姉さんは女の人だからべつにいいって感じ。

少し恥ずかしい気持ちはあるけど——、なんとというか男としての意識が残ってるボクとしては、見られるということこそそんなに意識していないってことかもしれない。配信のときはそのあたり結構意識してたんだけどね。

マナさんは家族みたいなものだし。命ちゃんも言うに及ばず。

「む……」

と、ボクは視線に気づく。

変態ロリコンお姉さんでも、命ちゃんでもない。

「あッー」

そう——、ゾンビさんでした。

柵の一部が破壊されていて、ささくれだったようになっていた。

ちょうど風呂桶みたいな構造で、長い板が鉄かなにかの針金上のもので固定されているような感じなんだけど、材質はあくまでも木で、わずかな隙間が開いている。その隙間に手か何かを入れて、少し歪んでしまっている感じ。

そこから、たまたまなのかゾンビさんがこっちを覗いていた。

「目と目が合う瞬間……」

いや、ゾンビさんに意識はないはずなんだけど、ゾンビから戻すと覚えていたりするからなあ。

いまこのときの情動として、覗いているという意識はないはず。

でも、もしもゾンビから戻ることがあれば、きつとこの瞬間を思い出すことはできるだろうな。飯田さんみたいにほんやりしている例

もあるみたいだし、個体差はあるみたいだけど。

ともかく、そんなことを考えると微妙に恥ずかしい。

「も……森にお帰り」

ゾンビはくるりとその場でユーターンしていった。

「あー、先輩ってもしかして、女の子の意識が出てきてるんじゃないですか」

「え、どうしてそういうことなの？」

「だって、今のゾンビ、男だったじゃないですか」

「それが？」

「わたしたちに見られても恥ずかしくくない。イコール、同性だと認識しているからでは？ 逆に男の人に見られるのが恥ずかしいというのは、先輩の意識が女の子のほうに傾いているから、とか」

「ち、違うよ」

そんなことないはずですよ。

だって——、だってそれはさ。

「家族みたいに思ってるから」

そう、マナさんも命ちゃんも、ボクの家族みたいなものだし。

家族に裸を見られても……、恥ずかしいけど、そこまでじゃない。

恥ずかしいけどね。

ボクに迫ったりしてこない限りは。

ゆっくりと温泉にいっしょに入るぐらいなら。

たいして恥ずかしくもないってことなんだ。

「わたしは別の意味で家族になりたいです」と命ちゃん。

「うちのご主人様がかわいすぎる……」とマナさん。

「同性婚はいまの日本じゃ認められてません」

「日本政府もそろそろ崩壊寸前でしょうし、神聖緋色帝国では認められるということになります」

「勝手に立国しないでよ……」

「命ちゃんのご主人様が結婚したら、どっちが夫なんでしょうか。ご主人様？」

「そこは考えるところじゃないよ」

その後もわちやわちやと楽しみました。

☆Ⅱ

脱衣室にはマッサージチェアと、例によってコーヒー牛乳とかが置かれてる例のアレがあっただけけど、残念ながら中身は空だった。まあ食糧とかは全部ひとまとめにしているだろうし、そこはしかたない。

自前で持つてきたスポドリを飲むことにする。

「マッサージチェア……動かそうかな」

「マッサージくらいなら、わたしがやりますよ」

マナさんがすごく楽しそう。きつと幼女の柔肌に合法的にさわることを妄想しているんだと思う。とっさになんて言葉をかけたらいかわからなくなっちゃったよ。

「ちよつといいい？」

入り口のほうから声がかかった。

声の感じからして、女子中学生ズの誰かなのはすぐにわかった。

見ると、女の子が入り口のドアのあたりで腕を組み、背中を壁に預けている。

不良少女だ。茶髪なんだけど、染めたのか脱色したのか微妙な色合いをしていて、あいかわらず目つきが鋭い。

もちろん、不良少女っていうのはボクの勝手な印象だけど。

「どうしたの？」

と、ボクは聞く。

少し緊張しているのか。その子は少し間をおいた。深呼吸をひとつ。

「わたしは、 大山正子」

いきなり名乗るのか。

わりと礼儀正しいのかもしれない。

「ボクは夜月緋色だよ。なにか話があれば聞くけど？ 代価の件？」
「そう」

ひとりで来たのがおかしいなって思ったけど、思いつめたような顔をしている正子ちゃんを見ると、問いただすのもどうかと思っ
た。

「座ろう」

とりあえず、そこらにおいてある籐でできたりクライニングチェアにすっぽり収まって話を聞いてみることにする。

「他の子たちはどうしたの?」

「おばさんと料理つくってる」

「おばさんって女将さんのこと?」

うなずく正子ちゃん。

不良っぽいと思ったけど、目つきの鋭さを除けば案外サバサバした性格の普通の女の子って感じだな。

「料理ってボクたちのために作ってくれてるの?」

「そう。けど、おばさんがなに考えてるのかはわかんない」

「んー」

お客様は神様ですっていうのはさすがにないだろうしね。

「ありうるとしたら、それこそ代価のことじゃないの?」

代価を吊り上げるってことは原理的に不可能だけど、ボクたちの心証をよくして、代価をよくしてもらおうという発想はありうるはずだ。

「おばさんはべつにここを出て行きたいと思ってるわけじゃないと思う」

「ふうん……住み慣れたところだから?」

ボクもアパートから出て行きたくはないし、人は場所に縛られるものだと思う。縁もゆかりもないところにいきなり住みかえるっていうのは難しいし、この温泉施設にも歴史があつて、でていきたくないとかそんなところ?」

「違う」

ほとんど聞き取れないくらいの小声で正子ちゃんは言った。

「じゃあどうして?」

「おばさんには子どもがいたんだ」

「いたってことは今はいない?」

「そう……今はいない。令子はゾンビになっちゃったから」

正子ちゃんはとても正確なことを言ってるように思う。

ゾンビは人間じゃないし、ゾンビ状態だと心は駆動していない。

つまり、死んでいるのと同じ。

だから、いないと言っている。

「女将さんは、えーっと、その……令子さんがゾンビだからここから動きたくないってこと?」

「そうだと思う」

「じゃあ、代価は物資補給になりそうだね」

「わたしは——、お婆さんはきつとわたしたちのこともどこかに行かせたくないんじゃないかと思ってる」

「労働力としてみてるから?」

子どもを働かせるなんて、労働基準監督署はなにをやってるんだろう。

なんてことを思ったりもするけど、まあ冗談です。

でも、働きたくないって思ってるひとを働かせるのは反対だ。

特に子どもはやっぱり働くには早すぎる。人生において学生時代っていうのは、たぶん長い長い余暇みたいなもので、一番時間があるときだろうからね。

その時間を不当に奪うのはよくないと思います。

余暇は必要。よかですか? (唐突な佐賀弁アピール)

命ちゃんがじーっとこちらを見てくる。

ボクのこころを読まないでよ!

まあ、正子ちゃんにはさすがにボクの激ウマギャグは当然伝わるはずもなく、沈痛な面持ちで眩くように口を開いた。

「そう……労働力としてみてるっていうのは確かだと思う」

「べつにそうしたくないならそうしたくないって言えばいいんじゃない?」

ボクとしては正子ちゃんが自分の意思で出てくってことなら、例えば町役場につれていくのはまったく問題ない。

それで、女将さんが激怒するという展開になってもねえ。

この温泉施設は使えなくなるかもしれないし、それはちよつともつたない気がするけど、この場にいたくない子をそのまま留めおくつていうのはちよつとどうかと思う。正子ちゃんの意味を尊重したい。

「わたしもちよつと迷つてるところがあつて——」

苦しげに、一言一言を噛み締めるように言つてる。

なぜという疑問が湧いた。

けれど、その疑問はすぐに解消した。

「わたしには、令子に借りがあるから……。だから、ここを出て行くわけにも行かないかなつて思う部分もあるんだ」

「正子ちゃんがボクに話しかけてきたのは、迷いがあるから？」

「そうかもしれない。あんたたちについていくほうがいいに決まつてるけど、おばさんはわたしたちに対して、うまくいえないけど、こころを縛つてる」

「こころを縛つてる？」

オウム返しになつちやうな。

不良っぽいと思つていたけれど、正子ちゃんはどちらかといえば、意思が強い子なんだろう。

自立心が強いのかもね。

だから、ボクとしては話半分として聞いていた。

女将さんがこころを縛るといっても、尾崎豊の”卒業”みたいに、大人に支配されてるつて感じてるだけかなあつて、そういうふうに思つていたんだ。

ボクも中学二年生くらいの人に覚えがあります。

突然、校内にテロリストが乱入してきて、ボクがステイプン・セガールみたいは無双するつてやつだ。

学校の先生たちはあつてなくやられちゃつて、ボクがヒーローになるつてそんな話を妄想してました。

いまになつて考えると、中二病そのものなんだけどさ。

多かれ少なかれ、大人達の決めたルールに従うことの息苦しさみたいなのを一番感じやすい時期なんだと思います。

正子ちゃんも、こんなゾンビだらけの世界になって、しかも中学生らしい女の子のきやつきやうふふなライフを送れなくなっちゃったわけだから、その不満が女将さんに向くのも分かる気がするなあ。

女将さんは厳しそうな感じだもんね。

なんというか、冷たい刃みたいな感じ。

こんな世界だから、こんな時代だから、甘い顔はできないのかもしれないし、火垂るの墓のおばさんみたいに、よくよく大人になって思い返してみると、わりと良い人だったってパターンはありうると思う。

正子ちゃんが女将さんが何を考えてるかわからないってさつき言ってたけど、まさにそういうことなんだろう。

女将さんもよく二ヶ月もみんなの面倒を見てたと思う。

でも、まだ中学生の正子ちゃんには女将さんの苦勞がわからないんだ。

反抗心と自立心がブレンドされて、大人になろうとしている中学生って、コミュ障気味な大学生のボクにとってはキラキラ輝いて見える。

なんだかほほえましいな……。

そんなふうに思っていました。

「わたしたちは人殺しだから」

その言葉を聞くまでは。

ハザードレベル67

女将さんの娘さん、多々良令子に借りがあるという大山正子ちゃん。

自分たちのことを”人殺し”だと告げた正子ちゃんは悲痛の表情をしている。

ゾンビモノとしては人殺しになったりするのはお約束ではあるけれども、女子中学生から出る言葉としては物騒だ。たとえほんのちよつと大人びたというか、不良っぽい雰囲気がある女の子だとしてもだ。

だって、案外重いものだからね。

「ボクにも人間を哲学的ゾンビにしたという、ある種の殺人的行為をやったことがあるわけだし、他にも幾人かをゾンビにしてしまうという前科があるわけだけど、やっぱりちよつとは思うところがある。人として、良くないことというかそういうものじゃなくて、端的に言うて――。」

罪の意識というか？

汚れてしまったというか？

そんな感じのもの。

ゾンビから人間に戻せるって知って、少しはそういう重みもなくなったけれど、正当防衛だろうがなんだろうが、人間が人間のカタチをしたものを破壊するという行為にはなにかしら汚れたという意識がつきまとうものだと思う。

まだ、世の中の風塵にさらされたことのない少女ならなおさら、自分が汚れたという感覚を抱いただろう。

正子ちゃんの言ってることはまぎれもない罪の告白で、客観的に言えば、かなり勇気のいる行為じゃないかな。

ボクとしてはそう思う。

命ちゃんやManaさんはどうだろう。

ボクは顔を左右に振って、命ちゃんやManaさんがどう考えているか探ろうとした。

「じー」罪の告白を聞くシスターなご主人様も捨てがたいな♪」

あいかわらず命ちゃんは無表情でクールな顔つきで、マナさんはボクのことを性欲的な意味で見ているだけでした。

ダメだ。参考にならねえ。

しかたなしに、普通に聞くことにする。

「人殺しって、どういうことかな？」

「……ゾンビになった人間を殺したとかじゃないよ」

「そう。まあこんな世界になっちゃったわけだし、人間が人間を殺したりするのも、そんなに珍しくないんじゃないかな」

配信のふんわりほんわかした雰囲気は例外的だと思う。

きつと本来的にはゾンビという外敵だらけの世界で、日々の娯楽も少なく、食糧も少なくなっていくという状況だと、人には自分のいち以外を気にかける余裕なんてものはない。

もしくは、ホームセンターのときみたいに、ゾンビよりも人間のほうが敵になるということもありえる。

「ずいぶんと淡白なんだね。引くと思ってた」

少し不満そう。

真剣に聞いてないと思われたのかもしれない。

まあ実際、中学生の言葉だと思って、侮っていた面はあったかも。

反省です。

「引くとか引かないとかの次元じゃないと思ってるだけだよ」

人の生死にかかわる以上、ボクはその人なりの事情というものを考えたいと思ってる。他人のころころなんてものは見えないし、感じ取れないし、本当のところはわかりようもないのかもしれないけれど、できるだけ耳は傾けたい。

ボクにはゾンビから人間に戻すという力があるから。

つまり、ある意味で、ボクは人間を生き返らせる力があるといえるから。

嫌でも人の生死に関わってしまう。

人の生死をちやかしたりはしたくないけど、ゾンビから人間にもどりましたとかギャグでいってるのかそれって感じだよ。

「ふうん。見た目……小学生だけど、なんだか大人なんだね」

ボクの意見に対して、正子ちゃんはわりと冷静な意見だ。

でもこれだけはいつておきたい！

「ボク、小学生じゃないしー」

さすがに中学生から小学生扱いされるのは堪えます。

「小学生だあ……♪」

やめてマナさん。よだれがたれてる。

「先輩、否定すればするほど、小学生だということが明るみにでますよ」

命ちゃんの容赦ないツツコミでボクの心は折れそうです。

ちよつとギャグ路線になっちゃったけど、話はきちんと言聞きます。

居住まいをただして、正子ちゃんは話をはじめた。

★
＝

どこから話せばいいんだろう。

令子とのなれそめを考えると、どうしてもそんなことを想ってしま
う。

最初はなんてことはない、とりとめのないエピソードから始まっ
た。

友達になるなんて、特別な何かがあるわけじゃないし、ましてや一
目ぼれとかそういうような運命を感じたような何かがあるわけじゃ
ない。

ただ、ほんのちよつとだけ特別で、ほんのちよつとだけ珍しいエピ
ソード。

そんなのを大人たちはおおげさに運命なんて言ってるだけなんだ。

「体育館倉庫の裏で、モクってたんだよ」

「モクる？ モクモク？」

小首を傾げて、ゾンビ避けできる小学生——夜月緋色が——わたし
の言っていることを理解していないようだった。

小学生はガキでいいよなあと思う。

なんにも考えてなくて、親のいうことや学校の先生のいうことに素直にしたがっていればいいんだから。

世の中がキラキラと輝いて見えて、将来の夢はパティシエになるとどったりするんだろう。

ほんのちよつとだけ嫉妬なのかなんなのかよくわからないけど、マインスのイメージが湧いた。

でも、小動物みたいでかわいいとも思った。

わたしはこう見えてかわいいもの好きだ。

家では狸をデフォルメしたようなたぬちゃんというぬいぐるみを小学生のころから抱き枕かわりに使っている。それがないと眠れない……眠れなかった。

修学旅行はきつとわたしは三日三晩寝ないで過ごすだろうと思っていた。その機会は永久に来ないだろうけど……。それと、こんな世界になってしまっても、ゾンビだらけになってしまっても、結局眠たくなったらたぬちゃんがいなくても寝れたし、結果的にたぬちゃんなんかなくてもよかつたということを、わたしは知ってしまった。

その知ってしまったということが、すごく寂しいんだ。

「タバコ吸ってたんだよ」

と、わたしはなんでもないように言った。

「やっぱり不良じゃん！ 未成年はタバコを吸っちゃだめだよ！」

「不良じゃないよ。あのときは少しくまくいかない日で、先生か誰かに叱られたかして、最悪の気分で、だから、親からくすねてきたタバコを一本だけ吸おうって思ったんだ」

「退学になっちゃう」

「見つければね」

結果的に見つかったのは、先生ではなく令子だったというだけのことだ。

それがなれ初め。それがほんの少しだけ特別なエピソード。

「令子はチクるかなと思ってたよ。あー、チクるといするのは先生とかに告げ口するってことで」

「それは知ってます」

いまどきの小学生もチクるっていう言葉はわかるのか。
基準がよくわかんないな。

もう、小学生とかの若い連中がなに考えてるかわかんないし。

「令子はチクんなかったよ。今になって思えば、令子もいろいろ溜まってると思う」

「溜まってるって？ ままま……まさか、せ、性欲じゃないよね」

「まっしろな顔が急激にトマトみたいになっただけでいく。」

「いまどきの小学生はマセてんなーと、思ったり。」

「わたしは首を振った。」

「大人たちへの不満っていうか、そんな感じのやつ」

「あー、そんな感じのやつね」

「そう。令子は地元ではそれなりに有名な多々良温泉宿のご令嬢つてやつで、親は——おばさんは一人娘に宿をついでほしかったらしい。」

でも、自分には自分の夢があるから、パティシエになりたかったから、温泉宿は継ぎたくないって大ゲンカしたらしかった。

その日はむしゃくしゃしてて、何もかもうまくいなくて、だから、どこか自分を壊したくて……要するにわたしといっしょだったんだ。

「奇妙な連帯感だった。」

「わたしたちのなかに友情が芽生えたような気がした。」

「タバコ吸わせてくれない？」

令子は、肩口くらいまである髪と、粉雪みたいな肌をした見た目お嬢様然としたやつだったけど、口を開けば案外サバサバしていて付き合いたくそうだった。

「タバコこれしかないんだけど」

「ふうん……ちよつとでいいからちようだいよ」

「おかしなやつだった。」

「いや、わたしは愉快的気分だった。」

「正真正銘のお嬢様で、実際にクラスメイトにもそんなふうに使われているやつが、わたしに吸いかけのタバコ一本を恵んでくれと言ってくるんだ。」

おもしろくないわけがない。

わたしは半分くらいまで減ったタバコを令子に渡した。

案の定、一口吸っただけで、盛大にせきこんでいた。

せきこみながら、

「間接キスだね」

なんていうもんだから、わたしはお腹を抱えて笑ってしまった。

そんなわけで——、わたしは令子と友達になった。

★
||

「いっしょに食事したら仲良くなるものだからね。タバコは食事とは違うけど……同じ行為をして仲良くなるっていうのは人間の性質らしいよ。確か、ピンクさんがシンクロシニティとかいってたような気がする」

そう言っつて、目の前の女の子はひとり勝手に納得している。

腕を組んでうんうんとうなずいている様はやっぱりかわいらしい。

言っつてることはわりと難しいことみたいに思えたけど、たぶん正しいと思う。

そのタバコの件がきっかけで、令子とはよく話すようになった。

令子と仲のよかったクラスの委員長（昭川和美（あきがわ・かずみ））と常に後ろ向きでおどおどしている平野早成（ひらの・さな）のふたりともよく話すようになった。

いままで、べつに不良とかそんなんじゃないけど、目つきが怖いと思われてぼっちになつていたわたしにとっては、友人が増えるのは願ったり叶ったりだった。

べつにタバコを吸ったりはしたけれど——、そんなに不良してるってわけでもないし、大人たちの世界を絶対の悪だとか、矛盾しているとか、まちがってるとか、そんなふう（ふう）に思ってるわけでもない。ただ、ほんのちよつとの間だけ、ほんの少しだけ反抗したくなっただけだ。

委員長は、わたしのスカートがちよつとでも校則より短いと、鬼になる。

そりやもう鬼の首をとったかのように、自分が絶対の正義ウーマンになる。

そんなところが煩わしかったりもしたけれど、そのたびに令子がりなしてくれた。

早成はなぜかわたしに殴られるんじゃないかと、いつもびくびくしていた。目つきが鋭いだけで鬼のような扱いをされるのはどうかと思うが、こればかりは生まれ持った性質だからしかたない。たぶん、令子がいなければ、わたしは早成と話すこともなかったと思う。

令子と、委員長と、早成と、わたしは、グループになった。

中学のクラスでは、小学校のときと同じようにつるむ仲間みたいなのが固まってくる。わたしたちは四人でひとまとまりになって、その中心にはいつも令子がいた。

令子の家に夏休みに遊びに行くことになったのも令子の発案だ。

温泉なんて家族旅行くらいしかいっただことがないから、わたしたちはみんなワクワクしていた。

半分遊びの半分仕事。

仕事ってよくわからないけど、令子の家で、ただの御客様として行くのもどうかという話になって、一部屋を自分たちで仕切ることになったって話だ。

ベッドメイキングとか、料理を運んだりとか——、そんな他愛のない仕事だったけど。

自分のことを自分でやるっていうのは新鮮だったように思う。

「令子ちゃんは家を継ぎたくないって思ってたのにどうして？」

「そんなの令子じゃないからわかんないよ。たぶん、本当にやりたくないってわけじゃなかったんだと思う。本当は、したいかどうかもわからなくて、でも、そうしなきゃいけないっていうのが嫌だったんじゃないの？」

「決められた道を進むのが嫌だって話ね。あるある——」

小学生のくせになにがわかるんだって思ったけど、ほほえましい姿に思わず顔がほころびそうになる。

でも——、楽しかったのもそこまで。

★
||

世界が変わった。

★
||

そのあたりのことは、いまさら語るまでもないことだと思う。

全世界の人間が同時に体験したことだし、火事の避難訓練みたいに、みんながバタバタと走り回った。

突然、ホテルに泊まっている人たちの何人かがゾンビになって、隣りの人にかみつき始めたんだ。混乱が生じてあたりまえだと思う。

でも、ゾンビ避けできるんなら違うかな。

え、同じようなもの？

そう……だよね。

一番厄介なのはゾンビじゃない。人間だ。

避難訓練のときみたいに整然とお行儀よく並んでなんてことはなくて、みんな突き飛ばしたり、ひとりだけ逃げようとしたり、ゾンビと人間をまちがえて殴り合いを始めた。

わたしたちは幸いなことに、誰ひとりゾンビになることはなかった。

でもホテルは人も多くて、ゾンビになった人も多い。

このまま部屋の中に留まっていたら危険だった。

だから、私たちは令子の発案で、温泉施設の方に向かうことにした。温泉施設は夜の十時までしか開いていなかったから、真夜中は閉めきってるはずで、令子は合鍵の場所を知っていたから。

合鍵はフロントにあるらしくて、二階から駆け降りるまで一分かそこらの距離。

でも、そこに向かうまでにゾンビが何匹かいて、狭い廊下で入れ違いないにならずにちやならない。

永遠にも等しい距離だった。

向かう途中でどんくさい早成がゾンビに捕まった。わたしは——、わたしたちは何もできなかった。動けなかったんだ。

こわかった。さつきまで温泉に入って楽しそうにしていたデブったおばさんが、早成の腕をがっしりとつかんでいた。

口元からはよだれがこぼれて、早成が青ざめる。

このままだと殺されてしまう。

でも、自分が動けば、死ぬかもしれない。

結局、友達なんていっても、他人は他人だ。

そんな言い訳が頭の中で数瞬、かけめぐる。

飛び出したのは令子だった。令子だけがとび蹴りをかまして、早成をゾンビから助け出したんだ。

そのせいで、噛まれてしまったけど——、早成は自分が噛まれたわけでもないのに、震えて泣き叫んでごめんなさいごめんなさいって泣きわめいていたよ。

むしろ、令子のほうが冷静だった。

ゾンビに噛まれたらゾンビになるっていうのは映画でもドラマでも当たり前知識だったけど、そのときはどうなるかわからなかったから、まだ気丈に振舞えたのかもしれない。

いや、あるいは令子だったら、友達のためなら本当にゾンビになってもいいなんて考えていたのかもしれない。

令子の白い肌は噛まれたところから蒼白に染まって行って、そこからどんどんと汚染が広がっていつてるように見えた。

そして、おばさんに会った。

おばさんとホテルの職員さんたちは、客を避難誘導してた。

令子が噛まれているのを見ると、おばさんは取り乱すことはなかったけれど、すぐにわたしたちとともに温泉施設のほうに向かった。

気よさそうな白髪交じりの支配人さんとか、ちよつとかつこよかったフロントのお兄さんとか、駐車場に向かうように誘導していたお客さんたちとか、みんな全部放りだして、結局のところ、おばさんは令子を選んだってことなんだ。

助けられる側のわたしは何も言えなかったけど、令子は猛然と抗議していた。

お客様第一主義はどこにいったのかって、いまこのときに言える令子はある意味すごいと思ったけど、ゾンビが溢れた世界でお客様もなにもないと思う。

おぼさんは令子を大事にしている。

それが悪いことだとも思えない。

確かにみんなを放り出して逃げたのは悪いかもしれないけどさ……。

ねえ、どう思う？

おぼさんはまちがってるのかな。

「女子中学生らしい共感性ってやつですな」

目の前のカワイイ生物はそんなふうにとりすまして言う。

「共感とかよくわかんないけどね」

「悪いとか悪くないっていうのは、感じ方の問題だからね。一言ではなんともいえないよ。ただ、一般的に悪いっていうのは、なにかしらの優先順位をまちがえることだと思うよ。この場合は、自分の血縁とそれ以外の人のどちらを優先するかって話だけどさ。べつに、自分の血縁を選ぶことがいつも悪いことだとは思わないな」

「でも——、駐車場の裏手から温泉施設を見つけた客とかがちよつと後に来てさ……」

それ以上は目の前の小学生に伝えるのはどうかと思った。

わたしにだって自重という言葉はある。

地獄の亡者といったらなんだけど……、あの扉を必死になって叩く音。開けてくれ助けてくれっていう声は一生忘れそうにない。わたしたちは必死にバリケードを積んで、それから耳をふさぐしかなかった。ふさいでも、断末魔の声はいくつも重なって聞こえた。

★
||

「その見捨てたっていうのが正子ちゃんの言う人殺しってこと？」

「いや、違う」

見捨てたつてことも人殺しだとは思う。
不作為の殺人。

あのときは必死だったから、そんな余裕はなかったけれど、もしかしたらみんな助かる道はあったかもしれない。もつと多くの人を中に入れたほうがよかったかもしれない。

そんなことを思わないでもないけど。

もし中に入れていたら、きつとすぐに内部崩壊してただろうとも思う。

いまのいままで生き残ってこれたのも、あのとき、おばさんがわたしたちだけ助けしてくれたからだ。

「令子は噛まれてから二日後くらいにゾンビになったよ」「うん」

「令子は自分から出ていくって言った。おばさんは当然反対した。わたしも反対した。早成は怯えて震えていたからよくわからない。委員長はたぶん令子よりの意見だったと思うけど、おばさんの手前言い出せないみたいだった」

「ゾンビになるとみんな危険になるから、委員長ちゃんの見解がもしそうだとするなら、それはそれで正しいと思うな」

「まあわたしもそう思う。けど、あのときのおばさんに逆らっていたら、みんなどうなっていたかわからないよ。結局、妥協案として、令子は自分から縛られて地下にとじこめられることになったけど……」

おばさんは、怨念のこもった言葉をわたしたちに投げかけた。

それは呪いとなって、わたしたちのこころを束縛していると思う。

”だれのせいだ?”

”だれのせいで令子はゾンビになったんだ”

”おまえか?”

”おまえか?”

”おまえか?”

早成なんてひどいもんだった。全身が震えていまにも漏らしそうなくらいな様子だった。

おばさんは何かを察したのか、早成に迫ったんで、わたしはとつさにみんなのせいにした。

みんなが逃げ遅れたから、その結果、噛まれたことにした。

責任を分散しようとしたんだ。

罪は分散しても消えることはない。

特に早成はそうかもしれない。令子と一番仲がよかったのも早成だ。

だから――。

わたしは令子に借りがある。

わたしたちは、おばさんに逆らうことができなくなった。

ハザードレベル68

ここまでのあらすじ。

不良少女あらため普通の女の子、大山正子ちゃんが言うには——。女将さんの子ども、令子ちゃんがゾンビに噛まれ、その原因になった自分たちは女将さんに逆らえなくなったということだけど……。

それは心理的にはそうかもしれないけど、正直なところ心理的な障害でしかないと思う。

つまり究極的には、そんなの関係ねえ！ とぶっちぎって、ここから脱出してもよいわけだ。それをできないのは、ゾンビという”物理的な障害”があつたせいだから、それがボクという要素によつて無意味になった今、すぐにでも出て行つてもいいと思う。

まあこういうふうに通つちやうのも、実のところボクってゾンビ避けのことしか言つてないからだよね。

案外、人のこころつて先入観に支配されているものだから、まさかボクがゾンビ回復も可能なチート持ちとは思つてないだろう。

「人を殺してしまったのは、それからちよつと後のことだよ」

正子ちゃんは女将さんに逆らえなくなつたつて言つてたけど、そのせいで——誰かを殺してしまつたという感じかな。

「そーいや、あんたつて……グロ耐性あるの？」

「人並みにはあるつもりだけど。外でたくさんゾンビ見てきたし」

「でも、人が実際に死に行くところは見てないでしょ」

「えーつと……」

どうだったかな。

小杉さんを哲学的ゾンビにしちやつたのは、ある意味、人の死に行く姿だとは思ふし、ゲームセンターでビヤツハーさんたちをゾンビにしたのは、順当に死に行く姿だつたような気が……。

わりと、ボクつてゾンビムーブしているような気がします。

「ボクつてわりとそういうのも体験してるかも」

「そー……まあ、だつたらいいかな。わたしたちは、わりとむごたらしく人を殺してるからね」

「ふうん」

中学生つてわりと簡単に殺す殺す言うよね。
女の子も例外はないのかな。それとも、こんな世の中だからかな。

★
||

温泉施設で引きこもり生活を始めて一日が経過したころ。

もう、令子がゾンビになる運命は確定していた。

ゲームみたいにたまたま抗ウイルス体質だとか、そういうご都合主義はなくて、嘔まれたところから悪いものがどんどん広がっていつて
るみたいだった。

令子は気丈だったよ。

おばさんとわたしたちは泣きながら令子を縛って、それからしばらくの間、彼女を看取ることになった。

あれほど怖かったことはない。

命が消えていくというのが怖かった。

暖かかったものが冷たくなっていくのが怖かった。

死ぬのが怖かった。

令子の顔が青白く染まっていつて、ガタガタと震えて、パイプのひ
とつにくくりつけられた縄がひきちぎられるんじゃないかってくら
い引つ張られて、何枚もかけられた毛布はジタバタともがく足で追
やられてしまった。

おばさんは必死になって、毛布を身体にかけようとするけど、ぜん
ぜん無駄で、意味なくて、意味わかんなくて……。

死にたくないって、やっぱり叫んでて。

地獄だった。

で——、終わった。本当に糸が切れるみたいに、唐突に力が抜けて、
意識とか魂というか、そんなものが抜け落ちたみたいに、いのち
が終わった。

周りを見ると、早成も委員長も震えてた。

わたしも震えていたように思う。

わずかに令子が動いた。その瞬間を見た人間なら、もしかしたら勘違いしてもおかしくないかもしれない。死んでいたものが生き返ったってそう思ってもおかしくないのかもしれない。

だって噛まれた箇所なんてほんのわずかだ。

内臓とかを傷つけたわけでもない。ちよつと腕を一噛みされたくらい。

肌だってきれいだし、死ぬような傷じゃない。

だから、生き返ったって——そう思ってもしかたないのかもしれない。

「おばさんが最初に言ったことばは、令子は生きてるだった」

「えー、ゾンビなのに生きてるっていうの。おかしくない？」

カワイイ生物は抗議の声をあげる。

まあ、普通はそう思ってもしかたない。

ゾンビと人間は外見は同じでも、やっぱり違う。一見してわかる。なんか得体のしれない異物といった感覚があつて、だから違うのはすぐにわかるんだ。

でも、生きていてほしいっていう思いが錯覚させるのもわかる気がする。

肉親ならなおさらそうじゃないかな。

「生き返ったように見えたんだよ」

「うなり声あげてるの？ 視線が定まらないの？」

「認知症のじじいばばだってそうじゃん。自閉症の子どもだって同じでしょ」

「うーん……まあ外形はそうかもしれないけど」

「要するに、おばさんにとって、令子に変な病気になっただけってこと。ゾンビだけど、比較的令子はきれいなままだったし、そう思いこむことはできた」

だけど、それはわたしたちにとって地獄でもあった。

おばさんはわたしたちに令子のお世話をさせた。

まるで出来の悪い罰ゲームみたいだった。

身体を清潔にしておかなくてはならないと言い出して、令子の身体

を拭かせるゲーム。噛まれたら即日介護する側から介護される側に仲間入りという出来の悪さだ。

腕を後ろで縛られて、ロープで固定されている令子は、わずか数メートルくらいの距離ぐらいいしか移動できない。でも、足を縛られているわけではないし、最大の攻撃方法である口は開いたままで。

サメか何かが突撃してくるみたいに、わたしたちの姿を見つけると、令子はうれしそうに寄ってくる。

わたしたちはエサだった。

だから、わたしたちは持ちまわりで、誰かが囷になって、ロープの届くか届かないかのギリギリの範囲までひきつける。そのあとは麻袋の出番だ。

べつになんでもいいんだけど、貯金袋の大きなやつを後ろからかぶせて、ゾンビの動きを鈍くする。

令子はちゃんと人間の姿が見えてるのか、目を使ってるみたいだったから、逆に視界を覆えば、なにが起こったのかわからず、わずかに動きが鈍くなった。

残ったひとりと麻袋をかぶせたやつで、悪質タツクルの要領で抱きついて、ようやくもうひとりが参戦する。

ゾンビのちからはすさまじく、もしも腕が自由だったらとてもじゃないがわたしたちではどうしようもなかったかもしれない。

おばさんはそうやって、三人がかりで押さえ込んだところで、ようやく冷たい水でぬらしたタオルをそっと、身体に這わせるようにして令子の身体を拭いていた。

わたしたちは必死でそれどころじゃなかったけれど——、麻袋は最後の最後にはとりはずさなくちゃならなかった。

——だって窒息しちゃうでしょう。

おばさんがなにもおかしなところはないように言うもんだから、きつとそうなんだろうと、わたしは考えるようになった。

必死になって押さえつけた腕が筋肉痛で震えていて、耳元でうなる令子の声が頭の中に割れそうなくらい響いて。

わたしはそうなんだろうと思うようになった。

そいつは——、わたしが勝手に考えてるだけかもしれないけれど、たぶん死んでもしかたのないやつだったように思う。そう思うことで人を殺した罪悪感を軽くしようとしているだけかもしれないけどさ。

令子がゾンビになって二週間ほどした後。

わたしたちが温泉施設に引きこもるようになって同じく二週間ほど。

そいつは、鍵をしめている裏口から侵入してきた。

いや、そいつにしてみれば、正当な権利の行使だったのかもしれない。

なぜなら、そいつは番頭の息子だったからだ。

よくある縁故採用ってやつで、番頭さんはいい人そうだったけど、そいつは軽薄そうな今風のちゃら男だった。頭も茶髪で、この温泉施設に似合わない金色のピアスをしていた。顔はそれなりにイケメンだったと思うけど、正直なところ興味なんて欠片も湧かなかった。

わたしたちはこれまでに十分に地獄ってやつを経験してきたから、人間が腹の底で何を考えてるかなんてわからないって思っていたから。

名前はよく覚えてない。きっと、脳みそのどこかが覚えることを拒否している。一言で言えば生理的に受け付けないってやつだった。

そいつの軽薄そうな顔も、嘲笑を隠そうともしないまなざしも全部嫌いだった。

出会った瞬間から、そいつはわたしたちをただの女子のあつまりだと思っていた。

女子。

中学生。

弱い。

オレ。

男。

強い。

だから、全部好きにしているという理論だった。

みんな、はつきりいうと啞然としていたように思う。

日々、介護疲れ。

精神は疲労困憊で、どうでもいいような戯言で心が折れそうな日々だ。

なにしろひとつ間違っただけでゾンビになってしまう。

ゾンビチャレンジな毎日。

そこにきてこれ。

「今日からさあ。おまえらのこと守ってやるからよ。ひとりずつ部屋こいや。あ、おばさんはいいからな。さすがにむりっしょ」

下卑た笑い。

どういう意味なのか、わかるかな。

へえ。わかるんだ。

案外マセてるんだね。

目の前のかわいい生き物は白色をした肌が朱色になって、ちょうど桜餅みたいな感じになっている。

ただ、そのときのわたしたちはもはや疲れきっていて、ちやら男の言葉に反論することもなかった。おばさんだけは怜悯な視線を向けていたように思うけど、無言のままだった。

たぶん、きつと想像すれば。

この二週間、男は運よく生き残ってこれたんだろうと思う。

それはわたしたちにも当てはまることだけど、男がいたのは、ゾンビだらけになったホテルのほうだ。

きつと屋上かどこかの部屋かに閉じこもって、それでなんとか生き延びてきたのかもしれない。

そいつは自慢するように言った。

「オレは人を殺してきたんだぜ」

その言葉はひどく現実味がなかった。
聞くこともなしに男は続けて言った。

「べつにゾンビを殺したわけじゃないぜ。ただおまえらみたいなガキが死にたくないから部屋の中に入れてくださいっていうからさ。飽きるまで抱いてやったのよ。で、飽きたから捨てたってわけ。最後までピーピー泣いて楽しませてくれるんだからよ。最高だよなあ」

そいつは既に正気の色をしていなかった。

そいつは偶然生き残って、偶然女の子を好き勝手する環境を手に入れた、偶然に偶然が重なって、またわたしたちみたいな”ガキ”が目の前にいる。

そうしていいんだと思っただろう。

一番華奢で、私達の中ではかわいい部類な早成さなが男の標的になった。

早成はわたしたちのなかで一番こわがりで、一番の泣き虫だ。

そんな被虐心をそそのかすところが男の琴線に触れたのかもしれない。

早成は逃げることも抗うこともできず、ただ怯えてるだけだった。とつさに男が早成の手を引っ張ったときに、動いたのは委員長だった。

委員長も——たぶん介護疲れが溜まっていたんだろうと思う。

いつ自分がゾンビになるかもわからない日々。

責任感が強くて、だからこそ逃げることもできない。委員長は令子よりも前に早成と友人だったらしくて、小学生の頃から仲が良かったから、きつと自分が守らなきゃって思っただろう。

それで、振り下ろされたフライパンの一撃は、案外簡単に男の頭にクリーンヒットし、昏倒させることに成功した。

委員長はさつと顔色が変わった。

殺してしまったと思ったのかもしれない。

事実、当たり所が悪ければそうなりかねないほど躊躇ない一撃だったけれど、だれも委員長の行動を賞賛こそすれ、悪く言うものはいなかった。

早成なんて、泣いて委員長に対して甘い声を出してたくらいだ。

でも——、それで終わりだったらよかったけれど、気絶した男はまだ生きてる。そう生きていた。

これまでの介護実習の中で、気づいたことがあるんだけど……。ゾンビにはある特性がある。

なにかわかるかな。

「はい」

ぴよんつと手をあげるかわいい生物。

本当にかわいいなと思いつつながら、どうぞと先をうながした。

「ゾンビは人を襲います」

「正解」

そう、ゾンビは人を襲う。

そして、ゾンビはゾンビを襲わない。

いまのいままで、おばさんがわたしたちにさせてきた介護実習の中で、ひとときわ狂気じみていたのが、『食事をしないと死んでしまう』という脅迫観念だった。

でも、ゾンビは食事をとろうとしない。

ゾンビが元気よくむしゃぶりつくのは人間だと相場が決まっている。

それで新鮮なお肉が偶然手に入ってしまった。

おばさんは言ったよ。

——これで、令子もひもじい思いをしなくて済む。
って。

戦慄した。

特に一撃を加えた委員長は、自分の行動が原因となって人が死ぬかもしれないから、さすがにおばさんに抗議した。

「わたし、人殺しになりたくありません」

おばさんは再反論する。

「おまえたちのせいで、令子はある人になったんだ。おまえたちが令子を殺したようなもんじゃないか」

「令子ちゃんのごとは事故ですよ。わたしたちが今しようとしている

ことはそれとは別次元だと思います」

「おまえたちは、令子が噛まれたのは自分たちのせいだといったじゃないか。自分の発言には責任をお持ちなさい」

わたしは正直びびりつちまつて、背中にたたりたりと冷や汗が流れるのを感じるほかなかった。早成は言うまでもない。

「本当は、おまえたち——ではなく、早成のせいなんだろう。一番とろそうなおまえを守ろうとして令子は……」

「ち、ちが……」

絶望の顔になつて、早成は否定したけど、おばさんはますますイライラと怒りを募らせてるみたいだった。

「わかりました」

委員長は早成をかばうために、おばさんの言葉につき従うしかなかった。

なんでこんなことをしているんだろうって、そのときはグルグル考えて考えて考えて、結局、考えるのに疲れてしまって、おばさんがヤレっていうからというのは、すごく簡単に思えて、正直なところわたしとしても楽しかった。

ゾンビがどうかは知らないけれど、少しでも水呑まないでいたり、物を食べないでいたりすると、人間の身体はシグナルを鳴らすようにできている。

頭蓋骨が割れそうなほど痛みを感じる。

それで気が狂いそうになったときに、コップいっぱいの水を分け与えられる。

その水は確かにこれ以上なくおいしくて、人間は食べなきゃ死ぬんだらうなというのが実感として、肌のレベルで感じ取れてしまう。

おばさんはわたしたちに順繰りに断食もどきのことをさせて、令子の気持ちを感じ取れるように強いた。

その拷問めいた実験も、少しはそういった行為をおこなうことへの忌避のころころをうすれさせたのかもしれない。

わたしたちは、男を簀巻きにした。

棺か何かを運ぶようにグルグル巻きにした男を、みんなで担ぐ。

誰ひとり欠けたところのない共同行為だ。

きつと、おばさんはチャンスがあれば二度目もするだろう。

地下への階段を降りても男はまだ眠りかけていて、わたしはいますぐそいつが動き出して、逃げ出すことを願った。

「いつせーの」

最後は令子の待つ奥まったところで、振り子のように男の身体を揺らし投げ入れた。

「つてえ……」

不幸なことに――。

男にとって不幸なことに、地面に投げ捨てられた衝撃は、男の目を覚まさせるに十分だった。

昏倒してから意識を取り戻すまで数秒。

ゾンビになった令子はゆったりとした動きで、投げ入れられたエサのもとに向かう。

「ひ。ウソだろ。え、マジでなにこれ。ゾンビいるんですけど。え」
近づいていく令子。

男は身動きひとつとれない。それでも身体をジタバタさせてもがいている。

恐怖と絶望に染まった男の顔に、いい気味だなんて思うところはなく、ただただ気持ち悪かった。

「いやだ。いやだ。やだ。助けて。ごめん。ごめ。ちよたあああッ」

令子は生餌状態の男の首筋に易々と噛みついて、口元を紅く染めていく。どくどくとあふれ出る血の色を見て、早成が目を逸らした。

「あああああああッあああ。が、ひゅ」

あの細い身体のどこに収まっていつてるのかわからないけれど、令子はこちらでも案外お嬢様らしく、男の身体をほぼ三分の一ほどゆっくりとたいらげた。

凄絶すぎた光景だったけれど、ひとつだけ救いがあったとすれば、男の身体はわりと食べられすぎていて、ゾンビとして動くことは二度となかったということだ。

――おなかすいてたんだねえ。

おばさんがうつすらと笑っていた。

わたしが考えたのは、今日出会ってわたしたちが殺した男と、おばさんは……、いったいどっちが狂ってるんだろうということだ。

☆

「ふうむ……モグモグしちゃいましたか」

まあ、わりとゾンビ映画のお約束ではあるけれども、三人とも女将さんの言葉につき従ったのは意外だったな。

|||||

ご家族・ご親族に新鮮なお肉を供給するゾンビ映画

ゾンビは原則として人間しか食べないという性質をもっていることがほとんどであり、人間は食べなければ死ぬから、ゾンビもきつと食べなければいずれ死んでしまうだろうという類推に至ることはまありえる。したがって、よくあるゾンビ映画のシーンが『あなた、家族に人間の肉を食べさせたの……』である。

|||||

ボクとしては、正子ちゃんが勇気を振り絞って罪の告白をしてくれたんだろうと思うけれど、正直なところこの先の展開がよくわかんなくなっちゃった。

正子ちゃんが人を殺したというのは、まあ正当防衛的側面がある点を除いてもひとまず本当のことなんだろうなと思う。

一生、罪の意識は消えないだろうし、きつと、投げ捨てた感覚を忘れることはないと思う。

でも、ボクの観点はべつのところにある。

もしゾンビから人間に復帰した場合、令子ちゃんはどう思うんだろうってやつだ。人肉モグモグしちゃったのは、ゾンビセーフ。ゾンビ無罪でのりきれるとしても、さすがにねえ。

ボクもゾンビらしく人間をいっちょ喰らってやりますかなんて思

わなくもないけど、普通なら人間は同属を食べることに強い嫌悪感を抱くものだし、なんか脳みそに異常がでるって聞いた覚えもある。

ゾンビから単純にゾンビウイルスを除去するってだけで大丈夫なんだろうか……。

それに、正子ちゃんはたぶんボクがゾンビ回復能力あることに気づいてないよね。

「えっと、話してくれてありがとうね。でも、なんでそんな話をしたのかわからないんだけど」

「きつと、話したかっただけだろうな。わたしが勝手に」

中学生らしい倒置文をやめてもらえませんかねえ。

ふわふわしてるポエムっぽいのは嫌いじゃないけど、さすがになに考えてるかわかんないよ。ボクもたいがいそうだけどね！

「女将さんからしてみれば、娘の令子ちゃんがここにいるからいっしょに逃げることはできないし、手勢であるところの正子ちゃんたちがどこかに行くのも困るってことだよね」

「そうだな。それもあるか……。わたしはあまり筋道だてて話すのは得意じゃないんだけどさ。なんというか、もういいんじゃないかって思ったんだ」

「なにが？」

「なんというか、みんな令子の呪縛に囚われすぎてるように思うんだよ。わたしたちは人殺しまでしてしまっただけさ……。ゾンビはゾンビとして受け入れるというか……。令子は死んだんだってきちんと認めてあげたほうがいいんじゃないかって思うんだ。わたしは令子に借りがあるけど、令子ならしつかり生きろって言いそうな気がする」

「なるほど」

すごい真顔になっちゃった。

令子ちゃん、すぐに生き返るからね。

胸のあたりに手を添えて、いまにも泣きそうな正子ちゃんを見ると、どうしたもんかと思っちゃう。

「正子。っはんできたよ」

のれんをかきわけて脱衣室に来たのは委員長ちゃんだった。

ハザードレベル69

委員長ちゃんにお呼ばれした後。

ボクたちは大広間みたいなどころに通された。

たぶん昔は宴会とかやってたんだろうなっていうぐらい大きなところ。

今は、ボクたち三人と、女将さんたち四人の計七人くらいしかいないから、少しさみしいな。

でも、蝋燭の光で照らされただけの室内は、おそらく夜目が利かない女将さんたちには微妙な距離感になっていると思う。ボクがゾンビじゃなければ、ゆらめいた炎の眩惑効果で、もう少し身近に感じ取れたかもしれない。

場に満ちているのは沈黙。

正子ちゃんからグロ注意な話を聞いたあとだけに、なんだか微妙な空気が流れている。

人見知りの命ちゃんとはともかく、マナさんも一言も発していない。大広間にはいくつか背の低いテーブルが置かれていて、その机のひとつに所せましと料理が並んでいる。お刺身とか、携帯燃料で作ったらしいすき焼きみたいなものとか、普通の旅館よりちよつと豪華そうな料理だ。たぶん、五千円以上はしそうな感じ。

もちろん、お金なんてもう意味はないけれど――。

女将さんは女子中学生ズに大広間から出るように促し、ボクたちの目の前には女将さんだけが相対することになった。

陰キャなボクとしては食べてるときくらいは放っておいてほしいけど、温泉入って料理食べてじゃあさようならってなっても困るから、女将さんがここに残るのは、まあおかしくはない。

もしかしたら、なんらかの交渉をしたいのかも？

「電気がないせいで、心ばかりのものしか出せませんでしたけど、どうぞお召し上がりください」

座ったままの姿勢で、すっとお辞儀をする女将さん。

やっぱり綺麗な姿勢だ。

「正子ちゃんの話聞いた限りだと、若干の狂気に濡れているようだけど、こんな世の中でもしかかも実の娘さんがゾンビになっちゃったんだから、狂わないほうがおかしいのかもしれない。」

「そもそも話、ボクも精神的引きこもりだったわけだし、精神的な引きこもりが一種の病気であるとするならば、他人のことはとやかくいえないよ。そうじゃないとボク自身は思ってるけど、人間のところが思ってる以上に弱いつてことはよく知ってる。」

「狂気と正常の線引きはそこまではつきりしているわけじゃない。」

「ともかく――、目の前にあるのは豪勢なお食事だ。」

「じー。おいしそう……。けれど誰も手をつけない。女将さんは当然のことながら、命ちゃんもマナさんもボクの行動を待ってるみたい。」

「あ、イカさんですね」

「声をあげたのはマナさんだ。」

「うん。イカだ。電気がないのにとっても新鮮そう。ぷるんぷるんで光ってる。」

「まるで、転生したスライムみたいだ。」

「もしかして呼子のイカかな?」

「佐賀といえは呼子っていうところにあるイカが有名だよな。」

「佐賀から見ると、ちょうど北のほう、福岡から見れば西のほうに向けて進んでいき糸島市を抜けていったあたりに呼子っていうところがあった、そこはイカが有名なんだ。」

「いっぱいお店が並んで、新鮮なイカをさばいてくれるところが多い。」

「新鮮なイカは、ぷにっつてすると色が変わるよ!」

「これってトリビアになりませんか?」

「なりませんよ。先輩」

「む。厳しいな、命ちゃん。」

「お客様はお詳しいんですね。このイカは呼子から取り寄せたものです。生簀にいれておいたものをさきほどさばいたんですよ」

「女将さんはそう言って、涼やかに笑った。」

「へえ……高そう。いただいちやってもいいの？」

「どうぞ。お召し上がりください」

さばいたつてところに、人肉じゃないよねとか考えちゃうけど、ボクたちに対する態度は特に悪いものじゃないな。

なんとなく身構えちゃうけどね。

たとえば、この料理の中にゾンビ肉を混ぜ込んでゾンビーフ案件とか。ゾンビを避けられることは証明したけど、ゾンビに感染しないとはいってないから、そうやってボクたちを害そうとすることは普通に考えられる。

正子ちゃんの話が本当だとすれば、ボクたちを令子ちゃんのエサにしたいと考えてもおかしくはないように思えた。なんとなくゾンビからの治癒力とかもありそうじゃん。人魚の肉を食べて不老不死とか、そういうふうな超常の力を持つもののお肉とか内臓を食べるといふ話はよくあることらしいし。

でも、そうじゃないみたい。

ゾンビ肉が混ざっていたら、さすがにボクにはわかるし、命ちゃんたちもわかるだろう。

それに、ゾンビ避けできるボクたちを委員長ちゃんや早成ちゃんも脱出のチャンスと捉えてるんじゃないかな。つまり、女将さんたちがボクたちを殺そうとしたらさすがに止めるんじゃないかと思う。いくら恐怖と罪悪感で支配されているとしても。

命ちゃんのほうをチラッと見てみても、特に危険信号はでてなかった。

たぶん、同じような思考経路にいたったんだと思う。
なら——、いいかな。

イカの吸盤はまだ新鮮なうちは舌にくっついてくる。

「ああ、舌が！ 舌が！

みよーん。

「ああ。ご主人様の舌にくっついていてるイカさんがうらやましすぎる」

「イカにまで嫉妬するとは思わなかったよ」

「ご主人様にくつつきたい」

「イカんでしょ」

幼女におさわりするのは禁止されているはず。

それにしても、本当に新鮮そのものだ。他の食事も濃厚でそれでいてコクがあり……うん、ボクにグルメリポートは無理だけど、ともかくこんなご時世でよく出せたよねってくらいのレベルだ。

マナさんのお食事もゾンビ避けチートで食材をかき集めてくるからおいしいのであって、食材がどんどん減っていくなかでこれほどのものを出せたということは、逆に怖くなってくる。

食べたな。じゃあ金払え——じゃないけどさ。

いまさらながら、何を言われるか怖くなってきたぞ。

女将さんはグルメ番組たく、ひとつひとつの食材について説明してくれてるけど正直なところべつのが気になってしょうがない。そんな場の空気を察したのか、広間の奥まったところに控えようとして、女将さんは立ち上がった。でも、ボクはそんな女将さんを引きとめた。

「えつと……女将さんはボクたちに何を望んでるのかな？」

「正子にはどこまでお聞きしましたか？」

あー。ほらあ。なんかそんな感じだし。

正直なところ、正子ちゃんに聞いたことについてここで素直に述べることが、正子ちゃんの立場を危うくすることだと思っ。

でも、正子ちゃんの意味はもう確認した。

たとえば女将さんとの関係が悪くなったとしても、ボクは正子ちゃんを連れて行くつもりだ。

だって、正子ちゃん自身が『もういいんじゃないか』って言ったわけだし。

つまり、外に出たいってことでしょう。

「令子ちゃんがゾンビになってるから、女将さんはここから出たくないんじゃないか。自分たちのことも他に行かせたくないんじゃないかって聞いたよ」

ボクはドがつくほどストレートに言った。

ウソとかごまかしかしてもしようがないし、ボク自身は温泉に入って、おいしい料理を出してくれたわけだし、過去に人を殺したとか殺してないとかは関係がないと思った。

ひとりの女子中学生が勇気を振り絞って告白したことに対して、ほとんど無関係なボクが弾劾しようなんて気にはならない。

そういう話だ。

「あの娘たちは素直でいい子たちです」

女将さんは目を細めてポツリポツリと言葉を紡ぐ。

「ゾンビになった娘の世話をさせるといふ非道をなしたわたしに、文句も言わず、よく従ってくれていたと思います。わたしが包丁を握っていたせいかもしれませんけど」

お、おう……。

まあ、それは怖いよね。

女将さんだけに温泉施設の料理方面を切り盛りしていたってことだろうけど。

正子ちゃんの話だと、女将さんの様子が相当怖かったのも確かにわかる気がする。

冷たい美人って感じなんだよね。無理心中とかしそうな感じの。

「みんな、わたしが怖かったのだと思います。そういうふうと思うよう仕向けてしまった。悪いことをしてしまったと思っています」

★
||

娘が死に、ゾンビになってしまい、わたしの中にあるのは後悔だけだった。

娘とは結局さいごまで仲たがいをしたままだったから。

人間どうしのこと。たとえ親子であつても他人どうし。

人様をたくさん見てきたわたしには、他人と感受性をあわせることがどんなにか難しいことかわかっているはずなのに……。

思春期の娘のことがよくわからない。何を考えてるかわからない。わかったとしても、娘の考えは甘く、将来のことを希望的にしか見

ておらず、妥当だと思えない。

血縁だからこそなのかもしれない。

子どもの幸せを考える。子どものことを一番に愛する。

そういう言葉をただ述べるだけならば誰にでもできるけれども、結局、親というものは自分が生きてきたやりかたを踏襲するようにしか娘を教育することはできないのかもしれない。

わたしは愛を理由に——、愛を人質にして、つまるところ『あなたのことを一番愛してるのはわたしなのだから』という言葉をもって、彼女の行く道を決めようとした。

それが嫌で、令子が反発したこともわかってはいるのだけれども。

じゃあ、好きにきなさいというふうにはならないのが親なのだ。

もしも、わたしが代わりにゾンビになるのなら、わたしは一瞬の躊躇もなくそうしただろう。

娘のことを一番に考えているということにもウソはない。

けれど、彼女を愛すれば愛するほど、ますます、令子はわたしから離れていくに違いない。

★
||

令子は親のひいき目もあるかもしれないが、しっかりした子だったと思う。

パティシエになりたいと言い出したのは、理解しがたい部分もあったが、そういった夢を今のうちから持っているのは、中学生としては珍しいらしい。

ママ友のひとりからそう言われた。

けれど、娘もまだその夢がすっかりしたものとはいいがたく、なんの具体性もなかった。ただ、そうなりたいというだけで、親としては応援してあげたい気持ちがないわけでもないが、どれだけ生きることが厳しいことなのか、令子はわかっていない。

わかるはずがない。

娘はまだ中学生なのだから。

きつと、未来は必要以上に輝いて見えているのだろう。けれど、世の中は楽しいことばかりじゃない。

夫が由緒のある多々良温泉の跡取り息子であると知って、なんの考えもなかったわたしは、女将という地位に収まってしまった。

叱られる毎日だった。

叱られて、教育されて、それでも冷たくされて。

夫はわかってくれたが、早くに死んでしまった。

みんな、女将であるとしてわたしを見る。ただの何の変哲もない大学生だったわたしはずつと昔から女将であると思われ、この温泉宿に対してすべての責任を負うことになった。

夫の死さえ、わたしの責任であるかのようにお義母様からは思われたのだ。

それからは必死に働いて、残された娘を育てることしかわたしには残されてなかった。

要するに、人生とは、修行なのだろう。

そうしたら――、そうすれば、きつと幸せが待っているのだと思いつながら、ずつとツライ想いを募らせていく。

神様からご褒美が降りてくるのを待っている。

娘が死んでゾンビになっても、そう願わずにいられないのは、きつと自分が”終わってしまった”と思いたくないからだ。

幸せになりたい。ささいで平凡でいいから普通の人生を送りたい。報われたい。

誰かのことを思いやったのだしたら、誰かにやさしくされたい。ただそれだけの願いさえ決定的に破綻したのだと思いたくないからだ。

令子が生きていると思いきもうとしたのは、令子こそがわたしにとつて残された希望だったから。

わたしの幸せそのものだったからだ。

娘の友人たちを巻き込んだのは、申し訳ないと思っている。

そう……巻き込んだのはわたし。

けれど、娘が噛まれた姿を見た時、取り乱した令子の友人の姿を見

た時。

誰も悪くないのは頭ではわかっているのに、はらわたがねじきれそうになるくらい怒りが湧いた。

きつと、令子は誰かのために噛まれたのだろう。

誰かのために自分を犠牲にする行為は、まったく関係のない他人であれば賞賛しうる行為であるけれど、自分の娘がそうしたところで、まったく欠片もうれしくはなかった。

きつと、それもまた令子を私物化しようとしている醜いわたしのころのせい。

わたし”の”令子が——ゾンビになってしまう。

足元が崩れ去るような寒さを感じた。

誰かの為に令子が噛まれたとしても、それは令子の責任に違いない。

それでもやはり、令子の友人たちを怨まずにはいられなかった。

娘の世話をさせたのも、怨みの念を抑えきれなかったせいだ。

まだ中学生だけれども——。

いや、中学生だからこそ。

娘の死に責任を少しでも感じてほしかった。

★
||

あの男を殺したのは、わたしの責任。

殺人の咎があるとすれば、わたしにある。

わたしは彼女達に責任を感じてほしかったから。

だから、あの男を殺すよう指示した。おそらくわたしが言わなければ、誰もそこまでしようとは言いださなかっただろう。

人を殺すのは人の業。

業というのは生きていくうちに積み重ねられるもの。

まだ十数年しか生きていない彼女達には、人を殺すほどの業はない。

殺したとしても、それは事故のようなもので、人を殺す意思がない。

だから、彼女達はわたしの道具であり、指示どおりに動くだけの人形だった。

わたしがそうさせたのです。

「本当に？」

じつと見つめてくる不思議なお客様。

かわいらしい容貌をしていて、ゾンビを避けることができ、本当に不思議な方。

わたしは、神様が降りてきたのだと感じていた。

——お客様は神様です。

旅館業をやっているともはやマントラのように繰り返される言葉だが、わたしにはその意味が胆の底から理解しているとはいいいがたかった。

それどころか。

そんなのはただの便法で、本当はお客様は神様でもなんでもなく、ただのお金を交換するだけの他人だと思っていたのだ。

けれど、いまゾンビの世界になって、他者と会う機会もめっきり減って、ただ温泉に入りたいといっけてくれる他者は神様なんだ思った。

ちいさくてかわいらしい神様。

その神様が聞いた。

「本当に、それだけ？」

「早成に手をあげた男を見て——、わたしは一瞬気が遠くなるような怒りを覚えました」

三人の娘の友人は、わたしにとって怨みの対象ではあるけれども、無意識に令子の代わりでもあったのかもしれない。

「守りたかった？」

「そうですね。そうかもしれません」

庇護の対象として、令子の友人としてではなく、実の娘のように守らねばならないかと思っていたのかもしれない。

「ふうん……じゃあ、女将さんとしてはこの後どうしたいの？」
どうしたいのだろう。

わたしは”終わってしまった”のだと思っている。

令子が死に、わたしの人生の意味は終わった。

正子や和美や早成を令子の代わりに生きていくというのは、あまりにもいびつで歪んでいる。

人を殺すよりも、もしかしたら歪んでいるかもしれない。

「正子たちをどうか外に連れ出してください」

「女将さんはいいの？」

「はい。わたしはここで令子とともに終ろうと思います」

「そう」

雪のように沈黙が下りてくる。

お客様はしばらく何やら考えて、それからパツと顔を上げた。

「令子ちゃん人間に戻せるけどどうします？　あとイカのお代わりつてあるの？」

は？　何言ってるのこの神様。

イカのお代わりございました。

ハザードレベル70

ボクは女将さんの娘さん——令子ちゃんを人間に戻すことに決めた。

もちろん、出されたイカがおいしかったからじゃない。
イカおいしかったけどね。

なんというか、ぷに度が違う。新鮮さがね、スーパーで売ってるようなやつとは違うのですよ。吸盤が吸いついてくるだけじゃなくて、細胞のひとつひとつが生きているような感じがして、舌のうえでとろけそう。そして、なんか甘い感じもする。もちろん、厳密な意味ではイカは生きてなくてボクが食べたのはイカの死体なわけだけど、イカゾンビというわけでもなく、普通のイカだ。

ボクがもぐもぐした瞬間にイカゾンビになるなんてこともない。
イカを生かして、踊り食いとかになったら食べづらいことこの上なかっただろう。

ご都合主義としかいいようがないけど、ボクのゾンビ能力つてわりとフレキシブルだよな。

イカしてるぜ……。あ、命ちゃん、そのジト目はやめて。

なにも言っていないし！

って、いつのまにかイカ談義だわ。

まあ——、出された料理がこころを尽くされたものだっていうのは大きい。

料理にはこころがよく表れるように思う。

なんというか、女将さんがそんなに悪い人じゃないかなって思えた。

基本的に命ちゃんと同じく、鉄面皮系の人って、表情に感情があらわれにくいから、言葉を交わしていくうちに少しずつ理解するしかないって思ってるし、話してみた感じだと、わりと普通って感じだった。

もちろん、正子ちゃんから話してもらったとおり、人を殺したという事実はあるのだろうけれども、それもみんなを守るって意味合いが強いまいたいだし——、無罪とまではいえないけれど、絶対的な悪とも

いえないんじゃないかな。

少なくとも、サイコパスとかそういうのではないというか。

ひとのところがわかる人って感じ？

さて、そんなわけでゾンビからの回復ですが、実際問題として、ゾンビから人間に戻す際に問題となるのは損傷の具合くらいだ。

ゾンビ状態のときは、たぶんだけど、寿命とかエネルギーとかの問題が発生していない。

つまり、時間が停まったような状態になっていると思う。

そのため、普通だったら致命傷と呼ばれるような状態になったとしても、ゾンビとしては動けるわけだ。

謎だけだ。

どういう原理でゾンビが動いているかはまったくの謎だけど！

まあ、ゾンビだし……。

ゾンビはそういうものだとして理解するほかない。

スマホがどうして動くのかわからなくても、なんとなく使えるから大丈夫っていうのと同じだ。

ただ——、ちよつとだけ気になることがある。

今回の令子ちゃんは、人肉モグモグしちやってるわけだけど、それは人間に戻ったときに大丈夫なのかなって思わなくもない。

人間が人間のお肉をモグモグしないのは、教育とか環境の問題以前に本能的な側面が大きいように思う。

だから忌避感が湧くわけで、そういう側面から解放されたゾンビは赤ちゃんのような無垢な存在なんだ。そこが好きって意見もあるぐらい。だから、ゾンビ無罪、ゾンビセーフなわけ。

でも、人間に戻ったら当然、モグモグしちやったという忌避感が一気に襲ってくるということも考えられるわけで、もしもゾンビだった頃を覚えていた場合、わりと悲惨なことになりそうな気がする。

どっちなのかなあ。マナさんの場合は、ゾンビのときのこともバツチリ覚えていたけど、飯田さんの場合は曖昧だったり、案外そのあたりははつきりしないんだよね。

「というわけで——、そのときは女将さんがなんとかしてください」

ボクとしては丸投げするほかない。

だって、ボクは令子ちゃんに会ったこともなければ話したこともないし、ゾンビになった令子ちゃんにモグモグさせちゃったのは、女将さんたちなわけだし。

フォローすることはできるかもしれないけど、直接的にはやっぱり女将さんたちが説明するべきだと思う。

「わかりました。けれど、本当にそんな……」

疑いというよりは当惑といった視線。

それも無理のないことだと思う。でも、ゾンビ避けしてる時点で信頼はしてもらえてる。ボクの力を疑ってるわけじゃないみたい。

「あと正子ちゃんたちも呼んで情報共有してたほうがいいんじゃないかなって思うんですけど」

「そうですね」

正子ちゃんたちは、最初何事かと思ってちよっとビクビクしていたみたいだけど、ボクの話の話を聞くうちにみるみるうちに驚愕の表情になった。

「てか、黙ってないでさっき言ってくればいいのに」

とは、正子ちゃんの言。

正子ちゃんごめん。

言うタイミングつてあると思うんだ。

それに、女将さんの心情があのとときはわからなかったから、令子ちゃんは放っておいて女子中学生たちを引き連れて脱出という線もなくはなかったから……。

でも、それは言わないほうがいいだろう。

「あの……」

細い声でボクに問いかけてきたのは、おどおどしている女の子。

確か——早成^{さな}ちゃん。

「なにかな？」

「令子ちゃんを戻すのはいいんですけど、それで戻ったらゾンビに襲われなくなったりするんですか？」

「ボクは単にゾンビウイルスを自壊させるだけだから、普通にゾンビ

には襲われるよ」

「じゃあ、ここから出て行っても、やっぱり襲われちゃう……」

「それはそうだけど、ここよりは物資はそろってるんじゃないかな」

ボクたちが食べたのが最後のイカだったかもしれないし。

思い出すと、唾が舌のうえにでてる。

いわゆるイカの足であるゲソだけでなく、耳の部分も短冊切りされた刺身で出てきて超おいしかったな。舌の上でとろける味。

ちなみに、イカの耳のあたり——あの側面のあたりのことをエンペラって言うんだよ。

ラストエンペラーなんちゃって。

「先輩……」

み、命ちゃんが呆れた目で見ておられる。なぜに！

まあ……、女子中学生ズがここに残るといいう選択もあるにはあるけどさ。

ボクがたまに温泉に来たいから、そのメンテナンスを頼むとか、その代わりにちよつとした物資を持つてくるとか。

そういう交渉も可能ではあると思う。

でも、ぶつちやけ面倒くさい。

人間が必要な物資というのはわりと多くて、快適な暮らしというレベルに達するには、相当程度の支援が必要になる。

町役場にはトラックいっぱい満載した物資を何度か送ってるけど、それだって、ひとりで消費すれば何か月分であっても、何十人もいればすぐになくなっちゃう。でも、ひとが多ければ探索班とかそういう役割のひとたちも出てくるはずで、外に行けないこの子たちだけの暮らしよりはよくなるはずだ。

もちろん、ボクの歌とかで、ゾンビ避けしてるとしても噛まれてゾンビになったりする場合はあるかもしれない。

みんなゾンビになりたくないだろうけど、いつかの時にはボクが治すから、それまで待っててくださいって感じ。

クソデカレベルアップくんが必要なんです。

「緋色ちゃんがここにいてくれたら……」

「それは無理だよ」

ボクのお家はここじゃなくて、みんなの待つてるゾンビ荘だから。

「早成さん。そんなに我がままを言うものじゃありません」

女将さんがとりなしてくれる。

ふと思ったのは、おそらく”さん”づけをしたのは、町役場に行くことが内心でかたまつたからじゃないかな。

いままで、おそらく女将さんは”さん”づけをしてなかったように思う。

それは、こころの距離が近いからとかじゃなくて、ある意味で彼女達を支配しようとしていたからだ。それは女将さんの娘さん——ゾンビになってしまった令子ちゃんの代替であり、壊れかけた愛情の産物でもあつたわけだけど。

対する早成ちゃんは、ぶるぶると震えていた。

「あきちゃん。助けて。みんなわかってない」

あきちゃんっていうのは委員長ちゃんのことだ。

すがりつく早成ちゃんに委員長ちゃんは困惑している。

肩のあたりに置かれた早成ちゃんの手にそつと手を重ねて、女将さんをしっかりと見た。

「早成は、きつと大勢のいるところが怖いんだと思います」

「そうだよー」

ほとんど絶叫に近い。

「みんな忘れてる。ここに来るまでに何人も死んでるんだよ。何人も見捨ててるんだよ」

——何人も殺してるんだよ。わたしたち。

「早成の言うこともわからないでもないけど……、しかたないでしょ。そうしなきゃわたしたちは死んでたんだし」

「……きつと、みんな殺されちゃうよ。ここにいたほうが安全だよ」

早成ちゃんのいいたいこともわからなくはなかった。

共感性がありすぎるんだろうな。

人が痛がつてるのを見て、自分も痛いように感じる人がいるけど、早成ちゃんもきつとそうなんだろう。

自分が人を殺しちやつたから、自分も人に殺されるかもしれない。その感覚は人間としては真つ当なものだと思うし、早成ちゃんは単に怖いんだ。他人のことが。

「わたし……こわい。ゾンビが怖い。人間が怖い。死ぬのが怖い。生きるのが怖い」

その場でしゃがみこみ、頭を抱えてうずくまる早成ちゃん。

基本的に他人事なボクは、そこまで共感しようがない。今日あったばかりの人にそこまで思いいれもなかった。

正直、イカがおいしかったとしか……。あ、あと温泉はリラックステキてよかったよ。

そんなわけで、ボクたちは無言のまま早成ちゃんの行く末を見守っている、最初に動いたのは女将さんだった。

膝を落とし、そつと語りかける。

「早成さん。いままでいろいろと怖い思いをさせてしまいましたね」
びくつと肩を揺らす早成ちゃん。

女将さんはそのまま正子ちゃんたちにも視線をやった。

「正子さんも、和美さんも本当に申し訳ないことをしたと思っております。温泉施設を閉め、たくさんの方を見殺しにしたのはわたしです。早成さんはわたしの指示に従っただけ、そうでしょう？」

いや違うと思う。

正直なところ、中学生でももう子どもじゃないんだから、責任の一端はあるように思った。

でも、お口にチャックです。

女将さんは早成ちゃんを慰めようとしているだけだろうし、罪の意識を軽くしようとしているだけだろうから。

早成ちゃんは谷底に落ちこんでるみたいな表情で、ようやく顔を上げた。

「違う……違うの」

「なにが違うのです？」

「わたし……わたし、いやで……いやでした」

涙で顔がぐちよぐちよな早成ちゃん。

「あの男を殺すよう指示したのはわたしです」
首を振り否定する。

「令子のお世話をさせたことですか？」
否定する。

「たくさんの人を見殺しにしたことですか？」
否定する。

「わたしが早成さんに虐待まがいの扱いをしたことですか？」
否定する。

女将さんは辛抱強く待っていた。

同年代の娘さんを持つ女将さんとしては、こういう状態に陥った女子中学生の扱いにも手馴れているのかもしれない。

ボク？

命ちゃんが泣いちゃったときとかはおろおろするしかないよ。

あんまり泣かない女の子だったけどね。

でも、早成ちゃんが何が嫌なのかは察してしまったよ。

「わたしはわたしが嫌……」

たくさんの人を見殺してしまった自分。

人を殺してしまった自分。

そんな自分のことを仕方ないと思ってしまう自分。

それが早成ちゃんの嫌なものか正体だ。

「早成。そんなの仕方ないじゃない。みんなだつてそうなんだよ。早成だけじゃないんだから」

委員長ちゃんが声を荒げる。

早成ちゃんは泣き続ける。

「わたし……令子ちゃんのこと……いやだつて思ったの。ゾンビになつて、うなり声をあげて、わたしのこともみんなのこともわからなくなつて、涎をたらして腕をつきだしてる姿を見て」

——キタナイって思ったの。

誰も声をかけようがない。というか、やっぱりコレって罪の意識みたいなものが主題なわけで、その人の内心次第だからどうしようもない気がする。

ゾンビがクリーンかそうでないかは非常に議論のしどころではあるけど、それも人間のこころが決めることだからさ。発酵と腐敗は同一の現象だけど人間にとつて利益があるかどうかで呼称が違うのといっしょ。

こころの問題だ。

「んー。じゃあ、早成ちゃんだけここに残るっていうのは？」

ボクはさりげなく自然に言った。もしかして完璧な解決策じゃない？

いきたくない早成ちゃんはいかなくてすむし。

あー、早成ちゃんが見捨てられた子羊みたいになってる。

「ご主人様がさりげなく外道ですな〜」

あー、いままで黙ってたマナさんがついにボクにご意見を。

「先輩。さすがにそれは人としてどうかと思います」

あー、命ちゃんまで。

「なし。いまの取り消し。えーっと、早成ちゃんの問題は置いておいて、とりあえず、令子ちゃんをゾンビ状態から復帰させにいかない？」

そういうことにしよう。

泣き続ける早成ちゃんに、さすがに罪の意識を覚えながら、みんなを地下に促すボクでした。

☆
||

地下はよりいっそう薄暗く、冷たい感じがした。

ボイラー室はいまは動いておらず、従って機械の鳴る音もしないはずなんだけど、耳鳴りのようなくぐもった音が聞こえてくる。

コンクリートか何かでできた冷たい床。

コツコツと音が響く感じ。スニーカー履いてるから実際は音はしないけど。

天井あたりは鉄製の配管が伸びていて、それっぽい感じ。

ゾンビが急に出てきて襲われそうな雰囲気だ。ただ、ゾンビが隠れ

るような場所もない。幅2メートルくらいの細長い通路で、一直線になっっている。

ラスボス前の通路って感じ。

地下はどうしようもない昏さをまとっていた。

鉄製の重い扉を開けると、そこは少し開けた部屋になっていて、奥まったところにいました令子ちゃん。

後ろ手にロープで縛られていて、太い配管にくくりつけられている。自由に動ける範囲は数メートルもないだろう。

女将さんの娘さんだけあって顔つきは美人さん。

いまはボクのゾンビ避け能力のおかげで、プレコックス感の漂う顔つきになっておられるけど、もしもその能力をオフにしたら、スーパ―の特売セールで突撃するおばちゃんたちみたいにもものすごい形相になるだろう。

女将さんたちは、たぶん普段と違っておとなしい令子ちゃんに困惑していた。

「令子ちゃんのおなか見るけどいいですか?」

おなかというか、全体的にだけどね。

「なぜでしょうか?」

女将さんの疑問ももつとも。

「人間としての致命傷を負ってたらゾンビから人間に戻ったとしても死んじゃうから」

「噛まれたのは腕だけです」

「まあ一応確認ってやつです」

腕に歯型がついてるけど、カサブタになってもう治りかけてる。時が止まっているゾンビだけど、再生能力はあるんだよな。謎だ。

そして、おなかを見ようとしたのは、噛まれていたときに身体の中心部分は致命傷にいたりやすいということもあるけど、人間を三分の一くらい食べちゃってるということからして、おなかパンパンなんじゃないかなって思ったからだ。

セーラー服をぺらつとめくると、かわいいおへそが見える。ぺたぺたと触ってみる。

は素粒子化されてる模様。

つまり、でてくるのはほぼ胃液くらいなわけだ。

「はぁ……はぁ……」

「令子……大丈夫なの？」

女将さんが令子ちゃんに駆け寄る。心配そうな顔つき。鉄面皮も揺らいでいて、いまにも泣き出しそうさ。

が、令子ちゃんは女将さんを払いのけた。

「最悪」

それが令子ちゃんの人間に戻った第一声でした。

ハザードレベル71

「マジ最悪なんですけど」

令子ちゃんは切れ長の目でじつと女将さんをにらみつけている。そう——、人肉モグモグしちゃった件について、ひどくお怒りのようだ。

もしかすると人を殺してしまったということもかも。

いずれにしろ、令子ちゃんは心神喪失状態だったわけだから、ゾンビ無罪だと思うけど、そんなの関係ねえって感じか。

嫌悪感ばかりは停めようがない。

よく、中学生が言ってるようにマジ無理ってやつだ。生理的レベルで嫌悪感を抱いている。

「令子、人間に戻って……よかった」

今にも泣き崩れそうな女将さんとは対照的だった。みんな、ゾンビから人間に戻った令子ちゃんに対して、ある種の感動を抱いているみたいだけど、そんなみんなとは違って、令子ちゃんはそのごく冷静だ。

いや、冷徹というレベルかも。

「腕痛いんですけど。縄ほどこいてよお母さん」

いまの令子ちゃんは後ろ手に縛られていて、まともに動けない状態だ。令子ちゃん自身が縛られることを許容していたみたいだけど、それはゾンビになった際に誰かを襲わないようにという配慮だ。

もちろん、人間に戻ったからにはもはや縛られている必要はない。

あたふたとしながら、なかなか縄がほどけない女将さんの代わりに、正子ちゃんが近づいてきた。女将さんといっしょになって縄をほどこうとしている。

そして、ぽつりと呟くように。

「令子」

「なに？」

「その……いろいろと最悪なのはわかってるけど、仕方ないって思うんだけど」

「そんなの正子に言われたくない」

わずかにシヨックを受けた様子の正子ちゃん。

でも、気にしてないふうを装っている。

「硬いな……くそっ」

正子ちゃんが悪態をつく。

縄は相当硬く結ばれているみたいだ。しかたないので、ボクが近づいてゾンビパワーでブチって切ってあげた。ゾンビから人間に戻している段階で、ボクは客観的に見れば不思議少女なので、このくらいでみんなは驚かなかった。

ひとりだけ例外がいるとすれば、目の前にいる令子ちゃんだけど、見た目にはそんなに驚いた様子はないな。

ゾンビだったときの記憶があるとすれば、ボクがゾンビから回復させたことも覚えているはずだけど。

まあ、ボクと令子ちゃんはいましたがた会ったばかりだし、自分がどうして人間に復帰したかまではよくわかっていないのかもしれない。

そういうわけで。

「あんたは？」

と、令子ちゃんは特に感慨もなく言った。

「ボクは緋色」

「緋色？」

「名前が緋色」

「そう」

ボクに対する態度もなんだか冷たい。ほっぺたに氷をびたつてつけられたみたいな感じだ。

回復したことで惚れさせると言うチート——、いわゆる回復ポはボクにはなかったみたい。

ボクが見た目女子小学生で、彼女が女子中学生だからかもしれないけど。

特に残念ではないけれど、人間に戻した点についてちよつとは感謝してほしくもあった。少なくとも嫌われたくはない。そうじゃないと、ゾンビ状態のほうがボクにとってはまだマシってことになってし

まうから。

うーん。身体だけでなくこころもちっちゃいなボクって。

でも本音としては他人にそういうことを期待しちゃってる。

令子ちゃんの状態は素っ気なかった。もしかするとゾンビから人間に戻ったことすらあまりありがたくはない感じだった。

人間に戻ったことでツラミを感じてるからだと思う。なにも考えないゾンビライフって、それはそれで楽そうだもんね。将来のことなんかも考えなくていいし、老後に2000万円貯めなくてもいい。

つまるところ――、中学生というのは、世の中の不条理というやつを始めて感じはじめる年頃なわけで、その憤懣を誰かにぶつけるのはしょうがない面もあるように思うよ。

現実と理想のギャップを弁証法的に解決するために、とりあえずのところ一番身近な人を現実の代表者として攻撃する。

人はそれを反抗期といいます。

その反抗期をファンタジーというか脳内妄想で乗り切ろうとする和中二病になるんですね。

ボクは詳しいんだ。(体験者は語る)

令子ちゃんの場合は、ただの反抗期かな。

「緋色さんはあなたをゾンビから戻してくださったんですよ」

と、女将さん。

なんというか、声にうれしさがにじんでいる。

回復ポしているのってむしろ女将さんだったりして。

「ふうん。ありがとう」

「どういたしまして」

なんだかサバサバしてるな。その調子で人肉モグモグの件も曖昧に解決していけばいいんだけど、そうはならないんだろうな。

ここまで明確な怒りの感情があると、その感情を解消しないことは落ち着かないように思えた。

「みんな最悪なんですけど」

ほらやっぱり。

手首を軽く握りながら、じんわりと嫌悪感をにじませた声。

正子ちゃんたちは気まずいのか何もいえない。

「普通に考えて、人間を生きたまま食べさせるってどうなの？」

「それは……あなたが人しか食べようとしなかったから」

「ゾンビでしょ。ゾンビは人しか食べようとしないのは常識でしょ！」

「そんなのわかりません。あなたがなにも食べないと死んでしまうんじゃないかと思ったのよ」

「もう死んでるって、ゾンビなんだから」

まあ、ゾンビだし。

普通は死体だよ。ただ、死体じゃなくて感染者というパターンもあるから、微妙どころではあるけど。

ボクのゾンビさんたちはべつに飢えてるから人間を食べようとしているわけではないと思うんだよね。

なんというか共感性の発露というか。

寂しいから人間をゾンビに変えようとしているように思う。

孤独を癒そうとしているのです。

でも、他人を自分に変えてしまつたら結局のところ孤独になるわけだから、矛盾している行動ともいえるのかななんて思ったりもします。

哲学だ。

しかし、基本的によそ様のお家のことだとはいえ——、親子喧嘩はあまりしてほしくない。

「ゾンビとか、わたしは知りませんよ。あなたが病気だと思ったから、そのときの最善を尽くしたまでです」

「それで生きた人間を食べさせるっておかしくない？ あんたたちもそうよ。正子。和美。早成。なんでお母さんを止めてくれなかったの。あんたたちは全員人殺しよ！」

あー。早成ちゃんがぶるぶる震えているよ。

罪悪感で膨れ上がってる早成ちゃんにとって今の言葉はクリティカルダメージだったみたいだ。

「あいつは死んでもしょうがないやつだったんだ」と正子ちゃん。

「だから？ だからなに。それでわたしを使つて殺してもいいって？」

「自分も殺したって意識があるわけか。正子ちゃんは二の句を告げない。自分が女将さんに逆らえなかつたという意識があるからだ。」

「あの人を殺したのはわたしの判断です」

女将さんが毅然とした態度で、きつぱりと言つた。

令子ちゃんのほうはいまにもつかみかからんばかりの勢いだ。

顔が紅潮している。

「人殺し！」

「そうしなければ、みんな殺されると思つたんですよ。令子がなんといおうと、あの時のわたしの判断は正しかつたと思います」

「お母さんはいつもそう。自分は正しい。わたしは感情的にわめき散らしているだけ。子どもは親のことを聞いていれればいいと思つてるんですよ」

「そうはいつてません。ただ、世の中はいろんなことを考えなければ生きていけないようになってるの。甘い夢ばかり見てたらいつか死んでしまう。あなただつてゾンビになつて思い知つたでしょう」

「子どもは親の言いつけを守つて、親が与えてくれるものだったら人肉でも食べるつていうの？ そんなのひどくない？ 狂つてる」

吐き捨てるように言い放つた令子ちゃん。

まあ、狂つてるといふ言ひ分は強烈だけど、あながち間違いではないとも思う。普通ゾンビになつてるからつて人間を食べさせようとするのはちよつとねえ。

いま、令子ちゃんが人間に戻つてるから、女将さんは『正氣に戻つた』のかもしれないけど、やっぱり、ゾンビのままだったら、あのまま突き進んでいたかもしれない。極端な話、早成ちゃんあたりをモグモグさせたりしたかもなんて。

女将さんは顔を伏せて絞り出すように言う。

「あなたを愛しているからよ」

「愛してさえいれば何してもいいと思つてるの？ わたしはお母さんの愛で傷ついたんだよ！ もう一生ずつとずつと悩んで、苦しん

で、きつと夢に見る。歯の隙間に肉が挟まってるみたいに、すえた腐ったにおいがして、もう絶対にパティシエになんかなれない。ひどいよ……お母さんのせいだよ……」

ほろほろと泣き始める令子ちゃん。

「令子……」

女将さんのほうは抱きしめようとしたけれど、抱きしめたら余計に傷つくと思ったのか、そのままじつと時間が過ぎ去るのを待った。

やべえ。この修羅場なんとなりませんかね。

命ちゃん。ふるふると頭を振る。

マナさんも同じく。

「う。うーん。その……あれだよ。ゾンビセーフ！」

「えっ？」

「とりあえず、ゾンビに造詣が深いボクから言わせてもらえば、ゾンビ状態で何かを食べると素粒子化するので人間を食べたことにはなりません。これをいわゆるゾンビセーフといいます」

「ゾンビセーフ？」

「つまりなにか言いたいかっていうと、温泉にでも入ってきつぱりしようよということ、ここはひとつ」

「なに言ってるのかさっぱりわからない」

ですよねー。

でも、地下室ですつとののしりあっても始まらないので、ボクたちはまた温泉に入ることになりました。

☆
Ⅱ

かほーん。

前回は命ちゃんたちと家族みたいな感じで温泉に入ったけど、今回は見慣れない人たち——女子中学生ズもいっしょだ。セクハラじゃないよ。精神的なケアに必要な行為だよ。正直なところ、ボクたちは二度目なのでべつに入らなくてもよかったけど、流れつてあるからね。しかたない。

「さあ入ろうかな」

「どうして温泉なんかに入らなくちゃいけないの」

「もう二カ月近く入ってないんでしょ。きつと気持ちいいよ」

「べつに今じゃなくてもいいじゃない。わたしはそんなに汚れてない」

「まあまあ、とりあえずとりあえず」

ボクの言葉に、顔をそらす令子ちゃん。

あいかわらずツンツンしてるけど、これはもう時間が解決するのを待つしかない。

でもね。

なんとなく嫌ではあった。

ボクって親を早くに亡くしてるから、親子という関係に憧れみたいな感情を抱いてる。できれば、仲良くしてほしいって思ってる。

親も子も互いに互いを選べないけど、縁あって親子になったんだからさ。

そこは仲良くしたほうがいいに決まってる。

人間だから、互いに間違うことはあるにしろ、生きてる限りは——、間違いを正せるんじゃないかって思いたい。女将さんは少なくとも令子ちゃんを愛してるって言うてるわけだし、愛でも虐待になったりするんだらうか。うーん。

愛情も使い方次第だから、絶対の免罪符にはならないと思うけど、トランプのジョーカー程度には、いろんな問題を解決する切り札になりそうではあるかな。

少なくともボクとしては女将さんのほうに共感する。

「親がいつしよにとか、マジありえんくない?」

いやまあそう言わずに。

令子ちゃんはいまだに納得していないようだ。

長めのタオルを前掛けのようにして身体を隠しているけれど、特に肉体的な変調はないみたい。瑞々しい肌が側面から覗いていて、幼女的精神以外のところで存外焦る。

あんまりじろじろ見てると、命ちゃんに怒られるので、ボクは早々

に湯船に浸かった。さつき洗ったばかりだし、もういいかなって。

「お客様。お背中お流ししましょうか」

湯船のヘリのところに膝をついたのは女将さんだ。

もちろん、タオルを身体に巻いている。

「さつき洗ったからいいです」

「さようですか」

「あと……、令子ちゃんとの仲直りだけど、ボクにはがんばってつかいえないけど……がんばってくださいね」

「はい。お客様にいただいた機会。ありがたく使わせていただきませう」

やっぱり綺麗な所作で頭を下げる女将さんだった。

女将さんは静かに立ち上がると、令子ちゃんのほうに向かった。

令子ちゃんのほうは、誰とも視線を合わせずにしきりに身体を綺麗にしている。

特に口の中に水を入れてすすいでいる。

ゾンビ状態のときは代謝が停止しているから身体もほとんど汚れないんだけどね。

罪の意識というか、罪の記憶というか、そういうものを洗い流そうとしているのかもしれない。

うーん。

なにかボクにできることはないだろうか。

「ごころの問題ですから、自分でどうにかするしかないですよ」

命ちゃんの言うこともわかるよ。

何を想って、何を感じるかは人次第だし、その人のキャパシティの問題もある。

パティシエになるのが夢だといった令子ちゃんにとって、食べるという行為は崇高な概念だったのかもしれない。それが踏みつけにされたって感じてるのかもしれない。

「ご主人様が、ズビヤッと令子ちゃんの脳内レセプターをいじって、罪の意識だけを感じさせないようにすればいいんじゃないですか？」

「マナさん。それは鬼畜」

ゾンビウイルスが人間の意識を奪うことができるのなら、その上位互換であるヒロウウイルスは人間の意識を操ることもできるだろう。脳だって物理的な“モノ”であることに間違いはないわけだし――

でもそうやって、人の意識を操るのはよくないことだと思う。

「ロキソニンを飲んだら痛みを忘れるじゃないですか。ご主人様成分を摂取したら、この世は天国。なにが違うんですか〜」

「痛みを忘れるのと洗脳するのではだいぶ違うと思う……」

「わたしの場合は、ご主人様に洗脳されたいです♪」

「じー」

ジト目でマナさんを睨んでみる。ヒロウウイルスを操ったりはしていないけど、マナさんが豊満な身体をくねくねさせた。

「あ♪ あ♪ 素敵です♪」

「なにもしてないんだけど」

「放置プレイも好きです〜」

度し難い。

マナさんらしいともいえるけどね。

そもそも、マナさんは最初からゾンビだったわけだし、そうやってボクに操られるのを望んでいる人なのかもしれない。

こういう言い方が正しいのかは謎だけど、ソフトなマゾなのかも。「ご主人様にいじめられるのもいいかもしれない。幼女に縛られるのっかられて、ふひ」

「いや、マジでやめてね」

「マジといえば真面目な話ですが、結局あれですよ。罪悪感というのは汚れてしまったという意識なんだと思います。それは自分で自分を罰する気持ちですから、誰かから赦してもらいたいですよ」

「女将さんから赦してもらいたいか?」

「女将さんのせいだってしたいのは、罪の意識を軽くしたいからでしょうけど、そうではなくてですね〜」

そうではなくてなんだろう。

マナさんのお胸さまがお湯にぷかぷかと浮いていた。

なんだか、とろけそうな声とあいまって、すごく癒される気分になるのはどうしてだろう。

「例えば、少女マンガとかもご主人様は読んでらっしゃいますよね」
ほんわか声でほっぺに人差し指をあてるマナさん。

「うんまあ」

最近はお暇だしね。電気が使えなくなってからはマンガ本はかなりのところ暇つぶしになる優秀な媒体だ。残念なところは、続きものはほぼ絶望的ってところ。読むなら完結済みのやつがお勧めだと思います。そういや前に超有名な漫画家の先生から、ヒロちゃんといいたみたいメールもらったけど、どうしてるかな。元気にゾンビになってるかな。それともいまだ描きつづけてたりして。

ま——、いまはマナさんの言葉を聞かなきゃ。

少女漫画か……。

だいたいは女性主人公で恋愛ものが多いってイメージかな。偏見かもしれないけど。

「少女漫画のテンプレ展開で、ポツと出の男とかに寝取られ展開とかあるじゃないですか」

「うん。まあそういうものもあるかなあ」

「で、結婚したのかオレ以外のやつとってなるわけです」

「うーん。まあそういうこともあるかな」

「ありがちなのは、わたし汚されちゃった——からの——、あなたで忘れさせてほしいっていう展開です。どうですか覚えありませんか」

「どつちかというと、マナさんの言ってるのってエロ本展開だよね」

「ご主人様……」

「なに？」

「じとー」。

「わたしのゾンビだったときのツライ記憶。忘れさせてください」
うるうるマナさん。

もう、この人のことは放置するしかない。

でも、まあなんとなくわかったような気もする。

男は恋愛対象を別ファイルで保存しておくけど、女は上書き処理を

するってことだよね。

あるあるー。

「違うと思います」

命ちやんの冷静なつつこみにもめげないぞ。

べつにいいんだ。違っても。

結局、マナさんが言いたいのは、罪というのを上書き処理しましよ
うってことでしょ。

転化じゃなくて。

そう、誰かのせいにするんじゃないでさ。

そのためにボクができることなんて限られている。

★
||

マジで最悪な気分だった。

簡単に言えば、目が覚めると知らない間に人を殺していて、親も友
人も等しく共犯者になっていたというありえない展開。

さらにいえば、わたしは——人間を……。

胃がそりかえるような気持ちがあった。

わたしをゾンビから人間に戻してくれた不思議な女の子は『ゾンビ
セーフ』とか言ってたけど、なにがセーフなもんか。

少なくとも、お母さんは人間をわざと殺した。

事故でもなんでもなく、殺すつもりで殺したという事実が変わらな
い。

わたしが人間を×した事実も変わらない。

厚手のベーカーコンをくいちぎるような感覚。髪の毛ごと頭蓋をかみ
砕くバカみたいな力。歯の隙間に繊維質が挟まる感覚。ぶよぶよと
したカタマリをお腹の中からひきずりだして、泥団子を作るみたいに
こねくりまわすわたし。

味は覚えていない。

いや、臭かった。ゾンビになってしまったわたしよりも遙かに生臭
くて、きつと人間はいろいろと悪いことを考えているからそんなに臭

くて、気持ちの悪い味になるんだろうと思った。

人間が人間を食べない理由は、きつとマズイからだろう。

吐きそうだ。胃のなかは既にからっぽで、唇がかさかさになるまで乾いていたけれど。

水で口をそそいでも、歯の裏を指でごしごしこすっても、きつとアレがこびりついてるような感覚は一生ついてまわるだろう。

みんなひどい。

友人だと思ってたのに。どうして誰も止めてくれなかったんだろう。

裏切りもの。

そう、裏切りだ。

だって、あのとときのお母さんの目。

あれは狂人の目だった。みんな自分がお母さんに殺されるかもしれないと思って、保身で付き従ったんだろう。だから、みんな嫌いだ。嫌いだ。嫌いだ。なにもかも嫌いだ。死んでしまえばいい。自分も含めて。全部ゾンビになつてしまえばいい。

「令子ちゃん……」

ふと目を横にやると、早成が立っていた。

わたしが浸かっている浴槽にそつと足を運び入れる。

ただそれだけのことなのに、わたしはイラつとした。

わたしがゾンビに噛まれる原因を作った早成。

いつも誰かに守られて、そのせいで誰かに迷惑をかけている。

「なにっ？」

声にいらだちが混じるのを、わたしは止められない。

「あのとときのことをもう一度謝りたかったの」

「あのときつてどのときよ」

「令子ちゃんがゾンビに噛まれたときのこと」

その言葉に、むしろ胃の中が冷たくなるような感じがして――。

「あんたはそうやって自分が苦しいから罪の告白をしてるだけでしょ。自分だけが罪を告白してすっきりしたいだけでしょ。やめてよ」

「ちが……」

「じゃあ、黙ってて。わたしは忙しいの」

そう、自分の罪に忙しい。早成を本当に傷つけそうで、いまはそばにいてほしくない。お腹のあたりに力をこめて、これ以上悪いことを考えないようにしたいけど、止まらない。

止められない。

だって、アレの感覚が、考えないようにしても、ずっと再生されるから。

「令子。早成を傷つけないで。お願いよ」

今度は和美だった。委員長然としたメガネはいまはかけていない。和美の言い分に、また怒りが湧く。

「わたしが悪いの？ それっておかしくない？」

「いまのは令子も悪いよ」

「なにが悪いの！ あんたがいつも早成を守るから、そのせいで誰かが傷ついてるんでしょ」

和美はさつと顔を青ざめさせた。

きつと思いいたることがあるのだろう。

「確かに」和美は言う。「わたしは早成を守るために人を殺した」

「ふうん。あつそ」

「あの男を最初にぶん殴って気絶させたのはわたし」

「ほら。言ったとおりじゃない！ そうやって誰かれかまわず傷つけてんのよ。あんたは」

「令子こそ悲劇のヒロインぶるのはやめて」

「いつからわたしが悲劇のヒロインぶってるって？」

友情なんて嘘っぱちだった。わたしたちの数年来の付き合いは、もう破綻寸前だった。

きつとこれからよくなるなんてことはないだろう。

「令子。ちょっと冷静になって——人間に戻ったばかりだからあんた混乱してるんだよ」

うざいことに正子までやってきて、わたしを否定しようとしてくる。

こいつらは結局のところ、みんな自分が悪くないって言いただけなんだ。

「わたしが勝手に人を殺して勝手に人を食べたんだから、あんたたちは自分は悪くないって言いただけでしょ。もう放っておいてよ！」

みんな仲良く町役場でもどこでもいけばいいじゃない」

「人間に戻るなんて誰も想像できなかったから仕方ないでしょ」

「そうやって、仕方ない仕方ないって言って、わかったふうの口をきいてるだけでしょ。いい加減にしてよ」

ああもう――。

こいつら。

「お友達を悪く言うものじゃありませんよ」

そして、諸悪の根源。お母さん。

何も――わかってくれない。

わたしはお母さんに虐待されている。べつに今回の件だけに限らず、由緒正しい何十年も続いている温泉だからとか、そんなのはどうでもいい。わたしには関係ない。

なのに、わたしの意思はないがしろにされていた。

子どもは親を選べないけれど、親は子どもを選べないという言葉はウソだ。だって親は子どもを産むかどうかを選べるわけだし、どんな子が産まれてくるかはわからないけど、なんにも知らない赤ん坊を自分の好みに洗脳していくのなんてたやすい。

わたしもきつと半ば洗脳されているんだろう。

世の中の子どもは誰もが、親に虐待されている。

「わたしたちのことに口を出さないでよ。うざい」

「みなさん令子のことを思って、あなたがゾンビだったときにいろいろとお世話をしてくれたじゃないの」

「そんなの頼んでないし、お母さんが命令しただけでしょ」

「そうですね。みんなに無理強いしていた面はあります」

「お母さんはいつだってそうじゃない。わたしが言うことを聞かなかったら被害者面して、自分はひどい子どもを持ったとか思ってるんですよ」

「長く生きているから、いまのあなたに見えてないものが見えるの。だからアドバイスをしたくなるのよ。あなたがよりよい道を進んでいけるように」

「それも頼んでない！」

どうして、だれもかれもわたしをコントロールしようとするの。

そうやって、わたしには無数の穢れがこびりついていって、最後には湯船の底に沈んでしまうのだろう。頼んでない。頼んでない。頼んでないのに。

と、そのとき。

隣の大きな浴槽から、大きな津波のような何かが迫ってきた。

いや、水が壁のようにならねって——、どういう原理なのか、木でできた小さな踏み場をつかって波に乗っていた。

「お、お客様。浴室でサーフインは困ります！」

そう、言ってみればサーフインだった。

あの不思議少女は水を操って波にして、驚異的といっているいい身体能力でサーフインをしている。

サーフインをしている……。

あまりにも異質な光景に、わたしは茫然としていた。

「ふいーん。ジャパンに到達。おっけーまる♪」

おけまるなんて使う子。もういないよ。

ハザードレベル72

双方いろいろ言いたいことはわかった。

特にゾンビだった令子ちゃんとしては、女将さんが子どもである令子ちゃんを愛しているがゆえに、その愛のせいで傷ついたって思ってる。

まあ無理やりゾンビだったときに人間をモグモグしちやっただ記憶が残っている令子ちゃんとしては、ゾンビ状態のときの女将さんの行動は許しがたいのだろう。

さっきまで鼻先がトナカイのように真っ赤状態だった令子ちゃんだ。

どうして真っ赤だったかって？

当然、人間をモグモグしていたからに違いなく、もっと言えば、あちこちに散乱していた残りものというか、長くて赤黒いやつを見るに、鼻先くつつけてモグモグしていたからだろう。身体を拭いたりはしていたんだらうけれど、顔はゾンビチャレンジでも高難易度だからね。なかなか拭けないってことだったのかなあっと。

そこから察するに、令子ちゃんのモグモグさ加減っていうのは、ちよつと腕をかじつちやいましたとかそういうのじゃなくて、まるちよつとか、レバナラとか、ほらいろいろあるじゃない。察していただきたいわけですけども、腸をちよつとばかし、こう舌先で味わうようにしてモグモグしていたというかそんな感じだったんじゃないかな。わりと人間の視点からするとグロ注意だ。遅すぎるけど。

ともあれ、令子ちゃんの中では――。

愛は虐待だし。

教育は洗脳だし。

子育ては支配なんだ。

それは、ある意味では正しいだろうけれども、女将さんの言い分も少しは聞いてあげてほしい。

それがわからないというのが、いわゆる反抗期なんだろうけれども。ボクは反抗期を始める前に両方ともいなくなっちゃったから

……。

女将さんと令子ちゃんはまだやり直せると思いたい。

母と子の関係がこじれて硬直状態だったところに、ボクはサーフィン状態で到着していた。念動で波を発生させてそのビッグウェーブにのるってというのは、わりと簡単だった。

べつに温泉施設内でサーフィンをしたかったというのが理由じゃない。

そう。ボクはただ単にボク自身が人間っぽくないという演出がしたかったんだ。

「えっと……、温泉施設内でサーフィンしちやダメだったかな」

「ダメ………といますか。そうですね。よく考えたらいまさらな感じですね」

広めの浴槽内で、女将さんはわずかな時間考え、苦笑めいた笑いをこぼした。ボクの年齢からしたらお婆さんだけど、相当美人さんだなとも思う。記憶の中のお母さんの顔が重なる。

女将さんが言う「いまさら」って、きつと、お風呂の中でサーフィンをしても、迷惑をかける他のお客様はきそうにないって気づいたからこそ漏れた言葉なんだと思う。

温泉宿の営業はひとまず終わり、ゾンビハザードが終息するまでお客様はきそうにない。もしも、ゾンビハザードが終わらなければ、この宿も終わり、人間も終わりだ。

そうはさせないつもりだけど、女将さんとしてもここを出て行く決心がついたわけで、その腹をくくったからこそ苦笑がでたのだろう。

人間って、何かを捨てる覚悟をするときが一番キレイに思います。だから、最初の言葉はこんな感じでどうだろう。

「ボクはわりとワガママなんです」

「お客様はいろいろとよくしてくださいました」

「それは交換だよね」

「交換？」

「そう。ボクは温泉に入りたかったし、その交換価値として、ここから他の安全な場所までつれていくことを約束したわけだよ」

「お客様が満足していただけたのでしたら幸いです」
「満足したよ。温泉は気持ちよかったし、イカはおいしかったし」
そう。

多くの人間にとって、価値とは交換価値のことだ。
つまり、なにかしらの代わりに、なにかしらの交換として、なにかしらをもろうとか、してもらおうとかするというのが価値なわけ。
よりわかりやすく言えば、例えばお金をわたして何かを買ったりするというのが一種の交換だ。

今回の肝というのは、ボクは温泉に入る代わりに、女将さんたちを安全な場所に連れていくというのが当初の約束だったわけだ。
「令子ちゃんは追加条項にすぎないけどね」

ボクは手のひらでお湯を意味もなく掬いながら、令子ちゃんのほうに視線をやった。令子ちゃんはいぶかしげにボクを見ている。

「わからないかな。ボクが令子ちゃんをゾンビから元に戻したという点については、なにも交換条件を提示していないってことだよ」

「それはどういふことなのでしょう。わたしができることなら、いくらでもいたしますが」

「女将さんからもらえるものってもうないよね。イカも食べきっちゃったし……。あとは女将さんたちを安全な場所につれていけばミッションコンプリート。最初の契約は達成されるってわけ」

「なにを対価として差し出せばよろしいのでしょうか」
「べつに交換するのはプラスの交換じゃなくてもいいんだよ」

ボクはできるだけのんびりと――、残酷に言う。

「プラスではない交換というと、マイナスの交換ですか……それは
いったい」

「女将さん、ゾンビになってよ」

「え？」

と、声を出したのは令子ちゃんだ。

みんなも声をださないけど驚いている。

確かにボクが言ったことは不合理で意味がない。マイナスの交換をしたところで、ボクが得をするわけじゃないからだ。

単に、ボクが与えた分の帳尻をあわせようとしているだけ。

「意味わかんない」

令子ちゃんはボクを射殺さんばかりにいらんでいた。

視線で人を殺せるなら、ボクは撃ち殺されているかも。

でも、世の中ではわりとありがちな不条理ってやつなんだけどな。

ゾンビになるのも不条理なら、残酷な悪魔に出会うのも不条理だ。

ボクは残酷な小悪魔です。

マナさんにも言われたことあるし。ワガママムーブしている女子小学生なんて、小悪魔以外のなにものでもないと思います。正直なところ、一番苦手な部類です。そういう姿態を想像しながらの言動をしています。

もともと陰キヤなボクには荷が重いけどね。

「ボクがゾンビから回復させる力があるなら、その逆にみんなを自由にゾンビにする力もあるんだよ。みんな軽度の感染レベルだから人間のままでけど、みんなの中にあるゾンビウイルスを活性化させればゾンビにするのはたやすいってこと」

「そんな力があるとかのことを言ってるんじゃないよ。どうして、お母さんがゾンビにならないといけないのって言ってるの」

「べつに慈善事業をしているってわけじゃないからさ。ボクはしたいようにしているってだけ。令子ちゃんをゾンビから戻したのもボクの気まぐれみたいなものだし、どうしても意味がほしいっていうんだったら、あえていうけどさ。なんだか令子ちゃんはゾンビのままでも良さそうみたいだったし、ボクに対する感謝の言葉もかたちだけだったじゃん。それがちよつとムカついたってだけ」

「なにそれ」

蒼白していく令子ちゃんに、ボクは口元をゆるませる。

あー、ちよつとだけところが痛い。べつにボクって人間をゾンビに変えたいわけじゃないしね。人間にはところがあると信じてるし、みんながみんな悪い人ばかりじゃない。そりや中には他人を傷つけてもちつともところが痛まない人っていうのはなかにはいると思うけど、ほとんどの人は、できるなら他人を傷つけないと思っ

し、そういう優しさ成分を持つてると思ってる。

女将さんはうつむいたままだ。

女将さんの言葉にウソがなければきっと――。

「わかりました」

そう言ってくれるって信じてた。

ボクにとつて、お母さんの愛っていうのは無限に信じきれるところがあるから、本当は試したくもないところ。

ほら、某宗教でもよくあるじゃない。自分の神様を試してはいけませんって。それと同じように、母親の愛情を確かめるのっていうのは、本当はしてはいけないってことだと思う。

でも、子どもにはその愛情が見えなかったりするんだよね。どうしてだろう。傍に在るのが当たり前だからかな。

「お母さんもなに言ってるの？　こんなわけわかんない子どものいうことを聞いちゃうの」

「お客様は神様ですからね。きっと、何か正当な理由があるのでしょう」

「本当にわけわかんない。お母さんはいつもそうじゃん。他人のことばかり気にして、自分のことは殺して――そんなお母さんが嫌いだから、わたしは女将さんなんかなりたくなかったの」

「初めて聞きました」

「初めてじゃないよ。何度も言ってるじゃん」

「いいえ。令子の口から直接ここを継ぎたくない理由を聞いたのは初めてです」

「そんなの今はいいよ」

令子ちゃんはザバザバとお湯をかきわけてボクに近づいてきた。

「ねえ、あんたもここの温泉を楽しんだのなら、それぐらい大目に見なさいよ」

「いやです」

「このクソガキ……っ」

令子ちゃんはそれ以上近づけなかった。

ボクが簡易的な渦潮のようなものを足元に発生させて、それ以上前

に進ませないようにしているからだ。

「正子。和美。そいつを取り押さえてよ」

「無理だよ。人間がボクに敵うはずがないよね」

うーん。最高にイキってる台詞だな。これ。

正直あとで黒歴史化しそう。

でも、目の前で実際に動けない令子ちゃんを見ているからか、正子ちゃんたちも動けないみたいだった。早成ちゃんなんか腰抜かしてるよ……。

えっと、それでどうしたらいいんだっけ。

「それで女将さん、さっきの言葉だけど本当にいいんだね」

「それでかまいません。わたしにとっては終わった人生でした。令子がゾンビになってしまい本当に死んでしまったと思って……わたしの人生は少しづつ腐りきっていくようなものでした。それを生き返らせてくださったのはお客様です」

女将さんは肩をふるわせて泣いていた。

ボクは街中を破壊して進むゴジラみたいな感じで、ゆっくりとゆっくりと女将さんに近づく。女将さんは湯船に浸かったままの姿勢で微動だにしない。

覚悟は決まっているのか。

「お母さん。嫌。待って……待って。わたしがゾンビに戻ればいいんですよ」

えっと、それは想定してなかったな。

どうしよう。

「令子ちゃんをゾンビに戻しちゃったら、ボクがせっかく人間にもどした意味がなくなっちゃうしね。令子ちゃんはそもそもゾンビのほうがよかつたんでしょ？ 人間に戻ったからこそ、いろいろと悩んじゃうわけだし、死にたい気分っていうのを味わえるわけだ。ボクつていじわるでしよう？」

「死ぬよりはマシだし……ゾンビになるよりはマシ」

「そう。でも、最悪な気分なんですよ」

「それはそうだけど！」

「だったら、黙ってみてればいいじゃん。その最悪を作り出した元凶がここでゾンビになるんだよ。君にとつての復讐が達成される——わけだ」

邪悪な顔を作ろうってがんばってます。

あ、視界の向こう側でマナさんが『カワイイ』って口の形で伝えてきている。

シリアスモードなんでほんとやめてください。

ボクはどうとう女将さんのすぐ傍まで近づいて、頬のあたりに手を添えた。

令子ちゃんを人間に戻したときと同じように手で触れてみただけだ。演出だけなんでなんの意味もないけどね。

女将さんは観念してるらしく翻意する様子はない。目を閉じて、黙ってボクにされるがままだ。ついに、令子ちゃんが泣き出してしまった。

女子中学生を泣かせるボク。

あかん。このままじゃ良心が死ぬう。

「お母さんをゾンビにしないで……」

「令子。わたしの我侷なのはわかっています、どうか健やかに生きて……」

重苦しい静寂。

ボクは、ボクは——『なーんてうそぴょーん』なんて言える雰囲気でもなく固まっていた。

最初は、母親の愛の偉大さに屈服させてしまおうという作戦だったわけだけど、効果が抜群すぎた。

これってボクはどう考えても悪魔的ムーブですよ。

小さい悪魔じゃなくて、普通に悪魔ですよ。

ああ。どうしよう。

女将さんの頬に手を当てたまま、ボクはもはや最終手段に出ることにする。

困ったときのヒーロウイルス。

もとい、ただの光る羽だ。

背中の方からヒロウイルスを放出させると、緋色の光がまるで天使の羽みたいに広がる。

自分で言うのもなんだけど、この姿を見るとボクのかわいらしさとあいまって本当に幻想的に見えるらしい。

「えー、ごほん。あー、そのー、汝の選択はなされた的な？」

「はい？」

女将さんですら困惑の声色。

目の前には天使の羽を広げたボクがわけのわからないことを言っているのだから当然そうなるだろう。

もうこのまま押し切るしかない。微妙になってしまった雰囲気を払拭するんだ。そうするしかない。

「ボクは天使なんです」

そういう設定でいく。

「お客様は天使でしたか」

「そうなんです。天使なんです。だから、令子ちゃんと女将さんが仲良くしてくれることを望みます」

「それはもちろん」

「令子ちゃんもそれでいいかな」

「お母さんをゾンビにしない？」

「しないよ」

「わかった」

感極まった令子ちゃんはついに母親に抱きついた。

肌色成分大目だけど、母子の愛の前ではべつに変な気分になったりしない。

とりあえず、丸く収まって超よかったです。まるちようではなく。

あ、命ちゃんが絶対零度の視線でボクを見ている。

脳内無罪だよ。ねえ？

☆
＝

夜になりました。

昼くらいに温泉宿についたボクたちはなんやかんやあって、なにもかも解決したのは夕方くらいだったから、町役場に向かうのは明日にしようってことになったんだ。

みんな夕方になると寝静まるだろうし、そんなところに出かけていったらビツクリするかなって思っただけ。

ゾンビ荘のみんなには一泊する可能性も伝えてあるから大丈夫だと思っただけ。

ちなみに、夕方から夜にかけてやったことはバリケードの撤去だ。

もはやボクがここにいる以上、ゾンビに襲われる心配はないわけだし、女将さんは最後にここをオープンな状態にしておきたいというのがその理由だった。

まんまるのお月様が優しく照らし出してる。

中庭の縁側みたいなどころに腰をかけて中空を望むと、ボクの髪の毛と同じ色をしたお月様がかかっていた。

うーむ。風情があるな。

涼むのもちようどいいし。

もちろん館内は電気がないから暗いんだけど、ボクとしては夜目が利くから問題ない。

と、そこへ、懐中電灯の光がこちらにやってきた。

令子ちゃんだ。

「あんだ……えっと、天使ちゃん？」

「ボクは緋色だよ」

「緋色ちゃん」

「なに？」

「お母さんと仲直りさせてくれてありがとう」

「うん。ボクがそうしたいって思っただけだから。正子ちゃんたちとも仲直りした？ みんな令子ちゃんのことを思っただけいろいろしてくれてたみたいだけだ」

「正子たちとはさっきまで部屋でいろいろ話してたよ。ちゃんと謝ったから」

「そう。それはよかった」

「どうして、そこまでしてくれるの。天使だから？」

「温泉に入って、天使のわっかがさらに強力なものになりました」

キューティクルですよ。キューティクル。普段から髪の毛はさらさらしてて、汗もほとんどかかないから、天使のわっかはあるんだけど、温泉に入ったことでさらに輝きは増してます。

「そうじゃなくてさー！」

「直接的なところで言えば、女将さんの言動が大きいと思うよ。令子ちゃんとしては多々気に入らないところはあるんだろうけど、お客様は神様ですという思想とかさ——まあ今の時代、ぶっちゃけ神様幻想もそろそろ崩れてきてたとは思っただけど」

「そうだよ。お客様は神様でもなんでもないって思ってるよ」

「だよ、ボクもそう思う。でも、なんというか——、そういう伝統的な考え方というのかな、女将さんの思想にも合理性があるというか、分かる部分もあって、ボクはお客様の立場だからやっぱり心地いいって思っただよ」

「おもてなしを受けて、対価を支払ったってこと？」

「風情のない言い方をすればそういうことだね。令子ちゃんがいま人間に戻れるのは、要するにそういう伝統的な考え方に基づいた思想というか哲学というか倫理というか、なんでもいいけど、ともかく令子ちゃんが嫌ってる考え方に守られたからなんだよ」

「わたしは頼んでないけど」
「まあそうだよ」

その思想は令子ちゃんの根底にあって、たぶん今はまだ揺るがないものだと思う。それをどうしようというのも大人げないし、やるつもりもない。

ただ——。

「いやなら、令子ちゃんをいまずぐにでもゾンビに戻すけど？」

へらへらと笑いながら言ったら、令子ちゃんは高速で首を振っていた。

まあそうだよ。

「令子ちゃんはお母さんの愛情で傷つけられたと言ってたけど、令子

ちゃんもお母さんの愛情を人質にしているように思うよ。だから、女将さんはいろいろといたくてもいえなくて、ききたくてもきけないこともあるんじゃないかな」

「わたしが……お母さんの愛情を人質に？」

「そう。どうやったって、なにを言ったって、母親は子どもを愛するものだって思ってるでしょ。あるいは自分を生んだんだからそれぐらいの責任はあるって思ってるんじゃない？」

「そんなことは……ないと思うけど」

「だったら、母親の言うことにもつと耳を傾けてもバチはあたららないと思うけど。天使が言うんだからまちがえない」

天使設定いらなかなと思うけど。

超常の存在から、そうしなさいって言われたほうが、母親からそうしなさいっていわれるよりは聞きやすいかなって思ったんだ。

いわば、女将さんの責任をひとつかみ程度だけど肩代わりする案。

「ねえ。天使さま」

「はいはい。緋色です」

「わたし、パティシエになれるかな」

すがるような目で見てくる令子ちゃん。まだ中学生にしてはしっかりしているなと思うけど、夢のかたちすら見えない年齢だ。

未来にはバラ色に輝く未来だけじゃなくて、ゾンビ色した腐っていく未来もありうると知ってしまった。それは想像を絶するほどの恐怖だったのだろう。

だから不安なんだろうと思う。

ボクは緋色の粒子を背中から拡散させた。困ったとき以下略だ。

夜の暗闇の中では、緋色の光がまぶしいくらいに映える。

令子ちゃんは、目を見開き、ボクを見ていた。

母親との確執が終わったとしても――。友人との仲直りが済んだとしても。

なんだかんだいって、ゾンビになったときの記憶自体は、母親や友人の責任のあるなしに関わらず、醜悪なものとして、そこに泰然と存在する。

それをどうこうするには、上書き処理をするしかない。

「ボクは——保証はしないけど」

指先をトンと令子ちゃんの額にあてた。

脳内レセプターを焼ききってマインドアサシンをするつもりはさらさらない。

洗脳なんてもつてのほかだ。

ただボクは言うだけ。

「祝福するよ。令子ちゃんの願いが叶いますように」

☆
☆

朝になりました。

昨日は布団に戻ったあと、なぜかマナさんがボクのお布団の中で待機してたので、そのまま簀巻きにして部屋の外に放り投げたり、ボクが寝ていたら命ちゃんが襲ってきたりと大変でした。防御力がきわめて低い浴衣というのもよくなかったのかもしれない。

いろいろとありすぎてちよつと眠たい。

「ふわああん」

「ご主人様はあくびもかわいくて困っちゃいます」

マナさんが例によつてもつさもさになったボクの髪を丁寧にブラシで梳かしてくれています。ドライヤーがない状態の濡れた髪の毛はまだと、どうしてもそうなっちゃうんだよね。だいぶんタオルとかで水気は吸わせたけど、やっぱりダメだったよ。

「先輩といっしょのお布団で眠りたかったです」

命ちゃんの悔しそうな表情。

「ただ眠るだけじゃないから問題なんだよね……」

それと精神的疲労が多少あったんじゃないかな。

やっぱり、人間は仲良く。ラブアンドピースが望ましいに決まっているよ。

まだ少人数だったから、天使設定でゴリ押しできたけど、これが何十人となっていくと、その利害調整といえますか、そういうのってど

うやるんだらうね。

それを考えると、町役場にいくのがちよつとだけパンドラの箱を開けるみたいで怖い。だって、あそこにはおそらく何十人も住んでいるだろうから。

いつのまにかみんな元気にゾンビになってました——とかだと、いままでのボクの苦労はなんだったのって話になる。

まあそれはないと信じたい。運び入れてる物資は、電気が通っていた頃にぼっちさんとかにツブヤイターを通じて聞いた限りだと、全員分をまかなえる程度はあったとのことだし、不穏な組織が牛耳っていたりもしてない様子だった。

もちろん、ぼっちさんがそういうふうに書かせられていたという線もなくはないだろうけど、そんな状況で、配信見るかって話もあるしなあ。

町役場までは歩いても三十分ほどの距離。

ゾンビ避けはバッチリだけど、おみやげも持っていったほうがいいということ、トラックを二台ほど用意した。

なんと女将さんはトラックを運転できるらしい。エクセレント。

そういうわけで、ボクと命ちゃんとマナさんは一台目に。温泉組は二台目になり、ゆるゆると町役場に向かうのでした。

「それにしても——、ご主人様」

運転しながらマナさんが口を開く。

「なにかな」

「ついにご主人様自ら、天使宣言をなされちゃいましたね」

「あれは方便で」

「でも、彼女達は信じきってると思いますよ」

「え、そうかな?」

「実際、あのお姿を見せつけられてしまったては、信じるほかないと思いますよ。いよいよ、天使様として、ご降臨いたしますか」

「しないけど」

「人間支配しちやいますか」

「しないって……」

「町役場に向かつてるわけですけど、今回は実際に中に入るのではありませんか？」

そう。いままでは町役場のすぐそばで生存者をトラックにのせたままにして、ボクたちはすたこらさつさと逃げだしていたんだけど、いよいよ接触を試みることにしたんだ。

その理由は――、

衛星インターネット。

他の地域では使えてると思われるインターネットを通じて雄大に連絡を取りたかった。あと、配信を心待ちにしているみんなに状況説明とかいろいろ。

ピンクさんにも連絡とりたいかな。

おそらく、町役場では衛星インターネットが使えると思うし、使えないにしても、どの施設なら使えるかを知ってる人がいると思うし、そういうわけで今回は接触したいなって思ったのです。

「マナさんはまだ顔を知られてないから帰ったほうがいいかもしれないけど」

「あ、べつにどちらでもかまいませんよ。いまなら温泉組さんたちと同じような立ち位置で溶けこめるかもしれないし、うまく状況判断していききたいなと思います」

さすがマナさんだな。

ボクのおとももを撫でながら運転していなければ完璧だったのに。

ハザードレベル73

町役場にはいったいどれくらいの人がいるんだろう。

その正確なところはわからないけど、ボクのアロワールであり、ヒロ友でもあるぼっちさんによれば、百人規模ではあるらしかった。正確な数値は大きな建物であることもあって、ぼっちさん視点ではわからない。

ぼっちさん。

ひとり暮らしをしていた男子大学生で、ボクと同じ大学に通っていたかもしれない人だ。

でも、相手視点では、ボクは完全に小学生アイドルの立ち位置だったので、ダイレクトメッセージにおいても、なんというか子どもをあやすような、そんな優しきにくるまれた言葉が多かったかなと思う。要するに、なにか嫌なことがあったとしても弱音を吐かないで、自分のなかにためこんでいる可能性があるわけで、町役場が凄惨なことになっていたとしてもおかしくはない。

ただ、他にもボクが町役場に連れて行った人はいる。

例えば、自分たちの赤ちゃんを生き残るために捨てようとした夫婦。

例えば、図書館でブンガクしてた女の子たち。

例えば、マッチョな兄と男の娘な弟。

みんななんとなくだけど、ボクの配信を見ているような気配がする。謎の美少女スレもエゴサーチの一環としてみてたけど、少しそんなニュアンスが感じられた。まあ匿名なんてなんともいえないけどね。

そんな複数人の視点によってみれば、まあ多少は余裕があるんじゃないか、なんて思っている。

「ご主人様。町役場が見えてきましたけどどうでしょうか？」

「周りにゾンビさんたちはいないよね？」

「視認する限りではいませんね〜」

ボクの影響力はさりげに少しずつ拡大していて、事前にエリアを指

定していれば、そこからゾンビを遠ざけることなんてたやすい。

脳内リーダーでゾンビを光点であらわすと、まわりにはいない状況

あれ？

でも、これは……。

町役場の中にゾンビがいるような感じがする。

最近では地下にいた令子ちゃんゾンビを見つけれなかった反省を活かし、建物の高低差にも気をつけるようにしているけど、どうやらゾンビさんが数人はいるような気がする。

「なんか町役場のなかにゾンビがいそうなんだけど」

「全滅してますかねえ〜」

「そんなこと言わないでよマナさん」

全滅とか……、ボクのひそかな努力が全部無駄だったみたいで嫌だ。

もちろん、ゾンビになった本人たちも嫌だろうけど。

ぼっちさんたち大丈夫かな？

「先輩にとっては、ゾンビだろうとそうでなかろうとあんまり変わりはないのでは？ そもそも、ゾンビから回復させたり、町役場に送ったりするのも気まぐれの一種でしょう」

ボクを膝に乗せている命ちゃんが、わりと冷たいことを言う。

腰のあたりには命ちゃんの腕がシートベルトになっている。

トラックって人を乗せるための車じゃないからね。スペース的にしかたなかったのです。

「気まぐれといえましょうかもしれないけど、ボクにはボクの哲学があつてそうしたんだよ」

けっして、チート持ち少女のガバプレイではないと思っただけ

「ご主人様の行動理念で救われたひとも多いわけですし、気まぐれだろうがなんだろうが、ご主人様を信望している人は多いと思いますよ」

マナさんは時々厳しいけど、時々優しい。

変態でなければ、お姉さん認定してもいいんだけど。

「む。ご主人様がわたしのことをお姉ちゃん的に見てる気がします。辛抱たまらん。命ちゃん。ご主人様を渡してください」

「いやです」

おう。ボクは命ちゃんにひっぱられる。マナさんから少しでも距離をとろうと、左側に寄って運転席側から離れた。

「まあ、ご主人様の心配するほどではないと思いますよ」

「え？ どうして」

「ほら、町役場の哨戒エリアといいますか。あのあたりの道路を見てください」

町役場は見た目は普通だけど、ところどころは要塞化している。ここ二ヶ月ほどの間に少しずつゾンビを駆逐したり、周りからボクがゾンビを遠ざけた隙を見つけては改造を施していたらしく、例えば、町役場の周りのエリアは四車線くらいの結構大きめの道路になっているんだけど、そこを竹束っていつてわかるかな？ 塩化ビニルでできた棒をいくつも連ねたバリケードで防いでいるんだ。

「バリケードがどうかしたの？」

「少しずつ前進しているんですよ。前に来たときにはもう少し町役場に近い道だったはずですよ」

うちのゾンビさんたちは力持ちだけど、人間を視認しなければ比較のおとなしいから、あのバリケードで人間が見えなければ、たぶん襲ってはこない。つまり、バリケードも破壊されない。

ということはある人たちもきつと大丈夫ってことか。

「中の人などいない♪」

「不吉なフラグをたてないでよ。マナさん」

とりあえず、ボクは降車して、バリケードに近づくことにした。わりと異様だ。水道管とかでよく見かける灰色の塩化ビニルを利用して作られた竹束状のバリケードは斜め方向に迫ってくるように突き出されていて、しかもかなりの高さがある。一言で言えば斜めの壁――、としかいいようがない。

仮にゾンビが迫ってきて斜め方向になっているせいで、ゾンビが

手を突き出していると体重をかけて押しつぶすつてことができないから、バリケードが破れにくくなってんだ。

でも、きつと塩化ビニルで出来ているだけあって、たぶん大人数人で移動できるぐらいには軽いのもかもしれない。

「どこから出入りしてるのかな？」

ボクはさらにバリケードに近づいた。命ちゃんたちも降車していっしょに近づいてきている。

よくある一手としては、ゾンビさんたちは脚立を組み立てたりするのができないから、そのあたりの特性を利用して、建物の塀の上を歩いて脱出というのが考えられるけど、このあたりはそういう塀がない。あるにはあるんだけど、それぞれの家で違う塀の高さだし、塀が平坦ではなくてがってたりといろいろと適さない。

「あちらの畑をつつきれば、金網フェンスですからよじ登っているのでは？」

「あー、なるほどね」

畑のほうを見れば、高低差があつて、畑側から迫るとするとゾンビとしては絶対によじ登れない。逆に人間のほうは当然よじ登ったりはできる。脚立でも置いていけばさらに楽なんだろうけど、畑のどこかにあるのかな。

町役場に行くにはあつちから近づいたほうがいいのか。

「どちらにせよ。侵入者が近づいたらわかるようになってはいるはずす」

確かにそのとおりだ。

命ちゃんがちょうど離れた途端。

ぴぽんぽんぽん。ぽんぽんぽんぽん。

なんだか懐かしい音が鳴った。

『ゆう~~~~やけ~~~~こやけ~~~~のあかとーんぽ~~~~』

ボクの歌だった。

バリケードに近づくと、ボクの歌が流れる仕組みになっているのかもしれない。どこかに電池式の動体センサーがとりつけてあって、ボ

クの歌が流れる仕組み。

結構な大音量で流れるから、ちよつとだけ恥ずかしい気持ちもあるにはあるけど、ユーチューバーをして、全世界に配信しているからいまさらって感じた。

『良い子のみなさん。五時になりました。おうちに帰りましょう』

ボクの声だった。

ゾンビ避けの一環で、結構な回避性能を誇った五時のチャイム音声。

ゾンビには生前の記憶に応じて行動する性質があるから、五時のチャイムは効果が高かったらしい。

当然のことながら、今は五時ではないし、まだ朝の時間帯と違っていい。でもゾンビってボクと同じでわりとガバガバだからね。夕方とか朝とかそういう状況はどうでもいらしく、五時になったとボクがいえばゾンビさん的にはそうなんだろう。

要はボクがどんな気持ちで歌ったかというのが大きいのかな。

おうちに帰りたいなって気持ちで歌いました。

ボクと連帯しているゾンビさんもおうちに帰りたい気分になるんだと思います。

「先輩。そろそろ……」

「ん。そうだね。誰か来そうな雰囲気」

と、そのとき。

塩化ビニルで出来たバリケードの一部、正確には端っここのほうの幅一メートルくらいのところが、すすつと引くように動いた。

よく見ると、バリケードの下にはゴロゴロするための小さなタイヤがついてたみたい。でもバリケード的には大丈夫なのかな。

「おそらくですが、バリケードの向こう側には土嚢とかをつめるようになってるんでしょね」

なるほど……よくわからん。

「まあ実際に見てみればわかりますよ」

人が通れるくらいずらされてようやく構造がわかった。ちよつと”L”みたいなかたちなんだね。Lというよりはもうすこし縦の線

が左側に傾いているんだけど、そのLの字の横棒のところとか、横棒の端の部分に土嚢とかを設置するようになってるみたい。これでゾンビに押されてもそう簡単には壊れないのかもしれないね。

あらわれた人影は数人。みんな思い思いの武装をしているけれど、こちらに敵意はなさそうだ。

その中のひとはボクもよく見知っている人。

ぼっちさんだった。

喜色満面。ものすごい勢いで手を振ってボクに近づいてくる。

「ヒロちゃん！ うわー。本当にヒロちゃんだ」

「ぼっちさん。こんにちわ。無事でよかったよ」

なんとはなしに、手を出して握手を求めてみる。友好的なゾンビですから。

ぼっちさんは上着の裾の部分で何度も手をふいて、それから手を伸ばしてきた。

はい。握手。

「うわあああああ。握手しちゃったよ。柔らかくてすべすべでマシユマロみたいな……生きててよかった」

「いやまあ……ふへへ」

握手程度でそこまで喜ばれてもと思うけど、本当にうれしそうなんでもこちらもうれしくなってくる。ボクってわりとアイドルしてるなあ。

「ヒロちゃんがきてくれてうれしいな……いや、マジでうれしい。なんだかすごくいい匂いするし、ヒロちゃん成分で頭おかしくなりそ……」

昨日死ぬほど温泉に入りまくってるしね。命ちゃんたちには念入りにピカピカになるまで磨きまくられたし、もっさもっさの髪の毛がシャンプーのいい匂いになってるのは確かだ。

ちよつと言い方が変態チックなのはご愛嬌かな。

よく見ると、少し瞳がうるんでらっしゃる。

そこまで感動せんでも……と思うけど、よくよく考えれば、ボクって救世主的な側面もあるんだよね。ゾンビ的な問題はボクがいる限

りでは解決するし、物質的な側面もボクは調達するのがかなり楽だから、要するに現世利益があるってことです。

ただ、ぼっちさんの場合は、ボクのファンだからね。

ふふん。ファンだからね！ 大事なことなので二度いいましたが、こころの連帯を感じます。ヒロ友特有の連帯感です。

「今日はね。ちよつとお願いがあつてきたんだけど。中入つていい？」

「もちろん。いいにきまつてるよ。あ、でも、いちおうリーダーにかかけあつてみるから、ちよつとだけ待ってもらつてもいいかな？」

「うん」

後ろのほうから、令子ちゃんたちも追いついて、ボクたちが通されたのはバリケードの横つちよにあるなんの変哲もない家だった。

☆
☆

家の中は普通——というか。普通で当然だ。

ここはたぶん、ゾンビハザードが起る前はただの家だったのだろうと思う。二階建てのよくあるお家。ゾンビに見つからないようにするためか、カーテンは締め切つていて暗い。

でも、ボクがいるからかぼっちさんはすぐにカーテンを開けてくれた。

朝日がさつと差し込んで、部屋の中は明るくなる。

ボクも晴れやかな気持ちになる。ゾンビ避け能力については確かにさんざん見せつけてきたけれども、ボクのことを信じてくれていてるってことだから。

通されたのはリビングだ。大きめのソファの真ん中にボクが座り、その隣に命ちゃん。そしてマナさん。マナさんつてボクの関係者であることを隠す気ないよね……。まあいいけど。令子ちゃんたちはぼっちさんの仲間が持つてきたパイプ椅子に座ってもらった。これだけたくさんの人が来るのは想定していなかったんだろう。

「いま、本部と連絡とつてるから待つてね」

対面に座ってるのはぼっちゃんひとり。向こうの壁のほうに背中を預けているのもう少し年のいった若い男の人。あとひとり60歳くらいの初老のおじさんって感じの人だったけどどっかいつちやった。

「どうやって連絡とってるの?」

「ほんととはトランシーバーでもあったらよかったんだけどね。町役場の中になかったからやむなく手旗信号をつかってるんだよね」

「OH……手旗信号」

ヨウ カン ヲクレ

ってやつですな。

古式ゆかしい伝達方法だけど、だからひとり二階に向かったのか。

ちなみに人間を超えてる聴覚を持つてるボクなので、トランシーバーの音なら拾えたかもしれないけど、手旗信号だと何を伝えてるか
はわからない。

まあ、そんなに悪い印象はないんじゃないかなと思うけど。

と、唐突に。

ドン、ドンというぶしつけなほどに大きなドアをノックしている音が部屋内に響いた。

ちよつとだけビクつてなっちゃった。

それぐらい大きな音だった。

ぼっちゃんは立ち上がって、それからドアを開けた。

そこにいたのは小さな女の子だった。

ボクよりはちよつと小さめ。ピンクさんよりは大きめ。

10歳ジャストぐらいかな。なんだかぼーつとしたというか冬眠明けでまだ眠たそうな子熊って感じで、垂れ目ぎみの顔立ちをしている。

そして驚くほど静かな印象。部屋の中はその子の一挙手一投足に集中していて、奇妙なほど沈黙している。みんな息を殺している。

その子はちいさな手にお盆をもっていた。

湯気たつお茶がその上に乗っていた。手がぶるぶると震えてる。

うーむ。つまり、さっきの音はドアを蹴り上げたのか。

ワンピースの裾から見える細い足。両手が塞がってるから、お行儀が悪いけどしょうがないよねって感じた。

ぼっちはさんはお盆ごと受け取ろうとしたけど、女の子は首をふるふると振って、やわらかく拒絶した。

うむん。自分で配りたかったのか。

それとも自分の仕事だという認識があるエライ子なのかもしれない。

ほほえまーです。うん。

こぼさないように慎重に感じて、ソファの真ん中に置かれたローテーブルにお盆を置いて、それから湯のみをひとつずつ丁寧に両手で持って、まずはボクに。

無言のまま。

ぬぼーとした眠そうな瞳がボクを見ている。

「ありがとう」

そのあと、女の子はみんなにきちんとお茶を配り終わったよ。

そして――、最後にぼっちさんの隣に座った。

ちよつと身体を傾けて、ぼっちさんに身体を預けてるような感じ。

ぼっちはさんは困ったようなうれいような微妙な顔つきになっていた。

「えつと……ごめんね。ヒロちゃん。この子は杵島未宇ちゃんって言って、ヒロちゃんのファンなんだ」

「へー。女の子のヒロ友……」

やったぜ。

ボクにも女の子のファンがいたんだ！

まあピンクさんという幼女がいたんだけど、あの子の場合は、半分以上は政府関係者でもあるからなあ。

純粋なヒロ友という意味では初めてではなからうか。

ぐつとうれしさを噛み締める。油断するとニマニマしてしまいう。

「はじめまして未宇ちゃん。ボクのファンになってくれてありがとう」

「……」

「あれ？」

無言なんですけど。

未宇ちゃんは眠たそうにしてるけど、本当に眠ってるわけじゃない。
いい。

ボクをリラックスした瞳で見てる感じ。

「ああ……、ヒロちゃん。この子は耳が聞こえないんだ」

「え、そうなの？ 耳が聞こえないのに——」

ボクのアーン？

というのは、少し変かかって思っちゃった。

それは健常である者のある種の傲慢的な考えなのかもしれない。

「ヒロちゃん動画は字幕入りで各種翻訳されてますよ」

隣で補足してくれたのはマナさんだった。

へえそうなんだ。ボクってアーカイブにあげるだけで関連動画を

全部見てるわけじゃないから知らなかった。

ぼっちはぴとつくつくついていた未宇ちゃんを離して、少しだけ距離をあけて、それから流暢についていったらいいのか、手話をして
いた。

「ヒロちゃんはアーンになってくれてありがとうって言うてるよ」

未宇ちゃんもそれに対して手話を返す。

「いつも楽しい動画ありがとうだって」

そして花がほころぶような笑顔。

やべえ。かわいすぎる。隣にいるマナさんの鼻息が荒いけど、これにはボクも賛同できる。とてつもない幼女指数だ。

「がいがあかうんたーで調べたらめちやくちやガリガリ言ってる気がする
します」

マナさんが何いつてるのかいまだによくわからない。

「ぼっちはさんとどんな関係なの？」

「なんかよくわからないうちに懐かれちゃって……、たぶん僕が手話
できるからかもしれない」

意思疎通できる人ってことか。

耳が聞こえないってことは、自分が何を言ってるのかも確認する方法がないってことだから、言葉を発することがなかなかできない。スマホのメモ帳とかミニ黒板を使って意思伝達することは可能かもしれないけど煩雑で時間がかかる。

こういう生きるか死ぬかという状況だと、子どもと会話するというリソースもとりにくいってことなのかもしれない。

しかしそれにしても――。

幼女にべったりとくっつかれている男子大学生（21）。

傍から見たら事案ですね。

うらやま――もとい、なにか腑に落ちない。

だからボクは言った。

「ぼっちさんがぼっちじゃなくなったら、ぼっちさんじゃないよね」「ええっ!？」

「これからはあんぼっちを名乗るといいよ」

「あんぼっちとは」

「否定の接頭語の”あん”をつけて、あんぼっちだよ。それとも幼女スキーぼっちのほうがいい？」

「あの、僕はロリコンじゃないよ」

慌てたように否定するぼっちさん。

「ボクも十分に幼女だし、ボクのこと嫌いだったの？」

「そ、そんなことないよ！僕はロリコンでした!」

「そうでしょ。だったら、これからはあんぼっちを名乗るといいよ」

「それは勘弁してもらえないかな……」

壁際の男の人がこらえきれなくなったのか、プッと噴出していた。まあ、ぼっちさんをいじるのもこのくらいにしておこう。

それにしても、耳が聞こえないってどのくらいのハンデなんだろうな。

はつきり言っただけ、健常者というのは障害者のことなんてまったくいいほどわからないと思う。

健常者どうしですら、他人のことはわからないし、何を考えているかわからないし、争いは無限に起こってるわけ。

ただ——、例えばの話。

ゾンビだらけになった世界で、ゾンビのうなり声が聞こえないというのは、かなりのハンデなのは想像に難くない。

そんな中で、未宇ちゃんがこの町役場にたどり着いたというのは奇跡に近い。

親とか知り合いはどうしたのかなと思うけど、たぶんダメだったのだろう。

だからこそ、ぼっちさんに懐いているんだろうし。

だから、彼女はひとりきりで寂しかったのだろうと思う。

そんなふうにくこのころの中を想像したところで、まったく検討はずれかもしれないけど。ともかく、未宇ちゃんがヒロ友であることは間違いないであろうし、ボクってファンサービスは結構こころがけているほうなので、あまり見かけない女の子のヒロ友には優しくしたいと思います。

ふっと思いつくのは——ヒロゾンビ化による再生能力をつかって、未宇ちゃんの聴力を回復させることだけど、ヒロゾンビ化することの弊害もあるかもしれないから、いまはまだ黙っておいたほうがいいかな。

そんなことを思うのでした。

ハザードレベル74

「許可でたぞ」

渋い口調で語りかけてきたのは、先ほど二階にあがっていった初老の連絡員さんだった。

灰色の作業着を着ていて、手には手旗信号用の旗をもっている。その持ち方ひとつで年季が入っている感じがした。

「ヨウカンヲクレ……」

ボクはつぶやいてみる。ちよつと見せてほしいかなって。熟達した技の数々をボクにプリーズ。なんか格好いいじゃん。手旗信号つて。

「ん。ヨウカンがほしいのか?」

「あ、いや、そういうわけじゃないんだけど」

「飴でいいか?」

ポケットのなかをこそこそと探り、その人はボクの手のひらの中に飴だまを落とした。もちろん飴玉そのものじゃなくて、きちんと包まれている。風情のない透明な包装紙とかじゃなくて、お耳があるタイプのキャンディだった。ひねるところをお耳ついでいわないかな。

「ありがとう?」

白くひねられた包装紙にはイチゴのマークが小さくたくさん描かれている。渋いおじいさんって感じなのに、案外趣味がかわいいな。

左右に引つ張って、飴玉を口の中に入れる。当然のことながらイチゴ味。

舌のうえでイチゴの飴を転がしていると、不意に手が伸びて、連絡員さんに頭をなでられた。ずっと撫でる感じじゃなく、ワシヤワシヤと二往復くらいだ。

孫みたいな感覚なのかな。髪が乱れるのはちよつとだけ嫌だけど、圧倒的に気持ちよくて、されるがままだ。

「この子がヒロちゃんか?」

と、ぼっちさんに聞くおじいさん。

「そうです」

ぼっちさんの言葉にはその人に対する敬意のようなものが含まれてる気がした。このグループ内でのリーダーはまちがいにこの人なんだろうな。ボクとしてはぼっちさんの暮らしぶりも気になるところだし、そのためには他の人の視点っていうのも大事だ。

だから――。

「おななえおしええくだたい」

この人と知り合うことにした。

「食べてからにしろ」

「むう……」

「ああ、噛み砕かなくていいぞ。ゆっくりでいい」

ワシヤワシヤ。

うむん。

なんだかぶしつけではあるけど、撫でるのうまいなこの人。技巧派ですか？

「む……」

飴玉を舐めてると、おじいさんは未宇ちゃんにも飴玉をあげていた。

ニコって笑って御礼の代わりにする未宇ちゃん。

ワシヤワシヤ。

くすぐったそうに目をつむってされるがままになってる。

たぶん、未宇ちゃん用だったのかな。この飴。

そんなことを考えていたら、すつとボクの手ひらに重なる手。

そのまま両の手を胸のあたりまで持ち上げられ、手で手を包み込むようにして祈りの姿勢になる隣のロリコンお姉さん。言うまでもなくマナさんだ。

「ああ、主人様の舐めた飴を卑小なるわたくしめにも与えてください」

マナさんがまた変態フレーズを言ってる。なんで人が舐めたのをとろうとするの？ 変態なの？ 変態か……。

「ん。おまえさんもほしいのか？」とおじいさん。

「あ、いえ……、わたしがほしいのは主人様の舐めたものです」

「そ、そうか」

ドン引きされるのも無理のないことだった。

「あげないからね」

大分小さくなった飴玉を舐めつつ、ボクはぺろんとマナさんを引き離す。

「そんなくく。今日は美幼女に会えた大吉の日だったのに、ご主人様はそんなわたしをガツカリさせるおつもりですか」

「知らないよ」

まだ床の上に転がってジタバタしないだけマシかな。

家だったらそうなたってた可能性も高い。

マナさんの変態さ加減は衆目にさらされているし、ボクのことをご主人様とか言っちゃってるし、もういまさら無関係を装っても無駄だろう。

本当にいいのかなって思うけど、こうなったらボクが守るしかない。

「あ、ご主人様に守られてる感覚がします」

「それはいいんだけど、ちよつとは自重しようね」

そうしたら、ちよいちよいとボクの肘のあたりにつつつかれる感覚。

「先輩」

命ちゃんだった。

もう、目を見ただけで何が言いたいかわかったよ。

自分もってやつだ。

「変態ロリコンがまたひとり増えたよ」

「違います！ ヒロコンです。ロリコンじゃありません！」

「知らないよ！」

気づいたら飴玉は溶けてなくなっていました。

やれやれ。

☆
||

「わしはゲンさんと呼んでくれりゃあいい」

「ゲンさん……」

ふむ。まさにイメージどおりな感じだな。

例の建築業者さんが着てるような——ぼんたんつていう裾になるにつれて広がりのあるズボンとかを着てるわけじゃないけど、なんとか現場の人って感じだし、実際、パソコンをカタカタ打つような仕事というよりは鉛筆を耳に挟んで、図面に線を引いてるイメージの人だ。ゲンさん……すごくしつくり来る。

「ボクは夜月緋色つています」

ボクは本名を名乗りました。

終末配信者のヒロちゃんでもいいかなとは思うんだけど、配信業は休業中だし、いまは謎の勢力からの接触を待ってる状態ともいえるので、いまさら本名を名乗るのに躊躇はない。ただ、ゾンビ荘のみんなの安全は確保したいと思ってるけど、どうしたらいいんだろう。

ボクはどこまでいっても一般人だし、政府とかその道のプロがどんなふうな手法でどんなふうなことができるかを知らない。それはたとえ天才である命ちゃんであってもあんまりわかってないんじゃないかな。そういう方面の防衛能力を高めるのであれば、ピンクさんみたいな政府組織に寄り添うほうがいいんじゃないだろうけど、人類全体の問題を解決しようとするときに、どこかにべつたりくつつきすぎるのもよくないような気がする。

ピンクさんは接触がはやかったし、かわいいし、幼女だし、幼女は正義だし、それはそれでいいんだけどね。

停電させた組織がどんな考えなのか、”御意向”つてやつを聞かなくちゃ始まらない。

そんなわけで本名を名乗ってるのも考えなしじゃないんですよ。と、言いたい。

やっぱり、ちょっと考えが足りないかな……。うーん。

「ヒロちゃんの本名？」

疑問顔で聞いてきたのは、ぼっちさんだ。

「うん。ボクの名前」

「どんな字を書くの？」

「そのまま、スカーレットの緋色だよ」

「緋色ちゃんだからヒーローちゃんか」

「そうだよ。ギャグみたいな名前の付け方だけど、ボクなりに考えました」

「かわいらしい名前だね」

「むふん。ありがとう」

「くっそかわいいな……それに、よく考えたら僕がヒロ友の中ではじめてヒロちゃんの本名を知った人間なんじゃ」

「ん……そうかな」

「やった！」

まあ、マナさんとか飯田さんとかをヒロ友だと考えれば、そっちのほうだけど、なんとなく身内感があるのがふたり。ぼっちさんも友達だけど、ちよつと距離感は違うかな。わざわざそんなことを言う必要はないけどね。

感無量って感じのぼっちさんを、わざわざ下げる必要はないというか。

「掲示板とかで知らせてもいいのかな」

「べつにいいよ。でも停電中だよね」

「ああ……そうか」

目に見えて落ちこむぼっちさんだった。

「でもまあ、電気ぐらいならなんとかできなくもないよ」

「え？」

「ボクがここに来た理由が、インターネットを使わせてほしかったからなんだ」

「インターネット？」

「うん。衛星インターネット。衛星を使ったインターネットで、基地局とか必要ないやつ。でも当然、そういうインターネットでも電気は必要だよね」

「ああ。ネットをしたいから電気も復活させるって感じか」

「うん。発電機を置いて、少しの間くらいは使えるしね。みんなも

ちよつとの間は使えるようお願いしてみよ」

「それはうれしいな……正直なところ、ここは娯楽不足なんだ」

それはボクも感じてます。

なにしろ、ゾンビだらけの世界をセーフテイに暮らせるボクですら、ネットがなければ暇でしょうがないからね。

精神的な意味で『暇』に負けて、みんなのところにやってきたというはあると思う。もちろん、ヒロ友のみんなのことが気になってというのもあるんだけどね。暇は強敵だったなあ。強すぎるよ。永遠の命を生きる吸血鬼とかが暇すぎてちよつと死んでみようかなって思う気持ちがわかつちやっつた。

ゾンビは既に死んでる説はありますけれども。

深閑とした静けさが不意に訪れた。

みんなしんみりしちやっつてる。ゾンビハザードって生命の危機でもあるけど、文明の危機でもあるんだ。

「ともかく——、ヒロちゃんがきてくれて本当によかったよ。みんな、いつか来てくれるんじゃないかって思っていたから」

「みんなボクのこと知ってるの?」

「電気が止まるまではヒロちゃんの動画を映画みたいにプロジェクトターで流していたよ」

それはそれは……恥ずかしいといふかなんというか。

「もちろん、コメントを打ちたい派は自前のパソコンとかで接続していたけどね」

「ぼつちさんも?」

「うん。僕も古参面したかったからね。僕にとってはヒロちゃんに実際に会ったことがあるというのがものすごく自信になったんだ。みんなは僕とヒロちゃんの秘密を知りたがったしね」

キラキラとした瞳でいわれると面映い。

かああつと顔が熱くなる。

でも、配信の向こう側って誰がどう感じているかわからないから、こうやって面と向かって感謝されるとうれしいな。

★
||

天使が笑ってる。

画面の向こう側の天使が。

静かで音のない世界で、いろんなものからわたしだけが浮いている。

イメージする。

世界は大雨洪水警報。

ざあざあと大降りな雨。

大きな木の下にわたしはぽつんと雨宿りしている。

雨の音はきこえないけど、誰も彼もないひとりぼっちの世界で、なんだかキレイであったかいかい無関係で透明な世界が広がっている。

舌の上にはいちごの飴。

隣にいるぼっちも笑ってる。

どうして笑ってるのかはわからない。

けど、最初にぼっちがぼっちという名前だと名乗ったとき。

この人はわたしと同じなんだと思った。

わたしはひとりぼっち。

でも、それが悪いことだとも思わない。

みんなが笑ってて、わたしにはどうして笑ってるのかわからないけど、画面の向こう側の笑顔がきれいだと思うから。

みんな天使で、みんなきれいだから。

天使が笑ってる。

☆
||

「この人たちは、えっとどういう関係なのかな」

ぼっちさんが確認したのは、女将さんたちのことだ。

女将さんが代表して、ボクによって助けられたというようなことを言っていた。つまり、身内ではないということも伝えていた。

「ああ、なるほど僕と同じような方なんです。ゲンさんどうしま

しょう」

「ぼっち。オマエは町長のところに案内したほうがいいだろう。湯崎、おまえがこの人たちを案内しろ」

湯崎さんっていうのは、壁際で腕を組んでいた細身の男性だ。

もう10月にもなろうっていうのに、タンクトップを着ていて、むき出しの筋肉がすごい。細いマッチョな人だ。肌が浅黒くてポニーテイルみたいに髪をしばってる。

それにしても、ぼっちさんって、ここでもぼっちさんなんだね。

そう名乗ってるのだろうか。

「わかりました。じゃあ、みなさんはオレについてきてください」

女将さんが最後にボクに対して一礼。正子ちゃんもボクに手を振り、ボクも返す。そこでとりあえずお別れということになった。

ボクたちはリーダーさんのところに向かうらしい。

リーダーは町長？　なのかな。

ここK町の町長さんが誰なのか、実をいうとボクは知らない。でも、地元の町新聞みたいなのに掲載されていて顔だけは知っている程度。

ゾンビハザードのときに生き残っているとすれば、それはそれで運がいいかもね。

でも、違う人の可能性も高いかな。

「町長さんってどんな人なの？」

「うーん。なんといえればいいか。リーダーシップはあるように思うよ」

「ほうん」

リーダーシップね。

このゾンビアポカリプスの世界を生き抜くにはリーダーシップは必須項目だろう。でもなぜか微妙に言いよどんだような気もするの
はなぜだろう。

「ちよっと個性的なんだけどね」

「個性的？」

「まあ会ってみればわかるよ」

ボクたちはゾンビ監視の家を出て、町役場に向かっている。徒歩で五分もかからない距離だ。ゾンビ避けのためのバリケードは一つじやなくて、地面には有刺鉄線と杭で出来た簡易バリケードがはりめぐらされている。

人が通る分には避けていけばいいけれど、ゾンビつて避けて通るといふ発想があんまりできないからね。このバリケードもありかなあ。たぶん時間稼ぎのための一種なんだろう。

いよいよ町役場を見上げられるところまで来た。

ここK町の役場は実をいうと、そんなに高い建物ではないです。前にもどこかで言ったかと思うけど、佐賀県の地盤は緩いので、あまり高い建物はNGなんだ。その代わりに地価が安いからか、長屋みたいに広大な敷地面積を持っている。横広がりをしているんだよ。

町役場の敷地内は低い植え込みがあるくらいで、バリケードはなかった。横手には空港みたいな広さの駐車場がある。もともと夜には車を出せなくなる仕様だったからか、何台しか車は停まっていな。その代わりにボクたちがいままでに用意してきた巨大なトラックがキレイに整列している。

「あのトラックも使われてるんだね」

「いざというときの脱出用だよ。まだ役場内の部屋数も足りてるからいまのままでもいいけど、足りなくなったら、トレーラーハウスみたいに使う案もあるみたいだよ」

「ほうん」

なんかそれワクワクしますね。

現実的にはワクワクするのは不謹慎極まりない話なのかもしれないけど、男としてはそういうキャピングカーとかで暮らすのは、なんか冒険って感じでワクワクするんだ。思わずスキップしちゃう。

「ご主人様が女の子してらっしゃる。尊すぎます〜〜」

「先輩が女の子的かわいさを発揮してらっしゃる」

だから——、女の子じゃなくて男の子的なワクワクさなんだって！
続けて町役場の中に入ると、案外薄暗くはなかった。敷地面積をそれなりに確保している状況なので、窓ガラスとかを覆ったりしなくて

もゾンビに発見されるおそれはないからだ。

特に玄関ホールは訪れた人に明るいとところだと思ってもらいたいせいか、空間的な広がりがあつて、光をとりこめるようにしている。

ホールにはまばらに人間がいた。

みんな流浪の民みたいに打ちひしがれてるかなと思つたけど、案外普通な感じだ。もともと住所変更とかの手続きをする台のところとか、役所側のスペースとか椅子は多いし、ソファにねっころがつてる人もいる。

ブルーシートを敷いて、そこでなにかの本を読んでる人もいる。

駆け回つて鬼ごっこをしているボクよりも小さな子ども達もいる。遊ぶスペースないからしようがないのかもしれない。

そのうちひとりの子どもがボクの姿に気づいて、指差していた。まるで恐竜を見つけたみたいに、驚きのあまり口をパクパクさせている。

みんなが一斉にこつちを見る。

「あ、ヒロちゃんだ。ヒロちゃん」「え、どこ?」「すげー。マジだ」「白玉団子ちゃん!」「え、ヒロちゃん?」「超能力みせてー!!」「わあああああ」

げっ。

すごい勢いでダッシュしてきてる。

ゾンビみたいな迫り方だ。

「ちよ、ちよつとちよつと」

接触まで余裕はあつたし、ボクの動体視力なら避けるのは楽勝だ。

でも、避けたら全力ダッシュしている子ども達がきつと転んじやうかもしれない。まだ小学生低学年。場合によっては幼稚園くらいの子ども達が五、六人。怪我されるわけにもいかない。

「むんっ」

ボクがやれることは孤軍奮闘おしくら饅頭でした。

つまり踏ん張つて耐えるだけ。

場合によってはトラックすら持ち上げることが可能なチート能力は、子ども達の体重を支えるくらい楽勝だった。

あ、でも髪の毛ひっぱらないで。
もみくちやにしないで。なんかおっぱい触られてるんですけど！
手つきがエロい。にやけた顔がクレヨンしんちゃんそのものだった。

むう。

不可視の力で悪ガキをつまみ、離れたところにクレヨンみたいな要領で置く。

その子はポカンってしてたけど、それは一瞬。

「すげー。もう一回。もう一回！」

むしろ悪化した。

「遊んでるんじゃないんだけど！」

「このくらいの年齢のおねロリシヨタも大変いいものですね。尊みが溢れる」

いやマナさん。それはちよつとどうかと思います。ともかく、子どもって元気だよ。傍らにいる未宇ちゃんの静かな様子とは大違い。ベタベタ遠慮なく触りまくってくるし、ボクの見えた目が珍しいのと、超能力に興味があるんだろうけど、みんな無慈悲すぎるよ。めっちゃくちゃにされちゃう。

イメージ的にはミツバチがスズメバチを取り囲んで体温で倒す攻撃方法だ。

「こらー。みんなダメだよ」

意識が朦朧としていたら、なんだか場違いなポワポワした声が聞こえた。

あ、この人は知ってる。

確か、図書館にいたゾンビになりかけていた子だ。

名前は確か——平岡鏡子ちゃんだったかな。

「久しぶりだね。ヒロちゃん」

同じくその子の隣には図書館にいた太宰こころちゃんもいた。こっちは「こんにちわ」と小さい一言だ。クール美人な感じなので、小さな声でも凜としている。

ボクも久しぶりにあった人たちに対して笑顔を向けた。

「いんにちわ」

ハザードレベル75

町役場のホールはわりとにぎやかだった。

小学生低学年とか幼稚園くらいの子どもたちに囲まれるし。もみくちやにされるし。

髪の毛触られるし。

胸も触られるし。

まちがつても傷つけるわけにもいかないから、わりと困っていた。

そんな中、救世主として現れたのが、ボクが図書館であった女子高生だった。

命ちゃんも女子高生だけど、彼女達は低学年くらいかな。

まだ中学生っぽい雰囲気をもとって、カワイイなど思える年頃です。

「ヒロちゃん本当にきたんだ。ちょっと前に噂になっていたよ」

ふわふわ髪にほんわか雰囲気なのが平岡鏡子ちゃん。

人当りがよくて、みんなに好かれそうなタイプだ。

「どうやって知ったの？ 手旗信号？」

「うん。そうだよ。重要性の高い情報はすぐに館内放送が流れるの」

「電気来てるの？」

「発電機はあるけどそこまではしてないよ。単純に人力」

「人力？」

人力の館内放送ってなんだろう。

答えはすぐに出た。

「メガホン使ってるだけだよ。ヒロちゃんがきたぞおって興奮してた。わたしもだけど、みんな興奮してると思うよ。だって、みんなヒロ友だし」

みんなヒロ友なんだ。ホワツとうれしい気持ちか湧く。

もちろん、額面どおりに受け取るわけにはいかないと思う。

鏡子ちゃんにとつて、ボクはゾンビ化を防いだまきしく救世主的なポジションだし、いわばヒロ友の中でも特に関係性が深いだろうから。ボクのシンパというか。ボクの味方な感じ。本当に全員がボク

の動画を心の底から楽しんで見ていたってわけでもないだろうと思う。

それでも、みんながボクのことを歓迎してくれてると思うと安心するな。

いままでここに来なかったことに罪悪感が湧くくらい。

「この子たちもヒロ友？」

「そうだよ。みんなヒロちゃんのこと大好きなんだよね」

鏡子ちゃんが子どもたちに聞いた。

花が咲くように笑う子どもたち。

「うん好きー」「いい匂いするし」「生ヒロちゃん！」「好き好き大好き超あいしてるー！」

「おまえのことが好きだったんだよ！」「ヒロちゃんずっとここにいて！」「ママー」

なんか妙にまかせてますね。

子どもたちは全部で七人くらい。背格好はボクよりも小さい。

「幼女化著しいと言われているボクだけど、さすがにこの子たちに対しては庇護欲が湧く。」

ちよつと怪しい言動な子もいるけど、ほほえましいことこのうえないよ。

みんなが寄ってくる、そして。

——おしくらまんじゅう。

ともかく密着したいというか、ボクに触りたいのか。

未分化な欲望をそのまま受けるかたちになるボクは、ほほえましくはあるけど暑苦しいです。

「ほらあ。みんな。ヒロちゃんから離れなさい」

ほんわか声でいわれても、みんなに効果は薄い。

命ちゃんもマナさんも、ほほえましく見てるだけで助けてくれな

い。

むぐぐ。

「みんな」

すつと透明な声が差し込んできた。子どもたちの顔がそちらに一

齊に向いた。

声の主は、太宰こころちゃん。

長い黒髪が綺麗で、なんというかロボットみたいに綺麗な印象の女の子だ。

図書館ではうろたえたり泣いてたりと人間味があった彼女だけど、どうやら標準的にはあんまり表情筋が動かないタイプなんだな。

冷静沈着というか。

身体は本でできている、とか言い出しそうなタイプ。

なんというか命ちゃんにそのあたりは似ている。

「こつちにおいで」

声のトーンがいつしよなので、感情の揺らぎがほとんど感じられない。い。

受け取り方によつては怒つても思われかねない言葉だけど、そうじゃなかった。

みんなダツシユでこころちゃんに寄っていく。

「抱いてっ」「こころせんせい」「ころせんせい」「それ違う」「せんせーなでてー」「きゆうん」「せんせーがいちばんおちつく」「こころちゃんが一番おちつくよね！」

子どもたちが離れたことで、うれしいやらちよつときみしいやら。ていうか、なんで鏡子ちゃんも抱きついていくんだらう。

「鏡子は許可してない」

「もう。そんなこと言わないで！ わたしとこころちゃんの仲じゃない」

「どんな仲よ」

「それ言わせちゃうかー。あつあつカップルでしょ」

「誰がよ」

こころちゃん、鏡子ちゃんにでこぴんする。

誰がどう見てもイチャイチャしているようにしか見えない。

子どもたちも無邪気にはしゃいでいる。

「百合だー」「アリだー！」「えるじーびーていーってママが言つてたよ！」「おまえのことが好きだったんだよ！」「鏡子×こころが鉄板だけ

ど、もしかしたら逆もありかもしれない」

百合の英才教育という言葉が脳内に浮かんだけど、ダイバーシティだ。多様性だ。

そもそもゾンビだらけの世界なので、みんな助け合いの精神が大事だと思います。

百合だろうがホモだろうが、そんなのは些事というか。

気にしてるだけの余裕がないんだろうとも思うし、こころちゃんも半分くらいは受け入れちゃってると思うんだよな。

「というか、なんとなくみんなの言葉でわかったけど、こころちゃんたちって先生やってるの?」

「そうだよ」と、鏡子ちゃん。

「わたしたちにできることはなにかって考えたの」と、こころちゃん。自分たちでできること――。

この小さな町役場で、できることは限られてると思う。

みんな、ねっころがつてじっと耐え忍ぶというのがデフォで、なにかを積極的に行おうとするのはそれだけでエライ。

ゾンビハザードが起こってから、ボクがやってきたことって配信くらいで、それ以外はダラダラ過ごしてきたんで、なんとなく心が痛くもあります。

「あ、そうだ。ヒロちゃんも授業受ける? 小学生くらいまでならなんとかなるよ!」

「え?」

「え、だって、ヒロちゃんも小学生なんだよね?」

確かに自己申告では小学生の年齢を言ってたような気がする。

でも、ボクは大学生。大学生なんです!

ピンクさんに中学生くらいの知識とか知力とか言われた気がするけど、それでも大学生なの!

いまさら、小学生の授業なんて楽勝に決まってる。

算数で四則計算ができたからって、なんの自慢にもならないし、ボクがすごい天才とかいわれても悲しい気分になるだけだ。

「えーっと、ボクはいいかな」

「あー、ヒロちゃん、勉強嫌いなんだ！ 将来困るよ。わたしも苦労したんだから」

しみじみと言う鏡子ちゃん。

ある意味、未来に希望を抱いているからこそ言える発言だ。

この世はゾンビだらけなわけだし、教育機関が復活するかはわからない。

それどころか、人類は存亡の危機に立っているから。

でも——、ボクの内心では大学生の知識を否定されるのは、男だったときのボクが否定されるようでもしろくない。

「ボクはこう見えて大学生くらいの知識はあるんだよ。鏡子ちゃんたちって高校生でしょ。ボクのほうがいろいろ知ってるし」

イキってしまうボクでした。

ニヤつと笑う鏡子ちゃん。

「へえ。じゃあ問題です。てろんっ」

「む……」

いきなりのクイズ番組か。

ボクは身構える。

でも、小学生に見えるボクにいきなり全力の問題を出すはずがないだろう（震え声）。

そこは手加減してくれるよね。

「わたしの大好きな太宰こころちゃんですが——」

「おい」とこころちゃん。さりげなくツツコミが丁寧だ。

「太宰といえば、大宰府。大宰府と言えば誰が祀られているでしょう」

「菅原道真だよ。楽勝すぎるよ！」

「おお。すごい。じゃあ、菅原道真は何をした人か知ってる？」

「確かめっちゃ頭がよかったから嫉妬を買って左遷されて、歌とか詠んでしょんぼりしてたんだよね。大事にした梅の花にボクのこと忘れないでねって言うってる今でいう陰キャです。それで道真が死んだときに、流行り病とかが起こったから、道真のたたりとか言われて、大宰府に神様として祀られました。めっちゃ頭がよかったから、学問の神様とか言われてたりもしてます」

どうでしょうか。

完璧じゃないでしょうか。

正直、これ以上は知らないので勘弁してください。

目に力をいれて、ぐっと鏡子ちゃんを見るボク。

鏡子ちゃんもボクを見つめ返す。

「祀りたい」

「ほへ？」

「ヒロちゃんを祀りたい。かわいいし。天使だし」

「うえ？」

「ヒロちゃんって天使なんだよね？」

「どうなんだろう。そういう説もありますね」

「有力説だよ」

「いや、有力説とかよくわかんないけど。それよりさっきの答えはどうなの？」

「正解なんじゃないかな。こころちゃんどう？」

「知らんのかい。まあ大宰府って佐賀県民からしてみれば微妙に遠いからね。」

「まず福岡に特急でいってローカル線で行くのがいいのかな。」

「こころちゃんは少しだけ頭を傾げて、ボクの答えを吟味している様子。」

「まあ小学生としては十分正解かな」

「こころちゃんの裁定はいちおうオーケーだったみたいだ。」

「小学生としてはという留保が気にかかるが、これ以上つつこんでも泥沼だ。」

「まあ、祀るといふ行為はまちがってないと思う。わたしにとって、ヒロちゃんは——デウスエクスマキナ——ご都合主義の神様みたいなものだし、人間にはできないことをしている時点で、”神”であることは間違いない。なぜなら、”神”とは上という言葉からきていて、人間より上の存在であるのなら、神様であるといえるから」

「ついにボク、神様説まで飛び出しましたよ。」

「こころちゃんがスラスラと自説を述べると、とんでも説でもなんと

なく本当のように思えてくるから不思議だ。子どもたちからの視線が熱い。

先生の言葉をうのみにする年頃だ。否定しておかないと。

「あのね。ボクって基本は人間だと思ってるんだけど」

「評価っていうのは他人の評価だから」

「そりやそうだけど……」

「それに——」

そこで、こころちゃんは言葉を切った。

「それに？」

「あのとき、鏡子を助けてもらって、わたしには神様みたいに見えたから」

うわー。鏡子ちゃんが恥ずかしさとうれしさのあまり、顔を覆ってるんですけど。

耳まで真っ赤なんですけど。

こころちゃんの天然たらしっぷりがすごい。

そんなこんなでボクの話は曖昧なまま、ふたりとはいったんお別れしたのでした。

☆
||

「待たせちゃってごめんなさい」

ボクは、初老の男の人——ゲンさんに向かって謝った。

こころちゃんたちと話してる間、なにも言わずに待っていてくれたからね。

「いい。みんな疲れてるからな。おまえさんが声をかけるだけでもだいぶん違うさ」

「だったらいいけど」

内心では——。

やっぱりみんなちよつと疲れてるのかなって思った。

いつ終わるともしれないゾンビとの戦い。ちよつとまちがえば自分がゾンビになってしまう恐怖。

食糧の問題とか。将来の展望とか。

端的に言えば、みんなちよつと汚れてるっていうのも問題かな。

お風呂はどうしているのか、そういう問題もあるわけで。

臭覚って一番慣れやすい感覚だといわれているから、自分の臭いかあまり気づかなくなっていくものだけど、温泉入ったりして身ぎれいにしているボクからすれば、どうやらそのあたりはけっこう気づくみたい。

ぼっちさんがボクのこと、いい匂いって言ってくれたけど。

それはそういう裏事情があるって話。

役場の中を上がっていくにつれ、ホールと違って多少は生活感があつた。ちらほらと廊下のソファにねっころがったり、じつと座っている人がいる。みんなボクのことをチラつと見たり、まじまじと見つめてきたりしたけど、声をかけてくる人はいなかった。

町役場の当然の機能として、いくつかの部屋がある。おそらくはナニナニ課みたいな感じで結構広い部屋。資料室とかみたいなのわりと狭い部屋。いくつかあるみたい。

各部屋の入口は、白色をした普通のドアだ。

しかも、ちょうど頭のところあたりが透明なアクリル板みたいになつていて中がのぞけるようになってる。

ちらつと中を覗いてみたら、洪水の避難とかの時みたいなのに、ブルーシートを敷いて数人ごとにまとまっていた。ある程度時間がたっているからか、パーテーションで仕切ってるみたい。

「ついたぞ」

到着したのは、町役場の三階。その奥まったところ。

町長室だ。

他の部屋に比べて重厚そうな木の扉がドンと鎮座している感じ。二つのドアが観音開きするようになっていて、扉というよりは門というような威圧感がある。小さな町役場のちよつとした見栄という感じかな。

ゲンさんが扉を開けてくれる。

そこにいたのは大きな机に座っていた三十代くらいのまだ若い男

の人だった。

わりとびっしりと七三分けされた髪の毛に、細身の長身。そして、ボク基準だところなんというかわりとイケメンな感じ？

町長ってこんな感じの人だったっけ。

彼はにこやかな笑顔のまま立ち上がり、こちらのほうにすたすたと歩いてきた。

そして、ボクに向かって握手の体勢。

ボクも応じる。

うん、べつに小学生女兒に合法的に触りたいというような変態的感触は受けないな。

ただの挨拶みたい。

「わたしが町長です」

お。おう。

その言い方はまるで某ロマンシングなサガを思い出させるからやめろ。

|||||

ロマンシング・サガ

いまではわりと当たり前なフリーシナリオをおそらく国産では始めて採用したと思われる国民的RPG。サガは佐賀のことではないが、語感が一致していることから佐賀県とコラボしたこともある。冗談のような真の話である。

そして、ロマサガ3では、町長にモンスターの子イケニエとして閉じこめられてしまうシナリオがあるのだが、モンスターを倒したあとに町に戻ってくると、町長は何事もなかったように「わたしが町長です」とのたまうのである。お、おうとしか反応できない微妙な空気感を今に伝えたい。ちなみに、町長が変わってる説、損害賠償をされても困るので知らないふりをしている説などいろいろと解釈はある模様。このたびシナリオライターによってしらばっくれてる説が正当であるという説明がなされ、長年の疑問に終止符が打たれた形になる。

|||||

|| || || ||

それがボクとこの町役場の主——葛井明彦さんとの初めての出逢いでした。

とか言うのと、なんか恋愛モノっぽいですけど、べつにそういうふうになる予定はありません。

☆ ||

「ヒロちゃんってゲーマーだと思ってるが違うかい？」

「うん。そうです。ゲーマーですよ」

町長は気安そうな人でした。

ボクたちはソファに座っている。正確に言えば、ボク、命ちゃん、マナさんといいでに未宇ちゃんがソファに座り、対面に町長が座ってる形だ。ぼっちさんとゲンさんは立ちっぱなしです。

それにしても、ゲーマーとは……。

ふふっ。

確かにそのとおりですとも。

ボクは大学生生活のありあまる時間を、勉強にはなくゲームとかにつきこんできたからね。ゲームには造詣が深い、と自負している。

あまり褒められたものではないけど、勉強をしておかなかったわけじゃないし、なにごとにおいても、それなりに深く知るといいうことは悪いことではないと思う。

たとえば、ゲームだとしてもね。

「ゲーマーのヒロちゃんならわかるんじゃないかな」

「うん。わかるけど。ロマンシングなサガだよね」

うなづく町長。

しかし、町長つてもっとまじめな仕事だと思ってたよ。

そうでもないのかな。

それに、この人はたぶん本当の町長じゃないよね。

リーダーとも呼ばれてるみたいだし。

あらためて見てみると、やっぱり若い。町長さんっていったら少な

くとも60歳くらいは越えてるイメージあるし、どつちかというところさんのほうがそれっぽいかな。ちよつと粗野な感じだけど、見た目的にはね。

「それにしても——、やっぱりヒロちゃんはアイドルを超えたかわいさがあるね」

ボクのことを町長さんが観察しているように感じる。

かわいいと言われると、いまだに照れてしまうけど、そこには不思議とロリコンのようないやらしさは感じない。

「ありがとうございます」

「神秘的な瞳も、紅葉を思わせる手の平も、精巧な陶器のような貌つきも、桃の花を思わせる唇も、大変すばらしく思えるよ。人間離れした美しさだね」

「ふへへ……」

まあ外貌には自信ありますし？

世界一かわいいゾン美少女かもしれないし？

褒められたら人並みにはうれしいです。

「僕の次に美しいよ」

うん。僕の次に——って。うん？

どういうこと？

「うん。つまり、君は美しい。確かに美しいがそれはまだ未完成の美しさだ。対してボクは十分に成熟しているし、完成された美しさを持っている。立ってるステージが既に違うんだよ」

「ステージ……」

イケメンだとは思うけど、正直、男の人の美しさってよくわからない。い。

「ああ……いいんだ。答えは聞かなくてもいいんだよ。僕のなかでは純然たる事実としてそうなのだし、誰がなんといおうとそうなのだから。だって、僕は美しすぎる……っ！」

キャラ濃すぎませんかね。

なんとなくわかったけど、この人っていわゆるナルシストなんだね。

よく見たら部屋の隅っこ、机の隣りに大きな鏡が設置してあって、なんだろうって思ってたけど、そういうことか。実害がないなら放っておこう。

「おい明彦。嬢ちゃんが戸惑ってるだろうが」とゲンさん。

「おっと、失礼……。僕は僕の趣味として僕自身のこと大好きなだけであって、他人に評価を無理強いするつもりはないから、そこは安心してくれたまえ」

「あつ。はい」

としか答えようがない。

「僕は葛井明彦。ここの町長をやってる」

どういう経緯で町長になったんだろう。このゾンビハザードなご時世にリーダーシップを発揮したんだろうか。ある種のカリスマはあるかもしれないけど、ナルシーだしな。

ボクがジト目で見ていたら、葛井町長もフツとさわやかに笑う。

「やれやれ。僕に惚れてしまったかな」

「あ、いや、どうして町長やってるんですか？」

「僕のパパが町長だったんだよ。本当はゲンさんにやってもらいたかったんだけどね——」

「ああ、ワシはそういう柄じゃないから辞退した」

「なるほど……」

葛井町長は本当の町長の息子さんだったのか。

で、ゲンさんは町長の知り合いだったのかな？

ボクが視線を投げかける。

「ああ……。こいつの親父とは古い付き合いだな」

ゲンさんは腕を組みながら答えてくれた。

「僕のパパは残念ながらゾンビになってしまったからね。いろいろと失敗して子供部屋おじさんだった僕にお株がまわってきたというわけだよ」

「誰かはリーダーを立てないと組織が崩壊するからな。こいつでも町長の息子という肩書はつかえたってわけだ」

強いてやりたいわけじゃないけど、周りに担ぎ上げられたナルシス

トな町長。

少しだけど、共感するかもしれない。

「で、ヒロちゃん」

笑うと町長は糸目になる。

糸目って強キャラの特権だから、ちよつとだけ怖いです。

「なにかなー……」

「僕たちにお願ひがあるんだよね？」

「そ、そうですけど」

「じゃあ、取引だ」

曲りなりにも政府との交渉が始まった。

ハザードレベル76

葛井町長はボクに対して取引をもちかけてきた。

イケメン顔のナルシスト。

そして、糸目で笑ってくる強キャラ感。

一体、何をさせられるのでせうか（震え声）。

「緊張してるのかな？」

「あ、いえ……そうではないですけど」

むしろ隣りにいる命ちゃんのほうが緊張していると思う。

こういう若い男の人って苦手だからね。

手のひらをぎゅっと握りこんで全身がこわばってるみたい。

ちよつとかわいいな。

あ、微妙そうな顔でこつちを見てくる命ちゃん。

かわいいと思われたのはうれしいけど、こわがってると思われたのは不満なご様子。

他方でマナさんのほうはリラックスしっぱなしの模様。

なぜかボクの手を握ってる。

小さな声で「ご主人様のぶにぶに感がたまらんぜ」とか言ってるけど気にしない方向で。

ボクの味方はいないのか……。

「そんなに緊張することはないよ。お互いにできることをすりあわせようってだけさ。嫌なら拒否すればいいわけだし、君にはその力があるだろう？」

確かに、ボクにはチート能力がある。

ゾンビ避けできる力。ゾンビから回復できる力。

どちらも得難い能力には違いない。

つまり、交渉の余地なんてものは最初からなくて、ボクが話の主導権を握ってもいいはずだ。

なのに、なぜか町長は余裕たっぷりな模様。

もしかして、もとからそういうキャラなんだろうか？

それとも、ボクの見た目が小学生だから侮ってるのか？

ありそうだなーとは思うものの、相手はボクのチートも知ってるわけで、普通に考えたら交渉するのに慎重になるはず。

うーむ。考えてもわからん。

交渉もバトルと同じく相手との呼吸というのが重要だと思う。

ボクが口を開きかけた途端、町長が先んじて口を開いた。

「君のお願いを聞かせてもらえないかな」

切りかかろうとした瞬間に居合い抜きされたみたい。

ねっとりボイスで妙に耳に残る感じ。

ボクは思考をそちらにやって考える。

——ボクをお願い。

それは衛星インターネットを使いたいってことだ。

ネットを使って、ボクの親友である雄大に連絡をとりたい。

ネットが使えても、電話が使えるようになるわけじゃないけど、今の世の中、ビデオ通信ができるアプリがたくさんあるらしい。

ツブヤイターにはその機能はないけど、ダイレクトメッセージでやりとりすればそのあたりをしめし合わせることは可能だろうと思う。

雄大と話したいな。しばらく話してないし。

それに乙葉ちゃんやピンクさんとも連絡をとりたいし、ヒロ友のみなんなども逢いたいな。

だから、ボクは言った。いつものように直球勝負。

「衛星インターネットを使わせてください」

「ネットが使いたいのかい？」

「そうです」

「配信をしたいのかな」

「配信もしたいけど、何人か、直接連絡をとりたい人がいるんです」

「ふむん。なるほど君の願いはわかったよ。しかし——そのためにはいくつか障害がある。そして、それらの障害は、君がほんの少し力を貸してくれるだけで取り除くことが可能だと思うよ」

「障害？」

「まずは電気。いくらネットをしたくても電気がきてない状況ではネットは使えないんだ」

「うん。それはわかる、けど……。発電機とかあるんじゃないの?」
「発電機は古臭いのが一台あるだけで、安定供給にはほど遠いよ。それにこの町役場にいる人はみんなヒ口友だ。彼らにも配信を見せてやってほしい」

「うん。それはそうしたいけど……」

「それはよかった」

パンと膝を打つ葛井町長。

常からの笑顔がいつそう濃くなって、むしろボクは怖くなる。

笑顔つて、一番攻撃的な表情つていわれてるしね。

「とりあえず太陽光パネル100枚かな」

「え?」

「太陽光パネル知らない?」

「いえ、知ってますけど。100枚つて?」

「太陽光パネルにはいろいろと規格があるところだけだね。だいたいの大きさは1㎡くらいなんだよ。それを屋上いっぱい敷きつめるとだいたい100枚くらいになる」

「それ、ボクにやれつてことですか?」

「違う違うそうじゃない。もちろん、設置はこちらでやるし、君にやつてもらいたいのは太陽光パネルを取り外す時に安全確保をしてほしいつてことだね」

「安全確保つて?」

「太陽光パネルがある家とか企業とか、いくつかピックアップしてやるんだけどね——、そこまでの安全域を確保してほしいんだ」

「それつて、人間の領域を拡大したいつてことでしょ」

「そうだね」

うーん。

ちよつとだけ面倒くさいつて思つてしまった。

正直なところ、労働の喜びを知るにはまだ早いと思います。

見た目小学生ということもあるけど、そもそもモラトリアムまっただ中な大学生だったわけだし。

誰かのために何かをすることが尊いことはわかるけど、比較的ダラ

ダラしていたい系です。

ブラック企業ダメ絶対！

「あ、わかるよ。今ちよつとやりたくないなって思ったでしょ」
「うっ……」

お見通しですか。

「僕もね。基本ニートだったんでわかるんだ。そもそも誰かのために働くなんてあんまり意味がないと思ってたし、できることなら楽しく遊んで暮らして、そのままおもしろおかしく死にたいなって思ってたくらいなんだよ。町長なんてやってるけどさ、本当はやりたくもないんだ。だって僕は僕の美しさを愛でるのに忙しいからね」
「そうですか」

最後の一言がなければ、それなりに共感はできるんだけどね。

でも、この人。自称ニートなわりには、交渉慣れしているな。血筋がなせる業なのか。それともニートっていうこと自体がウソなのか、わりとわからない。ある種の完成されたポーカーフェイスって感じだし。

「楽しいことだけして生きていけばいいんだけど、そうもいかないのが人間だよな。みんなからの期待もあるし、プレッシャーもある。人が人と関係を持つ限りしがらみができる。できてしまう。否応なくね」

それはそうだと思う。

他者にこころがあると信じるなら、尊重しなければならぬわけ
で、自分勝手にやっていけないことになるから。自分勝手にやってしま
う、自分のこころを優先してしまうということは、究極的には他者
の存在を認めてないってことで、自分の信条との矛盾が生じる。

「町長の立場としてはできるだけみんなに安全と安心を提供しなければ
ならないんだ。だから——お願いするよ。僕の立場としては、君に
ウソいつわりなくお願いするしかないんだ。ひとりのヒロ友として、
ヒロちゃん頼むよ」

ウソをついているようには見えない。

でも、ボクの交渉能力つてそもそもクソ雑魚なめくじレベルだから

ね。

ウソをついていても見抜けるとは限らないんだよね

「ボクは……うん、そういうのもいいかなって思うんだけど。太陽光パネルを取り外して持つてくるだけじゃダメなの？」

「君は太陽光パネルを安全に取り外せるのかな。超能力で無理やり引き剥がしたら壊れちゃうよ」

剥がすのは任せろバリバリって？ やめてって言われるのがオチだよ。

ボクの超能力やゾンビパワーはそこまで繊細ではないし、太陽光パネルは壊れやすいイメージがある。さすがにそれぐらいわかるよ。

「じゃあ、誰か専門の人だけ連れていけばいいんじゃないかな。ボクが護衛につけばゾンビに襲われることはないよ」

「君は人間の領域が広がるのを良しとしないということかな？」

「そうじゃないけど、安全域が広がるのを待ってたら時間かかりそうだよ」

単純にボクは早く連絡をとりたいたんだよ。

それにすぐに配信して大丈夫だよって言ってあげたい。

この安全が確保されるのはいいとしても、ゾンビを押しつけていくとなると、かなりの時間がかかるんじゃないかな。

「時間が問題なのかな？」

「うん。ここだけの問題じゃないと思うし。早くみんなと連絡とりたいの」

「わかった。君の意見を尊重しよう。まずは君の言うとおり、専門のチームを組んで太陽光パネルだけを取り外していこう。それから君が配信したあとに、人間の領域を広げていくというのならどうか」

あれ？

うん？

ボクの意見って——、確かに専門のチームといっしょに行くのを提案したけど、人間の領域を広げるってことまで了承したっけ？

どうしてそんな感じに話がまとまりつつあるんだろう。

ボクの両隣りにいる命ちゃんもマナさんも何もアドバイスしてく

れない。

なんでえ。

「ご主人様はそもそも人間と交渉したいから、この場に立つことを選んでのでは？」

と、マナさん。

久しぶりの真面目な顔で言われると、確かにそうかもしれない。

人間の精神には耐久度がある。それは温泉宿にいた女子中学生ズを見ても一目瞭然だった。長い間ゾンビのうなり声を聴きながら怯えつつ暮らしていると、精神がすり減ってくるものなんだ。

かわいそうだなって思った。

ボクの友達であるヒロ友もそんな思いをしているのなら、できることなら解放したいと思った。

ボクは人間が好き。

そんな単純な理由からここに来たのは確かだ。

雄大や他の人に連絡を取りたいっていうのも本当だけどね。

だから言った。

—。なんだかクソ雑魚なめくじな自分の交渉力に、不満はあるけれども

「いいよ。どれくらい広げればいいの？」

「とりあえず、五千人は無理なく住めるようにしたいな」

「それって、この町まるごとって感じ？」

「そう考えているけど、なにか不都合があるのかい？」

「うーん。ボクが住んでるところとかぶったら……」

「ヒロちゃんも、もちろん町民だよ。君が何者であれね……。五千人が住めるくらいの解放区を作れば、君の功績は絶大だ。君を悪く言う者はいないだろう。そうじゃなくても大人気の終末配信者だからね」

危険だけど——。

いずれは接触しなければならぬのは確かだ。

このままゾンビで人間が減びるのも嫌。

ボクたちゾンビが人間に滅ぼされるのも嫌。いいようにされてしまいうのも嫌ってなると、少しずつ融和していくしかない。

あるいは、ボクが一気にゾンビを人間に戻してしまう力があればいいんだろうけど、今のところエリアヒールをしたところで、数百メートル四方ぐらいが限界かなって思う。ヒイロパワー全開でね。ゾンビ避けは結構広がっていて、数キロ四方なら可能だと思う。これもパワー全開の話。はじつこのほうになるとちよつと曖昧になるかもしれないけど。

「わかりました」

「納得してくれてうれしいよ」

納得というのとは少し違うのかもしれない。

少し思っていたのと違う感じがしたから。

でも、こうやって”少し違う”という思いを呑みこむっていうのがしがらみなのかもしれない。

ボクも少しは大人になってきた感じがします。

☆
＝

大梓が決まったところで一段落。

場の空気が弛緩しているのを感じる。

「とっころで——」

葛井町長は再びにこやかな笑顔を向けてきた。

「実をいうと、ヒロちゃんにしてもらいたいことはまだあるんだ」

「え、まだあるの?」

ボクはふと温泉施設のときのことを思い出す。

あのときは、ゾンビになってしまった令子ちゃんを人間に戻した。

そして、この町役場の中にもゾンビになってしまった人が複数いる。

「もしかして、ゾンビになった人を戻してほしいとか?」

「ああ……それは違うよ」

「え、違うの? ゾンビはいるよね?」

「ゾンビになってしまった人はいるけどね。実をいうと悪いことをした人たちなんだ。だから、申し訳ないんだけど、今しばらくはゾンビ

のままでもいいもらおうと思ってるんだよ」

悪いことをしてしまった？

故意にゾンビ化させたってことかな。

つまり、なんらかの犯罪行為をおかした人を殺してしまったか。あるいは、ゾンビ化の兆候があった人が周りを巻き込もうとしたか。

「大所帯になってくるとどうしてもね。悪いことをする人がでてくるんだよ」

「泥棒とか？」

「うん。まあそんなところかな。泥棒よりはもう少し悪いことなんだけどね」

曖昧な笑いをこぼす葛井町長。

きつと小学生女兒には言いにくい何かなんだろう。

まあそこをあえてつつくつもりはなかった。

そもそも組織化していくにつれてどうしても刑罰権というかそういうのは必要になってくるものだと思うしね。ただ、罰則としての留置とか拘束とかが難しいんだらうなどは予測できる。

「ゾンビってエコだもんね」

ボクはそう言って、町長の考えを否定しないことにした。

あいかわらずの笑顔だけど、少しほっとしているように思える。

ボクが嫌悪感を示すと思ったのかもしれない。

「そうだね。ゾンビはエコだ。食べないし汚れないし、ずっと同じままだしね」

ある意味、死刑を除いた最高刑罰なのかもしれない。

ゾンビとは、思考禁止刑なわけです。

誰だってゾンビにはなりたくないものね。

「じゃあ、それ以外のボクにしてほしいことってなあに？」

「こてんと小首を傾げてボクは聞いた。」

「物資不足なんだ」

「トラックいっぱい積載していても足りないの」

「ここの町役場には今、156人以上の人間が暮らしているわけだけど……、たとえば人間はひとりあたり一日に2リットルの水を必要と

する。156人だったら単純計算で300リットル必要なわけだ。あの大きな2リットルのペットボトルで150本毎日消費するわけだよ。全然足りないっていうのがわかるかな」

「それだと、逆に全然足りないって感じがするけど……」

「もちろん、節水したり、貯水タンクにためた水を使うことでどうにか賄ってるよ。でも、水だけじゃなくて、着の身着のままだったり、娯楽が足りなかったり、ともかく健康で文化的な最低限度の生活を割りこんでる状態なんだよ」

「それは——、いますぐ死んじやうレベル？」

「……もう少しは持つかな」

少し頭をひねるようにして、葛井町長は答えた。

生存という意味では、まだ限界ではないらしい。ゾンビエコ効果で、死んだあとも保存が利くので、仮に全滅しても実をいえばなんとかなったりするけど、事はそういう問題ではないのかもしれない。

要するに、文化——というか。

生きていて楽しいって思える生活じゃないと人間は病むって話。

「じゃあ、みんなに温泉にでも入ってもらおう？ 多々良温泉宿ってい

うのが近くにあるけど」

「ああ、それなら知ってる。ここから車で10分かそこらのところだったかな」

「うん。そこまでみんなを引率していく？ ボクから離れないなら、たぶん——、一日くらいならそこらのエリアを自由に行き来できるようにするのは可能だよ」

「君はこの場にいながら、ゾンビ避けを実行できるのかい？」

「できるといえばできるけど、距離が離れるにつれてだんだん曖昧になっていく感じ。円の周辺に行ってゾンビに襲われても責任が持てないよ」

ゾンビを移動させたりするのって、かなり無意識的におこなってる部分も多くて、自動化されてるから感覚的にここまでできるっていうのが難しいんだよね。鳥がはばたく感覚を人間に伝えるのができないのと同じで、ゾンビを操る感覚って、人間だったときにはない感覚

なんで伝えようがないと思う。あくまで、ボクの『感じ』だけど、プログラムを走らせてるような感覚なんだよね。

「どこまで襲われないって確信が持てるのかな」

「わかんない」

正直、目の前で起こってることじゃないと、なにも確信が持てません。

「そこをなんとか……」

「眠つてるときとか移動しているときとか、なにかに意識がそれるときも大丈夫な距離って本当に範囲としては狭いかな。1キロ？

くらいは大丈夫かなあつて感じ」

「意識すればコントロールできる領域が広がるのかな？」

「それはそうみたい。かなりの祈祷力が必要とされます」

祈つて念じる必要があるのです。

本当はダラダラ過ごしているだけで、勝手にゾンビ避けエリアができればそれに越したことはないんだけど、今のボクのレベルだと、この場にいながらにしてというのは相当な集中力が必要に思う。

「なるほど……ヒロちゃんに動いてもらう必要があるわけか」

「今のところはそうみたい」

仮にレベルがあがって、この場にいながら数キロ四方の大規模ゾンビ避けができるようになれば、ゾンビ荘のみんなを人間に合流させるという意味では有用かもしれない。

つまり、救出されるのを装って町役場に合流できる。ボクとの面識があることさえいわなければたぶんそのまま人間として暮らしていくことは可能だろう。

それも——ありかな。

ただ、ヒイロウイルスもゾンビウイルスと同じく感染力があるのがあるね。

気づいたら、みんな人間辞めちゃってましたとか、そういう可能性もあるわけで……。

それはそれで困りものだと思うのです。

とりあえず、今のところボクにできることは、先も言ったとおり引

率だ。

みんなとぴったりくっついてゾンビ避けをできるだけ意識的にこなうのが一番安全で確実。

これ以外に方法はない。

「物資の補給については、安全域を少しずつ広げていくしかないかも。温泉とか当座必要なものを補給するとかだったら手伝うよ」

「助かるよ。できるだけ短時間で済ませられるようにチームを組んで行こう」

人間らしい生活を求めて、差し出された手にボクも手を重ねた。しっかりと握手。

悪魔との契約にならないことを願うばかりです。

なんとなく悪い人じゃないって感覚はするけどね。

ハザードレベル77

葛井町長との話をついた。

なんだかよくわからないうちに人類生存圏の拡大を助けることになったけど、これはボクにとつてもある程度折りこみ済みのところだったからまあいいと思う。

生存圏とともに生存権を確保する——つまり、ある程度の文化を取り戻すというのもやぶさかじゃない。文化つて余裕がないと生まれないからね。

その日暮らしの生活をしながらなにかを創るのは非常に困難だ。

ましてや生きるか死ぬかの瀬戸際でマンガ描いたり、歌をうたう人はいないって話。

そんなの想像するまでもない。

でも意外だったのは、町長もボクの配信を望んでいたことかな。

町長室を出る間際に言われたのは『ぜひとも配信してほしい』という言葉だった。

「配信したいというのは君からのお願いだったわけけれども、本当のところは、僕自身もそして町みんなも君の配信を望んでいるんだよ」

そんな言葉でしめくくられた。

もちろん、リップサービスなのは疑いようもないんだけど、それでもうれしかったのは事実。ここ、町役場にいる人たちもヒロ友なんだって思うと、なんとかしなくちゃって思っちゃう。この『なんとかしなくちゃ』っていう心のなかに、みんなにほめられたいとかチャホヤされたいって気持ちがまったくないかというとなんかわけじゃないけどさ。

ボクの配信を楽しんでくれたってことには感謝の気持ちしかないよ。

だからお返ししたいって思った。それが心の九割くらいかな。

もしかすると、町長の一流の交渉術の結果なのかもしれない。

ボクはいつのまにかコントロールされているかもしれない。

けれど、ボクの気持ちまでは誰にも操れないと思いたい。

それで――。

ボクたちはまだ町役場の中を歩いている。

町役場の中にいるみんなには、ボクのこれからの行動を知らしめる必要があるから、全員集めて説明するらしい。ボクはその場にいらなくてもいいんじゃないかって思ったけど、町長曰く『ヒロちゃんから直接聞いたほうが印象がよいよ』ってことらしかった。まあ一部の人たちにはボスゾンビと思われるかもしれないし、そうじゃないって説明するためには、そのあたりはやむをえない。

ボクわるいゾンビじゃないよってやつだ。やりすぎると天使扱いされるので注意。

アイドルの距離感ってやつかな。

そんなわけで、みんなはホールに集まるように指示がだされたわけだけど、ちよつとの間、フリータイムができたのでした。

ボクはぼっちさんとゲンさんに町役場内を案内してもらってる。お目付け役ってことかもしれない。小学生らしい奔放さを発揮するとても思われたのだろうか。ちなみに未宇ちゃんはぼっちさんの服の裾を握って、完全消音モード。淡雪のような存在感。見ている分にはとてつもなく和む。

この、あんぼっちめ。

特に気を使わせるつもりもないのか、ゲンさんもぼっちさんも自然体だ。

というか、町役場は生活空間になってるわけだけど、ホームセンターみたいな工夫がみられるわけではないからね。比較的大きい部屋に何人かが分かれて住んでるって感じで、独りがいい人は小部屋とかに住んでるらしい。

電気をつかってないから妙な雰囲気だけど、窓が大きいから明るい。小学校みたいな雰囲気がある。あるいは浴室であえて窓からの光だけになっているようなそんな感じ。

静謐の空気だ。

ゲンさんもぼっちさんもゆつくりと前を歩いていて、特にボクに対して言葉を重ねるつもりもないらしい。案内らしい案内もない。生活部屋は生活部屋でしかないってことなんだろう。それ以外に説明のしようがない。真顔で『部屋だ』とか説明されても意味がないしね。どこに向かっているのかはわからないけど、単なる暇つぶしともいえるわけだし、ボクも観光気分であちらこちらをぶらぶらみてる。

「ねえ。命ちゃん」

「なんですか先輩」

「これでよかったんだよね？」

「それは先輩が決めることですから、わたしが決めることじゃありません」

予想外にツンな態度でした。

もともとボクが表にできることもあまり好きじゃないみただから、そういう態度になるのもしょうがないのかもしれない。この子、究極的にはふたりきりで脱出すればそれでいいと思ってる節があるからな。

「常々言ってますけど、先輩は人間に甘いように思います」

「そうはいつてもさ……。人間助け合いの精神が大事ともいうし」

「助け合いってというのは、ひとりでは生きていけない人間が作り出した心理的な圧のことですよ。先輩はゾンビを操れるし、ゾンビからの回復もできるわけですから、そんな圧からは自由なはずですよ」

「いやボクは自由意志で、太陽光パネルにしろ人類生存圏拡大にしろ決めたわけだし」

「そう仕向けられたんじゃないですか。あの怪しい町長に」

「怪しいのはそうかもしれないけど、最初から怪しんでたら何も始まらないじゃん」

「温泉でたまたまうまくいったからって——、自分が一方的に多大な恩恵を与えられるからといって、他人が感謝してくれるとは限りませんよ」

「わかってるよ」

命ちゃんのお小言は耳に痛いけど、確かにそのとおりではある。
ゾンビウイルスに感染している人を回復させたところで、それが感謝されるとは限らない。

それどころか、そういう異常な力をもつ人物に関わりたくないって人も出てくるかもしれない。

「こーんなにカワイイ生物を前にして糾弾する人とか、そっちのほう
が異常だと思えますよ。また命ちゃんのかわいらしい嫉妬が発動し
てますよ」

マナさんはそう言つて、ボクを真後ろから抱きすくめるのでした。
命ちゃんはマナさんの嫉妬というワードに肩をすくめるのでした。
「まあ、先輩が小学生くらいに見えるっていうのはそれだけでアドバ
ンテージですね。おそらくほとんどの場合において、かわいらしく両
方のおててをあわせてお願いすれば解決しますよ。何か訴えられた
としても、涙目になりながら謝れば、むしろ訴えたほうが悪者になり
ます」

「なにそのチート……」

ゾンビチートより美少女チートのほうが強い可能性が微レ存？

「それは正しいかもですね。どこかのエライ人も言ってますよ。わ
たしはあなたの言うことには反対である。しかしあなたが幼女なら
どんな主張も守ろう」

「どこかのエライ人もそんなことは言っていないと思う……」

マナさんの脳内倫理がわからない。

「なにしとるんだ。おまえたち」

ゲンさんの呆れた声。いつのまにか少し距離が開いていた。

案内してもらってるのにふざけた態度はよくないよね。

「ごめんなさい」

「べっにかまわん。わしらの一方的な押しつけが多くて、むしろすま
んと思っとるぐらいだ」

ゲンさんはあいかわらず渋い顔だった。

あの場ではゲンさんではなくて代表者である町長が話すべきだし、
個人的心情は抑えるべきだったのだろうと思う。

「気持ちだけで大丈夫です」

「そうか……」

ふっと笑い、少し顔を地面に傾けた。

そして、また飴玉をもらっちゃった。

「お詫びのしるしだ」

「ありがとうございます。でも、人類救済計画ってボクも望んでいたことだから、押しつけられたなんて思っただけですよ」

「人類九歳計画なら、わたしご主人様を全力で応援するのにな」

マナさんは少し黙ってて。ここシリアだから。

「そう思ってくれるのなら助かる。わしらの組織も急ごしらえなのでな……いろいろと余裕がなくてな」

「みんないつかはヒロちゃんが出てくれるって思ってたけど、少しずつ配給が減っていったりと不安だったからね」とぼっちさん。

「外に探索したりとかはしなかったの？」

「みんなで持ちまわりとかでやってたらよかったんだろうけどね。ほとんど同じグループというか、本当のところ、僕とゲンさんと、あとさつきいっしょにいた湯崎さんってひとぐらいしか行かないよ」

「じゃあ、みんなは何しているの？」

ぼっちさんは少し顔を伏せた。なんだろう。

口を割ったのはゲンさんのほうだ。

「なにもしとらん。そうするだけの気力もないってことなのかもしれないが、ゾンビに襲われる恐怖を抑えて、外に探索しにいかうとする気概をもったやつはおらんよ」

何もしてない。

つまり——150人近くの人がいながら、実働部隊はたったの3人だけってこと？

「なにそれ？ よくわかんないけど」

「つまりは、ただ救いを待ってるってことだよ。あの子の僕みたい」

ぼっちさんが辛そうに言った。

ぼっちさんは引きこもって餓死寸前までいって、最後には自殺を凶

ろうとしていた人だ。

あるとき冗談めかして言ったのは、死ぬ前に美少女が助けに来てくれることに命を賭したということだったけれど、ある意味救いを待っていただけでもいえるかもしれない。

後悔したんだろうなと思う。餓死しそうになって悔しくて、畳をひっかいたのか爪が少し割れていた。なにもしないという選択を心底恐怖したんだろうと思う。大学生ってモラトリアムの時間が長いから、なにもしない楽しさを知っているのと同じになにかしないこの先どうにかなつちやうんじゃないかっていう恐怖もあるよね。

死がひたひたと迫ってくる恐怖とか、孤独のうちに死ぬんじゃないかって恐怖とか。

幸いにして、ボクには雄大や命ちゃんがいたわけだけど、運が悪ければ本当にひとりぼっちということもありえる時代なんだと思う。

寂しかったのかも……。

「な、なんだかヒロちゃんが熱い視線で僕を見ている気がする」

で、なにもしない人が多数派なわけね。

むしろ押しつけられてるのは、ぼっちさんたちのほうじゃん。

「……それはちよつと納得がいかないかな」

「僕はあるときのようににはなりたくないってだけだからね。自分で選んでるだけだよ」

ぼっちさんも選ぶ。ボクも選ぶ。

でも、ここにいる人たちには、そんなぼっちさんの勇気とか響かないのかもしれない。

「難しい面もあるのは事実だ」

ゲンさんが完全に歩みを止め、ある部屋の前で止まった。

その部屋の前にはダンボール箱がうずたかく積まれていて、完全に閉鎖されている。

ボクにはわかるんだけど、その部屋の中にはゾンビが数人いる。

町長曰く——罪を犯した人だったかな。

「難しいって何がですか？」

「ゾンビだらけの町に探索しにくくということとは当然、ゾンビに襲わ

れる危険がある」

「それはそうですね」

あたりまえすぎる事実。

「それでおまえさんがゾンビから回復できる能力を持つということも、みんな知っている。わかるか？ ゾンビに襲われたときにゾンビを殺せば、本当の殺人になつてしまうということだ。みんなは殺人者になりたくないから、外にでたがらん」

「……ボクのせいってこと？」

「いや、そうではないだろう。少なくともわしらはそれなりの覚悟をもっておる。殺される覚悟も殺す覚悟もな。みなは覚悟が足りてないだけだろう。そんなことを言うとは老害扱いされるだろうがな……」
そう言つてゲンさんが内ポケットから取り出したのは、見慣れた質感のメタリツク。

短銃だった。どこ製なのかまではわからないけど、比較的オーソドックなオートマテイツクピストルだ。

「殺すこともあるんですか？ その……ゾンビを？」

つまり、ゾンビの頭を撃ちぬき二度と立ち上がらないようにしてしまふ。

そうすることもあるつてことを言ってるんだろう。

ボクがゾンビウイルスを消滅させてもヒイロゾンビにしても、たぶん二度と起き上がることはない本当の死が待っている。

「ある」

「それは……ボクの力を信じてないってこと？」

「例えばの話——」 ゲンさんが段ボールに背を預けながら言った。「民衆はずつと昔からその欲するところを必ず成し遂げてきたという言葉がある」

「そうなんだ？」

「中国の言葉だったかと思うがよう覚えとらん。問題なのは、時間がかかるということだ」

「時間？」

「おまえさんがその力をつかつてすべてのゾンビを人間に戻せるとし

ても、それまでにどれくらい時間がかかる？ 不意におまえさんが息絶えてしまうという心配はないのか？ そんな不確かさを抱えながら、それでもなおゾンビに襲われたときに身を守らず、その身を差し出せというのか、という問題だ」

「そうは言わないよ。ボクとしてはその人がその人の選択としてゾンビを殺すというのなら止めはしないかな」

「その態度は、それはそれで無責任とは思わないか？」

「ボクはひとに最大限信じてもらうようにふるまうだけだよ」

「というか、それ以外になにかできますか？」

でも、ボクが打倒される可能性っていうのはあまり考えていなかったな。ボクがなんらかのはずみで死んじやったら、ゾンビハザードが収束することはないだろうし、ボクを信じて噛まれるがまま噛まれてゾンビになった人は、噛まれ損だ。

未来がどう転ぶかもわからないのに、みんなに対してボクを信じて噛まれっぱなしでおなシヤス！ とか言うほうが無責任だと思っし、その選択は人類側に委ねたい。

責任を放棄しちやってるのかな……ボク。

突き詰めるとコラテラルダメージとかそういうのにつながる言葉なんで、本当のところよくわからないよ。おめめぐるぐるしちゃう。「そうか」と小さくつぶやいて、ゲンさんはしばらく黙ってしまった。「あの、ここに連れてきたのはなんでですか？」とボクは聞いた。

「社会科見学」

「ああ、小学生のときとかによくあるよね。みかん工場とか……」

「そんなもんだ。おまえさんは利発な子だからわかかってると思うが、これから先、おまえさんを中心に政治というものがつくりだされる可能性もあるからな。今のうちにそこに触れておくのも悪くはないと思っただ」

「政治ってそんなにおおげさなものなの？」

「たった150人足らずしかないのに。」

「たった150人って顔をしてるな。しかし実際は、ここでゾンビになっっているやつらも政治の結果だとみることまでできるわけだ。この

部屋にぶちこまれているやつらはみんなそれなりの悪いことをやってきた。詳細は省くが、まあ普通なら十年とか二十年とか刑務所にぶちこまれるような罪を犯したと思ってくれればいい。で、ここで問題だ。いま、刑務所はどこにも存在しない。どうすればいい？」

「この部屋みたいにするってこと？」

ゾンビルーム完備。素敵な隣人があなたを歓迎いたします。

ちなみにゾンビルームの隣の部屋は空き室みたいでした。やっぱりみんな怖いんだろう。うなり声も聞こえるから騒音著しいしね。今はボクがいるから静かです。

「それもあるがな。量刑という問題もある。量刑とは――、罪に対する罰の妥当性のことだ。わしらは即席でもなんでもかまわんから、罪に対する妥当と思われる罰を制定しなければならんかった。それが――」

政治というわけか。

うーん。なろう系主人公がよく政治とかには関わりたくない面倒くさいっていうけど、ボクもその気持ちがあわかつちやったよ。

こんなの聞かされても、よし選挙にいこうって気分にならないもん。

で、下手したらボクを中心に据えた立憲君主制とかになりかねない。

天使、神様、アイドルときて、王様とか、役満すぎるでしょ。やだよ。

「ヤダ面倒くさいって顔してるな……」

ボクってもしかして顔にでるタイプなのかな。マナさんや命ちやんに引き続き、今日会ったばかりのゲンさんにまで見透かされちゃってるよ。そういうえば町長にも読まれてたな。

ボクのメンタルってそんなに読まれやすいのか……。

「面倒くさいと思っておっても、そういう立ち位置にいるのは理解しているな？」

「うん。まあそれなりに……」

「おまえさんがもしも人と仲良くしたいと思うなら、そういう側面で

の要請もあるってことだ。最大限におまえさんの責任を軽くするやり方で、お飾り的な立ち位置というのもありうるだろうが……、ここまで組織が弱っている状況だと、いろいろと駆り出されることは覚悟しておいたほうがいい。わかるな？」

「うん」

ゲンさんの厳しい優しさだ。

ボクは素直にうなずいておく。

「ちなみにはどうやってゾンビ入れてるの？ 何人が既にいるみたいだけど」

「ああ、それは簡単だ」

ゲンさんの説明だと、このゾンビ部屋と上の階を無理やり繋げたらしい。

罪を犯した人は上の階に運ばれる。

そして——、ついに出ましたよ。ゾンビウエポン！

|||||

ゾンビウエポン。

ゾンビの血肉に突き刺したゾンビウイルスまみれの武器を人間相手に刺突したりして感染させるといふ武器のこと。実をいうと映画においてはあまり使われたことはないが、ウエブのゾンビ小説を散見する限りは、結構定番のようである。感染＝マストダイな世界であれば、必殺の武器になるといえるだろう。ただし、自分が感染する恐れもある両刃のやいばであることは言うまでもない。

|||||

最終的には刺突され、傷をつけられた犯罪者はその穴のあいた部屋の中に放置される。当然、入口は封鎖されている。それでいずれ時間切れでゾンビになったその人は、うろろうろしているうちに下の階に落下してしまうという寸法だ。

残虐刑じゃないかって議論にはなりそうだけど、これもまた人類の選択だと考えれば、ボクとしては口出ししようがないかな。

町長にもいったとおり、ゾンビってエコだし。食い扶持が減るのはものすごい利点だ。それにいずれは復帰させることができたりもする。

ボクという存在が前提にはなってくるわけだけど――。

あ！

ということは、ボクって既に政治利用されちゃってるってことなのでは。

ね、そういうことでしょ。マナさん。

「お。ご主人様がわたしの知見に頼ってらっしゃる予感」

「マナさん……っ！」

「そういうことです。ご主人様が推察されたとおり、ゾンビルームはご主人様の存在が前提なわけです。そうじゃなければただの死刑です。いいじゃないですか。配信のときに死を司る天使とか呼ばれちゃってたわけですし♪」

「み、命ちゃん！」

「自業自得かと」

「うう……そうか。このゾンビルームもボクの選択の結果か」

「いや、おまえさんだけのものじゃない。みんながそれなりに考えを集合させた結果だ。いまの状況で最善だと思われる刑法。秩序の維持。それがこのようなかたちになったわけだ。誰のせいでもない」
うう、社会って複雑です。

☆
☆

次に案内されたのは屋上でした。

町役場の屋上なんて行ったことないから、なんだか新鮮です。

ちょうど前行った病院とかの屋上に近い。小学校や中学校とかの屋上にも近くて灰色のコンクリートで直射日光の照り返しがきつい。今の時期でも結構暑いよ。

そして思っている以上に広い。小学生が五十メートル走をできるぐらいには広い。

ここに太陽光パネルを設置する予定なんだね。

でも、いまは太陽光パネルを置けるような状況でもなかった。所せましと並ぶプランター。プランター。プランター。そのまたプランターって感じで、夏の朝顔みたいな感じで補助的な棒があったりと、結構いろんなバージョンのが置かれてる。

「社会科見学はまだ続いているんですか？」

「そうだ。ここでは成長の速い野菜を育てている」

「太陽光パネルを置いたら、ここのプランターはどうするんですか」

「外の畑ぐらいは解放してやってくれ」

「町役場の横の畑スペースですか。確かにそこぐらいなら……いいですよ」

あんなのボクの視認だけですぐにゾンビは追いやれるからね。それぐらい接着しているとところに畑があるってどんな田舎だよって感じだけ。

そうなのです。この町、田舎なのん。

「さつきゲンさんは誰も何もしてないって言ったけど、厳密にはちよつとはしてる人はしているんだよ。外に行くのはできないけど、洗濯とか野菜育てたりとか……、あと子供たちの世話をしたりもしてたでしょ」

ぼっちさんの言葉にボクは勇気づけられる。

そうだよな。誰もかれもが完全に何もしてないってわけじゃないよね。

少しずつでも何かをしようって思ってると思う。

ただ、ゾンビになるのは怖いんだ。

「それで、あのでかいのが貯水タンクだ」

ゲンさんの指差した先にはクリーム色をした巨大な貯水タンクがついている。こういう非常事態を見越してなのか。かなりの大きさで、仮に300リットル毎日消費しても、かなりの期間もちそうな感じ。

側面にははしごがついていて、登れるようになってる。ゾンビ映画とかでよく籠城シーンとかに使われるタイプのつくりだ。

「これは雨水貯水タンクになっていてな。ある程度の浄水機能もついとる」

「電気こなくても大丈夫なの？」

「濾過の仕組みだからな。特に電気を使うようなものでもない」

「へえ」

「中、覗いてみるか？」

「え、いいの？」

「社会科見学だからな。もちろん。かまわんよ」

ゲンさんが前期高齢者らしからぬ軽快な足取りではしごを登り始めた。

ボクもふわっと浮き上がって追従する。

温泉施設では使う機会がなかったけれど、ボクって普通に空に浮かますからね。

「うわ。ヒロちゃんが天使すぎる件……っ」

ぼっちさんが少女みたいに口元に手をあてて感動している様子だった。

まあ確かに配信で見ると生で見るとは違うだろうな。

ちらつと、ぼっちさんのほうに振りかえると、ぼっちさんの裾を握っている未宇ちゃんも興奮しているみたい。

なんだか高速で手話をしている。

「なんて言ってるの？」

「えっと、ヒロちゃんが天使すぎる件……っ」

いっしょかよ。

仲良しさんかよ。

ぼっちさんの意識も入っているんだろうけど。

「天使じゃないよ。えーっと、もどかしいな。こんな感じでどうかかな」
すたつと未宇ちゃんの隣に降り立って、ボクは空中に緋色の線を引いていく。文字どおりの意味で空中に緋色の線を書いているんだ。

——ボクは超能力少女です。天使じゃないのでご注意ください。

未宇ちゃんは目を見開き、ヒイログリフ緋色文字を凝視して——それに手を伸ばした。

残念ながら、それは光の屈折率を変えただけにすぎない幻です。触れません。

ぷくつとほっぺたを膨らまして不満顔の未宇ちゃん。

また、高速でなにかを伝えている。

ぼっちさんが翻訳してくれる。

「えっと、天使っていうのはみんなそうなんだってさ」

「うん？ どういうことかな」

ぼっちさんが再び未宇ちゃんとやりとりする。

ふむふむ。ぜんぜんわからん。

ぼっちさんボクのほうに顔を上げる。

「よくわからないんだけど、未宇ちゃんにとっては誰もかれも天使なんだってさ。ヒロちゃんだけが特別なわけじゃないから安心してほしいって」

「どういうこと？」

「たぶんだけど——、耳が聞こえない子っていうのは、周りから遮断されているんだ。だから——、例えば僕とヒロちゃんが話していても、いっしょのタイミングで笑ったりしても、どうしてそうなるのかわからない。疎外感とも違うんだろうけれども、自分とは違う世界に住んでるような感覚がするんだと思うよ」

だから——、みんな天使というわけか。

少しさみしい世界観のような気がするけれど、未宇ちゃんの世界は透明でこれ以上なく透き通ってる気がする。それをまちがっているとどうふうに言い切るのもおかしいかな。

「なるほど、わかったよ。ぼっちさんありがとう」

「どういたしまして」

「でも、みんな天使ならどうしてボクが浮いたのに興味を抱いたんだろうね？」

「ああ、それならカワイイ天使のほうがいいってことなんじゃないかな」

むう。照れるぜ。

「おい。わし、ここですつと待ってるんだが」

ああ、ゲンさんを貯水槽の上のところで待たせっぱなしでした。

「ごめんなさい」

ふよふよと浮かびながら謝ると、ゲンさんはようやく貯水槽のマンホールみたいになっている上部機構をとりはずしてくれた。

結構な重さで、ギコギコ鳴ってる。バイオなゲームのクランク音に近い音だ。

重々しいマンホール上のそれを開けると、いよいよ中が見えました。

タンクの中は人工的な井戸みたいなものだから薄暗い。でも夜目が利くボクなら見えます。

うん。半分くらいは入ってるかな。

「節水すれば一ヶ月くらいは持つ」

いまのところはまだ余裕があるみたいだね。

ハザードレベル78

一階のホールに降りると結構な人数が待っていた。疲れ切った様子の方は、順番待ちのための椅子に座ってぐったりしている。

比較的元気な人は立ちっぱなしで、遠巻きにボクを見ている。なんかこう終末感といいますかなんといいますか。

「う。この人数。視線。ヤバすぎる」

引きこもり特有の他人の視線が気になる性質。

あると思います。それにみんなヒロ友という町長の弁だったけど、この視線の性質はそんな単純な切り分けができるものでもないかもしれない。

ボクという存在を見極めようとしている。

そんな視線だ。信じるとか信じないとか以前に、得体の知れないストレンジジャーなのかな。子どもたちとか知っている人はそれなりなんだけど、知らない大人から見ればそうだよねって思っちゃう。

ボクは怪物なのかもしれないのだから。

「大丈夫ですよ。ご主人様」

「マナさん……」

「ご主人様はビツクリするくらいカワイイですからね。とりあえず、視線に入れておくだけで幸せになるタイプです」

「とはいえ、ゾンビ案件だし」

ボクってゾンビだしな。

みんなの気持ちとしては、ボクが何をしたいのかもよくわかっていないのが実情なのかもしれない。あるいはボクが何者なのかもわかってないのかも。

ひとまずのところ、配信動画をみんなで見たいというのは本当だろうけれども、それにしあって、なにかこの事態を収束させるヒントはないかとか、ゾンビ避けのよりよい方策はないかとか、生存のために必要な行為だったのだと思うし。

ボクみたく純粹に楽しみたいとか。

みんなと出会いたいとか。

そういうお花畑思考ではなかった。

もっと切実なものだった。

そう考えると、ぼっちさんのような純粋なボクのファンっていうのは逆に珍しいのかもしれない。

「うお。ヒロちゃんが僕のことを熱い視線で見ている」

「うん。ぼっちさんって変だなって思ってた」

「さりげにひどい」

「いい意味での変だからいいの！」

「いい意味っていう言葉をつけると、どんな言葉でも悪口じゃなくなる魔法！」

「ぼっちさんってボクのこと好きなんだよね」

あかべこみみたいに首を高速で縦に振るぼっちさん。マナさんから「小悪魔ムーブ」って言われちゃった。男の人の『好き』を確認するのは確かに小悪魔ムーブかもしれない。やべえ。

でも気持ちとしては、みんながどう思ってるか知りたい。

「ボクとしてはぼっちさんのような人のほうが珍しくて、ヒロ友っていつてもいろいろレベルがあるんだろうなって思うんだよね。本当のユーチューバーみたいにボクのが好きって人はあんまりいないんじゃないかなって……」

「うーん。困惑に近いのかもしれないね。だって、超能力が使えるまですって言ってもみんな信じられない気分なのかも。それに、ゾンビという異常事態について信じたくないって気持ちがあるから、同じようにヒロちゃんのこと信じたくないとか？」

それはあるかもしれない。

みんなゾンビが怖い。だから、ゾンビを操れるボクのことも怖い。

ゾンビが得体のしれない怪物であるのと同様に、ボクも外貌がカワイイだけの怪物なのかもしれない。

「僕はヒロちゃんを信じてるけどね」

かあああああああああ。

ぼっちさんって、なんだかこういうとき恥ずかしげもなく言うよ

ね。

惚れてまうやろ。

「ご主人様ってわりと全方向にチヨロインですよね」
マナさんが楽しげに言った。

「チヨロくねーし！」

☆
＝

しばらく待っていると。

「やあ。ヒロちゃん。町役場のなかはどうだったかな」

通路の向こう側から悠然と歩いてきたのは、葛井町長だった。

こうして歩いていると普通の人というか、それどころかある種の力
リスマがあるように思える。

甘いマスクと余裕の表情は、危機的な状況ではより輝いて見えるか
もしれない。

なんというかサマになっているっていうのかな。

エライ人って感じがして、まだ若いし。

リーダーって言われても信じられる感じ。もちろん、ナルシストな
言動がなければだけど。

ボクはペこりと軽くお辞儀する。

「いろんなところ見せてもらいました。ゾンビさんとか、雨水貯める
タンクとか」

「そうかい。それなりに生存状況は整っているけど、余裕があるとま
では言い難い状況なのはわかってもらえたかな」

「はい。わかりました」

わりと、素直なボクです。

雨水タンクについては、雨が降ればそれなりに貯まっつてはいくんだ
ろうけど、あれだけじゃ足りないだろうなとも思う。みんながみんな
それこそ湯水のように使えばすぐになくなっちゃう程度。要するに、
お風呂には入れない。生活用水としては最低限度に抑えなければな
らないと思う。

「二級河川が近くにもあればだいぶん違ったんだろうけどね。筑後川も遠いしゾンビハザードが始まったのがそもそも夏だったし、なかなか困った状況だよ」

「そうなの？」

筑後川ってどつちかというと福岡の川だと思ってた。

「先輩。筑後川って佐賀と福岡にまたがって流れてるんですよ」

命ちゃんが補足してくれる。

なるほど、そうなのか。

「ちなみに、筑後川は佐賀の南のほうに流れていますから、ちよつとここからじゃ遠いです。治水してみますか。先輩」

「治水って……」

なにその王者の仕事。

ヒイロパワー全力全開でもさすがに川の流れまでは変えられないよ。

「水もだけでも、食糧的にもわりとギリギリなんだ。最低カロリーは維持できていると思うけどね。だいたいがレーションみたいなものばかりになってるから、みんなおいしい食事を求めていると思うよ」

ボクに窮状を伝えてくる町長。

ちくちくってボクの良心を刺激しているのかな。

単に事実報告をしているだけにも思えるけど。

「まあ——、そんなわけでみんなツライ状況にあるんだ。おおまかなところは僕が説明するから、君はそのあとになにか付け足すことがあればいつてほしい」

「わかりました」

町長が壇上上がる。

小さな手で持てるタイプの檀上だ。脚立の小さいバージョンといえはいいのかな。子どもでも持てるような小さなサイズで、ちっちゃなボクがみんなに見えるようにという配慮なのかもしれない。

手にはマイク。そして、コードはこれまたコンパクトなタイプのスピーカー。これまた人が手に持って移動できる程度の大きさだ。珍

しい電池式のやつだ。メガホンでもよかつたんだろうけど、なんとなくかつこいいのはやつぱりマイクなのかな。

「えー。みなさん、お集まりいただきましてありがとうございます」
町長の挨拶が始まる。

☆Ⅱ

「——そんなわけで、ヒロちゃんには太陽光パネルをしきつめてもらうことになりました。その後は、みなさんの生活水準をひきあげるために、ゾンビがないエリアを拡大してもらう予定です」

おおーっという声があがる。

狭い町役場に閉じこめられて、強制的に引き籠りになっていた状況からすれば、希望の光が見えたってことなのかもしれない。

「では、ヒロちゃんにご挨拶をしていただきます。お願いします」

町長からマイクを渡され、壇上にかかるように促される。

うゝゝゝつ。緊張してきた。

視線にパワーを感じる。今のボクには、その視線はファンの視線ではなくて、さりとして悪意の視線でもなく、なんというかフラットなものに感じられた。

選挙とかのときに政治家の人たちが、持論をつらつらと述べているのを見て、不思議に思っていたボクだ。人前でしゃべるのはやつぱり緊張する。

「み、命ちゃん。いますぐボクをバーチャルユーザーにして」

「先輩がなに言ってるのかわかりませんが……」

命ちゃんが冷たい……。

こくなつたら！

「マナさんが代わりにいろいろと説明するのはどうでしょうか？」

「すぐにヘタれちゃうご主人様もカワイイです」

うぐ。マナさんもあてにならねえ。

そ、そうだ。

こんなときはさつき教えてもらったとおりにすれば——。

ボクは左手と右手をそつと重ねて、上目づかいでマナさんを見つめる。

これ以上なく優しげな表情になるマナさん。

そしてボクは最強の魔法を使う。

「おねがい。お姉ちゃん」

「ずつきゅーん！ これはすさまじい威力です。ああ、ああああああ。脳が震える！」

いや……それはあかんでしょ。

いきなりその場でブリッジしそうなくらいのけぞつてしまうマナさんに、ボクどんびき。そして周りに興奮している人がいると、自分が相対的に冷静になるって本当なんだね。

少し落ち着いた。小さな胸に手を当てて深呼吸すると、なんとか檀上に上がることができた。

配信のようにネットというフィルタに覆われていない生の現実は、なにが違うかっていうと、見られているという感覚だ。

みんなのぶしつけな視線。

ボクという存在を見極めようとしてくる。

喉がねばつくようにカラカラだ。

意味もなくマイクをポンポンしてみたり。マイクテストマイクテスト。

「えつと……こんにちわ」

ざわっ。ざわっ。

特に意味のない喧噪がまわりに広がった。

「葛井町長さんのお話にあつたかと思えますが、ボクが終末配信者のヒロちゃん——いや、夜月緋色といいます。ゾンビを操れたり、超能力が使えたりします」

「超能力使ってー」

わずかな喧噪の中に広がるひとつの声。

ボクがさつき遊んだ子どものうちのひとりだ。

ボクはうなづき、マイクをふわっと浮かせる。

ざわつきが少し大きくなる。

「太陽光パネルは……その、ボクのがままで、衛星インターネットを
使いたいからで、優先させてもらいたいんだけど。生活圈を広げるの
はその後になってからでもいいかな?」

なんかボクって説明ベタかもしれない。

それでも大意は伝わったらしく、さらにざわめきは大きくなる。

特に異論はないかな?

「ヒロちゃん。生存圏っていつ広げてくれるの?」

ざわめきのなかから澄んだ声が響く。

確か、ボクと恵美ちゃんの家で会った五十嵐新太くん。男の子だけ
ど女の子の格好がよく似合ういわゆる男の娘だ。

そしてヒロ友でもある。

ボクは少しほっとする。見知らぬ人ってわけじゃないからね。

「うーんと、太陽光パネルを集め次第だよ。きっとそんなに時間はか
からないと思う。それと、みんながどうしても困ってるってことがあ
れば優先するよ」

ざわつきが大きくなる。

あれ……?

命ちゃんのほうを振り向くと顔に手を当てて、あちゃーって感じ。

ボクなにかやつちやいました? (わりとマジで)

「洋服が足りないの」「お風呂入りたい」「もっとうまいもんくいてえ
よ」「電気がやっぱり一番ほしいな」「クスリとか抗生剤とか」「ゾンビ
を全滅させることはできないのか?」

津波のように意見が押し寄せてくる。

ボクは気おされてしまって、壇上から降りたい気持ちでいっぱい
です。

「その……ボクにできることは限られてるけど、みんなの希望はでき
るだけ聞くから、待ってください」

「また待たないといけないの?」「こんな状況でいつまでも待てねえ
よ」「人間らしい暮らしがしたい」「おれたちがなにしたらって言うんだ
よ」「一階のトイレしか使えないから死ぬほど臭いのなんとかしてく
れ」「ヒロちゃん。助けてよ!」「自衛隊はなにやってんだ」

ざわめきは大きくなるばかり。

これはパンドラの箱を開けちゃった的な？

いままでこの町役場でずっと同じところにいたから、みんなの不満やストレスがここにきて一気に爆発しちやっただのかもしれない。

ざわつきのなかに剣呑な空気が混ざり始める。

ど、ど、どどどうしよう。配信みたいにスイッチを切れば終わりにってわけじゃない。リアルの人間関係はこのへんが厄介だ。

ボクは無意味にまごついてしまって、何もいえなくなる。

そしたら、さらにざわめきは大きくなって――。

「美しくないなあ」

背後から声があがる。葛井町長だった。ボクが小さな壇上にあがっても町長のほうが身長が高い。町長はボクの背後から肩にそつと手をやって、ボクのマイクをさりげない動作で受け取った。

「まだヒロちゃんは小学生だよ。そんな子に一気にみんなが言いたい放題いっても全部の希望を叶えられるとは思えないな。なにより――美しくない。君たちがいろいろと無茶な要求を通そうとしても、ヒロちゃんに叶える気がないなら全部ご破算になるんだよ？ そのへんのことわかって発言してください」

ぴしやりとはねつけるような言い方だった。

町長はナルシストだけあって美的感覚で物事を捉えているらしい。

しかし本当に――、ボクって小学生設定で本当によかったあ。

みんなが切実で余裕がないのは本当だけどギリギリのところでも秩序を保っていた。

だから、小学生に無理強いするというのは、彼らの中でもまだ恥ずべきことだった。

ざわつきが収まり、ひそひそレベルに落ち着いた。

そこで、もう一度町長からマイクを返された。

「大丈夫……みんなゾンビからはいつか解放されると思います」

ゾンビとは顔も知らない隣人みたいなものなんだと思う。

ボクは本当に引きこもりがひどい時期は、電車に乗るのが怖かった。

だって、隣の人がいきなりナイフを持って襲い掛かってどうしようかと、わりと本気で考えていたから。

ボクは誰かと友達になる機会を数え切れないほど逸失しているのだろう。

でも、隣人がゾンビのように襲ってくるかもしれないという恐怖は簡単にぬぐいきれるものじゃないということもわかってる。

だって、他人のことをどうとも思っていないモンスターは——。確率的にどうしようもなく存在するのだから。

「なあ。ヒロちゃん様よお」

ざわめきが収まり、静かになったホールに、男の声が響いた。

その人は中肉中背。二十代半ばから三十代くらいで、無地のTシャツにジーパンを履いている。

目つきは正直なところ悪い。

人は第一印象が九割っていう本があったかと思うけど、その人はたぶん容貌で損するタイプかもしれない。そういうつもりはないかもしれないけれど、なんか見下されているような感覚がする。

「はい。どうしました?」

と、ボクは冷静を装って答えた。

「ちよつくら、ヒロちゃん様に頼みたいことがあるんだけどよ。いや、なにたいしたことじゃないんだ」

たいしたことじゃないって言葉、たいしたことある説。

あるよねえ?

「なんででしょうか?」

「隣に住んでる婆さんが飼ってる犬がクソうるさいんだよ。なんとかしてくれ」

「犬?」

ボクは首を傾げる。

男は大仰にうなずいた。

「ポメだよ。ポメ。小さい犬だけにキャンキャンわめくのなんのつて、マジうるさくて夜も寝れねえの!」

「ポメってポメラニアンのこと?」

「それ以外になにがあるんだよ！」

男は怒りに任せて声を荒げた。正直なところ意味がわからない。困惑半分。そして若干はムっとしたのも事実だ。ボクも引きこもりだけでも、人並みの感情は持ち合わせてるから。

「よくわからないんですけど……どういうこと？」

「だからさあ！ 婆さんがポメ飼ってんの！ こんなゾンビだらけの余裕のない時に迷惑なんだよ。わかるだろ？」

「よくわかりませんが……それで何をどうしてほしいの？」

「捨てろって言うてくれよ」

「えっと、犬をだよね？」

「そんなの当たり前だろ。オレだって婆さんにゾンビになれとか言うてるわけじゃねえし！ ただ、婆さんぜってえ認知症入ってるってあれ。世話もできてねーし。さつさと処分しまえばいいのに、80のババアにご配慮しまくって誰もいわねえ。そのくせ犬の世話をしようってやつは誰もいない。だからオレが代表して言うてやってんのよ」

男は真剣な様子だった。

少なくとも自分の環境を改善しようという気持ちは本気だろう。

しかし——、でも。

「なんでボクが言う必要があるの？」

それこそ、町役場のみんなで決めればいいじゃん。

ボクが口を出す必要はない。

「ヒロちゃんがいろいろやってくれるってんだろ？ だったらみんなヒロちゃんの言うことならほとんど聞く。本当にたいしたことじゃないんだ。ヒロちゃんが犬を捨てろって、それが正しいことなんだって言うてくれたら、みんな納得するにきまつてる」

「なにそれ……」

確かにボクはゾンビ避けできるし、みんなの生存圏や生活水準を押し上げるつもりだ。

でも、それを引き当てにして権力とか発言権を持つとは思ってない。

第一、ボクはそのおばあさんにも会ったことないんだし。

「辺田！ そのへんにしておけ！」

一際おおきな、渋い声。

ゲンさんが辺田と呼ばれた男の人を叱責するように声を上げた。

「ゲンさん。そりゃないぜ……。オレ、おかしなこと言ってるつもりないよ。だって、あの婆さんひとりで一部屋使ってるだろ。みんな、大部屋で共同生活なのに、婆さんだけ一人暮らしだぜ。おかしくないか？ それに犬を見る余裕がないのも本当だろ」

「そのことは後で協議しようってことになっただろ。つべこべぬかすな！」

「話をするっていったって、結局、一ヶ月もそのままだったじゃないか」

「今の状況では何かを決めるのにも時間がかかる。おまえさんもわかってるだろう。国はどうなったかもわからん。いまここには150人足らずの人間しかおらん。家族とも離れ離れになっている者がほとんどだ。みんな我慢している」

「だったら、オレだって、オレたちだって我慢してるだろ。どうして、婆さんだけ優先しなくちゃなんねーんだよ。あんなの彼岸に片足つつこんでるだけだろう！」

辺田^{へた}さんの言葉に、みんなは――

冷たい視線を返していた。じろじろと見るぶしつけな視線に、辺田さんは冷や汗を流している。

無言のほうがプレッシャーがある。

それで――。

今度は静かに。

静かすぎるほど厳かに。

葛井町長がいつものアルカイツクスマイルで述べた。

「辺田くんの言い分もよくわかるんですけどねえ。いまはそれだけの余裕がないんですよ。何度も言いますが、ヒロちゃんはまだまこちらにきてくれたんです。偶然ですよ。たまたまですよ。この奇跡を前にして、あなたにはどんな価値があるんですかねえ」

辺田さんは無言のままだった。

「おまえいい加減にしろよ」「ヒロちゃんは何も悪くないだろ」「犬は確かにうるさかったけど、それをヒロちゃんになんとかしてくれっていうのもどうかと思う」「辺田さんの言うこともわかるんだけど……」「これでヒロちゃんに見捨てられたらどう責任とるんだよ。辺田!」「あ……う」

総体として、辺田さんの意見は通らなかった。

でも集団生活を営んでいる以上——そういうのはいくらでもあるんだろな。

ハザードレベル79

なんといえればいいか。

微妙な終わり方になってしまったけれど、辺田さんの言い分もわかる気がする。

「ヒロちゃん。ワンちゃんに会いに行くかい？」

葛井町長の言葉に、ボクは少しだけ躊躇したけれどどうなづいた。きっと、辺田さんの言葉も一面の真理は表しているのだろうし。

辺田さんの言葉の中で気になったのは、『ボク of 言葉』の重み。

ボクが何かを人類側にお願いとすると、みんなはそれを聞いてしまう。

生きるために――。

つまり、ボクの意見はとても重みがある。

一票の格差なんてレベルじゃない。

例えばの話。あのときあの場所でボクが泣いて、辺田さん嫌いとか言ったらどうだろうか。

みんなして、辺田さんをつるしあげるってことも考えられるかもしれない。さつきだって、『ヒロちゃんに嫌われるかもしれないから』というただそれだけ理由で、辺田さんは冷たい視線を投げかけられていたわけだし。

ボクは人に優しくあろうと思ってるし、優しくない人は嫌いだけど、嫌いって理由だけで、人生という名のアカウントをBANしちゃってもいいものなのかは非常に疑問なんです。

それって、全然優しくないし。

そんなの関係ねえって全部ぶちぎってしまっただけ、楽しいゾンビライフを満喫すればいいとも思うんだけど、配信という縁ができてしまっている以上、いままでの関係を無為にするのも嫌だった。

これがしがらみ、というやつ。

お犬様に会いに行こうというのも、そういうしがらみの結果だ。

「面倒くさいなら会わなくてもいいんだよ」

町長がドキッとすることを言った。

ボクは軽く首を振って否定する。

「会わないと始まらないし」

「うん。いい子だね。僕とはまるで大違いだ」

「でも、ボクにだけ決断させるのはやめてほしいです」

「もちろんそのつもりだよ。パーフェクトな僕がそんなことをするはずないじゃないか」

ニヤリと笑う謎の自信。

でも、言葉で言ってくれるのは正直助かる。

だって、ボクひとりで150人以上の人間の行く末を決めるなんて重すぎるよ。

町長たちとはその場で別れ、ぼっちさんが案内してくれることになった。自動的に未宇ちゃんがついてくることになる。ゲンさんもいっしょだ。

他のみんなは散らばって部屋の中に帰っていく。

どうやら転校初日の転校生みたいに、みんながわつと寄ってくるという事態にはならないみたい。まだ、謎のゾンビ少女が自分のテリトリーに入ってきた段階だし、みんながボクに慣れるのには時間がかかる模様。

「ご主人様が尊すぎてみんな声をかけるのはばかられるのかも？」

「ボクわりとフレンドリイなのに」

「かわいすぎるとアレですよ。自分が邪魔って心理が働きますよね。小学生の女の子どうしがキャツキャウふふしていると、物陰からこっそり覗きたくなる心理というか」

「Manaさんが逮捕されなかったのは奇跡だよね」

「ご主人様の眷属になれたのが一番の奇跡です！」

眷属ね。

ボクが人間と接触するときには、周りの人間をヒイロゾンビ化させないように気をつけなければならない。そりや普通のゾンビのようには意思がない存在ではないと思うけれども、ボクがコントロールできちゃう可能性もあるわけだし、なによりゾンビの時間は停止している——かもしれないってことだ。端的にいうと、子どもができない可能

性がある。

「ボクとしては——あまり眷属を増やすのは……」

「なりたくてなったんですからね。いいんですよ。そもそもゾンビよりもご主人様の眷属のほうが百億倍いいです。ご主人様といっしょにお風呂はいったり、いっしょにねんねしたりできるのは、眷属特権！」

「お風呂……スヤスヤ動画……ヒロちゃんと」

ぐくくりと喉を鳴らすぼっちさん。

「想像しちゃだめ！」

「先輩、なりふりかまわず誘惑しまくるのをやめてください」

「ボクのせいじゃないよね?！」

そう、ボクのせいじゃないはずだ。

そもそも隣の変態さんが悪い。

☆
☆

そんなわけでワンちゃんがいる部屋まで来た。

閉め切られた部屋には、やっぱりガラス戸がついていて中が覗き込めるようになってる。カーテンも何もしていない。

そして、部屋の外に漂ってくるのは、あきらかな異臭だ。

据えた臭いというか、これはゾンビ避けスプレー（仮）を吹きかけないといけないレベル。

ゾンビ避けスプレーの真実の姿は単なる消臭スプレーだから、今こそ使う時なのに——。

残念ながら今のボクは装備していないのでした。

もうお役目終わっちゃったからねゾンビ避けスプレー。

あのときはお世話になりました。

「……わりと臭うね」

「猫と違って犬は自分を身奇麗にしないからね」

ぼっちさんが優しくボクに微笑みかける。

「へえ。ぼっちさんってそのへん詳しいの?！」

「いや人並かな。でも、猫みたいに孤高を生きるのは憧れたりするな。だからどつちかというと犬より猫派なんだ。ヒロちゃんのネコミミパーカー姿、すごくかわいかったよ」

「ありがとにゃん」

ボクはくるりと振りむき、握った拳を軽く挙げてファンサービスをしました。

けっしてネコミミパーカーをほめられてうれしかったからではない。

純然たるファンサービスだ。

「勝った……」

「ん？」

「人生に勝利した！ 僕は勝ったんだ。今この瞬間に！」

拳を硬く握り、わなわなと震わせるぼっちさん。

そして、そんなぼっちさんに対してうんうんと深くうなづくマナさん。

なに師匠ポジしてるの。

変態さんが増えたらどうしよう。

「そろそろ中に入るがいいか？」

ゲンさんがあいかわらず渋い声を出す。

そうだ。真面目にしないと。

ゲンさんが軽くドアをノックする。中は丸見えだから一応形式だろう。返答はなかった。

「萌美さんいるかい？」

部屋の中はダンボールまみれだった。

小ささまざまなダンボールが組み立てられた状態で無造作に置かれている。

箱の上部部分には蓋になるところがあるはずだけど、内側に押し込んでしまっている。いくつかのダンボールには私物なのか衣服が少し入っていたりしたけど、大半はからっぽだ。

そして床にはタオルとか毛布が敷き詰められている。床全体じゃなくて、部屋のすみっこのほうに固まるようにして置いてあるって感

じだ。部屋の広さがだいたい13㎡くらいかな。

いつ洗ったかもわからない毛布とタオルは少し変色していて、ところどころに汚れがついている。犬の糞とかかもしれない。

その汚れた毛布とタオルの中に、沈むようにしておばあさんが寝ていた。

ポメラニアンといっしょに眠り姫みたいに目を閉じている。

辺田さんの言い分では、このポメラニアンが元凶みたいだけど、眠ってる分にはかわいいな。

ボクは中腰になってゆるゆると手を伸ばす。

すると、気配を察知したのか、ワンちゃんは跳ね起きて、きやんきやんと鳴き始めた。

あわわ。あわわ。生き物を安易に撫でようとしたらいけなかったかな。

ボク自身が普段からかわいいかわいってなでられまくってるせいか、かわいいものは撫でられるのが宿命だと思っていたよ。

うーつと、歯をむきだしにしてうなるワンちゃん。

「悪かったから。悪かったから鳴くのやめて！」

「ヒロちゃん。落ち着いて。ヒロちゃんが興奮していると犬も興奮するから」

ぼっちさんがアドバイスをくれる。

でも、ボクはただ鳴きやんで欲しいだけだ。

「ボク、興奮してないよ」

「ヒロちゃんの口から興奮って単語を聞くと、なんか変な気分になるな……」

マナさんが「わかるわかる」って言ってる。

それで——、ますます喧騒が激しくなって、ボクは油断してしまった。

あっと思ったときには、小型犬とはいえ鋭い牙が目の前に迫っていた。

「つつ……」

いた……くない。

痛くないな。人差し指をしつかり噛まれてるんだけど、ほとんど痛みはない。

ちくちくつてするような感覚だけ。

でも、指先の頂点からしつかりと、一筋の赤い液体が流れ落ちてくる。

痛みに耐性はできているけど、べつに肉体が強くなったわけじゃないからね。

超能力がなければ、小学生の柔肌だ。

「怖くない」

ボクは指を噛まれっぱなしのまままで、されるがままの状態になる。俗にいうナウシカ状態ですね。

ポメラニアンに限らず、小さい犬つて怖がりなんだと思う。

だから、安心するまでじっと耐え忍ぶしかない。

アニメで学んだ知識です。

「先輩。その犬……ゾンビ犬になったりしないんですか？」

「え？」

「あ……う？」

「ん？」

そ、そんなことないよね？

ボクは犬を抱きながら、じつと犬の瞳を見つめてみた。

ゾンビ犬になっちゃったら、ボクの命令も聞いちゃうような気がする。

そして、この子をここで飼うのは少々危険ということになる。

噛み癖がある子なら、だれかれかまわずヒイロゾンビにさせちゃったりなんてことも考えられるし、自由意志があるように思えるヒイロゾンビ犬だったら元の性格が改善されたりするわけじゃない。

爆弾——作っちゃった。

部屋の中に沈黙が満ちる。重い沈黙。

そしてお犬様はボクの指を相変わらずガジガジしている。

「えつと……。えへ」

とりあえず、笑ってごまかしてみた。

当然のことながら――、
なんの解決にもなりませんでした！

☆Ⅱ

結論から言うと大丈夫でした。

ボクはビーストマスターになれるわけではない。

そもそもこのころ、ヒロウイルスは既に地球全土を覆ってる。これはゾンビウイルスも同じ。でも、ゾンビウイルスに感染しているからといってゾンビになるわけじゃないのは、実例としていくらでもあるところ。

人は死ねばゾンビになるけれど、犬は死んでもゾンビにならないしい。

同様に、人はヒロゾンビになるけれど、犬はヒロゾンビ犬になるわけじゃないってことだ。

これはどういうことかという、たぶんだけど、ゾンビになるための資格というか容量というか、そういうものが足りないんだと思う。

つまり、ゾンビ化というのは温床になるってこと。

それだけ集中するってことで、そうじゃなければすぐに霧散して通常レベルになってしまう。

ということらしい。

なぜそれがわかったかという、ボクが抱いている犬のからだのなかにあるヒロウイルス濃度を微速度レベルで感知しつづけたからだ。

「つまり、犬はキャリアにならないってことですね」

命ちゃんが確認するように聞いた。

「そうだよ」

「いまはもう大丈夫なんですか？」

「うん。いまはもう普通になってる」

あれからワンちゃんは落ち着いた。

いまではボクの指をペロペロしているくらい仲良しだ。

痛みに耐えてよくがんばった！

ナウシカ式調教術はやっぱり最強でした。

ちなみにおばあちゃんはまだ起きません。

「一応聞いておくが」ゲンさんがボクの指先を見ながら言う。「無機物からの感染は大丈夫なのか？」

「無機物？」

「ゾンビの血肉に突き刺した槍には感染力がある。それと同じようにおまえさんの血がどこかに付着して、それを誰かが舐め取ったりしたらどうかという話だ」

「それは危ないかもね」

ボクの指先から流れ出る血にはヒイロウイルスがたくさん詰まっている。

犬や無機物そのものにはゾンビ化するほど定着しないとはいえ、ボクの血肉にはたっぷりヒイロウイルスが含まれているのは確かだ。でも、ボクの血をぺろぺろと舐めとろうとする変態さんは目の前の変態淑女さんと変態後輩ちゃんくらいしかいないと思うけど。

それに触ったりくらいなら平気。

ゾンビモノのお約束で、ゾンビウイルスは体内に侵入しないと感染しない決まりだからね。

「つまり——、おまえさんがなんらかの原因で傷ついて、その血を誰かが飲んでしまうと、新型のゾンビになっちゃうってことか？」

「それはそのとおりかな」

新型のゾンビってなんだよって話だけど。

「で、おまえさんたちは全部ゾンビってわけだ」

ゲンさんが指差し確認するのはマナさんと命ちゃん。

マナさんは不敵に笑み、命ちゃんは腕に手をまわしてそっと視線をそらしている。

ボクが言わない限り、不必要な情報は渡さないという心積もりだろう。

でも、もうある程度配信のときにある程度は話しちゃってるし、血液を全部抜き取られないなら、ちよつとくらいなら血液だろうが唾液

だろうが供与するつもりです。

なので、ボクはゲンさんの言葉に応えた。

「ゾンビっていうのがどういう状態なのかという定義の問題ではあるけどね。でも、そうしたくてそうしたわけじゃないよ。ヒロウイルスには完全回復能力があるからね。たとえ手足がもげても、腸がだらんってなっても、頭が破壊されていなければ大丈夫」

「頭が破壊されていなければ、か……」

ゲンさんが痛ましげな表情になる。

ここに来るまでに家族とわかれわかれになった人は多いのかもしれない。

それに、ゾンビになった人を殺しちゃった人も。

「ボクには死者を生き返らせる力があるわけじゃないよ」

期待させても悪いから、そこだけは明確に伝えておく。

配信の時にも言ってるけどね。

「そして、ゾンビになればゾンビに襲われないってことか」

「そのとおりです。キモイぐらいの再生能力がつくよ。人間やめちゃう覚悟があればけど」

指先にぶくつと膨らんだ血液の塊を見せつける。

ゾンビから襲われないという特性は魅力的だろうけれども、人間をやめちゃうというのは思いのほか躊躇するのが人間だ。

血を舐めるという禁忌。おぞましい行為だという認識が一般にはあるんだろう。

でも、動物の血をスープにしたりする例もあるだろうし、共食いする種だってなくはない。

単に少数派か多数派かってことだと思っただけね。

「おまえさんは……、そのヒロゾンビだかを増やそうとはしてないわけだな？」

「ボク自身はね。普通のゾンビとちがって、ヒロウイルスはボクでも除去できなかったんだよ。不可逆的だから、あとでどんな不都合が起こっても取り返しがつかないし、怖いんだよ」

「不都合ってなんだ？」

「今のところ、もしかしたらゾンビ化したら赤ちゃんとかできないんじゃないかって思ってる……けどわかんない。それと、もしかしたらボクの言うことを無条件に無制限になんでも聞いちゃうかもってこと？」

「幼女のいうことは絶対です！ ご主人様は幼女です。なのでご主人様のいうことは絶対です！ Q E D。ヤバイ、真理が証明されちゃった！」

そして、ふんすって鼻息荒いのがマナさんです。

この人はボクがボスゾンビじゃなくてもなんでも言うこと聞きそうだな。

「実際のところどうなんだ。おまえさんたちは自由意志があるように見えるが」

「自由意志はありまーす！ といったところでどうせ証明なんてできないので無駄だと思いますよ。ゾンビだって意識があるかもしれない。けれど、それを表明する能力がないだけかもしれないじゃないですか」

今度は真面目モードなマナさん。

うん、その議論はあったね。

だからこそ逆に意識があるように完璧に行動できても、その実、意識活動がまったくない『哲学的ゾンビ』なんて観念があるわけだし。「それはそうだな。しかし、このことはみんなには黙っておいたほうがいいかもしれない」

「え。そうなの？」

「内容がショッキングすぎるしな。配信の時はそこまでは言っておらんだろう」

確かに——、ボクがバイキンみたいに思われるのはいやだ。

例えば、それはヒロ友のみんな。

ボクのことを好きだって言ってくれる人たちに嫌われたくない。

その無名の人たちのなかでも一際、ボクにとって関係が深いのが——

ずつと黙って聞いていたひとりの人。

「ぼっちさん……嫌わないでね」

少し聞くのが怖かったのは確かだ。

これだけいろいろと言ってしまったとしてもボクに対する態度が変わらないのか。

それとも距離を置こうとするのか。

ボクは——、怖かったんだ。

ほんのコンマ数秒の出来事だったけれども、ボクには何時間も待たされたかのように思った。

その遅延の時間。

それこそがクオリアの輝きのように思える。

「嫌うはすがないよ。いまでもこれから僕にとってヒロちゃんは天使だから」

「ありがとう」

ヤバイな。うれしい。うれしいよ。

気持ちが爆発しそうなくらいうれしかったけど、ボクはそれを抑えこんで、なんともないように装った。てれ……。てれ。

「ご主人様ってすぐメス堕ちするタイプですよね」

「メス堕ちってなんだよ。えっと……この血はどうしようかな」

「んー」

横から謎の変態さん——もといマナさんが。

パクって。

ボクの指をくわえちゃいました。犬が舐めたところだから感染症とか大丈夫かな。

「マナさん……」

「はい。今日もまるやかでクリーミーな幼女味で最高でした！」

「まあいいか」

最高の笑顔で言われるとどうでもよくなっちゃう。

それと、たぶんヒロウイルスは最強だから、他の感染症とかにはかからないだろうと思う。

欠損状態すらなんとかしてしまるのがヒロウイルスだしね。

いまでもぼっちさんに言われたことがうれしくて、その余韻に浸っ

ていたかったというのも理由です。べつにメス墮ちしたわけじゃないからね。人としてうれしかっただけです！
これだけははつきりと真実を伝えたかった。

ハザードレベル80

お犬様はヒイロゾンビにならない。

これは大きな発見かもしれない。でもそうになると、ヒイロゾンビ化させてコントロールするということも難しい。

ワンちゃんのお世話は誰がおこなうのかという問題は変わらず残存したままだ。

どうしたものかと思っていると、飼い主のおばあさんがついに目を開けた。

寝起きのせいか動きが鈍い。いや違う。

少し目と耳ついでに言うと言とうと身体も悪いんだろう。

80歳って言うてたからね。世が世なら有料老人ホームとかに入居しているかもしれないレベルだろうし、ご本人のほうがお世話が必要なかもしれない。

「あらあ。たくさんの方……」

おきぬけでほんやりとした声だったが、案外にかわいらしい声だった。

ボクの祖父母はボクが二歳くらいときに死んじやつててほとんど覚えてないから、なんというかすごくおばあちゃんって感じがした。甘えたい感じ。いきなり謎の小学生に甘えられても困るだろうから自重したけどね。

「萌美さん。犬のお世話の件で話にきたんだが」

ゲンさんがおばあさんに優しく語りかける。

萌美さんってすごくかわいらしい名前。

その名前のおり、おばあさんは丸顔でちいさくてかわいらしい感じだ。

犬を手放さない頑固者を勝手にイメージしてたけど、そういう感じでもない。

物腰は柔らかく、少しゆったりした調子ではあるけど、意識は明瞭。

「ワンちゃんのお世話の件ね……」

そして少しトーンを落としている。

何を言われるかはわかっているみたい。

「萌美さんは犬の世話ができないだろう」

言い聞かせるようにゲンさんが言った。一度目ではないのだろう。何度か同じ話をしているみたいだ。

「そんなことはないわ……」

「お部屋の中が臭つとるし、実際苦情が出ているんだよ」

「ゲンゾウ君はそういうけど、わたしは十分に暮らしていけるのよ」
ゲンゾウ君。

少し気安い言い方だ。

ふたりは知り合いのかもしれない。

ゲンさんが60歳前後だとすれば、萌美おばあさんは80歳くらい。
い。

つまり、20歳くらい離れてる。

血のつながりはないけれども、幼いときに面倒をみてもらったとかそんな感じだろうか。

「萌美さんがどう思ってるかじゃない。周りからどう思われてるかだよ」

「……わたしは、家族もいないわ。ずっとこの年になるまでひとりで暮らしてきたのよ。ワンちゃんだけが家族だったの」

噛みしめるように言う萌美おばあさん。

哀しげな様子に、ボクも感じ入るところがある。

ボクの腕の中にいるお犬様も寂しそうにクウンと鳴いた。

「みんな余裕がない状況なんだ。人間でさえ生きるのに精一杯の状況で、どうして犬を生かしておく必要があるという意見もあるんだよ。このまま行けば萌美さんはきつと不幸になる。それがわからないとダメだよ」

「怖いよ……。いままでわたしはこの子といっしょに暮らしてきたの。突然いなくなったら、わたしはどうなるかわからないの」

指を突き出すように犬に手を差し伸べるおばあさん。

ボクは犬を放してあげた。

ポメラニアンはきやんきやん鳴きながら、おばあさんに甘えて

いる。

おばあさんはふるふると震えながら上半身を起こそうとし、ゲンさんが腕をとって起き上がらせた。毛布の中にうもれるような形で、萌美おばあさんは体育座りのかたちでうずくまっている。

わりと座ってるのも辛そうみたい。

「おばあさんはこの子を手放したくないの?」

ボクは言った。

言うまでもないことだけど、ボクは言葉に『重み』がある小学生。

みんなの前で、萌美さんの犬は飼うことにしたよっていえば、確かにそのとおりになる予感がする。でも、それはみんなの前で自分の発言に責任をもたなくちゃいけないってことで、ボクはこの犬の面倒をみなくちゃいけないのかもしれない。

人間150人の生存に携わりながら、犬の面倒を見るっていうのがボクにはとても重い。

だから、おばあさんの意思をまずは確認することにしたんだ。

「あらあ……かわいい子だねえ」

「えへ……」

おばあさんにかわいいといわれて、ボクとしてはなんだか懐かしい気持ちになる。

「わたしには子どもがいなかったからねえ。この子は子どもみたいなものなんだよ。きっと、この子がいなくなればわたしも生きていけないように思うんだよ」

「うーん。ゾンビだらけの外にいったら、おばあちゃんはすぐにゾンビに噛まれちゃうよ?」

「迷惑だなんだって言われても、ワンちゃんはわたしにとってはずいぶん同然なの。だから……、手放すのは無理よ」

「萌美さん」ゲンさんが傍らに座り「みんながどれだけ我慢しているか、考えたことはあるか? 狭いこの役場の中で、こんな不衛生な状況だと病気が蔓延するかもしれん。決断してくれ。なあ萌美さん」

「そんなこと急に言われたって」

「急なことじゃないだろ。前から話してるじゃないか」

萌美おばあさんはうつむいて沈黙してしまった。

人の意思と意思のぶつかりあいを見ていて、おもしろいものじゃない。

言ってみれば、これは「政治」の縮図みたいなもので、みんなの総合的な意思は、犬を育てていく余裕はないといっていて、個人の意思は封殺されてしまっている。

ボクは――。

自由な意思のもと生きていくのが望ましいと思うんだけど、この世界のリソースは無限じゃない以上、どこかで我慢が強いられるのが当然だとも思う。

ボクがほんのちよつと我慢すれば、誰かの願いが達成されるなら――。

そうするべきなのかな。

「ゲンさん。ボクが人間の生存領域を広げれば、人間側の余裕も増えるんじゃないかな。犬一匹ぐらいならなんとかなるんじゃないかな」「そりやそうだが……、おまえさんはそれでいいのか?」

「町長さんとかはむしろそういわせたいってところなんだろうけど……、いいよ。それぐらいは呑みこまなきゃ、ボクって存在自体が許されない気がするし」

「すまん……」

「どういうことなのかしら」

萌美おばあさんが聞いた。

「ボクはこう見えて、ゾンビを操れたりするのです!」

「あらあ……そうなの?」

わかっているのかわかってないのか微妙だけど、なんだか柔らかい反応だなあ。

「うん。そうなの。だから、おばあちゃんは犬を飼っててもいいよ」

「そうよかったわ」

「しかし、この部屋の臭いとか、犬の世話が必要なことは変わらないぞ」

ゲンさんの厳しい意見に、ボクは言葉につまる。

いま、この部屋をみんなでキレイにしたところで、日常的なお世話ができるわけじゃないしな。

「僕がしましょうか」

ぼっちさんが声をあげた。

あの一人部屋では自尽すらしそうになっていたぼっちさんが、いまはすごくカッコいい。

「かっこつけるためじゃないだろうな？」とゲンさん。

「ヒロちゃんからカッコいいって言われたらうれしいですけどね……。僕はもともと介護畑を目指してたんで、おばあさんの世話も必要だってわかります。犬もそのついでにできますよ」

「カッコいいよ」

「ありがとうね。ヒロちゃん」

うむーん。なでなでされてしまう。ボクの身長つて、ちょうど頭 hands のせやすい位置なのかもしれない。男の人にぶしつけに触られるのって事案だつて、客観的には思うんだけど、頭をなでられるとなんかすごい気持ちよくてされるがままになっちゃうんだよな。

メス堕ちしているわけではないのであしからず。

しかし、本当にかっこいいなぼっちさん。ボクができないことはボク以外の誰かがやってくれる。だったら、ボクもボクのできることをしなくちゃな……。

ふと横を見ると、いままで沈黙していた未宇ちゃんがなにやらぼっちさんに伝えている。

「どうしたの？」

「未宇ちゃんも手伝ってくれるみたいだよ」

「へえ」

犬の世話をしたことがあるらしい。

そのことを証明するためか、未宇ちゃんは器用に犬を抱き上げた。ボクみたいにナウシカ式の証明をする必要もなく、ワンちゃんはさっそく甘えている。

ほえられることも噛みつかれることもない。

なんだか魔法みたいだ。ボクも超能力使ってガワだけは同じこと

できるけどさあ。

なんかボクとの態度と違いすぎない？

未宇ちゃんは確かに静かで落ち着きはあるけどさあ……。

もつと、こうなんというか——。

犬は人を見るっていうけど、ワンちゃん内格付けで最下位になってる予感がする。

☆
||

葛井町長にはワンちゃんは引き続き飼うことにしたことを伝え、ボクたちは久しぶりに我が家に帰ってきていた。

たった二日程度の出来事だけど、なんだか長かった気がするよ。

「おかえり緋色ちゃん」

たまたま家の外を散歩していた飯田さんと会うことになった。

「飯田さんただいま」

そんな感じでボクは帰還を果たしたのだった。

さて、アパートについたあとは、みんなの部屋をピンポンしまくりの、緊急招集です。

一階にある空室だったところに集まって、みんな床に座った。部屋の中は閉め切っているせいもあって、少し空気がおいしくなかったけど、秋の夕空に涼しい風を取り入れるとだいぶンマシンになった。

さて——。

おなじみのメンバーだけど紹介しよう。

まずは飯田人吉さん。40歳の小太りでロリコン。この世界には珍しいほどに優しい人。優しいせいで一回死んじゃってるけどね。その際にハイロゾンビ化もしています。

次に姫野来栖さん。20代半ばくらい。ちよつと厚化粧気味だったけど、最近は少しすっぴんに近くになってる。飯田さんの優しさに触れて、最近はよく部屋に入り浸ってるみたい。ゾンビの恐怖から精神的に不安定だったけど、いまでは襲われることもなくなったせいか、ゆるいゾンビライフを満喫している模様。時々、自分ひとりで洋

服とか宝石とか化粧とかをデパートに漁りにいつてる。飯田さんについていってもらうのはやめてほしいけど、まあ人間に会わない限りは大丈夫だろう。

姫野さんとはまだ隔意があるのか、ちよつと離れたところに座っているのが常盤恭治くん。高校生。細マッチョでかつこいいよ。ホームセンターではボクを助けてくれたし、世が世なら主人公気質があったと思う。残念ながら、いまではヒロゾンビ化しているけどね。

そして、恭治くんに寄り添うようにしてちよこんと座っているのが黒髪ロングの美少女、常盤恵美ちゃん。ゾンビに噛まれても最後まで抵抗してギリギリゾンビにならなかったんだけど、いろいろあつて結局ゾンビ化し、マナさんに偶然お持ち帰りされて、ヒロゾンビになった子。いろいろ考えると、不憫だな。

そして、ボクの隣にいるが水前寺マナさん。言わずとしたゾンビお姉さんで、ボクがキレイなお姉さんにお世話されたいと願ったら、勝手にきちゃった系のお姉さんだ。最初から立派な変態だったので、これ以上成長することはないと信じた。

最後に、ボクの後輩で幼馴染で、妹のような存在なのが、神埼命ちゃん。神埼の字をまちがえないように注意しましょう。長崎の字とは違うからね。最近無理やりキスしてこなくなったのは、ボクが待つてつていつたせいかな？

そんなわけで、ゾンビ荘のメンバーがそろいました。

議題は当然――。

「人間の生存領域を拡大していくつもりなんだけど……みんなはどう思う？」

これだ。

ゾンビ荘のみんなは一蓮托生。

もちろんみんなが自由意志で出て行きたいというのならそれはそれでしかたないって気持ちもあるんだけどさ。ボクとしては、つながりを大事にしたいってのもあるし、もしもみんながどこか知らないところで怖い人たちに捕まったらと思うと躊躇してしまう。はたして人間の領域をひろげてもいいもののだろうか。

ヒイロゾンビ化したのはやむにやまれぬ事情だけど、まぎれもなくボクの意味だし。

少しは責任を感じるところでもあるんだ。

「あぶくないか？」

まず声をあげたのは恭治くんでした。

恭治くんってリアリストだよな。わりと正義感も持つてると思うけど、言ってることはすごくまとも。そして的確。ボクもそう思う面はあるし。

「確かに、ボクたちにとって一番危ないのは人間かな」

「でも、わたし達だって人間だよ」と言うのは恵美ちゃん。

ボクなんかよりもよっぽど天使な思考をしているな。

恭治くんはシスコンなので恵美ちゃんが言うことには逆らえないのです。「そうだけだよ……」と小さく呟いたきり、沈黙しました。

で、恭治君の発言に同調したのは、姫野さんでした。

「恭治君の言うこともわかる気がするわ。ヘタするとわたしたちって実験動物扱いじゃない？」

「それはそうさせないよにするよ。ボクが人間の生存領域を広げたら、ボクに対して人間は恩があるわけだし……」

「恩でそのとおりに動くわけじゃない。人間なんて三秒で恩を忘れる生物よ。怨みは末代まで残るっていわれてるけど」

なにそれこわい。

でも、恩を与えたからってそれを感謝させるとは限らないっていうのは命ちゃんも言ってたし、ボクなんかホームセンターでゾンビ避けスプレーを供与したのに、犯されて殺されそうになってたしな。

わかるけどね。

「一応、みんなの合流の仕方としては隠れてたってことにして、接触したらさりげなく人間に混ざるみたいなのやりかたもあるけど……」

「それはよさそうね」

姫野さんはボクの意見に賛成のようだ。

しかし、それに優しく首を振ったのは飯田さんだった。

「姫野さん。わたしとしては緋色ちゃんがここまでいろいろやってく

れているのを無下にしたくはない。人間というポジションでは緋色ちゃんを助けることもできないだろう」

「あなたは……いつも優しすぎるわ」

すつと肩において、でもまんざらでもなさそうな姫野さん。

なんなのこのメロドラマ。

ぶつちやけ恭治くんに無理やりキスしてた件、ばらしますよ！

飯田さんがあいかわらずボクに優しいのはうれしいけどさ。ボクがロリだからつてもあるのかなあ。でも、なんとというか外貌以外の面でも、精神的なつながりは感じるけどね。

「おじさんがいつもどおり優しいのはうれしいけど、黙っていればそんなにわかんないと思うよ。子どもとかできないかもしれないのがネットだけどさ」

ヒイロゾンビと人間の違いっていったら、超絶的な再生能力があることと、もしかしたらボクと同じようにいずれは超能力が使えるようになるかもしれないって点、デメリットはボクの意味に逆らえなくなるかもしれないって点と、子どもができない点だ。

つまり、みんなが人間に混ざると、いずれはヒイロゾンビが無制限に増殖しちゃって、子どもが生まれない社会。いわゆる少子化問題がでそうな気がする。

まあ、みんな不老っぽい状況なのかもしれないから、子どもが生まれなくてもいいのかもれないけどさ。どうなんだろうね。

年をとらないかどうなのかっていうのは、まだ数ヶ月しか経過してないからなんともいえないな。ゾンビの特性からすると、もしかしたらそうなのかなって思ったりもするけど、ボクはボク自身のこともよくわかってないからなあ。

一度、ピンクさんあたりに診てもらったほうがいいのかもしいい。い。

「あの……ちよつといいかしら」

いつもとは何か違うしおらしい反応を見せたのは姫野さんだ。

「ん。どうしたの」

「あの、わたし……妊娠しちゃったみたいなんだけど」

は？

はああああ？

え、それってどういうこと。

「あ、あのお相手は……」

ボクの慌てた言葉には答えず、姫野さんが見つめたのは――。

飯田さんだ。

なんかいやあまいったなああ的な感じで頭の後ろをポリポリかいて
いるけど、ボクとしてはなんだか納得できない面もある。

これって宗旨替えだよな？ ねえ。飯田さん。

でも冷静に考えたら、飯田さんって子どもがほしいとか言ってた気が
するし、ロリコンなのはそうなんだろうけど、生命としての本分
みたいなことも言ってた気がする。

だから、やることやっちゃったのかも。

「あの、それって想像妊娠の類じゃないの？」

「あのね。きちんと妊娠検査薬で調べました」

「そ、そうですか……」

あの棒線がでる体温計みたいなやつね。

あれ……、じゃあ、ヒイロゾンビって普通に子どもできちゃうの。

ボク妊娠しちゃう？

「ご主人様を妊娠させたいだけの人生だった」

マナさんがまたよくわからないことを言うし。さすがに妊娠とい
う言葉には、小学生には刺激が強すぎたのか、恵美ちゃんは耳を真っ
赤にしている。

「先輩。そろそろスタッフ細胞を作り始めましょうか？」

スタッフ細胞はありまあすって馬鹿か。命ちゃんの目がギラギラ
してて怖いです。

「あの……、少し議論を戻したいんだけどさ。姫野さんの赤ちゃんが
できてたのが本当だとすると、ボクたちってほとんどデメリットはな
いのかな。ボクの言うことに逆らえませんって感覚はあるの？」

「ご主人様。他人の感じ方を聞いたところで、それはそう言わせてる
だけかもしれないよ」

マナさんの冷静な意見は何度も指摘されていることだった。そうなんだ。

結局、どこまでいっても独我論の魔の手は忍び寄ってくる。

ボクが一人遊びをしている可能性は否定できないんだ。お気に入りゾンビを好き勝手操って、ボクが好ましいように無意識のうちに動かしている可能性は否定できない。

でも、それでも聞きたい。もしも、そういう圧力があるのなら、ほとんどデメリットがないにしろ、人間としての尊厳が犯されてるよう感じるから。

やっぱり、ヒーロゾンビは増えるべきではないと思うから。

「先輩。ヒーロゾンビの物理的特性はわかりませんけど……、ほとんどの人間にとって影響が大きいのは社会的な立場ですよ。たとえば、先輩がある人を指差して、嫌いだからこいつは排除してって言えば、あの小さなコミュニティは先輩の言葉を叶えるでしょう」

そう……。それはそうだと思う。

「ひそかにヒーロゾンビを増やしまくってもいいと思いますけどね」

「ボクは、人と仲良くしたいだけだよ」

「どうせ、人間は多数派に従うだけです。多数であることが真実であり、多数であることが正義であるというのが大衆のありようですから」

「そんなに馬鹿じゃないよ。みんないろいろ考えて、いろいろ苦しんで生きているわけだし」

「だったら、実験してみればどうですか。例えば、辺田さんとかいうおかしな人がいたじゃないですか。犬がうるさいからって先輩に捨てろって言わせた人。あの人のことを追放させてみたらどうですか。きっと、先輩がそういえばそうなりますよ」

「命ちゃんー!」

ボクは——ちよつと強い言葉を発した。

命ちゃんが少しからだを揺らして、ボクの言葉を受けた。

ダメな言い方だった。

「ごめん。命ちゃん。でも——、そうはしたくないんだよ」

「わかってますよ。先輩はいままで、周りにこころを配る人でしたから」

視線を地面に落として、命ちゃんは少しガツカリしているようだ。ボクは他人を考えすぎているのかもしれない。

オンリーワンになりたい命ちゃんにとって、ボクの考え方はもどかしいのかもしれない。

「青春してますねえ〜」

間延びしてるのは、マナさんの声。

なんだか癒されちゃうな。いつものことだけど。

「ボクにとっては正直な気持ちだよ」

「ご主人様としては人間の自由意志というか尊厳というか、そういうものに配慮したいってわけですよね?」

「うん。そうだね」

「それで、わたしたちのことを愛らしくも守りたいって考えてくださっている」

「うん。恥ずかしいけど、そうだよ」

「はあ……幼女から守護られるとか最高かよ」

「べつにマナさんの快樂のためにそんなふう考えてるわけじゃないから」

微笑むマナさん。

どうせ、ボクのほっぺがリスのように膨らんでるのがカワイイとか考えてるんですよ。

知ってるんだから。

「タスクとして考えてみましょう。ご主人様としてはわたしたちが拷問にあうような事態は避けたい。でも、人間と共存したい。そういうわけですね」

「うん。だいたいはそんな感じ」

「だったら、今の状況でしたら、わたしたちがヒロゾンビであるってことは伝えなければいいんですよ」

「え、どういうこと?」

「つまり、わたし達はヒロゾンビではないけれども、もしかしたらな

んらかの関係者かもしれないと思わせておけばいいんです」

「それってみんなが人間としてまぎれこむのと何が違うの？」

「ウソというのは信頼関係を一時的に保全する分にはいいんですが、バレたときには一瞬で信頼関係を破壊しますよね」

「まあそうかも」

「わたしたちの身体は特殊で、たとえばショットガンで腸がだらーんってなっても、数十秒で回復するぐらいは強固なわけです。ついでにえば、握力も100キロは超えてるでしょうし、恵美ちゃんみたいな女の子でもドデカハンマーを振り回せますよ」

「そうかもね」

魔法少女チックな絵図になるのは確かだ。

特に恭治くんとヒヤツハーさんたちを殲滅したときを思い出してほしい。

一瞬でとはいわないまでも数十秒でキレイな腹筋が再生したからね。

「要するに、わたしたちが人間として合流しても、バレる可能性は常にあります」

「そうだね」

「だったら、最初から曖昧なまま、ご主人様との関係をおわせながら、しかし、何も言わないままというのが、持つてるカードの伏せ方としては一番効率的ですよ」

「ウソをつかず、でも全部は言わないってやり方？」

「そういうことですね」

うーん。マナさんのやり方は確かにリカバリが利くというのが魅力的かな。

「でも、ヒーロゾンビがいつのまにか増えちゃうかも」

「いつのまにか超再生能力を得ていても、熱心なヒロ友だなあとしか思われませんよ」

そんなもんなのかな。

でも、みんな人間としてまぎれこむよりは、ボクの関係者としてのほうがいいよってことになったみたい。

☆
||

みんなとの会議を終え、次の日ボクは町役場に戻ってきた。
ざわつきというか、なにか得体の知れない雰囲気を感じる。
町役場の正門近く。

そこに大きく血染めの文字。

——カエレ。

乱雑で荒々しい文字で、ボクは誰かに否定されていた。

ハザードレベル 81

町役場の前は一種異様な雰囲気にも包まれている。

ボクたちを出迎えてくれたのは、笑顔に包まれたぼっちさんでも、ナルシストな町長さんでもなく、血染めの文字だった。その文字を多数の人が見つめている。意味をなさないざわつき。

でも、その文字のことについて話し合ってるのはまちがいない。

縦書きでカエレと書いている。

カタカナだよ。実は力ではなくて、漢字の『力』ですなんてことはないと思う。ミステリでは常套といってもいい読み間違いだけど、このようなシンプルな文字に間違いようはない。

帰ってことだよ。

誰のことかといううまでもない。ボクのことには違いない。

「えーっと……これって？」

ボクとしては困惑でしかなかった。

だって、ボクってゾンビ避けできる唯一の超能力少女で、自分でいうのもなんだけど、みんなの希望の星とか思ってたから。メシア様なんていわれて、若干うれしさもあつたのは事実。ほめられるとうれしいっていう単純な理由だけだね。

でも、そうじゃなかった。

あるいは、そうじゃない人もいたということか。

人間のころって本当にミステリーだなあとしか思えないよ。

「なるほどなるほど、世界一かわいい美少女配信者に対してカエレとかある意味、わたしにはできそうにないことですね。すごいです。本当に帰っちゃったらどうするつもりなんでしょうね。」

マナさんの暢気な声。ちなみに今日もここに来たメンバーは昨日といっしょだ。

マナさんと命ちゃんのふたり。

ゾンビ荘の他のみんなもひとりひとり連れ出して行って、町役場になじませるのがいいんだろうけど、まあゆっくりやっていけばいいと思ってる。

「これってどういう意味かなあ。わざわざ血染めの文字ってところに
凄みを感じるんだけど」

「血染めですか？ ああ、なるほど……確かにそんな感じですけど、本
当の血じゃないですよ。ご主人様ならわかるはずですよね」

「あ……うん。そうかも」

ボクもマナさんに指摘されて気づく。

血染めっていうのは、なんとというか粘度とか、色合いとかがそれっ
ぽいからそう感じただけで、はつきり言う人間とかそれ以外の生き
物とかの血の気配はしない。ヒイロウイルスを浸透させやすいのは
圧倒的に人間の血で、そうじゃないのはすぐにわかっちゃう。

ゾンビって人間の血の臭いに敏感だからね。

それって感染させたいからかもしれないけど。

だから、この血染めの文字は、本当の血で書かれたわけじゃないの
はわかる。

「オーソドックスなペンキでしょうね」

今度は命ちゃんの指摘。

少し不快そうに文字を見ている。また敵認定してないよね。

セーフティにいきたいんだけど。

ただ、ペンキだとしてもわざわざ血に似せた色を使ったのには意味
があると思う。人間にとつて、赤は特別な色なんだ。赤は血を連想さ
せて、危険だと知らせる効果がある。信号の止まれが赤い色なもの、
そういった理由があるんじゃないかな。色の波長的に遠くからでも
見えるというのも理由らしいけど。

「でも、この場合——、ボクってどうすればいいのかな」

犯人探しをする？

それとも、犯人の言うとおりにいったん帰ってみる？

無視して、町長のもとに向かう？

「そもそも、ここに書かれている意味ってなんなんだろう」

カエレの文字は、わりと大きい。

ボクとしては見上げる必要がある高さ。

書いてる場所は庁舎の横にあるちよつと小さめの別棟。

その真つ白い壁。

ちやうどボクたちが来るとき、門側のほうの最初に目につく建物だ。

つまりいの一番に目の中にとびこんでくる配置。

大きさはそれなり——。

ちやうど平均的な身長の大人の人が手を伸ばしたときぐらいの大ききで書かれている。

高さは少し高めか？

大人だつたら腕を伸ばせばギリギリ届く高さの位置で書かれている。脚立とかも要らなさそう。

おそらく書くこと自体は一分もかからないだろう。

「俺じゃねえよ！」

ざわつきの中から聞こえてきたのは、昨日と同じ男の人の声だった。

辺田さんだ。

何人かの男の人が取り囲むようにして、辺田さんをにらみつけている。

辺田さんは昨日、ボクに犬を捨てろって言った人だ。

正確にはおばあさんが飼っているポメラニアンを捨てるように促してくれと言ったひと。

生存的にギリギリな今の状況で、犬なんか飼ってる余裕はないという意見の人だった。

ボクとしては——、あくまで個人的にはだけど、その意見に同調するほどでもなかったので、犬は飼つたままでもいいんじゃないかというのを町長に伝えて帰つたわけだけど。

それは、辺田さんにとっては否定的意見であることはまちがいない。

つまり——、ボクと意見の対立があったということになる。

辺田さんの意見をあえて否定したいわけじゃないし、あえて対立したいわけでもないけどね。

命ちやんみたいに敵味方をはつきりと区別していく戦略は、わかり

やすいけど疲れるんだよ。

で、いまのこの状況って――。

もしかして、犯人は辺田さんだと思われているの？

動機はあるって――さすがに短絡的すぎるような気がする。

「あの……、どういう状況なのかな？」

ボクは適当に辺田さんを囲ってる男の人のひとりに聞いた。

そろそろ秋なのに、いまだにタンクトップを着ている浅黒細マツチヨの人。

全身がバネみたいで、身のこなしが素早そう。

確かぼっちさんには湯崎さんって言われてた人だ。直接話してはいないけど、ゲンさんやぼっちさんと同じく、外に探索に行く数少ない人。

つまり、ここ町役場でそれなりの地位というか役職というか――。

影響力がある人だろう。

その人が率先して辺田さんを激しく攻め立てている。

昨日はボクに対しては優しい視線だったけど、今日の辺田さんに対するソレは激しく糾弾するものだった。

「ああ、ヒロちゃん……。昨日の今日でこんな状況だからね。確認だよ。確認」

「辺田さんが書いたかの確認？」

「そうだよ」

ふうん。確認というよりはなんというか魔女裁判的な圧力を感じるんだけど。

ボクのためなんだろうか。

あるいは、ボクというゾンビ利権を得られなくなる可能性に対する恐れ？

「だから俺じゃねえって。昨日は確かに犬のことをどうにかしてくれって言ったけどよ。それは臭くてうるせえって誰もいわねえからじゃねえか！ ああ婆さんに忖度しまくってよ」

「だからやったのか？」

「違えよ。だいたいそんなことしたら、みんなに攻められてヘタす

りやここから追放になるのは目に見えてるだろうが。そんな考えたら一秒でわかるようなことしねえよ！」

「バレなきやいいと思ってたんじゃないか？」

「アホか！ 話になんねえよ。オレがやったって言うんなら証拠だせよ！」

辺田さんの昏くかげった視線が、湯崎さんの視線と交差する。

湯崎さんは無言のままにらみつけている。

証拠は——ないんだろうな。

目撃証言とかもないんだろう。

昨日の様子だと、町役場のみんなはゾンビをこわがって外にはあまり出たがらない感じだったから。庁舎の敷地内とはいえ、外に出る人はそんなにいないのかもしれない。

「証拠はないが——、これを書いたやつがどこかにいるのは確かだ。いま動機の面でいえばオマエが一番怪しいのも確かだろう」

「あやしいうってだけで犯人扱いかよ」

「ああそうだ。他にあやしいやつが出てこない限り、暫定的にはオマエが犯人なんだよ」

つまり——、それは。

オレたちには犯人が必要だといってるようなものだった。

ボクのために。ボクは望んでないけど。

「あの、ボクってべつにこんな気にしてないよ。辺田さんに限らず——犯人探しをするつもりもないよ」

どうして書いたのかっていうのは知りたくはあるけどね。

人のところはミステリだといっても、わけもわからず拒絶されるのは嫌だし。

みえない悪意にさらされるのは怖い。

ボクがゾンビだから嫌だっていうんならそれでもいいけど、それならそうはつきりと言ってほしい。

でも、ふと思うことがある。

ボクが流れる的に”政治的な権力”を帯びてきているような状況だと、いいたくてもいえないみたいなきともあるかもしれないってこ

と。

例えば、多数の人がボクを待ち望んでいる状況で、自分は違うって
いうのは勇気がいる。

辺田さんが言うように排斥されてしまうという恐怖もあるだろう。
だから、こういうふうには不可視のかたちをとったのだと考えること
もできる。

いまはともかく——犯人探しならぬ犯人作りをやめさせないと。

「オレたちの総意は、ヒロちゃんを全力でサポートしたいと考えてる
んだよ。それに水を差すような行為には、正直怒りを覚える」

「その気持ちはうれしいけど、ボク大丈夫だから」

辺田さんを囲っている男の人たち。

そして、ざわつく周りのみんな。

どちらも軽い興奮状態にあるみたいだった。

ボクの言葉で少しは鎮静しているみたいだけど、人間はゾンビと
違って自我があるから、簡単に言うことを聞いてはくれない。

辺田さんがこのままゾンビルーム行きという線も考えられる。

とりあえず、秩序が乱されそうだからみたいなの理由で。とりあえ
ず、そんな軽さで。

そっちのほうが怖い。

「なんの騒ぎですかねえ」

救世主としてあらわれたのは、やっぱり町長だった。

ボクみたいなニワカとちがって、人心をつかむのがうまい町長さ
ん。

いつもの余裕たっぷりな様子に、みんな少しぎわつきを抑えて町長
がこちらにやってくるのを見つめている。

「町長！ オレはやってねえ！」

辺田さんの気合の入った声。

それには応えず、壁の文字を見つめる町長。

しばしの間、奇妙な沈黙。

顎に手をあてて、なにやら考えている。

そして細目がわずかに開かれ、ボクのほうに向いた。

開眼怖いです。強キャラ感ある。

「とりあえず、町長室にご足労ねがいますか」

アツハイ。

☆Ⅱ

町長室の扉が閉められると、ボクは一息ついた。

みんなの目。怖かったな。ボク自身が悪意にさらされたわけじゃないけど、誰かの悪意の対象になっているのは間違いないし、方向性が違うだけで、悪意自体の存在は認証されてしまっている。

つまり、人は人を拒絶する。それが怖かった。

葛井町長はソファに座るように促され、ヤカンのお湯をカセットコンロで沸かしている。

部屋の中にはゲンさんがいて、黙ってなにやら考えこんでるようだ。

「コーヒーでいいかな」

「ん。はい。命ちゃんもマナさんもそれでいい？」

「わたしはなんでも」「口移しでのませてください」

「なんでもいいみたいです」

マナさんの言葉は無視だ。無視。

「災難だったね」

カタカタと鳴り始めたヤカンをBGMに葛井町長はそう言い添えた。

「災難——というほどなにか明確な不利益を受けたわけじゃないけど。」

なんとというか、人付き合いの面倒くささを思い出した感じはする。

配信してるときには、そういう面倒くささはあまり感じない。

配信というシステムは、ここちよいコミュニケーションだけを選別するシステムだからかもしれない。本当の生のコミュニケーションはもっと複雑でわずらわしい。

ボクは黙ったままだ。

そして、目の前のローテーブルにコーヒーが置かれる。

「砂糖とミルクはいるかな？」

「いりません」

男は黙ってブラックコーヒー。

という、前時代めいた思想を持つてるわけじゃないけど、現実と心情を一致させるとすれば、今のボクにはブラックが似合ってる。

なんとなくかっこいいというイメージもあります。

で、一口。

「にがッ！ うえッ」

ダメでした。

「すっかり幼女舌なご主人様がかわいい。はい。お砂糖とミルクをたっぷりいれましょうねえ」

マナさんがボクのコーヒーにミルクと砂糖をたっぷりと入れてかき混ぜてくれた。

これはもはやカフェオレなのでは？

あるいは、牛乳コーヒー……。

でも、ちようどよかったです。

やっぱり、幼女舌になってるのかもしれない。

「さて、今回の件ですが、どうしましょうかねえ……」

「ボクとしては放っておいていいと思ってます」

理由はわずらわしき。

その一点に尽きる。

どうせならみんなと配信してワイワイ楽しみたい。

生存領域も広げるし、ゾンビ的な恐怖はとりさるようになら努力する。

せっかくあさおんして、かわいくチートな女の子になったんだから、そういう人間の負の面とか見つめたくないよ。人生楽しくエンジョイしたいよ（重複表現）。

「放っておくというのも確かにひとつの手だね。僕としてもできる限りみんなを刺激したくない。みんな疲れてるし精神的に不安定だしね。ただ——」

「ただ？」

「これだけで終わるのかなとも思う」

「また同じようなことが続くの？」

「そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない。なにしろ犯人の動機はわからないからね。ミステリ小説なら、誰が犯人かのほうが重要で、どうしてそうしたのかはあまり取りざたされないものだけど、動機がわからないというのは怖いものだよ。対策のたてようがない」「対策のたてようがないなら結局放っておくしかないんじゃない？」

「もちろんそのとおりだけど、政治的にはなにかしら対策をうったというモーションが必要なんだ。被害がでるかもしれないに放っておいたら、なにも対策しなかったという批判がでるのは当然だからね」

「それはそうかも」

甘々になったコーヒーをすすりながらボクは考える。

対策——見回りの強化とかかな。

「ボクはどうすればいいですか？」

「ヒロちゃんになにかしてもらうつもりはないよ。強いてあげれば、何事もなかったかのようにふるまってほしいな。これから太陽光パネルとか拾ってってもらおうわけだけど、今朝の文字の件はまったく関係なく、淡々と集めてほしい」

「それは大丈夫です。町長さんたちはどうするの？ その”対策”って」

「そうですね。ゲンさんに見回ってもらおうくらいしか思いつかないな」

「それはかまわんが、ワシらだって四六時中見張ってるなんて無理だぞ」

ゲンさんは厳格な声を出した。

ぼつちさんとゲンさんと湯崎さん、ついでに言えば未宇ちゃんもいれてわずか四人しかいない探索班。狭い町役場とはいえ、そこまでみんなに対しての目が行き届かないのは当然といえた。

「それこそ建前ですよ。とりあえずのところ我々としてはやるべきことはやったという建前です。実効性はなくても、しようがないです

よ」

「同じことが起これば、信頼を失うかもしれんぞ」

「そうですね。しかし、同じことが起きるということは、それだけ犯人につながる情報も増えるということですよ。犯人を捜す手がかりも得られるかもしれません。逆に同じことが起こらなければそれはそれでいいんです。ヒロちゃんは認められ、みんなに受け入れられたという事ですから」

「同じような事件が起こらなくても、その犯人がこの子を受け入れたかどうかはわからんぞ。野放しにするつもりか？」

「それでもいいんです。問題が起こらなければ、その問題は存在しないと同じですから」

そうなのかな。

世の中の不満が噴出しなければ、その不満は存在しないといっているのだろうか。

人はいろいろな考え方をしているものだし、不満を言わないという無言の批判もありうると思うから、表にでなきゃそれでいいって考え方は違うと思う。

とはいえ——。ボクがここでしゃしゃりでも、事態は混乱するばかり。

実務にたずさわっている葛井町長の意見に同調してたほうがいいのかな。

悩みどころさん。

「先輩——、面倒くさくなったらお部屋にこもって私とイチヤイチヤしましょう」

命ちゃんが小声でボクに伝えてくる。

それもまた魅力的な提案に思えてしまった。

結局のところ、ボクは町長の言葉どおり、何もしないことを選択しました。

それが次の事件の引き金になるとも知らずに——。

あー、今のなしなし。

ともかく、ボクはあまり考えないようにした。

人のこころを想像して、こう思うだろうって考えるのもある種の傲慢だからね。

与えられた仕事を淡々とこなすことも重要なんですよ。

いま、ボクはゾンビ避けマシンと化している。

レーダーのように探知領域を広げて、できる限りの祈祷力でもって、探索班の人たちがゾンビに襲われないように気をつけている。

マーカー代わりのボクの血が入ったお守りを渡せば完璧なんだろうけど、それはそれでヒロゾンビ化の可能性もでてくるので、今回は祈祷のみに頼ることにした。

びっくりしたのはなんと齡10歳の未宇ちゃんもついてきたことだ。

ボク視点では危険はないとはいえ、どうしてもついてきたいのとどだった。

なぜって、ワンちゃんを散歩させたいらしい。

ポメラニアンって室内犬のイメージがあるから散歩させる必要があるのか謎だったけど、どうやら犬について一家言ある未宇ちゃんが言うには（正確には手話だったが）ずっと同じところに閉じ込められているとストレスで剥げるらしい。

ボクに噛みついたのもストレスのせいではないかとのこと。

それに——、たぶん、ぼっちさんもついてきているからかな。

未宇ちゃんにとってはコミュニケーションの窓口みたいなものだからね。

申し訳ないけど手話はさっぱりなんだ。

だから、ぼっちさんに翻訳してもらわないと、未宇ちゃんがなにを思っているかはわからない。

「はい。みんな離れないでくださいーい」

手旗信号の旗を手に持ち、交通安全の引率役みたいになってるボク。

町役場から離れるときは、やっぱりみんなそれなりに緊張しているみたい。

ぼっちさんも、湯崎さんも、ゲンさんも周りを油断なく見渡している。いくらゾンビを避けられるからって、染み付いた生存本能は振り払えるものじゃない。ボクのことを信頼しているわけではないとは別に、ゾンビのうなり声を聞いたら身がすくんでしまうのと同じことなんだろう。

ただ未宇ちゃんだけはふんわり眠たそうだ。

静まり返った町並みをボクたちは進む。

まわりにゾンビはそれなりにいる。人間を感染させようとする攻撃本能だけスイツチオフにしている、ほかの行動制御はしていないからか、遠巻きにこちらを見ているような感じになっている。

小さめの建物から自然とこんにちわするゾンビさん。

ああーうーとうなり声をあげるものの、こちらに迫ってくる様子はない。

当然だ。ボクが操ってるからね。

みんな複雑な表情になっている。

こちらに攻撃してこないことは知っていてもやっぱりそれなりに怖いかもしれない。

「ヒロちゃん。探索班がみんな抜けちゃったら、犯人の監視役もいなくなっちゃうね」

ぼっちさんが話しかけてきた。

それは確かにそうかもしれない。

「でも、町役場の中だと相互監視状態みたいなものですよ。夜にこっそり外に抜け出すとかはできるかもしれないけど、昼間に誰にも見られずに外に出たりとかはできないんじゃないかな」

町長さんに聞いた話だと、町役場内から町役場の外にでるには正規ルートでも四箇所。職員用も合わせると六箇所あって、誰でも通過可能らしい。

つまり、誰にも見られずに事を成すのは可能だった。アリバイとかで犯人が割り出されるような類じゃない。それに究極的にはだけど、

みんながみんな犯人で、全員一致でボクを追い出そうとしたってことだ。だって考えられなくはないわけだし。

そこまではないにしろ、複数犯だってありえるんだ。

昼間にもし犯行があったら、複数犯の可能性は高まる。

でも、それも確率の問題かな。

結局、犯人を追及するにしろ、動機を探るにしろ情報が少なすぎるよ。

「僕としては、ヒロちゃんに嫌われないかが心配だよ」

「嫌うはまらないよ。みんなヒロ友なんですよ」

「そうだね。でも、ヒロ友のふりをした悪意のある者がいるってことも考えられるんだ。僕としては信じられないんだけど、これだけヒロちゃんにいろいろ頼んでおきながら、そんなの当然だって考える人だっている。みんな自分のことばかりだし……」

「多少余裕がでてくれば考え方も変わるんじゃないかな」

そう信じるしかないよね。

でも、みんなの不安を受けとめる形になったボクもそれなりに不安だ。

嫌われてるんじゃないかって不安。

陰キヤあるある。

そんなことを思っているせいかな、今日はゾンビの数がすこし多いような気がする。

ゾンビはボクの負の感情に反応しているのかもしれない。あのホームセンターのときも人間に軽く絶望してたときにはゾンビの数が自然と増えていったし、気をつけないと町役場が大量のゾンビに飲み込まれるってことも考えられる。それでもしつかりとコントロールしておけば問題はないんだけどね。

もつと散らさないと——。

そして、ふと後ろを見てみる。

ぞつとした。

未宇ちゃんは猫みたいに静かでおとなしくて気配のない子だ。

だから——なんて言い訳をするつもりはないけれど。周りはゾン

ビのうなり声が響き始めていて、多少の音はかき消される状況だった。

だったんだけど――。

未宇ちゃんがいなかった。

ポメラニアンのワンちゃんとともに姿が掻き消えていた。

ハザードレベル82

ボクたちが探索にでかけていると、いつのまにか未宇ちゃんがいなかった。

びっくりするほどのステルス能力だ。いくら物静かだからってほどがあるよ。

周りは遮蔽物が多い佐賀的ビジネス街なのでちよつとでも建物に入り込めば、あるいは路地に入り込めば視界の外に出てしまう。それこそ小学生の足でも二十秒もあれば、視界の外に出るだけなら簡単。といっても、佐賀のビジネス街ってたかが知れていて、あえていうならシャッター通りに近い感覚です。なんもないです。穏やかな感じですよ。

あるいは――。

「誘拐？ いや正確には略取っていうんだけど……」

誘拐とはその文字のとおり、誘ってかどわかすことを言う。

つまり、言葉とかを使ってその気にさせて連れ去ることを言うんだ。

無理やりさう場合は、略取というのが正しい。

未宇ちゃんは耳が聞こえない女の子だから誘ってかどわかすというのは難しいだろうから、ありえるとすれば、誰かが無理やりという線だ。

「先輩。おそらくですけど、一番考えうるのは誰かにさらわれたというよりは未宇ちゃん本人がどこかにいつてしまったという線ではないですか」

命ちゃんの冷静な判断に、ボクも少し考える。

確かにその線が一番濃いかな。

ボクのことに対して敵対的ともいえる『カエレ』の文字で敏感になつていたけど、普通ならこの状況で誰にも見られずにむりやりどこかにつれていくというのは難易度が高い。

「つまり、ワンちゃんがどこかに行つてしまつて、それを追いかけてつてこと？」

「そうですね。リードはしてたようですが、あれだけ元気な犬ですし、ないとは言えないんじゃないですか？」

「確かにね……」

犬もダツシユしているときは案外吼えないものだ。

なにしろ、自分の欲望が一番満たされている瞬間だからね。

吼えるというのはなんらかの不満があつての行為だろうと思うし。

「みんな未宇ちゃんの姿は見えないの？」

ボクは周りにいる全員に聞いた。ボクを含めて、命ちゃん、マナさん。ゲンさん。湯崎さん。ぼっちさんと、六名もいる。十二の瞳に見つめられながら、どこかにいつちやうなんてありうるんだろうか。

でも、みんな否定した。

「油断していたとしか言いようが無いが……、ワシらは前方にばかり注視していたからな」

ゲンさんの言葉に同意の声多数。

「ぼっちさんも？」

「僕は……正直なところ」

そこで、口を閉ざしてしまふぼっちさん。

「正直なところ？」

「ヒロちゃん見てました」

「は？」

マナさんを見ても、

「まあ殺人的にかわいい生物がいるとしようがないですよ。ずっとご主人様の膝裏を見ました。膝裏かわいすぎて困りますよね」

命ちゃんを見ても、

「先輩のことしか見えませんでした」

ダメだこいつら……。

ボクのことしかみてねえ。

つまりそういうことか。比較的まともなゲンさんと湯崎さんはいつものクセで最も危険といえる前方を本当に注視していて、他のみんなはちようど真ん中あたりにいたボクのことをずっと見ていて、一番後ろにいた未宇ちゃんを見ていた人が誰もいなかったってこと？

そんで——、ゾンビの数がにわかによく、うなり声にまぎれて、物静かな未宇ちゃんがいなくなっても気づかなかったって、そんなオチ？

ロリコン率高くね？

マナさんが言ったように、ボクの膝裏を見ている人ばかりなの？

いや、この際、原因は置いておこう。

「ボクとしては、すぐに見つけ出さないとまずい気がするんだけど」
言わずもがなってやつだ。

ボクのゾンビを操作する能力は無限大の距離を持っているわけじゃない。

そりゃ、祈祷力というか集中力というか、ボクの気持ち次第で操れる範囲は多少広がったりするけれども、無差別に全部のゾンビを操ろうとすると、それだけ疲れちゃう。

平野とかで、見えるゾンビは操りやすいけど、高低さのある建物が多くなるとさらに難易度は上がる。佐賀には高層ビルの類は無いけれど、それでも建物の中にいるゾンビは感知しにくい。

つまり、ほんのちよつとボクが祈祷力をきらしてしまつて、未宇ちゃんがゾンビに襲われるなんてことも普通にありえるんだ。

生きながらにして食べられる恐怖というのは、筆舌に尽くしがたいものがあると思う。

たとえば、ボクという特効薬があつたとしても。

じゃあ、全身噛まれまくってくださいとはならない。

ましてや小さな女の子ならなおさらだ。

やっぱりヒロウイルス入りのお守りでも持つてもらおうほうがよかつたかもしれない。

「先輩がリーダーのようにゾンビを見ることができればなら、あえて襲わせるというのも一手かもしれませんね」

「え、ダメだよそれ」

命ちゃんの言うやり方はボクにもわかる。

ボクの脳内にあるゾンビリーダーはそれなりに発達しているから、ゾンビのコントロールをといて襲われるがままにまかせておけば、ゾ

ゾンビが人間を襲う動きで未宇ちゃん的位置は把握できるってことだ。
ゾンビリーダー内の動きが激しくなるからね。

でも、いくらなんでも小学生相手にガチでゾンビ案件させるつもりはない。

ゾンビを停止させるまでのわずかな時間で噛まれたらどうするのって話だし、その恐怖がトラウマになってもかわいそうだ。

「ご主人様は優しいですねー。まあゾンビになっても回復できるわけですし、べつに問題ないと思います。襲わせたくないなら地道に探索するしかないのでは？」

「そうだね」

マナさんの意見を取り入れて探索することになった。

☆Ⅱ

探索をするということになれば、できるだけ短時間が望ましい。
つまり、チームを分けて探索する。

でも、二次的な被害も抑えなくちゃならない。

人間サイドのぼっちさんたちがゾンビに万が一でも襲われないようにしなくちゃならない。

ボクは周辺のゾンビを全部コントロールしながら、チーム分けを考
える。

一番いいのは、できるだけチーム分けをしたほうがいいという原則
論からして、ヒーロゾンビと人間を一对一ずつ組ませるという方法か
な。

これだと、三チームできるから一番効率がいい。

でも――。

命ちゃんの瞳が何かの感情に揺れるのをボクは見逃さなかった。

命ちゃんって、男の人が苦手なんだよね。

たぶん、初老のゲンさんでも苦手なレベル。

ごく短時間なら、理性でなんとでもなると思うけど、生理的嫌悪感
があるのは否めない。

ボクとか雄大に対してはぜんぜんそんなそぶりはなかったんだけどね。

おそらくは『敵』『味方』『モブ』というようなわけかたをしていて、ボクや雄大だけが命ちゃんの味方なんだと思う。

ボクが頼めば、きつと命ちゃんは拒否しない。

でも、身が震えるほどの恐怖を他人に抱いているのに、あえて強硬するのもボクはいやだった。

「えーつと……、マナさんがぼっちさんたちといっしょに行動して、命ちゃんとボクは単独で動くっていうのはどうかな」

「ご主人様は命ちゃんにあまあまですねえ。てえてえ……」

尊いがなまると『てえてえ』になるらしい。

配信中にも何回か言われたことあるけど、リアルで言われたのはこれが始めてだよ。

「それでみんないいかな？」

「ワシらはそれでかまわんが……、そっちは単独行動でいいのか？」

「まあボクは強いし。命ちゃんもゾンビだらけの場所だと逆に安全かな」

命ちゃんが危険なときって、ゾンビよりも人間に襲われるときだし、こんなな周りがゾンビだらけだと、逆に問題ない。命ちゃんもゾンビを操る能力はあるみたいだし、そこらの人間よりはパワーに溢れてるからね。

ダンベル何トンもてますかってレベルです。

「では搜索開始！」

☆Ⅱ

集合場所と時間は決めてある。

一時間をタイムリミットとした。一時間あれば、おそらく小学生の女の子でもボクのコントロールレンジからはずれることも可能だろうから。

でも、いくら小学生だからって、そんな無謀な真似はしないと信じ

たい。

みんなバラバラの方角を探すことになっている。

ボクは当然、一番探しやすい上空からの探索だ。

ふわっと浮きあがり、多少の寒さが混じってきた秋空を進む。

秋の澄み切った空。天高い青空に近づくと、命ちやんたちの姿が豆粒くらいに見える。

このくらいの高さであれば、ギリギリ未宇ちゃんの姿も視認できるし、より早く探索できるはずだ。建物の中にいなければ、だけど……。

いつもは無上の気持ちよさを感じる空中遊泳も、今日は不安な気持ちでいっぱいだ。

「いないな……」

網の目のように広がる路地裏も、比較的広がりのある大通りも、ゾンビだらけで未宇ちゃんの姿はない。

ボクは未宇ちゃんのことをほとんど何も知らないといってもいいけれど、きつと本当に何も知らなかったら探しもしなかつただろう。

ゾンビになっても、はいそうですかで終わり。

テレビの向こう側の戦争で何人死んでも、朝ごはんを普通に食べて学校に行くのと同じだったはずだ。

この心配って気持ちは——。きつと、知り合いになったからだと思
う。

もっと言えば、ヒロ友として、まがりなりにも友人として認識した
からだと思う。

ボクってわりと普通に人間してます。

「見つからんね」

ひとりごとを呟き、ボクは適当なところで地面に降りる。

スタンと足を響かせて着地。

ゾンビのコントロール域は可能な限り広げている。人間的な感覚
でいえば、ずっとマウスをクリックし続けるような感覚に近い。もつ
と極狭い範囲だったら空気を吸うような無意識に近い感覚で操れる
んだけどね。ボクは”ゾンビ”であり、ゾンビは基本的には不随意筋
みたいなものなのかもしれない。

「建物の中かなあ」

そうとしか言いようが無い。少し離れたところをみると、道の途中から小さな商店街があるみたいだった。アーチが天空を覆っている。上空からはテントか何かのように見えたけど、百メートルかそこらくらいの長さしかない商店街だ。でも見えないところには違いない。

普通の建物はざっと見た限り、扉が閉まっただけで、もしも予想どおりワンちゃんが逃げ出したのを捕まえようとしたのなら、入ってる可能性は低い。他の建物をひとつひとつ探すよりは可能性は高いか。

商店街のほうに行ってみますか？

「昼でもちよつと薄暗いな」

もともと佐賀の商店街はシャッター街化が進んで、開いているのは半分くらい。だいたいは大型のショッピングモールとかにお客さんをとられて、でもそのショッピングモール自体も撤退して、なんにも残ってないというのが現在の状況だ。

シャッター率はたぶん50パーセントくらい。

べつに佐賀に限らずだけど、日本の地方都市はだいたいにおいてこんな状況です。

少子高齢化が悪いのです。

「いくつかはシャッターが破られてるな……」

クリーム色をした昔ながらのシャッターがぼこぼこにへこんでいる。穴をあけるような開け方ではなく、強烈な力で押し込められて歪み、その分、下に穴が開いている感じだ。

もちろん、ゾンビハザードの初期の頃には人間がいてゾンビに襲われたということも考えられるし、あるいはヒヤッハー系の人たちが物資を調達するために開けたということも考えられる。ただ、人間が開ける場合は、もうちよつとスマートに開けるような気がするけどね。

人間の子どもなら楽勝で入れるくらいの穴が開いてたので、とりあえず入ってみることにする。

中は当然のようになっくらで、物音ひとつしない。

ボクは夜目が利くから真っ暗でも問題ないところだけど、未宇ちゃんには物音が聞こえないから、ボクがいるってことを知らせる必要がある

る。

サイドのポシェットから取り出したるは——はい、スマホです。すつかり両手持ちしないと落とすようなサイズになってしまったスマホだけど、いまだ懐中電灯代わりくらいにはなる。ネットにつなげないスマホなんてただの板だという説もあるけど、少しは使える。リバーシも将棋もできるし、ダウンロード済みのなろう小説も読めます。

青白い光が店内を照らした。

いくつかのプラスチックの棚のようなものが散乱している。なにかが暴れたような後？

で、いました。

普通にゾンビさんです。

夜遅くまで仕事をしていたのか、くたびれたスーツを着た男の人でした。

はいこんにちわこんにちわ。

まあわかってただけだね。

ゾンビレーダーが発達しているボクには、ゾンビがそこにいるかどうかぐらいはわかる。

人間のほうはいるかどうかわからないのが困りものだけど、わざわざこんな危険なところに未宇ちゃんが入っていったのかという問題はあるかな。

ただ——、

ボクとの関係性を見る限りだけど、ワンちゃんはゾンビ犬にはならないみたいだし、つまりゾンビに襲われないってことだから、ゾンビなんかものともせず建物内に侵入するってことはありえる。未宇ちゃんもボクがゾンビをコントロールできるから安全だって思っていることはありうるかもしれない。

「ねえ。ゾンビさん。ここに小さな女の子来なかった？」

「あ、あああうううう」

無理でした。

このゾンビさんを人間に戻したらいろいろと聞ける可能性はある

けど、食糧問題とかもあるし、勝手に戻すわけにはいかないよね。

ざっと店内を見渡してみても、やっぱり未宇ちゃんはいなかった。限りなく残念な気持ち。シャツターが開けられた店はまだ小さくもあるけれど、やっぱり中にゾンビがいる状況だと、未宇ちゃんもない可能性が高いか――。

ガツカリ。

くるりと踵を返し、ボクは店内を後にしようとする。

と、そこで。

「あ、緋色ちゃん。久しぶりだね」

「ふえっ!」

店の奥から響いた声。

それは、まぎれもなく人の声で――。

幽霊？

そんなことも今のボクの状態からはありえるかもしれないけど、全身の毛が逆立つような感じがした。怖すぎて天井近くまでジャンプしてしまった。

き、季節はずれの幽霊とか勘弁してください。暗いのはいいし、ゾンビは全然怖くないけど、幽霊はちよつとだけやっぱり怖い。

「だ、誰?」

「僕です。小杉ですよ」

「うわあ……ビックリした。なんでここにいるの?」

そう。

店の中に存在感薄く隠れるようにして座っていたのは、小杉豹太。ボクが最初にゾンビにした人だった。

☆Ⅱ

小杉豹太さん。

命ちゃんを殺そうとした人。

だから、ボクは彼を哲学的ゾンビにしてしまった。哲学的ゾンビというのは行動自体は生前と変わらないけど、内的な精神活動が一切無

い状態のことを言う。

超精密なロボットみたいなものといえばわかりやすいかな。

今、小杉さんには他の人間がいるところで暮らしちゃダメっていうコードを走らせている状態だ。だから、町役場とか他のコミュニティに属してないのは当然の流れだった。あと、人間を傷つけてはいけな
いということも厳命しているかな。

いずれにしろ、彼は生きてるように見えるけど死んでいる。

本当のゾンビ状態だ。

小杉さんは肩をすくめた。

「どうやら、僕にはゾンビを避ける力があるようですので、ゾンビがいるところのほうに僕にとっては安全だと思っ
てそうしてます。このあたりの商店街は人はいないし、物資は多めなので都合がいいんですよ」

あいかかわらず猫背でボソボソとした喋りだった。

「まあそれはそうだよね」

ボクがそういうふうにしたんだし。ある意味では小杉さんもヒー
ロゾンビなんだし。

いやでも分かるんだけど、命ちゃんたちがヒーロゾンビで意識がある存在なのは、ボクとしても信じているところだけど、ボクが小杉さんにしたように、生殺与奪の選択権があるっていうのはかなりの問題だ。

ボクは人を殺せる。

ヒーロゾンビになった人は一瞬で意識を霧散させることができ
しまう。

無へと――。

死へと――。

人間とは何かって考えたとき、究極的にはボクは意識だと考えた。
その意識を簡単に奪ってしまえるのは化け物に違いない。

ボクはやっぱり人間にとっては特大級に危険な存在なのかもしれ
ない。

カエレって言われるのもわかる気がする。

「ねえ。ところで、ここらへんに小学生の女の子が来なかった？」

「女の子ですか？ いえ来てませんけど」

「そう……」

やっぱりダメか。

これはゾンビ荘のみんなを連れてきていつしよに探してもらえないかな。

そろそろ一時間も経過しちゃうし、いったん戻るべきかもしれない。

「あ、でもボクが来たのに、小杉さんってなんで声かけたの？」

命ちゃんの評価だと、小杉さんは利益的な計算をする人だ。

つまり、利益がなければ動かない人。

ボクが来たからといってわざわざ声をかける必要はない。

「いや、べつにたいした理由はないのですが……」

小杉さんは一瞬悩むような形を見せ、

でも、ボクのコントロール化では沈黙もウソも許されてないから、

「久しく会話をしていなくて寂しいと思ったからですかね」

「――」

哲学的ゾンビのあまりにも人間的すぎる答えに、ボクは絶句してしまった。

少しだけ最悪な気分だった。

あのときのボクの行動はベストなものでないにしろ、ベターなものだったはずだ。

でも、もしかしたら、殺すほどのことはなかったかもしれない。

ボクの確信的な気持ちとしては――、死んだ人間が生き返ることは無い。

いくら泣き叫ぼうが、胸をかきむしりたくなるほど苦しかろうが、それだけはボクの経験に裏打ちされた純然たる事実だった。

死んでしまった小杉さんを元に戻すことはたぶんできない。

取り返しはつかない。

沈黙――。

そして、小杉さんが思い出したかのように軽い口調で言う。

「ああ……そういえば、女の子は来なかったですが、先ほど犬の鳴き声はしましたよ。いつもは音のない商店街ですから珍しく思いました」

「え？ それ本当」

「本当ですよ」

ウソはいえない。

「どつちからしたの？」

ボクは急かすように言った。

小杉さんといっしょに店外に出て、指差してもらおう。

「確か、こちらから聞こえたかと思います。店内からですからわりと曖昧ですが」

「ありがとう」

「あ、ちよつと待つてください」

「え、なに？」

ボクの作り出した小杉さんの形をしたオブジェクトは、ここでもボクを呼び止める。

精神のカタチというものは小杉さんの生前のままだから、これは小杉さんが生きていたらそう判断したであろう内容だ。

「手伝いましょうか？」

「え？」

「いや。緋色ちゃんは小学生の女の子と犬を探しているんでしょう？」

「いいの？ 小杉さんの利益にはなんにもならないけど？」

「たいしたことでもないですし、べつにかまいませんよ」

無意識にボクがコントロールしている可能性もある。

少なくとも実害を与えることはできないように命じているし、その強制力は絶対だという確信もある。ただ、手伝いをお願いしようとは思ってなかった。

だとすれば、これは小杉さんの精神の一面であることは間違いないかもしれない。

どんな悪人でも気まぐれで人を助けたりすることはあるという不思議さなのかな。

本当は違う未来もあったのかもかもしれない。

ゾンビみたいな極限的狀況がなければ。

「じゃあ、お願いします」

☆
☆

商店街の近くにいるとわかればあとは片っ端から調べていくだけだ。

シャッターが壊れている店はいくつもあるけど、店内は狭くてスマホで光らせればいくら未宇ちゃんでも気づく。

で——、数件目。

中から犬の鳴き声が聞こえてきた。

「ここみたいです」

小杉さんの声にボクはうなずく。

ゾンビはいないみたいだ。

スマホの光を店内にさしこみ、中を覗いてみる。

いた！

床にはいつくばりながら何かを探しているような体勢になっているのは、まぎれもない未宇ちゃんだ。ゾンビの気配がないことから特に怪我をしている様子はない。

差し込まれた光に気づいて、未宇ちゃんが立ち上がり、こちらに振り返る。

そして、軽く手を振った。

ボクも心配したんだよって伝えたかったけど、手話がつかえないボクにはそこまで複雑なことは伝えられない。

そうだ。ヒイロ文字で。

空間に文字を投射して伝える。

『心配したんだよ』

そしたら、未宇ちゃんは頭をさげて、ごめんなさいって伝えてきた。

反省しているならかわいいからゆるしてあげよう。

そんな気持ちになるボクでした。

『ワンちゃんは何?』

未宇ちゃんが指差すと、ちょうど小さな棚の間に隠れるようにして唸り声をあげていた。

未宇ちゃんには懐いていたみたいだけど、久しぶりの外で興奮しちゃったのかもしれない。

粘り強く出てくるのを待っているみたいだけど、もう時間切れだ。

ボクはヒイロウイルスの浸透力を用いて、物理現象を歪める。

要するには念動力なんだけど、動作原理が少し違うからね。まあ、近似的な現象としてはサイコキネシスが一番近い。

つまり、お犬様にはなんら抵抗を許さず、無理やり棚から引っ張り出したのでした。

そして、ボクの腕の中にイン!

「おまえ……迷惑かけすぎ」

暴れまくるお犬様。

二度と噛まれないという覚悟を持って対処するボク。

やらせは сенぞ。

小学生の身体だと小型犬でも結構な大きさに感じる。

ぎゅつと身体全体で押さえつける感じだ。

「あれ? オマエ……」

昨日は洗っていない犬の臭いがしたけど、今日はいい匂いだな。

未宇ちゃんが洗ったのか。ぼっちさんが洗ったのかな。

なんにせよ、未宇ちゃんが腕を広げてウエルカムしているので、ワ
ンちゃんを返してあげた。

未宇ちゃんの手に渡った瞬間に、いままでの暴力的な行動がウソの
ようにおとなしくなった。

なんだそれ。やっぱりボクのヒエラレルキーって低すぎっ!?

☆
||

問題があります。

小杉さんの姿がぼっちり未宇ちゃんに見られているということ。

未宇ちゃんは耳が聞こえないせいか、あまり喋らない子みたいだけ
ど、小杉さんを連れて行かなくちや変に思うかもしれない。

小杉さん自身に帰ってもらおうような感じで行動させるか――。
でも。

小杉さんは寂しかったからって言った。

ただの超精密なエミュレータに過ぎないとしても、ボクはどうして
もここで踏ん切りをつけることができないでいた。

ハザードレベル 83

結局のところ――、ボクが選んだのは放逐だった。

小杉さんは動く死体に過ぎない。つまりは、物体に過ぎない。だから、ボクが罪悪感を覚えて、小杉さんを役場につれていっても自己満足に過ぎない。

ふと命ちゃんも嫌がるだろうと思ったのは、ただの言い訳に過ぎない。

そう、全部言い訳だ。

小杉さんには人のいい顔を”させて”、手を振り、自分はここで別れるという動作をさせてそこで別れたけど、未宇ちゃんはあいかわらず、ぼーつとした顔をして、小首をこてんとかしげて、何を考えているかわからない様子だった。

ボクはバレやしないかと思って、少しドキドキした。

ボクの罪悪感が音もなく伝わるんじゃないかって思って。

「帰ろう」

ボクは言う。唇の動きで悟ったのか、未宇ちゃんはワンちゃんを抱いたままコクンとうなづく。

少し待ち合わせ時間を過ぎていたんで、ボクは念動力で未宇ちゃんの身体を浮かせた。

「ひゃ」

初めて聞いた声は、ちっちゃくてかわいらしいものだった。

べつに未宇ちゃんは喋ることができないわけじゃない。自分で自分の声が聞こえないから音程がはずれることを嫌って喋らないだけだろう。子猫みたいに、驚いて鳴き声をあげることはあるってことだろう。

ボクは手を伸ばす。

すると、未宇ちゃんも手を伸ばして、まるで某天空の城のワンシーンのように、空を駆けていく。空を飛翔する感覚は慣れないうちは怖いけど、未宇ちゃんはそんなに怖がってる感じはしない。

何を考えてるのかな？

数分ほど飛翔すると、すぐに待ち合わせ場所に到着した。
みんな既に待っていた。

「あ、ヒロちゃんー！」

ぼっちさんが手を振る。

ボクも手を振りかえして、地面に降り立つ。

みんな、未宇ちゃんの姿を見てほっとしているみたい。

「やっぱり、ワンちゃんがどこかにいったようだよ」

直接聞いたわけじゃないけど、状況から判断するにおそらく間違いないはずだ。

ゲンさんが膝をついて、未宇ちゃんに視線を合わせた。

「怪我はないか？」

コクン。聞こえてなくても空気を読むのはうまい。

未宇ちゃんはみんなを見渡して、頭をさげる。ごめんなさいって
言ってるみたい。

「叱らないであげてね。未宇ちゃんも悪気があったわけじゃないんだ」

「わかってるよ。ヒロちゃん。でも、心配したよ」

ぼっちさんは、手話で何かを伝えてるようだった。

未宇ちゃんも同じく手話で何かを話している。

同じようなことが起こらないようにすることだろうと思う。

「先輩……何かあったんですか？」

命ちゃんは聡いから困るね。

べつに何もなかったってわけじゃないけど、あえて小杉さんに会ったなんていわなくてもいいだろう。小杉さんをゾンビにしたことに罪悪感を感じるとか、ボクってカエレって言われてもしようがない部分があるとか、そういうネガティブなことを伝える必要もない。

「大丈夫。なにもないよ」

「そうですか……」

命ちゃんの顔が少し曇ったように見えた。

ボクは目を閉じて、すこしはぐらかす。

ボクがやったことや、やろうとしていることは必ずしも正しいとは

限らない。

でも、あまり気にしないようにしようと思う。

ボクって、やっぱりほんのちよつとした言葉にフラフラしすぎなんだよな。

陰キャってそんなものかもしれないけど、たかが『カエレ』って言われたくらいで、ちよつと傷ついてる。気にしすぎている。

こんなんじゃない、みんなと仲良くなんてできやしない。

世界を変えられるかはわからないけど、助けられる誰かはいるかもしれない。

「アクシデントありましたけど、まだ時間はありますよね」

ボクは気をとりなおして、ゲンさんに聞いた。

ゲンさんは腕時計をみて時間を確認している。

まだ、太陽は天頂に昇る前。九時頃に出発して、今は十時半くらいにしかかってない。

夜には程遠いし、天気が崩れてもいない。

「ああ、問題ない。それじゃ向かうか」

今度は未宇ちゃんもボクの隣にいる。もしもワンちゃんが逃げ出しても、一瞬で念動力で固定するから絶対に逃げられない。

そんな位置どりで進んだ。

☆
☆

とある建物の屋上階。

太陽光パネルはブラックダイヤモンドが碁盤の目のように規則正しい並びをしていて、一つの建物に相当な量がある。

町役場に百枚敷き詰めるというからたくさんの箇所を回らないといけないと思っていただけ、そういうわけでもないみたい。

一箇所だけで、結構あるんじゃないかな。

でも、固定されている太陽光パネルは結構巨大だ。一つが畳一枚分ぐらいはあって持ち運びはしにくそうだ。もちろん、建物の近くまではトラックで来てるんだけど、そこまで持ち運ぶのも大変かなあ。ま

あ大人が何人かいるし、ヒイロゾンビの力は大人数人分ぐらいは楽勝だろうし、余裕かな。

ボクたちは全員で七名だけど、未宇ちゃんは当然戦力にならない。はずし方を知っているのはたぶん、ゲンさんくらいか。

「どうやってはまずのか教えてもらったら、ボクも手伝います」

「そうか？ ベつに難しくはない。固定されているボルトを順番どおりにはずしていくだけだぞ。ただ、最後のボルトをはずすと支えがなくなるから、そこは何人かでやったほうがいい」

ゲンさんが手馴れた手つきでレンチを使ってボルトをはずしていく。

ボルトといってもボクが手でわかを作るぐらいの巨大なやつだ。あとは小さめなボルト、ナット、ワッシャーといいながら、いろんな要するにねじ的なやつをはずしていくてる。

やってる作業は、たぶん単純。

下のフレームと呼ばれる金属質の設置板から、バリバリバリっ下がしていつてるだけ。

ボクにもできそうだな……。

「ん。ご主人様。バリバリやっちゃいますか？」

ニコニコ顔で聞いてきたのはマナさんだ。

「えと……たぶん、大丈夫だよ。ボルトをはずすぐらいボクにもできるし」

「ご主人様がポンコツっぷりを発揮するチャンスですね」

「マナさんきらい」

「ああ、拗ねるご主人様も大好きです」

この変態お姉さんをへこます方法を誰か教えてください。

ゲンさんはものの数分で一枚のパネルをはずした。

畳一枚分のそれは大人であれば簡単に持ち運びができる

ぼっちさんと湯崎さんが二人で一枚を持って、下の階に運んでいく。

傷をつけないように慎重な動きだ。

やっぱりボクもやったほうが効率よさそう。

「先輩、無理はしないほうが」

「そういうふうにはフラグ立てしないでよ。これぐらい簡単だつてば！」

命ちゃんもボクに対する信頼が足りない。

だいたい、ボルトをはずすくらい小学生でもできるよ。

ゲンさんは順番があるっていつてたけど、そんなの一齐にやればいだけだ。

念動力を使って！

一気にグルグルグル。

ボルトをポンつと全部一気にはずしてしまう。

もちろんパネルをコンクリートの床に落とすなんて愚行はしない。

ちゃんと浮かせてます。

ホラ楽勝！ 五秒もしないではずせたよ！

「どやあー！」

「はいはいかわいいかわいい」

雑！

マナさんの言葉が最近雑！

「うまくできたな」

ゲンさんのほうがむしろ優しげだよ。

ボクのことを見た目どおりの年だつて思つてるからかもしれないけど。

「こんな感じでいいなら、一気にやれるよ」

目の前にある現象を歪めるのは、目の前にいるゾンビを操るのときとして変わらない難易度なんだ。もちろん重くなったり、操作量が増えたとそれなりに疲れるけど、それでも一個一個ボルトをはずしていくよりは圧倒的に簡単だ。

「何枚かはずしたら傍らに置くから、拾つていつてね」

みんなもここに来た意味がないと困るだろうから、ボクはかたつぱしから太陽光パネルをはずしていつて、ゆっくりと地面に置いた。

流れ作業的にあとはみんなが各々パネルを運んでいつて、建物に横付けしているトラックを重ねていつてる。上に重ねていつてるん

じゃなくて横にね。要するにブックシエルフみたいな感じで五枚くらいで一区切りとしている感じで横に置いていつてる感じ。

二十分くらい経つと、トラックに積み終わった。

全部で二十枚くらい。

単純計算だと、あとこれを五回くらい繰り返せばいい。

がんばれば今日中に終わるかもしれない。

でも、みんなもそれなりに疲れてるだろうし、今日はこれで終わりかな？

☆Ⅱ

町役場に帰ってくると、まるで配信の時のように歓声で迎えられてビックリした。

「おかえりヒロちゃん！」「電気よみがえれよみがえれー」「スマホでソシャゲしたいっす。あ、ソシャゲないか。オフゲしたいっす」「配信まだー？」「世界一かわいいよー！」

なんだか調子がいいなと思いつつも、悪い気分じゃない。

いつのまにか『カエレ』の文字は白いペンキにぬりつぶされていて見えなくなっていた。

「おかえりヒロちゃん。特に問題はなかったかな？」

あいかわらず余裕の表情なのは葛井町長だ。

こころの問題という意味では、いろいろとあったけど、物理的になにか影響があったわけじゃない。ゾンビみたいにみんなを恐怖で席巻するような、そんな何かがあったわけじゃないから。

「特に何もなかったです」

と、ボクは答えた。

葛井町長は満足そうに笑みを浮かべ、それから町長室にボクたちを招いた。

町長室に入ると、既に熱いコーヒーが用意されている。

ふう。ボクのだけミルクコーヒーになっちゃってます。町長が気を利かせてくれたんだろう。

こういうところが上手いよな、この人。

対人感受性が高くて、引きこもりだったとは思えない。

「あの、町長……ボクたちがいない間にあのアレを消してくれたのは町長の指示ですよね？」

「うーん。まあ多少ナツジを効かせたところではあるけど、僕の指示ではないよ」

「ナツジ？」

「行動経済学理論で言うところの、無意識的な促しのことさ」

「促し……」

「僕は彼らに何かを強制した覚えはないってことだよ」

「ふうん……どういうふうに言ったの？」

「ヒロちゃんが帰ったら困るよねえって、みんなの前で言っただけだよ」

「だいぶん具体性があるような」

「そうかな。まあいいよ。みんなが自発的にあの”落書き”を消したのは事実さ」

落書き。

なるほど、そんなふうに定義づけるわけか。

しばし、沈黙がたれこめた。

「ボクたちがいない間に何か問題はありませんでしたか？」

「特に何も無いね。まあみんなしてヒロちゃんたちの帰りを恋人が来るのを待ち焦がれる中学生男子みたいな気持ちで待っていたからね、そんなソワソワしているときに不審な行動を取れる人間なんてそんなにいやしないよ」

「それもそっか……」

ボクとしてはフーダニット、すなわち誰がやったかというよりは、ワイダニット、すなわちどうしてやったのかのほうに気がなっている。

カエレという言葉の意図はやっぱり知りたい。

落書きであると断じて、もはや気にせずに、頓着せずに、何事もなかったかのように振舞うというのが政治的には正しいとしても、ボク

自身としては、やっぱり気になるところなんだ。

「気になるのかい？」

町長がなにもかも見透かしたように言ってくる。

ボクは微かに頷いた。はつきりと頷けなかったのは町長の気持ちもわかるからだ。

「ほほえましいほど素直だね」

それはプラスの評価というよりはマイナスの評価だろう。

ボクは政治に向いていない。そんなのはわかりきってる。だって、ただ楽しく配信したいだけの一般人だし。チート持ちだけど、やっぱり普通の人間だし。

こんな極限状態でシムシティをやれるほど、人生達観していない。

ゲームならいくらでも核戦争起こせるけどさ。

現実はこのいのがかかかってるわけで……。

政治だから大多数の人に肯定されたからそれでオツケーなんて思えないよ。

だから、その一つの否定に敏感になってるんだ。

気にしないように我慢してるけど、やっぱりどこかで納得したい自分がいる。

「まあ、君が犯人探しをどうしてもしたいというのなら止めはしないよ。パネル集めもボチボチでいいし、人間の生存領域を広げるのも気が向いたときでいい」

「え？」

そんなんでいいの？

町長としては、人間の生存圏を是が非でも広げたいんじゃないの？

「僕が人間総体のために身を粉にして働いていても思ってるのかな？ 単に死にたくないからというのと、そうするのが一番楽しそうだからだよ。政治をやるうとしてるのは、みんなと利害が一致しているに過ぎないんだ。僕がこれだけワガママなのに、君に従順になれっていうのも違う気がしてねえ」

素直なのは、町長のほうじゃないかと思った。

こんなこと、他の誰にも聞かせられない。

町長はみんなのことなんてどうでもいいって言ってるんだ。ただ、みんなのためという建前を完遂するのが、一番自分の意に沿うから、そうしているだけ。そう言ってるみたいだった。

「まあ、感謝されるのは嫌いではないよ。みんなのために働いているという実感は悪くない気分にはさせるしね。僕も人並みには、誰かのためになんてことも考えたりはするけどねえ……」

そこで町長は少し息を止めた。

「ヒロちゃんがチートを持つてるのはわかるんだけど、だからといってなんでも解決できるわけじゃないってことなんだよ。難しいことは大人に任せてもいいし、誰か他人に頼るのもいいかな」

「ボクってそんなにひとり全部しようとしてるのかな」

「ヒロちゃんはわりとがんばり屋さんなイメージがあるね。それで疲れちゃってガス欠になるタイプじゃないかな」

それはそうかもしれない。

大学生で引きこもりぎみだったのは、がんばりすぎた反動って雄大には言われてた。

「だから、もう少し自分がしたいようにしてもいいと思うけどね。無責任な大人たちはあれしてこれして言うかもしれないけど、なかなか人間はしたたかに生きていくものだよ」

「そんなもの？」

「そんなものだよ」

町長に言い切られてしまって、改めて思う。

ボクは何がしたいんだろう。

ここに来たのは配信したくて、親友に連絡がとりたくて、ついでに人間と共存したくて。

そんな感じだ。

誰かがボクを拒絶してたとしても、それは最初の目的とは無関係だ。

そもそも誰かが誰かを嫌うのを止められるわけもないし、いくらゾンビ利権があつたとしても、そうじゃないところで、勝手に嫌われるということはありえる話だ。

だけど一方で、ほとんどなんにもしてないのに拒絶の言葉を使われるのには納得がいかないって気持ちもあるし、別に復讐心とか敵愾心があるわけじゃないけど、どうしてって気持ちは止められない。

「これもボクの本心だ。
うろう。悩みどころ。」

「先輩がどちらを優先するのかって話ですよ」

命ちゃんは頭がいいな。

ボクは優先するとか決定すること自体が大事なんだよ。

凡人だから。

「命ちゃん。今の時点で犯人ってわかるのかな？」

「難しいと思いますが、情報を集めれば可能かもしれないですね。例えば、ペンキの出所とか」

ほとんどタイムラグなく答えてくれた。

そうだね。配信もしたいけど。気にしないふりもできないよ。

「ボク……犯人探しもちよつとはしてみようかな」

「太陽光パネル集めは休憩するのかな？」と町長が確認の意味で聞いた。

「そちらはそちらで続けるけど、やっぱりどうしてって聞きたいから」「くだらない理由かもしれないよ。たとえば、僕が言ったとおり、”落書き”なのかもしれない」

「それでも、ボクの素直な気持ちとしてはやっぱり聞きたいな。どうして”カエレ”って書いたのか。ボクは知りたいんです」

「ヒロちゃんがそうしたいなら、それを止める理由もないね」

町長って案外ボクに甘いのかなあなんて思ったりもする。

小学生らしい素直さがよかったのかもしれない。

大人だと、それなりに責任が生じるって思うんです。

☆Ⅱ

ペンキの出所はなんてことはなく、町役場の中に在庫がたくさんあった。

赤色のペンキだつてたくさんあるし、誰だつて入れる倉庫みたいなところに無造作に置いてあった。倉庫はみんなの住んでる共同部屋からは離れたところにあつて、誰にも見つからずに持ち出すことは比較的たやすいと思われる。

「臭いとかでわかんないのかなあ」

犯人がペンキを塗りたくる。そのときの臭いが服に染みつく。

だから犯人がバレるということも考えられる。

そんなふうを考えていたんだけど。

「油性塗料ならかなり臭うが、水性塗料ならあんまり臭いはしないぞ」と、ゲンさんが教えてくれた。

うーむ。シンナーっぽい臭いが微かにしてくるけど、確かにものすごい強烈な感じはしない。あの文字を見た時も、強烈な印象は色合いだけで、臭いに対しては確かにたいして感じなかった。

ミステリ的に言えば、どうしてあのとき誰も臭いについて言及しなかったのでしょうかという感じだ。けっして描写不足だからではなく、臭いがほとんどしなかったからだ。

というミステリ的小技を使いつつ、要するに臭いが犯人に染みつくというのはあまりなさげな感じだった。もちろん、微妙な臭いで気づく人はいるかもしれないけど、みんなお風呂に入つてなくて、正直ちよつと臭いから、香水とか消臭スプレーでごまかしてる人も多いんだよね。そっちのほうが強烈なくらいだ。

そんなわけで――、

結論からいうと、まだまだ犯人はわかりそうになかった。

ハザードレベル84

犯人探しは順調じゃないけど、太陽光パネルは順調だ。

そろそろ最後の配信から一ヶ月の時間が経過しようとしていた。町役場に来てからは三週間くらいかな。

つまりそろそろ十一月です。

九月の末くらいに最後に配信したきりだから、結構な時間が経つてるかもしれない。

それまでの間に、太陽光パネルを集めたり、町民の皆さんを温泉につれていったり、ゾンビ荘のみんなをちらほらと町役場につれていたりといういろいろした。

ちなみに温泉に行くときはみんな大きなトラックに寿司詰め状態でいくんだけど、女性と男性で分けて行って、男の人の番にはただ待ってるだけなのが難儀しました。

だって超暇だし。番台さんみたいにぼーっと待つとくしかかない。

ボクとしては元男だし、ちよつとはみんなに混じって入ってもいいかなって思ったんだけど、命ちゃんには全力で止められるし……、ボクも言ってみただけだ。さすがに小学生女兒を始めてもう三カ月近く経つし、自分の立ち位置というのもわかってきた気がするよ。

それでいま強く思うのは、

——雄大どうしてるのかな。
ってこと。

一ヶ月もあれば日本横断くらいできそうだけど、徒歩だから時間がかかってるんだろう。

それにゾンビという障害物もあるし、あるいは人間だって敵になりうるかもしれない。

心配ではある。

でも、雄大は——ボクの親友は優秀だ。

きつと大丈夫だろう。

でも早く連絡をとりたい。

犯人探しについては、あのカエレの文字のあと、特に何か事件が起

こつたわけでもない。

ある意味、事件は風の状態。

悪くいえば膠着している。

事件は風化し、みんなは何事もなかったように暮らしている。

ボクは少しずつ町役場になじんでいってるとし、遠巻きに見ていた人たちもぼちぼち話しかけてくれるようになった。ヒロちゃんがんばってねとかそういう一言くらいだけだ。

今のボクは最後のパネルを町役場の屋上に敷き詰め終わったところだ。

「できた？」

劇的ビフォアアフター状態だった。

なんということでしょう。

殺風景だった町役場の屋上は今や黒いパネルが太陽の光をいっぱい浴びて、たくさん電気を作り出している。土台の部分を斜めにして、太陽光をできるだけ受けとめることができるようにしているんだけど、そのせいで斜面の影ができてしまっているともいえるかな。

ついでに言えば、スペースもなくなっちゃったんで、屋上に置いてあった菜園は畑に移動しました。

むしろ殺風景になってるかもね。

ただ、洗濯物を乾かすスペースとしても利用しているから、物干しロープがいくつか空中を走っていて、そこに白いシートがかけられていたりもするし、太陽光パネルだけのスペースってわけでもないよ。雨水タンクもあるし。

そしてついに――。

お昼間ではあるけれど、ようやく町役場に電気がついた。

あかるい人類の英知の光。

その瞬間に町のみんなは沸き立つ。

「やったー。光だ」「光あれー」「ヒロちゃん最高っ！」「これでようやく戻れるんだな。元の暮らしに」「長かったなあ」「ゾンビハザードからもう四カ月か」「政府は何してんだろうな……」「ヒロちゃんが佐賀にいたの知らないんじゃない？」「光ってこんなに安心するんだな」

おおげさだとは思わない。

ただ光がついたただけだけど、それは人類文化の象徴でもあるんだ。葛井町長が壇上にあがって演説をはじめ。

「えー、今日は歴史的な一日になりました」

みんな、じつと聞き入っている。

「ゾンビが巷にあふれてから四カ月。ようやく私たちも人間らしい暮らしを取り戻すことができました。まだ小さな一歩にすぎないかもしれませんが。しかし——、我々は初めて自らの手で文明を取り戻すことができたのです！」

煌々とした光が、町役場のホールを照らしだす。

みんなの顔が希望に輝いているように見える。

探索班のみんなはひとりひとり壇上にあがり、表彰された。

最後は——ボク。

最初に町役場に来たときよりは緊張していない。

配信もリアルも、コミュニケーションであることには変わらないから、少しは慣れる。

みんな見知った顔になった。

ひとりひとりとは会話はしていないにしろ、知らない人じゃない。だから安心した。

ボクが町長みたいになまいことを言おうとしてもきつと失敗するに決まってる。

普通でいいんだ。自然体で。

「みんな知ってると思うけど、ボクがここに来たのって、ネットにつながって遊びたかったんだ。みんなが生きるか死ぬかってときに不謹慎かもしれないけど……、ボクは配信してワイワイみんなといっしょに楽しみたいって気持ちが強かったんだ」

「でもゾンビいるし」

「世間ではゾンビが溢れてるし」

ゾンビがいて生存が脅かされている。

自分の意思がゾンビにのっとられる。無に消えるという恐怖。

「楽しめるわけないっていうのもわかるんです」

「楽しいって思えるのはきつと余裕があるからだと思います。ボクがみんなに余裕を配れるなら、みんな楽しんでくれるかなって思うんです」

「だから……、みんなが安心して眠れるように、ボクはボクができることをしていききたいです」

ひえう。これじゃ、まるで小学生並みの感想文だ。

自分でも何言ってるのかよくわからない。

支離滅裂で、感情的で、なによりゾンビ的な。

でも――。

最初、パチパチと小さく手が打ち鳴らされた。

すぐにそれは渦のように大きなうねりになって、ホールに響き渡る。

「いいよー」「ヒロちゃんがいれば安心する」「ヒロちゃんといっしょにいれるだけでオレたち勝ち組じゃね?」「ヒロちゃんに着床したい」「おまえゾンビ部屋いくか?」「余裕があるのが人間。余裕を配れるのは天使」「好き」「早く配信してー!」

みんなはボクを認めてくれたみたい。

うれしい! うれしいよ。だってみんなボクのことを心のどこかではゾンビだって、異物だって、化け物だって思ってた、来てほしくない帰ってほしいって思ってるんじゃないかって。

ボクが人間に認められるために努力しても、何も認めてもらえず。

「そんなのあたりまえ」って思われるんじゃないかって。

そんなふうを考えていたから。

じわっと瞳の奥から謎のヒロちゃん汁が出てくる。

「先輩。よかったですね」

檀上から降りたところで、命ちゃんがボクに声をかけてくれる。

ボクは「うん」と答えて、気持ちを新たにす。

町役場は新たな局面を迎えている。変革な動きは急速で、ボクの気持ちもフワフワしているけど、振り回されないようにしようと思う。

見上げ、人工の光がボクの顔に優しく当たった。

「やっぱりヒロちゃんは素直だね」

町長室で葛井町長に言われてしまった。

「腹芸はできないです」

「さすがに小学生で腹芸できたら逆に怖いよ」

でもピンクさんあたりならできそうなんだよな。

小学生も侮れないと思うんです。

「それで、さっそくだけで配信するかい？」

「あ、その前に連絡とりたい人がいるんです」

「ああ、そう言ってたね」

「うん。どうやったらいいんですか？」

「普通につなげればいいよ。スマホの設定で……そう、そこで町役場のIDを選んで、パスワードは今からいうとおりにもらって」

町長の口から語られるパスワードを入力する。

無線LANとかにつなぐのと同じだな。どこでも災害時にもつながるってところ以外は普通のネットと変わらないらしい。

よしつながった！

あとは、ラインがいいかな？

アプリでいれて。雄大の電話番号でダイレクトに友人登録して！

九州以北がどういう状況なのかわからなかったから、少しだけ待ったけど、すぐに登録承認がきた。

ラインで通話がかかってくる。

雄大からの連絡だ。

みんながじっとボクを見てる。

「あ、あの、みんな恥ずかしい……」

「雄兄いからの電話。まるで恋人からかかってきたみたいにとるんですね……」

命ちゃんの目が怖かった。

「ち、違うよ。単にこれだけの人数に見られながら電話するのが嫌なだけだし」

「先輩って節操ないですよね」

「友人に電話かけるのに節操って何!?!」

「先輩って男の人が好きなんですか?」

「男?」とぼつちさん驚愕。いやいや違うって。

そもそもボクって恋愛感情がまだよくわからないし。

雄大は普通に幼馴染で一番の親友ってだけじゃん。

命ちゃんもいっしょに育ったのかなのになんでそんな変なこと言うんだろう。

マナさんは「青春してますねえ」ってなんだかニヤニヤしてるし。なんで普通に友人と連絡とるだけで青春なの?

三角関係なの?

「はあ……。先輩……雄兄いにはよろしく伝えてくださいね」

「う、うん」

命ちゃんのお許しがでたので、ボクは部屋の中をきよろきよろする。

どこでかけたらいいかな。えつと……。

そうだ!

ボクは町長室の背後にある大きな窓を開け、お行儀が悪いけど、窓の縁の部分に足をかける。

ぴよんつとジャンプして、空中に浮かびあがった。

これなら誰にも聞かれる心配もない。みんなの視線もなく気兼ねなく雄大と連絡がとれる♪

あ、やべ。また語尾に♪がついていた。これではまるで……。いやなんでもないよ。

「えつと、雄大。久しぶり!」

『おー。緋色。久しぶりだな。元気してたか』

「ボクは元気。そっちは大丈夫? けがしてない?」

『おお。大丈夫だぞ。あれから旅は順調だ。危なくなったらヒロちゃんズボイス集もあるしな』

インターネットでダウンロードできる状態になっているみたい。

特に用途別に、睡眠用。ゾンビ撃退用。ゾンビ沈静用。その他もろ

もろあるみたい。

なぜか、ボクがお水をのんでる音や、リコーダーをちゅぱちゅぱしている音とかもダウンロードできる状態になっている。コメントには「助かる」と書いてあった。なにが助かるのだろうか。

「いま、雄大はどこらへんにいるの？」

『いまはまだ関東だ。東京あたりが一番やべえ状態だからな。東京を避けるのに時間がかかっちゃまった。あとはすこぶる順調だな』

「ボクに何かしてほしいことない？」

『あー、特にないが。あ、そうだな。ヒロちゃんとしてのカワイイ姿を見せてくれよ』

カワイイといわれて、なんだか得体のしれない感情が湧く。

正直なところ、すごくうれしい。

自分の容姿はともいいという自覚はあるし、褒められると素直にうれしいんです。

はっ。これが素直さか？

「ビデオ通信にしたよ」

『おまえ、浮きながら通信してるの？』

「あ、うん」

『そっか。やっぱ緋色はヒロちゃんなんだな』

「なにそれ？ そんなのあたりまえじゃん」

『まあそうなんだけど、オレの視点からすれば、親友がいきなり女の子になってるわけだからな。実感というかそういうのが無いんだよ』

「ボクはわりと慣れたけどね」

『女の子になっちゃうーってやつか？』

「なんか語弊があるけど、身体が前と違うのは自覚してるよ」

『ふうん。ならいいんじゃないか。おまえかわいいから襲われないように気をつけろよ』

「雄大セクハラ！」

『バーカ。親友無効だろ』

「うう……」

親友といわれると、なんでも許さないといけない気分になってしま

う。

そんなマジックワードだ。

『最近、おまえなにしてるの？ ネットつながってるんなら配信するの？』

「うん。町役場で衛星インターネットを使えるようにしたんだ。配信もいまからするつもり」

『へえ。じゃあ、いま町役場いるの？』

「うん」

『成長したなあ』

しみじみと言う雄大。

「え、なにが？」

『大学生入ってから引きこもりだったお前が人前に入るなんてな。それに今のおまえはゾンビを操れる超有名終末配信者だろ。いまのヒロ友登録者数知ってるか？ 5億人だぞ』

「マジか」

マジか……。いつのまにか億ってましたか。

『まあ片田舎の町役場だとしてもならんと思うが、配信するときには気をつけるよ』

「気をつけるよ」

『がんばれよ』

「うん♪」

そんな感じで、町長室に戻りました。

「先輩が、すごいニコニコしながら帰ってきた」

「親友と久しぶりに話せてうれしかったただけだよね！」

命ちゃんのヤンデレ度が急激に上がってきたみたいで怖いです。

☆
＝

町役場には小さな放送室が存在する。

この町での小さな出来事を話すには適した場所。

ここでボクは配信を再開しようと思う。

しっかし5億人とかマジなんですかね。

ドキドキしてきた。

「どれだけの人が登録しているんだろう。」

ネットに繋げる人である程度生存状況的に余裕がある人はほとんど全員登録してるんじゃないだろうか。

もちろん、ゾンビ利権狙いで、純粋にボクのが好きってわけじゃないと思うんだけど、数値はウソをつかないし、数値は裏切らないし、無いよりあったほうがいいよねって思う。

きつと、悪いことじゃないはず。

えつと、まずは持ってきたノートパソコンを設置してつと。

ボクとしてはこれで終わり。

あとは命ちゃんがすべてよしなに取り計らってくれる。

「えつと、マナさん。普通に隣に座ってるけど大丈夫？ 下手すると五億人に姿をさらすことになっちゃうけど」

「そうですねえ。わたしに配信力はないので、素直に配信前には出ようと思いますよ」

「あ、そうなんだ」

少し不安もあるかな。

マナお姉ちゃんは変態ですが、アドバイスは有用だし。

「あ、ご主人様が何かわたしのことを考えてる気がします」

「んー。そういやツブライターで配信しますって告知したほうがいいかな」

「いいんじゃないですか。たぶん、政府関係者とかは常時監視中だとは思いますが」

「やっぱりそうなんだ……」

「ご主人様を選んだ結果ですから、そのあたりはどうしようもないですよね」

「まあそうだけど……じゃあここが町役場だとバレないほうがいいかな」

命ちゃんを見てみる。

パソコンをいじりながら、ぐつと親指をつきだして答えてくれた。どうやらいまいる場所の欺瞞活動は完了しているらしい。

とりあえず、ツブヤイターで、いまから一時間後に配信しますって打ってみる。

うお。えげつないほどいいねがついている。爆速すぎて怖い。

いいねってついても、べつに本当にいいねって思われてるわけじゃないだろうけど。

やっぱり、受けいれられてるっていうのがカタチとして見えるのは悪くない。

うれしいって思う。

DMのほうもかなりたまってるな。百万件くらい？

正直、こちらもう全部見るのは無理って思います。

あ、でもピンクさんからも来てるな。

『ヒロちゃんの配信が復活して、ピンクうれしい』

八歳児のピンクさんの姿を思い描きながら、セリフとして読んでみるとほほえましい。

「ねえ。命ちゃん。ピンクさんには場所を教えるもいいかな。DMでだけど」

ぐつと親指を突きだす命ちゃん。

べつに教えても問題ないらしい。

どんな防諜技術なんだと思いつつながら、ボクはつらつらとDMに打つ。

いままでどんなことをしてきたか。いまどこにいるのか。

そして、これからどうしようとしているのか。

そんなことを世間話のように話したのです。

ハザードレベル85

配信まであと二十分。

命ちゃんはあいかわらず忙しそうだし、ボクのページにはもう既に待機者の列。

うげ。既に七百万人くらい待機してる。

なんか動作がもっさりしてるような……これって大丈夫なのかな。

「命ちゃん。なんか動作がスローリイなんだけど」

「そうですね。これだけ人数が多くなるとそうなりますよね」

「命ちゃんのほうでなんとかできないの？」

「配信環境自体は借り物ですからね。どうにもならないですね」

「じゃあ、みんなには、ボクの声が遅れて聞こえたり、ブツブツ切れたり、動画が止まったりする可能性もあるってこと？」

「そうなりますね」

「なんとかできないの!?!」

ボクはあわてた。

配信はボクが人間総体とコミュニケーションをとる手段だ。

今後人間との関係がどうなるにせよ、言葉も交わさないと何かを決めるというのはちよつとどうかと思うわけです。

町役場の人たちとはリアルなコミュニケーションをしているわけだけど、それはある意味試験的な何かだ。

「ご主人様の配信姿を後ろから眺めるというのも乙なものですね」

マナさんは放送室の後ろの方で待機している。

じっくりねつとりボクのことを見ているみたいだけど、べつに気持ちの悪い視線ではないので放っておいてます。

「マナさんも何かないの?」

配信には姿をさらさないと決めたマナさんだけど、外野だからか余裕の表情をしている。

「ご主人様が呼びかけて自発的にリアルタイム視聴を取りやめてもらうとかしかないですよね」

それぐらいしかないか。

「ちなみに、ご主人様の動画に対する配信リソースはいま全体の50%くらいは振り分けてるそうですよ」

「え、それってどういうこと?」

「自発的に、その運営会社さんがご主人様の動画に対して回線を太くしているんです。700万人でも落ちないのは、それが理由ですね」

「ふうん……」

「とはいえ、想定外な数値なので、いつ落ちてもおかしくないですけどね」

「じゃあ、呼びかけてみるね」

「あ、お待ちください」

マナさんはボクを呼び止めた。

「え? なに」

「ツブヤイターとかで告知したほうがよいかと思いますよ。配信動画で大人気のヒロちゃんと呼ばれてもむしろ数が増えるだけかと」

マナさんは苦笑めいたそんな表情だった。

そんなものかなと思う。

確かにボクの人気といえますか、半分くらいはゾンビ利権を狙ってるんだろうけど、リアルタイムで見たいって人は多そうだ。

生存に直接かわるゾンビ配信だしね。気持ちはわかる気がする。

「じゃあ、ツブヤイターで、リアルタイム視聴にこだわらない人は後でアーカイブを見てみてくださいって言うね」

ボクの動画のアーカイブだけど、厚生労働省のページもだけど、基本的にミラーリンクが一つの動画に対して200くらいは増殖している。非公式的なアップロードされたものを含めれば、その数は数えきれないくらい。

各国の言語に翻訳されていたり、字幕がついていたりと、バリエーション豊か。

これもゾンビ的特性のひとつなのかな。

だから、アーカイブはほどよく分散されて、特に問題なく視聴できると。

「ツブヤイターで呟いてみたよ?」

視聴者さんの数は、700万人から微動だにしない。

「あれ? ピクリとも動かないんだけど」

「増減なしってことは、入った人が自発的に出ていってることですから、ご主人様の言うことを聞いている人はいるってことでしょね。でも、中には自分だけはいいいとか、自分はどうしてもリアルタイムで見たいと考えてる人もいるはずですよ」

「そうなのか……」

自分勝手だっと思わなくもないけど、これもまた生存にかかわることだけに、強くは言えないと思う。でも、動画配信自体ができなくなっちゃったらどうしようもない。

どうしよう……。

「先輩。運営会社からDMが来てますよ」

命ちゃんの声にボクはツブヤイターのDM欄を見てみる。

あ、本当だ。

ご丁寧にも日本語で書かれてる。

『ヒーローちゃん様。日頃より当社サービスをご利用いただきまして誠にありがとうございます』

『さて、今般よりヒーローちゃん様の動画配信については、折からのゾンビ禍に対する有効的な対策になりうる可能性もあることから、政府関係者含め、多くの方からの衆目を集めるところでございます』

『これも日頃よりのヒーローちゃん様のご活躍によるところでございますが、動画配信の物理的容量の関係から、当社サービスが十全にご利用できなくなる可能性があります』

『当社としましては、ヒーローちゃん様の動画の価値を鑑み、当社リソースのほとんどをヒーローちゃん様に振り分けているところでございますが、それでもなおヒーローちゃん様の人気はとどまるところを知らず、当社のか細いリソースでは追いつかないのが実情です』

『そこで、ヒーローちゃん様の動画配信につきましては、視聴者数を限定して百万人までに絞るという案をご提案いたします。いかがでございますでしょうか。当社のご提案にご承諾いただけましたら、ご返信を

お願い申し上げます』

えーっと。

ボク、小学生の設定なんだけど……。ちなみに全部の漢字にわざわざフリガナ振ってます。でも言葉づかいが難しすぎるよね。で、結局、言いたいことは視聴者限定するよってことか。

「マナさんどうしたらいいと思う？」

「ふむふむ。ご主人様としては、運営会社さんの提案に何か穴はないかって考えてるのですね」

「いやそこまでは思っていないけど、ボクひとりで決めるのも性急かなと思って」

「そうですね。たとえば、運営会社さんはアメリカの会社さんなわけですけど、アメリカの政府と通じていて、視聴者を限定するっていいながら、さりげに作為的に選ぶことは考えられますね。アメリカの政府高官たち、CIAとかFBIとか、そういう人たちだけ優先的に入れて、逆にライバルになりそうな中国の人たちははじくように設定するとか」

「なるほど……」

そういうのもあるのか。

じゃあ、どうすればいいのかな。

「まあ百万人もいれば特に問題ないと思いますよ。矛盾するようですが、完全に敵対勢力を除くなんてできるわけありませんからね。最初の百万人について早い者順だったら必ず何人かは各国の要人クラスが入るはずですよ。ヒロ友の数が現在5億人ですから当選確率は0.2%。これは超ウルトラレアですね。きつと、百万ドルで視聴権利が売れちゃいますよ。運営会社にその気があればですけど」

「なるほどお……ボク、マナさんに翻弄されちゃってる」

「もっとお姉さんに翻弄されてくださいね」

マナさんがおもむろに近づいてきて、やむなく抱きしめられるボク。

ちよつと暑苦しいよ！ 距離があつたからなにするかはだいたいわかつてたし、拒まなかったのはボクだけ。

「で、例えばの話ですけど——、ご主人様」

「あ、はい」

「極端な話ですけど、ご主人様が視聴者を日本人に限定するなんてこともできるわけです」

「あー、なるほどね」

「嫌いな人ははじくなんてこともできるわけです」

「そうだね」

「どうします?」

「どうもしないよ。ボクは人間総体と話してるわけであって、特定の人種や国と話してるわけじゃないから」

「日本を特別扱いしないってことですか?」

「うーん。ボクにだってそれなりに生まれた国に愛着はあるよ。だけど、そうやってボクが好き勝手にしまっても人間側も困るんじゃないかな」

「好き勝手しようがしまいが、ご主人様の対応にあわせて向こうもいろいろ考えるだけだと思いますけどね。まあ、お姉さんとしては、ご主人様を選ぶのであれば、それでよいかと思えます」

「うん」

でも、やっぱりできれば純粋なヒロ友というのを想定してしまう。

それは、ゾンビハザードが起こらなくて、ボクが普通のユーチューバーだったらどんな反応だったんだろうっていう益体もない想像だ。

大変お恥ずかしながら、ボクってかなりかわいいし?

それなりに人気はでたんじやないかなって思うけど。

わざわざ外国の人が日本語を覚えてまでアプローチをかけてくるなんてことも思えない。

ボクはゾンビにまつわる力がなければ、ただの凡人だ。

そんなのはボク自身が一番よくわかっている。

沈みかけていると、ほっぺたに感覚が伝わった。

マナさんにほっぺたをやさしくつままれている。

「マナさん?」

「ご主人様はジョハリの窓という言葉はご存知ですか?」

「ん。ジヨハリ？ 守破離ではなくて」

「ジヨハリです。まあカンタンに言えば、他人が見ている自分と自分が考える自分を四象限に分けて表現する方法なんですけど、ジヨハリさんがそういう自己認識ツールを開発したという話です」

マナさんがゆっくり論すように言うには、

自分が知っていて他人が知っている自分。

自分が知っていて他人が知らない自分。

自分が知らず、他人が知っている自分。

自分が知らず、他人も知らない自分。

というふうに、自分というひとつの個体にも四つの見え方があるんだって。

「できるだけ自分も他人も知っている開放の窓を広げたほうがいいといわれてるんですけど、わたしとしては無理をして広げる必要もないと思っています。それもご主人様のキャラですからね」

「配信をし続けると、ボクも自分が気づかなかった自分のキャラに気づいたりもするけど、ただゾンビを操れるって特性が大きすぎるかな」

「それもまたキャラですよ」

「そうかなー」

「そうですよ。不安そうな瞳が非常にそそります」

「うん。本音の部分は最後まで隠しとけばかっこいいと思うよ。でも、マナさん、ありがとうね」

いまさらゾンビとは無関係に配信なんてできないしね。

それに、ゾンビを操れて、救世主になれる可能性を秘めた自分っていうのも、べつに嫌いじゃないんだ。

だったら、今はそのキャラでいい。

☆Ⅱ

あとわずかで配信開始時刻。

「そろそろ準備しようかな。ペットボトルよし」
中にはお茶入ってます。

話し続けると喉が渴いたり、キタナイ声がでちゃったりするしね。適度に喉を湿らせると配信にいいのです。

ボクもちよつとはプロっぽくなくなってきました。

「あ、ヒロちゃん。ちよつといいかな」

放送室のドアから顔をのぞかせたのは、ぼっちさんだ。

「なんです？」

「ヒロちゃんに会いにきてる人がいるみたいなんだけど」

菌切れの悪い言葉だ。

それに誰なんだろう。

あと少して配信時間だけど。

「えっと、誰？」

「わからないんだ」

「わからないって」

「まだ降りてきてないからね」

「降りてきてない？」

ほとんどオウム返しになっちゃう。

「ちよつと来てくれると助かるんだけど」

「え、もう少しで配信始まっちゃう……」

「時間はそんなにかからないと思うよ。みんな不安がつてるんだ。得体のしれない——へりに」

「わかりました。いきます」

ぼっちさんに案内されて外に出てみると、50メートルぐらい上空に黒い大きなへりがたたずんでいた。たたずむつて変かな。いわゆるホバリング状態なんだけど、普通のホバリングとも言い難い。

確かに得体が知れなかった。

だって、このへりからはホバリングの音がほとんど聞こえなかったからだ。

まさしく、たたずんでいるという形容が正確なように、へりは音もなく空中に静止している。

もちろん、完全無音ってわけじゃないし、プロペラが回っているのもしつかりと見える。

地面を風が薙いでいき、ポールに設置してある国旗がパタパタと激しく動いていた。

「音があんまりしないね？」

「音は空気中を伝わる振動ですから、同一振動で打ち消し合って無音にしてるんでしょう」

命ちゃんが淡々と説明するように言った。

なんだかたいしたことないように言ってるけど、これってとてつもない技術なんじゃない？

ボクたちが見上げたまましていると、重い鋼鉄のドアが横にスライドし、そこに見知った人の姿を見かけた。

ピンクさんだ。

あるいはピンクちゃん。あいかかわらず、ドクターの正装である小さいながらもちゃんとした白衣を身にまとい、なぜかよくわからないけどキノコみたいな帽子。そしてショートカットのピンク色の髪をした自称八歳の女の子だ。

ボクのようにエセ小学生ってこともないだろうから、普通に天才児なんだろうと思う。

ボクが手を振ると、ピンクさんはパツと顔を輝かせ――。

それからコンマ数秒の逡巡もなく、へりから飛び降りた。

驚いたのはボクだ。

いくら人間を越えた反射神経を持っていても、普通に予期しない行動には驚くし、ピンクさんの矮軀では地面にたたきつけられたらミンチになってしまう。

かつてないほど集中して、ボクは不可視の力を展開する。

念動力で優しくピンクさんの身体を受けとめると、音もなく地面におろした。

アトラクションを全力で楽しんだあとみたいに、ピンクさんは晴れ晴れとした顔だ。

ずれた帽子をなおして。

ボクに近づき。

ぎゅっと抱きつかれます。

「ヒロちゃんにあえて、ピンクはうれしいぞ」

「てえてえ」「幼女どうし仲良しなにも起こらないはずがなく」「ヒロちゃんへ向かうドクターピンク。疲れからか、不幸にも黒塗りのヘリから墜落してしまう。後輩をかばいすべての責任を負った三浦に対し、車の主、暴力団員谷岡が言い渡した示談の条件とは…」「おまえ途中から雑」「幼女キマシタワー」「なんだこれ…：…なんだこれ…：…」
なんか周りが騒がしかった。

「なんであんな無茶をするかなあ」

「ヒロちゃんなら、ピンクがピンチでも助けてくれると信じてる」

「お試しされちゃった…：…」

「試したわけではないぞ。ピンクはヒロちゃんに一秒でも早く到達したかっただけだ」

うーん。信頼されてるのはわかるけどね。

でも、ヘリから飛び降りるのはお勧めしないな。

ボクが力を使えなかったらどうなっていたのか。もっと慎重になるべきだと思う。ボク自身も慎重さとチャランポランさを兼ね備えているからあまり強くは言えないけど。

「もしかして迷惑だったか？ マイシスターを困らせるつもりはなかった」

シユンとしてしまうピンクさん。

「あ、あの、ぜんぜん大丈夫。ぜんぜん大丈夫だよ。ピンクさんが危ないかなって思っただけだから」

「心配してくれるのか？」

「うん。そりゃ心配するよ。ピンクさんもボクの友達だし」

「ピンクはうれしい。でもそれなら、ピンクちゃんって呼んでほしい。ヒロちゃんとおそろいだ」

「ピンクちゃん」

「ピンクだ」

そして、頭をこすりつけるようにすりすりしてくるピンクちゃん。なにこの子。かわいすぎるんですけど。

ボクはピンクちゃんを愛でることにした。

へりはピンクちゃんだけを置いて飛び去っていく。

あのへりの科学力もすごかったな。

でも、八歳の女の子だけをひとり置いていってよかったんだろうか。

「ピンクちゃんのお仲間は降りてこなくてよかったの？」

「ん。定時になったらここに来るようになってるから大丈夫だ」

「町役場に住むわけじゃないんだね？」

「ヒロちゃんがここに定期的に来るなら、住むことも考えなくはないのだ」

「まあそれはいいんだけど、ここに住むなら町長さんの許可はとつてね」

「わかった。ただ、物資とかはたぶんここよりは潤沢だ。ピンクひとりがかここに住むだけなら特に問題はないぞ。場所さえ貸してくれたらそれでいい」

「その場所もただじゃないからね」

「日本は土地が高いと聞いていたが、本当だったのか」

少し驚いた様子のピンクちゃん。

天才だけど歳相応なところもあつてカワイイな。

「先輩。そろそろ配信の時間です」

命ちゃんが声をかけてきた。

そろそろ時間か。

「ピンクちゃんも生配信に参加する？」

「するする！ ピンクは参加を表明するぞ！」

手をいっぱい伸ばして、絶対に参加するという不退転の意思を見せるピンクちゃん。

ボクとしては拒む要因はない。

配信でピンクちゃんが八歳だとわかったときに、みんながどんな反応をするかは興味深くはあるけれど。

「あ、それとヒロちゃんに伝えておこうと思う」

「なに？」

「私たちの組織の名前はホミニスというんだが、前にもいったとおりアメリカと日本の共同科学開発機構のようなことをしている」

「うん」

「少なくとも世界でも五本の指に入るくらいの科学機関だと自負しているが、既に他の科学機関にも働きかけてる。いろいろな思惑はあるだろうがみんな言葉のうえでは協調できたぞ。ヒロちゃんがたどえ人間でなくても」

——ゾンビだとしても。

「わたしはホミニスの全権委任大使だ。だから言葉を伝えることができる。少なくとも人間の科学サイドはヒロちゃんと共存したいと思っている」

ちいさなおててが差し出され、ボクも手を差し出した。

「友達になろう」

ピンクちゃんの言葉がボクの胸奥に響いた気がした。

ハザードレベル86

壮観としかいえない光景だった。

ボクの目の前には百万人が待機の列をなしている。

その百万人はおそらく世界中の人たちで、それでもボクが日本語をしゃべってるからか、全員日本語で雑談している。

『ヒロちゃんまだかな』『今日もまたゾンビゲープレイすんのかな』『ヒロちゃんかわいいね。日本人なのかな』『ていうか人間じゃなくて、天使だという説がもつぱら有力』『超能力使えるしな』『わが祖国では昔はこれぐらいできるやつぎらにいたぞ』『おそろしあ』『だったら自前でゾンビなんとかしろ』『は？』『なんだ戦争るか？』『うちの大統領がそちらに”お話”しにいくそうです』『やめてくだしあ』
ろ、ロシア？

ロシアって冷戦時代に超能力開発とか有名だったもんね。

ボクも中二病が発症したときに読み漁ったものだよ。

残念ながら、ゾンビを避ける超能力ロシア美少女はいなかったようだけど。

『うちの国きてくんねーかな』『ていうか、科学者どもはなにやってんだよ。はよ接触しろ』『急に黒塗りのヘリで来ても怖がらせるだけだろ。小学生相手になに言ってんだ』『子猫ちゃんは少しずつ信頼させないと逃げちゃうからね』『うちの国はゾンビが高速列車の中にまで入っちゃってる。これが本当の新感染……』『草』『草』『草』『草はやしてないでヒロちゃん助けて』

できれば助けてあげたいけど、海外進出はまだ早い気がします。

『ゾンビ回復能力がどれくらいのものかっていうのが問題よな』『やっぱり科学者は必要だろ。さっさと佐賀に歩いていってどうぞ』『内政干渉は大変遺憾である。ていうかオマエらこっちくん』『だったらおまえんとこの科学者はなにやってんだよ』『戦力を関東圏に分散させているため九州までいける余力がない』『兵隊さんに守ってもらってないと怖いでちか？』『あおるなあおるな』『日本が美少女だと定義して黒髪ロングの美少女が怖いよ怖いよって震えてる姿を想像すると

いろいろはかどるな』『度し難いな』『やっぱ初手で関東圏制圧とかしてるのが響いてるんじゃない？』

高速で流れ行くコメントに楽々追いついていっている。

みんな、国の代表とか頭がいい人たちが集まっているのかな。

『知ってるぞ。おまえんとこの自衛隊まっぶたつに分裂したんだってな』『クーデター起こってるの？』『そうじゃなくてにらみあってる状態で動かせないらしい』『シベリアンコントロールはどうした。民主国家！』『首相の命令権はあるんだろうけど』『やっぱりクーデターじゃないか』『いや判断停止つか。首相も言いたいこと言えないらしいよ』『つかさあ。いい加減、アメリカのいいなりになるのやめろって』『なってねーよ』『九州内の電力止めたのジュデッカ（日米共同経済機構）の指示だろ！』『現場の判断なんじゃねーの？』『アメリカもべつにヒロちゃんと争うつもりはないぞ。そのつもりだったらさつさと核撃ってる』『ゾンビで核ゲージは敗北必至』『そんなことよりスマブラやろうぜ』『わかった。負けたら国土割譲な』

危ないこと言ってるな。

でも今日はピンクちゃんがいる。

そう……ボクの横にはピンクちゃんがいるからそんなにひどいことにはならないだろう。

ピンクちゃんは純粋な天才科学者といっつい。

命ちゃんがパソコンとかそういう方面に詳しい天才なのだとしたら、ピンクさんはオールラウンダーなのかな。まだピンクちゃんのとよく知らないけど、科学者集団に属しているらしいし、知識量はピンクちゃんの倍生きていたボクよりも多い気がする。その中でも人間の精神を解剖する学問には精髓している。

ボクが見ていると、ピンクちゃんがこちらに気づいて、ニコって笑った。

うーむ。かわいいな。利発そうだし、白衣着てるし。かわいいし。

ボクの視点だと、八歳児にはさすがに変な気持ちは湧かなくて、純粹にかわいいという気持ちになる。小動物を愛でるようなかわいさだ。

「えーっと、ピンクちゃんに最終確認なんだけど、本当に出演していいの？」

「いいぞ。ピンクはむしろヒロちゃんといっしょに出演できてうれしい」

ああもう本当この子はかわいいな。

抗えんくなる。

「先輩はピンクさんのことが本当に好きなんですね……」

捨てられた子猫みたいな視線になってるのは命ちゃんだ。

「ピンクちゃんかわいいしね」

「先輩ってロリコンでしたっけ。わたしも八歳児になるべきでしょうか」

「なりたくてもなれないからね……。それにボクはロリコンじゃありません」

しかし、ふと思う。

ボクもいつのまにやら女の子になって、いつのまにやら小学生程度の外貌。

これがヒイロウイルスの効力だとすれば、できなくはないのか？

八歳児の命ちゃんが爆誕しちゃう？

ちっちゃな命ちゃんを夢想すると、それはそれで悪くないって思うけど――。

「命ちゃんはそのままでもかわいいよ」

「本当ですか？」

「本当本当！」

じーっとボクを見つめる命ちゃん。

ボクもじーっと見つめ返す。

そして数秒後、ふっと命ちゃんは視線を逸らした。

勝った。

いや、勝った負けたの話ではないけれど、おそらく大丈夫だ。

「ピンクとしては、べつにヒロちゃんを後輩ちゃんから取るつもりはないぞ」

おお、いい子だね。

「べつにピンクさんにとられるとは思ってません。ただ、少し寂しかっただけです」

命ちゃんがなんだかかわいいぞ。

ボクより大きくなつてしまった身長だけど、やっぱりかわいい後輩で妹分なのはまちがいない。

ボクは命ちゃんに手を伸ばして、頭をなでた。

命ちゃんは目を細めて、なんとというか……堪能してらっしゃる。

「えっと、じゃあいいかな」

マナさんはお部屋の外。

部屋の中にいるのは、ボクとピンクさんと命ちゃんだけだ。

放送室はラジオを収録するような小さな場所で、プラスチックの透明な窓が前面に開いている。そこから、たくさんの人が覗きこんでいる。

直接ボクの姿を見たいって人たちもいるのだろう。

『あああッー！』『あ？』『どうした？』『ヒロちゃんペディア更新されてる』『うそだろおまえ』『ヒロちゃんの名前でてるんですけど！』『夜月緋色ちゃん』『緋色だからヒーローか』『やっぱおっさんじゃないか』『親父ギャグで草』『緋色ちゃん。スカートレットちゃん？』『つーことは、ヒロ友の誰かと会ったってことか？』『適当に書きこんでるんじゃない？』前もブラフあつたじゃん』『ああ、ヒロちゃんがM78星雲からきたって話な。日本に詳しくねーから最初騙されたよ』『始まつたら聞けばいいんじゃない？』

ぼっちさんに教えたボクの名前。

いましてボクペディアに編纂されたらしい。

まあ多少はこうなることはわかってたけど、ボクの出自まで必要な情報なのかな。

年齢と性別がでたらめだから、戸籍にたどり着けるのかは謎だけだ。

佐賀で生まれたとは一言も言ってないし。

だいたい、誰かさんも言ってたけど始まつたら聞けばいいんだよ。ボクだつて答えるつもりだし……。

でも、性急な人も中にはいるらしい。

『戸籍調査まだー?』『幼女ストーカーは嫌われるぞ』『日本の戸籍管理って市町村でやってるから、佐賀圏内のどこの市町村か分からん限り調査できんぞ。市役所がゾンビだらけになって死役所になってるところもあるし』『ジャパニーズジョークH A H A H A ……』『名前を出してくれたってことはヒロちゃんも少しは人間を信頼してくれてるってことかな』『そもそも信頼してないと配信しないっつーか』『俺らヒロ友だろ。仲良くしようぜ』『オレくん好き』『ああオレも好きだぞ』『ヒロちゃんの枠でホモホモしい展開はやめてください』

なんだかなー。

でもヒロ友はやっぱヒロ友なんだなと思って、いつものノリに楽しくなってくる。

「ヒロちゃんは緋色ちゃんなのか?」

ピンクさんが早速コメント欄から情報を拾って聞いてきた。

「そうだよ」

「そうか。いい名前だな!」

「ありがとう」

「ピンクの名前も知りたいか? 知りたいなら教えるぞ」

「本名?」

「そうだよ」

「教えてくれるの?」

「いいぞ。ピンクの本名は、モニカ・グッドモーニングというんだ。M O M O ってみんなには呼ばれてる。だからピンクだ」

「モモちゃんか。かわいい名前だね」

ボクがかわいいというと、桃みたいにほっぺたを染めるピンクちゃん。

みんなからかわいがられてるんだろうなと想像できる。

さて――。

時間いっぱいになりました。

そろそろ配信を始めよう。

「ちゅっちゅ。今日も始まったよ。みんな元気してたかなあ」

『うおおおおおああああああ』『ああああああヒロちゃんあいだがっだ』『おまえら少しは落ち着け』『全裸待機してた』『ネクタイだけはつけてる』『国際的になっても変態度は変わらないなおまえら』『そもそも日本の配信のノリに合わせてるところあるからな』『ちゅっちゅ』『これはキスの擬音であり、つまりヒロちゃんは我々に対して信頼の情を示してくれているということだ』『ていうか隣にいるヒロちゃんより小さな女の子誰?』

「あのね。今日はとてもうれしいことにピンクちゃんが来てくれました」

ピンクさんは親しげを増した視線をボクに送り、パソコンのカメラに向かつて一礼する。

「ピンクだ。ヒロちゃんに無理をいって参加することになった。よろしく頼む」

『は?』『おは幼女』『ピンク、おまえだったのか……』『おいおいおいおいおっさんだと思ってたよ』『ピンクちゃんかわいくて草生える』『草はやしてる場合じゃない』『科学者初接触か。ジュデツカの息がかかってないか心配だな』『だから謎の組織名出すのやめろって』『謎でもなんでもないぞ。敗戦直後からある組織に何いつてんだ』『日本が何かやるときは必ずジュデツカにおうかがいをたててるらしいぞ』『陰謀論の類か?』『ジュデツカは単なる経済共同会議だよ(にっこり)』『悪い大人の人がいるー』『オレは幼女を信じるぜ』『幼女に貴賤なし』『ピンクちゃんかわいい』『オレ、ピンクちゃんのファンになりそう』『ピンクちゃんのことおっさんだと思つてごめんなさい』『幼女がふたりでイチヤイチャしている動画になるんですね』『後輩ちゃんのことお忘れなくください』

「とりあえずゾンビについてはピンクちゃんに任せようかと思ってます。なので、ボクは何も考えずに配信を楽しむー」

『ヒロちゃんはそれでいいと思うよ』『小学生は楽しむのが仕事だし

な』『ピンクもエレメンタリな年頃だよな?』『つーかガチで研究員なら飛び級してんじゃね?』『ゾンゾンしてきた』『いよいよゾンビに科学のメスが』『べつにいままでも調べてなかったわけじゃないがな』
ピンクちゃんもだいぶんなじんでたから、違和感ないな。
よし。

「じゃあ今日は”ワタシのクラフト”略してワタクラやっていくよ」
『直訳定期』『直訳しきれてないところがかわいい』『ゾンビゲーじゃないだ』『いやゾンビおるだよ』『ああ、ゾンビいたなそういや』『そもそもワタクラってなににするゲーム?』『みんな穴掘ってワチャワチャするゲーム』『知らないのか? 雷電』『知ってるのか大佐?』『おまえら、日本のサブカルに詳しくすぎw』『50とか60の政府高官が必死こいて日本のサブカルを覚えてる姿想像したらおハーブ生えますわ』

「コメントにもあったけど、このゲームはサーバー内の箱庭でいろんなものをクラフトしていくゲームなんだ」

『クラフトってなーに?』『クラフトの意味わかるかなあ?』『ヒロちゃんには英語つよつよガールだから分かるよね?』『ヒロちゃんなら……ヒロちゃんなら訳してくれる』『教えてヒロちゃん!』

「そんなのわかるよ! クラフトは……クラフトはあれだよ。こう……掘る的な?』

『ああ……』『ピンクか後輩ちゃんかどっちか教えてやれよ』『ピンクは到着したばかりなんじゃないか?』『英語よわわガール……』

なんだよ英語よわわガールって。

ボクがまちがってるの?

ピンクちゃんをチラッと横目で見ると、力強く頷いてくれた。

「今からヒロ友間でクラフトの意味は掘るということになったぞ」

ピンクちゃん、そうじゃない……。

「知ってましたか? 最近の小学生は英語を習うってことを」

命ちゃん……とどめを刺そうとしないで。

ボクって小学生以下なのか。

「えっと、どういう意味なのか教えてよ。フリじゃなくてさ。本当の

意味はなに？」

「クラフトは工作って意味だぞ」とピンクさん即答。

ボクも遙か昔というほどでもないけど、高校時代の英語教育を思い出す。

「ああ、なるほどね……。そういう意味もあつたよね」

「そういう意味しかないぞ」

「え、ああ、うん。そう……。ヒロ友言語としてはそういう意味もあるんだよ」

「む……。そうだった」

『イキリ小学生』かたくなに現実を見ようとしないう小学生』『認知バイアス』『ピンクちゃんは生粋のアメリカンか?』『知らないことは知らないって言えるようになったらいいね』『そんなことよりゲームはよ』『ゾンビゲーでゾンビ避けスキルのヒントが得られるのか?』『おまえここは初めてか? 力抜けよ』『あ、いや。まさかこんな宝くじみたいな確率に当選するとは思えなくて』『百万人いてもコメントするのは一部だけなんだよな』

「まあクラフトの意味はわかった。わかりました! ともかくさ。このゲームは箱庭の中でいろんなものを創っていくゲームなんだ。ゾンビ要素はさすがに薄いかな」

『ゾンビゲー要素薄くて大丈夫?』『ヒロちゃんはゾンビゲーしないと死ぬ病じゃないの?』『あ、でも体重測定したりもしてたな』『ゾンビの科学的考察とゲームは切り離そう』『サメゲーはなさらないのですか?』

なんだよサメゲーって。あるのかそんなん。

「時間いっぱいになりました。ちよつと接続するから待つてね」

『ヒロちゃんに接続したい』『おい消されるぞ』『あれ。あいつのコメントなくなつてね?』『あ、本当だ。こりや消されたな』『まあ不穏なことだったらモロに国益に反するからなあ』『ほんまヒロちゃん動画は地獄やで』

ほんとに地獄だな。

後ろから銃つきつけられながらコメント打ってないよね?

そんなの嫌なんだけど。

「あ、それと——、今日から投げ銭機能を使えるようにしてみました」

口座はマナさんに借りました。

ぶっちゃけ、お金なんて意味ないと思うけど、想いをカタチにできる投げ銭機能っていいかなって思ってる。

『うおおおおお。最速で最短で一直線にいいいい！？50000』
『？500000』『？500000』『なんだこれ。投げ銭に意味ないとわかってるのに止められねえ。？500000』『あえて1000円入れて逆に目立つ！？100』『10億ジンバブエドル』『もうねえよ！』
『ヒロちゃんへの愛。プライスレス』

やべえ。一時間くらいの配信で小国家並みのお金が入りそう。

みんな投げ銭でコメントするのがデフォになるとそれはそれでコメントを拾いづらい。

投げ銭機能はコメントを色つきで目立たせる効果があるけど、みんながみんな真っ赤だと目に悪いというかそんな感じだ。

「あの、この機能はお遊びみたいなものだから、みんなほどほどにね。みんながボクの動画にお金を入れてもいいって思ってくれてるのは、本当にうれしいんだけどね」

『うれしいってにはにかむ姿がかわいい。？500000』『そういうところやぞ』『わかったー(素直)』『ヒロ友がじゃぶじゃぶ課金したくなるような射幸心を煽りまくる説明文章を入力したい』『べつにゾンビ利権関係なく投げ銭はしていたと思う』『国家予算を全力投入してもいい。カネならいくらでもある』『おまえんとこデフォルト寸前じゃねーか。マジでやめとけ』

「ほんとに気持ち程度でいいからねー」

さて、いつまでもゲーム開始前で停まっても悪いから、そろそろ始めよう。

実をいうと、電気が停まる前にチマチマと箱庭は作ってたんだ。

サーバーをたててくれたのは命ちゃんだけだね。

電気が止まってネットも使えなくなってるからは当然接続もしてなかったけどようやく進められるよ。

「はい。接続できました」

ワタクラの世界は、なんとというかブロック構造体でできている。

ボク自身のアバターも同じ。

なんとというか四角い感じなんだ。

もちろん、それが深い味わい深さをかもし出してるかなあ的な？

「えつとみんな見える？ つながってる？」

『見える見えるぞ！』『見えます見えます！』『ここがヒロちゃんの”

ワールド”か……ふつ彼女らしい可憐な世界だ』『中二病がおる』『特に初期からいじった様子はないな』『建造物はなさげ。初心者っぽい？』『つながってる。助かる』

「うん。見えるみたいだね。このゲームは始めたばかりで、まだ何も創ってないんだけどさ。とりあえず、今日はピンクちゃんもいるし、ゾンビ避けできる建物を造っていいのかなと思います」

「ピンクはどうすればいい？」

ピンクちゃんは急遽参加になったから、アバターも雑に髪の毛をピンク色に染めただけのものだ。金色おめめも完備。リアルには似つかないけど雰囲気です。

そういえば、このゲームしたことあるのかな。

「ピンクちゃんはこのゲームしたことあるの？」

「工作は得意だぞ。リアルで荷電粒子砲とか、量子テレポーターとか作ったことあるから、このゲームもマクロ組んで自動で何か創ればいいのか？」

それじゃゲームが違うよ！

「操作方法は知ってる？」

「知らないが、そのうち慣れると思うぞ。四十秒で準備できる」

「もしかして、このゲーム初めてだった？」

「……？ それがどうかしたか？」

「うん。ごめん。配慮が足りませんでした。ピンクちゃんがコント

ルールに慣れるまではボクが教えようか？」

「うん？ おお……ヒロちゃんのいい匂いがする」

席を近づけて、ボタンの操作を教えていくボク。

ピンクちゃんの顔が近いけど、接触するほど近くないと教えることができないから。

『尊みがマックス値を更新しました』『後輩ちゃんを。後輩ちゃんを忘れないで』『後輩ちゃんがひたすら地面を掘っていつて草』『ヒロちゃんにかまわれないからすねちゃった』『ピンクちゃんが愛の手ほほきを受けている』『あれ、後輩ちゃんの動きが止まった……』

「待つてください。ピンクさんにはわたしが教えます」

リアルで叫んだのは命ちゃんだ。

「お？」とピンクさん困惑の表情。「後輩ちゃんが教えてくれるのか？」

「わたしもこのゲームは猛練習しましたし、教えるくらいできます」

命ちゃんもボクとゲームをするのを楽しみにしてくれてたんだ。

ちよつとピンクさんにかまいすぎたかな。

「じゃあ、後輩ちゃんに任せるよ。ボクは素材集めするね」

「はい。任せました」

「ピンクちゃんもそれでいい？」とボクは聞く。

「ピンクは後輩ちゃんのこと好きだからいいぞ」

『ピンクがいい子すぎるな』『後輩ちゃんもかわいいと思いませんか？』『ヒロちゃんがまさかのぼっち』『ん。ちよま……え、ウソだろ』『どうした？』『あ……てえてえ』

ウソだろというコメントが見て、ボクもすぐに命ちゃんとピンクちゃんの様子を目にいれる。

そこには、ピンクちゃんを膝の上に乗せて、レクチャーしている姿があった。

ピンクちゃんはべつに恥ずかしそうにしている様子はない。

そんな羞恥心を覚えるような年頃でもないということなのか。

「先輩をとらないでくださいね」

「ピンクは後輩ちゃんとも仲良くなりたいで」

なんの照れもない直言。
命ちゃんは顔を赤く染めて、絶句している。
んー。こういわれちゃうともう何も言えないよね。
幼女が最強すぎる件。

ハザードレベル87

ボクはピンクちゃんといっしょにワタクラの実況をやってる。

ワタクラっていうのは、実のところ目的というかゴールがないゲームだ。

まったりとスローライフを楽しむ。

打倒すべき巨大な敵はいなくて、いわゆる日常系に属する。

配信に適していないと思われるかもしれない。

アツくなれていわれてもなりようがないしね。ゆるーくほんわかと楽しむ感じだし。

しかして、その本質は。

その実態は。

——雑談にあるといっても過言ではない。

思い描くのは小学校の頃の図画工作の時間。

みんなでワチャワチャ喋りながら、自分の好きなカタチをつくっていく喜び。

仲がいい友達と遊んでいるような感覚。

実際に遊んでるんだけどね。

「ヒロちゃん何やる?」「先輩どうしますか?」

ある意味、両手に花なのかもしれない。

べつに男とか女とか関係なく、誰かに好意を向けられるというのはうれしい。

命ちゃんもピンクちゃんもボクにとってはかわいい妹みたいな存在だ。

「ゾンビ避けの要塞つくろ。要塞」

『要塞だと?』『要塞にこだわるヒロちゃん』『初心者がいきなりそんなん創れるのか?』『いや、待ってくれ。天才っぽいピンクちゃんなら、もしくは……』『天才チューチューバーの後輩ちゃんならなんかやってくれそうじゃね?』『ふたりならできそうだよ』『ヒロちゃんは?』『ヒロちゃんはお花でも摘んでればいいんじゃない?』『だべな』『ですよー』『ヒロちゃんは呼吸してるだけでおとなしく座ってればいい説』

『あると思います』『誰もヒロちゃんに期待してなくて草』

「なんでそういうこと言うかな?! ボクだってちゃんとやれますー！」

そう、ボクだって大学生並みの知識と思考能力は有してるんだ。

ただの小学生ユーチューバーと思ってもらったら困る。

『やはりイキルか』『毒ピンに張り合っても無理ゲーじゃね?』『そもそもクラフトも訳せない英語よわわガールな時点でお察し』『ヒロちゃんは純粹にゲームを楽しんでいればいいよ』『世界一姫プが似合うユーチューバー』『姫様お座りください』『姫様がお座り……ひらめいた』『ひらめくな』

みんなのボクの評価がひどすぎる件。

ピンクちゃんや命ちゃんが高スペックなのは認めるけど、ボクだって見た目小学生にしては頭いいでしょ。それには中身が大学生というからくりがあるのだけど。

「姫プはしないし。えっと、これから家を作ろうかな。家」

「どのくらいのサイズのをつくる?」

ピンクちゃんが聞いてきた。

んー。ボクたちが小一時間でつくれるサイズは、たぶん、本当に小さなサイズかな。みんながとりあえず入れるくらいの小さな家。一戸建てで、控えめながらも庭があるようなそんな感じ。

「イメージとしてはお菓子の家みたいな感じかな。あんまり大きくなくて。でもかわいいのがつくりたいかな。アットホームで明るいお家です」

『アットホームなお家って重複してるよな』『英語よわわガール』『かわいいお家をつくりたい女の子な感じ好き』『日本人は小さな一軒屋を建てるのが夢だったりするからな』

「かわいいお家がつくりたいとか、先輩女の子……」

「女の子だし。なにか変ですか」

「いえ。そんな先輩も好きですよ」

ほんのりと首を傾げ、どんなボクも受け入れてくれる命ちゃん。ピンクちゃんのほうは物理的に擦り寄ってきてるな。すりすり。

くう。やっぱりかわいい。

すると命ちゃんがクワつと目を見開いて反対側ですりすりしてくる。

対抗したかったのかもしれない。

しかたないにやあと思いながら、ボクはされるがままになる。

これは……ハーレムなのでは？

ちなみにみんなとの距離はだんだん近づいて、今では肩がほんのちよつとで触れ合うぐらいの距離だ。べつに放送室が狭いつてわけじゃなくて、ピンクちゃんがそうしたかったというのが理由。命ちゃんのほうは、たぶんそれに対抗する感じで、両者がボクに近づいてきてそうなつてしまった。

『間に挟まりたいです』『背中から見守りたい』『かわいい女の子が集まるとかわいい空間になる説』『孫たちがかわいくてワシは満足じゃ……』『ヒロちゃんが近所の幼女が好きつていわれて照れるおっさんの顔になつてる』『どんな顔だよそれ』

おっさんじゃねえよ。

まあ、ピンクちゃんの攻勢には、敗北を喫しているところではあるけど……。

「どうした。ヒロちゃん」

息があたるくらいの距離。撫で繰り回したくなるサイズ。

でも、命ちゃんの手前自重しました。

「うん。なんでもない」

では、始めるとするか。

ボクが目指すのはログハウスみたいな木造建築物だ。

みんなにはまず素材となる木を切つてもらふことにする。

「木はどれだよ？」とピンクちゃん。

ワタクラあるあるだけど、木もブロックで構成されていて、木が木だとわかりにくいこともあるかもしれない。

木が木だとわからない？ 冷静に考えるとこれもまた哲学か。

「とりあえず、これだよ。これ切つて」

「わかった」「先輩どれくらい集めればいいんですか」

「どのくらいだろ。200くらい？ みんなバラバラに集めて、あとで合流しようよー」

「ピンクはヒロちゃんといっしょにいたいぞ」「む。わたしも先輩といっしょにいたいです」

「リアルだと隣にいるよね？ 肩が触れ合う距離だよね!？」

『今年最高の取れ高』『尊いの次にくる言葉ってなんだろうな』『イチヤイチャイチャイチャイチャ』『チャラヘツチャラ』『これはいわゆる百合三角形では?』『おじさんおもむろに全裸になる。靴下は履いてる』
効率性を考えるとどうしても分散してやったほうがいいに決まってる。

「それじゃ、誰が一番多く集めることができるか勝負しようか」

「ピンクは絶対に負けない」「わたしも負けませんよ」

あれ、ボクそつちのけで二人が息巻いている。

これってもしかしてたきつけちゃった感じ？

二人の姿はあつという間に見えなくなる。

「あの10分くらいしたらまた集まろうね」

「うおおおお。ピンクは優勝するぞ」「ぼつと出の幼女なんかには負けません……っー!」

聞いちゃいねえ。

☆
☆

ボクもぼちぼち木を切つて、木材を集めています。

いいお家ができるといいな。

「そういえば、ヒロ友のみんなにご報告なんですけど、ボク、いまリアルでワタクラみたいなことやっています」

『なんぞ?』『リアルで工作?』『リアルで土掘ってるってことか?』『幼女が掘る。何を……』『これ以上いけない』『そもそもクラフト掘るではないのは先ほど理解したのではないか?』『ヒロちゃんはわりと思いきみが激しいから、概念の再インストールには時間がかかるのでは?』『ヒロちゃんならそこから廃車になつてる車をつみあげて動物

タワーみたいにできそう』『ゾンビタワーつくってるんじゃない？』

ゾンビタワーか。

その発想はなかった。

確かにワタクラっぽい要素だけど、さすがにゾンビを材料にはしないよ。

一応、人間に戻せる存在なんだし。

一番下のゾンビさんがしんどそうだ。

「あのね、いまボクはとある町の役場にいるんだけど、配信が終わったあとは人間の生存圏を拡大するようがんばります！　ゾンビ避けしながら少しずつバリケードとかを築いていくから、ちよつとワタクラっぽいかなって思ったんだ」

『ざわ……ざわ』『え、マ？』『マ？』『ママ？』『ヒロちゃん聖母説くる？』『めでてー。ヒロちゃんがついに人間救済計画を発動するとは』

『やっぱリメシア様じゃないか』『佐賀の片田舎救うよりもずは国の中枢にいったほうがいいのでは？』『は？　おまえはオレを怒らせた』

『知らなかったのか。四ヶ月前から佐賀は日本の首都だぞ』

「まだちよつと国のエライ人と会うのは怖いから、地元で草の根活動したいかなーって」

『モルモットになるかもしれないなあ』『ていうか、ヒロちゃんが近くにいたら愛でたいわ』『撫でくりまわしたく可愛さよな』『そういう口リコンがいるからあつー！』『ロリコンじゃない。ただ愛した人がヒロちゃんだったただけだ』『草の根活動はわかる。すでに五億人のファンがいるけど』

「ボクもこんな事態になったのは生まれて初めてだし、なにかも手探り状態なんです。正直なところをいえば、ゾンビについては誰かにまかしたいくらい。でもボクにしかできないし——」

ボクは最初、引きこもりで社会とのつながりなんて信じてなくて。みんなは他人だった。

でも、今ではほんのりとうっすらとだけど、みんなとのつながりを感じるし、みんなを信じている。つまりは社会を信じてるってことだ。

「ボクはボクにできることをします」

『ピュアピュアじやのう』『ん。いまなんでもするって』『言つてねえよ』『陰キヤなヒロちゃんが社交性を獲得した瞬間』『天使様が地上に舞い降りてきた瞬間』『無限に援助したい』『援助交際したい』『おいやめ……遅かったか。奴は死んだ』『次の待機者はうまくやってくれるでしょう』『乙葉ちゃんの時にも言つてたことだしな。ヒロちゃんは陰キヤじゃないよ。ちよつと不器用なだけ』『ちよつと不器用。わかる気がする』『ポンコツ……』

「うう……ちよつと恥ずかしいことを言つた気がするな。それとポンコツって言つたの誰だよ。見逃さんかつたからな!」

『草』『草』『ポンコツでもいいと思うよ』『恥ずかしがることはない』『そもそもこんななる前は行き詰つてたように思うしな』『新世界が到来するのを目の当たりにしてんのかな』『子どもはいつだって希望だ』『幼女はいつだって正義だ』『ピンクちゃんと後輩ちゃんが苛烈な競争を繰り広げてる傍で、ほんわかムード』『ヒロちゃんくらいのペースでいいんだよ』『ポンコツっ娘最高』

「またポンコツって言つた! 自分でもわかつてるよ。うまくできないことはたくさんあるけど、みんなには助けてほしいって思つてます。おねがい」

『ヒロちゃんの甘え声クセになる』『小悪魔要素あるで』『悪魔なのか天使なのかはつきりしろ』『オレがなんでも教えてやるよ』『おう。まずはオレくんの身体について教えてくれよ』『アッー!』

五億人にふくれあがってもやっぱり、ヒロ友はヒロ友だった。
ふふ。

☆
=

「ヒロちゃん。ピンクはがんばつた。500は集めてきたぞ」

ストレージの一ブロックに50入る。それが10。

たったこれだけの時間で、こんなに?

すさまじい早さだ。

ニヤリと笑ったのは命ちゃん。

「勝ちました。わたしは600は集めましたよ」

ピンクちゃん。絶望顔になる。

『ピンクちゃんかわいそう』『大人気ない後輩ちゃん』『かわいそうなのが抜ける』『おい。やめ……。ギリギリセーフなのか?』『ていうか二人とも有能すぎるだろ。ヒロちゃん100も集めてねーぞw』『雑談しながらだからしょうがない』『おやおやこれは姫プなのでは?』『姫プでもいいじゃない天使だもの』『姫様が姫プして何が悪い』『実際、ヒロ友ログインさせればなんでも集まるよな』

「姫プじゃないし! でもピンクちゃんも後輩ちゃんもすごいね」

「ピンクは敗北者になってしまった」

「このゲーム。今日が始めてだったんでしょ。すごいよ」

「たいしたことはないぞ。視覚情報から得られる木の密度を計算して、効率計算をただけだ。時間さえかければ誰でもできる」

いや……。誰でもできるようなことじゃないよね。

「甘いですね。単に効率計算をするだけではなくて、斧の損耗率も計算に含めなければダメですよ」

ごめん。命ちゃんがなに言ってるかわからない。

「なるほど、ピットインのタイミング差がでたのか。制限時間が決まってるなら、逆算は可能だった。ピンクの惨敗だ。素直に負けを認める」

ボクを間にして、熱く語り合うふたり。

ワタクラってこういうゲームだっけ?

「先輩のご褒美ほしいです」

「あとで……。えつと膝枕してあげようか」

「はいっ!」

今年一番のとてもいい返事だった。

『小学生の膝枕』『オレも……。オレも』『あ、自分ヒロちゃんに膝枕してもらったことあります』『は?』『は?』『お?』『もしもしポリスメン? 犯罪者がここにいます』『よく見たら、おまえぼっちじゃねえか』『洗顔剤と歯磨き粉を一生間違え続ける呪いをかけた』『目薬が口に

入ってもだえ苦しめばいいと思う』

自ら罨に飛び込んでいくスタイルか、ぼっちさん。

ほんとにボクしらないよ？

フオローもしないし。

「あの、先輩。いまの話本当ですか？」

あれ……命ちゃんのハイライトが消えて。

「人命救助！ 人命救助です！」

「そうですか。でも、男の人に対して簡単にお膝を許しちゃダメですよ」

「はい。わかりました！」

ボクは命ちゃんに対しては素直なのです。

ぼっちさんがコメント欄でボコボコにされるのを横目に、ボクはひたすら頭を振るだけの人形と化していた。

☆
＝

家をつくる作業に移ります。

たくさん木材ブロックができたから、結構大きい家ができそうかな。

「お菓子の家というケーキみたいなカタチにするのか？」

「んうー。どうしようか。正直、ボクにデザインセンスはないし」

「先輩。CAD使って、図面ひきました。ご確認いただいてもよろしいですか？」

「CADってなあに」

「図面ひくソフトですけど」

命ちゃんから送られてきたファイルを開くと、なんだこれ……。

そこには詳細な平面図・立面図・配置図までセットになっている。カタチを紐解くと、完成図はお誕生日とかに出されるような丸いチョコプレートケーキみたいになる。木材の色が茶色だから、チョコプレートケーキに見立てたんだろう。ボクが大理石を集めるっていったら、ショートケーキになったのかな。

「ありがとう！ 後輩ちゃん。これでやっていこうか」

もらったのはCADデータじゃなくてPDFだったんで、適当に切り張りしてみんなに見せることにする。図面は書けないけどこれぐらいならできます。

『ちよつと待て。いつ用意したんだこれ』『並行作業しながら図面ひいたのかよ』『毒ピンの力量。ヒロちゃんのポンコツさ。集められる木材の量。すべて計算しながら図面を引いただ』『後輩ちゃんはやっぱり天才なのか』『毒ピンもできそうだけどな』『毒ピンという最強のライバルキャラがでてきて本気を出す後輩ちゃん』

「後輩ちゃんはすごいな。ピンクは後輩ちゃんに敬意を表する」

「ありがとうございます。でも、実はちよつとズルをしちゃいました」「マクロを使ったのか？」

「いえ、そうではなく……なんとなくこのゲームを始めたときから、先輩がかわいいお家を創りたいっていうんじゃないかと思って、ひそかに用意してたんです」

ボクってそこまで予想されやすい頭なの？

「かわいいお家をつくるって後輩ちゃんには一言もいつてなかったように思うけど」

「そうですね。これはミステリ的にいえば、プロバビリテイに属する問題です」

「ぶ……プロ？ え、わかんない」

「プロバビリテイ。つまり可能性として、いつかそうならいいなと思ってるいろいろ仕込んでおくタイプの犯罪類型ですよ。例えば、ペットボトルを軒下に置いておいて、いつか太陽光が上手い具合に収束して火事になればいいとか、そういう可能性に賭ける犯罪です」

『物騒定期』『後輩ちゃん言ってることは物騒だけど、やってることは先輩が喜んでくれたらいいなってかわいらしい乙女心やぞ』『後輩ちゃんかわいい』『一途すぎて泣けてくるでホンマ』『もしかしてだけど、後輩ちゃん何パターンか図面描いてるんじゃないやね？』

「ん。コメントにもあったけど、後輩ちゃんいくつか描いてるの？」

「ふふ。乙女の秘密です」

「ふへへ……」

ボクもへにやりと笑っちゃう。

命ちゃんはやっぱりいい子だなんて思うから。

「ゾンビも……ゾンビもヒロちゃんにプレゼントあるぞ」

え？ なんだろう。

ボクが驚いていると、そつと地面に置かれたのは一輪の花。

「かわいい家にしたって言ってたから」

「ありがとう！ うれしいよ！」

ピンクちゃんも命ちゃんの勝負だけでなく、ボクのことを考えてくれてたんだ。

そんな気遣いがうれしい。

もうふたりともかわいいな。

『なんだ。無限にイチャイチャしやがって』『正直助かる』『末永くお幸せに』『ゾンビのことも忘れないください』『もう三人で結婚してしまえばいいと思うよ』

それからあとは命ちゃんが描いたとおりにブロックを並べていくだけだったんで比較的短時間で家はできあがった。

チョコレートケーキみたいなお家。

たいまつをろうそくに見立てて、ボクの公称年齢である11本立てである。

ちなみにボクの誕生日は——もう少し先です。

「うわーい。できたよ。みんなー」

『うわーい』『うわーい』『うひっ』『かわ……』『ヒロちゃんの満面の笑み助かる』『結局ゾンビでてこなかったな』『ゾンビこないとなんか物足りなくなっちゃった』『ゾンビならおまえの後ろにいるぞ』『おいやめろ』

「ゾンビはまあそのうちね。次の配信ではマシユマロ読もうかな」

マシユマロっていうのは質問箱のことだ。

当然、ボクのところにくるのはアイドル的な立場に対するものではなく、ほぼ99%くらいはゾンビに対する質問だけど、ピンクちゃんが傍にいれば、いろいろと判明することもあるかもしれない。

「次の配信時にはピンクちゃんにいろいろと実験してもらって報告してもらおうかなと思います。なにかわかればいいね」

「そうだな。ピンクとしてはヒロちゃんの唾液がほしいぞ」

「うん。あげるよ。お花くれたお礼にね」

『ピンクちゃん。ご褒美に唾液をもらおう』『オレもご褒美ほしい』『オレくんにはオレの汁をやるから黙つてろ』『ついに科学者のメスが入るのか。胸熱』『ピンクの交渉術が有能すぎる』『幼女らしい素直さじゃね?』『ピンクちゃんに唾液を口移しであげる姿を想像した』『そんなの……最高じゃないか』

「感染しちゃうって」

「感染するのか?」

「すると思うけど」

実際にマナさんもそうだったし。

「後輩ちゃんも感染者だったか?」

「そうだよ」

「ヒロちゃんに感染しても外形上は人間と変わらないように思えるが」

「でも、哲学的ゾンビみたいになってたらどうするの? 誰にもそれは証明できないんだよ」

ボク自身は命ちゃんや他のみんながそうであるとは思ってない。

ちゃんとかオリアが——ところがあって、感じ、考え、意思があると思ってる。

でも、もしも感染した瞬間に意識が黒いヴェールに覆われていたらと思うと、底知れない怖さがある。それは死そのものをイメージさせるからだ。

「それは昨日寝て今日起きたときに哲学的ゾンビになっていたとしても誰も気づかないのといっしょだ。唯物論的には不可識別者同一の原理が働くから、哲学的ゾンビだろうが人間だろうが、脳内の電気信号やシナプスの働きがいっしょなら両者を区別する必要はない」

うーん。

まあそういう考え方もあるかもしれないけど。

「人類種の存続という点ではどうだろう。明らかにパワーが強くなつてたり、超能力が身についたりするみたいだけど」

「人間の本質が誰かを想うことにあるのなら、べつにダンベル何トン持ち上げようが、超能力が身につこうがただの個性の範囲だと思うぞ。超能力があるから人間じゃないなんてことはピンクは考えない」
『なんかすごくプリミティブな議論をしてるな』『哲学的ゾンビっておそろしいな。ゾンゾンするわ』『死を考えるからだろう』『DNAとか変わってんのかなあ?』『ヒロちゃん曰く素粒子が感染してるんだろ』『単純に超能力が身につくだけならヒロちゃん汁のみたくね?』『せやな』『少女の唾液だからじゃなくて超能力がほしいもんな』『せやせや』『ほんまそれな』『わかりみ』

本当に超能力欲しいだけだよな？

ハザードレベル88

久しぶりの配信はやっぱり楽しかったな。

いつかのときに考えたんだけど、配信は楽しいことだけが純化されるんだと思う。

現実はその甘くないよっていうのはボクだって知ってる。

でも、たまには夢ぐらい見たっていいじゃない。

いっぱい遊んだっていいじゃない。

ボクたちは——人類は、まだまだ遊べるよね。

というのがボクの基本スタンス。

なので、ゾンビだらけのときに配信なんて不謹慎とか思われるかもしれないけど、配信はやめられない。とまらない。カツパ海老——。

「ヒロちゃん」

あいかかわらず愛くるしいピンクちゃんは配信の興奮冷めやらぬのか、ハアハアと息を継ぎながら話しかけてきた。小学生女児らしい興奮して息継ぎがうまくできなくて、真っ白いほっぺたがトマトみたいになりコピン多めの色合いになっていくのがかわいらしい。

「なあに」とボクは聞く。

「ピンクはまだ日本文化をよく知らない」

「ん。まあそうだよ。日本文化に触れて一ヶ月とちよつとだっけ？」

日本語自体を話せるようになったのもそれぐらいらしいし、ボクと話すために一週間足らずで覚えたらしい超スペックなピンクちゃん。

でも、圧倒的ポリウムを誇る日本のサブカルチャーが、たとえばピンクちゃんが超天才児であったとしても、そんなに突き崩せるものではないと思う。

知らないことがあっても普通だ。

「ピンクは今後もヒロちゃんと配信を続けたいぞ」

「うん。ボクもそう思ってるよ」

「だから、いろいろと教えてくれると助かるぞ」

「もちろん、ボクが知ってることなら教えるよ」

「じゃあ、これ……」

ピンクちゃんが指差したのはノートパソコンの画面だ。

さっきの配信がアーカイブデータとして再生されている。

そのコメントの一幕。

ピンクちゃんがボクに頭をすりすりしている状況だ。

変態性欲者マナさんと違って、この子はスキンシップとるのが好きなんだなあと思ってしまう。甘えん坊な感じだし。本当に幼いから変な遠慮がない。

「ここで何人ものヒロ友がコメントしているキマシタワーってなんだ？」

「えーっと……」

ボクは命ちゃんをチラ見する。

正直なところ八歳児に教えるべき内容なのか。

ピンクちゃんは天才だし、精神年齢も大人に近いと思うけど、やっぱりまだ未発達なところの部分もあるんじゃないだろうか。

ちなみに、キマシタワーについてなんだけど、知らない人はいないよね？

一応、説明すると――。

|||||

キマシタワー

ストロベリー・パニックという女の子どうしが唇合わせまでしちゃう系のアニメにおいて、登場人物のひとりが世に放った祝福の言葉。正確にはキマシタワーと叫んだわけではなく、たまりませんわーが正しいのだが、匿名掲示板でAAが張られるうちに勘違いされて広まった。だがそんなことはどうでもよく、要するにガールズラブ・百合サイコーということを端的に表現した始原／至言の一言である。ちなみにキマシタワーはストパニが元ネタだが、百合アニメとして最初に

有名なつたのはおそらくマリア様がみてる通称マリみてである。

|||||

最近は少しだけ自重するようになったみたいだけど、命ちゃんも容赦なくボクにちゅーちゅーしちゃう系女子だしな。ガールズラブなのか。それともボクが元男ということを知っているからノーマルなのかはわからないけど、非常にセンシティブな問題に違いない。

じつと黙ったままのボクをピンクちゃんが期待のまなざしで見つめている。

「女の子どうしが仲良くすることだよ」

と、ボクはしどろもどろになりながら言った。

ウソじゃないよね？

「そうか。じゃあ、ピンクとヒロちゃんは仲良しだからキマシタワーだなー！」

くっ。

純粹すぎる眼が痛い。ちくちく刺さるような気がする。

「うん。まあ間違つてはないけど、自分たちどうしではあんまり言わないかな。第三者が評価するときだけに使うというか」

「なるほどわかった。じゃあ、ピンクからすれば、ヒロちゃんと後輩ちゃんがキマシタワーといえいいのか？」

「う、うん。たぶんそんな感じ……」

ピンクちゃん知ってて聞いてないよね？

八歳児の知識にはやはり偏りがあるようです。

「あ、あとこれも聞きたかった」

「なにかなー」

たらりと汗が流れるのを止められない。

嫌な予感がする。

「この”ピンクは淫乱”ってなんだ」

あばばばばばば。

八歳児に向かってなに言ってるんだヒロ友！

見逃してたけどそんなことを言ってた人がいるのか。

絶対にゆるさんからな。

ロリコンは死すべし。慈悲はない。

「えっと、ピンクちゃんの髪の色ってピンク色だよな。染めてるのかな？」

「ん。これか。べつに染めてるわけじゃないぞ。ストロベリー・ブロンドって言って、薄い赤色なんだと思うぞ。生まれたときからこの色だ」

マジでアニメキャラみたいな女の子がいたよ。

自分のショートのをいじいじするピンクちゃん。

まだまだ幼いけど女の子なかわいらしき十分に持ってます。

「ピンクちゃんの髪の色かわいいね」

「ん。ヒロちゃんの髪もお月様みたいできれいだよ」

「キマシタワーっていわれそうだな」ボソ。

「ん。なにか言ったか？」

「なにも言ってないよ。みんながピンクちゃんのことをかわいいって言うってたんだよ」

「淫乱ってかわいいって意味なのか？」

うえ。

そうなるか……そうなるよな。

この子は日本語を形態素解析してそうだ。

変な逃げ口上は事態をややくしくさせそうだ。

「う……うん。ちよつとニュアンスの問題があるけど、そんな傾向分析といえますか、そういう方面の意味もあるといえますか」

「じゃあ、ヒロちゃんは淫乱だな」

「ぐほっ」

「すごく淫乱だと思うぞ！ 女の子どうしだけど、最初びっくりしたくらいだ。ピンクが見たなかで一番淫乱な女の子だといってもいい」
こいつはいけねえ。

このままだとピンクちゃんが淫乱の意味を誤解したまま使って大恥をかく恐れがある。

「あ、あのね……、ピンクちゃんが八歳児だから黙っていようと思った

んだけど、実をいうと、淫乱っていうのは、少し……そのなんというか……えちえちな感じなんだ」

「えちえちっ？」

えちえちの木。なぜかそんな用語は思い浮かぶ。もちもちの木を思い出した。

ほっぺたがなんだか熱くなってきた気がする。

ピンクちゃんがどんぐりのようなまなこがボクを見ている。

あまりに純粹で……、純心で……。

キャベツ畑やコウノトリを信じている可愛い女の子に無修正のポルノを突き付ける時を想像する時のような下卑た快感さ。

——感じちゃいました。

正直ちよつとだけゾクつとしちゃいました。

「えっちっ？」

「そう……えっち」

「えっちというのは確かHENTAIの頭文字でよかったか？」

「うん……まあ」

「つまり、淫乱という言葉は、情欲やセクシャリティにまつわる言葉とということか？」

「はい、そうです」

なんだろう。

この詰将棋のような言葉の配置は。

ボクの逃げ場が失われていく感じ。

まるで、ゾンビに少しずつ追い詰められていくようなそんな気持ちだ。

「しかし、よくわからない。ピンクはべつにヒロちゃんに対して変態的な行動をとった覚えはないぞ。ピンクは淫乱な行爲をしたのか？

ヒロちゃんにくつつきすぎたのがよくなかったのか？ 言語レベルでのインターテクスチュアリティか？」

「い、インタ？」

「間テクスト性によるコンテクストの生成か？ ミームの一種か？」

やべえ。なにいつてんのか全然わかんないんだけど……。

「ピンクが何かしたせいかな？」

あ、すごくレベルが落ちた気がする。

落としてくれたんだろうな。魔王城前から旅立ちの地くらいまで落ちた気がするけど。

「べつにそういうわけじゃないと思うよ。ピンクは淫乱というのは、ネットスラングの一種で、ピンク色の髪をしたキャラクターは淫乱であるという先入観があるんだ。ピンクちゃんは髪の色がピンクだからさ、みんなはしゃいでそんなことを言ったんだと思う」

「だから、さつき髪のことを言ったのか……」

髪の毛をいじるピンクちゃん。

変なことをいうヒロ友のことを嫌いになっちゃったかな。

最初の頃は、ヒロ友のことを愚劣なる大衆というか、そんなふうに見てたようにも思うし、実際悪ノリしちゃう面はあるからな。ボクとしてはピンクちゃんに傷つかないでほしいけど、ヒロ友のフォローもしときたいという微妙な気分です。

「ヒロちゃんから見てピンクは淫乱かな？」

八歳児から淫乱かどうかを問われる展開が、ボクの人生で訪れるとは思ってもみなかった。

いったい何を思い、そんなセリフを口にしたのだろう。

ピンクちゃんの表情筋はわりと動くほうだと思うけど、真剣なまなざし以外は特に何も感じない。

「えっと……」

命ちゃんに助けを求める。

じーっとこつちを見つめている命ちゃん。

ダメだ。完全に待ちの姿勢だ。命ちゃんのピンクちゃんに対する悪感情はないと思うけど、ボクがとられるとか本気で思っただけでそうなるのが怖い。八歳時にとられるとか意味わかんないし。

「ピンクちゃんは淫乱じゃないよ」

「でもピンクはヒロちゃんにもっとくっついてほしいぞー」

「うん。ボクとしてもうれしいけどね。でも、スキンシップは親愛の情だから、ほら淫乱とはちよっと違うよね？ 普通に仲良しなだけだ

よね？　ね？」

念押しするようにボクは言う。

「ピンクはまだ未分化な段階だからよくわからない。肛門期は抜け出してると思うんだが……思春期にはなってるしな。でも、どうやってたら子どもが生まれるかくらいは知識としては知ってる」

八歳児の口から肛門期という言葉がでてきました。

しかし、学術的な物言いのせいか、そんなにえちえちな感じではありませんでした。

八歳児にえちえちな雰囲気を感じたら、人として終わってる気がするけど。

知識と感覚がズレてるのかもしれないなあ。

ちぐはぐなところがまたかわいくもあるんだけど。この感覚は命ちゃんのときにも一度味わってるよ。命ちゃんも幼いときはだいぶんズレてたからね。知性が巨大すぎるといろいろと苦労するのですよ。お兄ちゃんの立場だと。

で、凡人のアドバイス。

「まあ、そんなに気にすることは無いってことだよ。ノリと空気ですんなこと言ってるだけだからね。でも、ボクとしてもピンクちゃんともっと仲良くなりたいたいというのは本当だよ」

ピンクちゃんもコクンと頷く。

「ピンクももっと仲良くなりたいで。えちえちなことも知りたいぞ」

はいはい好奇心が旺盛なこと——。

って、なに言っちゃってんの。この子。

小さな唇に人差し指をルージユを塗るように這わせて、

「ピンクは淫乱になりたいぞ」

こ、小悪魔だ……。

「ならなくてもいいよね？」

「ピンクは早く大人になりたいと思っている。周りが大人ばかりでピンクはいつもひとりぼっちだった。仕事はできても誰もいっしょに遊んでくれる人はいなかったぞ」

顔をうつむき、寂しそうな表情をするピンクちゃん。

ボクは自然とピンクちゃんを撫でる。

配信には不特定多数の友達を作る効果があるけど、リアルの得意分野は触覚だと思う。

子ども特有の暖かな体温とあまったるいトリートメントの匂いが伝わってくる。

ピンクちゃんは目を細めて気持ちよさそう。

「ピンクちゃんとはちゃんと友達になったから大丈夫だよ」

「ん……ヒロちゃんが初めての友達だ」

よしよしよしよしよし。

とりあえず撫でつづける。

「ヒロちゃん。ピンクは……ピンクは……あいむ……おん……くろうど……ないん……」

眠たそうに呟くピンクちゃん。

最後に何か言ったみたいだけど、英語よわわガールをなめんなよ。

ピンクちゃんが何呟いているのかまったくわからん！

とりあえず撫でポが効いているとしか……。

「和訳は天にも昇る気持ちです」

察してくれる命ちゃんが容赦ない件。

「どうもー」

「それと先輩。ひとつ言い忘れてたんですが」

神妙な命ちゃんの声だった。なんだろう？

「配信切り忘れてますよ」

「はっ」

ボクは待機状態になったノートパソコンの画面をさっと動かしてみよう。

『てえてえよお……』『エモい』『ほら、豚どもエサだぞ！』『ぶひひひ』『ぶひー』『百合豚はヒロ友じゃねえんだよなあ』『あ、バレた』『ピンクは淫乱になりたい宣言いただきました』『ピンクちゃんは淫乱？』『ヒロちゃんに撫でられたいだけの人生だった』『配信の切り忘れ。ピンクちゃんとのイチヤイチャ……このリアルさがたまらない』『毒ピ

ンの髪さらさらで撫でやすそうだな。ん。少々髪が痛んでる。ト
リートメントはしているか?』『おてて民だけにあきたらず髪民まで
いるとは』『後輩ちゃん知ってて黙ってた説あると思います』

「最低ー! えっち変態! みんなどうして配信見続けるかなー!
盗撮といっしょだよ!」

『ありがとうございます!』『我々の業界ではご褒美です』『うひひひ』
『ヒロちゃんの最低。助かる』『めっちゃ好きやねん』『生産性のない行
為ができるというのが人間のすばらしいところだよ』『ヒロちゃん天
使説から、ピンク小悪魔説でできて、神と悪魔の戦いが具現化されて
いる』『とりあえずハリポタを発禁処分しよう。悪魔を呼ぶから』『む
ちやくちやな理由でワロタw』『そもそもヒロちゃんが切り忘れたの
が悪い』
うっ。

最後に目に入った正論コメント。

切り忘れたのが悪いっていうのは、確かに本当だ。

配信は終わったあともしばらくコメントが続いていたりするし、い
わゆる余韻の状態も必要だと思うから。

「うー。今回はボクが悪かったです。でも、ピンクちゃんに対してえ
ちえちとか淫乱とか言うのは禁止! まだ八歳なんだからね!」

『承知した』『善処する』『高度な政治的配慮を有するので慎重の上決定
したい』『わかったー(素直)』『というか、ヒロちゃんも毒ピンも後輩
ちゃんもほとんど素なんだな』『ヒロちゃんはえちえちユーチュー
バーにはおなりにならないんですか?』

おなりにならねえよ。

まあ、ボクとしても少しは演じようって気持ちはあるけどね。素の
ままで男の思考もだいぶん混じってる気がするし。普通に女の子
好きだし。いい顔見せようって気持ちはやっぱりどこかにはある。
人は野生のままじゃいられないのだ。

葛井町長は切れ長の目をさらに細くさせてピンクちゃんを見下ろしている。

威圧する気持ちはないんだらうけど、ピンクちゃんとの身長差がひどいことになっている。

「私が町長です」

と、お決まりのセリフを言って、ピンクちゃんに手を差し出す町長。ピンクちゃんは物怖じせず、手を伸ばした。

握手。ピンクちゃんが座っているのはボクと同じサイドのソファ。場所はまた町長室。マナさんの視線がピンクちゃんを生暖かく見ている、ボクは守らねばならぬという決意を一層強くした。

「ピンクはピンクだ。リアルではモニカ・グッドモーニングという」

ピンクちゃんに残念ながら口マサガネタは通じなかったみたいだ。動じてないふうだけど、少しだけ残念そう。

「申し遅れました。僕は葛井明彦といいます」

「そうか。よろしく願います」

「それで、僕はどちらで呼べばいいのかな。ピンクちゃん？ モニカちゃん？」

「ピンクはピンクでいいぞ」

「じゃあ、ピンクちゃん。単刀直入に聞くけど、君は誰かの指示でこちらにやってきたのかな？」

「ピンクはヒロちゃんに会いたくてきたんだ。でも言いたいことはわかる。組織ぐるみかということだな。そうではないとはいえないな。

組織の——ひいては人類全体の希望でピンクはここにいるから」

「まるで自分が人類の代表みたいな物言いですね」

少しとげのある言い方。

ピンクちゃんは無表情に受け流す。

「実際に、代表だと思っている。人類の科学機関の頂点にたつのがピンクのいる組織ホミニスだ。ホミニスは各主要機関に働きかけて、人類の科学サイドの意識を統一させた」

「ごちらはしがないなんの変哲もないただの田舎の町役場なんですよ。僕たちはヒロちゃんに接触する前はほとんど世の中のことにつ

いて無知でしたし、今もどこの組織がどうなっているかなんて知りようがありません。今日はじめてネットにつながったくらいですし。例えば、配信でコメントにでていたジユデツカとかいう組織とあなたは関わりがあるのですか？」

「そういえばそんなコメントあったね。」

「確か、日米の共同経済会議体がジユデツカとかいうらしい。」

英語よわわガルなんで、どうせボクにはわかんないけど、たぶん『J』APAN―『U』SAうんたらかんたらみたいな感じなんだろう。JUDICCAなのかな。」

「ホミニスは日米共同での科学開発をしている独立色が強い組織だ。だが、資金源をたどるとジユデツカと無関係ではないな。ジユデツカからお金はだしてもらってる分、いろいろと融通をきかせるという関係だ。ただのお金だけの関係に過ぎない」

「しかし、資本主義の社会においては影響力は強かったんじゃないかな」

「もちろん。ゾンビハザードが起こる前はそうだった」

「いまは違うと？」

「違う。そもそも組織の人事権については口だしをさせていない。ホミニスは科学者集団だからな。科学的知見がない者が上にたつても現場は混乱するだけだ。――と、ママ……ごほん、上長が言っていた」

「つまり、ジユデツカという組織が何を考えているかはわからないということかな？」

「そうだ。正直なところさっぱりわからない。おそらく九州内の電気を停止させたのはジユデツカの意味だとは思いますが、そんなことをしてもまったく意味がないし、むしろ人類全体として困るのは目に見えている」

「例えば、ヒロちゃんがいなくてもゾンビをどうにかできると思っていて、新秩序のためにはヒロちゃんとの協力関係はないほうがいいと思っただとかは？」

「考えられる。しかし、ヒロちゃんがいない場合、ゾンビからの回復はほぼ不可能に近い状況だ。ゾンビを全滅させることは可能かもしれない」

ないが、多大な犠牲がでる。理に適っていない」

「感情的なもつれというか、拒絶反応だとは考えられないかな」

町長の言葉にピンクちゃんは首をひねっていた。

理性が強いピンクちゃんとしては人の感情の得体のしれない理不尽さがまだわからないだろう。

ボクはわりとわかります。

正直、ゾンビは怖いからね。ボクも異物として怖がられている可能性はあると思う。

なにがなんでも消したい。そう考えている人が一定以上はいると思う。

「ボクね。この町役場で誰かにカエレって書かれたよ」

言うと、ピンクちゃんは最初驚き、それから怒りからかプルプルと身体を震わせていた。

「人間はやっぱり愚かだ。バカだ。愚物だ。愚鈍だ。愚劣だ。阿呆だ。鈍麻だ。愚昧だ。どうして、人間はいつも綺麗なものを踏みつけにするんだ！」

地団太を踏み、キタナイ言葉を躊躇なく喚き散らすピンクちゃん。

「お、おちついてピンクちゃん。ボクとしてはそんなにシヨックを受けたわけでもないし、人類に対する敵愾心があるわけでもないから」
ボクが思うに――。

例えば、ゾンビから人類の生存圏を広げたり、あるいはゾンビから回復させようという行動が遅かっただけでも、ボクを糾弾する理由にはなりうるのだろうと思う。

会社の社長が、社員が忖度して居残るのをいいことに何も言わないという不作為が罪になるように、ボクも努力が足りないと思われているのかなあって。

人類の忖度につかかって、配信とかを無邪気に楽しんでるクソガキとかさ。

そんなふうに使われてるかもしれないわけ――。

もちろん、ボクはボクが犯人でないのは知っている。

ボクは人類を見下しながら笑ってる悪魔じゃない。

でも、ボクのクオリアは誰にも見えない。

「ピンクは決めたぞ」

ボクが懊悩していると、代わりにピンクちゃんが毅然とした声を出す。

「ピンクは犯人を見つけ出してやる。真実はいつもひとつだ！」

うーむ。これはこれでややこしい。

ハザードレベル89

【リアルなヒロちゃんについて語るべきときが来た】

1：名も無きヒロ友 ID：vvBRKz9Ga
騙りかと思われるかもしれんが、オレのいる避難場所にヒロちゃん
来てる

挨拶したこともある。握手したこともある。にっこり笑いかけて
もらったこともある。

つまり、リアルなヒロちゃんを知ってる。勝ち組すぎて天下が取れ
そう。

2：名も無きヒロ友 ID：of4TM4lrk
IDがダブルピースしてるみたいでムカつく
卵を割るときに一生殻が入りつづけろ

12：名も無きヒロ友 ID：7JHVvZ+4W
2から嫉妬コメでワロタ、どーせ騙りだろ
ソースだせや

17：名も無きヒロ友 ID：Zxqs/94lM
で、結局のところ緋色ちゃんが本名なんだよな？
宇宙生物じゃないよな？

18：名も無きヒロ友 ID：vvBRKz9Ga
間近で見ると超かわええ
ピンクちゃんもかわええ
後輩ちゃんは美人さんだな
緋色ちゃんっていうのは本名らしいぞ

本人に聞いたんでまちがいない
ソースはちよっと待ってろ。いまちようどヒロちゃんがいるから

頼んでみる

21：名も無きヒロ友 ID：u b L a v Q B w
というか、1の書きこんでいるところを逆探されたらヤバクね？

25：名も無きヒロ友 ID：M l Y l N V S u Q
◇21 後輩ちゃんが欺瞞しているから大丈夫なんだとよ

29：名も無きヒロ友 ID：K c 5 n t V r O J
つか、そこよく検閲とかしねーよな。。

34：名も無きヒロ友 ID：0 + r Z s 2 P 9 o
アホが書きこんだら特定されそうだしな

39：名も無きヒロ友 ID：／V R l 7 R f p t
そもそもヒロちゃんがポンコツなんですぐに特定されそうな件

40：名も無きヒロ友 ID：9 X g 5 9 K i b A
配信のときはわりと気をつけて発言しているみたいだけどな。と
ころで1はネームドなのか？

46：名も無きヒロ友 ID：M 8 i B C K o E Q
1が言ってるのはマジみたいだな。いま探知したら1は富士山の
頂上にいることになってる

53：名も無きヒロ友 ID：q s o p / H U O C
1は佐賀にいるんだよな？ なあ

60：名も無きヒロ友 ID：／8 4 9 r G 7 l K
場所特定はNG

63 : 名も無きヒロ友 ID : v v B R K z 9 G a

どこにいるかはいえないけど、どんな様子かは伝えられるぜ。
ネームドじゃない。

あと、ほら、ソースだ。

ヒロちゃんがいいよって言うてくれたから撮れたてほやほやのやつだ。

67 : 名も無きヒロ友 ID : h Q 7 7 d c + z T

ヒロちゃんが1のIDを書いた紙を持つてる……だと

68 : 名も無きヒロ友 ID : 9 N S s 4 k B 2 0

禿げろ

74 : 名も無きヒロ友 ID : j s l x C H f C V

後輩ちゃんに刺されそう

78 : 名も無きヒロ友 ID : u w q q + y S s 2

ゾンビだらけの世界で幼女をおいかけまわす1がいるという

83 : 名も無きヒロ友 ID : p P z z I O j G f

ヒロちゃんが断りきれない性格なことをいいことに美少女の姿態を撮影するとかおまえ変態かよ

90 : 名も無きヒロ友 ID : v v B R K z 9 G a

なんとでもいえ。オレは勝者だ。

98 : 名も無きヒロ友 ID : H F s W s H B n Y

1様。近況報告をお願いいたします。配信外の出来事とか何かございませんでしょうか。

99 : 名も無きヒロ友 ID : k 7 + 1 j I Z T 0

突然丁寧語な政治臭ばりばりなやつがきてて草

104 : 名も無きヒロ友 ID : G I K L W N X N Y

配信外の情報は気になるな。ワタクラみたいに人類生存圏を広げようとしているんだろ？

107 : 名も無きヒロ友 ID : v v B R K z 9 G a

聞いた話だと、ちよつとずつだけ解放区を広げていつてるみたいだな

家の中にたてこもっていたやつらとも合流して、人間もだいぶん増えたよ

111 : 名も無きヒロ友 ID : r p t z M M O y 2

悪い大人に騙されてないか心配だな

115 : 名も無きヒロ友 ID : X 2 d C 3 3 x + n

1はなにかしてないのかよ。社内ニートか？

117 : 名も無きヒロ友 ID : v v B R K z 9 G a

こっちは限られた人間しか外に出ないようになってるんだよ

123 : 名も無きヒロ友 ID : R j M j A J n 4 X

どうせゾンビが怖いだけだろ。一生震えてろ。

127 : 名も無きヒロ友 ID : v v B R K z 9 G a

いきなりどうした？情緒不安定なやつがいるな。まあ外に自由に出来なくなってるからみんなそうか。

129 : 名も無きヒロ友 ID : H F s W s H B n Y

人類の生存圏拡大はどの程度のペースなのでしょうか。1様情報提供をお願いします。

132 : 名も無きヒロ友 ID : YmDF00b7R
がつつきすぎて童貞臭がするw

134 : 名も無きヒロ友 ID : vvBRKz9Ga
▽ 132 ヒロちゃんのペースだからなんともいえんよ。毎日散歩できる距離が5分くらい伸びてるって感じじゃないか？ あとゾンビどもはヒロちゃんが追い出していつてるわけだけど、バリケードが破壊される可能性はあるしな。見回り班とかが近く結成されるらしい。

140 : 名も無きヒロ友 ID : yjlwV9XvG
隔離地域を広げてる感じか。毒ピンはなにしてるんだ。

146 : 名も無きヒロ友 ID : rcSZW5xuP
毒ピンの次回配信は、ヒロちゃんの生態調査だろ

148 : 名も無きヒロ友 ID : dVRpSp673
ヒロちゃんの生態調査。感度3000倍

149 : 名も無きヒロ友 ID : PXLGh2YS
この書き込みは削除されました

156 : 名も無きヒロ友 ID : vvBRKz9Ga
毒ピンは探偵ごっこしてるみたいだぞ
知らないところでヒロちゃんのDNAとかとってるのかもしれないが、一般ヒロ友のオレにはわからない

162 : 名も無きヒロ友 ID : uSfBOXIT2
なんだ。探偵ごっこって。

169 : 名も無きヒロ友 ID : vvBRKz9Ga

なんか避難所の壁に『カエレ』とか書かれてて、その犯人探しをやつてるんだと思う。ピンクちゃん怒ってたからな

170：名も無きヒロ友 ID：OHhnTcfVW
なにそれ？ おまえんこの避難所、ヒロちゃんにカエレとかぬかしやがったの？ 燃やす？

171：名も無きヒロ友 ID：FevE5ZrHE
民度低すぎるだろ。おまえんどこ

173：名も無きヒロ友 ID：WVPp7swhu
1のコメントとか考えてみても、どう考えてもヒロちゃん様の”救い”に値しない存在ですね。

176：名も無きヒロ友 ID：PCaxf0ZIl
おいやめろ。ヒロちゃんは争いは求めてないぞ
今も1のところにいるのがその証拠だ

180：名も無きヒロ友 ID：hVMzy5Vtu
1が勝ち組とか言い出すのがそもそも悪いんじゃないや……

186：名も無きヒロ友 ID：vvBRKz9Ga
正直スマンカッタ。

192：名も無きヒロ友 ID：zHzh15avX
反省してない1がいる

194：名も無きヒロ友 ID：RZgjQhveo
しかし、わけわからん人間がおるよな。

どう考えても除菌ができるジョイみたいに、ゾンビ避けできるヒロちゃんを手元に置いておいたほうがいいに決まってるのにな。監禁

とかは無理にしろ籠絡するだろ普通。

195 : 名も無きヒロ友 ID : 3pkvEJKUI

先生。犯罪教唆している人がここにいまーす！

☆Ⅱ

あいかわらず町長室でのひとコマ。

ピンクちゃんの探偵宣言はいいんだけど、実際問題、非常にややこしいのがボクの政治的な立ち位置だ。言ってみれば、要人みたいな立場になっているボクに暴言ともいえる『カエレ』という言葉を投げかけた謎の犯人Xは、どのような扱いを受けることになるのか想像に難くない。

たとえボクがゆるしたとしても、周りのみんながゆるさないってことはありえる。

いつのまにか犯人さんの姿が見えなくなっていましたとか後味最悪すぎないかな。

後味とかを考えるのは実に人間的な思考かもしれないけど、普通にヤダよ。

だから放置プレイのほうがいいかもしれないんだ。

みんなもできれば事件のことは忘れて風化したいって思ってるかもしれない。古傷をえぐるような行為でもある。事件をあらわにするよりも玉虫色のモヤつとしたままの未解決事件のほうがいいかもしれない。このあたりはエスパーじゃないからわからんけどね。超能力者ではあるけど。

「そんなアンチミステリみたいなことをいつてたら警察はいらなぞぞ」

ピンクちゃんはプリプリ怒る。

小さな身体でめいっぱいお怒りのご様子だ。

「でも、あの文字は誰に対してのものなのかはわからないし、ボクが被

害者とは限らないよね」

まあ状況からすると、間違いなくボクが対象だろうけどさ。

「んー」

ピンクちゃん考える。

白衣のポツケに手をつつこんで、首を左右に揺らしている。

なんだか独特の思考方法だ。この子、頭をすりすりしてくるのが好きだからな。

単に幼いから頭が重いだけかもしれないけど。

「わかっていることから並べていく。否定神学と同じ要領でありえないものを排除していけば、残ったものが真実だ」

「それは世の中が、虚実だけで出来ていると考えればそうだけけどさ……」

本当にそうなのだろうか。

人のこのころというのは、そんなにカンタンに否定と肯定に分けられるのだろうか。

敵と味方。

犯人と被害者。

ウソと本当。

男と女。

ゾンビと人間。

そんなふうによりわけられない中間が残存している可能性はないのか。

「ご主人様が排中律を否定してらっしゃるようです」

「む……」とピンクちゃんが後ろを振り向くと、いつもの変態ロリコン淑女なマナさんだった。

今回はボクを中心に命ちゃんとピンクちゃんが座り、わりと自然ななりゆきで、マナさんはピンクちゃんの横に座っていたからな。ピンクちゃんとしてはマナさんの存在をはじめて人間として知覚した瞬間なのかもしれない。

マナさんはあえてソファから降りて膝をついてピンクちゃんと視線をあわし、自己紹介も兼ねて優しく握手を求めめる。

ピンクちゃんは拒まず、握手を受け入れる。

基本的に握手は友好の証だし、拒む理由はないからだ。

でも——、危険なお姉さんだけどね。

「あー。マナさん。ピンクちゃんに手をだしたらダメだよ」
にぎにぎしてる手がちよつとしつこいように感じる。

ピンクちゃんは警戒心がないけど、見た目だけなら優しいお姉さんふうだからな。

見た目だけなら！

「ご主人様のあまーい嫉妬ですか？ お姉さんが恋しいですか」

「恋しいというより、ロリコンだけど同性ならではの厄介さを感じてます……」

いちおう同性だよね。

精神的にはどうかかわからないけど。

「女の子どうしですよ。ぜんぜん怖くないですよ〜」

「そういうこと言うからあ」

じと目で、ジリジリと距離をとり、ピンクちゃんを後ろに隠すボク。

正直なところ、女の人じゃなかったら、あっさり逮捕されるよね。

いまのゾンビな世の中でも、それぐらいの良識は残ってるはずだ。

「む。マナはロリコンなのか？」

と、ピンクちゃんがようやく気づいたようだった。

「そうですよ〜。マナお姉さんはちっちゃい女の子が好きなんです」

「ヒロちゃんに手をだしたらピンクは許さないぞ」

ピンクちゃんは立ち上がりボクの前にでて、かばってくれた。

ボクより小さな身長のパークちゃんが、ギリギリまで手をのばして壁になってくれるのを見ると、愛くるしいことこのうえない。

「あ、ヤバイ。尊さが溢れる……。大丈夫ですよ。お姉さんはご主人様の本当に嫌がることはしないですから。こう見えてご主人様のお気に入りゾンビなんですよ」

すうーっと大きな胸ごと飛びこんでくる感じ。

伸びてくるぶしつけなロリコンの魔の手。

対するピンクちゃんは。

「シャー！」

それはまるで子猫の威嚇だった。

「ピンクちゃん。そんなに警戒しなくても大丈夫だよ。いちおう優しいお姉さんだから。いちおうはね……」

「そうか？ ヒロちゃんがそう言うなら」

「お姉さんへの警戒心を解いてくれてありがとうございます。よしよし」

「む。むう……」

ピンクちゃんは頭をなでられて、一瞬警戒しようか迷ったけれども、結局はなすがままになる。

このあたりも子猫っぽい感じ。

「で、マナさん。なにか言いたいことあるんでしょう？」

「そうですね。ご主人様はもとから誰が犯人かよりどうしてそうしたのかを知りたいタイプでしたよね。ピンクちゃんの場合は、誰が犯人かということを目指しているわけですが、そうなるとご主人様とピンクちゃんの目的は異なることになります」

「それはそうだね」

「ましてや、先ほどのご主人様の言葉にあるように、動機というのはあやふやなものの場合もあるわけですから、明確な言語化を拒絶するようなどころがあるわけです。放っておいたほうが一番鎮火が早いのではないかとお姉さんは思うわけですよ」

「むう」ピンクちゃんはほっぺたを膨らませる。「ピンクは悪いことをしたならばつきりと謝らせたいぞ！」

「時にピンクちゃんに問いたいのですけど、ご主人様はなぜ動画配信に日々いそしんでいらっしやると思えますか？」

「楽しいからじゃないか？」

「実際はご主人様に聞いてみたらよいかと思いますが、おそらく答えは一言では言えないんじゃないかと思えますよ」

「うん。まあそうかもしれないね」とボクは答える。

「ここに首尾一貫性があるというのは、わりと幻想的であると思う

んだよね。

人間はなにかをなしとげようとする貫くような意志を持つこともあるけれど、だいたいはモヤモヤとした妄想の連なりが瞬間的に移り変わっていくものだと思う。つまりぼんやりしてる時間も多いうか。バカな連想もしながら日々を過ごしているというか。

ボクが特殊なのかは分からない。わりと凡人よりな考えだと思う。ずーっと同じことを考え続けられるなんて超人以外のなものでもない。

「つまり、排中律の否定なわけです」

「排中律って？」

「要するに、物事にはXかXじゃないかという二種類だけではなくて中間的な曖昧なこともあるってことですよ」

「わりとマナさんの言うことはボクのこころをあらわしてるかもなあ」

「しかし」ピンクさんがこわばった顔を見せる。「犯人かそうじゃないかということに中間項なんて存在しないぞ」

「うーん。ピンクちゃんの言うこともわかるけどね」

ボクの顔はいま曖昧な微笑を浮かべていることだろう。

ピンクちゃんの言うところのプレコックス感溢れる表情だ。

「ピンクは余計なお世話だったか？」

あ、いかん。

ピンクちゃんがちよつと涙目になってる。

八歳にしては卓越した理論武装と頭の回転を見せるピンクちゃんだけど、最強の武器は八歳児の涙だ。ボクとしても昔の命ちゃんを思い出すようで良心のうずきが……。

「ヒロちゃんは犯人探ししたくなかったのか？」

「今のままだと……その……放っておくほうがいいかなって」

思うような思わないようなあいまいさがあります。

現実の小説のようにはいかなくて、結構こういうあいまいさを多量に含んでいるものなんだ。

「わかった。ピンクが先走ったんだな」

「あ、いや……気持ちはずごくうれしかったよ」

「ピンクはヒロちゃんのところを全然わかってなかった。専門家なのに……」

やべえ。

ピンクちゃんのからだがぶるぶる震え始めている。

泣くぞ。ほら泣くぞ。

や、やばいよ。ボクが泣かせたみたいになる。

「ピンクちゃん！」

やむをえずボクはピンクちゃんの身体をかき抱いた。

「むう」

残された手段は肉体言語しかなかった。

男のままだったら事案でしかない幼女のからだを抱くという行方も、いまのボクなら見た目的には許される。

ピンクちゃんは頬を染めて、すぐに涙がひっこんだ。

ちいさな頃から命ちゃんのお世話をしていたボクからすれば余裕の対応ですよ。

経験が違う。

小さな子って感情の振れ幅が大きいから気をつけないといけないわけです。

ふう……ヤバかった。

そして、背中になにか気配を感じる。

そつと振り向くと、視線のその先にはボクをじつと見つめている命ちゃん。

本当に透明感のある微笑を浮かべて、ボクを見ている。

ぷ……プレコックス感が漂いすぎ。

「あの……命ちゃん。怒ってないよね？」

「べつに怒ってないですよ。ただ、ピンクさんに一言いっておきたいことがあって」

「なんだ？」

命ちゃんの言葉にピンクちゃんが反応する。

「わたしたちのように反応が早い人間は、基本的に先輩の言葉を待つ

て動いたほうが間違いが少なくてすみませす」

それは命ちゃんの生存戦略だね。

長年付き合う中で少しずつ醸成された距離感だと思ってる。

でも、違うのかな。

天才には天才のやり方があるのかもしれない。

「そうかもしれないな」とピンクちゃんは軽くうなづく。

「でも」命ちゃんは少し反応を遅くした。「犯人については私もつきとめたくはありますね」

「そうなのか？ 後輩ちゃんはヒロちゃんと気持ちを同じくしていると思っただぞ」

「わたしはわたしですから」

すこし悲しそうな顔をする命ちゃん。

「命ちゃんとしては犯人探ししたほうがいいと思ってるの？」

「先輩の気持ちとは異なりますが、わたしとしてはそうです」

「そっか」

それはそれでかまわない。

ボクはボク自身の考えがいつも正しいとは思わないし、むしろ命ちゃんが自発的に考えるほうがいいとすら思っている。天才的な頭脳を持つ子だからね。

ただ、その場合はボクは置いてきぼりをくらってしまう。

命ちゃんはいつもはボクのことを待っていてくれる。

さみしい気持ちができるのは本当だ。命ちゃんのことをかわいい後輩といいながら、ボクは手元に置いておきたいダメなお兄ちゃんなのかもしれない。

「ピンクちゃんも犯人を探したいならボクも止めないよ」

「うーむ。ピンクはやっぱり犯人を探したほうがいいと思うぞ。これから意思決定をいろいろとおこなうなかで不確定要素を抱えこんだままというのは気持ちが悪い」

わからないことが気持ち悪いという感覚はわかる。

でもそうだとすると、他者のこころは常にわからないのだから気持ち悪いということになってしまう。

「ピンクとしては不満があるなら言うてほしいと思う。ピンクができることならやるし」

「それはボクもそうだけどね」

「いいにくいなら匿名掲示板でも使えばいいんだ」

「まあ壁にペンキ塗るよりははるかに簡単だね」

犯人次第ではあるけどさ。

ちなみに、こここのことを書いてるスレッドも結構たくさんあるみたい。

葛井町長の考えではいまのところ止める気はないみたいだけど危険はないのかな。

そういう旨のことを聞いてみたら――。

「いまのところは止める気はありませんよ。せつかく電気とネットが復活したんですし皆さん自由を謳歌したいはずです。そちらの神埼さんのおかげでどこから発信しているのかわからないでしょう」
命ちゃんの謎の技術のおかげで、ひとまずはそうらしいけど、書きこむ内容によっては場所バレするかもしれない。でも自由か。なにかを表現したいって自由は精神的なものななかではかなり重要だ。

おさえつけてどうにかなるものでもない。

そんなわけで――。

まあいろいろ懸念すべきことはあるわけだけど、ピンクちゃんは犯人探しをすることになった。

ボクは配信と日々のゾンビ避けをがんばることにします。

☆
☆

【リアルなヒロちゃんについて語るべきときが来た その8】

103：勝ち組なヒロ友 ID：vvBRKz9Ga

追加だがピンクちゃんの犯人探し宣言のあと全員指紋とられたりしたな

104 : 名もなきヒロ友 ID : g g v Y w n a e 7
雰囲気とかどうなんだ？

105 : 名もなきヒロ友 ID : t G l 6 S l 6 V a
幼女に指紋とられるとかおまえ勝ち組かよ

106 : v v B R K z 9 G a ID : v v B R K z 9 G a
特に変わった感じはしないな。

ギスギスしたりもしてない感じ。

ヒロちゃんは犯人がわかっててもこっさり呼び出すだけで特に何も
しないって言ってくれたし。

107 : 名もなきヒロ友 ID : 6 3 f L W u h 0 e

ヒロちゃんに考えてんのかな。小学生らしく何も考えてないの
かな

108 : 名もなきヒロ友 ID : i Y l R w f s J y
ヒロちゃんの生姿をもっと報告しろ

109 : 名もなきヒロ友 ID : s B E j e x y l l I
ギスギスしたくないんだろ。わかれよそれぐらい。

110 : 名もなきヒロ友 ID : 6 3 f L W u h 0 e
ギスギスしたくないならそれこそ毒ピンの行動とめろって話

111 : 名もなきヒロ友 ID : s b v W I D k x B
毒ピンの行動は秩序は維持しようとしているというその政治機
構の意図するところなのかもな

112 : 名もなきヒロ友 ID : E n C I 2 F R r s

ピンクはべつにその政治機構とはべつのところだろ。立ち位置としては絶妙かも

問題が起こってもわれわれとは関係がございませんといえるしな

113：名もなきヒロ友 ID：oLgpHSxIG
科学調査でなにかわかったのか？

114：勝ち組なヒロ友 ID：vvBRKz9Ga
こつちには何も知らされてないな。

ミステリっぽく聞き取り調査するかと思ったら、なんか成分分析とかしだし。

わかっててもこのままフェードアウトするつもりかもわからん。

115：名もなきヒロ友 ID：X9Ippvfyx
ペンキ塗ったハケの指紋で一発でわかるだろ？

116：勝ち組なヒロ友 ID：vvBRKz9Ga
手袋してたらわからんだろ。

それに例の文字を消すときに何人かがハケに触ってるらしい。

117：名もなきヒロ友 ID：7Zzehvm5K
その時点でだいぶ絞れてる気もするな。犯人めっちゃ焦ってるんじゃない？

118：名もなきヒロ友 ID：DoeaDxK5Y
さっさと犯人は自首してどうぞ。ついでにゾンビになっちゃえばいいと思うの。

119：名もなきヒロ友 ID：19io2ZTpu
そんなことよりヒロちゃんの写真をもっとくれ

120 : 名もなきヒロ友 ID : C r m d o p l c k
ゾンビ解放区域は広がったのか？ 俺、静岡だから俺んところま
でにどんだけ時間かかるんだよ

121 : 名もなきヒロ友 ID : h j G G y L g R W
静岡のどこだよ？

122 : 名もなきヒロ友 ID : C r m d o p l c k
沼津

123 : 名もなきヒロ友 ID : h j G G y L g R W
ラブライブで生存しろ w w w w w

124 : 名もなきヒロ友 ID : w T L r o 4 d i v
沼津つてくそ田舎だよな。南部と北部が分断されとるし。駅通れ
んし。藤枝のほうが発展してね？

125 : 名もなきヒロ友 ID : x y P L C W R 7 1
静岡は佐賀ポジだよな

126 : 名もなきヒロ友 ID : g s Q j x c 5 O m
／ ^ o ^ \ てめえらは静岡民を怒らせた

127 : 名もなきヒロ友 ID : G O M L e A 2 7 6
ふっじさーん w w w w w

128 : 名もなきヒロ友 ID : 2 w P P q X k L v
ふっじさーん w w w w w w w w w

129 : 名もなきヒロ友 ID : k t c m f z O 8 h
ふっじさん . . .

130 : 名もなきヒロ友 ID : l H N 7 K g k d N
スレちはそれぐらいにして、解放区の広がり具合は気になるな

131 : 勝ち組なヒロ友 ID : v v B R K z 9 G a
じわじわと広がってるよ

ヒロちゃんが自分はどうどんレベルアップしてるからそのうち加速するって言ってたけどな

すげえかわいいなくらいしか思い浮かばなかった

132 : 名もなきヒロ友 ID : v T y W h 3 s H b
絶対生存が確約されてる時点でそんなもんだよな

133 : 勝ち組なヒロ友 ID : v v v B R K z 9 G a
あ

134 : 名もなきヒロ友 ID : a T o e w T k U L
あ?

135 : 名もなきヒロ友 ID : u R Z / x W I x 2
どうした1

136 : 勝ち組なヒロ友 ID : v v B R K z 9 G a
やべえ……やべえよ

137 : 名もなきヒロ友 ID : j u k s v S D h Y
ん?

138 : 名もなきヒロ友 ID : a Y I O j K q o M
なにかあったのか?

139 : 勝ち組なヒロ友 ID : v v B R K z 9 G a
いま一階で騒ぎがあった。ゾンビだ。

140 : 名もなきヒロ友 ID : J S Q T h O O a q
は？ ヒロちゃんいるだろ。どういうこと？

141 : 勝ち組なヒロ友 ID : v v B R K z 9 G a
ヒロちゃんは毎日来てるわけじゃないからな。

律儀に土日祝日は休んでる感じだ。小学生だしな。

それはいいんだけど、昨日から体調悪いやつが何人かいたんだけど、

そいつがゾンビになっていま何人かが取り押さえてるらしい。

いま、チラつて一階見たけど、やべえ。バイオテロってレベルじゃねえぞ。

142 : 名もなきヒロ友 ID : a 3 t D P Y Y B I
ヒロちゃんに感染した？

143 : 名もなきヒロ友 ID : 0 a Y R S O S T X
ガチヒロ友案件だったりするのか……やっぱりゾンビ少女とい
のはリスク高かった
怖いなーとじまりしとこ

144 : 名もなきヒロ友 ID : k U e v V b z x i
事実関係も明らかにしないで勝手に推測するのヤバイだろ

145 : 名もなきヒロ友 ID : B L I Z N s T J w
1 応答しろ。1！

146 : 名もなきヒロ友 ID : e D A m K J R o g
1 がバイオテロって書いてたから、人間の作業なんじゃね？

ゾンビーフとか。ゾンビウエポンとか。

147：名もなきヒロ友 ID：lswzymEAD
ゾンビなゲームでも下水道とかネズミ使って広まったよな

148：名もなきヒロ友 ID：nlMot8thw
水か……

149：名もなきヒロ友 ID：UWlUESWs0
1 どうした？

150：名もなきヒロ友 ID：SWEaGOyFN
1 がゾンビになった件について

151：名もなきヒロ友 ID：qfs5rScQX
ヒロちゃんに感染するとか勝ち組かよ

152：名もなきヒロ友 ID：U8RdeVlt6
ヒロちゃん。早く来てくれ。ヒロちゃん！

【リアルなヒロちゃんについて語るべきときが来た その23】

672：勝ち組なヒロ友 ID：vvBRKz9Ga

マジでゾンビこええええええよおおおおおお

673：名もなきヒロ友 ID：Y3cgqBMoa

1 が生存してた件

674 : 名もなきヒロ友 ID : n9 r l V h O Z P

どうなったのか気になって夜も眠れなかった。あれから一時間でスレがこんなに進んでしまったぞ。

責任とって辞職しろ。

675 : 名もなきヒロ友 ID : E S G 2 Z Q D J d

マジどうなったんだよ

676 : 名もなきヒロ友 ID : v v B R K z 9 G a

ヒロちゃん来てくれてみんな一瞬で治ったよ。

天使すぎて宗篤。

677 : 名もなきヒロ友 ID : d I X O V f D f A

宗篤がでてしまいました。申し訳ございません。

678 : 名もなきヒロ友 ID : 9 F v p c F y o k

胸熱とかどうでもいいから、何が起こったのか説明してくれよ

679 : 名もなきヒロ友 ID : v v B R K z 9 G a

昨日から体調悪かった人が次々とゾンビになる。

← ゾンビを取り押さえるも何人か噛まれる。

← ゾンビ増える。

← またまたゾンビ増える。

← 1階だけでなく2階でもゾンビ発生。

← 自分も気持ち悪くなってゾンビになるんじゃないかと恐怖。

←

いつのまにか半数以上がゾンビないし負傷者に。

←

町長の指示で屋上へ退避。

←

ヒロちゃん来てくれて一気にゾンビ回復。(いまこ)

680：名もなきヒロ友 ID：r59cg7ki／

ヒロちゃんのマッチポンプってことないよな

681：名もなきヒロ友 ID：fSsG2lnjP

∠679 そんなことやってなんの意味があるんだよ

682：名もなきヒロ友 ID：r59cg7ki／

人気取りとかあるんじゃない？ 1も胸熱とか言ってるくらいだし。

奴隷買って回復して惚れさせる展開とかあるじゃん。

683：名もなきヒロ友 ID：VnOudc+Mk

お前の頭ん中、なろう小説かよ。

684：名もなきヒロ友 ID：NrTdXJ8TM

これ犯人同じ？

685：名もなきヒロ友 ID：L5uKusgl t

噛まれた人は傷は大丈夫？

686：勝ち組なヒロ友 ID：vvBRKz9Ga

ほとんどが軽傷な人ばかりでそこは大丈夫だった。

でも、なんかみんな怖がってる感じだな。

687：名もなきヒロ友 ID：W5GjOSIOW

ヒロちゃんを怖がってるとかマジかよ。

だったら俺んどこ来てくれ。

688 : 名もなきヒロ友 ID : B p u 9 f r F Z W
緋色様を怖がるとか人として終わってますね

689 : 名もなきヒロ友 ID : e a l Z w T D X a
ヒロちゃんをというより、ゾンビ避けできると思っていたからなおさらって

感じじゃないか

690 : 勝ち組なヒロ友 ID : v v B R K z 9 G a
ヒロちゃんに対しては怖いって感じはないな。
触れ合える距離に結構長いこといたからかもしれないけど。
目の前で見たら、普通に超絶美少女ってことぐらいしかわからんし。

怖いっていうのはゾンビに対する恐怖かもしれん。
もしくは、俺たちの中に、そういうことをする気がくるってやつがいるって考えると恐ろしい。

691 : 名もなきヒロ友 ID : i a + i S V 2 d g
毒ピンがもつと本気になって探してればな。

692 : 名もなきヒロ友 ID : S W / V o W Y m 0
これは毒ピンも本気にならざるをえない。

693 : 名もなきヒロ友 ID : U a J / d y X 2 h
犯人探ししないと収まらんやろうな

694 : 名もなきヒロ友 ID : s 6 h 8 z p O u d
リア狂はなにするかわかんねーな

695：名もなきヒロ友 ID：ZKL+OWZBW
どうせ無敵の人でしょ

696：名もなきヒロ友 ID：HJsWSOIWj
緋色様、愚かなわれらをお救いください。

697：名もなきヒロ友 ID：WUUJjvbCN
これでまた配信遅れそうだな。やだなー

698：名もなきヒロ友 ID：lacPML503
ヒロちゃんの配信が見たいだけの人生だった

699：勝ち組なヒロ友 ID：vvBRKz9Ga
さつき町長とヒロちゃんが話をしてくれたよ
犯人探しはするらしい

それと犯行方法ははつきりしてて、貯水槽にゾンビ槍を入れこんだらしい。

これもヒロちゃんが浄化したから問題ないらしいけど、気分的にはちよつと、な……

700：名もなきヒロ友 ID：lbjY9gvAR
人肉食ってるようなもんだからな

701：名もなきヒロ友 ID：SAFqm5mQx
ホラーとかでありがちだよな

アパートの水が腐ってるような臭いがしだして、調査してみたら貯水タンクの中に死体がつて

702：名もなきヒロ友 ID：6cwxAe+tr
ゾンビーフ案件か

ハザードレベル90

町役場内の殺風景な一室。

ここには長い灰色の机が口の字型に置かれていて、他にはパイプ椅子がいくつか。

丸いシンプルな時計が天井近くに配置され、無音でゆるりと回っている。

要するに会議室というかそういうところ。

面接でもありそうな、そんな場所。

そこで、いまボクがおこなっているのは――。

カウンセリングだった。

「天使ちゃん。わたし、またゾンビになっちゃったんだけど……」

涙目で語るのは、多々良令子ちゃん。

ゾンビ温泉宿のひとり娘で、ゾンビになって人肉モグモグしちゃった女子中学生。

ゾンビだったときの記憶は損傷が少なければわりと残る傾向にあるらしくて、人肉モグモグの記憶もぼつちり残っていた。それがトラウマになって一時期荒れていたという経緯がある。

そのときはゾンビウイルスを除去して、ぼつちり人間に戻ってるわけだけど別に抗体ができたわけではないから、普通にもう一度感染するということはある。そして、ありえた。

先のゾンビテロ事件によって、町役場の人間の半数以上がゾンビになっちゃったからね。

当選確率はなんと驚きの50パーセント。

まあ、そういうこともあるよね……。

「傷は、大丈夫？ それとボク、天使じゃないんだけど」

令子ちゃんは無言で腕をまくりあげる。

そこにはガーゼで覆われた痛々しい傷があった。

実をいうとあまり検証はしていないところだけど、ゾンビ状態が長く続くと緩やかだけど人間よりも強い再生能力がある。人間的に言えば、噛み千切られた肉片が治るのにはかなりの時間を要するところ

だけど、ゾンビだとカサブタみたいになるのに時間はかからない。

つまり、傷を治すという意味ではゾンビ状態のほうがよかったわけだけど、でもそんなのを待っていたら、みんなの恐怖と不安が増大していただろうと思う。

誰だってゾンビになりたいくはないし、ゾンビが近くにいるのは怖い。ゾンビってなに考えているか外形からはわからないからね。とてもおながすいているのかなーとかぐらいしか。

なので傷の治りよりもゾンビからの回復を優先した。

「傷、治せないのかな……」

もちろん方法はないわけではない。

ヒイロゾンビにしてしまえば――。

ヒイロゾンビになってしまったら問答無用の再生能力でどんな傷もたちまち元どおり。

けれど、ヒイロゾンビをやたらめったら増やすのも人類との共存的にまずいように思います。ピンクちゃんはべつにいいんじゃないかといってたけど、どうなんだろうね。ヒイロゾンビになったらもう二度と人間には戻れない。現状少なくともボクの力では戻しようがなかった。

ヒイロゾンビを経由しないなら、あとはノーマルゾンビにもう一度なつてもらって傷が治ったところですかさず回復するとかという方法もあるっちゃあるけど……。

「もう一回ゾンビいつとく？」

「いやだよ」

そりゃそうだよね。

「ピンクちゃん。なにかいい手ないかな」

ボクは隣でじっとしていたピンクちゃんに聞いた。

「ん？ ヒロちゃん治せないのか？」

「え、なにその治せて当然みたいな顔は」

「ヒロちゃんの力が素粒子による現象浸食にあるなら、理論上はたぶんなんでもできると思うぞ。素粒子で現実を改変しているんだから。要は気合の問題だ。なせばなる」

「えー」

ピンクちゃんの眼差しは真剣で、ウソ偽り無くそう思っているようだった。

「そりやそうですよね」

命ちゃんが同意した。

この子、そう思ってるなら先にいつてよって感じた。

「つまり、ボクの想い次第というか？ 気合次第な感じ？」

「精神論はあまり好きじゃないが、そういうことになるな。自分の力を把握するのは大事だとピンクは思うぞ」

「ん……じゃあ、やってみるね。令子ちゃんもいい？」

「いいよ」

そんなわけでやってみたのだ。

もう一度、腕をまくりあげてもらおう。

ガーゼを取り払ってもらって、浅黒い血が固まった傷跡に手を伸ばす。

白い柔肌との対比で逆に痛々しさが増している。

んむう。治したい。

治れ治れーと思いつながら念じてみる。

よくアニメとかゲームであるような、球状のオーラが包み込むような感じ。

すると、まさしくアニメ的に傷跡が光ったかと思うと、すっかり元の白い肌に戻っていた。

時間はほとんどかかっていない。

「ヒール……、使えちゃった」

むしろ使えたんかいつて感じで、あまりにもあっけなすぎた。

RP Gとかで定番の治癒魔法を現実世界で使えちゃってます。まあ浮いたり念動力使えたりしている時点でいまさらって感じかもしれないけど。

「天使ちゃん。すごいね」

令子ちゃん、わりとナチュラルに受け入れてるなあ。

ピンクちゃんも当然のことのように受け入れているし、命ちゃんに

いたっては一言も感想がない。わりとどうでもいいらしい。そして、マナさんは……。

「ご主人様に癒されたいです〜♪」
なにか違う意味に聞こえるのはなぜだろう。

☆Ⅱ

令子ちゃんはお礼をいって帰っていった。

傷が治って少しは気も晴れたみたい。

「他の人も治してあげたほうがいいよね」

「そうですね。割れ窓理論ってありますからね」

マナさんは柔らかな顔で言った。

「割れ窓理論って？」

「ご主人様も配信者なら知っていたほうがよいでしょう」

マナさんが教えてくれた。

割れた窓を一枚放置しておく、それ自体はたいしたことじゃないかもしれないけど、誰も窓が割れた状態だということに対して心理的抵抗がなくなる。他の窓もいずれすべて割られてしまう。そうやって、どんどん環境が悪化していく。

ダムを決壊させてしまうほんのわずかな瑕というか。

たったひとつの悪意が伝播して、感染して、パンデミックになる。

やがて手がつけれなくなる。

それってつまり……。

「ボクが悪く思われてるかもしれないってこと？」

「ご主人様の怯えた顔がそります。ん……本当に不安がってますね。ええと、お姉さんが真面目にこたえますけど、今回のゾンビテロ事件は結果的にはご主人様のご活躍により鎮静したわけですが、ゾンビになった人にとっては大事件なわけで、いまだに未解決な事件なわけです」

大事件——。

まあ、そりやそうだろう。

でも、ボクなんにもしてないのに。

「なんにもしてないって顔してますね。まさしくそれです。ご主人様はなにもしなかった。そのなにもしないっていうことが、割れた窓を放置するのと同じなわけです」

「政治は町長に任せてるし、防犯はゲンさんたちがやってくれてるんじゃないの?」

「みなさんの考えだと、ご主人様と町長は同一視されてると思いますよ。ご主人様の政治的な立ち位置は非常に重いですし、なにかをしたいと思えば、その意見は必ず通ると思われてるでしょうから」

「ふう。ボク自身はそこまで積極的に意見をだしてはいないけど、みんなからはそうは思われてないかもしれないってことか。」

「屋上は施錠されてるし、鍵は町長が一元管理するようになった。ボクたちとしてみても、何もしてないわけじゃないと思うけど」

「犯人が捕まってませんからね」

ゾンビテロ事件については、ボクはまったく関与していない。

ボクはボクが犯人じゃないことを知ってるし、ボクがいなかったときに起こった事件だから、いちおうはボクの潔白も証明されていると思うけど、そういう事件を防げなかったことは、ボクの失態なんだ。ぞくりとした。

ボクの預かり知らないところでボクという存在が肥大化している。実際のここにいるボクと配信者でゾンビを操れる超能力少女としてのボクがズレている。

「でも、マナさんは“カエレ”の文字について放っておいたほうがいって言ったよな」

「あの文字については割れた窓かどうかが微妙なところでしたし状況が異なります。文字自体は塗りつぶされて掻き消えましたし、対処しなかったわけではないのですよ。なによりあの文字でみなさんがゾンビになったわけではないですからね。自分の身にふりかからない火の粉はただのキレイな花火と同じというわけです」

「今回のゾンビテロも対処したよ」

「テロと認識されるレベルと、いたずらかもしれないあの文字は同じレベルじゃありませんよ。ご主人様のへの字になった眉もかわい

いなど思います。お姉さんの腕の中におさまってみたくありませんか?」

「今回のゾンビテロが殺意高すぎなのはわかるけど……、カエレの文字も今回もボクができることは少ないよ」

だって、いつも24時間、町役場に常駐しているわけじゃないし。町の貯水タンクなんて触ってもいない。

「ちよつとヒロちゃんに責任を押しつけすぎな気がするぞ!」

ピンクちゃんが立ち上がって、目に見えない相手に対してプリプリと怒っていた。

優しいな、この子は。

あ、食虫植物みたいな動きで、マナさんに捕獲されちゃった。

じたばたもがいている様子もほほえましい。

マナさんの視線はいやらしい。一見すると、母性溢れる優しいお姉さんなんだけどね。

ピンクちゃんはやがて抵抗するのを諦めた。

ご満悦。

「現実世界でもありうる割れ窓理論ですが、ネットとかだと相手が見えない分、余計に書きこみやすいですからね。いわゆる炎上とかいわれている現象はご存知ですよね?」

「ボク、炎上しているの?」

さすがに匿名掲示板に千も二千もスレッドが立っている今となつては、そのすべてを見るのは不可能に近い。でも、当初はエゴサーチを毎秒やってたこともあるボクだ。いまもちらほらとボクのまとめを読んでたりする。承認欲求がなきや配信なんてやってないし。

それで、いつのまにやら、町役場で起こった事件はまとめられていた。

ボクのマツチポンプじゃないかって意見もあった。

つまりそれは、町役場内の意見も匿名化されてネットの中に溶かされているということの意味する。リアルでもネットでも注目されているということになる。

「炎上しているわけではないんですが、各国で割れた窓の一枚や二枚

はでちやつてるでしょうね。おそらくはそういった意見を封殺しようとする組織化された集団も形成されているのではないでしょう。わりと今が炎上するかどうかの瀬戸際で、重要な場面なんじゃないかと思います」

「割れ窓ってそんなに気にするべきものなの？」

「ご主人様はいままで炎上を経験したことはありませんよね」

「うん。配信のときもみんな仲良しだよ。優しいし」

そう、ヒロ友はみんな優しい。ときどき変態になるけど。

「炎上というのは割れた窓が一定数を超えたときに起こる現象なんです。割れた窓が一枚や二枚なら本人が特に何もしなくても自動修復されます」

「自動修復って？」

「多数派による少数派の蹂躪です」

「よくわからないんだけど」

「言いたいことも言えないこんな世の中じゃ……ってやつですよ」

「こんな世の中？」

「毒」

「んう？」

「世代が違いましたか」

マナさんは少し残念そうにしていた。

「ごほんどひとつ。」

それから気を取り直して続きを言う。

「つまりですね。ご主人様の配信動画にしろ、人類には共感能力というものがありますから同調圧力によつて、皆様いたくてもいえないこともたくさんあるのではないかということです。ヒロちゃんはいかがいけど、そんなことよりゾンビをはやくなんとかしてほしいとか時々書かれてるじゃないですか。そして、そんな意見を無粋だからといってみんなして排除したりもしています。多数派による少数派の蹂躪は常におこなわれているわけです。割れた窓は常に自動修復されているともいえます」

「うん。でも、ゾンビをなんとかしてほしいのは当然だし、その意見が

割れた窓なんて思わないけど。だからいまここで人類の生存圏を広げてるんでしょ」

「ご主人様自身がそのように思っているとしても、多数派にとってはそうではないということはありません。つまり、割れた窓というのは、多数派にとって不快なノイズなのです。だからこそ五億人もいて、それぞれ意見が異なるのに否定的な意見が掻き消えるわけです。炎上がなかなか起こらないのはそういった理由によります。逆に言えばマインナス意見も数がそろえば自分も言っているのかなと思っただけですよ」

マナさんはすごく柔らかい言い方をした。

でも、その言葉はボクに突き刺さる。

ボクが嫌われてないのはほんの紙一重のことなんだなって思うから。

ボクを否定する意見も潜在化している。

「ヒロちゃん。みんなを嫌いにならないでくれ。ピンクはヒロちゃんが好きだ」

ピンクちゃんが、ようやくマナさんから解放され、ボクのほうにつつこんでくる。

ボクはピンクちゃんの小さな身体を受け止めた。

「嫌いにはならないけど……。でも、どうしたらいいのかな」

ボクの知らないところで勝手にボクを評価して嫌っていく人たちがいる。そういった人たちにも、当たり前だけど心があって、その人なりの感じ方があるから否定したくはない。でも、ひとつの悪意が感染する可能性はある。ネットでのボクという存在の広がり方は異常だ。ゾンビのように増殖して、もうボク自身も把握できていない。そもそも五億人いるらしいヒロ友というのも、数が多すぎて、想像すらできないよ。

ただ、唯一ボクがわかるのは――。

みんなに嫌われたら、みんなを好きでいる自信がないということだ。

ボクはボクに自信がないから、特にそう。

100人に好かれても1人に嫌われたら、すごく気になるタイプなんだ。

だから、マナさんが言うように割れ窓に気をつけましょうね。炎上しないように注意しましょうねというのは、すごく的確なアドバイスだった。

でも、割れた窓と呼ばれる意見も、それはそれで一つの感じ方だし、人類総体の意見は分裂していて当然のようにも思う。

ボクは文字どおりの意味で、頭を抱える。

命ちゃんがちよつと前に言っただけ、面倒くさくなって引きこもりたい気分。

「もしかするとご主人様をはじめ、命ちゃんも危険かもしれませんね」

「ボクだけじゃなく?」

「眷属ですし、ヒロちゃんはやっぱり人類の敵という意見が主流になるとまずいですよね?」

「それはそうかも」

「いままでのように多数派がヒロちゃんを好きというままであればよかったのですが、これからいろいろな施策をやっていくにつれて、逆に嫌われる可能性もあるでしょうね」

「どうして?」

「距離感ですね。いままで遠くでなんとなく支援してくれていたのだったら感謝するけれども、逆に近い距離だとそれが当たり前になっていくということですよ。ちいさなほころびが目について嫌われる確率が高まるということですよ。ご主人様が愚民どもをしつめたほうが話は早いですよ」

「今日のマナさんはちよつと厳しいね」

「ご主人様を真に愛しているのはお姉さんだけですよ。寂しくなったら飛び込んでくださいいなね♪」

それはそれとして――。

マナさんの言葉はたぶん正しいだろう。

マナさんが命ちゃんの名前を出したのは、たぶんそれが一番ボクに響くからだ。

そして、それは確かに効果的だった。命ちゃんに危険が及ぶとなつたら、他のだれよりもボクは優先して守ろうとするだろう。

命ちゃんの顔を見る。

いつもどおりのクールビューティーな表情が少しだけ柔らかくなった。

「わたしも少しは強くなりましたから大丈夫ですよ」

「命ちゃんが傷つけられたら、ボクは犯人をゾンビにしちゃうかもしれない」

犯人——というか。

人類全部をぶっこわしてしまいかもしれない。

五億人のヒロ友と命ちゃん一人。

どちらが大事ななんて、決められるわけもないけど。

「ピンクが犯人を捕まえるぞ！」

人類の救世主はピンクちゃんかもしれないな。

ボクはピンクちゃんの頭をなでた。

ピンクちゃんもつと積極的に撫でてほしいのか、ボクに抱きついてきた。

ピンクちゃんを撫でながら、ボクはマナさんに確認する。

「マナさん。犯人を捕まえたら割れ窓は修復されたと考えてもいい？」

「そうですね。ただひたすら尊いとしか」

マナさんは口に手をあてて、なにやら感動していた。

「マナさん……」

「ごほん。そうですね。悪意にも根拠が必要ですから、犯人を捕まえるのはいいことです」

「うん」

「それと、みなさんの傷を回復させるといふのは悪くないことだと思いますよ〜」

とりあえずできることからということと、みんなを治癒することにしました。

「リアルなヒロちゃんについて語るべきときが来た」 27

148 : 勝ち組なヒロ友 ID : v v B R K z 9 G a

ふいー。あれから三日が経過したが

なんとかおちついたって感じだな。

質問があればなんでも答えるぞ。

156 : 名無しのヒロ友 ID : 0 e T j a i I m E

ん。いまなんでも答えるって言ったよね？

165 : 名無しのヒロ友 ID : Q m Z E C H q Q g

あれからどうなったんだよ。犯人は捕まえたのか？

168 : 名無しのヒロ友 ID : S 9 / X X z p j H

1のいるところって典型的な衆愚どもの巣窟だろ

マジ氏んでほしいみんな絶滅しろ

183 : 名無しのヒロ友 ID : I X H 5 a M G / e

ヒロちゃんの救世計画に狂いが生じてるしな

どうせならみんなゾンビになってしまえばいいんじゃない？

ピンクちゃんは除く

197 : 名無しのヒロ友 ID : K S p g 2 7 0 6 r

ピンクちゃん

名探偵ならそろそろ犯人捕まえてくれよ

203 : 勝ち組なヒロ友 ID : v v B R K z 9 G a

犯人探しよりたぶんオレらの動揺をおさえようとしてるんじゃないかな

犯人についてはまだ捕まってないが
今日はヒロちゃんが傷を癒してくれたぞ

207 : 名無しのヒロ友 ID : B5BookbeeC
ホイミ?

219 : 名無しのヒロ友 ID : PNlyiLCv5
ケアル?

233 : 名無しのヒロ友 ID : HKKPvac+6
ヒール?

238 : 名無しのヒロ友 ID : +MxDqqKi0
ホスピ?

246 : 名無しのヒロ友 ID : ggQt00Mbx
この中にひとつだけマイナーゲームがありますwww

255 : 名無しのヒロ友 ID : 2b2wwmAIg
貝獣物語を知らないおまえがニワカ

267 : 名無しのヒロ友 ID : 666kYMcxB
ヒーローちゃんって本当は人間を全部ゾンビにするために計画
練ってるんじゃないの?

277 : 名無しのヒロ友 ID : HisSE67bb
《 267

おまえみたいなやつがゾンビになっていないのが答え

284 : 名無しのヒロ友 ID : ezrxuQiMI
《 267

ヒロちゃんに頼んでゾンビにしてもらおう

285 : 名無しのヒロ友 ID : L6uaEnRW5

あの……癒しについて詳述していただきたいのですが

287 : 勝ち組なヒロ友 ID : vvBRKz9Ga

詳述っていうのがアレなんだけどさ

実はオレ、ハーメルンっていう投稿サイトで小説書かせてもらってたのよ

で、秋の夜長の手慰みに

ノンフィクション小説を書いてみたんだが

みてくれ……こいつをどう思う？

<https://syosetu.org/novel/176784/1.html>

302 : 名無しのヒロ友 ID : D9Ax1KeOd
唐突なダイヤモンド草

314 : 名無しのヒロ友 ID : icyrYq4eG
なにやってんだよ……[www](http://www.wwww)
10点

327 : 名無しのヒロ友 ID : +8IKFHxmo
ヒロちゃんの描写に文章量割きすぎやな。
そもそも、なんでヒロちゃんの一人称視点なんだよ。
おまえただのモブやろがい。

336 : 名無しのヒロ友 ID : bWwhvvUTH
ヒロちゃんがTSしてるという設定はおもしろいと思いました(小並)

346 : 名無しのヒロ友 ID : i t m 0 b 3 9 r c
ヒロちゃんの性格とかは結構トレースされてる感じ。

350 : 名無しのヒロ友 ID : T b e z c i N y f
ヒロちゃんって単純だから(ボソ)

363 : 名無しのヒロ友 ID : V 0 N 3 s B I e L
誰がポンコツだよ

377 : 名無しのヒロ友 ID : r d F e H C E q 2
ポンコツっていったーってかわいく怒られちゃう
それがかわいくてポンコツっていつちやう

389 : 名無しのヒロ友 ID : d i M f C U A y L
ヒロちゃんに怒られたいだけの人生だった

401 : 名無しのヒロ友 ID : y O M n b q l r 7
なんかスレが暗かったのがちよつと明るくなった感じだな

402 : 名無しのヒロ友 ID : D P y z k w L n 6
で、ホイミでもケアルでもいいけど、マジで傷を治せたりするの
か？

412 : 勝ち組なヒロ友 ID : v v B R K z 9 G a
こうなんというかペカアって光って治った感じだな
魔法だよ。マジで。

419 : 名無しのヒロ友 ID : d j T V b g m 0 m
おまえの描写力低すぎね？

430 : 名無しのヒロ友 ID : 4 u s B 2 Q z T 6
そのとき奇跡が起こった

434 : 名無しのヒロ友 ID : G 5 p c r H w x c
ネット小説のうち完結するのは、2割くらいと言われてるからな
1がエタらないことを願うばかり

449 : 名無しのヒロ友 ID : 7 v W u / E 5 e k
エタる？

462 : 名無しのヒロ友 ID : 7 C A T G W z t l

≪ 449
それくらいググレよ。

エタる⇨エターナルで、未完のまま更新されなくなってしまったこと
だよ。

467 : 名無しのヒロ友 ID : o Z v 9 + x j p 2

462がツンデレイケメン

479 : 勝ち組なヒロ友 ID : v v B R K z 9 G a
オレの一族が、オレでエタリそうな件

491 : 名無しのヒロ友 ID : 3 3 e R m z z E Z
ゾンビだらけやしな

499 : 名無しのヒロ友 ID : y U G W 2 o e G C
あ…… (察し)

508 : 勝ち組なヒロ友 ID : v v B R K z 9 G a
察しないで……

ほらほら他にはないのか？

523：名無しのヒロ友 ID：l++t5jJwP
ピンクちゃんの探偵ごっこは具体的にはなにしているの？

539：勝ち組なヒロ友 ID：vvBRKz9Ga
いわゆる聞きこみ調査だな。

今回の回復魔法と同時に、いろいろ聞いてるみたいだ。
オレも聞かれたよ。

555：名無しのヒロ友 ID：ziWLkAlQZ
1はゾンビにならなかったんじゃないか？

570：勝ち組なヒロ友 ID：vvBRKz9Ga
ゾンビから逃げるときにすりむいたりしたんだが、
べつに怪我がなくても、なんかあつたかくて気もちいいし……
ヒロちゃんの手がすべすべだし

571：名無しのヒロ友 ID：ZgzYTJaRk
やっぱおまえでエタるのが正解だわ

579：名無しのヒロ友 ID：U4YITxZeC
低評価。低評価。低評価。

588：名無しのヒロ友 ID：dDKoLx4Py
これは☆1ですわ

598：名無しのヒロ友 ID：mYJIN/p5g
聞き込み調査で犯人わかるもんなのか？

611：名無しのヒロ友 ID：QWelluxu5d

できるだけ穏便におわってほしいのう

627：名無しのヒロ友 ID：666kYMcxB

おまえたちは騙されてる

ゾンビは所詮ゾンビだろうが

なぜそれがわからない

ハザードレベル91

雨が降ろうが、槍が降ろうが、ゾンビテロがあろうが、ボクはボクの責務を果たさなければならぬ。少しずつ人類生存圏を拡大していくという使命です。

しかし——、これっでもうそろそろボクの居場所が世界中にバレてるんじゃないだろうか。

べつにいいけど、ピンクちゃんくらいしか会いにこないっていうのはどうしてなんだらう。ゾンビテロが起こっているから怖いとか。あるいは多くの勢力が牽制しあって、たまたま台風の目のように静かな状況だとかかな？

あるいは電気が通ってるのは町役場だけだから、まだボクの正確な居場所がわからないってことも考えられるけど。どうだらうなあ。佐賀にずっといるって明言しているわけじゃないし、もしかしたら不意に手を出したらボクが逃げるなんてことも考えてるのかもしれない。

とりあえず、仮定に仮定を重ねてもしかたない。

今は目の前のことに集中しよう。

人類生存圏を広げるお仕事というのは、結局のところバリケードをどんどん進めていくということと、当該エリア内のゾンビさんを外に出すということだ。

ボクひとりでもやってもいいけど、そこは人類とボクとの共同作業ということで、ぼっちさん達も手伝ってくれる。

今日のメンバーはいつもの探索班。ぼっちさんゲンさん湯崎さんの三人と、ボクと命ちゃんとマナさんの三人の計六人だ。未宇ちゃんには危ないから置いてきたよ。

「よし。せ……っ。押せっ……」

ゲンさんのかけ声で、探索班のみんなは力を入れる。

巨大な簡易移動式バリケードがジリジリ動いていく。

塩化ビニルでできたやつをとりあえずのところ設置して、ゾンビが近づくとボクの歌が流れるようにして、そうやって少しずつ少しずつ

安全なエリアを確保する。

ボクたちゾンビ少女たちは男達の力仕事を見守るのみだ。

本気出せば指先ひとつで動かせそうではあるけど、いうのは野暮つてもんだよ。だって、男にはプライドがあるからね。男のプライドをへしおらない。つまりこれって男ごころがわかる男ならではの思考です。

「お兄ちゃんのごことが大好きな妹的思考のように思われてるかもしれませんがんよ〜」

マナさん。そんなこと言っちゃだめ。

それにボクたちの仕事はべつのところにある。

いわゆるゾンビ避け。

ボクほどではないけど、マナさんも命ちゃんもゾンビを操れるし、建物はたくさんあるから、そのひとつひとつをボクひとりで確認するのは時間がかかる。建物内のゾンビさんたちも丁寧に拾っていく必要があるためだ。

もしも、ゾンビさんがひとりでも残っていたら安全とはいえないからね。

ボク的能力で、ゾンビさんは軒並み停止しているから、ぼっちさんたちは安全だとは思うけど、バリケードを動かしたり、バリケードを作ったりする作業は重労働といえた。

チラつとぼっちさんを見ると、そろそろ寒い風が吹き込んでくる季節になったのに、あせばんで息があがっている。もともとひよいい身体しているからなあ。

「そろそろ休憩するか？」

と、ゲンさんが声をかけた。

お年寄りっていつでもいい年頃のゲンさんだけど、ぼっちさんより体力あるな。

すっかりとした足取りで適当な家の中に入っていく。

今のところ、どこの家も所有者はいないからね。外で座るよりも衛生的だし身体を休めることは必要です。ボクとしては——まあ全然疲れてないけど。

湯崎さんが疲労困憊なぼっちさんの肩をポンと叩き、後を促す。ぼっちさんも首だけで返事し、家の中に入った。

お疲れかな？

ボクはお疲れのぼっちさんを癒すという崇高な使命感にかられた。

☆Ⅱ

「ぼっちさん。ボクあのおときみたいにご飯作るね」

「おお。ヒロちゃんのご飯つくってくれるの？ 役得だなあ。でも大丈夫なの。無理しないでいつもどおりマナさんにつくってもらったら……」

少し不安気な視線を感じる。

確かにあのときはピザをまともにチンすることもできない料理よわよわガールだった。

しかし——、いまのボクは違う。

リュックの中から取り出したのは、なんとお湯をかけるだけで超簡単にできる即席カップライスだ。これだったら誰も文句はいうまい。お湯を入れてかき混ぜるだけでできる。しかも人類の多数派が好きだというカレー味。これはもう勝ったわ。お風呂入ってこよう。

「カレーメシ？ 聞いたことないな」

湯崎さんが首をひねる。

「最新系カレーだからね！ これだからニワカは」

「し、辛辣だな……」

「カップライスは年寄りにはきついな」

ゲンさんがあいかわらず渋い声をあげる。

食べる前から文句というのはダメだと思います。

「国産米をつかってるんだよ！ 侮っちゃダメ！」

そう…… 即席だからという考えをまず捨てるべきなのだ。

思った以上にちゃんとしてる。即席だけど、即席とは思えないほどに奥深く、まるみがあり、なんとというか完璧なんだ。

「お湯は？」

命ちゃんがつつこみを入れる。

ふっ……。そんなの考えてるに決まってる。

「マナさん。お湯ちょうだい！」

「はいはい。こんなこともあろうかと持ってきてますよ」

さすがゾンビお姉さん。ボクのところを知っている。

忘れてたわけじゃない。

忘れたわけじゃないんだ。

マナさんから魔法瓶を受け取り、みんなの分にお湯を入れる。

そのあとは、箸をつかって、かき混ぜるだけ！

ちよつとずつ、とろみのようなものができて液体から半固形になっっていく。

ふっ……。ボクにもできた。マジで超簡単だった。

「できたよ！」

「お、うまそう」

「いいにおいだな」

「通常のカレーライスとは何か違うのか？」

「言ってみれば、カレーおかゆみたいな感じかな」

「コクが違いますね」

「カレーメシ最高っ！」

「スパイス効いてる」

「うーん。インドに到着……」

「銀河が渦巻いている」

「これが最新系……」

「うまいぞっ！」

みんなもカレーメシたべよう！

☆
||

今日のお仕事が終わったあと、ボクたちは町役場に戻ってきていた。

少し——、みんなの視線がいつもと違うような気がする。遠巻きに

見ているような。カレーくさいからじゃないよね？ お口はゆすいできたんだけど。

集団の中から出てきたのは、にやついた顔をした辺田さんだった。辺田さんはおばあさんが飼っている犬を捨てるよう言ってくれとボクにお願いしてきた人だ。

つまり、ボクと意見の対立があった人。

集団の中で少しだけノイズになる人ともいえる。そういう考え方は嫌いだけど、事実として争いの種になってしまっている。

そのため、前に湯崎さんから「カエレ」の文字の暫定犯人として扱われていた。

その後はうやむやになっていたけど、辺田さんがここで多少なりとも住みづらくなっていたかもしれない。

「ゾンビテロを起こしたのはお前達探索班の誰かだろ！」

「はあ？」

湯崎さんがここでも切れたのか、つかつかと近づいて行って辺田さんの襟元をつかむ。

「なんの根拠があつて言ってるんだよ！」

「ゾンビ槍を管理しているのは探索班だし、あの文字だって外に行ってるお前達ならそんなに怪しまれずに済むだろ」

ゾンビ槍は——、ゾンビウイルスが散逸してしまう特性上、ある程度の新鮮さが求められる。

つまり、活動しているゾンビに刺しこみ、ある程度急いで屋上にある貯水タンクに投げ入れなければならぬ。

町なかにいるゾンビに突き刺すというのは人目につくだろうし、必然的にゾンビ部屋にいるゾンビたちを使ったという可能性が高い。

ゾンビ部屋を使ったりゾンビ槍を使うのは確かに探索班だった。

だから、辺田さんの言い分は多少は論理的だし、推理の範疇には入っているだろう。

牽強附会というわけではないように思う。

ただ、ボクには探索班の人たちが犯人だとは思えない。人のこころはミステリーだけど、いくらボクがいるからゾンビから回復できると

いっても、勝手に人をゾンビにしているわけがない。誰だって自分の意思が霧散し、思考が停止するのは怖いって思うはずだから。

ちなみに、探索班の人たちはゾンビテロのときに全員無事でした。やっぱり生存能力高いのかもしれない。あるいは、それも辺田さんが考える探索班Ⅱ犯人説の根拠のひとつなのかな。

「ゾンビ部屋の上の階は人目のつかない離れにあるから、誰だってこっそり入るのはいけないわけじゃない。ゾンビ槍だってそこに無造作に立ってかけてただけだから誰だって持ち出せる」

ゾンビ槍って対人間用の武器だからね。対ゾンビ用の武器じゃない。もちろん、ゾンビの頭をかちわったり、身体にぶっさしたりしたら必然的にその武器がゾンビウエポンになってしまうこともあるけれども、あくまでこの町役場におけるゾンビ槍の役割は犯罪者に対する刑罰という扱いだったんだ。ボクという回復役がいつか現われることを前提とした刑罰だけど。

ちなみに槍って言い方をしているけど、これは鉄パイプを斜めに切ったもので、細長い筒状になっているからゾンビに突き刺したときにゾンビーフが中に入りこむ仕様となっております。

貯水槽に入れられていたのは、この鉄パイプの”先端”のみ。ポケットに入るぐらいの十センチぐらいの大きさだった。パイプカッターが部屋の中に放置されていたから、おそらくはそれで切ったのだろうと思われる。パイプカッターも思った以上に小さくて、小さなレンチぐらいの大きさしかない。鉄パイプを挟み込んでグルグル回転させて捻じ切るような感じの使い方をするらしい。音もしないし慣れば切るのはあつという間にできるとか。

「いいがかりはやめろ」

湯崎さんが辺田さんを殴りそうになる。

止めようか迷ったけど、その前にゲンさんが間に入って止めた。

「ふたりともよせ」

「けどよお。あんただって容疑者のうちのひとりなんだぜ」

むき出しにした歯茎が覗く。

探索班に対する明確な敵意がそこには見て取れた。

ゲンさんはただ睨みつける。

「へ。だんまりかよ」

辺田さんはゲンさんの視線だけで少しひるんでいる。

「あんたらは、外にいける特権階級だから好き勝手やってるんだろ。どうせ、自分達の価値をもっと認めてほしいから、ゾンビテロを起こしたにちがいないええよ。なあそう思うだろ。みんな!」

みんなの視線は——わからない。

どちらともとれるものだった。

「武器の管理はワシらがやってたのは事実だ。その責任を問われるのであればわかる」

「認めるのかよ」

「武器の管理責任はな。だが、貯水槽に毒を混ぜたのはワシらではない」

「証明できるのか?」

「証明はできん」

貯水槽に投げ入れられた正確な時刻はわからない。

ピンクちゃんが唸っていたけど、ゾンビの発症スピードは人によってまちまちだから、正確な時間を特定できない。

真夜中だろうなっていうのはわかるにしろ、だれがどのように動いているかなんて自分自身も把握していないだろう。

つまり、アリバイを証明できないということだ。

大部屋にいて、いっしょに寝てる人たちはわかるかもしれないけれど、部屋にも大小あって、数人程度のところもあれば、十人以上寝泊りしているところもあるだろうし、みんな気を使っているから、夜中にトイレにこっそり抜け出すなんてこともあるだろう。

もちろん完全に潔白かなという人も中にはいるみただけ(複数人から爆睡してたと証言されている人とか)その精査だけで膨大な時間がかかる。その精査がおわっても、犯人特定までいたるかどうかは不明だ。

「証明できないっていうんだつたら……」ゾンビよりも獰猛な狂犬めいた顔つきだった。「お前達が暫定的な犯人つてことでもいいよな」

そういう論理か。

あの”カエレ”文字のとき、湯崎さんはいちばん怪しいからというただそれだけの理由で、辺田さんを犯人扱いした。

その結果——、彼は犯人のように扱われた。

かもしれない。わからない。ボクは町役場に住んでいるわけではないから。

ただ、そうなりそうだったのは事実だ。

つまり、これは辺田さんの意趣返しだったのだろう。

「もうやめよう？」ボクは言った。「疑わしきは罰せずだよ。つまり疑いだけで犯人扱いするのはまちがってるし、あのときの湯崎さんの言葉もボクとしてはまちがってると思うな」

いちおう公平にジャッジするのです。

あのときは湯崎さんの論理もひどかった。

いま辺田さんに攻められているのは因果応報かなって。

まあ放置していたボクも悪いんだけど。

「け、けどよ。ヒロちゃんの功績を奪うつもりかもしれないねえんだぞ」

「うーん。べつにそれはどうでもいいんだけど。辺田さんとしてはこれからどうしたいのかなって思ったよ。例えば、探索班は信用ならないから自分が探索班になるとか？」

「う……、あ、いや……それは」

ゾンビは怖いらしい。

それともボクが怖いのかな。

どちらでもかまわないけど、この人に将来の展望とか、あるいは他人が利他的に動くということを想像できないのなら、糾弾する資格はないように思うな。

自然と集団は解散し、辺田さんはひとり取り残されることになった。

☆

「だからね。配信は変わらず続けてくれないかな」

辺田さんの言いがかりのあと、ボクは葛井町長に呼び出されていた。

「配信はちよつとオヤスミしてたほうがいいと思いますけど」とボクは答える。

だつて、犯人が捕まつてない。

配信は言つてみれば娯楽の側面が強くて、犯人が捕まつてもいないのに何あそんでいるのつてならないかな。いやもちろん、普段でもそうなんだろうけど、特に今回の場合。炎上一歩手前の不安定感があるらしいし。

それに――、

はつきり言えば……。

ボクは誰かに指示されて配信をしたくない。

心の底から楽しいと思えるときにしか、配信をしたくないんだ。

「僕としても義務的な行為なんて美しくないとは思うんだけどね」

ナルシストで自分の美学を持っている町長は、ボクの在り様も理解してくれていた。

それでも、なお――ということらしい。

「はつきりいうと、町のみんなは当事者だからね。逆に事件から目を背けている部分もあるんだよ。けど、そうじゃない外部者にとってはどうだろう」

「外部者？ 町の外の人たちですか？」

「そう。君は自分のスレッドを覗いたことはあるかな。匿名掲示板でもそうでないものでもどちらでもかまわないんだが」

「えつと……多少はありますけど」

エゴサーは配信者の基本ですからね。

いまはめちやくちや有名になつてしまったから、それほどでもないけど、新人だったときは本当に毎分、毎秒の勢いでエゴサーしてましたから。

いまでも適当にスレを覗いたりはするよ。やっぱり自分の評価つて気になるし。

「スレでのこの町の評価はかなり厳しいものもあるよね」

葛井町長が顎のあたりを手で支えるようにして、（つまりエヴァのゲンドウのポーズね）ボクに対してニコニコ笑いながら問いかける。確かに——、この町は『衆愚』であるという評価もあったな。

ボクというジョーカーを十全に使いきれていないことへの評価なのか。

あるいは、ゾンビテロみたいなことが起こってしまうほど統制がとれていないということに苛立ちを覚えているか。

いずれにしろ、外野はなんでも言える。

外野だからこそ野次を飛ばせる。

そういう面はあると思う。

案外、内部である町役場の様子はあの事件がウソのように静かなんだけどね。

さつきは辺田さんの件があつたけど、逆にいえばあれぐらいしか問題になっていない。ただの口論のレベルだし、むしろ静かすぎるくらいだ。

逆に言えば、犯人が潜伏しているってことでもあるんだけど。

「ボクは、この町の在り方はけっこう好きだけど。ううん。葛井町長のやり方はそんなに悪くないと思ってます」

思い起こすのはホームセンターのときの力による支配だ。

あのときに比べれば、この町はまだ自由だし、町長はあんまり権力とかに興味がなさそう。

みんな出入りは自由だし、来るものは拒まず受け入れている。

いまでは200人くらいにはなったのかな。ただ、町なかに戻った人はいないようだけど。

「緋色ちゃんの評価は光栄だけど、少し本音を言えばね。君の在り様を考えてそれに合わせた面もあるんだよ」

「ボクの好みの政治形態を選んでるってこと？」

「ありていいに言えばそうなるね。例えば——、いまの政治形態は無政府じゃない。言ってみれば原始的な集権国家だろう。しかし、当然のことながら経済活動もないし、外部から狩猟——つまり物資探索して、それを配給しているに過ぎない」

「うん」

「だけど、当たり前のことだけど外部から調達するにしろ限度はあるだろうから、いずれは農業なり酪農なり、ともかくなんらかの食糧生産手段を確立しなければならぬし、みんなにはいずれ働いてもらわないといけない。ノートだった僕がいうのもなんだけど」

「それは必要なことだと思います」

ゾンビになったボクはわずかな食糧でも生きていけそうだけど、町のみんなはゾンビじゃないし、食糧はある。電気だって、いまは太陽光パネルでなんとか確保しているけれど、今後、町や県というふうに住存領域が拡大するにつれて、新たな手段を模索しなくちゃならない。

みんなも町役場のなかで何もしないってわけにはいかないだろう。

「実を言えば、町のみんなは自発的に町なかに行かない人も結構多いけど、最近では町の中に戻りたいという陳情も多いんだよ」

「へえ。みんな元の暮らしに戻りたいからかな」

「配給だけでは物足りなくなってきたんだろうね。例えば、ヒロちやんの配信を見たいっていうときにパソコンなりタブレットなり、あるいはスマホなりを確保しなければならぬわけだけど、みんながみんな持っているわけじゃない。役場のフロントに大きなモニターを置いてはいるけど、個人的に見たいって人は多いだろう」

「そういえば、ゲンさんたちといっしょに電気屋さんにいったって、ノートパソコンをガサって持ち帰ってきたけど……」

そういう陳情を聞いていたわけか。

みんなが戻りたいっていう意見を封じているのは、たぶん犯人を取り逃がすのを恐れているのだと思う。確認の意味で聞いてみたら、

「それもあるけれど、今は分配を公平におこなうだけのリソースがないんだよ」

「どういうことですか？」

「たとえば、いまではここからここまで広がったわけだけど」

町長がローテーブルのうえに、この町の地図を置いた。

A3サイズの大きさで、町役場を中心としている。

ボクが広げてきたのは主に北西方面だ。

ゾンビ荘はこの町役場からそんなに離れていないけど、南のほうに位置している。

つまり反対方向。

ボクが住んでるところと完全にリンクさせるのはちよつとまだ怖かったんで、みんなとエリアを決めるときに、ちよつとごねたら、そうになりました。

まあ――、北西方向には佐賀市がある。そちらに伸ばすほうが物資補給の面では堅実だろうと思う。北東には鳥栖市があつて、こちらはこちらで捨てがたいけどね。南東の久留米市も悪くない。でも手榴弾は勘弁な。

そんなわけで、広がった地図を見ると、なんだか歴史シミュレーションで領地が増えてるみたいで少し楽しい。

「いま、この町役場に住んでいる人もこの周辺に住み家を持っていた人、賃貸アパートに住んでいた人などいろいろいる。他県に住んでいた人もいるみたいだよ。で――、そういう人たちに家を分配するときに、勝手に誰かさんはここに住んでくださいというふうに決めていいものかという問題がある。みんな自分が住んでいたところに住みたいよね？」

「まあそれは確かに」

ボクだって、自分のゾンビ荘にこだわりがあるから住み続けているわけだし。

でも、いずれかの時に住み家の分配はしなくてはならないだろう。

町役場で集団生活するよりはきつと住み心地がいい家はたくさんあるはずだ。

「例えば、グレードの問題もある。家だって全部同じ規格ではないからね。みんな少しでもいい家に住みたいと思うはずさ。貨幣が復活した場合に備えて、そのとき既存の……つまり数ヶ月前まで使っていたお金を使うと考えると、金持ちの家を所有したいと考える人が出てくるだろう」

「なるほど……」

なんだか複雑すぎてよくわからない。

「ボクだって大学生だったわけだし、それなりに社会経験をつんではいるけど、この国の仕組みって、政治を一ミリも考えなくても、とりあえずのところブイチューバーの動画を見て、ソシヤゲをやったりして、適当に遊びながら生きていけるようになっていいるから。」

ボクはあまり考えてこなかった。

たぶん、本質的には小学生とそこまで知識量に差がないと思う。

「ヒロちゃんはお金って好きかな？」

「お金？　好きか嫌いかといえば好きなのかな……よくわかんないです」

両親が残してくれたお金がボクのモラトリアムな時間を与えてくれた。

その意味ではお金にも価値があるなんてことは言われなくてもわかっていいるつもりだ。

お金があればできることは増えるし自由を買える。

「いうまでもないけど。ある程度の領域を確保したらみんなには町に戻ってもらおうと考えている。そのときに貨幣経済を復活させるかどうかということも考えなきゃいけないね。もちろん、貨幣こそ交換価値の際たるものだから、復活させたほうがいいという意見が多数派だろう」

お金をたくさん持つことは、自分を拡大するという欲望の一種だろうから、多数の人がお金持ちになりたいという意見はわかる気がする。

ゾンビ的な百パーセントOFFの世界も、それなりにおもしろくはあると思うんだよ。

ドラえもんの鏡の世界のように、誰もいない世界で、好きなものを所有できる。

——ワールドイズマイン。

本質的な世界の所有。所有権者はボクひとり。

でも、ボクは孤独になるのは嫌だった。

だから、人間と仲良くなりたかった。

配信してるのは、そんな理由だ。

整合性のとれた態度という意味であれば、ボクは配信をするしボクは資本主義を認める。

そういうことになる。

カレーメシを食べよう。ちゃんと買ってね。

☆

ピンクちゃんの捜査が数日続き、町役場は仮初の落ち着きを取り戻していた。

カタチにならない不安が残存していて、奥歯に何かが挟まったような気持ち悪さを感じていたけれども、人間というものは状況が固定されてくると、それに慣れてくる。

犯人がわからないという状況にも慣れる。そんな生き物だ。ボク自身もそう。

このごろのボクは完全にルーチンワークだ。

平日の九時くらいから町役場いき、ぼつちさんたちといっしょに町のバリケードを少しずつ広げて、建物の中をざっくり探索して、ゾンビさんがいたら追い出して、お昼ご飯を適当に食べて、町役場に戻り、三時くらいからピンクちゃんと合流して、犯人探しにつきあったり、ワンちゃんをいっしょに世話したり、町のみんなと雑談したり、ともかくそんな感じで日常を過ごしていた。

ピンクちゃんがやった捜査はボクには理解できないし、その点については効を奏さなかったという結論だけを述べることにしよう。

具体的に言えば、おそらくは指紋がついていないかとか、DNAが付着していないかとか、足跡の痕跡がないかとか、目撃証言がないかとか、ゾンビになるまでの発症確率と時間からおおよその犯行時間を特定したりとか、そういう有形無形の証拠を集めていたみたい。

謎の機械を取り出してきて、ミクロン単位でうんぬんかんぬんって言ってたけれど——、結局、犯人はわからなかった。

それが結論だ。

そして、いつもの会議室でボクはピンクちゃんに相談を受けた。

「科学的捜査でわからなかった。ピンクは無念の極みだ」

ピンクちゃんは小さなかんばせを曇らせる。

せっかくボクのためにがんばってくれたのにね。

落ちこんでるピンクちゃんの頭をボクは優しく撫でた。

「だがわかったこともある。まず、ゾンビにするための血肉だが新鮮さが求められる。このことから、ゾンビ槍に付着したゾンビ肉は少なくともゾンビウイルスが密集していると思われる活動的なゾンビより摂取しなければならぬ」

「ピンクがきたときにもそうだが、葛井町長は町役場から人間が出ることを許可していない。出ようと思えば出られなくもないが、まだ外に出たくない人が圧倒的に多い。したがって――、犯人は内部犯である可能性が高いといえる」

「犯人はゾンビルームに置かれていた鉄パイプをパイプカッターで切断しポケットなどにいれやすい形状にして貯水タンクまで持ち運んだ」

「現在、町役場に住んでいる人数は203名。このうちアライバイが成り立るのは105名。アライバイといっても後で言う理由であまり意味はないのだが……」

「要するに複数犯じゃないかと思う」

「なぜなら、ゾンビルームにしろ、屋上にしろ、人の動きを想定できないからだ。つまり目撃者が出る可能性がある。偶然うまくいったのか？　しかし、ゾンビルームに向かう。パイプカッターで切る。屋上に向かう。貯水タンクを開ける。ゾンビ槍を投げ入れたあとに何食わぬ顔でベッドにもぐりこむ。非常に困難なミッションだ」

「低い可能性に賭けたとも考えられるが、何人か犯人がいればべつだ。人の動きを誘導する役割の者と実行犯がいれば目撃者を減らせるだろう。ピンクがそう思った理由はもうひとつある。ピンクはかなり科学的な手法を用いて犯人を特定しようと考えた。貯水タンクの指紋というか……付着している微粒子を調べたのだが、ゲンゾウのモノしか検出されなかったんだ」

「そこでピンクは考えた。ゲンゾウが犯人じゃないかと。否定神学的に言えば残った唯一の可能性が真実だからな。当然だ。だが、ヒロちゃんにも聞いたとおり、ゲンゾウはヒロちゃんに貯水タンクを見せるために開けてくれたそうだな」

「もちろん。それも後々の犯行のための布石だったと考えることもできる。けれど、ピンクはちゃんと全員に証言を聞いたぞ！」

「グランマはゲンゾウが会いに来てくれたって言った。ゲンゾウにはアリバイがあるんだ」

ふうむ。

ほつぺたをピンク色に染めるピンクちゃんがかわいい。

グランマって萌美おばあさんのことだよな。犬の飼い主の。

ゲンさんは自分には証明する方法がないって辺田さんに言ってたけど、たぶんそれは——萌美おばあさんをかばったのかな。

辺田さんは、おばあさんを認知症扱いしているし——、証言の是非が問われたらあの足の悪いおばあさんが証人として引つ張られることになるから。

「ピンクちゃんありがとうね。でも、萌美おばあさんがウソについている可能性もあるよね？」

「あるが……、ピンクとしてはこうなるともはやプロの犯行だと考えたほうが妥当だと思う」

「複数犯だと考えたのもプロっぽいから？」

「そうだ。組織だった行動のように思えるから。たぶんジュデツカの連中が入りこんでいるのかもしれない」

ジュデツカ。日米共同経済開発機構とかそんな感じの組織だったと思う。日本を裏側から動かしているとかいう陰謀論とかもスレにあがっていたけど、真実のほどはわからない。でも、その下位組織にあたるピンクちゃんの所属組織が実際にボクに会いに来ているわけだから、ジュデツカの人たちがいないとも限らない。

「うーん……複数犯を捕まえるのは難しいよね。反撃を受けたらみんな危険かもしれないし」

「犯人を特定できないと厳しいだろうな。ピンクは探偵役失格だ。所

詮ただの科学者だった」

落ちこむピンクちゃん。

そのとき、命ちゃんがすつと手をあげた。

ハザードレベル92

「はい。こんこん。今日も終末配信をはじめようかなあ……」
ちよつと気だるげな始まり方です。

そして今日の配信はひとりですることになりました。

放送室のカーテンは締め切り、誰からも見えないようにしている。

一階にある放送室の傍は、みんなも立ち入り禁止。

だれも入れない。

少し静かな環境が欲しかったから。

『こんこん』『おきつねこん』『よつこらフォックス』『ゾンビじゃなくてお狐さんだったのか?』『ばかされちゃう?』『そんなことよりゾンビテロは大丈夫?』『ヒロちゃんのお身体が心配です』『うむ。今日もわが妹はかわいいな』『なんかちよつと疲れてる?』『みんなヒロちゃんに頼りすぎだから』

ボクはまだ犯人が捕まっていないのにも関わらず配信をしている。

今日のボクはちよつと特殊な格好だ。

装備品——、狐のお面。お祭りとかで売ってるようなやつ。

そして露出度高めの邪道着物。スカートと着物が合体したような

やつね。

生白い足が見えちやつてて、ちよつとだけ恥ずかしい。

でも配信用のノートパソコンは上半身しか映らないから何も問題はない。

髪型をロング海老テールにしたら、なんとなく神力とか放ってそうな怪しげな美少女がそこにいた。黙っていればボクって儂げな配色しているし、妖精っぽいし、雰囲気でてる。

ちなみにお面の装備の仕方は、頭につけるのが正しい。被っちゃダメなんだよ。前が見えないからね。

もちろん、マナさんの趣味だ。

そして擬態だった。

ボクはいつもの素のボクじゃなくてちよつと偽りのボクだった。

みんなと純粋に配信を楽しみたいっていう気持ちじゃなくて、今回

は『いつもと変わらず』に配信するように、葛井町長に頼まれたからだ。

配信はボクと人類をつなぐコミュニケーションツールになりつつある。

この町役場の事件で、そのコミュニケーションに滞りがでたら、ボクの評価もおちるだろうし、この町の評価も落ちるだろうというのが理由だ。

なんだそれって思った。

正直なところ、すごくイラつとした。

そんなにも、人はゾンビ的思考能力しかないのか。

つまり、なにも考えられないのか。

マナさんが前にも言ってたけれど、『自立できる人は少ない』のかな。

自立って自分で立つってことだけど、要するに周りの判断に流されずに自分で考えられる人って少ないのかな。

——そうだろうと思う。

ボクの冷静な部分は、その通りだと判断してしまう。

そうじゃなければ、割れ窓理論なんてないはずだから。

つまり、人は周りを見て、空気を読んで、自分で考えずに、他人の考えで動く。

レミングスのように流れに逆らわずに生きている。

そういう人がたくさん集まれば、デマとかに流されやすい集団ができあがる。

きわめてゾンビに相似した集団だ。

ヒロ友たちの流れるコメントを、ボクはじつと眺める。

高速で行き交う文字列は、ひとつの川の流れのようで、それはボクを肯定するものではあるけれども、ボクを見ていない。

流されている。流れている。ボクもそうだけど……。

『ヒロちゃんどうしたの？』『なんだか魔王様っぽい』『今日のヒロちゃんはやたらと神秘的なんだ』『ヒロちゃん様。天使さまあー！』『またわけのわからんやつが湧いてくるし』『テロが怖いのかな』『ヒロちゃ

んは対人無敵だろ?』『そろそろ核でも落とされるんじゃないかってビビってんじや無いの?』『だから、核はゾンビ無効つつたろーが』『正直なところ、人間に萎えちやつてるんじゃないかね?』『陰キヤあるあるだわ』

そこにクオリアはありますか?

「今日のボクはアンニユイです」

『どうしたの? 生理?』『この人数でセクハラする勇氣は褒めてやる』『ほんぽん痛い?』『アンニユイの意味わかる?』『英語よわわわガールだしなあ……』『ヒロちゃんのアンニユイな顔が正直抜ける』『かわいそうなのは抜けないだろいい加減にしろ』『むしろかわいそうなのが抜けるという説も』『じゃあ、君は両足からゾンビにちよつとずつかじられるゲームしようか』『おいやめろ』

「アンニユイの意味ぐらいわかるよ! えつと……そう、メランコリックな感じだよ」

『メランコリックの意味わかる?』『にゅいにゅい』『ちよつと気だるげな感じだよな』『はあ。着物の肩のところがちよつとズレて扇情的すぎる』『相手は小学生だぞおまえらしつかりしろ』『むしろ小学生がいい』『ヒロちゃんだからいいんだろ』『かわいい』

「メランコリックの意味はアンニユイだよ!」

『ああ、ついにヒロちゃんが同語反復という裏技を身に付けてしまった』『これはとんちじゃな』『でもなにひとつ解決していない件』『どうしたのかお兄ちゃんは心配です』『緋色様。何をお悩みなのでしようか』

「ボクって、みんなに嫌われてるのかなあつて思つて……」

『そんなことないよ!』『すこすこのすこ』『おまえのことが好きだったんだよ』『ヒロちゃん愛してる』『こんなかわいい小学生を嫌いになるわけないだろ』『ゾンビのことは置いておいても好きです』『いつもとなんかちよつと様子が違うなあ?』『ヒロちゃんってあまり自分のこと好きかどうか聞くタイプじゃないと思うんだが』『ヒロちゃんが小悪魔モード?』

「そう。ボクらしくなかつたかもね。でも、みんなに嫌われなくな

かったから」

流れを少し意識する。

ゾンビを操るように大衆を意識して動かせるか試行する。

逆らってほしい。クオリアを——輝く断片を見せて欲しい。

そんな逆説的アプローチ。

「ボク、みんなに好かれたいな」

『やべ。かわいすぎる』『ヒロちゃん本当大丈夫？』『なんか弱気モード？』『媚び媚びやな』『なんか変じゃね？』『いつもと違うような』『正直キモい』『ゾンゾンしてきた』『小悪魔モード？』

「あは……初めてキモいって言われちゃった」

ボクを否定するコメントをピックアップする。

そしたら——、一気に燃え広がった。

炎上した。炎上した。炎上した。

ボクに対するものじゃない。ボクなんてそっちのけで、ボクをキモイと評価した人を糾弾する。ボクを鑑賞するよりも、誰かに憎悪の言葉を投げかけるほうが気持ちいいから。

もっと——もっと、燃え広がれ。

正直、ボクはイラついているんだ。ボクの配信なのに！

ボクの配信にゾンビみたいに侵入してきて、感染する悪意に対して

真っ赤に燃え盛る炎のようにボクのおなかの中はグツグツと煮立っていた。

だから、燃え盛るのは上等だ。

ボクはわりと暴力的でワガママなのを、みんな知ってほしい。

『マジかよ』『消えろ』『ゾンビに欲情しているおまえらがキモい』『なんだこいつ』『ヒロちゃん助けて』『キモいのはおまえの精神だろうが』

『やめてくれー。ヒロちゃんの配信を荒らさないでくれ』『アンチに反応するやつもアンチ』『これはひどい』『今日の配信はなんか変だな』『ヒロちゃんアンチスレの住民だろ。まじこっちくん』『運営会社はなにしているんだよ。早く荒らしを消してくれ』

ボクは荒れるがままに任せて——。

それから——たっぷり時間をかけて待った。ただひたすらに待つ

たっぷり時間をかけて待った。ただひたすらに待つ

たっぷり時間をかけて待った。ただひたすらに待つ

たっぷり時間をかけて待った。ただひたすらに待つ

たっぷり時間をかけて待った。ただひたすらに待つ

たっぷり時間をかけて待った。ただひたすらに待つ

たっぷり時間をかけて待った。ただひたすらに待つ

たっぷり時間をかけて待った。ただひたすらに待つ

たっぷり時間をかけて待った。ただひたすらに待つ

たっぷり時間をかけて待った。ただひたすらに待つ

た。

人差し指を口元にあてて、静かにのジェスチャー。

コメントの勢いが失速していく。

百万人もいるからなかなか収まらないけれども、ボクがじつと黙つたままだったからか、その意図を察してくれて、徐々にコメントの数が減っていった。

やがて——0になる。

ほんのわずか、ポツポツとコメントがついたりしているけれど、全体の流れは停滞し、凧のように穏やかだ。さつき鉄火場のように燃え盛っていたのがウソのようだ。

「えー、みなさんが静かになるまで五分もかかりました」

『ズコー』『それが言いたかっただけなんちゃうか?』『え、ヒロちゃん関西人なの?』『ヒロちゃんは佐賀県民だろ』『今日のヒロちゃんは一体何がしたいのかおじさんわからないよ。厚労省に三十年勤めてきてわからないことがあるとは……』『厚労省のおっさんがここにいる件』『わしは汚れ好きの土方の兄ちゃんだが何か?』『聞いてねえよ』『あのね……、今日はちよつとやりたいことがあつて実験したんだ。ごめんね』

『わかつたー(素直)』『なんの実験?』『アンチを釣る実験とか? 趣味悪いな』『そんなエサに釣られクマー』『ナニカサレタヨウダ』『さすがに釣り実験じゃないよな』『びっくりしたー。心臓停まったわ』『心停止兄貴はゾンビとしてたくましく生きて』

「アンチを釣る実験じゃないよ。これはね——」

犯人を釣る実験なんだ。

話は二日前に遡る。

☆
||

二日前の会議室。

ピンクちゃんの報告のあと、命ちゃんが静かに挙手をした。

「どうしたの?」

「先輩。わたしとしては、疑わしきを罰するべきだと思います」
「なに言ってるの？ そんなことをしたら法律も秩序もないよ」

ボクが勉強してたのって実をいうとそれ系だし、社会秩序を積極的に崩壊させるなんて意図していない。ボクはできれば人類文化をそのまま保全したいと思ってるし、そのために人類の秩序というものもできるだけ壊したくないんだ。

「ピンクさんの調査によって明らかになった事実は二百名近い町民のなかの百名くらいが容疑者ではないかということです。そして、複数犯ではないかという推理——、この点についてはわたしもそう思います」

「まあ、複数犯かもしれないけど……」

「であるならば、犯人がそうでないかを選び分けるためのメルクマールが必要です」

メルクマール。目印。法律用語のひとつで、命ちゃんはボクの思考に沿おうとしてくれている。

だからといって、疑わしい人を次々罰していくというのは納得できない。

納得できるはずがない。それは冤罪の温床だからだ。

「言ってることは正しいと思うけど、それがどうして疑わしきを罰するという話になるわけ？」

命ちゃんはピンクちゃんの向こう側に座っている。

距離的に言えば、数メートルくらいしか離れていないけど、命ちゃんのところがわからなかった。それは寂しくもありうれしくもある。

ボクは命ちゃんのところを支配していないってことだから。

「犯人たちはウィルスではないからです」

命ちゃんの迂遠な言葉。

そしてタイムラグ。

ボクに考えが染みるのを待っているみたい。

ピンクちゃんはなるほどって顔つきをしていたけれど、ボクにはよくわからない。

ボクがよつぽどいぶかしげな表情をしていたのか、命ちゃんは再び

唇を開く。

「要するにトロイの木馬であるということですよ」

「うーん。パソコン用語のことだよね」

「そうです」

「トロイの木馬もウイルスも悪さをするくらいのイメージしかないんだけど、何か違いがあるの？ カレーメシとカレーライスくらい違うのかな」

「まったく違うぞ」

ピンクちゃんが振り返りながら言う。

「どう違うの？」

ピンクちゃんの言葉を継いだのは命ちゃんだ。

「簡単に言えば、ウイルスは非正規のプログラムで他の正規ファイルに感染していくものです。他方でトロイの木馬は単独で成立し、正規ファイルを装います」

「どっちも悪いやつだよね」

「そうですね。どちらもマルウェアではありますが……理論上、トロイの木馬は正規ファイルを装っている限りは発見されることはありません」

「ゾンビ槍を持ち帰ったり、貯水タンクに入れる行為は十分に非正規な行為、つまりウイルス的な行為だと思うけど。悪意も不安も感染したよ」

「ええですから、犯人たちはトロイの木馬ですが、実行犯はウイルスだと思っっています」

命ちゃんの考えがようやく少しだけ分かった気がする。

要するに、今回ピンクちゃんが犯人を突き止められずに困っているのは実行犯を補助したやつらは、きつとたいした行為をしていないということなんだ。

例えば、同じ部屋にいる町民たちが、ゾンビ部屋に近づきそうになったら、ちよつと声をかけて止めるとか。普通の人のような振る舞いでコントロールできてしまう。

実行犯は決定的な行為をしているから、突き詰めていけば誰がやつ

たのかはわかるかもしれないけれど、もしも、そうした行為が判明したときに犯人たちが一斉に抵抗したら困る。

ほとんどの戦闘力のない無辜の民だからね。

だから——、トロイの木馬をあぶりださないといけない。

「えっと、つまり命ちゃんはお馬さんたちを見つけ出すために疑わしきを罰する必要があるって言ってるんだね？」

正規のプログラムを装うトロイの木馬は、悪意のある行為をおこなわない。感染活動をおこなわない以上は、見つけることができない。

命ちゃんは神妙に頷いた。

「そういうことです」

「でも、何をするつもりなの？」

「わたしとしては——、ヒロウウイルスに感染させてしまえばいいと思います」

「命ちゃんそれは……」

「先輩が嫌がっているのは知っています。周りがヒロゾンビになれば生殺与奪の権利を握ってしまう。それが人間の尊厳をなくしてしまうのではないかって考えてるんでしよう」

「そうだよ。それにヒロゾンビになったって、みんなのところがわかるわけじゃないから無駄なんじゃないかな」

「無駄じゃないです。犯人はゾンビテロを起こした。つまりそれは先輩に対する糾弾です。ノーモアゾンビノーモアヒロちゃんってことじゃないですか。そんな人がゾンビに感染したいと思いませんか？」

きつと犯人はゾンビにならなかつた半数の中にいるに違いなく、ピクさんのあぶりだした証言と重ね合わせればさらに絞れます。そうやって、疑わしい人物を敵として認定することでは、トロイの木馬は排除できないんですよ！」

命ちゃんはクールな顔つきだけど、ボクにはわかる。

必死だった。

どうしてそこまでヒロゾンビを増やしたいのかがわからない。

いや——、本当はわかってる。

たぶん、命ちゃんにとって町の人々とか犯人とかはどうでもいい

い。

ヒーロゾンビになるのを拒否した人を疑わしいものとして排除するというのは、ただの副次効果なんだ。犯人探しはただのおまけ。

「ボクのため？」

びくつと肩を震わせる命ちゃん。

やっぱりそうなんだ。

「ボクがヒーロゾンビを増やさないとなんでダメなのかな？」

「先輩、考えてみてください。今のところヒーロウイルスのことまでは知れ渡ってませんが、もしも世の中に知れ渡ったら、先輩はゾンビ利権のためにヒーロウイルスを出し渋っていたと思われかねません。自分の優位性を利用して独占状態を作っていた。人はそういうビジネスを悪と評価します」

「うーん。そういう可能性もあるかもしれないけど、でも血を飲むとかいやじゃないかな。言ってみればゾンビっぽくないけどゾンビになるわけだし。ボクの血を飲むと人間やめることになるけどいいですかって話でしょ。ゲンさんだつて言ってたじゃん。混乱するって」

「混乱はするでしょう。でも、このままだと先輩にはわかり負担が集中してしまう。回復魔法のヒールだつて完璧ではなかったでしょう？」

確かに未宇ちゃんの耳までは治せなかった。

たぶん、ヒーロウイルスに感染したら治せるだろう。

あくまで回復は治癒であり、再生とか復活の領域じゃないってことなのかもしれない。

「人はしてもらったことは当然だと思うようになるんです。先輩がゾンビハザードを完全に払いのけるにはまったく力が足りません。でも——、ゾンビは増殖するじゃないですか。ヒーロゾンビならいくらかは先輩の助けになれるはずですよ」

「ヒーロゾンビを増やしても、結局のところボクに集中すると思うんだけどな」

命ちゃんもマナさんもボクのレベルを超えることはないというか。結局、ゾンビもヒーロゾンビも管理者権限があるのはボクだけで、

命ちゃんやマナさんがゾンビを操れるのは下位存在だからだと思っ
んだよね。

命ちゃんは悲しげな顔になった。

「それでも先輩の重荷が分散できるならって思ったんです！ もう人
類の未来とか他のみんなに任せればいいじゃないですか。あのア
パートで怠惰にモラトリウムに引きこもって、ただただ楽しく配信し
て、わたしも時々参加して、人類の行く末を見守っていればいいじや
ないですか！」

命ちゃんがボクのことを思ってくれてるのはわかる。

きつと他の誰よりも強い気持ちだろう。

「でも、町のみんなの気持ちも考えてあげて？ だって今それやっ
たら踏み絵じゃん」

ボクの血を飲まないと犯人扱いしますって踏み絵そのものだよね。

お隣の長崎ではわりと有名だった隠れキリシタンの話だけどさ。
現代社会においてそれをするのはどうかと思います。魔女裁判的
でもあるし、そんなのやりたくない。

「だいたい、後でバレたらよっぽどボクの評価が落ちるよ。炎上案件
だよ。そうなくてもヒロウゾンビが今より増えたら自動的にゾンビ
は駆逐されていくのかもしれないけど……」

「ねえ。マナさんもそう思うよね」

「そうですね。ご主人様に無理やり舐めろと言われるシチュエーショ
ンも捨てがたいな、と」

ダメだこのお姉さん。聞いたボクがバカだった。

「ピンクも踏み絵は嫌いだ、考え方としては間違っていないと思う
ぞ。今ざつと数えたが、ゾンビにならなくてアリバイがないやつは三
十四名だった。ヒロウウイルスに感染するよう仕向ければトロジャ
ンホースプログラムは軒並み偽装がはがれるだろう。ウイルスを識
別因子として使うのは天才的発想だ。さすが後輩ちゃん！」

ピンクちゃん大きな頭を揺らして答える。

三十四名か。あと少して絞り込めそうではある。

二百名の容疑者からすれば、十分すぎる推理。十分すぎる成果だ。

命ちゃんの疑わしきを罰する方式は確かに有効だと思う。

でも、命ちゃんが言ってるのは犯人がどうこうとか、町役場がどうこうとか、今後の人類がどうなるのかとか、そんなことじゃなくて、ただひたすら、ボクが勝手に考えひそかに感じている責任を放棄しろということに等しかった。

責任――

ヒーローとしての責任。

そんなのともから無いのは知ってるけどさ。

ゾンビがいなければ、もっと楽しく配信できたのについて思ってるよ。

命ちゃんはボクを睨むようにまっすぐと見ている。

「いままで先輩が危なかった場面だつてたくさんあったじゃないですか」

「そうかもしれないけど」

「先輩は自分勝手です」

「否定できないけど」

「……」

命ちゃんは何も言わずに、すつと右手に左手を重ねた。
なんだろう。

何をしているのかわからず、ピリつとした空気めいたものが流れる。

小さな貝殻のような親指の爪が右人差し指に食いこんでいく。

紅いボクによって汚染された血。

目の前にいるピンクちゃん。ピンクちゃんを挟んで命ちゃん。

何をしようとしているのか、瞬間的に理解した。

ピンクちゃんの口元に命ちゃんの指が伸びる寸前。

ボクは念動力を使って、命ちゃんの指を叩き落した。

まるで不可視の重力場のようなものが発生して、命ちゃんの指は地面に引き寄せられ、途中の机を紙みたいに真つ二つに引き裂いて墜ちていく。

盛大に倒れこんだ形だ。

強い力が反発しているのがわかる。

命ちゃんもヒイロゾンビだから抵抗する力が激しい。

でも——、ボクも怒っていた。

怒りすぎて逆に血の気が引いている。冷静だ。

「命ちゃん。なにピンクちゃんを感染させようとしているの……」

命ちゃんの端正な顔が歪んでいる。

身体は地面に押しつけられ指一本も動かせない状態。

こんなことしたくないけど。

こんなの胸が裂かれるみたいに痛いけど。

でも、ピンクちゃんを害そうとする命ちゃんを許すことはできない。
い。

「先輩が自分勝手にするなら……、わたしもそうしようと思ったから……」

「それだと命ちゃんを害そうとした小杉さんと変わらないじゃん」

「それでも……、先輩がいつか傷つくんじゃないかって思ったたら怖かったんです」

泣いちゃった。

いつもはクールで無表情な命ちゃんだけど、ボクのことになると途端に感情が豊かになる。

今までで一番、命ちゃんのこころを感じた。

それはうれしくもあるんだけど、ちゃんと言葉で最後まで交信してほしかった。

「命ちゃん。ボクは……、命ちゃんからみたら歯がゆいくらいに何もできないのかもしれないけど、ちゃんと命ちゃんの言うことは聞いてボクなりに考えて答えを返すからさ。お願いだから、暴力は使わないでね」

ボクが使ったのも暴力だけど……。

命ちゃんは大の字に横たわったまま、こくんと了承した。

素直な子なんだ。ずっと昔から。

「すみませんでした。ピンクさん」

「んー。ピンクはちよっぴりビックリしたけど大丈夫だぞ」

ピンクちゃんはい子すぎた。

幼いながらも手を伸ばし命ちゃんを立たせようとする。

しかし、体力的に無理だったので、命ちゃんは自分で立った。かぷっ。

あ？

ピンクちゃんの身長的に命ちゃんの指先は、ちょうどよい塩梅だった。

いや、そんなのはどうでもよくて、なにがどうなっているのかわからないけど、ピンクちゃんがおしゃぶりみたいに命ちゃんの指先を咥えていた。

咥えて？ え？

ヒロウイルスのたつぷり蠢いている指先を。

あ、あばばばばば。

なにやってんのピンクちゃん。またマモレナカッタ案件です？

「ふむ。当然のことながらなんともないな」

でも、感染している。

ボクにはわかる。ピンクちゃんはヒロゾンビになっちゃいました。

人類の科学者が、あつというまにゾンビサイドに。

これっていいのだろうか。ボクにはよくわからない。

「よかったですか？」と命ちゃんが聞いた。

「いい機会だったし問題ないぞ。それにピンクは科学者だしな。このゾンビハザードをなんとかする際に自分の身体を実験体にするのは当然だと思う」

「あの、ピンクちゃん。ボクに感染しちゃったらもう戻れないんだけど」

「不可逆的反応だといいたいなんだな。たいしたことじゃない。人間は皆、たったひとつの死というゴールに向かって生きている。いのちにレトロアクティブなんて無いんだ。ただひたすらに自らを更新し続け、前に進み続ける。もとより不可逆的な存在なのだ」

「いやあのね。風邪とかインフルエンザじゃないんだよ？」

「うん。むしろ身体の調子はいい感じだ。どんどんパワーが湧いてくるぞ。それに——」

ピンクちゃんがボクに抱きついてきた。

いままでよりももつとずっと密着させている。

「これでヒロちゃんに抱きついていても感染の心配はないぞ！ なにしろ既に感染しているからな」

まさかそれだけのために？

ボクが感染させるのをおそれて遠慮がちになってたのを見抜いたのか。

ピンクちゃんおそるべし。

あつあつあつ、すごい勢いで頭すりすりされてる。

「ピンクちゃんもゾンビになったので、同族としてわたしも愛でてもいいんですよ？」

「マナさんはしばらく黙ってて」

そんなわけで、ウダウダやりながらも、もうしばらくお馬さんを炙り出す方法を議論したのだった。

ハザードレベル93

ピンクちゃんがヒロゾンビになってからの議論はボクにもわかる簡単な結論に達した。

アンニュイな配信をしながらボクは思い出す。

——最初は強く当たって後は流れで。

ヒロウイルスの問題とか踏み絵になっちやうとかそういうもろもろの問題はあるものの、最終的に残った犯人候補については、できるだけ事が大きくならないように話を聞こうという流れになった。

「ピンクがなんとかするぞ」「わたしがサポートします」「お姉さんは見てるだけ〜」

そんな感じで言われたものだから、ボクはすっかり安心して配信にいそむことにした。

もう考えるのに疲れちゃったともいう。

配信用のノートパソコンの前で、ボクは緋色の翼をふわりと開く。ガスバーナーみたいにシューッと光の帯を出力する感じ。

あるいは戦闘機のアフターバーナーみたいな感じ。

わりと忘れがちなことだけど、ヒロウイルスは無機物にも感染するし、携帯端末なんかを通じて感染させることもできる。雄大が青函トンネルを抜けた直後にゾンビに噛まれて、ボクはスマホを通じて、ヒロウイルスを飛ばし、ゾンビを追い払ったことがある。

もちろん、これにはボクの気合が必要だけどね。

緋色の翼が出てるときは、ボクの最大出力時にあたり五分くらいで息切れしちゃう。

いや、少しは成長しているからもうちよつとは持つかな。

ともかく、その状態でおこなったのは犯人と思われる人の追跡だ。ボクはパソコンを片手で持ち上げ、そのまま放送室を出た。

『ヒロちゃん何してるの?』『さっき何か言いかけてたよな?』『また翼だしちゃって』『神々しすぎる』『着物きてるとこんな感じになるんやね』『あ、ノートパソコンが傾いたときにあんよが見えた……』『下駄はいてるのね今日は』『すべすべあんよ』『足がかわいいのよ足が』『数

秒の映像も見逃さない変態たちがおる』『今日のヒロちゃんはなんか変だな』『さつき炎上しかけたしな……』『つーかなんでアンチが動画見てるんだよ。いやなら見るな』『アンチとか勝手に認定すんなよ』『あ？ 戦争か』『やめーや』

まだ炭火のように鎮火しきつてないようだ。

でも、これもまたしようがないのかもしれない。

ボクは命ちゃんの意見を取り入れて、

——疑わしきを罰する。

ということに部分的に同意した。

部分的というのはどういうことかいうと、状況的に疑わしい人をさらに精査するってことだ。

つまり、

——疑わしきを疑う。

グレーの人間をつるしあげる。34名のグレーの人間に黒塗りをおこなう。

あれから命ちゃんの知恵もあつて、犯人が日米共同経済なんたらの人たちなら住民登録上はこの町の住民ではないのではないかということも指摘された。

ゾンビハザードが起こったあとに住民登録データを改ざんした形跡はない。命ちゃんのパソコン上の技能はピンクちゃんも驚くほどのウィザードクラスらしくて、その道のプロでもごまかしは効かないだろうとお墨付きをもらっている。

つまり——、住民登録データとの照らし合わせ。

ピンクちゃんの面談結果と住民登録上の名前を重ね合わせて、少なくともこの町に住民票がない人物でかつ、その34名に該当する人物はたった10名にまで絞りこまれた。

住民票は基本的には居住地が変われば変更手続きをするようになってる。この”基本的には”というところが厄介で、ボクも法律上はそうなることは知っているけれど、相続の関係とかいろんな事情で移さなかったりすることもある。

それに命ちゃんみたいに他県から来てる人だっているわけで、他県

から来てたってべつにおかしくはない。単に状況的に少し犯人っぽくなるだけだ。

でも、少しずつ黒を濃くしていく、犯人であるかもしれない疑わしさを濃くしていくということが残された唯一の方法だった。

十分に非道な行為であることは理解している。でも、ここまで容疑者の数が膨れ上がってしまつて、トロイの木馬がいる状態で推移すると、みんなのこころが持たないように思った。ピンクちゃんの面談に付き合うなかでいろんな人の声を聞いたよ。

みんな安心をほしがっていた。

爆弾が傍らにあるままに人間は生きていけない。ボクだつておんなじ気持ち。

完全に割り切つてるわけじゃないけど。

「えっと、その人。こつちにきてください」

みんなが住んでいる居住部屋のひとつを開けて、そこにいるふたりの人間をピックアップした。

ひとりは背が高く20代半ばくらいの若い坊主頭の男の人。もうひとりも同じく20歳半ばくらいの男の人でグレーのシャツを着ていた。

ふたりとも筋肉質で引き締まった身体をしている。

部屋の隅っこあたりに座つて、彼らはスマホをいじっていた。

ボクに呼ばれて狼狽しているように見える。

「どうしたのかな?」「配信中だよね?」「一般人のオレらに何か用?」「配信に出るのは恥ずかしいんだけど……」「顔見せは親の代からの取り決めでNGなんだ」

矢継ぎ早に話しかけるその人たち。

ボクは黙つてこちらに来るように促す。

彼らは立ち上がったボクに近づいてきた。他の人たちは困惑した表情でボクを見ている。

おずおずと立ち上がるふたり。

もし反抗しても、ボクの念動力のレンジに入っている。

誰かを害することはできない。油断はできないけど。

『ほんとどうしたんだよ』『カメラが内側だから誰に話しかけてるのはわからないがこれは』『犯人探しをしてる?』『いまヒロちゃんが話しかけたやつが犯人?』『どうやってわかったんだ?』『なにがなんだかわからない』『毒ピン解説してくれー間に合わなくなっても知らんぞ』

「解説しよう」

後ろからひよっこり現われたのはピンクちゃんだ。

ちっちゃいから気づかなかったなんてことはなく、いままで隠れていただけだ。

「残念ながらピンクは犯人を見つけることができなかった。なぜなら、犯人は巧妙でピンクの科学的捜査をことごとくはねつけていたから。また、目撃証言もいなかったことから、犯人は複数犯の可能性が高かったのだ」

『な、なんだってー!』『複数犯ってマジか?』『それはあなたの感想ですよね?』『複数犯、容疑者200名以上とか普通に絶望的じゃね?』『でもピックアップできたわけだよな?』『あ、もしかしてアンチコメしたやつか?』

「ん。そうだ。ヒロちゃんに対してアンチコメしたやつは、ヒロちゃんが追跡できる。ヒロちゃんの素粒子は万能だからな」

『へー(無関心)』『いまなんでもできるって言ったよね?』『前から思ってたんだけど緋色の翼ってヒロちゃんの素粒子なんだよな』『緋色のウイルスか』『緋色様の聖霊ですね』『パソコン辿ってヒロちゃんの素粒子が追跡したの?』『電子戦もできるのか』『でもアンチコメしたからって犯人とは限らんよな』

「複数犯といったがゾンビ槍を投げ入れたのはもちろんひとりだろう。何人もわざわざ人目につきやすい屋上に行く必要はないからな。つまり、実行犯プラス複数の幫助犯という構成だ」

目の前にいる二人組は、ピンクちゃんの話が進むにつれて青い顔になっている。

「ま、待ってくれ。オレらは確かにヒロちゃんのことキモイって書いたけど、悪ノリ的一种だったんだ」「よくあるイジリだよ。ヒロちゃん

がかわいいからちよつといじわるしたくなっただけで、特に悪気があつたわけじゃ……」

しらばつくてきているのか。

それとも本当にイジリの一種だったのかはわからない。

ピンクちゃん後はお願ひします。

「もちろん、犯人であるかどうか確定したわけじゃない」

ピンクちゃんが毅然とした態度で述べる。

「じゃあ、こんなんで犯人扱いしないでくれよ」「拷問にでもかけるのか」「オレらをゾンビにでもするつもりかよ」「他人のコメントをこっそり覗き見るとか趣味悪いよヒロちゃん」

「趣味が悪いのはそうかもね。みんなが好きにコメントするのを抑制しちゃうかもしれないのもヤダよ。でも、町のみんなをゾンビにするような人がいるならしかたないっていうのもわかってほしい。いまここには刑事さんとかいないんだし」

ボク自身への悪口とかアンチとかならいくらでもやってもらつてかまわないと思つてる。

でも、ボクは”この後”が怖い。

割れた窓がどんどん多くなつて取り返しがつかなくなるのが怖い。

命ちゃんの恐怖が感染したのかもしれない。命ちゃんがボクの心配をしたように、ボクは命ちゃんやボクと親しい人たちが傷つくのが怖かった。

匿名性のある量的なファン——ヒロ友。

集団が大きくなればなるにつれて、その中でアンチが発生する確率は高まる。

ネットでの悪口だけならまだいいけど、今回は実効性のある暴力だ。

警察がいなくなつてしまった世界では、多少の自衛はしかたないと思う。

本当は配信しながら犯人探しをしないほうがよかつたかもしれない。

パソコンを開きながら犯人を追跡したのはヒロウイルスの追跡

のためというのも理由だけど、ある程度特定してから配信を切り上げることができた。

でも——それでもコソコソ犯人を捜すのはもうやめたかった。

ボクはボクの行為が正しいかをみんなにジャッジメントしてもらいたかった。

結果としてボクが今より嫌われたとしても。

いまま配信を続けているのはそんなボクワガママだ。

『犯人をトリアージするためか』『幫助していったってなんだ？』『犯行を幫助するといったら、目撃者逸らしとかかな』『なんだかやり口がプロいよな』『やっぱジユデツカなんじゃね？』『だからどうして黒幕扱いするんだよw』『これからヒロちゃん動画は検閲されるのかやべえよやべえよ』『そもそも検閲とは表現の事前抑制だから厳密には検閲じゃありませんね』『ヒロちゃんより自国とか運営会社から監視されてるんじゃない？』『コメントどころか垢バンされることもあるしな』『そりゃそうだわな』『小学生とチヨメチヨメしたいとか度し難い。あ、やめて消さないで違いますチガイマス』『まあ変なコメントとかは元から消されるよな』

「検閲はしないよ。そんなのやりたくもない」

『ヒロちゃんのアンニユイ顔』『神秘的ヒロちゃんがより神秘的に』『事実上検閲になってるような』『ヒロちゃんとしてはどうしようもない問題じゃね？ アンチとかどうやったって湧くし』『みんなに優しくしたら八方美人だと言われたりするしな』『ヒロちゃんの長所を短所と捉える人だっているだろ』『検閲されてもなんの問題もない』『だから検閲しねえって言ってるじゃん。ヒロちゃんを信じる！』『全部犯人が悪い。さっさとゾンビになってどうぞ』

意見はさまざま。

いまはみんな困惑しているみたい。

ボクだって葛藤があった。

配信に現実世界の楽しくないこととかを混入することになりかねないから。

でも水に毒を混ぜたのは犯人たちだ。

「オレらは犯人じゃねえ。証拠はあるのかよ」「そうだよ。証拠もないのにオレたちこれから町のやつらに吊るし上げられるかもしれないだろ。ヒロちゃんのせいだからな!」「だいたい小学生が探偵ごっことかおかしい」「町長だせよ。町長。大人を遊びで陥れるなよな!」

これ以上、この場所で話しても埒があかない。

ボクはピンクちゃんに当初の会議で決めた”流れ”を視線で促す。

犯人っぽい人から話を聞く。つまり取調室みたいなところへ。

でも……、プチっていう音が聞こえた気がした。

ピンクちゃんはめちやくちや怒っていた。

マジ切れしている。

「証拠はないがお前達が犯人だと証明することは可能だぞ!」

ピンクちゃんがちっこい身体を精一杯伸ばして、ふたりを睨んでいる。

「なにをどうやって証明するっていうんだよ」「自白とか狙ってるのか?」

「ピンクはこの場で公表する——、ピンクはヒロちゃんの素粒子、ヒイロウイルスに感染している。ヒイロウイルスのデッドエンドホスト。つまりヒイロゾンビだ。ゾンビといっても腐ってないぞ!」

あ、あれ?」

そんな話をする流れでしたっけ。

『ピンクもゾンビちゃん?』『毒ピンがいつのまにかポジってる件』『見た目かわいい幼女だし違いがわからんな』『外見上、人間と違いがなくてもやっぱり種族が違うんじゃないか?』『自己同一性の認識は?』『いつゾンビになったんだよ?』『ヒロちゃんがレイプ目に』『この流れは……ピンクちゃんの暴走?』

「ピンクは自分自身を精査してみたが、直接的に観測しうる結果としては人間だったときと脳の活動に違いはなかった。具体的なデータについては、ホミニスのウェブサイトにアップロードしているので参照してほしい」

『はっ!』『いつのまに毒ピン』『いま毒ピンが最高に毒ピンしてる!』『多目的合成装置サイクロトロンをつかったゼロベースデータか』

『チューリングテストもやってる』『PET使った細密な脳のビフォアアフター』『データ的には違いはないが……』『いやデータのいっしょでも心に違いがないかはわからんわけでしょ』『哲学的ゾンビについての問題は残るよな』『他人どころか本人も違いがわからんでしょ。こころを直接観測する装置なんて無いんだから』『傷の治りが超早い動画が軽くグロ動画なんだが』『待てよ。ヒロゾンビになればゾンビに襲われないんだよな。これってワクチンなんじゃ』『ピンクちゃんの血を百億円でわが国は買いたい』『うちは二百億円。キャッシュ一括払い』『うちは5兆円だします』『まていまは慌てる時間じゃない。そもそもヒロちゃんその気になればヒロゾンビなんか簡単に増えるだろ』『ヒロゾンビになって本当に問題はないのか?』『ただちに影響はありませんだったらどうするの?』『話ではあるよなあ』『あとからヒロゾンビは五年で死にますとかだったら嫌だよな』『で、なんの話だっけ?』

もうめちやくちやだよ。

ピンクちゃんは怒りに燃えて我を忘れてるけど、犯人がどうしようい後からフォローが困難なんじゃないかな。でも、ゾンビになるというリスクから、みんな動かないことも考えられるか。

ボク自身としては——、みんながこころの底からゾンビになっていitと言うんだつたら、いくらでも血なんか分けてあげられる。ヒロゾンビになった人が誰かに分けるといいうのも止める気はない。前まではもしかしてゾンビなんだから赤ちゃんとかできないし成長できないんじゃないかって思ってたけど、そういうデメリットはないみたいだし。

つまり、ボクにもヒロウイルスがなんなのかよくわからなくなってきたということ。

もしも日本のことだけ考えるなら、ヒロウイルスの値段を吊り上げて売るといいうことは考えられるけど、もう後はこころの問題といいうか、感情的に納得するだけのよな気もするんだよね。

おそらく混乱が生じるだろうけど——。

「な、何が言いたいんだよ?」と犯人候補のひとりが聞いた。

「わからないのか？ 犯人はヒロちゃんを否定する一派だ。だから、ヒロちゃんに感染したくない。そうだろう」

「そんなわけのわからない物質に感染したくないのは当たり前だろ！」「ゾンビにはなりたくねえよ。気持ち悪い」

「これは信用問題だ。ピンクは保証する。ヒーロゾンビになっても何も問題はない。人間だったときの違いは、ゾンビ避けができる。身体に再生能力がつく。精神的に賦活される。簡単に言おう。自分が望む自分が手に入る」

「だからって嫌に決まってるだろ」「あんたは頭がいいからわかった気になってるかもしれんが、オレは地頭悪いからな。さっぱりわからねーよ」

「ヒーロゾンビになればお前達を信用する。ヒーロゾンビにならないければ、お前達は少なくともピンクやヒロちゃんを信用してないってことだから、ここから出て行ってもらう」

「要するに踏み絵なわけだ！」「このガキ。言ってることがえげつねえよ」

やっぱり出てきた踏み絵。

ピンクちゃんの話し方は暴力的になっていると思う。

いまこの場での強制力はかなり強い。

こころの底からヒーロゾンビになりたいならという理想からはほど遠い。

「ピンクちゃん。信用問題なのはわかるけど、いいやりかたじゃないような気がするよ」

「ピンクは全部の責任をとるぞ！ ヒロちゃんが気に病む必要はない」

そうか。

ピンクちゃんもボクのために言ってくれたのか。

うれしくはある。

でも、本当にそのやりかたが正しいのかな。

『踏み絵か』『踏み絵だな』『ゾンビになっても何の問題もないといわれてもな』『そもそもアンチコメする連中がそんなに納得するか？』

『鬼畜幼女』『毒ピンは本当に毒ピンだった!』『ヒロちゃんが悩ましげな顔になってる』『容疑者扱いされたやつらももう住めんだろ』『ピンの言い方はきついが免罪符でもあるわけだよな』
免罪符か。

そういう考え方もあるのか。

容疑者だった人たちがここにこのまま住むためには、そういう踏ん切りというかきっかけは必要かもしれない。アンチコメを書いたという事実は事実だし。ヒロ友という連帯の仲で他のみんながどう思うかわからないけど、あんまりいい感情は抱かないだろう。

「さあ選べ。ヒロゾンビになるかならないか!」

ふたりは顔を見合わせる。

推理が正しければ、ふたりは同僚であり仲間なわけだけど。

考え方が同じとは限らない。

「お、オレは……ヒロゾンビになってもいい」「おい」

ヒロゾンビになってもいいと言ったのは、グレーのシャツを着た男の人だった。

見下げ果てたような視線になる隣の人。

「えっと、鈴木さんだっけ。本当にヒロウイルスに感染しているの?」

グレーのシャツの男。鈴木さん(偽名かもしれない)はゆつくりと頷いた。

「ウソだろおまえ。あの人に殺されるぞ……」

坊主頭の——えっと、田中さん(偽名かもしれない)が恐怖に怯えた声を出す。

事実上の自白だった。

鈴木さんは隣の男の人、田中さんをにらんだ。

本来ならグレーのまま行きたかったんだろう。

鈴木さんは自己犠牲の精神でヒロゾンビになると言ったのかもしれないし、自分だけが助かりたいという思いからそう言ったのかもしれない。

そのあたりは不明ではあるけれども、自白がとれちゃった時点で、

もはやヒロゾンビになる意味はないかもしれない。

「えつと……、自白だよな？」とボクはできるだけ柔らかく言った。

配信でもなかなか出さない媚び声だ。

犯人を刺激しないようにそおーつと声をかけた感じだ。

田中さんはしばらく無言だったが、いい加減どうしようもないと悟ったらしい。

「ああ、オレたちは上からの命令でゾンビテロを起こした」

『ひゅうー』『やったぜ』『犯人捕まったぞ』『ピンクちゃんの粘り勝ち？』『さすがに状況からにつきもさつちも行かなくなつたんだろうな』『トリアージは成功したが、まだ実行犯が残存しているだろ。気を引き締めろ』

「あのこんなことになつちやつたけど——、鈴木さんどうする？」

「オレはもともと嫌だつたんだ。あの人はゾンビに異常なまでの憎悪を抱いている。でもヒロちゃんはゾンビだとは思えなかつたし……、アンチコメとか本当はしたくなかつたんだよ。信じてくれ！」

「命令されてしかたなくやつたつてこと？」

「そうだ」

「だそうだけど、ピンクちゃんどう思う？」

ピンクは白衣のポッケに手をつつこんで、冷たい視線になつていった。

「お前達以外に幫助犯がいるのか知りたいぞ」

「いねえよ」とぶつきらぼうに言い捨てる田中さん。

自分が自白したのは鈴木さんのせいだとも言いたげで、地面ばかり見ている。

「ヒロちゃん。オレたち、あの人に殺されちまうよ……」

「あの人って、どの人？」

「その……名前はいいない。本当に裏切つたと知られたら殺されちまう」

「実行犯のこと？」

鈴木さんはかすかに頷いた。

秋だというのに大量の汗を流している。

背筋はピンと伸ばされ、本能的に恐怖を感じているのがわかる。でも、目の奥底にあるのは、その人に対する怨みの感情だ。

その微妙な均衡がヒロゾンビになってもいいという発言だったのかもしれない。

「ヒロゾンビになったら鈴木さんはその人に殺されちゃうかもしれないわけだね。だったら、名前をここで述べてすっきりするのも手だよ。ボクが約束する。ヒロゾンビになってもならなくても実行犯の名前をここで述べたら鈴木さんを庇護するよ。あ、田中さんも同じくです。ふたりに話し合って決めてください」

「わかった」と鈴木さん。

田中さんは無言のままだ。

「なあ、田中。オレたちのやってることって”悪”じゃないのか？ ヒロちゃんは人類のためにがんばってるし、オレたちが本来守るべき子どもだろ。もうやめようぜ」

「おまえはあの人の怖さを本当の意味で知らないからそんなことが言えるんだ。あの人は関東決戦でゾンビを百匹以上殺しまくった存在なんだぞ。いくら超能力が使えるからって小学生にオレらが守れるのかよ」

「わかってるさ。でも、もともと自衛隊に入ったのは守るべきものを守りたいからだろ。あの人はゾンビ憎しで殺しまくってるだけじゃないか。そもそもゾンビから回復できるのがわかってるのにゾンビを殺したら殺人だろ」

「オレたちにゾンビを殺す殺さないを決める権限はない」

「ひとりの人間としてどう思うかだって大事じゃないか。そもそも権限ということでは自衛隊は分裂してどっちが正統か曖昧になってる。入間か小山内かそんな感じだろ。上のことはわからんが、どっちか決めるのは個々人じゃないのか」

「オレは……そのゾンビを信じていいかはまだわからん」

あ、ボクです？

それは人それぞれだと思います。

鈴木さんはどう答えようか迷ってるようだった。

ピンクちゃんはどうでもよさげ。基本的に執着していること以外は完全無視に近いのは命ちゃんに似てるよね。ボクにすりついてくるところも似ているけど。

「田中。友人として言う。頼むよ。あの人に逆らうのは怖いがここはヒロちゃんを信じよう」

しばらく無言の時間が過ぎた。

やがて雨が降り始めるようにポツリと――。

「オレにはあの人の気持ちもわかる気がするんだ。オレは五歳の娘を失ったからな。あんたは独り身で何も失ってないじゃないか。だからわからないんだよ」

ひとりほの暗く笑う田中さん。

ボクがわちやわちやと配信を楽しんでいる傍らで、何千何万もの人がゾンビになって、そしてゾンビに噛まれて感染して、死んでいったのは頭では理解している。

中には頭を撃ち抜き、愛する人を永遠に失った人もいるだろう。

結局、実行犯の名前を告げたのは鈴木さんだけだった。

――久我春人。

実行犯の名前がついに明らかになる。

あ、ちなみに実行犯はもう捕まえています。

ハザードレベル94

話はちよつとだけ巻き戻り、配信の二十分前。

久我さんはひとり——なんというか黄昏ていた。

ほとんどのみんなが居室代わりになっている部屋か、あるいはホールでボクの配信に備えて待機しているというのに、久我さんだけは三畳くらいの大きさの端っこにある喫煙室で、タバコをくわえ片足だけソファに乗せて、（お行儀が悪い！）不良のように座っていた。

「はいお邪魔しまーす」

ボクは容赦なく喫煙室に入った。

久我さんは驚いて、ソファから飛びのくようにして立ち上がったけれど、こんな狭い部屋の中でどうこうできるはずもない。

要するに念動力による拘束で一発アウト。

ドラゴンボールでチャオズが最強といわれる理由がここにある。

なにしろ攻撃動作すら入れないんだからね。超能力最強だよ。

不可視の輪ゴムが身体ごと覆ってるイメージで拘束され指一本動かせない状態にある。

久我さんはボクをにらみつけていた。

「なんのつもりだ？」

「あ、うん。ゾンビテロの犯人を捕まえようと思って」

「ゾンビテロの犯人？　なぜオレが犯人だと思う」

「簡単だよ。目撃証言があるんだ」

「目撃証言？」

実行犯がやったことを思い出してほしい。

新鮮なゾンビ肉を役場内の人間が手に入れる方法は限られていて、ゾンビルームにいるゾンビさんたちを鉄パイプ槍で突き刺すことだった。

で、考えたらわかることだけとき、ゾンビって人間に抱きつきたくてたまらないという習性を持つてるんだよね。人間の出す音とかにおいにも敏感だし、要するに突き刺す際に必ずその人間を見ているはずなんだ。

さて、ここで問題です。

ボクってゾンビさんに対して何ができるでしょう。

シンキングタイムは20秒。

それ、わかちこわかちこー。はい終了。

そう——、回復です。ゾンビから人間に回復させることができます。

人間に戻ったら損傷が激しくなければ、ゾンビだったときの記憶も残るみたいなので目撃証言が残っている確率はかなり高いものと思われました。

もちろん、元々ゾンビルームにいるのは犯罪者らしいので、葛井町長には回復していいかを確認したよ。胸に傷のあるゾンビさんは運がよかったということで人間に回復させて——、それからピンクちゃんデータから誰が犯人かの証言を得たわけですね。

え、回復させたその人はどうしたかって？

ちゃんとありがとうってお礼をいってゾンビに戻してあげたけど。

刑期といつかなんといつかゾンビの時間は半分にしてあげるって言ったら、わりとすんなり受け入れていたよ。

ゾンビになってる状態って、思考しないで済むからそれはそれで楽ちなんだったって。

これは刑罰として機能しないかもしれない可能性が微レ存？

まあ、そういうのは全部、町長に丸投げした。ともかく大事なものは証言が得られたってことだ。

「そんなわけで、目撃証言があるから言い逃れはできないよ」

「オマエはそんな犯罪者の証言を信じるのか？」

「え？」

「ゾンビルームにいたのは犯罪者なんだろう。自分が罪から逃れるために適当なことを述べたとは思わないのか？」

「ああ。なるほど……」

まあその可能性もなくはないけど、だからといってここまで容疑がかたまっていると、拘束しないわけにもいかない。

「あとで言い分は聞くから、別室に移ってもらおうね」

もちろん、久我さんは不満の表情だったが、ボクに拘束されてい

る状態から抜け出すことはまず不可能だし、久我さんの身体を人形みたいに動かせば、嫌でも手足は前に進んでしまう。

わっせ。わっせ。あ、念動力うまくいかない。赤ちゃんが人形をもてあそぶような感じで、空中でぐるんぐるんなっちゃってる。

「やめろっ！ 自分で歩ける」

「じゃあ、自分で歩いてね」

はつきりいうと、ボクは怒ってるんだ。

ヒロ友のみんなをゾンビにして不安にさせて、久我さんはボクの配信も見ずに、ボクのことを知らうともせず糾弾している。

そう、鈴木さんと田中さんのふたりが自白した状況を思い出してみると腑に落ちるんだけど、ボクが配信しながらも、久我さんがその配信を見ているとは思わない口ぶりだった。

久我さんが配信を見ているなら、そもそも『あの人に殺される』とか、そういう自白が成立している時点で無駄に終わる。ふざけんなオマエなに自白してんだよと殺されてしまう可能性が高い。でも、そうはならない、まだリカバリが可能だからこそあそこで田中さんと鈴木さんは言い争った。

配信で情報が伝わるのでなければ、たとえ捕まってもあとから言い訳できるからね。

ボクも久我さんが配信を見てないからこそ、ふたりが自白する可能性も高いかなって思ってたんだ。

そんなわけで、今は取調室で最終確認中です。

容疑はほぼ固まっているけど、どうせなら久我さんが嫌で不快でたまらない配信に無理やり出演させてやろうという粋な計らいだ。

隣には命ちゃん。ピンクちゃん。そして、この町の代表者として葛井町長がいる。葛井町長にはボクの狐のお面を被せてあげた。顔にかけるのはまちがいだけど、くっそ似合うのはなぜだろう。

☆
||

「さて、役者もそろったことだし、続きまして今日は世界初かもしれな

い取調べ実況配信をおこないます。出演者は実行犯のKさんです。宜しく願いしまーす」

『草』『しかし目撃証言とはな……』『ポンコツじゃないヒロちゃんなんて』『どっちかというの後輩ちゃんかピンクちゃんの策じゃないか』『肝心の実行犯が映ってないやん。どうしてくれるのこれ』『刑事訴訟法をぶっちぎってるな』『いやそもそもゾンビルームって人権的にどうなん』『ゾンビという型枠に思考を閉じ込めるという点で禁固刑に近いんじゃないか?』『政府がガバってんだからしょうがないやろ』『いろいろ思うところはあると思うけど、いちおう、容疑者さんの人権にも配慮して顔は見せません。あと、ここの責任者の町長さんにもきてもらいました』

「よろしくお願いしますねえ……。ようやく犯人が捕まって僕も一安心ですよ」

『ねっとりボイスやめろ』『こいつが黒幕じゃね?』『どう考えても怪しき満点やろ』『こいつが犯人でFA』『町長ってだけで怪しいわ』『町長……ふむ佐賀の町ってどれくらいだったかな』『詮索はNGだつってんだろ』『でももうほぼ絞り込めてるんじゃないか。隔離地域も少しずつ広がってるわけだし』『ここが分水嶺ではある気がするなあ……』

ちなみに佐賀県には10の市と10の町があるよ。案外町も多いからまだ半分にしかなり込めないね。でもピンクちゃんがやったみたいボクの発言とかからプロファイリングしていけば絞りこむことは可能かもしれない。

ヒロゾンビという存在が明らかになったことで、干渉の度合いを早めるか。接触をしてくるかはわからないけど、普通に会いたいというんだったら会うのはべつにいいし……なんなら配信やSNSを使つて連絡をとってくれたらそれでいい。ヒロゾンビの情報が知れわたったのはさっきだから、今後どうなるのかはわからないけど。「ではさっそくですけど、Kさん。あなたが犯人ですよ。認めますか?」

「……」

久我さんはまったくもって無視していた。

一言もしやべらず、視線をあわせようもしない。ちなみに、今の久我さんはロープでグルグル巻きにして、パイプ椅子に固定されてます。身体検査も済んで武器になりそうなものは全部取り上げました。

「えーっと、ボクと話すのは嫌なのかな。ピンクちゃん？」

とりあえず、探偵役のピンクちゃんに話を振ってみる。

「あー、ピンクとしてはおまえが自白しなくてもべつにどうだっていいぞ。おまえは十中八九ヒロちゃんのことが嫌いなアンチヒロちゃん派なんだろうから。おまえのアイデンティティを破壊するのなんて簡単だ」

この幼女、鬼畜につき――。

「ヒロゾンビにして、あえて解放すれば、味方が勝手に処分してくれるんじゃないか？」

なんか三国志とか銀河英雄伝説であった気がする。

捕虜をあえて何もしないで返すことで、裏切ったんじゃないかと思わせ、相手に処断させるという方法だ。

えぐえぐだよ。

視聴者の皆様もどん引きだ。

『おー、毒ピン毒ピン』『毒ピンのいつもの様子』『ヒロゾンビになっちゃったらもう普通には扱えんだろうな』『拘束かよくて……』『ヒロゾンビ?』

久我さんがつぶやくように言った。

そういや、久我さんはさっきの自白配信を見てないから知らないんだった。

ここでも拘束中だったしね。

「ヒロゾンビというのは、ゾンビに襲われず、よくわからないパワーに目覚めたゾンビっぽくない何かだよ。要するにボクのことなんだけど」

「オマエはそうやって自分の仲間を増やすのが目的だったのか!」

顔をこちらに突き出し――首だけで飛び掛りそうな勢いだった。

その様子だけで、もはや自白に等しい。

でも、犯人かどうかが重要じゃない。こちらとしては犯人であるという確信はもう得られているに等しい。目撃証言もあるし、鈴木さんも実行犯だと告げてるわけだし。

問題なのはなぜそうしたのかだ。

つまり、久我さんの個人的な怨みなのか。それともジユデツカという謎の組織の関係なのか。

意思を確認する必要があった。

「べつにヒロゾンビを増やそうとはしてないよ。Kさんがやったみたいな方法で増やそうと思えば簡単に増やせただろうけど、人間には人間の尊厳があるだろうし——、増やすにしろ人間側がそうしたいって思わなければしないつもり」

『ヒロちゃんに感染したいです』『わが国にもヒロゾンビを！』『何人か政府高官を送るといのがよさそうかな』『しかし、ゾンビと人間の区別がつかないとパンデミックが起こったときに怖いな』『え、でもヒロちゃんみたいになれるだけなら別にいいんじゃない？』『人間としての尊厳の問題はあるだろ』『血に穢れを混ぜるな』『緋色様の聖霊を身に宿すのです。なんの問題もありません』

議論がグチャグチャになってしまってる。生配信で議論なんかできるわけもなく、もうみんな言いたいこと思ったことをその場で瞬間的に投げている感じだ。

犯人のことなんかわりとどうでもいいみたい。

「オマエは……人類の敵だ」と久我さん。

「敵ではないつもりだけど、そう考える人がいるのも知ってるよ」

憎悪のこもった眼差しにボクはうんざりした気持ちになる。

嫌いだとか好きだって気持ちはその人の感じ方だから、その感じ方自体を停止させることはできないけれど、やっぱり気が滅入ってくるよね。アンニユイ。

「敵だろうがなんだろうがかまわないんですがねえ……。なぜゾンビテロを起こしたんです」

葛井町長が聞いた。

町長としてはいちばん聞きたいところだろう。

「あ、当然だろう。そのゾンビは人類を滅ぼそうとしている害獣だ。そしておまえらはけがらわしい害獣を囲っている。オレはわからせてやろうと思っただけだ。お前達といっしょにいるゾンビがどれだけ危険な存在なのか。ゾンビになって少しはわかっただろう？ そいつを肯定するやつらは全員敵だ。腐った死体になって全員頭を撃ちぬかれて死ねばいい」

「発想がこちらのチンピラと同じですね。緋色ちゃんが人類に仇なす敵だというのは、まあ言ってみれば異種族ですしね。そう思う人がいたとしても話としてはわからないでもないですが、そのためにゾンビを増やすというのがどうにも矛盾してませんかねえ」

『そりやそうだよな』『ゾンビテロ起こす時点で発想がゾンビだわ』『お気持ち案件か？』『というか、Kにとつては町のやつらは全員ゾンビなんだろ』『だが人類のことを考えてるというのも一考の余地ありなんじゃないか？ ヒロちゃんアンチってわけじゃないけどさ』『ヒイロゾンビという呼称がよくない。ハイヒューマンとか天人族になるんだというのだつたらもつと受け入れやすいと思うが』『名前とかどうでもいいだろ。要は人とは違う存在になるってことだよ』『利益しかなければクラスチェンジしてもいいだろうが』『ヒロちゃんのアンニユイ顔が加速しているからみんなやめよ？』

久我さんは怨みを視線に乗せて、噛みつくように口を開く。

「お前達が人類を危機に陥れている。オレの考えはべつにオレだけのものじゃない。5万人近い自衛隊員がそいつを殺そうと狙っているんだぞ。わからないのか。これは民意だ。オレは尖兵に過ぎないが、民主主義的に正しいことをしている。オマエたちがやってるのは多数の意思を無視することだ」

「自衛隊は確か真つ二つに割れて、残り5万人は違う意見のようですよ」

「そいつが世論をそちらに傾かせるように誘導したに違いない」

「単に配信活動を通じて、自分の考えを精一杯伝えようとしているだけだと思いますが」

「それがそいつのやり口なんだよ。ゾンビには感染能力がある。おま

えたちはすっかりそいつに感染させられてしまい思考までゾンビと化してしまっているんだ」

「だそうですが？」

町長がボクに話を振った。

「まあ思考感染ということだったら、ぶつちやけみんなゾンビ感染しているし、もう手遅れだよ。しないけどさ」

「オマエを排斥したいと願っているのは人類の意思だ。オマエもすべての人間を操れるわけじゃないんだろう」

この場で久我さんを哲学的ゾンビにするということはさすがにできないな。

配信中だし。みんなを怖がらせることになるだろう。

「ボクがしないっていてもそつちは信じないだろうし、ボクとしてはどうしようもないよね」

「当たり前だ。唯一信じるとしたら、オマエやヒロゾンビとかいうやつらが全員自殺すれば考えてやるよ」

おうおう。邪悪な顔なこと。

「ボクだって隔離地域を拡大したりしてるし、科学的な実験だっていろいろしてもらってるよ。人類側が怖いっていうんなら、ヒロゾンビは極力増やさないようにするし」

『ヒロちゃんって協力的だよ』『まあ少なくとも配信なんかしないで世界が減びるのを待ってれば安牌だしな』『ヒロちゃんがその気になれば、ゾンビを回復させるついでにヒロゾンビ化させれば世界救済RTAは可能です』『救済の時間が遅いのは人間側が怖がるからか……うーん、控えめに言っただけ』『すこ』

「配信のコメントとか見ると、わりとみんな肯定してくれるみたい」「笑顔がかわいいヒロちゃんであった』『ヒロちゃんの眷属になりたいのであった』『あの、もしかしてですけど、キスで感染というのもありですか？』『おまえ天才かよ。いますぐヒロちゃんに会いにいくぞ』『おまえはヒロゾンビになったオレが感染させてやるよ』『アッー！』

もうなにがなんだか……。

でも、少しだけ気持ちが悪くなったよ。
もちろん、ヒロ友だからっていう鼻目はあるかもしれないけどさ。

みんなもそれぞれに心があって、いろいろ考えた結果、肯定してくれてるんだと信じていることができるから。みんながボクのことを信じてくれるから、ボクも信じていることができる。

「くだらないな」久我さんは履き捨てるように言う。「そいつらは全員ゾンビだ」

「へえ……」

『ひっ』『ひえっ!』『ヒロちゃん怒ってる』『神力マシマシな格好でそれは怖い』『ヤンデレになっちゃおう?』『ヤンデレは後輩ちゃんの特権だろいい加減にしろ』『でもオレらもゾンビ扱いか。もう何言っても伝わらんだろうな』

葛井町長がクツクツと笑っている。

まるで黒幕の笑いだ。

「それは君の考えなのかな?」

「当たり前だ」

「いや、よく伝わってないようだからもう一度言い直そう。君のその考え方は君の所属している組織の考え方なのか、それとも君自身の個人的主張なのかな?」

「組織とオレの主張は同じだ」

「なるほど、しかしそうだとすれば、自衛隊の半分はなぜこちらに攻撃してこないんでしょうね。あなたはここに来てから一度も外部に連絡をとらなかつたんですか?」

「お前達を一齐に殺すための機会をうかがっているだけだ」

「残りの半分の自衛隊に牽制されているからこちらに来れないんでしょう。内戦状態になったらもはやどうしようもありませんからね」「彼らは小山内に騙されてるだけだ!」

小山内?

その名前は聞いたことがないけど、知らないところでボクを助けてくれてるらしい。

「しかし、おかしいですねえ。君の主張だと、そもそもゾンビの味方をするのはゾンビ。だったら、5万人の対立している自衛隊のみなさんもゾンビということになってしまいます」

「……いずれは打倒するだろうさ」

「ところで、あなたは匿名掲示板のスレッドとかを覗いたことはありませんか？」

「あ？」

「その様子だとなさそうですね。こんなご時勢だからこそ、ヒロちゃんのスレッドはたくさん立っているんですがね、その中でも【人間か】ヒロちゃんを守りたい。【小山内か】というスレッドがあるんですよ。ご存知ありません？」

へえ。そんなスレッドがあるんだ。

ボク関連のスレッドだけでもめっちゃくちゃありすぎて正直全部は目を通せてない。

小山内さんと人間さん。ふうむ？ よくわからん。

「このスレッドは自衛隊内の心情がよく表れてると思います。まあ簡単に言えば自衛隊という組織をひとりの人間と見立てれば、ひどい混乱状態で一步も動けないといった様子です。人間さんという方と小山内さんという方が事実上組織のトップに立ってるみたいですから、あなたが先ほど小山内さんに騙されたということを言っていたということは、あなたは人間さんの命令でここに来たということになりますね」

「だからどうした」

「いやね。あなたはわりと人間隊長の側近に近い方だったのかなと思いまして……」

そうなるのかな？

よくわからないけど。

『ヒロちゃん話についていける？』『そんなことよりスマブラやろうぜ』『わが国が誇る最強の落ちゲーテトリスをやろう』『ヒロちゃんとテトリスしたい』『おまえらが変なこと言うからますますヒロちゃんが困惑してるだろ！』

「困惑というか……こっさり教えてくれると助かります」

小声でみんなに意見を求める小心者なボクです。

『自衛隊は混乱中で大部隊は動かさせない』『命令系統がぐっちゃぐちや』『シビリアンコントロールわけわかんない』『人間は総理大臣からの命令らしいが、その総理死んだしな』『え、死んだの？ 知らなかった』『内閣総理大臣臨時代理がいま代わりぞ』『人間は命令の前内閣総理大臣の御遺志をみたいなこと言ってる』『ともかく、本丸に潜入している時点でエリートってこった』

うーん。ボクって暗殺されそうになつてたのかな。

それにしたつて、変な感じだけど……。

「あの一」ボクはおずおずと拳手をする。「だったら、Kさんってボクを暗殺しようとしてたんだよね。なんでカエレとか生ぬるい感じなの？」

「はっ。オマエは本当に何もわかってないガキだな。あれはオレがやったんじゃない。この町役場の中にもオマエに思考感染されず、オマエを排除したいやつらはたくさんいるんだよ！」

え？

そうなの？

『ヒロちゃんショック』『ウソかもしれんぞ。かまうな』『どうせ最後のあがきだろ』『でも行動からすると確かにカエレは変だよ』『Kの任務はおそらく監視だろうからな。本当に帰っちゃったら困るといっか』『だったら、やっぱり犯人は別じゃねえか』

あ……そうなの？

なんだか久我さんが全部やったんだと思って、ボクが嫌われているのは久我さんだけだと思って安心してたんだけど、それは誤りだったみたい。

じんわりと胃のあたりが冷たくなつてくる気がする。

ボクは誰かに嫌われている。知らないところで誰かに。

ハザードレベル95

衝撃の事実。

カエレの文字とゾンビテロは別の犯人だった！

ボクとしては胃の裏側がメンソールで満たされたみたいな心胆寒からしめる事実だったのだけれども、周りを見てみると、ピンクちゃんも命ちゃんもまったく動揺がみられない。

町長はボクが貸したお狐様のお面で顔見えない。

でも動揺している気配はない。

あれ？ みんな驚いてない？

むしろそのことが驚きなんですけど!?

「大丈夫だぞ。そっちの犯人もわかってる」

ピンクちゃんの力強い言葉。

え、そうなの？ 知らなかったんだけど。

「先輩が動揺しないように黙ってるつもりでした」

命ちゃんも？

「まあ、いろいろあるんだよねえ」

町長も？

ボクだけ知らなかった系？

もしかしてはぶられてる？

『ヒロちゃんだけ知らなかった系？』『ヒロちゃんのきよとん顔助かる』『どういうことだ？』『なんらかの忬度があったんじゃないか。日本お得意の』『ピンクの大丈夫は大丈夫じゃない説』『毒ピンを信じろ！』『後輩ちゃんを信じろ』『謎の町長を信じ……なくていいな』

ま……まあいいや。

ボクだけ知らなくてもそれはボクのためを思つてとかだろうし、命ちゃんとピンクちゃんはボクよりずっと頭がよいんだから、ボクはただみんなを信じていればいい。

久我さんはあいかわらず憎悪まるだしの表情。

言つてることもむちやくちやなように思えるし、正直捕まつても自分が絶対的に正しい人なんだろうな。こうなってくると肅々と対処

するしかないという気がする。

感情論のスキ・キライじや何も進まない。

「とりあえず、君に聞きたいのは組織の考え方かな」

葛井町長がなごやかなムードで語りかける。

でも隣にいてだけで感じる威圧感がすさまじい。

この人ほんとにニートだったのかな。

「ゾンビを殺せ。それだけだ」

「しかし、実際にはゾンビを……、つまりヒロちゃんを害するというのではなく、町のみんなをゾンビにするという指令だったわけだ。これはどういうことなのかな？」

『監視レベルだったのかねえ』『普通に考えてヒロちゃんに勝てるとは思えんからな』『むしろ排除しちゃったらマズイって考えもあるんじゃないね』『ヒロちゃんがいなくなったあとにゾンビハザードが続いたらもうどうしようもなくなるしな』『そんな香具師おらんやろ』『あ、昭和な人ハツケソｗｗｗ』『おっさんで何が悪い』『みんな仲良く』

久我さんは黙秘する構えのようだ。

葛井町長は気にするふうもなく続けた。

「上からの指令というのは、ヒロちゃんを貶めることにあったんじゃないかな。ヒロちゃんが人間にとつての敵であるということ的印象づけたかつたんだろう。まあ実際にはヒロちゃんは何の対価もなく癒してくれたわけだけどね。敵どころか天使という見方が強まったようだよ」

「おまえたちがチョロすぎるだけだろ」

「チョロいというのは心外だねえ。そもそも僕たちはゾンビから逃れてようやく安息の地を見つけたようなものなんだよ。ヒロちゃんはみんなの希望にもなっているし、みんなのためにがんばると言ってくれたわけだ。君もいつしよにいたからわかっているだろう。そんなヒロちゃんを信じないなんてことはありえないなあ」

「自分かわいさだけだろうが！」

「その何が悪いのかな？ 君達のような侵入者がいなければ、この町はなごやかなムードで着実に人類救済を進められたんだよね。わ

かっているのかな。君たちは僕らにとってはゾンビと同じだ」

「ふぎけるな!!」

激昂だった。久我さんはパイプ椅子が机側に傾くぐらいに身体をこちら側にやって、血走った目で町長をにらみつけている。

「怒るのも筋違いだよ。こちらはいろんな利害を調整しながらやっているんだよ。本当は仕事したくないんだけどねえ」

「おせえんだよー!」

その怒号はいままでで一番取り繕うところがなく本心のように思えた。

遅い――。

それはボクとしてもわかっている。

ボクがゾンビを操る能力に気づいたのは目覚めてすぐの時だった。そのあとにしたことは？

とりあえずコンビニにいたり、学校にいたり、ホームセンターにいたり、成り行きにまかせてグダグダと進行しただけだ。

人間を信じるのが怖いというただそれだけの理由で、ボクはいたずらに時間を経過させた。

自己保存は人間の本性だから、それはそれでしょうがなかったんだとボクは言いたいんだけど、周りの人間からしてみたら、遅いとなってもしかたない。

だって、ここにいたるまでに関東ではゾンビとの大決戦があったらしいし――。つまり、かなりの数のゾンビが駆逐されてしまった。

要するにヒトが死んだということだ。

ボクが何もしなかったことと、因果関係がないとはいえない。

淡くて暗い蛍光灯しかない奥まった部屋に、黒いタールのような重苦しい沈黙が降りた。

「ボクが悪かったかも」

ぽつりと呟く。

久我さんが――、みんながボクを見る。

「いろいろフラフラ考えてて、遅くなったかも……ごめんなさい」

『ヒロちゃんは悪くないだろ……』『ちよつと遅かったんちゃうん?』

『遅れてきたヒーローに価値はない』『小学生やで。無理言うなや』『ヒロちゃんか覚醒したのは彗星が降った日って言ってたしな。遅いといえど遅い』『愚かな人類が悪いのです。緋色様は悪くありません』『ちよつとくらい遅れたって誤差だよ誤差』『弥勒様だって56億7千万年くらい遅れて来るからヘーキヘーキ』『太陽系滅びてるく』』

ヒロ友にもいろんな考えがあるらしい。

「そうやって——、謝ればなんとかなると思ってるんだろう。ガキの考えそうなことだ。感情的優位性を作り出し、議論に打ち勝とうとする」

「勝とうとは思ってないよ。ただ、もう少しやりようはあったかなって」

「やりようだと？ その上から目線がきにくわねえんだよ！ おまえのやりようってやつで、どれだけの人間が死んだと思ってる」

久我さんは怒りのあまりに全身が震えている。

『感情的優位性とかいっても議論にならない』『オレもママンの頭がち割ったけどヒロちゃん悪くねえよ……』『ヒロちゃんが最初から計画的に人類を滅ぼすつもりなら配信してねえって！』『だべなー。配信せずにひきこもってりや勝ち確だしな』

配信せずに引きこもっていれば——勝ち確。

なにをもつて勝ちとするかはあるけれど、ボクと命ちゃんと雄大と……あるいはボクと知り合った何人かの仲が良くなった人たちだけ生き残ることができればそれでいいなんて考え方もあると思う。

仮にゾンビが全滅しても、ヒロゾンビをちよつとずつ増やすことは可能だろうし、ヒロゾンビと人間の違いは見た目的には存在しない。ただ再生能力が強いだけ。

ゾンビが消え去ったあとでこっさり増やしていくなんてことも可能だったろうし、あるいはヒロゾンビなんて増やさなくても楽しく配信できたかもしれない。

人間が滅びた場合は言うまでもない。ボクたちは生き残る。

でもボクは選んだ。人類は生存すべきだし——、その人類の中にはボクのが嫌いだという人も当然に含まれるべきだ。

すごく、怖いけど。

「ボクはボクのできる限りににおいて、人が死なないように、文化が復興するように努力するよ」

「信じられるかよ」

「信じてとはいわないよ。でも、ボクはやるって決めたんだ」

『ヒロちゃんがイケメン』『なんだよかわいくてイケメンとか最高かよ』『今週の切り抜き決定』『素敵抱いて』『ピンクちゃん補佐してあげて』『Kはこれだけ言っても伝わらんやろうな』『まあたぶん親族家族がゾンビに殺されたとかゾンビになったとかやろ』『気持ちはわからんでもないけどなあ』

再び沈黙が落ちる。

これ以上は久我さんも口を開きそうにない。

命ちゃんもピンクちゃんも沈黙のまま。

お開きかな。ボクはそつと町長に視線をやる。

謎の組織、ジユデツカの指示だったかどうかはわからないし、久我さんの動機もわからないままだったけど、それはそれでいいんだ。

ボクもまた嫌われるだけの理由があるって知れただけでも収穫。

それでも——、やるんだって決めることができたのが収穫。

それでいいよね？

そんな弛緩した空気が流れた時だった。

『待たせたな』

コメントの中で閃光のように放たれた一言。

他のコメントが次々に名前をあげる本当のヒーローの名前。

モーセのように、コメントが、ヒロ友の列が割れる。割れる。

そんなイメージ。

ボクもよく知ってる人。

F P Sの神様とまで呼ばれた人物。

幼女先輩だった！

☆
||

「あ〜〜。幼女先輩。お久しぶりです！」

『ヒロちゃん超笑顔』『はい。かわいい』『小学生にガチ恋』『お兄さんそろそろムシヨは寒いよ』『生きてたんか我え』『幼女先輩がきてくれただけで安心感が違うな』『勝ったな風呂入ってこよう』『おじいちゃん水がもつたいないからお風呂は週一って決めたでしょ』『小山内隊長なにしてんすか…』『自衛隊の仕事を放り出して配信に参加する幼女先輩www』『あとで始末書もんだろ』『さて、この配信に参加するのが自衛隊の作戦行動じゃないか?』『小学生の配信に参加するのが作戦行動で。草』

ん。小山内？

なんか聞いたような。

あ…。

久我さんと目が合う。口の中で小さく「小山内」と呟いている。

その憎悪のこもった視線を見ていると思いついた。

そう、入間さんと小山内さん。

自衛隊を真つ二つに割った二人の人物のひとり。

入間さんというのが元々の自衛隊の長だったみたいだから、小山内さんのほうが半身をもぎとっていったって感じかな。

つまり、幼女先輩イコール小山内さんってこと？

自衛隊が二つに割れて釘づけになることで大規模作戦はとれなくなっただけで済んだ。

もし、幼女先輩が自衛隊を割ってくれなかったら、電気が落ちるだけじゃすまなかったのかもしれない。

じんわりと胸があつたかくなる。

「幼女先輩がボクを守ってくれてたんですか？」

『子どもを守るのは大人の使命だからね』

とうんく。

ああ、かつこいい！ かつこいい！

幼女先輩すぐくカツコいい。すぐく大人のひとって感じがする。

お父さんって感じがする。

「えへっ」

『まだ可愛さ係数が上がるだ』『ボンッ(スカウターが壊れた音)』『ヒロちゃんって大人の男の人けっこう好きだよね』『かわいい女の子も好きだぞ』『つまり人間が好きなた使』『幼女先輩かつこいいからな。名前以外は』『なんで幼女なんだろうな』『そりや……ロリコ……』『仕事かたてこんで遅れてしまったよ。申し訳ない。音声チャットでお邪魔していいかな。そこにいるK君とも話したいんでね』

「もちろんです！　お願い後輩ちゃん！」

地味に音声チャットは使ってなかったからね。機械に詳しい命ちゃんに丸投げするのだ。

「先輩はやっぱりチョコロイン……」

「ん。なにか言った？」

「なんでもないです……」

命ちゃんがすぐに場を整えてくれました。

そしてパソコンを通じて、幼女先輩の声は想像してたとおりの大人のひとつって感じだった。

あー♪

「久しぶりだね。K君？　元気にしてたかな」

「小山内……なにしにきた」

「べつに、小学生に捕まった君のことを哀れんだりするために来たわけじゃない。入間隊長殿はどうしたのかなあとと思ってね」

「オレが答えるとも思ったのか」

「隊長殿は最近お姿が見えんからなあ。現首相の命令にも耳を貸さない様子だし」

「国が崩壊しているのに現首相もクソもない。国民が臨時の首相をいつ認めた？　ゾンビだらけで国会の召集もないんだぞ」

「国の制度でそうなるんだけどな……。まあ、君と争ってても時間の無駄だし、単刀直入に聞こう。ジュデツカは何を考えている？」

「知るかよ」

「末端の君じゃ本当に知らないかもしれないな」

『やっぱ黒幕はジュデツカじゃねえか』『自衛隊の半分を掌握している

時点で人間だけの力じゃないだろうしな』しかし、日米共同だろ。なんで日本が言うこと聞くんや。おかしいやろ』『まあアメリカの支配が思ったよりも強かったってことで』『日本の政界もぐっちゃぐちゃ』『そんなことより幼女先輩の声でASMRしてるヒロちゃん』『妊娠ボイスだしな』『ヒロちゃんが孕んじやう?』『セクハラはやめような』
だってかっこいいんだもん。
しょうがなくなる?

「ヒロちゃん」

幼女先輩に呼ばれ、ぴよんと跳ねるボク。

「はい!」

「ごめんね。Kは元々わたしの部下だったんだ。だからこいつにいろいろ言われて気分を害したのなら許してほしい」

「はい! 大丈夫です!」

『素直』『小学生』『目の中ハートになってない?』『メスの顔してる』『ちよろすぎw』『完全に幼女先輩のファンと化してるな』『やっぱりヒロちゃんも女の子やったんやなって』

「ボクはフツーに人として幼女先輩を尊敬してるだけです!」

『ほんとお?』『うそおん』『幼女先輩。娘さんをください』『やらんぞ』『おまえに聞いてねえ』『Kのことほったらかしで草』『しかし、Kって本当に現場をかき回すだけのクソ雑魚やったんやな』『そこに住んでる人にとっては恐怖でしかないで。ゾンビテロは』『ヒロちゃんがいだからよかったただけだもん。普通なら死ぞ』『それな』

幼女先輩は溜息をこぼし続けた。

「人間とジュデツカがつながってるのは確かなんだ。しかし、具体的に何をどうしたいのかが見えてこない。ジュデツカと自衛隊の関係も複雑でね。誰が構成員なのか、どれくらい根を張ってるのかもよくわからないんだ」

「まるで人間の脳みそに寄生する虫みたいだな」とピンクちゃん。

「そうかもしれないね。ジュデツカの恐ろしいところは人の心を行動心理学的に操るところにある。例えばスーパーで大根を買おうか人参を買おうか迷ったときにジュデツカは多数派がどちらを選ぶかを

そそのかすことができる。そういう組織なんだ。五万人の分かたれた自衛隊も本意じゃないやつはいるだろうし、わたしだって味方と殺し合いはしたくない。だから、相手さんの意図が知りたかったんだよ」

幼女先輩も苦労人みたい。

しかし、大根か人参かを選ばせるとか、すごいのかすごくないのかよくわかんないな。

社会をデザインして、人のこころを操るといふことなんだろうけど。

「お前達がオレたちに従えば争いは起こらない」

久我さんが憎しみをこめた声をあげた。

「それはできない相談だな。わたしは大人としてヒロちゃんのような子どもを守る義務がある」

「そいつは人間じゃない。ゾンビだろうが」

「ヒロちゃんは人間だ。人を想う心がある」

「違う！ そいつは意図的にゾンビハザードを放置した。自分本位な化け物だ」

久我さんの憎悪が膨れ上がる。

場に満ちる風船が破裂しそうな緊張感。

ボクは、わりと冷静だった。

久我さんには嫌われているのは確かだけど、幼女先輩が弁護してくれるから。

幼女先輩はまた深く溜息をついた。

「君が妹さんとご家族を撃たなければならなかったのは悲劇であると思う。しかし、この子は関係ないだろう。自分の与えられた立場で精一杯がんばっているじゃないか。どうしてそれがわからない」

「そいつはウソをついている。最初はただの配信者。その次は超能力少女。今度はヒロゾンビ。なんだそりゃ。やっぱりゾンビじゃないか。こいつは都合のいいタイミングで少しずつ情報を小出しにして人間を内心ではあざ笑ってるんだよ。オマエのほうこそどうしてそれがわからない！」

ボクもその都度その都度で最善は選んでるつもり。
でも、確かにそれが不誠実な態度になった面はあるかもしれない。
ボクは視線を落とす。

他のみんながどんな考えなのか怖かったけど――。

『まあKの言うことも一理あるかもしれない』『ヒロちゃんもわりとウソはつくしな』『バレバレだけだなW』『バレバレっていうか空気感で伝わるというか』『Kは配信を直接的には見てないんだろう。オレたちはわかるよな』『わかる。ヒロちゃんが人間を好きだっていうのはわかるよ』『だから顔をあげて』

うん。

ボクはヒロ友たちのコメントに勇気をもらって顔をあげた。

★
||

彼女は感受性のカタマリだった。

あらゆる音、光、情報を、0と1のコードとして純化し、時間と空間を隔絶して吟味する。

凡人を超越する天才的思考。あるいは悪魔的思考。

黒いリノリウムの廊下を歩き、わたしは彼女の部屋の前に立つ。

そしてノックする。

心臓が恐ろしく跳ねる。

『オジサマ。イラシタノ』

機械じみた恐ろしく調律された少女の声に、わたしはいますぐにでも踵を返したかった。

いや、屈服し頭を地面にすりつけて許しを請いたかった。

久我が思ったよりも使えなかった。

戦闘力だけで見れば小山内と同程度。ゾンビハザードのような未曾有の災害が起こったときに突然変異のように表れる異常個体だと思っただけだが、ただの凡人だったらしい。対人戦闘がほんのちよつとだけ得意な一般人。

本当の異常個体とは、あの小さな白いゾンビと――。

彼女くらいのものだ。

気づくと白髪が混じる執事が傍らに立っており、わたしに声をかけた。

「入間様。コートはこちらにお預けください」

「ああ」

部屋への扉を執事に開けてもらう。

彼女はここにいて――、しかしここにはいない。

そんな奇妙な存在感が彼女にはある。

わたしがぼんやりと立っていると、

『ドウシタノデスカ?』

と、彼女はわずかに視線を流した。

どの人種かもわからない奇妙なほど平均的な配列をした顔。

まるでAIが作ったかのようにバランスがとれている。

鴉の黒翼のような髪の毛は床下に届きそうなくらい長い。

そして――、瞳。

ブラックホールのように見るものを吸いこむような。

人の罪過も憎悪も怨嗟も憤怒も諦念もすべて喰らい尽くすような

黒の瞳。

要するに何のことはない日本人的な配色なのだが、すべては彼女の美しさがベールのように覆っていて、見る者を幻惑させるのである。

わずか齢13歳。

彼女こそがジュデツカの最高議長。

誰が言い出したのか彼女の名前の由来から、こう呼ぶ者もいる。

イスカリオテのジュデイ、と。

ハザードレベル96

ようやく開放感。

久我さんへの取調べもおしまい。配信もいったん終了。

終わり際に幼女先輩と電話番号の交換しちやっただよ。

いざというときは駆けつけるってすごい力強い言葉もいただいたし、ボクはうれしさのあまりに小躍りしちやっただよ。配信の切り抜き動画で『MPを吸い取られそうな踊りを踊るヒロちゃん』とかいうタイトルをつけられちやっただよ、風評被害だよ！

でもまあ――。

魚の骨が喉の奥に刺さったかのような気持ち悪さもとれたような。

あるいは花粉症とかで鼻が詰まっていたときに、不意に空気が通ったような爽快感を覚えたのは事実だ。いや、実際はすべてが明らかになかったわけじゃないから、そんなに小学生並の安易さで安心しちやいけないんだろうけど、ひとまず当面の問題は解決したといっている。町役場内のトロイの木馬とウイルスはいずれも隔離されて、町のみんなも少しは安心できたかな。

久我さんはとりあえず拘束することになりました。

ゾンビにはしなかったよ。高度な政治的配慮ってやつだ。実際にジュテッカがどういう意図なのかさっぱり明らかにならなかったんで、必要以上に事を荒立てると逆に危ないという意見が強かったから。

それに――。

ヒイロゾンビのこともある。

今のところヒイロゾンビに対する意見というのはなんともいえない感じだ。いくつかのスレッドで既にピンクちゃんのデータを洗い出ししているみたいだけど、専門的すぎてよくわからない。

ゾンビを一種のロボットのように考えて、人間とは似て非なる存在だという見解もあった。ゲーデルの不完全性定理からチューリングテスト。それから、一種の神託装置として起動する器官なき身体。うーむ。ぜんぜんわからん。この発想ってたぶんボクの持つ超能力

から来ているんだと思う。どうして現象をねじまげることができ
かの推察を一種の演算による現実改変だと考えている理論。その第
一人者がピンクちゃんだったりするわけで。

優秀で気が利く命ちゃんがいくつかの小論を英語よわよわなボク
のために翻訳してくれている。

だけど、結論はいつもひとつ。

ヒイロゾンビへの印象はボクへの印象にひきづられるとみていい
だろう。

ボクは基本的に優しい態度をとったほうがいいと思う。

自分自身を守るためにも。それに何人かのヒイロゾンビを守るた
めにも。

そして会議室で今日の配信をマツタリとふりかえっている。

マナさんが作ってくれた手作りのプリンを食べながら、黄色い暴力
の前にボクは早くも負けそうになっていた。

「ご主人様のトロ顔……使える」

やっぱりマナさんって料理上手だね。少ない材料で的確にボクの
ツボを押して来る。これでロリコンでなければ完璧なんだけど、人の
性癖ばかりはどうしようもないからね。献血ポスターで後輩キャラ
から煽られるのに性欲を持って余す人もいるかもしれないし、小さな女
の子が好きな女の人がいってもおかしくない。

そーいやマナさんみたいなのって、自分が小学生女児だったときに
は、自分に興奮してたりするのかな。

哲学——か。

ヒイロゾンビだらけの会議室で、命ちゃんもボクもピンクちゃんも
黙々とスプーンを進めている。おいしいと、基本無言になる説がまず
まず補強されて、マナさんは主にボクとピンクちゃんを交互に生暖か
い目で見ている感じだ。

まあ、見るくらいはいいよ。このプリンに免じて許してあげる。

そんなふうな傲慢にも思っていると、ニヤニヤ笑ってくるマナさん
でした。

数分後に食べ終わったあと、ボクはピンクちゃんに問いかけた。

主題はいちおう反省会だからね。

「ねえ。ピンクちゃん」

「ん？」

おつきめなキノコみたいな帽子にピンク色をした髪の毛。

そしてボクを見上げてくるまんまるの金色おめめ。

この子もヒロゾンビなんだよなあ。

なんともいえない罪悪感というか、残念感もあるような。

ボクは勝手にピンクちゃんが人類サイドに立ってくれるものだと信じていたから。

まさかボクと混ざっちゃうとは思わなかったから。

ピンクちゃんと距離が近づいたのはうれしくもあり、でもピンクちゃんが他者として好きだといってくれたのが、よくわからなくなっちゃったのは残念でもある。

「いまさらだけど、ピンクちゃんってヒロゾンビになってよかったの？」

「なにが問題なのかわからないな」

「えーっと、ほら、ヒロゾンビって異種族だよな。厳密には人類じゃなくなってるんじゃないかな。例えば――、他の国とかはよくわからないけど、入国審査のときに手の平に針かなんかを刺してさ、再生力が高かったらヒロゾンビ。そうじゃなかったら人間みたいに区別されるかもしれないでしょ」

「差別される可能性か。あるだろうな」

わざわざ言い直すピンクちゃん。

やっぱり頭がいいな。

ふるふるとおつきな頭を振る。

「あるだろうが、どうせそんなものは多数決の問題に過ぎないぞ」

「そうなの？」

「そうだぞ。ヒロゾンビが増殖すれば、何もいえなくなるやつばかりだぞ」

「もしも人類側に対して、譲歩しようとするなら、ヒロゾンビはあんまり増えないほうがいいんじゃないかな」

「ヒロちゃんはヒーロゾンビを増やさないほうがいいと思ってるのか？」

「ヒーロゾンビになってもいいって人ならべつにいいと思うんだけど、こうなんというか、なし崩しはヤバイような気がするとか。そもそもゾンビもどういう存在なのかわかってないから、なにをどうやっても忌避感はあるんじゃないかな。天から降り注いだコンピュータウイルスなんだって説もあるみたいだし」

「それは自分の制御をはずれるのが怖いということか？」

「そうかも。うん。そうだよ」

「後輩ちゃんが言ってたように、ヒロちゃんが独占するのはかえって危ない面もあると思うぞ。ゾンビに襲われなくなるお手軽な方法がひとつ増えたっただけで、人類側はリスクマネジメントするから好き勝手やらせとけばいい。ヒロちゃんからしかヒーロゾンビになれないという状況より、誰か適当なヒーロゾンビから血を分けてもらえばヒーロゾンビになれるという状況のほうがこちらとしてはリスクが少ない」

「まあそりやそうだろうけど、ヒーロゾンビは自由意志があるんだから——、例えば好き勝手に増えるかもしれないよね」

ピンクちゃんみたいな例もでてくるかもしれない。

ボクにカプって噛みついてきたら、超能力をつかって対処できるかもしれないけど、まだヒーロゾンビになりたてのピンクちゃん自身は、幼女だしそんなに抵抗できないっていうか。

そうだよ。たとえばピンクちゃんが浚われたらどうすればいいんだ。

「自由意志があるなら、なにかあってもそいつの責任だぞ」

「でもいわば、ボクが最強のコンピュータウイルスでもなんでもいいけど、それを持っているなら、ボクが管理者だよ。ボクの責任もあるような気がするんだけど」

「管理者権限を持ってない人間が他人のパソコンを好き勝手使ってウイルスを拡散させたりすることもあるから、べつにヒロちゃんがアドミニストレーターだからといって全部の責任を負う必要はないぞ」

「そうかなあ」

「そうだぞ。不思議な力を持つてるからって——、人類を救える力があるからって、イエス様みたいに人類を救わなきゃいけないなんて思う必要はないぞ。むしろ、イエス様自身はみんなといつしよに配信を楽しんでほしいって思っていたのかもかもしれないしな。ピンクはヒロちゃんが配信を純粹に楽しんでくれたら言うことはないぞ！」

ピンクちゃんがヒロゾンビになったのは、ボクの責任感を軽くするためだ。

でも、ボクはヒロゾンビの位置をこんなにも強く把握できる。それはゾンビの比じゃない。

ボクの管理者権限は強力だ。

たとえば——、しないし言わないけど。

ボクはピンクちゃんを瞬時に自分の意に沿わすこともできるだろう。

どこまで把握できるかわからないけど、ボクは今のところヒロゾンビになった人がどこにいるのか把握できる。例えばゾンビ荘のみんながどこにいるのかわかっちゃう。

人間、ゾンビ、ヒロゾンビの順で、ボクはなんとなく情報の中継地点になつてるような感じなんだよなあ。ボクからは他人の考えとかは読まないように、たぶん無意識にしているんだろうけど、わりとボクの脳内妄想の類は、緩やかに伝わってる感じがするんだよね。そのうち、ファミキチくささいごっこができるかもしれない。

「こいつ直接脳内に♪」

うん。manaさんはもう規格外だよ。

そしてもう一つ。

ヒロウイルスの情報網から必然的にわかっちゃうこともある。

「ねえ。ピンクちゃん。ヒロゾンビを増やしたりした？」

「ママとおやすみのキスしたら、ヒロゾンビが増えた気がする……」

ほらあ。やっぱり！

なんか変な感じがしたんだよ。

いつのまにやら佐賀からだいぶん西のほうの、具体的には長崎の五

島列島あたりにヒイロゾンビの気配がいきなり出現するんだもん。ピンクちゃんとはぼ同座標でひとり増えてて、マジかと思っただけど、もうどうしようもないし、それがピンクちゃんとその人の意思なんだったら否定はしないけど。

でも、人間側がどう考えるかわからないしな。

それが怖いんだ。

「当座はヒイロゾンビが各国にひとり派遣されるようなカタチにすれば、人類救済としては十分なんじゃないか？ 誰か覚悟のあるやつがヒイロゾンビになつて、国はそいつを保護すればいい。救国の英雄になるんだから悪いようにはしないだろう」

「自分もなりたいてって人がでてくるかもしれない。いつのまにか誰がヒイロゾンビなのかわからなくなつて、国は事態を重く見てだれかれかまわずヒイロゾンビを排除したりとか……」

「まあそうなつたらそうなつたで、ヒロちゃんはこの国内での立ち位置を確立していれば問題ないんじゃないか。ヒイロゾンビを排除するような国がこの先生きのこれるとも思えないしな。ちなみに——ホミニス内にもゾンビになつた職員が何人かいたんで、ピンクが治しておいたぞ。ものすごい勢いでよしよされたんで、ピンクはうれしかったぞ」

なんだこのカワイイ生命体。

ゾンビからの復帰は問題がないように思う。

でも外部からはヒイロゾンビもゾンビから戻つた人間もなんらかの交じりものように捉えられる可能性はある。

ウイルスに感染し発症した一度ゾンビになつた人間は、ボクたちがウイルスを排除したつて主張しても、そうは思わない人がいるかもしれない。

でもそんなことを言い出したら、ゾンビになつた人間は一人残らず殺さないといけなくなるしな。人類の大多数は——実際に言葉を交わせる以上はゾンビから戻つた人間は人間であると思うんじゃないだろうか。

「つて——、ピンクちゃんつてなんかヒイロゾンビの中でも強いよね。

ゾンビからの回復って今のところピンクちゃんがボク以外で始めてだし」

「ん……ピンクも治したいと思ったらできた感じだぞ。それに……ほら」

その場で椅子から立ち上がり、ふわーんと月の表面を跳躍する宇宙飛行士みたいにくっくりと空を舞うピンクちゃん。まだ重力には負けているけど、すこし抗ってる感じ。

「重力制御しているー」

驚きでいっぱいです。

「ピンクちゃんもご主人様に近づいてまいりましたねえ。これは命ちゃんもがんばらないといけませんね」

マナさんがなんかよくわからない煽りをいれる。

命ちゃんはクールないつもとかわからない無表情顔だったけど、お兄ちゃんとしては見過ごせない。なにげないふうを装った髪の毛のサイドテールをいじいじする動作。

ひそかに焦っているときの行動パターンだ。

「わ、わたしもそれぐらいできますし」

バレバレだった。

命ちゃんもけっこうかわいいところがあるからな。

「あのさあ……、命ちゃんって前にドローンとかと遭遇したときに、どうやったらずけるのかわからないって言ってたよね？」

「いいましたけど。あのときは常識という厚い壁がありました。わたしも浮いてみせますー！」

命ちゃんも椅子から立ち上がり、鳥のように羽ばたいて見せる。本当に鳥のようだ。セピア色の動画とかで記録に残っている。ライト兄弟以前の飛行機みたいに。

手のひらをはためかせている。

が……ダメ。

経験値が足りないのか、それともいまだに常識という名の壁が厚いのか。

／＼な顔つきで必死になっているんだけど、ダメでした。

「哀れな後輩を笑ってやってください……」

「あ、あの……なんとというか……惜しかったよ。ナイスファイト！」

「むしろ、フオローされたほうが心にきます」

「ピンクとしてはなぜできないのかのほうかわからない。その……すまない。力になれそうにない。後輩ちゃんができるようになるのをピンクは願うものだ」

ピンクちゃんの言葉にとどめをさされて、命ちゃんはガツクリしてました。

でもお兄ちゃんとしては、むしろいいことだと思ったりもするんだよな。

命ちゃんもピンクちゃんも天才だし、似たようなタイプだといえる。

他人がなぜできないのかわからないタイプなんだろう。

でも、命ちゃんにとっては初めての挫折だったのかもしれない。

挫折は人を大きくするよ。ボクはむしろちっちゃくなっちゃったけど。

「わたしも練習します。ピンクさん教えてください！」

「いいぞ。まずは気球の気持ちになってみるんだ。気球になれば後輩ちゃん」

「はい、わかりました」

ヒイロゾンビどうしって結構仲がいいよね。

ヒイロゾンビだからかなあ。

「ご主人様のことが好きな人どうしですからね。いわば同志なのですよ」

そんなものなのかな。

「そんなものなのです」

いつものようにマナさんにすんなり説得されてしまうボクでした。

☆
＝

「で、それはいいんだけどさ。そろそろ教えてよ」

ボクが聞いたのは当然『カエレ』の文字の犯人についてだ。

配信時にはいろいろと明らかにするとマズイのかなって思って聞くのを我慢していたけれど、ボクだって真相が知りたい。

場合によっては、次回配信のときにヒロ友のみんなに説明しないといけないかもしれないし。

「そうだな。ヒロちゃんも知ってたほうがいいかもしれないな」

ピンクちゃんが命ちゃんへのレクチャーをいったん止めて、ボクのほうに振りむいた。

「どうやらピンクちゃんが教えてくれるようだ。」

「ピンクはこの町役場にいる人間全員に事情聴取をした。そのときから違和感があったのが『カエレ』という文字と、ゾンビテロとの関係だ。『カエレ』が文字通りの意味で達成されてしまったら、ゾンビテロは起こせないしな。もちろん、エスカレートしてということも考えたのだが」

そのあたりはボクも考えてました。

そもそも発想としては誰が犯人か——フーダニットではなく。

どうして犯行に及んだのか——ホワイダニットを重視していたから。

動機からすると、なんか矛盾しているように思えたし、なんか変だなあと思ってたんだよね。

ピンクちゃんが言うように、最初は小さな犯罪で、気が大きくなってやりすぎちゃったのかなとも思ってたんだけど。

「実を言くと、いろんな証言を聞いてるうちに、ひとりだけ妙な証言があったんだ」

「妙な証言？」

「杵島未宇……」

ピンクはボクに言い聞かせるようにその名を告げた。

未宇ちゃん。

耳が聞こえない十歳くらいの女の子。

いまではおばあさんの犬のお世話をぼっちさんといっしょにしてくれているらしい。

「その子がまさか犯人？」

「あ、いや違う。そもそもあのカエレの文字は未宇の身長じゃ届かないぞ。脚立は外になかったし、いくらなんでも持ち出そうとしたらバレル」

「そりやそうか。未宇ちゃんが何か言ってたの？」

正確には手話か筆談だろうけど。

耳が聞こえない未宇ちゃんはすごくおとなしい子で、あまり口を開かない。

発声ができないんじゃないやなくて、自分の声が聞こえないから、変なふうに聞こえるかもしれないと想像してあまり言わないんだって。

前にぼっちさんも言ってたけど、世界が隔絶しているようなそんな感覚があるんだろうと思う。

でもそれは、必ずしも寂しい世界じゃなくて、雨宿りをしているような暖かなシールドなんだ。

「未宇はおそらく外に出ている可能性が高かったんだ」

「カエレの文字が書かれたときに？」

「そうだ」

「つまり犯行現場を目撃していたということ？」

「そうだ」

「どうして未宇ちゃんが目撃していたってわかったの？」

「直接の目撃証言はなかったんだが……、グランマが覚えていたぞ。未宇が犬を洗いたいって身振りで伝えてきたって」

「ぼっちさんといっしょじゃなかったの？」

「いっしょじゃなかった。未宇としては犬の世話は自分がしたいことだったんじゃないか」

うーん。なるほど。

そーいやワンちゃんがいつのまにかフローラルの香りになっていたな。

ぼっちさんか未宇ちゃんが洗ったんだと思ってたけど。

「屋上で洗ったんじゃないんだね」

「屋上は外に行くのと比べて段違いに人に見られやすいからな。それ

に屋上で水を得るには貯水タンクを開けないといけない。未宇の握力じゃたぶん無理だ」

あのバルブハンドルみたいなのを、小さな子どもが回すのはめっちゃくちや大変だろう。

かといって、屋内の水を使ったりするのもNGだったんだと思われる。

だって、貯水しているといってもみんなが使って一ヶ月かそこらぶんしかなかったんだ。

みんな節水をがんばっていた。

生存にかかわりのない犬を洗うということにたいして、みんながどう考えるか。

非難されるかもしれない微妙なラインだったんだろう。

だから、外でこつそりと――。

たぶん、たいした水の量じゃないとは思う。

ポメラニアンの小さな身体を洗うぐらいだ。ニリツトルのペットボトルでも十分。

「じゃあ、未宇ちゃんが犯人の名前を伝えたんだね」

「んー。違うぞ」

「え、違うの？」

「状況から考えて、未宇が犯人を目撃していたのは確かなんだが、誰が見なかったかという問いに対して、未宇は誰も見ていないと答えたんだ」

ふうむ？

頭がこんがらがってきた。

「manaさん。糖分が必要だよ。プリンのお代わりってあるのかあ」

「いっぱい食べるご主人様も大好きですが、カロリー抑え目の杏仁豆腐にしましょうね」

ごそごそと保冷バックから取り出したのは、三分クッキングの要領で既に作られていた甘味どころでした。

さすがmanaさん、ボクのところをわかってきている。

ごころ……か。

未宇ちゃんは犯人を見ていた。
でも、誰も見てないとピンクちゃんに伝えた。
これって――、犯人を庇ってるのかな。

ハザードレベル97

耳の聞こえない女の子、杵島未宇ちゃん。

彼女は『カエレ』の文字が書かれた日に外に出て、ワンちゃんを洗っていたとか。

つまり犯行の目撃者である可能性がある。

「外に出た時間帯次第では犯人と会わなかったってことも考えられるよね」

と、いちおう疑問を口にする。

「ピンクの科学捜査はわりと正確だぞ」

ピンクちゃん曰く――、ペンキの成分分析からいつぐらいに空気に触れたのか、つまりおおまかな犯行時間を分析することは可能だったらしい。

そして、未宇ちゃんも外に出たこと自体は認めた。

さすがに、お犬様をお洗いさしあげた時間は科学捜査ではどうにもならなかったけれども、彼女は探索班の人たちと寝所をともししているらしい。

つまり、男所帯に少女ひとりそれはちよつと問題が……。いや、まあさすがに10歳に欲情するような人たちはいないだろうし、いまはその話は関係ない。

とりあえず関係がありそうなのは、未宇ちゃんが部屋の中を出て行ったとき、見咎める人がいるとしたら、探索班の人たちということになるということだ。

「おそらくは、ひとりで事をなしたかった未宇は、ぼつちたちが寝静まるのを待ってから、犬を洗いにいったか。あるいは……。まあいろいろと察したのかもしれないな。だから、ぼつちたちの証言とあわせるとだいたい時間帯もわかったんだ」

察した？

「未宇ちゃんの発言ってよくわからないよね。どうして、犯人を見てないってうそをついたんだろう」

「ピンクも最初その点がよくわからなかったんだ。詳しい話を聞こう

としたら、例のゾンビテロが起こってしまったし……。とりあえず、ゾンビテロのほうが重大だったし、そちらは新しい事件だから証拠も集めやすいと思って、そっちに集中したんだ。ピンクとしては、なんとなく別の犯人かもしれないという印象はあった」

ボクにはカエレの犯人とゾンビテロ犯は同じだという先入観があったけど、ピンクちゃんは最初から違う人物だと想定していたらしい。

そして、事の重大性からゾンビテロのほうを優先した、ということか。

「ピンクとしてはカエレの文字も許せなかったけど、社会的な害悪としてはゾンビテロのほうが大きいからな。ヒロちゃんに対する印象論という意味でもそちらのほうが早急に処理すべき事案だ。探偵役としては、正しい態度なのかはわからないが」
なるほど……。

「で、ゾンビテロのほうの科学的調査がいちおう終了したあとに、今度はさかのぼってカエレの文字のほうをもう一度調べることにしたんだ」

うーむなるほど……。

話の筋としてはわかった。

「そして、未宇から再び話を聞いてみた」

話は、二度目の話のときにさかのぼるそうです。

★
||

ピンクちゃんはカワイイ天使。

ちいさくて頭がよくてキレイなピンク色の髪の毛をしている。

ピンクちゃんは”犯人”を探しているらしい。

あの夜のことをまた聞かれるんだろう。

ゾンビテロのとき、わたしはゾンビになるんだろうなって漠然と考えていた。

わたしは、とろいし、運動するのも苦手だし、耳も聞こえない。

話をするのは苦手で、誰かに想いを伝えることもできない。

ゾンビテロに気づいたのだった。たぶん一番最後だ。

みんながあわてふためいていて、走りまわっている。

喧騒というのは走るというイメージ。

みんなが急いでいる。

急ぐということが、騒がしいと表現されることをわたしは知っている。

音——というのが世界にあることは知っている。

わたしも、かすかにわかるのは心臓の刻むリズム。

でも、わたしにはそれだけ。

だから、天使たちが何を考えているのか本当のところはわからない。

ぼつちがわたしに部屋の中にいるように言った。

わたしと唯一会話ができる人。

ぼつちは弱くて強い。

ゾンビがこわくてたまらないはずなのに、みんなが避難できるように出て行った。

誰もいないワンルームで、わたしは膝を抱えて誰かが来るのを待っている。

思い出すのはここに来る前の、ケアハウスにおばあちゃんといっしょにいた日のことだ。夏休みの一日だけのお泊り。パパもママもたまたま出張が重なって、わたしはおばあちゃんのお家に泊まることにした。

ゾンビが溢れた日。

十人くらいの小さな家。

ゾンビになったのは、隣で寝ていたおばあちゃんだった。

あのときもわたしだけは喧騒の外側にいて、ただ雨があがるのを待っているみたいな心境だった。おばあちゃんと同じくらいの年齢の施設長さんが突然、部屋の中に入ってきて、わたしとおばあちゃんを見て——、何事か確認した。

わたしと目があったとき、一瞬の迷いのようなものがあった。

今になって思えば、それは会話によってゾンビか人間かを確認する術のないわたしがどちらなのかを見極めようとしたからだろう。

でも、そんなことをする必要もなかった。

わたしは背後からいきなり抱きつかれて——、ものすごい力で抱きしめられたから。

いつもゆつくりとした動きで、ニコニコした顔で、わたしを優しく撫でてくれる。

そんなおばあちゃんが、肺がつぶれるんじゃないかってくらいの力で万力のように締めつけてきた。でも、だからこそ、わたしは人間だって施設長さんはわかったらしい。

鬼のような形相で施設長さんはおばあちゃんを押しつけて、わたしを助けてくれた。

いまだ混乱しているわたしの腕を引っ張って、廊下に出る。

ドアが揺れて。

揺れて。

嵐のときの雨戸みたいに揺れて。

やがて細くて枯れ枝みたいな腕が、ゾンビ映画のように伸びてくる。

施設長さんが必死になって何かを言っている。

口元を見る。大きく開かれた口。叫んでいるのだと思う。

耳が聞こえないわたしは、唇の動きで相手が何を言っているのかを考えることがよくあった。

おばあちゃんの名前を呼んでいた。

見ると、施設長は腕のあたりを噛まれていて——、もしかしたら押しのかけたときにおばあちゃんに噛まれたのかもしれない。

振り返り、施設長さんはドアを押さえつけながらわたしを見る。

何かを言っている。

わたしに伝わるようにゆつくりとした口調だ。

リ……サ……イ。

カ・エ・レ。

カ・エ・レ！

わたしは走った。心臓がドクドクと”音”を知らせてくれた。いつもは蚊帳の外。

わたしだけの世界。

でも、今日だけは違った。

私は世界のなかの登場人物で、ゾンビはすぐ近くをうろついている。

わたしは走った。

★
||

ゾンビテロが起こったとき。

わたしは胸に手を当てて、心臓の”音”を感じていた。

ドクドクと早鐘を打つ心臓音が、わたしもこの世界にいることを教えてくれる。

ドアが——揺れた。

あのときみたいに、おばあちゃんの時みたいに。

この部屋はワンルームになっていて、ドアは一箇所しかない。

他に逃げ場所はない。

やがて、ガチャリとドアが開く。

誰か知ってる人であることを願った。

でも、そこにのっそりと立っていたのは、ワンちゃんの本当の飼い主、わたしにワンちゃんのお世話を託してくれた人。おばあちゃんと同じで足が悪くて歩けない人。

——萌美おばあちゃんだった。

身体が悪い人もゾンビになったら歩ける。

のっそりとした遅い動きだけど、少しずつ近づいてきている。

わたしは立ち上がることすらできずに、ただあのときの光景がよみがえってきて、なにもできない。

萌美おばあちゃんの足元をワンちゃんが駆け回っていた。

おばあちゃんが元気だったときに、少し散歩していた時期があったって聞いたことがある。そのときのことを思い出して、うれしいの

かな？

そんな場違いのことを考えて――、
目の前いっぱいにおばあちゃんの突き出した手が広がって。
わたしを助けてくれたのは、あの文字を書いた”犯人”の腕だった。

★
||

『なるほどだいたい言いたいことは伝わったぞ』

ピンクちゃんがちいさなおてで手話をしている。

最初の面談のときには使わなかったのに、こんな短時間で使えるようになるなんて、ピンクちゃんはすごかった。驚きすぎてしばらく手話すら忘れていると、

『いちいち、パソコンの画面を見せあいつこしてやりとりするのが面倒だから覚えた』ってなんでもないように言うし。

ピンクちゃんは地上に降りてきた天使なのかもしれない。

わたしは自分の想いを全部伝えたつもりだ。

地上の――人間の言葉を解することができるなら、天使にも伝える。

『要するに、未宇は犯人をかばっているわけじゃないんだな』

そう、わたしは犯人をかばってるわけじゃない。

わたしは判別がつかなかったんだ。

あのとときの施設長さんは、わたしを逃がすためにカエレと言ってくれた。

犯人がどんな気持ちで、どんな動機でそう書いたのかわたしは知らない。

だって、天使たちの言語はわたしには届かないから。

『未宇にとっての”人間”が誰もいないってことだったわけか。未宇にとって周りの人間はみんな天使で、違う言葉をしゃべる違う世界の住人なんだな』

そう。

違う種族とかまでは考えてないけど。

わたしの言葉は。

わたしの想いは。

そんなに伝わるものじゃないと思ってる。

他の天使達は共通の言葉で、通じ合ってるみたいなのに。

『まあ未宇のいうところの天使たちもべつにいつもわかりあってるわけじゃないがな』

それぐらいはわたしもわかってるつもりだ。

ヒロちゃんも——、ゾンビなのか天使なのかわからないあの子も、カエレって文字に傷ついていてみたいだった。

だから、”犯人”も伝わらない想いを伝えようとしてもがいているのかもしれない。

☆
||

「えつと結局のところ、未宇ちゃんは犯人の名前を告げなかったの？」

「ん。そうだな。でも、これでだいたいわかっただろう」

「え、なにもわからないんだけど……」

「え？」

「え？」

なにその間。

天才特有の説明不足というやつか。

ピンクちゃんが説明してくれたことはわかったよ。

未宇ちゃんが人間のことを、プロトコルの違う天使だって考えているから、あのととき目撃した犯人も天使だった。人間は誰もいないという論理なのはわかった。

ウソを伝えたんじゃなくて、自分には天使の言葉はわからないから、余計なことと言わない／言えないっていう心境だったんだろう。

うーん。控えめに言って天使なのは未宇ちゃんじゃないかな。

ともあれ、今の話でわかったことは未宇ちゃんの沈黙の動機であつて犯人が誰かじゃないはず。

ていうか、周りを見てみると、命ちゃんが残念そうな顔をしている。そして、マナさんは生暖かい視線だ。

「ご主人様ってかわいいですね〜」

マナさん、それはなにか悪口めいている！

「ヒロちゃん。未宇の交友関係からして犯人が探索班の誰かだってことはわかるだろう」

ピンクちゃんが、これくらいわかって当然だよね的な視線で見ている。

そ、そんなものかな。

たしかに未宇ちゃんって交友関係は探索班の人ぐらいしかいなさそうだけど、犯人はそれ以外の人だって可能性もあるはずだ。いや……ピンクちゃんがそういうんだ。思考過程がどうであれそれが正しい可能性は高い。

そして、少し遅れて——ジュンと暗くなるころ。

探索班の人たちは、ぼっちさんを含めて町役場の中で一番仲が良かった人たちだ。

その誰かが犯人だなんて、少しダメージがあるな……。

「ヒロちゃんがそんな顔になるのがいやだからピンクは伝えなかったんだ」

「ごめん。大丈夫だよ。犯人が誰かが知りたかったのはボクだから」

ピンクちゃんがボクをなぐさめようとして、頭ですりすりしてくる。

すこし元気になった。

「探索班のうち誰が犯人なのかって、どうやってわかったの？」

「それは簡単だ。ひとりひとりにオマエが犯ったのかって聞いた」

なんとという直接的な——。

でも、ここまで絞って、目撃者もいるって状況だから、犯人も観念すると思っただのかな。

「で、誰なの？」

「それは——」

ピンクちゃんが犯人の名前を告げようとしたとき、会議室のドアが開いた。

あけた人は探索班のひとりで——もちろん、言うまでもないことだけれど”犯人”だった。

☆Ⅱ

「すまん」

ゲンさんだった。

ボクに飴玉をくれたりして、探索班のリーダー的存在で、町長を顎で使ったりする。

町の参謀みたいな人だった。

頼りがいがあつて、いろんなことを知っていて、町には欠かせない人。

ボクもゲンさんのことは好きだ。

飴玉くれたし。

頭なでてくれたし。

孫みたいに思ってくれてるのかなあつて。

でも『カエレ』という文字を書いたのはゲンさんだった。

「どうしてなのか聞いてもいいですか？」

ボクは自分のところがざわつくの落ち着かせるように努めた。

カエレというアンチコメ。

仲が良かった人がアンチコメを書いていたって、普通に考えれば陰口みたいで真正面から悪口を言われるよりよっぽど気分が悪い。

ボクだって人並みにいやな気分にはなるし、ゲンさんに対して悪感情が湧きそうになる。

でも——、未宇ちゃんがピンクちゃんに伝えたみたいに、すぐに悪意があると断定するのはよくないかもしれない。

ゲンさんは頭をさげて謝った。

その表情は曇っていて、少し哀しげだ。

わしには孫娘がいた。

まだ小学四年生で、わしによく懐いてくれた。

娘はコワモテのわしにはまったく懐いてくれなかったというのに、孫娘はわしのことをおじいちゃんおじいちゃん慕ってくれた。

目の中にいれても痛くないくらいかわいいという言葉があるが、あれは本当だった。

孫娘はわしの宝で、人生の集大成ともいえるものだった。

ゾンビハザードが起こったとき、わしが最も気になったのは、孫の安否だった。孫は娘夫婦と住んでいて、わしの工場兼家から車で三十分くらいの距離だ。言ってみればたかだかそれだけの距離だが、ゾンビが溢れた世界では、それだけの距離でも気が遠くなるほど遠い。

最初——、混乱していた時期。

電話もまだ通じていた頃。

わしは何度も娘の家に電話をかけた。

通じなかった。

しかし、車に飛び乗っていこうにも町にはゾンビがいる。

見知った顔のやつらもいて、そいつらを轢き殺していつていいものなのかわからない。

やってしまおうとも思ったが——しかし、わしは怖かったのかもしれない。

娘に電話が通じないということは、ゾンビになってしまっている可能性が高い。

ゾンビになった娘。そして孫娘を見ることになるかもしれない。

ゾンビをひき殺し、無理にでも会いにいこうと思えば会いにいける距離だった。

しかし、それでも決意するまでに時間がかかったのはそういう理由からだ。

そうこうしているうちに、明彦から電話がかかってきた。

町役場で避難所をやってるから助けてほしいという話だ。

わしは探索班長になった。

町にでかける動機を自らに植えつけるためだった。

そして——、幾日かの月日が流れたあと、わしはようやく孫に会いに行った。

ゾンビになっていたよ。

おそらくはゾンビに変化していたのはわしの娘のほうで、孫のほうは娘に噛まれたんだろう。

わしの孫は、顔が半分えぐれていた。

恐れという感情はなかった。

ただ、ところが凍てついて——、あんなにかわいらしい顔立ちが崩れてしまった。

かわいそうにと思った。

だから、撃った。

警察署を探索したときに、くすねてきたピストルで。

一撃のもと頭を撃ちぬいた。

そして時間が経って、今度はおまえさんが現れた。

ゾンビを操れる。ゾンビ状態から回復できるおまえさんが。

もしも——という考えを抑えられなかったよ。

もしも、おまえさんが少しでも早く来てくれていれば。

少しでも早くゾンビから回復できるという情報を教えてくれていれば。

おまえさんと実際に会って話をして、思った以上に無邪気なところを見て。

正直なところ……怨んだ。

わしの孫は死んだ。いや、わしが殺したのに、なぜおまえさんはそんなに笑っているんだと。

そう思った。

「だから書いたの？　ボクに帰ってほしくて。顔も見たくなかったとか」

そうかもしれん。

だが、信じてもらえるかはわからんが、それだけではなかった。

「どういふこと？」

あのとき——、ヒロゾンビの話をおまえさんがしたときに、
むしろように孫の顔が見たくなった。

もう一度会いたくなかった。

だから——。

「だから、帰ってこいって？」

そうだ。

帰れ……帰れと。

こちらに、わしの許に。

ヨミガエレと。

☆
☆

ゲンさんが話し終えた。

結局——動機のほとんどは久我さんと同じで、ボクが遅かったとい
うのが理由なのかもしれない。ヨミガエレって意味も含まれてるつ
てことで、ボクに対する害意というよりはお孫さんを取り戻したいつ
て気持ちもあったってことだけど……。それはボクを必要以上に刺
激しないための方便なのかもしれないし、人のこころはミステリー
で、やっぱり言語化したときにこぼれおちてるものもあると思う。

だとしても、ボクはその方便を飲みこむつもりだ。

「話してくれてありがとうございます」

「感謝されることはない。あれを書いたのはわしがただ自分の気持ち
を処理できなかった未熟さが原因だ。罰も受けよう」

「それはそれで問題があるような。探索班というくりで町のみんな
は見ているし、ゲンさんがやったって知られたら、みんな混乱するよ
？」

「それはそうだろうが……。しかし、さっきの配信で犯人は別だとい
うことが知られてしまったぞ。そのあたりをうやむやにはできないと
思うが」

「カヴァーストーリーをつくれれば問題ないと思います」

さすがマナさん。略してさすマナ。

お姉さんは世の中の虚を司つてるとかそういう中二病めいたことを言っただけに、なんといかウソをつくのがうまいね。

「ウソじゃないです〜。ちよつとアレンジするだけですから」

うーむ。それをウソって言うんじゃないだろうか。

「ゾンビにでもなつて余生を過ごすかと思つていたが、わしの罰はウソについて生きていくことか。従おう……」

そういうことになりました。

ハザードレベル98

マナさんのカヴァーストーリーはボクには思いもつかないものでした。

まあ簡単に言えば、謎の組織ジュテツカもとい自衛隊の久我さんたちが悪いという感じのなすりつけかな。ジュテツカの暗躍に気づいたゲンさんがあぶりだすために使ったという、なんかそんな感じのやつだ。

マナさんがA4用紙で10枚くらいのレポートを書いてくれて。

ピンクちゃんが要点をまとめてくれて。

ボクがボクなりの言葉で書いて。

命ちゃんが校正と添削してくれて。

最終的に400文字の作文用紙が完成したのだった。

あれ、コレってもしかして小学生並の作文!?

もちろん、発表はボク。

『じえいたいはえらいとボクは思います。じえいたいはボクたちのような子どもやいっばんしみんなを守るためのそしきだと習っていました。たとえあいてがせめてきても、せん守防えいして決して自分からはこうげきしないそうです。』

でも、じえいたいの人が暗やくして、みんなをゾンビにするという悲しいできごとが起きました。ボクは悲しかったです。悪いことをしていない町のみんなをどうしてじえいたいの人はこうげきするのでしょうか。町の勇氣のある人はそうなるのがいやだったからカエレという言葉を書いたそうです。ボクはえらいと思いました。人がいがみあいこうげきしあう世の中はダメだと思います。

日本は災害の起こりやすい国です。そんな時、じえいたいの方々が災害救助で活やくしているのを見て、ボクはうれしくなります。じえいたいのえらい人が町のみんなをきずつけるように命令したのだったらやめたほうがいいです。

なにごととも平和が一番だと思います』

棒読みちゃんにならないように演技がんばりました！

以下掲示板とか配信での反応。

『ヒロちゃんって小学五年生くらいだよな。正直小学二年生くらいの……いやなんでもない』

『ダメだと思えますが小学生並の作文で草』

『やめたほうがいいです。ここ強者感』

『でもカエレの文字が先だよな。ジュデツカの暗躍がわかっていたってことか？』

『ジャパニーズ忍者がいるんじゃないか？』

『ジュデツカ以外にも暗躍する組織が？』

『まあ小学生並の作文ではあるが、言ってることは正論だよ。自衛隊が自国民を攻撃するとかありえん。存在の矛盾だ』

『作文用紙がなつい』

『PDFスキャンデータ助かる』

『女の子っぽい丸文字かなって思ったら想像以上にその……なんというか個性的な字だね』

『多様性だよ多様性』

『なんか作文用紙のはじっこに変な落書きされてて草を禁じえなかった。あれなんだ？』

『スプーだよ。知らないのか？』

『日本式のハロウィンだと思ってた』

『後輩ちゃんや毒ピンに添削してもらったんだよな？』

『うーむ。謎が多い作文だが、詮索しないでほしい感もあるような』

『最初は丁寧に書いているのに、途中から段々飽きてきてる感がリアル』

『書くことがいよいよ無くなって、平和が一番というおぎなりエンド……』

『ヒロちゃんががんばったねすごいね！』

『全肯定おじさんやめろ』

役場内では、ゲンさんが隣に立っていたけれど、配信での発表は町役場内の有志の方ということにしました。いろいろと議論にはなってるみたいだけど、いちおう解決したことはお知らせしたカタチです。あのクレーマーの辺田さんが何か言いたそうな顔をしていただけ、そのときは何も言われなかった。もうこれ以上の混乱を望まない民意というか、同調圧力が強かったのだと思う。

日本人、右にならえが大好き説。

あると思います。だって楽だもん。

「すまなかつたな」

みんなへの説明が終わったあと、ゲンさんはあいかわらず渋い声を出している。

「いいよ」

ゲンさんはボクのことを嫌いというわけでもないと思う。

孫みたいな感覚もあり。ゾンビみたいな感覚もあり。

複雑な感じ。

複雑なクオリア。

であるがゆえに、ボクはまた飴をいただきたいなあと思うわけでありませぬ。

「ねえ。ゲンさん」

「なんだ？」

「ひとつお願いがあるんだけど」

「お願い？」

瞳の奥に奇妙な寂しさみたいなものがあって、ボクに関する態度はちよつとだけよそよそしいというか、そんな感じだ。

少しだけ距離を取り戻したい。

だから言った。

「ボクの配信動画に参加してもらえないかな？」

☆
||

「おでこのメガネで、でこでこでこりくん。今日もはじまったよ。最

近は物騒なことが多かったから普通に配信したいと思います」

おでこにあげていたメガネをジャキーン！

装着完了。

『はあメガネっ娘！』『メガネですか？』『メガネ装備なんで？』『ヒロちゃんの視力は2.5以上あったる？』『ピンクちゃんが調べてたしな』『伊達メガネでもメガネはメガネだ』『でここなんだって？』『きようはメガネを装備しないといけない理由があるのです。後輩ちゃんの謎技術で、メガネのちよつと前にみんなのコメントが投射されるようになってます』

『メガネ助かる』『メガネはしてないほうが好き』『なんだてめえ……』『お、戦争か？』『いきなり喧嘩はじめんな』『喧嘩といえば勢力図また変わったよ』『ヒロちゃんの作文で入間自衛隊に動揺が走ってるしな』『ちよつとリラックスしてる感？』『事件が解決してゆるんでるんだらう』『今日の服装はショートパンツにニーハイか……きゃわ』『ゆるゆるヒロちゃん』『ていうかいつものパソコンのカメラじゃないね』『これは誰かが撮影しているパターンだな。後輩ちゃんがやってたやつだ』『なんか美容室っぽい？』

はい。町役場の目の前にある美容室です。

わりと苦労したよ。太陽光パネルの余りを設置して電気を確保したり。

電気がないといろいろと大変だからね。

町役場からだだ漏れのネットはかなり高出力で、例によって障害になるような高い建物がないから、普通に通じた。これがダメだったら中継ルーターを道路に這わすとかしないといけなかったから難しかったろうな。

水はたとえ電気ができたとしても、送水するための水道局の電気が止まってるから無理でした。

まとめると――。

電気ありネットあり水なしです。

室内はクリーム色を基調とした落ち着いた作りで品がいい。どちらかといえば女性向けの店だったようで、ゲンさんはちよつと緊張し

ているみたいだった。ボクとしても若干の緊張があります。なにしろこういう店には縁遠かったものでして。

さて、そんなわけで、美容室の三つくらいある大きな椅子のうち真中に座ってもらってるのはゲンさんです。プライバシー保護のためにアイマスクつけるか聞いたんだけど、そんなもんは要らんと一蹴されてしまった。頑固なおじいちゃんめ。

撮影してくれているのは命ちゃんです。

ボクは——、施術者だ。

「今日はね。ヘッドマッサージに取り組んでみようと思います。みんなを癒すカリスママッサージストだよ！ ボクはヒールも使えるんだから理論上最強なはずだよね」

『え？ ASMR配信するの？』『おじいちゃんと孫って感じだな』『官理職（67）』『ヒロちゃんかとびちる水に濡れ濡れになる動画か』『それだと不真面目マッサージになるぞ』『わしの孫がかわいいのう……』『パパにもマッサージしてくれないかな』『そーいや癒しの力が使えたんだったな。癒し効果高そう』

「配信を通じて癒し効果あるのか試してみるね！」

ASMRって音を通じて癒す効果があるみたい。

なんか絶頂するみたいな感じの翻訳がなされていたし、ドーパミンがどばどばでるんだろう。

ボクの癒し効果ってなんかよくわかんないけど、みんなの中に感染してある微量のゾンビウイルスをなんかあれこれして、あれこれできるはずだ！（小学生並の構文）

『もしかしてゾンビ回復効果がネット配信で？』『そんな効果があったらすげえよ』『それができたらゾンビ終了のお知らせかな？』『ふむ。やってみようってやつか』

「さすがにゾンビからの回復効果まではないかもしれないけど。なんか効果があったらいいなと思います。癒してみせようホトトギス」

まあそこまで深く考えてるわけじゃないけどね。

そもそもゾンビからの回復という点でいえば、旬なのはやっぱりヒロゾンビだ。

ヒイロウイルスを輸入できれば、つまりヒイロゾンビがひとりでも自国にいれば、その人を基点にしてゾンビを駆逐できるし、ゾンビからの回復も可能になる。

ピンクちゃんが証明してしまった。

ボクでなくてもゾンビからの回復は可能であるという事例。

でもみんな及び腰なのか、慎重論者が多いらしくまだボクのところに来る人はいない。

何人かヒロちゃんゾンビになりたいっていう人はいるんだけど、正当な政府から承認を受けた人はまだいないらしい。非正規の人を勝手にヒイロゾンビにするとそれはそれで人類側の警戒を招くので、いまは待ちの状態です。町だけに。

あ、あ、命ちゃんがとても残念な顔になってる。

さて……はじめようか。(あきらめの境地)

「はい。ではまずは……あったかいものから。あちあち」

『ほかほかタオル』『あちあちってなってるのがかわいい』『このあちあちタオルをそのまま顔にぶっかけてたらコントなんだけどな』『寒くなつてくるとあったかいタオルは気持ちいいっすよ』『わりとまともなママたち』『真面目マッサージだからな』『あちあち動画』

少し冷やして適温にしてから、タオルを顔の形に。

呼吸ができるようにちゃんとそこは折り曲げてます。

それぐらいはできるよ。ぽんこつじゃないからね！

『ポンコツじゃないだど?』『ヒロちゃん大丈夫。体調悪くない?』『無慈悲な呼吸困難動画になるとばかり思ってた』『ヒロちゃんだしな』『まあこの際、美少女ってだけで十分なんじゃ』

ポンコツじゃないし……。

「暖かいタオルを顔にあてると、血行が結構よくなってリラックス効果があるよ」

『血行が結構』『ヒロちゃんってたまに親父臭くなるよな』『まあそこがいいという説もあるが』『む……よく見ると身長が微妙に足りないのを空中に浮いて補ってるな』『無駄に洗練された無駄のない無駄な動きというやつか』『倒した背もたれなんで戻すの。終了なの?』

無駄じゃないし、終了でもない。

「ヘッドマッサージするからね。背もたれは元に戻します」

『結局のところ無駄な動きなのでは？』『その……個性的なマッサージだね』

「さて、今回使うのはこれ……ハールワツサーーだよ！」

『なにそれ？』『ハールヴァッサーが正しい発音なんじゃないか？』『日本式のドイツ発音なんだろう』『なんかラムネみたいだな』『ラムネ……？』『ヒロちゃんそれなあに？』

「ハールワツサーーはヘッドマッサージ専用に開発されたローションだね。地肌に心地よい刺激を与え頭皮を健やかに保つトウガラシチンキ。フケかゆみを抑えるヒノキチオール。清涼感を与えるメントールを配合しています」

『すごいまるでカンペを読んでもみたいだ』『メガネには両目あるからな……おそらくそういうことだ』『後輩ちゃん。さすがだな』『後輩ちゃんのシナリオどおりか』

なぜバレてる……。

ヘッドマッサージって簡単に見えるけど、案外難しいんだよ。それなりに練習したけど手順を忘れちゃうから台本くらいいいでしょ。

高速で流れていくコメント欄と、命ちゃんが作ってくれた台本を同時に見ながら施術する。

想像してもらえればわかると思うけど、かなりの難易度。

ボクがほぼカンペ読みになるのもしかたない。でも、解説するっていうことが大切なんだ。我々は文明人だからね。解説されることによって、それが刺激となるんだ。

「まず、ハールワツサーーを十分に塗布します。髪の毛がひきつれると怖いからね」

『ドバドバいくな』『これメンソール系だろ。こんなに塗布して大丈夫か？』『髪の毛がひきつれると怖いからな』『頭頂部から周囲へよくもみこんでるな』『マ民たちが活性化してる』

「十分な塗布が完了したら、椅子を倒します」

『なんだ。結局倒すのかよ』『倒したり起こしたりしろ』『背もたれを倒

すのか起こすのかはつきりして』『ヒロちゃんに翻弄されちゃってる』『通常のマツサージは背もたれを起こしたまま行いますが、このアメニティマツサージは椅子を倒したまま行うことによって、お客様にリラクセスしていただき、より気持ちよく、効果的に行うことができます。サロンが儲かる仕組みを……あ、これ違う感じ?』

命ちゃんが首を横にブンブンと振っていた。

『儲かる?』『儲かるってなんだ?』『どこかのマツサージ動画を元に後輩ちゃんが台本書いたんやなって』『後輩ちゃんもいろいろ大変だな』

確かに命ちゃんに頼りっぱなしなのは悪かったと思います。

「まずは、ひたいの蹂躪? からおこないます」

『あ、読めてないやつや』『蹂躪しちゃだめだろwww』『なまじつか握力10トンくらいありそうだしな』『冥福をお祈りします』『ジユウネンな。ジユウネン。押しつけて揉みこむやりかただよ』

「漢字難しかっただけだし。やりかたはわかっているから大丈夫だよ。えーっと、ぜんがくぶのぼしきゆうをひたいに当てて、なんかともかくやります」

やりかたは本当にわかっているんだ。

手のひらのつけ根の部分を押し当てるようにして軽く圧迫する感じ。

力の調整だつてできるよ。まちがっても海水浴場のスイカみたいにはならない。

『きもちよさそう』『おてて』『おてて民。おまえ生き残ってたのか』『ヒロちゃんにいつトマトみたいに潰されるのかわからなくてヒュンつてなる』『孫にマツサージしてもらえるなら死んでもええ』『爺さん。あんだそこまで……』

「顔面の指圧に入ります。親指をつかって額からコメカミをグリグリするよ」

『あ、途中で読めなくなつたやつだ』『後輩ちゃんがもう少しだけ優しさがあれば』『後輩ちゃん。ルビ振ってあげて』『でも読めなくても施術自体はできてるな……練習したんやな』『台本を読む練習もできれ

ば行おうべきだった」

「人差し指を使つて、目の上の骨を押し上げるようにするよ。これで目の疲れが取れます」

『ああ、絶対気持ちいいやつや』『目の疲れが取れます（断言）』『ぎゅむぎゅむ』『ぎゅー』『極楽動画』『目で見る癒し』『マ民が歓喜しておる』

「さらに、びこんこつ。きようこつ。かがんか。あごの骨の順でジユウネンします」

『後輩ちゃんの優しきギター！』『なんだ動画配信中にルビ振つたのか』『誰もヒロちゃんが素の状態で読めると思つてないんやなつて』『しかし、言われてもどこの骨なのかわからんな』『どこの骨とも知れないやつ』

「これで顔面指圧は終了です。続いて四本の指を使つて、そっけいかぶを良く揉みこみます」

ぐーりぐりぐり。ぐーりぐりぐり。

『あああ……』『ああ……』『ああしかいえないんかい』『首つて疲れるからな』

「手のひらを額にあてて、こうとうかに中指を押しこみます」

『あああ……』『ああ……』『わかるマン』『首はらめえ。首はらめなのお』

「非常に疲れやすい筋肉である……きようさにゆうとつきんを揉みこみます。お客様をつかの間の眠りに誘うようなタッチでおこないましょう」

コメント欄がzzzで埋め尽くされる。

ゲンさんもほとんど眠たそう。うまくできてるみたいだね。よし次。

「続いて頭皮のマッサージに入ります。頭皮と骨の動く範囲を側頭頂部まで10回ずつジユウネンします。このとき、通常のトニックですと、水より乾燥が速く髪の毛がひきつれることがあるのですが、このハールワッサーはマッサージ専用のローションとして開発されているので、大丈夫なんだよ。すごいんだよ」

『さようでございますか』『ダイレクトマーケットしていくスタイル』『髪の毛がひきつれることへの過度の恐れ』『ハールワツサーSUGEE E E E』

「頭頂部のマツサージにかかる前にまたハールワツサーをたつぷりと塗布しますー!」

『追いワツサーだと』『短時間のうちに二回も!』『なんて贅沢なんだ』『本当に短時間のうちにかけてまくってるからわりとビショビショ感あるな』『気持ちよくなるんじゃないか?』

「えーつと……なんか台本が長すぎるから簡単に説明すると、頭を掴んだ状態でドリブルする感じでマツサージします」

『わりと本気で揺らしてて草』『脳震盪』『これ大丈夫なのか?』『ほんとにドリブルじみてる』『美容室の椅子はわりとはずむから大丈夫……だと思いたい』『官さあん!』

「このように大きく振ってもお客様は不快感を感じませんので思い切って振ってみてください」

『正体あらわしたね』『不快感は感じません(断言)』『これお客様は文句を言う気力もないだろww』

「ここがアメニティヘッドマツサージのクライマックスです!」
揺らせ揺らせ。頭を揺らせ。

『死んじやう死んじやう』『案外気持ち良さそうでもあるが』『口開いたら舌かみそうだしな』『盛り上がってきたな』『よーし逝くぞお!』

「この快感が忘れられないってファンがいっぱいいるんだからね。特に、管理職の方に多く見られます」

『ホンマかいな』『やっぱり管理職(67)』『バブル時代を彷彿とさせるようなワードばかりだな』『最近の小学生はいろんなこと知ってるなあ』『ネット時代の恩恵だろう』

「いよいよ椅子を起こしてフィニッシュのマツサージに入ります。ここで三回目の塗布を必ず行ってください。お客様に新たな快感を与えらるとともに、短時間に三回も塗布されたという贅沢感を植えつけます」

『短時間に三回も塗布していただけるんですか?』『すごい……なんて

贅沢な』『え、今日は三回も塗布していいのか?』

「ぼしきゆうで、じぜんぶ、じごぶ、じじようぶ、そっけいかぶの順でジウウネンします。左側も同じように行います」

もうどこがどこやらわからない……。

ともかく頭全般だ。

「ぼしとうで、俗にいうフウチをよく揉みます」

実をいうとフウチはわかります。なんでか知らないけどいつのまにか知ってたツボの名前。ここはいいツボだ。

「次に首の運動です。ゆっくり前傾。後ろ。横と、十分にストレッチを行います。ゆっくりと回転をさせます」

『首ポキ動画……首ポキ動画はどこじゃ』『首ポキはやめといたほうがええで』『起こさないでやってくれ死ぬほど疲れてる』『神経集まってるもんな』

「最後に軽く肩を揉んであげましょう。これでアメニティマッサージは終了です。この施術で絶対にしてはいけないことがあります。それは施術中に髪の毛を絶対に引きつれさせないことです」

『引きつれこえー』『早くハールワツサーを買わなくちゃ』『なんだかんだいってもいいマッサージだったよ』『癒しの効果は……まああれだな。コメントみながらだと微妙だからコメント切つてあとから見てみる』『髪の毛ぼっさぼさなんですすがそれは……』『ぼさぼさになる髪があるだけマシだろ。いい加減にしろ!』

マッサージも終わり。

ゲンさんは無言のまま立ち上がる。

なされるがままだったけれど、気持ちよくなかったのかな。

名前を言うと、個人情報的にまずいので、ボクは一般的な人称代名詞で聞くことにした。

「おじいちゃん。マッサージどうだった?」

「……まあまあだな」

顔はこちらに向けず、しばらくゲンさんは突っ立っていた。

どうしたんだろうって思っ、ボクが覗きこもうとすると、命ちやんに途中で止められた。

少ししてから、ゲンさんは振り向いた。
ハールワツサーが目に入ったのか、瞳が赤い。

「おじいちゃん。大丈夫？」

「ああ……礼は飴玉でいいか」

「うん」

欲しかった飴玉。

お耳のあるピンク色の飴。

いちご味。

★
||

動画の配信と聞いて、公開処刑でもするのかと思っただらなんのことはなかった。

ヘッドマツサージ配信の対象者になってほしいという、小さなお願いだった。

「いいかな？」

小さな瞳が怯えたようにわしを見定めようとしている。

紅いまなざしがわしをみている。

そのまなざしは、この星の人類を救いたいという大それたことを考えながら、その実、わしひとりに嫌われることすら怖がっている小さな子どものように見える。

ゾンビか人か。あるいは天使か。

そんなことはわしにはわからんが、しかし、その外貌はまぎれもなくわしの孫と同じくらいで、そのこころも変わるところはないように見える。

ゾンビが溢れたのは、誰のせいでもない。

夜月緋色がそうしたのであるなら、きつと、このような小さなひとりの老人の想いなんぞ踏みにして笑うだろう。

だから、わしがやったことはただの——八つ当たりだ。

孫を失ったわしの行き場のない怒りをぶつけただけだ。

だが、孫娘はわしの宝だった。

その孫娘の頭を撃ちぬいたとき、こころのなかが黒く塗りつぶされていくような気持ちになった。底なしの黒い沼底に腰までつかり、溺れるのをいつそ望むわしがいた。

自殺を考えたこともある。

ただの義務感で生へとつなぎとめていた。

その義務感すらもぷつぷつと切れてしまったのは、後悔があるからだ。

もし、あとわずかでも早く……あるいはわしが孫娘の頭を撃ち抜いていなければ。

「かまわん」と答えた。

緋色は花がほころぶような笑顔を浮かべた。

似ている。

思い出すのは孫娘のこと。

「おじいちゃん」

そう言つて、優しく肩を揉んでくれる孫娘。

いちご味の飴が好き——。

その声が重なった気がした。

孫娘とこの子は似ても似つかない容貌だが、わしのようないかつい顔をした気難しい老人に、気兼ねなく声をかけてくれたのは、孫娘以外にはいなかったのだ。

形容しがたい言葉に、身がすくんだ。

目を閉じたまま、考える。

孫娘のことを。ゾンビのことを。人間のことを。

考える——。

生きていてよいのだろうか、わしは。

「おじいちゃん。大丈夫？」

「ああ……礼は飴玉でいいか？」

「うん」

いちご味の飴玉は、手のひらにおちて。

彼女は優しく笑顔をこぼした。

ハザードレベル99

ピンク理論——Monica Goode Moulding

「うんしょ。はじめての単独配信……。ヒロちゃんがいないからちよつと緊張するな。」

ごほん。まずはヒロちゃんに習って挨拶からはじめよう。

ハローワールド。ピンクだ。ドクターピンクと呼ぶ者もいるな。

今日は、ヒロウイルスによる超能力やゾンビについて考察したい。

まずは、引用からはじめてみよう。

——人は考える葦である。

これは偉大な哲学者パスカルが述べた言葉であるが、ピンクはこの言葉をいま一度現代風に言いなおしてみることにする。

——人は演算する機械である。

人は意識的にあるいは無意識的に演算している。

そのことを否定する者はいないだろう。

この配信を見ている諸君らも、また演算している。

諸君らが思考しているということは、諸君ら自身が証明しつづけていることだろう。

デカルト曰く——、

我思うゆえに我あり。

正確には、我思うゆえに我思うという思考ありが正しいが、いずれにしろその演算自体が存在することは否定できまい。

したがって、この点については証明不要である。

しかし、ここでピンクは人間という存在が『原子がランダムに衝突する単なる物質的存在』であるということを書いたわけではない。

きわめて卑近的な当たり前のことを言いたいのだ。

人間は、日常生活をするうえにおいても、あるいは単に呼吸をし、会話を交わし、なんらかの感動をしているときでさえも、想像もつかないような膨大な演算をおこなっているということである。

感動に方程式はあるだろうか。

呼吸に我々の想像もつかないような法則があるだろうか。
愛や友情に相関係数は？

それらはいまだ科学的なメスが入っていない部分も多いため割愛しよう。

ひとつ留意してほしいのは、人間には演算力があるという事実だ。ここでコンピュータに詳しい者は『人よりもコンピュータのほうが演算力は高いのではないか』と思われるかもしれない。

然り——、コンピュータは人間が苦戦するような長大な計算を一瞬で読み解く能力を持つ。しかし、ピンクが言いたい『演算』という言葉は、想像力をも内包するものだと考えてほしい。

演算と一口にいつても、人間にはコンピュータが苦手な分野をカヴァーしている面があるということだ。

ひとつわかりやすい例え話をしよう。

わが国が1998年に新たな神をつくりあげた。

そう、みなも普通に使っている『グーグル』という検索サービスだ。利用者は神託を求める巫女のように、グーグルに問いかける。

グーグルは演算する。

しかし、ソレは『正解』を知っているわけではない。

黒板に式を書いてみるぞ。

うん。と。ピンク自身が浮く超能力はちよつとまだケイケンチが足りないみたいだ。

届かないぞ！

どうしよう。

ちよつと誰か、誰かピンクをもちあげて。お願い。うん。

以下の条件を満たす数字Pは存在しない

Pはこの言説の妥当な証明のコード番号である。

この言説がなにを指しているのか、数学を勉強した諸君らはすぐに

ピンときたことだろう。

偉大なる数学者ゲーテルの掲げた着想。

要するに公理系の無矛盾の証明は同一公理系内では証明できないということだ。

すなわち、コンピュータが演算にもたついている間に、人間が一息のうちに理解してしまえるような領域がある。直観という領域が存在する。コンピュータが絶対に直観をもてないのかというと、そういうわけではないと思うが、いま現在時点においてはコンピュータはゲーデルが用意した壁を越えることはない。

グーグルの例に戻ろう。

うん。おろして。ありがとう。

グーグルがいくつもの選択肢を我々に提示するということは、既に経験として諸君らの多くは知っているだろう。しかし、その選択のなかから、実際にクリックするのは我々人間なのだ。あ、ピンクは人間じゃないかもしれないけど、まあそれはそれとして――。

このとき、グーグルという『場』において、人間と機械はひとつの神託機械として動作している。人は機械の苦手な領域を補い、機械は人の苦手な領域を補っている。

人は決して、コンピュータに演算力で負けているわけではない、ということだ。

このことを諸君らには留意していてほしい。

今回ピンクは科学者として、現象から法則を逆算してみたい。

ピンクの目の前には、いま一本の鉛筆がある。

わたしの中にたゆたうヒロウイルスは、現実干渉し鉛筆をまるで操り糸でたぐるようにダンスステップを踏ませることができ。――できました。

この超能力。いわゆる念動の力はいったいなんなのかということである。

ピンクは推論として述べる。

この力は――人間の演算能力ではないか、と。

より現実的な路線で言えば、ナノマシンのような小さな機械がピンクの周辺にたむろっていて、ピンクの思考を感知して、そのような現実をもたらしたのだという言い方のほうが受け入れられやすいかもしれない。

つまり、ヒロウイルスなる物質が——単純にその個体の持つ総量で現実を改変する力に強弱が生まれるという理論だ。

しかし——、後輩ちゃんとの対比で、ピンクはまったく違う知見を得た。

後輩ちゃんは長くからヒロゾンビをやっている。後輩ちゃんという名前だがピンクにとってはヒロゾンビ的な先輩ちゃんでもある。ピンクは後輩ちゃんに比べて、わずかだがヒロウイルスの力を強く使える。

この差異はいったいどうして生じたのか。

ましてや、ピンクは実を言えばヒロちゃんからではなく後輩ちゃんから直接感染している。

ピンクが最初に考えていたモデルは、ヒロウイルスはヒロちゃんを頂点としたピラミッド型になっているのだと思っていた。要するに、ヒロウイルスが一番濃いヒロちゃんが強く、第二感染、第三感染になるにつれて弱まっていくのではないかと思っていた。

日本の漫画とかアニメの吸血鬼だと定番の組織図だな。ヒロちゃんが頂点で、その次がエルダー。その次が中級。そしてレッサーみたいな感じのやつだ。

ところが違った。

ピンクが感染してから、わずか数日のうちに、ピンクは少しだけ超能力を使えるようになった。ゾンビを避けることができたり、ゾンビを操る力もついているがそれはヒロゾンビなら最低限使えるように、明確な差異はない。

ピンクのほうが単純に上手かっただけなのか？

たまたま個人的な力量差がついて、後輩ちゃんよりも上回っていただけなのか？

ピンクのほうが年下で、よりヒロウイルスが増殖しやすい体質

だったとか、そういうことも考えたのだが、ヒロゾンビどうしが感じる連帯感のようなものはあっても、ヒロちゃんに対して感じる巨大な存在感のようなものを後輩ちゃんには感じない。

ヒロゾンビどうしに親と子のような関係は存在しない。

例えば後輩ちゃんに何かしろと命じられても、お願い以上の意味は持ち得ない。

ヒロちゃんに対しては、なんだかマイシスターとして甘えたい感覚はするけど、もともとそんなふうに思っていたから、この点はピンクとしての個人的な感想なのかもしれない。

それで、なにが違うのかを考えて、ある日突然、神託が降りてきた。ググツたわけじゃないぞ。

ふと思いついたんだ。

後輩ちゃんとピンクの違いといえば、知名度の差ではないかと。

ピンクは言うまでもないが、ホミニスという人類の科学サイドをまとめあげる組織に属している。ピンクがピンクとして表にでたのはごく最近だが、ゾンビに対する対策やヒロちゃんという存在に対する考察ブログなど、後輩ちゃんに比べて積極的に活動してきた。

その結果、知名度的に言えば、ピンクのほうが後輩ちゃんを上回ってしまった。

だから——、だから冒頭の推論に戻る。

この力は——、

いま消しゴムを空中母艦のように浮かせているのは。

人の力を借りているのではないかと。

人の演算能力を借り受けているのではないかと。

要するに、こういうことだ。

諸君らは、一人残らずゾンビウイルスに感染している。

ゾンビウイルスに感染してもゾンビにならないのはゾンビウイルスが体内に少ないから、言い換えれば人間的部分を多く残しているからだ。

諸君らの人間的な部分は当然のことながら日々の営みを続けてい

るだろう。呼吸をし、ご飯をたべて、生存に必要なことを文句も言わずに下支えしているばかりではなく、娯楽を楽しみ、遊び、戯れ、時々配信を見たりもする。

周りがゾンビだらけでなかなかそういった余裕がない人もいるだろうが、生存に必要な余白ができれば、それは何か楽しいことに振り向きたいと考えるのが人間だ。

そう、余白。

生存に無関係な余剰の演算能力を、諸君らはヒイロゾンビに対して振り分けている。

より知名度の高い個体に対して、より強く想えば想うほど、その個体はヒイロウイルスの力を十全に発揮できるようになるだろう。

わかりやすく言えば、仮想通貨のマイニングのようなものだ。

諸君らのリソースを間借りすることで、ピンクは強くなった。

なぜ演算能力が現実に影響を及ぼすかについての考察は、別項で述べる。

今回の推察は、ピンク理論の基礎になるものだ。

もしも、議論したい場合は、チャンネルの登録をよろしく願います。

それでピンクは空も飛べるようになるかもしれない。

ピンクはいつかヒロちゃんといっしょに空を飛ぶんだ！」

【ピンクちゃん。コメント少しは見ようよ？】

「あ、いま。スマホから連絡があったぞ。ヒロちゃんだ。あ、うん。ちゃんとコメント見るぞ」

【最初は緊張してコメント見る余裕ないよね。がんばってね。ピンクちゃん】

「うん。ありがとうヒロちゃん！」

『仲良しだな』『てえてえ』『ピンクが喋り続けるだけの講義みたいな配信だったけど最後で救われた』『毒ピンがだんだん興奮してきてほっぺ

たピンクになるの……かわゆ』『知名度つーかさ……後輩ちゃんをおもんばかって言わなかったんだろけど、ぶつちやけ人気だよな』『八歳児の幼女天才科学者のほうが、ヒロちゃんのことしか興味がなくて他が有象無象のゴミ虫みたいにしかな思ってなさそうな後輩ちゃんより人気があるのはしかたない』『後輩ちゃんに踏んで欲しい』『そういう少数派は置いておいて』『おまえらに後輩ちゃんのなにがわかるんだよ』

「んー。ピンクのことが好きって言われるのはうれしいぞ！」

『ピンクも最初は有象無象って思ってたんじゃないかなあ』『まあ天才幼女がヒロちゃんと触れ合って、なんというかより丸くなったんじゃないか?』『ここはピンクちゃんねるだぞ。ヒロちゃんのことをメインで語るのはマナー違反』『ピンクちゃんねるって、なんというか……その卑猥ですよね』

「ピンクも、うぬぼれてた。ヒロちゃんはピンクの友達だしべつに話題にだしてもいいぞ。でも、ヒロちゃんに迷惑をかけたり、ヒロ友のみんなが争うのはあまりしてほしくないと思うぞ」

『なんだただの天使か』『毒ピンの毒が抜けたらただのピンクじゃん』『こうやってかわいいって思わせて想いをマイニングするつもりなんですよ。えっち』『つーか、ピンクを見に来たんやで』『オレらのこと名づけて〜ピンクママ〜』

「そっか。ピンクの友達か……。じゃあ、ピン友……というのはなんか語呂が悪いから、ピンクフレンズということにするぞー！」

『友達作戦?』『フレンズか』『わーいたのしー』『既に懐かしい』『けものフレンズは死んだんだ。君も人生と向き合う時なんだ』『ピンクの人气が上がれば上がるほど、パワーが上がるんだよな。その実証を今まさにやろうとしているのか?』『とりあえず課金しとこ……?50,000』『ヒロちゃん越えもあるのかなあ』

「ヒロちゃんはインフラそのものだからピンクがヒロちゃんを越えることはないぞ」

『ヒロちゃんはインフラか』『ちよつと待てそれってマルチしようほ……』『構造的にはそれかWWWオレらは搾取されるだけの存在』『搾

取か……まあゾンビになるよりはマシだけど』

「ピンクとしては人間とかゾンビとかそういうのはあまり深く考えないで、みんなが自由に空が飛べるようになる世界を思い描いてほしいぞ。どんどんヒーロゾンビが増えるほうが望ましいぞ」

『やっぱり毒ピンは毒』『幼女らしい小悪魔的発言の可能性』『毒をくらわば皿までってやつなんじゃ』『人間の遺伝子とか物質的なところは変わってないみたいだけど、再生能力とかつくのはちよつとなあ』『臓器の移植手術とか受けたりするし、そもそも人間だって再生能力はあるぞ。ちよつとそれが強くなっただけ』『でもピンク理論だとヒーロゾンビよりただのゾンビが増えたほうがよくね?』『多田野はゾンビだった?』

「ゾンビは基盤にはなっているかもしれない。つまり、再生力の源にはなっている。ただ、やっぱりゾンビは考えなしだから演算力はヒーロゾンビとか人間のほうが強いぞ。仮にゾンビが全員ヒーロゾンビや人間に戻ったとしても、ヒーロ力が減ることはない」

『だからってヒーロゾンビになりたいとは思わんがなあ』『超能力ほしー。すごい』『頭わるわるになるとゾンビになっちゃうぞ』『ピンクのなんなんだぞって言い方すこ』『オレのピンクちゃんへの想いをうけとってくれー!』

「ゾンビが考えなしって言い方は悪かったかもしれない。滅私——あるいは利他的というほうが言葉の印象としては近いかもしれない」
『ゾンビは愛でできている?』『ゾンビは利他的存在?』『おなかすいたんで食ってるわけではないのか』『周りに流されやすい共感力の高いやつがゾンビになるってことなんじゃ?』『まあ生き残ってる時点で俺らもけつこう意地汚く生きてはいるわけで』『そーいや全世界で人類ってどれくらい生き残ってるの?』

「人類がひとり残らず生存するためには、実はヒーロゾンビよりも不活性なゾンビのほうがいい。それはピンクのママ……所長も書いてる」

『ああ、あれかあ』『時間的にヒロちゃんの救済方法では間に合いそうにないってやつな』『町内から少しずつゾンビ減らしても間に合う

わけねーべ』『日本だけならギリギリ助かるんだろうけど、その前にオレら全滅するよな』『餓死はいやだー』『ゾンビにもなりたくねえよお』
「だったらヒロゾンビになるほうがいいと思うぞ。ご町内にひとりくらいのペースでヒロゾンビがいれば、ゆるやかに調整しながらソフトランディングできる。ゾンビに勝利できるぞー！」

『ううむ。八歳児の誘惑』『ピンクちゃん尻尾生えてないかな。悪魔的なやつ』『でも言うてることは正しいわ。わが国ではヒロちゃんが好みそうな小学生の美少女を選出中』『ピンク理論から言えば人気が出そうなアイドルを選んどくべきだよな』『ちよつと待て。抜け駆けはするいぞ』『おまえら内政干渉はしてくるなよ』『ヒロちゃんがダメならピンクちゃんからでもよくね』

「そうだな。ピンクはここにいるぞー！」

『なるほど、公海！』『その手があったか』『これはいよいよピンクちゃんのほうが重要に』『毒ピンは自分がタゲとってヒロちゃんの騎士になるか。いよいよよてえてえ』『ヒロちゃんは佐賀の田舎で配信を楽しんでればいいってことか。身の丈？』『おい身の丈やめろ！』『でもピンク理論にも穴はあるんだよな……』『穴？』『ヒロちゃんがインフラならヒロちゃん次第でいろいろと変わってくるというか』『ヒロちゃん排斥派の根拠もまた提示してしまってるということか』

「ヒロちゃんは管理者なんだ。インフラそのものじゃない。誤解を招くような言い方になってしまったのなら謝る。管理者のいなくなつたゾンビたちはどうなるかわからないだろう。この力だつてどうなるかわからない。だからヒロちゃんを傷つけたらダメだぞ。ピンクは怒るぞー！」

『ヒロちゃんを傷つけるつもりはないけど……』『ヒロちゃんが突然事故死したらヒロゾンビがめっちゃ強いゾンビとして暴れまわったりしないよね？』『その可能性もあるか。わが国はいましばらく静観のかまえをしたい』『おまえ手のひらぐるんぐるんやな』

『緋色様が神様になるというのでしたら、使徒が増えるのは喜ばしいことです』『仮にヒロゾンビが増えまくったらヒロちゃんのパワーもモリモリ増えてモリモリレベルアップしてくつてことですよっ？』

『指先ひとつで地球破壊できるレベルになったらどうしよう』
「ヒロちゃんはただみんなに余暇を楽しんでもらいたいだけだ。人類を救うスーパーヒーローをやりたいわけじゃない。みんなといっしょに配信を楽しみたいってただけだぞ。できれば——、みんながヒーローになればいいと思ってるはずだ」

★
＝

ツマリ……。

ゾンビが減びた後で。

夜月緋色とヒロゾンビをハイセキすれば、ニンゲンの主権をトリモドセル。

★
＝

「ハローワールド。緋色先輩の動画ではさんざんうちよろしかった後輩ちゃんです。よろしくお願いいたします」

『ピンク理論が出た後に即座に動画配信を始める後輩ちゃん！』『後輩ちゃんって健気だよ』『ピンクちゃんのいっしょに空を飛びたい宣言から、わたしも！』となってる確率100パーセント』『その場にヒロちゃんがいなくてもえてえよ……』

「……本音で言えばそうです。わたしも先輩といっしょに空を飛びたいと考えてます。だから皆様、ちゃんねる登録してください。お願いしますー！」

『初手に頭を下げる後輩ちゃん』『いきなり懇願動画』『お願いするのはいいけど、この動画配信はなにすんの？』『オレたちを楽しませてくれよ。ぐへへ』『後輩ちゃんのパパ活』『リアルにヤバイのはやめろ』『甘い顔したらすぐこれですか。本当に度し難い。今のような言葉を先輩に言ったらわかってますね。……滅しますよ』

『ひっ』『ひっ』『ふう……』『おい』『我々の業界ではご褒美ですから』

『しかし真面目な話なにするんだ？ ゲームとか？』『配信も幅広いな。ヒロちゃんと被ってもピンクには勝てんだろ』『人気は偏る傾向にはあるだろうが、ピンクが人気でたからって後輩ちゃんが不人気になるわけじゃないと思うぞ』『しかし、ピンクはかわいいしな……なんつーか素直だし』

「まあそうですね……、わたしはどうせ重い女です」

『初手に鬱キャラだすのはNG』『配信って大好きなもんを語る場所だからな。自分語りもいいけど、大好きなヒロちゃんについて語ってみれば？』

「あ、それいいですね。採用です。えっとまずは先輩のかわいいところからあげていこうかなと思います」

「で、後輩ちゃん、ここはね。ブロックするんだよって身体をちよつとだけ寄せてくるんです。柔らかくていい匂いがして、ちよつと照れた顔になるときがものすごくかわいいんです！」

『6時間』『運営会社はヒロちゃんたちの放送時間は無制限にしたからな……』『後輩ちゃんってやっぱり、その……あれだよな』『ヤンデレ』『ピンクに診てもらったら？ ヒロちゃん依存症とか診断でそう』

「失礼な。緋色先輩は本当に超絶かっこいいだけです。あ、次は先輩のかっこいいところベスト100を発表しましょう」

『後輩ちゃんが空を飛べる日って来るのか？』『ニツチだけど需要はあるようなないような』『筆頭ヒロ友としてちゃんねる登録数はえぐいことになってるけどな』『ヒロちゃんの普段の生活スタイルとかがわかるのがあるがたい』『ていうか……毒ピンとちがってもしかして後輩ちゃんっていつしよに住んでないか？』『百合ですね。ズボンももう脱いでました』

「百合じゃありません。わたしは先輩を先輩として好きなだけです

！」

『百合はみんなそういうんだよ』『ガチレズだろどっちかという』『ヒロちゃんの貞操が危ない』『そういや思い出したんだけど、お酒飲んでるときに後輩ちゃんキスしてなかった？』『あ……』『ガチだわね』『心神喪失状態だったんだよ』

「そのときは……ちよつと反省してます。先輩の気持ちを考えてませんでした」

『反省できるいい子』『後輩ちゃんが先輩から巣立つときが来るのだろうか』『むしろドロドロのレスエンドだろ』『野獣の眼光がこわE』『後輩ちゃんがオレらのことをゴミ芥以外の何かとしてみてくれることってあるのかなあ……』

「ちや、チャンネル登録してくれたら少しは考えます。わたしはあまり人と話すのが得意なほうではありません。だから、お手わらかにご教授ください」

『ヤンデレな生徒を育て上げる先生役か』『このミッション。難しすぎる』『天才で孤独な少女を救うミッションだぞ』『まあぶっちゃけオレらがいなくてもヒロちゃんがよしよししてくれてれば勝手に救われそうではあるが』『後輩ちゃんの人気出るといいなあ』

ハザードレベル100

「ボク、この町の市長になりますー!」

高らかと晴天に向かって宣言する。

といつても、バーチャルな空だけだね。

それでも、どこか懐かしい原風景はボクらのこころを優しく撫でる。

突き抜けるような青空。

そして柔らかな稜線を描く緑豊かな山が遠くに見え、都会つぽさの見られないごく普通の町並みは、どこか故郷の風薫る。

『開幕矛盾』『町の市長。また新しいワードが』『なんの話?』『普通の日本風町並みだな。ものすごい完成度だが』『市長? 町長じゃ無くて?』『ヒロちゃんがいるところは町。佐賀市はむしろ大都会』『クリキン?』『おっさんよ。今だけは許してやる』『しかし、このどこか懐かしい風景は郷愁を誘う』『町つっつか下手すると村』『全体を見れば都会つぽい部分もあるぞ』『グンマーといい勝負してるよなあ』

「あのね。みんなにありがとうって言いたくて。今日はボクにとつての特別な日なんだ。だからボクがいるところにみんなを招待したかったの。現実には難しいと思うからせめてバーチャルでね」

『ん。特別?』『なんの話?』『知ってるぞ……ヒロちゃんの』『ああああっ!』『どうした雷電』『そうだよ。ヒロちゃんの配信100回目記念じゃん』『おおおおおっ』『マジか』『カウントしてる人いたんか』
カウントしてくれてる人いたんだね。

ボクもうれしいよ!

世界にゾンビが溢れて早くも5ヶ月。

ボクが配信を始めて早4ヶ月。

わりと暇だったこともあり、結構な頻度で配信してたせいか、いつのまにやら100回を迎えました。てか、命ちゃんが数えててくれたんだけどね。記念配信はしないのだった。

他の配信だと登録者数が何人を超えたとかですることが多いけど、ボクの場合はたぶん上限いっぱいまでいっちゃってるからもう増え

ようがない。もしかするとなんかのときのための予備アカウントとかも多クまぎれてるのかもしれないけどさ。

ともかく——配信回数だ。

人間キリがよいということに意味を持たせる生き物だからね。

『100回おめでと〜』『オレらもよく5ヶ月も耐えたな』『もうすつかり冬だからな』『北海道は寒すぎてゾンビが白くなってた』『ホワイトゾンビか』『凍ってもゾンビって動くの?』『動きはさすがに鈍くなるけど普通に動くぞ』『マジかよ。北海道移住しとけば冬の間は大丈夫だと思ってたのに』『たぶん部分的に現実改變能力を使ってるんじゃないかな』『ピンクもそう思います』

世間はいろいろと大変だけれども、ボクはボクのできることをします。

ヒロゾンビについてはピンクちゃんに任せたほうがよさそうだしな。流されているかもしれないけど、それはそれでボクの自由。ボクの選択だ。

「さて、このゲーム。もう気づいている人もいると思うけど、『市都空線』といって、自分好みの市や町や秘境みたいなどころを作ることができるんだよ」

『直訳定期』『ちゃんと全部直訳できたね。えらいね』『市で終わらないで市都っていうところがポイント高い』『ピンクもそう思います』『ピンク、おまえは自分の動画配信がんばれよw』

今日のボクは単独配信。

でも、ピンクちゃんも見てくれてるみたいだ。

おそらくは西のほうでネットにつながってるんだろう。

『ピンクちゃんはマルチタスクができるからね。ボクの配信見ながら次の動画の準備をしているみたいだよ。実を言うと、この配信のための準備もだいぶん手伝ってもらいました』

『ヒロちゃんにしてはディテールが細かすぎると思った』『既にほぼ完成品じゃん』『現実のとおりなの町並みなのか?』『完全コピーじゃないが空気感はでてるよ』『後輩ちゃんとピンクに手伝ってもらったのね』『じゃあヒロちゃんはなにをしたんだ?』『そりゃ決まってるだろ。見て

「たんだよ』『世界一姫プが似合うユーチューバーだしな』

「あのねー。ボクだってちゃんとやったよ！ ほら、こことか」

マウスをクリックしてマップを拡大する。

コンクリートの地面をみんなに見せる。

『なにもないように見えるが』『ん？ ああ……これは地味にすごいぞ』『そうか田舎の道だしな。あえて白線を薄くしているのか。かすれてるしな』『それだけじゃない。道をいい具合に汚しているー』『え、都市全部にこれを施したのか？』『狂気の産物』『時間泥棒されちゃってるな』

「そう、キレイに汚すのがポイントなんです。ピンクちゃんも後輩ちゃんも、マクロだと自然な感じにするのが難しいって言ってたし、がんばってゴシゴシしたんだよ。マウスを使って一生懸命ゴシゴシしたんだ」

『道ゆかば……』『それはそれとしてこのゲームって町を作るゲームだろ。これからなににするんだ』『これからヒロちゃんが単独で町を広げるんだろ』『後輩ちゃんもピンクちゃんもいないのにできるの!? ヒロちゃん!』『誰か手伝ってあげて!』

みんなのボクに対する期待値が低すぎる。

「まあ、この町はもうほとんど完成しているけど、まだ、できあがっていないところがあるからね。ほら、いまここK町とS市は道が断線しているでしょ。ここをつなげる作業が今日のメインかな」

ボクがいるK町。そして北西方向にあるS市。

ふたつの都市は今つながっていない。

『ほーん』『道をつなげるだけならまあ……』『ヒロちゃんががんばって』『道をつなげるだと……。なんて高難易度なんだ。もつと簡単にしてあげて』

だからどんだけ期待値低いんだよ。

道と道をつなげるのはめっちゃ簡単。今のところ二つの都市。ボクがいるK町とS市は完全に分離されている。よく映画とかであるように道路が寸断されていて互いに行き交うことができなくなっている。どうしてそんなことが起こるのかというと、現実世界と同じく

いま両市はバリケードに覆われていて交通を遮断しているからだ。進撃の巨人みたいな壁に覆われた町をイメージしてほしい。もつともあの漫画みたいに巨大な壁じゃなくて、バリケードはブロック塀くらしいの高さしかないけどね。

「ボクが市長として説明してあげるね。この状態のなにがダメなのかわかるかな」

『電気と水かな』『S市にも電気と水あるの?』『現実とは違うが、普通にぽつんと一軒屋の隣に原子力発電所立ててるやん。住んでる人軽く地獄』『公共の福祉』『大事の前の小事』『最大多数の最大幸福』『おまえらしい加減にしろw』『よく見たら隣は産廃場とサンドイッチ状態でさらに地獄』『サスケエ……』

「し、しかたなかったんだよ。この市都の中に建築しないと効果がなからね。それで、えつと、電気と水。正解です。K町は単独では電気も水もまかなえません。このままじゃ住民のみなさんが困ってしまいますね? だからふたつをつなげる必要があったのです。じゃあいきますよ」

ズビヤつとマウスで線を描く。

こんなの簡単だよ。いくらなんでもボクにだってできる。

そこまで完成させたのはほぼピンクちゃんと命ちゃんだけどね。

ボクは道を担当したんだ。なんか達磨に最後に目を入れる作業みたいだけど、ボクだってちゃんと関わってる。ボクは市長なんです! ってあれ?

「おかしいな。供給量が足りない?」

送電はされてるみたいだけど、肝心の人とモノの流れが滞ってるよな。

『くっそ渋滞しとるやんけ』『あれだけの都市を一本こっきりの道でつなぐのは無理ぽ』『悲報。ヒロちゃん道をつなげられない』『つなげはしただろ。ただちよつと足りなかっただけだ』『やっぱりヒロちゃんには姫プしとくぐらいがちようどいいんだよ』『はやく誰か助けてあげて』

「うぐぐぐ。ちよつと足りなかったみたいだね。で、でも大丈夫だよ。

こんなの道を広げればいいだけだからね。あれ？」

道を広げようとしたらできませんの表示。

家をびつちりと配置したせいで置けないんだ。

超グラマーなひょうたんみたいな地形になっている。

うぐぐぐどうすれば。

変にゾンビ的な今の状況に似せたせいか、道を複線的につなげようとはしていない。

現実でもボクたちが佐賀市とつながろうとしているのも、動脈になっっている大きめの道からやっていこうとしているから。それ以外の部分は何もない土地として表示している。

まさにひょうたんみたいだな。いやこれはもう鉄アレイみたいな感じだよ。極端につなげる道が細くて、そこに両端から車が殺到しているせいで交通量がとんでもないことになってる。

「そ、そうだ。お家をちよっと取り壊して道を広げたら」

『公共の福祉』『大事の前の小事』『最大多数の最大幸福』『市民よ。幸福は義務です』

コメントがボディブローのように地味に効いてくる。

ボクだってできるならみんなのお家を壊したくないよ。でもどうすれば……。

「あ、ひとつ手があったよ。ボクの腹案聞いてください」

『これいろいろイジリすぎてダメになるやつだ』『ヒロちゃん。ダメになる前にセーブだけはしないようにね』『ピンクがデータコピーしてるだろ。大丈夫だ』『もういつそ町をぶっこわして一から作り直そうか』

「大丈夫だよ。ただの置き換えだからね。つまり、この道を全部線路に置換してしまえばいいんです」

『悲報。車や徒歩でいけない町ができる』『町から脱出できない系ホラー』『しょうがないんや。小学生にとって町の外は未知の世界なんや』『しかし、車両基地はどうすんだ』

「車両基地は……えつとえつと。あ、そうだ。この都市と都市の真ん中に置こうと思います」

ボクが着目したのはいわゆるデッドスペース。ピンクちゃんも命ちゃんもボクのために用意してくれてた何も無いスペースだ。ここならなんでも置けるね！

つまり、○T○ こういう形です。○のところはS市。K町ね。

『……そのなんか公然猥褻』『うな。小学生女兒が作ったやつだぞ』
『しかし、この形は無理がありそうな』『ああ……やっぱりお見合いしてる！』

「うぐぐぐ。なんでこうなるかな」

列車と列車がお見合いしちゃっててまったく動いてない。

しかも、都市部の駅とつながってないから、お客さんが乗る場所がない。

これだと両都市間の流入もシナジー効果もないよ。

あきらかに失敗だ。

「あ、そうだ。今度こそいいこと考えた」

『がんばってヒロちゃん』『なんだか楽しくなってきた』『ヒロちゃんが市長にならない理由』『バリケードにこだわるから失敗するんじゃないかな』『単純に両端の市都から道路を複数伸ばせばいいだけだからな』『細い道でつなげるのはなぜなのか』『正論だが様式美も必要だろう』

そうだよ。様式つてもものがあるんだよ。

このS市とK町は、この小さな一本道でつなげるんだ。小さいっていつでも佐賀県じゃ一番大きな道なんだからね。ただちよつと本数が足りなかっただけで。

リアルでの事情とかみ合わせたいというのはボクのワガママだけど、みんなを記念配信に招待したいというのが動機だからしかたない。

「ここで第二腹案発動です！ この道を多段式にします」

『は？』『高架道路みたいなものかな？』『でも多段なんだろう』『多段つてなんだ？』『そんな道路あったかな？』『MODなんじゃね？』

「多段つていうのはミルフィーユみたいに高架道路を重ねます！ 後輩ちゃんに作ってもらったMODです！ なんか困ったら使ったら

いいよってもらったデータのなかに入っていました」

別窓で命ちゃんにもらったデータのフォルダを開く。

MODの導入はなんとファイルをダブルクリックするだけで簡単に適用できるようにしてもらった。全部で100個ぐらいあるけど正直どんなのが入ってるのかは使ってみないとわからない。

ちなみにMODっていうのは改造データのことね。セツトされているだけの建築物とかでも十分に遊べるけど、MODを入れたら日本風の駅とか道路とか郵便局とか、そこそこ田舎だけど都会になりきれない都市の空気感をよくだせます。

『後輩ちゃんの愛が重い』『でも多段ってよくわからん』『全部で100個もMOD用意するとか』『想像ができないな。どういうことだ』『ようは高架道路を多段に重ねただけだろ』

「そうです。まずこの道路の横道を作って……これを高架橋で空中に浮かせるよ。そして、この高架橋で空中に浮いた道路からさらに横道を作って高架橋でさらに空中に浮かせます」

『ソレは不毛の道』『また髪の話をしてる』『いやしかしそれは根本の交通量が変わらんのではないか』『合流地点が地獄』『これはひどい……』『ヒロちゃん。町はあきらめよう』『市のほうだけ生かす。町の住民には死んでいただく』『おいやめろ』

みんなあきらめるの早すぎ。

「K町とS市に人の流入がないと、物流も止まっちゃうしみんな死んじゃう。諦めるわけにはいかない！」

『キリつとしているのはいいんだけど』『見てくれよ。この無惨な道路をよ……』『こ、個人的な道路だね』『やったねヒロちゃん。道路で遭難できるよ……』『バイオハザードの建築家も賞賛するよきつと』

その後も、命ちゃんにもらったMODをいろいろと試していく。

「ワープ装置？　なんで現実世界でワープ装置作っちゃうの？　却下却下」

「やっぱり複線道路だよ。あああ、合流地点がお団子様につ！」

「空だ。空しかない。この町では定期的に飛行船がでることにします！ 着陸地点がない！ コストがコストが！」

幾多の試行回数末。

たどり着いた妥協点。それは思いもよらないものでした。

「地下鉄。これだよ。むしろこれしかないよ！」

もうみんなも佐賀のことはだいぶんわかってきたと思うんだけど、もう一度復習しとくと佐賀の地盤はゆるゆるです。そのため、地下街とか地下鉄には適していません。もちろん、いまの技術力からしてできなくはないんだろうけど、コストに見合わないだろうなと思う。だから気づかなかった。

現実的にできそうで、あまりファンタジックでないもの。

地下鉄。

これで物流も電気も水も大丈夫だ。全部地下で流してることにすればいい。

「よし完成したよ。どうみんな」

『見た目無惨な道路は残すのね』『観光名所だろむしろ』『いちおう収支は黒字だからいいんじゃない』『ようやく完成したね。がんばったねヒロちゃん』『おめでどう』

「ありがとう。でね。ここからが本当にしたかったことなんだけど、実はこの町、探索できるんだよ」

『ん？』『うおおおおお。バーチャルヒロちゃんお久しぶり！』『バーチャル！』『ヒロちゃんがバーチャルにおかえりなさいしてる』『キ

ター!』『そういうことか』

「これはボクのアバターです。でもそれだけじゃなくてね。ヒロ友のみんなを招待できるようになりました〜!」

『は?』『神アプデきた?』『もともとそんなんでできなかっただろ。どんだけ魔改造してんだよ後輩ちゃんw』『ピンクもそっちいい?』『サーバーは持つのか?』『先着何名だ?』

「えっと、ピンクちゃんごめんね。ランダム抽選で400名になります。エントリーはいまから受付開始します。30分後にインできるからみんなドンドン市民になってドンドンお金を落としていってください! 市民よ幸福は義務です」

『おかわるわるよのう』『うおおおおいま最速でクリックしたぞ』『ランダム抽選なんだから早さは関係ないだろ』『宝くじにあたるよりも確率低そう』『ヒロちゃんのアバターに近づきたい』『そうか。直接ゲームで話せたりするかもしれないのか』

みんながクリックしてくれた数は、あつという間に千を越え、万を越え。

☆
=

「ようこそボクの町へ! みんなよくきてくれました!」

ボクもアバターとして、この市都に降り立っている。みんなもそれぞれアバターを選んで触れ合えるような距離にいる。残念ながらVRというほど精密なものではないけれど、町並みは現実世界とかなり似ているよ。

『ヒロちゃんがすごく近くに。やべ。興奮してきた』『ヒロちゃんが近くにいと安心するなあ』『バーチャルだけどヒロちゃん』『配信よりも近い近い!』『町は大きな家族なんやなって』『クラナドは人生』『そんなに遠巻きに見てないで、みんなこっちおいでよ。いまからボクの町を案内するね』

400人を引率するボクは新米市長さん。

ボクも一部手を加えたところはあるけれど、命ちゃんとピンクちゃ

んのダブルエンジンで創った町並みはすさまじいリアルさを誇っている。

ボクはそこをすこし不完全にしただけ。

例えば、屋根とかをちよつと壊したり。意味のない道路を作つてみたり。

明らかに誰も使うことのない公園を作つてみたり。

そんな感じだ。

『不完全で汚れているところがいいんじゃないかな』『日本の町並みは温かみがあるからなあ』『不完全な人間が創る不完全な町。それがいいんじゃないか』『つまり機械並みに精密な後輩ちゃんとピンクちゃんのデータにヒロちゃんのものポンコツ成分を混ぜたのがこの町』『ポンコツはよくない人間味といえ』『ゾンビ味溢れてるな』

『ポンコツじゃないよつ。ちよつと今日は調子が悪かっただけ』

『せやな』『調子が悪いときは誰にでもあるからな』『遠めに見える公共工事の失敗作も市長の体調が悪かったからしかたなかったんや』『天空の道路』『なんかかっこいいみたいな感じだそうとしても無惨すぎるだろあれ』

『ううう……S市のほうはあとから紹介するから、まずはこつちからね』

ボクはアバターを動かして、みんなを引率していく。

まずは町の中心部。

「ここは町役場だよ。いまは300人くらいの人が住んでるみたい。そろそろ限界っぽいからいよいよ町の外にみんな出ようってことになつてるよ」

『誰がどこに住むとかどうやって決めたの?』『狐面の町長が適当に割り振ったとかじゃない?』『不満は誰がどうやってもでるだろう。お金持ちの家に住みたいとかさ』『人が適当に少なくなるんなら町役場に残るのもアリなんじゃない? 電気も水もあるのってそこぐらいだろ』

「この町に入植してくれたみんなと同じで、抽選で決めたって言つてたよ! 水と電気の問題があるから、とりあえず半分の150人くら

いが近々移る予定です。でも冬だからね。体力ある人だけだよ」

『抽選か。まあそれしかないよな』『集団生活じゃなくて個人のスペースが確保できるのはうれしいだろ』『いや俺の場合、屈強な戦士たちと寝屋を共にできるのはうれしいぞ(ぽっ)』『そうか。痔にならないよ気をつけるよ』『パイロゾンビになればそもそもゾンビに怯える必要ないだろうから、俺は普通になりたいけどな』『そのあたりの窓口はピンクが請け負ってるんだっけ?』『ピンクちゃんねるではそういう話だったな』『公海上でパイロウイルスを渡すって話か』『はよしてくれ。間に合わなくなっても知らんぞ』『国民の意思が固まらんのよなあ』

雑談多いね。

まあゾンビをどうするかっていうのは、もはやボクの配信では切り離せない問題だからな。

ピンクちゃんはボクの肩代わりをしてくれてるみたいだけど。

やっぱり、インフラであるボクを完全に無視することはできないみたい。

「はい。次に到着したのは、K町にあるS小学校だよ。道を挟んで反対側にS中学とS高校があります」

『ヒロちゃんもここで学んだのかな』『オレそのこの小学校について最近まで通ってたけど、ヒロちゃんみたいな美人さんはおらんかったような』『おまえ何歳だよ』『15歳だけど?』『うーん。小学一年くらいでもヒロちゃんなら一発でヒロちゃんだよな』

「あの一、ボクはそのこの小学校には通ってないよ」

そもそも佐賀に来たのは案外最近なんだ。

よく考えると、佐賀のこの町でみんなといっしょに町おこしをしているのは、わりと偶然の産物なんだなあと思う。

それをいつたらボクが小学生並の女の子になって、ボスゾンビみたいになってるのも偶然なんだろう。人生、偶然が多いです。

でも、ボクが選んだこともある。

「はい。次はこの町でも結構有名なT温泉宿です。ボクも入ったことがあるけど、お肌がぷるんぷるんなるよ」

ゾンビになった女の子——令子ちゃんを人に戻したり。

「ここは町の図書館だよ。そこまで大きくはないけど、なろう小説とかも置いてあるから結構楽しいよ。漫画はちよつとしかないのが悲しみ」

人類の文化を守ってみたり。

『なろう小説?』『知らないのか雷電』『うーん。聞いたことがないな』『なろう小説とはチート持ちの主人公がハーレムしたりスローライフしたり、俺またなんかやっちゃいましたかしたりする小説のことだ』『ラノベか?』『ラノベよりストーリーとかキャラが薄味なやつだぞ』『そのなになが楽しいんだ?』『哲学だなそれは』『俗っぽさがいいんじゃないか?』

俗っぽい文化も文化だよ!

文化に貴賤なし。

「ここはコンビニです」

『コンビニだな』『コンビニ?』『え? 普通のコンビニだよね』『こんな町のはずれにコンビニか。田舎のコンビニは24時間営業じゃなかったりするな』

「うん。ここは23時には閉まるよ」

『マジか』『働き方改革』『いいこと考えた。ゾンビに働かせておけば24時間営業可能じゃね?』『ゾンビの労働力転用か。赤い国だと案外できそうだけど民主国家系は人権屋が騒ぐからな』『だったらおまえらゾンビから人間に戻すときに、高齢者や障害者も分け隔てなく戻すのかって話だよな』

ゾンビを働かせるという発想は実は珍しいものじゃない。

たとえば——。

|||||

ザ・キングダム・オブ・ザ・Z

よくあるゾンビものと思いきや、キングダムの名のとおり国興しを考えているJKさん。

『ゾンビって休まないのよ。ずっと動ける。だから装置さえあれば無

限に電気が作れる』

という台詞に痺れた人は多数いるはずだ。

|||||

ボクの町もそういうふうになっていくのかな。

町を開放していく中で、有料老人ホームとか精神病院とかも見てきたけどさ。みんな元気になってワチャワチャ歩いていたよ。

その人たちをもしも人間に戻したら一気に介護しなければならぬ人数が増えて大変になる。町長はNOといった。ボクもしかたないのかなと思った。

そういう話だ。

ゾンビは消費ゼロで無限に電気を作れる究極の生産性を持つてることになるし、効率とか生産とかのキーワードだけで考えたら、みんなゾンビにしてしまえばいいんじゃないかなあ。

とはいえ、家族が見つかった人も中にはいて、その人たちを人間に戻したりもしたけどね。

選別しているというのは、どうにもよくない気がする。

『ヒロちゃんがまたアンニユイ顔になってる』『ヒロちゃん大丈夫。ぽんぽん痛い?』『おまえらがゾンビを利用してしようとするからだろ』『しかし、ゾンビに対しての恐怖心とかもあるしな。せめて利用して恐怖を克服しようって気持ちがあったっていいだろ』

「大丈夫です。えっと、最後の目的地はここですね。ボクのおうちです」

バーチャルとはいえ、ボクのお家を見せたのは始めてた。
すこしドキドキする。

でも、いままで配信をやってきて、ボクを受け入れてくれたみんなへのボクなりの誠意の見せ方だった。マナさんにはまた甘くいつて言われちゃうかな。

『ほうん。なんの変哲もないアパートやな』『ヒロちゃんも生きてここにいるんやなって』『どこかの天界から来てるわけじゃないんやね』『中に入れないのがつくづく残念』『町役場から歩いて十分くらいの距

離か』『ヒーロゾンビ荘だったりして』『まあ引越しなんて秒で可能なんだろうが』『仮の住まいかもしれないしな』

まあ賃貸ではありませんでしたけど——。
ボクにとっては初めてのボクのお家なんだよ。

☆Ⅱ

「次はS市のほうを案内しようかなって思います」

問題はそこまでどうやっていくかだよね。

徒歩だと時間がかかるところだし、車やバスで行くにしても、あの芸術的な道路のせいで、めちゃくちや時間がかかってしまう。

しかたない。

ここはまた命ちゃんの力に頼りますか。

『後輩ちゃん。確か舞空術MODあったよね』

DMを飛ばして命ちゃんに聞く。

100もMODがあるとどうしても一息には理解できない。

適用しやすさのためか正規表現的な問題なのか、全部英語表記なんだもん。

英語よわわわガルだと難しい。

『ありますよ。先輩』

『なんて名前だっけ？』

「Z戦士とかそういうファイル名だったはずです」

「ありがと」

なるほどね。

Z戦士といえばドラゴンボールのことで、ドラゴンボールといえば舞空術だ。

見てみると、Zのファイルはふたつある。

「Zmode」と「ZWmode」

どっちなのかな。

まあいいや。似たようなもんだろ。

みんな待ってるし、早くしよう。

「はい。みんな集まってください」

『ん。どうしたの?』『ヒロちゃんが得意げな顔になってるな』『みんなあちゅまれー』『はーい(素直)』

「これからS市のほうに向かうのに、徒歩だと時間がかかるから、みんなに舞空術を授けます」

『おお。超能力』『やったぜ』『ヒーロゾンビになれば現実的にありそうな展開』『ピンクちゃんがふんわり浮いてたのは感動した』『緋色様のお力の一端をいただけるんですね!』

「じゃあ。いくよ」

MODの適用完了。

範囲指定になってるみたい。全員は入らないからとりあえず先頭の数十人を囲んでつと。

「よし。スタート」

★
＝

やつらが迫ってきている。

炎で包まれた町中をのそのそと早歩きしてくるやつら。

ヒロちゃんがMODを適用した瞬間に、前にいたやつらは軒並みゾンビになりやがった。

そして当然の権利のように、当然の事象として、当たり前前に隣のみだ人間だったやつに噛みつきやがった。

「お客様お客様お客様!!!困ります! あーっ!!!困ります!!!ゾンビは困ります!!!あーっ!!!あーっ!!!ゾンビは!!!お客様!!!あーっ!!!お客様!!!」

ヒロちゃんが絶叫していた。

『ゾンビになるとどうやらコントロールできなくなるらしい』『せっかくヒロちゃんの町に入植したのに死にたくねえ』『あああああ。ヒロちゃんたずげで』『NPCも噛まれていつのまにやらゾンビだらけだぞおらあ』『おまえもゾンビにしてやろうか』『てめえ。自分がゾンビになったからって楽しんでんじやねえ』

はは。

なんか笑えるな。

身体はゾンビハザードが起こったときみたいに自然とゾンビから逃げるようにできているが、あのときみたいな深刻な感じじゃない。ヒロちゃんの慌てふためいている顔が、そう思わせるのかもしれない。

あ、これコメディなんだなって。

現実はいまだゾンビに溢れてるが、ヒロちゃんはがんばってる。なんとかなるさと、そう思ったんだ。

ハザードレベル101

今日は何の配信をしようかな。

そんなことを考えながら町役場の中を歩いているときだった。

ボクは脳内でいろいろと妄想しながら——想像しながら歩いていたから、視線は右斜め上のほうを向いていた。そんなわけで前のほうでなにが起こってるか知りようもなかったんだけど。

なにやら喧騒が聞こえてきた。

玄関ホールの方で、探索班のひとり湯崎さんと、なにかといろいろと文句をつけてくる辺田さんがまた言い争っていた。

このふたりって犬猿の仲だよね。

年齢的には辺田さんのほうが若く、金髪に染めたピアスとかつけてる、なんといえればいいか、往時であれば『ウエイイ』とか言ってそうな感じの人。DQNではないと信じたい。

湯崎さんはダンサーでもやってたのかな。すごい筋肉をしている細マッチョ。

体格的には湯崎さんのほうがしなやかな筋肉質って感じで強そうだけど、負けん気というか、私の強さでは辺田さんのほうが一枚も二枚も上手って感じ。

いい年した大人どうしがって思ったりもするけれど、大学生になってもボクの子供年齢なんて小学生の頃からそんなに変わってない気もするし、少しばかり年齢が上でもそうなのかなあとと思う。

「いい加減にしろよオマエ。なにもしないくせに」

湯崎さんが辺田さんの肩のあたりをドンと手のひらで押し出した。

よろける辺田さん。すぐに睨み返す。

対する湯崎さんも辺田さんを睨みつけている。

こういうの知ってる。

不良同士がやってるらしいメンチ切ってるってやつだ。

剣呑な雰囲気。

なにを言い争ってるのかは前段部分を知らないからなんともいえない。

けど、湯崎さんには探索班をやっているという実績がある。ボクがいないときから、ゾンビをかくぐつてみんなのために活動してきた湯崎さんだから、辺田さんに対しては何もしてこなかったくせにという反発心があるように思えた。それをいっちゃうと、町のみんなもそうなんだけどね。

まあ、互いに犯人扱いしたりされたりした仲だからしょうがないんだろうけど、剣呑さを周りに広げるのはやめたほうがいいんじゃないかな。

ほら。

周りのみんなは遠巻きに見ている感じで、どちらかといえば関わりたくないみたいだ。

そりやそうだろう、と思う。

いまはようやくゾンビテロ犯が捕まって落ち着きを取り戻しつつある時期だ。

できれば、このまま穏便にいきたいはず。

ふたりとも顔を歪ませて、襟首をつかみあい、いまにも殴り合いの喧嘩を始めそうな様子。

周りに町長やゲンさんはいないな。

ぼっちさんは——いた。けど、未宇ちゃんを後ろに隠して遠めに見てる感じ。積極的に関わろうという気はないみたい。喧嘩しているふたりに割って入るのも勇気がいるんだろうと思う。余計に関係がこじれてもって思うしね。

ついでに言えば、命ちゃんは常にボクの隣にいるけど、基本的に男の人には近づかないのです。

ボクも未宇ちゃんを守護るぼっちさんみたいに隠れてようかな。

……ダメですか。そうですか。

なんとというか視線だけで期待感がわかる。

ボクが出て行けばひとまず丸くは収まるだろうしね。

みんな仲良くしてほしいし、一肌脱ぎますか。

「どうしたの？」

ボクは何も知らない小学生のような感じで聞いてみた。

「ヒロちゃん」

両方の声が重なる。

「こいつが悪いんだよ」

また重なる。

あんたたち実は仲良しなんじゃない？

とりあえず、ボクは少し迷って、辺田さんに先に話を聞くことにした。

ボクって、どちらかといえば探索犯の人たちと仲が良いように思われてるだろうから、探索犯の肩をもったって思われないうちにね。

すこしは空気が読めるようになったボクなのです。

「ゲンさんのことだよ」と辺田さん。「いくらなんでもおかしいだろう。んう。正解。」

ゲンさんが『カエレ』の文字を書いたことは、無事にみんなで考えたカヴァーストーリーで、小学生並の言い訳をして、ふたをしてしまったことだけど、実際にはボクに対する拒絶感みたいなものもあったのは確かだ。

町役場のみんなの前で言い訳するときには、ゲンさんは隣にいた。実際にいる人物としてみんなの前に姿をだしていたからね。

配信のときみたいに謎のジャパニーズ忍者が、ジュテツカの暗躍を感じ取って警告のためにあの文字を書いたんだっていう線には無理がある。

ボクができるのは――。

「それで？」

無知な子どもを演じること。

「それでって……いいのよ。ヒロちゃん」

「うん。いいよ」

ボクは断言した。仮にゲンさんがどのような動機であの言葉を書いたにしろ。

被害者であるボクが同意していればおおよそのことはOKという理論だ。

辺田さんは二の句が告げない。

辺田さんの理論はボクのためを思つてのものだからね。本人から否定されてしまったら何もいえなくなる。

「こいつは抽選に落ちたから、そういうことを言ってるだけだよ」と湯崎さんは怒りの声。

仲間であるゲンさんを貶められたというのが喧嘩の原因か。

ちなみに、抽選つていうのはボクが広げた町役場の外の家に住むことを指す。リソース的にすべての人間が役場の外に行くほどの広がりではなくて、電気も水もまだごく少量を配分していくしかない状況だ。公平を期すためには抽選という方法しかなかった。原始的な紙のクジをひくつて方法だけだね。だいたい300人くらいいるなかの半分以上は町役場周辺の家に住む権利を与えられた。半分以上は居残りだ。その居残り組のひとりが辺田さんで、それが不満じゃないかといつてるんだ。

「ちげーよ。やっぱり探索班のやつらは自分の都合のいいようにやつてるじゃねーか。まだ子どものヒロちゃんを騙して好き勝手やってんだろ！」

「あの一。ボクつてわりと自由な意思でいろいろ決めてるつもりなんだけど」

「それもそういうふう誘導されてるんだよ」

誘導ね。

むしろボクみたいなボスゾンビのほうが、みんなの意思を好き勝手に誘導してるかもしれないのに、辺田さんは逆のことを言ってる。

すこしおかしいなつて思つてしまった。

「まあ誘導というか摩擦というか。人間いつしよに暮らしているとストレス溜まるものだと思うよ。ボクだつて本当のところはお家に引きこもつてただ配信だけしときたいくらいだし」

ヒロ友たちと仲良し空間でワチャワチャしときたい。

リアルでの交流はいろいろと雑多なノイズが混ざるからなあ。

面倒くさいの一言に尽きる。

「そんなこといわないでくれよー！」

辺田さんが焦つた声をだしている。

湯崎さんも。あるいは周りにいるみんなも焦っていた。

そりやそうだよな。

ボクがこれ以上協力しないって言っちゃったら、ゆでがえるみたいに、ここで餓死するか。無理やり外にでかけて行ってゾンビサバイバルに突入だ。

「ごめん。いいすぎたよ。ちゃんと協力はするから安心して。でも誰かに誘導とか洗脳とかされているわけじゃないって、これでわかったでしょ」

「お、おう」

「じゃあ、喧嘩もしないでね」

「わかったよ。ヒロちゃんがそう言うなら……でも、みんな待ってるんだよ」

「え、なにを？」

「もつと豊かな暮らしを、っーかさ。安心できる暮らしをさ」

「うん。わかった。そうなるようにがんばるね」

そのスピード感覚は、ピンクちゃんのママをして——複雑な計算式を用いて『間に合わない』とのことだったけれども、人間の感性において妥協できる範囲をいま模索しているところ。

つまりは——ヒイロゾンビの扱いについて。

そこさえ確定しまえば、ピンクちゃん経由で間に合わせるだろうし、ボクが考えなくてもよくなっている。あとから聞いたことだけど、これって命ちゃんとピンクちゃんの話し合いがあったみたい。話し合いというか談合というか。まあそんな感じで。

ボクにはない思考と発想で、事態が伸張していくのは少し怖くもあったけれど、ピンクちゃんも命ちゃんも一歩踏み出したってことなんだろう。

ボクとしては後輩であり妹分である命ちゃんがボクの手を離れていくようで寂しくもありうれしくもありって感じです。この子ってボクにべったりちゃんだからな。物理的に離れていたときはそうでもなかったんだけど、ゾンビハザードが起こってからは特にそう。

全体的に言えば、ボクは命ちゃんの成長が好ましくあるのです。

「先輩はむしろ幼女に退化……」

うるちやい！

ま、そんなわけでゾンビ的な話は、町役場以外は少し荷を降ろすことにしたのです。

「まってくれよ。ヒロちゃん」

「んー？」

まだなにかあるの？

「オレがヒロちゃんに感染したいっていったら、オレもヒロゾンビになれるのか？」

驚いた。

初めてだった。

ボクに対して明確に自分の意志でヒロゾンビになりたいって言ってきた人は、辺田さんが初めてだ。

ピンクちゃんも態度ではヒロゾンビになってもいいってタイプだったけど、すこし毛色が異なる。辺田さんの場合は、単純に外に行きたいんだろうか。

人間のこころはわからない。

他人のこころはわからない。

だから、少し興奮気味な血走った瞳を覗いてみてもなにを考えているかわからない。

「えっと。他のみんなとも相談してみないといけないかなあ？」

玉虫色の回答です。ここにはピンクちゃんもマナさんもないしね。

なにしろ、ヒロゾンビが好き勝手に増えまくったら、人間との折り合いをつけるのが難しくなる。ピンクちゃんとか、わりと過激で、ヒロゾンビが多数派になっちゃったら逆に何もいえなくなるよと行ってたけど、それで本当にいいんだろうか。

ピンクちゃんや命ちゃんが配信することになってから、ボクはどんな力が増していつている。

ヤバイくらいの速度でレベルアップしているのを感じる。

ピンク理論によれば、ボクの力ってヒロゾンビの人気の累積みた

いだしね。ソレが本当かどうかはわからないけれど、確かに配信を始めてから加速度的にボクの力が増しているのは事実だ。最初は基盤であるゾンビの数が増えたことによるレベルアップ。そして、ボクの人気度によるパワーアップ。

もしもみんながヒーロゾンビになったら？

わからないけど——。ボクって普通に宇宙遊泳とかできそう。

それはそれで楽しそうではあるけれども、なんといえればいいか。貯金通帳に知らない間にどんどんお金が溜まっていくのを眺めているみたいで、小心者のボクはびびっちゃうんです。

「例えばさ」ちよっと間を置いてボクは言う。「ヒーロゾンビを識別するための何かを身につけるとかさ。なんか無いと危くない？」

「オレからしたらなにをそんなに怖がってるのかって話だけだな。ほとんど見た目人間だろ」

「そういう考え方の人もいるし、そうじゃない考え方の人もいるし。いろいろだよ」

そういろいろ。

テロをおこしたり落書きしたり、ボクの寝ているベッドにもぐりこんできたりといういろいろだ。

「ともかく——ボクひとりです勝手には決められないな」

そういう段階を通り過ぎて、というか。

「なんだよ。結局、出し渋りかよ……」

と、辺田さんは納得していない様子。ボクはみんなの前で、本人にその気があるんならヒーロゾンビにしてもいいよ的なことも言うてるからな。

辺田さんの不満もわからなくはないというか。ウソついたことになっちゃうかな。

「ごめんね。みんな決めてから——」

「オマエをヒーロゾンビにするとか、ありえねーから期待すんなよ」

って、湯崎さん。そういうふうに煽るからあ。

「湯崎てめえ！」

「なんだよ。オマエは自分のことしか考えてないだけだろ。まだ希少

価値のあるヒーロウイルスを使って一儲けしようとかそんなくだけないことを考えてるんじゃないか？」

湯崎さんの決めつけ。

そして、辺田さんがワナワナと震えている。

「お前達、上のやつらこそヒーロウイルスを国に高く売りつけようとしてるんだろ！ だから出し渋ってんじゃないか」

「てめえがどんなに喚ぶことが、誰もおまえのことなんか聞かねえよ」

ドンと辺田さんを押し湯崎さん。

よろめいて倒れそうになって——、ボクは超能力で支えた。

湯崎さんのやり方とか言い方も悪いと思ったから。

起き上がりこぼしみたいによろけた姿勢から回復する辺田さん。

「ちっ」

でも、辺田さんにとってはボクも敵側だったのかな。

そのまま、そそくさと集団の中に帰っていった。

★
＝

湯崎の野郎許せねえ。クソがっ！

ゴミ箱をへこますほど蹴りつけても、腹の虫はおさまらねえ。

べつにヒロちゃんが悪いってわけじゃねーのはわかってる。

だけど、あいつら上級国民さまは下級国民のことを何もわかってないねえ。

ヒロちゃんだつてわかっているわけじゃない。

ゾンビのうなり声が遠くに聞こえるとき、オレはあの夜を思い出す。

あのゾンビが溢れた夜を。

勤め先のしがない新聞社で配達の仕事をしてたオレは、その日も——朝早く、早朝というか深夜といってもいい時間帯に作業をしていた。

オレは22歳。高校を卒業してからすぐに働くように親にいわれて、どうにかこうにか見つけ出したのが今の仕事だった。

親はろくでもねえクソ。

生活保護を受けていて、オレに『手足の一本でも失えば2万円くらい障害加算ももらえるから腕一本失ってこい』とかいうクソオブクソだ。

オレもクソ。高校までは奨学金でなんとかだったが、半分くらいは親が金をむしりとるためだけの方法だったらしい。クソから生まれるのはクソしかない。頭もよくなかったから、当然といえば当然の流れ。

さつさと仕事を見つけて、一人暮らしを始めて、親とは絶縁した。いつかビッグになってやるなんて夢もなく、単にその日を凌ぐだけの毎日。

同じ職場にはそろそろ初老にもなろうかという50歳の同僚がいて、そいつは時々、新聞を誤配しては社長にヘコヘコと頭を下げている。気の弱いやつだった。オレのことも『辺田さん』と呼んでヘコヘコしていた。周りの人間全員に頭を下げていた。

ああはなりたくねえなと思った。

けど、十中八九そうなるだろう。

オレも30年後はああなるに違いない。

そいつはある日、新聞を配達する原付で人を轢いてしまって、残りわずかな人生を刑務所の中で過ごすことになった。

轢かれたほうは、いわゆる上級国民のお坊ちやまで、親がいつそう奮起したらしい。そいつが絶対にしそうな飲酒運転をしたことになっていて、危険運転致死ということで厳罰が課されることになった。いや、もしかしたら本当に飲んだのかもしれない。そいつは世の中のストレスを一身に浴びているようにも思ったから。

ともかく——、長時間労働をさせているんじゃないかとか、そういう難癖をつけられて新聞社自体に対する風当たりも強くなった。上級国民さまの圧力なのかもしれないねえが、オレにはわかりようもない。

ただ、笑えるのはそんな新聞社に人手が集まるはずもなく、ひとりあたりの仕事量はどんどん増えている。本当にブラック企業になっちゃまったんだ。逃げ出していつてる従業員も多い。オレも深夜近く

から出勤して深夜近くまで働いている。いつ休んでいるんだ。わか
らねえ。

そいつの力なく笑う顔が思い出される。

むしように腹立たしい。

どうして世の中はこんなに不公平なんだ？

じゃあこんな職場、早く離れてしまえよと思うオレがいる一方で、
クソな職場になれた自分は踏ん切りをつけることもできない。

それに――。

「お疲れ様です。辺田さん」

「ああ、ありがとう葵ちゃん」

部屋の隅にある物置台の上を取っ手つきのコーヒークップが置か
れた。

お盆をもった白い腕がきれいに折りたたまれている。

勤め先の社長の娘さんだった。まだ中学三年生で、人手不足で手の
足りない職場の手伝いをしている。華奢な体つき。肩口にかかるく
らいの髪。

仕事場にいるせいか大人びている。

だが、やはり年相応に幼い。

オレの頭一つ分くらいは小さいが、子どものような大人のような微
妙な年齢だ。

瑞々しい肌が制服の脇から覗く。二時間ほど仕事を手伝ったあと
は部活の朝練にそのまま出るらしい。何も持っていない俺からすれば、
未来という時間を持っているだけで、葵のことが羨ましくもあり、他
方でそういうやつも生きあがっているのだらうなと思うと胸の奥の
つかえがとれるような気持ちがあった。

社長令嬢が貧乏にあえいであるというだけで、オレと同じステージに
おりてきてるってだけで、スカツとした気分だったんだ。

チラリと視線を這わせながら、俺はチラシを新聞の中に入れこむ。
そろそろ朝刊を配る時間が近づいている。

そして、その時はやってきた。

「あ………れ？」

葵はその場でよろめいて、作業台のほうに手をついた。

オレはいぶかしげに思い、「どうした？」と声をかける。

葵はうろんげな瞳になって、空を見上げていた。

オレも釣られて空を見上げる。新聞社の窓ガラスといっしょになった扉の向こう側には彗星が尾を引いていた。青白く光る帯がゆっくりと空を落ちてくる。

——世界が変わった。

葵は無言のまま、すくつと立ち上がる。

視線を地面に落としているから、髪の毛で隠れて表情が見えない。

しかし、どことなく異常な雰囲気を感じて、オレは黙って葵を観察した。

「ヴああああつ……」

普段出しそうにない声をあげ、葵はゆっくりと腕を突き出す。

その茫洋としたまなぎしはどこも知れないところを見つめ、しかしオレを標的として狙っていた。訳がわからず何の冗談だと声をあげかけて、その前に腕の辺りをつかまれた。

ものすごい力だった。今になって思えばゾンビの怪力だったわけだが、そのときはそんなことはわかるはずもない。ただつかまれた痛みに反射的に押しつけて、葵はよろめいた。

視線が腐っている。

理知の飛んだにごった瞳を見れば、あいつらが人間じゃないってことは誰にでもすぐにわかる。狂った人間を識別できるのと同じことだ。

「どうしたんだよ。葵ちゃん？」

会話は通じなかった。作業代の上にキレイに積まれた新聞の束は、葵ともみ合ううちに崩れた。

中学生の小柄な体格だからなんとかなっているが、狂犬のように噛もうとしてくる姿に本能的な恐怖が湧いた。

「どうした？」

奥の部屋から現れたのは、目に濃い隈を浮かべた社長だった。

あの事件があつてからずっと休んでおらず、いつ過労で倒れてもお

かしくないくらい疲れている。フラフラの足取りで現れた社長を葵は簡単に補足することができた。

押したおされ、社長の首筋からはベーコンみたいな肉が生産された。

赤い血がブシュつと噴出して、灰色の新聞を赤く染めていく。異常な光景に足が震えた。

グチャグチャと異音が響く。時間が止まって、壊れたテープレコーダのように異音が繰り返される。やがて、音がやんだ。

葵はようやく社長だったものから口を離した。ふりかえる。口元が赤く化粧がほどこされた顔。あどけない表情は無垢そのものといったてよく、恐ろしいほどにキレイだった。オレはようやく再起動し、そこから逃げ出した。気づけば町役場にいた。

★
||

湯崎が言うように、希少価値というのはまちがっちゃいねえ。

オレが考えるのは、いまヒロゾンビになればヒーローに簡単になれるに違いないってことだ。例えば、ゾンビは生前の行動を繰り返す傾向にあるといわれている。葵もおそらく新聞社からそこまで離れていないだろう。もしかすると、あの新聞社の中にまだいるかもしれない。

だったら——。オレが救ってやるなんてこともできるはずだ。

葵はあのゾンビハザードが起こった日に勝手にゾンビになりやがった。

つまり、ヒロちゃんの存在なんか知りようもない。

それが、オレによってゾンビから回復したらどうだ？

葵はオレに感謝するだろう。

オレのものになるだろう。

実に楽しい状況だ。

そのうちにヒロちゃんの状況やヒロゾンビについて知られてし

まうだろうが、オレが助けたという事実は変わらない。

それまでに調教してしまえばいい。

口角がつりあがるのを抑え切れなかった。

深い紺色をしたセーラー服を破いて、年相応の小ぶりな胸をもみし
だく。

——オレとセックスしなければ、おまえはゾンビに戻るぞ。

と脅しつけて、未成熟な果実を味わいつくしてやる。

最初は嫌だ嫌だと拒絶するだろう。だが、ゾンビから戻したのはオ
レだ。オレだけがおまえを戻せたんだ。

だから。

オレのものにしてもいいよなあ？

白い肌が汗ばみ、よじるのを想像する。

……。

役場にあるトイレの片隅で、オレはティッシュの中に欲望を吐き出
した。

賢者タイム。

しばらく冷静な時間が続くが、やはり腹の底にある怒りは収まらな
い。

オレたち下級国民はひとりあたり3平米もない狭苦しい空間に押
し込められているのに、あいつらは自由に外にいける。

ヒロウイルスくらい、出し渋る必要ねーだろうが。出し渋らない
と死ぬのかよ？

金持ちや権力を持っているやつらはいつだってそうだ。

持たざる者たちが苦しんでいるのをあざ笑っていやがる。

何も持っていないやつは何を言ったっていいんだよ！

それが本当の公平ってやつだ。どうして町のやつらはそんなこと
もわからねえんだ。唯々諾々と上のやつらのいうことに逆らってもせ
ず奴隷のように付き従うんだ？

オレのように言いたいように言ったほうが世の中はよくなるだろ
う。

オレのやってることは正義に適う行動だ。上級国民さまの独占と

独善を防ぐ正しいおこないだ。

だが、あいつらはゾンビの特効薬を簡単に配る気はさらさらねえ。上級国民さまがたは、自分が有利になるようにしか状況をコントロールしない。ヒロちゃんはただの子どもだ。どうせ町の上のやつらにいいように使われているんだろう。

ヒロちゃんが単独行動をすることはいままでに一回もないし、町役場内では誰かしらがいる。オレが頼みこんでも湯崎みたいに邪魔されるのがオチだ。

どうする？ どうやったらヒロゾンビになれる？ どうやったらオレはチート持ちのヒーローになれるんだ？

いや——まてよ。

いるじゃないか。ここにヒロちゃんと対立したやつが。あいつを利用すれば……。

オレは便器の中にトイレットペーパーを投げ入れて、そいつのいる場所に向かった。

言うまでも無い。

いま拘束されているKとか呼ばれている自衛隊員のいる場所だ。

ハザードレベル102

創作上のゾンビというものをあらためて考えたりするボクだけど、ゾンビものっていわゆるシエアワールド的な意味合いも強いんじゃないかなって思う。

シエアワールドとは何かというと、創作者側が同じ舞台を使ってそれぞれが独自に創るってことなんだけど、厳密には違うかもしれない。だってストーリーもキャラもバラバラだからね。

だけど、つながりがある。

つまり、ロメロ作品から端を発した作品群はおのおのが独立した作品ではあるものの、ゆるくゾンビという要素で連帯しながら独自の発展を遂げたジャンルなんだ。ゾンビというモンスターを登場させた瞬間に、ああゾンビものねって感じで受け手は一瞬で理解する。サメものでサメが出てきた瞬間に、サメものだと理解するのと同じだよ。とりあえず、ゾンビに傷つけられたらゾンビに感染するっていうのはだいたい共通しているし、そこで繰り広げられるドラマも同じ方向性を向いているように思う。

これって小説的に言えば、二次創作を読んでいるようなもので、ストーリーもキャラクターもまったくのオリジナルであつたとしても、やっぱり様々な作品とのつながりのようなものがあるんじゃないかなって言いたい。

なにが言いたいかというと、人の連帯っていいよねって話。

誰かが残した足跡を誰かが感謝とともに踏み抜いていく。

その緩い連帯が道になっていく。

それはけっして束縛なんかじゃない。そうしなければならなくてわけでもない。

ローマ教皇か誰かが言つてたんだけど、この国って『ゾンビ国家』になつてるんじゃないかって話があつて、ゾンビというのは、要するに魂が貧困であるってことなんだ。魂が貧困であるというのはだれからも愛されていないんじゃないかという孤独感をあじわうってこと。ボクもその言葉には同感で、人のつながりを忘れたら、ボクたちは本

当の意味でゾンビになっちゃう。

いくら人間っぽく自由に思考できるといっても、ひとりでもかまわないなんて思ったら、それはゾンビと同じだ。

何度もいうけど、べつにひとりでいたいっていう気持ちを束縛するようなものじゃなくて、これは世界観をシェアードするって考え方なんだ。他のみんなといっしょにね。

「ボクはそう思うんだけど……」

ボクは久しぶりにゾンビ荘にて演説ぶつてた。

対するは常盤恭治くん。ヒロゾンビな元高校野球男児だ。

ムスっとした表情をしていてご不満の様子。

どうしてこうなった？

説明するとたいしたことじゃない。

実をいうと、恵美ちゃんである。

恵美ちゃんは黒髪ぱつっん美少女で半ゾンビ状態でがんばった女の子なんだけど、残念ながらというべきかなんというか、最終的にはヒロゾンビになってしまった恭治くんの実の妹だ。

その恵美ちゃんが、ある日、ボクが町役場のおしごとから帰ってみると……、その黒髪がブルースカイを思わせる色になっていたのである。びっくりした。アニメだとクール系キャラとかによく使われる青髪だけど、現実的に青い髪っていうのは、まあ目立つこと目立つこと。

「え、なんで？」と素に近い状態で聞いたのは確かだ。

「ピンクちゃんのピンクがキレイだと思ったから。わたしもなにかキレイな色にしたいなって思ったの。そしたらこうなったの」とのことだった。

まあ、目立つてはいるけれど、染めている感じはしなくて、実によく馴染んでいた。触らしてもらったら先端まで抜けるような青色がつやつやに光っていてキレイだった。なんか宇宙的な粒子がでそうなくらい。

理論上はピンクちゃんが言うようにヒロゾンビには現実を改変する能力があるから、自分の領域に近い自分の身体なんかはわりと自

由に変えられるらしい。それが実証された形になる。

ボクも……もしかしたら女の子になりたいとか、こころのどこかで思っていたのだろうか。

そんなことを思わされる出来事だったんだけど、事はそれだけで終わりませんでした。

「わたしも配信したいなーって」と恵美ちゃん。かわいらしいおねだり攻撃だった。

当然これには恭治くんもNOをつきつけたのであります。

恭治くんってシスコンで過保護だからね。わからなくもない。

ただでさえややこしいことになっている今の状況で、ヒロゾンビですと自ら名乗りでるような真似はしないほうがいいって考えだろう。配信することは必ずしもヒロゾンビであるということとイコールではないけれど、このスカイブルーの青髪をゾンビ世界で保持するって相当な労力が必要だからね。

ちなみにだけど、金髪に染めてる辺田さんとか恭治くんはさあ……黒髪と混ぜっててなんとというか無理やり感があるんだよね。似合っていないってわけでもないんだけどさ。

というわけで、ドラえもんも真っ青な青髪状態の恵美ちゃんは、たぶん言わなくてもヒロゾンビだってバレる可能性が高い。

ボクもそれはわかる。

けど、なんとというか恵美ちゃんって結構わがままというか、やりたいうようにやっちゃうタイプなんだよな。

というか、ボクの周りにいる女の子ってみんなそんなタイプばかりというか。我慢する前にとりあえずやっちゃいましたとかいうタイプばかりなんで、恵美ちゃんも我慢できるとは思えない。

事後報告系少女多すぎ！

いまは”チクタク”とかいう短時間の動画をあげるアプリもあることだし、恵美ちゃんもヒロゾンビなんで機材調達くらいのことなく可能だ。スマホひとつをどこかで調達でもしてくれば（たとえばその辺歩いているゾンビさんからちよっとお貸しただければ）、チクタクを利用して全世界の皆様にお披露目することは簡単に

できるってことになる。事後報告でお兄ちゃんやっちゃった♪とか言われた日には、恭治くんは血の涙を流すことになるだろう。ボクもガンだよ。

だからこそである。

ボクは恭治くんを説得する必要がある。ヒロちゃんおねがーいつてかわいらしく恵美ちゃんにおねだりされたからでは決してない。指先どうしをちよこんと接触させて上目づかいで小首傾かせてお願いされたからでは決してない。

「あと一か月くらいで、このアパートも町役場のセーフティゾーンとつなげる予定だし、とりあえずみんなも町役場と合流する予定でしょ？」

いまはみんなをちよつとずつ顔見せくらいはしているけど、特にヒロゾンビだなんだという説明はしていない。まあみんな内心ではヒロゾンビなんだろうなって思われてると思うけど、聞かれてないから答えてないんだ。

ただいずれにしろ。いつかは合流する。社会のなかで生きていくということであれば、配信だつてもいいし、むしろ人とのつながりを求めて配信するのは悪いことじゃないと思う。

まあボクとしてはこれまで配信してきたなかで、だいぶん絆ストツクできた感じあるし……、恵美ちゃんの自主性を尊重したい。それが理由の最たるもの。恵美ちゃんが（略）。

「でもなあ……。あえて目立つ必要ないだろ」

「もちろん、恭治くんの言うことは正しいよ。だから、もう少ししたらつてことで時期を決めてから許可すればいいんじゃないかな」

よくある常套句。

いまはまだ早いつて言い方だ。

これならなんとか恵美ちゃんも我慢できるんじゃないかな。

「具体的にはいつからだ？」

「ピンクちゃんが公海上で各国のお偉いさんにヒロウイルスを渡すらしいし、そのときでいいんじゃない？」

「それは余計目立つだろ。もう少し後でもいい。だいたい小学生で配信

とか早すぎるだろ」

ボクの姿をじつと見てる恭治くん。

まあ恭治くんには見た目詐欺だってことはだいぶん前に伝えてるからね。男だったってことは言っていないけど。

恭治くんとしてみれば、小学生並みな容姿をしているボクがいるから恵美ちゃんも興味をもったって思ってるんだろう。だから、まあ半分はボクのせいって考えてるのかもしれない。

「最近では小学生で配信している人もたいして珍しくないよ」

それで大人顔負けの収益をあげてる子だっているしね。

「恵美には早い」

「お兄ちゃんが厳しくしすぎると恵美ちゃん反抗期になっちゃうよ」

「恵美は反抗期にはならねーよ」

「お兄ちゃんのほうがむしろ反抗期でしたか」

「ちげーよ。そもそもなあ……、人間と仲良くっていう方針はわからんでもないけど、オレはまだ懐疑的だぞ。ホームセンターでの出来事だってゲーセンでのアレも忘れたわけじゃないだろ？」

「まーね」

最近ほんこつムーブ著しいボクですが、人間の我意というのはずつと感じてる。

その我意の衝突の結果、殺し合いが発生するということも実際に体験したわけだし。

ゾンビワールドになってしまったほうが、そういう凄惨さとは無縁のクリーンな世界になるのもわかるんだ。

だって、ある意味ゾンビのほうが慈悲があるからね。

「でも、ボクはたいして上等でもない人間ってというのが可愛く感じたりもするけど」

「貴族的思考か？」

「そうじゃなくて、人間には限りがあるからね」

限りがあるし、死ぬし——だから生きたいと考える。

その我意はキタナイからキレイだ。

工事完了です。

いや、まあたいしたことないんだけど、今日のおしごとということ
で、予定していた区画の整理が完了しました。

念動力使って青い車で適当にバリケード的な蓋をしたのです。

予定としては、このまま佐賀市のほうにどんどん広げていって、物
資調達ができやすい状況にするというか。海までセーフティゾーン
をつなげて外国との門戸開放を目指すというのが一手。

それまでの間に北東方面にもエリアを広げて、吉野ヶ里のほうにあ
る超ビッグな太陽光発電所を解放するなんてことも考えられている。
その年間発電量は世帯にして5000世帯分くらいはあるらしい
しね。停電する前までは、自衛隊が守っていたんだろうけど、一斉に
退いたことよって逆に管理する人たちがいなくなり、ゾンビだらけ
になっちゃったというのが現状だろう。ここを開放できれば、どんど
ん膨れ上がっている人口もなんとかなりそう。あとは食料とか……。
文化とか……学校とか。

いろいろ考えることはあるけど、ボクはどっちかいうと道をつない
だり人をつないだりするのが役目なのかななんて思ってたりもする。
無人の街並みにいつか人がたくさん行きかうようになればいいな
と思ってる。

と、頭の上に暖かい感触。

「今日もよくがんばってくれたな」

ゲンさんだった。最近また前みたいによく頭をなでてくれるよう
になりました。

うれしいです。

「うん」

あいもかわらず探索班がセーフティなエリアを広げてるわけだけ
ど、街のみんなはそれぞれ抽選であたった住宅からあまり出ようとは
しない。一応セーフティになった建物内とかくまなく探したり、バリ
ケードが壊れてないかを確認するような別動隊はできたらしいけど、

ヒロゾンビの数が少ないから、エリア開放をするのはやっぱりボクといっしょにいた時間が長い探索班のみんなになつていてるといふことなんだろう。

ただそれだけではないとも思う。

それはある種の保守的な態度というか……、要は何もしなくても現状なんかなつてきてしまったから、引き続きそうしたほうがいいつて思つてしまつてるんじゃないかな。

町のみんなにとつては探索班が自発的に行動している以上、そこにあえて加わつて自分が危険を犯す必要はないというかそんな感じなんだろうと思う。

食料はいまだに配給制だし、仕事をしなくても生きていけるわけだし。

つまり、何もしないというのが一番インセンティブがあるというか。

賢いやり方になつてゐるつていうか。

葛井町長は、そのうち仕事をさせるつていつてたけど、奴隷制でもないんならやっぱり貨幣経済として仕事をまわしたほうがいいのか。ヒロゾンビを増やしまくつてさつさと既存の国家体制を復活させたほうが話は早いんだろうけどね。たぶんアメリカとかはそうするんじゃないだろうか。わからない。その国の考え方次第なんので、ボクはその点については関与しない。

ヒロゾンビが結果的に増えるのならそれも別にいいけど、それは人の自由な意志によるべきものだと思う。

現時点におけるヒロウイルスの財としての希少性はいらぬ。

ボクとしてはヒロウイルスを分け与えてその価値が薄まつてもいいと思う。

ただ、ここでやつぱり我意というのが問題になつてくる。

ヒロウイルスは——神様としてふるまいたい人にとつては希少なまま押さえておきたいと考えるかもしれないつてことだ。

実をいうと、某所からボクを『アメノウズメノミコト』として認定するから、血を分けてほしいみたいな連絡がきたことがあつた。

ちなみにアメノウズメノミコトというのは最古の芸能の神さまです。この国の主神様って実をいうと超絶引きこもっていた時期がありました。主神が引きこもってたら他の神様たちも困るんで、アメノウズメノミコトが引きこもってる主神様を踊りで誘いだして、無理やり外に連れ出したというエピソードがあります。

引きこもりを無理やり外に出すのはマジで危険なんでやめましようとか言えないんだけど、ともかくボクがそういうふう認定されたのは、たぶん、主神との関係上、ボクの立ち位置をそれなりどころに収めつつ、それなりの地位を与えておくことでコントロールしたかったのかもしれない。

配信も芸能の一種だろうから、芸能の神様認定されたのはちよつとはうれしかったけどさ。

ボクが目指してるのって、天使でもなければ神様でもなくて、単なる配信者なんだから、丁重にお断りしました。

それはそれとして自分だけが特別の力を使える……って魅力的なことだと思う。

たとえば、なんらかの権力のある立場にいる人にとって、その正当性を担保するためにチートを持っておくというのは、ものすごい安心感があるんだろうな。だって、独裁者だって銃の一撃で死ぬというのだったら、一発逆転みたいなことがありえるわけで。

自分が特別な存在で、価値があり、誰かにかしずかれる存在で永遠にいたいって気持ちはわからないでもない。

ヒロウイルスが拡散していけばいずれは特別ではなくなるかもしれないけど、先行逃げ切りでとりあえず今ならまだその希少性から神様みたいに扱われるという可能性はなくないただろう。

だから、辺田さんからヒロゾンビになりたいって言われたとき、最初は驚いたけど、むしろそういう考えのほうがオーソドックスなのかなって思った。

国という正当性の塊にヒロウイルスを渡すのは、これはヒロゾンビの”責任”を国に受け持ってもらうために絶対的に必要なことだ。

だけど、個人の想いに応えるべきかどうかというのはまた別問題として残されているような気がする。

悩む……。

「先輩。悩みすぎて疲れたら、わたしといっしょにお部屋の中でイヤイヤするだけの生活をしましょう」

命ちゃんってほんとブレないよね。

まあ、命ちゃんにはボクからの返事を待ってもらってる状況なので、悪いと思ってるけどさ。

たったひとりの女の子と付き合うことすら優柔不断なボクなんです。

国の行く末とか、倫理とか、道徳とか、人とは何かとか、ゾンビとは何かとか……。

世界には難しい問題が多く、時間はいくらあっても足りない。

「まあ、世界が全滅してもそれはそのときです。先輩が超強い生命体になれば、少なくとも先輩だけは生き残りますから。人間もゾンビも滅んでも先輩だけは大丈夫です」

「ひとりはいやなんだけど」

「だったらわたしを選んでくれますか？」

「もう少し待って」

「はい。わかりました」

命ちゃんの覚悟に比して、ボクってよわっちいなと思う。

その覚悟を問われることになるのは、町役場に帰ってからのことだった。

ハザードレベル103

町役場の人たちに罪はないけれど――。

あえて言うのなら、世の中は何もしない人が多いというのが特徴であり、そのなにもしないというのが罪だ。

多数派は世界を変えようとはしない。個としては。

それは革命家にもならなければテロリストにもならないという意味ではいいことかもしれないけれども、自分がコントロールできる範囲を本当に小さくしてしまつて、あまり社会を変えようとはしない。そんなの面倒くさいし、自分は自分の人生を生きるのに忙しいから。

なにが言いたいかというと、嫌なことはあまりしたくないっていう当然のこと。

嫌なことっていろいろあると思う。

例えば、他人のお世話をするとか――。

そういうのが好きな人もいるけど、多数派はむしろ自分がお世話をされたいのであつて、誰かのお世話をするっていうのは、なんとなく誰かに搾取されているようで嫌だ、なんて考えるのが普通なんじゃないかな。

かくいうボクもマナさんに毎食ご飯作ってもらつたり、命ちゃんに配信のための準備をしてもらつたりと、いろいろ助けてもらつてる面が多い。

だから、人のことはいえない。魂が貧しいのかもしれない。誰かのために何かをするのは喜びでもあるけれども、自分が不当に消費されていくようで疲れもする。ボクはゾンビだ。根本のところでは本当に他人は存在するのかなんて考えている。

――久我春人さん。

あのゾンビテロを起こした主犯の人だけど、拘束していた彼のお世話するところのものも、基本的にはみんなやりたくないことだった。刑事でも法務官でもない普通の人がテロリストの拘束にかかわるといふのは多大なストレスだったんだ。

それが理由。

それが、ボクの目の前で未宇ちゃんが首元に果物包丁を突きつけられている理由だ。久我さんは小柄な未宇ちゃんを右腕でからめとるようにしている。左手には怜悯な刃物が握られていて、細くて白い首元に吸いつくように重ねられており、未宇ちゃんは少し震えていた。

ボクのせいだった。ボクがあのととき久我さんをゾンビにしていれば、みんなのストレスがかかるともなかった。

辺田さんがトイレとか食事とか、人間として当然必要なお世話をかってでたとして、断られることがなかったのは、突き詰めるとボクの行為の結果だった。ボクが久我さんを何もしないゾンビにしてあげば、こんなことにはならなかった。

大きく広いホールの中心で、久我さんと辺田さんと未宇ちゃん。

まるでそこだけバリアが張られたみたいにみんな距離を置いている。

久我さんと辺田さんの距離は近く、辺田さんは何がおもしろいかわからないけれども、猿面のような奇妙なほどゆがんだ顔になっていた。

笑っているような喜びを抑えきれないような、そんな表情だ。

誰が見ても、辺田さんが解放したに違いない状況。

なぜ久我さんを解放したのかはわからない。ただ推測されるのは、ヒロウイルスをわけてほしいということをいったときに断ったからかもしれない。

対する久我さんの顔は、ボクをにらみつけたものの思ったよりも冷静だ。

激情に駆られている様子はなく、冷たいプロの顔。だからこそ下手にうごけない。

いや、それよりも。

ボクが一番動けなかった理由は。

ボクがショックをうけていた理由は。

——そんな状況をまるで関係ない世界の出来事みたいにスマホで撮影している人がいたからだ。

こころの中がざわつく。

久我さんや辺田さんに対するものというより、みんなに対する怒りだ。

ゾンビみたいに魂が死んでいる。未宇ちゃんがあんなに震えてるのに。

「みんな、撮影するのをやめて」

ボクは抑え目の声をだした。こんな低い声がでるなんてボク自身も知らなかったよ。

撮影していた人たちは慌てて、スマホを下げる。

下げる人もいた。超能力を使って、前方に落とした。その人はスマホを拾おうとして輪のなかから飛び出ることになる。周りの視線が突き刺さり、その人は小さくなりながら、スマホを拾ってそのまま輪の中に戻った。

「全世界におまえの悪行を広めるチャンスだったんだがな」

「未宇ちゃんを離してよ」

「それはできないな。おまえの念動力は強い。こいつを離れた瞬間にオレはお前にくびり殺されるだろう」

いまの状態で拘束はできるかをボクは考える。

念動力の射程には入ってるけど、ナイフを完全に固定できるかはわからない。

念動といっても本質的にはヒロウイルスの浸透力だからね。ゾンビではない死にかけてでもない人間にはヒロウイルスに対する抵抗力がある。例えば周りの空気とかを伝って力を行使することはできるけれども、それには微妙なたわみのようなものが発生する。

コンマのズレ。

それだけでプロは十分ということか。

「妙な力を感じたら、すぐにこいつを殺す。ゾンビにもならないよう脳髓まで達するように殺す。首元からナイフを突き入れて、上方までぐるぐるこむように刺殺する。おまえの腐った頭でも理解したか？」

「理解はしたよ」ボクは手のひらをプラプラさせる。「それでわざわざボクを待っていたのはどういうこと？」

そう。たぶん久我さんはボクが帰還するのを待っていた。

ボクがゾンビ解放区をつくる作業時間はだいたい9時から3時の時間帯だ。今日も9時にみんなと合流して、それからたぶん辺田さんが動いたんだろうから、ただ逃げるだけなら十分に時間があつたはずなんだ。

久我さんは少しだけ逡巡したあと、比較的ゆっくりとした口調で話し始めた。

「彗星が降り注いだ夜から、世界に溢れた動画をおまえは知っているか？」

「ゾンビの動画でしょ」

ボクだってそれぐらいは知っている。

ボクがあさおんした後には、ちらほらとネットをあさっていた頃。

世界に溢れているのはゾンビ動画だった。もちろん、ボクの配信動画のことじゃない。

お食事の中のゾンビとか、ゾンビが人を襲うシーンとか、ゾンビに噛まれた人がゆっくりゾンビになっていく動画、解剖する動画、戦車が人の形をしたものを踏み潰していく動画。

ゴアシーンのカタマリ。

18歳未満は見ちゃいけないような、そんな映像のオンパレードだった。

「そうだ。あんな醜悪な生き物はなかった。頭を切り飛ばしてもその頭がうごめいている。火炎放射で焼き殺しても炭になるまで動き続ける。隊員はストレスで精神失調をきたしたものだって多数いる」

「それで？」

「ゾンビは醜悪な存在だということを人が忘れてしまったのは、おまえのせいだ」

「配信動画のこといつてるの？」

「そうだ。人は臭いものに蓋をしたがる。隣に人を食い殺す怪物がいて、いつ殺されるかわからないという現実に耐えられない。だから――、おまえという偽りの希望にすがった」

いつのまにか、ボクの動画が上位ランキングを席卷しまくってたか

らな。

でも、ゴアシーン満載の普通のゾンビ動画とか見たいの？

中にはそういうのが好きな人もいるだろうけどさ。

多数派はたぶん、ほんわかしたコメディよりの動画が好きなんだと思うよ。

「偽りの希望にならないように、ボク自身は、みんなが安心して暮らせるようになればいいと思ってるよ。久我さんは信じてくれないかもしれないけど」

「信じられるか。おまえがその気だったのなら、もっと早くにゾンビをどうにかできていたはずだ。それがなぜ頭のネジがゆるんだ配信動画をすることになる？」

「モルモットになる可能性もあったし、みんなを助けたいというのはボクがモルモットにならない限りということだったからね。普通に解剖とかされたくないでしょ？」

「そのせいで何億人死んだと思ってる」

「わからないけど、みんなの犠牲にはなりたくないよ」

「少なくともオレの知る限りでは関東でのゾンビを排除するだけで二万人ほどは犠牲になっている。その英雄的行為もオマエのわけのわからないお花畑な配信に塗りつぶされてしまう！」

久我さんが怒ってるのは、二つ。

ボクが遅れたことに対する怒り。

そして、自衛隊の仲間の献身的な自己犠牲が、ボクのちゃらんぽらん動画に負けているという思いこみだろう。

べつに自衛隊の人たちがゾンビと身を粉にして戦ったことが悪いことじゃないんだけど、ボクを信じてる人にとってみれば、自衛隊はゾンビを動かなくなるまで破壊した殺人者ということになってしまふ。

そんな遡及的な判断は無理なんだけど――。

多数派は『ゾンビは人間に戻せるのに』って思ってしまったてる。

本当は違うのに、書き込みは無邪気に邪気がある。『自衛隊ってバカだよなー』みたいな書き込みをいくつも見かけた。

それは違うとボクは思う。

人間が人間を無私で守るといふ行為がバカなわけがない。

「ボクは自衛隊の人たちもえらいと思ってるよ。作文も書いたし……。自衛隊の人たちがゾンビをあのととき殺しちゃったとしても、しようがない面はあると思う。正当防衛とかそういう概念で正当化するのには可能なんじゃないかな？」

「正当防衛が許されるのなら——、いまオマエを殺してもオレは正義というわけだ」

「そのときとは事情が違うよ。ボクは久我さんに対して侵害する行為はしていないし——、そりや少し拘束はさせてもらったけど、ゾンビテロを先に起こしたのはそっちでしょ」

「貴様が先にゾンビハザードという特大のテロ行為をしたからだ」

だからといってゾンビテロを起こすというのは、やはり矛盾しているように思うけどな。

言っても無駄だろうけど。

「ボクはゾンビハザードを引き起こしてはいないよ。あれはたぶん事故。誰の意思も関係ないと思う。ボクというイレギュラーが生まれたのもたぶん事故というかがチャというかそんな感じなんだろうけど」

いまだにあさおんした理由は不明だからな。

ボクがボクである理由がわからないように、たぶんわからないままだろう。

「信じられるはずがない」

「でも、ボクが未宇ちゃんを殺さないでほしいと願うのは信じてるんだよね？」

「信者を増やすためにな。オマエはどうせ人を裏切る。自分かわいさにこいつを見捨てるだろうさ。そのあとにオレも殺されるのだろうが、それはたいしたことじゃない。二万人の英霊達の列に加わるだけのことだ」

あー。そういう思考なわけね。

自分の命も何もかも巻きこんで、ただ敵だと認定した存在を殺すこ

とを願っている。

破滅的思考。

爆弾テロみたいなものだ。

でも——、どうしたらいいんだろう。

この状況を打破するためには、なにかしらの動きが必要だ。

「未宇ちゃんを解放してくれるなら、久我さんは元の場所に帰ってもいいよ」

「それこそ信じられるか。おい、オレの装備をもつてこい」

久我さんが声を張り上げる。

拘束したときに取り上げた銃だろう。あまり大きなものは隠せな
いからか短銃だったけど、果物ナイフよりは圧倒的に殺傷力がある。

誰も動かない。当然だ。多数派は動かないのが特徴だから。

久我さんはいらついていた。

「こいつがどうなってもいいのか?」

「えっと……ぼっちさん持ってきてあげてくれる?」

周りには町長や探索班のみんなも当然いたけれども、ボクが指名し
たのはぼっちさんだった。

事態の推移的には銃は渡さないほうがいいかもしれないけれども、
このままだと未宇ちゃんの身が危ない。

ぼっちさんは未宇ちゃんに慕われてるから、ぼっちさんもまた未宇
ちゃんをかわいがっている。

ボクと未宇ちゃんを天秤にかけて、一瞬、よくわからない変な顔に
なったけど、ぼっちさんは葛井町長から町長室の机の鍵を受け取っ
て、久我さんの装備をとりて走った。

「辺田に渡せ」

ナイフを未宇ちゃんに突きつけたまま、久我さんは言った。

隙はない。

「辺田さん。どうして」

ぼっちさんは泣きそうな声で言った。

辺田さんは笑ったままだった。

「わからねえよな。上級国民様はよ」

ぼっちさんはそれ以上なにも言わなかった。なにを言っても無駄だと悟ったのだろう。

辺田さんは銃を眺めすがめつした。

「使い方はわかるか」

「ああ、わかるぜ。映画とかでなんべんも見てるからな」

ガチャリとスライドさせて、銃口がこちらを向いた。

黒い。虚空が目の前に迫っている。

死が、黒々とした口を開けて迫ってるような気がした。

命ちやんが前に出るような気配を感じて、ボクは命ちやんの足を止めた。

死にたくはない。

そんなの当然だ。だけど、ボクが力を行使したら——たぶん久我さんは未宇ちゃんを躊躇なく殺す。どうする。どうすれば。

「殺せ！」

久我さんの怒号が銃声のようにホールに響いた。

☆
||

とつさに目をつむってしまったけれど、なんの衝撃もこなかった。

おかしいなと思って、恐る恐る目を開けてみると、辺田さんはいつもとおりヘラヘラと笑っている。

「なにをやってる？ 怖気づいたか」

久我さんが急かすような声をあげた。

「いや、冷静に考えて殺人とかおかしいだろ。おまえイカれてるよ」

「なんだと？」

「べつにヒロちゃんのごとは嫌いじゃないしな」

ふうむ。

なんともいえないこの気持ち。

でも、ボクを殺すという動機が辺田さんにはなかったらしい。

「何を言っているんだ。おまえ、こいつが殺されてもいいのか」

未宇ちゃんへのナイフをひけらかす。

しかし、辺田さんは一瞥すると興味がなさそうに、ボクのほうを向いた。

「べつに。どうだっていいよ。それよりヒロちゃん」

「あ、はい」

すたすたとこちらに近づいてくる辺田さん。

ズモッと迫る身長は、ボクよりもずっと高くて見上げる形になる。

辺田さんはボクと視線をあわせたまま目の前で膝を曲げた。

これで身長が同じくらいになる。そして言う。

「オレをヒイロゾンビにしてくれよ」

それが、辺田さんの成し遂げたいこと。

犯行動機だったらしい。

久我さんは怒り心頭といった様子だが、逆にボクに対する気が逸れている。

だったら、感染させてしまうのもありか。

ヒイロゾンビになってしまったら、ボクの強烈なコントロールが可能になる。

「いいよ」

久我さんが混乱からたちなおる前に、ボクは――。

爪で辺田さんの首のあたりを切り裂いた。

感染確認完了。

「やった。これでオレも――英雄に」

なんかアへ顔というのかな。陶醉しているみたいだけど。

自分のためだけに動く人が英雄になれるわけもないと思うんだけど。

まあ助けられたほうは、助けたほうがどう思っていようと感謝の気持ちはあるかもしれないけどね。

「何をしている辺田あー!」

地獄の底から響いてくるような声だった。

「そんなに怒るなよ。久我さんよお。そもそもあんたの計画には無理があるんだよ」

「あっ」

「ここにいるやつらは、ほとんどは血のつながりもない他人だ。究極、他人が死のうが生きようが関係ねえ。要するに身寄りのない十歳の子どもが死のうがどうだっていいんだよ」

それは違うと思う。

だって、ぼつちさんのさつき表情は、心の底から未宇ちゃんの心配をしていた。

手のひらを震えるくらい握り締めていた。

友人どうしで仲良しな子たちもいる。ゾンビに噛まれたから助けてくださいって、年下に見えるボクにすがって、透明な涙を流していた。

血のつながりが無いから、他人のために自分を犠牲にできないってわけじゃないと思う。

でも、未宇ちゃんが浮いていたというのも事実だ。耳の聞こえない未宇ちゃんは、もう少し小さな子どもたちといっしょには遊ばない。探索班とほとんど行動をともししていた。

人のいないところにぼつんといたから、久我さんに捕まったのかもしれない。

「クソがつ。辺田、銃をそいつに投げろ。自殺しろ緋色！」

むちやくちや言ってる。

辺田さんの『実は絆なんて無いですよ』宣言は、わりと効いたらしい。

ボクが未宇ちゃんを見捨てても、それはやむをえないものとして処理されると思ったからだろう。実情は違いかもしれないけれど、この町の人と本気でつきあっていない久我さんには判別のしようがない。だって、久我さんにとって、この町のみんなは敵だったから。

敵と仲良くしようという道理はないから。

未宇ちゃんは建前上救出を願われているにすぎないとなる。

「なあ、久我さんよ。さつきとここから脱出しようぜ。ここで死んだら元も子もねえだろ。脱出できれば再起が可能だし、そっちのほうがいいだろ。オレとしてもここで町のやつらと暮らすのはうんざりだからよ」

ふうん。つまり、辺田さんはヒロゾンビになりつつ外に行きかけたのか。

だから、久我さんを利用した。

久我さんとしても、この状況では未宇ちゃんを殺したとしても、その後にはボクに殺されるのだったら犬死だ。

事態は動いた。

「車を用意しろ」

事実上の敗北宣言だった。

ホールの中をゾゾと這うようにして集団が動く。

湯崎さんがしかめっ面で、辺田さんに車のキーを放った。

「へ。そんなに睨むなよ」

「オマエには人のこころはないのか」

「べつに人を殺したわけでもないんだしいだろ。これからゾンビどもから日本を救うんだからよ。数カ月後にはオレに感謝する人間のほうが多くなるぜ。いままでお疲れさん」

ポンと湯崎さんの肩を叩き、辺田さんは運転席に乗りこむ。

このままだと未宇ちゃんが連れ去られちゃう。

でも、久我さんはやっぱり一部の隙もない。ボクが力を行使したら首元からナイフの刺さる姿を幻視できる。

ヒロゾンビになった辺田さんの位置関係はわかるから、空中からこっそり追跡するか。

いつかは、未宇ちゃんの身体が離れたときを狙って、一気に――。

「すまない。未宇」

え、と思ったときには隣にゲンさんが立っていた。

パンという少し前にも聞いたことのある撃発音が響き、未宇ちゃんの胸は真っ赤に染まった。

わけがわからない。

どうして？

どうして、ゲンさんが未宇ちゃんを撃つのか？

苦しそうな表情をしているゲンさん。

あ、わかった。

わかってしまった。

ゲンさんは万全を期したんだ。どことも知れない場所に連れ去られてしまい、もしかしたらむごたらしく殺されるかもしれない状況よりも――。

先ほどの辺田さんの言葉を身をもって証明する。

つまり、未宇ちゃんに人質としての価値がないと思わせることによって、逆に確実な安全マージンを選択した。

結果、死ぬことになるけれども。

頭を撃ち抜かれぬ限り、未宇ちゃんはヒロゾンビとしてよみがえる。

つまり――、ボクを信じてくれたから。

でも、文字通りの意味で死ぬほど痛いだろう。ゲンさんは未宇ちゃんに嫌われてしまうかもしれない。お孫さんを撃ち殺したといっていたゲンさんも、きつとこころは痛い。

ずるりと体中の力が抜けて、壊れた人形のように未宇ちゃんは崩れた。

瞳からは光彩が失われ、崩れた拍子にナイフで首元が軽く切り裂かれ、地面には赤く染まった血液が垂れて伸張していく。

「イカれてるぜ。あんたら」と辺田さんがエンジンを噴かす。

久我さんは一瞬呆然としていたけれど、すぐに車にすべりこんだ。

車はあつという間に走り去った。

いまはどうでもいい。

未宇ちゃんは死んでいた。即死に近い状況だったのだろう。不幸中の幸いなのは、辺田さんのというような人間の価値を毀損するような物言いを聞かれてなかったこと。

ボクは手のひらを切り裂いて、血を与えた。

「すごい傷がみるみる回復してる」「奇跡だ」「緋色ちゃん様あ……：我らをお救いください」

だれかがそんなことを無責任に無邪気に言う。

未宇ちゃんは時計が巻き戻るように、胸の傷が修復された。ついでに首元のナイフの傷も治った。

「ハローワールド。痛かったね。もう大丈夫だよ」

たぶん、ヒロウイルスの力によって耳も聞こえてるはずだ。

でも、完全に耳が聞こえない状態だったのなら、突然新たな感覚が湧いたようなものだ。

その意味内容を理解するには時間がかかるだろう。

「あうえあおあ……えんし……」

すつと指を指した先に、ゲンさんが自分の頭に銃をつきつけてる光景があった。

わけ――。

わかんない！

乾いた音が響く直前、ボクは力を使って全力で銃を叩き落とす。

いやわかるけどね。

「べつに死ななくてもいいんじゃないかな」

「すまなかった。本当に……すまなかった。許してくれ」

天国のお孫さんに謝っているのか、ゲンさんが顔を覆って泣き崩れている。

未宇ちゃんはまだよみがえったばかりなせいか、ゾンビ映画のいもむしゾンビのように地面をはいずって、ゲンさんに抱きついた。

「あいじょうぶ」

ゲンさんは赦されたくて泣いて、いまは赦されて泣いていた。

★
＝

「へ。うまくいかなかったな。久我さんよ」

辺田が車を走らせながら軽口を叩いている。

くだらない茶番劇だった。

夜月緋色の姿を確認したとき、それは完全に偶然の産物だった。自衛隊の各員は佐賀内の二十箇所ある町役場や市役所に派遣され、偶然にオレのところが当たりだった。

運命を感じたものだ。

こいつを殺すのはオレだと。

しかし、敵の力は巨大でありそう簡単には殺せない。
ヤツは人間を感染させる。その感染させたキャリアが力になると
いう。

配信動画にもなんらかの感染力があるんじゃないか？

人間を守るのは使命だ。

だから——ゾンビは殺されなければならない。

そうでなければ、死んでいった仲間が浮かばれない。

死んでいった人間が浮かばれない。

くず折れた先ほどの子ども。力なく事切れた命に、オレはいらだち
を感じていた。

辺田の便器にこびりついたクソのような笑った顔がいらだたしい。

「そんなに怖い顔すんなよ。ここらはまだいいけど外はゾンビがいる
だろ。俺が安全な場所まで送り届けてやつからよ」

まだ、ヤツがつくったセーフティゾーンの中だ。

安全で安心なクリーンな世界。

ゾンビのいない世界。

笑わせる。おまえ自身がゾンビだろうが。

「もーいいい」

「はっ」

「もーいいいといったんだ」

オレは持っている果物ナイフを思いつきり辺田の腿に突き刺した。

「ぎゃっ」

痛みのあまり、辺田が飛びのく。

ハンドル操作を誤って、車はグルグルと回転し電柱にぶつかって止
まった。

一足先に、車から脱出したオレは受身をとって軽やかに着地する。

辺田はそのまま車といっしょにドカン。車は炎上し、一度大きな爆
発をしてスクラップになった。爆発するギリギリのところまで脱出は
できたようだが、それはそれで好都合。

ヒイロゾンビの戦闘力は未知数だ。

試しておく必要がある。なんの成果も得られないまま帰ってもお

笑い草だしな。

目の前にいるゾンビは車から投げ出されて、コンタクトレンズを落とした人間のように、あたふたと地面をはいずっていた。

あちこちすり傷ができており、その傷も急速に再生している。

「あ、やめ、やめてくれ！」

「あ、人間様のように喋るなよ。ゾンビが」

地面に転がっていた銃を拾い撃つ。

あえて頭は狙わない。

足。

手。

腕。

腹。

心臓。

試すように撃っていく。

「あがつがが、やめ……やめてください」

身体中のあちこちに穴が開き、血を垂れ流しているのに意識ははつきりとしている。

ヒーロゾンビの耐久力はゾンビと同じ程度か。

目の前のゾンビは人間を装い、人間のように泣きはらした目をしていた。

こいつを殺すのは、客観的に見て良心が痛むだろう。

そもそも人間の形をして、人間を模して襲ってくるのがやつらの手

口だ。

「おまえとは友人になれそうだったのにな……残念だよ。辺田」

這いずるようにして辺田だったモノが逃げようとする。

オレはゾンビの背中に足をかけ、それ以上逃げないようにした。

「ヒーローに……なりたかっただけなんだ。何かを……オレでも残せるって……」

「じゃあな」

「やめ——」

頭を撃ちぬき、ゾンビは完全に活動をやめた。

足でごろりと死体を転がし、完全に動かないかを確認する。
ヒイロゾンビは殺せる。オレはひとつ得た成果に満足した。

☆
||

あ、辺田さんの霊圧が消えた？

朝焼けの新世界編

ハザードレベル104

町役場とアパートを往復する生活にも慣れちゃった。

とりあえずのところの恐怖は去ったので、ボクはボクのために用意された町役場の一部屋で、のんびんだらりと過ごしていた。隣には珍しく命ちゃんもいない。

今日はひとりで集中したかったからね。

無為に過ごす時間ほど贅沢な時間はないと思う。

一人で過ごす時間ほど自由な時間はないと思う。

具体的には、お気に入りのサメ映画をフルスロットルで見続ける。四台くらいのノートパソコンを同時に開いて、サメ映画を四つ同時に視聴する。完璧すぎる布陣。

大丈夫だ。ストーリー展開は全部覚えてる。

最近、ボクが思うのは、ボクってマルチタスクが苦手だよなってこと。単線のひとつのことに集中するのはそれなりに上手くこなせるんだけど、わりと不意打ちを喰らってるような気がする。

なんというか、飽和攻撃とか受けたらパニックになったりしてヤバいかもと思ったんだ。

つまり、訓練。

これは訓練だ。

ふへへ。右を見ても左を見てもサメだらけ。たまらんぜ。えとらんぜ。

サメることなき夢の世界。

頭、サメ、いっぱい。

サメトランス状態になりながらも、しかしボクが不満なのは、どう考えても世の中、ジョーズとティープブルーくらいしか認められてないってことだ。

悲しいけど、これが多数派の意見ってやつだ。

できればマイナーランキングにも目を向けてほしい。

いや、しかし……もしかするとだけど、シャークネードはギリギリ、メジャーなのではないか。

学術的な思考でうんうん唸りながら、サメ映画の真髓について考えるボク。

お行儀悪く、足を長テーブルの上に乗せて、椅子を揺らしながら思考する。

そんなときだった。

突然のラインメッセージがボクのスマホに届いた。

ライン通話したいらしい。

開く。

と、同時にアップ顔。

涼やかさをまとう蒼い瞳と、生成り色というかなんとか、わかりやすく言えば金髪だ。

「わたしーのことー！ー 忘れてないデス~~~~~か~~~~~！ー」

「忘れてないよー」

ボクは少したじたじとなってしまった。

その理由はダバダバと涙を流す乙葉ちゃん。

画面の向こう側にいる彼女のことを忘れていたわけじゃない。

——嬉野乙葉ちゃん。

国民的アイドルグループのひとり。

ボクとコラボ配信してくれた14歳の女の子。

ハーフらしくてお肌の色素が薄くて淡い妖精のような印象の女の子だ。

背はボクよりかなり高いけどね。

ともかくかわいいそんな乙葉ちゃんだけど、コラボ配信のあと、なにがなんでもついてくるって感じだった乙葉ちゃんに対して、ボクは「うーんあとで」的な返事を返してしまった。

その理由はヒイロウイルスの感染があっさり広がっていくことへの恐怖があった。

いまでもその恐怖はあるけれど、ピンクちゃんが肩代わりをしてくれて、少しほっとしている。

ボクにはご町内の平和を守る程度がお似合いだし。

ボクも人と関わるることについて、少し学んで、ちゃんと乙葉ちゃんとは連絡がとれるようにはしていたし、いろいろとほんのちよつとだけメッセージのやりとりはしてたんだけども、ご町内のいざこざとかいろいろあつたから、無限に話をしたがつてたふうの乙葉ちゃんに対して、ボクのほうは一言二言ですぐに連絡をうちきってしまつてた。ごめんちよつと忙しいからあとでの的な感じで。

つまり、客観的に見ておぎなりの態度。

美少女アイドルに対して、あんまりと言えればあんまりな態度かもしれない。

「あの。スレッドとかいろいろあつたんだよ。いろいろ」

「いろいろつてなんデスか？　いろいろつて！」

金色の髪の毛とサファイアのような青の瞳。

青って神秘的だね。ちよつと睨んでくると目力が強くて怖いけど。

まるでそう、怒つたときの命ちゃんみたいな感じだ。

「えと……、スレッドとか見てない？」

匿名掲示板には、けっこういろいろなことが載っている。

ボクの好きなものから嫌いなもの、身長、体重、靴の大きさ、わりとところの中以外は全部載ってる感じがして、集団ストーカーされる気分になって、ちよつとぴりどん引きしたのは事実だ。

まあ、それもこれもゾンビを操れるという特技のせいだろうけどね。

ゾンビを操れるというのは、ゾンビが溢れた世界では言うまでもないけど、ものすごいインセンティブなんだろうと思う。例えばの話、それは砂漠の国で無尽蔵に水を出せるとか、そういうのと同じだ。

誰もかれも欲しがる特殊な技能。

だからこそ、ボクの一挙手一投足が気になるんだろう。

スレッドには、町役場で起こつた顛末もほどよく脚色されて、ほどよく物語風に、まとめられていた。

当然、ゾンビテロのことも、ゾンビテロリストが逃亡したことも、そ

の際にヒロゾンビがまたひとり生まれたことも、みんな知っていることだ。

乙葉ちゃんも知っているはずだ。

「見えますヨ〜」

口をとがらせる乙葉ちゃん。

やっぱりアイドルだけあって、怒ってる顔も激カワ。

でも、怒ってる顔もかわいいよなんて言い訳はしない。

それは悪手だからね。

「乙葉ちゃんを呼んだら危険かなって思ったんだ」

「わたしのこともおもってくれたデスか？」

「うん。もちろん」

「ひとときも忘れたことなかったデスか？」

「う、うん」

ひとときもといわれると、どうなのかなって思ったりもするけれど。

期待のまなざしでいわれると、ボクも否定はしません。

「じゃあ、ヒロちゃんに会いにいつてもいいですか？」

「いいよ。でも会いに来る手段ってあるの？ あの軍用ヘリ？」

「それなんですけど……」乙葉ちゃんが暗い顔になる。「軍用ヘリだと問題があるデス」

「どんな？」

「あのヘリだとせいぜい6名くらいが限界デース」

うん。そうだろうね。

もともとは輸送ヘリというよりは武装ヘリに近い種別で、兵士をあまり積載するって感じじゃなかった。それでも民間のヘリなんかよりははずっと大きいみたいだね。ピンクちゃんのところのは規格外だったけど。

「乙葉ちゃん以外に誰か来たい人いるの？」

「そんなのあたりまえデース！」

画面にめいっぱい顔を近づけて、迫る乙葉ちゃん。

鼻息荒いけど、それでも美少女なのはさすがアイドル。

「実をいうと、わたしのおとうさんも行きたいと言ってるデース」
「ふうん」

「それに、わたしのコミュニティの人たちは全員行きたがってるデースよ」

「何人くらい？」

「30名くらいデース」

ふむふむ。

あれから少しずつ少しずつエリアを解放して行って、いまではなんとかが町内を飛び越え、佐賀市と吉野ケ里の一部に手を伸ばしているところだ。

吉野ケ里に手を伸ばしているのは、大規模太陽光発電所を解放するため。

電気が解放されれば、おのずと水関係も満足されるからね。

日本はもともと水資源が豊かな国だし。

安全なエリアに住んでる人も300人くらいは超えたんじゃないかな。

みんなよく餓死とかしないで数か月も暮らしていけたねって思うけど、わりとリアルに「カラス食ってた」とか言われたから、へえカラスって食べられるんだと思ったよ。わりとあっさりした味でそれなりに食いがあるのがよいらしい。

考えちやいけないことだと思うけど、道端に放置されている死体をつついたりしてないかなと思ったりもしました。死体からはある程度時間が経つとゾンビウイルスも散逸するから問題ないとはいえ、気分的には人肉を間接もぐもぐしているのといっしょだしな。でも、食物連鎖だよ。みんなどこかでつながってるからオツケーまるだよ。

ちなみに雀は食べたからおなかをこわすらしい。かわいいものには毒があるのかもしれない。

そんなこんなでボクの町も急速拡大中。インフラも整備中。配信で街づくりゲームしてた甲斐があったなあ。

みんなも少しずつニートから復帰して、おいしいものをまた食べられるようになるために、農業を始めたりもしているみたい。いまはま

だ原始的な政治形態というか、ほとんどすべてがボランティアあるいは公共事業ということになるんだろうけど。

やっぱり、探索班のみんなの物資集めというのはいまだに必要なだけどね。

ちなみに、みんなに供与するお家については抽選で決めてるみたいだけど、これって探索班がいちおうはお金の類は全部回収してます。ある程度、このゾンビハザードが収まってきたら、今度は資本主義が復活すると考えられるから、そういつたときに不平等が生じないようにするためだ。おかげで、町役場の一室は札束と貴金属で埋められつつある。そのうち銀行とかに物理的に移動させないといけないかな。「どうしたデスか？」

おっと、思考が脇にそれちゃった。マルチタスクはやっぱり苦手です。

とりあえず今のところ言えることは三十名くらいなら余裕ってこと。

「三十名くらいならば大丈夫だよ。ヘリ使って5回くらい往復すればどう？」

「ヒロちゃんのいるところに住んでもいいデスか？」

「町長に聞いてみないといけないけど、問題ないと思うよ」

「仕事はしろって言われるかもしれないけどね。」

電気が来て、ヒーロゾンビの問題に片がついて、資本主義なる得体のしれないものが復活して、コンビニでおべんと買えるようになれば完璧だ。

ボクはまた時々配信するだけの引きこもりに戻るのもいいかもしれない。

夢が膨らむなあ。

「ヒロちゃんが何か変なこと考えてるデース」

「えー」

変じゃないよね？

それから町長に話をして許可をもらって乙葉ちゃんが来る日になった。

そわそわ。そわそわ。

「先輩がうれしさを隠しきれてない感じがします」

命ちゃんがジト目でこっちを観察するように見てる。

そんなに変かな。

自分のことを気にかけてくれる存在がいるってことは、べつに変でもなんでもないし、むしろ人間として普通だと思っただけだ。

「アイドルにほだされてるようにしか見えない」

「そんなことないよ。ボクはただ……」

「ただ？」

「同じ佐賀県民として応援してるだけだし」

「もはや、県とか国とか言ってる場合じゃないと思うんですがう。ごもつとも。」

公海上でのピンクさん主導のヒロウイルス引渡しに向けて、いろんな調整がおこなわれている今、ゾンビという災害を基軸にして、世界がひとつにまとまりつつあるような気がする。

もちろん、それは国とか県とか人の差異を否定するものじゃないし、いろんな国家間の利害調整をまったく無視するようなものじゃないと思う。

たとえば、アメリカは世界一の国でありつづけたいし、それはゾンビが溢れた世界であっても同じままだ。

匿名掲示板とかウェブ上の情報を見る限りでは、アメリカはわりとやんちゃしたらしい。

つまりは、全力でゾンビを排撃したってことだけど、うちのゾンビは古式ゆかしい走らないタイプのゾンビだからね。まあ、早歩きレベルの早さはあるし、力も強いけど、軍隊が倒せないってレベルじゃない。

マッチョイズムが大好きなアメリカさんは、大都会で戦争さながらに大乱闘を繰り広げたらしい。スマブラみたく。

で、いちおうの安全は確保したっぽいけど、今度はボクというイレギュラーが現れてしまった。人権派な人たちは当然いろいろと主張するよね？

もちろん、ゾンビも完全にいなくなったわけじゃないし、アメリカは国土も広い。

日本みたいに単一民族というわけでもないし。ゾンビに人権を認めるとか、そういうことを主張する人たちも現れたり。

ボクが天使で、天使の亜種なのがゾンビだから傷つけたらいけないとか。

ともかく、ボクが考えたところでどうしようもないような大混乱があつたみたい。

その混乱がようやく収まりつつあるのは、ピンクちゃんのおかげだったりする。

ピンクちゃんが属しているのは国籍上はアメリカだしね。アメリカが主導であるなら否はないということだ。ピンクちゃんの人気つて、たぶんアメリカの支持なんだろうな。

命ちゃんの人気度がピンクちゃんを越えることはあるんだろうか。お兄ちゃんは少しだけ心配です。

「哀れむような目で見ないでください」

「う……。あの、命ちゃんの力は最近どうかナーって」

ヒイロ力が増してたりするんだろうか。

登録数だけ見れば、命ちゃんはピンクちゃんを凌駕してたりするんだけどな。

ボクにひきずられる形での表面上の数値ではヒイロ力は上がらないらしい。

「すこしはあがってきてます。最近流行りのRTA動画を生配信したらそれなりに人気がでますよ」

「見たよ。すごいよね。機械みたいに正確な操作。突破率を事前に何パーセントとかいいながら、淡々とリセットするところとか。次々と世界一位になってるみたいじゃない」

「先輩がRTA風動画をあげたときみたいに人気がないみたいで
す。どうやら、みんなポンコツかわいいほうがお好みのように……」
「いや、命ちゃんはクールかわいいよ。クールかわいい!」
「どんどん落ちこみ、闇をまとう命ちゃんを、ボクは必死に励ました。
命ちゃんは実際すごくかわいい子なんだけどな。ちよつと、闇深な
だけで。」

☆
||

空からパラパラと爆音が響いてくる。

ピンクちゃんの無音ステルスヘリと違い、こちらは通常の軍用ヘリ
だ。

音を掻き消すようなそんな機能はついていない。

時間どおりの到着。

乙葉ちゃんがいる福岡から、ここまでは片道三十分程度のフライト
みたい。

つまり往復一時間程度。6名乗りで30名ってことだから。5時
間かかるってことか。

例によって町役場の前にある駐車スペースをヘリが着陸できるよ
うに整備してもらって、ボクは空を見上げて待った。

ピンクちゃんみたいに飛び降りてこないよね?

さすがに、14歳のたぶん頭脳的には普通の範疇の乙葉ちゃんはそ
ういう突飛なことをするでもなく、ヘリはゆつくりと降り立った。

町のみんなもアイドルの乙葉ちゃんに対しては歓迎ムードだ。い
ろんな事件があったから外部の誰かが来るのは神経とがらせないと
いけない部分もあったんだけど、ひとまず安心。

ひゅんひゅんという残響とともに、羽の回転が止まり、扉がゆつく
りと開く。

乙葉ちゃんはまるでお姫様みたいに静々と降りた。

いつものチエツク柄のスカート。アイドルの衣装だ。

うん。いつもながら完璧なかわいさ。さすが国民的アイドルグ

ループ。

乙葉ちゃんはボクの顔を見たたんには、たださえカワイイ表情をさらに当社比128パーセントまでひきあげて、駆け寄ってきた。

ボクにあえてうれしいのかなって思ったたら、ボクも自然とうれしくなる。

「ヒロちゃん！ あいたかったデースー！」

お姫様風スイングバイ。

バイしちやったらダメだけど。

映画とかでよく見る、抱きつき空中回転だ。

もちろん、ボクが普通の小学生ならそのまま吹っ飛ばされてたりするかもしれないけど、人外パワーに溢れてるいまなら、余裕ですよ。乙葉ちゃんの負担にならないようにくるくと回転する。

それにしても、乙葉ちゃんの柔らかな身体がすごく密着……密着。

14歳だけど、幼げな中にも育つところは育つてるといふか。

わざとなのか天然なのか、ひととき柔らかいところが顔に押し当てられてるといふか。

ぎゅうぎゅう抱きしめられている。

身体がちよつと熱いです。

見ると、乙葉ちゃんほうるうるとした瞳で、ボクを見つめていた。

蒼い双眸がほのかに水気を帯びると、まるで聖なる泉みたいで神秘的。

「ヒロちゃん……」

「うん……ん？」

むちゅ。

そう、むちゅとしか言いようが無かった。

ボクにとつて不意打ちは弱点であり、かわいい女の子も、それもとびつきりかわいいアイドルの乙葉ちゃんも弱点で。弱点が弱点とあわさり最強で、ボクは木っ端のクソ雑魚でしかなかった。要するに、まったくもって抗うことも逆らうことも反撃すらもできずに、唇と唇がドツキングしていた。

「おいおい百合かよ」「羨ましい」「どっちが」「ずきゅううん」「さす

がにここではズボンを下ろせない」「ごころちゃん。ほら、女の子どうしでキスくらいフツ―だよ」「迫ってくんな。怒るよ」「百合だー」「ありだー」「見ちゃいけないものを見ちゃった気がする」「フレンチキスのことを軽いキスと勘違いしてる人を散見するが、実際にはあのようにディーブなキスのことをフレンチキスという」

外野の声もどこか遠くで。

舌が。

舌がからんで。

ふわってする。

頭が痺れる感じ。

とつてもきもちー感じ。

ふわふわわわ。

と。

チラッと視界に入る命ちゃんがすっごいクールな顔になってた。ボクの肝臓あたりも、すっごいクールになってた。やべっ。悲しみの向こう側に行つてしまえそう。

「あ、あの、むりやりはよくないと思うな」

乙葉ちゃんの肩に手をあてて、ボクは渋面を作る。もちろん怒った感じも忘れない。

命ちゃんの顔が怖いからではなく、あまりにもフランクすぎる態度だからだ。

ボクも乙葉ちゃんも女の子どうしだけど、女の子どうしだからって同意もなくキスをしちやいけないと思う。決して流されてたわけじゃありませんよ。そうなってもいいかなって思ったから抵抗しなかつたわけじゃありませんよ。命ちゃん怖い。

「先輩。このアイドル。わざと感染しましたよ」

「あ……そうなの？」

命ちゃんの言うとおり、乙葉ちゃんはキスで感染していた。

いまでは立派なヒロゾンビ。

「わざとじゃないデース。感極まって大好きなヒロちゃんにキスしてしまっただけデース。欧米では当たり前前の挨拶デース。ヒロゾン

ビになったとしても問題ありませーん」

「うーん。ほら、乙葉ちゃんもそういつてるし」

「この女。やっぱり最悪ですね。どうせ自分の使命とやらを果たすために自分から当たりに行っただんですよ。ドブネズミのほうはまだキレイです」

「ドブネズミ……」

あ、今度は乙葉ちゃんがマジ泣きしそう。

「命ちゃん。そんなふうになんか悪く言っちゃダメだよ。世の中ラブ&ピース。さっきのは欧米の当たり前の挨拶だったんだよね？」

「そうデース」

「先輩アホですか。どこの世界にディープなキスをかます挨拶があるんです？」

「わかんないけど、文化っていろいろあるしね。そういう文化もどこかにはあるんじゃない？」

「先輩はそういう文化ですって言われたら、ほいほいキスされちゃう女の子なんですか？」

「まあその……乙葉ちゃんのこととは信頼してるし……」

「その女だからキスしてもいいと、そうおっしゃりたいんですか？」

「ち、違います。そういうわけではなくてですね」

外野のざわめきが遠くに聞こえる。

「百合三角形」「ヒロちゃんってなんか男的ポジ？」「いつもはヒロインポジだけだな」「ヒロちゃんりバーシブル」「乙葉ちゃんの人気すげえからすぐに後輩ちゃんをぶつちぎりそう」「人気の違いが恋愛力の決定的差ではない」「尊い……」

命ちゃんと視線を交わす。

真っ黒いタールのような闇を抱えた瞳だ。

このままじゃ闇堕ち命ちゃんになっちゃう。
くっ。やむをえない。

ここは――。

ふわりと浮き上がり。

ボクは命ちゃんのほっぺたに唇を落とした。

「はい。平等」

「唇じゃないですけど」

少し不満げだけど、だいぶん緩和されたみたい。

ほっぺのところを当てて、少し照れてる模様。

よし。

「日本人ならこれくらいが挨拶の限度でしょ。乙葉ちゃんが欧米式の挨拶をしたっていうなら、ボクはボクの知ってる文化の限度で挨拶をしたんだよ。ほんとは握手のほうがよかった？」

「いえ。でもできれば……」

「あとでね。あとで。とりあえず今はせつかく来てくれたんだから歓迎しよう。ね？」

「わかりました。先輩は約束は守る人ですから信じます」

問題の先送りは凡人にゆるされた唯一の方策だ。

ボクは乙葉ちゃんに向き直り、ほほえみを浮かべる。

「ようこそ乙葉ちゃん。待っていたよ」

でも、ボクはこのときまだ知らなかった。

あとから到着する彼らが——乙葉ちゃんのお父さんが特大級の爆弾を抱えてくることを。

ハザードレベル105

あっさりヒロゾンビ化しちゃったアイドル嬉野乙葉ちゃん。隣を歩く彼女の足取りは軽い。

少し見上げると、自然と視線があわさってはにかむように笑いかけられる。

「どうやら、本当にヒロゾンビになってもよかったみたい。

すらりとした立ち姿と、キレイな歩き姿。

人の視線を自然とひきつける振る舞いだ。

町みんなは乙葉ちゃんに釘付け。

「ひらひらと手を振ると、みんな男も女も関係なく顔を赤くしている。」

元気でかわいくて、本当にアイドルだなんて思う。

ボクのようなニワカじゃなくてね。

ボクは乙葉ちゃんを町長室に案内した。

葛井町長からは、じきじきに頼まれていたことでもある。

たぶん軽い面談みたいなものだろう。

「やあ、君が嬉野乙葉ちゃんだね。僕は葛井明彦。ここの町長をやっている者だよ」

葛井町長がなにやら怪しげな挨拶をしていた。

「どうやら、『私が町長です』ネタはやめたらしい。

「あいかわらざるの狐目で、指を交差させて顎のあたりに乗せている様は、さながらどこかの黒幕って感じた。」

「はいデース。よろしくデース」

いつもどおり乙葉ちゃんは元気いっぱいの挨拶だ。

柔らかく浮かべる微笑は、みんなを元気にさせてくれる。

町長も笑ってた。いやこの人はいつもこんな感じか。

「うん。すごくよくできているペルソナだね」

「なんのことデース?」

「アイドルだしね。僕もこういう立場になっているからわかるんだけど、よくできた仮面だといってるんだよ」

ペルソナって心理用語のペルソナかな。

まあボクも終末配信者で超能力少女な仮面をかぶってるわけだし、人は大なり小なり被ってるものだとは思うけど。

乙葉ちゃんはみんなを元気にしたいって。

歌でハッピーを配りたいってそんなことをいってたりもして。

その言葉はウソじゃないって思ってるけどな。

あれ？

なんか乙葉ちゃんがぶるぶると震えだしているんだけど。

たった数分で、面接めいたこの場所は、詰問する警察署みたいな雰囲気になっていた。

ぴりっとしていて、緊張感がある。

どうしてだろう。町長は乙葉ちゃんたちがここに住むのを許してくれたのに。

和やかなムードだと思ってたのに。

今の状況だと、大人が中学生の女の子をいじめているようにしか見えなない。

そして、町長の爆弾発言。

「君さ。もしかして友達いない系の人なのかな」

「ち、ちがいマース。フアンの人、たくさんイマース」

慌てたように反論する乙葉ちゃん。

必死だ。

「フアンは所詮フアンだしね。僕はアイドルじゃないからわからないけど。個人的な親交があるわけじゃないだろう。君つてもしかして友達エアップなの？」

友達エアップとはいったい。

「うううう」

その場でうづくまる乙葉ちゃん。

耳のあたりに手をあてて、それ以上聞きたくないようだ。

町長はあいかわらずニチャッと粘度の高い笑顔を浮かべていてやらしい。

なんだよって気分になって、ボクは町長をにらむ。

ボクに対してもニチャットとした笑いを浮かべて、どうしてそんなことを言ったのかはわからない。

でも今は――。

なぜか、しゃぼん玉のように壊れそうな乙葉ちゃんをフォローしなきゃ。

ボクは乙葉ちゃんの肩にそつと手を乗せた。

「あの……ボクって、乙葉ちゃんの友達だよね？」

「うう。ヒロちゃん」

こつちを見上げる乙葉ちゃんは、うるうると瞳をにじませて、捨てられた子犬みたいだった。

なにこのかわいいの。

ボクのなかのお兄ちゃん的属性がくすぐられる。

「とぼだち？」

「そう。友達だよね。いっしょに配信したし。楽しかったよね」

「はいデース」

弱々しく答える乙葉ちゃん。そのまま手を引つ張って立たせた。

まだ傷ついているみたいだけど、少しは回復したみたいだ。

「町長。パワハラです」

ボクは抗議した。だって、ボクは乙葉ちゃんを誘ったんだし、乙葉ちゃんが心地よくこちらに住めるようにする義務がある。なにより友達として当然の気持ちだ。

「確かに言いすぎだったかもしれないね。謝罪するよ。ただ――」

葛井町長は少し間を置いた。

ボクたちを引き込むための、ほんのわずかな演出。

こういうのがうますぎて、怪しさを加速させてるんだけどな。

「僕にもね。立場があるんだよ。それをわかってほしいな」

「立場って？」

「もちろん町長としての立場だよ」

「うんまあ。それはわかるけど」

「他ならぬヒロちゃんの頼みだから今回は受け入れることに決めただけど、本来300人程度しかいない町民のなかの30人というのはかな

り大きな比率だ。しかも、バラバラと来るのではなく、まとまってくるとなると、ひとつの派閥が生まれてしまう可能性がある。わかるかな?」

「でも、乙葉ちゃんはアイドルだし、政治的にどうこうする意図なんてないと思うんだけど」

「集団の中で、嬉野乙葉という人物がどういう役割を果たしているのかはわからないけれども、今の時代は便利だからね。ネットにつながっていけば、家族関係やらなにやら結構わかるもんなんだよ。まあ少し大きめの会社だったら、就職のときに履歴関係を洗い出したりするだろう。それと同じようなものさ」

「圧迫面接したってこと? それってやっぱりパワハラ……」

「否定はしないよ。ただ必要なことだということのもわかってほしい。我々は怯えているんだ。外部の者に対しては特にね。君もわかるだろう?」

ゾンビテロのことを言っているんだろう。

こつそりとジュテツカの息のかかった人間がまぎれこんだら、あの事件がまた起こりかねない。

町長の言ってることもわかるけど。

でもやっぱりいたくない少女をいじめるようにしか見えないな。

ジト目で観察しても、葛井町長のペルソナはまったく崩れる気配がない。

と、そこで、今度はボクの肩に乙葉ちゃんのしなやかな指が乗せられた。

「いいんです。ヒロちゃん」

「ん。なにがいいの」

「きつと、葛井町長もわかっていると思うデス。わたしのお父さんが変な宗教の創始者だって」

「変な宗教?」

「魔瑠魔瑠教って知ってマスか?」

「まるまるきよう……? ん。知らない」

「たぶん、ほとんどの人は知らないと思うデスが、それだけマイナーな

宗教ってことデス。マイナーな宗教を信じる人たちはメジャーな人から見れば容易に排斥対象になりマース。だってある日突然、怪しげな宗教団体の怪しげな宗教施設が自分の家の隣にできたら誰だって嫌ですよね」

最後がめつちや流暢な言い回しだったな。

ボクもちよこつとだけうなずく。

「それなりにわかるよ」

なんともいえないこのセンチティブな感じ。

日本人にとって宗教自体がタブーな感じあるよね。神道とか仏教とか信教の自由がある以上、なんでも信じていいんだけど、宗教という装置自体に懐疑的というか。

普通、宗教っていうのは儀式なり教典なりがあるんだろうけど、おそらく一般の日本人にとっては、儀式も教典もなくて、無意識の言葉になってるんじゃないかな。

例えば、モノを粗末にしてはいけないとか。

情けは人のためならずとか。

そういう無意識レベルでの教義を信じていて、それはまとまりのない緩やかな領域になっている。意識とか理性とか言葉に縛られないから、宗教ですかといわれても違うかもって思う。

日本人の多数派は、この『無意識の宗教』を信じていてそれを縮めて『無宗教』と呼んでいる。

つまるところ、『無宗教』な人から見れば、『宗教』を信じている人は他教徒だ。

「でもそれって、結局他人は怖いって言ってるのと変わらないよね。他人なんてひとりひとり考え方は違うんだから、別にマイナーな何かを信じてもいいと思う。ボクもマイナーなゾンビ映画とかサメ映画とか好きだし」

「わたしもヒロちゃんの考え方には賛成デスが、たぶん町長さんは危険だと思う人がたくさんでてくるかもしれないって言ってるデス」

町のみんなが、魔瑠魔瑠教の人たちを危険だって考えるって？

対立。抗争。戦争みたいなの？

そこまでいなくても——そう。派閥か。

ひとつの考え方に沿って、ひとつの信仰に沿って。

社会のシステム自体を変えようとする集団ができるってことか。

確かに今いる人たちにとっては危険かもしれない。

いや正確には、危険とみなすかもしれないってことだ。

「融和できるよね」

ボクは少し怖くなって聞いた。乙葉ちゃんを招き入れたのは、すぐかわいくて全国的に人気のあるアイドルグループのひとりが町役場にきてくれたら、みんな喜ぶんじゃないかってそんな単純な気持ちだった。

派閥抗争の火種とか、下手すれば戦争とか笑えない。

乙葉ちゃんは数瞬、目をつむって考える。

「たぶん大丈夫だと思いマース。魔瑠魔瑠教って、へんてこりんな名前ですが、その実態は仏教とかキリスト教とかをちゃんぽんにしたパクリ宗教デスし、無理に修行したり、天界と通信したりするようないかがわしさは無いデスから。わりとフツーです。わたしもフツーに友達いる系の女の子デース」

「パクリ宗教って……。いいの、そんなふうと言っちゃって」

「わたし自身はべつに魔瑠魔瑠教の信者というわけではありマセン」

「そうなんだ」

「あ、でも」

乙葉ちゃんはボクをジッとみる。

ボクも小首をかしげて見返す。

ん？

「魔瑠魔瑠教は、神聖緋色教に改名するかもしれない」

「へ？」

「神聖緋色教なら、わたしも入信しますデス」

「へ？」

「もちろん、ヒロちゃんが神様デース」

ボク、いつのまにかご神体扱いされちゃってました。

乙葉ちゃん以外の人たちは、もれなく魔瑠魔瑠教の信者さんらしいけど、見た感じは普通の人だった。

要するに怪しいローブを着て、なにやらブツブツつぶやいているとかいうことはなくて、普通の服装をしていて、おとなしく別室で待機してくれている。ボクと顔をあわせるとみんな熱っぽい視線を向けてくれたけど、それは町役場のみんなともそんなに変わらない気がした。

さつき町長室で繰り広げられた派閥形成とかのリスクはとりあえずのところなさそう。というか、町みんなは宗教関係のことはたぶん知らないんだろうな。

ちよつとネットで調べれば出てくるらしいけど、そこまでする気力もないのかもね。

「お父さんは、最後に来るとおもいマース」

「そうなんだ。じゃあ、いまから五時間後くらいかな」

「そうデスね」

乙葉ちゃんも葛井町長の圧力から解放されて、少しリラックスしているみたい。

ここは、会議室。

探索班の人たちと昼食をとったりもするところ。

ネット配信するときは放送室を使ったりもするんだけど、ここも候補のひとつだ。

いまはボクと命ちゃん、そして乙葉ちゃんの三人だけ。みんな気を利かせてくれたんだと思う。

そんなわけで――。

「乙葉ちゃん。お父さんが来るまでなにをして遊ぶ？」

上目遣いで、ボクは乙葉ちゃんに聞いた。

現役アイドルと遊ぶなんてチャンス。そうそうないからね。

特に、乙葉ちゃんとはコラボ配信した仲でもある。

いっぱい遊びたい。

「あ、……かわいいデス！」

ボクはギユウギユウと抱きしめられていた。背後に見える命ちゃんの視線が痛い。

「あ、あの、ボクにおさわりするのは禁止です」

「どうしてそんなこと言うデスか？」

ほんのちよつと瞳をうるませて、罪悪感をくすぐってくる乙葉ちゃん。

ますますクールになってくる命ちゃん。

「ヒロゾンビになつてから、ヒロちゃんはともし火のようなものデス。くらやみを照らす暖かな光のように感じマース」

なんだか宗教めいた言い回しだなあ。

命ちゃんにしろ、マナさんにしろ、ボクと接触したりするのが気持ちいいって言う人はわりと多いけど、やっぱり物理的にヒロゾンビのつながりってあるんだろうか。

「ねえ。乙葉ちゃん」

「なんデスか？」

「ヒロゾンビになつちやつてよかつたの？」

「先ほども言いマシタが、特に問題ないデス」

「お父さんか誰かに言われたから、ヒロゾンビになつたんじやないの？」

「うっ。そんなこと無いですよ！」

少し焦ってるみたいだった。

妖精みたいな顔つきの乙葉ちゃんがきよろきよろと涼しげな目元をまたたかせている。

まばたきの回数が多い。

やがてひと段落したのか、乙葉ちゃんは「ふう」と大きな溜息をついた。

「お父さんに言われたのは確かデス……。でも、ヒロちゃんともっと仲良くなりたいと思ったのは本当デス」

「そうなんだ。じゃあ、改めまして、よろしくね」

握手。

おずおずと差し出してみた。

美少女アイドルとの握手なんて、そうそうできるものじゃないからね。

「よろしくデース」

花が咲くように笑うっていうのは、こういうことを言うんだろう。

「先輩がアイドルにほだされている……」

命ちゃんが少し怖いけど。

☆Ⅱ

「じゃあ、少し配信してみようか？」

ボクは乙葉ちゃんに提案した。

ボクの唯一のコミュニケーション経験値が高いのは配信だ。

冷静に考えると、ボクって女の子の遊びとかよくわからないからな。

女の子っていうと、タピオカ飲みながら無限にしゃべってるイメージあるけど、命ちゃんの場合は、ほとんど喋らない感じだし、ボクといっしょのお部屋にいるときも、本とか読んでじっとしていることが多い。それかパソコンをいじったりとか。

ちよつと……なんとというか……個性的というか。

ボクの周りの女の子サンプルは命ちゃん以外はいなかった。

つまり——、ボクは女の子との遊び方を知らないのでした。

「なんか先輩の女の子カテゴリにわたしが入ってない気がする」

「そ、そんなことないよ」

命ちゃんは特別。特別枠だからね。

「まあいいんですけど……」

「それはそれとして、配信だよ。どうかな」

「なにするデースか？」と乙葉ちゃん。

うーん。どうしよう。

配信と一口にいってもいろいろあるから、考えどころではある。

例えば、乙葉ちゃんがいる状況だと、歌を唄ったりするのが効果的

ではあるだろう。

なにしろ、アイドルは歌が唄えて一人前。

乙葉ちゃんもすごくうまい。

そんな乙葉ちゃんの生歌を聞けるだけで、ボクはうれしい。

「歌とか、かなあ……」

でも冷静に考えると、命ちゃんが浮いちやうからな。

命ちゃんはギターが死ぬほど上手いけど、歌を唄うのは好きじゃないみたいだし。

ここにはギターがない。

つまり、歌配信だと命ちゃんが浮いちやう。

「わたしはべつにいいですよ」

少し視線を伏せ気味に、お暇をいただきますな雰囲気命ちゃん。

乙葉ちゃんにかまいすぎたせいかな。

「今日はいっしょに配信しようね!」

両の手を両の手で握って、力強く宣言する。

命ちゃんがこくと頷いた。

素直な。素直すぎる。かわいい子なんです。

「後輩ちゃんが羨ましいブース……」

今度は乙葉ちゃん。バランスとるの難しいぞ。

「乙葉ちゃんのごことは先輩だね。配信とか、アイドルとかの。ボクにいろいろ教えてくれると助かります」

そう、ボクにとって乙葉ちゃんは偉大な配信の先輩だ。

ゾンビが溢れた世界になっても、配信をし続けて、みんなのこころを鼓舞し続けた。

その動機がたとえ宗教的な理由であれ、やった行為で誰かが救われたのは事実だ。

「もちろんブース」

ふう。乙葉ちゃんも満足げな表情だ。

女の子のご機嫌をとるのがって難しいな。ほんと。

とりあえず配信はじめるか。

「やっふー。今日は寒いね。みんな元気してるかな」

「やっふー」『もこもこした服着てるね』『ひとりクリスマスを敢行したオレに隙はない』『オレくん……かわいいそう』『あつ、隣にいるの乙葉ちゃん！』『ついに乙葉も合流か』『まあ元々コラボ配信してたしな』『もれなくヒロゾンビになってたりして』

む。ヒロゾンビになってます。

でも、わざわざ言うことでもないしねー。

「えつと、みんなお気づきのとおり、乙葉ちゃんがボクのところに来てくれたよ。これからは、ずっとコラボ配信できるよ」

『ずっといっしょだよ』『ズつ友』『なんだよ百合かよ』『ズボンはもう脱いでターバンのようにしてる』『後輩ちゃんのことも忘れないであげてください』

「もちろん、後輩ちゃんもいっしょだしね。最近はピンクちゃんがヒロウイルスの受け渡しとかの調整に忙しくてね。ちよつと寂しかったんだ」

いまは日本の海域にいるけど、受け渡しで政治的な要素をできるだけ排除するために公海上で渡すとかいう話になってるみたいだし、ラデブーポイントとか、テロが起こらないようにするために護衛とかどうするとか、そういう話を詰めていってるみたい。

年明けには、きっとヒロウイルスが各国にいきわたることになるだろうと思う。

『ピンクは仕事のできるいい女の子』『幼女先輩と打ち合わせ中とか』『ヒロウイルス散布で世界に平和が訪れるといいな』『オレ、ゾンビになってもいいかも』『既得権益化しそうだが』『そろそろ食糧の備蓄がヤバイからむしろ早くしてほしい』『人間が減るのもコワイがなー』『とはいえ、もはやゾンビを積極的に減らそうとする勢力は潰えたが』
そう。

ゾンビを積極的に消し去ってしまおうとする勢力は表舞台からは姿を消してしまった。

なにしろ、ヒロウイルスやヒロゾンビによって、生き返ることができるからね。

誰も人殺しにはなりたくないし、責任を負いたくは無い。

もちろん、ゾンビが迫ってきたら、正当防衛したいところではあるけれど、ボクの歌とかでゾンビ避けはできるようになってるし、だいぶんゾンビになってしまいう危険は少なくなってるらしい。

ただ――。

逆にだけど。

たとえば、幼女先輩たち自衛隊が、ゾンビを押しつけて発電所を復活させるというのも難しくなっちゃった。大部隊を動かすとゾンビが死ぬ。――もとい人が死ぬってことだから。

このあたりは、痛し痒しってやつかな。

「じゃあ、そろそろ始めます。今日の配信内容はコレ――ヒロちゃん三分クッキングです」

取り出したるは市販のパンケーキ作成セット。

女の子といえば、料理。

そして、乙葉ちゃんも命ちゃんもゲーム配信とかよりも、興味があるかなって思ったんだ。

ボクも、料理には自信がありますよ！　なにしろ経験を積んできてますからね。

カレーメシとか。カップ麺とか。

よゆーよゆー。

『料理？』『小学生の手料理……ごくり』『ヒロちゃんは食べる役目？』『後輩ちゃんが難しい顔してる』『料理よわわわガール』『ほう。つまり、ヒロちゃんを全力でサポートする配信か』『大丈夫だよ。メシマズでもかわいい！』

「バカにしてるなく。ボクだってパンケーキぐらい作れます！　この前はマーボーだって作れたんだからね！」

そう、ボクは片栗粉をいいところで投入する役目だった。

マナさんはボクをほめてくれた。

つまり、ボクは料理ができる子なんです。

『後でスタッフがおいしくいただきましたという流れ?』『消し炭になっても食べる役目があるな』『焼肉で炭になった野菜の気持ちがかかるか』『乙葉ちゃんはわりとできる子だよ。ゾンビ禍前にカレー作ってたし、普通にうまそうだった』『後輩ちゃんの実力はわからないが手先は器用だからなんとかなるだろ』『ヒロちゃんの前バフVS後輩ちゃん・乙葉ちゃんの前バフ』『パンケーキおいしくできるといいね』

みんなの信頼が痛い。

でも、パンケーキ好きだからがんばります！

ハザードレベル106

乙葉ちゃんが町役場にやってきた記念配信。

それは料理配信でした。

なあにたいしたことはない。

なにも考えることはない。

ただ、パンケーキの元を、パンケーキを焼く機械でジユウジユウするだけの簡単なお仕事。

それこそ小学生でもできる単純作業。

ボクは乙葉ちゃんに手料理をご馳走しようとしてたんだ。

配信で、料理つよつよガールであるところを見せたかったというのもある。

そんなわけで――。

料理風景はまるまるカット。

くう。疲れました。

多くのことがあった。

数え切れないほどの悲しみ。喪失。そして痛み……。

いや多くは語るまい。

語りえぬものは厳然と存在するのだ。

ボクの目の前にあるパンケーキになるはずだった希望の種も。

誰も語りえない。

語りえぬものには沈黙せざるをえない。

だから、深海のような重たい沈黙が場に満ちている。

「ていうか炭ですよね」

み、命ちゃん。そのツツコミは厳しすぎるよ！

「料理レベルゼロガール……」

乙葉ちゃんが何かすごく絶望的なことを言っている！

「なんで止めてくれなかったの!?!」

ボクはふたりに抗議した。

そう、目の前で料理してるんだったら止めることぐらいできたよね。

「先輩が楽しそうに料理してるし」と命ちゃん。

「自信満々だったし」と乙葉ちゃん。

「そもそも料理？」

「なんか遊びのようでもアリマシタ」

「先輩が男の子みたいな遊びするから」

「一瞬でしたし、止める暇もアリマセンでした」

それでも、炭になる前に声をかけるぐらいはできたよね。

『やはり料理よわわわガール』『メシマズ少女』『これはひどい』『ゾンビーとかよりはマシなんでは？』『料理がよわわでもかわいければいいのよ』『いやしかし、なぜあそこでライトセイバーごっこを始めるのか』

コメント欄でも言われたけれど、ライトセイバーごっこがよくなかったのかもしれない。

——ライトセイバー。

いわずと知れたスターウォーズの主力武器。
光る剣のことだ。

男というものはそれこそ五歳のときから、野原をかけるときにとりあえず棒状のものを拾うことにロマンを感じる生き物だ。ジエンダーフリー。そんなの関係ねえ！

あんまり暴力とかは苦手なボクにしろ、雄大とチャンバラごっこかはよくやったしね。ソシヤゲばっかりやってる陰キャってわけでもないのですよ。

いまは女の子でしょってツツコミはなしの方向で。

それで、あの武器つて高熱で焼ききつたりすることもできるんだよね。

そう熱があるんだ。

ふと握り締めたお好み焼きとかをひっくり返すやつを視界に入れたとき、ただ料理するだけだと、地味かなって思ってしまった。

なんか、こう配信のときって華が必要じゃない。

映えを求めるのが配信者の宿命みたいなものだし。

ボクの光る緋色の翼も出力を一定方向に収束させれば同じような

ことができないうかなくて考えたんだ。

つまり、ちよつと大きめの返しを持ち「ブーン」と口に出しながら、緋色の光を伸ばしてみた。

できた。

気分はもうジエダイです。

デデデ、デーン、デン、デデデ、デーン、デーンというお決まりのテーマを口ずさみながら、ボクはうれしくなって、ヒイロセイバーをプレートに置いたパンケーキの種に突き入れたのです。

結果はごらんの有様だよ！

パンケーキだったものは完全にまっくろくろすけになり、原型を留めていなかった。

それどころかプレートごと真つ二つに引き裂いている。

テールはなんとか大丈夫みたいだ。

『そうはならんやろ』『やっぱフォースの暗黒面なのがよくなかったんやな』『緋色だしな……ヒロちゃんだけに』『そもそも料理で遊ぶのはよくないと思います』『炭だけにスミませんってか』『審議』『滅』『ない』『極寒』『絶対に笑ってはいけないでも笑わんわそんなん』『スミマセン……』

『泣かないで』『かわいそうかわいい』『乙葉ちゃんや後輩ちゃんがフォローする暇もないとか』『ヒロちゃんには料理を食べる係になってもらったほうがいいんじゃない』『しかし、炭っていうかも完全に炭化して風に舞いそうなくらいポロポロやな』

黒くなった炭状のものは、ツンとついたら崩れ落ちた。

「以上です」

『終わろうとするな』『スタッフがあとでおいしくいただきました』『緋色様がおつくりになったものならたとえ炭でもいただきます』『小学生の料理ぞ。炭でも食べるわ』『さすがに料理じゃないのはちよつと……』

まあ、料理はできなかつたけど、乙葉ちゃんと久しぶりに配信できてよかったよ。

配信が終わって、いよいよ乙葉ちゃんのお父さんが降りてくる時間になった。

総勢30名という大所帯が、福岡あたりから佐賀まで移動してきたことになる。

その内訳はほとんどが魔瑠魔瑠教とかいう謎の宗教団体らしいけど、乙葉ちゃんの人となりを知っているボクとしては、さほど不安はない。

町のみんなも乙葉ちゃんの笑顔の営業活動のおかげか、ボクと同じような感じみたい。

友好ムードよりかな。

無骨で大きなヘリが空中を舞っている。風が強く巻き起こって、ボクは手で日差し避けをするみたいにした。

「どうやら何事もなく到着しそうだね」

「そうデスネ。最後に来るのは魔瑠魔瑠教の幹部の皆さんみたいデース」

「ふうん。幹部ってことは司祭とかそういう感じなの？」

「住職だったかと思いきや、まあそんな感じデース」

「西洋なのか和風なのかよくわかんないけど」

「わたしもわかりマセンが、考えるだけ無駄デース。きっと、お父さんもあまり考えてないんじゃないかな」

「へえ……」

宗教のいかかわしきつていうのは、やっぱり一般人感覚だとあるような気がする。

前に命ちゃんと言った『誰かを愛することは誰かを愛さないことだ』というのと同じロジックで、何かを強く信じている人は何かを強く否定するかもしれないからだろう。

信条がぶつかるような――。

侵食されるような――。

自分の考えを否定されるような肌感覚が気持ち悪いと感じるのか

もしれない。

でも、乙葉ちゃんの顔を覗き見ると、父親がやってることに思春期らしい嫌悪感は見られない。

むしろうれしそうだ。

「ん？ どうしたデスか？」

「乙葉ちゃんのお父さんってどんな人かなって思ってた」

「んー。普通のお父さんだと思うデスが」

「普通？」

「普通にわたしのことを愛してくれてマス」

ふむ。とりあえず乙葉ちゃんにとってはいいパパさんのようだ。

町役場の駐車スペースに、ヘリは降り立った。羽の回転が緩やかになり、やがて止まる。横スライドしたドアから、ゆっくりとした歩調で出てきたのは、なんとか普通の日本人男性だった。年はたぶん50代半ばくらいで、乙葉ちゃんの年齢を考えれば少し年がいつているように思う。

髪の毛が相対的に少ない感じというか……なんというか。

でもそんなことより特徴的なのは着ている服かな。

日本人の顔なんだけど、神父さんが着ているようなゆったりめのローブのような服装だった。神学校が多い長崎方面では日本人の神父さんが多いから、見慣れていると思うけど、一般的には日本人顔でローブのような服装って珍しい。

彼はきよろきよろと見渡すような仕草をし、それからボクと目があつた。

うれしさが爆発するとはこういうことをいうんだらうか。

子どものように一直線にこっちに向かってきて――

「ヒロちゃん様アアアあああああああ！」

土下座だった。

ジャンピングというか、すべりこみというか。ともかく土下座だった。

「お会いしとうございしました。あなた様の敬虔な信徒でございませす」

「は、はあ……こんにちわ」

とりあえずボクは挨拶した。

そうこうしている間に、ヘリから降り立った男女が同様に地面に這い蹲るようにして土下座していた。

土下座というか平伏なのかな。

正直、ドン引きなんだけど！

「あの、立ってください」

「崇高なるあなた様の前では立ちあがることなどできません」

えー、ボクがいたら匍匐前進でもするつもりなの？

それに超ローアングルになって、今日のボクはもふもふジャンパー装備だけど、下は元気にミニスカートなんですけど。見えそうなんですけど。

女兒に対して土下座する大人というのも外間が悪い。

「お父さん。いい加減にしないとヒロちゃんが迷惑してマス」

「おお、乙葉よ。その様子だと、無事ヒロちゃん様の使徒にしていたのだな」

使徒って？

ああ、ヒロゾンビのことか。

あれは事故というか、乙葉ちゃんが無理やりって感じだったけどね。

あいかわらず、乙葉ちゃんのお父さんは膝をコンクリートの地面につけたまま、立ち上がるうともしない。その格好でジツと固まってるから、町のみんなも少し様子がおかしいことに気づく。

まずいかもしれない。宗教戦争勃発。派閥争い。いろんなマイナスイメージが思い浮かぶ。

マイナー宗教を信じる信じないは勝手だけど、ボクをご神体にするのはやっぱりやめてほしい。

でも、乙葉ちゃんにお父さんだし、あまり強く言うのもよくないかな。

「先輩。強く言ってあげたほうがいいですよ。こういう強い存在に依存する人たちには、はつきりと伝えたほうがいいんです。忖度させると逆に意に沿わない方向にいきそうですし」

命ちゃんのアドバイス。

確かにそうかもしれない。

「えーっと。嬉野神父さん？」

「あ、いえ、違いマスよ。お父さんの名前は荒神といいマス」

「え？ そうなの」

乙葉ちゃんからの訂正に、ボクは面食らう。

乙葉ちゃんって嬉野乙葉って名前だから、ボクはてっきり嬉野神父さんなんだと思ったんだけど、違ったのか。もしかして、乙葉ちゃんの名前って芸名なのかな。

でも、さつき乙葉って言ってたよね。

わからぬ……。

まあ、ともかく気を取り直して。

「えっと、荒神神父さん」

「はい」

「立ってください」

「はい」

うーん。敬虔な信徒って感じかな。

そろりと立ち上がる荒神神父。視線はボクをガン見している。

「ヒロちゃん様」

「はいなんですよう」

「ヒロちゃん様を信望している者として、是非にお願いしたいことがございますー」

「なんですよう……」

ものすごく迫ってくるから圧がすごい。ていうか、近い近い。乙葉ちゃん一家は人との距離が近い家風だったりするんだろうか。

さりげに両の手を包み込まれるように握られているし！

飯田さんみたいに変な感じはしないから、小学生女兒に性的に興奮するような感じじゃないんだろうけど、これはこれで別種の興奮があるみたいでコワイです。わたし神様に触れちゃってます的な血走った目をしてるし。人違いじゃないでしょうか。

ていうか、真にコワイのはボクの隣にいる命ちゃんの冷氣。

「わが宗教——魔瑠魔瑠教は世界が変革したときよりヒロちゃん様を信仰してまいりました」

あー。言っちゃったよ、この人。

町のみんなの前で。誰も聞いたことのないような宗教名を口にしてる。

荒れるかなー。荒神って名前だし。

「へーそうなんだ」

と、ボクはなにげないふうを装うことしかできません。

「それでなのですが——、魔瑠魔瑠教という名前をぜひとも神聖緋色教へと改名いたしたく」

「却下ー」

乙葉ちゃんから聞いたとおりになったよ。

ボクの名前の宗教とか絶対勘弁です。そんなのいまの状況で黙認しちゃったら、全世界のヒロ友の一部が追随しそうだし。

「なぜでございますか！」

「なぜって……そりゃ恥ずかしすぎるでしょ」

そう恥ずかしいのです。

いや本当は恥ずかしいとかそういうことよりも、いろいろと弊害がありそうじゃない？

そこんところをわかってほしいのです。ボクは神様じゃないので。

「ヒロちゃん。ごめんナサイ。お父さんはこういう感じの人なん德斯」

乙葉ちゃんは悄然とした様子だった。

まあ、父親が宗教家というのはいろんな意味で大変だと思うよ。

ともかく却下。

ボクをひそかに想ってくれるというのは、まあ悪い気持ちでもないんだけど、なんとというか神様の代わりにしちゃうっていうのは荷が重い。だから、名前を使ったりとか、ボクの容認をうまく引き出したりするのは本当に迷惑。

「ヒロちゃん様はわが信仰をお疑いなのでしょうか」

「べつにそういうわけじゃないけど、ボクは神様じゃないですしおす

し……」

「いや、ヒロちゃん様こそ神。世界の理を塗り替えるかけがえのないお方なのです」

そういうふうにも力説されましても。

町のみんなも困惑しているみたいだし。

「美少女が神なのは疑いようのない事実」「つまりヒロちゃんは神？」

「神ってる？」「かわいさは神がかつてるよな」「ていうかあの神父？

髪薄くね？」「つまり信仰心も薄い」「おいやめろよ。ハゲ」「誰がハゲ

だよ」「知ってるか。ハゲネタはハゲは笑えないんだぞ」「髪の話をするのはやめろ」

困惑してるんだよね？

「ごほん」とりあえず場を整え。「神父さんが信仰しているのを止めはしないけど、ボクはなんの干渉もしないからね。容認もしないから」

ガンと衝撃を受けたように固まる荒神神父。

この世の終わりを見たような表情だった。

少し悪いことをしているような気分。

でも、こういうことは、はつきりさせとかなないと後々引きづるような気がする。

「わかりました……」

苦悶の表情。

心苦しいけど、退いてくれてほっとする。

でも、それは一秒後に、ボクの勘違いだったと気づいた。

「わが信仰が足りないと仰せなのですね」

「いやそういうわけではなく」

「ならば——！」荒神神父は後方で平伏状態の幹部の人たちにチラリと振り返り言った。「僭越ながらお見せしましょう！ わが溢れる信仰心を！」

話を聞かない人である。

信仰を見せるとか意味わかんないし。

だんだん自分の目が据わってきたのがわかる。

いわゆるジト目状態で、荒神神父を見ることしばし。

花が咲いた。

真つ赤な真つ赤なお花が咲いた。

もちろん、それは比喩的表現で、いくらなんでも自傷するなんて思っただけでボクは、驚きのままなにもできない。

見れば、信徒の人たちもその何割かは、持っていた小型のナイフなどを使って、自分の首元に刺し入れていた。

動脈を深く傷つけた人は、本当に時代劇みたいにプシユウと飛ぶんだ。

そんなことがわかってしまった。

幾人かはさすがに、恐れからかそこまではできなかったみたいだけど。

町の役場の駐車場が紅く染まっていく。

「なにやってんだよ」

本当に理解不能だ。意味がわからない。

どうしてこんなことするの？

ボクが回復させられるから？

それともヒロゾンビになりたいから？

「ああ……甘美」

荒神神父は陶醉しきった表情を浮かべていた。

信仰心とっていいのかわからないが、彼が彼の信念に殉じようとしているのはわかる。

首元から今も大量の血を流し、青白い顔になりながら、やがてバタリとその場にくず折れた。

「お父さん！ なにしてるの！」

乙葉ちゃんが驚き慌て、倒れふした荒神神父の身体を優しくいたわるように——悼ましい表情で抱いている。

「乙葉よ……。よいのだ。自分の信仰を疑われるのは……ごほつ。わたしにとっては耐えがたきこと。それよりはまだ死んでモノいわぬゾンビに成り果てたほうが幾分かマシなことなのだ」

それはボクにはわからない。

信仰って、ボクのようなちやらんぽらんな存在には縁遠いものだった。

たから。

せいぜいが、命ちゃんのことは守るとか、かわいい女の子とは仲良くしたいとか、そういう程度のもの。

神父さんのような強烈な意志は——殺意ぐらいしか経験したことがなかった。

だからボクには、神父さんの行動が得体の知れないものにしか思えず、正直なところちよつと気持ち悪いと思ってしまう。

だけでなく——生きるという生物の本能に抗う姿に、逆に生命そのものを侮蔑するような感覚がして、怒りのような感情すら覚えていた。

そう、ボクは怒っていた。

だから、回復しない。勝手に死ねばという気分だ。

「助けてください」

乙葉ちゃんが懇願しても、ボクは動かない。

だって、乙葉ちゃんもヒロゾンビだ。ゾンビになっても乙葉ちゃんが血を与えれば回復できる。ボクが回復する必要すらない。もしかしたら、そうなることも織り込み済みなのかもしれない。ボクはかわいい女の子に甘いし、一等かわいいアイドルの乙葉ちゃんに対しては甘いと思われてるんだろう。

そういう思考を辿ると——やっぱり沸々と怒りが湧く。

「乙葉ちゃんだって知ってるでしょ。ヒロゾンビにしてしまえば、ゾンビから復帰できるって。だから、こんなの信仰心を示すことでもなんでもないんだ」

自分でもビツクリするほど冷たい声が出ている。

「わが信仰をお疑いになられるのであれば、どうか——わたしがゾンビになっても、どうか——そのまま捨て置いてください」

荒神神父は、かすれるような声でそんなことを言う。

その殊勝な態度が本当のものかは、ボクにはわからない。

「乙葉よ……。大変無念ながら……。わたしは緋色様のご不興をかったようだ。緋色様がお赦しになるまで、けっしてわたしを蘇らせたりはしないように」

「なんでそんなこというの」

泣きはらした乙葉ちゃん。

でも、ボクには茶番めいたように思えて冷めて見ていた。

ボクは酷薄なのかな。

でも、信仰っていうのが本当によくわからないんだ。

ただ——、この人たちって自分のことしか考えてないなって。

自傷するのも自殺するのも自分が気持ちよくなるためなんだって思えて。

そう確信すればするほど、勝手に死ぬのはいいけど、迷惑にならないように死んでくださいとしか思えなかった。

もしも、乙葉ちゃんのお父さんでなければ、ボクの目の前ではないところでひっそりとゾンビになっているのだったら、ボクは「ふーん」といって、それで終わりだっただろう。

荒神神父と、幾人かの信徒達はそれで終わり。

数分も経たないうちにゾンビとして動き出した。

腕を突き出し、どこを見てるとも知れない視線で、ゆっくりと起き上がる。

町みんなはさつきからドン引き状態で、ゾンビになった人たちから距離をとるように離れた。

もちろん、あまりみんなを怖がらせてもいけないから、ボクはゾンビをコントロールして、ボクの近くから離れないようにしている。
気が重い。

乙葉ちゃんとは仲良しだと思ってたけど、ボクは彼女にバツテンをつけなくちやならないから。

「さつきも言ったとおり乙葉ちゃんの好きにしていよいよ」

「ヒロちゃんは怒ってマスカ」

「そりやそうだよ。みんなに迷惑かけて、駐車を真つ赤に汚して——自分勝手じゃん」

「ごめんなさい」

「乙葉ちゃんが謝ることもないよね」

「でも」乙葉ちゃんは土下座した。「お父さんを戻してください」

「だから、乙葉ちゃんが戻せばいいじゃん」

「父はわたしに戻すなど言っていました」

「言ってたね」

「だから、ヒロちゃんが良いというまで、わたしは戻せません」

「じゃあ、ゾンビルームにでも保管しとく？　ボクは戻すつもりはないけど」

「だいたい、さ。」

死ぬのは怖くないって、他人からしてみればめっちゃコワイよ。サイコパスの所業だよ。自分で自分のいのちを断つのは究極的にはまあその人の自由であり権利であるのかもしれないけれど、そんな人たちと仲良くなりたいかっていうと、ボクはなりたくない。

「お願いします。父を救ってください。なんでもします。一生、ヒロちゃんの奴隷でもいいです。わたしが代わりにゾンビになれっていうのならなりますから」

乙葉ちゃんは、すごくお父さん想いの子だっていうのはわかったよ。

でも、それって娘に期待している父親の構図というのもありそうで、荒神神父の思惑に乗るようで嫌だ。

乙葉ちゃんは好きだけど。

乙葉ちゃんに対しては叶えられる願いは叶えてあげたいけど。

ふう……。

「じゃあ、この場で裸になって配信してよ」

ボクは地面を見ながら言った。

「アイドルとして終わって」

ボクは冷たく言った。

「だったら考えてあげてもいいよ」

ボクは攻撃的に笑った。

乙葉ちゃんに一瞬でも逡巡があったら——と、考えたけど。

乙葉ちゃんは文字通りの意味でまったく躊躇なく、自分の服に手をかけた。

その動きにはよどみが一切ない。

乙葉ちゃんのお父さんへの想いのほうが、乙葉ちゃんのお父さんの信仰心より上回ってるように思うし、ボクの視点からすれば尊いように思える。

ほんのちよつとの尊さが人間の価値を決めてるのかなあなんて。

「もういいよ」

寒い年の暮れ。乙葉ちゃんは純白のブラジャーを皆さまの前にお見せすることになってしまいました。ボクはもこもこジャンパーを脱いで、乙葉ちゃんに着せてあげた。

もこもこジャンパーの下にはなんとキャミソール姿のボクがいるのです。さむっ。

でも、ヒイロバリアで寒さ無効です。寒くないっ。

「ヒロちゃん……」

「ごめんね。乙葉ちゃんを試すような真似をして。でも、知っていて。ボクはこの人たちとのつながりなんてまだほとんどないし。乙葉ちゃんがお願ひするからやむなく——しようがなく、助けるんだからね」

そもそも助けるとかそういうのとも違うような気がするけど。

荒神神父をひざまづかせ、ボクは手のひらを切り裂いて血を与える。また、ヒイロゾンビが増えちゃうな。

そんなことを思いつつ、ボクは信徒の人たちにも血を与えてまわった。

途中で、命ちゃんや乙葉ちゃんも参戦。

結局三十人中、ゾンビになってしまったのはその半分くらい。そしてその人たちはみんなヒイロゾンビになってしまったのでした。

そして――。

乙葉ちゃんの父親はまた最初のように平伏している。

「ご不快にさせてしまい申し訳ございません」

「乙葉ちゃんに感謝したらいいと思うよ」

荒神神父は乙葉ちゃんに向き直り。

「すまん。乙葉。おまえにも迷惑をかけてしまった」

「お父さんが生き返ってよかった」

親子愛には、ボク弱いんですね。早くに両親なくしてるから。子が親を慕う気持ちをふみにじりたくなかったというのが大きい。けっして乙葉ちゃんの下着姿に興奮したからではないことを知っていたらどう！

「先輩が、アイドルにほだされてる……」
だから違うって！

☆
||

「はあ、今日はなんか疲れちゃったな」

フカフカのベッドに倒れこみ、ボクは一息ついた。
たくさん血が流れたし。

たくさんヒロゾンビが増えちゃったし。

あれだけたくさんヒロゾンビが増えてしまったら、それをみんなの前で見せてしまったら、そのあたりの影響もでてくるかもしれないな。

「ティーター効果ですね」

ボクの部屋にいるのは、ゾンビお姉さんことマナさんだ。

なんかのコンサンルタントみたいな仕事をしていたらしく、よくわからない言葉をいろいろ知ってる。

「ティーター効果って？」

「プレゼンみたいなものですよ。プレゼンをご存知ですよね？」

「うーん。広告みたいな」

「そう。そういう感じです。英語つよつよガールですね」

「うん」

ボクは英語よわわガールではないのだ。

「ともかく、みなさんにとってヒロウイルスが未知の存在ではなくなり、十分に実効的なものとして広まったと思いますよ」
「なにが起ころのかな」

ボク、お布団を両の手でつかみながら、マナさんに聞く。

「一番考えられるのは、そろそろ自分もヒロゾンビになりたいという考えの人たちが増えてくるかもしれないってことですね。それとともに、やはり宗教的な影響もあるかもしれないですね」

「なんだか面倒そう」

「ふふ。ご主人様がお布団をなんとなくつまんでるのがかわいいです」

ん？ ああ、べつになんでもない感じだけど、冬の寒い時期にお日様の光をいっぱい吸ったお布団をつまんで、フニフニするのってなんか気持ちいいんだよね。

なんか疲れちゃったから。エネルギー補充中です。

「添い寝していいですか？」

「えー」少し考える。「いいよ」

お布団干してくれたのマナさんだしなあ。

電気のきてないボクのアパートだと、湯たんぽくらいしか暖房器具がない。

それと——人肌。

「今年一番のラッキーお姉さん選ばれました♪」

すごくうれしそう。なんだか、マナさんのそういう純粹なところは好きだな。

それにあったかいし。

「ふう。おやすみなさい」

「はい。おやすみなさい。がんばりましたね」

よしよしされながら、ボクの意識は暗闇に溶けていった。

ハザードレベル107

次の日。町長室。

ボクは昨日の事件について、正式に報告していた。もちろん昨日のうちに、簡易的な報告はしたけどさ。それだけじゃ足りなかった。事件の張本人に話を聞く必要があったんだ。いわゆる事情聴取というやつ。

——魔瑠魔瑠教信者の大量自死事件。

凄惨すぎる事件だったけれども、結果としてみればボクの血によってリカバリできたともいえるし、実質的には誰ひとり死んではないわけで、町のみんなども遠巻きに見ている状況のようだ。

昨日の今日でいきなり仲良しというわけにはいかないまでも、やっぱり隔たりはできちゃっただろうな。今後どうなっていくかはわからないけどシヨツキングな事件だったろうし。

ほかにはヒイロゾンビの数が15人ほど増えたらしいことも告げた。

「やっぱり宗教というのはコワイねえ〜」

と、黙って聞いていた町長が初めて意見を述べた。

対するは、厳格な表情を浮かべている荒神神父。

「何を信じるかはその人のこころの問題です。なんの問題がありませんか。素晴らしき存在を崇め奉るのは、人として自然な成り行きです」

またそういうこと言ってるし。

確かに信じることを止められないけど、信じるということに付随する”行為”はみんなに影響があると思う。内心だけにとどめておけばべつになにも言わないけどさ。

駐車場で真つ赤なお花（比喻表現）を咲かせたのは、ちよつと、ね。さすがにみんなに対して影響がある。

自傷だけど他害性のある、みんなを傷つける行為のように思える。

ある意味、テロに似ているというか。そんな感じすらするし。

「お父さん。あんまり信仰の自由を言い訳にするのはよくないとおも

いマス。ヒロちゃんも困ってマスよ。わかってマスか？」

乙葉ちゃんがぶんすこ怒っている。怒っている姿もかわいらしい。「う、うむ。それはわかっておる」

少しは反省しているのかな。うーん。よくわからない。乙葉ちゃんのことは普通に大事な、ただのお父さんって感じで、そういった属性は、ボクも好きなんだけどね。

宗教家としての属性は一般人にはやっぱり重いな。

「ともかく、ここは僕がとりしきってるんですよ」葛井町長はあいかわらずニチャつとした笑いを浮かべている。「勝手なことをしてもらっては困ります」

「もちろん、信仰の自由を認めてもらえるならば、そちらに従おう。真神たる緋色様が手を貸している組織だ。無碍にはできまい」

「ヒロちゃんにはいろいろとよくしてもらってるからね。こちらもヒロちゃんが君たちを受け入れるというから、同じく受け入れる努力はしようって言うてるんですよ。そちらは、どのような努力をなされるんですかねえ」

「人心を慰撫し、そちらの意に沿うようにしよう」

「既に人心は離れてると思いますけどね。僕も遠巻きに見てましたけど、あんなカルト的な行為をして、それでも皆が付き従おうとすると、思いますか？」

町長の言うことももつともだ。

ボクという存在がいたからこそ、ヒロゾンビ化することで何事もなく復活できたけど、ボクがいなかったらそのまま死んでるし、ゾンビのままなわけだし。

例えば、天国にいけますよって言うって、だからいつしよに死にましようって言うってくる集団があつたら怖すぎるでしょって話。

もちろん、荒神神父もバカじゃないから、ボクという存在をあてにしていたんだろうけどね。神様を試しちゃいけませんってキリスト教では言ってるけど、魔瑠魔瑠教にはそんな教義はないのかな。

「我々を信じるのではない。緋色様を信じるのだ！」

「まあ、ヒロちゃんをひそかに天使だとか神様だと思ってる人は多い

と思うけどね。それを形にしてしまうとマズインじゃないかな。まつさきにヒロちゃんが困ると思うよ。神様扱いされて勝手に自殺する人たちが増えたらね」

そりゃ困る。

あんな真つ赤なお花事件が毎回のよう起こったら嫌だ。

ボクとしては、ヒロゾンビになりたいっていうのだったら、首筋にちよつとした傷をつけてでも感染させることはできるし、それでいいと思うんだけど。

それに――、ボクは配信者であつて、神様じゃない。

ボクはみんなとは友達つて気持ちだし、ご神体にはなりたくない。「ほらね。ヒロちゃんもコオロギ食べたような顔になつてるでしょ」

コオロギ食べたような顔つていたい……。

苦虫を噛み潰したような顔つてことだろうか。

「緋色様。我らが緋色様を信じ、お慕いするのをお認めいただけないでしょうか」

「信じるつていうのはそつちの勝手だから、ボクが止められることじゃないと思うけど、ボクはただの超能力少女だよ。神様とか天使とかじゃないんだけど」

「もちろん理解しております。そういうフリなのですよね」

「いやフリつていうか……」

同じ日本語なはずだけど、言葉自体がだいぶん違うつて感じで、話がどこまでもかみ合つてないような気がする。

ボクが戸惑つていると、葛井町長が口を開いた。

「荒神神父さん。いまはとても重要な時期なんですよ。ヒロウイルスの国際的な拡散があと少しでおこなわれる。そうなれば、こちらの価値もおそらく相対的に下落すると思います。それまでは自粛していただけると助かるのですがね」

下落する。薄まる。それがとても大事。

いままではボクの価値は高すぎた。なにしろ世界を救えるかもしれない唯一の存在だ。

だから、高すぎて売れなかった。

ボクの手には余っていた。

でも、安売りしちゃうと今度はそれはそれで困るみたいだった。それをどうにかしようとしてくれるのがピンクちゃんということになる。

荒神神父は葛井町長の発言が気に入らなかったようだ。

むっとしてる。

「自粛とは？」

「簡単なことです。布教しないでいただくとお助かります」

「宗教弾圧ではないか！」

「ええそうですよ。それが何か？」

葛井町長つえー。荒神神父のほうは、ぐぬぬってなってる。

でも、葛井町長のいうとおおりだと思う。正直なところ、昨日の件もかなり微妙なんだよな。

宗教的な信条にもとづいて自殺したことがじゃない。

ヒイロゾンビが増えたっていうのが問題なんだ。

いまはヒイロゾンビの取り扱いも正直なところフワっとしてる。それぞれの国がどう扱うかはその国がやりたいようにやればいいと思ってるけど、たぶん、国際的な取り扱い要綱みたいなのも定めて、とありえずこの方向でやっていこうみたいな感じになるはずだ。

例えば、ヒイロゾンビは一国100人までにしようとかさ。

それなのに、昨日たった一日で15人もヒイロゾンビが増えちゃった。

これはゆゆしき事態です。

国際法に違反してますってなるかもしれない。もちろん、遡及効無効で問題ないとは思っただけ、ここ佐賀だけ特別扱いされちゃう感じで、いろいろと微妙になるかもしれないんだ。

「緋色様。我らが緋色様を信じるのは自由とおっしゃられましたね」

「うん。まあ言ったけど」

「では、緋色様を信じる者を我らが受け入れ、集合するのもまた自由であるはずですよ」

「積極的布教をするのではなくて、魔瑠魔瑠教に入信したい人がでた

ら受け入れてもいいかっていつてるの?」

「そうです」

「積極的か消極的かの違いがよくわからないんだけど」

「緋色様は素晴らしいお方です。なにもせずとも、人心を掌握し、衆生を癒される存在といえます。我々が入信しませんかといわずとも、きっと緋色様を中心にひとつになれるでしょう。我々は左様な存在になるべきなのです」

「勧誘しないでも、ボクが黙認したって思われるだけで信者さんが増えそうで嫌だなあ」

「既に全世界に5億人のヒロ友がいるではないですか!」

「うーん。ヒロ友と信者さんは違うっていうか……」

「なにをおっしゃいます。宗教とは——そうですね、作法のようなものなのです。宇宙の理に沿う人のあり方なのです。緋色様をお慕いする者が増えれば、この世界はもっと暮らしやすく、弱者が虐げられることなく、誰もが幸福のうちに暮らせるようになるでしょう。いや! そうなるべきなのです!」

怪しい目つきになってきてコワイんですけど。

どう考えてもボクの責任とかそういうのが過重されていて、そこんところが辛い。

「ボクが公式に魔瑠魔瑠教を認めちゃうと、神様としての責任を負わなくちゃいけなくなるよね。ゾンビについてはボクのが役にたつしなんとかしたいと思ってるけど、それ以外のことまで責任はもてないよ」

「しかし——」

「ヒロちゃんもこう言ってるんです」

荒神神父が何か言う前に、葛井町長が言葉を差し込んだ。

「しかし……」

「小学生に重責を負わせるのは忍びないと思いませんか? 宗教上の存在になるということは、例えば宗教戦争が起こったときに、その責任も発生するということです」

「緋色様はそのような空想上の存在ではない。ここにおられる! 実

存する神なのだ。緋色様を中心とする平和的統一によって、すべての争いは消滅する」

「いや、ヒロちゃんだって生物だし、いずれはいなくなるよ。そのときは同じように空想上の存在になるよね」

「緋色様は永遠の存在である」

「それってあなたの妄想でしょう」

「貴様は緋色様のご寵愛を受けておらぬからわからぬのだ！」

ヒートアップする議論。

ボクは陸にあげられてピチピチ跳ねてる魚の気分だった。

死んだ目ってやつだ。

「お父さん。あまり迷惑をかけるのはどうかと思うデース」

乙葉ちゃんが荒神神父をいさめてくれた。

いくら宗教家でも娘には弱いのか、さつきとはまた別の意味でうなっている。

「乙葉よ。その身に緋色様のご寵愛を受けておきながら、なぜわからぬのだ」

「わからぬのだから言われなくてもデース……」

「見よ。われらは既に人を超えておるのだぞ」

グツ。

荒神神父が右腕を持ち上げると、壁にかかっている額縁がガタガタと揺れた。

念動力が既に身についているみたい。

割と早いと思うけど、ピンクちゃん理論によれば、集合的な人気があれば力が身につくらしいから、15人ばかりとはいえヒロゾンビからの人気がある神父さんなら、それだけ力も強いってことだろう。腐っても宗教家ってわけだ。

「乙葉よ。おまえはわたしよりも強い力を得ているはずだぞ」

確かに乙葉ちゃんはアイドルで、登録者数も多い。つまりそれだけ人気なわけで、念動の力もピンクちゃんと同じぐらいはあるはずだ。

けれど――。

乙葉ちゃんはうつむいたままだった。

いつもは元気な顔もしぼんでしまってる。

「そうやってヒロちゃんの手を見せびらかすのはどうかと思うデース」

「見せびらかしているわけではない。我らは緋色様の使徒としての使命がある。緋色様の救済を広めていくという使命がな」

そんなミツシヨンを与えた覚えはないんだけど。

「やれやれ、人の話を聞かない御仁だね……」

町長も張り付いたような笑みは変わらないけど、ちよつと疲れ気味のようにだ。

だって話が通じないんだもん。

だからといって、ボクが無理やり言うことを聞かせたら、それはそれでうれしく受諾しそう。

やめてねってお願いしただけで、使徒認定されたって喜びそうだからどうしようもない。

どうしたらいいんだろう。いい案が思いつかないよ。

なんととはなしに、ずっと黙ったままのボクの隣にいる命ちゃんを見てみる。

天才な命ちゃんなら凡人には思いもよらない妙案が思い浮かんだりしないかななんて。

「人文系は苦手なんですけどね……」

「うん。ごめん」

でも人の心もパラメータ分析できそうな命ちゃんなら。

「教団のトップをアイドルにさせてみればどうですか？」

「アイドルって乙葉ちゃんに？」

「そうです。先輩が危惧しているのは野放図な勢力拡大でしょう。町長もそうお考えなのでは。だったら、こちらである程度コントロールが可能なアイドルがトップに立ったほうがいいんじゃないですか？

もちろん、トップという名の広告塔ですけど」

「お、乙葉が教皇か……うーむ。娘は死ぬほど陰キヤなのだが」と荒神神父。

陰キヤ？ あんなに元気いっぱいな感じなの？

「ムリムリムリムリカタツムリデス！」

乙葉ちゃんはスライムみたいに小刻みに震えていた。

うーむ。自信がないのは本当らしい。

「問題ないですよ。今やってるアイドル業と同一線上でやればいいんです。肩書きがひとつ増えるだけ。むしろそうでないと困ります」

「どうして？」

ボクは聞いた。

「簡単なことです。宗教とアイドルっていうのは本質的には同じですからね。要は信者を束ねるということです。であれば、彼女が宗教家となったとしても人はアイドルの副業なんだなと思います。お遊びの一環として捉えられるということですよ。ガチになりません」
なるほどね。

ガチガチの宗教っていうよりはファンワリとアイドル業の一環みたいな感じに所属させとけばいいってことか。そうすれば、信者もファンもそんなに変わらなくなる。

「そうすると乙葉ちゃんがボクのファン筆頭になっちゃうけど。いいのかな」

「ヒロちゃんのファンなのは間違いじゃ無いデスガ……」

「正直なところ、わたしの視点ではそこで涙目になってるアイドルのほうがまだ信用できますからね。先輩のことを好きだつて気持ちウソではないみたいです。なによりあんな事件を引き起こしておいて無罪放免なんてありえません。鈴くらいつけとかないとリスク高いですよ」

「ううむ。鈴をつけねばエサももらえん飼猫か」

ますます唸る荒神神父。

命ちゃんの言ってることは、

- 一、乙葉ちゃんを魔溜魔溜教のトップに据える。
- 二、アイドル業と宗教をまぜこんで遊びの一環にみせかける。
- 三、宗教的色合いを薄める。
- 四、もしものときは乙葉ちゃんをお願いして、カヴァーしてもらおう。
- 五、みんなハッピー。

こういうことだよね？

考えれば考えるほど悪くないって感じがする。

乙葉ちゃんは生粋のアイドルだし、みんなの心を掴むのがうまい。乙葉ちゃんは教祖さまって感じがしないし、教団のトップがアイドルなら怪しい方向には進まないだろうし、みんなの警戒心もかなり和らぐんじゃないかな。

「しかし、乙葉さんがお父上の言うことを優先してしまうことも考えられるんじゃないかな」

葛井町長は懐疑的なようだ。

「もちろんそうでしょうね。ただ——、今のままだと魔瑠魔瑠教は排斥対象になるでしょう。排斥対象になった集団が体制側に牙を剥いたりすることも考えられるかもしれませぬ」

敵対勢力になってしまえば。

異物になってしまえば。

確かにそういうこともあるかもしれない。

ボクが人から受け入れられているかもって思えるのも、友達と呼べる人がたくさんできたのも、配信してきたからだ。つまり、アイドルをやってきたから。

だとすれば、魔瑠魔瑠教もアイドル宗教にしてしまったほうがいい、

荒神神父からしてみても、布教禁止の今の状況よりはずっといいはずだ。だって、ファンが増えるのはボクとしても嫌とはいえないわけだ。

さすが命ちゃんだなあ。ボクはそう思う。だから、ここは荒神神父を説得しなくては。

「乙葉ちゃんのお父さん。どうかな。ボクとしても悪くない提案だと思っただけ」

「乙葉を教団のトップに据えれば、布教をお許しくださるのですかな？」

「ボクが神様じゃなくて、単なる配信者って位置づけなら、まあ……」
「アイドルも宗教ですからな」

「この町の長としては非公式なファンクラブ程度ならいいと思います
が、乙葉さんの舵とりがかなり難しいことにならないでしょうかね。
正直、僕は不安です」と葛井町長。

「舵取りって?」

「乙葉さんはお父上とヒロちゃんとの調整を続けなければならなくな
るということです。もしも荒神神父がヒロちゃんの意に沿わない行
為をしようとするとき、乙葉さんは心を鬼にして止めなければならな
くなる。鈴になればといってるわけだからね。親子の仲が引き裂かれ
ることになるかもしれないということです」

「それは嫌だな」

親子の仲を引き裂くことになるというのは、やっぱりダメ。

この案はなかったことに。反射的にそう考えて、

ボクがそう言いかけると、

「鈴になるくらいで仲が引き裂かれるというのなら、それだけの絆
だったということですよ」

命ちゃんの見事なまでのドライな割り切りだった。

「アイドル。あなたはどうなんですか。教団には鈴をつけないと、体
制側は危なっかしすぎて認めることができないという状況です。あ
なたが鈴になれば——多少はお目ごぼしがもらえる。あなたの負担
は増えるでしょうが、概ねみんなが満足する結果になるでしょう」

「わたしではムリデス……」

「そうですか。では——この話はなかったことにしましょう。魔瑠魔
瑠教団の皆さんには活動を自粛してもらって、我々の誰かが監視する
ことになりましたが、やむをえません」

命ちゃんが冷えた視線で乙葉ちゃんを見ている。

「わたしにはムリ……ムリなんです」

そうしてぽつりぽつりと語りだす乙葉ちゃん。

「わたしは捨て子だったんデス。お父さんは捨てられたわたしを拾っ
てくれて育ててくれました。わたしはお父さんの言うことならなん
でも聞きたいと思ってます。ヒロちゃんのごことは好きですけど、お父
さんの言葉には逆らえません。だからムリなんです」

オーバーフローした感情が、涙となって流れてた。

罪悪感が半端なかった。プロフィールだと、ドイツ人とのハーフとかしかかかれてなくて、お父さんが日本人なら、お母さんがドイツ人なのかなって思ってたんだけど違ったらしい。

捨て子と告白するとき、乙葉ちゃんは悲痛の表情だった。

捨てられたくないって想いを感じた。絆にすがっている感じ。それは依存に近しくはあるけど、他人がどうこう言っているものじゃない。

「ごめん。乙葉ちゃん。無理しないでいいからね」

「すみませんでした」

命ちゃんも頭をさげた。

さすがに乙葉ちゃんの事情までは知らなかったのだろう。命ちゃんも提案も悪くはなかったんだけど、乙葉ちゃんには無理をさせられない。

「待ってください」慌てたのは荒神神父だ。「乙葉よ。わたしは緋色様の言葉にはすべて従うつもりでいる。なにもするなといわれればそのようにする。布教するなといわれればそうしよう。そもそも前提として——、わたしと緋色様が対立するということがあるわけがないのだ」

えー。

でも、真っ赤なお花は、ぜんぜん望んでなかったんですけど。

と思ったけど、黙っておく。

「それに——、乙葉よ。連れが死んで、こころに凍えるような寒さを感じたとき、おまえの存在はわたしにとって暖かな光そのものだったよ」

荒神神父はそっと乙葉ちゃんに肩に手をかけた。

「なにがあってもおまえを捨てることなどない。おまえはわたしの言うことを聞く素直な良い子であったが、もし悪いことをしたとしても決して見捨てることはしないと断言できる。なぜなら、わたしはおまえの父であり、おまえはわたしのひとり娘だからだ」

「お父さん……」

乙葉ちゃんが荒神神父に抱きついた。
頭をよしよしされてて、ボクはそつと自分の頭に右手を添える。
少し寂しくてあったかくて変な気持ち。
まあ、宗教っていう趣向というか、特殊な趣味はあるけど、悪い人ではなさそうかな。

——などと思っていたボクが甘ちゃんでした。

「だから乙葉よ。教祖になってもよいのだ」

と、なにやらのたまっている。

「いや、むしろ緋色様は乙葉が教祖になることを望まれている。これはもうやるしかないぞ！」

ぐつと、親指でサイン。

おま……、ちよ……おま。

ボク絶句。

みんなも絶句している。

「わたしは司祭長あたりでよい。乙葉は教皇だな。わが娘ながら乙葉の目はよいのだから、きつと信者も増えるだろう。すばらしい。エクスレント！」

「お父さん……」

「頼む。神聖緋色教の未来のため、教祖になってくれ！」

☆
☆

鈴になれるかというと、非常に疑問の残るところだけれども、結果として乙葉ちゃんは教祖になることを選んだようでした。

事情が事情だけにどうなんだろう。というか、あの神父さんが止まることってありうるのかな。もう言語規格がそもそも常人とは異なるというか、そんなレベルのように感じる。

でも、だからこそ——。

長年いっしょに暮らしてきたひとり娘の乙葉ちゃんが一番、手綱を

握りやすいともいえるだろう。神父さんの言葉を常人の言葉にひきなおしてくれる。

それだけでもコントロールがしやすくなる。

と、町長は考えたのかどうなのか。いちおうは了承した。

「いやはや。強烈な御仁だね。正直なところ、今後がどうなるか不安でいっぱいだよ」

乙葉ちゃんと荒神神父が退出したあと。

葛井町長は疲れきった顔になっていた。いつものアルカイックスマイルも鬩りが見える。

「宗教のことはボクもよくわからないです」

「まあ戦争とかにはならないように気をつけないといけないね」

「それはやだな」

「そうじゃなくても、派閥とか差別とか、人間の本性つてろくでもないからね」

「町のみんなはどうなんでしょうか。やっぱり不安？」

「それもあるけど……信者のみなさんが案外カンタンにヒロゾンビ化しちやっただろう。それをじかに見ていたから、自分もそうなりたいと考えている人が一定以上はでてきてるよ」

「えー、ゾンビだよ」

「天使の眷属とか、まあなんでもいいんだけど、ただのゾンビとは違うだろう。ピンクちゃんの資料も後押ししていると思うけど、最終的に言えるのは君のファンは多いつてことさ」

「そうなのかな」

「みんな、ゾンビテロを体験しているだろう。ゾンビの怖さも体験済みってわけさ。だったら、その恐怖から解放されるヒロゾンビ化っていうのは魅力的に思えるだろう」

確かにヒロゾンビになれば、ゾンビに襲われることはなくなる。

最低保証ってやつだ。

「人間じゃなくなっちゃう恐怖はいいの？」

「そのあたりはバーターだよね」

「バーター？ マーガリンじゃなくて？」

「英語よわよわガール……」

命ちゃんがボソッて呟くように言った。

なーぜー。

ちがうよ。ボクだってそれぐらいはわかる。

ちよつとしたギャグのつもりだったんだ。

ようするに「選択」だっていいじゃないでしょ。

人間をやめるといふ恐怖は、正直なところ理論的なものであって、頭の中でグダグダ考えるときに生じるものだし、対してゾンビの恐怖は現実的なものだからね。

どっちか選べといわれたら確かにヒイロゾンビのほうがいいのかな。将来的に国やあるいは人間自体からどういう扱いを受けるかわからないということを除けばだけど。

たぶん、ボクという存在に慣れちゃったというのもあるのかもしれない。

ただし――。

ボクが想像していないことが一つあった。

町長室の扉が乱雑にノックされ、ボクは町長に視線をあわせる。

町長が頷いたのを確認してから、念動力で扉を開いた。

「ヒロちゃん。助けて！ 感染させられる！」

ボクが想像してなかったこと。

ヒイロゾンビは自由意思を持っているということだ。

ヒイロゾンビは人を襲える。

ハザードレベル108

「感染させられるー」

恐怖にひきつった表情で町長室に乱入してきたのは、ぼっちさんだった。

息もたえだえといった感じで、いまにも倒れこみそうだ。

「どうしたの。ぼっちさん。感染させられるって何に？」

当然。ここ町役場内で感染といったら、ノーマルゾンビじゃない。

まだゾンビルームはあるけど、嚴重な封印がされていて、そこから移動した様子はない。

ボクのゾンビソナーで捉えられるのは、ヒーロゾンビだけ。

そう——、感染といったらヒーロゾンビ。

「僕は……僕は違うんだ。違う。違うんだ！」

狼狽しきったぼっちさん。

冷蔵庫の中に入ったみたいなのに、全身がブルブルと震えている。

なにが違うのかはわからない。

でも、ヒーロゾンビに襲われたとしか思えない状況に、ボクは緊張の面持ちで聞いた。

「誰かに襲われたの？」

考えられるのは——昨日の15名。

信者を増やそうとして無理やり人を襲ってるという状況が考えられた。

でも——すぐに違うとわかった。

ゾンビソナーで見える限り、15名の信者さんは昨日から固まったまままだ。特に動きは見られない。15名が残り半数をヒーロゾンビにしているのかなとも思ったけど、そういうわけでもないらしい。

ヒーロゾンビが人を襲う動機といったら信者を増やすというのが強い動機に思えるけど。

それ以外に動機ってあるのかな。

でもホワイダニツトも、もうそろそろ卒業してもよい頃合だろう。どんな動機であれ、その犯行は完遂させられることはない。

「落ち着いて。誰が襲ってきててもボクが撃退するから大丈夫だよ」
ヒロゾンビはボクには原理的に勝てないからね。

ボクに勝てるとしたら”人間”しかない。

ここに逃げこんだ時点で、ぼっちさんの安全は保証されている。

「ヒロちゃん信じてほしい！」

必死の形相だ。

「うん。ぼっちさんのこと信じるよ？」

正直、何をどう信じればいいのかはわからなかったけど、そう語りかけるほかない。

「僕は……僕は……ロリコンじゃない！」

「ん？」

「僕はロリコンじゃないんだ！」

「そう、なの？」

よくわからない。

ぼっちさんの言っていることと、「感染」というキーワードがなぜつながるのか。

でも、その疑問は数秒後に氷解することとなる。

町長室の重いドアがゆっくりと開かれていく。

ホラーの演出みたいに、少しずつ。

そして顕わになる小柄な影。おつきめなヘッドホンを装備して、胸元にはポメラニアン。

出会ったときと同じく、足癖悪く細い足で、ドアを開けたみたい。

そこにいたのは、杵島未宇ちゃんだった。

ボクとほぼ見た目年齢が同じ。

十歳くらいの眠たげな表情の物静かな女の子。

生まれつきなのか耳が聞こえなかつただけど、いまはヒロゾンビになって聴力が回復している。そして、耳が聞こえるようになる前は探索班に属していた。ぼっちさんと仲がよかった。ぼっちさんが唯一手話ができて、意思疎通ができていたみたいだから。

つまり、ぼっちさんと浅からぬ仲。

つまり、ヒロゾンビ。

つまり、十歳の女の子。

つまり、完全なロリータだった。いや幼女なのかな。どっちでもいいけど。

ぼっちさんが、逃げるように後ずさる。町長の机にぶつかりそれ以上後退ができない。

「ぼっち。キスしよ。わたしと家族になつて」

戦慄すべき言葉とともに、未宇ちゃんはほっそりとした足を町長室へと踏み入れた。

★
||

あらためて言うことでもないけれども、僕の名前はぼっち。

もう町役場ではみんなの前で言ってる名前だし、ニツクネームとして広く周知されている。

僕が凡人のくせに、それなりに名前を知られているのは、僕が探索班だからだろう。

探索班としてゾンビが危険だったときから町の外にで繰り出した人はわずか四人しかおらず、僕と湯崎さんとゲンさん、そして未宇ちゃんだ。ヒロちゃんがいないときから、町の外に出ていた。危険極まりない探索班だけれども運よく誰も欠けることなくここまでやってこれた。

それなりにみんなから感謝されてもいるんだろうと思う。

もちろん、まだ小学生の未宇ちゃんに危険なことはさせられなかったから、未宇ちゃんは名誉会員みたいなものだ。実際には安全圏内で雑用が彼女の仕事。

それもやむをえない事情があった。

町役場のなかで唯一手話ができて、未宇ちゃんと意思疎通できるのは僕だけだったからだ。未宇ちゃんは町役場に逃げこんできたときに、おそらく家族を失っている。このご時勢だ。家族を失った人というのは珍しくもないことだけど。ただ、十歳の女の子が独り身になっているというのはそれなりに珍しい。

あのゾンビが出現した夜。時間は深夜帯で、にわかには騒がしくなってきたときに避難した人たちは——親や子がゾンビになつてない限りは、子どもの手を引いて避難したに違いないからだ。

つまり、町役場にいる小さな子どもはほとんどは親とセットになつている。

片親になつているパターンが多いけど。

子どもがひとりで町役場まで来たというのは奇跡的なパターンなんだ。まず避難所として設定されていた小学校ルートに進んだ人は全滅している。感染者がたぶん紛れ込んでいたからだろう。ゾンビ映画とかではお決まりのパターンというやつで、小学校ルートに進んだ人たちは運が悪かつたとしかしいようがない。町役場に限らず、避難所は大なり小なり同じような感じで、ほとんどが全滅してしまつた。

わりと安全だつたのが、むしろひとりアパートにじつとしていた方だつたんだから笑えない。避難所が避難所になつてなかつたんだ。もちろん、これは結果論。あとからわかつたことであり、未来視がでない人の身ではわかりようもない。

町役場はたまたま。運がよく。感染が広がることもなく、避難所としての機能を失わずに済んだ。そこに集まるまでに多大な犠牲がでたのだろうけれども……。

そんなわけで、未宇ちゃんの保護者になれるのは、偶然の産物だけど僕しかいなかったんだ。

厳密に言えば——、僕が町役場に来る前は、未宇ちゃんはどこにも所属していなかった。

僕が後からやってきて、未宇ちゃんはひとりぼっちで寂しそうに、所在無く部屋の片隅にうずくまっていたというのが正しい。町の子どもたちはお母さんやお父さんといっしょにいて、わずかながらも孤独ではないというのに。

想像を絶するほどに孤独な彼女の様子に、僕はいたたまれない気持ちになつてしまった。

僕と同じだつたからだ。

ヒロちゃんが来るまでの間、ひとり部屋で、餓死するまで、誰とも会話せず、ただ朽ち果てるのを待つだけの日々だった。

いやそれ以前に、僕は中学、高校と肉体的ないじめではないけれども、みんなに精神的な意味で揶揄されていたから。魔法少女が活躍するアニメを見ていたというそれだけの理由で「ロリコン」と後ろ指をさされてきてから。

これこそまさに事案なんじゃと思いつつも、ゾンビがはびこる世界で事案もクソもないなという思いで、僕は、未宇ちゃんに「どうしたの？」と語りかけた。

大きな瞳が僕を捉えていた。じっと沈黙したまま。おとなしい子なのかなと思つて、僕も黙つたままだつた。

やがて――。

未宇ちゃんは小さなお耳をそつと指差して、ふるふると首を振つた。

すぐにこれは耳が聞こえないんだなと察して、僕は手話を始めた。

『こんにちわ』

それが始まりだった。

★
||

最近、未宇ちゃんは音楽をよく聴いている。

眠たげな表情で、いつもこことは違うどこかの世界に精神を飛ばしているかのような彼女だけれども、いまアクセスしているのは音の世界。彼女の小さな頭には不釣り合いな大きめなヘッドホンを装着されていて、いろんな音楽を聴いてるようだ。

特にお気に入りなのは、僕が好きだといったボンジョビ。

特にお気に入りなのが『禁じられた愛』という曲。

べつに禁じられた愛だからといって、ロリコンの恋愛についての曲ではないけれども。

僕が近くにいるときはよく聴いてるようだ。ガチガチのロックなんだけどな。

小さな身体を揺らしながら、よく部屋の隅に座り、対面にいる僕をじーっと見つめてくる。

体育座り。小柄な身体。眠たげで表情に乏しい。

けれど、ほとんど使ったことのない声帯は澄んだ声を紡ぐ。

「音が楽しい」

と、未宇ちゃんは言う。

生まれたときから音が聞こえる常人には預かり知らぬところだけれども、未宇ちゃんにとっては生まれてはじめて音というものに触れたんだ。

その感動は筆舌に尽くしがたいに違いない。

あるいは——ヒロゾンビ。

彼女はテロにまきこまれて、ヒロゾンビになってしまった。

人間のままである僕には預かり知れない感覚があるのかもしれない。

たとえばヒロちゃんとのつながりとか。人とのつながりとか。そういうものを感じているのかもしれない。

音が聞こえない未宇ちゃんは、他人を天使であると表現していた。

違う世界に住んでいて、違う通信を交し合っているからというのがその理由らしい。

ひとりぼっちの世界。

いま、未宇ちゃんは音が聞こえている。僕としては小さくてかわいらしい未宇ちゃんのほうが天使っぽいなと思うんだけど、ようやく、天使が地上に舞い降りてきたのだともいえるのかもしれない。

孤独であろうとした僕としては矛盾しているかもしれないけれど、未宇ちゃんが”人間”になろうとしているのは好ましいことだと思う。

ヒロゾンビになって聴覚が回復したとしてもすぐに話せるようになったわけではなかった。

手話を覚えるのと同じく、自分や他者が発している音が、どの言葉に対応するのかわかなくてはいけなかったからだ。

僕は最初に幼稚園児が使うような、ひらがな表を用いて、ひとつひ

とつの言葉を指差して発声した。

「あいうえお」

「あーいーうーえーお?」

こんな感じだった。

「あーい……あーい」

未宇ちゃんがじーっと僕を見つめながら、『あ』と『い』の間を往復してたのはなぜなのか。

そのときの僕は気づかなかった。

小説の読み聞かせも、音を覚えるのに非常に効果的だった。未宇ちゃんが選んできた小説を僕が隣で読み聞かせるといいう感じだ。

内容は年上の先生に恋をする小学生という、かなりきわどいやつだった。最近の小学生って進んでいるなど思ったけれど、小学生の女の子は僕にとっては未知の生物って感じで、そういうものなのだろうと飲みこむしかなかった。探索班には女の子がいなかったし、基本的に対人が苦手な僕が探索班以外の誰かに、そのあたりの機微を聞けるはずもない。

結果として生じたのは――、

「メスガキ。オレの言うことが聞けないのか」

オレ様系の先生が、小学生の主人公を顎クイする展開だった。

あろうことか、先生は女の子をメスガキ呼びである。県教委あたりに怒られそうな展開だ。その前にPTAで禁止されるか。

不幸なことに県教委もPTAもなくなってしまったこの世界では、僕は未宇ちゃんに言われるまま、怪しい小説を読み上げるほかない。やがて、未宇ちゃんの言語スキルが上がってきて、未宇ちゃんはメスガキちゃんの台詞を読むようになる。

「せんせ。好き。キスして」

舌つたらずで甘い声を出すメスガキ――じやなかった未宇ちゃん。もちろん、音を覚えてたの彼女に他意はないはずだ。

でも、隣にちよこんと座る未宇ちゃんが甘い吐息を吐いて、なぜかうるんだ瞳で僕を見てくると、心臓がドキンと跳ねたような気がした。

「まったく、生意気なメスガキだな。わからせてやる」

あえて僕は宣言するが――、僕はロリコンではない。そういうふう
に人から言われたことはあるが、あれは悪意があるレッテルであり、
僕は小さい女の子に性的興奮を覚えるような変態じゃない。ただ、小
さな女の子が僕を慕ってくれるのは、やはりうれしいものだ。オレ様
系ではないけれども、僕がいちおうのところ目指していたのはそうい
う道だったから。大学というモラトリアムな時間を使って、僕は僕
のような境遇を生み出す環境をぶっ壊したかったから。

つまり、先生になりたかったから。

ただ、僕は甘く見ていた。

未宇ちゃんのゴーイング・マイ・ウェイっぷりを。

女子小学生の本当の恐ろしさを。

もう数ヶ月もほとんどいっしょに過ごしているのに、気づきもしな
かったんだ。

★
||

きっかけはやっぱり昨日の出来事。

魔瑠魔瑠教の人たちがたくさんヒロゾンビになって、おそらく未
宇ちゃんは『いいんだ』と思っってしまった。

つまり、彼女は彼女なりに自制していたのだろうと思う。

そのタガがはずれてしまった。

「ぼっち」

探索班に与えられた十畳ほどの室内で。

ゲンさんも湯崎さんもどこかに行っていない時間。

狙い済ましたように未宇ちゃんが言葉を発した。

無音に近かったのもあり、未宇ちゃんの声はよく通った。

「ん？」と僕は短く聞く。

「愛は感染する」

ポエマーだなと思った。

かといって、その思考にはバカにするような感情は含まれていな

い。

むしろ、その知的水準に驚きを隠せない。

人と隔絶した世界に暮らしてきた彼女は、詩的感性が優れているのかもしれない。

そう思ったのもつかの間。

未宇ちゃんが何を言ったのかを考える。

愛は感染する？

気づいたら未宇ちゃんは立ち上がり、僕が座っている対面のほうへ近づいていた。

さすがに小学生といえ、あぐらの状態の僕より、立ったままの未宇ちゃんのほうが高い。

見下ろされる形になって、僕は「どうしたの？」ともう一度聞いた。

「愛はゾンビと同じ」

「どういうことかな」

「愛は感染したいと思う。同じになりたいと思う」

「じゃあ、憎悪はアンチウイルスなのかな」

「そうかも」

「太宰先生にでも聞いたのかな？」

この町役場で先生役をやっている高校生。太宰ころちゃん。彼女はかなりの本マニアだ。そういうような表現に長けているように思い、彼女からそういうふうな話を聞いたのかもしれないと思ったんだ。

「違う」

未宇ちゃんから出てきたのは否定の言葉。

「なにか小説でそんな表現でもあったの？ その……すごく難しい言葉を使うね」

「本は好き。でも違う」

僕が小学生の頃は、そんな高等なものは読んでなかった。

せいぜいがドリトル先生くらいだ。あとは漫画ばかり。

女の子の成長は早いっていうけれど、十歳の女の子の言葉としては天才といえるレベルだ。

ヒロちゃんにしろピンクちゃんにしろ、ここでは天才児が多いから気づかなかつたけれど、未宇ちゃんも天才なのかもしれない。

教え子の輝かんばかりの能力に、僕はにわかになれなくなって、口角があがってしまう。

よく考えたら、僕は未宇ちゃんに言葉を教えた『先生』みたいな感覚なのかもしれない。

教え子がどんどん成長していく。にじみでるような嬉しさ。

「未宇ちゃんが自分で考えたの？」

それも首を振って否定した。

いったいどういうことだろう。

「昨日。いっぱい愛が広がった」

「愛って……ヒロちゃんのこと？」

というか、たぶんヒロウイルスのことだろう。

確かにゾンビは感染させたいもの。ゾンビは他者を同じくしようとする。同化融合しようとする。愛も同じで、究極的には、他者とひとつになりたいってことだ。

未宇ちゃんは『見た』と知っているんだ。

音のない世界にいた彼女にとつては、視界情報はほとんどすべてとってよく、あの真つ赤にコンクリートを染める様子は、それはそれは鮮烈に目に焼きついたことだろう。

愛が広がるという表現に引っかかりを覚えはするものの。

「わたしもぼっちも、ひとりきり」

「まあ——、大学に通ってきた頃の僕はそうだったかもね」

「でも、我慢しなくてもいい」

我慢？

と、世の大きなお兄さんなら羨むかもしれない出来事が起こった。僕は未宇ちゃんに抱きすくめられていたんだ。当然、座っている僕と立った状態の未宇ちゃんの身長差から導かれる情景は、小学生の女の子にバブみというかなんとか胸のあたりで抱きすくめられている大人という図である。

「み、未宇ちゃん。それはヤバイって！」

僕は慌ててふりほどいた。いまの姿を誰かに見られたら、ロリコンのそしりは免れないだろう。

未宇ちゃんは、不満げにほっぺたを膨らませている。

そんな積極的な子じゃなかったはずだ。

「ひとりはいや」

「まあ誰だってそうだろうと思うけど」

「家族ほしい」

「そりゃあね……」

こんな世界になった後。

当然ながら、僕も未宇ちゃんも連絡くらいはとってみたし、ヒロちゃんが来たあとは、実のところ、未宇ちゃんの実家に行ってみたりもしたんだ。結果——、誰もいなかった。

ゾンビになっているのか、それともどこか遠くに避難しているのかはわからないけれども、ともかく未宇ちゃんが悲愴な表情になっていたのは事実だ。

僕の場合も同じ。

そんなのはありふれていて——身寄りがいないなんてことは、誰にでも起こりうることだった。

家に家族がいて、なにげない会話を交わしたり、ご飯をつくってくれたりする存在がいるということが、どれだけ貴重なことだったのかは、いまさらながら感じていることだ。

だから——、未宇ちゃんの気持ちも理解できたとは言わないまでも、共感できるころはあった。未宇ちゃんはおそらく家族が欲しいのであって、特段、僕に対する恋愛感情はないのだろうと思う。あるいは分配比率の問題で、恋愛1に家族9とかそんな割合なんじゃないか。

「ぼっち。わたしのこと嫌い？」

「嫌いじゃないよ」

そんなことがあるわけない。

でも、そうやって迫ってくる未宇ちゃんは恐ろしい。

「ぼっちと結婚する。家族になる」

「未宇ちゃんにはまだ早いんじゃないかな」

「あいしてます」

「ひええ」

弾丸のように迫ってくる唇に、僕はとつさに畳の上を転がった。

ヒイロゾンビになってしまった未宇ちゃんの膂力は、おそらく常人の数倍程度はある。

小柄な身体を活かしたフットワークは、とてつもなく素早い。

まるで、彼女とお世話をしているポメラニアンの全力疾走並。いやそれ以上。

転がると同時に、受身の要領で立ち上がったが、相対する未宇ちゃんはにじり寄ってきている。

狭い室内がさらに狭く感じられた。

「ぼっち。痛くないよ?」

「いやそういうことじゃないんだ」

「ヒイロゾンビになるのが怖いのか?」

「怖くはないけど」

べつにヒイロゾンビになるのが怖いわけじゃない。

ヒロちゃんは僕にとつてのヒーローだし、普通に考えて、このゾンビが溢れる世界でゾンビ避けできるスキルが身につくのは悪くない選択だと思っている。

ゾンビになるということも、ヒロちゃんと同じ種族になるんだと思えば特に嫌悪感も抱かなかった。

じゃあ、なぜ未宇ちゃんを拒否しているかというと、野放図にヒイロゾンビが増える展開を、ヒロちゃん自身が望んでないからだ。

僕はヒロちゃんのやってることを手伝いたいと思ってるし、ヒロちゃんの思考に沿いたいと考えている。命の恩人だから。それに――、僕は彼女のファンだからだ。ヒロちゃんを裏切りたくない。

「ヒロちゃんにキスしてもらったほうがうれしい?」

「……いやいやいやいや。そんなことないよ」

「ぼっち。いまちよつと考えた」

「ヒロちゃんは忙しいから、僕になんかかまってる暇はないと思うよ」
「ヒロゾンビになるのは一瞬。天井の染みを数えてる間に終わる」

小学生らしからぬ物言いに僕は心底怖くなった。

にじりにじり。にじりにじり。未宇ちゃんはゆったりとした歩調で僕に寄ってくる。

ボクシングの試合みたいなのに、僕は円を描くように逃げるが、最後にはコーナーに追い詰められてしまった。

「大丈夫。畳と女房は新しいほうが嬉しいって聞いた。わたしはまだ十歳。新しい。ぼっちも嬉しい。子どもは一姫二太郎がいい。庭付き一戸建てに住む。若奥様」

「誰に聞いたのかな」

「忘れた」

ついに、僕は十歳の女の子に壁ドンされてしまった。

ダメだ逃げられない。

ジャジャと、音が漏れ聞こえてくる。会話ができるくらいの音量で、未宇ちゃんは音楽を聴いている。たぶん、ロック。たぶん、禁じられた愛。

「未宇ちゃん。音楽聴きながら人と話すのはお行儀が悪いよ」

「ん……」

未宇ちゃんはヘッドホンを取り外して、あらためて僕に向き直る。

そのわずかな隙。

コンマ一秒のあいだに僕は逃げ出した。

後ろも見ずに全力疾走だ。僕は小学生の女の子から逃げ出して、ヒロちゃんに助けを求めた。

そして今に至る。

ハザードレベル109

「ぼっちさん。一言だけいいかな？」

「はい……」

懺悔する信徒みたいになだれているぼっちさん。

少し手心を加えるべきではと思っただけ。

でも、ボクがいわべき言葉はひとつ。

「リア充爆発しろお！ 爆ぜろお！」

説明するまでもないことだけど、リア充はその名のとおり、リアルが充実しているやつのことだ。

小学生の女の子に言い寄られるなんて、事案中の事案であり、これ以上ないほどにリアルが充実しているといえるだろう。モテ期か？
もちもちの木ならぬモテモテの期なのか？

「先輩……」

命ちゃんも黙ってて。いまはぼっちさんを糾弾すべきときでしょ。

ぼっちさんは、ボクを見るとき視線にねっとりとしたものはない。
親愛の情みたいなのはすごく感じるけど。

たぶん、ロリコンってわけじゃないと思う。

要するに、今回の事件は未宇ちゃんの一方的な積極性によるものであつて、ぼっちさんに罪はないと思う。

だけどさあ。

ボクとしては腑におちない感じです。

やっぱり10歳という年齢が犯罪的。

いまのぼっちさんは20歳くらいだと思うから、例えば10年後とかなら、30歳と20歳でわかるんだけどね。

いまはダメでしょ。

特にしようがないなあとか言いながら、キスとかしたら、ぼっちさんは一生ロリコン呼ばわりされても仕方ないレベル。言い訳のしようもない。

このロリぼっちめ。あ、いや、これだと変な意味になるな。

「僕はべつにリアルが充実しているわけでは……」

「ほう。未宇ちゃんみたいな可愛い女の子に結婚したいとまで言われて充実してない？ ぼっちさんの理想は相当高いのだろうなあ。どれだけリアルが充実しているのか、ボクにはまったく想像もできないよ」

やれやれといった感じ。

「あの、ヒロちゃん。そういうわけではなくてね。僕は未宇ちゃんのお気持ちもわからないではないんだけど……、要するに家族が欲しいってことだろう。未宇ちゃんは少し混乱しているんじゃないかと思うんだ」

「家族欲しい。いっぱい子ども産みたい」と未宇ちゃん。

信じられないくらいクールだ。それでいて言ってるセリフはホツトだ。

もしかすると命ちゃんよりも積極的かもしれない。

「ぼっち」

「ひえっ」

ピトっ。

そんな感じで、お犬様を床に下ろし、ぼっちさんの腕にくつつく未宇ちゃん。

まるでオナモミみたい。

オナモミって知ってるかな。とげとげのいっぱいある親指の爪くらの大きさの植物なんだけど。佐賀方面では『バカ』って呼ばれたりします。くつつき虫って言い方もあるみたいだけど、子どもときにはよく投げて遊んだなあ。

そんな感じで、めつちやくつついている。ぼっちさんは当惑している。本当にどうしたらいいかわからないみたいだ。

やむをえない。少し助け船をだそうかな。

「えっと未宇ちゃん。いちおう確認するけど、どうしてぼっちさんをヒロゾンビにしたいの？」

そう。

問題として大きいのは、ぼっちさんがロリコン認定される件ではない。

もしも、未宇ちゃんがぼっちさんとキスしたりすると、ヒーロゾンビが増えるということが問題だ。

女の子の貞操と世の中のことわりを変えるかもしれない素粒子では、どちらが重要なかは判断つかないけれど、ボクにはヒーロゾンビたちの行く末を見守る義務のようなものがあるように思える。

将来的にヒーロゾンビの位置づけが固まってしまつて、例えば人間とは許可なく結婚できないなんてことになったら、ボクはやっぱりそれは違つて言いたい。自由に結婚できるように働きかけたいって思う。

なんて言つたら上から目線かな。

でも、いまはそのときじゃないというか、未宇ちゃんは幼すぎるというか。

結婚うんぬんの話も、もう少しヒーロゾンビが増えてからだろう。

ともかく、未宇ちゃんの意味確認が先決だ。

「ひとりぼっちはさみしい」

「家族が見つからなかったから?」

「そう」

「ぼっちさんのこと好きなの?」

「あいします」

十歳の女の子とは思えないほどに、ドキつとする表情だった。

いつも眠たげで、正直なところ何を考えているのか読み取るのが非常に難しかった未宇ちゃん。

言語を獲得して、自己主張ができるようになって、ボクは彼女の意思が鋼のように固いことを知る。

「ぼっちさんも未宇ちゃんのこととは大事だと思うよ。でも、ヒーロゾンビにすることと家族になることはイコールじゃないと思うんだけど。未宇ちゃんの年頃だとまだキスはちよつと早いんじゃないかな」「ん……」少し考えているご様子の未宇ちゃん。「男の人はいつまで経っても若いお嫁さんがほしいって聞いた」

若すぎる気がしますが。

「ぼっちが望むなら、いまからでもお嫁さんになる」

「法律上、もうちよつと大人にならないと無理かなあ」

「そんな法律もう無くなったよ」

まあ確かに現行の法律のほとんどは崩壊したといえるかもしれない。

だからって、完全に秩序とか風俗が消え去ったわけでもないんだけどな。

「未宇ちゃんはまだ心も体も成長期なんだから結婚は早いかなあと思うよ」

「ヒロちゃん知らないの？　女の子は生まれたときから恋することができなんだよ」

うわ、すごい説得力。

ボクは女子的な経験値が圧倒的に少ないので、そういわれてしまえばそうなのかなと思うほかない。

しかし、なんという無敵感。

「ボクはまだよくわからないかな。でも、法律も死んでるかもしれないけど、もし未宇ちゃんと結婚するとかいうことになったら、ぼっちは社会的に死ぬよね」

「ひえ」とぼっちゃん。

まあ、ちよつと前にホームセンターで英雄は何してもいいんだ説とか唱えてた人いたけどね。

ぼっちゃんも探索班である意味、英雄だし——。頼りなさそうには見えるけど優男って感じで、なんか安心するタイプだし。もしかすると、世の女子たちはわりとぼっちゃんに好意を寄せてるかもしれない。

未宇ちゃんとキスしたりしたら——英雄だからやむをえないってそう考える人がいたりするのかな。

いや——。

そんなわけない。

とりあえず、ボクが黙ってません！　ボクは命ちゃんとの関係で培ってきた兄力があるのだ。兄は妹的存在に対して庇護力が高まるのである。ぼっちゃんが未宇ちゃんに手をだしたりしたら、兄的存在

としてゆるしませんよ！

「戦国時代なら珍しくもない。前田利家の若奥様は11歳から子ども産んでる」

世は戦国時代でありましたか。

「あの、いまはわりと平和なときだと思うけど」

「ヒロちゃんがいるから。ここはそうだけど、たぶん他の国は戦時体制だと思う」

「……そうなの？」

ていうか、ボク、小学生の女の子に説得されかかってるんだけど。ヤバイ。ボク大学生なんだけど小学生に勝てない！

いや勝つとか負けるとかでなく、なんというか、そう……ともかく強い（小並感）。

「そもそもぼっちさんの気持ち的にどうなのかな。小学生に言い寄られてホイホイキスしようとはしてないよね？」

「僕は、その……ここまで言ってくれることはうれしいよ。でもヒーロゾンビのことになったらヒロちゃんの領分だから、僕が勝手にヒーロゾンビになるのは裏切りになるんじゃないかと思ってるんだ」

ぼっちさんの気持ち。

それはヒーロゾンビになるならいいとかそういうことよりも、ボクに対して誠実でありたいってことらしかった。

ぼっちさん、いいひとだよな。

友達にしたいタイプナンバーワンだ。あ、恋愛要素はないですからね。あしからず。

ボクの領分と言われてしまうと、うーん。悩みどころではある。だって――。

「昨日。ヒロちゃんの愛は広がったよ」

そう、愛っていうのが独特の表現だけど、未宇ちゃんがいうとおり、ヒーロゾンビは結構な数増えてしまった。

いまさら、ぼっちさんがヒーロゾンビになろうがなるまいが、まあ言うなれば、いまさらいっしょでしよってことだ。

ボクのスタンスは結構揺らいでいる。

ヒーロゾンビを増やすということに対しても、前ほどは抑制的じゃない。

もちろん、これにはピンクちゃんの多大な努力に感化されたからつてのが大きい。

もしくは、ヒーロゾンビになりたいって人間が結構増えてきてるから。

「まあ——、ぼっちさんがロリコンって呼ばれてもいいならしようがないかもしれない」

「そんなヒロちゃん」

涙目になるぼっちさん。そんな見捨てられた子犬みたいな目をしてないですよ。

「ぼっちが望むなら、なんでもする。だから、ぼっち。お願い」

うるうる見つめる未宇ちゃん。なんだこの最強生物は。

ぼっちさんはもはやうなだれて、言葉を失ってしまっている。

み、命ちゃんは何か妙案ないかな。

「無理です。わたしも先輩への気持ちと同じですから」

命ちゃんは首を振った。ボクと命ちゃんの年齢は、未宇ちゃんとぼっちさんほどは離れていなかった。でも、ボクが年下の女の子扱いして、命ちゃんの想いを受け止めなかったのも事実。

妹分のおままごと扱いたというか。そういうふうに躲してきたというか。

命ちゃんが本気なのはわかっていたけれど、関係性が崩れるのが怖かった。

特に——なんといえはいいか。三人だったんだ。雄大とボクと命ちゃんの三人。三人でひとつ。

その関係性を崩したくなかった。

命ちゃんの天才的頭脳が借りることができないとなれば、ボクにはもう万策は尽きた。

葛井町長はさつきから、ゲンドウポーズのまま動かないし、むしろ楽しそう。

いまや、この町長室は未宇ちゃんの独壇場だ。

スツとぼつちさんの腕から手を離し、ゆっくりとあとずさる。距離をあけて、小さな唇から唄うように言葉を紡ぐ。

「わたしはひとりぼつちだった」

「みんな他の世界に生きていて、わたしが血を流してもみんな気づかない」

「だってみんな天使だから」

「ぼつちが声をかけてくれた。ひとりじゃなくなった。ぼつちもひとりだったんでしょ？」

「だって、ぼつちはぼつちだから」

「ぼつちもひとりぼつちはイヤだった？」

「わたしは傍にいるよ！」

「星が輝きを失うまで」

「言葉が枯れてしまうまで」

「ずっといつしょ」

かあああああああつ。顔が熱くなってくる。

激烈にヤバイ。

こんなのドラマでも聞いたことがないっていうぐらい、ド直球のラブコールだった。

これにはぼつちさんも参ったようで、ついに観念してしまったのか、動きがない。

未宇ちゃんが抱えるようにして——ぼつちさんの頭をロックオン。抱きつく要領でキスつもりのようだ。ボクが超能力を使えば拒否することは可能だろうけど。

ぼつちさんも完全に抗ってるわけでもないし。

もう社会的に死んでも、それを受け入れるつもりだ。名誉の戦死つてやつなんだろうか。

ボクが考えるのは、ある種の同意傷害なんじゃなかろうかという、分けのわからない思考。

つまり、感染症を患ってる人がいて、その人からべつに感染してもいいよと同意した場合に傷害罪が成立するのだろうかという、きわめて法律的な思考です。

構成要件的な要素としてはじくのか、それとも違法性ではじくのか
が問題だよね。

あるいは責任の問題なのか。

ああ、悩ましい。

人間、めちやくちや関係のないことを不意に考えたりするよね。

いまのボクはそんな状態です。

ああ一つだけ言えるのは未宇ちゃん君の勝利だ。

ぼっちゃん陥落。もしくは感染。あるいは……。

「ロリコンだよね」「ロリコンですね」「ロリコンだねえ」

「ぼ、僕はロリコンじゃない」

「抵抗しなかったし」「ロリコンはみんなそう言うんです」「世が世なら君は豚箱行きだよ」

「抵抗したよ！ したけど抗えなかったんだ。未宇ちゃんのほうが力は強いし」

「あー小学生女子のせいにするんだ」「控えめにいってクズですね」「未宇ちゃんがかわいそうだねえ」

「わたし大丈夫。ぼっちゃんがダメな大人でも愛せる。わたし尽くす女だから」

未宇ちゃん最強すぎるだろ。

もう誰も勝てないよ。お犬様はさつきからキャンキャン吠えながら飛び回ってるし。

未宇ちゃんがおいででのポーズをすると、お犬様はうれしそうに腕の中に納まった。

ここでもヒエラルキーが。

ぼっちゃんは、膝について未宇ちゃんに語りかける。

犬吠える。

「未宇ちゃん。僕は君を傷つけないんだよ」

「知ってる。ぼっちゃん優しいから。でもひとりじゃなくてもいいんだ」

よ」

「ヒロゾンビになってしまったら、今のところ二度と人間には戻れない。

未宇ちゃんからすれば、ひとり取り残されたのは、ぼっちさんのほうだったのかもしれない。

「だったら、手を差し伸べるのは未宇ちゃんのほうからしかありえなかった。」

「そういう話なんだろうと思います。」

☆Ⅱ

「なんだ。ぼっち。そんなところで固まってどうした？」

突然、町長室のドアが開き、見知った人物が入ってきた。

「ゲンさんだ。探索班のリーダーで、未宇ちゃんからみればおじいちゃんといってもおかしくない年齢の人。」

「あ、いえ。やむをえなかったとはいえ罪悪感が……」

「わたしがぼっちをヒロゾンビにした」と未宇ちゃんはクールに自白する。

「ふむ？」

「ゲンさんが少し考えた。ヒロゾンビについては知ってるほうだと思っただけ、感染方法についてはいろいろあるからね。具体的に何がどうなったのか考えるのに時間がかかったんだろうと思う。」

「その解法は、部屋の中でじっくりねつとり事態を観察し続けただけの町長の手によってもたらされることになった。」

「つまり、」

「そこにいるロリコン君が未宇ちゃんとキスしてヒロゾンビになったんですよ」

「爆弾を投下する葛井町長。」

「マジで楽しそうにしてやがる。こいつは鬼畜だぜ。」

「とはいえ、ロリコンの誹りは免れない。だって事実だもん。」

「ボクも未宇ちゃんに負けた敗北感からすれば、それぐらい、『名誉の

不名誉』だと思いなよって言いたい。

そもそも美少女にチュウされていやがるとか間違ってると思います。あれ、ボクなんか矛盾してる？

まあいいや。ともかくぼっちさんが悪い。

ゲンさんは、ぼっちさんをにらんでいた。

ゲンさんは未宇ちゃんを孫娘のようにかわいがってたと思う。特に未宇ちゃんがテロリストにさらわれそうになったときは、あえて、未宇ちゃんを銃で撃ち、ヒーロゾンビ化させることで救った。もちろん苦渋の選択だった。

あのときはそうしなければ、未宇ちゃんが連れ去られていたかもしれないからだ。

正直、ゲンさんのなかでは、圧倒的に未宇ちゃんのほうが大事なんだろう。

「どういうことか説明してもらおうか」

「ひえっ」

ぼっちさんが青くなる。ゾンビ化しちやっただせいかな。

それで、ぼっちさんがしどろもどろになりながら説明すること約十分。

たっぷりと時間を使ったわりには伝えたことは、自分はロリコンではないという言い訳が九割。

そして本質的な部分はたったひとつだけ。

要するに、未宇ちゃんの気持ちだ。

「ゲンじい。ぼっちは悪くないよ」

「そうか？　しかし、家族が欲しいのであれば、わしに頼めばよからうに」

「んー？」

「わしはいつでも未宇の家族になるつもりだぞ。ヒーロゾンビにだってなっついていい」

ゲンさん。孫に死ぬほど甘いおじいちゃんの顔だ。

というか、未宇ちゃんにチュウされたぼっちさんにひそかに嫉妬の炎を燃やしてませんかね。

まあ、未宇ちゃんを銃撃したことを、そのときはそれしか方法がなかったとはいえ——後悔していたゲンさんだ。

未宇ちゃんが何かをしたいと願えば、その願いに極力添いたいと考えていたのだろう。

「ゲンじいも家族になる？」

「ああなるとも」

未宇ちゃん無双は続く。

「ん。わかった。ちよつとかかんで」

未宇ちゃんの指示に、ゲンさんはおとなしく従う。

いつもは厳格な顔つきが、耐えきれなくなつてちよつと笑顔なんですけど。

正直キモイんですけど！

でも。

未宇ちゃんの中では、恋の対象であるぼっちさんと、ゲンさんはやっぱり異なっていたらしい。

未宇ちゃんは、かぶつとゲンさんの首筋に噛みついた。

わりと痛そう。ゲンさんの顔がゆがむ。

小さな歯が首元の血管にまで達し、しばらくして離れた。

口元をぬぐう未宇ちゃん。やり遂げた顔になつてる。

まあ、ゲンさんも疑似家族認定はされていたらしい。べつにどうでもいいといわれなくて、ゲンさんとしてもほつとした顔をしている。

しかし、ゲンさんもぼっちさんのケースとの明確な『違い』には苦い想いを抱いているみたいだ。

キスじゃないもんね。ゾンビ的にはむしろそちらのほうが正しい作法だったりしますけど。

「ぼっち。貴様には少しばかり教育が必要だったことを思い出した。いくぞ」

教育的指導が入るらしい。

ぼっちさんかわいがられておいで。ロリコン矯正は必須です。いくら未宇ちゃんがいいって言つてもね。

死ぬほど自制してもらわないと認めませんよ。ボクは。

「え、なんの教育ですか」

「知るか！」

首元をつかまれてふたりは退室し、残された未宇ちゃんはボクにもわかるハンドサインを出した。

すなわち、勝利のブイサインだ。

☆Ⅱ

「俺だけぼっちなんだよな……」

後日。探索班のうちひとりだけヒロゾンビになっていなかった湯崎さんは、若干のひきつった顔になりながら、ボクに相談してきた。

もしかすると、未宇ちゃんが感染させるかなと思って、もはや探索班の人たちはしようがないかなという思いもあり、ボクは黙って推移を見守っていたんだけど、湯崎さんは微妙に未宇ちゃんとの距離があつたらしい。

それとも、辺田さんとの喧嘩みたいなのを何回かやらかして、少しばかり怖かったのかもしれない。

ともかく隔意である。

もちろん、ぼっちさんやゲンさんも、いまやヒロゾンビなわけだから、感染させるのは可能だ。

でも、ぼっちさんからそのあたりの事情を聞いたのか、あるいはゲンさんなのかもしれないが、湯崎さんが聞いた事情は美少女である未宇ちゃんから感染させられるというびみように嬉しい出来事だった。

このあたりのうれしみって、たぶん男ごころです。はい、ボクもわかります。

男ごころわかります！

なので、湯崎さんのひきつった表情の理由もよくわかるのです。気づいたら周りから取りこぼされていた。

いつのまにか、他の人たちどうしが仲良くなっていた。そして、相対的に人的関係が薄くなっている自分。

正直かわいそうすぎるでしょ。

「未宇ちゃんにお願いできなかったの？」

湯崎さんも探索班の紅一点、未宇ちゃんのことをかわいがっていたのは事実だ。

それに、未宇ちゃんだって、お願いされればいやとは言わないと思う。

家族にこだわる未宇ちゃんが、家族になりたいといわれて拒むはずもない。

いざとなれば、ぼっちさんを通してお願いすれば……。

「いやそれだとなんか負けた感じがして」

「ですよー。で、ボク？」

「まあ……、なんとはいえいいか。未宇ちゃんにお願いして断れたらシヨックすぎるんで、その前に練習というかなんというか。そんな感じはどうだろうか」

「いやどうだろうかと言われても……」

一応、ボクってヒーロゾンビについては、それなりに理由がないと増やしてこなかったんだけどな。

それはすなわち、”死”という明確な要素を否定するためだ。

例えば、信者さんたちも、自傷の結果、死に至っていたわけで、それを否定するには超再生能力があるヒーロゾンビにするほかなかった。軽い傷で済んだ人たちは、回復魔法使えばいいわけだし、そうはできなかったんだ。

で、ぼっちさんとゲンさんはボクが感染させたわけではないからノーカンとして。

ボクって湯崎さんをヒーロゾンビにしてしまってもいいのかな。

つまり、いままでの行動原理からするとわずかにズレがあるような。

でも、未宇ちゃんがぼっちさんやゲンさんをヒーロゾンビ化するのを止めなかったボクがいる。

それは結局のところ、生死にかかわらず、ヒーロゾンビが増えてもいいと許容したことにならないだろうか。

だからって、湯崎さんをヒーロゾンビにしてもいいって安易な結論

にとびついちゃいけないと思うけど……。

「頼む。ヒロちゃんだけが頼りなんだ」

「まあ……いっか」

なしくずしってこういうことを言うのかもしれない。

それに、もはやひとり増えようがふたり増えようがって感じた。しかし、これで終わるわけがなかった。

ヒロゾンビのパンデミックは、これから始まるのだった。

ハザードレベル110

イヤな事件だったね。

ボクと真実の年齢が同じくらいの、ボクと同じくらい陰キヤでひそかに仲間だと思っていたぼっちさんが、まさか小学生女兒にモテるというスーパーリア充だったとは。

ましてや、ちゅうまでされちゃって、愛の告白まで受けちゃうとは。

正直なところ、ぼっちさんのことを同年代の友人と思っていたこともあつてか、ぼっちさんをとられちゃったみたいなのヤモヤ感もあつて、逆に未宇ちゃんのことと妹が兄離れしていくようなさみしさもあつたりして、ボクのこころはぐちゃぐちゃです。

若干、ぼっちさんに対するうらやまけしからん感覚のほうが強いけど。

陰キヤがモテるなんて存在の矛盾だとか思ったりもするけど。

未宇ちゃんがよければそれでいいような気もするし悩みどころさんだ。

嫉妬なんかしてないんだからね！ SHIT！（英語つよつよガール並感）

それはともかく。

ヒロウイルスが増えたことも問題だけど、それ以上に厄介なのは、

——それでいいんだ。

と思われてしまったことだった。

これって魔溜魔溜教のときと同じ。

要するに他人がやっているのを見て、自分もやっていいと思ってしまう。

赤信号みんなで渡れば怖くない的な。

未宇ちゃんはハネムーンよろしく、ぼっちさんの腕にオナモミ状態でくっついているし、死んだ魚の目をしたぼっちさんを見たら、だいたい察してしまう。探索班はヒロゾンビになつたんだなっと思われてしまう。

間違いではない。ボクに近い存在からどんどんヒーロゾンビになつていく。

出来事の因果連鎖は誰にも止めることはできない。

「いや、普通に止められると思うけどね」

「そんなふうに言わないでください。葛井町長だつて止めなかったじゃないですか」

ぼっちさんが未宇ちゃんに襲われているとき、葛井町長はニヤニヤ笑うばかりで、何もしなかった。

それは同罪のはずだ。

「まあ、それなりに思惑があるから黙っていたわけだけどね」

「町長もヒーロゾンビが増えたほうがいいと思ってるんですか？」

なんとというか、ヒーロゾンビはゾンビだらけの国においては国力そのもののような気がするしね。

ゾンビ避けができるだけでなくゾンビを操れる。

例えば、ゾンビを操って、エネルギー問題を解決したり、畑仕事に従事させたりも可能だ。

いまのところは何もさせてないけど、いずれそうなるかもしれない。

そのとき、ヒーロゾンビはたくさんいたほうが有利なのは確かだ。

「ヒーロゾンビは増えたほうがいいと思ってるよ。でもそれは僕がアーリーリタイアを目指しているからだ」

「アーリーリタイアって、50歳とかで退職して悠々自適な生活を送るっていうアレ？」

「そう、そのアレだよ」

「どうやって？」

「ケマルアタチュルクって知ってるかな？」

「んー……なにか聞いたことあるような」

「ケマルアタチュルク。ある英雄の名前さ。僕のように美しく気高い人だよ。すべての栄華をおさめ名声を極めた瞬間にそのすべてを捨てた英雄。ヒロちゃんにわかりやすいのはロマサガ2の最終皇帝のほうかな。僕もそうなりたいと思ってるんだ」

「この町の国力というか対ゾンビ性能を高めて、あとは国にお任せするとか、そういう感じ？」

「そういう感じだねえ」

「でも、ヒロゾンビはピンクちゃんの受け渡しで勝手に増えるんじゃない？ ベつにこの町特有の存在でもなくなると思うけど」

ヒロゾンビの数は、その国の考えに任せるつもりらしい。

つまり、その国が1000人といったら1000人だし、1000人といったら1000人だ。

いずれにしろ増える。

そうなったら、ヒロゾンビの価値は相対的に下落する。

この町のヒロゾンビがいくら増えようが、まあ抑制的にするかもしれないけど、あまり関係がないはずだ。

「僕の考えだとヒロゾンビの保有数は国どうしの取り決めで制限されると思うけどね」

「じゃあ、ヒロゾンビは増えない？」

「どうだろうね。人類にとってはゾンビ禍は歴史の中で初めての存亡の危機だ。ゾンビウイルスを消し去れるのは今のところヒロゾンビだけ。ヒロゾンビは人類が打ち勝つためには必要な存在だといえる。ただし——、ゾンビがいなくなってしまうばどうだろうね」

ボクにもそれぐらいはわかるよ。

ヒロゾンビが国によっていいようにされる可能性があるってことだろう。

映画でもそんなのあったし。

|||||

ゾンビ・リミット

ゾンビ映画だけどゾンビ映画じゃない。普通のゾンビ映画といえど、ゾンビが襲ってきてそれに対抗する人類というお話だが、この作品では既にゾンビハザードは収束している。ゾンビウイルスに感染した人間を人間のまま留まらせるワクチンができているからだ。ただし、そのワクチンを一生摂取しつづけなければゾンビになってしまう

う。要するに感染する病気になった人を差別していいのかという文学的な作品。

|||||

ヒロゾンビは勝手にゾンビに戻ったりはしないと申し、ボクは感覚だと人間にオポジションがついた感じた。ピンクちゃん曰く、素粒子のうんぬんかんぬんで現実を侵食する能力がつく。超能力人間になるっただけ。

でも周りの人にとっては、「いつか」ゾンビに戻る危険性はあるという見方もあるだろうし、そのときに全員がヒロゾンビになっていたら取り返しがつかないという見解も成り立つかもしれない。杞憂というか被害妄想というか、そんな感じだけど、人類は怖がりだから。「でもそんなこと言い出したら、みんなゾンビウイルスには感染してらんだし考えたところで無駄だと思うんだけど」

そう。
ヒロゾンビになっても、みんなゾンビウイルスには感染している。

みんな死ねばゾンビになって動き出すという現実が変わらない。「理性的に考えればそうだけど、人は自分と違うものが怖いんだよ。そのときに対抗できるのは、悲しいことに理性でもなく感情でもなく、数だけ。そう、数だけなんだ」

ニヤアと笑いながら言わないでください。ただでさえ怪しいんだから。

「ヒロゾンビの数が増えれば差別されなくなるって考えてるの？」
「そういうこと。国力を高めるといよりはヒロゾンビたちの発言力を高めるといったほうが正しいかな。ゾンビの脅威が薄れるにつれて、ヒロゾンビの価値は下落する。下落すると今度はヒロゾンビが排斥される」

「ボク排斥されちゃうの?」

「狡兔死して走狗烹らる、という話さ」

「こうとしてそうくにする? なにかの魔法言語? クトウルフ的

な？」

二チヤ。

「小学五年生にはまだ早かったかな」

「うぐっ」

小学生じゃないけど、大学生活でゲームばっかりしていたら受験知識が急速に薄れていくっておかしなことじゃないと思うんだ。

「犬を使ってウサギを狩ったりするんだけどね。ウサギが狩られたあとは、犬はいらなくなるってことだよ。転じて、必要なときは手厚くもてなされるけど、必要がなくなればあつさり捨てられるという意味を指す。そうならないようにしないとね」

「わかりました。でも——、ヒーロゾンビの数が増えるのと、町長のアーリーリタイアってどうつながるのかな？ あんまり関係なくない？」

「まず君が危険に陥らないっていうのが第一。ヒーロゾンビはアラームになるだろうからね」

「アラーム？」

「ヒーロゾンビは死にくいわけだし、殺されたりしたら君にすぐばれるわけだろう」

「うん」

辺田さんの霊圧は消えちゃったし、たぶん死んじやったんだと思う。

結構離れてても、わかるし——、もしかしたら地球の裏側でもわかるかもしれない。

それに、これだけネットが発達している時代だ。

ヒーロゾンビの排除をだれにも悟られずにやり遂げる国家なんてないだろう。

「ヒーロゾンビの数が増えれば、ボディガードが増えるということになる」

ヒーロゾンビを盾にする気はないけど、ヒーロゾンビが害されたらすぐにわかるという意味では、町長の言ってることは正しい。

あれ？

そもそも、ボクって命を狙われたりするのかな。まあ既にテロにあつたりはしてるわけだけど。なんというか、ボクのなかでは久我さんみたいな人は例外的で、人間のなかでは異端だと思っていた。実際、ヒロ友たちの意見やネットの掲示板でも、テロ死すべしという意見が大勢を占める。

でも——、それはゾンビをどうにかしなきゃいけないというのが前提にあるからで、ゾンビがほとんど見られなくなったらどうなるんだろう。

今後は？ 将来的には？

「ボクが危ないと、町長も危ないの？」

「もちろんそうだよ」

「どうして？」

「君とお仲間だと思われてるからだよ。実際にお仲間なんだけどね」

「町長はヒーロゾンビじゃないのに」

「ヒーロゾンビのシンパだと思われるからだよ」

「ボクが殺されない限りは、町長はターゲットにならない？」

「ならないとまでは断言できないけど、危険はグツと減るだろうね」

「もしかして、町長はボクを見捨てて、ひとりだけ引きこもる気ですか？」

「アーリーリタイアだよ。それにそうならないように君にはボディガードをたくさんつけたほうがいいと言っている」

「ボクもアーリーリタイアしたいんだけど」

「君はまだ11歳だしね。リタイアするには早すぎるよ」

「町長も30代でしょ。まだ早いよ」

「早いからこそアーリーリタイアなんだ」

「町長が町長してくれてるとボク的に助かるんだけど」

「どうしてかな？」

「いっしょに仕事してきて、悪い人じゃないって思ってるから」

町長のニヤニヤ度が100%ほどアップした。

「それは光栄だねえ。とはいえ、最初にいったとおり、もともと僕はニートだと伝えていたよね。どんどん増えていく町民にいろいろ考

えなければならぬことが多すぎて、僕のパパはこんな大変なことをよく喜々としてやっていたものだ。と今更ながらに思うよ。正直疲れてるんだ」

心の中で引きこもりたいてって気持ちが芯にあるからこそ、ボクは町長の在り方を好ましいと思ってるのかも。ボクもちよつとだけ引きこもっていたからわかるというか。

「でもボクがヤダっていえば町長はリタイアできないよね」

ちよつといじわるな聞き方をした。

でも、町長はまったく表情に揺らぎがなかった。

「それはそうだね。なんといえはいいかな。君もリタイアして配信だけを楽しみたいっていうんだしたら、政治的なあれこれとは距離を置いたほうがいい。これはわかるかな？」

「わかります」

「とはいえというやつだ。君はヒロゾンビの中心的存在だし、ゾンビハザードが収まれば英雄であることはまちがいない。それにさっき言ったとおりウサギちゃんを狩りつくした後のお犬様的な立ち位置になる。国は……、地球人類は君を放っておかないだろう」

「うん。そうかも……」

嫌だけど、しかたないかな。

ゾンビハザードはなんとかするって宣言したし。人類は滅びないように努力するって言ったし。

ヒロ友はボクの友達なのだし。

「この国はもともと権力の多層構造に慣れているからね。君は形骸化した権力を握って、実質的な政治は他人にお任せするという形になるだろう。つまり今と同じだ」

「うん。そのときの実質的な政治部分は葛井町長にお任せしたいんだけど」

「そこが少し問題なんだよ」

「問題って？」

「形骸化する君とちがって、僕が政治を握り続ければ、僕は権力に固執した醜い人間になってしまう。君をいいように傀儡にして地球を支

配する黒幕になりかねない」

「あー」

町長の言いたいことがわかってしまった。

「でも、ボクがやっぱり町長がいいって言ったら？」

「他の人の評価がどうなるのかはわからないしね。僕は暗殺されるかもしれないね。僕は君が言うように悪い人じゃないのにねえ」

「うぐっ」

「議論よわわガール……」

命ちゃんのテクニカルな突っ込みが痛い。

でも、そうなっちゃう可能性もあるのかな。

国がヒイロゾンビをつかってゾンビハザードを完全に駆逐したとき、この町をどうするかという議論は絶対にでてくると思う。ボクを無視するっていうのはさすがにないだろうし、いまのままというわけにもいかないだろう。

一番いいパターンはある程度の自治というか、小国家みたいな感じだろうけど。

そのときに、ボクはお飾りだとしても、本当の政治をまわす人が悪の枢機卿みたいに使われても困る。

そうなりそうなのは、今のところ葛井町長なんだ。

葛井町長はアーリーリタイアしてもらったほうがいいのかもかもしれない。

ちよつと寂しいけど。でも悪い人じゃないし……。

ボクがヒイロゾンビを数千に従える権力者になれば、町長やヒイロゾンビたちの盾になれるのかな。まさしく”数”が武器になる。

「まあ、それはだいぶん先の話になるだろうし、僕はいきなりやめたりはしないから心配しないでいいよ」

「うん」

「それにヒイロゾンビが増えてくれば——逆に君の意見は通りやすくもなる。君が引きこもりたいというのなら、それも可能になるはずだ」

退出後、本当かなあと思いながら、ボクはいつものように横にいる命ちゃんに聞いてみる。

「ねえ。命ちゃん。町長の話つてどうなのかな」

「まちがってはいないと思いますよ。保身が理由とおっしゃってましたけど、先輩にとってもヒロゾンビを増やしたほうがいいのは間違いないありません」

「増えまくっても困らない？」

「先輩はいつも人類側にたつて話をされますけど、顔バレ身バレして、盛大に配信しまくっている現状で、このままゾンビハザードが収束していくとそれはそれで困ります」

「確かにそうだけど、ボク、わりとがんばってきたんだけど」

「先輩がヒロ友を助けたいという一念でやってきているのはわかります。でも、実際にはテロ活動にあつたりして居るわけでしょう。こちらが主導権を握るべきだと思います。先輩だけでなくヒロゾンビになつた皆さんも、あるいは——もしかすると、この町のみなさんも潜在的ヒロゾンビだということ危険にさらされますよ」

「そういわれてしまうと、ボクは黙るしかない。」

ボクは『みなさまのためにく』といいながらも、ボクやボクに親しい人たちが犠牲になるのは嫌なんだ。

「みんながボクの弾除けみたいになるのも嫌だ。」

「先輩は我儘ですね」

「あー、それって前にも言われた気がする」

「人は我儘なんですよ。ままならない現実が多すぎますから」

「うん。そうだね」

「わたしも未宇ちゃんみたいに先輩に無理やりキスしたいです」

「やめてください」

「ウソですよ」

「よかった」

「でも、したいのは本当ですよ？」

憂いを帯びた顔になる命ちゃん。
わりと我慢しているらしい。

命ちゃんにはちゃんとした返事もしてないし、ボクは決められない
ダメなお兄ちゃんです。

少し自己嫌悪に陥っていると、

「先輩。手をつないでほしいです」

命ちゃんが狙い済ましたように可愛いお願いをしてきた。

「いよ」

その提案も、命ちゃんの優しさだと思いました。

☆
☆

しばらく命ちゃんと手をつないで廊下を歩いていると、20人くら
いは住めそうな大部屋の扉が開き、そこからひとりの女の子が飛び出
してきた。

いや——、女の子の格好をしている男の子。

確か名前は新太くん。女装が似合う小学生の男子だ。

今日もスカート履いていて、つるりとした無駄毛のない素足を見
せつけている。

かなりカワイイんだけど、お兄さんのほうはわりとマッチョな高校
生なんだよな。

いやべつにだからどうしたって話ではあるけど。

遺伝子は不思議だなんて感じるくらいで。

「ヒロちゃん。お願いがあります！」

小学生らしい弾丸のようなまっすぐさで、新太くんは口を開いた。
素早く、快活で、ひらりとスカートをはためかせる様は、やっぱり少
年っぽいところもあるんだなとボクは思った。

「なにかな？」

「ボクもヒーローゾンビになりたいです！　お願いします」

迷いも悩みも一切見られない。

タイムリーなご提案というやつだ。

「えっと、お兄さんは何か言ってるの？」

「お兄ちゃんは関係ないです」

「どうしてヒロゾンビになりたいの？」

「ヒロゾンビはなりたくない自分になれるんですよ」

「そんな効果もあるみたい」

「ボク、女の子になりたいんです！」

「なるほど」

できるのかと思わなくもないけど、恵美ちゃんみたいに髪の毛をブルーに着色したりもしてるしな。自分の肉体領域をいじるというのは、わりと簡単らしい。

「自分で言うのもなんだけど、ボクってまちがって男に生まれてきたと思うんです」

「そうなの？」

性自認が違うってやつなんだろうか。

「そうなんです。だから、本当の女の子になれる可能性が少しでもあるならヒロゾンビになつてみたいです」

「ヒロゾンビになつても女の子になれるかはわからないよ。新太ちゃんの努力次第だと思う」

「努力なら慣れてますから」

うーむ。一見美少女に見える新太ちゃんも、努力して今の姿を保つてるといふことだろうか。

「話はわかったよ。まず——お兄さんはどう思ってるのかを聞いてから……」

「お兄ちゃんは関係ないですよ」

「関係あるでしょ。家族なんだから」

「ボクが女装することについても、ゾンビハザードが起こる前は、お兄ちゃんはわかってくれませんでした」

★
||

ボク、五十嵐新太は望まれなかった子どもだ。

いや——、べつにそんなに重い話ではないけれども。

お母さんが言うには「ふたりめは女の子がよかったのに」って。だからかな。

お母さんはボクが小学校に上がる前までは、しょっちゅうボクに女の子の服を着せていた。

ボクはそのときだけは女の子になって「かわいい」と言われて、ボク自身もうれしい気持ちはあった。

女の子がよかったのという言葉には、ボクも激しく同意する。

女の子ならかわいくていい。

女の子ならちいさくていい。

女の子なら足が遅くていい。

女の子なら力がなくていい。

女の子なら助けてもらえる。

本当の女の子に言ったらたぶん怒られると思うけど、ボクにはない、たくさん属性を持っている「女の子」がこころの底から羨ましかったんだ。

どうしてボクは女の子じゃないんだろうって思っていた。

身体には余計なものがついてるし、小学生高学年になる頃には、少しずつ体つきが男になっていく。お兄ちゃんみたいに筋肉質のゴツゴツした柔らかさの欠片もないからだになっていく。

それはまるで、自分の身体が——自分自身が望まれない子どもに向かって成長していくようで、たまらなく嫌だった。

ボクは女の子のままだった。

お兄ちゃんはお母さんが女装することを最初から、あまりよく思っていないようだった。ボクが自発的に女装を始めてからは特にボクといつしよに歩くのを嫌がった。ご近所さんに「変」に思われるからだ。

近所の人は、ボクが男だと知っているから。

ボクが女装している変態だと知っているからだ。

迷惑なのかもしれない。

ボクだって、もしもお父さんと同じくらいの年の人が、すね毛の処理もせずに女装していたら似合っていないと思うだろうし——、その人

自身は楽しいと思うだろうけど、他の人にとってみたら、何をするかわからない変な人という見られ方をしてもしかたないところだと思う。

少なくとも女装というのは、世間から変だと思われることだ。

つまり女装をするってことは、変なことをしてしまえる人間だということになる。

自分を優先している我儘な人間だということになる。

迷惑で我儘な人間——犯罪者予備軍。

そんなマイナスイメージがあるのかもしれない。

でも、人間なんて大なり小なりみんな我儘でみんな迷惑をかけて生きている。

そんなに「女の子」になるのが悪いことなの？

ゾンビハザードが起こって、お母さんもお父さんも死んでしまったから、お兄ちゃんは女装についてはなにも言わなくなった。周りの人も言わない。

ボクが女装しようがしまいが、生きることにはほとんど関係がないからだ。

でも言葉は残り続ける。

さぼてんの棘が刺さったみたいに、ボクは『変』なのかなって、自問自答してる。

ボクは本当の女の子になりたいと願いつけてきた。

それはボクが『変』じゃないって証明したいから。

完全になりたい。不完全なまま死にたくない。地中で大人になれずに死んでしまうセミみたいに、女の子になれずに死ぬなんて嫌だった。

ボクは女の子になりたい。

☆Ⅱ

「変じゃないと思うけど？」

ボクとしては、フェルマーの定理の簡単な解法について、幼稚園児

のときからつらつらとボクに対して見識を求めてきた命ちゃんのほうがよっぽど変だと思えます。あの頃の命ちゃんはかわいい宇宙人って感じでした。

「先輩……、わたし、そんなに変でしたか？」

「あ、いや、ぜんぜん。とてもかわいい女の子だったよ」

命ちゃんがジトってボクを見てくるもんだから、思わず真顔になっちゃったよ。

ともかく「変」とか言ってくる周りの目は放っておいてもいいと思う。

そう思われることは、周りの評価だから止めようがない。

ボクがボスゾンビとして一部の方々に悪く思われちゃうのを止められないように、誰がどう思うかはわりと運次第だからね。

とはいえ、その行為が周りに実際上の影響を与えてしまうと、抵抗が強くなるという面はあるだろう。

新太ちゃんが女の子になりたいっていう願いは、あまり周りに迷惑をかけるものでもないし、それはいいんじゃないかなって思える。

しかし——、ヒロゾンビ化という側面は判断が難しい。

「ヒロちゃん。お願いします」

「うーん。保留で」

とりあえずはそんな感じです。

未成年者の意思も、もちろん尊重するけど、やっぱりお兄さんの意見も聞いてみなくちゃね。

☆
☆

続きまして、ボクがあてがわれた町役場の一室でくつろいでいると。

突然、部屋のドアがノックされた。

「はい」

わりとボクの部屋にはたくさんの人がある。部屋のドアの前に使用中ってプレートをかけてたら、入ってこないでねって意味だけど、

ヒロちゃんのお部屋って書かれたプレートのとときは誰かが訪ねてきてもいい。そんな感じですよ。

現れたのは、20代くらいの若い女の人だった。

手の中には赤ちゃんがいて、まんまるな瞳をこちらに向けている。かわいい。

この人、知ってるな。

確か、ボクが配信を始めた頃に、車でゾンビから逃げていた人で、赤ちゃんを車から投げ捨ててその隙に逃げようとした人だ。

ボクが助けたんだけど、お互いにもあまりいい印象ではないと思う。

あのときはついつい語意が強くなっちゃったからね。

それ以来、ボクはこの人と言葉をかわしたことはない。当然名前も知らない。

「どうしたの?」

「わたし——、北波多早苗っていいいます」

「夜月緋色です」

うん。まあ名前を知るぐらいどうってことないよ。

積極的に仲良しになろうってしないぐらいです。

「あの……お願いがあるの」

視線は下を向き気味に、おどおどとした態度だった。

「なにかな?」とボクは聞いた。

「わたしとこの子をヒロゾンビにしてほしいの」

「えっと。確か配偶者いたよね?」

ゾンビに襲われてたときに、夫婦喧嘩してた男の人。

この人の夫に当たる人がいたはずだ。

その人はいいの?

「あの人。すごく怖がりだから、わたしの提案も嫌だって」

「ふうん。別れたわけじゃないんだ」

「結婚するときに、ふたりは別れないって誓いあうから」

「だったら、その人をきちんと説得してから来ればいいのに」

あとから夫婦喧嘩の種を作るのも嫌だしね。

「わたし怖い。こんなゾンビだらけの世界で、いつ襲われるともわ

からない。ここの人たちだって、いつ襲ってくるのかわからないじゃない」

「町みんなはボクがいる限り、そんなことしなれと思うけど」

犯罪者はボクが追い出すし、ここは絶対安全圏だし。

合理的に考えて、大人しくいい子でいるほうがいいに決まってる。

ヒヤッハーして生きていきたいならお外でやってください。

「ここじゃないところでよ！ 人間は余裕がなくなったらなんでもする。他人のことなんかどうだっていいのよ！」

「そんなに興奮しないでよ。というか、ヒイロゾンビになってどこか別の場所に行くつもりなの？ それはちよつと困るかも」

辺田さんは霊圧なくなつたからいいけど、ヒイロゾンビが町の外に出るとマズいかもしれない。

「この子にも広い世界を見せたいのよ」

あどけない赤ちゃんを見せてくる早苗さん。えーつとなんというか、子どもをダシにつかつてないかな。あのときみたいに。

「赤ちゃんについては、親が責任を持つことで、ヒイロゾンビにするしなれも決めていいとは思うけど……、ヒイロゾンビになつたからといって、完全な自由が保障されるわけではないよ。むしろ、いろいろと制限がつくと思うって？」

ボク、いますごく政治的にナイスなことを言ってる気がする。

「それでもいい。ゾンビに襲われるよりは。その制限とやらを呑めばヒイロゾンビになれるのね？」

「うーん。保留で」

とりあえずは、そんな感じですよ。

ハザードレベル111

町長のアーリーリタイア宣言。

そして五十嵐新太ちゃんや北波多早苗さんからのヒイロゾンビになりたいという希望。

次第に変わりつつある町のみんな。

ボクはひとりではなにも決められない小学生状態です。

ていうか、配信でもうっかかりヒイロゾンビ増えそうですとか言っちゃダメだろうし、ボクはもう……もう頭がフットーしそっだよお。

(意味が異なります)

そんな混乱の中。

とりあえず、ピンクちゃんにラインを使ってコンタクトを取ってみた。

『いいんじゃないか?』

というのがピンクちゃんの答えだった。

「え、いいの? ヒイロゾンビが増えちゃったら国どうしの取り決めとかで苦労しない?」

『問題ないと思うぞ。どうせ、国力とかを取り戻したい国のやつらはすぐにヒイロゾンビを増やす。千人とか万人とかの単位じゃないかもしれない。スタートダッシュの要領だ。ゾンビハザードからいち早く立ち直った国が次代の覇者になるという考えだな』

「でも、ほら。感染者差別とかあるかもしれないし」

映像の中でのピンクちゃんは大きなおめめをぱちくりさせていた。

なにか変なこと言ってるのかな。

『ヒロちゃんは怖がりすぎだと思うぞ』

「人間のほうが怖いからね」

『ヒイロゾンビも人間だ。それに——他国へ感染を広げようとしているなかで、いまさらやっぱりやめたというのは困るぞ。すごく困るぞ! ママに叱られてしまう……』

くそかわいい。ピンクちゃんだった。

でも確かにそっだよね。ここまでピンクちゃんにお膳立てしても

らっっておいて、いまさらヒイロゾンビを増やさないっていうのも矛盾している行為のように思う。

「わかった。ありがとう。ちよっと考えてみるね」
続きまして、マナさんです。

ボクのアパートの隣の部屋に住んでいるマナさんを訪ねると、エプロン姿でなにやら料理していた。電気のきてないゾンビ荘でもバーナーや小型発電機を使えばわりとなんでもできるのです。

あ、ボクの好きなパンケーキかな。

お昼がもう少しだからボクのためにつくってくれてるのだろう。

「ん。ご主人様の匂いを感じる。きゅんっ」

「マナさん。お邪魔します。ピンポンは押したんだけど気づかなかった？」

「ご主人様のご自分の部屋を出るあたりで気づいてました。むしろ隣の部屋で目覚めたあたりで、お布団をかぶって、お布団つむりになっているあたりで気づいてましたけど？」

「鋭敏だよね……マナさん」

「幼女の気配を見るに敏。それが幼女ハンターのわたしです！」

もしかして、ストーカーなのでは？

ボクはいぶかしんだ。

でもまあ、わりと優しい大人な人である。

「ねえ。マナさん」

「はい。なんでしよう」

「未宇ちゃんの件だけど……」

「未宇ちゃんがどうかしましたか？」

「ヒイロゾンビになっちゃったじゃない」

「なりましたね。そのあとの未宇ちゃん事件を聞いてわたしは思いました。どうして、わたしにもキスしてくれなかったんだろう、と！」
「マナさんの場合、関係性っていうか、そういうのがすっぱり抜け落ちているよね」

「そこに展開されている絵図が美しければ、関係性とか因果とかどうでもいいのです」

「ボク、男子大学生だったんですけど……」

「いまはこんなに絶世の美少女。めちやくちやにこねくりまわしたい！」

「マナさんにとっては過程はどうでもいいんだね」

「どうでもよいのです。すべてが少女になる。少女惑星だったらいいのに」

「そんな星があったらいいね。すぐに絶滅しそうだけど」

「みんなヒロゾンビになったらそう簡単には絶滅しませんよ。気合で女の子どうしても繁殖できそうじゃないですか」

「えー。でも、だったらなんでマナさんは少女姿にならないの？」

「それはですねえ……、ご主人様がわたしのこの姿を望まれているからなのです」

「うーん。確かにマナさんはきれいなお姉さんでボクは好きだけど、マナさんの自由を奪ってるつもりはないんだけどな」

「もちろん、わたしの自由ですけども。少女どうしがきやつきやうふふしているときに、わたしはむしろ壁になりたいというか。そこに異物がまぎれこむのは、美しいスチルを壊す行為のようにも思うんですよ」

スチル——乙女ゲームとかでいうところのいわゆる一枚絵のことだ。

どっちかというと、マナさんは体験したい派ではなくて見たい派ということなのかな。

「話をもとに戻すけど、ヒロゾンビが増えていくということに対してはどう思ってるの？」

「少女の種が増えていくのですからいいことだと思いますよ。自分が自分であるという強い場合は、なかなか少女指数が上がらないですけど、男の娘とかだったら少女指数が高いですから少女になりやすいですかね」

少女指数って冗談じゃなかったのか。

でも確かに、新太ちゃんとかヒロゾンビになったら速攻で性転換しそうだよな。

謎のあさおんしたボクなんかよりずっと女の子になりたくって
気持ちが強そうだし。

見た目だけならマジで美少女だしな。

新太ちゃんが女の子になるということを仮定したとして、ボクはど
う感じるだろうか。

女の子。美少女。うーむ。

ボクも、自分がかわいくなっただのはうれしかったりするけど、どっ
ちかというと女の子のほうが好きだし、あまり考えすぎるとよくわか
んなくなるから放っておいているけど、好意を向ける対象って、なん
というかすごく未分化な感じがする。

いわゆるバイってやつなのか？ 男も女も関係ねえってやつ。
どっちもいけちゃうタイプ。

いや——そもそも恋愛感情自体があやふやふやふやふや。
ふやあん。

「それこそが幼女指数なのです！ ご主人様がかわいらしくて食べ
ちやいたいですねえ」

「おさわりはしない派なんじゃ」

「据え膳食わぬは幼女ハンターの恥なのです」

「お願いだから襲ってこないでね」

「ご安心ください。ご主人様の命令には逆らいません」

マナさんがメイドさんのポジションで本当によかった。

いまさらながらだけど、なんでボクってご主人様なんだろうな。

気を取り直してボクは質問を続ける。脱線しまくりだけど、いまは
意見を収集する時なのだ。

「ヒロゾンビが増えると、ボクの弾除けが増えるって町長はいうん
だ。ちょっとひどいよね」

「ヒロゾンビの特性がピンクちゃんによって明らかになった以上、
ヒロゾンビはさほどデメリットがないと明らかになりましたしね。
すべての人類が感染するのはさすがに怖いでしょうけど、わりと増や
しても問題ないと思われるかもですね」

「ヒロゾンビが知られていなかったときは、町長はもしかしてアー

リリータイアするつもりはなかったのかな」

「たぶんそうでしょうね。そもそも、ヒーロゾンビという存在がいな
い場合は、ご主人様だけでなんとかしないといけないですから、せい
ぜい町をひとつやふたつ解放していくくらいしかできませんし、ゾン
ビになった人を治すのにも莫大な時間がかかります」

「まあ確かに」

「なので、ヒーロゾンビが増えていくというのは、アーリータイアを
早める行為にもつながるはずです。町長としてはヒーロゾンビが増
えるのは良いことでしょうね。ジユデツカのことを考えなければで
すが」

「だったら町長もヒーロゾンビになればいいのに」

「それこそいざというときの保険でしょうかねえ。自分はヒーロゾン
ビじゃないということとで危険回避できるかもしれませんが。町のみ
なさんが一緒くたに殲滅される可能性を下げてるのかもしれない
よ」

「なるほど……、ボクにはそこまでわかんなかったな」

「落ち込むご主人様がかわいいです」

よしよしされてしまうボクです。それは正直悪くない感覚なのだ
けど。

生暖かい視線を感じてボクはマナさんを見上げる。

「ああ、ご主人様がかわいい。できればわたしもヒーロゾンビにして
ください」

唇をとがらせてくるマナさんがすごくうざい。

感染済みでしょ！ お姉さんは！

☆
||

ゲンさんにも聞いてみた。

答えとしては「わしが言うことではないが、慎重になったほうがえ
えぞ」ということで、至極もつともな答えだった。

ゲンさんってほぼ自分の意思でヒーロゾンビになってるけど、なん

というか責任感が原因だったりするからな。未宇ちゃんがヒロゾンビになつた直接の原因はゲンさんにあるわけだし。

ぼっちさんは巻き込まれパターンだけど、ヒロちゃんがいいならそれでいいってタイプで、湯崎さんも同じく、ボクの好きにすればいいって感じだった。

ゾンビ荘のみんなも同じ。

ボクに決めてって言ってくる。

決断するというのは、わりと疲れることなんだけど、選択をゆだねるということは、ボクを信頼してくれてるってことだから、真剣に考えないといけない。

うううう。重圧。

それで、結局のところ――。

ボクは最後には親友の雄大にアドバイスを求めるのだった。

「雄大。いまどこにいるの?」

『いまか。岡山のあたりだな。突然どうしたんだ?』

「岡山?」

『ああ、桃太郎さんの銅像があるあたりだ』

「遅いよ! いつ帰ってくるのさ」

『そうはいつてもな。岡山のあたりは人口も多くてルートも多いから迷ってるんだよ。新幹線の通ってるルートはやっぱり厳しそうだが、四国のほうに行くのは運次第になるからな。船が調達できるかわからんし、さすがにオレも船は運転できないしな』

「むかえにいいこうか?」

「大丈夫だよ。おまえ今すげえ忙しいだろ。配信しているときもちよっと余裕がなさそうだしな。顔見ればわかるよ」

確かにそうかもしれない。

テロのときの緊張感もなくなり、さりとて今後の行く末を決める一大イベントヒロウイルス拡散が控えている今の状況。そんななかでのヒロゾンビ増殖の希望が増えてきたことに対する困惑。

みんなはボクが二十歳くらいだって知らないから、小学生にしては頭がいいって思ってるんだらうけど、ボクの頭脳はピンクちゃんをし

て中学生レベル……。ほ、ポンコツじゃないんだからね。ともかく、事態に対して振り回されてる感じがする。

「雄大。ボク、ちょっと疲れちゃったんだけど」

「おう。配信とかもよく続けてるしな。人類の皆様が怖がらないようにしてくれてんだろうけど、おまえ自身がつぶれちゃ意味ねーぞ。たまには休んだらどうだ？」

「配信は楽しいからいいんだよ」

「本当にそうか？ ボクしーらないって投げ出してもいいんだぞ」

「ボクしってるし……」

「そうか」

ちよつと『間』が流れる。

雄大はボクが悩んでいることもわかってる。

引きこもりでダメダメなボクのことともわかってくれる。

話してて安心感がある。

ふと雄大がゾンビのままどこかにいなくなっていたらと想像して、宇宙の中に取り残されるような寂寥感に泣きそうになってしまった。涙腺ゆるゆるガールではないから我慢した。

『で、何が気にかかるんだ？』

ボクはヒイロゾンビの増殖希望の件について話した。

『フム』と雄大。『信念の問題のように思えるな』

「信念？」

『例えば、オレがおまえを引きこもりから脱却させようと画策しても、おまえにとつては迷惑かもしれないだろ』

「まあそれは確かに」

引きこもりを無理やり外に引っ張り出すのは、蓑虫の皮をむいで放置するのに似ています。

すごくむごたらしい行為なのデス……。

『逆にオレはオレで引きこもりはダメだと思ってるかもしれない。信念のぶつかり合いがあるから争いが生まれるわけだな』

「そうだね」

『おまえがヒイロウイルスを分け与えることが”いいこと”だと思っ

ていても——そういう信念を持っていたとしても、他人はそう思わないかもしれない。砂漠で水を与えても感謝されないことなんてざらにあるし、むしろ害されることすらある。逆に与えない方がいいと考えても、その善意を歪められることがある。内心は関係ない。自分の信念を貫けるかどうかだ』

「結局どういうことなのさ?」

『あー、つまりだな。がんばりすぎずにがんばれよ』

「うん♥」

その言葉が聞きたかっただけなのです。

☆
||

結局、みんなの意見を総合すると、ボクがどうしたいかということに収斂される。

はつきり言っただけ小学生のボクに決めてほしいというのは、みんなの弱さだと思う。

でも、そんな弱さをボクは長らく受けとめきれなかった。だから、みんなの弱さを見つめるのは、ボクの弱さを見つめることに等しい。

あ、ちなみに神聖緋色ちゃんファンクラブという謎の宗教団体に改名されてしまった元魔瑠魔瑠教団の人たちには聞いていません。

あの人たちに聞いても無駄だからね。どうせ、ボクの御心次第っていうに決まってるし。

そんなわけで決めました!

「ヒロウイルス始めました!」

「ギター!」「マジで?」「冷やし中華かよw」「超能力少女にワイもなれるんか?」「令子はなるの?」「あたりまえでしょ。もうゾンビになるのは嫌!」「ごころちゃん。わたしが先になって、感染させるっていうのはどうかな?」「フツーにわたしもなるよ」「ようし女の子になるぞお!」「実質ゾンビのない世界になるんだな」

みんな喜んでるように思う。

もちろん中には、ヒロウだろうがなんだろうがゾンビになりたくない

い。人間のままでいたいっていう人もいるんだろうけど、みんなのところがようやくヒロゾンビを肯定的に捉えてくれているようであれしかった。

「聖体拝領の要領ですな」

荒神神父が、影のようにススッと近づいてきた。

隣には乙葉ちゃん。いまではボクの公式ファンクラブ会長。信者の皆様からは乙葉会長と呼ばれたりもしている。

荒神神父が嬉々として口を開く。

「我ら衆生の懇請を聞き入れてくださり誠にありがとうございます。具体的な配布方法としてはどういたしましょうか。我らが手伝えることもあると思います。なにしろ我々は直接、緋色様からご寵愛を賜っておりますからな」

「うーん。どうしようかな」

ボクが少し考えてると、乙葉ちゃんが残念な顔になっていた。

「お父さんはたぶんヒロちゃんから直接、聖霊 をもらえる人は自分たちだけの榮譽にしておきたいと考えているのデース」

「感染したらみんないっしょだけどね」

「わたしもそう思いマス。お父さんには残りの信者を任せておけば満足するデース」

神聖ヒロちゃんファンクラブ会員30名のうち、ヒロゾンビになったのは半数の15人。この人たちはファンとしては未熟ということで、人間のままとどめおかれていたらしい。なんとというか、自傷を聖なる行為とするのはモヤモヤするところだけど、好き勝手にヒロゾンビが増えたらダメって思ってたから放っておいたんだ。

「乙葉よ。我々には緋色様の使徒として、信者を増やす使命があるのだぞー」

「いいから。早く準備するデース」

乙葉ちゃん、ちょっと投げやりというか、ふっきれてませんかね。

まあ、お父さんとの信頼関係はあるみたいだから、いいんだけど。

これからもよろしくねって意味合いで、軽く手を振って見送る。

乙葉ちゃんも、片手で荒神神父をひきずりながら、もう片方の手で

応答してくれた。

「さて、どうしようかな」

聖体拝領とは言いえて妙だけど、某宗教では、パンの代わりに一口サイズの薄くてひらべったいお餅をつぶしたようなものを口にする。

正確には、司祭が信者に与える。

ヒイロウイルスの場合、感染方法は血液や唾液を摂取したり、あるいは傷をつけられたりすると感染するわけだけど。

——希望者の数はわりと多かった。

町役場のいつもの箱に立って、見渡すと、400名から500名くらいになっている町民のうち三分の二程度は希望者なんじゃないかな。町のホールがほとんど埋め尽くされていて、まるで雨の日の選挙会場みたい。

ひとりひとりに血を与えると、絶対貧血になっちゃう。

キスするのは——、まあかわいい女の子とかだったらいいけど、男の人は無理です。

女の子とかにキスしたら命ちゃんが闇の衣を身にまとうことになるので、やっぱり無理。

となると、傷をつけていく方法が一番無難かな。

ボクの攻撃能力はすこぶる高い。爪で切り裂くことはバターをナイフで切るよりもたやすい。

と、そのとき、集団の一角で喧騒があがった。

なにかなと思って視線をやると、やっぱり荒神神父たち。

例によってボクのほうを向いてひざまずいている。

神父さんとは90度の方向で違和感このうえない。日に何度かはボクのほうを向いてお祈りしないといけない感じですか？

それからは肅々と乙葉ちゃんがてずから信者さんの口の中に何かをいれている。

食べさせている。アイドルのあーんなのでは？

ちよつと、うらやま……ちがう。

本当の聖体拝領のような感じで。でも、真っ白な聖餅とは違い、白と赤が混ざったようなピンク色の聖餅だった。もしかしてあれって。

「血を練りこんでいるんでしようね。アイドルの血ですかね」

命ちゃんの予想はボクと一致した。

他人の血を口に入れるのは、ちよつと抵抗感があるけど、ああいう形だったら少しは薄れるかな。ボクたちはどうしよう。傷をつけたらいいと思つてたけど、いまからでも聖餅をわけてもらったほうがいいのかな。

「うーん。どうやって感染させようかな」

「ヒロウイルスは人から人へ感染するんですから、親しい人から感染したい人はそうしてほしいと伝えたほうがいいですよ。感染方法も親しい間柄でしたらお任せしましょう」

キスとかかな。わかります。ぷしゅう。

「先輩つてすぐ赤くなりますよね」

「そうかな」

「そうですよ」

簡単すぎる頭の構造をどうにかしたいです。

命ちゃんは町長を通じて、今しがた言ったように、ボクからの直接感染する人は少数にするように手配してくれた。

「感染方法についてですが、ミクロレベルでも血液は感染すると思います。血の一滴で相当な数を感染させられるんじゃないでしょうか」「つまり？」

「みなさんを傷つけないというのでしたら、お水か何かに血の一滴を垂らして、それをコップ100杯くらいに分けても感染するんじゃないかって思います」

ふうむ。そうしようか。

ヒロゾンビに感染しているかどうかはボクわかるし、感染力の限界を見極める意味でも悪くないかもしれない。

例によって、手のひらをうつすらと切り裂いて、ボクは血を垂らす。探索班の誰かが持ってきたのか、デカンタと呼ばれる大きめなワインとかが入ってる瓶だ。

それを両手に持って、みんなに紙コップを持ってもらって、分けていく。

見た目的にはほほ水。血は数滴で、デカントは１リットルくらいはありそうだ。

みんなには底のほうにほんのちよつと溜まるぐらいしか分けなかったから、１リットルで十分足りた。飲んでもらったあとは、紙コップは完全に焼却です。

「ゾンゾンしてきた」「ヒロちゃん汁飲んじやった」「あーうー」「ゾンビごっこやめろ」「女の子になりたい女の子になりたい女の子になりたい」「さてこころちゃんを感染させますか」「子どもたちの目の前で襲うのはやめなさい。怒るよ」「子どもたちの目の前じゃなければいいんですね。わかりますー」「百合だー」「アリだー」「超能力使えないよ？」「ヒロちからが足りない！」「墜ちろよー！」「むんっ」「ナツパごっこもやめろ。そのうち本当にできるようになったらシヤレにならんぞ」

みんな楽しそうだなによりです。

ハザードレベル112

文化とは自我の総体である。

どういうことかというところ、文化というものは、あるひとりの人物が思いついて始めたことに対して、みんながおもしろいと思つたものには『いいね』して、自分もやりたいってなつて、どんどん拡散していく。

その中で、ある種のテンプレートというかお約束というものができあがつて、自分なりのアレンジをくわえたりして、より洗練されていく。

ゾンビ映画だつてそうだよ。

最初はロメロ監督が思いついたかよわい化け物が、いつのまにやらかくさんの人たちから

——自分も創りたい。

と思われて、実際にそうなつた。

映画、漫画、小説、表現手段も多種多様。

そして、文化になつた。

自我が出发点なんだ。自分も創りたいって想いが、絡まりあつて、ネットワークを作り出し、群集と化し、それを消費する者たちが生まれ、また、クリエイターも生まれる。

「自己組織化する系ですね」

マナさんが何か言つてる。

でも、そう自己組織化する系、つまり、ひとりでに作られる創造力のネットワークというのが文化であつて、それはみんなが自分だけの創造力を発揮しながら、でもひとりじゃないんだ。ゾンビとは違う。ゾンビはただの集まり。ただの集合体。同するだけのただの野合。

ヒーロゾンビは違う。いわば、ヒーロゾンビは和する存在。自分が自分でありながら他と響きあう存在。

だから、文化とは自我の総体論として結実する。

「やらかした現実から目をそらすように、哲学してるご主人様がかわいい」

ううう。マナさんが何か言ってる。

そう、ボクの目の前にはノートパソコンのスクリーンが広がっていて、そこには恵美ちゃんがかわいく自己紹介する動画が映っていた。

この動画はアーカイブ。つまり配信済み。

ボクの動画の関連動画として辿れるようになっていて、新たに生まれたきら星のような配信者として爆発的に有名になっている。登録者数、たった一日で530000だと。バカな。

※

「ヒロチューバーのスカイです」

『ヒロチューバー?』『ヒロちゃん関係者?』『髪の毛染めてるのかな。かわいい』『すげーかわいい。この子だれ?』『アイドルかな?』『ヒロピロ。オレのアイドル知識だとこの子はどこにも登録してない』『数秒で判断できるオレくんが怖い』『ヒロちゃんの真似して動画配信始めたやつもいるけどゾンビ関係じゃないとやっぱいまいち伸びないからな』『でもこの子かわいいから顔だけで売れる気がする』

「ヒロチューバーっていうのは、わたしが考えたの。ヒロゾンビの配信者ってことで、ヒロチューバー。いい呼び名だと思うんですけど、どうかな」

『は?』『こんなかわいい子がヒロゾンビなわけがない』『ヒロゾンビって今どれくらいいるんだろうな』『めっちゃかわいい』『小学生くらい?』『顔つきは日本人っぽいけど』『超能力見せてー!』

「超能力まだ使えないの。でもみんながたくさん登録してくれたら使えるようになるかも」

『光の速さで登録した』『なにをするの?』『パンツ見せて』『おいやめろ幼女はそつと愛でるもの。血の誓いを忘れたのか?』『オレくんにはオレのパンツを見せてやろう。じっくりとな』『アッ』『おまえら小学生配信者の前で見境なさすぎw』

「登録ありがとうございます。ん……なにか力が湧いてきた気がする」

『んつつていうところがえちえち』『小学生にセンシティブ感じるな』『おいちゃんと見ろ。ほつぺたに手を当てて曲げて立ててる紙のほうに向けて倒れたぞ!』『スゲーまるでハンドパワーだ』『じゃねーよww風かもわからんだろ』『登録した』『みんなスカイちゃんに元気をわけてくれ!』『うおおおお』

「えっと、じゃあこうして」

『ギター!』『紙が飛んだ!』『また髪の話をしてる……』『鳥よ鳥よ!』『これでヒイロゾンビ配信者。ヒロチューバーであることが証明されたな』『ヒロちゃんの関係者なのかな』

「みなさんのおかげでできました。ありがとうございます」

『はにかむスカイちゃんかわいい』『うーん。やはり美少女』『手品かもわからんぞ』『ヒイロゾンビじゃなくても見るよ』『ハンドパワーやろ』『ヒロちゃんのとときとおまえら反応変わらんよな』

「えっと、じゃあ……こうして」

『柔らかな肉を軽く切り裂く膂力』『王道をゆく自傷行為』『超再生能力確認』『ふーん。えつちじゃん』『えつち?』『女の子が傷つくのがえつち』『は?』『スゲー変態がいる』『みんなスカイちゃんにもっと集中しろ。初心者だぞ』『どんな配信していくの?』

「どんな配信か……えっと、ヒロちゃんみたいな楽しい動画にしていきたいです」

『やっぱりヒロちゃんの関係者?』『あんまり他の配信者の名前を出すのもどうかと思うが』『でも、ヒロちゃんはインフラだろ。ヒロチューバーにとっては切っても切れない関係なんじゃ』『いろいろと実験に協力してくれると助かります』『政府関係者か?』『ピンクちゃんのほうに行けよ。実験関係は』

「ヒロちゃんの関係者っていえるのかな。えっと、ヒロちゃんが配信する前にわたし、ゾンビに噛まれて半分くらいゾンビになつてたんですけど、ほとんど自分のからだをうごかせなかったの。それで、ヒロちゃんに身体をふいたり、ご飯を食べさせたりしてもらってました』『身体をふく』『センシティブ動画』『半分ゾンビってなんだ?』『抵抗力がある状態?』『ヒイロウイルスの影響で完全ゾンビ化を防いでい

たとか?』『アンチウイルス?』『我々は全員ゾンビに感染している。だとすれば、全員アンチウイルスを多かれ少なかれ有しているということになるが』『噛まれてゾンビ化を免れていた例なんて無いぞ』『非常に興味深い……』『おまえらヒロゾンビがいるからいまさら抵抗力とかどうでもいいだろ。よそでやれ』『スカイちゃんかわいい』『ん? あれ、いま玄関のほうから音……』

『親フラ?』『スカイちゃん焦る』『動画やめないで!』『めっちゃ焦ってるww』『ヒロゾンビの親ってやっぱりヒロゾンビなんか』『オレもヒロゾンビになりてえ』『外歩きたいよな』

「あー、あつ、お兄ちゃん!」

「お、おい。なにやってんだよ。配信はまだ早いつて言っただろうー!」
『兄フラ』『おにフラww』『お兄様!』『ひええっ』『あ、切らないで切らないで』

「でも、町の人たちもヒロゾンビになったもんっ! お兄ちゃんもヒロちゃんもヒロゾンビが増えたらって配信していいって言ったもん」

「そういう意味で言っていないだろ! 早く切れ」

『お兄ちゃんガチ切れww』『ていうか町の人たちもヒロゾンビ?』『いまヒロちゃんの町って確か数百人規模でいるって話だったよな?』『まさか全員ヒロゾンビになってるのか』『おれもヒロちゃん町に行きたい』『ヒロゾンビってひそかにめっちゃ増えてるんじゃないね?』『人類存亡の危機(´)』『オレもヒロチューバーになりてえ』『えつと、じゃあ、そういうことで、ありがとうございました。次回配信は未定です』

ブツっ——。

※

やらかした現実。

でも、それって恵美ちゃんの自我のせいだよな。

ボク悪くないよね!?

「ご主人様がそう思うんならそうなんだろう。ご主人様の中ではな」
ひえっ。

でもでも——まさか思わないだろう。

町のみんなをヒイロゾンビにしたときには、いまが微妙な時期だから、外部に漏らさないでねってお願いした。ピンクちゃんが他の国にヒイロウイルスを拡散するまでは、少なくとも、この町のことは伏せておいてねってみんなには言って、みんなもそれに了承したんだ。

お行儀のよかった町のみんなは、どこにも情報を漏らさなかった。外部掲示板にも、ボクの動画のコメントにも、そういう情報は一切漏らさなかった。

保身的な意味合いもあるんだろうけど、みんな結託して、ちゃんと情報封鎖したよ。

でも——。

思ってもいなかったのは恵美ちゃんの行動だ。

恵美ちゃんは髪の毛が空色を思わせるブルースカイになっていて、自分も配信したいと言っていたけれど、恭治くんとの話し合いの中で、ちよつと待つようお願いしたはずだ。

そして、いちおうは恵美ちゃんも了承したはず。したよね？

「でも、町の人をヒイロゾンビにしてしまったっていいかゾンビ荘のみなさんに聞いてまわってましたよね。そのとき恵美ちゃんも思っちゃったんじゃないですか？ あ、これ——自分もしていいんだって」

「ヒイロゾンビになると配信するのは別！」

「恵美ちゃんのなかではいっしょだったんでしようねえ。伝え損ね。報告連絡相談の齟齬。世の中にいくらでもある事象です」

「ボクの連絡ミスっていうこと？」

「いやまあ半分くらいは、恵美ちゃんのやっちゃえ精神だと思いますけどね」

「なんでやっちゃうかな」

「ひとつは配信環境が整ってきたというのも大きいでしょうね」

最近、この町の周辺領域では無線インターネットというものを引い

ている。

無線インターネットは山の上とか高いところから、ネット回線を配るものだけど、つまりそれさえあれば、町のどこからでもネットにつながったりできるわけだ。電気はまだ吉野ヶ里の太陽電気とつながってないから町役場で補充するしかないけど、それさえすれば――、町の中なら比較的どこでもつながるようになった。

ボク、がんばりました。

がんばった結果がこれだよ！

「もうひとつの理由としては、いまが黎明期であるということですね。案外、恵美ちゃんは商機というものを嗅ぎ取る能力があるのかも」
「商機？」

「どんなものでも最初にはじめて人は強いってことですよ」

「バーチャルな配信者も確かにそうだったな。つまり、恵美ちゃんはこれから先、ヒロチューバーが増えることを予見して、みんなに先んじようと思ったってこと？」

「そうですね。おそらくそうだと思いますよ。無意識かもしれませんが」

「恵美ちゃんって頭よさそうだもんね」

素の知識とかは小学生だけど、なんとというか頭の回転とかが早そうだし。

最後のお兄ちゃんとのやりとりはすごく小学生っぽかったけど、それ以外は早熟な女の子って感じだった。

「女の子の成長は早いですからね。ほろり」

「なぜ泣くのか」

「幼女指数が減っちゃうのは世界の損失ですから」

「そうですか……」

「ご主人様は成長しないでくださいね」

「なんかそれお口が悪い気がするよ!」

ボクだって成長してるつもりです。引きこもりじゃなくなりましたし。

いまのボクは“お仕事”をしている。

これはとてつもない成長ではないでしょうか。

「では——、ご主人様もお仕事をしていたくださいませようか」

「ふえ？」

「釈明のお時間ですよ」

「ふええっ」

☆
☆

ヒロゾンビが増えたことについては——もはや隠すことはできませんでした。

恵美ちゃん動画をもとに、町みんなのスレに質問が投げかけられ、それに答える形で例の聖体拝領について明らかにされています。

その間わずか——数時間の出来事。

さすがに、ピンクちゃんも命ちゃんもスレのすべてを把握することはできないし、監視するには人員がいる。書き込みっていうのは事前に防ぐことは完全にはできないし——、例えば中国のラインに似たアプリとかだと、特定の言語を弾いたりすることもあるみたいだけど、暗号というか符号を使われてしまえば、それも意味がない。

そもそも、ボクがそういう検閲めたことを嫌がったんで、命ちゃんも自重してたっぽい。

で、明らかにされる事実。

引きずりだされた真実。

そしてみんなの前にはボク。

まさかまさかの釈明配信のお時間です。

普通の配信がしたい！

たかさんの人がバラバラに質問しても、わけわかんないようになるんで、みんなの意見をまとめてもらい、何人かの記者さんが発言者になるようにしてもらいました。もちろん、みんなもコメントはできるんだけど、声を出せるのはその人だけって感じ。

知らない人と話すのは緊張する。

——ヒロゾンビについては、ヒロちゃんが意図的に増やしたので
しょうか。

「えーと、意図的といえますかなんといえますか。ボクが増やした
いって思ってた増やしたわけじゃないです。みんながヒロゾンビに
なりたいたいっていうから、ボクがそれに応えただけというか。そんな感
じです」

——具体的にどのようなみなさんのご意見を聴取したのですか？

「ボクが意図的に意見を集めたわけじゃないです。いつのまにかそう
いう空気感といえますか雰囲気だったんで、町長が町の人みんなにヒイ
ロゾンビの申込用紙を配布して、記入してもらおうようにしてみた
です。意思確認ってやつです。意思確認だいじ！ だいじだよねー
ん」

申込書についてはご丁寧にアップロードされました。

町の人みなも、もうやけくそだったんだろう。

——申込書を使ってコピーもしてくださいと。こういうやり方で
幅広くヒロゾンビを募っていることについて、ヒロちゃんはいつか
ら知っていましたか。

「そういう文書をとということについてはですね。ボクはつまびらかに
は承知していませんでした。ぜんぜんぜん知らなかったです」

——この文書を見たことはなかったけど、募集をしているというこ
とは、いつからご存知だったんですか？

「ボクはですね。幅広く募っているという認識でございました。募集
しているという認識ではなかったものです」

『?』『?』『?』『ふあ?』『?』『?』『?』『?』『?』『?』『?』
「なんじゃないか?』『やはり小学生?』『小学生だぞもつと優しくしろ!』
『そうだそうだ。小学生でもわかる質問にしろよ記者!』」

ボクも言つてて意味がよくわかりませんでした……。

——わたしは、48年間日本語を使つてまいりましたけれども、募
るというのは募集するっていうのと同じですよ。募集の募は募るっ
ていう字なんですよ。

『つつこみが激しすぎる』『小学生だぞ。優しくしろ』『涙目なヒロちゃ

んがかわいすぎる』『やめてあげて』『48歳が11歳に言うには厳しすぎる言葉だと思えます』『ヒロちゃんをいじめないで』『でもワイも意味がわからなかった』

「あの、それはですね。つまり町長がですね。いわば今までのですね。経緯の中において、それにふさわしい方々に声をかけていると」

——ふさわしい方に声をかけてるんじゃないです。これ見てくださいよ。コピーして。コピーしてくださいと、知人友人も誘ってくださいって書いてるんですよ。これが募るってということじゃないですか。

「ふさわしい方ということですね。いわば募ってるという認識があったわけでございまして、例えばですね。新聞等にですね、広告をだして、どうぞということではないんだらうと」

『やばい泣きそう』『共感性羞恥』『ぶるぶる震えとる』『いまさら後にひけなくなつてさらに苦しくなるヒロちゃん』『ごめんなさいまちがえましたって言うべき』『記者も手心加えろ』

「ごめんなさい。ボクがまちがってました……」

——あ、はい。その……わかりました。

「みんなの意見については文書は任せてたけど、町の全員から意見を集めました」

——募集してたのですね？

「はい」

——いつからですか？

「たぶん、一週間ぐらい前です」

——乙葉さんが来られた直後ぐらいですね。何か関係はありますか？

「ボクのファンクラブの人たちがゾンビになって、普通のゾンビ状態からは治せなかったんで、ヒロゾンビにしました。くすん」

『あー、泣いちゃった』『記者ひでえ』『小学生に詰問すんなや』『冷静に考えてノーマルゾンビから治せない状態って……』『死んだ？』『殺された？』『自傷……自殺か』『なんか熱狂的な信者っぽいもんなあいつら』

——つまり、ヒイロゾンビが一気に増えて、町のみなさんもヒイロゾンビになりたいと。そうなったわけですね。

「たぶんそうです」

——ヒイロゾンビになりたいという人が増えていたという認識はありますか。

「なかったです」

ボクには町のみんながいつからヒイロゾンビになってもいい、なりたいと思っていたか正確なところはわからない。でもきつかけは些細なことだ。

そういうことだ。

——これからもヒロちゃんは、ヒイロゾンビを増やしていくつもりですか。

「ボクとしてはいままでもこれからも町のみんながどう思っているか、どうしたいかを尊重したいです。ヒイロゾンビになりたいならどうぞって思います。でも、ピンクちゃんの件で、国レベルでどうしてもくかが決まれば、それに従うつもりです」

『ヒロちゃんが大人っぽい』『今日もかわいかったー(こなみかん)』『なんだ、ただの天使か』『しかし、ヒイロゾンビになりたいって思えばならしてくれるなら、他県にも早くきてほしいぞ』『ヒイロゾンビの誰かが他県に来てくれねえかな』『スカイチちゃんは小学生だから無理だろうが、他の大人なヒイロゾンビなら来てくれるかもしれんぞ』『知人友人ならワンチャンあるか?』

みんなが声をあげてアレしたいコレしたいって言えば、例えば町の外だつて出ていけるし、ヒイロゾンビの拡散は止まらないかもしれない。

やってしまったことは取り返しがつかないけど——、少しだけビビるボクでした。

ハザードレベル113

「ラーメンが食べたい……」

ボクは呟くように、噛みしめるように、万感の想いをこめて言った。「ご主人様。今日はカップ麺をご所望ですか。何味にします？ シーフード？」

「違うんだ。 マナさん」

お部屋の中には、今日のお昼の献立を聞きに来たマナさん。

でも違う。カップ麺じゃなくて——。引きこもり風味なボクだったまには濃厚なやつが食べたくなるんだよ。カップ麺もおいしいんだけど、味が平面的で比較的薄味が多い。ボクがたまに食べたくなるのは、もう油まみれやつてくらい濃いやつ。

ちなみに佐賀のラーメンは福岡ほどではないけど、たぶん豚骨が主流だと思う。

よく考えればお隣の長崎だって、ご当地料理としてちゃんぽんが有名だけど、ちゃんぽんって豚骨野菜ラーメンでしょ？ え、違う？ 違うのはわかってるけど、味のベースが豚骨なのは間違いない。

つまり、リバーシ的な意味合いで、挟まれた佐賀もやはり豚骨が主流なのだ。

博多みたいにラーメンといったら豚骨が出てこないと怒るような、そんなコテコテの主張があるわけではないけれども、ボクが今求めてやまないのは、あの忘れがたき濃い味。佐賀は比較的薄味豚骨が多いけどね。濃いのに薄いつてなんだ？ 哲学か。

いや、いまはそんなことより。

「マナさん、豚骨ラーメンって作れる？」

「さすがに無理ですね」

「マナさんってなんでも作れるイメージあったけど。もしかして、豚骨ラーメン食べたなら、ボクの幼女指数が下がるからダメって話じゃないよね」

なんかありそう。

においがついちやうとかそんな感じで。

幼女は甘いにおいじゃないとダメとかそういう理由で。

「大丈夫ですよ。ご主人様の場合、にんにくを口いっぱい頬張っても消せない幼女のおいがありますので。わたし的にパーフェクトな幼女臭です」

「幼女のおいって何？」

「うーん、練乳ですかね」

ボクって練乳くさかったのか。

定番のミルクとかじゃない分、業の深さを感じるよ……。

「まあ、ボクのおいはどうでもいいんだけど、技術的に無理ってこと？」

「そうですね。実際、ラーメンっていつでも下準備とかしてるんじゃないですか。ゾンビ的能力で下準備はなんとかなるとしても、今日いわれて今日お出しするっていうのは無理です。それに、おそらく技術的な問題もあるかと」

「無理かー」

そりやそうだよね。お料理全般が上手なマナさんも、基本的に作るのは家庭料理の類だ。インスタントな蕎麦やソーメンは料理できても、お店で出すようなラーメンは作れない。至極もつともなことだった。マナさんってチートキャラっぽいからついつい普通の人だって忘れそうになるよ。

「素人が作ったラーメンでよければおつくりしますが、ご主人様が食べたいのはそういうのではないですよね」

「うん。マナさんが作ってくれる料理もすごくおいしいんだけど、たまには外食がしたいです」

「外食産業全滅しちゃいましたけどね」

「そうだね」

当たり前のことだけど、ゾンビハザードが起こって、それでもラーメンを作ってくれるおじさんなんて、さすがにフィクションの世界だけだった。

|||||

|||||

醤油を借りに行くだけで死ぬことがある世界の中級サブバルガイド

ゾンビ×日常コメディ系の漫画。ゾンビが溢れたのは壁の中だけなのか。ときどき政府がアイテムを支給してくれる仕組み。そのせいで絶妙にゆるふわな、しかし一歩まちがえば死んでしまう過酷なのかそうでないのかわからない絶妙な世界観。あえて言えば、ロックなのだろう。そして、この作品のベストエピソードとも言えるのが、ラーメンおじさんの話である。ゾンビが溢れた世界ではラーメンを作る奇特な人はいない。いやいたよ的な話。なにかと郷愁をかきたてられるエピソードである。

|||||

でもボクが目指しているのって文化の復興であって、ラーメンだって立派な文化だ。ラーメンとは宇宙であるなんて大仰なことを言う人もいるくらいだしね。

さすがに500名もいれば、どこかにラーメンおじさんがいるはずだ。

「ご主人様の場合、他県から募集してもいい気はしますけどね。募集殺到しますよ」

「いやさすがにそれは不平等というか争いの種になりそうだからやめておきます」

「ご主人様がかすかに成長されていますね。前はお姉さんのおっぱいに抱きついてくるだけの無邪気な女兒だったのに」

「無邪気な女兒っていうところが微妙に韻を踏んでる……」

それにボクだっていろいろ考えてるんだよ。

けっして単なる思いつきで、本能の赴くままラーメンを食べたいだけの女兒じゃない。

いや元男というつつこみは置いておいて。

「まあダメ元で町のみなさんに聞いてみるのがよいかもしれませんがね」

聞いてみることにしました。

とりあえず身近なところで大人な人といえば、飯田さんだと思っ
た。

ボクは下の階に住んでいる飯田さんの部屋のドアをノックした。
しばらくしてドアが開く。

そこにいた飯田さんの姿にボクは驚愕した。

「お、おじさん……」

「ん。どうしたの。緋色ちゃん」

「なんか、すぐくやつれてるんだけど」

なんかというかコケおにぎりみたいになってる。

体型自体はほとんど変わりなく、ずつしりとしたままだけど、頬の
あたりはおちくぼんでいて、肌の水分もカサカサだ。だというのに、
目だけは爛々と輝いていて、血走っている。

一言で言えば、計量前のボクサーみたいな。

ダイエツトに不慣れな人が、無理くり食べなきゃいいんだろって安
易に考えたみたいな。

そんな感じのご様子だった。

なんでだろ？ 飯田さんもゾンビイな日々を送ってるはずで、物資
調達なんて簡単にできるはずなのに。もしかして、この町にヒイロゾ
ンビが増えたから町の物資が無くなったとか？

いやそれはない。

そうだとしたら、町長あたりからそういう情報が入るはずだ。
わずか一瞬のうちにそこまで考え、そして答えはすぐに出た。

「配信始めたんだ」

「え、そうなんだ。気づかなかった。おじさんのハンドルネームって
確かアイちゃんだよな。教えてくれれば見に行ったのに。配信が何
か関係あるの？」

「関係しかない」

疲れたように呟く飯田さん。

ボクを部屋の中に通してくれて、ゾンビのようなのろりとした動きだった。

居間の畳に体育座りをして、続きを聞く。

「ダイエツト動画とか？ リング使うようなやつあるよね？」

「いや、わたしにはそういうのは似合わないよ」

「ダイエツトに似合う似合わないってあるのかな」

「実をいうとね。配信を始めたのは、わたしなりの責任の取り方だったんだ」

「責任って、あ、姫野さん？」

姫野さんとそういう仲になったとか言ってたし、根っこから葉っぱまでいい人な飯田さんと責任をとろうとしてもおかしくない。飯田さんはおもむろに頷く。

「それで、今の世の中、どうなっていくかは流動的だろう。お金だつてどうなるかわからないし、今の生活が永遠に続くかもわからないわけだし」

「そうですね」

「一番手っ取り早いのは、人気を得ることだ。超能力が身につけば一通りのことができるだろうし、だから、配信をはじめたんだよ」
なるほど職業訓練をしていたわけか。

恵美ちゃんのヒロチューバー発言からわずか数日で、町のみんなからヒロチューバーが続々と輩出している。みんな人気者になろうと必死だ。前世界ではお金を得るといのが目的だったんだらうけど、いまは資本主義自体が休眠中。よって、人気を得て超能力を使えるようになるというのが主目的だろう。

その背後には、資本主義が復活した暁には、というような目論見もあるのかもしれない。

「どんな配信？」

ふと、風が吹くような気安さで聞いてみた。

すると、飯田さんは目に見えて落ち込んでいる。

「おっさんに人気ができるわけがないんだよなあ」

「え、そんなことないよ」

咄嗟にフォローの言葉が出たけど、実際のところ外貌っていうのは配信者としてかなりのウェートを占めると思う。無言のまま飯田さんは学習机の上においてあるパソコンを起動させた。デスクトップ型の大きなやつだ。

ボクは立ち上がり、飯田さんの背後に立つ。

背中にベターってくつついてそのまま画面を見続ける。

そして表れる飯田さんの——アイちゃんのページ。

ここ数日で既に数十も動画をあげているみたい。

最初は2000回ぐらい視聴されていてわりと好調なのかな。

よくわかんないけど、まあヒロチューバーが珍しいというのもあるんだろうなと思う。

しかし、問題は最新の視聴数。

——視聴回数62回。

フォローのしようが……。

いや待て。まだ慌てるような時間じゃない。内容次第だ。内容次第でなんともなる。

飯田さんはボクの視線から何かを感じたのか、力なく頭を振った。

「わたしには歌も踊りもないしね。だからこそだよ。だからこそなんだ——」

「アイちゃんのダイオウグソクムシ的絶食生活……」

動画のひとつを飯田さんがサンプル的に開いてくれた。

コメントを見てみる。わずか数個だけど。

『毎日おっさんが数分じつと座ってる』『体重計に乗るときの足が汚い』『オレは好きだぞ。登録はしなかったが』『学術的には興味深いレポートにして提出してくれ』『なんだアイちゃんって名前から小学生美少女だと思った』『詐欺』『ロスジェネおっさんに生産性なんてないよ』『生きる価値なし』

むごい。そして飯田さんは自嘲気味に言う。

「これでわかっただろう。いま絶食中なんだよ」

「どうしてそんなことを？」

「ヒロゾンビはゾンビだろう」

「うん。まあそうですね。ゾンビの定義がよくわかんなくなってるけど」

「ゾンビは食べないだろう」

「人肉モグモグしてるけど」

「でも人肉モグモグしなくても何年も稼動するのがゾンビだ」

「まだ半年ぐらいしか経ってないけど、たぶんそうかも」

「それにヒイロゾンビは”人気”によってパワーを得ている。だったら”人気”さえ出ればエネルギー問題は解決する！ 恵美ちゃんに聞いたら登録者数53万再生でも超能力が使えるようになったらしいから、いまの計算だと——そう、登録者0だから、0に何を掛けても0だ。永遠に達することはない。永遠の0！ あはははははっ」

飯田さんがおかしくなっちゃった。

「粘り強い人気がでてくると思いますよ。そのうち、きつと……」

「そうだね。君のように世界中で愛されるようにはならないかもしれないが、せめて自分と家族の食い扶持くらいは稼がなくてはいけないな……」

しんみり。

「あの、ボクでよかったら、フォローとかリンクとかしましょうか？ たぶん、今よりは見られるようになると思うけど」

「それはやめておいたほうがいいな」

「えー、どうして」

「緋色ちゃんが紹介してくれたら確かに人気はでるだろうが何かフェアじゃないものを感じてね。できれば自分自身の力でなんとかしたいんだ」

「紹介したりされたりとか、宣伝力とか、人脈なんかも飯田さん自身の力だと思うけど」

「確かにそうだろうけど、わたしは資本主義的な世界からつまはじきにされた者だからね。どうしても、そういう使えるものはなんでも使えという論理自体に反発してしまう」

「だったら配信しているのがなんだか矛盾しているように思うんだけど」

「矛盾がキレイじゃないか。とても……人間は……」

ヤバイ。飯田さんが絶食のしすぎで壊れちゃった。

いまラーメンの話とかしたら、ますます危なそうだ。ダイエット中に濃厚なカロリーのカタマリの話をするなんて、禁酒中の人にアルコールを与えるようなもの。

ボクは適当に話を切り上げて、他の人に話を聞きに行くことにした。

☆Ⅱ

「ラーメンでございますか？」

あいかわらず美人で、最近ますます艶がでてきたかもしれない多々良温泉宿の女将さん。

浅葱色の着物をきていて、町役場の中でもすごく目立つ。

町役場のなかは薄く空調をきかせてるけど、電気を節約しているからそこまであったかくはない。気合入ってるのかなあなんて思う。

この人はイカのおつくりっていうのかな、豪華な食事をボクにふるまってくれたし、もしかしたらって思ったんだ。ちなみに、娘さんがヒロゾンビになったため、ご自身もヒロゾンビになっております。

「ラーメン食べたいなって思って」

「ラーメンでございますか？」

二度聞く女将さん。少しうつむき気味に苦悩というかなんとというか。

悩みのある表情になった。

「無理なの？」

「そうですね。旅館の料理とは少しばかり趣きが違いますので」「そっか……」

残念だけでしょうがない。

食べられないとわかると、なんかむしように食べたくなくなる。

脳内でラーメン欲があふれ出して止まらない。

「誰か知り合いいませんか？」

ラーメンおじさん。ボクがいま一番会いたい人はラーメンおじさんだ。

ラーメンおじさんがいたら、だらしないメスガキになって全力で甘えてもいい。

「ひとり心あたりは、あるにはあるのですが……」

「え、誰？」

「大山正子さんです」

大山正子。

多々良温泉宿の中学生ズのひとり。不良っぽい染めたような髪の色をしているが、わりと普通のいい子ちゃんだった女の子。女将さんの娘さんである令子ちゃんとは、おそらく親友といってもいいポジション。

って、脳内テロップが出たけど。

よく考えたら中学生だよ彼女。

「中学生なのにラーメンおじさんなの？」

「ラーメンおじさん？」

「あ、いや、ラーメン作れるんですか？」

「正子さんのお家はラーメン店をやっていたはずですよ」

「家がラーメンやっていたからってそんな無茶な」

「フフ」

美人が笑う。いつもは表情が硬い女将さんが笑うなんてすごく珍しいことだった。

命ちゃんと同じくクールなタイプだからね。

こういう人が笑うと、なんというかレア感があったいい。

とくに薄幸のというか、ものすごく女性って感じの女将さんが笑うと、ドキつとしてしまう。

ボクも男の子ですゆえ。

「どうして笑うのかな」

照れ隠しに幼女モードになるボクでした。

「失礼しました。緋色様のようなお方が無茶だなんておかしくて。あ

なた様の存在自体が無茶といえは無茶ですのに」

「ボクってそんなにはちやめちやじゃないよ」

「そうですね。緋色様は天使様ですからね」

「ラーメン食べたがる天使ってどうなの。というかその設定まだ信じ
てたんだ」

「いいじゃありませんか。そういうかわいらしい我儘もわたしは好き
ですよ。ひとのために動かれているあなた様が少し自分のために動
く。実にいいと思います」

「うん。ありがとうございますっ。」

でも、正子ちゃんラーメン作れるのかな。

血筋がなせる業といっても限界があるように思えるんだけど。

☆
||

女将さんのアドバイスに従って、ボクは中学生ズの群れに突貫し
た。

いつものように仲良しグループで、ロビーの長椅子に座って、かわ
いらしい駄菓子とカップに入れたお茶だけで、ただひたすらに駄弁つ
てた。

令子ちゃんや正子ちゃんだけでなく、臆病な早成ちゃんや委員長に
も笑顔が見える。ここの暮らしにもだいぶん余裕がでてきたのかも
しれない。学校がないから暇っていうのもあるのかな。

ちなみに、どうあがいてもお昼ご飯には間に合わなかったから、
ラーメンは数日後でも数週間後でもいいと思ってる。飯田さんみた
いに絶食生活じゃないからね。マナさんのご飯はおいしいし、ボクも
不満はないんだ。

ただ、むしように前の生活を取り戻したいって気持ちが強いの。

ある種のスタルジーかな。

単に食い意地張ってるだけかもしれないけど。

「え、ラーメン食べたい?」

「そうっす。豚骨でこつてりなやつをお願いしたいです」

「緋色ちゃん。ラーメン食べたいんだ。意外だね」

令子ちゃんが女将さんに似たうつすらとした笑みを浮かべる。

ふうむ。そんなに変なこと言ってるかな。

パンケーキが好きですとかいってる少女マンガ風なボクが、こてこての豚骨ラーメンを求めるっていうのは、案外ギャップがあるのかもしれない。

「でも、たまにそういうときないかな」

「まあ確かに」「さすがにインスタントばかりじゃ飽きるよね」「フライドポテトならわたし無限にいける」「あんたMサイズも全部食べきれないじゃん」「ラーメンってキレイに食べきれないからわたし苦手」
脱線して無限軌道にのりそうなJCさんたち。

本当におしやべりするのが好きなんだな。ボクは陰キャな本性からして人と話すのは十分が限界です。

「あの——、正子ちゃんのお家がラーメン店やってたって聞いたんだけど」

ボクは強引に話を軌道修正した。

「ああ、やってたよ。一杯290円の博多ラーメンね。佐賀なのに博多ラーメンってなんだよって子どもごころに思ってたけど、いちおうやってたのは確かだよ」

「正子ちゃんもつくれたりしない?」

「うーん。作り方はいちおう知ってるけど——少しは手伝ったりもしてたし」

「やった! ラーメン!」

「町役場の南東方面に家あるからさ。誘導してもらわないといけないけど。家に来る?」

実をいうと正子ちゃんはヒロゾンビじゃない。

令子ちゃんがヒロゾンビになったから、正子ちゃんもそうなるかなと思っていたけど、人間でいたいというのが正子ちゃんの意味だった。

町の中では少数派だ。だからって何って話だけだ。

要するにセーフティゾーンからはずれる南東方面は、ボクや他のヒ

イロゾンビに守ってもらわないと危険ってこと。

それぐらいお安い御用だ。

「あ、わたしも行くよ」

令子ちゃんが声をあげる。早成ちゃんと委員長ちゃんもいつしよについていくみたいだ。

みんないつしよってというのが仲良しグループの基本だからね。こだけきさら空間みたいだ。

それはそれとして——、みんなで正子ちゃんのお家におでかけすることになりました。

ハザードレベル114

ボクは女子中学生四人とラーメンを求めて旅をすることになった。といっても、日帰りだけだね。

命ちゃんはラーメンにはあまり興味がないらしくお留守番です。

そして、ボクはひそかに緊張していた。

何をもって決まってるでしょ。

影に住まう者は光を浴びると朽ちてしまうのだ。

ついていけるだろうか。光属性の彼女たちに。

つまり、ボクとしてはまだ出会ってまだ数ヶ月くらいの女の子たちとサシで話し合わないといけないわけで、ゾンビに脅かされることもなくなった今では、彼女達はきらきらきゃぴきゃぴと小鳥のようにさえずっている。まるで光と戯れる小人さんたちみたい。うふふよろしくてよ。こっちにいらっしやい。

じゃねえよ！

無理。

それ無理ですよ。ボク的には、まあ普通に話す分にはできると思うんだけど、女の子トークってやつについていけそうにない。

出会って間もない頃の疲労していた顔はどこへやら。

令子ちゃんの人肉モグモグトラウマも大分薄れてきたのかなあなんて思う。

地味に、ハイロゾンビ化による精神鎮静効果なんてものもあるのかもしれない。

「どう」

前を歩く四人の少し後方を歩くボクは、人外めいた跳躍力でいつかのときみたいに塀の上に登った。お話の中に入れそうにないから、ひとり寂しく遊ぶのだ。

「ヒロちゃんも小学生だね」「あ、ほんとかわいいー」「おこさまだー」

「ん？」

気づいたらみんなに見られてた。

なに言ってるのかちよつとよくわからないです。

普通に高いところに登ると、なんかこう気持ちいいって感じで、落ちるといふ恐怖もほとんど消えた今となっては、なおさら高いところが好きだったりします。

ただそれだけなんだけど、女子中学生のマインドでは解釈が異なるらしい。

「下に落ちたらマグマなんですよ」「一機落ちるんだよね」「横断歩道の白いところ歩かないと死ぬみたいなやつ」「わかるわかるー」「あ、それやった!」「ジャンプするときスカート見てくるやついたよね」「ヒロちゃんも見えそうだよ」

むむ。下から覗かれると見えそうなのか。マナさんが用意してくれる服って全部ふとも見えまくりのやつだから。とりあえず両手を使って伸ばせるだけ伸ばしてみたけど、たぶん効を奏してはいないだろう。

とりあえずごまかしがてら、彼女達の話題に乗っかることにする。

「影を通らないと死ぬって遊びはしたかな」

「なにそれー」「くらいよー」「吸血鬼ごっこ?」「あ、でも男子達がそんなのやってたかも」「わたしもやったことあるよ」「えー、男子に混じってやってたの」「普通に女子だけでやってたよ」「わたしはそういう遊びはしたことないかな」

「まあ小学生くらいだと男子女子ってそれほど意識してなかったと思うよ」

「ヒロちゃんってどこ小?」「水鏡小学校ではなかったよね」「ご近所さん必須の」「ていうか、小学校区広すぎだし」「ここにはそれくらいしかないしねー」「少子化だし仕方ないよ」

あらためて聞かれると困る。

実をいうと福岡にある、とある小学校なんだけどね。

ボクがまごついていると、何を思ったのか、令子ちゃんがぴよんと跳んだ。

ブロック塀に足をつけて、ひらりと二段ジャンプ。

塀の上に乗る。

さすがのヒーロゾンビ。人間だった頃に比べると最低保証でも筋

力は数倍はあるから、簡単に跳躍はできる。

「できた」

「へえ。わたしもそれできるかな」

真面目そうな委員長ちゃんも楽しそうだ。同じような要領でジャンプ。

「わたしもやってみよう！」

早成ちゃんもさすがにこの程度では尻込みしないらしい。むしろ置いていかれることに恐怖を覚えるタイプなのか。

て、塀の上にさすがに四人は人口密度が、前と後ろを挟まれて動けないし。

そして——、正子ちゃんは人間のままだからさすがに人外めいたジャンプはできない。

「ほら。正子」

そのときの形容しがたい微笑は、どうにも表現しづらいものだと思う。

ほんのりと、人間とヒイロゾンビの違いを感じて。

さみしそうに笑ってたんだ。

友情を信じてないわけではないと思う。

その違いが致命的な亀裂を生むわけではない。

でも——、違うんだ。仲良しグループだけど、ぴったりと一致しているわけではない。

当たり前だけど違う人間。違う考えがある。

「みんなして塀の上に登ってどうするつもり」

「もちろん。落ちたら死亡だよね」「死んだらどうする?」「罰ゲーム

じゃん」「どんな」「えー、一番最初に好きになった人の話でもする?」

「あんたの話もう何度も聞いたんだけど」「えー、まだまだ話したりないよ」「将来の夢とか」「知ってるし」

きやぴきやぴ度数がまたあがってる。

「ねえ。ヒロちゃんは好きな人いるの?」「後輩ちゃんなんじゃないの?」「えー、でも女の子どうしだよ」「早成。それは差別発言。今の時代LGBTには厳しいんだから」「つつても、小学生でしょ。ヒロちゃ

んには早いんじや」

少ずつ体温があがっていきます。

「でも、ヒロちゃんって天使ちゃんだし。性別とか関係ないんじやないの?」

命ちゃんのなかでは、やっぱりボクは天使扱いみたいだ。

天使に性別はないっていうしね。

しかし、実際のところ、ボクってどうなんでしょうね。

うーむあまり考えすぎるとよくわからん。

「命ちゃんのごときは好きだけど……その名のとおり後輩ちゃんだし。ボクにとってはかわいい妹みたいな感覚なんだ」

うん。これが偽りのない気持ちかな。

「ヒロちゃんのほうがどう見ても妹的ポジションのように思えるけど」「そもそも後輩ちゃんってなんで後輩ちゃんなんだろう」「後輩ちゃんって命ちゃんって名前なんだ。高校生だよね?」「高校生の後輩がいる小学生?」「ヒーロゾンビ的な後輩かなあ」

「うーんとね。実を言うとボクは大学生なのです!」

元男というのは、いっしょにお風呂に入ったりもしているし、とりあえず伏せておく。

大学生というのは実害がない情報だからいいでしょ。

君たち中学生とは歴然たる知識量学習量の違いがあるのだよ!

「ヒロちゃんって時々むふんってなるよね」「イキってるようで小動物が自分を大きく見せようとしているようにしかみえない」「あーわかる。リスとかが両手広げてガオーってやつ」「マウンとろうとするのが逆に小学生らしい」「大学生なのにあの作文はないよね」「どう考えても小学生ムーブなんだけど」

J Cの評価は思ったよりも辛辣だった。

命ちゃん……ボク、くじけそうです。

しばらく進むと、セーフティエリア外だからか、当然の権利のようにゾンビはそこらにたむろっている。アーアーいいながら、手を突き出して、誰か『人間』を求めている。

正子ちゃんも人間のままだから、ボクがコントロールしなければ、

当然襲ってくるだろう。

令子ちゃんたちもゾンビに襲われた経験があるからか、最初の数分間は緊張していたけれど、すぐに慣れたみたいだった。

「ゾンビは怖くない？」

「怖いけど襲ってこないなら大丈夫」「襲ってこないゾンビなんて赤ちゃんみたいなものだよね」「映画みたいな腐って見た目やバイゾンビが少ないから大丈夫」「もしかしたら家族がいないかって見ちゃうよ」「おやじどこいったんだろうな」

最後の発言は正子ちゃんのものだった。

おやじというのは言うまでもなく、ボクが追い求めているラーメンおじさんだろう。

実際、ゾンビというのは生前の行動をある程度受け継いでいるようなので、住んでいたところからはあまり離れない性質がある。

ただ、これも絶対の法則じゃないし、現に彼女たちの親兄弟はみんな見つかってない。少なくともネットが復活した今なら、どこかの避難所に駆け込んでいるのであれば連絡をとろうとするだろうし。そうやってないということは、たぶんどこかでゾンビになっているんだろうと思う。

そして——見つからない。離れた避難所近くでゾンビになったからか。あるいは——本当に死んでしまったからか。

みんな明るい顔をしているけれど、そういった現実はあるんだよね。

ラーメン食ってる場合じゃねえぞって感じで。ごめんなさい。ラーメン食べたくて……。

でも、みんな気晴らしにはなったかもしれない。町みんなはセーフティエリアを離れることはあまりない。町長がみんなには危険だからエリア外に出るのは届け出てからにしてほしいと申し伝えているからだ。許可制ではなく届出制というところがミソね。

なんで、そういうふうにしてるかっていうと、やっぱりヒロゾンビの扱いがまだ確定していないこの状況だと、人間にさらわれたり、いいように扱われたりする可能性があるし、ヒロゾンビがめっちゃく

ちや感染拡大しちやったら、それはそれで国際的な取り扱いも変わってくる可能性があるからだ。

要するに自分と周りに責任が持てない限りは外に出ないほうが無難ってことです。

ピンクちゃんの受け渡しは、いよいよ一週間後くらいに迫っているから、今急いで外に出なくちゃいけないって人は町民にはいないだろう。エリアの拡大スピードも周りの人が手伝ってくれてるから、早まってるし。

「ボクの釈明動画も役に立ったのかな」

あの釈明動画のおかげで、外への説明はいちおうできたし、ヒイロゾンビが増えても、とりあえずのところ外部的な影響がなければ、国も静観してくれるみたい。外国はよくわからないけど、この国のことについては幼女先輩が教えてくれた。

「あー、あの釈明動画ひどかった」「正直、笑っちゃった」「募集と募るは実をいうと微妙に意味は違うから、ヒロちゃんの言うこともあながち間違いじゃない」「ヒロちゃんも大変だよ。あんな感じで質問されたらわたしだったら絶対泣いちゃう」「実際に泣いてたよね」「ううっ」

J Cたちが厳しいとです……。

「あ、泣いちゃう」「泣かないでヒロちゃん」「え、ウソ。後ろからだが見えないんだけど」「あれくらいの釈明だったら町長に狐面被らせてやらせとけばよかったんじゃない」「町長だったら適当にのりくらり言いそうだよ」「あの人が釈明してたら、怪しさ倍増でうちらヤバかったって」「ヒロちゃんのおかげで、追及すんのやめとこうって空気になっただしさ」

なぜか、後ろにいた令子ちゃんにギュッと抱きしめられています。

命ちゃんの気配を感じる。これは不可抗力。これは不可抗力。

「あー、なんか後頭部あたりからいい匂いする」「なんのにおい?」「なんかー、えっと、練乳っぽい感じ」「あまーい」「実際舐めてみると甘いのかな」

「やめてくたしあ」

たまらずボクは浮き上がり、みんなから距離をとる。

「あ、ズルい」「逃げた」「おいで。ラーメン食べさせたげるから」「正子が怪しいおっさんみたいなこと言ってる」「小学生からパパ活覚えたらまずいって」「パパ活っていうかお姉さん活動だから、おね活?」「あ、ますます遠くに」「かまいすぎると逃げるよ」「猫か」「ヒロちゃん猫っぽいしね」「確かにうちの妹もそうだったわ」

「おさわりは禁止です! 禁止!」

ミツバチのあったため戦術で殺されるスズメバチの気分でした。

ヒイロゾンビだからって油断できないなまったく。

「まあいいけど。ついたよ」

そして、いつのまにやら目的地についていたらしい。

ボクの目の前には、燦然と輝く『博多ラーメン』の文字があった。

☆
☆

いや、ぶつちやけ輝いてないんだけどね。

正子ちゃんのラーメン店は老舗って感じで、看板も年季が入っていて、『ラーメン』の『ラ』の字がとれかかっている。看板は中が空洞になっていてライトで照らすタイプだったのか、アルゴンが抜けちゃった電灯みたいになんか全体的に黒くくすんでいる。

だが! それがいい!

この老舗な感じ。ラーメン一筋。他のことはなんも考えてないって感じが、実においしいラーメンを想像させる!

ぐびりと喉が鳴った。ボクは文明人なので、文字だけで興奮できるのです。

ビバ! 文明人!

「ああ、ラーメン」

「ヒロちゃんがお祈りポーズになってるんだけど」「浮きながらお祈りポーズだとマジで天使っぽいよね」「台詞はラーメンだけ」「ラーメンが食べたくてたまらないんだね……」「パンツ見えてるよ」

JCSが何か言ってるけど、いまは気にならない。

だって、本当に食べたかったものがそこにあるものだもの。

地面に降り立つボク。天使の時間終了。いまのボクはラーメンを
求めるただの小学生だ。

「さあ。正子ちゃん。つくろっか」

「いや、そんなつくろっかって言われてホイホイしてくれるもんじゃな
いよ」

「えーっ。どうして？」

「どうしてって言われても、豚骨ラーメンってなんの材料できてる
か知ってる？」

「そりゃ。豚骨って言うぐらいだから豚の骨でしょ」

大学生の知識量を舐めてもらっては困る。

「そう、豚骨。げんこつとも言っただけだね。ちょうど骨の形が握り
こぶしみたいだから」

「ふうん……」

知らなかった。

大学生の知識、即敗北。

でもまあいい。専門用語を知ってる正子ちゃんすごい。ラーメン
店主になれるよ。

浮かれていたボクだったけど、対称的に正子ちゃんの顔は暗い。

「あのさ。電気なくなっってから何ヶ月経ってると思う」

「4ヶ月くらいかな……」

「豚骨どうなってると思う？」

「豚骨ゾンビになってる？」

「なに豚骨ゾンビって」笑われてしまった。「でも正解。見てみないと
なんともいえないけど、たぶん使えないよ。仮に豚骨ゾンビになっ
てないとしても味が落ちるし」

「じゃあ、ここに来た意味って？」

「香辛料とか、スープの素になる原料は残ってるだろうし、専門的なア
イテムをいろいろとそろえる必要があるでしょ」

「豚骨はどうすれば……」

「九州内だと難しいかもしれないね。山口県あたりまでいってきて調

達してくる?」

「うーん……」

停電状態なのは九州内だけ。だから、中国地方まで行けば電気はある。

ちなみに九州内の主要な発電所はすべて物理的にぶつた切られている状態らしい。

らしいというのは幼女先輩に聞いたからで詳しいことはわからないけど。

ともかくできることは、太陽光パネルを敷き詰めたりとか、そこまでの”線”をつなぐことかな。ボクだけじゃ人手が足りなさすぎるから、ヒロロゾンビが増えて誰かがやってくれることを願うばかりです。電力回復配信とかやったら人気ができるんじゃないかな。町の中だけだったら、吉野ケ里の大規模太陽光発電からもらってくればいから、そこまではやろうと思ってるけど。

ともかく――。

豚骨を手に入れるには、九州内じゃ難しい。

いや、でも本当にそうかな。マナさんみたいに発電機を調達してる人がどこかにいないだろうか。ゾンビものでは定番の『プレッパーズ』とか。

プレッパーズ。

言わずと知れた備えるものたち。食糧とか防具とか備蓄しまくって終末に備える人たちのことを指す。当然、やる気に満ちた彼らは豚骨のひとつやふたつ隠し持つてるだろう。

交渉次第では――、分けてもらえたりしないだろうか。

「ねえ。どこかにプレッパーズっていないのかな」

「プレッパーズ?」「英語よわよわガールじゃなかったの?」「備える者たちのことね」「豚骨ラーメンに備える人たちっているのかな」「プレッパーズが本当に備えているんなら、ヒロちゃんのこと知らないはずがないと思う」「インターネットとか無線機とか」「でも有線インターネットだけなら状況知らないで引きこもってる人もいるんじゃないの?」

みんなボクの発言を吟味してくれている。

ボクに豚骨を恵んでくれるプレッパーズさん、どこかにいないものか。

正直なところ山口まで飛んで行って、また戻ってくるというのも、そこまで難しくはないと思う。ただ、もう少しでピンクちゃんのイベントが始まるわけで、ボクとしてはふらりとでかけて行って帰らぬ人となったりしたら、みんなめちゃくちゃ困るだろう。ピンクちゃん主導とはいえ、ボクはヒーロゾンビの基点なのはまちがいないわけだし。

それぐらいの自重はできている。

せいぜい日帰りでなんとかしないとイケない。だとしたら——、やっぱりボクの町で、そういう人がいるかどうか探してみないといけない。

でも、備えてる人たちはゾンビハザードが起こったときに、ゾンビに見つからないように隠れるということも想定しているはずで、ボクもゾンビの一種なので彼らを見つけるのは難しいかもしれない。

豚骨ラーメンへの道は険しい。

そのまま、ワチャワチャと話しながら店内へ。

店内はわりとキレイなままだった。窓が割れていたりすることもなく、店内に目に見えるような破損は見られない。少しだけ埃っぽいくらいかな。

もちろん、店内に人気はない。ゾンビっ気もない。

静かな空間だ。

「だれもいないよね」

ボクは言う。いちおう、ヒヤッハーさんがたむろってた場合も考えての発言だ。

いま、中学生ズを守るのってボクだけだからね。正子ちゃん以外はヒーロゾンビ化しているんで、そう簡単には死なないだろうけど。

「お化けがでないか怖いのか？」と令子ちゃん。

「ぜんぜん」

人間のほうが怖いんだけどな。

みんなもそうじゃなかったの？

でも、とりあえず人間の気配もないようだ。狭い店内だし、とりあえず本当にいなさそう。

店内は電気がついていないので、薄暗く見通しは悪い。ただし、ヒイロゾンビは夜目が利くのでバッチリです。

でも、人間の正子ちゃんも勝手しつたる我が家だったのか、ズンズン奥に進んでいった。

カウンターはすぐ傍にあつて、厨房とカウンターが直結しているタイプのようだ。

「だいたいこの道具はそろつてるみたい。中見てみる？」

「見る見る」

促されるまま厨房の中に入つてみる。わりと狭い。コンビニのバックスペースくらいの領域しかなくて、大人なら壁とカウンターに両手が届きそうだ。

吊り下げられてるお玉とか調理器具の類。設置されたままの空の大きな寸胴鍋。中には大きめの鈍い銀色の冷凍庫があつて、正子ちゃんの意味ありげな視線でボクを見た。

「見る？」

冷凍庫の中をしてみるかと言っているんだろう。

「ここまできたらつてやつだよ」

「チャレンジジャーだね」

そろりと開け放たれた冷凍庫。

もしかしたらロッキーつていうボクシング映画みたいに、豚のお肉がつるされてたりするのかなつて思つてたけど、そんなことはなく、中に置かれていたのは、普通に肉の塊だった。

そして――。

「あー」「うー」「ああー」「ゾンビ肉」

そうお肉はゾンビ状態だった。密閉されていたからハエはたかつてなかったけど、浅黒い感じに染まつてて、なんか変な臭いがした。豚骨はゾンビのように生き返らせることはできない。

「とりあえず……アイテムもつてかえろうか」

正子ちゃんの言葉に従って、ボクはラーメンのための道具を全部持ち帰ることにする。

当然使うのは念動力。みんなにも小物は持ってもらったけど、さっきの寸胴鍋とかはボク担当だ。ガチャガチャと大きな音をたてながら、ボクはとぼとぼと帰宅。

「結局、豚骨がないというのが致命的だね。他はなんとでもなると思うけど」

正子ちゃんのラーメンおじさんとしての発言は正しいだろう。

香辛料とか卵とか、麺とか、そういうのは案外ななんとかなるんだよ。実際、鶏とかご近所さんで飼ってる人とかいるし。生みたてをもらったこともあります。

しかし——、お肉というのは、実際には、その前にご生前のお姿とというのがあるわけで、自動的にキレイなお肉の塊が土から生えてくるわけじゃない。

「豚骨持つてるプレッパーさんを探さなきゃ」

「あるいは動物園とかで豚を捕まえてくるとか」「そういえば昔小学校で豚を育てて最後に食べるとかいう企画があったような」「ヒロちゃん。子豚ちゃんをキュってしめれたりする?」

「あ、いやさすがにそこまでは……」

念動力使えば、キュつとできるけどさあ。

「普通に、配信で頼んだら?」とは令子ちゃんの言。

まあそれも考えました。でも、町のみんなの生存領域を考えると難しいだろうし、町の外の人豚骨を大量に持ってきて押し寄せるとか怖すぎる。豚骨まみれになっちゃうかも。

「知り合いがいいよね」「だったら幼女先輩かピンクちゃんなんじゃない」「ピンクちゃんならなんとかしてくれそう」「豚骨輸送作戦」「できるだけラーメン食べたいの?」

「いや、そこまでおおげさにしたいわけじゃないから」

「豚骨のためならそれぐらいしたっていいと思うけど」「ヒロちゃんが少しだけ我儘言ってくれたほうがみんなも安心するんじゃないかな」「友達にお願いするのはそんなに変じゃないと思うよ」

女子中学生の結束は固いみたいだね。
ピンクちゃんに頼んでみようかなあ。

☆
||

「いいぞ。ピンクもこのごろヒロちゃんに会えなかったから行くぞ」
即答でした。

豚骨ゲツト！（NEW）

ハザードレベル115

「すんすん……すんすん」

ラーメン店から帰ってきたら、さつそく匂いチェックをされているボクです。

命ちゃんになぜか身体の匂いがかがれています。この子、猫か何かですかね。

フレーメン反応されちゃうんですかね。

「み、命ちゃん。なんで……？」

「先輩から他の女のニオイがします」

「そりや中学生らしい戯れってやつだよ」

確かに道中で、みんなから抱きつかれたりしてたけど、この子嗅覚鋭すぎませんかね。

ただ、そこには一ミクロンも恋愛感情なんて含まれていない。

そもそも彼女達の認識ではボクは小学生女兒だよ。そんな感情なんてあるはずもない。

いいとこ小動物を愛でるようなそんな感じだろう。

ボクのほうも中学生なんてまだまだ子どもだし。

「でも嫌なんです」

「そうですか」

命ちゃんのかわいらしい我儘。

ボクはそのまま受け入れるしかない。

ただ、ラーメンにかける情熱は途絶えていないと知ってほしい。

「まあ、女の子たちの距離感ってボクにはよくわからないからな」

「先輩との本当の距離感を知ってるのは私だけだと思っっています」

「確かに男のときのボクを知ってるのは命ちゃんと雄大くらいだろうしね」

幼馴染属性ってやつだ。

「配信はキャラに過ぎませんし。町の皆さんとの関わりも——」

「それは言い過ぎかな」

キャラもボクだよ。

それにラーメンを作ってくれるっていうのは、立派な関係じゃないかな。

でも命ちゃんが言いたいことはそういうことではなかったらしい。英語つよつよガールの言えば、ペンディング状態である案件。

後輩の告白。

「先輩。いつになったら答えてくれるんですか」

愛してるという直球の言葉に対してすらボクは応えることができないヘタレだ。

不満の源泉はそこにある。

「雄大が帰ってきたら応えるから」

ペンディングです。ペンディング。

「なんで雄兄いに関係あるんです？ 先輩は男の人が好きだったりするんですか？」

「違うよ」

ボクはきっぱりと言った。

男の人が好きとか嫌いとか、雄大のことがどうかそういうんじゃないんだ。

ボクはただ昔からの関係が心地いいんだ。

——変わるのが怖い。

そんな後ろ向きな感情。

でも、命ちゃんと共有してる部分もあると思ってる。

命ちゃんも、変わることが怖い部分はあるだろう。

だから、命ちゃんもそれ以上は踏みこんでこなかった。

無言のまま抗議とも不満ともつかない空気が満ちる。

お、重い。ジトーって見られてる。

こ、これって後でボク刺されたりしませんよね。命ちゃんはそんな子じゃないと思ってるけど、ボクの態度が命ちゃんを苦しめてるのも事実だ。

「先輩がいじわるするなら、先輩の枕から成分吸い取っちゃいますよ」

「ど、どうぞ……」

「すんすん。すんすん」

代償行為なのかな。ものすごく吸引されてるんだけど。ボクの男
だったときの臭いはたぶんもう完全に消えてると思うけど。

なんか変な雰囲気になったので、ボクは軽い口調で、まったく別の
話題を出すことにする。

「ピンクちゃんなら豚骨ぐらい持つてるって思ったけど当たりだった
ね。あとは正子ちゃんがグルグルすれば、豚骨ラーメンできるよ。命
ちゃんもいっしょに食べるよね」

「先輩が嬉しそうなのはいいんですけど。やっぱり例の件、知らな
かったみたいですわね」

命ちゃんが少し溜息めいた息をついた。

どういうことだろう。ボクが知らないことがあるのだろうか。

そりやラーメンについては知らないことだらけだけど。

「なにかあったの？」

それには答えず。

命ちゃんはベッドの上で、ボクの枕を意味ありげに触ってる。

丁寧に位置を正して、ポンポンと触って。よしと小さくつぶや
いて。

吸引完了の合図？

「いずれにしろ、豚骨ラーメン作ってもらうんですよね」

「うん。そのつもりだけど、ピンクちゃんから豚骨もらったらすぐに
作ってもらおうつもり」

「だったらいやでも知ることになりますから、今は言う必要はないで
すね」

「えー、なに？ 気になるから教えてよ」

「女子中学生にもみくちゃんにされて嬉しがってる先輩には教えませ
ん」

「命ちゃんがグレちゃった！」

「グレてないです。でも私は嘘は言っていないません。私達は変わってき
てるんです。先輩もその意味をよく考えてくださいね」

なにが、変わったんだらう。

正直なところ、ボクにはまったく予想がつかなかった。

ピンクちゃんはいつものように黒塗りの音のないヘリでやってきた。

いまではヘリから自由落下してもまったく問題ない。ピンクちゃんもある程度重力に逆らうことができるからだ。

ふわっとした羽毛のような落下で、ピンクちゃんは降りてきた。

でも狙いはボクの腕の中なので、ちゃんと受け入れます。

ボクよりもさらに小さな矮躯。

すっぽり収まるサイズ。あいかわらず無邪気な笑顔で、頭をすりつけてくる様はとってもかわいい。

「ピンクちゃん。良かったの？ 例のヒロウイルス受け渡しで忙しかったんじゃない」

「日程の調整とかは他の人でもできるし問題ない」

「あの、ボク行くからね」

「え？ あー、うん。そうなのか。ヒロちゃんも同行するのか？」

「ヒロゾンビの行く未を決める大事な会議でしょ。行かないほうがいいよ」

「なるほど……。さすがヒロちゃんだな。責任感の欠片もない国の偉いやつらとは大違いだ」

「ボクよりちいさなピンクちゃんががんばってるのに、なにもしないわけにはいかないよ」

「マイシスターは、だから好きなんだ」
すりすりすり。

いつもより多めにすりすりされています。

それからしばらくして、落ち着いたところで、ピンクちゃんは上空にいるヘリに合図を送った。

ヒュッと落とされる大きなカタマリ。

言うまでも無い豚骨——いやゲンコツだ。ピンクちゃん両手を広げて重力を操作する。

ボクもあわてて手伝った。せつかくのお肉が地面についたらテンションダダ下がりだからね。

ただ、目の前に来たゲンコツを見ると、透明な厚手のビニールみたいなもので覆われていた。中はかちこちに凍っている。

なるほど基本的には冷凍保存なのか。

冷静に考えたら、ピンクちゃんの組織も巨大なプレッパースだといえるのかもしれない。

「あの、ピンクちゃん。いまさらだけど資源的には大丈夫なの？」

「ホミニスの資源か。この、とんこおつくらい何千本単位で保存されてるから大丈夫だぞ」

とんこおつ？

「そうなんだすごいね」

「そもそも資源なんて言い出したら、このへりで一回くるだけで、だいたい一万ドルくらいはかかってるから、いまさらだぞ」

「一万ドルって……だいたい百万円くらいだよ。一回で？」

「いや正確には片道でだな」

黒塗りのへりは最新鋭だけに、大食らいのようでした。

それにしても百万円って。資本主義はやばい状態とはいえ、とてつもない贅沢品をブンブン飛ばしてるんだな。

「ヒロちゃんのこれからやろうとしていることを思えばこれくらいどうってことないぞ。ヒロウイルスは百億ドル以上の価値があると思うし。ヒロちゃんが人類共存を望むところはプライスレスだ」

「ゾンビの治療薬としてみたらそうかもしれないね」

「人類の可能性を広げるとい意味でも大きいぞ」

「人類じゃなくなってるのかもしれないけど」

「人類にヒロウイルスというアドオンがくっついたという感じだ。べつに人類が変わったわけではないと思うがな」

「もう素の状態には戻れないけどね」

「認知症や精神病についても治らないより治ったほうがいいだろう。人として純粹かそうでないかがそれほど重要だとは思わない」

まあ、それはそうかもしれない。

いま多くの人が、ヒロウイルスを摂取したのは、結局のところ彼らを選んだからだ。

「でも——望まない人もいるかもしれない」

「いるだろうが、少数派は少数派だからこそその不利益を享受するしかない」

ピンクちゃん大人です。八歳児なのに大人！

「それにしても、ヒロちゃん」

「はい」

「実をいうとピンクは、とんこおつラーメンなるものを食べたことがないんだ」

「そうなんだ。ピンクちゃんとその組織ってやっぱり欧米スタイルなの？」

「うーん。ピンクは箱入りだから専属のシェフがいる感じだった」

「そ、そうなんだ……」

もしかして、ピンクちゃんってお嬢様？

生活に頓着のないドクタースタイルなピンクちゃんだけど、わりとすさまじいお嬢様生活をしているのかもしれない。

「んー。なにか誤解があるようだから言っておくが、シェフといっても中国でいうところの食医に近い。一流のシェフがどうこうって話じゃないぞ」

「食医って？」

「いまでいう栄養士に近い考え方だ。食事も医療につながる。例えばの話。何らかの病気を患っていたとしても、それを改善する食事をすれば治るといふ考え方だな。向こうからしてみれば、ピンクは優秀な装置だから、メンテナンス費用をかけても元をとれるという考えなんだと思うぞ」

「ますますわかんなくなつた」

「ピンクの体の調子にあわせて、いろいろ作ってくれるすごいやつだ」
「なんとなくわかつた」

「ただ、ピンクがヒイロゾンビになってからは、何もしなくても体の調子はあがりっぱなしだから、やることがなくなつたって嘆いていた

ぞ」

「ピンクちゃんは断食動画なんてしないですね！」

飯田さんのコケおにぎり状態が想起される。

あれは痛ましい状態だった。自分で選び取った動画内容だとはいえ、さすがに。

「生存にかかわりなくても食事は生を豊かにするものだと思ってる。ピンクとしてはたとえ食べなくてよくなっても断食とかはしたくないな」

「ピンクちゃんが好きな食べ物は何なの？」

「ハンバーグとか好きだぞ」

お子様だー。ピンクちゃんって天才だけど、それ以外の部分は結構子どもっぽいからな。

豚骨ラーメンは少々敷居が高いかもしれないけれど、これも経験とということで味わってもらおう。

☆Ⅱ

豚骨ラーメンの朝は早い。

というか、ピンクちゃんが来たのって朝の八時くらい。

学校に行く時間と思えば、普通なのかもしれない。大学生くらいの時間帯で生きていると小学生のころよくあんな早くに学校行つたよなっと思うけど。

正子ちゃんたち女子中学生ズはすでに、町役場前のスペースを確保していた。

寸胴鍋を結構ごつい網の目状になっている台の上において、下にはかなりでかいバーナーみたいなのが置いてある。そのほか食材等を適当に並べるために長机。

正子ちゃんと委員長ちゃんは野菜を切ったり、なにかのタレとかを作ってるみたい。

ん。よく見ると、令子ちゃんと早成ちゃんは微妙に離れた机に陣取り、別の作業をしているようだ。中学生四人組だけど、分担作業かな。

「なに作ってるの?」

豚骨ラーメンではないのは確かだ。

なぜなら、フライパンで焼いてるっぽいので、白くてモチモチしてて……これって。

「マシユマロ?」

「そうだね。せっかくだから私もパティシエっぽいことしようと思っ
て」

令子ちゃんの将来の夢はパティシエになることだった。

豚骨ラーメンを作っている正子ちゃんに触発されて、自分もやりた
いってなつたんだろう。

中学生らしい不確かさがあるけれど、だからこそキラキラとしてい
る光属性を感じる。

「焼きマシユマロとチョコレートをクッキーに挟むの?」

「サクサクつとしてておいしいと思うよ」

「お餅みたいにふんにやりにあって、なんかすごく甘い匂いしててお
いしそう」

「天使ちゃんよだれよだれ」

「はっ」

しかし、おいしそう。

豚骨と違い、焼きマシユマロはほとんど時間もかからない。

「食べていいい?」

「つまみぐいは太るよ」「でもヒロちゃんって30キロだよ」「ちよつ
と痩せすぎじゃないかな」「いやそもそもあの時の体重って絶対浮い
てるよね」「うん。たぶんちよつと浮いてる説が正しいと思う」「見た
目からして5キロはサバ読んでるんじゃない?」

「浮いてますかね?」

「むしろ浮いてるじゃん」「ふわってしてるよね」「ヘリウムかもしれな
い」「ヒロちゃんっていくら太っても浮いてごまかせるよね」「ラーメ
ンもカロリーの塊だから気をつけたほうがいいよ」

「ボクは令子ちゃんの夢を応援するものであります!」

「なにそれ」令子ちゃんが笑う。「はいどうぞ」

中学生らしい体重への厳しい批評を乗り越えて。
ボクは焼きマッシュマロサンドをゲットしました。

中からこぼれそうなほど柔らかくとろけそうなマッシュマロ。

「うによーんって伸びるよ」

ちよつとだけ焦げてるのがいい。外側はカリカリしているんだけど、歯を突き立てたらものすごく柔らかい。

「うによーんかわいすぎか」「わたしも一個もらおうつと」「太るよ」「縦に成長すれば大丈夫」「X軸に成長したら悲劇だよ」「甘い罠」「文字通りね」

配給は――。

町役場のみんなに配っている食事は、基本的にはレーシヨンのやつだ。

日持ちのする固形物。

正直なところ味は二の次だった。腐りやすいもの。劣化しやすいものは電気が停められてからは即消費の対象となった。

それから、電気が復活して、町の多くの人がヒロゾンビになって、食事の状況はだんだんとよくなっているみたいだけど、まだまだ今日みたいな本格的な料理というのは行われていない。

食料不足というほどではないけれども、節約したほうがいいレベルなのは確かだし。

ヒロゾンビであっても飢えはするのだから、備えたほうがいいに決まっているからだ。

「よかつたらどうぞ」

令子ちゃんの言葉に反応して何人かの人近づいてきて、焼きマッシュマロサンドを手にしていく。

さて、それからは正子ちゃんの作業を見守るだけになった。

本格的な豚骨ラーメンは数時間もあるいは数日もかけることがあるらしいけど、今回は賄い的な側面もあるから、手早く三時間くらいで仕込みを終わらせるらしい。

スープのコクという意味では時間不足かもしれないけれど、正子ちゃんの視線は真剣そのものだ。

「おやじの味を継ぐとかそんなのは考えてなかったけど——おやじが万が一帰ってきたときに驚かせてやりたいからさ」
かっこいいと思います。

☆Ⅱ

三時間と少し後。

すごくいい匂いがしてきた。いやあ。普通ラーメン店でここまで待つことはないから、もうボクは待ちきれません。あふれ出るラーメン欲で脳みそが満たされそうです。

ラーメン！ ラーメン！ ラーメン！

豚骨！ 豚骨！ 豚骨！

あ、たまには塩もしようゆも味噌も好きですよ。ともかく今のボクは豚骨ラーメンのことでいっぱいだ。限界ギリギリまで『待て』をされた犬の気分だ。

「先輩ってたまに猫なのか犬なのかわからなくなりますよね」

「えー、ボクはボクだよ」

そんなことよりラーメンしようぜ。

「へい。お待ち」

青空の下。

ボクが座っていたテーブルにドンと置かれたのは、まさに恋焦がれた豚骨ラーメンだった。

白濁した底の見えないスープはこつてりとしていて、まさしく濃厚という感じ。

麺は博多ラーメン系列では伝統的な細麺。あ、硬さは『バリカタ』ね。博多ラーメンだったら、ちよつと硬いぐらいがおいしいんだよ。カップ麺で言えば、三分で出来上がりのやつが一分半くらいで茹で上げるのが『バリカタ』だと思う。

正直、ちよつと茹で上がってない感じもして、あとでおなかを壊したりもするけれど、だがそれがいい！ 男は黙ってバリカタを頼んどけ。そう思いたい。

そして、ラーメンの横にすつと差し出される白いお米を見て、ボクは正子ちゃんを心の底から賞賛した。

この子はボクのこころをわかってくれている。

そう、ラーメンとはオカズなのである。博多ラーメンというか九州の北部の県では基本的に麺は替え玉が可能である。替え玉というのはその名のとおり、麺だけのお替りを比較的低料金で行えるシステムだ。したがって、通常は麺にご飯はいらないと思いがち。

しかし実相は異なる。

ラーメンとはオカズであるという認識からは当然ご飯を主食として据えるべきなのだ。

そして気づいたら、ボクはご飯もラーメンも細い体で完食してました。

「ふえあ……なんか豚骨成分キメると頭がぼやーってなるよね」

「先輩が怪しいこと言ってる」

「これで文化がひとつ復活したんだから素直に喜ぼうよ」

「復活したんでしようか」

「ちがうの？」

ボクはラーメンに夢中だったから気づかなかったけど、町みんなは少しだけ遠巻きに見ている、正子ちゃんのラーメンを食べようとしていない。どうしてだろう。

賄いとしてのラーメンなのはわかってるはずだ。

正子ちゃんは少し当惑してて、令子ちゃんたちは慰めている。

どうして？

中学生だからか？ まともな料理が作れないとかそういう評価をされた？

いや、直前に令子ちゃんに対しては普通に受け取っていたよね。

「まさかボクに遠慮してとかじゃないよね」

「先輩に遠慮してではないですよ」と命ちゃん。

「ピンクちゃんは何か知ってる？」

「デマゴーグだ」

ピンクちゃんは冷めた目つきで、町みんなを見ていた。

するりと渡されたスマホの画面には、とある匿名掲示板のスレッドが映し出されている。

※
||

【共存か】 ヒイロゾンビと人間の今後 【隔離か】

1 : 名無しのゾンビ ID : J y H J Y T Z q O

町のみんはほとんどヒイロゾンビになっているわけだが、今後、人間とはどのように接していくべきだと思う？ 正直、恋人が人間のままで辛い。

10 : 名無しのゾンビ ID : W 9 p 5 4 i d Y j

まずお前が爆発するところから始めようか

13 : 名無しのゾンビ ID : J P 8 B K X X N I

その恋人とは、あなたの妄想の産物ではないでしょうか？

15 : 名無しのゾンビ ID : j p 3 E 3 o 1 3 H

思うんだけど『人間』のままのやつらつてズルくね？

あいつら『人間』だから外に行ったら襲われるってことで食料調達もしねーし。役に立たない。生産性がない。怠惰のカタマリ。実際、ヒイロゾンビになるのなんて簡単なんだから、奴らの精神性は汚物の極みだろ。あいつらのためになんで働かにやいけんの？

16 : 名無しのゾンビ ID : q S A q x x O j t

人間のままがいつてやつだっているだろ。選択の自由だ。

23 : 名無しのゾンビ ID : W O i r y + k Y O

選択の自由とか人権とかを言い訳にして、やるべきことをやってないだけ。

26 : 名無しのゾンビ ID : j p 3 E 3 o l 3 H
やつらの自由のために俺らの自由が侵害されてるんだぞ
一人残らず燃やしつくすべき

27 : 名無しのゾンビ ID : d W b T S l e e J
町外から失礼します

正直なところ、ヒイロゾンビにいちはやくなれる皆さんがうらやましいです。

小生住んでるところが九州内でも微妙にハブられている宮崎なのでほんとうらやましい。

37 : 名無しのゾンビ ID : W S O V a / i P 7
新幹線通ってない田舎民は死ぬしかないぞ

47 : 名無しのゾンビ ID : O P 8 e B d i L a
ヒロちゃんかヒイロゾンビのだれかに来てもらえよ。ピンクちゃんが解禁したあとには、たぶん行き来自由だろ。

49 : 名無しのゾンビ ID : e S v 0 h Z J O y
(* 艸) 沼津まで来てくれるのいつかなー。

53 : 名無しのゾンビ ID : C p 3 h J j P P 4
つか、みんな1のことガン無視してるわけだが、1は説得とかけたのか？

58 : 名無しのゾンビ ID : U S H c y X R p r
ㄱ 49

おまえは愛で生存してろ w w w

64 : 名無しのゾンビ ID : J y H J Y T Z q O

説得はしました。

しかし、怖いというよりは『人間』であることの矜持があるから、自分は『人間』でいるんだということを言われてしまって。恐怖とかなら怖くないって言えるんですけど、矜持に対してはなんていえないかわかりません。

68：名無しのゾンビ ID：j p 3 E 3 o 1 3 H

矜持で飯が食えますかって話だよな。

75：名無しのゾンビ ID：h H Z S R p f M i

男性優位が大嫌いなクソソフエミババアじゃね？

85：名無しのゾンビ ID：7 U L s f L p 0 J

ゾンビ映画でババアインパクトしそうな迷惑なやつだなそいつ。やっぱり『人間』は駆逐すべきだよな。一人残らず駆逐してやる！

92：名無しのゾンビ ID：o T J r x U Y j H

おまえらヒロちゃんみたいな末広がりな寛容の心を持ってよとげとげしすぎだろ。このスレ。

99：名無しのゾンビ ID：L n E O Z D E f x

便所の落書きに何言ってるんだ

108：名無しのゾンビ ID：j p 3 E 3 o 1 3 H

おまえらに真実を教えてやる。

ヒロゾンビになったばかりの弱ゾンビ状態だと、『人間』が生来的に持っているアンチウイルス、いわば『ヒトウイルス』に感染するとヤバイぞ。

ヒロちゃんのようなキャリア持ちならいざ知らず、弱い奴らは死ぬ。

1も下手すると死ぬかもしれない。

118 : 名無しのゾンビ ID : DM2LNGo41
なに適当なこと言ってるんだよ。

128 : 名無しのゾンビ ID : 6HzKu3tN
ピンクちゃんが大丈夫だって言ってるから大丈夫だべ

137 : 名無しのゾンビ ID : SvpuX2+5p
ヒロちゃんが涙目で釈明したときに、べつにヒイロゾンビが何人増えても、ただちに影響ありませんって言ってなかったっけ？

142 : 名無しのゾンビ ID : jP3E3o13H
感染症ってやつは、事後性があるんだよ。感染した後の広がり具合やどんなふうウイルスが変化するかなんてわからないだろ。ピンクちゃんやヒロちゃんだって未来のことなんてわからない。俺らヒイロゾンビにとって『人間』を残しておくのはリスクなんだよ。

148 : 名無しのゾンビ ID : CEYk76Wft
即落ちニコマじゃないんだから、お前何言ってるんのかわかってるか？

ヒロちゃんやピンクちゃんもわからないことをなぜおまえがわかってるんだよw

155 : 名無しのゾンビ ID : jp3E3o13H
俺が言いたいのは、リスクマネジメントの話だ。ヒロちゃんやピンクちゃんが今後どうなるかわかってないのは本当だろ。だったら、リスクを考えてリスクを除去するほうが安全じゃないか？

162 : 名無しのゾンビ ID : v0e62viuD
危険かもしれないって理由で人間を襲ったら、俺らマジもののゾンビじゃね？

172 : 名無しのゾンビ ID : b4vrPYGL2
ID 真っ赤にして言われてもなっ感じ

181 : 名無しのゾンビ ID : Lr58Yf5V1
その『ヒトウイルス』とかいうのが弱ゾンビにとつては危険とい
うのは、証拠も何もない、それこそ単なる妄言じゃんか。

190 : 名無しのゾンビ ID : AILj2i1Zb
でも『人間』がちつと邪魔なのは確かよな。自分たちで頑張ろうつ
とときに、ちょっと方向性が違うっていうか。

194 : 名無しのゾンビ ID : 5lWe0tf++
多様性

197 : 名無しのゾンビ ID : NORQlqsjv
人間と暮らしていたら、人間側も不意にヒロウイルスに感染する
かもしれないし、距離をとったほうがいいんじゃないか？

206 : 名無しのゾンビ ID : wx4/XJCwq
このご時世に『人間』のままっていうのは感性がゾンビよりも腐つ
てんだよ。

あいつらがやってることって、俺らの調達してきた物資に寄生して
いるようなもんだろ。あいつらのほうがゾンビじゃんか。

213 : 名無しのゾンビ ID : w72ScvSTs
1はセックスレス夫婦確定

214 : 名無しのゾンビ ID : jwmISUtvD
子どもがいるので少しでも危険だというのなら、できれば『人間』に
はいなくなっしてほしいです

221 : 名無しのゾンビ ID : R9sZLoNS1
人間なのは甘え

227 : 名無しのゾンビ ID : BUebvVugE
やむをえず『人間』のままにいるっていうのならわかるけどね。

例えば町長とかは人間たちと折衝していく役割があるから人間の
ままでもしようがないかもしれない。でも他のやつらは単に動きた
くないだけかもしれないなあ

235 : 名無しのゾンビ ID : oE3AqLWtH

何を信じて何を信じないのも自由だろ。小学生の女の子を信じて、
もてはやするのが正しいとは思わないけどな。ヒロちゃんはかわいい
とは思うけど、ただのぼんこつかわい配信者でいいんじゃないか。

242 : 名無しのゾンビ ID : DGNi8LmDI
だったら、『人間』と距離を置くのも自由なんじゃないか？

247 : 名無しのゾンビ ID : oE3AqLWtH
≪ 242

自由だけど、理性的であってほしいと思うよ。

257 : 名無しのゾンビ ID : xGUfDAw+b
人間は一人残らず抹殺すべき。あ、いや人間としてはって意味ね。

265 : 名無しのゾンビ ID : uSgQs/lsh
ゾンゾンしてきた。

おまえらゾンビより容赦ねーな。

274 : 名無しのゾンビ ID : ZeLofxOkB
でも、そいつが人間でいたいっていうのはただの我儘だろ。

そうじゃないっていうなら、ゾンビの群れに突撃して物資調達してこいよ。

276：名無しのゾンビ ID：GVWUPAX5n
冷静に考えたら、1が紐られている可能性にたどり着いた。

277：名無しのゾンビ ID：pNpV13e06
でもパパ活ではない。なぜなら感染してしまうからな。ハハハハ。

287：名無しのゾンビ ID：aYk7oeU8Q
ヒトウイルスが危険とかいうのは完全なデマだから、みんな騙されるなよ。

嘘を嘘と見抜けないやつは匿名掲示板を使っちゃだめだぞ☆

290：名無しのゾンビ ID：GZZeTcZDs
最後の☆がうざいのでスルーするわ

300：名無しのゾンビ ID：ZGG36aVAd
可能性があるなら、やっぱり怖いよな

309：名無しのゾンビ ID：EfFRQH8ih
恐怖ゆえにヒロゾンビになり、恐怖ゆえに人を避けるか。
どこまでも愚かだな。人間は。

311：名無しのゾンビ ID：Wixkpeuf
そんなことよりラーメン食いてえ。

☆
||

な。なんじやこりやあ！

つまり、この状況は――。
ヒロゾンビによる人間への逆差別が起きている!?

ハザードレベル116

いつのまにか変わっていた。
いつのまにか進行していた。
それは深く静かに潜行する。

——差別。疑念。被害妄想。敵愾心。猜疑心。恐怖。
異なる存在への恐怖。

ひとつの概念が重くなれば、他方の概念は軽くなる。
まさに無意識は物理学。

いや、もうわけわからんからね！

ボク知らんよ。知らんよ？ ほんともう知らんよ？

正直みんなデマに振り回されすぎて思いますけども！

でも事実として、現実として、集合的な意識が傾いたのは確かだ。
要するに——、

町のみんながヒロゾンビになって、人間を虐げるようになってい
た。

いや、正確にはその一歩手前かな。

虐げるというほどではなくて、どう取り扱ってよいか困惑している
というような感じ。

距離感をつかみかねて、だから安全マージンをとろうとしている。

結果として生じた事実。

正子ちゃんが作ったラーメンは町のみんなに食べられることはな
かった。

あえて無理して生存にかかわりがないのであれば、食べたくないっ
て程度。

ゾンビはケガレみたいな思想が逆転して、人間はケガレとなってし
まっている。

しかたがないのでラーメンはスタッフがおいしくいただきました。
スタッフといっても別になんということはない。

神聖緋色ちゃんファンクラブ会員の皆様だ。元宗教団体の信者さ

んたちだ。

ボクが黒といえば白でも黒になっちゃうような怖い集団だけど、アウトオブコントロールというのもそれはそれで怖いので、ファンクラブ会長の乙葉ちゃんに頼んで統制をとってもらってる。いつのまにやら100名ほどに膨れ上がったコアなファンに食べるようにボクが直接『お願い』したんだ。お願いと命令の違いはあいまいだけど、なんかボクがお願いするとうれしげな顔をするので、これでいいのかなあと思ってる。筆頭は荒神神父さん。ひとりで三杯食べてた。食いすぎだろおい！

もちろん、こんなので正子ちゃんの気が晴れるとは思わないけど、ファンみんなはこころの底からおいしいと言ってくれてるようだった。

それだけが救いかな。

……いやいやよくないだろ。

ちよつとみんなひどくないかな。

ボクは人の心はミステリーだと思ってるし、不可侵の自由なものだと感じているけれども、他者に関して不寛容なのはあまりよろしくないと思ってる。

それがデマから生じたものであればなおさらだ。

「ののしりあうのも自由かもしれないよ」

命ちゃんは厳しめなことを言う。

確かにそうかもしれない。

人の自由を最大化するなら、ののしりあうのも、虐げあうのも自由だろう。

ファンのみんなに無理やり食べさせた形になってるし、ボクも同罪だ。

けれど、もう少し『和をもって貴し』となせないのだろうか。

「ねえ。ピンクちゃん」

「ん？」

ピンクちゃんは小さな体でがんばって麵をすすっていた。フォークを使ってパスタみたいにからめとっている。言語を操るのに達者

なピンクちゃんも実際には八歳のアメリカンなわけで、お箸を使うには少々レベルが足りない。

そして正確にいうと、麺を口の中に入れて少しずつ咀嚼している感じだ。欧米の人たちはあまり『すする』という動作がうまくないらしいからね。

もぐもぐしているのが小動物っぽくてかわいい……じゃない。

それも本当だけど、ピンクちゃんにお願いしたいことがあるんだ。

「ピンクちゃんから、みんなの誤解を解いてほしいんだけど」

「誤解というと、ヒトウイルスがヒイロゾンビを害するとかそういう話か」

「そうだよ。それは事実とは異なるよね？」

ピンクちゃんは止めていた麺をずつと口の中に入れた。

もぐもぐする様はやはりリスのようでかわいい。

「ファクトが人間に正しく伝わるなんて稀なことだぞ。むしろファクトは歪められ、真実はムードに押し流される。ピンクとしてはなるようにしかならないと思うぞ」

「それでもお願いしたいんだけど」

「わかった。ヒロちゃんがそこまで言うなら、ピンクは配信するぞ」

「ありがとう」

「ラーメンのお礼だぞ。ピンクは気に入った！ 濃厚でぷにぷにして不思議がいっぱい詰まってる感じだった！」

「気に入ってくれてよかったよ。正子ちゃんも喜ぶと思うよ」

天才児のピンクちゃんならなんとかしてくれるだろうと思います。

☆
＝

二日後。

ピンクちゃんは町役場の会議室の真ん中に陣取り、腕を組んで小さな体を主張している。

まるで、この会議室の長であるかのように、ドクタースタイルで、長いホワイトボードの間を歩き来した。

悩める科学者あるいは先生のような。八歳児だけど。

やがて、時間いっぱいになりました。

ピンクちゃんはふわっと浮き上がり、バンっとホワイトボードを叩く。

その姿は凜として美しい。

ボクは会議室の隅っこで、ピンクちゃんの講義を聴いているだけの生徒です。

ホワイトボードには『ヒロウイルスについて』と書かれてある。さつきピンクちゃんがフワフワと浮きながら書いていた。もうピンクちゃんも浮けるみたい。

『なんか突然始まったぞ』『ラーメンがどうか書いてたが』『ヒロちゃんがいるところで』いじめ”があつたらしいぞ』『人間の飯をヒロゾンビが食べたくないかんとか』『中学から高校までぼっち飯をきわめた俺に隙はない』『わかるー。トイレで飯食うと落ち着くよな』『インとアウトが同時に行える合理性』『おまえらの精神状態おかしいよ……』

ピンクちゃんは少し息を吸った。

空気の中に緊張が混じる。コメントも空気を読んで散発的になった。

会議室の長机に両手をつけて、ピンクちゃんが話しはじめる。

「差別は一種の純粋な殺人のようなものだ。——では殺されるのは誰か。諸君らの中にある輝く断片。寛容の精神、正しい智慧が殺されるのである」

ピンクちゃん、なんかぶつとんだこと言ってる。

その思考はやはり天才のそれで、天空に糸を這わすような、思考をしている。

まあ慣れたもんです。傍らには命ちゃんという事例があるからね。

「先輩がまた私を謎の生命体のように思ってる気がする」

そ、そんなことないけどね。

ピンクちゃんと同じく天才ではあるんだろうけど、天才ってオールラウンダーとは限らずに専門的な場合も多いからな。例えば命ちゃ

んはパソコンとかそういうのが得意そうだし、それ以外のところはわりと普通だ。

対するピンクちゃんは特化型ではなくて、全体的には科学者なんだろうなと思う。

「科学者の使命とは何か、それは正しい知識を積み重ねていくことにほかならない。ゆえに、ピンクは今一度諸君らにヒロウイルスについて正しい知識を披露しようと思う。現時点で人類が持つ最新情報だ！」

ピンクちゃん、赤いペンを持つ。

ホワイトボードの『ヒロウイルスについて』の文字の横に、赤い字で書き加えていく。

すらすらと書かれた文字を見て、ボクは目を見開いた。

そこには『何もわかっていない』と書かれてあったからだ。

並べると『ヒロウイルスについて何もわかっていない』ということになる。

『うそだろおまえ』『わかってないのにヒロゾンビになってるのかよ』『やだこわい』『マジかよ。やっぱ人間と濃厚接触すると危険なんか』『ヒロゾンビになるのもヤバいのか?』『ゾンビルートを進むのも勇気がいるな』

「この言葉には語弊があるかもしれない。我々が経験的に知っているいくつかの事柄。例えば、いま現在人が死ねば漏れなくゾンビになることや、ヒロゾンビになれば、ゾンビ状態から回復させることや操れること、あるいは超能力が身につくことなどはわかっている。しかし——根底にあるヒロウイルスという言葉そのものも厳密に言えば間違いだ。なぜなら、我々はまだヒロウイルスそのものを観測していないからだ」

『あー、そういやそうだったな』『え、そうなん?』『素粒子とかなんとか言ってたやん』『それはヒロちゃんが教えてくれただけであって、人類側が観測したわけじゃないぞ』『じゃあ何かオカルト的な要素でゾンビになってる説もありなのか?』

「ピンクもいろいろやってみた。例えば、素粒子を観測する装置とし

てはシンクロトロンが有名だな。粒子を加速させて、その反射によって分析する装置なんだが、ピンクの血を分析しても何も見つからなかった」

『じゃあやっぱりヒーロゾンビは危険なんじゃね？』『ゾンゾンしてきた』『ある日突然毒ピンがゾンビピンクになる恐怖』『ヒロちゃんも超能力ゾンビになったりしないよな？ 勝てる気がしないんだが……』『可能性というレベルでは、未知の物質はすべて危険だ。コメントに書かれているとおり、ある日突然、ピンクがゾンビになったり、あるいはヒトとの濃厚接触でヒーロゾンビ側が死滅するということも考えられなくはない』

——しかし、とピンクちゃんは述べる。

「現在、20億ほどいるゾンビをすべて駆逐するの？ あるいはおそらくすべての人類が仮称ゾンビウイルスなるものに感染済みであろうことからすれば、ヒトがゾンビに噛まれたり傷つけられたりしなくても、いつかゾンビになってしまう可能性もある。ゾンビウイルスは目に見えない。だからエアロゾル感染の可能性だってある。そもそも観測できていないのだから、どういう物質なのかあるいは波動存在なのか、虚数物質の可能性だってなくはないんだぞ」

『うーん』『言ってることはわかる。でも怖い』『ゾンゾンしてきた』『俺ら普通にヒロちゃんで慣れちゃってるけど、ヒロちゃんも相当謎だよな』『まあ天使だとしてももはや驚かんが』『毒ピンの言ってることはファクトベースってやつだが、マジで可能性少なくするってことを考えると、ゾンビはやっぱり全消したほうがいいんじゃないやね？』『だからそれやってもゾンビウイルスに侵されてたら将来、無事みんな死亡。人類絶滅ルート』『どっちの道が崖下転落かわからんのなら、そのまま現状に甘んじたい』

現状の甘んじたいっていうの、ボクもわかります。

でも……、現実には前に進んでいくものだ。

時間は流れていくものだし、人は変わりゆくものだし。

つまり、現状維持っていうのも、立派な行動で、いつもそれが功を奏するとは限らない。

「諸君らに今一度思い出してほしいのは、ピンクのママが作った計算式だ。このままヒイロゾンビが増えずにいる場合、物流が寸断されているため、ゾンビを殺しつくす前に人類側が餓死してしまう。少人数だけノアの箱舟のように助かるというのなら話は別だが、人類が積み重ねてきた文化や智慧というものは永遠に失われてしまうだろう」

『いやだー死にたくなーい』『ナディアの毒ガス。貝獣物語のバイオベース。やっぱり神様なんていなかったね』『ハイレタハイレタ』『えっ今日は全員人間食っていいのか？』『おかわりもあるぞ』『うめ』『うめ』『うめ』『みんなトラウマがフラッシュバックしちやってる』『選ぶしかないのか』

「諸君らの感じてる恐怖は”死”への恐怖だ。誰もがふとした瞬間に感じるものだ。ピンクだつてももしかしたら明日にはゾンビになって何も考えられなくなってるんじゃないかと思ったりもする。時々怖くなってママのベッドにもぐりこんだりもするぞ……だからみんなの気持ちもわかるぞ」

——しかし、とピンクちゃんは述べる。

「死への恐怖を押し殺してみんなで前に進んでいけたのは……。死ぬかもしれないと思いつながらも昏く得体の知れない大海原に漕ぎ出したりできたのは……。人類が巣穴で震えているだけの野生生物と違ったのは！ 人類が明日の誰かのために行動できるからだ！」

死は個人的な体験だという。

でも、死の向こう側に価値を見出せるのは、自分以外の誰かに価値を見出せるからだ。

ピンクちゃんほっぺが真っ赤です。

ハアハアと息を吸っている。

そして、少し落ち着いてからまた口を開いた。

「ピンクは自分を使ってみた」

その意味をすぐには理解できなかった。

「つまり、当座の問題となっているヒトの成分摂取でヒイロゾンビが何らかのダメージを受けるのか試してみた。簡単に言えば、ピンクの身内に血液を提出してもらって摂取してみた。通常なら感染症の恐

れもあるからおすすめはできない。だが、ピンクはピンピンしてるぞ。ピンクだけに」

『は?』『ピンクちゃんなにやってんの?』『悲報。ピンク吸血鬼になる』『ピンクがピンピンというところに誰か反応してやれよ』『ピンクちゃん死の恐怖を乗り越える』『黄金の精神を發揮する八歳児』『ヒロちゃんびつくりしすぎて固まってるやん』

「危ないかもって思ってるのになんでそんな無茶したの?」

「この二日間の準備期間って、つまり血液テストをしていたのか。」

「いま言ったとおりだぞ。ヒイロウイルスそのものを観測できないなら、実験して生じた事実を積み重ねていくしかない。選択しうる方法としては最善だったんだ」

「大丈夫なの?」

「大丈夫だ。少なくともただちに影響はない。本来的には何十年も何百人もテストしていかないといけないことだが、それは後世に任せればいい。いまはいまできることをやるんだ」

「ピンクちゃんママは何か言ってなかったの?」

「少し怒られたぞ……、ちなみにママも同じ実験をした。ピンクのママは配信的には表に出てないから、弱ヒイロゾンビということになるのだろうが、ママもなんともなかった。したがって、ヒトと接触しても、少なくともヒイロゾンビ側は特段問題ないということになるな」

「無謀な親子!」

ボクはちよっぴり怒ってる。ピンクちゃんのやってることは自分を大事にしてないみたいに感じて。もちろん科学者としての使命感もわかる。でもモヤつとするよ。

元をただせばボクが言ったせいかもしれない。

ピンクちゃんに『事実』を説明してっってお願ひしたから。

「気に病むことはないぞ。いつか誰かがしなければならなかったことだ」

「そうかもしれないけど……なんかほら動物実験とかできなかつたの?」

「ヒイロウイルスはヒトにしか感染しない。だから動物実験自体がで

きない」

んう確かにそうだけど。

「もちろんできる限りの安全策はとった。まずは摂取してしまう前にシャーレの上でヒトの血とピンクの血を混ぜてみたり……。そのあとは、血染めのピンク状態になってみたり……。ともかくできる限りのことはしたんだぞ！」

ピンクちゃんが必死に弁解している。

「わかったよ。ピンクちゃんのほうが専門家だもんね」

それに頑張り屋さんだ。取り組んでる問題はまぎれもなく人類の今後にかかわる貴いお仕事だろうし、ボクの『お兄ちゃん』的な心配なんかちっぽけなものだろう。

それでも、やっぱりちよつとだけ心配なのでした。

☆Ⅱ

それにしても事実って難しい。

科学的な事実というのは検証によって証明されるものだけど、例えば、地球は丸いという自明のことだって信じない人がいるらしい。

今回のピンクちゃんの説明は公平で誠実なものだった。

科学者としては百点満点の態度だろうと思う。

けれど、誰もがピンクちゃんの説明に納得したわけではないらしい。

掲示板では不安が現れていた。

20:【悲報】ヒロウイルスについて何もわからないことが発覚【ピンクちゃんかわいい】 ID:8bEfgsd0Q

いままでなんとなくそうなのかなって思ってたんだけど、

ヒロウイルスについてもヒロゾンビについても、

ゾンビについてすら知らないことだらけだったんだなって。

40:【悲報】ヒロウイルスについて何もわからないことが発覚【ピンクちゃんかわいい】 ID:1I+C9/8px

わからないことがわかった。
スレタイのピンクちゃんかわいいには同意。

42:【悲報】ヒロウイルスについて何もわからないことが発覚【ピンクちゃんかわいい】 ID:qh3x2VSO5
今日もピンクちゃんを心配するヒロちゃんが尊かった。
ついでに、それに嫉妬する後輩ちゃんも尊かった。

50:【悲報】ヒロウイルスについて何もわからないことが発覚【ピンクちゃんかわいい】 ID:d+3JwYZlM
全部仮説仮説仮説で何一つはつきりしたことは言えないとか、科学者つてもしかして無能？

59:【悲報】ヒロウイルスについて何もわからないことが発覚【ピンクちゃんかわいい】 ID:Eluq7udSu
>>50
まずお前が無能。

69:【悲報】ヒロウイルスについて何もわからないことが発覚【ピンクちゃんかわいい】 ID:qnbUYhf2c
観測できないんだからしょうがないだろ。

電子顕微鏡がなかった時代の細菌とかウイルスとか未知の原因だったんだぜ。

脚気が細菌とか思われてたりしてな。

79:【悲報】ヒロウイルスについて何もわからないことが発覚【ピンクちゃんかわいい】 ID:8D/FiJo7A
逆のパターンもあるから怖いよな。

呪いと思われてたら実際は放射能だったとかで早死にした例あるじゃん。

ヒロゾンビがヒトウイルスに感染しないというのも、今すぐには

わからないだけかもしれないし。

85:【悲報】ヒロウウイルスについて何もわからないことが発覚【ピンクちゃんかわいい】 ID:YrGHjj4Nc

人間を差別するのはよくないっていうのは猿でもわかる話だが、実際危険があるかわからん以上はしようがないだろうって思う。

ピンクがわかんねって言うてるんだったら、自衛するしかない。

88:【悲報】ヒロウウイルスについて何もわからないことが発覚【ピンクちゃんかわいい】 ID:UNUEMuV8M

結局は自分の体をつかって実験したっていうのもパフォーマンスだろうしな。

106:【悲報】ヒロウウイルスについて何もわからないことが発覚【ピンクちゃんかわいい】 ID:mVIUuIYc7

配信のときはみんな毒ピンすげえってなってたのに、なんかみんな辛辣だな。

119:【悲報】ヒロウウイルスについて何もわからないことが発覚【ピンクちゃんかわいい】 ID:Y3I2XUPIR

ここ町民ご用達スレだしな。おまえもしかして町の住民じゃないな？

町民以外はかえってどうぞ。

140:【悲報】ヒロウウイルスについて何もわからないことが発覚【ピンクちゃんかわいい】 ID:W3P2hwtoF

正直、ノリでヒロゾンビになっただけで微妙に怖い。

微妙っていうのは、なんかワープ装置使った後に、実は記憶を引き継いでるだけのまったくの別人ですよって言われたときみたいな感じ。

154 :【悲報】 ヒロウイルスについて何もわからないことが発覚
【ピンクちゃんかわいい】 ID : 9h7gEDCd h

>>140

おまえすげえな。ワープ装置使ったことあるのかよ。

165 :【悲報】 ヒロウイルスについて何もわからないことが発覚

【ピンクちゃんかわいい】 ID : kz eT I 4 V V Q

ゾンビに襲われなくなったのはいいけど、

ピンクちゃんやスカイちゃんみたいに人気ヒロチューバーにはなれそうにないので絶望しかない件。

182 :【悲報】 ヒロウイルスについて何もわからないことが発覚

【ピンクちゃんかわいい】 ID : A 6 s Q p E P 7 4

いまそれ関係あるか？ スレタイ見える？

190 :【悲報】 ヒロウイルスについて何もわからないことが発覚

【ピンクちゃんかわいい】 ID : 16 a 6 + d 3 D 9

原始時代はなにもわかっていなかったわけだし、それでもなんとなくこうしたらこうなるっていうのの積み重ねで発展してきたわけだろ。

ピンクちゃんの行動は勇気あると思うけどな。普通に。

203 :【悲報】 ヒロウイルスについて何もわからないことが発覚

【ピンクちゃんかわいい】 ID : 11 Z N d e q / m

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い

い 怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い

い 怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い

い 怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い

い 怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い

い 怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い

い

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い

い

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い

い

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い

い

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い

い

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い

い

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い

い

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い

い

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い

い

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い

い

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い

い

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い

い

怖い怖い

219：【悲報】 ヒロウイルスについて何もわからないことが発覚

【ピンクちゃんかわいい】 ID:QCase82SSG9

途中で柿いが混ざるとる

226：【悲報】 ヒロウイルスについて何もわからないことが発覚

【ピンクちゃんかわいい】 ID：RHp+QHAtP

お前が怖いわ

245：【悲報】 ヒロウイルスについて何もわからないことが発覚
【ピンクちゃんかわいい】 ID：18IuP1IN4

毒ピンは正しいことを言ってるんだけど、事実ってやつに俺らがついていけない感じだよな

正直なところ事実よりも「大丈夫だピンクがなんとかするぞ」とでも言ってもらったほうが安心というか、毒ピンがヒロちゃんといチャイチャしてるだけでよかった気がする。

事実は大事だと思うんだが……事実だけでは生きていけないというか。

☆
||

みんなのころ。

揺れてるなって感じ。スレッドをつらつら眺めながらボクはため息をひとつ。

人のころは事実では動かされないんだなと思いました。

むしろ、ボクとピンクちゃんが大丈夫だよって言ってあげたほうがよかったのかな。

ピンクちゃんは科学者の矜持があるから、そうは言いたくなかったんだらうけど。

揺れてるなあ。

「ん。揺れた？」

いやマジで実際に揺れたみたい。ほんのちよっぴりだけどね。

フルフルって重力に揺らされる感じがした。

佐賀は比較的地震が少ない。

それでもいま、ほんの少し揺れ――。

そう思ったのもつかの間、ものすごい揺れが襲った。

建物がガクガクと震えてるようだ。

まるで恐怖にすぐむみんなの心を代弁しているかのよう。
立ってられない。

「ヒロちゃん。ヤバい。ヒロゾンビが恐怖で共振している！」

「ど、どどど、どういうこと」

ガクガク震える足場。

「お気持ちの問題ってやつだ。ピンクじやみんなを納得させられなかった！」

「先輩、浮いてください」

「えー」

レベテーションしちゃうんですか。

「ここで？ RPGのように浮いて地震を無効化するの？」

みんなは？

「ぎゃああ」「地震。地震だ」「すごい揺れだ」「うわああああ世界のお
しまいだ」「助けてヤダー！」「ゾンビの次は地震かよ」「ああああ。ああ
あああああああああああああああああ」「やだああああああああ
ああああああ」「ママー怖いよー」「いまこそヒロ力を使って浮くと
き」「むりいいいいいいいいー」

揺れがどんどんひどくなっている。いや——、これは傾斜が。

建物が傾いているんだ。町役場はかなり大きな建物なのに。ピサの斜塔みたいに床が傾いていつてる。机や椅子が傾きとともに下のほうに流れて行って、当然ボクらも。

「先輩浮いてください」

もう一度命ちゃんが決死の声をあげる。

ボクは空中に浮きあがり命ちゃんも浮かせて。ピンクちゃんは自前でなんとかできるらしい。

でも、町のみんなは——。町のみんなはほとんど浮けない。

ヒロゾンビはヒロゾンビを認識できるから、ボクはほとんどみんなの居場所がわかるけど人間のままの人たちがどこにいるかはわからない。

誰かが守ってくれることを期待するしかない。

ボクはヒイロゾンビをとりあえず浮揚させた。

「浮けたああああああ」「あ、違うのね?」「冷静に冷静になれ」「ああああ、傾きが」「助けて助けて」「ちよま、オレ浮けないんだけど、早苗早苗助けてくれえ」「死んだら生き返らせてあげるから、とりあえず頭だけは守って!」「こころちゃん! 死ぬ前にちゅっちゅさせてー」「百合だー」「アリだー」「こんなときになにあほなこと言ってるの」揺れが収まったのはそれから二十分後。

建物はなんとか倒壊を免れ、四十度ほど傾いたところで止まった。人的被害は奇跡的になかった。何名かやむをえず人間からヒイロゾンビになったけど、人間のままで死なずに済んだ人も多かった。それはよいことなんだろうけど。

お気持ち斜塔になってしまった町役場。基礎の部分のコンクリートは見るも無残にむき出しになっていて半ばからぽつきり折れている。ぽつきりなんて言い方しているけど、規模からすれば百メートルとか二百メートルとかの範囲にわたってる。

当然のことだけど、こんな斜めってる場所に住んでいられない。町は広がってるから住む場所には困らないと思うけど。

町の中心点が。

みんなの心のよりどころが。

——ぶっこわれちゃった。

どうすんのこれ……。

ハザードレベル117

「人間オジサマ。定型発達者とそうでない者を簡便に見分けるスベをご存じカシラ」

ジュデツカ最高議長のジュデイは、豪奢などいうにはあまりにも武骨で機械的な、寒々しい椅子に座りながら、じつとこちらに視線を這わせてきた。

ぞつとするような蛇の視線だ。

「定型発達者というのはなんですか」

「いわゆる一般人のコト」

「一般人。つまりジュデイ嬢のような天才ではないということですか」

「それが人間オジサマの認識ならそれでもいいわ」

「ふむ。宗教でしようか」

黙ったままのジュデイ嬢。

どうやら正解のようだ。蛇に見つめられたカエルさながらの緊張感であったが、その緊張が幾分緩んだ。続けて口を開く余地ができたというべきか。

「一般人は宗教をいかがわしく思います。つまり、わたしはマイナーな宗教を信じていますといったときに、拒否反応ができれば一般人。そうでなければ、その者は外れた者なのでしょう」

「ある意味正解ネ」

ギシユギシユとした声。

いや、それは完璧に調律された声なのだ。

耳障りはよく、おそらく一般的に言えば美声。

リズムも音感も完璧といって差し支えない。

けれど、わたしにはそれが不気味の谷に落ちこんだ亡者の声にすら聞こえる。

「定型発達者はエデンに住んでるノヨ。彼らが感じる憎悪も嫌悪も愛情も好ましきもすべて加工されている。四方を取り囲まれている籠の鳥。絶対に追い出されることのない桃源郷。ゆえに、定型発達者と

そうでないものを見分ける術は簡単」

少し——時間が止まる。

彼女の思考は光のように速く。

我々常人には及びもつかないものであったが、その出力は人並みだ。

人の身であるがゆえの限界は彼女にも存在する。

けれど——、そう。

彼女の思考は逸脱していた。

それは彼女が生まれながらに天才であることの証左であるのだろう。

ジユデイは言った。

「幸せであるということに良心の呵責を覚えれば定型発達者である」と。

「夜月緋色もそうであるといいたいのですかな？」

「話が早い男の方は好きよ。緋色様はきつと定型発達者なのだわ」

ジユデイはなぜか敵であるはずの夜月緋色を様づけしている。

敬愛の情すら示しているのだ。

私の理解だと、ジユデイは夜月緋色のゾンビがあふれた世界をコントロールできる価値に着目しているのだと思っている。ゾンビがあふれた世界でゾンビから回復できたり操れたりする価値は貨幣的に見てどれだけのものかは想像もつかない。ゾンビがあふれる前の世界で経済を裏から牛耳っていたジユデツカが、その地位が揺らぐのを恐れて、なんとか復権しようとしている。そう考えている。しかし——、ジユデイは単純にそうではないのかもしれない。

凡人の自分には考えもつかないそんな思考が存在するのかもしれない。

ゆえに、私はこう答えるしかない。

「つまり凡人というわけですね」

「そう。エデンに住んでいる天使パライイアのひとり」

定型発達者、つまり一般人はなんらかの枠組みにとらわれているということだろう。

確かにわたしも常識という枠組みに問われている。

すでにジユデツカがバツクについている自衛隊の統率も限界だ。

我々は敗北している。これから巻き返すなどということはありません、前総理大臣の命令の下に集結させた自衛隊を解散させ——夜月緋色にすべてをゆだねてみたくすらあるのだ。

しかし、この目の前にいる齡13の少女は、わたしにはまったく予想すらできない智謀の持ち主である。彼女がそうしろというのであるなら、逆らうことはできない。

おかしなことを述べていると思うだろうか。

聞く人が聞けば、人間清輝は齡13歳の少女にうつつを抜かしているだけのただのロリコンとでもいうような評価になるだろう。あるいは、ジユデツカは経済を牛耳っている。金に目がくらんだと思われるかもしれない。

だが、そうではないのだ。

私は彼女が恐ろしい。だから逆らうことができない。

「オジサマ。自衛隊とかいうオモチャなんてどうでもいいのよ。あの久我とかいうオモチャもそう。オジサマが要らないのなら、ワタシもどうだっていいわ」

「久我は挽回したがっておりますが。ヒロゾンビも殺せると息巻いておりましたよ」

「カワイソウ。戦うことしか知らないのね」

「軍人ですからな」

「それはダレカから認められたいカラ。誰もが持つてるニンゲンの習性ヨ」

「彼なら死すら厭わないと思えますが。例の公海上のヒロウイルスの引き渡しになんとかもぐりこもうとしているようですよ。彼は彼であることを捨てました。その覚悟は並々ならぬと」

「彼がニンゲンである限り、彼は最初から生きてイナイ。所詮は加工された生を生きていると言いつ張っているに過ぎない。死体の——ゾンビの生。彼のタナトスは標本とされ供儀とナツテイル」

「どうか私にもわかるようにご説明ください」

「エデンで遊び足りないのでしょうか。緋色様と戯れたいのでしょうか。その資格があるというだけでウラヤマシク思いますわ」

やはりジュデイの言葉は難しく、私には理解できなかったが、彼女もまた私が理解することを期待してるふうでもなかった。

つまり、ただの言葉遊び——戯言の類であつて、べつにどうでもいいのだ。

結論としては変わらない。

久我はチャンスを求め——つまり夜月緋色を暗殺しようと狙つており、ジュデイ嬢は興味なさげに一任し、私はそれに許可を出した。ただそれだけのことだ。

匿名掲示板である程度混乱させるような電子戦の指示を出してはいるが、あまり意味がない。公式的にはヒロウイルスの配布は間近であるし、世の趨勢は現実主義で彩られている。我々がいくらデマをまき散らそうと、現実の前では意味をなさない。

いや、わずかだが市井の者たちは動揺しているだろう。

世界には天使たちがうごめいていて、彼らは神経症を患っているのだから。^{パラボノイア}

悟りの境地に至るには、人類は幼年期にすら達していないということなのかもしれない。

それすらも、ジュデイ嬢にとってはどうでもよいことなのかもしれないが。

☆Ⅱ

拝啓。

町役場がぶつ壊れました。

いや、正確には壊れたというよりは傾いただけだけどね。あれからピンクちゃんに調べてもらった限りでは、地震は実際にリアルであつたらしい。

きつかけは些細な自然現象。

佐賀県で震度2程度のちよっぴりだけ揺れたというただそれだけのこと。

それが最大拡大化された。

ヒロゾンビたちの恐怖というか困惑というか不安といった、そういった言葉で名づけることのできないマイナスの感情が直列的に共振反応を起こして、その場の現実を著しくゆがめた。

結果として、強固なはずの基礎がうがたれたというか、そんな感じらしい。

奇妙とっていいほどピンポイントで町役場だけが倒壊寸前となっていて、町のほかの建物はダメージひとつ負ってない。

そもそもそんな規模ですらなかったんだ。ちよつと揺れたかなって程度の、そんな地震だった。

ヒロゾンビたちの、もしそうだったら怖いなって感情が増幅された結果なのだろうと思う。

幸いなことに、町役場は完全に倒壊したわけではないし、屋上のソーラーパネルとかもほとんど壊れていない。人的損害もそんなにはなかったし、中の机とかが幾分壊れたくらいだ。

「要するに傾きさえなんとかしてしまえば元通りなわけだよね」

「そうだな。ピンクもそう思う。町役場は象徴的な場所だし、できるだけ早く元通りにしたほうがみんな安心すると思うぞ」

「問題はどうやるかだけど。あ、それとピンクちゃん公海上のヒロウイルス引き渡しの準備は大丈夫なの」

「調整はほとんど済んでるから大丈夫だ。もともとこうなってしまうたのはピンクのせいだし挽回したい。なにかできることがあったら言ってくれ」

「ピンクちゃんが罪悪感を覚える必要はないと思うけどね。そもそも話、こうなった原因はだれのせいでもないと思うし、いつかは地震だって起こってたよ。それがたまたま昨日だったってだけ。自然には逆らえないから」

「ピンクがもうちよつとみんなを説得できていたら違った結果になっていたかもしれない」

「だからピンクちゃんが悪いわけじゃないって」

本当に元の元をただせば、ヒロゾンビを増やしてもいいかって考えたボクのせいだし。

ピンクちゃんに説明を丸投げしたのもボクだ。

「これを元に戻すには、補修というレベルでは利かんぞ」

しかめっ面で厳しい意見を述べるのはゲンさん。どうやら建築関係も詳しいらしい。

素人目にもそうだろうなと思う。なにしろ地面と接している基礎の部分からして中折れしてしまっている状態なんだ。

これをどうにかするには建物自体を一度解体するか、あるいは元の角度まで戻しつつ、基礎を作り直さないといけないだろう。

最初に土台を作るほうがまだ簡単だろうから、壊して作り直すことになるかな。

重機とかも引っ張ってくればなんとかなるかもしれないけど、文明自体が停滞気味な昨今、いったいどれだけの時間がかかるんだろう。

「臨時の町役場をどこかに建て、どうにかこうにかしのいでいくほかないね」

いつものアルカイツクなスマイルを見せたのは、葛井町長。

彼も人間のままなんとか生還できた一人。

いつもの余裕が崩れないのはすごい精神力だと思うけど、昨日は町役場の中でテント暮らした。

「町の中心点が壊れて、みんなもっと不安になってないかな」

不安とか疑問とか、そういうのはどこから去来するんだろう。

この町役場はみんなのこころのよりどころだったように思う。

そしたら、もっと悪いことが起こらないかな。

「先輩が不安そうな顔をしているとみんな心配しますよ」

命ちゃんがボクを励ましてくれる。

「うん。そうだよね」

「それと――、先輩の力でどうにかできませんか」

「え？　これを？」

ボクの目の前にある斜めってる町役場は何トンとかいうレベル

じゃない。

それを超能力で浮かせるなんてできるだろうか。

「もともと比例加算されたヒイロちからが加わった結果です。なので、できない道理はないと思いますけど」

「うーん。ピンクちゃんは どう思う?」

「できるんじゃないか? ただその前に基礎を作り直す準備はしておいたほうがいいぞ」

「基礎工事のやり直しになるわけだから、コンクリートとかを用意する感じだよな」

「日本の建物はあまり詳しくないが基礎部分はアールシーなんじゃないか?」

「アールシーって?」

「リーンフォースド・コンクリートのことだ。要するに高い建物になればなるほど地下深くに杭をうがっているんだと思う。今回その杭の部分が中折れしてしまったわけだから、単にコンクリートを流し込むのではなく、杭の部分をもう一度取りかえる必要があるんじゃないか」

うーむ。まったくわからない。

でも感覚的にはなんとなく理解できた。建物は高くなればなるほど不安定になるから、地下深くに杭を伸ばす必要があるってことだよな。

幸いにして、町役場は三階建てのあまり高くない構造をしている。

だから杭もそんなに長くないんじゃないかな。

「ここは地盤が緩いから杭自体は実を言うとかかなり長い。支持層と違って硬い地層まで届かせる必要がある」とゲンさん。

ふうん。で、結局何が必要なんだろう。

「杭自体は軸となる管とその周りを鋼鉄で覆った二層構造になつとる。そこにコンクリートを流し込むことで摩擦力を増し基礎の部分を動かさんようにしとるわけだ。いまそのコンクリートごと杭が折れているわけだから、いったん杭の部分を抜き出して——杭を入れ替えるという形になる」

理解が追いつかない。

「その杭ってどれくらいの長さがあるの？」

「2、30メートルくらいじゃないか？ ワシも直接見たわけではないからわからん」

「え、そんなに長いの？」

つまり超能力を用いたとしてやることは……。

1、町役場をそつと浮かせます。（何千トンになるのか想像もつかない）

2、基礎部分を固定している杭をセメントごと引っこ抜きます。（大根みたいだね）

3、壊れた杭を補修してもらいます。（それまでの間ずっと町役場を保持！）

4、基礎工事が完了したあと、基礎と町役場を合体させます。（要コントロール）

5、以上。平定。みんな解散！

いや無理くない？

特に基礎工事ってそんなに簡単にできるものなの？

ボクがつい疲れからか町役場の保持をやめたら大惨事だと思うんだけど。

それに基礎の部分と合体させるのって、なんかすごいコントロールが必要な感じだけど、そのあたりは大丈夫なの？

「プラモデルとかで胴体に手とか足をくっつけたりするのは要領は同じですよ」

「命ちゃん、ボクは実をいうと、おつちよこちよいなんだ。つい町役場を逆さにつけちゃったりするかもしれないよ」

「知ってます」

「知ってるんだ……。ダメじゃないか」

「ですが、町のみなさんの不安を早急に取り除きたいと願っている。そんな優しい人だということも知っています」

「命ちゃんの信頼が厚すぎる」

「ピンクもそう思います」

「期待値をあげていくスタイル！」

でも豚もおだてりや木に登るといふふうだ。

ボクもかわいい後輩にできるよって言われたらその気になるのでした。

☆Ⅱ

「というわけで直下型の地震が町を襲ってボクの町の中心点が壊れてしまいました。これを補修していきたいと思います」

ピンクちゃんの組織は本当にすごい。

ボクが思っている以上の速さで——具体的には一日で杭の素材と特殊なコンクリートを用意してくれた。長崎のほうからグルグル回る例のコンクリート車とでかいトラックが何台もやってきたわけなんだけど。

もちろん、ゾンビさんたちをゾンビーフ(挽肉)にしないように、ピンクちゃんが陣頭指揮をとって、ゾンビ除けをしながらやってきたらしい。長崎から佐賀まではぶっ飛ばしてくれば二時間くらいで到着するけどね。

普通に考えたらものすごい費用がかかってないかな。

一日で素材集めてきたのにはもちろん理由があって、公海上でのヒロウイルスの引き渡しがついにあと二日後まで迫っているからだ。世界中の誰もが、やはりなんだかんだいってもゾンビをどうにかできるヒロゾンビは必要不可欠と考えているようで、日本人よりもかなりドライな感じだ。ビジネス的な割り切りというか、情感によるネットリ感がないというか。

まあなんにせよ日本以外の国は、いまだヒロゾンビを持たざる者だからね。

餓えた狼が四の五の言ってられないってことなのかもしれない。

そんなわけで、この工事は一日で終わらせる。

「ピンクもこの町役場でヒロちゃんに会えたからな。なくなっただけじゃないんだ」

あいかわらずピンクちゃんはかわいい。

町のみんなは正直危ないので町役場の敷地から退避してもらつて
る。

そして、命ちゃんはハンディカメラを握ってボクを撮影している。

「先輩、緊張してませんか」

「うん。大丈夫です」

そう——町役場補修配信始まります。

町役場の前の駐車場スペースに張った運動会のように使うような
足の長いテント。

タープテントっていうらしいんだけど、そこでボクは背後にある斜
めつてる町役場を背にして配信作業を開始している。

一応理由もあるよ。ボクはみんなのお気持ちを整流器のように一
定のパワーに変換しているわけだけど、やっぱり直接応援してもらつ
たほうが力は強まると思うわけでありませう。

また、象徴的かつ中枢的な建物が壊れたままだと、ヒイロゾンビつ
てやべえとかなくなってしまいかねないので、ボクがいる限りはそうい
うのは大丈夫ですって言い続けたいといけません。

百聞は一見にしかず。

つまり、配信は事実を伝えるものではなく感情を励起させるもの
だ。

お気持ちウエーブを喰らえ！

『ヒロちゃんのいたところすごい地震だったらしいな』『ヒイロゾンビ
が集まるとレイアース状態になるのね』『レアアース？』『お気持ち
がパワーになるってことね』『まるで魔法ではないか』『ていうか魔法な
んじゃないか』『理論がわからん状態だからな。魔法といっても通じ
るというか』

「えーっと、皆さんが見ているあそこの建物ですが、不幸にも地盤が沈
下してあんなふうになってしまいました。液状化です。たぶん、ぶく
ぶくなつてしまったのです」

『液状化は地震と関係なくないか？』『基礎から中折れしちゃってるか
らたぶん関係ない』『ヒロちゃん様が言うのならそれは関係があるの

です』『液化化現象と地震か……その説明をする前に今の銀河の状況を理解する必要がある』

「銀河はさすがに関係ないかな。えっと、専門用語を使ってしまったけど、要は傾いてる状況をどうにかしたいと思っっています。大したこととはなくてプラモデルをもう一度組み立てなおすみたいない感じだよ』『スケールがでかすぎる』『なんとなく話が見えてきましたよ』『ヒロちゃんの超能力ってそこまでレベルアップしてたのか』『ヒロちゃんにとっては町役場1分の1スケールもオモチャ』『がんばえー』『がんばるよー』」

ピンクちゃんに確認の視線を送ると、親指をあげた。

ボクはうなずいて、力をこめていく。

さすがに感覚的にはかなり重い。ヒロちゃんからの現実浸食能力を使っても、現実原則というものはそこにあるわけで、つまり重量と存在感は動かしがたい『事実』として抵抗している。

むうううううん。

『ヒロちゃんがぶくうってなってるのかわゆ』『白玉団子ちゃんが桜餅に』『浮いちやう。町役場浮いちやう』『みんなヒロちゃんに力を分けてくれ』『パワーをメテオに!』『いいですとも!』

みんなの力が流れこんでくる気がする。

町のみんなも手を掲げてボクに力を送ってくれてるみたい。

ぴきっという音が響いた。

基礎部分と合体していた部分がメキメキと音を立てて浮き上がり、町役場はまるで天空の城のように浮き上がった。

『バルス』『おいばかやめろ』『天空の町役場とかオレ何見てんのかな』『これが現実……現実なのか』『しゅごい』『ヒロちゃんの力んでる顔が正直使える』『ここ老番の超能力だな』『この天空の町役場状態をずっと続けるの? つらくない?』

「んー。思ったより大丈夫みたい。まだ本気じゃないし、工事が終わるまでは何時間でも大丈夫っぽいよ。みんなが力を貸してくれてるからかな。ありがとうね」

町役場は影を作りながらゆっくりと浮いている。

下の部分には地下莖のように伸びた杭が何本も見える。大根みたいにちやんと引っこ抜いたよ。

で、今度はこの杭の部分だけを取り外します。

『空中で杭の部分を取り外しているのか』『なんか建築ゲームしてるみたいな感じだな』『工事費10億円以上はかかってるだろ。それがオモチャ扱いとは』『さすがに基礎工事は他の人がやるんだな』『でもこれは問題だぞ……』『どうした雷電』『これでは間が持たないんじゃない』『間が持たない。』

そうこれは杭を打って基礎を完成させるのにどうしても時間がかかるということだ。

普通は何日も何週間もかかることだと思う。

でも——、コンクリートが馴染むということに目をつぶれば、ヒイロちからで強引に解決できる。要するにコンクリートは無理やり固めます。

それでも何時間もかかるというのが問題といえれば問題だ。

ボクの超能力はずっと想い続けていなければならぬというようなものではなくて、プログラムを走らせてる感じではあるのだけど、さすがに意識がまったく途切れるようなことがあったら落ちちやう。

町役場自体はみんながいなくて浮かせるのはヤバイよねって話だ。かにゲームをしたり歌を歌ったりするのはヤバイよねって話だ。

つまり、ボクは数時間なのかあるいは数十時間なのか、ともかくじっとしていなきやならない。

ただ、

「雑談くらいはできると思います」

『トイレどうすんの?』『まっさきにトイレのことを小学生女児に聞く勇者』『もともとヒロちゃんの力は俺らの計算力なんだろ。べつにトイレとか食事もなんとかなるんじゃないか?』『力技すぎるな』『ヒイロゾンビの可能性が提示されたわけだ。公海上での引き渡しの前に最大のプレゼンになったな』『ヒイロゾンビスゲー』

みんなの恐怖や不安も少しは解消されたのかなって思います。

ただ人間への差別心は別かもしれない。それはゼノフオビア——

異類恐怖症であつて、例えば、自分たちのほうが力が上だということになると虐げてもいいというふうになるかもしれないからだ。

町役場の補修工事は約6時間後に終わった。たぶん異例といつていい速さだと思う。町のみんなも補修工事を手伝ってくれて、最後に元の町役場の姿を取り戻す頃には、みんなで喝采をあげた。

こころの補修もできたのかな。そう思いたい今日この頃なのでした。

ハザードレベル118

「ねえ。マナさん。ボクできることやったよね。みんなのこころの補修できたよね」

「それは世界一甘い食べ物といわれるグラブジャムンより甘いですね。なんならご主人様の後頭部あたりから発せられる甘い匂いよりもなお甘いです」

お家での一幕である。

ボクは中折れしてしまった町役場を補修した。

普通だったら何か月もかかる補修工事を無理やり浮かせることで、なんと一日に短縮したんだ。

みんなもほめてくれたし、町のみんなも喜んでた。

人間を差別するところなんて吹き飛んだと思うんだけど。

「例えばゾンビ的に考えて、首ちよんぱした後にその首を無理やり元に戻してゾンビだから大丈夫といったところでご主人様は信じますか?」

「どうなんだろう。町役場は首じゃないし、事情は異なると思うんだけど」

「同じことですよ。人のこころは思ったよりも可塑性がないということですよ」

「もつとわかりやすく言って!」

「移ろいやすいのですよ。秋空のように」

「そうかもしれないけど、でもこれからヒロゾンビが増えていくわけですよ。いまなんとかしないと、ハチャメチャが押し寄せてくると思うんだけど」

「そもそもピンクちゃんみたいに事実を述べただけでは人のこころは変えられません。結果だけを冷徹に見つめると不安を加速させたのは、**事実**です」

「それはまあわかったよ」

ピンクちゃんのヒロウイルスに対する無知の知というか。

ヒロウイルスについて何もわからない宣言は、科学的事実にとっ

しりと根を下ろした誠実なものだったとボクは思う。

でもその宣言が、みんなの不安を掻き立ててしまった。

ヒイロゾンビは精神的に安定してはいるものの、人間みたいにちよつとしたことで不安になったりするところがなくなつたわけじゃない。

だから、あの地震が拡大化して、町役場を崩壊させてしまった。

「でも、ボクが治したから……ちよつとはみんなも安心するかなつて思つたの」

「ぶくうつてほつぺたを膨らませるご主人様が尊い」

口に手を当てて小刻みに震えてるマナさんが尊くない。

「マナさん。ボクががんばつたんだよ」

抗議の目でマナさんに言った。

「わかりますとも。そのお気持ちはきつと伝わつてると思いますよ。けれど足りないかもしれないね。心のどこかで変わつてしまった自分たちに不安を抱いているかもしれない」

「ヒイロゾンビになつても単に超能力が身につくだけだと思ふんだけどな。正直なところ、なぜみんなが不安なのかよくわからないよ。みんなを動かすだけの感情が足りないの?」

「そういうことでしようね」

「じゃあどうすればいいの。またお気持ち作文を作つて読み聞かせればいいの?」

差別はいけないと思います、というような一文からはじまる感想文だ。

自衛隊の人に対するそれはある程度うまくいったと思ふんだけど。なんだかおバカなことをしているみたいで正直あまり気乗りしない。

「それもひとつの手ですが……そうだ。フリーハグというのはどうでしょう」

「フリーハグ?」

「みんな大丈夫だよ。きつとなんとかなるよと言いなながらご主人様が抱き着いたりするので。人間を差別したらいけないよといいなが

ら身体的接触をします。ああ尊すぎます！　ひとまず隗より始めませんか。つまり言い出しつぺのわたくしめにフリーハグしてみませんか」

「えー、それってマナさんがしたいだけじゃ」

「そんなの……そうに決まっています」

じとー。

ボクは生暖かい目でマナさんを見つめた。

「マナさんってどうしてロリコンなのかな」

「哲学ですね」

「哲学ですか」

もうボクにはマナさんがわからない。

「ただですね」マナさんは真面目な顔になって言う。「ご主人様がこれからどうしたいかというのは少し考えたほうがいいかもしれませんね」

「これからどうしたいかって？　人間と仲良くヒイロゾンビも幸せに生きてほしいなっていう漠然とした感じだけ」

「本来、現実というのはいくつものパラメータがあるわけじゃないですか」

「パラメータ……」

「そうパラメータです。例えば町のみなさんの不安というのもパラメータのひとつです。ご主人様は、ときメモというゲームを御存じですか？」

「話が飛ぶね。知ってるけど」

ボクの11歳くらいの見た目からすれば、かなり昔のゲームだけど、お父さんがやってたゲームの一つにあったよ。恋愛ゲームでパラメータをあげていくやつ。

「そのなかのひとつに女の子の不満度という隠しパラメータがありました。実際には爆弾という形で表示されているわけですけど、このパラメータを無視してクリアはできません。そのほかにも学力、体力、ルックスなどいろいろなパラメータを考えなければ意中の女の子は落とせないわけです」

「ふうむ。つまり町のみんなのパラメータを考えなくちゃいけないってこと？」

「そのとおりです」

両手をあわせてにっこりと微笑むマナさん。

見た目だけならふんわりとした雰囲気のとつてもキュートなお姉さんなんだけどな。

致命的なことにこの人は少女が好きただけの変態なんだ。

「いっぱいパラメータがあつたらどうすればいいかわからなくなるね」

「そうですね。現実をもっと複雑です」

「そういうときはどうすればいいの？ 世界の”虚”を知ってるお姉さん」

コンサルタントというんだかよくわからない職業だつたらしいマナさん。

ボクにはよくわからないことが多くて、周りの人に聞くしかない。

「ご主人様は素直で本当にかわいらしいですね。通常はパラメータが多い場合は、適切なポートフォリオを構築し、それに沿ってロードマップを形成します」

「英語よわわガルだから！ 忬度が必要だから！」

「ご主人様は時々、天然のロリコンキラーですね」

「真面目なマナさんが好きです」
ぎゅ。

はい。ロリコンの前で不必要な発言をしたボクが悪かったよ。

マナさんが満足したのは、たつぷり三十分後でした。

「えーっと、まずポートフォリオというのは、小学生的に言えばランドセルのようなものです。ランドセルのなかにはいくつもの教科書が入っていますよね。どの教科書をいれるべきなのか、優先する順位はなんなのか。どの順番で履修していくべきなのか、そういうパラメータを考えた絵図のことです」

「なるほど……」

全然わからない。

「大丈夫ですよ。考えるべきパラメータはほとんど人間のこと、ヒイロゾンビのこと。物理的なこと。精神的なこと。この四つです」

「それぐらいならなんとかなるかな」

「ヒイロゾンビの精神的な安定は最優先事項でしょうね」

「そうなの？」

「そうですね。だって地震のたびに建物をぶっこわしていたら世界の耐久度をお試しすることになっちゃいますよ。ヒイロゾンビが万人単位になったら下手すると地球自体が壊れかねません」

「マジで？」

「類推ですけどね。百人規模である町役場が壊れるくらいですから」

「やべえ……」

「小刻みに震える幼女もこれはこれで素敵な感じですよ」

「ねえ。マナさんどうすればいいの？」

「だからフリーハグですよ。ご主人様が聖女的ポジションになって、みなさんのこころをまとめあげるしかないです」

「そんな簡単にいうけど、ボクはアイドルでも聖女でもない一般人だから無理だよ」

「ご主人様は立派なアイドルですけどね。ただ、これからのことを考えたらヒロチューバーさんたちのことはもつと気にかけてもいいかもしれません」

「気にかけるって？」

「きやつきやうふふする」

「ごめんマナさん。何言ってるかわかんない」

「要するに、気に入ったヒロチューバー。ヒイロゾンビ達に声をかけて、それらインフルエンサーたちによって、人々のこころをまとめあげる。そういったことがこれからは必要になってくるのではないでしょうか」

「それは洗脳とか誘導とか、ボクがやりたくないことだと思っただけだよ」

「なにが本当の優しさかということですよ」

マナさんの言葉は難しい。

でも——、今日もボクの長い髪の毛はマナさんの手によってきれいに整えられた。

行こう。

出発の時間だ。

ピンクちゃんが待ってる。

ヒロゾンビの受け渡しまであと一日。

ボクは——ピンクちゃんの下へ向かう。

「行ってくるね。マナさん」

「行ってらっしゃいませ。主人様」

よし。今日もがんばるぞい。

☆
☆

うー。緊張する。

公海上のお偉い方さんたちに会うというのも、もちろん原因の一つだけだ。

一番なにが緊張するかというと、ピンクちゃんママに会うことだ。

ピンクちゃんにはよくしていただいと挨拶しなくちゃいけない。

相手がどんな人なのかわからないと緊張する。

ピンクちゃんにボクとの接触を控えるように言われたらどうしよう。嫌われてしまったらピンクちゃんとも会えなくなっちゃうかもしれない。

音のしないへりに乗りながらもボクは緊張で沈黙していた。

「ヒロちゃん？ どうしたんだ」

対面に座るピンクちゃんからいぶかしげな視線が投げかけられた。陰キャ特有のムーブだから気にしないでとはいえるはずもなく。

代わりに口を開いたのはボクの隣に座っている命ちゃんだ。

「先輩はどうやら緊張してるみたいですね」

「これからピンクのママに会うだけだぞ。みんなヒロちゃんのこととは

大好きだから大丈夫だぞ」

「先輩は人見知りなんですよ」

「そうなのか。大丈夫だぞ。ピンクがついてる」

トトトと揺れの少ないヘリの中を歩いて、ピンクちゃんはボクのそばに座った。

横抱きっ。

マナさんがロリコンな気持ちが少しわかる。

「ありがとうね。ピンクちゃん」

「先輩。わたしもわたしも」

横抱きっ。

命ちゃんも抱き着いてくる。

右は幼女に左はJK。隣から漂ってくる甘い匂い。

押し付けられる女の子特有の柔らかさ。

そこになんの違いもありやしねえだろうが。

——ボクはこんらんしている。

それから一時間ほどしてヘリは海上にでた。

長崎の近くだろうか。たくさんの島が見える。

水面がキラキラと輝いて、宝石のようにきれいだ。

周りに船はいない。ゾンビ的世界だと海上に逃げるというのも手だから、船が漂ってるかなと思っただけど、そうではないらしい。

代わりにあったのは巨大な船。

ひととき目立つ灰色のきれいな形をした船だった。

「あれがピンクちゃんのお家？」

「そうだぞ。エセックスクラスCVS—12。」いんとれぴっどだ」

「イントレピッドって確かニューヨークで博物館になってるんじゃないかな」

スカイママという呼ばれ方をしたりして、日本人にとってもそれなりの知名度がある。

「ちがうぞ。日本だって”かが”とか”あきづき”とかあるだろう。

あれは——表にはでていなかった箱入り娘。万能航空潜水艦いんと

れぴつど、だ」

「ん。潜水艦？ あれ潜水するの？」

「そうだぞ」

「波動砲撃ったりしないよね」

「さすがにそこまでの機能はないぞ。クラインシールドを張ったりもできない。ただ潜れるのは本当だ。ホミニスの中枢機関でもあるな」

いまさらながら人類の科学サイドホミニス。

その最高峰機関との評価が伊達ではないということが実感として感じられた。

「すごいね」

「ふふん。人類だってたいしたものだろう」

ピンクちゃんが胸を張る。

ピンクちゃんは既にヒロゾンビだけど、いまだに人類サイドなのは間違いないのだった。

☆
||

いんとれぴつどは空母形態が通常モードのようだった。

甲板は小学校の運動場くらいの大きさがあつて、空母って本当にでつかいんだなと認識させられる。端のほうにはゲームとかで見慣れた戦闘機。ステルス爆撃機みたいな変な形はないみたいだけど、みんなお行儀よく並んでてなんだかかわいい。

ボクわくわくしてきます。

男の子的な趣味としてそういうの好きだったからね。

窓に身をのりだして空の上からガン見してます。

うーん。どの戦闘機もきれいなフォルムだね。

戦闘的合理性は美しさにつながる。空の姫様だよ。

戦闘といえは――、

ポーチの中には一応念のためにデリンジャーって呼ばれるボクの手にも収まるちっちゃな銃は入れています。どうせ戦闘的な意味合いでは念動力のほうが強いとは思っただけど、念には念をいれて。慢心

はダメ絶対、だから。

ヘリは音もなく戦闘機のお隣のスペースに降り立った。すぐにかけてよってくる迷彩服を着た軍人さんたち。髪の色が金髪で青い目をした結構若い男の人だった。二、三人くらいの体制で、彼らが運んできたのは移動式のタラップだ。

ボクたちの能力から考えれば、ヘリから飛びおりるのなんか造作もないことなんだろうけど、賓客扱いらしい。

丁寧にタラップを設置したあとは、一步引いて、きれいな所作で敬礼している。

ピンクちゃんがダッシュで先を行き、ボクの手を引いた。

ピンクちゃん、自分のお家を自慢する幼女らしさがとつてもかわいいです。

抱きしめたいぞピンク。

いかな。どうもマナさんに影響を受けているような気がする……。

いや、このほほえましさは世界レベルだよ。

ボクとピンクちゃんは連れ立ってタラップを降りる。

そのとき、冬の透明な青空にラッパの音が鳴り響いた。

軍人さんは軍人さんでも礼式な服を着た人たちが勇壮な音を奏でている。

ドラクエの勇者になったような気分。

「ヒロちゃん。手を振ってやってくれ。みんなヒロちゃんが来るって知ってから猛練習したんだ」

「え、うん」

ボクが促されるままにひらひらと手を振ると、みんな笑顔でラッパを吹きながら軽い礼をした。

「もしかしたら町役場よりも人多いのかな」

「5000人くらいだぞ」

「ご、5000人もいるの?」

「そうだぞ。みんなヒロちゃんを待っていたんだ」
待っていた。

その言葉がボクの中に響く。

横断幕みたいなのが垂れ下がっていて、「ようこそヒロちゃん」とか書かれてあるし。

少しずつ緊張感というか羞恥というか、心臓が浮き上がるような気持ちになつてくる。

ラッパの音が響き渡る甲板をボクは笑顔のまま歩いた。

手持ち無沙汰な軍属の人。オレンジ色をした服を着たたぶん整備の人。ドクタースタイルな方々。

いろんな人が甲板にできて、ボクを見定めている。

いや——なんかアイドルみたいな感じだ。ボクアイドルしちゃうてる。

これはわりときついぞ。陰キヤ的には限界が。

天真爛漫に妖精みたいな軽やかさで歩いていくピンクちゃんがうらやましい。

えらい人たちの気持ちが少しだけわかってしまった。

顔を口ウで固定するような感じじゃないと無理だ。命ちゃんは——ちらつと振り返ると氷よりも冷たいトゥーランドット姫みたいだった。

命ちゃんもさすがに緊張してらっしやるようです。

「大丈夫だからね」

ボクはピンクちゃんとおつないでるのは逆側の手で命ちゃんを確保した。

つまり、はたから見れば三人娘が連なって歩いている状況だ。

「アメイジング」「オウ。ジャパニーズトウイ」「プレシヤスワンス」

「ワッザ……」「ガッデスマイガール」「ジャパニーズリイジャンル

……」「はー。マジ尊いっす。完璧っす」

なんか変な日本語も混ぜてたけど、おおむね好評のようだ。

ボクたちが向かっているのは空母のちっちゃい管理棟スペース。

ちっちゃいって言うっても大きいんだけどね。甲板が全長300

メートルくらいの巨大さがあるなかで、管理棟にあたる部分はちよこんと突き出てるみたいなものだから、そういう表現をしました。

もちろん、空母の居住スペースは突き出た管理棟ではなくて、たぶん甲板の下が本体なんだろうけどね。向かった先は地下のほうだった。

「もともと空母だから狭いかもしれない」

「え、そんなことないよ」

「クルーズ船とかだったらよかったんだが」

「豪華客船とかゾンビパニック起こったら凄惨なことになりそうだね」

逃げ場所ないし。ゾンビだらけになっちゃいそう。

「まあ実際のところ、豪華客船はほぼ全滅してるらしいぞ。5000人乗ってたらず少なくなるとあの彗星が降り注いだ時点で5000人がゾンビになるわけだ。しかも当初は、ゾンビを撃つていいのかどうかもわからなかっただろうしな。運よく接岸できた船の住民が数人助かった程度じゃないか」

海の上というのはやはり怖い。

ボクとかピンクちゃんは余裕で陸地まで飛んでいけるけど、命ちゃんはまだちよつぷり浮ける程度だ。もしものときは守らないと――。

ピンクちゃんはボクに途中途中にある部屋をボクに見せてくれた。

空母の中なんて見たこともないから、修学旅行のすごい版みたいでウキウキする。

「ここはレストランだぞ。基本的にはビュッフェスタイルで、みんなは好きなやつを食べていく」

空母の中だけど、そこは町役場の食堂並みに大きなスペースだ。

天井も普通に日本のお家くらいの高さはあるし、もしかしたらボクもアパートよりも高いまである。空母だけど、生活スタイルは普通よりいい。

「ピンクちゃんはオーダーメイドだったよね」

「そうだぞ。ピンクの灰色の脳細胞を維持するために、カスタムした食べものを作るすごいやつだ。いまはたぶん昼食を作ってるんじゃないか？」

「豚骨くれた人だよ。あとでお礼いいいな」

「いいぞ。彼は——日本語ができないから通訳しよう」

シエフさんとの邂逅を約束しつつ、次々とお部屋を見せてもらう。歯科さん。トレーニングルーム。娯楽室。バー。大浴場。理容室。リラックスルーム。

ここ本当に空母だよな。完全な軍属とはいいがたいから戦闘以外のところにも大きな力をそいでいるのだろうけど、なんだか遊びの空間が多いような。

「余裕があるところに科学が生まれるんだ」
アッピ

さすがピンクそこに気づくか。

「さすがモモ。そこに気づくか。わたしの娘。天才。かわいい」

通路の奥からすつと姿を現したのは、ピンクちゃんと同じく西洋人顔で、すらりとした体形で、涼し気な青色に銀色が混じったような髪色のドクター姿をした女の人だった。

年のころは20代のように思える。

顔つきは命ちゃんと同じく表情に揺らぎがないタイプ。

「ママ。お部屋で待ってる手はずだぞ」

ピンクちゃんが抗議めいた声をあげるが、

ピンクちゃんのママは何もいわずに足を折って、そのままピンクちゃんをギユ。

「うちの娘がかわいすぎる」

「ヒロちゃんの前で少しだけ恥ずかしいぞ！」

「む。ヒロちゃん……」

「どうも〜ピンクちゃんにはお世話になってます」

「こつち」

「え?」

「こつち来る」

ピンクちゃんを捕獲している片腕がバクンと開いた。

察した。入ってこいという意味だ。

「あっはい」

いっしょにギユつとされてしまいました。

鉄面皮だと思った顔が『く』ってなってるし。

堪能されちゃってるじゃん。
それがピンクちゃんのママ。
のちにヒロチューバーとなる『ピンクママ』との出会いだった。

ハザードレベル119

ピンクちゃんのママにひとしきり堪能されたあと、不意に興味をうしなった猫みたいに、ママさんは立ち上がりクリーム色をした通路を歩きだした。白衣のポツケに手をつつこんで、すたすたと先を歩いていく。

「ついできつ」

ボクはさつきまでの濃厚接触とのあまりの違いについていけない。クールなのかホットなのかよくわからない人だ。

それでも、ピンクちゃんが大事にされていることはわかったけどね。

通された部屋は普通にボクのアパートよりも広く、二十畳くらいはあるスペースだった。いくつか大きくて真つ白な事務机が置かれていて、何人かの人がパソコンとかを触って何やらしていた。ボクたちが入ってくると一瞥と軽く「ハイ」と言われたりしたけど、すぐにお仕事に意識を戻した。

つまりは事務室なのかな。

わりと雑多に物が置かれている。何かの科学の賞をとったのか、金ぴかに光るトロフィー。大きな事務用複合機に、大きな鉄製の書庫。わりとどこにでも置いてそうな何の変哲もないウォーターサーバー。

そして隣に続く部屋をくぐると、ちょうど町役場の町長室みたいな、大きな机が一個だけ置かれていて、その机の上にはかなり大きめの液晶とパソコンが二台ずつ置かれていた。

事務室の隣に所長室があるタイプみたい。

うーむ、なんか所長っぽい感じ。ていうか本当に所長なんだろうけど。

なんとというか存在感が透明で、雪化粧のような色合いをしていて、ボク的な印象としては、もしかしたら失礼な考えかもしれないけど雪女って感じの人だ。銀と蒼が混ざったようなブルーメタルの髪の毛が余計そう思わせるのかもしれない。天然なのかな。ピンクちゃんの髪の毛も天然らしいし、親子ともどもレアな感じだ。

そしてピンクちゃんのママは、黒タイツを履いてるすらりとした足を組んで椅子に座った。

なんというか、すごくえちえちな感じがします。

「先輩……」

「な、なんでもないよ」

最近は小さな女の子ばかり周りにいたから、大人の色香に惑わされてなんかいないです。

マナさん？ 外見はきれいだけどね。あれは変態というカテゴリーだからノーカンだよ。

「もはや先輩のなかではマナさんはヒトというカテゴリーですらなかったのですね」

「そんなこと……あるかもしれない」

だって、得体のしれないことばかり言うんだもん。

ボクたちは、前もって準備されていたのであろう背もたれのついている木の椅子をすすめられた。

二脚ある。ん。ピンクちゃんは？

「モモはこつち」

「ママは甘えん坊だな！」

おなかに押し付けるような形でピンクちゃんがピットインした。つまり、抱っこされている状態だ。微妙に背もたれ部分が倒されていて、ちょうどよい感じに収まっている。やはり堪能されている。

「ヒロちゃんに紹介するぞ。もうわかっていると思うが、ピンクのママだ。ホミニスの所長をしている。要するにこの空母の中で一番偉い」

むふーって息を吐くピンクちゃん。

ママのことを尊敬しているんだね。

「ピンクママと呼んでくれればいい」

ピンクちゃんのママは言葉すくなくに語る。

それにしてもピンクママってまんまじゃないか（激うまギャグではない）。

なんというか自己紹介とかなさらないんですか？

あるいは芸名みたいなものなのかもしれない。

ビッグママみたいな感じで周りにピンクママと呼ばせているのかも。

そんなことを考えていたら、じつと見られていることに気づいた。いかん、こちらも自己紹介しなきゃね。

「えと。ピンクママさん。お初にお目にかかります。夜月緋色です。ピンクちゃんにはいつもお世話になってます」

「神埼命です」

命ちゃんが人見知りムーブで便乗名乗りしてる。

ピンクママさんはいくぶん穏やかな表情になる。

「モモとお友達になってくれてありがとう。モモは同年代の友人がないから。ヒロちゃんがいてくれて、あんなに楽しそうに笑ってるのは初めて見た。本当にありがとう。ママはうれしい」

ピンクママさん、組んでいた足をほどき、ピンクちゃんごと頭を下げる。

ピンクちゃんが小さいからまるで人形みたいだ。

「ボクもピンクちゃんがいてくれて本当に助かってます。今回のことだってボクだけだと收拾できなかったと思うし、頭のいい人たちがいろいろと考えてくれると安心します」

「收拾がつくかは今後の推移次第だ」

「ヒイロゾンビは何名までとか決めてる感じなんですか?」

「人類救済という意味合いで言えば各国2000名程度もいれば十分だ。しかし、おそらくそれでは済まないだろう。ヒロちゃんはヒイロゾンビの数を抑制すべきだと考えるか?」

「うーん」

当事者であるボクが知らないのはまずいかもしれないけれど、政治的な色合いも帯びてる今回のサミットのな合は、ボクがあまり強烈に入りすぎると、いろいろとまずい気もしている。

例えば、各国のお偉いさんがいちいちボクにお伺いをたててくるようになったら、それはそれで面倒くさいなって……。もつとはつきりいうと、町のみんながわりとボクに依存しているような感じがして、

それが拡大化されていくと、なんとというか人類の自立といえますか、そういうのが阻害されるんじゃないかなって思ってたります。

もちろん、見た目小学生のボクに依存するとかそれ自体が変な考えなんだろうけど、なんかそういうふうにいるのまにかなっちゃってるというか、信者さんからすればボクがご神体なのだからそうなるのはわかるんだけど、そうじゃなくても、重力みたいにボクが引き寄せるような感じがするんだよね。

じゃあ最初からピンクちゃんに任せて全部丸投げしてたほうがいいのかということも考えはしたんだよ。これでも無い頭を必死にフル回転させて考えました！ でもあちらを立てればこちらが立たずで、会合に参加するのも参加しないのも一長一短がある。ヒロゾンビが増えるのも増えないのも同じく有利不利がある。他にも宗教観とか科学的事実とか、いろいろいろいろ……考えることが多いすぎた。

考えたんですよ！ 必死に！ その結果がこれなんですよ！

「先輩の頭がプスンプスン言ってる……」

難しすぎてわからんです。目立ちたくないって言いながら、結局は目立つっちゃうなろう系主人公みたいなのが分る。

「ヒロゾンビの数なんて考える必要ないぞ」とピンクちゃん。「国のえらいやつらが勝手に考えればいいことだ。ピンクはヒロちゃんと楽しく配信できればそれでいい」

「モモ。それはなかなか難しいことでもある」

答えるようにピンクママさん。

「ん。ママ。どうしてだ」

ママさんピンクちゃんをくるりと回して抱っここの姿勢になる。

「ヒロちゃんが政治的な立ち位置をまったく求められないということはない。もちろんモモがヒロちゃんの仕事をがんばって肩代わりしようとしているのはわかる。わたしの娘は天使なのはまちがいない。けれど、馬鹿な人間は必ず因果のないところに因果を見るだろう。ヒロゾンビが世にあふれてもあいもかわらずヒロちゃんは中心人物であり続けるだろう。要するに――」

ピンクママは結びの言葉を口にする。

「馬鹿な人間を利口にすることは科学にもできない、というわけだ」
ものすごい淡々とした、肅々とした言い方だった。

ピンクちゃんもわりと近い思想をもつてると思うけど、ママの影響
だったのかなと思う。

「ピンクは少し違うのかなって思ってきたぞ。町のみんなもいろいろ
考えてる。大衆は馬鹿じゃない。地球人類の総体が文化的に未成熟
だとしても、ホミニスにいる人たちと変わらない。つまり大衆は馬鹿
だからヒロちゃんを求めているのではなく、モースのいう全体的社会事
実に基づいてヒロちゃんを求めているんだ」

「モースが申す……」

「先輩……」

いや、モースって誰だよって思ってたね。

たぶんえらい学者さんか誰かなんだろうけど。

ピンクちゃんがなにをどう考えて” 宗旨替え” したのかボクには
わからない。

でも、なんとなくわかることは——いままでピンクちゃんは箱入り
娘だったんだろうなってこと。そんなお嬢様だったピンクちゃんが、
みんなと触れ合うことで変わってきたのかなって思います。

「先輩の影響も大きいでしょうけどね。先輩好みに染め上げてしまっ
たんですよ」

「なんかハーレム主人公みたいな言い方やめて！」

でも、ピンクちゃんはいいい子だなんて思います。これは本当のこと
です。

「大衆が馬鹿だろうがそうでなかろうがどうでもいい。いずれにしろ
今後の推移としてヒロちゃんは求められ続ける。それが問題じゃな
いか？」

じっと吸い込まれるような金の瞳をピンクちゃんと合わせるピン
クママさん。

「ピンクとしては……、少しは自重が働くんじゃないかと思ってる」

「ノー。おそらくヒロちゃんもモモも衆目にさらされることになるだ

ろうと思う。それが心配だ。いままで以上に行動が制限されるかもしれない。ママもそのうち配信して弾除けくらいにはなるつもりだがどこまで制御ができるかはわからない」

「でもピンクはちゃんと配信できてるぞ」

「配信は遊びだ。政治とは違う」

「いつしよだぞ。全体的社会事実だ」

「どうしよう。うちの娘がかわいすぎて反論できない」

ちらつとボクを見てくるピンクママさん。

いやボクに助けを求められましても。

そもそもの話、なんの話をしてるのかよくわからなくなってきたよ。

最初に問題になったのはヒロゾンビの数を抑制するかどうかって話だよ。

ボクの意見がそこで重要になってくるかもしれないってことで、これからあとみんなを無視して楽しく配信だけをしていればいいってことにはならないということママさんは言いたかったのだと思う。

「えつと……、まずヒロゾンビの数についてはボクとしては意見を出さないほうがいいと思います。いわゆるノーコメント戦法でいいか」と

ノーコメもありや。

「ホアイ？　なぜ」

「うーん。やっぱりみんな考えてほしいから」

けっして丸投げではないのです。丸投げでは。

高度な政治的配慮なのですよ。

「丸投げではなく考えた結果なら、それでもよいと思うが……」

疑惑の瞳を向けられるボク。

「大丈夫！　ちゃんと考えました！　考えた結果がこれなんですよ！」

「つまり、ヒロちゃんは政治的なあれこれを……モモが言うところの全体的社会事実を考えないわけではないということですよいか？」

「あの……全体的社会事実ってなんですか」

「……ホミニスは専門的集団だ」ピンクママはボクの知性を探り探り言葉を選んでくれている。「現代社会というのは個別の問題に対して個別の解法を探る傾向にある。文明が成熟してくると学問が細分化され高度になっていくというのはわかるか？」

「わかります」

それぐらい、大学生だったボクなら余裕のよっちゃん（死語）ですよ。

「全体的社会事実というのは横断的かつ包摂的な前言語的背景のことだ」

「ふわあ……」

なんか難しいこと言われると、よくわからんないけど脳内でまったく関係のない、たとえばラーメン天国みたいな妄想がはかどるよね。四角いお餅が、ぎつぎと一糸乱れぬ行進をしながらラーメンのなかにダイブする映像が流れたよ。ラーメン餅絶対おいしいよ。

ピンクママが何かを察したのか、あわてて言葉を追記する。

「つまり、なにもかもが混ざったスープみたいな感じだ」

「なんとなくだけどわかりました」

「これからヒロちゃんが”ヒト”と対話していくということは、法律も文化も文明も言語もあるいは思想もそれらすべてがグチャグチャに混ざり合った状態で目の前に置かれることになる」

「ピンクちゃんが科学的事実を述べてもダメだったもんね。要するにいろんなパラメータがあつて、ポートフォリオの構築を考えなくちゃいけないってことでしょ」

「エクセレント！ すばらしい。ヒロちゃんは私の娘と同じく天才だったのか」

「えへへ……」

マナさんの予習が役にたちました。

「さて、ではヒロちゃんの合意もとれたことだし。ひとまず一つ目の全体的社会事実に向かおうじゃないか」

ピンクママはピンクちゃんをそっと床におろし、机の上においてあつたコールボタンを押した。

「例のアレをもってきてくれ」

「イエスマム！」

応答があった。やっぱりママって呼ばせてた。

「ふえ？」

ボクは当惑気味です。いったいなにが始まるのでしょうか。

☆
||

ドクタースタイルの方々が持つてきたのは、いくつかのハンガーラック。そして段ボール箱。

お部屋の中がすぐにいっぱいになるほどの量だ。

「な、なにこれ」

「みつぎものというやつだな」

ピンクちゃんが念動力を使って段ボールを受け取っている。

「みつぎもの？」

「あるいは賄賂と言い換えてもいい。ヒロちゃんの復興支援に対するお礼という形で送られてきたやつだ」

ピンクちゃんは適当な段ボールを開けて中を見せてくれた。

箱の中にまた箱があつて、マトリョーシカみたいになっている。とりあえず適当って感じで開けた中には、透明色のガラスの箱が鎮座してて、その中には見たこともないような宝石のはまったネックレスが入っていた。サイズは卵大。ブリリアントだかなんだかわからないけど、金色に輝くダイヤモンドだ。もちろん周りの意匠も訳のわからないレベル。

庶民的な感覚のボクでも、背筋がぞつとするようなオーラを放っていた。

「お、お高いんでしょう？」

「うーん。50億円くらいだと思うぞ。戦闘機とかと比べればわりと安い」

ピンクちゃん、適当に取り出して適当にポイって段ボールの中に直接イン！

あばばばば。

「ピンクちゃん雑！」

「うん。あ、そうだな。ヒロちゃんのを雑に扱ったらまずかった。ごめんなさい」

「いや、そういうことじゃないんだけど……」

「こっちは王冠みたいなのが入ってますね」

命ちゃんが開けた箱の中にはまさしくRPGとかでよくある王冠が鎮座していた。

金ぴかだまぶしい光を放っていて、吸い込まれそうな色合いをしている。普通だったら手を触れるのもいとわれるようなそんな歴史の重み、感じちゃいます。

そつと頭にかぶせられて、なんか頭が物理的に重いんですけど。

「あの国は国宝を出してきたか。気前がいいことだ」

ピンクママさんが何か言ってる。

なにか……得体のしれない全体的社会事実を感じる。

「日本は振袖ですか」

あ、これはかわいらしい感じ。他のがゴージャスな中、ボクみたいな小学生ボディで着ていてもそんなに変じゃなさそう。

「お値段は2千万円くらいですかね」

「へえ安いな」

億円とかの単位じゃなくてよかった。感覚がマヒしてくる。

「こっちはドレスもあるぞ。ピンクも明日はさすがにフォーマルな恰好をしなくちゃいけないから、ヒロちゃんにはドレスを着てほしいぞ」

ボクの洋服。マナさんが選んでくれたかわいい服だけど、このままじゃいけないのかななんて。

カジュアルなもこもこなジャケットにミニのプリーツスカート。生足で元気な小学生って感じなんだけど、ダメなんでしょうか。

「礼装は必要だと思うぞ。社会人としての常識だ」

八歳児に社会人としての常識を説かれるボク。

手にもってるのは、ピンク色をした腰にふわんふわんした紐がまと

わりついているタイプのドレスで、ピンクちゃんが着たらかわいらしいだろうなってやつだった。

「要するに、だ——。各国の連中はヒロちゃんが何を身に着けるかに心血を注いでいる」

ピンクママさん、少しため息をついている。

「どんどん国宝クラスのアイテムが送られてきたのだそうな。」

「ヒーロゾンビは勝手に増やせるからボクのことなんかどうでもいいはずなのに」

「どうでもよくないということがこれでわかってもらえたかな？」

ピンクママさんが何を言いたいのかようやく身に染みてきた。

ボクは明日着ていく服を、装飾を、あるいはバッグひとつに至るまで選ばなければならぬらしい。たいして重要なことじゃないかもしれないけれど、送ってきてくれたやつはだいたいが女の子用のやつで、ボクの精神力を地味に削っていくものでした。

カジュアルなのはもう慣れたんだけどね。ごふっ。

ハザードレベル120

いよいよ明日にヒロサミットが迫り、ボクは明日着ていく礼装について考えを巡らせている。

ピンクちゃんが言うには、ドレスコードは社会人としての常識らしい。

いま着ているカジュアルな服装はダメで、ちゃんとした服を着るというのが求められている。

「各国のお偉方からしてみればなんとかして、ヒロちゃんに自国の服装や装飾をしてほしいんだろうな。ちなみに、服装だけじゃないぞ。どこかの国は島の権利をポンとくれている」

ピンクちゃんは何気なくすごいことを言っていないか。

島の権利？

「島って？」

「島は島だ。いわゆる常夏の島的なやつだ。日本語的に表記ゆれがあったか？」

「いや、意味わかるけど意味わかんないよ!」

「すまない。ピンクはヒロちゃんが何言っているのかわかんない」

「ご、ごめん。混乱させるつもりはなくて、どうしてそんな大ごとになってるの?」

というか、一日前になってようやく事態を把握し始めるとは。

ボクってクソ雑魚すぎないか。

「ピンクも言おうかは迷ったんだが、どうせ何をいつても送られてくるのを止めることもできないしな。競売の原理で、みんな競いあうようにいろいろ送られてきたから、一国につき10個までという制限はさせてもらった。この空母がパンクしそうだったからな」

「ふうむ……」

所長室いっぱいに積まれた段ボール箱を見る。

これでもまだ最小限だったのか。

「ヒロちゃんが全部受け取るつもりなら、あとで送付先を教えてください。みんなに伝えておくぞ」

「そんな通販みたいなノリで国宝級送ってこられても困るんですけど」

そもそも頭の上の王冠っぽいのがすでに重い。

スポンとはずし、とりあえず命ちゃんの頭に載せてみた。

「ふう」

「ふうじゃないです、先輩。どうするんです?」

「普通に考えたら、ピンクちゃんから服装は借りて送られてきた装飾品とかはいっさい身に着けないのがよさそうだね。政治のベクトルを感じちゃう」

「ピンクとしてはそれでもいいが……」

ピンクちゃんは何か言いたげだ。ホミニス内に礼装を借りるというのが一番中立だと思うんだけどな。もちろん、みんなの期待を裏切ることにはなるけど、余計な嫉妬とか偏波を生まないほうがいいに決まってる。あそこの国はボクに選ばれたんだみたいなことになってはいけない(戒め)。

「日本はどうする?」とピンクママさん。

あいもかわらずスラリと伸びる足をボクに見せつけてくる。

「日本がなにかあるんですか」

チラチラ見つつ、ボクは言った。

日本から送られてきたのは、他の国に比べたら金額的にはたいしたことのない振袖だったけど、それがどうかしたのかな。

「日本はすでに最大級の利得があるからな。端的に言えばヒロちゃんが在籍しているというのが最大の利益だ。補足的に言えばヒロちゃんが日本語を話しているというのも大きい」

「まあボクってこんな見た目だけど日本人だし」

「他の国はそうは思っていない」

「え?」

「つまり何も身に着けないという状態でもすでに偏りはある。真の公平性というのは満たされないかもしれないということだ」

「よくわかりません」

「ふむ」足をくみかえる動作。「モモ。ヒロちゃんに説明が足りないよ

うだが」

「ピンクはヒロちゃんが来るとは思ってたなかった。町役場が崩れたりいろいろあって大変だったんだぞ。しかたなかったんだぞ」

「言い訳をするうちの娘がかわいい。おいで」

ピンクちゃん再びピンクママさんにピットイン。

腕がシートベルトみたいになる。

落ち着いた後に、ピンクママさんはボクに確認の意味をこめて口を開く。

「国籍はどのように決められるか知っているか？」

「国籍？ えーっと確か出生地主義と血統主義とに分かれていたと思うけど」

両親の国籍に関係なく生まれた国が国籍になるというのが出生地主義。

両親の国籍と同じ国籍を取得するというのが血統主義だったはずだ。

国際法か何かで習った気がします。でも必須科目じゃないのであやふやんです。ふやんふやん。ボクの学問的知識って急速に失われている気がする。そろそろ復習しないとヤバいな。

「エクセレント！ ヒロちゃんは本当に素晴らしいな。大学生並みの知識を持っているとは」

「大学生？ おおっ！」

やった！ やりました！ ついにボクが大学生並みの知識を持っていると認められましたよ。

しかも、人類科学の最高峰機関の所長から！

権威主義万歳！ ヒロちゃん万歳！ かわいいだけのポンコツ小学生ではなかった！

「先輩……」

「なにか興奮しているようだが、話を続けてもよいか」

「はいどうぞどうぞ」

大学生レベルのボクがなんでも答えますよ。

「国籍については血統主義か出生地主義ということになるが、基本的

には血統主義だろうな。なので、血統が不明確というか……種族としてもホモ・サピエンスではないかもしれないヒロちゃんは国籍が不明ということになる」

「ボクって無国籍少女だったんだ……」地味にシヨック。「あ、でもボクの両親って日本人ですよ。だから血統主義的にいっても日本人だと思っんですけど」

「そうなのか？　しかし他国からしてみれば――、いずれにしろ人類離れた容姿に人類離れた能力を持つ異種族という認定が一般的だろう。日本人として認めることはまずないだろうな」

「ボク、宇宙人じゃないんだけど」

「もちろん、ヒロちゃんの気持ちは大きいだろうが、例えばの話。ヒロちゃんを手元に置いておきたい国はたくさんある。たとえば――我が国の国籍を取得してみませんかという話だってありうる。ヒロちゃんがよければすぐにでも他国に国籍を移すことは可能だろう」

「ま、マジですか」

「その一環がさっきのような島をひとつあげるとい話だったり、他にも首都近郊の土地をあげるとい話だったりするわけだ。また、国の名誉大臣的なポストをヒロちゃんのために開けておくとかい話もあった。これはフライングということを取り下げさせたが」

「なんか裏側でとんでもないことが起こっているよ……」

「そんなわけで、日本は世界中からすでに嫉妬されていると思っただほうがいい」

「ボク自身の価値なんかそんなにないと思うんだけど」

「この部屋にうずたかく積まれた金銀財宝がヒロちゃんの可視化された価値そのものだ。そして力は力を生むということも知っていたほうがいい」

「日本の振袖くらいは着ていったほうがいいのかな」

「そうだな。何も身につけていかなければ、日本と懇意の関係なしとみて、各国が招致しようとするかもしれない」

愛国心があるかないかといえば、ありますけどね。

ナシヨナリズム的な強烈なやつじゃなくて、パトリオティズムと呼

ばれる緩やかなやつ。

サッカーとかで自国を応援するような、自然な感情だ。

「うーん。ちよつと考えてみます。明日どうするかだからもう少し時間はありますよね」

「そうだな。期待感は膨らむばかりだろうが、ヒロちゃんの気持ち次第だろう。いざとなれば、モモにもドクタースタイルを貫かせればいい」

ピンクママはそう言って、ピンクちゃんをなでる。

「ヒロちゃんに合わせるぞ」

とはいえ——国際的な取り決めのなかで、ピンクちゃんに恥を欠かせるわけにもいかないしな。

お兄ちゃんとしてきちんと思いたいと思います。

★
＝

日本。

首相官邸。

わたし、本郷撫子（26）のクライアント、つまりこの国の政府を牛耳っている江戸原首相は最新鋭のノートパソコンを人差し指で打鍵していた。

人差し指である。

自然とこぶしを握り締めてしまう。

ブラインドタッチができるようになれとはいわない。

しかし、いまだき人差し指操作というのはどうだろう。

おまえそれ北斗の拳かと言いたい。パソコンの秘孔を突いているのかと言いたい。

言いたいが、わたしはこれでも秘書兼政治家の卵でもあるので、ひとまず黙っている。

いうまでもないがスマホのフリック操作もできず携帯打ち。

見ているだけでもどかしい。

首相はわりとがんばっているほうだとは思う。

本来なら秘書のわたしに任せればよいところを大事なことからご自分でこなしているのだ。

首相はまだ若い。内閣府のおよそ半数がゾンビ化してしまった現在、繰り上げ当選で選ばれたいまだ50代の若手（ ）だ。その50代のおっさんが必死になつて打鍵している姿は哀れというか、ある意味、母性を刺激される奇妙なかわいらしさを有していた。

ただ打鍵している内容は――、

「見て！ ヒロちゃんが踊っているよ！ かわいいね」

何を書いているのだろう。

いや書いている内容をわざわざブツブツ呟きながら打鍵しているので、まるわかりなのだが、わたしの脳細胞が理解を拒んでいる。

江戸原首相、少し消沈した顔で書き進める。

「みんなが自国に招致するので、ヒロちゃんは踊るのをやめてしまいました。おまえのせいです。あゝあ」

「江戸原首相。いったい何を書かれてらっしゃるのですか」

「撫子くん。各国の動きがキナクさいと思わないか」

キリつとした顔は、わりとダンディではあるのだけれど。

「公海上のヒイロウイルスの受け渡しの件ですか」

「そのとおりだ。ヒロちゃんは我が国に在籍している。まぎれもない日本人だ。しかし、各国はそう思わないらしい。アメリカは夢の国の隣の一等地をただでくれてやるという話だし、イギリスはヒロちゃんに爵位を賜るとか言っている！ どこかの弱小国家は王様になってほしいまである。このままでは我が国の至宝といってよいヒロちゃんが他国に奪われてしまう！」

「その結果が、匿名掲示板――ヒロちゃんこれからどうするのすれで、首相自らがデイスることですか」

「撫子くん。なにやら怒っているようだが、これは非常に重要なことだ。みんなヒロちゃんを自国に招きたいと考えている。腹黒どもの探り合いは過熱し危険な領域に突入している。このままではヒロちゃんを誰かに寝とられてしまうかもしれないのだぞ」

「とられてしまうって、オモチャじゃないんですから。夜月緋色さん

は意思ある人間ですよ。彼女は幼いですが自分の意思でこの国にいるわけですから、誰かから招かれたとしてもおいそれと出ていくとは思いませんが」

「わからんじやないか。先のごとはだれにも」

人類が経験したことのない未曾有の危機。

ゾンビハザードを経験した今となつては、生き残った人間はみんな怖いのだ。

いつ絶滅するかもわからない恐怖が、脳の裏側にこびりついている。

その恐怖が、アンチウイルスである夜月緋色を希求するところにつながるのだろうか。もっともそれは、夜月緋色が宣言するとおり、ヒイロゾンビになること、つまり恐怖と同化しようとするところに他ならない。心情的にはいつそ殺してくれという気持ちと同じだ。

「先のごとはだれにもわかりませんが、仮に緋色さんがどこかに行つてしまつても、ヒイロウイルスの手渡しは確実になされるでしょう——さほど困らないのでは」

「そんなことはないぞ。象徴的な権威がいるということは今後の国益、国民の精神的安定性にとつてどれだけの寄与があるか。もし仮にどこかの国に行つてしまった場合、わが国は所詮それだけの国と思われってしまう」

「だったらどうなさるのですか？ 佐賀県を神聖緋色協和国としてお認めになるのですか？」

「それはいいアイディアだな」

この人、頭おかしいんじゃないだろうか。

小学生に一国任せようとしているよ。

いけない。わたしは思考のノイズを消すように努める。

いちおうこの国のトップだということを忘れてはいけない。

反論するなら理的に冷静に。

「あの、夜月緋色さんは自己申告では11歳だったと思うのですが、国の保有する土地を無条件に与えるつもりですか？ 国として分割するとして誰が経営していくのですか。外国が我が国固有の領土内に

できてしまつては問題なのではないですか」

「ヒロゾンビの11歳は人間でいうところの20歳かもしれんのだろ。いわゆる合法ロリというやつだ。それに先にも述べたとおり、ヒロちゃんがそこについてくれるというだけで安心感がまったく違う。彼女はゾンビで、ゾンビは死なない。つまり永遠に生き続けるかもしれんし、最終的には利益のほうが上回るかもしれんぞ」

「小学生に期待しすぎだと思えますが」

「しかし、他国に取られてしまつたら不利益が大きすぎる。いまでさえ、あの町の評価は悪いんだぞ。ヒロちゃんに迷惑ばかりかけて我儘だとな！」

「我儘というか必死なのでしよう。被災者は一日一日を生きるだけでも必死です。なにかにすがりたいとしてもやむを得ないことだと思えますが」

「我が国の評判が落ちてしまう。ヒロちゃんがいるという豪運に恵まれながら、なぜあれだけいろいろと問題を起すのか、これがわからない」

ロマサガやつてんなーと、ぼんやり思う。

ヒロちゃんと話を合わせるため、各国のトップは必死だ。

それは我が国でも例外はない。文化的な素養が近い分、我が国は圧倒的有利だろうが。

ともかく、町の話だったな。

あの町の人間の態度は、客観的にみれば確かにあまり褒められたものではないだろう。緋色さんがいることをよいことに、自分たちはいちはやくヒロゾンビになつて、利益を享受している。のみならず、人間のままでいたいという気持ちを踏みにじり、逆に差別を加えているらしい。

らしい——というのは、実際にそこに行つたわけではないからだ。

「ネットを通じての情報ですから、話半分聞いたほうがよいですよ。緋色さんが何をどう考えているのかは、直接やりとりをしている小山内さんのほうが詳しいのでは」

「おおそうだな。小山内くんのことをヒロちゃんは慕っているからな

！ 明日の会合もきつと小山内くんならいいようにまとめてくれるだろう」

実際に振袖という、相対的に言えば金銭的価値が低いものを送ったかどうかと提案したのは小山内さんのアイディアだった。

夜月緋色という人物を観察する限り。

アンダークラスとまでは言わないが、いわゆる庶民的感觉を有していることは想像に難くない。きつと国宝級の金銀財宝を送られたところで困惑のほうが強いだろうというのが小山内さんの意見だ。わたしもそう思う。

「いずれにしろ明日次第ですね」

「そうだな。明日次第だ――。ところで我が国も美少女を送るべきだったのではないだろうか」

ピンク理論によれば、人気度によってヒロゾンビの強度が変わってくるらしい。

小学生くらいの女の子は人類共通の認識で『人気が出やすい』という傾向にある。かわいらしいし、攻撃性を最も感じにくいからだ。

昔なにかのSF作品で宇宙人が人類にコンタクトをとろうとするときに小学生くらいの女の子の姿をとるといったものがあった。理由は先に述べたように、一番安心するからというのが大きい。

夜月緋色が配信を見る限りでは、わりと一般的性格を有していることから、大多数の人類と感性が同じだとすれば、ひとまず小学生くらいの女の子を使者として送るのは理にかなっている。

ただし、幼女先輩との人的関係のほうが強いだろう。

彼女はわりと大人の男性も好きそうだからというのがその理由だ。小学生女兒にとつてはエレクトラコンプレックスといって、父親と仲が良くなる傾向がある。小山内さんに父親としての面影のようなものを感じているのかもしれないし、下手に美少女を投下するよりもよっぽど効果的と考えてのことだった。いまほとんど開かれなくなった内閣の重要な会議で話し合われた結果が、小山内先輩起用論だったのである。

この国、大丈夫かなとちよつと思う。

「小山内先輩のほうが彼女のパパとして好かれるかもしれませんが」
「わたしもパパになりたいんだが」

日本死ねって思いました。

★
||

オレは意識をもたげた。

船内は狭く、すでに就寝時間。月が頂点あたりにあり、明日は早い。明日がくれば――。

脳裏にめぐるのは、あの闇夜のような存在。

ジユデツカの最高議長。要するにオレのクライアント。

イスカリオテのジユデイとの邂逅だ。

日本内にあるとある屋敷の一室で、オレは心の底から恐怖と安堵を味わった。

闇は安らぎでもあり、安定でもある。

「久我くん。君は何をしに帰ってきたのかね」

傍らに立っていた人間隊長はそう言っておレをさげすんだ目で見ている。

わかっていたことだった。オレは失敗した。町役場で潜伏していたにも関わらず、最後には訳もわからないまま、特に何事もできぬまま排斥された。テロリストとして逃亡するほかなかった。

ジユデツカの立ち位置を悪くしたというのはオレの頭でも理解できる。人間隊長のさげすみや静かな怒りはわかる。だから恐ろしくはない。人が最も恐怖を感じるのには、自分の理解が及ばないときだ。人間隊長の怒りと対比的に、ジユデイは穏やかな風のような状態。怒りもなにも見えない底知れぬ闇をたたえた瞳。

オレは彼女が恐ろしい。

ジユデイは固着した視線でおレを観察している。

心の底までのぞき込まれているようだ。

やがて――、

「あなたの殺意の源流はドコにアルノカシラ」

と、機械じみた質問が飛んできた。

品のいい調度品と白いテーブルクロス。視線は彼女を直接見るところを拒んでいる。

にじみだす威圧感。

「オレは……」

「だっておかしいでしょう。緋色様は何も悪いことはしてナイワ。自らの能力を公表することも、あなたみたいな存在に襲われるかもしれないと思ったのなら、拒んでもやむをないデシヨウ。一か月かそこら遅れたことがそんなに罪なのカシラ」

「彼は自分の妹と家族をその手にかけております」

入間隊長がオレの代わりに言う。

「ゾンビになったのね？」

じわりと闇がにじむ。

そう、オレの妹——久我夏美はまだ10年しか生きていなかった。実家には母親と妹のふたりだけ。父親は早くに亡くして、オレが一家の大黒柱だ。

オレは普段基地に住んで集団生活を営んでいたが、休みには電車で一時間という比較的近い場所にある実家に帰る暮らしをしていた。

あと少して夏季休暇。

その日、突然ゾンビハザードが起こり、オレに与えられた任務は基地内のゾンビの制圧だ。集団生活の隣で寝ていたやつがいきなりゾンビになるような異常事態だったから、ゾンビを駆逐するのに時間がかかってしまった。

家は近いが遠い。

妹や母親と連絡はとれず、どうなっているのかオレが確認できたのは、約一か月後。

「ちょうど夜月緋色が配信を始める一週間前くらいの出来事だ。」

母と妹はオレを盛大に迎えてくれた。どうやら先にゾンビになったのは母のほうだったようで、口元には妹の血がべったりとこびりつき、体にはどこにも損傷はなかった。

代わりに妹は生白い体から腸だけがやけに赤く飛び出していた。

オレはその日、帰る家を失った。

奇妙なほどに精神は安定していて、不思議と悲しいともつらいとも感じなかった。

だから、オレはゾンビを駆逐する日々を送った。何も考えずにただひたすらゾンビを殺して殺して殺して——いや、ゾンビに人格はないから、解体するといったほうが正しいか。

ともかく何も考えずに、ただゾンビを壊した。

ある日、同僚が夜月緋色について話しているの聞いた。

馬鹿な話だった。世界が壊れるときに救世主が現れると信じるよ
うな、そんな何の根拠もない話。

いや、夜月緋色がどんな存在であろうが、どうでもいい。

「どうでもいい?」

「夜月緋色が救世主であろうがなかろうが、オレにとつてはどうでもいい」

「ナゼですか?」

「偶然、やつが配信中に言ったんですよ。『ゾンビとかで大変かもしれないけど、みんながんばろう』と。忘れていた怒りが沸々と湧いてくるのを感じました。なにをこいつは言っているんだ。オレは帰るべき家を失ったんだぞ。おまえになにがわかる。こころがつかろうが、血反吐をはこうが、帰るべき家がない。頑張る根拠がない」

夜月緋色は無邪気に笑っていた。

この世で最も邪悪な笑いだと思った。

ひとかけらの邪気もなく、善意で、善意のかたまりで、ほとんど無意識のように『がんばろう』というようなことを言っていた。

気が遠くなるようなそんな気持ちかわいた。

遠くにおいやっていた現実が、いきなり牙をむき出しにして迫ってくるような感じがした。

がんばろうって、なんだよと思った。

オレはもう帰るべき家がない。服も漫画も、高校のときに少し弾いていたギターも何もかもぶっ壊れて、家ごと火をつけて焼いてきた。オレには何も無い。

何か頑張れる要素がオレにあるのか。

お前は『いっしょに』がんばろうという。

どこまでいっても他人事なのに、神妙な顔をして、ゲームのように遊んでいる。

少し時間が経過して。

夜月緋色がいかに傲慢なのか。安心で安全な他人事というポジションから、一方的に慈悲を与えているのかを知ることになる。

膨れがっていく殺意。

「それがあなたの殺意の源泉ナノデスネ」

オレはうなずいた。

「正直、不幸になってほしい」

偶然、たまたま失わなかったやつらが、夜月緋色をことさらに持ち上げて、神さまのように祭り上げて、それでみんないっしょだ、みんながんばろうなんて世界。ぶっこわしてやりたい。

「オモシロイ考えですこと」

かくして、オレはジュデイに許され。

いま、ヒロウイルス受け渡しのランデブーポイントに向かっている。

「近藤。どうした眠れないのか」

名前と顔を変えて。

ハザードレベル121

ピンクちゃんのママとの話し合いも済み、何を着ていくかとりあえず決めたよ。

やっぱり、振袖くらいは着ていこうかなって思う。それが政治的な傾斜を生むとしても、ボクって日本人だもん。日本びいきしてもいいよね。ピンクママさんの他国はボクを日本人だと思わないって発言に、ちよつとだけ嫌だなって思ったのが理由です。

つまり、ボクは『ボク』だけど、例えば、命ちゃんに慕われていたり、全人類の十分の一くらいにヒロちゃんとして認識されていたりするわけで、そのひとつに日本人という装飾もついていいんだって考えだ。ボクは生身で裸身のボクでいるってことは稀で、大体の場合は社会的な肩書がついてくる。その中で、ボクが好きな肩書をひとつつつ自由にくつつけることの何が問題だろう。

「自分が自分であることに誇りを持つということとは大事なことだ」

ピンクママさんもそう言うってくれた。

それと、実をいうと明日は元旦なのです。つまり今日は大みそかかってことだけど、紅白もガキ使もないと、さっぱり大みそか感がでないよね。だから振袖着てみたいなって。ヒロ友のみんなも喜んでくれるかなって。明日のイベントは配信することになってるから、いままで着たことのない服を着てみるのです。魔改造された浴衣っぽいのは着たけどさ。ガチの本物はさすがにまだない。ウン千万円の着物を着るのも初めての経験だ。

女の子の服ってことに、すこーしだけ抵抗感があるけど、まあボクってかわいいしなと思うと、わりと薄れるよ。自分を客観視すればいい。

そんな感じで決めたのです！

「どうせなら結婚式のようにお色直しするとかもいいぞ」

ピンクちゃんが意見を述べる。

それも考えなくはないけど、振袖って結構装備するのに時間がかかるイメージがあるな。よくわからないけど脱ぐのも同じくらい時間

がかかるんじゃないかと思う。明日はお偉いさんが来るわけで、ボクとしてはさつきとイベント自体は終わらせたいんだ。みんなにヒイロウイルスを渡したあとは、適当に配信して、家に帰りたいです。だって、ほとんどの国が政治的トップクラスの人が来るんでしょ。チートを持ってても小市民なボクはこころが持たないよ。」

「ピンクもヒロちゃんとおそろいの振袖を着たいぞ」

「それは問題ない。モモの分もきちんと送られてきていた。後輩ちゃんの分もだ」

ピンクママさんはピンクちゃんをかいぐりかいぐりしながら言った。

「おお。日本もなかなかやるな。えらいぞ」

ピンクちゃん上から目線で日本をほめる。無邪気なので嫌味はない。ボクとおそろいの服を着たいってところに、ふわっとしたうれしみを感じます。

「じゃあ、ピンクちゃんは振袖ね。命ちゃんはどうする?」

「わたしは遠慮しておきます」

命ちゃんはきつぱりと言った。

「どうして」

「やはり、政治的な傾斜配分が気になりますから。わたしは普通のドレスでいこうかと思っています」

「ふうん。命ちゃんがそれでいいならそれでいいよ」

「ですので――、先輩好みのわたしに染め上げてください」

「ぼ、ボクが決めるの?」

「はい」

うつむきがちに頬を染める命ちゃん。

うーむ。ボクの服飾センスなんて、たかが知れていると思うんだけど。

「あー、ピンクもピンクも選んでほしいぞー!」

じたばたもがくような感じでピンクちゃんと言う。

でも、ピンクちゃんのパパが拘束を強めた。抱きしめた感じ。

「モモ。振袖は日本だけ。日本は奥ゆかしいのか三人分しか送ってき

ていない。つまり、選ぶという能動的作業の余地は残されていない」
「むう……」

ピンクちゃんのほつぺたがフグのように膨らんだ。

ママの前では人並みに八歳児だな。そこがかわいいところなんだ
けど。

「まだまだですね。ピンクさん」

み、命ちゃん様。まさか八歳児と張り合っておられるのですか。

「ヒトは本当に欲しいもののためなら、たとえ相手が幼女だろうと本
気を出すのです」

「命ちゃん。目がこわいです」

野生の瞳ですよ。猛禽類あたりに狙われている小鳥の気分だ。ボ
クに抵抗する術はほとんど残されていない。

あとでめちやくちやコーデイネイトしました。

☆
＝

ピンクママさんといったん別れ。

ボクが次に案内されたのは当然の権利のようにピンクちゃんの個
室だった。命ちゃんの部屋とかにも案内されたことがあるボクだけ
ど、純粋な女の子の部屋に案内されたのってこれが初じゃないか？

ピンクちゃんがさりげに手をつないできた。

ボクをぐいぐい牽引している。

「明日までヒロちゃんと遊びたいぞ」

やはり、かわいい。

ロリコンとかそういうのではなく生物的にかわいいピンクちゃん
である。

「うん。いっしょに遊ぼうね」

「先輩。わたしって純粋な女の子じゃないんでしょうか」

消沈した命ちゃんの声。

「幼馴染の部屋はやっぱりちよつと違うかなって感じがして。べつに
命ちゃんが女の子らしくないとかそんなことを言いたいんじゃない

よ。命ちゃんはボクにとっては家族だから」

「家族ですか。先輩はぬるくてゆるやかではつきりしないフアンシーな世界が好きなんですね」

「ん……。まあそうだよ」

現実はいつだつて峻別する。

生と死。端的に言えば、生が利益で、死が害だ。

そうじゃない世界にボクは行きたかったから。曖昧な世界が好きって言われればそのとおりだ。

でも冷静に考えたらそれってカオスなんじゃないって思うけど。

そんなことを考えながら、ピンクちゃんの部屋に足を踏み入れ、ボクは息をのんだ。

——カオスじゃん。

本当のカオスがそこにはあった。

科学者だし理系だから、なんというか簡素な部屋を想像していたけれど、むしろ雑然とした法則性のないような奇妙さがある。

空母内にしては広く、25㎡くらいはありそうな部屋。

そんな広い空間に、足の踏み場がないくらいモノがおかれている。なんだこれ。キリンのぬいぐるみ？ 棘のついたバランスボールのようなもの。英語か何かで印字された文字が書かれたメモ。分厚い辞書みたいな大きさの本。よくわからない機械。かろうじて雑多なアイテムに埋もれずにいるのは、部屋の端っこに鎮座している大きめのベッドだけだ。

「お……。汚部屋だ」

説明するまでもないけど、汚部屋とは、整理整頓清掃がなされていない汚らしいカオス係数の強めのお部屋のことをいう。ボクもマナさんが来てくれる前は、そこまで綺麗な状態じゃなかったけどさ。さすがにこのレベルじゃなかったよ。

「この配置が最高に使いやすいんだ」

いやいやそれって掃除できない人が言う言い訳ナンバーワンだよ。「掃除とかなさらないんですか？」

なぜか丁寧語になってしまった。

「してるぞ。そこらで自動掃除機が徘徊してるはずだ」

自動掃除機って、あの丸いやつですかね。

そう思っていたら、不意に物陰からウイーンウイーンという小さな音が聞こえてきた。

ボクはそつと視線をやる。

すると、黄色くて小さくて馬みたいに四足歩行している機械と目があった。

モノアイがあやしく赤く光っている。少し突き出た部分がまるで豚の口みたいになっていて、鼻先を近づけるように床を掃除していた。確かにお部屋の中をよく観察してみると、埃っぽくはない。

カシヤンカシヤン言いながら歩いてると、なんとなくかわいらしい感じもする。

でも――。

「災害救助みたいになってるんだけど」

「大丈夫だぞ。物の配置は把握している」

「ウイーン。ウイーン言ってるんだけど」

「静穏設計だ。問題ない」

いや確かにそこまでうるさくはないけどさあ。

「欧米だと、ハウスキーパーを使わない限り、自分の部屋は自分で掃除するということなのかもしれないね。ピンクさんもご自分でという発想が、ああいうロボットを造るってことになってしまうのかも」
命ちゃんがそつと部屋の中に入りドアを閉めた。

ボクはおそろおそろ提案してみる。

「ちよつと掃除したほうがいいんじゃないかなあ?」

「え、そうなのか?」

「ベッドの上くらいしか足の踏み場もないしね。遊べないよ?」

「むう。ピンクはベッドのうえでいっしょに枕投げとかできればよかったぞ。漫画とかでしてるやつだ。それが、いっしょに布団の中にもぐっておしゃべりするんだ。楽しいぞ」

ピンクちゃんって同年代の友達がいなくて言ってたから、そういう普通の遊びにあこがれていたんだろ。とはいえ、ガールズストー

クはボクも初心者ですけどね。

「えーっと、ボクとしてはもう少しお部屋が片付いていないと、そつちが気になっちゃうな」

「そうか……。じゃあ、少し片づけよう」

「ボクも手伝うよ」

「いや、それには及ばない」

ふわりと本やら機械やらを浮かせて、ピンクちゃんが片づけていく。

もうすでに十分なヒイロちからを備えているピンクちゃんなら、そういう片づけ方も可能だと思っただけど、明らかに物の移動スピードが速い。本とかを書棚に片づけるにしろ、すさまじい勢いでマルチタスク処理をしている。あるいは自動的——といった感。

ピンクちゃんの処理能力が速いからかなって思っただけど、明らかに異常なスピードだ。

なんとというか時間が巻き戻るのを見ているみたいだ。

それで、数十秒もしないうちにお部屋の中はきれいに片付いてしまった。

「どうしてこんなに早く……」

「ヒイロウイルスは現実を改変する能力があるからな。例えば、空間配列情報に所与の配置を記録しておくということも可能なのだけだ。つまり、ピンクは元の部屋の状態を記録しておいて、それを展開させただけだぞ」

「ピンクちゃんつてもしかしてボクより力の使い方がうまいよね」

「ピンクにはさすがに町役場を持ちあげることにはできないぞ。ただ、ヒロちゃんも火をおこしたり、氷をてのひらから出して試してみてもいいと思う。いずれこういつた力の方向性も体系化していこうと思うが、科学のようにいつでもだれにでも扱えるわけではないから難しい部分もあるな」

ピンクちゃんはいろいろ試しているんだろうと思う。

ボクはただ単に便利そうだから使ってるだけだ。パソコンがどう動くかわからないけど、とりあえず使っているのと同じ。

ボクってほとんどの場合、サイコパワーで脳筋プレイしているからな。

ライトセイバーもどきを掌から出したりもしてたし、念動以外の現象再現もできなくはないんだろうけど。いまいち、そういった変則的なのは苦手です。

やろうと思えばできるんだろうけど、面倒くさいっていうか。

だって、火をつけるんだったらライター使えよって話で、わざわざ念じる必要性ってないじゃん。

「先輩って勇者ですからね。基本的には回復魔法と雷系しか使えないっていう」

「じゃあ、命ちゃんはなんなのさ」

「うーん」少し考える仕草。「お嫁さんでしょうか」

「そんな職業はないよ！」

ほのぼのとしたやりとりがしばらく続いた。

ちなみに、ピンクちゃんのベッドのなかでイチヤイチャもしました。

☆
☆

結局、ボクたちはピンクちゃんのベッドの上で、トランプしたり、枕投げしたり、ベッドの上で意味もなくぴよんぴよんしたりしただけだった。命ちゃんはさすがに高校生だから恥ずかしがってぴよんぴよんはしなかつたけど、ボクは見た目小学生だ。まったく恥ずかしくない。幼女化しているなんて言わないで。

これもピンクちゃんの情操教育なのです。つまり、ピンクちゃんに合わせたのです。

お兄ちゃんの行動なのです。

「言い訳乙です」

と、命ちゃん。あいかわらずクールな一コマだけど、命ちゃんはボクが頭をくつつけて寝ていた枕をまた吸ってる。何がいいのかボクにはわからないけど完全なヒイロ中毒者です。治療法は残念ながら

確立されていません。

ピンクちゃんもそもそもベッドから起きだしてきた。

「ヒロちゃん。ちよっと相談なんだが」

「どうしたの」

「ピンクは、いままで配信っていうのは一方的な供与と思っていたんだ」

「供与？」

「つまり、配信者側から視聴者へ適当に気が向いたように情報を振り向けるだけのものと思ってた。でも違うんだな。ピンクは——いまむしようにこの時間をみんなと共有したいぞ。ピンクフレンズにヒロちゃんといっしょにいるっていいたいんだ」

この子。かわいすぎませんか。

とりあえず、そつとピンクちゃんを撫でる。

「ピンクちゃんがそうしたいなら、ボクは協力するよ」

特に反論する人もいないので、突発的な配信になったのです。

いつものように命ちゃんに配信用カメラで撮ってもらって。ネット接続は実はこの船ならどこでも常時接続のようです。

『うお。いきなりベッドの中』『甘い空間』『空気がうまいな』『すうすうすうすう』『開幕掃除機やめろ』『かわいい女の子がベッドの中から配信とか最高すぎるやろ』『ぎーこつて言ってく欲しい』『おう。クソ雑魚なめくじはこつちでオレと戯れような』『アッー!』

「えっと、明日にはいよいよヒロウイルスの受け渡しなんだけど記念配信するね。今日は特に何をするって決めてないんだ。雑談しようか？」

『人類の存亡をかけた一日が雑談で消費される件』『毒ピンがヒロちゃんに濃厚接触しているな』『まあすでにインフェクテッドなので問題ない』『ヒロちゃん。いまどこにいるの?』

「いま、ボクがいるのはね。空母の中かな」

ベッドから起きだして、両の手を広げ、ピンクルームを見せる。

雑然としていたお部屋も今では綺麗に整理されている。

壁とかはむき出しの鋼鉄なので、わりと空母っぽい。でもやっぱり

空母なら外に出なきやね。

「ピンクちゃん。外の様子を撮影していい？」

「ん。ちよつと待ってくれ。ママに聞く」

ピンクちゃんがすぐにスマホで聞いてくれた。普通だったら重要機密で、モザイクとかかかりそうなどころだけど、今日は特別らしい。

ピンクちゃんの部屋から甲板までは撮影し放題だ。

『これが最新鋭の空母の中か』『ヒロちゃんもついに欧米進出なんやなって』『ヒロちゃんはオレが育てた』『ガチで国連的な組織にいるんだな』『ゾンビもそうだけど現実味ねえよ』

『どっこい。これが現実なんだよな。みんな見て。甲板ってこんなに広いんだよ。戦闘機もすぐくきれいなフォルムしてるし、おつきいよ』

甲板に出たら、やっぱりその広大なスペースに圧倒される。

端っこにおいてある戦闘機もボクの身長は何倍もあって、白くて流線形のフォルムは見ていて飽きない。隣にいるピンクちゃんがうっすらとほほ笑んでいた。

「みんな、大丈夫だぞ。いろいろ不安はあるかもしれないが、希望はある。明日は今日よりよくなっていく。ピンクはそれを一番に伝える必要があつたんだ」

たぶん、町のみんなに伝え損ねたことをピンクちゃんは後悔していたのかもしれない。

ただ事実を伝えただけで、ピンクちゃんはちつとも悪くないけど、でもその事実だけだとみんなは納得しなかった。

ピンクちゃんはわりとドライな性格をしているけれど、それでも感情という重さを知つたんだと思う。

『なんだ。毒ピンがついに天使に昇格したのか』『控え目についてピンクちゃんにバブみ感じるわ』『朝焼けの水平線を見ると、なんというかただ美しいとしか』

ボクは言う。

「上にいこう」

それは字義通りの意味だった。空中浮揚で空に浮いて、甲板の上空

に躍り出る。

あまり離れすぎると配信ができなくなるけど、ほんのちよつとだけ浮くんだ。

ピンクちゃんは自前で浮けるようだけど、命ちゃんはまだ難しそうなので、ボクが手伝った。

蒼くきらきらと輝く大洋に、大きな船が豆粒のように見える。

人の作り出した英知。世界中の国々から集まってくる船たち。

ここ、いんとれびつどに向かつて、どんどん集まってくるのが見えた。明日までにはまだたくさん集まってくるだろう。小さい船。大きい船。自分の国の国旗を掲げて、こっちに近づいてきている。

「見てどんどん集まってくるよ」

「綺麗だな」「綺麗ですね」

『はえー。幻想的』『空中浮揚撮影とか控え目に言って天使』『後輩ちゃん。しつこくねぶるようにヒロちゃんを撮影するの草』『朝焼けの光つつーことは、ちよつと移動してんのかな』『ランデブーポイントはランダムらしいからな。つつてもそんなに日本から離れてはないっぽいぞ』

あと一日で何が変わるのかはわからないけど、目の前に広がる光景は、燃えるような熱さと峻烈なまでの光の束だった。

世界の始まりは朝焼けに似ていた。

ハザードレベル122

ボクたちは空の上から下の海を眺めていた。

眼下に広がるのは、蒼空と海が混ざったような曖昧な色。

お日様が地平線から登ってきて、水面を鏡みたいに照らし出している。

——まぶしい。

ここから見える船の様子は、ほんの小さな豆粒のような大きさだ。

でも、みんなが集まってくれるのはうれしい。ちいさな力が寄り集まって大きな力になるというイメージは、人間なら誰でも安心するよ
うな気がするんだ。自分が自分でなくなるような怖さもあるけど、大
きな流れに寄り添ってるような安心感というか。

こころがホカホカしてくる。

「ランデブーポイントは近いのかな。結構あったかいね」

「ん。そうだな。だいぶん南下しているはずだぞ」

「受け渡しのセレモニーは、”いんとれぴつど”で行うんだよね？」

「そうだぞ。国の数だけで200近くあるからな。”いんとれぴつど”
の甲板で行うことになってる。みんな要人だから、護衛もつけてく
る。となると、相当な人数だからな。超大型空母の甲板でもギリギリ
のスペースだ」

「要人だけに用心しないとね」

「先輩……そのギャグ、すでに32回目です」

み、命ちゃん。ボクまちがったこと言ってるやないよ。

ていうか、カウントしてるの!?

「ん。それは、ようじんとようじんをかけたジョークというやつだな。

おもしろいぞ。さすがヒロちゃん。日本語がお上手だぞ！ H A H

A H A H A H A

やめてあげて。

ピンクちゃんが全力でほめてくるので、逆に恥ずかしくなるボクで
した。

それからしばらく空の風景を楽しんでいたんだけど、そろそろ話す

こともなくなってきたので、高度を落とすことにした。

風船が空に飛び立つのを逆まわしにするみたいだ、ボクたちはゆっくりと降りていく。

当然、高度が下がるにつれて見えてくる艦容。

空母や戦艦、巡洋艦、揚陸艦に、なんだかよくわからない真四角の船。ハリボテっぽい真つ白い駆逐艦。いろんな形、様々な国のお船が集まっているみたいだ。

その中の一つに、ボクは見知った日本の船を見つけた。

みんなもわりと知ってるかもしれない。護衛艦”いずも”。

オスプレイが乗るとか乗らないとかでニュースにもなったデカイお船。昔でいうところの空母だけど、空母みたいな直線が引かれてるんじゃないくて、ヘリコプターが停まるためのアスタリスクみたいなマークがついているのが特徴です。*なマークね。

「幼女先輩。いるかなあ」

そわそわっ。

「ん。ヒロちゃん。会いにいききたいのか」

「うん」

テレビ会議とかで話したりはしているけど、実際に会うのは今回が初めてだ。

この会合のためにいろいろと調整してくれたみたいだし、お礼も言っておきたい。

明日でもいいんだらうけど、たぶん明日は忙しいだらうしな。

そわそわっ。

「命ちゃんもいいかな」

「先輩がしたいようにどうぞ。幼女先輩のどのあたりが先輩の興味を引いているのかはよくわかりませんが、まさか男の人が好きというわけでもないでしょうし……」

「えー、かつこいいじゃん」

そう、幼女先輩は名前以外はめっちゃかつこいい。

バリトンボイスというのかな、渋い声を聴いてると、なんだかふわふわっつてしてくるし。

FPSもめちゃくちゃ強いし。

なにより、なんだか守られてる感が強くて、つい甘えたくなくなってしまふ。

「日本だけ優先しているように見られるかもしれませんが……」

「んー」ボクは一瞬考える。「いいよ。べつに」

だって、ボクは幼女先輩を実際にひいきしてるんだからね。

日本優先も嘘じゃない。日本だけズルいとか思われて風当たりが強くなったとしても、ボクがやめてねってお願いすれば済む話だ。

「先輩にしてはかなり強引な……よっほど会いたいですね」

「うん♪」

そんなわけで、ボクは高度を落とすし「いずも」の甲板めがけて、ゆったりと降下していくのでした。

★
||

なんで陸自の私が海自にいるのか。

私、幼女先輩こと小山内三等陸佐（出世した）は、ぼんやりと海をみている。

海をかきわけるように進む”いずも”の司令塔に私は所在なくたずんでいる。

そう、所在なく……。借りてきた猫みたいな気持ちだ。

所属が違うんだぞ。おかしいだろ！

と、心の中で叫んだところでどうしようもない。

今は陸だの海だのにこだわっている状況ではないのはわかる。ただし、命令系統が別種の私が海のうえで何をどうこうできるわけもなく、ただただぼんやりと司令塔に座っているだけなのは、運命のめぐり合わせというものを考えざるをえない。あー、海は広いな大きなな。

そもそも私は戦略とか戦術を考えるより、いかに敵の頭を華麗にぶち抜くかを考えるほうが好きな性質だ。戦闘狂ってわけじゃないんだが、要するに考えるより頭を動かすほうが好きなタイプだといえる。

ここに来るまで、いろんなところに根回し根回し根回し根回しの連続で、会議会議会議会議の連続で、押印押印押印押印の連続で、最後のあたりは押印マシーンになったのかと錯覚するほどだった。早くゲームで遊びたかった。

そんなわけでようやく、長かった超連続勤務も終わり、朝焼けの世界が始まる。

暁の水平線に勝利を刻むのだ。

「小山内くん。明日はよろしく頼むよ」

そんな茫洋とした思考をしていると、ようやく一時間前に軍用ヘリでお越しの、江戸原総理が直々に私に話しかけてきた。本来、三等陸佐程度の私に首相が話かけてくることはない。首相はシビリアンであり、国民の意思が化体された存在だ。つまり自衛隊のトップに対して命令できる立場である。

ただこれもまた緊急事態というやつなのだろう。

「小山内先輩。明日は緋色さんの歓待。何卒宜しくお願い申し上げます」

最近、政治家秘書に転向した撫子くんが綺麗の一礼した。

彼女のおかげで、私の意見が通りやすくなった面は大変ありがたいのだが、しかし、私に押し付けられた役割は、ヒロちゃん係だった。

正確には、特殊災害対策本部夜月緋色歓待係。

ペットじゃないんだからさとは思うものの、いま世界のどの国を見渡してもヒロちゃんをないがしろにする国はないだろう。

彼女の気分ひとつで世界は滅びるかもしれないのだ。いや、私自身は彼女が世界を滅ぼすような悪性は持っていないと信じていることができる。

しかし、ヒロちゃんに直接かかわっていない者たちは、その有している利益や力のあまりの強力さに、恐れおののいているのだろう。情報非対称性が対象の評価を誤らせているのだろうと思う。ヒロちゃん自身は……そうだな、例えば、世界に好奇心半分恐れ半分子猫ちゃんという感じだろうか。

やはり、ヒロちゃん係は正しいネーミングかもしれない。

と、そのとき。

司令塔がにわかに騒がしくなった。

「ん。あれはなんだ？」「人？ え、まさか」「鳥だ！ 飛行機だ！ ヒロちゃんだ！」「え、どこでありますか」「天使のヒロちゃんを発見！」「ただちに目標地点に向かい、周辺を清掃しろ」「了解！」「ハイ……ワカリマシタ」「全軍。清掃開始！」「突入せよおおおっ！」

は？

ヒロちゃんやってきちゃったのか。

「天使！ 直上！」「うそだろ。マジで空飛んでるよ」「この距離から見ても美少女だな」「みえ……みえ」「おまえ小学生の何を見ようとしてるんだよ」

人影は三人。

ヒロちゃんとピンクちゃんと後輩ちゃんだな。ゆつたりと円を描くように、空を旋回する鳥のように、舞い降りてきている。時間をかけているのは、私たちを驚かせないようにする配慮だろう。

五分くらいかけて降りてくるつもりだな。

オレはさつきも述べたが、陸自であつて海自じゃないので、命令する権限はない。

ヒロちゃん対策係としてワンマンアーミーを求められているので、特にするものもない。

いや、とりあえず首相には聞いておくか。

「どうしますかね？ 江戸原首相」

「な、なにを言ってるのかね。君。これはすさまじい僥倖だぞ。いまますぐ配信だ。全世界に我が国とヒロちゃんとの友好を見せつけたまえ」

「あー、はい」

なんとというか、大人の事情というやつで。

撫子くんを横目で見るが、彼女は首を振った。是非もなしか。

「着艦が近いぞ！ 急げ！」「大丈夫だ。問題なああああ！」「小官も清掃係に！」「ダメだ！」「ダメだ！」「ダメだ！」「対空警戒対空警戒」「進路090。高度505」

ほとんど意味もなく飛び立つへり。

おそらく上空から降りてくる様子を撮影するつもりだろう。

撮影許可とってるのか。

空母の甲板をスクラブするように磨きをかけ、どこかから持ってきたレッドカーペットが甲板の上に敷かれていく。連中本気すぎるだろう。

どんだけ歓待したいんだ。

双眼鏡で覗いてみると、案の定、困惑した顔になっている。

「しかたない。行くか……。首相はどうなされます」

「小山内くん。こんなチャンスはめつたにない。行くに決まっているだろう。ヒロちゃんはサミット前に、特別に！ 我が国のところに来てくれたんだぞ！ わかるか。この意味！ ああ、ヒロちゃん！ パパがいま会いにいきます！」

唾が顔まで飛んできた。この人、ゾンビウイルスに感染していたら、オレも感染してただろうな。

撫子くんの顔をみる。

やはり、首を横に振った。

この首相、本当に大丈夫なんだろうか。

いささか失礼なことを考えつつ、私たちはヒロちゃんを歓待しに甲板へ降りて行った。

☆
||

いやあ眼福眼福。

ガンダムとかそういうのと同じで、でっかい機械が動いているのを見ると、それだけでなんか楽しいって感じわかるかな。

実をいうと”いずも”の甲板は全稼働式になっていて、なんとというか船体自体が巨大なエレベーターみたいになっているんだ。つまり、甲板自体がせりあがって、立体駐車場みたいな感じでヘリコプターを外に出したりするんだ。

向こうも突然来られたら困るかなと思って、ゆったり旋回しながら

降りてたら、なんかその駆動部分がせりあがってたくさんの人がわらわらでてきて甲板を掃除しはじめた。草刈り機みたいな、たぶん甲板を掃除する機械が一行になって、甲板を磨き始めたんだ。なかには竹槍で特攻するみたいにモップで磨くという原始的な行動をしている人もいた。

そのあとは灰色の甲板にモフモフとしたレッドカーペットが敷かれた。

いまは、ヘリコプターは二機ほど甲板に停まっていて、三機が上空を飛び、ボクたちのことを撮影している。甲板自体は駆動しておらず、まっ平に戻り、たぶんほとんどみんなが甲板に出て、ボクの到着を待っている。

もう数十メートルくらいの高さです。

ボクは空気が読める子ですから、あちらの準備が終わるのを待っていたのです。

「帽ふれー！」

なんだか偉そうな人が、声をあげた。

一斉に、みんなが帽子をぬいで、帽子を持った手を振っている。

いささか過剰ともいえる歓待っぷりにボクはちよっぴりビビってしまった。

幼女先輩に会いに来ただけなだけだな。

とはいえ、これで準備完了かな。

すたんっ。

降り立ちました。

レッドカーペットは足が沈み込まない程度に柔らかく。

両隣に配置されたトランペット部隊がやっぱり勇壮な音楽を奏でる。

「生ヒロちゃん……ああっ」「このあと握手してもらえっかな」「後輩ちゃんと手をつないでいるのてええ」「日本の夜明けは近いぜよ」「ピンクちゃん。ちっちゃい。かわいい」

そして、カーペットの向こう側には、ボクの見知った顔。

幼女先輩が待っていた。

「やあ。ヒロちゃん。元気してたかな」

「元気してましたー♪」

洪い声で、脳を揺さぶれてる感じがします。

幼女先輩の声、溶かされます。ふにゃん。

「元気そうでなによりだよ」

「フライング気味で来ちゃってごめんなさい」

「謝ることはないよ。もともと私たちがお願いをしている立場だ」

「ヒロウイルスについては、ボクが広めるんじゃないで、国が主導したほうがいいに決まってますから、お互い様だと思います」

「そう言ってくれて助かるよ。あと、ひとついいかな」

「ん？ なんですか」

「いま、私たちのやり取りは全世界に衛星回線を使って放送されているんだ。これこそまさにフライングなんだけどね。私の権限では止めることができなかったんだ。厚かましい願いになってすまないが、差し支えなければこのまま続けていいかな」

「いいですよ。うん」

「先輩が、幼女先輩にグラブジャムンよりも甘い態度とってる……」

世界一甘い食べ物だっけ。

そんなに甘いかな。なんというか、ボクのことを考えてくれてる大人な態度に対して、ボクも誠実な態度をとろうとしているだけなんだけど。

決然と、ボクはうなずいだ。

うん、社会的動物である人間として、社会的な態度をとっただけだよ。

なにも変なところはない。

「先輩って……」

「えつとお」ボクはことさら大きな声でいう。「お隣にいるのは誰ですか」

見た感じスーツ姿で縁のある眼鏡。白髪混じりの髪の毛で、スーツ姿。

普通の人よりもわずかに清潔感があるけど、普通のおじさんって感

じだ。

そして、その隣にいる人は、マナさんと同じくらいの二十半ばくらいのお姉さんって感じの人だ。なんというかシュツとしてて、冷やっこい感じ。命ちゃんタイプかな。

「紹介してもいいかな」

「いいですとも！」

幼女先輩の声に反射的に答えるボク。

どうやら紹介してもらえるらしい。

「こちらの方が、現日本の首相。つまり内閣総理大臣だね」

「江戸原です。よろしくお願いいたします」

落ち着いたボイスで差し出される右手。国のトップということに緊張するかなって思ったけど、そうでもなかった。それは——ボクがこの人を知らなかったからだ。

家にテレビもなかったボクは、国会中継とかも見たことない。ネットで、さすがに首相の顔くらい知ってたけど、この人は新しく首相になった人っていうことだし。前総理はゾンビにモグモグされたって話だし。つまり、えらい人って言われてもピンとこなかったんだ。

人好きのする、普通のおじさんって感じ。それにボクのこと好きそう。ナルシストっぽいなと思いつつも、なんとなくそんな感じがする。

うん。ボクもちゃんと握手できました。

「夜月緋色です。よろしくお願いいたしますー！」

パシャパシャとカメラのフラッシュがたかれる。

これって、新聞とかに一面トップで載るやつだ。新聞なくなってるけど！

たぶん、厚労省のトップページとか、いや官報とかに載るのかな。幼女先輩がカメラを指さしたんで、よくある国のトップどうしがやるみたいに握手したまま、カメラに笑顔をふりまいた。

『歴史的瞬間キタ』『ちよつと日本だけズルくないすか?』『はー、マジ日本。パールハーバーのときと同じかよ』『センシティブ発言やめろw』『日本のフライングに対して、我が国は遺憾の意を表明するー!』

『ちよつとお。日本！』『ヒロちゃんが来てくれてひとまず安心するところだろ』

なんだろうなって思ってた背後に置かれた超巨大モニターから、いつもの配信みたいみんなのコメントが流れた。デカいと圧倒されるな。普通に映画のスクリーンくらいある。

言うまでもないけど、これは正確にはボクのチャンネルじゃない。たぶん日本の公式チャンネル。わずか五分かそこから準備したってことか。

ボクのためにというか、政治的なあれこれはあるんだろうけど、幼女先輩に会いたかったんだからしかたないよね。うん。

『緋色さん。こちらのほうにお願いいたします』

甲板の上に置かれていたのは、首相が時々外国のえらい人とかといっしょに座ってるような豪華な椅子だ。

もしものときのために、持ってきてたんだろう。

甲板の武骨な感じとはミスマッチな椅子だけど、ボクはお客様という扱いらしい。

『ちよこん』『椅子でかいな』『毒ピンくつろぎまくってるな』『はーマジ日本』『すまない。そちらに向かってもよいだろうか。盟友として』『合衆国大統領。臆面もなくwwww』『ジャイアニズムなお願いやめろ』『ピンクちゃんは我が国の国民だぞ！ 何が悪い！』『明日まで待ってるカス』『50以上のおっさんたちが唾飛ばして言い合うのやめろ』

あーあ、もうめちやくちやだよ。

対する江戸原首相は、優しいおじさんって感じだった。

『撫子くん。なにかスイーツでも用意できるかね』

傍らで立ったままだった綺麗なお姉さんに江戸原首相は話しかける。

タブレットをいじりながら、お姉さんは落ち着いた調子で口を開いた。

「シヨートケーキ。モンブラン。プリン。緋色さんが好きだというパンケーキもございませうが」

そろそろお昼時だから控え目がいいかな。

「えっと、プリンで」

「ピンクもヒロちゃんと同じなので頼むぞ」

「同じので」

プリン食べながらの会談になったのだった。

ちなみに最高級なプリンは超おいしかったです。

☆
||

オープンな会談が終わったあとは、クローズドな会談です。

江戸原首相がなにか張り切ってるらしく、幼女先輩は追従する感じ。

幼女先輩ともっと話したいな。できればゲームとかいつしよに楽しみたかったりして。

でも、いちおう、今は明日に向けての最終調整。

ボクとしては唯一といってもいい”お仕事”なのだから、いまは我慢です。

「艦内を案内してあげようかね」

優しいおじちゃんって感じだなあ。

肩のあたりにすつと手を置かれて、自然な形で誘導される。

「首相。セクハラです」

「何を言ってるんだね。撫子くん。小学生じゃないか」

「小学生でも女性です。気を付けてください」

撫子さん。すっかりしている人だなあって感じ。

ボクとしては、この程度だったら別にどうとも思わないけどね。

いざとなったら、腕をねじきれるくらいのパワーを持つてるせいかもしれないけど。

さつきプリン食べさせてもらったから甘いというわけじゃない。

それに、なんとというか撫でられたりすると、気持ちいいし。

単純にその感覚が好きっていうか。

首相自ら案内してくれた”いずも”のなかは、基本的なつくりは空

母なせいかな、”いんとれびつど”とあまり変わらなかった。大きさは”いんとれびつど”より小さいけど、レストランとか運動するところとか、ブリーフィングルームとか変わらない感じ。

通路の狭さとか、急な階段とかもそれほど変わらないかな。

ある程度見まわった後は、司令塔に案内された。甲板に出ている自衛隊のみんなは、今は仕事に戻ったみたい。チラツチラって視線は感じるけど。

「あらためて、この国の内閣総理大臣としてお礼を言わせてくれないかな」

「あ。はい。大丈夫です」

少女先輩に会いに来ただけだし。

ボクが視線を投げると、少女先輩はフツと笑い返してくれた。とうんく。

「それで……その、なんだ。我が国としては、ここらでハッキリさせておきたいことがあるのだが、少しいだらうか」

言い淀む江戸原首相。

なんだろう。なにかボクにお願いごと？

「えー、あー、ヒロちゃんが住んでいるところなんだけどね」

「はい」

「我が国、固有の領土なわけだ」

「ん？ 出て行って話」

「違う違う違う違う！ そんな話じゃなくて、逆だよ。逆。ヒロちゃんは日本国に住んでいる日本人ということでもいいのかいってことが言いたいんだよ」

「あー」

これってもしかしてあれか。

「緋色さんは国籍をお持ちなのでしようか」撫子さんが話を継いだ。「残念ながら我が国の戸籍システムは遅れておりまして、市町村ごとに独立しております。また、緋色さんの本籍地がわからないため調べようもありませんでした」

「ボクは日本人です」

出生地としても血統としても日本人なのは間違いない。

ただ、本籍は佐賀県ではない某県にあるんだけど、そこが滅びてないかどうかはわからない。

戸籍データもたぶんコピーとか、いろんなところにあるんだろうけど、ゾンビハザードで燃やされたり、完全に滅失している可能性もな
くはないかな。

そもそも戸籍からして、20歳男ということになるわけだし、検索
不一致になるという問題もあるわけだけど。

——そうか。

ぶるっ。身震いしちゃった。

冷静に考えたら、命ちゃんや雄大がボクをボクだと信じてくれたのは奇跡みたいなものだ。

ボクは命ちゃんに知らない人って思われる可能性もあつたんだ。
ボクがボクでいられるのは命ちゃんのおかげだったんだなって。

「先輩のことをわからないわけがないです」

「ありがとうね。命ちゃん」

ほっと息を吐くボク。安心の吐息。

「その……言いにくいことだったと言わなくてもかまわないのだが、ヒロちゃんが日本人ということを証明する手段はあるかね。つまり戸籍があるかということなんだが」

「うーん」

戸籍システム自体がぶっ壊れてるかもしれないしな。

ただ、ボクにもお父さんやお母さんがいたことをなかつたことには
したくない。

「戸籍はあるんですけど、ちよつといじつてもらう必要があるかもしれ
ません」

「いじる？ つまり元データがあるということなのかね」

「そうです。ボクは夜月緋色。本当の名前です。ボク……」ちよつと
だけピンクちゃんを見たり、幼女先輩を見たり。「彗星が降る前は、男
だったりー、なんかして。へへっ」

ちよつとだけ怖いんだけど、真実を暴露しちゃいます。

ボクが男だったという事実は、ボクの”人気”からすると、なんと
いうか微妙に暴露しないほうがいいような気がするけど、そこは真実
の戸籍を保持するためのバスターです。

そこにいた人たちは、にわかには息をのんだのか。

ちよつと時間が止まっていた。

一番影響がなかったのは、もちろん真実のボクを知っている命ちや
ん。

ついで、ピンクちゃんだ。

「なるほど、ヒロちゃんは男の子だったんだな。ピンクと結婚できる
な」

ぶふっ。

「ふふ。冗談だぞ。ヒロちゃんがちよつと不安に思ってたのはわかつ
たぞ。べつに元が男だろうが女だろうが関係ない。ヒロちゃんはヒ
ロちゃんだし、ゾンビと人間の違いに比べたらどうということとはな
い。そうだろう。エドバラ」

「う、うむ。確かにたいしたことではないな。だとしたら——、本籍地と
いくつかの事項を教えてもらえれば、戸籍をいじることは可能だ。し
かし、親戚関係の問題もあるし、もしかしたら新しいまっさらな戸籍
を作ったほうが——うぐっ」

撫子さんが首相の脛を蹴った。

「首相。緋色さんが本当のことをおっしゃってくださいったのも、ご両
親との絆を消したくないからでは。無粋なことはやめてください」

「う、うむ……。もちろんだとも、今後のヒロちゃんのことを考えて可
能性を述べたまでだ」

撫子さん。クールだけどいい人だなあ。

親も親戚もないから、ボクが本当の戸籍と結びついても、誰にも
迷惑はかけないはずですよ。

それと、仮にボクの戸籍が世界中に広まったとしても、もともとボ
クを日本人と考えてない『ヒロちゃん宇宙人派』からすれば、そんな
の偽物だってなるはずだから関係ない。

「ありがとうございます」

「いえ。シヨタだったら、ドストライクなんですけどね」
「は？」

「なんでもありません。ええと、それではいくつかの情報を教えていただけえますか。連絡が取れている市町村であれば、戸籍の確認が可能です」

「えつと、じゃあ……いいですね。でも、他の人に知られたくないので、こしよこしよ話で」

「はい。どうぞ。少年のこころを持つてるのかなあ。この子」
「え？」

「いえ、なんでも」

ふうむ。よくわからない人かもしれない。

☆
||

三十分後。

「確認がとれましたよ。どうぞ」

ボクは撫子さんから、うやうやしく書類を受け取る。

そこには、夜月緋色。11歳。生年月日は生まれた年だけ改変しました。

性別：女。

生まれた性別を変えるのはしようがないかなあ。

でもいいんだ。

お父さんとお母さんの子ども。

そこは変えてないから。

うれしくなって、ボクは小さな紙きれを愛おしく抱きしめた。

ハザードレベル123

もらった戸籍簿謄本だけど、ポシエットにしまうことにします。

ボクの腰回りにつけているそれは、当然のことながらA4サイズの戸籍簿謄本を入れるにはいささかサイズ感が足りない。ほんのちよつとは、せつかくももらったものだから折り曲げないでおこうか
なって気持ちもあつたけど、紙はしょせん紙だって気持ちもある。

ボクがうれしかったのは、この国にボクがボクでいていいって言われたからだ。

つまり、物質的なものではなくて、精神的なもの。

なので、できるだけ綺麗にたたんで入れました。

「そのあたりが男の子っぽいところかもしれない……」

ギリりと瞳の奥が光ったような撫子さん。

クールなスーツ姿のお姉さんは、ボクの行為を食い入るように見つめている。

なんだか知らないけれど、マナさんっぽい気配を感じた。マナさん
亜種なの？

怖くなったんで、そそくさと後退します。

「あー、ヒロちゃん」

一步引いたところで幼女先輩に声をかけられた。

いまさらながらだけど、ボクが元男だとぼらしたのは、ほんのちよつとだけ後悔もある。

それは、やっぱりボクのことを女の子だと思っていた人たちからすれば、ある種の裏切り行為のように思うから。

それに単純に気味悪がられるかもしれないし。

ゾンビなボクが、いまさらって感じだけど。

でも、やっぱり、気持ち悪いと思われるかもって恐怖もあつた。

最終的にはボクがいた証を優先したわけだけど。

割り切れないのが人間だ。ボクはやっぱり人間だった。

そんなわけで、幼女先輩の声に対して、ボクはいささか緊張気味に答えることになった。

「なんでしようか」

「いま、ちらりと見えたんだけど、そのポシエツトの中に銃を入れてるね」

全然違う話だった。さすが幼女先輩。動態視力が半端ないな。

ボクはデリンジャーと呼ばれる小型の銃をみんなの前に見せた。

「護身用です」

「うーん。小学生が装備するにはいささか危険じゃないかな」

「小山内先輩。緋色さんは小学生ではありませんよ」と撫子さん。

「そういやそうだった。だがどうにも想像できなくてね。ヒロちゃんは本当に成人だったのかい」

視線は先ほどから変わららず、小さな子どもを慈しむものだった。

「ボク、成人しました」

「それにしても、こうなんというか堂々たる小学生っぷりだったような。完璧な擬態というか。むしろ小学生そのものというか。今もそうだが……」

「え？」

「あ、いやなんでもない」

ボク、小学生並みの行動だったってこと？

そんな馬鹿な。

ボクは命ちゃんを見てみる。命ちゃん頭を振る。

命ちゃんはボクのことを知ってるでしょうが！

「幼女先輩。ボクわりと大人っぽいムーブもしてませんでした？ してましたよね！ 小学生らしからぬ、ゆとりある態度をとってましたよね!？」

「う、うーん。そうだね。そういう考え方もあるかもしれない」

これは忖度されている!？」

「ピンクちゃん!？」

ボクは最後の砦であるピンクちゃんを見た。

「日本の大学生はモラトリアムだと聞いたことがある。つまり、精神的な幼形成熟であるからして、ヒロちゃんが小学生っぽくても、特段おかしいことはないぞ。大丈夫だ。問題ない」

なんか難しいこと言ってるけど、それってボクが小学生並みの精神でことだよな。

ねえ、ピンクちゃん！　そこ重要じゃない？

「ピンクとしては、ヒロちゃんのこと大好きだから大丈夫だ」

なにが大丈夫かわからないよ。

「ともかく、話を戻すが」少女先輩が顎に手をやりながら言った。「明日のセレモニーでヒロちゃんが銃を持っているのは何かとまずいんだよ。各国の要人が来ることになっているからね。ヒロちゃんはいわばもてなす側というか。簡単に言えば仲良くしようという儀式なわけだ」

「確かにそれはあるかも」

武器を持ちながら仲良くしようねっていう態度はないよね。

ただ、ボクには懸念がある。

——ジユデツカ。

ボクにはよくわからない謎の組織だけど、実際に町役場ではプチゾンビハザードを引き起こして、実害を与えられたのは確かだ。実態のない蛇みたいな感じ。いつのまにか絡めとられて、誰が敵かもわからない。

あの久我さんとかいう自衛隊の人は、ボクを憎んでいた。

それはボクが『遅かった』からだと言っていた。

あるいは、嘘つきというようなことも言われた気がする。

ボクは全世界をだまして、自分の好みで作りがえようとしている悪の首魁らしい。

もし、明日——ジユデツカが攻めてきたら？

なんらかのテロ行為をしてきたら。

そう思うと、自衛手段くらい持っておいたほうがいいよねって思ったんだ。

「ジユデツカについては対策しています」撫子さんがボクの不安を読み取ったのか、速やかに応じた。「例えば、各国のみなさんは”いんとれぴつど”に乗船できるのは、要人とボディガードひとりまでとなっております」

「一国に対してふたりだけってことですか」

「そうです。人数制限をしておけば、大規模なテロは起こしづらくなります。また、海上護衛は我が国とホミニスが共同で行うことになっておりますが、いずれも出自がはっきりした者を選抜しております」

思想チェックとかしているんだろうか。

テロってというのは、ある種、無責任だからこそできる犯罪行為だ。

その極端な例が『殺人』だったりするわけだけど、ヒトがヒトの意思を完全否定するという激甚な行為には、必ずそれに先んじて激烈な思想が必要となる。

つまり、決意が。

殺す覚悟ってやつがなければ、テロ行為なんてできない。

思想チェックっていうのは、人のこころを覗くようで、あまりよろしくないように思うけど、防疫的には必要だよな。

テロリストはウイルスみたいなものだし。

ん。ボクのいまの思考。めちゃくちゃ大学生モードじゃなかった？

やはり、ボクは大学生並みの思考力はあると思うんです。

「先輩……」

ナズエミテルンデイス。

「あー、ヒロちゃん」今まで黙っていた江戸原首相が口を開く。「護衛はプロに任せてもらえないだろうか。もちろん、君が護衛の必要がないほど強いことは知っているのだが、こちらにも意地というものがあるんだよ」

プロか。

幼女先輩を見つめる。直接戦闘力は、たぶんボクのほうが上だろうけど。

いろんなことを知っている幼女先輩をボクは信頼すべきだろう。

「わかりました。幼女先輩にお任せします」

「よかった」江戸原首相がほっとしている。「それで、明日の件なんだが、その……我々が送った振袖は見ていただけただろうか」

あ、そっちが気になってたんだ。ふーん。

確かに振袖にポシエットって装備できないからね。

明日は政治的セレモニーでもあるから、ボクに振袖を着てもらいたいってことなんだろう。

「ヒロちゃんに似合うのを用意したんだが」

おずおずと述べる江戸原首相。

「明日は、振袖を着ますよ。かわいかったし」

プレゼントしてくれた気持ちはうれしかったし。

相手を安心させてあげるのも必要だ。このあたり悪女ムーブだな。自覚的なので大丈夫です。

ボクは自分がかわいいことを知っている系女兒ですゆえ。

「おおっ！　ありがとうヒロちゃん！」

江戸原首相はボクの手をとった。

一応、日本のトップなんだろうけど、対する態度はやっぱり孫に相対するおじいちゃんというか。なんというか。ボクが成人男性だつてことも、あんまり関係ないんだろうか。

「ぶしつけに触りすぎです。セクハラになりますよ」

「撫子くん。ヒロちゃんは元男だったわけだろう。何も問題ないはずだ」

「ダメです。周りからどう見られるか考えてください。明日は握手するのは、まあいいでしょう。政治的行為ですからね。ただ、肩を抱いたりするのはNGです。他にも視線を5秒以上合わせたらいけません。本当はこういうクローズドなところに連れ出すのもよくないんですよ」

「厳しすぎないかね」

「日本の総理大臣が世界的な英雄になる人物にセクハラしたと非難されれば、日本全体の恥です。絶対にやめてください」

「ううむ。わかった。わかった」

「それと——、さっそくですが、来たようですよ」

タブレットをいじりつつ、状況報告をする撫子さん。

なんだかダメなお父さんを必死に支える娘さんって感じで、クールだけど憎めない感じだな。

親子関係に激甘なボクですゆえ。

「ん。クローズドな場所にヒロちゃんを連れ込んだ非難か」

「いえ。アメリカが会いたいといっけてきてます」

「追い出したらいいだろう。フライングしたのは確かにこちらだが、我々はヒロちゃんに選ばれただけだ。ヒロちゃんが着艦するときの映像は世界的に放送されているはずだ。なにもやましいところは無い」

まあ、そりやそうだよね。

ボクはもともと幼女先輩に会いたかっただけだし。

じー。幼女先輩を見る。

政治的な話は、幼女先輩の埒外なせいか、ふと目があった。

すすすつ。ぴとつ。ふう。

まいったなあという感じで、後頭部をぽりぽりする幼女先輩。

やむをえないのです。護衛対象なので守ってください。

その間にも事態は進行する。

「相手はかなり強引にVTOL機を”いずも”に着艦させたようです」

「本当にアメリカなのか。テロリストではないだろうな」

「コールサインはアメリカですし……、いえ、まさか」

驚いた様子の撫子さん。どうしたんだろう。

続く答えは、そこにいる人全員を驚かせるものだった。

「大統領です。合衆国大統領自らがVTOL機を操縦しています！」

「クソアメ公がつ！ こちらは……うむむ。全力で遺憾の意を示せ」

「すでにやっています。ただ、アメリカは日米安全保障条約を盾に、いわば緊急事態が発生したということで、こちらに来ています。緋色さんへのフライングは有事にあたると……」

「なにが有事だ。そんな条約、破棄してしまえ！」

「ノリで国防の要を破毀しないでください」

「だったら、こっちに来させないように人壁を作れ」

「既にやっています」

「あゝ」

ボクは幼女先輩の腰のあたりからそつと顔をだす。

「ん。どうしたんだい」

江戸原首相は、険しい顔から一転、仏の顔になる。

「アメリカと会わなきやいけないうっていうんだっいたら会いますけど」

「いや。ヒロちゃんは政治にかかわることなんてないんだよ」

「そうですか」

まあ、関わらないほうがいいってのは心底理解しているけどね。

あの町役場規模でさえ、ボクがプチ炎上したのは、政治的な流れと
いうか力に手をつつこんだせいだからだといえる。

もちろん、いまヒイロウイルスを各国に渡すというのも、そんな
だろうけど、それはやむを得ないからそうしているわけであつて――
。

「ピンクさんに任せておけばよかったですね」

命ちゃんの言葉が耳に痛い。

でも、ピンクちゃんだけに任せて、あとはしーらないってひどくな
い？

ボクは、ボクができることはするって決めたんだ。

多少、ややこしいことになっても。

撫子さんは、タブレット端末から音声を飛ばす指示に切り替えたよ
うだ。

「E3区画より先へは絶対に行かせないでください」

これは訓練ではありません、キリリと指示を飛ばす撫子さんがかつ
こいい。

直接やりとりしているのは海上自衛隊のえらい人だと思うけど、向
こう側の音が少しだけ漏れでている。

『いたぞおおー！ いたぞおおー！』なんだこいつ。ああ速い』『なんと
う……でかさだ』『我々には手が出せません』『触ったら犯罪だよな』『
え、触らなきや確保できなくね？』『っーか、後で告訴されそう』『助
けて幼女先輩！』『幼女先輩はヒロちゃんとキャツキャウふふしてる
はずだ』『うらやまけしからん』『そっちいったぞ』『抜けられましたあ』
「どういふことなの」

撫子さんがシリアスな声を出す。

『幼女来ますー!』

海自の偉い人もシリアスな声だ。

言ってる内容は、意味不明だけど。

果たして司令塔の扉は開け放たれた。

見ると、そこにいたのはボクと見た目同じくらい、背格好同じくらいの少女が凜然と腕を組んで立っていた。金髪に碧眼。不敵にほほ笑むその姿は自分に自信ありげです。

陽キャ。こいつ陽キャじゃないか。ボクの苦手なお日様属性持っていないか。

やべえ。

追記——、どことは言わないですが、部分的にすごくデカいです。

☆
☆

「アメリカ・デフォルトマン。11歳。わたしが大統領よ」
シーン。

司令塔内の誰も答えなかった。答えようがなかった。

え、うそでしょ。11歳の女の子が大統領なの。

戦闘機乗ってきたって言ってたし。めちやくちやだ。

アメリカはめちやくちや戦闘国家だけど、さすがに幼女からして戦闘機に乗れますとか、話がぶつとびすぎている。世界がゾンビだらけになっちゃったことより、ある意味現実味がない。

「おまえは大統領の娘だろう。嘘をつくな」

ピンクちゃんがジト目でにらんでいた。

ああ、なるほどそういうことですか。

アメリカと名乗った巨乳小学生が、ぷるんぷるんとソレを揺らしながら、ゆつくりとピンクちゃんに近づく。モデルの人みたいにもったいぶった歩き方だ。ちなみに着ている服は、品のいいお嬢様学校風の制服みたいな感じ。

「ふうん。あなたがドクターピンクね。実際に会ったのは初めてだけ

ど、やっぱり小さいのね」

ケラッと笑う少女。

「わたしね。嘘をついた気持ちはないのよ。だって、わたしのパパは大統領でしょう。そして、わたしは人類存亡の危機に対する救国の英雄となるの。次期大統領は確定だわ」

「ピンクは等身大だけだぞ。おまえみたいに無理やり自分を大きく見せようとしてないからな」

ピンクちゃん辛辣だ。

勝手に”いずも”に乗船してきたことに、かなり怒ってるみたいだ。

ピンクちゃんはアメリカ人なはずだけど、なぜなんだろうな。

「あなた、もう少し愛国心をもったらどうなのかしら。アメリカ人なんでしょう」

「おまえのは愛国心ついていわない。ただ自分勝手なだけだ。ピンクは同じアメリカ人として恥ずかしいぞ。人間として厚かましいぞ」

「小生意気なガキね。やっぱり科学者は頭が固くてよろしくないわ」
ぷくうつと膨らんでいくピンクちゃんのほっぺた。

でも少女はピンクちゃんを半ば無視し、くるりと振り返りボクをロックオン。

え、ボクですか。

「あなたがヒロちゃんね」

「あ、はい。そうですけど〜」

適当に愛想笑いを浮かべてしまった。

圧倒的な陽キャオーラを感じる。

「もう一度、自己紹介してあげるわ。アメリカ・デフォルトマン。次期アメリカ合衆国大統領よ。アメリカとアメリカで一字違いだから覚えやすいでしょ。あなた、ぼんやりしてそうですものね」

「うん。そうだね」たじたじ。「その、ボク……夜月緋色です」
「知ってるわ」

アメリカちゃん、ズバっと切り裂く感じ。

強気っ娘は、ボクの周りでは初めてじゃないか。

ぐいぐい来るタイプというか。遠慮がないというか。

公称年齢が同じだからっていうのもあるのかもね。

「ともかくこれで二人は知り合えたわけだし。私たち友人になれたってことでよろしいかしらね」

「友人？」

友人ねえ。

正直なところ、我儘な女の子がグイグイ来たところで、友人って感じはしないな。

まあ、男だったボクからすると、敵愾心みたいなのは湧かなくて、小動物がなんか自己アピールしてるなってほほえましさもあるにはあるけど。

とりあえず、大人としては、どうもくっつてごまかすか。

「なにが友人だ。いい加減にしろ！ ピンクは絶対に認めないぞ！」

ピンクちゃん激おこモード。

火山が噴火したみたいに、ぶんすか怒っている。

「あなた何もわかってないのねえ」

「あ？」

「緋色と仲良くなるというのが国家的最優先事項なのよ。政治家も科学者もね」

「国益と友情なんて関係ないぞ」

「あるわよ」

アメリカちゃん断言する。

そこらにいる大人は、アメリカちゃんの独断場の前に何も言えない。

「日本とアメリカが半世紀以上同盟関係にあったことに、国益が関係ないと思ってるのかしら。結局、自分のためになるからこそ、友情を育んできたわけでしょう」

「なんでそれが、いまヒロちゃんと関係があるんだ」

「夜月緋色は、どこの国にも属していない。いわばまっさらな新天地なわけ。いまの状況を鑑みれば、ヒロちゃんという一つの国が突然あらわれたようなものなの」

「……それはそうかもしれないが」

「そうでしょう。だったら、どの国もまっさきに考えるべきは『ヒロちゃん』という国家とどうやって友誼を結ぶかなのよ。ドクターピンク、あなたが本当に愛国心にあふれているなら、夜月緋色をいまずぐアメリカ人として国籍を取得するようお願いすることだわ」

「ピンクはそんなことしない。ピンクは国益とかそんなの考えなかったぞ。ピンクはピンクは……ヒロちゃんとただ友達になりたかっただけだ」

「だったら、あなたには愛国心も友情も足りないのよ」

ピンクちゃんは科学者として、思考しちゃうタイプだ。

なんといえればいいか、天才にもいろいろなタイプがあって、例えば命ちゃんはパソコンとか情報処理に特化している。

ピンクちゃんはオールラウンダータイプではあるけれど、その属性を一点あげるとすれば、思考するというタイプだろう。

だけど、議論って結局自分の意見を押しつけるってところにあるから、相手の考えに対して『受け』にまわると、いくら天才でもいつかは崩れてしまう。要するに考えすぎて勢いに負けちゃうタイプだ。

「あのお。ボク自身はひとり一国なんて考えてないんですけど」

ボクは傷心のピンクちゃんを後ろからギュっと抱きしめながら言った。

この子のサイズってボクにちょうどいいんだよな。体温高めなのもポイント高い。

命ちゃんがボクをギュっとしたらマトリョーシカ人形みたいになるな。

なんて馬鹿なことを考えつつ――。

「あなた、あまり頭の回転早くなさそうなものね」

「ハハハ……」

――ぶち殺すぞヒューマン。

なんて思ったりはしない。

なんとなくわかったけど、このアメリカちゃんには悪意は一切ない。

思ったことを、直列つなぎの善意として、まるきり疑うことなく出力しているんだ。

曖昧にぼかしておいたら、よくないことになるかな。

「えーつと、アメリカちゃんに言っておくと、ボクは日本人なんだよね」

さつき折りたたんでおいた戸籍簿謄本をアメリカちゃんに見せた。

アメリカちゃんは露骨に嫌そうな顔になった。

「ふうん。日本に先手を取られたわけか」

「いや、これは日本がどうかアメリカがどうかじゃなくてね。ボクは生まれたときから日本人だし、それを証明してもらったってだけだよ。ボクは宇宙人じゃなくて、この星の日本という国で生まれた一般人ってわけ」

「なるほど。わかったわ」

「わかってくれてよかったよ」

「だったら、緋色。あなた、アメリカ人にもなりなさい」

わかってねえ！

誰か助けて！ ボクは周りを見渡してみる。ピンクちゃんはさつきからぶくうって膨らんだままだし、命ちゃんは見事に陰の気をまとっている。大人たちは困惑といった様子だ。ここまでオレ様外交をされたら、言うべきこともなくなるというか。もしかすると、ボクの扱いを考えると、やっぱり、自国民ですと公言するのがまずかったりもするのかな。

「ああ……うーん。アメリカ嬢」

声をあげてくれたのは、江戸原首相だった。さすが総理大臣。

「なにかしら」

「ヒロちゃんは我が国の国民であるということは、まぎれもない事実であつてね、アメリカの国籍を取得してしまうと、いわゆる二重国籍になってしまうのではないだろうか」

「なにか問題でも？」

「失礼な言い分になってしまって申し訳ないが、アメリカ嬢の考えは、夜月緋色さんという個人をあまりにもないがしろにしていけないだろ

うか。どこの国の国籍を持つかというのは、個人のアイデンティティにもかかわる非常に重要な事柄だ。無理に押しつけるものではないと思うのだがどうだろうか」

めちやくちや紳士的な物言いだった。

ボクの中の江戸原首相の株がストップ高です。

「なるほど、だったら緋色がいいって言えばいいのね」

「ボクは日本人だからね。アメリカ人にはならないよ」

「考えてみなさい。緋色」近いです。おっぱいが先行して当たってますけど。「あなたに国土の一部を割譲するとか言ってきた国はないかしら」

「あつたような、気が、ぷにんぷにんって、するよ」

「ぷにんぷにん？」

「いや、うん。そういう国もあつたね」

「そうですね。このもらった国土を、あなたはどうするつもりかしら」

「まだ考えてないけど、ボクは名ばかりなんじゃないの？ 権利だけ持つてるといふか、場末の遊園地にヒロちゃんランドって名づけましたみたいなの」

「まあ、あなたがそれでいいならそれでもいいんですけどね。その土地から収益を出すことを考えたら、人を雇って人を動かしたほうがいいわよ」

「なんなら返してもいいけど」

「もつたないわね。じゃあ、あなたがアメリカ人になるメリットを教えてくださいませうか」

「まあ、どうぞ」

「この微妙な雰囲気どうにかしてください。」

「あなた、配信しているから、配信するの好きなのよね」

「まあ、好きだよ」

「配信するのは、いろいろと設備とか電気とかいるわよね」

「うん。そうだね」

ネット環境とか、マイクとか、パソコンとか、そういった物理的な

インフラが必要なのは確かです。要するに、ある程度の文化力がないと配信できないのは確かだ。

ボクは無人島にいて一人で暮らしたいわけじゃなくて、なんていったらいいかな、ゾンビハザードが起こる前の、コンビニにいけば何かご飯は買えるし、ゲームだつてできるし、ありきたりで平凡な、そんな毎日でいいんだと思ってる。

ボクが変わっちゃったから、そんな生活も難しいのかなって思うけど。

ヒロゾンビが増えれば、ボクの役割も薄まって、前みたいに平凡になれるかなって。

「アメリカは言うまでもないけれど、ナンバーワンの国よ」

「まあ現時点ではそうだろうね」

「つまり、あなたにいろいろ融通できる」

「ボクがアメリカ人にならなくても、日本は佐賀に電気送ってくれると思うし、べつにいらなかな。ボクにとってはたいしてメリットじゃないよ」

「百万人があなたの合図ひとつでかすかせることもできるし、世界中の富豪が求めても得られない宝石を身に着けることができるわ。なにより世界一優秀なアメリカの国民があなたを支持することになる。目の前にチャンスがあるのよ。なぜ飛びつかないの」

陰キヤだからです。

「アメリカちゃん。ボクはあんまり実益とかに動かされないタイプなんだ。ピンクちゃんはすごく天才だから、そのあたりのこともすぐにわかってくれて、ボクに合わせてくれたんだよ」

端的に言えば――。

ボクはピンクちゃんによって、世界中にヒロゾンビを増やしてもいいかなって思ったわけで。

国益とか人類益的に見れば、ボクのこころを動かしたのはピンクちゃんだ。

そんなピンクちゃんは、いまちよつと涙目になって、ボクの袖のあたりをギュつと握ってる。

「それ以上の言葉は要らないよ」

正直に言えばね。

すこーしだけ、アメリカちゃんに怒ってるんだ。きみにはわからないだろうけどね。

ボクが強引に言葉を打ち切ったからか、船内は奇妙な沈黙に包まれた。

アメリカちゃんの顔にはじめて困惑が浮かぶ。

大人たちも、きまづい表情になっている。

緋色ですが、艦内の空気が最悪です。

——と、そこで。

救世主のように現れたのは、渋い髭もしやの男の人だった。

すごく若い印象。40歳くらいかな。

政治家にしてはって意味だけど、すごく若い。

スタイリッシュな眼鏡をかけてて、濃い茶髪。髭も茶髪。蒼いスー

ツがめちやくちや似合っつて、日本のサラリーマンのスーツ姿よりずっと着こなしてる感じ。ネクタイはしてない。わずかにあいてる胸元。カジュアルとフォーマルのはさまから漏れ出る色気といふかなんというか。

眼は青色。細身のように見えて、それなりに鍛えてそう。

どこかの映画で言ってたけど、アメリカ大統領って最強の兵士って言うってたしね。

イケメン顔で、ちよつとだけキュンとする。あ、いや違いますけどね。

撫子さんが小声で。

「トミー・デフォルトマン。38歳。ゾンビハザードのときにご逝去された前大統領の子飼のひとりで、ゾンビ殲滅作戦の指揮をとっていた方です。ピンクさんが緋色さんと仲良くなられてからは、ヒロゾンビによる駆逐作戦に転向してます」

ふむふむ。38歳か。よい年頃だ。

「パパ！」

アメリカちゃんが抱き着いた。

「トミー・デフォルトマンです。はじめましてヒロちゃん」

「夜月緋色です」

だれよりも早くボクに挨拶してくるトミーさん。

差し出される手に、半ば反射的に握手をしてしまった。

イケボに惑わされたわけじゃないよ。

敵じゃないって伝えてくる人に、なにも敵対心を抱かせることはないだろうと思っただ。

ただ、この人は——アメリカちゃんをけしかけて——子どもをダシにつかって、警戒網を突破したってことになるんだけど。

「大統領。突然ご来訪されるとは誠に遺憾です」

江戸原首相がさっそく抗議した。

「どうやら、最初に謝罪をしなければならぬようだ。娘も迷惑をかけたみたいだしね。みなさん申し訳なかった。ただ——、実をいうとヒロちゃんと個人的友誼を結びたいという理由で来たわけではないんだ。可及的速やかに、しかも、絶対に傍受されない生身での情報伝達を行う必要があった」

うーん。すごくイケボだな。あこがれる。

ボクがイケボだそうとしても汚い声にしかならんからな。

そんな思考とは裏腹に、トミー大統領は衝撃の事実を伝えた。

「ジュテツカが紛れ込んでいるらしい」

ハザードレベル124

アメリカ式のイケボからもたらされたのは意外。
ジユデツカの暗躍。

いや、ぜんぜん意外でもなんでもなかった。
でも、なぜだろうという思いも当然ある。

——どうしてそのことを知っているのか。

「大統領閣下はどこからその情報をつかんだのでしょうか」
仕事のできる撫子さんが当然のように疑問を口にした。

「うちのほうに、ジユデツカから転向したいというものがきてね」

「つまり、ジユデツカ内の裏切り者ということですか」

「イエア。まあそうだね」

若干の歯切れの悪さ。

「その転向者に話を聞くことは可能ですか？」

「可能ではあるが、あまり意味はないだろう」

「なぜですか？」

「ジユデツカがいわゆる組織とは異なるからだ」

「意味がよくわかりませんが」

「なんとはいえばいいか」言葉を選ぶ大統領。「組織としてのジユデツカはとうの昔に解体されているんだよ。しかし、ジユデツカ本体は生き残っている」

「どういうことでしょうか」

「脱皮する蛇みたいなイメージだね。実際の本体部分はどこか物陰に隠れてしまって、そいつは暗闇の中から我々を狙っている」

なんか抽象的でよくわからない話だ。

「具体的にその転向者はどのような話をなされたのです？」

「今回のサミットでテロを起こす計画があるということだ」

「テロの可能性は我々も考えておりました。小山内先輩」

撫子さんが幼女先輩を呼んで、幼女先輩が大きめな凶面を取り出す。
す。

うん。やっぱり幼女先輩のほうがかっこいい。

図面には“いんとれびつど”のほか、“いずも”や各国の艦容が黒くて細長い抽象として書かれている。配置図というのかな。

そして、配置図は“いんとれびつど”を中心とした、いわゆる輪形陣をとってるみたいだ。

「武装については最低限の自衛に必要なもの以外はすよう指示しています。ほとんどあり得ないとは思いますが、どこかの国の艦をのつとられたときのための処置です」

戦闘艦が乗っ取られたりすることってあるのかな。

沈黙の戦艦っていう映画では、ほとんどギャグみたいな感じで楽勝に乗っ取られてたけどさ。

飛行機が乗っ取られた事例もあるし、ないとは言えないか。

ただ、船については何百、何千という人が組織的に連動しないと動かせないはずだから難易度は高いと思うけど。

「おそらく、ジュテツカがテロを起こすとすると、こういったどこかの艦をのつとるというような手法ではなく、こちら側に無害なふりをして乗り込むという手法だと思われます」

幼女先輩が、すぐキリつとしている。

大統領はうなずいた。同じくらいの年頃で、元軍の人ということもあってか、幼女先輩と響きあうものがあるみたい。

「また、こちらの受け渡しをする際には、一度“いずも”に乗船していただきます。当艦が検疫を果たすということですよ」

「ふむ。“いずも”でジュテツカかそうでないかを選別するわけか」

「そうです。検疫の最中には、当艦からは護衛ヘリ一式と、哨戒機も出しますし、“いんとれびつど”からも同様です。閣下の国に所属しているのですから、ご存じでしょうが、潜水艦や戦闘機などによる攻撃はほぼ不可能と断言できます」

まあそりやそうだよね。

P-1哨戒機とかの対潜水艦哨戒能力は、世界的に見ても優秀だつて聞いたことがある。

なぜ日本が潜水艦絶対殺すマンになってしまったのかは省略するとして。

「この”いずも”にジユデツカが既に乗り込んでいる可能性はないだろうか。あるいは”いんとれぴつど”内に既に潜んでいるということも考えられなくはない」

「ありません」幼女先輩は断言した。「少なくとも当艦については、船員を選抜しております」

「いんとれぴつど”については、私のほうが把握している。愚問だったな」

ピンクちゃんのママが艦長っぽいことをしている”いんとれぴつど”は、微妙な立場ではあるけど、船籍としてはアメリカになる。つまり、大統領閣下が船員について把握していないわけがない。

その後もいろんな話が続いたが、結局持たされた情報の多くは、TNT爆弾の一部が盗まれたようだったか、テロは少人数で行われる可能性高いだとか。そういう話ばかりだった。そもそも、ジユデツカ自体が、あえてこういった情報を流した可能性もあるんで、疑念が疑念を生むというか、もうさ。なんというか……。

——正直、眠たくなってきた。

いや、ボクも真面目にお話を聞かなきゃって思うんだけど、基本的にこれさ、姫プなんだよね。

ボクは最奥で守られてて、ただひたすらみんなが来るのを待っているだけというか。

テロの可能性があるってだけで、心理的圧迫感はあるんだけど、ボクの仕事って、明日振袖着て、新年あけましておめでとうございますして、にっこり笑顔をキープするぐらいというか。

案外、テロよりにつこり笑顔をキープのほうがきつついかもしれない。

そうこうしてぼんやり考えこんでいると、大統領の腰あたりにくつついているアメリカちゃんが、右手を目のあたりに持つていつて”あかんべえ”した。ボクに対してかなと思っていると、違った。いまだにすねてるご様子のボクの手の中でイジイジしているピンクちゃんに対してだ。

「嫌いだぞ」

ピンクちゃんが初めて自分の価値観を戦わせてる感じだな。
さつき言い負けたのがよっぽど答えたんだろう。

とりあえず撫でておこう。

「ふう」

少し落ち着いたみたいだ。対するアメリカちゃんは――。

「パパ。わたし飽きたわ」

突然子どもっぽいつきで言葉を発した。

「いま大事な話をしているのだから我慢しなさい」

「NO。この艦内を見て回ってもいいでしょう？　せつかく来たのだから」

「わたしが案内いたしましょうか」

撫子さんが提案した。

大統領はわかりやすく破顔した。

「もうしわけないが頼めるだろうか」

「かしこまりました。では、アメリカさん参りしましょうか」

「いやよ」またも爆弾発言するアメリカちゃん。「子どもどうして自由に遊びたいの。おばさんなんて要らないわ」

「お、おば……」

撫子さんは綺麗なお姉さんです。

ていうか本当に若いよ。まだ20代半ばくらいだし。

でも11歳という若さのカタマリからしてみれば、総じてみんなおばさんだしおじさんだ。

「ねえ。緋色。いっしょに艦内を見て回らない？」

金髪巨乳ロリがデートのお誘いをしてきた。

「コミュ力つよつよガールだな。」

さつきのボクの拒絶の言葉なんて、光の速さで忘れ去ってそう。

「その前にピンクちゃんに謝って」

「はっ」

「アメリカちゃんの、なにげない一言がピンクちゃんを傷つけた」

「傷つくのなんて、その人の勝手よ。わたしはその子のママじゃないのよ。傷ついたならママに泣きついてればいいじゃない」

ママもパパもいない子なんて珍しくもないんだけどな。
想像力が足りなさすぎる。

べつに『ざまあ』したいわけじゃないんだけど、正直、お近づきになりたいとは思わないというか。ボクとしてはピンクちゃんファーストだからね。

こんなかわいい子を傷つけておいて、お兄ちゃんは許しませんよ。謝るなら、まあ、金髪ロリ巨乳という属性爆盛に免じて、許してやらんでもない。

「まあ、アメリカちゃんがそういう信条を持っているなら、べつにいいんだよ。でも、そういう子とは友達になりたくないなってだけで」
「友達になりたくないって言ったの。わたしと!? 次期大統領のわたしと友達になりたくないって。ありえないわ」

「いや、アメリカちゃんって、いまはただの子どもだよ。日本語話せるのは頭いいとは思うけど、ピンクちゃんに比べたらただの子どもだよ」

「馬鹿にして!」

「傷ついたのはアメリカちゃんの勝手だから、パパにでも泣きついたら?」

「むぐぐ……」

アメリカちゃんがバグってる。

なんということだろう。なろう式の『ざまあ』をまさかリアルにやってしまうとは。

現実で年下にやると、スカつとはしないな。

むしろ、自分がクソ雑魚メンタルなせいか、しぼんでいく風船のような気持ちだ。

「レディ。ドクターピンクと喧嘩したのかい?」

イケボなアメリカ大統領が、膝をつけて、アメリカちゃんに問いかけた。

「わ、わたし悪くないわ」

「そうかい。君がそう思うのならそうなんだろうね」

まさか漫画的なネタじゃないと思う。日本語流暢だけどアメリカ

人だし。

ボクが日本のサブカル話せるからって、各国の偉い人はめっちゃ勉強しているらしいけど。

ま、まさかね？ ドキドキ。

まあ、大統領閣下がそんなネタを言うわけもなく、ただの論法だったらしい。

優しい気な声は続いた。

「レディ。君が本当に自分のことを悪くないって思っているんだったら、僕の目を見て話せるはずだ。どうして目を伏せてるんだい」

「パパが、わたしを叱るから」

「そりゃ叱るさ。君が悪いことをしたら叱る。僕は君のパパだからね」

「わたし叱られるようなことしてないわ」

「本当に？」

「本当よ。だって、わたし、たくさん友人を助けたわ。助けを求めにきたみんなを収容したし、ゾンビから避難できるように手配したし、食べ物だって毛布だってあげた。わたしはみんなに感謝されたのよ。さすがパパの娘だってほめられたの」

なにやら本国ではそういうことをしてきたらしいアメリカちゃん。うがった見方をすれば、友人たちをお願いされてって感じだろうけど。

「みんなゾンビになりたくないし、はやくこんな事態から解放されたいって思ってるのよ！ ドクターピンクとは意見が違ったみたいだけど。緋色と仲良くなるうとするのがそんなに悪いことなの？ わたしは自分が与えられるものを提示しただけ。パパみたいになりたから、アメリカのことを考えて行動しただけよー」

「そうかい……。レディ。もし君が大統領になりたいなら、一番必要な能力はなんだと思う」

「計算能力？ 調整能力かしら」

「そういうのも必要かもしれないね。ただ僕としては人に優しくあることだと思うんだよ。私たちの国にはいろんな考えや異なる宗教を

持つ民族が暮らしている。そういった違う考えを束ねていかなくはならないからね。相手に感情移入する必要がある。もちろん時には決断することも必要だけれども、できるだけ対立は避けるべきだ」でも、大統領はVTOL機で、日本のお気持ち考えずに無理やり着艦しちゃってますよね。

この艦からしてみれば、無理やり肩におさわりされたようなもので、セクハラですよ。

と、考えたのは内緒だ。

一応、ジユデツカのことを伝えたかったという理由があるしね。つまるところ、テロに対する恐怖への感情移入ともいえるわけだし。

結果として、来てもらってよかったともいえるわけだし。

ボクは、そういった善意の行動は目をつむることにしている。

「君に傷つけるつもりがなくても、相手は傷ついたと思うことがあるかもしれない」

「傷つけるつもりはなかったわ」

「でも相手はそう思っていないかもしれないわけだろう。友達になるには、まず、その子のことをよく観察してみるんだ」

アメリカちゃんがこちらを見てくる。

いや、正確にはボクの手元に収まっているピンクちゃんを字義通り観察している。

い、いや大統領が言ったのはそういう意味じゃないんだろうけど。ある意味素直な子なのかな。

ピンクちゃんを、ちよつと斜め方向から見たら、あいかわらずクソにらんでました。

「不満に思ってるようだよ」

「なにか彼女にとってよくないことを言ったのだろうね」

「愛国心が足りないって言ったことかしら。それとも友情が足りないと言ったことかしら」

「どうすればよいかわかるね？」

「ええ。わかったわ」

こちらに近づいてくるアメリカちゃん。

ピンクちゃんの目の前。つまりボクの目の前で止まり。

「悪かったわ。だからあなたも許しなさい」

ピンクちゃんがスマホみたいにプルって震えた。

ひえっ。

「あの、アメリカちゃん。その……なんというか、全体的に言葉をもつと選んだほうが……」

「穏便にこうぜを作戦として選びたい。」

もしかすると、日本語に不慣れなせいで、激辛に思えるだけかもしれないけど。

「嫌いだ」とピンクちゃんの評価もあいかわらず辛い。

「まだるっこしいのは嫌いだから単刀直入に聞くけど、何が気に入らなかったわけ？ 誓って言うけど、わたしに悪意はなかったわ。悪意があるように受け取ったのはあなた」

「本当に馬鹿なんだな、おまえ」

ぴ、ピンクちゃんも棘モードです。これはもうフグのようにほっぺたが膨らんで、ハリセンボンに進化しようとしています。

「馬鹿で結構よ。だって、わたしはテレパスでもなんでもないもの。あなたの気持ちなんてわからないわ」

「だったらもういい。お前とは友達にならないだけだ」

ピンクちゃん、今度は貝モード。

ああ、うーん。これはこれでよろしくない感じがする。

「えっと、ピンクちゃんはね。たぶん、ボクと友達だつていうことをすごく大事に思ってくれてたみたいなんだよ。だから、そこに国益とかは関係ないってわけで」

ボクが解説するのってズルなんだろうなあ。

ピンクちゃんには嫌われるかもしれない。でもこのまま不仲というのもどうもよろしくないというか。ボクって基本的にはラブ&ピース派だからね。

「ふうん。つまり、友情が足りないって言ったのがよくなかったわけね」

「そういうことかな。ピンクちゃん。そういうことだよね？」

「ふんっ。ヒロちゃんもこんなやつに付き合う必要はないぞ」

ピンクちゃんさらに拗ねる。

「悪かったわ。本当よ」

アメリカちゃんが再度謝る。今度は言葉も選んでいるし、形だけで見れば悪くない。

本心はどこにあるのかはわからないけど、案外、心底他人がどう思っようが関係ないってタイプなのかもしれない。

「ピンクちゃん。えっと、こういつてることだし、許してあげたらどうかなーなんて」

ピンクちゃんのちっちゃいおててを持って、無理やりプラプラさせてみる。

されるがままの状況。はい握手しようね。握手。

アメリカちゃんもおずおずと手を差し出し、握手はなされるかに思えた。

が、ダメ！

圧倒的な斥力がピンクちゃんの掌から生まれている。

ヒイ口ちからを全開にして、握手を拒んでいる。

まるで磁石みたいに反発している状況では、普通の女の子であるアメリカちゃんには、何もできない。

「こ、こいつ。こなっ。謝ってるじゃない！」

「そんなの謝ってるうちに入ってるぞ！」

ひえ。誰か助けて！

☆Ⅱ

結局、二十分かけて、ボクがピンクちゃんをおだててなだめてよしよしして、アメリカちゃんの理というか、言い分にも少しは正当性があることを言って、ピンクちゃんとの友情は絶対変わらないという、いわゆるズツ友宣言をおこなうことで、ようやく握手はなされましました。

ピンクちゃんは、めっちゃふてくされて、顔は90度そむけてたけどね。アメリカちゃんのほうもひきつった笑顔だったけれども……。握手は握手。仲直りは仲直りだ。そういうことにしておいてほしい。

ボクの仲裁力もなかなかのものでしょ。H A H A……。
はあ。

同じアメリカ人どうしでこれだからね。まったく知らない国の人どうしがこんな調子で争われたら、もうどうしようもない気がするよ。

「本当に申し訳なかったね。ヒロちゃん」

こちらに謝意を述べてきたのは大統領閣下だ。

あれから、アメリカちゃんのこととは再度叱っていたけれど、この人の叱り方って、なんとというかドラマのフルハウス方式なんだよな。よくあるアメリカの激甘パパというか。

まあ良し悪しはあるかなって感じですよ。

「いろんな考えの人がいるんだなって、当たり前前の事実気づけてよかったです」

「娘はあんな感じだからね。父親としても心配なんだ。こんな世の中だからね。わりとパワーだけでなんでも解決できてしまうように思うけど、それだけじゃダメなんだ。あとから軋轢をうんでしまう」

「それはそうですね」

ボクもパワーばかりあふれてるけど、人のところだけはままならん
い。

アメリカちゃんは、ピンクちゃんの何が入ったのか、やたらと撫でようとしている。ピンクちゃんはジト目で、斥力つかって完璧にシャットアウト。

「触らせなさい」「いやだぞ」「どうしてよ」「触られたくないからだぞ」
みたいなやりとりが続いている。

不毛な争いを見ると、心が穏やかになっていくなあ……。

「そういえば、そろそろお昼になりましたが、お食事はどうなされますか」

撫子さんが微笑みかけてきた。

「そういや、もうお昼だ。いったん”いんとれぴつど”に帰ったほうがいいかな」

「わが艦でもご用意できますよ。どちらでもかまいません」

「うん。ピンクちゃんはどうしたい」

「うん。ピンクはもう帰るぞ」

ちよつとお疲れのようです。かまいすぎた後の子猫みたいな感じ。

「じゃあ、そういうことでいったん帰ります。命ちゃんもいい?」

命ちゃん。陽キヤから隠れていたのか、一言もしやべらなかつたけど、ここでもコクリとうなずいただけだった。女の子だったら比較的大丈夫かなと思っただらそうでもなかつたみたいだね。

「あ、緋色」

アメリカちゃんです。ドキつとしちやうのは決して惚れたとかそういうことではない。

「はい。なんでしょう」

「わたしもつれていきなさい」

「えつと、どういうことかな」

「簡単なことよ。アメリカの特別感を演出するため、わたしたちは一日早く乗船するの」

「それこそフライングなんじゃ」

「なにいつてるのよ。”いんとれぴつど”はアメリカの船よ。大統領が乗船するのを拒む権利はだれにもないわ」

ああ、またピンクちゃんがみるみる膨らんで。

「その、申し訳ない」差し込まれたのは大統領の声だ。「艦長にはすでに許可をとってある」

「ママの許可をとったのか……。んーむ」

ピンクちゃん、沈思黙考。

なにかしらの葛藤があったみたいだけど、処理自体は5秒くらいだ。

「しかたないから特別に許してやるぞ。ただ、”いんとれぴつど”は、ママの船だ。ママが一番えらい。それを忘れるなよ」

「一番偉いのはパパに決まってるでしょ。何言ってるのよ」
そのあとのやりとりは、ご想像にお任せします。
ただ、離艦までに、あと一時間かかったとだけ。

ハザードレベル125

「えー、前夜祭的なやつです」

あれから遅い食事をみんなでとりまして、はじめての喧嘩にベッドにダイブしたピンクちゃんをなだめつつ、結局なんやかんやあつて、配信することになりました。

ていうか——また、アメリカちゃんだよ。

理由は「あなたの配信でわたしを紹介しなさい」だった。

なんとという自儘で奔放な、と思わなくはなかった。

自慢するわけでもないけど、事実上、ボクはいま一番有名なヒロチューバーなわけで、ボクが紹介すれば、自然と知名度が爆上がりするのは間違いないから。

しかも、おそらく人類史に刻まれるであろうイベントの前夜。

最高のタイミングといえるだろう。

しかし、アメリカちゃんの言ってることは、よく聞くと政治的事柄も含んでいる。

今回のサミットは、アメリカと日本が主体になっているのはまちがいない。その一つはピンクちゃんだし、そのひとつはボクが理由だ。

ただ、ここホミニスという組織は人類の英知を結集した、なんとか国際機関みたいな側面もあるんだよね。

そう考えると、やはりアメリカがいち早く、ここ「いんとれび」に乗船しているのはフライングであるといえる。

つまり、アメリカ合衆国が自らルールを破るのは少々外間が悪く、その外間を少しでも取り繕う必要があるというのが理由だった。

アメリカが自分で言い出して、一抜けするって、よくあることだけどぎ。

そんなわけで、アメリカちゃんの依頼は、アメリカ側の正式な要請なわけで、ボクとしても断りにくい。政治的な誘導を強く感じるけど、ピンクママも断り切れないわけで、ピンクママからいわれると、ボクも断りにくいってわけ。

アメリカちゃん自身は、単純に自分が一番目立ちたいだけっぽいけ

どき。

もうなんというか破れかぶれな気分だよ。

「さて今日も配信は始めるね。その前にみんな横にいる女の子が気になってるんじゃないかな」

『だれだ』『ろりきよぬ』『はいおつかいで』『おい。おまえら不謹慎発言やめろ』『またロリだ。またロリだー!』『だれだろ?』『ヒロちゃんの関係者なのか?』

「この子は、アメリカちゃん。ボクの友達です」
いちおう、そういうことにしておく。

ピンクちゃんにも謝ったし、ギリギリ最低限の礼儀はわきまえているし。

まだ子どもだから、判定甘めです。今後の成長に期待しましょう。

「アメリカ・デフォルトマンと申します。現アメリカ大統領、トミー・デフォルトマンの娘ですわ。今日は皆さまに謝罪するために、ヒロちゃんにお時間をいただきました」

なんか猫を三重くらいかぶってるけど。

まあ、初配信なんてみんなそんなもんだ。

ボクも初配信のときは、なんかもじもじしてたし、AVみたいな感じだったしな。

ありがとうございますよ。

『アメリカちゃんおつきい』『かわいいね。でゆふふ』『謝罪ってなんだ』『コメントがきめえ』『隣にいるピンクちゃん、めっちゃふてくされてね?』『どうしたピンク?』『後輩ちゃんはいつもクールで美しいな』

ピンクちゃん。あいかかわらず、ぷっくり膨れている。

最初に出会った時から、アメリカちゃんとはソリがあわないみたい。

配信にでなくてもいいよって言ったんだけど、自分の仕事だって言ってるのは固辞した。

結果、りんごみたいなのほっぺたが膨らんだ、やさぐれピンクちゃんのできあがりだ。

「ピンクはやさぐれてなんかいないぞ」

膨らみすぎたほっぺたがかわいすぎて困る。

対するアメリカちゃんは余裕の表情だ。その外貌だけみれば、すさまじくかわいらしい女の子が、圧倒的強者のオーラをまとって座っているような感じ。

謝罪と自ら言っているのに、まったくそんな感じがしない。

「謝罪については、言うまでもないことですからけれども明日のサミットの件ですの」

流々と語るアメリカちゃん。

まったく淀みなく、決められた台本を読むような感じだ。

『明日のサミット』『人類の夜明け』『日本だけフライングしてズルいつて思ってたけどまだ何かあるのか?』『もしかしてアメリカも……』『お気づきの方もおられるかと思いますが、先の”いずも”へのヒロちゃん着艦事件は——』

事件なんだ。

「ヒロちゃんの日本との個人的友誼によるものです。誰も日本が優待を受けたとしても文句をいう筋合いはございませんし、もしも文句を言いたいというのなら、陰でこそこそ言うのではなく、ヒロちゃんに直接言うべきですわ」

え、ボクが釈明すんの？

『話としてはわかるが』『ヒロちゃん幼女先輩好きすぎるからな』『でも、世界中の国が歩調をあわせようとしているのに、日本だけやっぱズルいわ』『ジャップはクソ。はつきりわかんだね』

日本ズルい論がわらわらと湧いてくる。

ボクも釈明しようかと、少し身構えた。

しかし——。

『おまえ、さつきヒロちゃんの国籍アップされてたの知らないのかよ』『あー、日本の戸籍謄本な』『ご両親の名前とか住所とかは黒塗りされてたけど厚生労働省のヒロちゃんのページに載ってたな』『ヒロちゃんペディアにも載ってたでよ』『日本人をクソ呼ばわりする』ヒロちゃんをクソ呼ばわりする』ヒロ友じゃない』君もう帰っていいよ』

『すみませんでした』『おまえのてのひら、ドリルかよww』

仕事が速いな日本。

それにしてもみんな喧々諤々というか。

ご意見がたくさんおありのようです。

みんなボクに合わせるために日本語で発言しているけど、文化とか考え方の違いとかは結構はつきりしているような気もするね。

「さて、ここでわたくしの国、ユナイテッドステイツについても釈明いたしますと——、ヒロちゃんとわたくしの”個人的友誼”から、明日に先んじて、ここ”いんとれぴつど”にお呼ばれいたしましたの”さつき個人的友誼を強調していたのも布石だったようだ。

既定路線だな。

『アメリカがまたジャイアアニズム』『うーん。しかし、個人的友誼という、ヒロちゃんと仲良しってことだよ』『最初に友達って言ったし嘘じゃないんだろうな』『アメリカの陰謀だよ。おまえら騙されんな』『一日早まったかどうかが問題じゃなく、アメリカちゃんがヒロちゃんと仲が良いというのが最も言いたいところなんだろうな』『あー、だからピンクちゃんがむくれてるのか』『毒ピン友達をとられて拗ねてるのかわゆ』

陰謀というか。単なる我儘というか。

アメリカ式のやり方は、意見は押さえつけない。言われるがままにまかせる。

けど強権を振るうし、時々釘を刺すというやり方だ。

アメリカちゃんも子どももつぽいけど、政治的感覚は鋭いのかもれない。

「ヒロちゃんはピンクの友達だぞ……」

うんうん。わかってる。わかってるから。

「アメリカちゃんの謝罪だけど、みんなわかってもらえたかな。この船はアメリカの船みたいだし、一日ぐらい早くてもいいよね」

『でもアメリカもレナルドだかロナルドだかわからんが他の船で来てたんだぞ』『一日でも早くヒロちゃん汗ほしいです』『我が国の経済はボドボドだ』『経済死んだのはどこの国も同じだぞ』『はよヒロちゃ

ん汁はよ』

なぜヒロちゃん汁という言い方が定着しているんだろう。

ボク絞れちゃうの？

☆Ⅱ

アメリカちゃんの釈明も終わり。

楽しいゲームの時間だ。こんな時にゲームだって？

友情を育むグローバルな感覚こそが、ゾンビウイルスに抗する唯一の手段なんだよ！

わかってくれ。むしろわかれ！

「というわけで、髭面のおっさんがカートに乗ったゲームやりますよ
〜♪」

言わずとしたゲーム。

そう、もはやタイトルなんて要らない。

髭がカートする。それだけで伝わる特異性。もちろん、みんながワイワイするのに、こんなにも適したゲームはない。

『ヒロちゃん。日本人なのに日本産英雄を髭面のおっさん扱いw』『いきなり友情破壊ゲームとは難易度たげえな』『毒ピンも後輩ちゃんも精密操作うまそうだからな。ヒロちゃん大丈夫？』『プロゲーマーが負けるわけないだろw』『ヒロちゃんは素人ゲーマーだよ』

「そう。ボクは素人ゲーマーなんで、みんなで遊んで楽しみたいだけです」

『ゾンビのことも忘れないください』『アメリカと日本が仲良しだったことを見せしめる最大のパフォーマンスなのかもしれんぞ』『そういや年越しカウントダウン配信ってやんのかな』『やるに決まってるだろ』

「年越し配信は夜になってからするね」

残念ながら、今はゾンビでせわしない世の中。

はつきり言って、紅白みたいなアーティストたちのパフォーマンスはできるような状況じゃない。

でも、ボクはできるだけ楽しかったあのころを取り戻したい感じだ。

ヒロゾンビが増えて、世の中がそうなればいいと思っている。というわけで、ボクが選んだのは髭面のおっさんだ。

案外若かったような気もするけど、まあそれはいい。まぎれもなく日本が産んだ英雄のひとりです。イタリア人って設定だけだね。

そして、ピンクちゃんはピンク色したお姫様。よくさらわれると評判のお姫様だ。

アメリカちゃんは、恐怖キノコ人間を選択したようだ。マタンゴじゃないよ。

最後に命ちゃんが緑の兄弟を選んだ。

いこうぜ兄弟（今はシスターのほうが正しいかもしれないけど）。

「あ、緋色。ちよつといいかしら」

ん。スタンバってるときにアメリカちゃんが急に話しかけてきたものだから、ボクは前かがりにポーズボタンを押した。

「な、なにかにや」

『噛んだ』『噛んだな』『ぎゃわいい！』『ふう』『ありがとう神に感謝』

『素材提供ありがとうございます』『神のMMDにネタにされるヒロちゃん』

「や、やめろお」

すぐにネタにされちゃうんだよお。

ヒロ友多すぎだしね。

「で、なにかな。アメリカちゃん」

「このバトルに勝ったら何か優勝賞品はあるのかしら」

「んー。そんなの考えてなかったけど……じゃあ、ボクができる限りのことはするってことでどうかな。なんでもじゃないよ。なんでもじゃないから変なコメント書かないでね」

『ん』『ん？』『いまなんでもするって』『いつてねーから騒ぐな』『しかし、ヒロちゃんも太っ腹だな』『いままでヒロ友は謙虚だったらかな』『だがアメリカなら……アメリカなら……』

「じゃあ、わたしが優勝したら一足早くヒロゾンビにしてもらおう

かしら」

「ふえ……。まあいいけど。本当に一日早いだけで意味あるの？」

「そんなのあるに決まってるじゃない！」

『あるよな』『ないよ？』『ないあるよ』『いや普通に考えて明日の受け渡しはプロージットするんだろ？』『プロージットって何語だよ。ドイツ語かよ』『乾杯ね』『ヒロちゃん汁で乾杯するんでしょ。知ってる』『みんなといっしょに乾杯してハイロゾンビになるって演出も悪くないと思うんだけどな』

「いやよそんなの。緋色。わたしが勝ったらわたしとキスしなさい！」

「ええーっ」

わりと本気でドン引きです。

命ちゃんがマジでヤバイ雰囲気になっている。

ピンクちゃんも今にもポツポツって湯気がふきでそうな感じだ。

『アメリカ強引すぎる！』『後輩ちゃんが黒いオーラを身にまとってるんだけど』『毒ピンもだ。やべえぞ』『どうなってしまうんだよ』『悲しみの向こう側へ逝ってどうぞ』

「ばかー。うんこー！ ヒロちゃんをとるなあ！」

おっと、ここでピンクちゃんが配信で言っただけじゃない言葉を出しちゃいましたか。

とはいえ、ボクが思うのはピンクちゃんって成長したなあって気持ちだ。

いままで、妙に大人っぽい感じの言葉とかを使ってきたからね。人並みになることの難しさはいやというほど知っている。

特に命ちゃんのことを想えば――。

「ピンクちゃん。お口わるわるになってるよ」

「んむぐ。すまなかつた。取り乱してしまっただ。みんなもすまない」

『ピンクちゃんの発言使える』『どこをどう使うんだよ』『とるなあって発言がてえてえんだよ……。わかるかよ』『わかるよ』『オレたち』『仲良しだよな』『きやつきや』『うっふふ』

みんなも平常運転のようだね。

「まあキスはちよつとどうかなくて思うけど、いいよ。フライングで感染するっていうのがアメリカちゃんのお願ひね。ピンクちゃんは どうする?」

「んーん。ピンクはそうだな。ピンクもキスする」

「あ、あのピンクちゃん。ボクの属性忘れてないよね?」

成人男性なんですけど。

みんなには知られてないことかもしれないけどさ。

ピンクちゃんはそれでいいのかって話だ。

「ん。大丈夫だ。でも、アメリカにもできるんなら、ピンクにもできるはずだ」

だめだ。ピンクちゃん。その道はボクをロリコンなロリにしてしまふ。

「こ、後輩ちゃん」

「わたしもキスでお願いします」

平常運転。

『盛り上がってまいりました』『百合の全国放送はこちらですか?』『パ
ンツはもうない』『おまえら、後輩ちゃんやピンクちゃんやアメリカ
ちゃんに対抗心むき出しの精神的なところにこそ百合の神髄を見る
べきだろうが』『なんか百合上級者いるな』

だめだこいつら……早くなんとかしないと。

いまさら言った言葉は取り消せない。

キスキス連呼するリアルなヒロ友と、ネットのヒロ友が両面まんべ
んなくうざい。

いまさら『あれは嘘だ』って言える雰囲気じゃねーぞ。

こうなったら……こうなったら勝つしか。

レースで優勝して、みんなをぶつちぎって、孤高のヒロちゃんになる
ほかない!

☆
||

勝つ。

その一念しかない。

ふ……ふ……ふ。

無策だと思ったか、小娘どもが。馬鹿め！

このゲーム、命ちゃんとはもかくとして、おそらくピンクちゃんもアメリカちゃんも遊んだことはないと思われる。いままでボクはレースゲームを遊んでこなかったしね。ゾンビゲーが主だったことは置いておいて。

それで、このゲームだが、実をいうと精密操作はそこまで必要ないのだ。

もちろん、精密操作が必要な場面もある。リアル系のレースとは違って、カーブを曲がるときに加速するテクニクや、小刻みなブレーステクニクももちろんはずせない。

しかし――。

このゲームで最も必要なのは、

このゲームで最も勝率が高いのは、

――アイテムだ。

要するにアイテム運が良ければどんなにぶつちぎられていようと勝てる。

逆にどんなにぶつちぎっていようと、周回遅れとかでもない限り油断はできない。

たぶん、ゲームバランスの問題で、うまい人もそうでない人も接戦ができるようにデザインしているんだと思う。

その結果、ボクはあえてスタートをおくらしした。命ちゃんとかスタートダッシュという知ってる人しかできない技を使ってたけど、本当勝つためには手段を選ばないと、超クール。

みんな血相を変えて、死ぬ気で一位を狙っている。

それが罨！ それがみんなが陥りやすい罨なのです！

さあ来い。キターー！

ボクが手にしたのは瞬間ブースト能力の高い、お星様だ。これなら、2位か3位ポジションに付けていれば勝てる。

『狙ってやがるなこいつあ』『恥も臆面もなく初期知識でイキる小学生がいるらしい』『後輩ちゃんはいテム運を寄せ付けないほど逃げ切り先行か』『ピンクちゃんがむしゃらにがんばる姿かっこかわいいよ』『ヒロちゃんがえ』『後輩ちゃんもピンクちゃんもさすがにうめえな。超精密動作してやがる』

一応ボクもエイム力とかあるし、普通にふたりと同じくらいはうまいよ。

完全精密操作という意味ではふたりには劣るけどね。

そして、アメリカちゃん。この子を見たところボクと同じぐらいのスピードで走っている。今のボクは流し気味とはいえ、普通に曲がる場所は曲がり、直進するところは直進するという堅実な走りをしている。

普通にプロ級並みの反応速度は出していると思うんだけど、普通についてきているな。

むしろぴったりというか。

「えいつ」

ちよまつ。

ボクがカーブを曲がろうとした絶妙なタイミングで甲羅をなげつけられた。

ぶつ飛ばされたボクはコースアウトになってしまい、立て直すのに時間がかかる。

釣り糸で池ポチャ状態から回収されながら、横目で見ると、アメリカちゃんがにやつと笑っていた。こいつ……できるっ。

一番危険な相手が誰か理解したボクは、すぐさまお星さまを使った。

ともかく、周回遅れはヤバイ。

これ以上遅れるともう追いつけなくなる。

お星の様のブースト力で、二位につけていたピンクちゃんに追いついた。

「むっ、ヒロちゃんか」

「ピンクちゃん。申し訳ないけど勝たせてもらうからね！」

「やった！ やったー！ 勝ったよ！ 優勝したよみんな！」

『ん？』『なんか変じゃね』『硬直時間ってこんな感じだったかな』『え？』『忖度？』『忖度じゃね？』『んー。微妙な感じだな』

「は？ なに言ってるの。忖度とか……あるわけないよね？ こ、後輩ちゃん」

ボクは命ちゃんを見た。

フイっと視線を逸らす命ちゃん。

うそでしょ。おい。

最近の髭面カートは、実はちゃんとすべての走行を記録できる。

髭面TVを見れば、忖度かどうかなんて一発でわかるんだ。

「えっと……ここで、ピンクちゃんの雷が来てるよね」

スローモーにしてみたり。

スイッと追い抜く瞬間。あれ、みんな動いているのに、命ちゃんだけなんでゴールで止まってるの？ これって。

「忖度じゃん。後輩ちゃん。なんで忖度してるの」

「そのすみません……、先輩が困ってるみたいだったので」

『後輩ちゃんって忠誠度高いよな』『それもまた百合なのだ』『ヒロちゃん微妙な顔になってるな』『忖度はあかんやろ』

「まあいいけどね。じゃあ優勝者さん。どうしたいの？」

少しは恥ずかしい気持ちもあるけど、あそこまで明確に勝ちを譲られたんじゃ、先輩としてはどうしようもないよ。もう好きにしてって気持ち。

「じゃあ、しますね」

「うん」

全国の皆様の前でボク、されるがままになっちゃうんだ。

ちゅ。

感触があつたのは、唇ではなくほっぺたへのキスだった。

『あえてほっぺたというところに尊みがあふれる』『勝って負けてまた勝って』『後輩ちゃんはやっぱり後輩ちゃんだなという感じ』『正妻宣言』『ゾンビだらけなのになんでゲーム楽しんでるんだろうなオレら』

月が頂点にかかる頃。

くだらないゲームに興じる夜月緋色を見て、オレはまた黒色をした憎悪がぐつぐつと煮立つのを感じた。

「どうした。近藤。夜月緋色の動画でも見て、また身体を無駄に熱くしているのか。楽しいじゃないか。馬鹿らしくて。愚かしくて。実に人間的で……」

「近藤ではない。それは一つ前の名前だ。間違えるな」

「ふ……そんなのわかってる。いまはクウガという名前だったな」
久我とクウガ。

そんなに近い名前でも本当にいいのかは疑問だが、今のオレは——名も知らぬ小国の姫君の護衛だった。正確には護衛という位置に落ち着いたというべきか。

戦艦でも駆逐艦でもなく、少し大きめのクルーザーにすぎないここで、オレは静かに明日が来るのを待っている。

相對するは、オレの妹と同じくらいの年頃の少女。

肌の色は褐色。年齢は10程度。水色に近い瞳の色が幻想的で、実に夜月緋色に似ていた。

が、その瞳は混濁しきっていて、この世界に絶望しきっている。だからこそ、オレも安らげた。

小国の姫君が——、普通だったら、会うことすらままならない天上の地位にあるものが、地上をはいつくばって生きるオレと同じ気持ちで共有しているのだ。

痛快でしかなかった。

安心でしかなかった。

オレの共犯。

——ゾイ・トウリトトリ・ビットリオ。

彼女とオレは同じ部屋に押し込まれている。

「いうまでもないが——、この部屋にお前と私がいつしよにいるということはすでにそれ自体が異常事態ともいえる。ハッキリ言えば、お

前は私を好きに味わってよいと言ってるようなものだ」

「何を言っている？」

「わからないか。通常、王家の貞操はもう少し厳重に守られているものだ」

「まあそうだろうな。だがお前はまだ子どもだろう」

「子どもだろうがなんだろうが——王家は利用しやすいところから利用する」

「そうかもな」

「いや、クウガよ。おまえは何もわかっていない」

ゾイはオレが体を休めているソファへと寄ってきた。

ぴたりと吸い付くように身を寄せるゾイ。

「わたしはお前のことは聞いている。おまえは私のことを知っているか」

「知らん」

「だとすれば、それは不均衡だ。教えてやろう」

「知りたくもない」

「まあ聞け。でなければ、私かなぜここにいるのか。なぜジュデツカに付き従っているかの確信も持てんだろう。それでは私も困るということだ」

——なあ、お前様。

そういって、ゾイはオレの胸元に無機質な指を這わせた。

その指は、木製の義手で構成されていて、硬く冷たかった。

彼女は、シエヘラザードのように、怪しくオレに語り始める。

ハザードレベル126

曇天に月がかかり始めたころ。

オレ——久我春人は、共犯者であるゾイを見下ろしていた。赤い豪華なソファに座り、オレの胸元に武骨な木組みの手をぴたりと吸いつけるゾイ。

クルーザーの一室は光もつけず、青白い反射光で照らされている。ゾイは齢にして10を超えたほど。

オレの妹とさほど変わらない。

年を考えれば、そこに誘惑めいた意味合いはなさそうだが、彼女の混濁した瞳は当の昔になにかをあきらめているように思えた。最貧困国で性を売っている少女と変わりない。

「どういうつもりだ。第一王女」

イラついた声色でオレは聞く。

「怒っているのか。私は本気だぞ。この部屋にお前様と私しかいないのは、わが祖国がそうなってもよいと思っているからだ。私がお前様に犯されようが、仲睦まじく夫婦のように暮らそうがどうでもいいと思っている。だからこそ、この部屋には誰も立ち入らない」

「王女としての権力だろう」

「そうじゃないさ」ゾイは目を伏せた。「私と話ができるのはお前様にとっても悪いことではないだろう。明日に向けての情報共有だ」

確かに共犯者が必要だった。

これは言うまでもないことだろう。

現在、小山内によつて警護されている”いんとれびつど”は虫の侵入も許さない厳戒態勢だ。もしも、オレがひとりでのこのことにかけていったところで、あつけなく捕まって終わりだ。

たとえば、顔を変え、名前を変えたところで結果は変わらないだろう。ただし——、それはオレが異物であり、ウイルスであるからだ。

検疫をすり抜けるトロイの木馬であれば、素通りすることは可能だろう。

ジユデツカの意向に沿い、小国の姫君と引き合わされたことは、夜

月緋色に復讐を誓ったオレにとって僥倖ではある。

ジユデツカの諜報力はいまだ失われていない。

小山内が、二人一組のみ乗船可能というルールを決めたことは、すぐに知れたことである。

そして、人間は自ら制定したルールが絶対だと思いこむ癖がある。

この場合は二人一組。

このルールを守っている限り。やつらは侵入に気づけない。

「なあお前様」ゾイは蛇のようにぬめらかに言う。「私はお前様のことをそれなりには知っている。しかし、お前様は私のことを何も知らないだろう」

「作戦の決行に支障がなければ何も問題はない」

「支障がない？ わたしのコレがなければ何もできんのか？」

ゾイが見せつけてくるのは、義手だ。

その中身は爆弾の素。セムテックスと呼ばれる超小型爆弾だ。ダミー情報としてTNTを盗んだという情報を流したようだが、検知器にひっつかからない最新式らしい。

少量だが仕掛ける場所によっては、船を沈めることも可能だろう。

妖艶のまなざし。

愛おしそうに木組みの指を生身のほうの指で触るゾイ。

「我々の目的はお偉いさんがたを全滅させることだ。夜月緋色を排除することではない」

「第一目標は夜月緋色を排除することだろう！ やつがいる限り、際限なくヒイロゾンビは増え続けるんだぞ」

「フフフ。すでにそこからして情報共有できておらんじやないか。いか。ジユデツカの目標は——ヒイロゾンビによる人類救済策を愚策だと思わせることだ。トップどもがあらかた死ねば、夜月緋色に対する意見も変わる」

「希望的観測だな」

「絶望的観測だよ。お前様」

ゾイはかすかに笑っていた。

いいだろう。話を聞いてやろう。

たかだか10かそこらのガキがなぜこんなにも絶望しているのか聞いてやる。

「ようやく話を聞く気になったか」

ゾイは嫌な笑みを浮かべた。

「好きにしろ。どうせ時間はたつぷりある」

夜は長く、明日は遠い。

「たいした話ではないさ。どこにでも転がってるようなありふれた不幸。ただ——、話をする前にひとつだけ訂正しておこう」

「訂正？」

「わたしは第一王女ではない」

★
||

私には姉様がいた。

姉さまはわたしと五歳ほど年が離れていて、国中から慕われていた。

姉さまはだれにでも優しく、誰よりも美しく、まるで公国の祖である”聖女”の再来だといわれた。

聖女は慈愛の指先で人々を癒してまわったとされる。まあよくあるおとぎ話だが、そういった建国と宗教の起源はどここの国でもあるものだろう。

この国は『指』に聖性を感じる。

実際に姉さまの指先は美しく、桜色の染料を爪先に薄く塗り、俗物どもの頭を母親のように優しく撫でるのだ。

穢らわしいスラムに住んでいる少年にも、きらびやかな金品に囲まれている商人にも、実の娘に欲情する腐った豚にも、平等に分け隔てなくもたらされる慈雨のように。

陶醉しきった表情になる俗物ども。

やつらはきつと、姉様によからぬ感情を抱いていたに違いない。

いや——、それは私も同じだった。

恥ずかしながらというべきか、私は姉様に嫉妬していた。

完璧すぎる姉と、そのスピアにすぎない私。

聖女の再来とまで言われた姉様と、ただの凡人にすぎない私。

王宮での扱いもぞんざいなもので、私は姉様を怨んだこともあったのだ。

そんなとき――。

いつかのとき。なんのイベントも特別性もない日常の一コマのよう。

姉さまの指先が私の頭に触れていた。

「ゾイ。哀しいことあった？」

どきまぎし、卑小な我が身が限りなく恥ずかしく思え、わたしは「いえ」と小さく返すことしかできなかった。姉さまは微笑を浮かべ、私に視線を合わせる。

「不安なこと哀しいことがあったらなんでも言うのよ。私たちはたったふたりの姉妹なのだから」

たったふたりの姉妹といたのには理由があった。

血縁者がいないわけではない。親類がいないわけではない。

しかし家族であるために血は絶対の条件ではない。

父と呼ぶのも穢らわしいからあの男と言っておく。

あの男は、三年前に母様が身まかられたあと、タガがはずれたようだった。

わたしの国は女系国家なので、女のほうが権力を持つ。

つまりは、女王が統治する国なのだが、あの男は、それが気に食わなかったらしい。

いずれは女王になるであろう姉さまと、そのスピアである私が邪魔

だったのだ。

姉さまが国政に関わるのは大人になる18歳からだと言われた。まだ子どもである姉さまにできることは限られていたし、わたしはもつと何もできない。

その間に、あの男が女王の代理として国政を握るといふのは、自然な流れだった。

摂政としての地位。

しかし、やがてあの男はその地位を永遠にしたいと考えるようになった。

国政に携わる幾人かの有力者もまた、野合し、あの男を盛り立てるようになる。

政治というのは不気味な蛇のようなものだ。

姉さまはそれに対抗しようとしていたようだが、優しい姉さまは、あの男を切り捨てることもまたできなかった。聖女のような心を持つ姉さまは、親が親であるというだけで、ただそれだけの理由で愛していた。

なあ、お前様。

愛は、枷よの。

人を殺すのは、愛よの。

だから、あのようないことが起こったのだろう。

魍魎が地にあふれた日に、事実上の王位篡奪があったのだ。

★
||

雷雨が轟く夜だった。あと少しで寝る時間。

ベッドの上で横になりながらスマホのソシヤゲをいじっていたけれど、もう飽きて放り投げてしまった。

ガチャゲーなんてするもんじゃない。最高レアは数億分の1とかいうゲームだけど、絶対に嘘だ。そんなレア度なんて存在するはずがない。

いつもなら、姉さまは私の部屋に来てくれる。10にもなつて夜も

ひとりで眠れないのは恥ずかしかったけれど、お姉さまに撫でられると安心するからしかたない。

「姉さま遅いな」

最近忙しくなってきた姉さま。

政治のことを学び始め、学業に専念されながら、市井の人々にも分け隔てなく接している。

とてもお忙しい。

けれど、夜だけは。

このわずかな時間だけは、姉さまはわたしに、その貴重なお時間を使ってくれる。

わたしだけの姉さまになってくれる。

——姉さまが来てくれない。

使い慣れた毛布が手元にないかのような不安感。

窓をしたたかに雨がうちつけ、ときおり雷光が走る。

怖くなってきた。

姉さまを探しに行こう。

政務室だろうか。

長い石畳の廊下を歩いていると、慌ただしい怒号が聞こえてくる。

「化け物だ」「どっから湧いたんだ」「え、おまえ……なんで」「噛まれた」「こいつらなんなんだ」「どうなってるんだ」「警備を固めろ」

かかしのような影がゆらめき。

獣のようなうなり声が石壁に残響した。

なんなんだ？

先ほど前の静かな王宮内の様子から、尋常ではない気配が漂ってくる。

——なにかよくないことが起こってる気がする。

ぞわりとした。

部屋に戻ろうかとも一瞬考えたけれど、それ以上に姉さまの無事が気がかりだった。

何人かの人間が人のようで人でない者たちと格闘していた。

政務室。休憩室。娯楽室。応接室。どこにもいない。

最後に重苦しいドアを開けて入ったのは儀式室。

宗教的行為を行う際に使う、簡素な部屋だ。

部屋の中は、石畳の上に柔らかなベルベットが敷かれていて、ランプの間接照明で全体がぼんやりと照らされている。

聖香がたかれ、煙が充満しており目に染みだした。

部屋を中心に姉さまはいた。傍らには僧服の男が5人。王宮の兵士が3人ほど立っている。

「姉さま！」

姉さまは応えず、視線をこちらに投げかけるのみだった。

「静かにせんか……ゾイ。貴様の大好きな姉さまは今、国のために必死になって祈っておるのだ」

ドアのすぐそばに立っていた巨躯が睥睨するように私を見た。

「なにを……父様」

「今から三時間ほど前、天から星が降り注ぎ、地に魍魎どもが湧いた」
「魍魎……」

「知性のない混濁した瞳。人肉を喰らう悪食。食われたものも同じく魍魎になる。さしづめゾンビといったところか」

「国民は!?」

「知らんよ」

「え？」

「兵は王宮に集めるように命令してある。今の段階で民を助けることなどできぬ」

「そんな……」

酷薄な王。

市井のみんなは、王に見放された。

「見放したわけではない。だからこそ、いま『聖女』は魍魎どもを打ち払うべく祈っておるのではないか」

「聖女!? 姉さまは聖女ではありません」

そのように思われていたけれど。

ただの優しい姉さまだ。

だいたい祈ることどころにかなるものなのだろうか。

「我が国が興ったとき、国には魍魎どもがあふれ、人々は餓え、死肉すらあさるような有様であったという。そのとき、どこからともなく”聖女”が現れ、慈愛の指にて人々を救ったのだ。餓えることなく、誰ひとり不幸になることなく——な。国が艱難辛苦に見舞われるとき、”聖女”は現れる。そういうものなのだ」

「馬鹿な……」

「馬鹿とはなんだ。貴様は祖国の宗教すら信じきれぬのか」

「ゾンビがあふれる理由なんて、いくらでも科学的説明がつくはずです。例えば——そう。どこかの国のウイルス兵器とか。いまお父様がすべきなのは、祈ることではなく現実的な対処をすべきなのではないか？」

「しておると言っている。だが足らんのだ」

「何が足りないのです」

「兵が足りぬ。弾が足りぬ。情報が足りぬ。足りぬ。足りぬ。なんともかも足りぬのだ」

頭を抱えて懊悩する王を見て、胃の裏側が冷たくなるのを感じた。「しかし、ここで祈っていてもしかたないはずです。せめて、ここにいらっしゃる方々だけでも現場に回すべきなのでは？」

「貴様に何がわかる小娘」

「王は現実逃避をしているだけです」

「黙れ！ 世の中の仕組みをなにひとつわかっていない小娘がつ！」
耳のあたりに衝撃を感じた。

雷鳴と鈍痛が入り混じり、私は自分が殴り飛ばされたのだと知った。

わたしは茫然と座りこむ。

身体に痛みは感じていたし、脳が揺らされていたことも事実だ。

しかし、それ以上に、純粋な暴力というものに初めて触れた。

それが怖かった。

いやなことは続く。

儀式の部屋の重々しい扉が再び開かれて、慌ただしくやってきた男の人が、父様へとなにやら耳打ちした。それから布に包まれた何か小

さなものを狂気をはらんだ目で検めた。

指——だった。

二本の青白い血の気の失われた指。

父様は笑う。

「あははっ。聖人ラ・ムルは魍魎に敗北したようだぞ！ あのクソ野郎。政治にまで口出ししてきやがって、あつけない最期だったな！」

ラ・ムルは国の者なら誰でも知っている高僧だ。

母方の叔父にあたる人物で、私たち姉妹にも優しい方だった。

「こんなときまで政治ですか」

「うるさい。うるさい！ 聖性も効かぬとなれば、もはや我々は滅びるしかないではないか。そんなこと認めん。認めんぞ！」

わけのわからないことを叫び始め、獣のように怒声を飛ばす父様。

口元はだらしなく歪み、笑みとも恐怖ともいえない色を浮かべている。

ああ——、この人は怖いんだなと思った。

父につき従っている者たちも、周りにいる兵士も、僧も。

誰一人たがわず、魍魎どもに恐怖している。

いずれ、自らも獣のように食べ散らかされ、魍魎となり徘徊することを恐れている。

聖人ラ・ムルの死は、また一つ、父のタガを外したようだ。

「そうだ……。お前の姉さまが本当に”聖女”かどうか試してみないか。いい考えだ。いい考えだ！ そうだろう。おまえたちもそう思うだろう」

ゾクリとするような、あの魍魎と同じような目をした男。

わめきちらす乱痴気な言論が、どこか遠くに聞こえた。

「父様——」

姉さまが祈りを中断し、声を張り上げる。

「聖女よ。祈りをやめるな。それとも、貴様はただの偽者にすぎなかったのか」

実の娘に、ここまで冷淡な声が出せるものなのか。

まるで、モノに向けるような目。

「いひひ。まあいい。いまから試せば済むことだからな」

困惑の気配。僧も兵士も男の狂気にあてられている。

「いいか。この腐れた魍魎の『指』を聖女に食わせろ。真の聖女であれば、ひひひつ、助かるだろう。魍魎にはならず、我々も助かるというわけだ。聖女でなければ、我々は死ぬつ。みんな死ぬ。ひひひつ」

壊れた理論。

狂った人倫。

しかし、それすらも政治の機微の中では存在を許されている。

いくつも伸びる指先が証明していた。

男たちは姉さまの身体を押さえこんでいた。

体が燃え上がるような怒りに、わたしは飛びこんだ。

「姉さまを離せ、下郎ども！」

「暴れるなゾイ。神聖な儀式の最中だぞ」

かつて父と呼んだ男に全身を押しつぶされて、呼吸すらままならぬ状況だったが、灼けるような怒りに、全身が燃えるようだった。

しかし——、身体はピクリとも動かない。

姉さまも齡15の小娘にすぎない。大の大人に寄ってたかつて組み敷かれては、まともに身体を動かすことすらできない。

綺麗なお姉さまの身体を、ここぞとばかりに押さえこみ、獣欲を満足させようとする男ども。

ご辛抱くだされといいながら、四肢を、両の手、両の足をひとり一本といった体で抱く彼ら。

恭しきは、むしろ暴れまわる性的欲望を強調する媚態のようだ。

「いやー、いやあー！ お父様やめさせてください！ 死にたくない！ 死にたくない！」

国中から聖女と崇められていた姉さまは、ただの小娘に過ぎず、無力な女こどもとして、命乞いをしていた。

父だった男から、聖人ラ・ムルの指先を格式ばった宗教行為として受け取る男。

身をよじり、涙でグチャグチャになった顔で、歯を折れんばかりに口元に力を入れる姉さま。

ああ、でも無意味だった。
無力だった。

仕事熱心な彼らを取り出してきたのは、何処から持ち出してきたのは、奇妙なほど洗練された丸い割つかのような器具。

開口器。

口腔内に差し込み、口を強制的に開けたままにする道具だ。

最初は何をしているのかわからなかった。

きつく真一文字に結ばれた口元に、冷たい先端が差し込まれ、テコの原理でグイグイと裂開されていくのだ。

なけなしのプライドも、命も、恐怖も、すべて無意味だと言わんばかりに。

開かれ固定されていく。

年齢15にすぎない乙女が、こぶし大の大きさで口を開いたまま固定される。

どんなにか恥ずかしかったことだろう。

いや、それは――まぎれもなく命の危機。

口を開かれたままのお姉さまは、それでも懇請の声をあげる。

私も口のきけない姉さまの代わりに、かつて父だった人間に乞い願った。

「あ、ああ……父様。どうか。どうかお考えなおしてください。生意気な言動も直します。どうか、姉さまだけはとらないでください。わたしの唯一のお姉さまだけは。お願いします」

「無理だな。やつらの目を見てみる。もはやワシの命令など関係ない。聖なるものを侵し、試してみなければもはや収まらんよ」

試す？

神を試す。聖性を試すというのか。

どれだけはねつけようとしても、力が足りなかった。

力があれば、テレキネシスのように吹っ飛ばせる力があれば。

姉さまを助けられるのに。

「お……い」

泣きはらした目で私を見つめ、私の名を呼ぶ姉さま。

馬乗りになった男が、姉さまの頬をつかみ、開けられた口の中に――

直視できなかつた。

「いあああああゝ あゝ あゝ あゝ あゝ」

人のモノとは思えぬほどの絶叫が響き。

男どもは、自分のしでかした行為に、かすかな罪悪感を覚えている。

結果として、現出したのは寂寥とした沈黙。

互いに目を合わせて、バツの悪そうな顔になり、しきりに自分は悪くないと言いつつも聞かせながら、奴らはようやく姉さまの身体から飛びのいた。

姉さまは、すぐに口元に自分の手をやってがむしやらに開口器をはずし二本の指を吐き出した。

ふと身体が軽くなっていることに気づく。

男が私の身体からどいていた。残忍な笑みを浮かべる男を一瞥し、私は姉さまに駆け寄った。

「姉さま。お身体は……」

顔を伏せている姉さまの表情はみえない。

けれど、嫌な予感はいや増すばかり。

あれが――感染性のものだったら――。

「姉さま。お顔をお見せください」

私はいつか姉さまがしてくれたように、指先で姉さまの髪をかきあげようとした。

気がつくくと、世界は赤く。紅く。アカク。沈んでいた。

混濁した瞳が私を食料として見定め、私の指先はかつて姉さまだったモノに、姉さまの形をした魍魎にかみちぎられていた。

「感染してるぞー」「やっぱり聖女様でもダメだったんだ」「俺たち……死ぬしかないんだ」

ゆらりと立ち上がる姉さま。

指先がなくなつた感覚に、よくない毒素が体の内側をせりあがってくるような感覚。

瞬間的に感じたのは、姉の身を案じることもなく、男どもへの怒

りでもなく、かつて肉親だった男への憎悪でもなく。

——自身の死。

死への恐怖。

死にたくないというなりふりかまわない思いだけだ。

「姉さま。いやだ。やめて。姉さま」

首元に姉さまの口が迫る。

「……ぐみ虫が」

皮肉なことに、私の命を救ったのは、あの男だった。

あの男は、狂気を生への執着に塗り替えて、カトラスサーベルで、姉さまの美しい顔を一突きしたのだ。

姉さまは、死んだ。

「お前も死んだら、ワシが困るなあ」

熱い。熱い。ああああつ。痛い。ぐじやぐじやになった思考で、男をにらみつける。

腕が切り飛ばされていた。

怒りと痛みで、もはや言葉にできないほど思考はイカれていたが、煮えたぎるほどの憎悪こそが、ゾンビ化することをまぬがれさせていた。

憎い。憎い……。殺してやる。

★
||

しかし、結局のところ——。

私は無力な小娘にすぎなかった。あの男が私を殺さないのは、情けや親子としての感情ではなく、ただ利用価値があるからだ。

つまり、聖女信仰のある我が国においては、あの男にとって、女の子もはいわば、赤ん坊のへその緒のようなもの。権力の紐帯なのだ。

姉さまが死んだあとの私は、部屋から一步もでず、なにもせず、ただの傀儡であり続けた。

あの男が死ねと言えば死んだだろう。未練もなく、砕けたガラスの

ようなもの。

どうでもいい。

果てしなくすべてがどうでもいい。

案外、ゾンビは倒しやすく、それなりに自衛することも可能だと知ったのは、私にとっては関係のない世界の出来事。

遠い日本という国で、なにやらゾンビ避けする方法が編み出されたなどという話も聞いた。

夜月緋色というまぎれもない”聖女”の存在。

聖女はただそうであるという理由だけで、そこに在ることが許されている。

ああ、もしも。

もしも、世界が——もう少し優しければ、姉さまは生きておられただろう。

ふと、スマホが震えていた。

ソシヤゲをなにもしなくなったスマホは、ただの連絡手段になり果てていた。

知り合いも友人もない私に連絡をかけてくるものはいない。いたずらの類かとも思ったが——。

なにもない私が、これ以上失うものもあるはずがない。

瞳。

闇が広がっていた。

「こんにちは。ゾイ」

「あなたは誰？」

「わたしはジユデイ……」

「ジユデイ？」

「ねえ。あなた。指を失ったのね。かわいそう」

右手は空っぽ。心も空っぽ。そこに、すっと入り込んでくるような慈愛の声だった。

「指を失ったのは私が愚かだったから」

「そうね。猫だって抵抗するとき爪を立てるわ。あなたは爪をたてることすらできないのね」

「爪がほしい」

「そう。爪がほしいのね。いいわ。与えてあげる」

世界に引っかけ傷を負わせてやる。

★
||

「と、そういうわけで、ジユデツカ——いや、イスカリオテのジユデイがやってることは、ただの口添えだ。ただ、ささやきかけているだけだ。汝の欲するところをなせとな」

「それで」オレは口角をあげた。「今話を聞かせてオレの同情でもひこうっていいのか」

「そうではない。お前様よ」

闇が広がる目だった。

混濁した水色は、もしかするとゾンビウイルスの含有量が人よりも多いのかもしれない。

「私が——私たちがやろうとしていることは、世界を救うことではない。逆だ。むしろ世界を破壊しようとしているのだ。お前様は根が純朴な性質なのだろう。しかし、本当にここらの底で願っておるのは世界を壊し、運命を壊し、運命を操る神を殺すことではないか」

「オレはゾンビが憎いだけだ」

「本当にそうかな。妹が死に、怨んだのだろう、この世界を」

「怨んだのはゾンビであって人間じゃない。人間に全滅しろとは思っていない」

「ふふ。そうか。お前様はずいぶんとかわいらしい思考をしている。しかし冷静に考えろ。ヒロウイルスは客観的に見れば、ゾンビを駆逐する聖性を帯びている。お前がゾンビを一匹残らず駆逐したいのなら、むしろヒロウイルスが世界に広まるように心がけるべきだろう」

「違う。夜月緋色は悪魔だ。ヒロウイルスに汚染されれば人は死ぬ。それを誰もわかっていないだけだ」

「ただの遊び好きの小学生にしか思えんがな。聖女などと呼ばれてい

た姉さまも、今思えば普通の人間だった。おまえは他者が自分の考えをわからないとみれば、その他者もゾンビだとみなして殺すのだから」

「まちがっていないだろう？」

「間違っていないさ。ただ、その考えを敷衍ふえんすると、結局、他者と自分の考えはどこかしらで異なってくるのだから、他者はすべてゾンビであるということになる」

つまり――。

ゾイは遠くを見つめるように言った。

「同じだ」

そして続ける。

「似たものどうしだよ、お前様」

そして、

「私たちはヒトを怨んでいる。ヒトの絶滅を願っている」

不条理な世界が壊れることを願っている。

それが答えだった。

ハザードレベル127

いよいよ年が明けます。

ボクは”いんとれびつど”の船内で、年明け配信をしている。そこそこの広さのあるブリーフィングルーム。

わが祖国、日本が贈ってくれたきらびやかな屏風の裏側から――。

「ちらっ」

つと覗く。

『あ、かわいい子発見』『チラ見せするその姿はっ！』『なにかな。あでやかな色合い』『ちらって口でいうのかわいすぎだろ』『あくこの子、自分の可愛さを理解してますね』

お次は反対側から。

「ちらちらっ」

『じらす』『じらすくじら』『袖ちらするのがいいのよ』『みやびー』『えっろー』『えっど』

さらには上から。

「ちらり」

『トイレで覗かれたときみたいだ』『おまえ幼女から覗かれた経験あるのかよ。勝ち組だな』『ああ、お花の髪飾りが綺麗』『ヒロちゃんが天使だと再認識した日』

チラ見せだけで上々な反応だ。

よーし。時間いっぱいになりました。

お隣には、かわいい後輩の命ちゃん。うなづきあう。

アメリカ大統領の娘。アメリカちゃん。余裕な笑み。

天才科学者のピンクちゃん。あれ？　なんかぼーっとしているけど大丈夫？

そうか、ピンクちゃんは八歳児。まごうことなき小学校低学年。もうそろそろおねむの時間か。

ピンクちゃんのことには心配だったけど、もう時間いっぱい。

ボクはカウントダウンを始める。

今年最後の十秒だ。

「10、9、8」

『あく〜』『だめだめエツチすぎます』『お前らカウントダウンで何はしやいでるんだ』

「7、6、5」

『そっぴい前にもカウントダウンしたことあつたよな』『確かドローンを落とした時だな』

「4、3、2」

『いよいよ年明けか〜』『みんな生存おつかれ』『ゾンビ疲れしてきた今日このごろ』

「1」

『1』『1』『1』『みんないっしょにいくぞ!』『ダイナモ感覚。ダイナモ感覚』

「0!」

『ゼロ。ゼロ。ゼロ』『あああああ!』『みんなハッピーニューイヤー!!』『ウン億円するかもしれない屏風が取り払われて……』『ギター!』
そう、ボクは——。屏風を念動力でさつと取り払った。国宝級の屏風なので取り扱い注意です。

ボクたちは、用意してもらった畳の上に正座していた。

正確には、命ちゃん。ドレス姿——、横座り。ふんわりスカートで足もとは見えない仕様。

まるで、一輪の花みたいに綺麗。

ピンクちゃん。うん。かわいい。予告したとおり振袖姿。

正座は無理で、アヒルちゃん座りしている。なでまわしたくなるほど可愛いらしい。

眠たげだけど、ごしごし目をこすってがんばっている。

アメリカちゃん。紅いドレス。で、この子だけ畳の上に椅子を用意するということある意味、暴挙。

でも、めちやくちやそれがサマになっていて、まるでお人形さんみたいだ。

黙っていれば。そう——黙っていれば、我儘なお姫様も静かなお姫様も判別はつかない。

そしてボク。正座は——。はい、ちょっと無理なので浮いてます。ドラえもんは数ミリ浮いているらしいけど、それと同じ要領だ。足がしびれないためにはしかたない。

三つ指ついて、丁寧にごあいさつ。

「あけましておめでどうございます」

『あけましておめでどう』『おめでどう。振袖かわいいよ』『うむ。日本の振袖だな』『日本がドヤ顔でコメントしてやがる』『日本、大勝利やんけ』『くっ殺せ』『日本だけなんでこんなに忖度されてるんだ』『落ち着けよおまえら。明日になればみんな友達だ』『ズツ友だよ』『おう。兄弟仲良くしような』『アツ……うん』『今日はしおらしいかよ』

「まあ、振袖については、明日のセレモニーでも着るから事前予告だよ。ちゃんと着こなせるか心配だったしね。寝るときは脱ぐから、それも心配だけど」

『我が国のドレスも我が国のドレスもどうかあ！』『国宝を送ったのですが、お気に召されませんかでしたでしょうか』『ピンクちゃんのピンク振袖もかわいいな。しかし見事な迷彩というか欺瞞色だが』『毒ピンめっちゃねむそうじゃね』『アメリカ様に踏まれたい』

「うーん。みんながボクに超特大スパチャを送ってくれたのは、本当によろしいよ。ありがとう！でも、物理的に全部装備するのは難しかったです」

『せやろな』『地球上のほとんどの国は贈り物しただろうしな』『ヒロちゃんからの贈り物に対するフライングお礼だよ』『ポストゾンビアポカリプスを考えてのことだろうな』

ヒロウイルスに対するお礼っていうのはわかっているんだ。

でも、それでもボクのことを考えてくれてるのはうれしいし。

悪くない気分。

「いまから軽く、みんなが贈ってくれたプレゼントを紹介するね」

『後輩ちゃんが目録を読み上げ』『ヒロちゃんが物品（国宝級）を浮かし』『アメ嬢と毒ピンが解説するって感じか』

しばらく目録の読み上げが続く。

「続きまして、82番目。……国名は伏せてあげます。先輩の1/1

スケールファイギュアです」

『なぜ作ったし』『ヒロちゃん微笑みがひきつってる』『これは戦犯やろどう見ても』『ストーカー国家キモイ』『でもちよつとほしいかも』『おい！』『ワンオフなのか量産型なのかそれが問題だ』

そつと段ボールを開けたときの衝撃といつたらなかったよ。

なぜかボクのファイギュアが入っていたんだ。

これを贈られてどうしろっていうんだろう。

「馬鹿なの？」とアメリカ嬢が切り捨てました。

某国の担当者は、国名を明かさなかつた命ちゃんに感謝しているに違いない。

「続きまして、127番目。……北欧あたりのどつかの国とだけ言うっておきます。剣です」

『宝剑か』『エクスカリバー？』『グラム？』『フラガラツハ』『ていうか刃物贈んなし』『小学生に刃物贈っちゃダメだろ』『あくあ。ヒロちゃんが案の定キラキラしてるし』『ヒロちゃん男の子説あると思います』『ねーよw』

「続きまして、164番目。アメリカから贈られてきた夢の国への永久フリーパスです」

命ちゃんの声に従って、ボクは七色に光る綺麗なカードをふわふわ浮かす。

アメリカからの贈り物ということで、がぜんやる気になっているのはアメリカちゃんだ。

「まあ言うまでもないけど、わたしの国は、世界のエンタメの最前線でもあるのよ。緋色もきつと満足すると思うわ。ほら、ピンクも何か言いなさいよ」

「うん……うん。ピンクもそう思うぞ」

ふわふわな声。

本当の夢の国に旅立ちそうだ。

『毒ピンほんま大丈夫か』『お子様なピンクかわゆ』『小学生のころ大みそかにがんばって起きてたこと思い出したわ』『なんやこれ……父性があふれる』『父性なアクセスを検知しました！』

「あ、ピンクちゃん。眠たいんだったら寝ててもいいよ」

「ん……ピンクは大丈夫う。にゆう」

『おいおいピンクついに崩れたぞ』『毒ピンがヒロちゃんに膝枕されている』『毒ピン代われ』『ヒロちゃん代わって』『てえてえとはこのことだ！』

ついに陥落してしまったみたい。

コアラか何かみたいにくっつくついてくる。

ちいさなおててがボクの胴回りにまわって、安心した姿勢になったところで、寝息が穏やかになった。こ、これは――。

父性なアクセス検知。

ピンクちゃんのピンクな髪の毛をなでてみたり。

そつと、ほっぺたをつつついてみたり。

八歳児の張りのあるお肌をぷにぷにする、跳ね返りがよくてついつい楽しんでしまう。

『んゆ』『ピンクちゃんねるの登録者数がなぜか爆上がりしている件』『なぜかではないが』『明日世界が救われるというのに、オレたちは幼女を愛でているだけ』『幼女を愛でて何が悪い』

「ピンクちゃんは今日のために一番がんばってくれたんだよ。みんな静かに見守ってあげてね」

『毒ピンの功績は言うまでもない』『ヒロちゃんが一番いじりたおしている件』『ピンクちゃんかわゆ』『後輩ちゃんもさすがに嫉妬めらめらではないみたいだな』『俺にはアメ嬢のほうがかまいたくてうずうずしているように思える』『はあ、オレ置になりてえ』

ピンクちゃんを起こさないように、静かに目録読み上げは続き……。

ようやく、完了。

日本だけ不均衡という事態を少しは解消できたかな。

『わが国の贈った杖が実にヒロちゃんに似合っていた』『儀仗とかおまえヒロちゃんの年を考えろ』『なんだと。てめえのところはたかだかコーヒーカップじゃねえか』『価値とかうんぬんじゃなくてだな。ヒロちゃんが喜んだやつが一番だろ』『ヒロちゃんは何が一番よかった

？』

「あー、みんなよかったよ」

『これは八方美人』『何が決められない日本人気質』『ヒロちゃん
が喜んでくれたならなににより』『わが国もやはり国宝を贈っておけば
よかった』『うちはめぼしいもんじゃないから、最高クラスのメイドさん贈
ろうとしたら断られた』『ヒト贈んなしw』『これにはヒロちゃんも苦
笑い』

いやなにしてんだよって話で。

まあ、世界的に見れば、顕貴な人を贈るって歴史的にはありがち
だったわけだけどさ。

たとえば、人質外交みたいな感じで、それだけこちらを信頼してま
すよってな話なわけで。

ただ、なんといえはいいか。

民主主義国家に生まれたボクとしては、人権問題というか、奴隷と
いうフレーズがちらついてよろしくない気がします。

ピンクママさんがお断りしてくれてよかったよ、ほんと。

☆
||

配信も夜の一時くらいで切り上げて、今日はそうそうに寝ることに
なりました。

明日は朝の10時くらいから式典が始まるけど、みんなはもっと早
い。

なぜなら、

——護衛ヘリ搭載艦”いずも”による検疫。

つまり、余計な武器をもっていないかだとか、そういうのがあるか
ら、朝早くから一国ずつ丁寧に見極めて、それから”いんとれぴつど
”へ乗船してもらうことになっている。

いうまでもないけど、集まっている人たちは超VIP。

危険にさらすわけにはいかない。武器とかを持ち込まれて、例えば
銃なんかを乱射されたり、爆弾を爆発させられたりしたら、今度こそ

世界秩序の崩壊だ。

ただでさえゾンビハザードで偉い人たちが死にまくってるからね。なんだかんだいっても、偉い人というか、世界の行く末を決める人は必要だという話です。

ヒロウイルスについては、町役場でしたように、血を薄めてそれを飲んでもらうという方向でいくことにした。

式次第を見る限りでは、たぶんみんながヒロゾンビになるのは、お昼頃になるだろう。

というわけで——ボクが向かっているのはピンクママのいる所長室だ。アメリカちゃんとは途中でわかれ、たぶんパパさんと明日の打ち合わせでもしているのだと思う。

「んゆ。ヒロちゃん……」

背中に感じるピンクちゃんのあつたかみ。

絵面的には、命ちゃんのほうが適しているかもしれないけど、パワーがあるのはボクのほうだからね。まあ命ちゃんもゾンビパワーで余裕ではあるんだけど、女の子に女の子の子を運ばせるってどうよって思ったわけです。お兄ちゃんこころです。

なに、セクハラ？ 男女同権に反する？

残念でした。TSしてます。

そんなわけで、ピンクちゃんはボクが責任をもってピンクママさんのところに運ぶことになりました。

所長室につくと、あいかわらずクールで雪女みたいな配色のピンクママさんが待っていた。

この人って、科学者然としていて肉感的な生々しさが無いんだよな。

存在感が透明で、清楚というかなんというか。

「うちの娘の無垢な寝顔があいかわらずかわいらしい」

つむがれる言葉は柔らかいんだけどね。

椅子に座っているピンクママさんにピンクちゃんを譲渡。

ピンクちゃん、ピンクママさんのおなかのあたりに無意識にしがみつく。

「ところで、ボクたちってどこで寝ればいいんでしょう」

「モモが説明していなかったか。艦内は安全だとは思いますが、一応セキユリティ上は安全な場所がいいだろうと思っっている。つまり、最も安全な場所。モモの部屋だ」

「ピンクちゃんのお部屋ですか」

巨大なベッドがひとつしかなかったと思うんだけど。

面積的には問題ないけど、女の子といっしょに寝るといっしょに、ほんのちよつとだけ引つ掛かりがなくてはならない。命ちゃんはずつと昔から同衾してきたからいまさらって感じだけどね。

ピンクちゃんは箱入り娘だからなー。朝起きたときにボクがいっしょに寝てて、いやじゃないかなみたいに勝手に考えちゃう。

ピンクちゃんには、ボクが男だって言っちゃったからな。

でも、ピンクママさんにはそのあたりの事情を伝えてないから、

「あの部屋の掃除ロボットを見ただろう。緊急時にはレーザーも撃つぞ」

と、まったく関係ないことを言った。

四足歩行のすごいやつね。

あれってそんな機能もついてたんだ。

すげえな……ピンクちゃん。

でもそれはそれとして、ベッドがひとつなんだけど。

「ん。なにか問題ありそうな表情だな」

「あ、いえ。あの部屋にはベッドがひとつだけだったと思うんですけど」

「ふむ……。同性であるし、ヒロちゃんくらいの年齢なら問題ないと思っただが……。後輩ちゃんはさすがに厳しかったか？ おもりをするような感じでいけるかと思っただがな」

「いえ、わたしは別に問題ありません」

命ちゃんは親しみをこめて言った。

もう、ピンクちゃんには慣れてるからね。この子は慣れたら早いんだよな。

セキユリティホールは強力だけど、いったん侵入したらガバガバというか。

敵と味方がはっきりしてる子だから、いったん味方認定すると激甘なんだと思う。

「では問題ないな」

「あのお」ボクはおずおずと手を挙げた。「実をいうとボク、元男だったんですけど」

「ん？ そうなのか」

「そうなんです」

「……」

「……」

じつと観察されている。うう、少し恥ずかしいぞ。

「それで？」

「え？」

「それで何か問題が？」

「いや別にないですけど、愛娘が元男と同衾してもいいのかなって」

「つまりヒロちゃんは八歳児に欲情する変態だということか？」

「違います！」

なんでロリコン認定されるんだよ。

ピンクちゃんはかわいいけど、性的に興奮したりはしません。

「なら問題ない。わたしは娘のことを信頼している。その娘が信頼している子のことでもまた信頼している。ヒロちゃんは悪い子ではないということもわかってるつもりだ」

なぜか撫でられています。

うーむん。この感覚にはあらがえないな。

☆
||

月明り。

淡い間接光に照らされた部屋に、かしゅんかしゅんと静穏設計のロボットの足音がかすかに響いている。ピンクちゃんは振袖を丁寧に脱がされて、すでにパジャマ姿。

ボクも、動きやすいオモシロTシャツに短パン姿だ。なぜか表面に

『性欲を持て余す』と書かかれてある。もちろん、用意してくれたのはマナさん。

思うにこれは、マナさんのこころをあらわしているのではないだろうか。

それにしても振袖つて着るのも脱ぐのも大変だね。

あれで、トイレとか行きたくなったらどうすればいいんだろう。ヒイロ力を用いてキャストオフするしかないか。もちろん、最終手段だけだね。

命ちゃんも、落ち着いたルームウェアに着替えている。

ピンクちゃんはかわいらしく寝息をたてていて、完全に夢の世界だ。

さて、ボクたちも寝ようか。

そう言おうとしたところで、命ちゃんが口を開いた。

「先輩……」

「ん？ どうしたの」

「ピンクさんはえらいですね」

「ほんとに突然どうしたの？」

「私はいまだに人間とか世界とか、わりとどうでもいいと思っす」

「うん」

「対してピンクさんは、先輩に寄り添える人です。こんなに小さいのに、ヒトのこと、世界のこと、他者のことを考えられる人です」

「ふうむ。ピンクちゃんがいい子なのは確かだね」

なんかよくわからないけど、命ちゃんはネガティブモードに入ってるらしい。

まあ、陰キヤなボクにはよくわかる。

他人のキラキラした部分を見ると、自分の闇サイドが際立つということだろう。

ピンクちゃんはなんといえがいいか……まあ、子どもなんだよな。

無垢で汚れが少ないというか。

確かに天才児で大人顔負けの知能と知識を有しているけれども、端

的に言えば人間の善性を信じているんだと思う。

「私は先輩のことを一番考えて、一番寄り添おうと思ってるのに、ピンクさんは簡単に追い抜いていきます。先輩がとられそうで怖くなるんです」

「考えすぎだと思うよ」

「時々自分の醜いところが嫌で嫌でたまらなくなるんです」

「命ちゃんは醜くなんかないよ」

どっちかというところ、命ちゃんも清廉なんだろうな。

清濁併せのむということがうまくいかないタイプというか。

他人と接触するのが嫌な潔癖症などところがあるんだと思う。

「配信をコラボしたりして、ピンクさんのほうが先輩のそばにいるのにはふさわしいって、そんなふうにも思ったりもするんです。先輩もピンクさんのこと好きでしょう」

「恋愛的な好きではないけどね」

「私のことも妹的な好きでしかないんですよ」

「言葉にしたら固定されそうだし、今はなんとも言えないかな」

命ちゃんが一瞬哀しげな顔になる。

ボクはいまだに命ちゃんに答えを返せない。

でも——、大事な子なのは確かだ。

笑っていてほしい。

そう、単純に思った。

ボクは月の光みたいにとつと柔らかく命ちゃんに触れた。

命ちゃんは両の手で唇をおさえている。

「仮差押えという解釈でよろしいのでしょうか」と命ちゃん。

その顔は紅く染まっている。

ボクの顔も紅いかも。

答えを返す直前——。

「ピンクもするぞっ！」

ふたりしてビクつとなった。

もしかして今の一連の流れ見ていらっしやったのですか。

恐る恐る見てみると、ピンクちゃんは完全に寝入っている。

口が半開きになって、すやすやとした寝息が聞こえる。
なんだ寝言か。

ほっとしたあと緊張が弛緩に変わり、ボクと命ちゃんは声を抑えて
笑った。

ハザードレベル128

セミの抜け殻。

ボクが思ったのはそれである。

つまり、どういうことかというところ、ピンクちゃんがその小さな四肢をボクの上半身あたりにまとわりつかせている。細くてちっちゃいの、大木にがちり固定されているセミの抜け殻のように、ピンクちゃんはボクに接しているといってもいい。

あどけない表情に、健やかな寝息。

抱き着いている表情には安心の二文字。

朝起きると、ピンクちゃんがそんな感じでした。

昨日――。

ひとつの大きなベッドで、ボクとピンクちゃん、そして命ちゃんは眠った。

今日という日の大事さから、いささか眠りが浅かったボクは、いちはやく目が覚めて今の状況に気づいたというわけだ。

さらに問題がある。

反対側にいる命ちゃんもまた、同じようにボクの片腕をがちりホールディング。

ボクの頭というか、髪の毛に顔をうずめて、すうすうと安らかな寝息を立てている。

なんらかの成分摂取をされているようだ。

こちらも高校生のわりにはあどけない表情。

――動けない。

動こうとすると、どっちは目を覚ましちゃうだろうし、ピンクちゃんも命ちゃんも眠つてるときは、ただのかわいい女の子で、そんな寝顔を見るのも悪くないと思ったからだ。

とはいえ、ずっとこうしているわけにもいかないだろう。

今日のヒロウイルスを受け渡しする式典は10時からを予定しているとはいえ、みんなの動き出しはもつと早い。

だとすれば、ボクたちもおとなしく待ち構えてないといけない気が

する。

時計がないから正確な時間はわからないけど、眠気の程度でだいたいはわかる。

たぶん、そろそろ7時になるかどうかってところじゃないかな。

もう少ししたら、ピンクママさんあたりが起こしにきてくれるような気がするけれど、自分で起きることもできない小学生だと思われるのは、気持ち的に釈然としないところだ。

起きようと思った。

さて、ではどうするかだけど。

どちらか一方を起こすとなれば、ピンクちゃんより年長な命ちゃんに決まっている。

「命ちゃん。起きて……」

「ふ。ふへ。先輩といっしょに……ふへ」

ホームセンターのときもだったけど、命ちゃんって眠ってるときはめちやくちや無防備だよな。

ボクの両腕は完全に固定されているけれど、まだ自由にできる第三の腕が残されている。

念動力だ。

不可視の腕で、命ちゃんのおでこあたりを撫でてみる。

「ごしごし。ごしごし。」

「ん。んっ。先輩、もつと撫でて……」

君、もしかして起きてないよね。

「命ちゃん。そろそろ起きて〜」

と、小声で問いかける。

おめめパチパチ。まだ寝ぼけ眼だけど、ようやく起きたみたいだ。

「起きた？」

「起きてないです。昨日みたいに目覚めのキツスが必要な案件です」

「もうっ。命ちゃんが動かないとボク起きれないんだけど」

「むっ」

命ちゃんが拗ねる。ぷくっどほっぺたを膨らませる。

その反応、八歳児のピンクちゃんと変わらないんだけど。

「命ちゃん。昨日のはボーナスステージだから」

一時の気の迷いとは言わない。

命ちゃんのことを大事に思ったのは確かだし、ボクも悪いなどは思っている。

「お兄ちゃんは男らしくないです」

「今のボクのどこに男要素が……」

しかたないので、おでこのあたりにキスを落としました。

「もうちよつと。もうちよつと下のほう」

しかたないので、ほっぺたのあたりにキスを落としました。

「どまんなか……どまんなかです」

君は野球投手に指示する人か。

しかたないので、普通に唇のあたりにキスを落としました。

「ん。先輩、男らしいです。かっこいいです」

なしくずしって怖いなって思う。

世の中の人為的ミスってほしいは、なしくずしのせいかもしれないし。

とりあえず、片腕が自由になったので、ボクはピンクちゃんを起ささないように、ゆっくりと腕を引き抜こうとする。

が、ダメ。

ピンクちゃんの無意識の力はゾンビのソレだ。

ボクじゃなかったら腕の骨が折れていたかもしれない。

人間には250本以上骨があるのよ、1本くらい何よとはさすがに言えない。

それぐらい、がっちりつかまれている。

そうこうしているうちに、起きだした命ちゃんがボクの目の前でルームウェアを脱ぎ始めた。

「み、命ちゃん、なにしてんの」

「なにして、シャワーでもあびようと思ひまして」

「だからってボクの目の前で脱がなくてもいいでしょ」

シャワールームは本棚で仕切られた向こう側にあつて、脱衣室らしきものもあつたはずだ。

ピンクちゃんのお部屋というくくりでは、他の部屋に行く必要はないけれど、ボクの目の前で着替える必要もないはず。

この娘、もしかするとストリッパーの気質があつたりするのだろうか。

お兄ちゃんは、男の人の前でほいほい服を脱がないか心配です。

「心配しなくても先輩だからしてるだけです」

「そうですか」

いつもの命ちゃんだった。

そんな命ちゃんは脱いだルームウェアを持ってきた黒のボストンバックに詰めこんで、下着姿のまま、シャワールームに向かってしまった。

残されたのはボクと眠ったままのピンクちゃんだけ。

「うーむ……」

あらためてピンクちゃんを見てみると、すぴすぴ寝ててかわいらしいな。

昨日のピンクちゃんはアメリカ大統領の娘、アメリカちゃんと喧嘩したりと、いままで以上に子どもっぽさを見せてくれた。

それだけに、今まで以上に仲良くなれた気がする。

今日までも、今日からも、ピンクちゃんは人類のためにがんばっている。

そんながんばりやさんを起こすのは、本当に忍びないけど、時を止めることはできないしやむを得ない。ボクは自由になったほうの手で、ピンクちゃんの頭を撫でた。

「むううん。あ、ヒロちゃん……」

ぽやっとしたまなざしで、ピンクちゃんが起きた。

「おはよう。ピンクちゃん。昨日は寝ちやっただね」

「んう。もつと寝る……」

「あ、もう起きなきゃダメだよ。朝ごはん食べて、しっかり栄養補給しないかね」

「わかった」

そう言って、ピンクちゃんは両目を閉じて唇を前に突き出した。

え、なんですか。

この構えは、もしかして。

「あの、ピンクちゃん」

「ん。どうしたヒロちゃん」

「マジでキスする五秒前みたいな顔してるけど」

「朝の目覚めのキスだぞ」

「欧米か」

欧米だよ……。

ピンクちゃんアメリカ人だし、ピンクママさんが溺愛しているみただったから、朝は目覚めのキスなんかさされているのかもしれない。「というか、さつき後輩ちゃんとしてたから、日本もそんな感じなんだと思っただぞ」

げげっ。見られていたのですか。

「眠ってたと思っただのですが」

「ゆめうつつに見てた」

「なるほどですね」

ピンクちゃんの観察眼も侮れない。

ベッドで眠ったままの恰好だから、ピンクちゃんのぷっくりとしたほっぺたも、淡い紅色をした唇もすぐそこにある。横向きになりながらピンクちゃんと顔をあわせている状態だ。

腕は自由になったからそのまま起きてもいいけれど……。

とりあえず、そっとおでこあたりにキスしてみました。

アメリカのドラマとかで、小さい子に大人がしているような感じですよ。

「ヒロちゃんは恥ずかしがりやだな」

それ以前に陰キヤなんですけどね。

ピンクちゃんの考えは豊かだ。当然、ボクが何を考えているかぐらいはわかったうえで言葉だろう。

例えば、いまは女の子だけどみみたいな考え。

ピンクちゃんといっしょのベッドに寝ていることへのかすかな罪悪感とか。

そういうもろもろを含んでの恥ずかしがりやという言葉なのだろうと思う。

「後輩ちゃんはシャワーか？」

「うん。もうそろそろあがると思うよ」

「後輩ちゃんの後には、ピンクたちもいつしよにシャワーを浴びるか」

「いつしよはマズイと思うけどね」

「ふふっ。冗談だぞ。ヒロちゃんをからかっただけだ」

この娘。小悪魔度があがってませんかね。

もちろん、シャワーは別々に入りました。

ボクが脱いだおもしろティーシャツをやたらと吸っていた命ちゃんがいいたことを、ここに記しておきます。

★
||

「小山内くん。君には一足早く私とともに”いんとれぴっど”に乗船してもらいたいのだが」

”いずも”内の貴賓室に呼び出された私——小山内は、江戸原首相の言葉に、いくぶんかの危機感を抱いた。

隣にいる撫子くんを見してみる。

今でこそ首相の秘書をしている撫子くんだが、少し前には自衛隊員に所属もしていた。

今回の江戸原首相の”お考え”については、さすがに問題があることに気づいているだろう。

端正な顔立ちの撫子くんだったが、今の顔はさながら般若。

いや、すまない。なんで何も言っていないのに伝わるんだよ！

女性って怖いなど心の芯から思う。

わたしはしがない公務員として口を開く。

「ええと。首相。本日の日本の乗船順番はしんがりを引き受けてすべての国の検疫が終わったあとではありませんでしたか」

そうテロリストがめぐりこんでいる可能性がある以上”いんとれぴっど”に乗り込む前の検疫の役割をはたす、”ここ”いずも”の存在

は大きい。

さながら究極の防壁を果たす『皮膚』のように、身体に侵入される前にウイルスであるテロリストは排除しなければならない。

自分がどうこうというわけではないが、テロリストは元自衛隊員である可能性が高く、最も考えられるのは久我春人の再来だ。

さすがに国の代表になりすますというのは難しいだろうが、ボディガードならありうるかもしれない。

わたしは久我を見ている。それなりに知ってもいる。

だから”いずも”に残るべきだと考えていたのだが――。

江戸原首相の意向は違うらしい。

「小山内くん。アメリカに水をあげられたのは大変遺憾の意が強いのだよ」

「はあ……なるほど」

気の抜けた返事をしてしまう。

アメリカとの差といえば、昨日のうちにアメリカ合衆国大統領トミー・デフォルトマン氏と、その娘アメリカ嬢が”いんとれびつど”に乗船したことだろう。

どの国よりも早い乗船。一番乗り。世界一位。

しかし、言うまでもないが、”いんとれびつど”はアメリカ国籍の船だ。

組織としては国際機関に片足つつこんでいるから、微妙なところではあるとはいえ、アメリカ大統領がアメリカの船に乗って何が悪いという論理も成り立つ。

もつとも――、みんなで一齐に乗船しようねと、幼稚園の手をつなぎながらのゴールのようなことを言っておいて、自分からルールを破るのは、アメリカのよくある横紙破りではあるのだが。

「そんなに気にすることはないと思いますがね」

「何をいつているんだ。今日のセレモニーは歴史的なイベントになるのだぞー！」

青筋たてて怒鳴る江戸原首相。

そんなに怒ると血圧あがりますよ。

「日本は検疫を果たすという点で、非常に重要な役割を担っているものと思います。与えられた職責をまっとうするのが、国際的信用につながるものと愚行いたします!」

びしっと敬礼してみた。

「それは”いずも”にいる隊員が果たせばいい。そもそも君はヒロちゃん係だろう」

つまり、オレは黙って首相のおもりをしておけってことね……。

最後の抵抗ということで、いちおう撫子くん視線をやる。

撫子くんは心得たとばかりに口を開く。

「首相。小山内先輩の存在は検疫にとって非常に有用だと思われる。再考をお願いいたします」

「いやいや、撫子君、組織はひとりで動いているものではないのだよ。いかに小山内くんが強くても、それは人ひとりの力にすぎない。小山内くんを侮っているわけではないが、我が国は組織として一致団結して、事に当たらなければならないのだよ」

「なに言ってるんですか。なにも中身のないことをおっしゃらないでください」

いいぞいいぞ。その調子だ。撫子くん。

「中身がないってそんな……うーん。まあいい」

「まあいいってなんですか。ごまかさないうでください」

「ともかくだ!」バンと机をたたき首相。「これは決定事項だ」

「決定事項? どういうことですか。秘書の私を通さないうでアメリカ大統領に直電しましたね?」

ひえ。撫子くんが鬼のような形相になっている。

江戸原首相も滝のような汗をだしている。

「まあまあまあまあ、落ち着き給え。撫子くん。わたしが友人としてトミーに電話をかけてもなにも変なところはないだろう」

おそらく、アメリカとしてはどうでもよかつたのだらうと思われる。

なにしろ、すでにアメリカは一番乗りしているのだ。日本が二番だらうが最後だらうが、わりとどうでもよかつたんじゃないだらうか。

検疫を軽視しているとは思うものの、自分たちが横紙破りをしていて、日本にそれをするなどというのは言い難いというのもあったのかもしれない。

「専門家の意見ぐらい聞いてください」と撫子くん。

「ああ、わかった。次からはそうしよう」

「まったく……」

撫子くんがタブレットを見た。わずかな思考。時間を見ているのだろう。

「小山内先輩。申し訳ありませんが、首相についていつてくださいますか」

それが結論らしい。

「かまわないが、今からでもアメリカ側に打診すればよくないか？」
「いえ、向こうは向こうで警備体制を敷いてるはずですから、予定を今から組み替えるのは難しいと思います。もう少し首相が早くおっしゃってくだされば、こういう事態も避けられたかもしれないけれど」

「連絡が遅れたのは申し訳なかった」

報告。連絡。相談。

まあ組織で動くうえでは基本中の基本だが、日本つてわりと『わかってくれるだろう』で動くところがあるからな。首相もご多分に漏れずというやつなんだろう。

いささかの不安は残るもの。

わたしは、首相とともに“いんとれびつど”に乗船することになった。

☆
||

8時になりました。全員集合はいたしません。

昨日聞いた予定だと、そろそろ“いずも”による検疫が始まっている時間だ。

そんな時間にボクたちは優雅に食事をとっています。

ピンクちゃんの専属シェフに会えるかなとも思ったんだけど、昨日も今日も忙しいらしくて会えなかった。食事はほんとに軽めのパンと目玉焼きとベーコンで、これぞ朝の定番って感じ。

持つてきてくれた人は、シェフではなくてピンクママさん自らだった。

温冷車っていうネコ車みたいな大きさのやつにトレイごと入れてきたらしい。

「デカイ通路を持つ」いんとれびつど」ならではの輸送法だろう。普通の大きさの空母だと通路はそこそこでしかないからね。

そんなわけで、ボクと命ちゃん、ピンクちゃんとピンクママさんは適当に置いてあった椅子に座り、トレイを念動力で浮かせている。

四人で互いに支えれば、結構な安定力があるみたいだ。

まるで見えないテーブルがそこにあるかのようで、まったく揺らぎがない。

「軽めの食事でよかったか？ 足りそうにないならもう少しもらってくるが」

ピンクママさんがボクに優しげに問いかけてきた。

「いえ大丈夫です。緊張するから、あんまり食べないほうがよさそうだし」

イベントが終われば、あとは楽しい歓談らしいけどね。

セレモニーは朝早くから始まって、夕方くらいまではかかる。

丸一日ということだから、立食パーティーみたいにするらしい。

毒物みたいな心配もなくはないけど、ヒイロゾンビになったら毒無効だしね。

ピンクちゃんの専属シェフも駆り出されるほどの大量の食事を用意しているみたい。

まあイベントが終わったあとには時間ができるだろうし、そこはあまり気にしていないところです。

ボクとして気になるのは、むしろピンクママさんだ。

ここの所長であり艦長でもあるピンクママさん。こんなところで優雅に食事をとっていていいのって話です。いやもちろん愛娘と触

れ合うために、苦勞して時間調整しているのかもしれないけど。

そのあたりはピンクちゃんも気になっていたのか。

「ママ。艦長としての職責は果たさなくていいのか？」

食パンを裂きながら聞いた。

「ああ、私は一時的に艦長の地位を大統領に預けた」

「ん……そうなのか」

ピンクちゃん、何かを察してそれ以上は聞かない。

でも、少ししよんぼりしている。

これって……。どういうことですかね。

「大統領の地位は最高指揮官だからな」

ピンクママさんが続けた。

なるほど、なんとなくだけどわかった。

昨日、この船に乗艦したアメリカ合衆国大統領のトミーさん。

髭面イケメンのナイスガイって感じの人だったけど、あの人が軍の

統帥権も持つってことか。

よくわかんないのはピンクちゃんの組織は科学を標榜する組織だったはずだけど、どう考えても”いんとれびつど”は軍属だもんね。

統帥権を持つ大統領が、ここにいる以上、命令系統は一本化しておいたほうがいいっていう判断なのかもしれない。

「ん。じゃあ警護とかも大統領が指示するの？」とボクは聞いた。

「そういうことになるな」

「ピンクママさんは？」

「窓辺でサボテンに水やりでもしようかと思ってる」

要するに暇になったというところらしい。

「ピンクとしては不満だぞ。いいところだけ取って行って」

「モモ。お口わるわるはよくないぞ」

ピンクちゃんのお口まわりについた食パンの残りかすを、ハンカチで拭うピンクママさん。

「むうん」

「まあ悪いことばかりではない。トミーは優秀な軍人だし安心して任

せられる。わたしは久しぶりに娘を愛でる時間ができた。むしろいいことばかりなのではと密かに考えている……」
「考えてること、ぶっちやけてますけどね。」

ハザードレベル129

着替えまーす。

案外大変なのが、この着替えるという作業。

なにしろボクなんか、まだ一回しか着たことがないお召し物。

ワンピースみたいにスポって頭から着ればそれでおしまいというわけじゃない。

艦内にいるその道のプロが数人がかりで寄ってたかつて着せてくれる。

振袖というのは、それほどレベルが高い。

「腕あげてくださいいね」

んむ。

「おみあしを少しお上げください」

んむむ。

「きつくないですか」

ないです！

「髪飾りは昨日と同じものでよろしいでしょうか」

それで。

まちがつてもクラウンは振袖には似合わないのです。ズブシユ。

「扇子はこちらにさしておきますね」

帯のあたりにズブシユ。

いいセンスだ。

いや、もちろんこのなにげないアイテムも数百万円くらいするのかもしれないけど、ボクにはわからない。

最後に命ちゃんが帯のあたりに手をあてながら、くるくると周りをチエックしてくれる。

よいではないかごっこをしているわけではない。

「問題なさそうです。先輩」

「うん。みんな。ありがとう」

——ボク、なにもしてねえ……。

綺麗なお姉さんたちに着替えさせられるという、ある意味特異な体

験をしなければ振袖を装備することはできないのだ。

おそらく軍属というよりは、どちらかというサービス担当みたいな人たちだった。

ひとりは黒髪の日本人顔した人がいたんで、たぶん日系人かもしれない。

ボクの偏見かもしれないけれど、女の人って自分が着飾るのも好きだけど、ちっちゃい子を着せ替えするのも好きだよ。マナさんとかもそうだし。

なんかやりとげた感をだしながら、綺麗なお姉さんたちはにこやかに笑いながら去っていききました。全力で感謝するものです。

さて、これで装備完了。

振袖を装備したボクは当然のことながら、かなりのところ足さばきが制限される。

なにしろ、ちよんつとしか動かせないからね。

テロがあるかもしれないときに、こんな装備で大丈夫か？ と、思いはするものの。

なあに、いざとなったら足元をはだけさせて全力全開で動けばいい。

「先輩。おトイレは大丈夫ですか？」

「ふふっ。大丈夫だよ。結局のところロングスカートといっしょの構造なんだから、いざとなれば、ほらこうやって」

念動力でまくりあげればいいのです。

おみあしぺろん。

「ヒロちゃん。ちよつとはしたくないぞー！」

ピンクちゃんに叱られてしまいました。申し訳ない。

そんなピンクちゃんもピンク色の振袖を着ている。こうしてみると欺瞞色だけど、ちんまいので、ただただかわいらしいとしか。

ピンクちゃんもなんといえがいいか、容量が小さいのでトイレに行きたくなったときは考えてたほうがいいと思うんだけどな。

立食パーティのあととかヤバくない？

「ピンクは脱ぎたくなったらいつものスタイルに戻るだけだ」

なるほど、ドクタースタイルに戻るのね。

まあイベント中はなかなかそんな機会もないとは思っただけど、そこはボクがカヴァーすればいいだろう。

必然的にボクが参加すると決めた時点で、ボクがイベントの中心だから、義務みたいなもんだ。

「うーむ……トイレ……テレポ」

膀胱内の物質を直接トイレへテレポーションできれば楽そうなんだけどな。

「できなくはないと思うぞ」

え、マジですか。

ただ、なんか怖いからやめておこうと思います。

★
||

西欧の聖なる書物を見ると――。

最終章でフラグもなにもなく”竜”が突然登場して大暴れする。

おそらく竜の系譜は悪魔にあたる。

つまり、年若き始まりの人間をだました、あの”蛇”と同一の存在である。

ただ人間をだまして楽園を追放させるきつかけをつくったに過ぎない蛇が、よく竜と呼ばれるまで出世したものだど、当時のわたしは思っただものだ。

「なあ、そう思うだろう。お前様」

「いよいよ”いずも”による検疫が始まり、わたしは久我に話しかけた。

「くだらない御託はいい。何が言いたいんだ」

「せいぜい世界の終わりに、せめて竜と呼ばれる程度にはなろうじやないか」

「竜はメシアに打倒されるんだろう?」

「ほうよく知っておるな。日本人は聖なる書物に疎いとばかり思っっておったが」

「馬鹿にするなよ。教養の範囲だろ」

久我がにらみつけてくる。

反抗心むき出しの犬のようで、その視線もまた心地よい。

「ひとつはつきりさせておきたい」

「なんぞえ。お前様」

「事が成功しようが失敗しようが、おそらく世界のおたずねものになるのは間違いない。それでお前はいいのか？」

「まさか、わたしを心配してくれているのか」

「それこそまさかだ。いざというときにおじけづかれても困るだけだ」

「それはこちらのセリフだ。わたしを妹とみまごうて、躊躇してくれなよ。お前様」

「オレが確認したいのはな……おまえの動機は、父親に対する復讐だろう。違うか？」

「違わんさ」

わざわざ語って聞かせたのだ。

父と呼ぶのも汚らわしいあの男を滅殺したい気持ちは当然ある。

「なら、お前は国に帰って、そいつに復讐すればいい」

「道理だな」わたしは嘆息した。「しかし、言っただろう。わたしには力がない」

「ジユデツカと取引したのか？」

「ことが終われば、我が父を殺すだけの力をやろうと？ まさかそこまでアフターサービスあふれる組織だとも思っているのか」

ジユデツカには、人心を惑わす力がある。

しかし、逆にいえば、人心を惑わす力しかない。

「お前様よ。復讐は自分の力でせねば意味があるまい」
「だろうな」

「だったら簡単なことだ。名を呼ぶのもおぞましいあいつは己の権力に固執している。今日この日に娘が世界に宣戦布告すればどうなるかわかるだろう」

「テロリストの仲間……家族と思われて、世界からリンチされる」

「そういうことだ。いくら取り繕っても必ずそうなるだろう。人は自分がかわいく他人が醜い。わかりやすい悪の首魁がでてくれば義憤にかられた諸国は発情した犬のように我が国を滅ぼしてくれるだろう。わたしはせいぜい派手に殺されればいい」

「死ぬつもりなのか」

「当たり前だろう。わたしはあいつの娘なんだぞ。存在からして穢れている」

身体の内側から、精神まで。

何億もの虫がはいずりまわっているような感覚だ。

穢らわしい。ああ——、ケガれている。

姉さまを殺したときに、やつは楽しんでいた。

ゾンビウイルスに冒され、よじれ狂う様を楽しんでいた。

唯一ケガれていないのは、肉の身体ではなく木組の義手だけだ。

わたしは義手を残ったほうの腕で、そっと抱く。

——世界をコワそう。

ほどなくして”いずも”から乗船の許可がおりた。

わたしたちは連れ立って小型のボートに乗りこむ。

「これでルビコン川を渡ってしまったな。海の上では早々に逃げられんぞ」

「川じゃなくて海だがな」

「それはマジレスというやつか」

「……」

久我は応えなかった。

感情を捨て去ったような表情。

怨嗟といってもいい。

久我の瞳に宿る昏い憎悪の炎を見て、わたしは愉快的な気持ちになった。

同志という言葉がこころに浮かんだ。

ボートからタラップを伝い”いずも”に乗船する。

この”いずも”に乗船できるのは一国につきふたりまでとなっている。

甲板上には、いくつかの天幕が張られ、待機者が何組か座っていた。年端のいかぬ子どもたちが多い。

ヒイロゾンビは”人気”によって力を増す傾向にあり、子どもというのは人気のコンテンツだからだ。子どもを政治に利用しようとするやからはどこの国にも多いらしい。

「こちらにござる席ください」

迷彩服を着た男に着席を促される。

ボディガードは座らない。わたしの座る椅子の横に手を前にした状態で待機している。

およそこの国もそうだ。

ただ国によっては、父親がVIPで娘がいつしよにとか、そういう例も多いようだ。

「……」

父親らしき人物と楽しげに歓談する様子を見て、胸の奥がざわついた。

無意識のうちに笑いがこぼれる。

笑いに影が伸びる。

「えー、ゾイ様。ゾイ・トゥリットトリ・ビットリオ様はいらっしゃいますか」

そのうち自衛隊員がわたしの名前を呼んだ。

「わたしだ」

久我也わたしのあとにつき従う。

案内されたのは、急遽作ったであろうプレハブ小屋のようなところだ。

VIP相手に、チープなものだと思ったものの、見栄より実をとったということなのかもしれない。昨日の夜月緋色が着艦したときには影も形もなかったことからすると、こういう小屋を使って検疫するという手法そのものが秘匿されていた可能性がある。

小屋の中は狭苦しく、真四角に切り取られた空間だ。空調はわずかに効いており、急遽立てたにしては気が利いている。わたしの目の前には長机が置かれており、そこには五名のお偉方が座っていた。

目の前に座っているジジイの眼光は鋭い。

そして、目の前には小さなパイプ椅子。

あえて屈辱的な仕打ちをして、思想反応を見るという趣向か。

おもしろい。

「さて、それではお名前から教えていただけますかな」

「はい♪ ゾイ・トゥリトトリ・ビットリオと申します。世界平和を望むものです」

茶番は十分ほど続いた。

そもそも、思想テストをしたところでわざわざテロを行いますなんて言う馬鹿はいない。

また、疑わしいといったところで、こいつらに国どうしの取り決めを止める権限なんてないのだ。

面接が終わったあと。

いよいよ本番となる。武器等の携帯がないかのチェックだ。

ここで久我とはいったん別の部屋に通された。

「裸になる必要はあるか？」

「いえ、そこまでは必要ありません」

ずいぶんと甘いことだ。

カーテンに仕切られた場所で、女の兵士に体中をまさぐられる。

当然、久我も同様の儀式を受けているだろう。

むしろ、ボディガードのほうを警戒している節がある。

今頃、裸にひん剥かれるぐらいはされているだろう。

わたしのほうは子どもで王族で、女ということが効いたようだ。

細長い棒のような機械で火薬の類を持ってないかも探られたが、義手に仕込んだ爆薬は最新式で成分分析でもされない限りは問題ない。

「義手ですか」

女は少しだけ妙な表情になる。

規約ではおそらく少しでも疑わしいなら調べるということになっているのだろう。

だが、わたしはか弱い少女にすぎない。

少年兵がAKを片手に戦場を駆け抜けたり、子どもに爆弾をまとわせるような世界で生きてない日本人にとっては、義手の少女というだけで、同情を買える。

安い買い物だった。

「姉さまが——、ゾンビになったの」わたしは声を震わせた。「それで噛まれて」

「そう大変だったわね」

女はしかめっ面になった。

それ以上は詮索されなかった。

あと十年も生きていれば女優にでもなれたかもしれない。

わたしがふと思うのは、

——女がミスをしたというわけではない。

ということだ。

おそらく、先ほどの面接とあわせて、いくつかのフェールセーフを設けたため、逆に——。

自分がわずかに緩んでも大丈夫だと思ったのかもしれない。

気のゆるみ。

いや、わずかな優しき。しめった情実。

それもミスといえばミスだが——。

姉さまのような優しげな瞳をした人を悪く思いたくはない。

矛盾したような心持ちに、自身をあざけるような気持ちが湧く。

いまさら何を考えているのだろう。

☆
||

AM 9:00

セレモニーの1時間前。

既にたくさんの方の人たちが、こつちに乗りに来てくれているみたい。

雰囲気としては思ってる以上に、体育館でおこなわれる卒業式とかそういうのに近い。

人数が多いこともあって、椅子はパイプ椅子みたいな面積をとらないやつだし、座ってるのはボクと見た目年齢がさほど変わらないお子様が多い。

いやー、ぶっちゃけ美男子美少女ぞろいですわよ。

こつちに手を振ってくる子がいたから、振り返したら、きやつきやとはしゃぐ女の子たち多数。

ほほえまー。

あ、一番近くにいる江戸原首相もいっしょになってはしゃいでいるよ。

ほほえ……ま？

でも幼女先輩はこつちを向いていませんでした。

お行儀悪いことに壇上と反対側を向いています。

でも、車とかでバツクするときに、背中が見えるとなんとなくキュンってしちゃう感覚があると思うんだけど、そんな感じで、幼女先輩の背中もかつこいいです。

ボクたちがいるのは、わざわざ甲板上に壇上を作って、そこに設置された椅子。

真っ白いテーブルクロスのかけられた長机。

これもまた体育館みたいな感じだ。

それと、空母全体を覆うような天蓋というのかな。

そのサイズが馬鹿でかいんだけど、たぶんプラスチック製というか軽い素材でできてそうなの、そんな屋根がいつのまにかついてました。昨日のうちに設置されたんだと思います。

ボクが抱き着いても腕がまわらないくらいの大っきの足が四方向に延びていて、空母をドーム状に覆っている。

わかるわあ。

甲板って実はわりと熱い。

コンクリート道路の夏みたいな感じで、陽光を受けると照り返して熱中症になっちゃうレベル。

たとえば今が一月一日だとしても、なんの遮蔽もない甲板は熱いんだ。

「南下しているというところもあるでしょうね」

ふむ。命ちゃんの言葉もなるほどと思います。

どこまで南下しているのかはわからないけど、オーストラリアとかクリスマスが夏らしいしね。

南半球では夏と冬は逆転しているってわけだ。そこまではいつてないにしろ亜熱帯気候ではあるだろうし、ともかく熱いんだよ。

「みんな水分補給はしたほうがいいよ」

いくら影になっているとはいえむし暑いしね。

ほら、みんなボデイガードさんから水分補給用の水筒とかもらってるよ。

「うーむ。少しばかり暑すぎたな。ピンクも計算違いしていたぞ」

「計算って？」

「これだとみんな水分補給するから、トイレに行きたくなるかもしれない」

「なるほど……」

やっぱり膀胱内の物質をテレポするしかないな。

ちなみにトイレは仮設用のものではありません。工事現場とかに立っているようなやつを設置してはいないのです。

よいところの坊ちゃんお嬢さんがたが多くなると予想された結果、ルートを固定した艦内のトイレを使うことになっている。

甲板にいる人数を考えると、セレモニー開始前のトイレは混雑するかもしれないな。

「まあおそらく……、アメリカあたりがどうにかするだろう」

「伝えなくていいの？」

ピンクちゃんはアメリカちゃんと昨日盛大に喧嘩した。

いちおう、仲直りはしたものの、わずかながらギクシヤクしたものが残ってるのかもしれない。

ピンクちゃんも自分のスマホを持っていて、今は振袖の帯のところにあいつこんでいるけど、手を伸ばそうとしてやめた。

「いい。あいつらは自分たちで取り仕切るって言ったんだ。口出しするのによくない」

「まあそれはそうかもしれないけど」

かくいうボクもピンクちゃんを飛び越えてまで伝えるのは躊躇する感じ。

アメリカちゃんと大統領は、たぶん司令塔かどこかにいて、全体の状況を把握するよう努めているんだろうけど、現場の様子が伝わるのに時間かかるかもしれない。

ボクが横やりをいれる感じになっちゃいそうだし、ピンクちゃんの考えを無視するのもいやだし。

ううむ。

「先輩。伝えたいことははっきり伝えたほうがいいですよ」

わかってる。わかってるんだ。

でも、伝えることで状況が悪化するなら、現状に甘んじるというのも一手だと思ふんだよな。

待機するのも行動の一種ということだ。ここはひとつ。

「先輩って基本的に待機行動が大好きですよね」

「そりゃまあ……」

——微引きこもりですから。

★
||

わたし——小山内三等陸佐は孤軍奮闘中である。

「いやあ、ヒロちゃんの振袖姿がかわいすぎるっ。君もそう思うだろうー!」

江戸原首相のお守りで。

「首相。いま、乗船中の人らをひとりひとりチェックしているんだから話しかけないでください」

体育館で言えば、一番右前の席を確保した我らが首相は、先ほどから壇上のヒロちゃんに向かって熱い視線を送っている。

この人、サイリウムでも握らせたら、めちやくちや元気に振り回

しそうだよな……。

それはそれとして、隣のうるさいおっさんのことは放っておいて、私がいましているのは、ゲストのチェックだ。

まちがいなく久我のやつが来ているような気がする。

しかし、すでに甲板も半ば埋まりつつあるというのに、それらしいやつはいない。

もしかすると昨日検討したときに却下した、潜水艦や空挺で侵入するというパターンか。

いや、それはあまりにも現実的ではない。

必ず”いずも”から侵入してくるはずだ。

「小山内くん。ほら、ヒロちゃんが手を振ってくれたぞ。うおおおつ！ ヒロちゃん！」

誰かとなりのおっさんを止めてくれ……。

会場の熱気というか盛り上がりは、セレモニー開始前にもかかわらず、かなりのものだった。

甲板に容赦なく当たる陽光のせいもあるが、人間が多数集まることによる熱気もかなりのものだ。

頬のあたりを撫でる汗をぬぐい、ひとつ長嘆息する。

ヒイロゾンビ候補生のお子様たちは、これから始まるセレモニーに向けて、多数の者が席をたちあがりおトイレに向かうようだ。にわか移動量が大きくなる会場。

時計を見る。9：30分。

と、そこで不意にわずかなひっかかりを覚えた。

褐色肌の小さな子どもと、付き従う男。

ひっかかりというのは、感覚的なもので、特に言葉にできるようなものではない。

「首相。少し席をあけてもよろしいですか」

「なんだトイレかね？」

「まあそういう感じで」

お許しがでたので、わたしは二人の後をつけることにした。

ハザードレベル130

久我がどこかにいるであろうと思ったわたしは、首相の承認を得て独自に動くことにした。

妙に思ったのは、異国の少女と歩く、おそらくはボディガード。

少女のほうはちょうどヒロちゃんと同じくらいの年齢だろうか。褐色肌にインドのサリーみたいな服装をしていた。

乗りこんだすぐあとには艦内のトイレに向かっているようで、すぐに姿は見えなくなった。

そのこと自体は特に妙でもなんでもない。

おそらくは最後尾に近い小国だろう。

このセレモニーはきわめて政治的な力動が働いており、小国は最後のあたりにまわされている。

アメリカが一番目をとり、日本が二番目をとったというのは、政治的なパワーの結果だ。

国力というよりはヒロちゃんとの関係性の問題だろう。

ただ、そうではないところの順番は結局のところ、国力といってよく、200番目に近いところにある国の名前はわたしも知らない。

——なにが妙だったのか。

自問する。

無意識のうちにある様々な情報を吟味する。

わずかな時間だったが、彼らの動きを脳内で再生しつつ歩く。

思い浮かんだのは四路五動という孫子の言葉だ。

兵には、四路と五動がある。

四路とは、要するにファミコンでいうところの十字キーみたいなものだ。

そして、五動とはそれに対応した動き。

進む。戻る。右に行く。左に行く。

ということを指している。

四路の四に対してひとつ多い五動めの動きは、その場で待機すること。

そうか。

一瞬、彼らが待機したとき。

ボデイガードの”休め”の姿勢は、自衛隊のものと同じだった。いまの小学校で教えているかどうかは不明だが、わたしが小学生のときは”休め”の姿勢も教えられたものだ。

足をわずかに開いて、手は後方で軽く組む。

わりとどこの国でも採用されているように思うが、何千、何百と見慣れた動作は妙な感覚として伝わったのだろう。

久我か？

疑念が濃くなり、自然と足を速めてしまう。

甲板からトイレに向かう人ごみは、物を売るレベルじゃーねーぞというほどに増えていた。

明らかに子どもの数が多いせいか、思ったように進めない。

「トイレ誘導とかしていないのか。大統領は何をしているんだ？」

これは後で知ったのだが、ピンクママさんから大統領閣下への突然の権限移譲に伴い、命令系統にわずかながらほころびが生まれていたらしい。

現場「会場は熱気に包まれており常設トイレを増やしたほうが良いと思われます」

上官「会場は熱気に包まれているそうです」

司令「早くも会場は沸いており開催が待ち切れないようです」

閣下「ふむ。わかった。現場にはよろしく伝えてくれ」

司令「閣下は現場はよくやっていると仰せだ」

上官「閣下は問題ないと仰せだ。そのまま任務を続行せよ」

現場「ヨシ！」

こんな感じだったとか。

艦内に入ろうとしたところで、わたしは軍属の人間に止められた。狭い艦内のドアの前には二人組の屈強な男が立っており、手の中にはM4と呼ばれるアサルトライフルが握られている。いまは地面を向いているそれも、わたしが妙な行動をおこしたらすぐさま銃口が向けられるに違いない。

「What is your affiliation and rank?」

「あ?」

「You can't get in here unless you're with your escort」

「すまないが、英語はさっぱりなんだ」

「Just walk away」

指差されたのは甲板のはるか向こう側。

要するに立ち去れと言われているらしい。

「大統領にとりついでくれないか。えー、あー、プレジデント。プレジデントプリーズ」

「What?」

「アイム。アイム。フレンド。プレジデント」

「I don't know what you're talking about」

わたしの前に立ちふさがったのは“英語”という言語の壁だった。

撫子くんが英語うまかったよなあと思いつつ、英語を本気で勉強してこなかったことを心底後悔した。日本人ってなんで10年近く英語を勉強してきて話せるようになっていないのかね。

日本人の脳構造は英語を真に理解できないようになってるのかもしれない。

ここで問題なのは時間だ。いうまでもないが、誰か英語がわかる人を連れてくるという選択肢はない。首相も英語ができるかわからん。また、スマホも武器もすべて“いずも”に預けてきている。日本はあくまでも“いずも”における検疫がメインで、“ここ”いんとれびつど”の警護は埒外だからだ。

スマホとかも案外危険なんだよな。爆弾とか仕込めたりするし。つまり、連絡手段がないのだ。クソ。手旗信号でもするか。

そのとき――。

ざわつきが後方から広がる。

子どものひとりが空を指さした。

兵士のひとりも思わずそちらに視線を向ける。

「Oh……Tenshi！」

言えたじゃねえか。

ともあれ天使だった。

ヒロちゃんが、振袖姿のままスイッと滑るようにして甲板から五メートルほど上空を飛んでいる。

いまの姿だと、天使というより天女のような。垂れ下がるはずの袖の部分も、むささびのように広がったまま落ちない。

どうやら振袖姿が崩れないように、全体的に固着するように念動力をかけているようだ。

花火を見る観客のように、皆、ヒロちゃんから視線をはずせない。

自然とこぼれる笑みは、やはり天使としか形容できないほどかわいらしかった。

いつまでも見ていたい遊覧飛行だったが、それも終わりを告げる。

ヒロちゃんが装備している下駄が、甲板と接触して「カポっ」という小気味良い音を響かせた。

わたしの五メートルほど先にいるヒロちゃんが、しずしずと歩いてくる。

人の波はかきわけられ、まるでモーゼの出エジプト記のようだ。

いつもは無邪気にかわいらしいのだが、なんだか妙にしおらしい様子。

すぐ目の前まで来た。

帯のところにさしこんであった扇子を開き、口元を隠して、艶美なうるうるとした視線を向けてきている。小学生らしからぬ色気。ヒロちゃんは小学生ではなかったが、カタチとしては少女でありながらも大人のようなアンバランスな蠱惑的魅力があった。

「あ、あの、幼女先輩」

「ん。なにかな。ヒロちゃん」

わずかばかり動揺しながらも、大人の余裕を崩さないように努力する。

「幼女先輩……、トイレ行きたいんですね」

ヒロちゃんの発言には照れがあった。

あ、だからかと思うと同時に、ヒロちゃんってトイレくらいで恥ずかしがるの？

やっぱり小学生女兒なの？

と、思わなくもない。

成年男性だったという証言の信憑性がゴリゴリ削られていく感覚だ。

もじもじしながら、ヒロちゃんが上目遣いにわたしを見ている。

「違うんですか？」

「あ、いや、違わないが」

とつきにわたしは嘘をついた。

護衛対象にいたずらに不安をあおってもしょうがないだろう。

まだ、わたしの疑念は疑念にすぎないのだ。

「よかった。なんだか幼女先輩が止められてるみたいだったから、ボク助けにきたんです」

むふんという表情になるヒロちゃん。

「助かったよ。このままじゃ間に合わなくなるところだった」

テロ防止がね。

「ええっ？ 大丈夫なんですか。膀胱限界なの？ いますぐテレポする？」

「あ、いや、まだそこまで切迫はしていないよ。ここを通してもらえればそれでいいんだ」

「ふむふむ」

「どうやらここに配置されている屈強な兵士は日本語ができないみたいなんだ」

というより、わたしが英語を話せないといったほうが正しいんだが、いまは一刻を争う事態といえるかもしれない。細かいところは置いておき、主賓の権力でゴリ押しそう。

しかし――。

「え」

ヒロちゃんが固まってしまった。

手に持っている扇子がプルプルと震えている。

「英語。ボクもできないよ……」

絶望の表情は三分前のわたしと似ている。

英語って本当に凶悪だよな。RPGのラスボスよりも話が通じない。

ただ、ヒロちゃんの場合は別だ。

「普通にここを通してと言えば大丈夫だと思うよ」

なにしろ、ヒロちゃんは主賓だ。

ヒロちゃんが信頼しているというだけで、フリーパスになる。

なんだったら周りの人間の誰それかに話しかければ、必ず日本語と英語を操る人間がいてもおかしくない。ともかく一言二言でもいいからヒロちゃんに話しかければいいと思ってる人は多いはずだからな。

「あの、僕でよろしければ通訳を」

眼鏡をかけた小さな男の子が声をかけてきた。

「ちよつとズルいわ。わたしが通訳してあげる」

ドレスを着たどこかの国のプリンセス。

「わたしも通訳すりゅ」

五歳児くらいか。

金髪碧眼のめちやくちや小さい子が舌たらずに日本語をしゃべっている。

わいわいがやがやと詰め寄られるヒロちゃん。

むげにもできないから焦っているようだ。

「あー、君たち。少し下がってもらえると助かるのだが」

仕方ないので、横やりを入れた。

「あ、おっさんのくせに幼女な人だ」「幼女先輩渋い好みだわ」「じやましゆりゆな」

子ども相手には分が悪い。

困っていると、扇子をまた帯にさしたヒロちゃんが、皆に対してほころんだ。

「ありがとう」

それだけで、老若男女問わず顔を赤くしている。

一番近くにいた眼鏡をかけた少年は、胸のあたりに手をあてて、ポーっとなつてしまっている。

ヒロちゃん、おそるべし。

「とりあえず、通訳はいいかな。ボクが通してつて言えばいいんですよね」

わたしの言葉を信頼してくれてるらしい。

ヒロちゃんはふたりの兵士に向かいあう。

もうすでにだいたい事情は把握していると思われるが、なんとなくヒロちゃんの言葉を待っているようだ。もしかすると、救国の英雄あるいは聖女に話しかけられるという榮譽に浴したいと考えているのかもしれない。

「えーつと。んーつと。パス。スルー。スルー。フリー。オツケー？」

意味が不明だった。

もちろん、日本人だからこそ逆に意味がわかる。

文脈って大事だよなと思う。

しかし、さすがにそれは小学生並みの英語力だった。

——英語よわわガール。

配信時の不名誉な称号が脳内にちらついた。

ふたりの兵士は顔を見合わせ、ヒロちゃんの言葉を吟味しているようだ。

その吟味がよくなかった。ふたりしてなにやら言い合っている。上官の日本語ができる誰かに連絡しようか検討しているのだろう。

ヒロちゃんはこちらを振り返り、不安げに首を傾げている。

ちよつと涙目になっている。

あ、また扇子を開いて今度は顔まで覆ってしまった。

なんだこのかわいい生物。

しかし——、時間がかかりすぎるとマズイ。

焦燥感がつのりつつあったそんな時。

「H i r o c h a n w a n t s t o l e t t h i s p e

rson through」

見かねた眼鏡の男の子が翻訳をしてくれた。

破顔一笑。

兵士たちはハハハと笑いながら、手をドア奥へ向けて、あっさりと私を通してくれるようだ。

「ありがとう。助かったよ。時間は有限だからね。君もありがとう」

「どういたしまして」と眼鏡の男の子が述べる。

「ありがとう」とヒロちゃんもその子にお礼を述べていた。

先を越された形になったほかの子たちは悔しがつている。

一見するとほほえましいやり取りだが、これもまた政治的な力動なんだろうな。

まあヒロちゃんにはあまり関係のない話か。

「それでは行ってくるよ」

——と、そのまえに。

少々、懐がさみしいことに気づいた。

懐といってもお金ではなく、武器の件だ。

“ここ”いんとれびっど”での警護はアメリカに任せているため、いまのわたしは徒手空拳だ。

それなりに戦えるとは思いますが、久我がどんな武装をしているかはまったくの未知。

さすがになにかしらほしい。

艦内に行く一歩手前で足を止めた私を、怪訝そうに見つめるヒロちゃん。

小首をかしげて、不思議そうにしている。

漏れた？ とか思われてないよな。

「どうしたんです？ もしかしてやっぱり間に合わなそうとか？」

「あ、いや……。実をいうとヒロちゃん。私はなにかしら銃器を持ってないと出ない性質なんだ」

「ええっ!? そうなんですか。あ、でもトイレで全裸にならないと出ない人とかいますもんね」

ヒロちゃんが頬を染めながら言う。

嘘に嘘を重ねるようで申し訳ないが、ここで手早く武器を調達するために仕方がない。

さすがにアサルトライフルは無理でも、腰に差している短銃ならどうだろうか。

「申し訳ないが、君、銃器を貸してもらえるようお願いできないだろうか」

無茶な願いなのはわかっているがダメ元だ。

流れで、翻訳役を引き受けることになった眼鏡の男の子が伝えると、さすがに兵士の彼らはNOと拒絶の姿勢。

これは時間がかかるかもしれない。

武器なしで突貫してみるか。

時間の経過を勘案しつつ、私はやむを得ないかとあきらめかけた。そのとき、

「あ、ボク、そういうえば——、大統領との直通回線知ってるんだった」
ヒロちゃんが、不意に呟いた。

袖のあたりから取り出したるは文明の利器スマホ。

厳密には電話ではなくアプリらしいが、ともかく大統領と連絡がとれるのなら問題ない。

「あ、大統領閣下。ボクです」

『ん。ヒロちゃん。どうしたんだい？』

「幼女先輩がトイレで、トイレが銃で、ヤバいです」

あわてたように言うものだから、私はどう考えてもヤバい人間だった。

「あの、ヒロちゃん。代わってもらっていいかな」

「あ、どうぞ」

手渡されたスマホを手で覆い、小さく周りに聞こえないように話す。

「すみません大統領。小山内です」

手早く状況を伝えると、閣下は快諾してくださった。

そのまま敵の補足に向けて動くべきかも問われたが、なにしろ私の勘だけの話。

警護体制にイレギュラーを持ちこんで隙をつかれてもマズい。

私は独自に動き、問題がありそうであれば連絡する。

問題がなくても連絡するが、ともかくイベントについては滞りなく行う必要がある。

そういう話を三分間ほどでおこなった。

もちろん、兵士たちには直接命令してもらったよ。

「悪いね」

わたしは兵士のひとりから短銃をもらう。

手にしつとり馴染む。それを内ポケットに入れた。ちなみに私もそうだがボディガードの役割をしているやつのはほとんどは黒服というかスーツ姿だ。

「あれ。無線機も必要なんですか？」

無線機といっても手に持つタイプじゃなく、これも黒服とかがよく使っている耳に装着するタイプだ。もちろん、これも平和的に借りた。

「そうなんだよ。無線機がないと上司と連絡がとれないかもと思って出ないんだ」

「職業病なんですわね」

ヒロちゃんに哀れまれたりしたけど、私は元気です。

★
||

ゾイとともに無事”いんとれびつど”に降り立ったオレたちは、さっそく連れ立って艦内に向かうことにした。思った以上に人の動きが激しく、警護に隙があるように感じる。

もちろん、甲板の端のほうには無数の兵士がM4を抱えて、つつ立っているが、そんなものはただの力カシと同じだ。

だが——、降り立って艦内に向かおうとした瞬間。

ゾクリとした、首の裏のあたりがチラつくような感覚を覚えた。

こちらを探るような視線。

「やつか」とオレは小声を出す。

「ん？ 想い人でもいたか？」

「ああ。小山内がいる。前もって伝えていただろ」

「FPSの天才。幼女先輩か。よくわからんのだが直接的な戦闘力ではお前様とどちらが強い？」

「そんなもん知るか。殴り合いは弱そうだがな」

そう——、こちらは爆弾以外は無手。

何か武器を調達しなければ、テロ以前につかまって終わりだ。

「どうやら”いずも”での検疫のおかげか、あるいは子どもという名のフリーパスを連れ立っているせいか、セキユリティは甘い。」

艦内には難なく侵入することに成功し、さてどこに向かうかという話になる。

もちろん、セキユリティは甘いといっても完全にフリーというわけではない。

いま、トイレの前は人がずらりと並んでいて、量的に足りていないという状況だ。

頭の足りてないお子様が「私に恥をかかせる気か」とかなんとか言いわめいている。その隣では泣き出してしまいうガキ。きれいに着飾ったガキが年相応に泣いている。間に合わなかったやつもいるように、ボデイガードに手を引かれながら、どこぞで着替えに連れていかれているやつもいた。

そのせいか、現場の判断でトイレの数を増やしている。それだけフリーに動けるスペースが増えて、混乱が見られるようだ。ジュテツカの仕入れた情報から、艦内の情報は頭に叩きこんでいる。

さすがに当日の警備まではわからなかったが、状況は悪くない。

「人の視線が切れたと同時に警戒エリアに侵入するぞ」

「ん……了解した」

ゾイについては、人並みの運動神経しかなく、正直なところ足手まといだった。

しかし、ゾイの義手に仕込まれた爆弾がなければ、何もできない。

子どもを連れてきているというだけでわずかに緩むという効果も馬鹿にはできない。

狭い通路の先に人影がないことを確認し、ゾイを手早く先行させる。

警戒エリアとフリースペースの区域分け。

これもまたひとつの隙を生んでいるといえる。

VIPたちを通過させないという検疫所の役割を果たしているわ
ずか数人の兵士たちを突破すれば、そこから先は人に見つかったところでおかしいと思われない。

検疫所を突破した安全な因子と判断されるからだ。

艦内の5000人という人数の多さ。

編成されたのはわずか数か月前。

400名程度の”異物”に感染しているという状況。

すべてにおいて時間が足りなかったというのが敗因だ。

「遅すぎるんだよ……」

オレは、夜月緋色に憤懣をぶつけたときと同じ言葉をつぶやいた。

★
||

「ゾイ。こっちに向かうぞ」

オレはゾイの手を引いて、無理やり速度を上げた。

50メートルほど先にある通路の角から、小山内がひよつこりと顔を出したからだ。

今にも顔を上げそうな瞬間に、とつさに角を曲がる。

やつはなにか超能力にでも目覚めているのか、当て勘だけでなく、敵がどこに潜んでいるのかをピタリと探り当てる能力がある。

それがやつの強さの理由だ。

向かう先は下層だが、大回りしていったほうがよさそうだな。

「お前様。こちらに向かうのはどうだ？」

ゾイの提案はすぐにわかった。

指さされた通路の先にある区画はレストラン。そして隣接する厨房だ。

朝でも昼でもない微妙な時間帯。

レストランには人はまばらにしかおらず、非戦闘員ばかりだ。警戒されるかと思っただがオレたちの姿を見ても、誰も何も言わない。

我儘な姫様に連れまわされているとでも思われてるのかもしれない。

まあ、実際にそうなんだがな。

厨房のドアをゾイは無造作に開けた。

レストランが巨大なだけあって、厨房もかなりの大きさを誇る。

厨房の中は戦場のようなだった。

中にはシェフが何人もいて、上の連中のくだらない立食パーティーのために、こんな時間から調理している。

「なんだ。ガキがまぎれこんでやがるぞ」

そのうちのひとりが声を上げた。

もちろん、英語だ。

「おなかですいたんだ。なにか食べ物をくれないか」

ゾイは腹のあたりをさすりながら孤児のような顔で答える。

もちろん、英語だ。

「あくあ。ゲストのガキか。これでも食つとけ」

渡されたのはなんの変哲もないプリンだった。

もちろん、カップのやつではなく、透明なガラスに入ったものだったが、ゾイはおいしそうに食べ始めた。

ゾイはわずか10歳程度。

子どものいない空母内では、衆目の的になる。

——そいつ毒婦だぞ。

と、脳内で思ったが、まあいい。

手ごろなサイズの刃物を手に入れることができたのだから。

ハザードレベル131

AM9:50

いよいよ式典が開始する時間が近づいてまいりました。

あれから幼女先輩は帰ってきていません。一番前の江戸原首相の隣の席は、いまだぼっかりと空いています。

これは——大きいほうか？

ちよつぴりさみしい気もするけれど、幼女先輩のためにセレモニーの開始を遅らせるわけにもいかないのだろう。

いまだざわめきと熱気にあふれた会場だけでも、ほとんどボクと見た目年齢が同じような子どもたちは、きちんとお行儀よく席に座っている。

いくつかの席はまだ空いているようだけれども、ヒロウイルスの受け渡し自体は11時くらいを予定している。

まだ一時間は余裕があるんだ。

「ふむ。皆の準備はいいか？」

いつのまにやら壇上に上がってきたピンクママさん。

どうやら今日の司会進行役。

十分前にここに来て、したたる汗に、熱い吐息を吐き出している。見た目が涼し気だけど、やっぱり熱気にあてられているようだ。

「それにしてもモモ。会場が暑すぎるな。サーキュレータは回しているか」

「全力全開だぞ！ ママ！」

「そうではない。ヒロちからを使って、会場の熱気をコントロールすればいい」

「なるほど、気づかなかったぞ！」

ピンクちゃん、さつきから熱さのあまりに袂をえぐいくらい開いているからね。

このままでは幼女の見えちゃいけないところが見えそうになっていから、たぶん熱さに弱いんだろう。子どもって体温暑いしね。

ピンクちゃんが両腕を突き出して、むうんとうなる。

その途端――。

会場に流れる清涼な風。

ピンクちゃんの上空五メートルくらいのところから、エアコンみたいな涼しい風が吹いてる。

みんな涼しくなつて不快指数が下がって安らかな顔になつてる。

「え、ピンクちゃん。これなに？」

「ん。これは原理としてはエアコンだな。そもそも熱さというのは――」

ピンクちゃんの講釈が五分くらい続く。

ボクはひやつこい感覚に身を委ねて、なんとなく理解した気になつた。

ありがとねピンクちゃん。

「さて、時間になつたようだ」

超がつくほどクールなピンクママさんが、壇上に設けられたスピーチ用の台に近づく。

会場がシンと静まり返つた。

ピンクママさんは、ゆっくりとした動作でマイクの角度を調整した。

すうつと息を吸つて。

「ピンクママだ。そこにいるドクターピンクの母親をしている」

それは自己紹介から始まつた。

今年初めて開かれたサミットの開会の辞だ。

「若い者たちが多いので、年長者として少しばかりお説教をさせてほしい」

「諸君らはいま地獄の中にいる。諸君らはいま穢れた世界に取り残されてる」

「人生はバラ色ではない。世界は美しくない」

「証左はいくらでも存在する……」

なぜかピンクママさんは慈愛の微笑みを浮かべて、

「誰ひとり例外なく明日は命を失っているかもしれない」

「父親を失った人もいるだろう。母親を失った人もいるだろう。子ども

もを失ったら、私は泣き崩れてしまうかもしれない。友人を失った人もいるだろう。頼れる仲間を失った人もいるだろう。恋人を失った人もいるだろう。自分自身という世界にたった一つの宝物さえ明日にはどうなっているのかわからない」

「ゾンビウイルスに侵された身では誰ひとりその運命からは逃れられない」

「これが”現実”だ」

「現実とはつまるところ不快で不潔でまったくの不合理な出来事なのだ」

「諸君らも今さきほどまで、うだるような暑さを経験しただろう。私の娘が空調を調整するまで、諸君らは不快のただなかにいたはずだ」
「しかし、私はあえて言おう。この不快で不潔で不合理な現実のただなかにあっても、我々は思考しつづけることができる存在であると」
「つまり、思考とは、うだるような暑さの中で待ち続けるという不快さでさえも、ある神聖な出来事としてとらえることができるのである」
「何によってか。愛と友情と共感によってである」

「諸君らが、救国の英雄となった暁には、政治の道具として使われるのではなく、自ら思考しつづける、他者を愛し続ける人間であってほしい」
「ここに――」

神妙な声で厳かに。

その一瞬だけ、ほんのざわめきすらも停止した。

「第一回ヒロサミットの開催を宣言する！」

ワっ！ と湧く会場。

え、そういう名前なの？

し、知らなかった。びっくりだよ。

みんなサミットとかセレモニーとか言うものだから、正式な名前を知りませんでした。

でも、みんなが立ち上がり万雷の拍手が巻き起こる。

それだけでなんとなく晴れがましい気持ちになってしまう単純なボク。

『ギターああああああああ』いい加減。ゾンビともおさらばした

いぜ』『アフターゾンビ世界を見据えて行動しよう』『ピンクママさんのママ度が高い』『ピンクちゃんとなんか似てる論法だったな』『ママさん素敵抱いて!』『ヒロちゃん様。大天使!』『ここが天国か』『ああそうだよ。ようこそ男だらけの天国へ』『アッー!』

例によって会場の横には巨大モニターが設置されていて、甲板を覆う天蓋からのカメラから全世界に向けて、このサミットは配信されている。

ボクのお願いを聞いてくれた形だ。

いくつかの流れるコメントを見てみると、いつものパターンで笑ってしまった。

「次に、ヒロちゃんから皆さまへのご挨拶。それではよろしくお願います」

ピンクママさんのクールな紹介によって導かれるように演説台に向かう。

もちろん、袖の内側には、みんなが作ってくれた台本がある。でもさ。

ピンクママさんの演説を聞いていると、こういうズルじゃなくて、短くてもいいから自分の言葉で語りたいたいと思ってしまった。

しずしず、カポカポと演説台へと歩きながらボクは決意する。

演説台のマイクをボクの身長に調整。

奥まっていたところに座っていた時よりも、みんなの顔がよく見える。

期待感。そのまなざしはお姫様に内謁する騎士のようでもあり熱っぽかった。

そう考えると、いまボクは最高に姫プしているのであり、かあくつと顔が熱くなっていく。

ピンクちゃんのエアコンでガンガン冷やされているにも関わらずだ。

や、やっぱり台本読もうかな。

あ、いやいや。がんばるぞ!

「えく。夜月緋色です」

『知ってる』『かわいい』『台本は?』『作文用紙のときみたいにカンペ見ながらしたらいいのに』『日本の首相だつてカンペガン見しながらだぞ』『それな』『アメリカ大統領とか自分の言葉で語ってるし』『それな』『ピンクママさんに感化されたんだろう』『ヒロちゃん影響受けやすい説』

さつそくみんなに看破されています。

ボクが大意即妙に、かつこいいことを言えるわけないことはわかっている。

自分らしく小学生並みに思ったことを言えばいいんだ。

「今のままではいけないと思っっています」

ボクはいまの気持ちを素直に表現した。

そう、このゾンビにあふれた世界を今のままにしておいてはいけない。

文明も文化も、そして一番は人間を守らなきゃいけない。

「だからこそ」

キリつとした表情を作ったつもり!

「世界は今のままではいけないと思っっている!」

『は?』『A||A』『トートロジー最強説』『なんかいいこと言った空気感』『うーんポンコツ』『ヒロちゃんの勢いで突っ走る姿勢すこ』『お顔が赤い』『すすすこのスコティッシュホールド』『ゾンビ怖いけどヒロちゃんのおかげで元気だよ』

お、おちつけ。

おちつくんだ。まだあわわわてるような時間じゃない。

言葉はぐにやぐにやとして形がなくて、ボクの唇から解き放たれるときには既にボクの制御を離れている。陰キヤあるあるだと思うけど、なんだか話の方向性がどんどん自分の思っているところと乖離していくってあるよね。

——なにを言ってるのか自分自身でもよくわかんなくなってきたぞ。

「年末年始。年の瀬。師走。こういう言葉を聞くたびにね。いつもこう思ってきました。もうすぐ新年だな、と」

『わかるー』『わかりみが深い』『ていうか新年一日目』『うんそだねー
(素直)』『なんとというかすごい当たり前のことを言ってるような気がする……』『おまえすげえな。そこに気づくか』『ヒロちゃんがあたふ
たしてたらそれでいい気がしてきた』『まあ、マスコットやし』
「人間というのは節目が大事だと思うんです。だから節目は大事だ。
ボクはそう思います」

『おめぐるぐる』『だからAⅡAでゴリ押すのやめなされw』『すごい
なヒロちゃん。そこに気づくとは』『わかりみが深い』『ヒロちゃんの
言葉を聞いているとなんだかゾンビでもいいかなって思ってきた』
『思考力低下中』『新年だし心機一転しようってことかな』『ブルーベ
リーフラペチーノが唐突に食べたくなった』

「そうだよー」

もう破れかぶれだ。

「年が新しくなったし、ボクは今年が綺麗な一年になったらしいなと
思ってるの。新年だしボクには信念があるの。たぶん、それはひとり
じゃできないだろうし、いろいろみんな迷惑があるんだろうけれど
も。できればみんな仲良くできたらなって……」

——難しくてうまく言葉にできない。

でも、ボクの前にはたくさんの方がいて。

ボクの見えないところにも、たくさんの方がいた。

純粋な好奇心がボクを貫いている。

「だから、みんながここに集まってくれたのは尊いことなんだと思う。
感謝しています」

『てえてえの最大級』『他者に感謝』『oooooooooooooooooooooo』
『新年に信念って……』『そこは突っ込んだじゃダメだ』『おまえに感謝』
『とはいえ、さっさとゾンビをなんとかしてくれという気持ちも当然
あるがな』『oooooooooooooooooooooo』

ぼつぽつと拍手があたり。

やがて嵐のように拍手の音が重なった。

ボクも最低限のおつとめは果たせたのかなって思います。

「お前様よ」

下へ下へと降りていくうちに、ゾイに話しかけられた。

鋭い視線に対して、矮躯は必要以上に呼吸を繰り返している。

これまでに相当量の運動を強いた報いか。

幼い身体には過酷な運動量だったらしい。

「なんだ？ 休憩でもしたいのか？ だったらそうしろ」

ここまで深く下りれば、もはやほとんどが非戦闘員しかない。

甲板近くの浅い層に出払っているのだろう。

ひとりふたりであれば、どうとでもなるし――。

もはやあと少しで、この艦の目標地点に到達する。

爆弾を仕掛けるに最適なウィークポイントに。

つまり、ゾイの役目はもう終わったのだ。

ゾイは知ってか知らずか、挑戦的な視線を投げかけている。

「お前様に提言する。私は上に向かいセレモニーに参加しようと思っ
ている」

オレは足を止めた。

「どういうことだ？」

いまさらだった。

ゾイにはセレモニーに参加する意義がない。

ここでヒト型の爆弾として朽ち果てるのを、己が使命としていたはずだ。

「私はハイロゾンビになろうと思っておる」

「なにっ？」

「そう殺意をほとばしらせてくれるな。お前様」

「よりにもよって、ゾンビになろうっていうのか。お前は！」

両の腕をつかんで、ゾイを壁際に張り付けた。

ぐっと小さい息が漏れる。

蝶の標本のように指一本動かすことができないゾイは、それでも濁った瞳で攻撃的な視線をよこしていた。

「お前様よ。私は世界に復讐したいのだ。なので力がある」

「ヒイロゾンビになったところで、夜月緋色に殲滅されるだけだろう」
「そうとも限らないぞ。やつは根本的なところで世界を信じている甘ちゃんだ。果たして、子どもの私を殺せるかな？」

「なに……」

「それに言っただろう。私は最終的に淘汰されなければならない。我が父上を地獄に叩き落とすためにな。誰がやったかもわからぬボカシと一発では困るのだよ」

わけのわからない不気味さに、オレはそろりと手を離す。

半月のような口元。

こいつは、本当に――。

「お前様はせいぜいお前様の信念に沿って世界に爪あとを残せばいい。お前様がわずかなりとも世界を――人間を信じられるのであれば、ここでやめてもらってもかまわないし、恨み言など言うまい」

「馬鹿にするな。オレは自分の命が惜しくてやめるような臆病ものじゃない」

「失礼したな。べつにお前様を臆病者だなんて思っていないさ。他者の怯を楽しむようなねじれた性癖を持っているわけではない」

あの男のように――と、小さく吐き捨てるように言うゾイ。

「どうして黙っていた」

「切迫せぬと、お前様は私を殺しただろう？」

ゾンビになると宣言したゾイを殺したか。

わからない。だが、あのクルーザーで言われていたらオレは確実に止めていただろう。

仲間としての契約も打ち切っていたかもしれない。

オレにとって、それだけゾンビというのは存在自体が許しがたい存在だった。

――トラウマ。

だった。

「その沈黙だけで当たりだったことがわかるな。思えば――、わたし

とお前様を引き寄せたジュデツカは、こうなることを半ば予想していたのだろうか。いわばフェールセーフ。どちらが本命だったのかということだが、おそらくどちらでもよかったのだろう」

「何を言っている……」

「己が職責をよく全うしろということだ」

語る言葉は勇壮だが、なぜかオレにはひどく寂しげに聞こえた。

エンジンの音が鈍く響く船内で、ゾイが義手を静かにとりはずす。

「指を決められた順番で曲げると爆弾が起動する。それから爆発するまでの時間を設定する」

ゾイの体格にあわせられた爆弾はひどく小さい。

この大きさで、この巨体を打ち滅ぼせるほどの爆発力が生まれるのかはにわかには信じがたい。

奇妙なほどに軽くて存在感の薄い悪意の形だった。

「願わくば」ゾイは重たい口を開く。「自爆はせぬようにな」

「おまえがそれを言うのか」

自殺しようとしているお前が。

「失言だったか。まあよい。自分の命をどのように使おうが自由だ。死ぬのもな。ただ、私はお前様のことを存外気に入ったのよ。なるべくなら死んでほしくないほどにな」

「なにが気に入ったのやら。顔なら整形だぞ」

「顔ではない。案外にかわいらしいと思ったままでよ。世界を憎みながら世界をあきらめきれないところとかな」

ゾイはにやりと笑った。

なんだこいつは。

十歳という齢に不釣り合いなほどの諦念。

この世の不浄を見続けたような濁った瞳をしているはずなのに。わずかながらも年相応な態度が見えたような気がする。

それが妹の姿とだぶって見えた。

AM10:30

ピンクちゃんの科学的な講義を一通り終えたあと。

つややかなかんばせに豊かな金髪とお胸様を湛えたアメリカちゃんが、なぜかピアノを弾いていた。

流れるような指先とたたきつけるような鍵盤裁き。

揺れる空気。揺れるお胸様。

なんの曲かは残念ながらわからなかったけど、身体全体を使ってピアノを叩くときにリズムがはずんだ。楽しくなってくる曲だ。

才媛だなと思えない。

意味がわからないけど、一応意味はある。

これはボクの挨拶に対する返礼ということらしい。

つまり、このピアノの旋律はボクにささげられたもの。

アメリカちゃんは全人類の代表として、人類の文化の最たるもの――音楽を奏でたのだった。

――いや、普通にアメリカちゃん目立ちたいだけだよね。

なんて思わなくもなかったけれど、アメリカちゃんも世界の平和を願っているという点では、ボクと想いを一致している。

ピンクちゃんは透徹した無表情を貫いていたけど、これだけうまかったら、ボクは手放しに褒めちぎりたいかな。

演奏が終わったあと。

アメリカちゃんはきれいな所作で立ち上がり、体軀をピンと伸ばして直立した。

力強い瞳。

未来を見据えた視線で、アメリカちゃんは上体をかがめ、スカートの裾を持ちあげて、カーテシーと呼ばれる昨今、乙女ゲー的小説でやたらと取りあげられる姿勢をとった。

ていうかりアルカーテシー、めっちゃうちゃサマになってるな。

「綺麗だよ。アメリカちゃん！」

ボクは思わず拍手した。追従するように拍手が起こり、アメリカちゃんはボクとはくらべものにならないほどに胸を張る。のけぞってるレベルだ。

『アメリカ嬢がピアノを全力で弾くとはずむよな』『ああよく弾む』『無邪気にぷにんぷにん』『スタンディングオベーション！』『スタンディングって書くだけで卑猥な気がするからやめろ』『なんでや、ただの拍手やぞ』

なにがスタンディングするんですかねえ。

「緋色。人類の代表として、あなたの友人として、今日この日を迎えられたことを喜ばしく思うわ。きつと私たちは勝利する。ゾンビにもそれ以外の災禍にも」

燃えるような強い意志。

陽キヤのパワーはすさまじい。

まぶしすぎてボクは燃え尽きそうだよ。

陰キヤをなめるな！（意味のない逆切れ）

でも、彼女の輝かしさは、ボクには無いもので素直に好ましい。

伸ばされた右手に、ボクも手を重ねる。はい握手。

『幼女どうしがきやつきやうふふ』『ピンクちゃんが仏像のようになってるぞ』『ムスツとしちやいけないから我慢してる顔だよ』『後輩ちゃんは無だよ。無』『いいんじゃないか。すべてはヒロちゃんの御心のままに！』

必要以上にカメラのフラッシュがたかれて。

いま、アメリカが国威の全身全霊をかけて歴史を保存しようとしている。

明らかに自国優先ではあるけれども、自分自身に誇りを持つっていうのも大事だと思った。

☆
☆

AM11:00

それからあとは、アメリカ大統領のトミーさんによる映画のワンシーンみたいな名演説だった。

名演説すぎて、ボクはちよつとだけボーっとしちやった。

校長先生がいいこと言ってるんだけど、集中力が続かない、あの感

覚だ。

『ヒロちゃん寝てね?』『いやまさかこんな大事なイベントで寝るわけないべ』『ピンクちゃんよりも大人なヒロちゃんが寝るわけねーだろ。いい加減にしろ』『正直すやすや動画のほうが捗る』『後輩ちゃん。いますぐヒロちゃんの鼓動音を録音するんだ!』『変態動画になるからやめろ』『その変態動画を後輩ちゃんは実行したんだよなあ』

そんなこともあったね。

でもあのときのボクはバーチャルだったけど、リアルで衆人環視の中でやったら変態だからね。

ふい。なんだか目がさえてきたよ。

「少々レディたちにはつまらない話だったようだね。では、これにて終わりにしよう」

大統領閣下は苦笑していた。

苦笑も渋くてかっこいいとか欧米人はチート持ちか。

「ね、寝てませんよ! ボク、全然すっかりはつきり聞いてました」「うん。ありがとう」

渋い顔で言われちゃうと、ボクなんとも言えないな。

渋い顔で思い出したけど、幼女先輩の姿が一時間以上見えない。

これは……便秘か?

さすがに一時間とか長いよな。

「大統領閣下。thank you very much indeed。さて、続いては本日のメインイベント」

ボクの困惑とは別に、司会役のピンクママさんが式次第を読み上げる。

淡々とイベントは進行していく。

「ヒロウイルスの授与式を行う」

また、再び。

ワっと会場が湧いた。

けれど、ボクにはなんだか得体のしれない不安が、胸の奥にうずきだすのでした。

ハザードレベル132

AM11:00

私——小山内は久我を追っている。腕に装着してある時計をちらりと見る。スマホがないとこういうときに不便だよな。

「まずいな」

時間が経ちすぎている。

最初の検疫ポイントである扉を抜けたあとには、トイレ前の通路で一回だけ英語で誰何されたが、それ以外はスルーされている。

当然それは久我も同じだろう。

検疫ポイントを抜けたあとは、大手を振って艦内を歩いているはずだ。

巨大な艦。

軍属だけでなく非戦闘員も入り乱れて生活していることから、しかも私のような東洋人も少なくないことから、トロイの木馬のように敵と味方を識別できなくなってしまうた。

検疫の敗北。

どこかに隙があつたのだろう。だが、

——まだ負けたわけじゃない。

丹田のあたりに力をこめ、足取りは止めず、脳みそもフル回転させる。

広い艦内でどこに向かえばいいのか。

FPSでもそうだが、相手の思考を読めばいい。相手の思考とは相手のやりたいことである。

通常テロリストの目標は大別すると二つ。

要人の暗殺か重要な建造物の破壊だ。

要人はほとんど甲板にいるだろうから、おそらく艦の破壊が目標だろう。

この広い艦内を人の身体と同視すれば、敵はすでに身体に侵入し、重要な器官に向かっていているに違いない。さながら通路は血管のよう

なもので、耳をふさいだときに聞こえるような『ゴー』という音がそこかしこから聞こえてくる。

クリーム色をした巨大なパイプ。壁は鉄製で、通路は“いずも”に比べると広い。

居住空間を抜けて、枢要部に入るとさらに人の気配がなくなってきた。

——白血球になったような気分だな。

と、益体もないことを考えていた時だった。

「キヤー」という万国共通の悲鳴が先に耳に入り、それから「ヘルプ！ヘルプ！ ノー！ ノー！」と私でもわかる英語が通路の先から聞こえた。

聞こえたのは視覚の外。

角を曲がればすぐといった感覚だ。

駆ける。懐から短銃を取り出し、セーフティを流れるように解除。カンカンカンと通路を走る音がやけに響く。

私が角にたどり着くまでに要した時間はわずか二秒にも満たないだろう。

しかし——。

FPSの敗北パターンで、一瞬前に負けるということがわかることがある。

それと同じく、絶対に間に合わないという嫌な確信があった。

「ひゅ。ぼあ。え……ぶ」

いつ聞いても聞きなれない音。

死の音が耳朶を打つ。

「おいおいマジかよ。勘弁してくれよ」

つい軽口になってしまうのは許してほしい。

久我のやり口が一瞬で想像できてしまい、その後の展開に心底うんざりしたからだ。

はたして想像は現実のものになった。

私がちらりと角から覗くと、金髪白衣の女医（30くらいか）がエンジンニア姿の男ゾンビ三匹に襲われていた。

いや違うな。

正確に言えば、襲われ終わっていたというべきか。押し倒された首元は無惨にも噛みつかれ、トマトケチャップを逆さでぶちまけたかのようになっているし、白いソフトパンのような柔肉からは、真つ赤にしたたるウインナーが生えている。

まあちよつとばかし製造工程と、内容物が違うがな。

さながらヒューマン・ブレイクファストか。クソつたれ！

死んでるのはすぐわかった。おそらく動脈を食いちぎられたというのもあるだろうが、気道のあたりを食い破られて、呼吸ができなくなったのだろう。

あるいはショック死かもしれない。

いずれにしろ――、野生動物のように食って腹いっぱいになったら満足して寝るようなやつらじゃない。ゾンビは次なる獲物を求め、つまりは一番近くににいるオレのにおいに気づいてゆらりと立ち上がった。

「わかってる。おまえの狙いはな」

久我の狙いは時間稼ぎだ。

ヒロちゃんというゾンビから回復できる存在がいる以上、オレはゾンビの頭を撃ちぬいて永遠に停止させることはできない。

ゾンビという形で人質にとられてしまったともいえる。

最大効率化を目指すなら、ゾンビをすべて駆逐してでも先に進むべきだろうが、それはゾンビを絶死させるべしというジューテツカ思想

――あるいは久我の思想に敗北することを意味する。

問題なのは――。

久我が何人殺したかだな。

いつもながら戦略も何もなく腕を突き出してゆっくり近づいてくるゾンビに、オレは回し蹴りを叩きこむ。ゾンビはよちよち歩きの赤ん坊のようなもので、つかんでくる力は強いが踏ん張る力は弱い。転べば立ち上がるのもノロノロとした動きで、数秒間は時間ができる。

今度は二匹が同時に襲ってきたが、一匹の膝を撃ちぬき、ガクつと崩れたところをヤクザキックで前に吹っ飛ばした。コンマ数秒後に

到達するゾンビには、あえて引き込むようにして右腕をとって、遠心力の要領でくると周り、足をかけて転ばした。

弾がもつたないから、先を急ぐ。

先ほど食われた女医がさっそくゾンビになって手を伸ばしてきたのをヒヨイと避ける。

——下層部には、いったいゾンビはどれだけいるんだ？

あえて説明するまでもないが、人間は例外なくゾンビウイルスに侵されており、死ねばみんなゾンビになる。ヒロゾンビはその先の存在だから省略するとして、艦内のヒロゾンビは聞かされているところピンクちゃんとピンクママさんしかいないはずだ。

久我は道すがらトラップでも仕掛けるように、非戦闘員を手にかけたのだろう。

何人かは手ずからゾンビを作成したのだろうが、ゾンビが増えれば増えるほど危険は増す。一般人でもゾンビ一匹なら抵抗できるかもしれないが、二匹、三匹と増えていけば抵抗もできなだろう。ましてや、思想的には抵抗しないほうが正しいのだから。

「はあ。こんなことならヒロちゃん汁を先にもらつとくんだったな」
通路を走りぬけながら、オレは心底後悔する。

すでにかなりの汚染度になっているのだろう。狭い通路なうえ、次から次へゾンビが現れる。そのたびに転ばすなり、足を撃ちぬくなりして無力化したが、ヒト型の質量を持った存在を何秒かでも無力化するのほびどく手間がかかるのだ。

少ない弾も使わざるを得ない場面がでてくる。マガジンは一個だけ。弾数にすれば20発程度しかない。

これも久我も狙いだろう。クソっ！

ポジティブなことを言えばゾンビの先にやつがいるのだろうという確信もある。

通常、軍属でもゲリラ戦を知っているものであれば、後を追われなために、

——バックトラック法

といった歩行法をしたりする。

要するに、後退したりすることで追跡を逃れる方法を言うのだが、ゾンビは久我も襲うのであるから、おちおち後退なんぞしてる暇はないってことだ。

時間から言えば、道すがら——まさに、すれ違うようにしか殺せないのだ。

必ずゾンビの先に久我がいる。

「大統領閣下。まずいことになりました。ゾンビが大量発生しています」

無線機を使って、私は今の状況をかいつまんで伝えることにした。

☆
☆

AM11:05

「それでは国名、代表者を読み上げるので壇上にひとりずつ上がるように」

ピンクママさんが感情の所在を感じさせない声で言った。

でも——、ボクはわずかな違和感を覚えていた。

いや、これは違和感じゃない。

違和感というよりもっと具体的な——、ゾンビの気配だ。

人間的な感覚ではないから、表現するのが難しいけれども、レーダーサイトに紅点が点在する感じだ。自分の存在が拡張されるような奇妙な感覚。

甲板ばかりに目がいつてたから気づかなかったけど、下のほうにゾンビがたくさんうごめいている気配がある。1、10……いっばい。あばば。いっばいいるよ。なんで？

って、当たり前だけど、これはテロ活動だろう。

百パーセントとは言えないけど、たぶんジュテッカだろうと思う。ゾンビも『ボク』だから、自分が拡大化されていくのは悪い気分じゃないけど、人間にとってはそうじゃない。人間と仲良くなるための式典でゾンビが出現するのは当然好ましいことじゃない。

ボクは命ちゃんに視線を送った。

命ちゃんは視線に答えるように軽く頷く。

ピンクちゃんにも視線を送った。こちらも気づいているようだ。

ヒロゾンビはゾンビの気配には敏感だからね。当然、ピンクママさんも気づいているだろう。

つい昨日まで艦長をしていたピンクママさんからしてみれば、艦内の人ゾンビになったのはツライだろうな。それでも気丈にふるまっているのは、賓客に過剰な不安を与えないためだ。ボクたちも気取られないようにしたい。式典を台無しにはしたくない。

「命ちゃん。操れる?」

ボクは小さく聞いた。

「できます」

ピンクちゃんのほうが力はあるし、ボクも当然可能なんだけど、ピンクちゃんはいまエアコンのためにヒロちからを使ってる状態だしね。

ボクもなるべく手はあけておきたい。何が起こるかわからないからだ。

となると、命ちゃんが一番適していた。

このあたりの意思伝達の速さはやっぱり幼馴染ならではだろう。さきほどから霞のように存在感を消していた命ちゃんなら、こっさりゾンビを停止させていても問題ない。この距離から人間に戻すのはやめておいたほうがいいだろうな。ゾンビウイルスを消す方法だと、もしも肉体的に傷ついている場合、本当に死んじやいかねない。

『ヒロちゃんさつきからメツチャそわそわしてね?』『椅子の上でふわふわしてるね?』『きよどってるな。いまさらのはずだが』『あつ……(察し)』『どうした雷電』『トイレじゃね?』『こんなデカイイベントで』『ライターイ?』『ほんほんぺいん?』『やべえなそれ』

ちがうよ!

とか言える状況でもなく。

その間にもピンクママさんの読み上げは続く。一番に呼ばれたのは当然のことながら、アメリカ合衆国代表のアメリカちゃんだ。

アメリカちゃんは、澄まし顔でスツと立ち上がり、壇上には右側か

ら登る。

身体をまつすぐとしたまま、ボクの座っているほうに一礼。

先ほどしたような綺麗でかわいらしいカーテシーだ。

それから、みんなに対して同じくカーテシー。

壇上のボクから見て左手には木製のコップが置かれている。某宗教にかこつけた聖杯といったイメージなのかもしれないけれど、ピンクママさんにいわせると割れないような配慮ということらしい。意匠は一切なくどれも同じにしているのはそういった宗教色とは無縁のものとの強調するためだ。

壇上に登った代表者はそれらの中から好きなのを一つ手に取る。

ボデイガード役は壇上には上がらない。

そのあと、ボクが水がめみたいなどころから、柄杓のようなものを用いて、ヒロちゃん汁と化した水をカップにひとりずつ入れていく。壇上の左側から降りて、自分の椅子に座りなおし、乾杯の時を待つ。ということをやる。200名近くいるからね。流れ作業になるのは仕方ない。

視線がなにそわそわしてんのよと語っていたが、この緊張感に包まれたイベント進行で口を開くわけにもいかない。わずかにほほ笑むにとどめた。

続いて、江戸原首相。そのあとは金髪でエメラルドの瞳をしたプリンス様。さつき幼女先輩の通訳をしてくれたスーツ姿の小さい眼鏡の男の子。五歳児くらいのちっちゃい女の子と続く。

お子様だらけのヒーロゾンビ候補のなかで、日本だけ平均年齢をおしあげているな。

まあべつに大人はダメって言ってないしね。

「ヒロちゃんありがとう。とてもかわいらしいですね」

歯の浮くようなセリフを言ってくる男の子もいたり、みんな個性を出そうと必死だ。

けれど、ボクにはそこまで丁寧に対応できるほど、並行的に考えられない。

「大統領が何かやってるな」

人が途切れた一瞬を見計らって、ピンクちゃんが指摘した。

アメリカ大統領のトミーさんは先ほどから目立たないように耳元の通信機を指先で押している。誰かと通信中。誰と——幼女先輩と？

「んーむ。ピンクが少し聞いてみるか」

「お願いね」

ピンクちゃんは振袖からスマホを取り出してポチポチとやりだした。

もちろん、テーブルの下でこっそりと見えないようにしている。空調を操りながらスマホも操るとか、ピンクちゃんボクより多才だな。

対するボクはピンクちゃんを見ながらだったから、コップに水をインし損ねた。

水をコップにいれることすらできないボク。

ダバ——と水が無為に流れた。壇上がびちゃびちゃになった。

「あ」

「あ」

そのときの気まずさつたらない。

黒人の女の子だから年齢がよくわかんなかったけど、たぶんボクの見た目年齢より明らかに年下だ。ピンクちゃんと同じくらい？ まんまるの瞳にジワつと涙がたまり、泣きそうな顔になってるし。

わたしもらえないのって、瞳が訴えてるし。

「ご、ごめんね。ちゃんとあげるからね」

『ヒロちゃんひどい』『気もそぞろ』『もしかして本当にトイレ我慢してない？』『ヒロちゃん汁ってそういう』『おいやめろ』『無事もらえたときの女の子の笑顔。プライスレス』

ふい。無事渡せてよかったよ。壇上に落ちた水分はヒイロ力ちからで浮かべて球体にした。

そのままふわふわと浮かせて、海上へシュート！

大丈夫です。ヒロちゃん汁は動物には影響ありませんからね。

「やっぱりゾンビがでたらしいな」

また合間にピンクちゃん。

疑念が確信に変わったという感じだ。

「ジューデツカなの？」

「おそらく。幼女先輩が対応してくれてるらしい」

「他の兵隊さんたちは」

「向かわせているようだが間に合うかはピンクもわからない」

ピンクちゃんはピンクなのに青ぎめていた。

ボクもそうかもしれない。

幼女先輩——、がんばって。

★
||

AM11:30

ゾンビの動きがピタリと止まって、ヒロちゃんがやってくれたんだとすぐにわかった。

孤軍奮闘などとてもなかった。

オレはひとりで戦ってるわけではない。映画ダイハードのマクレーン刑事のようにひとりでなんでも解決できるわけじゃない。ひとりの少女が応援してくれてる。

それだけで無限にパワーが湧いてくるようだ。

そこは、幅十メートルほどの通路が真ん中で二つに分かたれていた。

巨大な換気扇が周り、すぐ隣から排熱された煙を吸い取っている。全体的に沈んだ青色をした鉄の空間。エンジンルーム。

ここエンジンルームは二層構造になっているらしく、箱型ではないエレベーターで下層に向かう。

が、下層に至るまでもなく、そいつの姿をようやくとらえることができた。

艦内のエンジンルームには不釣り合いなスーツ姿。

後ろ姿に、オレは遠慮なく照準をつける。

「おい。こんなところで何をしている。ゆつくりとこちらを向け」
しかし、逆にこいつは何事もないふうにくるりとこちらを向き、銃をつきつけられていると知って、あわてふためき撃つというジェスチャーをしてきた。

「I, v e r u n a w a y f r o m t h e z o m b i e s」

またかよ。アメリカ語は苦手なんだよ察しろ！

しかし、そいつの顔は久我ではないし、表情には驚きと恐怖の色合いが混じっていた。

風貌はありていに言えば東南アジア顔というべきか。

もしかすると、久我ではないということも可能性としてはありうる。

こいつが艦内を迷っているうちに、久我がどこかで暗躍し、ゾンビに襲われなんとか逃げ延びてきた。そんな可能性もなくはない。

——トロイの木馬だ。

敵か味方が判然としない曖昧な存在。

やつらの手口はいつもそうだった。

「おまえ——、小さな女の子はどうした？ あー、ガール。リトルガール。ウエア？」

「Put t h e g u n d o w n , p l e a s e」

右手を下へ下へと下ろす動作。ガンくらいはオレにもわかる。

銃を下ろしてくれって？

どうする。もちろん、こいつが久我かどうかもわからない以上、そうすることはできない。

「NO」

と短く言っつて、それからまた質問をする。

「ワツチュアネーム」

さすがにこれくらいはわかるだろう。名前はなんだ。

「クウガ・デモリツションマン」

「はあん。クウガね」

こいつが久我だとしたらたいした役者だ。

よりによつて久我とクウガとか洒落がきいてる。

いつそ感心するほどだ。

事態は膠着状態に移った。オレは目の前の獲物を逃がすほど甘くはない。

彼我の距離は十メートルほどあるが、この距離ではずすことは無い。

時折煙が出て視界が遮られることはあつても、遮蔽物に入りこむ前に仕留めきれぬだろう。

もう少し近づいてもよいが、ナイフなどの近接武器を持っていたら厄介だ。

この距離がベスト。

どうする？

このままアメリカの海兵隊がここに到着するのを待つのがベストか。

いや――。

冷静に考えれば、こいつを撃ち殺してゾンビにしてしまったほうがよくないか？

賓客だというのは確かだろうが、全体の安全性のためにはそうしたほうがいい。

久我ではなく、本当にたまたま紛れ込んだだけの被害者だとしても、

――でえーじょうぶだ、ヒロちゃん汁で生き返るから。

そんなドラゴンボールの鬼畜悟空のような発想がでてきてしまった。

うん。悪くないな。

そうするか。

外交問題になつたとしても撫子くんがなんとかしてくれるだろう。そう決意を固めたときだった。

「Don't shoot me. I'll show you my ID」

懇願するように男が言ってきた。

オレの決意が伝わったのか。誰だって死にたくはないよな。
ドント。シユート。ミー。

撃つなど言ってることくらいはわかる。

そのあとは——、シヨウは見せるだろ。IDはなんだ身分証か？

身分証を見せるから撃つなど言ってるのか。

そんな脳内で英語の授業を繰り返していると、男が内側のポケットに手を入れた。

英語からの翻訳からすればおかしくないと思い、一瞬だけこちらの動きがとまってしまった。

ほとんど予感だけで、銃を首筋に持っていき、飛来する光の線から身を守る。

投げナイフ。

いやそんな専門的なものではなかったが、持っていた銃は手元から離れ、通路の向こう側に転がってしまった。

と、衝撃！

一瞬で十メートルの距離を詰めた男が、飛び膝蹴りをかましてきた。

わずかだけ手をさしこめたが、首がふつとぶくらしいの衝撃を受ける。

やつの攻撃が止まらない。

打突。さばく。一直線に拳が伸びる。弾丸のような素早さだ。

これもギリギリでさばく。

膝。お腹はやめて！

「ぐふっ」

くそつたれ。三十も後半のおっさんに本気になってかかってくん
なよ。

よろめくように後退し、少しだけ距離が開いた。

「久我だよな。おまえいい加減にしろよ。こんなことして何になる」

「何になるかなんて知るかよ！」

吐き捨てるように言う久我は、もはや自分が何をなしたいのかもわからないらしい。

根拠も理念もない行動。

ただ言われるがままにコマになり果ててしまっている。

「爆弾テロでもするつもりか」

「ああそうだ」

「おまえが嫌いなゾンビが増えるぞ。ここだけじゃない。世界中の人間が困る。ゾンビから解放される日が遠のく。それでいいのか」

「それでいいさ」

わずかながら声に陰りがあった。

誰かの影響を受けたのか、考えにわずかな違いがある。

あるいは自棄を起こしているのか。

剃刀のような拳。

オレは当て勘のみでカウンターを狙う。

めきつ。

骨がきしむ音がした。

身体中の神経が脱落するような虚脱感。

鼻と口から、血が逆流する感覚を味わったが、奇妙なことに頭は痛

みよりも別の考えで占められていた。

——こいつ、カウンターにカウンターを。

認めざるを得ない。フィジカルではこいつに勝てる要素はない。

身体能力では久我のほうが上だ。

意思とは関係なく座りこみそうになる足を叱咤激励し、ふらふらしながらも立ったままの姿勢を保つ。

銃を拾わなければ。

ハザードレベル133

はい。緋色です。

艦内でゾンビが発生して、たぶんゾンビテロだつてことだけど、幼女先輩がなんとかしようとかんばってくれてるみたい。

大変心配です——。

ヒロウイルスの受け渡しは、順調に進んでいて、もうそろそろ終わりそう。

機械的に200名近くに配るんじゃないかと、ひとりひとりに笑顔をかめてとなると、精神的にもけっこう疲れる。

心のうちにはテロのことがやっぱり気になってしまつて、どうにもよくない。

立食パーティについては、ゾンビが発生したのが下層だから可能ではあるだろうけど、ボクは辞退したほうがいいかもしれない。

ゾンビになっちゃった艦のみなさんを元に戻さないといけないし、そもそもテロリストの目標は、たぶん下層に向かつている以上、この”いんとれびつど”を爆破して沈めることだろう。

爆破オチなんてサイテー！

とか思うものの、テロリストなんて、なるべく殺しなるべく破壊することしか考えていないんだから、当然の帰結だと思う。

ボクを狙ってくれたほうが楽なのに——。もう戦艦の主砲が直撃しても死にそうにないくらいレベルアップしてるし……。

ボクは、式典が終わつたら、すぐにでも幼女先輩を助けに向かうべきかもしれない。

助けるなんてプロに対して失礼な物言いだけど、なにかできることをやりたい。

ただ座つてるだけの姫プのほうがもどかしい。

「ピンクがなんとかするから」

ピンクちゃんがまつすぐ前を向いたまま、ボクのところを見透かしたように言った。

この子も、いま我慢している。

本当はすぐに駆けだして言つて、みんなを助けたいだろうに。ちやんと与えられた職責を全うしようとして頑張っている。ボクも年長者として落ち着かないとね。幼女先輩を信じないと。大丈夫だよな。幼女先輩強いし。

★
||

「いふつ。げふ。やめ」

滅多打ちである。ぼろ雑巾のように久我に殴られている。

銃は通路の先に飛ばされていて、十メートルくらいの距離が離れている。

たった十メートル。あまりにも遠すぎる十メートル。銃メートル。あ、ダメだ。

わけのわからん親父ギャグが出てくるくらいヤバい。ふひひ。

もうだめだ。こいつ強すぎるだろ。拾いに行く暇すらない。

将棋やチェスで言う『詰み』の状態に入っている。

「ガッシー・ボカツ！」私は死んだ。スイーツ（笑）。

人間って逆に絶望的すぎると笑えてくるのってどうしてだろうな。ヒロちゃん たすけてー！。

☆
||

最後のひとりは、褐色肌の女の子だった。

インドのサリーみたいな赤い服を着ていて、刺繍はきめ細かい。

ボクと同じく白銀のような髪の毛をしていて、目も薄銀色。

——どこか左右の焦点が違うような。

身なりがいい子ばかりの式典だったけど、ひとときわ品が良いように見えた。

品というより陰りというべきなのかな。

なんだか年齢と比して大人びて見えるような。

王族の方なんかも集まってるから、大人びてる子は多かったけど、

なんだか子どもものなかに大人が混じってるような感覚。見た目は小さな女の子だったけれど、その瞳が濁ってるように感じた。

その子には片腕がなかった。

少しばかり静止した時間が流れた。

ボクがいろいろ考えていたからだ。

ややあつて、ボクは慌てて水をすくい、彼女の持つてるカップに入れた。

「ありがとう」と、彼女はうつすら笑う。

やつと終わった。

正直なところ、ボクはそんな気持ちだった。

早く終わりたいという気持ちが強かったから、ほっとしたんだと思う。

壇上から見下ろすと、みんなヒロウウイルスに満ち満ちたカップを握ってボクを見ている。

ボクに賛同してくれるのは単純にうれしい。ボクに同化したいというところは怖くもあるけれど、テロとか、政治的思惑とか、そういう摩擦があるから、他者を感じ取れたりもする。

「みんなにいきわたったか？」

ピンクママさんが確認の意味をこめて言った。

見回してみても、特にもらつてないという意見はないみたい。

ピンクママさんは頷き、ボクのほうに振り返った。

「それではヒロちゃんに乾杯の音頭をとってもらおう」

そういう段取りでしたもんね。

ちなみにボデイガードさんについては、代表者から緋色印の水をもらったり、もらわなかったりといういろいろだ。一口でも感染させる力は十分にあるし、回し飲みに忌避がない国はそうするところもあつたりといういろいろ。

ボデイガードといっても親族親子だったりする例も多いからね。でもませた子なんかはパパと間接キスになって嫌、とか言っちゃうパターンもあるのかな。

こつちが配った木のカップと違って、ボデイガード側が必要な場合

は職員さんが配っている。木のカップとはちがつて、これはワイングラス。いちおうは乾杯つて方式なのでそうなったんだろうな。

あれ。さっきの子。隣にボディガードがないみたい。

——それに。

なんだかものものしい。

その子の周りの兵士さんたちの視線が、どうにもその子にそそがれているような。

油断のならない視線。そして、不敵に微笑するロリサキュバスみたいな表情の彼女。

ニヤニヤと挑発的に笑う彼女に対して、兵士さんたちも余裕の笑みを崩さない。

ボクはゾツとした。

もしかして——ロリコン？

いや、違うか。周りの子女たちも全員ほぼロリとシヨタばかりだからね。

最後の女の子は配色的に神秘的な感じはしたけど、大人びているのを除けば、普通の女の子であることは間違いない。まあ外貌とは裏腹にこころはボクよりも複雑つてことはありえると思うけどね。命ちゃんみたいな例があるからべつに驚きません。

気のせいかなあ。

「ヒロちゃん。こちらに」

考えてる時間はなかった。

ボクはピンクママさんに導かれるように演説台に向かう。

「えーと……」

いろいろ考えていたから、考えていたセリフが吹っ飛んでしまった。

ピンと張った糸みたいな緊張感に、手に持ったカップの水面が波立ってくる。

『ぎわぎわ』『ついにこの瞬間が訪れるのか』『オーバーシュート』『始まります』『クラスター構成しちゃうのね』『オレもヒロちゃんとクラスターを構成したい！』『わかった。オレとクラスターになろうな』

『アッー!』

ふふっ。

少しノリのよい、いつものヒロ友たちの発言に、わずかながら緊張感が解けたような気がする。

ボクの手の中におさまってるカップ。

その水面の揺れが少しだけ平面に近づいた。

「あんまり長すぎても眠くなっちゃうんで、短く言います。みんな今日この日に集まってくれてありがとう。ゾンビ対策はいろいろ大変だと思うけど、ボクもできることはお手伝いしますから、みんながんばってください。以上です」

「ヒロちゃん。何に乾杯する?」

ピンクママさんが絶妙なタイミングで言葉をさしこんでくる。

何に乾杯か。

無難な言葉がいいかな。

「じゃあ、新しい世界に。乾杯!」

「新しい世界に!」

唱和する声がミルフィーユみたいに幾重にも重なった。

☆
||

立食パーティーは予定通り行われるらしい。

壇の下では、パイプ椅子が取り払われていて、すぐさま長机が設置されつつある。シエフたちが温冷車で運んできたのは、手によりをかけた料理の数々。

世界中の料理が所せましと並べられている。日本のお寿司とかもあるよ!

くっ。イカ以来の新鮮な魚料理。

ボクの脳内割り当ての半分がお昼ご飯に占められてしまう。

もう半分はテロについてだ。

アメリカは威信をかけて、テロなどなかったということに納めたいのだろう。

しかし、それは一方でほとんど不可能なことだろうとも思う。

いまは目覚めたばかりのヒロゾンビたちも、すぐにゾンビがどこにいるかぐらいはわかっちゃうだろうしね。

勘のいい子はもう気づいているんじゃないかな。

国のVIPでもあるから、人気度の高い王子様とか女王様だったら、すぐさま超能力が身についたりもするかもしれないし、いきなり強くてニューゲームな子たちもいるってことだ。

要するに、下層でのあわただしさにはすぐに気づく可能性がある。

ただ、逆にいえば貴賓ならではの空気を読む能力で、何事もなかったかのように対応してくれるかもしれないし、このあたりはわからないな。

やたらと目につくのは、幼げな容姿に対して大人びた表情。

ボクよりも能力的にはめちやくちや高いだろうし、同じぐらいの年齢でも教育レベルがまったく異なる。

なによりずっと幼いころから、政治に触れてきたのだろう。

テロが起ころうがどうしようが、もはやヒロウイルスの受け渡しは済んだわけだし、ヒロゾンビは死ににくいから、爆破が起こっても、万が一この艦が沈んでも大丈夫だろうと思う。

ピンクちゃんの手前、そんなことには絶対にさせないけどね。

「ヒロちゃん。まずいことになった」

壇上の席にじっと座っていると、アメリカ大統領のトミーさんが話しかけてきた。

ゾンビのことだったらすでに命ちゃんにお願いして対処済みだ。

「小山内くんのことだよ。実はついさっきまで通信が入ったのだが、それから連絡がない」

「トミーさんとこのの兵隊さんは？」

「急行させているが、間に合うかどうかはわからない」

ふうむ……。心配が膨らんでいく。

幼女先輩の無類の強さは知っているけれど、相手はなんでもやってくるテロリストだし、現実にはゲームとは異なり、乱数が多いわけだし。

大丈夫だよな。

ボクの不安はゾンビになった後に、頭を撃ちぬかれて完全に殺されてしまうことだ。

そうならボクにもどうしようもない。どうしよう。どうしよう。

「ピンクがゾンビを人間に戻しながら現場に向かおうか」

「でも間に合わないかもしれないんだよ」

思い出すのは、親友の雄大が噛まれたときだ。

あの時のボクは、ゾンビになったあと、もうどこに行ったかもわからなくなるのかもって思ってた怖かった。

もう二度と話せなくなる。

死とは、コミュニケーションの断絶だ。

「ん……」

そのとき。

トミーさんが耳に装着している通信機から、かすかに音が聞こえた。

「小山内くん？ 無事か!？」

トミーさんが聞く。

かすれるような力のない声。

ボクの超人的聴力がとらえる。

『ヒロちゃん。たすけてー』

カツ！ と目の前が真っ赤に染まるような気がした。

幼女先輩が傷つけられている。

ボクに助けを求めている。

ふざけんなよ！ 敵！

ボクはなりふりかまわず、緋色の翼を顕現させ、通信機を感染させる。

電子的な侵略はコンマ数秒で済み、ボクはすぐに幼女先輩とつながった。

「幼女先輩。いま助けます!」

突然、ヒロちゃんから「助けます」と語りかけられて、ビックリした。

腕も足も顔も青あざだらけで、意識はすでに気絶一步手前だったが、ヒロちゃんの声で覚醒した。

「先輩どうしたんですかあ？　もうそろそろ死にますかあ」

久我のやろうが、歪んだ顔をしてゆっくりと近づいてくる。

こいつはもはや自分のほうが肉体的能力では上だと確信している。

つまり、銃さえなければ逆転の目はないと思っている。

確かにそうだろうよ。

ひとりの力ならな。

久我の繰り出したパンチをオレは無造作につかんだ。

久我の顔が驚愕に変わる。当たり前だ。一秒前には死にかけだった男が突然、筋肉モリモリのマッチョマンみたいになっているんだからな。

傷はすっかり元通り、それどころか溢れんばかりのパワーで満ちている。

見れば身体がうっすらと赤いオーラで覆われていて、ヒロちゃんの力でバフがかかっているのだとわかった。

ヒロちゃん、補助魔法もできるようになったんだな。

「な。ぐあああああつ」

そのまま久我の拳を握りしめ破壊する。

骨が軋み、バキゴキと嫌な——いや、いまだけは痛快な音が響いた。

「どうした。久我。カルシウムが足りてないんじゃないか」

「く。ぬツ。おっさんみたいなのを言ってんじゃねえよ！」

残った左手を振りまわす久我。

パワーだけではなくスピードもあがっているオレは悠々とかわした。

「今までよくもやってくれたな久我ッ！」

三下悪役のセリフを吐き、オレは久我に殴りかかる。

「小物すぎるだろ。おっさん」

「うるせえッ！」

ガードが入ったがおかまいなしだ。

蹴りを入れると、久我は紙つぺらのようにあっさり吹っ飛ぶ。

明らかに人外の力を得て、べつにヒイロゾンビになったわけではないが、その力に戦慄する。

これが”人気”の力か。

ヒトの想いの集積がヒロちゃんの力となる。ヒイロちから。

「人気ものはつらいね」

「くそがああッ！」

「おいおい語彙すくなくなってるぞ。コレはオレの分。コレもオレの分だ！」

一発。一発。殴りかえされてもまったく痛みがない。

シールドされているから、一方的だ。

グチャ、グチャつと人体から聞こえちゃいけない音が聞こえてくる。

闘争の場面では、普段オレは言葉少なに淡々と処理する傾向がある。

FPSでは冷静にならなきゃダメだし、そうでなきゃ相手を上回れないからだ。

今回のように、なんでもありの殺し合いだと『冷静に』なんて意味がないことがわかった。

オレも熱くなる傾向が確かにあったんだ。自分自身も知らなかった一面だ。

うずくまっている久我を見下ろすオレ。

少しかわいそうだが、こいつはここで殺すしかない。

なに本当に死ぬわけじゃない。ゾンビにして放置するだけだ。

さすがに素手で首の骨を折ったりするコマンドー的な解決方法は勘弁してほしかったので、オレは銃を探した。

遠かった十メートルほどの距離が今では近い。

アニメの縮地のようなスピードで近づき、銃を手にする。

その間、数瞬にも満たないだろう。

ポイントをつけ。
終わりだ。

「おい……幼女先輩よ」

「なんだ？」

つい反射的に答えてしまった。

「It's a bit of a late Christmas
present. Take it!」

「は？」

放物線を描いてくる小さくて細長い物体をオレは馬鹿みたいに受け取ってしまった。

見ると、義手のようだ。

いや、これは――。

久我がすでに駆けだしている。オレから距離を取り逃走を図っている。

銃でポイントをつけるのも忘れて、オレは考える。

「どうすんだよ。これ」

起動しているとすれば、止める方法は？

いや、それ以前に――この部屋を丸ごと破壊するほどの威力だとすれば、どうすれば一番被害が少なく済む？

ヒロちゃんのシールドで抑えこめるのか？

久我は通路の向こう側、床と操作盤だけあるエレベータのほうに向かい、そこから下の階へエレベータを飛び越して、下層へとジャンプした。

もう一度、義手を見る。

死の宣告と、英雄的行為を天秤にかけて、やはり死ぬのは私も怖かった。

結果取ったのは実に中途半端な行為。

その場に爆弾を置いてのみつともない逃走である。

と、その瞬間。

視界がまばやく輝き、爆音とともに、とてつもない衝撃が私の身体を吹き飛ばした。

☆
||

ドオオオオオン！

という爆発音が響いた。幼女先輩とのリンクも切れて、どうなったかわからない。

たぶん、幼女先輩とつながっていた通信機も今の爆発ではずれちやっただらう。

幼女先輩！

とてつもない爆発音に”いんとれぴつど”が鳴き声をあげた。

ギシギシと船体が歪んだ音を立てている。

みんなは立食パーティの準備中で立ちあがっていて、準備ができるのを待っていたけれど、軽いパニック状態になっているみたいだ。

「落ち着くようにー！」

ピンクママさんが必死に呼びかけている。

しかし、みんななんだかんだいっても子どもが多いし、たったひとりの声でおとなしくできるはずもない。統制がとれた組織ではないのだから。

今日のはじめて会った人どうしなのだから。

だから――、

だからだろうか。

その子が、しとやかに。

しかし豪胆に。

壇上が上がってきても、誰も咎めなかったのは。

ボクもピンクちゃんも、誰もかれも彼女を止められなかった。

いや、混乱していて止められなかったというのが正しいだろう。

果たして演説台にたどり着いた彼女は慈愛の女神のような微笑みを浮かべ言った。

「プレッパーズ諸君。諸君らに告ぐ！」

ハザードレベル134

船体がわずかに揺れている。

いや、そもそも海の上だから揺れているのはおかしいことじゃないけれど、ゴゴゴという地獄の歯ぎしりがそこかしこから聞こえてくるようだった。致命の一撃になったのだろうか。ここからじゃよく見えないけど下層のあたり、横っ腹から煙がたちのぼってきて、船体をなでるように視界を遮っている。

行きかう人たちは走りだしこそしないものの、表情には不安が浮かび上がっていた。

ピンクママさんは、ピンクちゃんを手元に抱き込みながらどこかと連絡を取り合っている。

アメリカ大統領のトミーさんは通信機を使って、他の兵隊さんたちに状況の報告を命じているようだ。表情は険しい。

命ちゃんは――。

ボクと手をつないでいた。

不安感をかき消すように、ボクはその温かみにすがった。

その一瞬の間隙――。

彼女が、ステージに上ることができたのは、わずかなころの間隙を縫ってきたからだった。

「プレッパーズ諸君」マイクの前で一呼吸し厳かに言う。「諸君らに告ぐ」

プレッパーズというのは備える者たちのことだ。

例えば、大災害とか、アポカリプス級の何かに備えて、日ごろから準備を怠らない人たちのことを指す。

ここにいる子どもたちや、賓客は、備えてきたのかというと、やや疑問。

どちらかというところ、プレッパーズは備えることが趣味で、引きこもりが趣味で、世界の終わりを夢見ている人たちだから、ここにいるような基本的にお日様の道を堂々と歩く子たちとは違う。

終わるかもっていう前提で、自分たちだけは助かるように動いてい

る人たちだからね。

言い方が悪いけど日陰者なんだ。

だから、最初、その子が何を言ってるのか誰もわからなかった。

巨大なモニターに映し出されたコメントも困惑する声が多数派だ。

『テロられた?』『なにしてんだよアメリカあー!』『なんだ。檀上の褐色肌の女の子?』『プレッパーズ?』『備えるものたちって……』『この子、テロリスト?』『ヒイロゾンビになったんだよな?』『ヒイロゾンビになったんなら……ヒロ友?』

そう、ボクもヒイロゾンビになるんだったらヒロ友かなとも思っ
て、よくわかんないまま動けなかったというのが正しい。

その子はあくまでも柔らかく微笑みながら続けた。

「わたしが呼び掛けているのは画面の向こう側の君だ。世界の終わりを夢みて、せっせと備蓄し、ミツバチのように働き、物資を蓄え、危急の事態に備えてきた者たち。本来であれば選ばれていたであろう君たちのことだ」

『なんだ?』『画面の向こうのオレら?』『まあ視聴者の中にはプレッパーズもおるやろうけど』『備えている以上は、外部との連絡手段は言うにおよばずだろうからな』『しかし、この子いったい誰なんだ』

「失礼した。私の名前はゾイ。吹けば飛ぶような小国ヌース・スム・ド・ソライレの第二王女だ。参加者リストの末番を見ればすぐにわかる」

『知らない国のお姫様』『ゾイちゃんにがんばるゾイといってほしい』『おまえ、ほんまシリアスブレイカーやな』『褐色肌のロリっついいいよね。白いのが映えそうで……』『ええい。ヒロ友にはロリコンしかおらんのか』『ヒロちゃんのこと好きな時点でだいたいはロリコン』『おまえらほんま……』『んー。参加者リスト見たら第一王女ってなってるけど』

お姫様?!

みんなに落ち着けていいのかな。

でも、そうじゃなかった。

「プレッパーズ諸君。わたしは君らに提言したいのだ」呼吸を切った。

「このままで本当にいいのか？」

流し目をするように備え付けられたカメラに視線を送るゾイちゃん。

ヒイロゾンビになったことで回復した腕、そしてもう片方の腕を等しく翼のように広げて。

「お前様よ——、夜月緋色が存在しない世界を考えよ。お前様は世界の王となり、ポテトチップスを貪り食いながら、ゾンビに食われていく者たちを笑いとばしていただろう」

『なんつう邪悪』『虫図が走ることを言ってるぞこいつ』『優越感か……まあ多少はわかるわ』『プレッパーズは日常の中では異常者扱いだったからな』『まあそうねえ』『俺らも多少は蓄えてたから、こんなに参加できるわけであつてだな』『備えてなかったけど運よくネット環境にありつけたオレみたいなやつもいるぞ』

「ゾンビが溢れて夜月緋色が現れるまでの数か月の間。お前様は限らない優越感を感じていたのではないか？」

しかし、と続ける。

「夜月緋色という救世主が現れたことで、お前様の天下も終わってしまったな。優越感も水をかけられた火のようにしぼんでしまっただろう。なにしろ、何もしなくても救われるのだ。何もしなくても——！ 世界は元に戻る。お前様は、元の日陰者に戻り、備えているのは馬鹿らしく、世界は終わらないと後ろ指を指されながら生きていくことになるだろう」

ゾクリとする視線がボクのほうに飛んできた。

「お前様——。私に投機せよ。さすれば世界を再び混沌の渦に叩き落としてくれよう。夜月緋色の存在しない世界に。人類がゾンビに敗北した世界に。すなわち、お前様に勝利を捧げよう」

ボクは、やめさせようかとも思ってたけれど、その前にズイと前に出たのはトミーさん——、アメリカ大統領閣下だった。

ボクたちを守るように下がらせながら、

「ステージから引きずり下ろせ！」

と鋭い舌鋒を飛ばす。

普段、穏やかそうな人が厳しく命令するのは怖くもあった。

この人もやつぱり兵士なんだなって思った。

対する我らが日本の江戸原首相のほうは腰が抜けたのか、その場で赤ちゃんみたいな姿勢でハイハイしている。

日本の首相はシビリアンだからしようがない。

壇上の端までボクたちが下がったとき（時間としては五秒も経っていない）、ようやく兵隊さんたちが何人か近寄ってきて、ゾイに手を伸ばした。

子どものいたずらを咎めるようにというわけにはいかない。ほとんど猛獣を取り押さえるハンターのような物々しさだ。

しかし、届かなかった。

すでにゾイの言葉はプレッパーズに届いてしまっていた。

薄いヴェールのようなバリアに守られて、それ以上、前に進めない。

吹き飛ばされてしまう兵隊さんたち。

わずか数分間しゃべっただけで、ゾイは一定の”人気”を得ただ。だ。

愕然とした。この世界にはいまだに、みんなが救われるのを願う人ばかりじゃなくて、自分さえ助かればそれでもいいっていう人たちが一定程度はいるという事実には。

全員が同じ考えというのもさすがにゾツとしないけど、ゾンビになるのはみんな嫌だと思っていた。でも、そうじゃないんだ。

この世界には、世界が滅びてもよいと思っっている人間が確実に存在する。

「虐げられし者たちよ。今こそ立ち上がるべき時ではないか？」

ゾイはもはや壇上の支配者だった。

言葉を駆使し、みんなのこころを引き裂こうとしている。

潜在的に押さえつけられていた声の代弁者として。

世界を分断する。

「知ってのとおりヒイロゾンビは非常に耐久性に優れている。なかなか死なんぞ。ここに集められた支配者階級は文字通り永遠に統治することになるだろう。お前様は永遠に、永遠に、永遠に、搾取される。

「虐げられるのだ」

扇動する。

「それでよいのか？」

熱狂的な身振りで。

「革命を起こそう」

ゾイは怪しく踊る。

「わたしを伴侶とせよ」

この世界で見たどんな政治家よりも政治家らしい身振りで。

「虐げられた者たち。マイナーな者たち。支配された者たち。強姦された者たちよ。わたしがお前様の声を代弁してやる。力を貸せ！」

『いやわけわからんし』『ヒイロゾンビって不死なんかなあ？』『普通に頭ぶち抜けば死ぬんじゃね。ゾンビだし』『ゾイ閣下がりりしくてわりとスコ』『おい！』『さすがに革命戦士に肩入れするやつとかおらんやろ』『ヒロちゃんもこれにはドン引き』

ボクも、ゾイの言い分に耳を貸すやつはいないと信じたかった。

けれど——感じる。

ざわつき。ヒイロのちからの源泉を。

ヒトがヒトに同調するとき、その集積装置としてヒイロゾンビは力を発揮する。

はつきりと見えた。

ゾイの思想は、メジャーではないものの、決して少なくない支持を受けている。

マイナスの連帯とも言うべきそれは、ピンクちゃんや命ちゃんにも匹敵するほどだ。

いや——もしかすると、それ以上？

「やむをえん！ 撃て。シユート！ シユート！」

大統領閣下の命令に、兵隊さんたちは流れるようにアサルトライフルを乱射する。

相手が子どもだということもあってか、ほんのわずかな躊躇が見られたものの、プロらしい思い切りの良さだった。

ダルルルルルと、ゲームなんかより何倍も大きな音が響き渡

り、ゾイは虚をつかれたように、口を浅く開き、先ほどと同じようにヴェールをまとった。

シュインシュインと火花を散らせながら、ヴェール状のシールドを舐めるようにして弾丸が走る。

火線が不自然に曲がり、後方へと滑り落ちていく。空間が歪み、弾丸が到達しない。

白くて透明なまゆのようなシールドに包まれたゾイは、中から不敵に笑った。

それは——弾丸で殺されることはないという安堵からか。

それとも、自分が支持されているという安心からか。

「今度はこちらから行くぞ」

兵隊さんたちの顔が恐怖にひきつった。相手は得体のしれない力を使う化け物だ。

客観的に見て、こちらの武器は通じない。あちらの武器は正体不明のヒイロちから。

勝てるはずもない。

マズイ。このままじゃ……。

ボクが相手をしたほうがいいだろう。

「ヒロちゃん。手を出さないでくれ」

「え？」

「向こうの思惑がよくわからない。ヒロちゃんの戦闘力を世界中に広めて、ヒロちゃんは危険だと思わせるのが狙いかもしれない」

「でも……」

「あいつらもプロだ。自分の使命はよくわかっている。任せてくれな
いか」

そう言われてしまうと、ボクは黙るしかなくなる。

兵隊さんのひとりが弾幕を張りながら、ゾイの足元に手りゅう弾を投げ込んだ。

いや、正確には投げこむ姿勢のまま固まった。ゾイの念動力だ。

空中に手りゅう弾が固定され、そのまま爆発。

「うあああああああ」

聞くに堪えない絶叫が響く。

彼の腕は半ばから消失し、赤黒い血の色と白い骨がコントラストで見えた。

『グロ注意』『グロ中尉!!』『マジか。本当のテロかよ』『ひえええ』『ヒロちゃん助けて』『海兵隊でも相手にならないか』『コマンドーならな……』『グリーンベレーでもいいぞ』『さすがに不謹慎』

ボクが一步前に出ようとす。

これ以上は、みんな危険だ。いやすでに犠牲はでてしまっているけれど。

この船における最大戦闘力はボクなのだから、ボクが前にでるのが一番合理的なんだ。

けれど、その前にピンクちゃんが切れた。

「ママの船で、好き勝手しやがって」ピンクちゃんが毒づく。「許さないからな」

「どう許さないというのだ。大人に守られてぬくぬくと育ったお嬢様が、わたしをどうこうできる権利があるともいえるのか」

それが何かの引き金になったのか。

底知れぬ憎悪を感じる声だった。

ゾイは地面にうつぶせに倒れていた兵士たちを数人、念動力で持ち上げる。

じたばたともがく。あがく。人の影。

「ノー」「あああッうがああ」「スト……げへえ」

ちようどペットボトルの蓋を回すように、いとも簡単に首をねじきってしまった。

糸の切れたようというのを現実には体感する。宿主のなくなった身体は重い人形のように崩れ、生首は自分がどうなっているかすらわからない苦悶の表情で、落ちた果実のように甲板に投げ捨てられた。

『うあああ……』『これは痛そう』『これオレもやられたことあったけど痛かったぞ』『首ねじ切られ兄貴は無事成仏してくれ』『普通にR18G展開でさすがに困る』『オレはヒロちゃんがかわいい動画を見たかったの!』『どうしてくれんのこれ……』

「やめろー!」

ピンクちゃんが叫び、念動の力をぶつける。

ゾイも同じく腕を伸ばし、不可視の力を使った。

フォースどうしのぶつかり合いで、空間がたわむ。

ほぼ同程度の力勝負。ピンクちゃんの顔が歪む。

「みんなが仲良くしようっていうときになぜこんなことをするんだ
!」

「みんなが仲良くというのが気に入らない者もいるのだ」

そういう人も中にはいるだろうと、頭では思っていた。

自殺者だっている世の中だ。この世界を自分ごと滅ぼそうとする人間だって少なくない。

けれど、ボクはそのことを実際の現実としてはまるで理解していなかったんだ。

まだ、ボクと同じくらい女の子が、世界を滅ぼしたいと願うなんて――。

うすら寒い感覚だった。

現実感のまるでない現実。

これがジユデツカの悪意。

ボクはピンクちゃんに力を貸すことすら忘れていた。

ゾイは一瞬、視線を上方に向かわせ、甲板を覆っている天蓋を破壊した。

巨大な天蓋はそれなりの重さと質量があって、落下時に人間を押しつぶす。

もちろん、目覚めたてのヒイロゾンビも例に漏れない。

下にいたのはアメリカちゃんだった。

ボクはとっさに腕を伸ばし、念動を使おうとする。

しかし、その前にピンクちゃんが力を使った。

きつと、ママの船で誰も犠牲をだしたくないと思ったからだ。

天蓋は空中でピタリと止まり、そのまま海中へと投げ捨てられた。

けれど、そのわずかな間。

ピンクちゃんのパワーは二分されてしまった。

ピンクちゃんの矮躯が木の葉のようにくるくると舞った。

『うああああああ。ピンクうううう』『毒ピンに暴力ふるうとかマジこの女なんなん?』『アメ嬢かぼったのはピンクか』『マジ黄金の精神』『ヒロちゃんつつ立つてる場合じゃないぞ』『他人事でごちやごちや指し飛ばすなカス』『なんだとてめえ。死ぬ』『やめる喧嘩すんなよ』

ピンクちゃんは壇下まで吹っ飛ばされ、意識を失っていた。

アメリカちゃんが駆け寄って、ピンクちゃんの身体をかき抱く。

「ピンク。しっかりしなさい。ピンク！」

「アメリカちゃん。あまり動かさないほうがいいよ。頭を打ったかもしれないし——」

どうしてなのか。

あまりに怒りすぎると、逆に冷たいような感覚がしてくるのは。

こんな10歳くらいの子に対して暴力をふるうのは、まったくもって気が進まないけれど、ピンクちゃんを傷つけられたら、もはや黙ってはられない。

ボクは命ちゃんからそつと手を離れた。

一瞬だけ不安そうな顔になる命ちゃん。

心配しないでも負けることはないよ。

「いい加減にしてくれないかな」とボクはゾイに言った。

「だったら力づくで止めてみせよ」

ゾイはその場で空中に浮揚していた。

そのままどんどんと浮き上がり、天蓋を念動の力を使って無理やり破壊した。

落ちる天蓋をボクは支え、ピンクちゃんと同じように横に放り投げた。

天蓋がドポンドポんと音をたてながら沈んでいく。

頂点近くへのぼった陽光が容赦なく甲板を照らし出し、太陽を背にしてゾイは笑んだ。

ボクは追隨する。

「とまってー！」

「言葉などもはや不要だろう。世界を憂いたところで誰も救われな

い」

「言葉が通じているから話しているんだよ。これだけのことをしでかしているんだ。お咎めなしってわけにはいかないだろうけど、やめる気はないのかな」

「何を馬鹿なことを言っている」

「ボクはゾンビから人間に戻す力がある。首だけになった人たちだつて、回復させることができるんだ。だから——」

「だから、やり直せるとでもいいたいのか」

「ありていに言えばそうだよ」

首だけになった人たちは、いま、ゾンビになって視線を動かしていない。

ヒロゾンビにしてしまえば、首だけになっても元に戻せる。回復魔法を使ってもいいかもしれない。ただ回復のほうは劇的回復能力はないからな。首だけから戻せるかは不明だ。

ともかく、ボクが言いたかったのは、まだ完全にゾイが殺したわけではないということだ。

不可逆のラインを越えてはいないってことだ。

「虫唾が走るほどの甘さだな」

下方へ不可視の力が伸びた。

ヒロゾンビはゾンビを操れる。正確にはゾンビウイルスなるものを操って従えることができる。

だから、ゾイが行ったのは、ヒロゾンビなら基本的に備わっている機能だ。

——人間の体内にあるゾンビウイルスを増殖させた。

賓客やボディガードたちはヒロゾンビだから影響を受けない。

けれど、海兵隊さんたちは、その場で首元に手をやり苦しみだした。ゾンビになってしまった。

「ほれ、貴様がさっさと強権を振るわないから大変なことになってしまったぞ！」

眼下に広がるゾンビの群れ。

ヒロゾンビは襲われない。

けど——、海兵隊ゾンビは容赦なく引き金に手をかけた。
マズイ。

ボクはとつさにゾンビウイルスを消そうとする。
空気が膨れ上がる感じがした。

不可視の力。押さえつけられるような重力波。乱暴な力まかせの
念動力。

ボクの身体は気づくと、相当な勢いで甲板に叩きつけられていた。
戦闘機の離発着にも耐えられる甲板は、物理的なパワーによってク
レーターのようなひびび割れ状態になっている。

すぐに身体を起こした。

——ぜんぜん痛くない！

はだけた振袖のほうが気になるくらいだ。

いや、それよりもゾンビ兵たちの乱射はどうなった？

見ると、命ちゃんが祈るような姿勢で、ゾンビを操っていた。

静止した姿勢のままゾンビは止まる。

やがて、命ちゃんを中心に、みんな人間に戻った。ゾンビウイルス
を人間に戻す程度まで除去したんだ。

『展開速すぎる』『ヒロちゃんってすでにドラゴンボール状態だったん
だな』『つーかヒイロゾンビって兵器転用できそうだな』『いやしかし
”人気”が必要なわけだから』『戦争屋が人気になれるか？』『私は君
のファンだよって変態SF忍者から言いよられる例もあるし』『戦場
だからこそホモは輝く』『なんでホモ前提なんだよ……』

それでもなお——、ボクはまだ躊躇していた。

このままボクがゾイを倒したら、おそらくゾイは殺されるだろうと
思う。

世界中の国々に対して喧嘩を売ったんだ。当然だろう。ただ——
小さな女の子なんだ。

たぶん、日本でいえば小学生くらいなの。

何が彼女をそうしてしまったのかはわからないけれど、子どもだっ
たらまだやり直せると思いたい。一線を越えない限りは——。
甘すぎるのかな。

幼女先輩の安否も不明な今、こんなことを考えるのは。

けれど、幼女先輩はたぶん生きている。そんな確信がある。事前にボクが力を貸していたし、シールドで全体を覆っていたから、たぶん、爆弾を抱え込まない限りは大丈夫だろう。

船体に穴が開いて、海中に投げ出されていたらわからないけど。

ともかく、ボクがいまだにゾイに攻撃しないのは、子どもだからというただそれだけの理由だ。

怒りはもちろんある。

殺された人たちや傷つけられたピンクちゃんのことを考えると、お腹のあたりが熱くなってくる。

「悩むだけ無駄なことだ。この世はどうしようもないほどにケガレている。さっさと殺せ」

「事情があるのなら話してもらえれば調整はできるかもしれない」「死ね」

念動力を難なく捌く。

わかりあおうとすることを拒否する以上、排除するしかないのかな。

排除自体は簡単だ。ボクはたぶんゾイの全力攻撃でも傷を負わない。いい。

でも、

——ボクはこの先、何人のわかりあえない人たちを殺せばいいんだろう。

そして、ボクはまったく成長していないことを実感する。

あのホームセンターの時と同じ。

飯田さんが殺されたとき、

恵美ちゃんが殺されたとき、

命ちゃんが傷つけられたときと同じだった。

ボクの決断力のなさが、また命ちゃんを危険にさらした。

のたうちまわる見えない触手の一端が、命ちゃんに伸びた。

命ちゃんのお腹には大きな穴が開いていた。貫かれ。いや、ボウリングの玉か何かがそのまま通過したような状態。ドサリと倒れこむ。

「よい顔だ。はじめて貴様に爪痕をつけることができた」
ゾイは快樂を得ていた。ボクの喪失と引き換えに。
触手は振り下ろされ、

「せんぱ……」

グシヤ。

つぶれた。

ハザードレベル135

異端を束ねるゾイの力。

排斥された者たち。虐げられた者たち。少数派。人でないとされた者たち。

ゾイはそれらの呪いをより集めてひとつの力にした。

不可視の触手で貫かれ押しつぶされた命ちゃん。

ヒロゾンビも無敵じゃない。頭を潰されれば活動を停止する。

感覚的に知っている。

ボクたちヒロゾンビも死ぬ。

死ぬ――。

死は断絶だ。

ボクは知っている。

もう二度と話せない。

もう二度と笑った顔を見れない。

命ちゃんを失ってしまった。

心臓が氷に張りつけになったようだった。

「命ちゃんー」

甲板は叩きつけられた際に生じた礫が、雨のようにパラパラと降り注ぎ、挟れたアスファルトと触手の摩擦熱が濛々と煙をあげている。

もしボクが甘えを見せずに決断していれば。

もしボクがさっさとゾイを攻撃していれば。

もしボクが少しでも余裕を見せなければ。

無数の『もし』が胃の中で膨らんで、息もできないくらい苦しい。

夢想にも近い想念は、中学のころにお父さんとお母さんが死んだ時にも及んだ。

ボクが『いつてらっしやい』なんて言わなければ。

ふたりで行ってきいていいよなんていわなければ。

配信なんてしなければ。誰にも会うことなく引きこもっていれば。

人間が一人残らずゾンビになるまで待っていれば。

ううああああああああ。ああ。あああ。

後悔の言葉で脳が焼ききれそうだった。

唇からは呻きに近い怨嗟の音が漏れて、ボクはボクでない何かになりそうだ。

ゾイは嗜虐に顔を歪ませた。

その顔を見た瞬間。

真っ白い。思考。途切れ。ねじ切るような力を本能そのままに解放する。

気づくと振袖なのもいとわず、音速をはるかに超えるスピードで蹴りぬいていた。

「ぐッ」

ゾイは身体をくの字に曲げて、甲板の向こう側に吹っ飛んでいった。

まだ。足りない。

コレはダメなやつだ。存在してはいけない。消さなきゃ。削除しなきゃ。殺さなきゃ。存在するのも呪いながら死んでいけるように惨たらしく殺さなきゃ。そうでなければ世界は間違っている。

——殺害する。

害を殺すから殺害という。こいつらは害虫だ。だから殺してもいいやつだ。

純粹に近い殺意がボクを支配する。

そうだよ。ボクなんて、最初からそうだったじゃないか。

最初から邪魔なやつ、嫌いなやつ、どうしようもなく気が合わない

やつはいた。

そんなやつらをボクは、ただただ目の前から消していた。それは引きこもるといふマイナスの行為で、客観的にはおとなしいものだったけれど、事実として、ボクの内心は緩やかな殺意に満ちていた。

ボクは世界を呪っていた。

いまは物理的にできるだけの力があるんだから、誰もかれも消してしまえばいい。

ボクは世界が嫌いだ。

ボクは他人が嫌いだ。

ボクは人間が嫌いだ。

——ボクはボクが嫌いだ。

だから、殺す。

「ヒロちゃん！」

遠く——。

輝く声を見た気がする。声が見えるなんて詩的な表現に思えるかもしれない。

でも、ボクには文字通り、その声は虹色に輝いて見えた。

ピンクちゃんだった。

ピンクちゃんは小さな身体で命ちゃんの傷ついた身体をかき抱いている。

みんなもいた。ボクがヒロウイルスをあげた子たち。

それぞれが手を掲げて、薄いヴェールのようなシールドを張っていた。

「ピンクたちだつて負けてないぞ。悪意になんか負けないぞ！」

「当たり前ですよ。国を統べる予定ですからね」「たったひとりに負けるわけないでしょ。いい加減にしないで」「ふじやけるな。ゆりゆさんぞ！」「負けません！」「戦隊ものでもわりと虐めだけど1対200はさすがにどうかと思いますが」「おまえ空気読めって言われたことないか？」

「あ……」っと声が出た。

それはピンと伸びていたゴムが急に弛緩したときのような、

——安堵の吐息。

としか言いようのないものだった。

命ちゃんは、お腹をぶち抜かれていて、もちろんヒイロゾンビにとつては致命傷じゃないけれど、その傷に慣れてないのか、よわよわしくわずかながら右手をあげて、ボクに生存を知らせてくれている。

口のカタチが小さく「お兄ちゃん」って動き。

胸がちりつとするような熱さ。

ボクの成長はボクの中にはなかったよ。

みんなのなかにあつたんだ。

ボクがやってきたことは、周りのみんなに伝わって、ボクといっしょに害意や悪意と戦ってくれている。配信して人間と仲良くなるうとしなければ、誰かと友達になろうとしなければ、きつとひとりでは失うばかりだった。

命ちゃんを守ったのはみんなだけど、ボクの行動と因果的につながっていたんだ。

もう手加減はしない。

ボクはひとりで戦ってるんじゃないから。

「そのような三文芝居になんの意味がある？ 人間は九割を生かすために一割を殺す生き物だ。わたしののような怪物が生まれたのも、人間の本性がそうあるからだ。ヒイロの力はそれを実体化したに過ぎない。ゆえに——、人間の本性が変わらない限り、いつかお前の大事な人は死ぬだろう」

ゾイはボクが蹴り上げた腹を抱えながら再び立ちふさがった。

すぐに何本もの不可視の触手が伸びてきた。ボクは無感動にひとうひとつを止める。

ドラゴンボールの超高速戦闘のように、ボガンボガンと空間がはじけとんでいる。

客観的には、ただ、つつ立っているだけだ。

『なにしてんのヒロちゃん』『戦ってるのか？』『さつきからドゴンドゴンいってるんだけど』『カメラさん仕事して……って固定カメラだったー！』『さつき後輩ちゃんヤバかったよなあ』『後輩ちゃんのへそちら

に正直なところ興奮した』『へそちらとか内臓チラなんだよなあ』『……興奮した』『だめだこいつ』『ヒロちゃん激おこ?』『さつき蹴ったとき、オレでなきゃ見逃してた』

怒ってるのは怒ってるよ。

それに失う怖さはよく知っている。

いまでも、命ちゃんを失っていたかもしれないと思うと怖い。

でも、みんなが前を向いている。ボクの後ろには無数の世界を肯定する声がある。

いままいましてうにボクをにらんでくるゾイ。

ボクもにらみかえした。

「君が何かを失ったらしいのは言葉の端々からわかるよ。でも、自分が何かを失ったからって世界中を敵にまわしてなんになるの?」

「貴様だって、先ほどは世界中を呪っていただろうに。所詮は他人事よ。貴様はまだ失っていないから、そのような欺瞞を並び立てることが出来るだけだ! そんなものは、持てる者たちが持たざる者たちから奪われるのを恐れて野合した結果にすぎない」

「そうかもしれないけどね。持たざる者だって持てる者になりうるんじゃないかな。貧乏な人だっていつかはお金持ちになれるかもしれないし、大切な何かを失っても、また大切な何かを得ることが出来るかもしれない」

「そんな戯言」

ゾイは身体をわなわなと震わせ、怒りのまま念動力を叩きつけてきた。

パワー自体を無理やりつかみとる。

わずかな力の均衡。だけど――。

『ヒロちゃんにパワーをー』『いいですとも』『どうか画面の前で元気玉をつくればいいんだよな?』『ヒロちからがどんなふうに贈られるかはわからんしな』『投げ銭とかしたらいいんじゃないやね。50,000』『50,000』『1億ジンバブエドル!』『パパになりたい!』『振袖からチラリと覗くおみあしプライスレス』『パンツ見えた!!』『お前どさくさにまぎれて何みてんだよw』

多数派の意見のぐり押しだ！

ヒイロちから全開！ たわんでいた空間のゆがみが激しくなり、やがて一方的に押し返す。

均衡が崩れるのは一瞬。

その瞬間、ゾイの半身は圧縮蓄積された念動力の解放によって一気に消し飛び、そのまま甲板を削り落とすような勢いで吹っ飛んだ。

たった一人の女の子に対してふるう力にしては、あまりにも巨大で、圧倒的で――。

ボクはいやな気分だった。

多数派が多数派としての力をふるって少数派をなぶるなんて、ボクが一番きらいなことだったから。ボクもある意味少数派で、べつに誰それにいじめられたわけではなかったけれども、その理不尽さは知っているつもりだ。

最低な人間になってしまった気分。

ゾンビだけでも、ヒトとしてよくないことであるのは確かだ。

でも、誰かがやらないと、きつと止まらない。

「殺してやる……」

ゾイはいまだに生存していた。ヒイロゾンビの生存能力は高い。頭を破壊されれば停止するだろうけれども、半身をふつとばされても、うまい具合に再生の核となる部分が残っていれば、全身が再生する。

じわりじわりと身体の半身が植物の全能性のように伸びていつている。

でも、急には動けるようにはならないだろう。事実上の戦闘終了だ。甲板のところどころは陥没し、天蓋の残骸がところどころに転がっている。ひどい有様だった。

ヒイロゾンビになった子どもたち、そしてその護衛も甲板の端っこで、ゾイに恐れとそして少くない怒りを向けている。

さつきゾイに首をねじきられた人とかも、優しい美少女ヒイロゾンビさんが拾ってあげてたり。なんか小動物を抱く女の子感があつてかわいらしい。手元のゾンビさんあーあー言ってるけど。

当然、兵隊さんのほうはヒロウイルスを摂取していないから、まだノーマルゾンビ状態だけど、ヒロウゾンビにすればすぐに身体は元に戻るだろう。

なんとか人的被害は出さずに済んだかな。

そんなふうには、ほっと一息ついた瞬間だった。

甲板の向こう側からスーツ姿で息をきらしながら駆けてくるのは、トミー大統領閣下と、十数人の重武装した兵隊さんたちだ。

当然、ゾイを確保するのかなと思っていたら、

「Disinfect it thoroughly!」

険しい顔をして閣下は言い放った。

英語だからよくわからない。けれど、確かデイスという言葉は否定の言葉だ。言い放たれる語気には殺意が乗っている。

すぐに兵隊さんたちは甲板に倒れ伏したままのゾイを取り囲む。

「あ、あの……」

「申し訳ないが、これは決定だ。彼女を生かしておくことはできない」
呆然とする間もなく、甲板にとめどなくマズルフラツシユの光が満ちる。

アサルトライフルから放たれた銃弾は、ヒロロちからがほとんど残っていないゾイでは防ぎようもなく、細い身体は陸にあげられた魚のように何度も跳ねた。

ゾイは年相応に泣いていた。

「う……ぐ……ぐ……ぎッ」

肺炎の病気が何かみたい、酸素を求めるように呼吸し、うつぶせになりながら甲板に右手を伸ばす。爪をたて——鋼鉄よりも硬い甲板をえぐる。

逃げようとしているというよりも、まるでだだっこのように。

くいしばった口元からは哀咽がこぼれた。

「いやだ。痛いのがいやだ……姉さまあ。ぐぎッ」

ダルルルルルと、再び銃口が火を噴き、ゾイの身体をはねあげさせる。

いくらかの減殺と驚異的な再生力があだとなって、余計に苦しませ

る結果となっている。

「ただ、兵隊さんたちには、わずかながらに楽しんでいる気配さえあった。」

「自分たちが絶対の正義として悪を誅殺することに、獣欲に近いものを感じている。」

「殺さないであげることではできませんか」

「難しいのはわかっている。テロに情けなんて、意味がないどころか、むしろ害悪だ。みんなを危険にさらして命ちやんを危険にさらして、大切な誰かを失う結果にいたるに決まっている。」

「けれど、十歳くらいの小さな女の子が泣いてる姿は、あまりにも哀れだった。」

トミー閣下は眉に力を入れながら、アメリカちゃんにしたときみたいに片膝をつき、ボクに視線をあわせてくれる。

「責任は私がすべて負う。ヒロちゃんは彼女の”死”に対して何も責任は負わない。私が彼らに命令し、彼らはそれを実行するのだからね」

「少し日本的な言い回しとは違って大仰だったけれど、要するにトミー閣下はボクが厭う必要はないと言っているようだった。」

ボクは言葉をかけようとしてやめた。

「アメリカという世界で一番大きな国の一番えらい人が決然とした意志で決定したことだ。」

「それを言い訳にしているというような思いもなかつたけれど、先ほどの命ちやんのイメージがちらつく。」

「冷静に考えて、ここで脅威を排除するということは世界にとって悪いことじゃない。」

でも本当にいいのか？

「配信を止めろ！ これ以上は意味がない」

死をショーにするつもりはないらしかつた。

けれど、大勢のまなざしはまだゾイに向けられている。

「今日この日に彼らは——無垢な子どもでいるのをやめるのだろうか。」

と、思った瞬間。

アサルトライフルよりも遙かに軽い音が青空に広がった。いつそ、紙風船か何かを膨らまして、それを一気に割ったときのような軽さだ。

ずつと向こう。

タラップから甲板にあがって来たらしいびしよぬれの男の姿。

顔は全然違うけれど——、その瞳をボクは知っている。

憎悪に彩られた瞳。

ボクを恨み、呪い、死ぬように願った瞳。

久我だ。

久我はどこかで拾ったのか短銃を握っていた。

ちようど幼女先輩がもらっていった銃に似ている。

その銃から、弾丸の火線が伸びている。

超人的な知覚能力でひきのばされた時間の中。

ボクは火線の先を追った。

ボクじゃない。狙ったのはボクじゃなく——大統領だ。

不可視の力を伸ばす——いや、こんな極短時間では無理。

意識の外から発射された力に対して、ボク自身だったらまだしも、他者に対してヒイロちからを及ぼすのは、ミリセカンドに満たない世界だけでも、致命的な遅延が発生する。

マズイ。マズイ。

この火線は確実に、大統領の頭蓋を破壊するコース。

あと。

わずか。

そんな、引き伸ばされた時間の中で。

ボクは奇跡を目撃することになった。

まったく理解できない角度から、つまり大統領の後方、仰角60度くらいのところから同じように火線が伸びていた。

空気が弾丸の回転によって引き裂かれている。

高速で飛来するカタマリは、つまり真逆の方向からもたらされていることになり、真向いにある火線をわずかばかり見下ろす形で発射さ

れたことがわかった。

弾丸と弾丸は空中で衝突し、グミか何かのようにつぶれるのを知覚する。

絶技とっていい所業だ。

ボクは振り返ってみる。

すると、そこにいたのは一機のへり。

横面を見せたまま、縄梯子のようなものをたらし、そこに手をつかんでいたのは――。

幼女先輩だった！

幼女先輩はボクのポシエットに入っていたデリンジャーと呼ばれる小さな短銃を握り締めている。

あらためて考えてみると、揺れるへりから、発射とほぼ同時に弾を撃ち落とすなんて。

人間技越えてるな……。

と、間髪を入れず。久我から二発目が発射される。けれど、これもはや余裕の距離だ。

ボクはシールドを張って、それらの弾丸を空中一メートル手前で止めた。

久我の顔がわかりやすいくらい歪んだ。

タラップのところは階段になっていて、兵隊さんたちのほとんどはゾイに集中している。

場合によっては人質をとられる可能性もあるから、すぐに大統領は動いた。

わずかなハンドサイン。それだけで兵隊さんたちは機械的な素早さで、タラップ方向にいる久我に向かって牽制射撃をおこなった。

弾丸の雨が降り注ぐ中。

久我は驚くべき身体スピードで、甲板に躍り出る。

甲板は兵隊さんたちとボディガードと子どもたちが入り乱れている。

ボディガードは自らの国の子どもたちを守るのに必死。

兵隊さんはとりまわしのいい短銃ではなくアサルトライフルを装

備しているから、悠々と射線を切って駆けている。

けれど、ゾイの周りには兵隊さんたちとボクくらいしかない。

「自殺するつもりか？」

トミー閣下がいぶかしげに言う。

久我とゾイの関係なんてわからないけれども、もうすでにズタボロの雑巾のようになっていてゾイを助けたところで、久我自身が危険にさらされるだけだ。

そう思いはするものの、でも、なんとなくわからないでもない。

そのメチャクチャなほどの破壊思考は、ボクにも覚えがあるから。

ばかだ。これで終わり。

でも、そんな他人事だけれども、自分事と同じ。

少し悲しい。

久我が撃つ。兵隊さんたちも撃つ。

入り乱れる人影。頭を抱え込んでその場でしゃがみこむ人たち。

アサルトライフルの弾のいくつかが久私の身体に吸い込まれた。

それでも止まらない。まごうことなき命を賭した突貫だ。

ボクはここにいる全員に、幼女先輩にしたようにバフをかける。

あんな短銃ではもはや傷さえつかないように。撃たれた弾丸が足

のあたりにあたった兵隊さんが、反射的に顔を歪ませたけれども、何事もなかったことに驚いているようだった。

彼私の距離。わずか20メートルばかり。

けれど遮蔽もなにもない状況だ。いかに後方に賓客がいる状況といえども、撃ち漏らすことはない。それでも止まらない。ノックバツクすることなく、すでに久私の肉体は限界を超えている。

なのに——死なない。

ああ——、そうか。そうなんだ。ボクと同じように彼には彼の味方がいる。

ゾイが力を貸しているんだ。

だけど、もはや感じられる力は弱く風前のともしび。

こんな状態で、なにができるの？

周りは脱出不可能な海の上。不可能で無駄なことをしているよう

に思える。

いや、そんなことすら考えてないのか。

不死身の怪物のような有様に気おされたのか、兵隊のひとり問わずかに後退した。

その一瞬の隙について、久我の手が伸びる。

アサルトライフルをポイントした瞬間。短銃で射線をずらし、そのままふところに入りこんで、密着させるように撃つ。

ボクのバフで肉体的には問題はないけれど衝撃は伝わる。

引いた。久我は兵隊さんでできたサークルのど真ん中に侵入することができたことになる。

つまり、ゾイのもとにたどり着いた。

そんな彼の想像を絶するほどの努力と覚悟。

久我さんは呪いで駆動していると思っていた。

けれど、それだけじゃなかったのかもしれない。

歪んでいるけれど。終わっているけれども。生まれたことすら忘れるほど、人生に苦しんでいるけれども。

ゾイをかかえこむ姿は、ボクたちと変わりない。

自分以外の誰かを大切に思う、ただの人間だ。

どこか神聖な一枚絵のように、崇高な自己犠牲にすら思えるその姿は、容易に手を出せない状況を作り出した。



「お前様よ……」

「ああ……」

「お前様も愚かよな。わたしごときを助けるために無駄に死ぬこともなかっただろうに」

そつと——、手を腹のあたりに添えられる。

いまいましく思っていたヒイロの力で、オレは癒されていた。

囲まれているこの状況だ。

すぐにでもオレは殺されるだろう。

そんなことはわかっている。

だが。そんな論理なんてクソくらえだ。

オレの紙のように薄っぺらい背景が。

世界のどこにでも転がっているような不幸が。

妹を失ったという、ただそれだけの事柄が、ゾイを見捨てることを

許さなかった。

「ただ、それだけだ」

「なあ……お前様よ。わたしは欲が出てきたぞ」

血を吐きつつゾイが言う。

ゾイの半身は血塗られていたが、再生がある程度のところまで止まっていた。死へ向かっていた。

死へ向かっている。

うつろで茫洋とした、あの濁った瞳のまま。

わずかばかり残った力で、オレに身体を接着させ耳元でささやく。

「わたしの復讐の弾丸となれ」

意味がわからなかった。

いまさらゾイが生きたいなどというつもりがないことはわかっていた。

ゾイの復讐は祖国の破壊。自分の父親を社会的に追い詰めることだ。

いやそれ以前に。

この状況をどうしよう、と。

オレの困惑もいとわず、ゾイは甘く微笑んだ。

——と、間髪入れず。

オレの身体が熱く輝きだす。

体中の細胞がバラバラになっていくような痛みを感じた。

しかし、我慢できなくもない。ゾイがなんらかのちからを行使しようとしている。人間爆弾か。オレの身体を爆弾に作り替えてすべてを破壊するつもりか。

いや。

違った。

急速に移り変わる景色。昔あったビデオテープの早送りのように瞬間、瞬間が移りかわっていく。

あわてふためく兵隊たち。夜月緋色。

いい気味だと思ったのは一瞬。ゾイは哀しげに瞳を揺らした。ひどく憔悴した様子。

そして、最後の言葉が聞こえた。

「お前様はわたしの代わりに生きろ」

オレは、空母”いんとれびつど”の上から姿を消した。

☆Ⅱ

午後1時32分。ゾイは死んだ。

甲板の上には凄惨な血の川がとめどなく流れている。

その身体にはブルーシートのようなものが被せられている。

死は思考の死。コミュニケーションの断絶だ。

わずかな言葉しか交わせなかったけれど、もはや取返しはつかない。

言葉も、思考も、意志も、途絶してしまった。

もちろん、いい気分なんかじゃない。

もしかすると、ゾイはジュテツカに利用されただけかもしれない。

いや、そういう考えはゾイの意思をふみにじることになるのかな。

いずれにしろ。

もはやわかりようがない。

ボクたちにわかるのは、痛ましすぎる事件だったことだけ。

残されたのは、久我が消えたという謎だ。

「どういふことだ？」

閣下が困惑している。

ゾイも久我も死にかけたかったし、特攻してきた兵士に対しての敬意のようなものから、最期の瞬間を躊躇させてしまった。容赦なく撃つておけばいいという意見もあるだろうけど、ボクとしては呪いが伝播する可能性もあるから、あの場ではベストな選択だったとも思う。

負の想い。人間が持つマイナスの力。

けれど、最期のゾイは違った。ゾイは久我を生かそうとしていた。

「テレポートしたのかもかもしれないぞ」

と、ピンクちゃんが言う。

振袖はすっかりボロボロになってしまったピンクちゃんだけど、肉体的には元気だ。

たくさんファンに支えられているピンクちゃんは、もはや容易に傷つかない。

そして、その叡智もまた衰えることはない。

しかし、テレポートか。冗談めかしてトイレに行きたくなったりとき、膀胱内の物質を転移させればいいのか言ってたけど、それも可能ということなのかな。

ヒロゾンビがいろいろできすぎて困る。

世の中がヒロゾンビだらけになったら、いろいろとルールも変わってきそうだな。

とはいえ、テレポートができる子は、稀だろうけどね。

「そんなことが可能なのか？」

「んー……」

ヒュっとして、すとん。

どこからともなく――、ボクはデリンジャーを空中に出現させた。

隣にいた幼女先輩が慌てて腰のあたりを探る。

「ヒロちゃん。泥棒し放題だね」

「けっこう大技っぽいから、何度もは無理そうかもしれませんが。生物をテレポするのはハエ人間が生まれそうで怖いし……」

|||||

ザ・フライ

筒状の転移マシンの実験中に、一匹のハエが紛れ込んで、人間とハエが混ざるといふ発想のもとに生まれた名作映画である。遺伝子レベルでハエと合体してしまった主人公が徐々にハエっぽくなってい

く様がすさまじく生理的嫌悪感を抱かせる。だが、そこがいい。

|||||

「ゾイは命の炎を燃やしたから成功したのでしょうか」

へそちら状態の命ちゃんが聞いた。

いのちの危機があつた命ちゃんとしては複雑な心境だろう。

命ちゃんはボクのために自分の身を犠牲にできる子だ。

なおさら複雑な心境なのかもしれない。

「そうかもしれないね」

「どこにいったかはわかるかい？」トミー閣下が聞いた。「可能であれば指名手配をかけたい」

「うーん。ヒイロゾンビになつたわけじゃないからわからないです」

「ヒイロウイルスの力で跳んだのだろう」

「ヒイロウイルスはもう地球をまるごと覆ってますから」

力の生まれたポイントはここ。

空間自体のたわみは一瞬で、もうわからない。

久我さんがヒイロゾンビならわかつたかもしれないけど。

「全世界に指名手配をかけるのが関の山か」

ちなみに、こんなことになつてしまつた以上。

立食パーティーについては再開されることはありませんでした。

世界中の美味しいものが食べられると思つたのに！

お寿司だけは包んでもらつて食べられたのが幸いです。

★
||

目覚めると――。

そこは執務室のようなところだつた。

豪華な机と、そこに座る、でっぷりとした男。

そいつは机の上に置かれたパソコンの画面を眺めながら、ブツブツとなにやら呟いている。

そして、オレが立っていることに気づいた。

「あ、なんだ。お前はどこから現れた!？」

明らかに狼狽し、うろたえる男。

「なあ。お前の名前を言ってみろ」

「ワシはこの国の王だぞ。誰ぞ。誰ぞであるか。曲者を殺せ！」

聞くに堪えない罵声。

わずかばかりの時間で、近づいてくる足音。

時間はあまり残されていないようだ。

「ゾイを知っているか」

「ああ……ゾイ、か。先ほどのアレはなんだ。お前はアレの仲間か」

どうやらオレのことには気づいていないらしい。

配信されていたのは、ほとんどゾイで、オレの姿はカメラに映る前

に配信自体が打ち切られていたのだろう。

銃をかまえる。

男は恐怖に顔をひきつらせた。

「な、なんだ。貴様は。ゾイの馬鹿がへまをやったから、ワシを暗殺しにきたのか。この国を亡ぼすために！ 馬鹿な。あれはあいつが勝手にやったことだぞ。ワシは知らぬ」

「そーかい」

オレはいつそ笑いだしたくなるような気持ちを抑えて、引き金を絞った。

胸に二発。それでそいつの身体はくず折れて豪華な椅子をすべるようにして床に転がった。

「オレは、あいつの弾丸だよ」

ハローワールド編 ハザードレベル136

ザザーン。ザザーン。

果てしなく広がる赤い海。

昔、エヴァンゲリオンの二次創作ではこんな始まり方をする作品が全体の20パーセントほどあった。(当社調べ)

ボクは夢の中にいる。

すべての感覚が曖昧でぼんやりとした幻の中にある。

今いるところは、”いんとれぴっど”の甲板。

三か月前にヒイロウイルスの受け渡しがあった、あの船だ。

実を言うとあの後、とてつもない揺れが船体を襲った。

クジラの鳴き声のようなひとときわ大きな絶叫の後。

突如、船体が傾き始めたんだ。

理由はあった。

エンジンルームは爆破によって破壊され、底には巨大な穴が開いていたからだ。

さすがにダメージコントロールはなされていたと思うんだけど、中枢であるエンジンが連鎖爆発した傷跡は大きかったらしい。気づいたら取返しのつかないところまでダメージが及んでいた。

リアルセプトントリオン状態。あるいはタイタニックか。

船体の傾きが20度くらいになって、みんなが慌てふためいた。

勾配がある坂でも20度くらい余裕だろうって？

まったく違う。

揺れる船体における20度は、その状態で安定しているわけではない、刻一刻と変化していくものだ。立っていられるものではない。

このままでは沈んでしまうということで、みんなでパワーを結集した。

ヒイロちからによる船体を浮かせるという荒業だ。

まあ、町役場よりは重かったけれど、エンジンの修復と穴の補修ま

で”いんとれぴつど”を浮かせるのは、不可能なことじゃなかった。それで——まあ、なんとかあったはずなんだけど。

——夢のまにまに。

現実には起こりえないからこそその夢なんだけど。

ボクはトルネードが艦を取り囲んでいるのを知覚する。

うわツ。これ！ シャークネードだ！

ボクはびつくりした。なぜそう思ったのかはわからないけど、そう思っちゃったのだからしょうがない。夢なんて因果はバラバラで、そんなもんだ。

シャークネードについては、もはや言うまでもないよね。

シャーク＋トルネード＝シャークネード。

天才の考えだした方程式が完璧な形で再現されている。

魔女の巻き毛のようなトルネードの中に、サメが泳いでいるという絵図を想像してほしい。

ちなみに、シャークネードを単なるパニックホラーだと思うのは間違いで、実をいうと最終話では時空転移なんかもしちやつてた。つまり、ゴズミックホラーというかSFといったほうがジャンル的には正しく、あんまりサメっぽい感じはしない。

いつのまにやら添え物になつてるサメ。

ただの障害物程度の存在になつちやつてるサメ。

——サメ主体じゃないとか冷めたわなんて言わないでほしい。

始原のサメを倒せば、すべてのサメも消滅するという、ちゃんと物語の中心にあるのである。

時空転移もののお約束つてやつだ。ただ終盤、存在感がないだけ。

いわば、ドラゴンボールにおけるドラゴンボールみたいな存在かな。

すさまじいようなすさまじくないような、そんなB級感が大好きです。

ともかく夢の世界において、シャークネードの臨場感はすさまじかった。

見上げると、猛烈な勢いで竜巻が渦を巻き、その中をサメが悠然と泳いでる。

見惚れたのは一瞬。

いつのまにか周りには誰もいなくなっていて、ボクはトルネードに巻き上げられて空中に身体を浮かせてしまった。

「うわあああああああああああ！」

ぐるんぐるん回るボク。

そして、一匹の巨大なサメがボクを獲物に見定めた。

空中に巻き上げられている状態のボクは、まともに身体を動かせるはずもなく――。

いや、念動力を使えば余裕だと思っただけど、夢のなかあるあるで、なぜか力を発揮できない。

ただ、身をよじって逃げようとするのみ。

抵抗はまったくの無意味で、サメはどんどん近づいてくる。

身をくねらせ、左右に身体を揺らし、サメの口が迫る。

ボク、食べられちゃううううううう！

「や、やだあああああ！」

「はーい。ぱくぱくッ。ぱくぱくッ」

目覚めました。

「って……、マナさん何してるの？」

見るとマナさんが奇妙なグローブを身に着けていた。

それはちようどサメのカタチをしたかわいらしいぬいぐるみのようなグローブで、マナさんの両手に装備されている。

四つ指と親指を動かすことで、ちようど口にあたる部分を駆動できるみたいで、ボクはマナさんの両の手サメによって、あむあむって甘噛みされていた。ぷにぷにしたほっぺたを思いつきり捕食されちゃった。

「ご主人様がかわゆすぎて、ついついサメ的な捕食ごっこをしてしまいました」

く、くすぐりたいよ。

ちなみに足をばたつかせるも、なかなか動かせない。

今日はマナさんがいつのまにやら調達していたサメ寝袋を装備していたからだ。

それはちょうどボクの身長をすっぽりと覆うようなサメのカタチをしていて、いまのボクはすっぽりと腰のあたりまでサメに食べられちゃってるからだ。

これがサメ寝袋。寝サメはよくない。

というか、冷静に考えたらこれってボク食べられちゃってるよね!?

ある意味、人魚状態というか。

悪くて、サメに食べられてる人間というか。

マナさんは、サメ寝袋をサメグローブのままつかんで、すぽんとボクを抜いた。

とたんに露わになる下半身。どうやら脱出できたようで。

「はい。下半身もぱくぱくッ」

「や、やめてよ。マナさん。背中がぞわんてしちゃうー!」

マナさんは特にボクのふとももあたりがお気に入りようだ。

細くて産毛すらない足は、男目線でいえば、確かに綺麗だなんて思うけど、マナさんの場合は、本当に食べたそうだから怖い。

「サメ寝袋はもう着なくていいかな。暑くなってきた気がするし」

「そうですか。じゃあ、これは私の抱き枕にしちやいましよつかね」

マナさんはどこからともなく、ビニール袋にいれたビーズを取り出してくる。

それを、サメ寝袋の中に大量に注ぎ込み始めた。

一分もしないで出来上がったのは、ボクとほとんど変わらない14センチメートル前後の抱き枕だ。少々ビーズの入れすぎか、太り気味のサメだけど。

「洗わないでいいの?」

「洗わないのがいいのです!」

マナさんがむしやぶりつくように、抱き枕を胸いっぱい吸い込む。

まあ――、人それぞれだからいいけどね。

「はあ。マナさんに寝袋とられちゃった。普通のお布団だしてよ」
ボクは甘えた声を出す。

ダメ人間の典型だけど、マナさんはお世話するのが好き。ボクは綺麗なお姉さんにお世話されるのが好き。ウィンウインの関係で誰も損しないからいいと思う。

けれど、ボクの意に反して、今日のマナさんはちよつとだけ厳しかった。

「ご主人様。もうそろそろ九時ですよ。だらだらしすぎだと思いません」

「んー。そうはいつでも、ボクの仕事ってほとんどなくなったし」

そう、町役場にしても、ヒロゾンビはたくさんいるし、ボクがいなくてもゾンビ避けはなんとかなるわけだし、ボクが町の領域を広げる必要はほとんどなくなったといっただろう。

それに、日本へのヒロウイルスの受け渡しも済んだんだし、あとは自然と広がっていつてははずだ。ボクがことさらなにかをしななければならぬということとはなくなったはず。

それこそ気が向いたときに配信するくらいだ。

「ねえ、マナさん。今の状況って結構悪くない気がするんだよね」

「食う寝る遊ぶの生活がですか？」

「うぐ。まあ……うん。まあそうだよ。じゃなくて！」

ボクは言葉を少し探す。

いまの生活を客観的に見れば確かに重圧からの解放っていうのかな。

ヒロウイルスの拡散という主目的は果たされたわけだし、ボクがいなくなっても、誰かがなんとかしてくれる状況になったわけだから、こう——なんとというか、春休みに入った学生の気分なんだよ。最高に救われてる気がするんだ。

「つまり、えっと……、そう、ボクってわりと人間に優しい存在になれたよね」

ポジシヨンのようにそういうふうに収まったというか。

「なるほど、あの空母での戦闘で、ヒロちからを無理やり篡奪しなかったということをおっしゃってるのですね？」

「うん。そう」

ボクはゾイの力を無理やり奪うこともできた。なにしろ”人気”の総元締めだからね。ボクはインフラであり、ヒロゾンビの”人気”を取り仕切ってる。ゾイのパワーをゼロにするのだって簡単だ。ヒロゾンビであるということには変わりないけど、ただの人間と同じような無力な少女にすることだってできたし、あるいは——思考力を奪って、哲学的ゾンビにすることも可能だった。でも、そうしなかったんだ。

ボクがいざというときに、そうする存在だと知られば、ボクは魔王様ルートを進んじやうからね。そんなのいやだ。ボクは配信してかわいいねって褒められる程度の存在でいいんだ。実際にかわいいし。

「かわいさにひれ伏しちゃいますね」

「うん。だから、もっとだらけちゃってもいいでしょ」

「かわいいメシア様としての役割は果たされたのかもしれないけど、ひとりの人間としてはご成長なされないのですかねー？ まあ幼女指数高いほうが私としてはうれしいですけれども」

「うぐっ。ボクだって成長してるし！」

「本当ですか？ わたしの見たてでは、ご主人様とお会いしたときから、肉体的には一ミリも一ミクロンも成長なされてないと思いますよ」

肉体の話ではないけれど、肉体の話も重要だ。

「そ、そんなことないよね？」

「さてどうでしょう」

マナさんはあやしく微笑むと、例の体重を図るゲーム機を持ち出してきた。

普通に体重を計る機能もあるから、これで体重も計測できる。

そろりと足をのせてみて——。

「うそでしょ。ぜんぜん増えてない」

「はい。永遠の幼女」

両の手を合わせて花のようにほころぶ笑顔。

マナさんにとってはおうれしくてもボクにとってはうれしくもなん

ともない。

「やめてよ。ボクだって成長するから」

ズンっ。ほら、体重も40キロまで増加！

「念動力でズルしちやだめですよ〜」

「ち、違う。これはなにかの手違いです！」

「そんなところもまたかわいらしいんですけどね」

ボクはマナさんに抱きかかえられてしまう。

ちようど抱っこされているような姿勢だ。

マナさんもヒイロゾンビだから、ボクの体重ぐらい余裕みたい。

ボクはただただ恥ずかしいだけだけど。

「あのね。マナさん。ボクの成長はボクの中になかったよ。ボクの外側に、他者の中にあつたんだ。これ重要！ これすごく重要だよね！」

「そうですね。外側からの評価という意味で言えば、私の中のご主人様は天井知らずにかわいらしいリトル女神様です」

「それ、なにか違う。って、わひやあああ」

耳をカプってされてしまった。

密着している状態だと逃げようもない。

この人は——危険だ。危険なお姉さんだ。早く逃げないと。

じたばた。じたばた。

「ご主人様の成長について言えばですけど、してないわけではないと思いますよ。ヒイロゾンビがたとえ現実改変能力によって老化しない存在だとしても、考え方や感じ方は変わっていくものでしょうし、こころは揺れ動くものです。揺れ動くからこそ生きているというのですよ」

突然の真面目ムーブやめて。

その場で下ろしてくれたマナさん。

見てくれば、綺麗で母性溢れるお姉さんなんだけどね。

「老化についても、望めば可能なのかな」

「わたしは幼女なままのご主人様が好きですけどね」

「変化しない生命なんて変だと思うよ。もちろん、死に近づいていく

のは怖いけど——」

ボクは死が怖い。

死がもたらす断絶が怖いんだ。

ヒイロゾンビによって相互保障された世界なら”死”すら拒否できるのかな。

「ご主人様は変化するのが怖いのですよね」

「そうだよ」

「だったら幼女のままでいいじゃないですか。モテカワスリムの愛され幼女として永遠にお気に入りの子たちとイチャイチャしましょう。わたしも末席に加えていただければ幸いです」

マナさんのロリコン発言が悪魔の誘惑に聞こえる。

「ゾンビみたいになにも考えないわけにはいかないんだからさ。ボクも変わりたかって思ってる」

「命ちゃんとの関係も変化したいんですか?」

「ボクなりにはちゃんと考えてるんだ」

でも、踏ん切りがつかないのは——。

自分の手をじつと見つめる。このぶにぶにした身体。

マナさん曰く幼女の身体。これも原因だけど……。いや、これはたいたことじゃない。

命ちゃんは今のボクでいいって言ってくれたし。

ボクも今の状態が安定しているのは感じてるんだ。

なんというか完璧なほどに精神が安定している。これって初回から言ってることだけだね。

だから問題は、ボクがどうこうというのではなく他者との関係だ。

「関係ですか——、しかし、なにか忘れてるような気がしませんか?」

マナさんの言葉に、ボクは頭をかしげる。

なにか忘れたことなんてあつたつけ。テロとの関係については、ボクがどうこうできるわけもないし、他の人に任せるほかないと思ってる。配信のネタが尽きてきたことか?

いや違うよな。ヒロ友たちとの関係は、いまでも緩やかに結ばれているよ。

そんなふうにいるいろいろ考えてると。
マナさんはふんわり口調で言った。

「あの〜。ご友人様はどうなさっているんでしようか」
「あーッー」

雄大のこと忘れてました。

いままでもこれから三人の関係なのにね——。

☆
||

ラインを使つて、すぐさま雄大に連絡をとつた。

こんなにも連絡が遅くなつたのは、言い訳をさせてもらうと、精神力の補充という概念を持ち出さないといけないだろう。

例えば、三国志というゲームがある。これにはいろんなメーカーがあるけれども、多くのシミュレーションの場合、武将が行動するとき【行動力】なり【精神力】なりを消費する。

同じだ。

ボクも、三か月前のヒロウイルスの受け渡しで、はつきり言つて疲れちゃつた。

精神的な気疲れがあつたんだ。

なんにしる世界的なイベントになつてしまつたし、周りはいらばっかりだし、ボク凡人だし。

精神力0の状態。

もうね。なーんもやる気が起こらなかつたよ。

かえつてきたあとには、スーパードラダラタイム。

配信は楽しいから一週間後くらいには復活したけど、ほとんど何もせずに精神力の回復に努める必要があつたわけ。

だから、雄大と連絡がとらなかつたのも、便りが無いのはいい便りとか、そんなふうには気楽に構えていただけであつて、べつに忘れていたとかそんなんじゃない。

いや、そもそも——。

雄大もちよつとはボクに連絡してくるべきじゃない？

親友なんだし。ボクと雄大の仲だし。そうだよ。ボクばかり連絡して、ぜんぜん雄大のほうから連絡してこねーじゃん！

自分の中で言い訳を構築すると、ボクは雄大に対して怒りの感情を抱いた。

P i

出たときには、なんかもう理不尽に怒りモードだ。

「なんで連絡してくれないの」

我ながらムスっているのがわかる低い声だ。

『お……緋色か。なんか怒ってるのか？』

「ぜんぜん怒っていませんけど」

ほっぺたが膨らんでる気がするけど気のせいだ。

『あのな。こつちも地味にがんばってただぜ。スマホの電気はゾンビ避けのために節約しとくのが無難だからな。命綱なんだよ』

雄大の声がなだめるような口調になった。

ボクの声とか歌がゾンビ避けに役立つのはわかる。スマホに音声を記録しているから、無駄に電力を使いたくないってのもわかる。

けど——、なんか雄大の言ってることが言い訳めいていて、わかってくれないのがヤダって感じた。ムカムカしてくる。

「どっか安全な家を探せれば連絡とるくらいできるでしょ！」

『あのな。本州も電気が潤沢にあるわけじゃねーんだぞ』

「え、そうなの？」

『そうなの。考えてもみろって。本州の電気だって火力発電がメインだろ。発電所を回すための石炭や液化天然ガスは外国からの輸入品だ。外国から輸入が再開されるまでは備蓄しているやつでなんとかしなくちやならんから、超自粛体制に決まってるだろうが』

「へ、へえ……そうなんだ」

『そうなの。まあ、お前ががんばったおかげで今後はなんとかなくていくんじやないか。三か月の間に各国のヒーロゾンビたちは、インフラを押さえに動いているはずだからな』

「安全なの？」

ボクとしてはそれが一番知りたいところだ。

『完全にゾンビがいなくなったわけじゃないから安全とは言えんが、おまえんとこの町みたいは安全圏が広がっていつてるんじゃないか』
ヒイロゾンビについては各国で、一応2000人ほどを目途に総量規制をかけた形になる。

それぐらいいけば、インフラの整備が間に合い経済も復活するとう計算らしい。」

もちろん、間に合いそうにないとか、各国の状況に応じてこのあたりは臨機応変だ。

ヒイロゾンビは体液交換で簡単に増えるから禁止したところでどうしようもないところではある。

「ねえ。雄大。いまどこにいるの?」

『あ、山口県の錦帯橋あたりだけど』

「四国ルートは通らなかつたのね。ていうか、三か月もかけて岡山から山口までつて遅くない?」

『遅くねーよ。ゾンビを一匹も殺さずに避けていくのつて、めっちゃくちゃ大変なんだぞ。新幹線のあるルートはあいもかわらずゾンビだらけでやべーしな。だから、いったん鳥取方面に向かつてそこから西に向かつたの。山道だから本当につれーのなんのつて……』

「むう」

さつきとは別の意味でイライラするな。

ボクとしては雄大と早く合流したいのに。

それに嫌なことを思い出してしまった。青函トンネルで雄大は一度ゾンビにかまれている。それと同じことが関門トンネルの地下通路でも起こるのではないかってこと。全長としては一キロもない短いトンネルで青函トンネルとはくらぶべくもないけど、心配だ。

そう心配。

どうしてボクが心配してるのにわかつてくれないかな!

「ボク……迎えにいくし」

『は? なに言ってるの。ヒロちゃんが町出てどこか行ったらよくないだろ』

わざとヒロちゃん呼びをする雄大。

ヒイロゾンビの総元締めとしての立場を考えろって言ってるんだ。ボクはますます不機嫌になる。

「ちやんと行き先言えばいいし。ボクがどこに行こうと勝手だろ。子どもじゃないんだからさー！」

『いやまあそうだけだよ。お立場とかあるだろ。オレはべつに大丈夫だから待ってろって』

「ヤダ」

『おまえ。お子様かよ。身体に精神ひきずられてないか』

「そんなことないし——」

ムスウとしてしまってる顔が、CD入れ兼姿見に映ったけど気のせいだ。

ともかく、もう決定。

はい決定。

「ボクのスPEEDなら余裕だよ」

『わかった。わかったから。そんなにむきになんなくて。じゃあ、待ち合わせ場所と日程を決めようぜ。緋色が好きなところでいいからさ』

大人の余裕っぷりを見せつける雄大。

むううううううううう。

「門司港で貴様を待つ！」

「決闘かよ」

ともかく、そういうことになりました。

ハザードレベル137

ボクは見た目こそ小学生ですが、れっきとした大人です。

しかも、社会的常識人であり、礼儀をわきまえたジエントルマン？です。

ジエントルレディ……いや、ジエントルガールといったほうがいいのか？

ともかく！

ボクは報連相を知っている。

ボクは根回しを知っている。

急にふらりと出かけて行って、迷子になって、どこにいるかもわからなくなるようなお子様とは違うのだよ。お・と・な なのです！

そんなわけで雄大に会いに行くのを決めたボクでしたが、すぐにかけるといった不要不急の外出は控えて、きちんと準備してでかけることにします。お・と・な ですから！

なににせよ、雄大がいるところは錦帯橋あたりと言ってた。

ただ単に思いつきのように門司港で待つとか言っちゃったけど、グーグルマップとかで見えたら、錦帯橋から門司港まで141キロメートルもあるじゃないか。

141キロだよ。1キロの141倍だよ（意味のない計算）。

徒歩で29時間とか書いているけど、ゾンビ避けしながらだと、もつと時間がかかるだろう。

雄大がどんなに急いでも一週間はかかると思われる。

待ち合わせの日時は、これも思いつきで一週間後に指定したんだけど、ちよūdい塩梅じゃないか。無意識になんとなく一週間後を指定したボクって天才かもしれん。

対してボクのいる町から門司港までは100キロメートルに満たない。

こちらは準備してゆるゆるといっても、十分間に合う距離だ。

いうまでもないことだけど、ボクを阻む障害はない。ゾンビさんはむしろお仲間だし、もはや戦闘機でサイドワインダーを放たれても無

傷で生還できそうだ。

待ち合わせに遅れる可能性があるのは雄大のほうだ。

もしも、雄大が一週間以内に門司港にたどり着かなかったら……、

「ぎゃー」。ぎゃー」

って、耳元でメスガキよろしくささやいてやる！

それで錦帯橋だろうが、新岩国だろうが迎えにいつてやるさ。

ちなみに、新岩国は新幹線が通ってる駅としては、おそらく日本で一番とっていいほど周りに何も無い。

どれくらい田舎かというと、一番近くにあるホテルからコンビニまで、数キロは真つ暗な道を歩いていかないといけないくらい田舎だ。デイスってるわけじゃないのであしからず。

佐賀といい勝負してるところなんだよなあ。

まあいい！

要するにボクは最終日の前日ぐらいに門司港にフワフワ飛んでいけばいいだけです。

準備は、皆さまに対するご連絡のみ。

一応、雄大のやつが心配したとおり、ボクはヒロゾンビの行く末を見守る立場にあるから、みんなにきちんと伝えておく必要があるよね。

まずは言うまでもないけど、命ちゃんです。

☆

「行きますよ」

間髪を入れずとはこのことだろう。

ボクの話の聞くと、ほとんど秒数を入れずに答えを返してきた。

「命ちゃんも？」

「雄兄いともしばらくぶりですし……」

うろんな目でボクを見てくる命ちゃん。

その視線にはいろんな意味が詰まってる。

例えば。

——答え

とか。

命ちゃんがボクに言ってくれた「好き」って言葉に対して、どう答えるかという命題だ。

テロとか世界とかよりも、むしろ命ちゃんにとっては最大級に気になる点なのだろうと思う。

ボクにとっても、決して軽いものではない。

要は変化を受け入れるかどうかって話だから、ボクは半身を削ぐような気持ちで事に当たらないといけない。もちろん「好き」なのは「好き」だよ。でも、命ちゃんの「好き」っていうのは、世界中で何をも犠牲にしてもボクを選ぶってことで、逆に言えば、他の何も選ばないってことだ。

その峻烈な区分けは、あこがれる側面もあるけれども、ボクの生き方とは少しズレが生じている。だから、ボクの答えは百パーセント命ちゃんが満足するものにはならないだろうって気がしている。それでもいいと思ってくれるかどうかだ。

それに、雄大のこともある。

「たぶん、福岡とかまでの旅とか言っても、なんだかんだ言っただけで雄大のほうで門司港に到着するのに遅れる可能性があるし、何日かここを開けることになるから命ちゃんがわざわざ出向くことはないよ」

「だったら雄兄いに、そこで待っていてもらって、私たちが会いにいけばもつと効率的だったはずです。門司港とか、なんでそんな中途半端な場所なんですか？」

「う、うん。それはそうだけど、なんというか会話の流れの中で高度な柔軟性が発生したといえますか。門司港というのはもはや決定事項になったというか」

「思いつきで言っただけで後悔した流れですよ」

「ち、違います。よく考えたら、門司港って、ほら……ちようどボクたちの町と雄大のいるあたりとの中間地点じゃん。雄大のこれまでの苦労を一瞬で無にするんじゃないよ。政治的な妥協点を全体的社会事実に基づいて決定しなければならないのです」

「ふうん。会話の流れのなかで、先輩がそんなことを考えていたわけですね」

「そうです。きつとそう」

ものすごいジト目で見られています。

命ちゃん。ボクを見ないで。

「ヒイロゾンビが嘘をつくとき……、鼻のあたりに血管が浮き出ます」

「え、嘘!？」

鼻？ ボクの肌って卵みたいに白いから目立つかな。

左手でそつと触って確かめる。感触じゃわかりようがない。

あつ……。

ジト目の命ちゃんと目があつた。

間抜けは見つかつたようだ。つて、ボクだけど。

ていうか、このネタ、前にもしたような。

「先輩つて、時々男らしくないですよね」

「男らしいとか女らしいつてジェンダーバイアスつていうんだよ。よくないんだよ」

「もういいです。ともかく門司港まで行くんですね。私も行きますから」

決意をほのかに帯びる瞳。

これはもうボクには覆せそうにない。

「命ちゃんが行くならもうちよつと準備しないといけないかな?」

「べつにたいした準備は必要ないと思いますが、着替えと食料くらいは用意しておいたほうがいいですよ。何が起こるかわかりませんし」

☆
＝

ゾンビ荘の皆様への説明。

「また、ご主人様は出て行ってしまわれるのですね」

よよと泣き崩れるマナさん。

「でも、マナさんつて飛べないよね」

「飛べないロリコンはただのロリコンです」

「じゃあ飛べるロリコンは？」

「ただの飛べるロリコンです」

「……」

お変わりがないようで。

まあいいんだけど、マナさんの場合、わざと配信してない節があるからな。世間からはステルス状態なので”人気”によるヒイロちからがほとんどないはずだ。超能力全般に興味がなく、もっぱらボクを抱き枕にすることに興味専心のお姉さんだ。

べつにボクが連れていってもいいけどさ。

ただ――、

雄大については、なんとなくボクと命ちゃんの問題だって認識だから、他の人を連れていく気はそもそもなかった。

「帰ってくるんだよね？」

次に口を開いたのは、恵美ちゃん。

髪の毛を粒子が飛ぶような神秘的スカイブルーに染めて、生配信を再び始めている12歳児だ。

すさまじくかわいらしい正統派美少女。

ピンクちゃんや生粋のアイドル乙葉ちゃんを除いて、ヒロチューバーの中では実をいうと登録者数が世界3位。命ちゃんよりも多かったりする。ちなみに世界4位がアメリカちゃん。

しかして――、恵美ちゃんは配信名『スカイ』ちゃんの名前にふさわしく、もはや空を手中に収めている。超常の力で空を飛べる”人気の収益ラインはおよそ50万程度の登録者数なんだろう。見えてる数値がすべてじゃないけど、見えてる数値を否定することもできない。

「もちろん。帰ってくるよ」とボクは言った。

「ヒロ友のみんなにも説明するの？」

「そうしようと思っっているけど」

「わたしもブタさんたちに伝えてたほうがいいかなあ？」

「ブタさん？」

「そう、かわいい私のブタさんたち。ぶひぶひ鳴いてかわいいんだよ」

口元のあたりに人差し指をそつと触れて、恵美ちゃんは妖艶に笑っている。

聞けば、空（スカイちゃん）にあこがれる飛べないブタということ、フアンの呼称がブタさんになったらしい。

——飛べないブタはただのブタ

って感じなのか。いやどう考えても……。

「ヒロちゃんもヒロ友のみんなをちゃんとしつけないとダメだよ」

「し、しついですか。考えたこともなかったです」

「ブタさんってすぐ調子にのるんだから、しつ前は大事だよ。それで——、私みたいな小さな女の子に叱られて恥ずかしくないのって言ったら余計にブヒブヒ言うの」

「ふ、ふーん。そうなんだ。しつげができてえらいね」

「時々はご褒美もあげないといけないんだよ」

「どんなご褒美かなあ……」

恵美ちゃんはキラキラとした笑顔をしている。

ボクは逆に戦慄しているんだけど。驚きおののいているんだけど。

この子、特殊な才能が半端ない。

「まずは靴下を脱ぎます」

「はい」

「次にカメラに向かって足を——」

「あ、だいたいわかったからもういいよ」

「え、もうわかったの。さすがヒロちゃんだね」

なんかヤバい方向にいつてない、この子。

まあいいけどさ。

恵美ちゃんの家族である恭治くんが、何も言わないでいるところを見ると、もはや容認されていると考えるべきだろうし。

「恵美の場合、もうあきらめた。そっちの方向性のほうが力が得られるだろうし、むしろ安全だという判断だよ」

容認ではなく、あきらめでしたか。

でも”人気”の得方もひとそれぞれだからね、恵美ちゃんがロリ小悪魔路線でいくのなら、それもありがたかもしれない。お兄ちゃんの属性

としては、恵美ちゃんの将来に一抹の不安を覚えるものの、すでに常人の数十倍くらいは強いはずだから大丈夫なはずです。

次にボクは飯田さんの元に膝を進めた。

六畳一間の狭い室内にデンと座っている飯田さん。

三か月前は確か、ヒロゾンビがどれくらい絶食生活が可能かを配信していたはずだ。

いまの飯田さんは、通常モードに戻っている。

コケおにぎりみたいな状態じゃない。

「おじさん。この頃はちゃんと食べてる？」

「ある日耐えられずに、カップ麺を生のままバリバリ食べちゃってね。そしたら飯テロ動画としてわざわざ再生数が多かつたんだ。それで

——アイちゃんが一品作って優勝していく動画をあげたら、そこそこ再生されるようになったよ」

ふうむ飯テロ動画か。ゾンビハザードでおいしい料理を作れるところも少ないから、そこそこ見られたんだろうな。なんにせよ。絶食状態が解除されてボクとしてほっとしてしている。

「あんだ。また変なこととして、自分から狙われに行くなんてやめなさいよ」

次に発言したのは姫野さん。

飯田さんと男女の仲になって、お腹の中の子どもはだいぶ大きくなっている。

「お腹触ってもいいーい？」

「いいけど……」

わずかに困惑してるものの、姫野さんは許してくれた。

そっと触ると、赤ちゃんはまだ蹴ったりとかはしなかったけど、ボクにはきちんと感じられる。

——ヒロゾンビの気配。

ヒロゾンビどうしだからというよりは、お母さんがヒロゾンビだから感染したんだろうな。

飯田さんもヒロゾンビだから、純血ともいえるかもしれないけど。

両親の愛情を一身にうけた純粋なヒーロゾンビがどれほどの力を
持つかはわからない。

量的な”人気”と質的な”人気”。

どちらが強いかなんて、わかりようもない。

ただ、姫野さんはこわがりだから、その不安を少しでも払拭させて
あげたかった。

「この子が安心して生まれてこれるようにがんばります」

「なにをどうがんばるのよ」

「えと、まあその……。危険が及ばないようにいろいろとがんばりま
す」

「そう」

横座りしたままの姫野さんは機嫌がいいようにも悪いようにも見
えなかった。

ただ、ボクの言葉を否定したりもしないことから、一応の納得は見
たということだろう。

☆Ⅱ

「ぽよよん。ハローワールド。みんな元気してるー？」

いつものようにお気軽に配信を始めるボク。

『ヒロちゃんの配信で今日も元気』『配給券が多くなってきたよ』『お金
もそろそろ復活するかもしれん』『ヒロちゃん今日もかわいいね』『お
い日本の公式アカウントじゃねーか』『なにやってんだよ首相』

「元気そうでなによりです」

ゾンビハザードのリスクが相対的に軽減されたせいか、みんなの雰
囲気が少しばかり明るくなっている気がする。

ゾンビ自体はおそらく完全に囲い込めてるわけじゃない。

ただ、目についたゾンビは、刑務所とかショッピングモールとか大
学とか、そういった巨大な施設にぎゅうぎゅうに詰めまくって、とり
あえず放置しているとところが多い。

全員を人間に戻さないのは食料とか生活物資の関係だ。

人間に戻さないままという選択はないだろうけどね。ゾンビは農業みたいな単純作業には向いてるけど、そうでない高度な知的作業には向いてないから。

まあ、そのあたりもお偉いさんが考えるんだと思う。

「江戸原首相。元気ですかー」

『パパは元気です』『パパじゃねーだろ』『日本の首相だけ名前呼びされてうらやまします』『自分とこのヒロチューバーでも見とけばいいだろ』『ヤダ。ヒロちゃんがいいの!』『ヒロちゃんっていま誰が養ってんの?』『日本?』『ピンクじゃね?』

「みんなの好意とかはうれしいですけど、実をいうとボクは自立しているのです」

国とかに養われてるわけじゃない。

ちゃんと、マナさんがどこからともなく食料を調達してくれている。

ん。

あれ? これってもしかしてヒモでは。

い、いや、違う。

ボクはマナさんにお世話をされてあげてるんだ。

マナさんはボクをお世話するのがうれしい。ボクはお世話されるのがうれしい。

ウィンウインの関係だし、ヒモじゃない。

『あーあ、ヒロちゃんがバグってるじゃん』『自立って自分の足で立ってるとかそういう』『かれぴっぴに養われてるんだとばかり』『小学生でおつきあいは早すぎる』『ゾンビツビじゃね?』『ゾンビを利権扱いですんなよ』『なんだあ……てめえ』

「あー、喧嘩しないで。怒るよ」

『幼女に怒られたいだけの人生だった』『ヒロちゃんが怒ってもかわいだけ』『かわいさ全振りだしな』『どういうふうに怒るのかお兄さんに見せて』『めっ(幼女)』『滅!』(ドン)』

いつものノリでした。

ちらりと思ったのは、さっきの恵美ちゃんの発言。

——しつけ。

小さい女の子に叱られて喜ぶなんて、このロリコンとか言えばいいの？

いや、ボクのキャラじゃないしな。

「ともかく——、特定の国にどうこうしてもらってるわけじゃないです」

たくさんの国からもらったお宝は、押し入れの奥深くにしまわれています。

『パパも養いたかった』『首相さみしそう』『そんなことより今日はなんの配信するの？』『ゲーム配信しようぜ』『いや重大発表とかあった』『重大ってなんだろう。そろそろ生理きた？』『マジでそろそろ垢バンされるぞおまえ』『ヒロちゃんって成長してない感じだよね』『ゾンビだしな』『不老なの？』

不老かどうかはボクが決めることにするよ。

いやマジで、ヒーロゾンビは自己決定能力が現実原則に抵抗するからな。

「はい。重大発表です。といってもたいしたことないんだけどね。ちよつと福岡まで旅行しにいろいろかなって思っています」

『きたあああああつ（福岡民歓喜）』『らめえええええ（佐賀民死亡）』『パパとしては特に問題ないが自衛隊の護衛が必要かは後で個別の連絡をお願いするよ』『ていうか福岡ってどうなってんの？』『佐賀よりは危険だが、ゾンビはだいぶん少ないよ』『博多駅周辺は閑散としてます。ただゾンビもいないので安全です』『悲報。糟屋郡はカスや』『は？』『福岡つつつても広いからな』『福岡のどこらへん？』『いろいろなところを見て回りたいなって思っています』

最近はとんと聞かなくなったジュテッカの暗躍だけど、馬鹿正直に行き先を言う必要もないだろう。実際、せつかく足を延ばすんだから、他の町の様子も知りたいっていうのはあるし。

そうだ。唐突な思いつきだけど、準備が速くできたら他の町に寄り道しようかな。

『ゾンビを回復してまわるの？』『それは国が調整すればいいだろ』『ヒ

ロちゃん旅情編』『旅と言えば温泉だよなあ!』『配信はするんだよね?』

「配信かあ。ネットの通信環境がわからないからな。できないかも」
『そんなあ』『だめですう』『福岡市だったら可能な模様』『市役所とか町役場だったらだいたいはネットできるよ』『ゾンビだらけの市役所もあるけどな』『ゾンゾンしてきた』『もはやゾンビなんてただの障害物よ』

うーむ。

配信環境が整えられたほうがいいのかな。

場所がバレたりもするだろうけど、移動しながらなら特定はされな
いだろう。

最終目的地さえバレなければ予想もできないはず。

「配信はできそうだったらするね。じゃあ、報告はこれでおしまい!

今からは普通にゲーム実況しまーす」

『わあい』『悲報。総理大臣。普通にヒロちゃんのゲーム実況を楽し
む』『非常事態宣言中とはいえ、なにかしろよ』『せ……推せ』『いつぱ
いちゆき』『楽しんでるヒロちゃんが一番好き』

ボクの日常が戻ってきた感じがします。

ハザードレベル138

元引きこもりプレイヤーとしては、ゲームとは空気であると定義する。

つまり、意識なんてしない。呼吸するようにプレイする。

ボクが配信でゲームプレイ多めなもの、そのあたりが大きいかな。ただ、ソシヤゲの廃人プレイヤーとはまた別の領域なんだよね。

なんだかんだ他人と比べるのがソシヤゲの廃プレイヤー。

対してスタンドアロンな引きこもりの廃人プレイは、言ってみれば自己探求の旅なんだ。

ボクたち私たちの果てしない探求。

旅の終わりはいつたいどこにあるのだろう……。

「というわけで、今日やっていくゲームは”私たちのおしまい”です！」

『お兄ちゃんはおしまい？』『名作TS漫画？』『ヒロちゃんも時々がさつになるしな』『英訳をアレンジして……ヒロちゃん成長したね』『英語よわわガールからの脱却』『かつこEこと言ってる風だけど、単なるニート予備軍だよね』『小学生のころからゲーム漬けど香川県に行かせられちゃうよ』『ひっ』『ひえっ』『香川怖い』

「英語ほどほどガールだよ。小学校については再開したら通うかどうか考えるね。あと香川県には行かないよ！ 悪いけどゲームは一日十時間なんだ」

『ひえっ』『大丈夫、香川県もほとんどゾンビで機能してない』『ゲーム条例もどきくさに紛れて廃案にすればいいよ』『ヒロちゃんおいで。おいしいうどん食べさせてあげるから』『うどん脳こわい』『やつら絶対うどんに寄生されてる』

「九州人にとって、うどんはおかずであって主食ではない感じだしなあ」

うどん単品でももちろん食べますがね。主食ではないのは確かだ。

「ともかく説明するね。このゲームは海外産のゲームだけど、いちおうゾンビゲー的な位置づけになるのかな。謎の真菌類に感染してキ

ノコ人間が襲ってくるって感じだけど、重厚なストーリーが売りのいわゆる人間ドラマ系かな。もちろんゲームとしてもオモシロヒ。ステルスゲームもできるし無双ゲームもできる。ただ、無双はあまりお勧めできない。ゾンビゲーの理であるところの一撃死が待ってるからね」

『めっちゃ早口』『真菌とウイルスの違いわかるかな？』『ゾンビゲーよく飽きないな』『ヒロちゃんは、ぷよとかを乙葉ちゃんといっしょにしてるほうが似合ってるけどな』『深夜にこっそり配信しottaで』『え、マジで？』『ほっぺたくつつけて、ばよえくんしottaで』『ほんまかいな』『うそやで』『うそかよ！』『ほんまは、身体ごとくつつけottaで』『うおおおおお』』

アーカイブにも残してないのに、何ばらしてんだよ。

あとで、命ちゃんが怖い。

「落ち物ゲーは即応はできるんだけど連鎖が苦手だねー。あー、真菌とウイルスの違いね。わかるよ。わかる。ちょっとシンキンタイムが必要だけど」

『それはもしかしてギャグで言っているのか？』『ヒロちゃんって時々こうなんというか……』『わからせたい』『ウーム。そもそも、ウイルスは生命かどうかという定義の問題もあるな』『ん。毒ピン来ottaんか我え』『ピンクはここにいるぞ』

「ピンクちゃんいらっしやい。真菌とウイルスの定義はね。そうだなあ。ピンクちゃんに説明をお願いしようかな」

『丸投げガール』『わらわのこころはピンクが知っておる』『毒ピンのほうがそりや詳しいだろうがあ……』『ヒロちゃんの答えが知りたかったの！』『ピンクが答えられることは答えるぞ』

ピンクちゃんは、おそらく今、”いんとれびっど”の修理につきあつてるはずだ。

ドクターであるピンクちゃんなら、余裕の答えですよ。

音声をオンにして、ピンクちゃんを招き入れる。

スワイプ画面でボクの隣にどうぞ。手慣れたもんですよ。

「はいどうぞ」

「そうだな。まず真菌は生物だけれども、ウイルスは生命かどうか疑わしいということを書かないといけないだろう。生命というのは主に三つの要素によって成り立っているといえる」

ピンクちゃんは淀みなく続ける。

「ひとつは自他を区別すること。ひとつは代謝すること。ひとつは生殖すること。このみつつだな。ウイルスについては、スタティックな情報鎖であり、代謝と生殖については疑似的であるから生命とは異なるのではないかと言われている。もちろん、これは生物学的な生命の概念に照らし合わせたものであり、魂やこころといった霊的作用とはまったく関係がない」

ふうむ。さすがピンクちゃん。八歳児とは思えない頭の良さだ。

「じゃあ、ゾンビって生命じゃないのかな」

彼らは動いてこそいるものの、その身体的な特徴は『代謝』とはほど遠い。

人間を噛んだり傷つけたりして増えていくところは『生殖』っぽいけど。

「ゾンビは先の生命の定義に照らせば、なんとというかウイルスっぽい。物質的にとらえきれてないから、ウイルスと名づけられたけど、そもそも素粒子の生命。波動の存在という時点で、既存科学としてはかなり厳しい領域だ」

『ピンクちゃんがかわいいことしかわからなかった』『なるほど……わからない』『あまり難しいことを言うなよ。話についていけない』『ゾンビっていったいなんなんだろうな』『まあいいさ。いずれ消えるだろ』

「ゾンビについては、ヒイロ宣言で各国で総量規制を設けたが、この規制はあつてないようなものだから、正直、アメリカではすでに1万人以上になつていと思うぞ」

『は？』『アメリカおまえまた横紙破りかよ』『オレの国、まじめに2千人守つてたのに』『いやー、でも家族をヒイロゾンビにするって事例も多いからなあ』『あ、やっぱり、おまえんとも闇ヒイロゾンビ増えてんの？』『なんだよ。闇ヒイロゾンビって』

「留保条項として、各国の状況に応じて総量規制は随時更新されるというものがあるから、べつにルール違反しているわけじゃない」

ピンクちゃん腕組み。たしかにそういう話だったね。

しかし、それだと総量規制は有名無実だなあ。

「ヒロゾンビが増えることによる弊害も確かにあるが……、そもそも念動力が使える、いわばスーパーヒーロゾンビというのは本当に一握りだし、単なる犯罪者がそこまで”人気”を得ることはほとんどありえないぞ」

確かにね。

ゾイの場合は、世界を恨んでいる人が50万人以上いたからこそ、あのパワーが発揮されたわけだし、自分のために強盗とかするやつに誰かが力を貸すとも思えない。

人間は誰かが何かを言っていると、それを否定する人が割合的に出てくる。

すべての人が承認する話なんて、ありえない。

それはボクもだ。ボクも誰かに否定されている。

それでも、否定されていることを否定せずに前に進んでいくというのが、今のマイムーブです。

「ところでヒロちゃん」

「ん。どうしたの。ピンクちゃん」

「さっきの話なんだが、福岡に行くのか？」

「そうだけど」

「ピンクもついていきたかったぞ」

「ごめんね。ちよつとわたくしごとなんだ……」

「それはわかった。でも、事前に相談くらいしてほしかったぞ」

「ごめんね。”いんとれびっど”の修理で忙しいかなと思って……」

「ヒロちゃんからの相談なら最優先でうけつけるのに」

ちよつと、しよんぼりしちやつてる声。

罪悪感が半端ない。

そうか。報連相といっても、その順番が重要か。

当たり前だ。特にピンクちゃんはボクにいろいろ便宜を図ってく

れたのに、薄情だったかな。

「本当、ごめんね。おみあげ持つていくから許してね」

「む。しょうがないな。ピンクはヒロちゃんの友達だから許してあげるぞ」

むふんむふんなってるピンクちゃん。

ほっと一安心です。

『ヒロピンクは永遠の友情』『てえてえやりとり』『ヒロちゃんのわたくしごとってなんだろうな』『後輩ちゃんとかいつしよにいくのかな』『まさか後輩ちゃんといっしょに……』『男に会いに行ったりしてw』『男とかパパ許しませんよ!』『だから首相は仕事しろって……』

雄大も男だしな。

男に会いにいくとか知られたら、大荒れだろうな。

ガワだけ見れば小学生アイドルだしな。首相はボクのこと知ってるはずなのに。すっかり娘扱いじゃないか。

「さ、さして、そろそろゲームはじめようかなっ」

『ヒロちゃんごまかしてない?』『なに焦ってんですかねえ』『ヒロちゃんくらいの年頃だと普通にクラスの男の子に恋したりするのかな』『俺はヒロちゃんにガチ恋』『小学生にガチ恋はマジで犯罪なんで、さっさとゾンビに食われてどうぞ』『なんでやヒロちゃんかわいいやんけ。恋に年齢は関係ないんや』『キモ友さんはお帰りください』『じゃあ、とりあえずゲームを進めていきます』

強引ながらも進めていくのだ。

☆
||

「はい。ぎあこ。ゾンビはやっぱり後ろから締め落すに限るね」

正確に言えばゾンビじゃないんだけど、まあボクの中ではゾンビだからいい。

そして最強はコンクリートブロック。

これひとつで誘導よし、殴りよし。ぶち当たて殴るもよしと最強だ。

「コンクリートロード。この道」

『めっちゃリラックスしながらプレイしているな』『リラックス凄惨プレイすこ』『ゾンビさんの頭をかち割りながら、鼻歌歌う小学生がいるらしい』『CERO レーティングからするとヒロちゃんこのゲームしちやダメなんじゃ』『おまえの頭ん中香川県かよ』『スカイちゃんの忠実なるブタでもあるオレからすれば、ヒロちゃんののしり方には優しさ成分に溢れててちよつとまだ物足りない』『そうか。ならオレがメス堕ちさせてやるよ』『ぶ、ぶひーっ』

まあ、いつもどおりのゲーム実況だしね。

ボクもわりと配信そのものに慣れてきてるんだと思う。

だいたいヒロ友はボクを受け入れてくれてるし、ボクもそんなみんながいるから飛べるんだと知っている。

これって信頼関係ですよ。

「この調子だとRTAもできちゃうかもしれないなあ」

『イキる小学生』『悪いお顔』『ヒロちゃんがイキるとだいたいろくな結果にならない』『もう連立方程式なりたってますからな』『ピンクもそう思います』『ピンクの裏切りwww』

「イキってるわけじゃないのですよ。これは余裕ってやつ」

実際バトルとしては、このゲームは難しいほうだと思う。

少なくとも無双できる感じではないし、ゾンビも走ってくるタイプが多いからね。

クリツカーと呼ばれる、おまえの頭キノコかよみたいな敵は遅いけど、つかまれたら即死だ。

ボクの世界のゾンビたちはノーマルゾンビで比較的弱くてよかったですよね。

ただ、現実と違ってゲームはゲーム。

敵の配置だって覚えればルート固定可能だし。行動パターンさえ覚えてしまえば最高難易度でも十分対処できる。

「ここではわざと警戒モードにさせて火炎瓶を投げつけると一網打尽にできるよ。ジャジャーン！」

ゲームに出てくる14歳のヒロインの真似をして”ジャジャーン

”してみる。

ほんとのジャジャーポイントではかわいいとしかコメントできなかったからな。

かわいいは感染するのだ。そしてかわいいは作れるのだ。

『おかわいいいこと』『アザトース』『ぎやわいい!』『ヒロちゃんがもはや純真さを取り戻すことはないんやなって』『十分純真やろ』『おまえらジャジャーくらいで騒ぐなよ』

でもヒロインの可愛さにはみんな概ね同意のようだ。

ちなみにヒロインはゾンビに襲われはするものの、発症しないという生ワクチンみたいな存在だったりして、ボクの今の立ち位置に少しだけ似ている気がする。

そこんところが感情移入できるポイントかな。

それになんというか、ヒロインちゃん素直なんだよね。いろいろと思っただことをそのまま言葉にしているところがすごくかわいい点です。

「黙れブタ」とかも、聞きようによってはかわいいしな。

発言者の属性って大事です。

『ブヒ?』『ヒロちゃん?』『ヒロちゃんも小悪魔になっちゃうの?』『ぶひぶひ』『すげえ勢いでブタが現れやがる』『養豚場かよwww』『養豚場草』

「あ、ごめん。まちがえた」

脈絡のない場面での不規則発言だったわ。

『ブヒ』『集中力なくなってきたやつてるね』『子どもの集中力なんて45分も持たんぞ』『配信者って二時間ぶっ通しとかも多くて、体力使うかな』『へろへろヒロちゃん』『ヒロちゃんにスポドリあげたい』『はい、お水飲んで』

「ん。ありがとう。んぐんぐ」

もちろん、スポーツドリンクは配信前に用意して机の上に置いてるよ。

ボクもわりと長期間配信者やってるからね。素人とは違うのだよ。素人とは。

『素材入りました』『使える』『もう何個もあるだろおまえら』『素材は多ければ多いほどいい』『集中力が欠けてるのはオレらかもしれない』『んー。じゃあ、この難所を越えたら、いったん切るね。ちよつきん力二さん』

『ちよつきんいただきました』『カニさんのポーズいただきました』『いかがわしいことをしそうなになったヒロ友に使える動作やな』『やめなされやめなされ』

難所で爆死することもなくクリアしちゃって、うーん撮高とか考えちゃうあたり、ボクもプロってきてるなと思う今日このごろでした。悪いヒロちゃんになってる気がする。

☆
||

配信が一通り終わると、お昼近くになったので、マナさんにお餅を焼いてもらった。砂糖と醤油で甘辛い感じ。うーんと伸ばしてると、マナさんにほっぺをうーんとされる。

「あの、マナさん、食べにくいんだけど」

「かわいすぎる生物に対しては、めちやくちやにしたい衝動が湧くものなんです。これをキュートアグレッションっていうんですよ」

「学術的なのはわかったから、食べるの邪魔しないで！」

「じゃあ、食べ終わったらうーんしよっていいですか」

「ボクのほっぺた伸ばして、そんなに楽しいの？」

「楽しいですね」

「ボクは全然楽しくないんだけど」

「サメの気持ちになってみてください」

「サメ？」

「そう。ご主人様の大好きなサメです。サメは人間をパクパクしちやいますよね」

「うん」

「サメは人間をパクパクするとき、もちろん楽しいです。ようやく餌にありつけたわけですし、人間は高エネルギーで、しかも海の中では

無力ですからね。楽勝な捕食が可能です。楽しくないわけがないです」

「んー」

お餅を伸ばしながら考える。

確かにそういう考えもあるかもしれない。

「翻って、食べられる人間さんの気持ちになってみましょう。どうですか?」

「ぜんぜん楽しくない」

「そうですね。そうですね。つまり、今の私たちの関係も同じといえますね」

「お姉さんはサメで、ボクは食べられる人間さん?」

「そういうことです」

「ちつともよくねーじゃねえか」

「粗暴なご主人様もかわいらしいです」

「やくめ〜て〜」

またサメ手袋してるし。もうお餅は食べ終わったからいいけど。

いやよくないよ。

「まあ実際のところ、わたしは防御面でも有用なのですよ」

「え、お姉さんが防御面で有用?」

なんのことを言ってるんだろう。サメ的には攻撃面ばかり有用な気がするけど。

「さっきの配信ですけど、乙葉ちゃんとしつぽり、ぶよってたって話があったじゃないですか」

「あ——、はい」

「さっき、わたしの部屋で、命ちゃんは福岡遠征のご準備をされていたんですけれども、片手間にご主人様の配信を見ながらでした。そのときたまたま命ちゃんが手にもっていたカメラがですね……、こうなんというかメキョという音を立ててお亡くなりになりました」

「はい……」

やべえ。ゾンゾンしてきた。

「ご主人様のところにオハナシに来たがっていたところをとどめたの

はわたしなんですよ」

聖母みたいにほほ笑むマナさんの顔。

後光がさして見えるよ。

「お姉さんが救世主だった！」

「そうでしょう。そうでしょう。もつとほめたたえてもいいんですよ」

「さすが、マナお姉さん。さすがマナ。すごい。きれい。ロリコン淑女！」

「そうでしょう。そうでしょう。だからご褒美的にご主人様はわたしにパクパクされてもしょうがないと思いませんか」

「うーん。それは……そうかもしれない」

命ちやんをなだめるよりは、お姉さんにキュートアグレッションされるほうがマシだ。

正直なところ、ボクが単なる小学生の女の子ってところを考えると、単にいちやつく程度にしか思えないし、マナさんも変なことはない。

変態だけど淑女なのは認めようと思う。

「なんでもはダメだけど、パクパクくらいならいいよ」

「ご主人様」

うるうるマナさん。

瞳の奥がうるうるしてて、なんとなく甘い雰囲気。

ボクもかあくっと熱くなってくる。

マナさんも見てくれだけは美人だから。

そのまま数秒見つめあっていると、不意にマナさんがうつむいた。

「なんかダメな感じですよ」

「え？」

「ご主人様がこう、ちっちゃな身体をせいっぱい動かして抵抗してくれないといまいち燃えません。かわいそうじゃないとダメみたいです」

「そうですか……」

ロリコンというより、なにか他の病をこじらせてませんかね。

悪魔合体で外道スライムになったみたいな、しちやいけない概念が合体してませんかね。

ボクはいぶかしんだ。

「ところでご主人様」

「ん。なあに。マナさん」

「命ちゃんを抑えられるとしても、そんなに長い間は無理です。どうせいつかは怒られるのでしたら、今のうちに脱出して、町役場の皆様にご説明にあがったほうがいいですよ」

女の説教は長いですから――。

そんなふうにはマナさんは言うのでした。

☆
☆

ゾンビ荘を出ました。

命ちゃんはお部屋の中にいる気配がするけれど、ボクは刺激しないように、ゆつくりと外に出た。もちろん、気づいているとは思うけど、命ちゃんもマナさんになにかしらの説得をされて、我慢しているのだと思う。

マナさんありがとう。

お礼はさつきあむあむされたから、それで支払い済みだ。

季節は春。

もう4月だ。この季節って暖かくて過ごしやすいくて、一番好きだなあ。

なんかフワフワってしてくるし――。

実際、いまのボクもフワフワしまくってる。

たんぽぽの綿毛みたいに、体重をゼロ近くの均衡に持って行って、空高くというほど高くもなく、地面から4、5メートルほどを浮いている。

「ふわあああああ」

お昼を食べたばかりだからか、超眠い。

このまま寝ていれば完璧な自堕落生活だったけれど、福岡に行くと

いう目標ができた以上は、小目的であるみんなに説明もこなさなければならぬ。

うとうとしながら、風船のように進んでいく。

途中。畑仕事をしている人たちが横目に見えた。

もうゾンビリスクがほとんどないエリアでは、ともかく自給自足の生活に入ってる。

資本主義が復活する前には、やはり物々交換が最強だからか。

株がリアルな株として通貨のような役割をしているのかもしれない。

それとも、単にそれが仕事だったから、元の生活を取り戻したくてそうしているのかもしれない。

畑の人がボクに気づき、手を振ってくれた。

ボクも振り返す。

「問題は——お金のかな」

お金はキャッシュとキャッシュレスの二つがあって、キャッシュレスのデータは残ってるかもしれないけど、現金についてはどうなんだろう。

幼女先輩が言うには、国主導のところは『銀行』とかに、現金をしかたま集めて、それを配給券の代替物としていくという方法をとってみるみたい。つまり自衛隊は『銀行』を守っている。

この町も同じような感じだ。

銀行と見定めた建物に、家中から集めた現金を一度収納してもらってる。

いまは原始的な物々交換。

株一個と配給券一枚みたいな感じで。

この配給券はいずれはお金になりかわっていくのかもしれない。

あるいは毀損の具合が低ければ、いきなりお金を復活させてもいいのかな。

例えば大企業の株式とか、キャッシュレス経済とか、うんたらかんたら。

はあ。眠くなってきた。

経済の話って本当によくわからない。

ボクはなんかマナさんからご飯食べさせてもらえるからそれでいいかなって気がしてきました。

☆Ⅱ

そんなこんなで畑ゾーンを抜けたあたりで、ボクは眠気がぶつとぶ出来事に遭遇した。

いや、遭遇というよりは、なんというか――。
出逢いだ。

「あ、あ……嘘でしょ。こんなことが」

こんなことがあるなんて。

感動といってもいいかもしれない。

その進行ルートは、気まぐれのようなもので。

奇跡のような出会いといっているかもしれない。

本当にたまたま、気が向いたからそっちのほうを通ったってだけ。

あえて向かったわけじゃない。

――飯田さんと初めて出会った場所を覚えているだろうか。

そう、コンビニ。

23時までしか開いてない田舎コンビニだ。

そうであっても、コンビニはコンビニ。全国チェーンのあの色合
い。

電気がこなくなつて、すっかりさみしい色合いだった、あのコンビニ。
二。

それがいま光っていた。

というか、開いていた。

びっくりしつつ、ボクは足を踏みいれてみた。

「いらっしや――」

中には若いお兄さんがいて、ボクを見て、向こうも驚いたみたいだ。
というか、どこかで見たような顔だ。たぶん、町役場にいた人だと

思う。

「ここ、やってるんですか？」

「やってるよー。ヒロちゃん。何か買ってくー？」

「なに売ってるの？」

「見たまんま。なんでも売ってるよー」

確かになんでもといえはなんでもだ。

さすがに日持ちのしないお弁当とか生ものは売ってなかったけど、その代わり、電子部品とかパソコンの類が、その棚に売られている。収納スペース的には合理的だけど、なんかシニールだ。

「んー。アイスとか」

ふらふらつと導かれるようにアイスボックスへ。

もしかしたら冷蔵の関係で難しいかなと思ったら、案外ごっそり

残ってるじゃん！

もちろん、あどときに溶けて消えてしまったやつじゃない。

全部新品で、かちこちに冷気がでて固まっている。

ボクの好きなハーゲンダッツも売られてやがる！

ちくしよう。すげえぜ。あんちゃん。もう一生ついていく。

「なにと交換してるの？ 配食券とか」

「んー。配食券もだけど、物々交換とかもやってるかな。レートはその時の気分次第って感じで」

「これどうやって集めたの？」

「適当に他県から集めてきたよ。まだ、ヒイロゾンビも少なかったしなー」

仕入れ値0円ってやつか。

もちろん、秩序が戻ったあかつきには、よろしくないに決まっているけど、今ならまだヒイロゾンビも少ないし、アドバンテージがあるってことだろう。

「お、アイスか。これ溶かさないように持つてくるの結構大変なんだよ」

お兄さんが誇らしげにいう。

確かにそうだろうな。溶けてないアイスって言ったたら、たぶん作る

か、電気がかろうじて通っていた本州あたりでゲットしてくるしかない。道のほとんどはゾンビ的にむちゃくちゃになってるだろうし、車だらけで通りにくいだろう。

せいぜいが二輪バイクか。

ということは、このアイスの山は何往復したのかって話で、地味にすごい。

あと、電気もか。たぶん、これは発電機をひっきりなしにまわしてるんじゃないか。

うーん。すごいぜ。

「お兄さん。ひとりやってるの？」

「あ、いや、相棒とふたりで交代しながらやってるよ」

「ふうん。ひとりだと危くない？」

「みんな見知った顔だからな。誰それに襲われたってなれば、みんなにボコられるだろうから、たぶん大丈夫だよ」
なるほど。

みんなにとつてここが価値があるって認められれば、みんながここを気にかけてくれるっていうことか。原始的だけど強力な防衛装置かもしれない。

それはそれとして——、ボク、アイスが食べなくなっちゃった。

「物々交換も大丈夫なんだよね」

「ああ、もちろん。ヒロちゃんなら——」

「はい」

お兄さんが何か言いかけたけど、ボクはいま持つてるもので、いちばん高価なものを渡した。

小学生がクリップとかをなんとなくポケットに入れているみたいに、本当になんとなくな気分を持ち歩いていた、どこかの国のシンブルな指輪だ。

銀色でなんの装飾もないし、なんの宝石も入ってない。あの船でいろんな国からもらったプレゼントのひとつ。

「こ、これはなにかな」

「わかんない。重要文化財とか国宝とか、そんな感じのやつだと思う」

「ちよつと、お値段的に釣り合っていないかなとお兄さんは思うんだけど」

「指輪は食べられないけど、アイスには食べられるよ」

「まあそりゃそうだけど」

「アイスは半年間くらい食べてないです。食べたいです」

ジツと相手の目を見る。

上目遣いがポイントです。お兄さんは、ちよつとの間は耐えてたけど、やはりボクの眼力に押し負けて目をそらした。

勝った！ いやこれは買ったのだ！

「わ、わかったから。ヒロちゃんがこの店を宣伝してくれるだけでいいから。アイスはあげるよ」

「やったっ！」

ハーゲンダッツ様をボクは高々と掲げる。

ああ、愛おしい。もう半年は出逢えなかった。

あなた様を一日千秋の想いでお慕い申し上げておりました。

「あの、ヒロちゃん。ヒロちゃん。指輪持って帰って！」

お兄さんが何か言ってきたけど、ボクはアイスに夢中で気づきませんでした。

ンマイ！

ハザードレベル139

「ヒロちゃん。わたし無理デース」

「わわっ。乙葉ちゃん？」

町役場に説明しにいったら、なんかいきなり乙葉ちゃんに泣きつかれた。

スーパーアイドル乙葉ちゃんは、いまやボクのファンクラブの会長の座にも収まっている。

いつもキラキラして笑顔ふりまく美少女ってイメージだったんだけど、ボクの前ではけっこう素を出すようになってきた感じだ。

つまり、メソメソ陰キャ。それが彼女の本质だと気づいてしまった。

——うーん、わずかばかり共感が。

長いまつげに涙が乗ると、美少女だなーって、しみじみしてくるのは何故だろう。

ともかく、今はボクの腰まわりにくっついてる乙葉ちゃんをはずして、

「なにが無理なのかな」

と、素に近い聞き方をした。

乙葉ちゃんの柔らかな身体が、ドッキングするようにボクの柔らかなボディに当たって、ぷにぷにと吸いつくようになるのは、悪くない感触だったけど。

乙葉ちゃんみたいなかわいい子が泣いていると、ドキドキするより先に、なんとかしなきゃって思っちゃうんだよね。

わずかばかり残ったお兄ちゃんごころだろうか。

「ヒロちゃんが福岡に行くという話があったじゃないデスカ」

「うん。したけど？」

「信者……もとい、ファンクラブの皆さんもついていくって聞かないデース」

「えー」

それは困る。

どちらかというところ、地雷的な『男』に会いに行くっていう案件だからな。

フアンみんなをひきつれてとか、意味わかんないし。地雷原から自分でつつこんでいくようなものだ。

ボクの自意識では、まだまだ男としての精神は死んでないと思うけど、客観的に見て、ボクがかわいらしきメインのアイドル的な見方をされていることを知っている。

男はあかんやろってバカでもわかる。

まあ、ボクが男とくつつくとかありえんけどね。そりゃ幼女先輩みたいに渋い男の人をみると、かっこいいって感じるけど、それは憧れであって恋愛感情なんてものはない。

飯田さんみたいなおじさんに、なんかかわいらしきを感じているのも同じく。

人としての親愛の情は湧くけれど、やっぱり恋愛とは違うような気がするのです。

ただ――、

言葉にしちゃったら、その瞬間にデジタル化されて、イチかゼロかに分類されちゃうと思うから、本音のところはよくわからないって部分もあるんだけどね。

「乙葉ちゃん教祖でしょ。なんとかできないの？」

「それが無理だから無理と言ってるんデース」

ううーむ。これはどうすれば。

「信者の皆さんに説明してくだサーイ」

「えー、ボクから」

「ヒロちゃんの直々の言葉じゃないと、わたしじゃ統制とれませーん」
「んー。ちよつと面倒そうな」

じわっ。

乙葉ちゃんの美人顔に涙の泉が湧いてくる。

うう。罪悪感がチクチクと。

「ヒロちゃんに見捨てられたデース。わたしががんばったんデスヨ！
突然、教祖にされて、右も左もわからないままがんばったんデスヨ！

ヒロちゃんは全然助けくれません……」

見捨たつてそんなおおげさな。

乙葉ちゃんのボクに対する依存度がどんどん高まっていつてるよ
うな気がする。

もしかして、乙葉ちゃんが一番ヤバイ信者さんだったりして……。
ち、違うよね。

「えっと、あ、そうだ。ボク町長に福岡遠征の説明しにきたんだった」
ボクは思い出したかのように、町長室に向けて歩き出した。

「待ってヒロちゃん」
「ぐえっ」

リアルで後ろ髪を引っ張られるとは思わなかった。

首のあたりがカクンつてなったよ。ゾンビでなければ危なかった。

「あ、ごめんデース」

髪の毛をよしよししてくれてるところを見ると、偶然そうなっ
ちやったみたいだ。

そのあとに、おもむろに髪の毛をすんすんしだす乙葉ちゃん。

「なんかあまーいデース」

ボクの髪の毛には沈静作用でもあるんでしょうか。

「わかったよ。その幹部さんたちに説明すればいいんですよ」

「お願いしますデース。ほんとにほんとにわたしが会長になってか
ら、大変だったんデスから〜」

「く、苦しいから。いろいろ当たっちゃいけないところが、ぷよってる
から！ やめて！」

「やめないデース！ そもそもヒロちゃんはわたしの苦勞をゼンゼン
わかってマセン」

「えー、わかってる、つもりだけどー……」
ジト目。

翠色の瞳が綺麗だなーっ。

「ヒロちゃん。わたしの日記を読んでください」

ものすごく流暢な日本語でお願いされました。

「あっはい」と素直に答えるボク。

いまどきの子らしく、ブログに書かれているみたいです。
スマホで指示されたURLに飛んで、パスワードを一時的に解除してもらいます。

どうやら鍵付きみたいです。

★
||

○月×日

なんか教祖になってしまいました。

正確にはヒロちゃんファンクラブの会長なんですけど、元が元だけに、宗教色を払拭できてません。周りの幹部さんたちは怪しい人たち、もといデーブなファンなので不安がいっぱいです。

特にアヤシイのがお父さんなのが目下のところ、一番の悩みだったりします。

今日、お父さんは、魔瑠魔瑠教が正式に『神聖緋色ちゃんファンクラブ』として認められたことに、狂喜乱舞してました。

幹部の人たちと飲めや歌えの大騒ぎ。

清貧を旨とする厳粛な宗教だったはずなんですが、いいんでしょうか。

「乙葉。おまえも飲むといいぞ。わはは」

「お父さん。わたし未成年デース」

「よいではないかよいではないか。ヒロちゃんもストゼロ飲んでただらうに」

「あれって本当にお酒だったのかはわかりませんデスよ」

「神聖緋色教では酒は問題ないということが示されたのだ。未成年でも問題ないぞー」

お酒の力って怖いなって思いました。

○月×日

今日は、お父さんに神妙な顔つきで呼ばれました。

「信者をふやさねばならない」

「ファンですよ」

「ファンでも信者でもいい。ともかく緋色様のファンを増やさねばならない。何かいいアイディアはないだろうか」

お父さんは布教に必死みたいでした。

ファンクラブと言えば、わたしもヒロちゃんほどではないにしろ結構な数がいます。

わたしのファンクラブの会長さんは、何人かのファンを引き連れていつもライブ会場にきてもらったりしていました。でも、今の世の中そういうリアルな活動はできません。

できるとしたら、テレワーク的なやつです。

「切り抜き動画を作ったりして推しの魅力を語るとかでしょうか」

「なるほど。それはいいアイディアだ！ 早速、そういうのに詳しいやつにやらせよう」

○月×日

モリさんという人が、そういうのに詳しい人みたいでした。

その人は、おなかがぽっこり出っていて、縁のある眼鏡をかけて、なにもしないでも汗をかいてるような人です。偏見かもしれませんが、確かにそういうのに詳しくそうでした。

「よろしくなんだな。さ、さっそくつくつてきたんだな」

すでにDVDに焼いてきてるみたいです。

動きは鈍そうですけど、仕事は早い人みたいでした。

さっそく、幹部の皆さんといっしょに視聴してみます。

——ヒロちゃんのセンチティブ声を集めてみました——

わたしもアイドルの端くれだから、なんとなく理解はできました。けれど、見もしないうちに止めるわけにもいきません。

無情にも時間は流れ、映像も流れるに任せるほかないのです。

誤解とか、勘違いとか、そういう甘えた幻想などは一切なく、繰り出される声は、ヒロちゃんのセンチティブな声が集められたボイス集でした。

「あつ」「ダメダメ」「やだー!」「んうううう」「ううう」「やだやだやだやだ」「ああつ」「熱っ」「んんんんつ」「でるっ!」「いく!」「きます!」「あうううう」「べとべとお」「濡れるっ!」「はやくう。はやくきてよお」「ハアハア」「中はダメだつてばっ(怒)」「もう怒るよ!」「いっしょにいこつ」「うわーい」「気持ちよかった!」「もう一回しよ」

「拙者も抜かねば不作法というもの」「使えるものができてしまいましたな」「これは再生数爆上がりですな」「モリ氏の情熱には拙者感服いたしました」

「なに言ってるんデスカ!! 没収デス!」

「乙葉よ。これくらい良いではないか。表現の自由だ」

「相手は11歳の女の子デスヨ。お父さん本気で言ってるデスカ」

「あ、いや、モリくんの努力がだな」

「破門にしますよ」

「ひっ」「ひえっ」「われわれにはご褒美です」

センシティブ動画の流出はなんとか阻止できました。

ヒロちゃん。わたしの努力をほめてください。

○月×日

お父さんたちが、ファンを増やしに町役場の人たちを勧誘してました。

とりあえず、十人くらいで気弱そうな人をひとり取り囲んでいます。

「ヒロちゃん様の庇護にあるにも関わらず、そのご寵愛を受けずにいるとは何事か」

「信心が足りん」

「ヒロちゃん最高っ! ほら、あなたもいっしょに」

クルクルと、かごめかごめをしながら周りをまわる恐怖映像でした。

「お父さん、なにやってんですか」

「わたしはべつに何もしてないぞ。ただ、ヒーロゾンビはいいぞとお説き伏せてるだけだ」

「無理やりはダメだつていいましたよね」

「うむ。それはな、ステージが足りないのだな。我々の言葉を理解できななのだ」

「お父さんが、ヒロちゃんの話を理解していないのを、いま理解しました」

「ステージの問題だな。ともかく、我々も無理に誘ってるわけではないぞ。彼は——、おそらくだが緋色様のことが好きでたまらないのだ。しかしながら、彼の欲望は若さゆえかよろしくない方向に向いておる。ありていにいえばヒロちゃんの細くしなやかな足に接吻したいという欲望だ」

「ちが、ちがう。オレはロリコンじゃねえっ」

「ほら、彼もそう言っている」

「言つてないように思うデスが……。ともかく、解散デス。無理やり加入させるとかダメ絶対！」

「乙葉よ。心の眼で見るのだ」

ぴきぴきっ。

念動力を使つて、コンクリの地面をひび割れさせ、その日は無理やり解散させました。

ヒロちゃん。わたしの努力を褒めてください。

○月×日

ヒーロゾンビが増えました。

ヒロちゃんがヒーロウイルスを解禁したからです。

比較的マイルドなファンができて、既存の濃いファンと中和できればいいなつて思います。

……………結論から言えば無理でした。

「ヒロちゃんの足でなでなでされてえよお」

その日の宴では、あの日かごめかごめをされていた人が、人目もはばからず、そんなことをのたまっていました。

人って……生きてていいのかな。

ヒロちゃん。教えてください。

○月×日

ファンクラブ会員がじわりじわりと増えてきており、当初の目標であるファンの増加という目標は達成されつつあります。それとともに、もう最初の課題である自分たちの立ち位置をはっきりさせる必要が出てきたみたいです。

「要するに、公式ファンクラブということを明らかにさせたい」

「お父さんが何を求めているのかよくわからなくなってきました」

「つまり、わたしたちだけが可能な、そんなインセンティブだ。ファンクラブ会員になったら、こういう特典があります的なやつだ」

「ヒロちゃんにお願いするしかないと思いますが……」

「頼めるか？」

「頼んでみます」

ヒロちゃんも知っているとありますが、わたしがヒロちゃんとコラボ配信をお願いしたり、そのときにお歌をうたってもらったりしたのは、そういう理由からでした。

いっしょに歌をうたうのは本当に楽しかったです。

ヒロちゃんの一生懸命な歌声を聞いていると元気ができます。

励まされてる気がするんです。

問題はその後でした。

「よし。ペットボトル回収OKです」

信者さんの一人がそんなことをのたまっていました。

あれはヒロちゃんが飲みかけのスポドリです。

ゴミの回収はこちらがするというところで、捨て置かれたはずの飲み物。

「超緋色神水としてとっておくのだ。ファンを増やし、ファンクラブ

の存続に貢献したものに下賜しよう」

「やったぜ！（30代男）」「ヒロちゃん様と間接キスしたい（十代女）」

「蓋だけでいい。蓋だけでいいから頼む（20代男）」

「こちら。D班。おみぐしを。おみぐしを発見しました」

「おお……絹のように美しい」

「超緋色素麺として下賜しよう……」

「うおおおおお」

この人たち。もうダメかもしれません。

助けてヒロちゃん様。

○月×日

なんとか超緋色神水と超緋色素麺を回収し破毀し終わったあと。

へとへとになった私に次なる試練が投げかけられました。

「やはり仲良しなのが一番だと思うのだ」

「お父さんが何を言いたいのかさっぱりわかりません……」

「つまり、教祖であるおまえとヒロちゃん様が仲良しであれば、おのず

と公式ファンクラブとして認められ、我々の布教も必ずや成功する」

「すでに仲良くさせてもらってマス」

「もつと。もつとだ。もつと百合百合するのだ」

「お父さん。娘に百合百合するのを求めるのはどうかと思うデス

……」

○月×日

チャンスはすぐにやってきました。

経緯はよくわからないのですが、ヒロゾンビの中では人間が怖いという空気がありました。

それでヒロちゃんがラーメンを食べたいと言い出して、作ったのが人間のままだった中学生くらいの女の子でした。

みんなが怖がつて食べないので、町役場の空気が最悪なことになっ

て、ヒロちゃんは哀しそうな表情で、食べてっつてお願いしにきたのでした。

「うおおおこれ実質、ヒロちゃんのラーメンだよな」「人間さんありがとう」「ナチュラルに差別発言すんなw」「あ、おまえもヒイロゾンビにしてやろうか」「ざんねーん。すでにヒイロゾンビでした」「きゃっきゃ」「うふふ」

おそらくですが――。

わたしたちはそもそもがマイナーな側だったので、人間を差別したりすることはなかったのだと思います。差別される側は、差別される痛みを知っていますから。

今日だけは、ファンクラブの教祖でよかったと思えました。

○月×日

ヒロちゃんが日本の首相と握手しています。

感覚的には変なんですけど、わたしたちのヒロちゃんが巣立っていくような気分で、なんだか温かさときみしさがごちやまぜになった変な気分になりました。

「うおおおおおおおつ。首相おおおお。日本の国教は神聖緋色ちゃんファンクラブでえええええええ、お願いしやすっ！」

隣で、お父さんが暴れ狂いながらコメントを打っていました。

やっぱり宗教は人を狂わせる悪い文化です。

○月×日

テロ怖い。

○月×日

ヒロちゃんが配信を休んでて心配です。

わたしも画面越しでも怖かったから、ヒロちゃんもわたしより小さ

な女の子だし、いくら超人的な力を持ってても怖かったんだろうな
て思います。

信者の人たちは、ヒロちゃんの公式ファンクラブとして、この機会
に海外進出を果たしたみたいです。わたしとヒロちゃんの配信して
ないコラボボイス集。歌謡集。非公式できわどいながらもギリギリ
セーフな写真などを、ここぞとばかりに放出しています。

物的なものとは物流の関係で出せませんが、ファンになれば、いろ
いろなデータがもらえるようになってるみたいです。

「ひ、ヒロちゃんの隣ですよやすや寝息動画。ダウンロードされまくり
なんだな。乙葉ちゃんの寝息と、はじめて混ぜて、さ、最高なんだ
な……」

『フォレスト氏神』『ASMR動画のレベルがとても高く丁寧な仕上が
り』『ここ数か月で最高の出来』『ボジョレーかよww』『偶然、ふたり
の寝息がユニゾンする瞬間が神』

「ぐふふ……ど、どんどんヒイロちからが、な、流れこんでくるんだな。
すごいんだな」

魂のやりとりをする悪魔の所業でした。

ヒロちゃん。早く帰ってきてください。

○月×日

今日はヒロちゃんと落ちものゲームを楽しみました。

四色のぷよぷよしたスライム状のものを集めて異次元に消し飛ば
すという鬼畜ゲームです。

ヒロちゃんに大丈夫ですかと優しく声をかけて、いっしょにゲーム
をしようとして深夜に連れ出す鬼畜の所業です。悪魔はわたしでした。

深夜の放送室は寝静まっています、人通りは少ないです。

ただし、信者の皆さんが本当のゾンビみたい窓にべったりと張り
ついていて軽くホラーでした。

けれど、ヒロちゃんはお父さんたちを背にしているので、そんなホ
ラー的な様子に気づいてもいません。

「乙葉ちゃん。ありがとう」

はにかみながら、感謝の言葉を述べるヒロちゃん。

「え、どうしてですか」

「ボクがおちこんでるって思ってたんだよね」

「はい」

ヒロちゃんの笑顔を見ると、わたしの顔が熱くなってきたのを感じます。

『チャンスだ！』『いまだ。チュウしろ』『ハグするのだ！』

後ろでテロップを掲げるお父さんたちを見て、すっと冷めるのを感じます。

「えっと、そっちの席にいついていいですか」

「ん？ うん」

向かい側に行く途中で、カーテンを閉めました。

これで余計なノイズは届きません。

わたしは隣に座りました。

「お、乙葉ちゃん近いよ」

「ぶよです」

「ぶよっ」

「肌色と肌色でくつつくデス」

ぴとっ。

ほっぺたどうしをくつつけました。

画面では百合だなんだとうるさかったですが、ヒロちゃんが元気になったみたいで、わたしも癒されました。あたふたするヒロちゃんがかわいくて、ギュっとハグしてしまいました。

わたし、悪魔になっちゃったのかもしれない。

○月×日

「聖書を作るのだ」

お父さんが上機嫌に話をもちかけてきました。

「聖書って、そもそもファンクラブだからありませんよね？」

「もともと、某宗教の聖書も、救世主のファンが持ち寄った同人誌みたいなものだぞ。つまり、緋色様の敬虔なファンであるわたしが筆頭の一文を載せても何も問題あるまい」

「まあ好きにすればいいと思うデスが……」

「実はもう作っておる」

ズンとテーブルの上に置かれたのは、辞書みtainな厚さの薄い本でした。

めくってみました。

原作、お父さん。そして絵がついてました。

漫画でした。

お父さんがやたら美形に描かれていて、ヒロちゃんがヒロインポジションで。

ゾンビの群れに無双するお父さん。

「聖女様お助けしましょう（ニコッ）」

「ありがとうございます。かっこいい神父さま（ポ）」

うああああああああつ。

育ての親が中二病ライトノベルの原作で、11歳の女の子にニコポをかましていた時の気持ちがわかっちゃいました。

わかりたくもなかったですが……。

ヒロちゃん。お願いです。

わたしに焚書の許可をください。

○月×日

わたしはお父さんをお父様と呼ぶ超美麗なアマゾネス的な美少女として描かれてました。

いつそ殺して……。

○月×日

さすがお父様！ たった一撃でゾンビの群れを！

○月×日

お父様は創造神を越えたインソファウルの分身体だったのね！

○月×日

燃やそう。

わーい焼きいも作れるぞー。

○月×日

いつのまにかアップロードされてた。

ぽきん。

わたしは自分のこころが骨折する音を聞きました。

☆
||

思った以上に過酷な内容に思わず戦慄してしまった。

「あの……、なんとというか、丸なげしてごめんなさい」

「本当デスよ〜〜〜」

「でも、乙葉ちゃん。あんまり言わないタイプだよ。だからわからなかったんだ」

「わたし、ためこむタイプデス」

「そうなんだね」

「それで、どうですか？」

「どうって？」

「正直なところ、かなり邪教の類だと思うデス」

「邪教って、まあ……マイナー宗教なんてこんなもんじゃないかな」

「マイナーって、今のファンクラブ会員数は、3500万人くらいいるデスよ」

登録者数5億人にしちゃ、少ないな。

そんなもんか。

「あ、いま、少ないって思ったデス？　ちがいますよ。登録者数が多すぎて、ランク分けしてるんデス。3500万人はいま読んだような濃い人たち——精鋭の数だと思ってクダサイ」

「総数は？」

「2億人くらいデース」

「マイナーじゃないっていうのはわかったよ。ただ、まあボクが知らなかったくらいなんだから、それぐらいはいいんじゃないかなー」

「ヒロちゃんといっしょの部屋の空気を、缶詰に詰めて配っててもデスか」

「う、うん。まあそれはちよつとどうかناと思うけど。乙葉ちゃんには申し訳ないんだけど、常識的な範囲でお願いできるかな」

「常識ってなんデスカ」

「乙葉ちゃんの考えるアイドル活動での普通かな。普通のアイドルだと缶詰でエアヒロちゃんしないでしょ」

「わかりましたデース。善処します。でもそれには——ともかく、わたしの言うことをもつと聞いてもらわないと無理デース」

「隣で乙葉ちゃんのいうことを聞いてねってだけじゃ難しいかな」

「足りないのデース。いまのわたしはヒロちゃんのファンクラブの会長デスが、ヒロちゃんと時々コラボするぐらいしか能がないただの女デース。ヒロちゃんとは一番仲がいいのは後輩ちゃんデスし、政治や科学はピンクちゃんのほうが強いデス。雑魚女なのデース」

卑下しちやってるなあ。

「つまり、なんらかの権威が必要だってこと？」

「そういうことになりマース」

権威っていつてもなあ……。

ともかく、幹部さんたちがいるところに連れていってもらおう。

ハザードレベル140

もともと、神聖緋色ちゃんファンクラブ（この名前もたいがいだけど）の前身になったのは魔瑠魔瑠教とかいう謎の宗教団体だった。ファンクラブとしたのには理由がある。

——脱宗教化。

つまりは、アイドルのファンという属性を得ることで宗教色をできるだけ中和しようという目論見だった。

教団のトップだった荒神神父さんにも退いてもらって、乙葉ちゃんには教祖になってもらって、ともかくボクがご神体とかになるのをできる限り防いでもらいました。

それは一定程度はうまくいったと思う。

乙葉ちゃん自身も人気があったし、ボクのファンでありながら乙葉ちゃんのファンでもある人が多かったし、掌握できるかなって思ってたんだ。

でも、元から魔瑠魔瑠教にいた幹部の人たちは、どうにも宗教であるという認識から脱却することができないらしい。それに、乙葉ちゃんはメソメソキャラだから、心労が限界値まできてるっぽい。

だったら、ボク自身がなんとかするほかない。

「で、幹部の人たちってどこに集まってるの？」

「お寺デース」

寺？ ファンクラブがなんで総本山を寺にしちゃってるの。

でもまあ、案外寺はいいかもしれない。宗教団体って世俗から離れて集団生活とかそういうのもあるだろうしね。なんというか結束力を強めるとかそういう効果はありそうだ。ボク自身は集団生活に向いてませんけど。

「間借りとかそういう感じ？」

「誰もいないからいいんデース。いちおう町長さんには掛け合いましたカラ」

「ふうん。葛井町長の許可はとってるんだ」

「あの町長さんはそういうのにはめっちゃめっちゃ厳しいデース」

「まがりなりにも政府機関だしね。住んでる人にある程度の強制力を働かせるのも道理というか」

税金とつてないだけマシという話。

まあそのうち、日本政府と正式に交流をつなげば、そのあたりの正当性もでてくるんだらうけど。

「でも、そのお寺の人がわたしん家ですって出てきたりしたらどうするの?」

「それは一般的なお家でも同じ話デスね。もし、お寺の持ち主が現れたら、交渉することになると思いマース」

「クジで選んだんだっけ」

「そうデス。基本的には現在の土地と建物は抽選によって選ばれマース」

「つまり乙葉ちゃんたちは例外措置ってこと?」

「そういうことになりマスね」

「町長さん。本当によく認めてくれたね」

「そこは、ファンクラブは家族のようなものだという建前デース」

「建前? じゃあ本音は」

「袖の下というかなんというかデース」

お金というものが機能しなくなっているけど、それはそれとして人が集まってるだけで権力というものは生まれる。

例えば、いざというときの労働力は提供しますよとか、そういうやりとりがあつたんだらう。

それと、前に魔瑠魔瑠教について説明してもらったときに、お寺から信仰を引き継いだとかなんとか言ってた気がする。宗教法人も譲渡できるからね。つまり、お寺に住むものにも完全な正統性がないわけではないのかもしれない。

——つて、微妙。

思わずセルフつつこみしてしまう。

つらつらと考えてみたけど、ファンクラブがお寺を使うのはさすがに微妙じゃないか。

ボクとしては——、そういう政治的バランス感覚はよくわからない

い。

えらい法律の先生とか、裁判官を務めていた人ならわかるのかな。こんな前代未聞なこと、その都度対処するほかないし、よくわからないことは放っておくしかかなと思っっている。

それこそ、乙葉ちゃんを信じてるから。

あれ、でもこれってお友達だからって理由で忖度してることになったりして……。

んんん。考えだすと怖いのでこれ以上は考えないようにしよう。

☆Ⅱ

お寺は町役場からさほど離れていない場所にありました。

町役場からホームセンターに向かう道を、みちなりに進んでいけば着きます。

普通に徒歩でもいける距離だ。

あえて歩いていく意味もなかったんで、飛んでいったんだけどね。

乙葉ちゃんも飛べるし。

敷地の前で着地。

見上げてみると、威容がある。

寺院ってよく考えれば、門構えといい、塀の高さといい、なんというかお城のような趣があるよね。たぶん戦国時代とかの名残で、お寺が僧兵——武力を持った時期があって、領主と張り合ってたからだと思う。

苔むした塀が歴史を感じさせる。

考えるにゾンビ対策にも向いているかな——、ゾンビハザードが起こって無人になってたってことは、みんなどこかへ逃げたか、あるいはゾンビになったかしたんだらう。

この町のヒロゾンビ率はかなりの高さを誇るけど、ノーマルゾンビから人間にはまだ戻していない。物流が回復するまでは、そのほうが有利だからだ。ヒロゾンビも食べないでいいとはいえ限度がある。

ノーマルゾンビがヒイロゾンビに勝っているのは、燃費がいいところ。

なにしろなんにも食べなくても活動可能だからね。

まあ、人間に戻したら戻したで、自分の権利を主張する人が増えて、混乱するんだろうなとか思ったりもします。

そういうのは全部、町長に丸投げです。

そんなのボクに決めてって言われても困るし無理。

ゾンビのことならなんとかできるけど、人間のことはなんとかできないし、するつもりもない。

ボクには政治家も宗教家も向いてないっていうのは、わかりきってるから。

「さて、ヒロちゃん。覚悟はいいデスか」

「いいよー」

お寺の門は開いていて、ちらほらと何人かの人が行き交いしている。

開放的だし、あやしい雰囲気はしないし、幹部の人以外は、案外普通の人なのかもしれない。

——そんなことを思っていたときもありました。

ふと、ボクに視線を向けた人がひとり。

「あ、ヒロちゃんだ」「え、マジ？ あ、ほんとだ」「ヒロちゃん」「かわいい」「教祖様とヒロちゃん様があわさり最強コラボが最強」「ヒロちゃんといっしょの空気吸いたい」「ちよつとでも近づく……」「いい匂いしてきた」「ゾンゾンしてきた」「すんすんすん」

「ひ、ひえっ」

ファンの皆様がじわりじわりとゾンビみたいに近づいてくるんですけど。

いくらなんでも、ファンの人たちをなぎ倒すわけにもいかななくて、ボクは棒立ち状態だ。

「はいはい。みんな下がるデース。おさわりは禁止デスヨー！」

ボディガードのようにボクの前に立ちふさがってくれたのは、乙葉ちゃんだった。

素ではない状態は、陽キャモードだから、こんなこともお手の物だ。「はあ……教祖様に叱られちゃった……」「好き……」「す……」「ここ……」「おねロリはいいものだ」「ヒロちゃんグッズ増えるのかな」「オレ対価労働多めにして配食券ためてるんだ」「そうだ写真とろ。写真はいいよね」

「写真は、常識的な範囲ならかまいません。いいですよ。ヒロちゃん」

「うん」
まあ写真ぐらいならと思っただけど、その瞬間に、高速連続撮影の力シヤシヤシヤシヤという音があたりに鳴り響く。中には動画撮影をしている人もいるみたいだ。ちよつとだけ手を振ってみた。

「おてて」「おてて民。おまえだったのか」「お姉さんに連れられた気弱な妹って感じがして好き」「お姉ちゃんが守ってあげる」「ヒロちゃんフォルダが充実してく……」

濃ゆっ。

一見すると普通の人たちだけど、ここ総本山にいる時点で、だいぶ一般人を逸脱しているよ。

「はやくいきマシヨウ。こんなの序の口デスヨ」

「うん……」

幹部の人たちが集まってるのは、門から直線のところにある本堂みたいだ。

石畳の上を歩く。

両側には桜が満開で、見事な絶景だった。

風が舞って、花が散る。

「世の中変わっても、自然は変わらないね」

と、なんとなくボクは言った。

なんか、桜を見ていると落ち着く。

ここにくるまでいろいろあったけど、なんか全部許せるというか。人に疲れたときに、最後に癒してくれるのは、やっぱり自然なんだよね。

日本人としてのDNAが成せる業だ。

「そうデスネ」

と、乙葉ちゃんも同意してくれた。

ゆっくりと隣を見上げてボクは言う。

「だから、ヒトもそんなには変わらないと思うんだよ」

「だいたいデスガ……」

「ボクは変わらないのが好きなんだ」

「わたしはヒロちゃんに救われましたよ」

「ボクなにかしたっけ？」

「いっしょに歌をうたってくれました」

「そんなことで」

「そんなことで、デース……。今ではちっちゃな豆電球を消しても眠れるようになったんですよ」

幼女みたいなことをいう乙葉ちゃん。

けれど、彼女は彼女なりに成長してるっていいんだと思う。

ボクはどうなのかな。少しは成長しているんだろうか。

それともゾンビみたいに、時が止まっているんだろうか。

そんなことを思った。

☆
☆

「靴脱いでクダサーイ」

浄財と書かれた賽銭箱を越えて本堂前の階段を上ったところで、

乙葉ちゃんに指示される。

「靴下も脱いだほうがいい？」

「いえ、靴下は大丈夫デース」

下駄箱に靴をつっこんで、お堂にあがった。

畳の匂いが充満していて、なんとなく落ち着いた感じ。

あえて電気とかロウソクとかつけないで、天然のお日様の光が中まで入り込んでいる。

わずかに暗いけど、光の帯が当たったところは明るくて、悪くない雰囲気だ。

忍者屋敷のようなキィキィと音の鳴る古めかしい木張りの床を歩き、乙葉ちゃんの後を追った。

閉じられた障子の前で、乙葉ちゃんは振り返る。

「いいデスか……。気をしっかり持ってクダサイ」

「地下アイドル系みたいな感じになってるの？」

「まあ、そんな感じデース」

いまさら、彼らの信心にどうこう言うつもりはない。

なにを信じようが自由なのがこの国だしね。ただ、ボクが信仰の対象だつていうのがあまり好ましくないってことで……。

そういえば、マナさんが言っていた、サメにとつては人間はおいしいけど、食べられる人間にとつてはおいしくもなんともないって話。もしかすると、このことが言いたかった可能性が微粒子レベルで存在する？

「ちらつとだけ見ていい？」

「かまいませんが……」

乙葉ちゃんに許可をもらい、障子を数センチだけソロリと開け、中を覗いた。

古くは平安時代の垣間見、鶴の恩返しなどに通ずる覗き見文化の発露だ。

——うわあ。すごく大きなボク。

逆に驚きすぎて、きつい感じはしない。

縦5メートル10メートルくらいに引き伸ばされたボクの顔写真が目に入った。

どうやって印刷したんだろうなあ。いつ撮影されたのかわからないんだけど、とてもいい笑顔だ。

あ、よく見ると白い布か何かをいっぱいに広げて、プロジェクターで映しているみたい。

遺影かよつて思わず突っ込んでしまいそう。

いや、ゾンビは死んでる説から言えば、遺影も間違いないのか？

幹部の皆様方は全部で30名くらいだろうか。畳の上に等間隔で正座してたり、あぐらだったり。

幹部のみなさんはわりといいも悪いも普通の人だ。

若い人も多いけど、一番多いのは案外、30代とか40代くらいの中年層。

顔は覚えてないけど、たぶん、へりに乗ってきた人たちが多いのかな。

ボクのプロマイドを握り締めている人、ボクのエア缶詰を口元に充てて法悦にひたる人、ボクが前に配信したアヤシイ踊りと評される踊りを真似する人。

うーん、宗教って。

そんな彼らが一心に見つめるのは、ボクの顔写真——ではなく、それを背景にした荒神神父。

「いよいよ、審判の日が迫っておる」

厳かになにやら言っていた。

「我らが神、夜月緋色様からご寵愛をたまわって数か月。我々の努力が実り、信者の数は2億人に達した。しかしながら、まだまだと言わざるを得ない。緋色様の魅力、カリスマ性からすれば、この十倍は信者を獲得していてもおかしくない。ひとえに——我々の努力不足であらう」

まあ二億人もいれば十分だと思っただけ。

「緋色様は現状を嘆いているに違いない」

いや、嘆いてないどころか、今日始めてファンの数知ったんだけど。

「ゆえに、緋色様はこの地を離れ、随行をお許しにならなかつたのだ」しみじみと語る荒神神父さん。

信者のみなさま方が、悲しみに肩をふるわせてる。

え、なにこれ。

そういう話だったわけ？

単に、自分の立ち位置的に外出自粛続きで、引きこもりだったままには外に出たといって、ただそれだけだったんだけど。

「しかしながら——」。しかしながらである。緋色様は我々の努力をお認めになるだろう。緋色様は我々とともにある。たとえば肉体的に離

れていても霊的な作用によって、連帯しているのだ。しからば、我々が誠実であるならば、必ずや随行をお認めになるに違いない！」

いたたまれなくなつて、ボクは障子を開け放つ。

その瞬間、みんなの視線がボクに向いた。

荒神神父が驚きに目を見開く。

「ひ、緋色さま。おおっ！ 緋色様あー！」

「緋色様」「ヒロちゃん様……ここに来てくださるなんて」「なんと麗しい」「おてて」「ここにもおてて民が？」「生ヒロちゃん」「ああ、衆生をお助けくださる天使さまあー」

一斉にこつち向いて、土下座してくるものだから、なんといいかいたたまれない。

拝まれて、涙まで流されると、どう反応してよいものか、非常に困る。

隣にいた乙葉ちゃんが一步、中に踏み入れた。

「お父さん。ヒロちゃんがきましたヨ」

「う、うむ。皆よ。わたしの説法の一兆倍は緋色様のお言葉を聞くほうが大事だろう。ささつ。緋色様こちらにいらしてください」

端っこを通つて、奥まったところにいる荒神神父さんに近づく。

みんなの視線はボクをガン見してて、わずかばかり居心地が悪い。

「ようこそお越しくださいました。どうぞお座りください」

なんか豪勢な座布団が用意されたんで、ボクはそこに女の子座りする。

荒神神父と乙葉ちゃんも座つた。ボクを見下ろすのはダメらしい。

みんながじつとボクを見ている。話にくいけど、しょうがないな。

「あの、乙葉ちゃんに頼まれたんだけど……」

「乙葉にですか？」

「みんながヒロちゃんについていくつて話デース」

乙葉ちゃんが横から説明した。

「おお。そうか。ついに我々の努力が認められたのだな」

「違うんです。荒神神父さんもファンのみんなも福岡にはついてこないでねって話をするために来ました。みんなの努力が足りないとか

そういうことじゃなくて、なんというかプライベートな旅行なんです」

「プライベートな旅行ですか。それはぜひとも、我々も随伴したく……」

「うーん。ダメ」

「ダメですか……」

意気消沈しちやう荒神神父さん。

ちよつとだけ良心というか罪悪感がうずくけど、ファンといっしょに旅行するアイドルなんて、ほとんどいないでしょ。そりゃ、ツアーかなんかに無理やりくつついてくるパターンはあるかもしれないけどさ。

「ともかくそういうことだから。みんなもよろしくお願いします」

ボクの言葉に、みんなは平服している。

どうやら、ボクの福岡遠征については、納得してもらえたみたい。

ここは一気に畳みかけるべきかな。

「それともうひとついいですか」とボクは言った。

「なんなりと」

「あのね。乙葉ちゃんのことなんだけど、いまファンクラブの会長さんなんだよね」

「さようでございますが」

「乙葉会長の言うことなんだけど、みんなどれくらい聞いているのになって」

「どれくらいとおっしゃいますと?」

「例えば乙葉ちゃんと神父さんがまったく違うことを言ったときに、みんなどっちに従うのかな」

立ち位置的にはナンバーツーなはずの荒神神父さん。

しかして、元からの幹部さんたちを動かせるのも荒神神父さん。

これだと、乙葉ちゃんは単なる傀儡だ。

もっとバランスをとらないと、乙葉ちゃんが心労で倒れる。

「もちろん、乙葉のほうでございますよ」

「お父さん。それは違いマース。所詮、わたしはついこの間、会長に

なつたばかりデース」

「しかし、緋色様のご推薦でなられたのだぞ。私はあくまで副会長。副ということはナンバーツーということだ」

そのナンバーツーがナンバーワンと心を等しくしてないから困るんだけど。

「でも実際に説法しているのはお父さんデース」

「では、私は説法もせず、緋色様のすばらしさを広めもせず、黙っているというのか」

「いや、べつにそこまでは言っていないよ」とボクは論調を緩める。

「さようございませうか」

明らかに荒神神父さんはほっとしているようだった。

さりげにアイデンティティクライシスだったりして。

べつに何を信じようと勝手だし、誰かが何かを好きになるのを止める気もない。

誰かがボクを好きだろうが嫌いだろうが、それはその人の勝手だし、その人の内心をいじって洗脳するなんてことはしたくない。

それは荒神神父さんであっても、同じだ。

もし——荒神神父さんに黙ってるといったところで、それはそれで好き勝手に解釈して、ボクの気持ちとかは置き去りにされたところで、勝手に話が進んでいくだけだし。

どうせなら、知り合いのほうが話はまだ通るかもしれない。

「まあともかく、乙葉ちゃんが会長なんだから、ファンクラブのトップなんですよ。もうちよつと耳を傾けてよ」

「しかしながら申し上げますと——」

「どうぞ」

「乙葉はまだ15歳の子供です。人生経験も少なく、そのため私との“解釈違い”によって、意見がたびたび分かれます。それはすなわち私を説得できるだけのパワーがないのです」

「もっと娘さんの言葉を最大限善意解釈して」

「しておるつもりですが……」

「もつとー」

「かしこまりました」

んー。あきらかに困惑というか、わかってないというか。そもそも、言葉を受信する側の問題なのか発信する側の問題なのかって話だしな。

荒神神父さんにとってみれば、乙葉ちゃんは血がながっているようがいまいが娘なのは変わらないはずだし、娘の言葉は庇護している者の言葉。やっぱりどこかで軽く見てしまいうんだろう。

乙葉ちゃんと視線をあわせる。

乙葉ちゃんは首を振り、ため息をついた。

これじゃ、やっぱり元の木阿弥。

あんまりやりたくなかったけど、やるしかないか。

——権威づけ。

「あー、皆さんに発表があります」

ハザードレベル141

「あー、皆さんに発表があります」

ボクの突然の言葉に、みんなは聞き入っていた。

——発表。

と言われても、ピンとこなかったのもあると思う。

ボクはいまのいままで、コアなファンに対して、直接言葉を投げかけたことはないから。話としては全部、荒神神父さんや乙葉ちゃんを通じてのみおこなってきたからだ。

どうしてそうなってしまったのかというと、海よりも深く空よりも青い理由があるのだけれども、要するにボクが陰キャだったからです。

人と話すのは基本的に苦手だし、ボクを神様扱いする人たちと話すのも正直なところつらみ成分ありありという、ただそれだけの話。けれど、そうやって放置プレイをしてきた歪みのようなものがいろんなところで噴出していると思われるわけで……。

乙葉ちゃんの不安そうな顔を見ると、ボクも気合を入れなくてはと思います。

「えーつと、乙葉ちゃんの立ち位置なんだけど……」

「はい」と荒神神父さん。

「いまはみんなの会長というか教祖様の立ち位置にいるよね？」

「ええ、そのとおりですが」

「ボクはこれを追認します」

「追認ですか？」

「そうです。追認です。つまり、乙葉ちゃんが正式な会長さんだということを、ボクはこの場で正式正統なものとして認めます」

「おお、つまりそれは………、今までと何が異なるのでしょうか？」

ん？

荒神神父さんが困ったような顔になっている。

ボク、なにか変なこと言いました？

「わたし、ヒロちゃんから正式に認められてることになってたはずで

すが、違うのデスカ？」

し、しまった！

そうでした。あんまり興味ないから放っておいたけど、ボクは乙葉ちゃんが会長をやることを認めていたわ。

やべっ。乙葉ちゃんがすでに泣きそうになってやがる。

「ち、違うよ。そういう意味ではなくてですネ……。なんといえはいか。今までは、そう仮免許。試験期間みたいな感じだったわけです」

「試験期間？」と、乙葉ちゃんが訝しげに聞いた。

「そうテストをしていたのです」

「わたし、ヒロちゃんに信頼されてなかったのデスカ」

「ち、違うよ。そうじゃなくてね。ヒロゾンビっていうのは車の運転免許みたいなものなんだ。人間よりもパワーがあるし、不思議な力が使えたりもするよね。だから、乙葉ちゃんを信頼するとかしないとかじゃなくて、一定の技量を持っているかどうかを見極める期間が必要だったのです！」

「なるほど……そうだったのデスね」

「そうだったのです！」

ふう。とりあえず乙葉ちゃんの涙が決壊することは防げたようだ。

「ともかくそういうわけで、今から乙葉ちゃんは正式なボクのファンクラブの会長さんだよ。乙葉ちゃんの言葉はボクの言葉だと思ってください」

そう、これがボクの言いたかったこと。

乙葉ちゃんの権威づけだ。

いわゆる乙葉ちゃんはボクのこころを知っているというやつだ。

「緋色様。衆生にはわかりやすい”証”が必要です。なにかしら乙葉に賜れればと思います」

荒神神父さんがかしまりながら言った。

本来なら、自分の発言力や権威が落ちる”証”は、荒神神父さんにとっては首輪のようなものだ。乙葉ちゃんが絶対的なナンバーワンとして君臨すれば、当然ナンバーツの存在感はかすんでいく。ボク

が望んだことではあるけれど、あえて、そういった発言をするのはなぜだろう。

ボクの好感度は確かに上がったけれど……。

娘に対する無償の愛情なのかな。

そうだったらいいな、なんて思ってしまう。

それにしても”証”ね。

なんらかのカタチが必要なのは人間としては当然かなと思う。

節目とか儀式とか式典を求めるのはヒトの常だからね。

で——、なぜかちょうどボクのポケットの中にはあるんだよねこれが。

コンビニのお兄さんにつきかえされてしまったシルバーだかプラチナだかの指輪だ。

余計な装飾とか宝石とかはついておらず、下手したら百均とかで売ってるなんちゃって装飾品と同じに見える。でもこれって、たぶんそれなりに価値はあるんだろうな……。

「乙葉ちゃん」

「はい」

「ちようど、ここにそれっぽいのがあるんだけど」

ボクは指輪をとりだした。

瞬間、乙葉ちゃんの目つきが変わった。

「指輪ですか？」

「うん。いま持ってるのはこれぐらいしかないけど、いいかな」

「むしろそれがいいデス！　くださいー！」

うわ。すごい食いつき。

アイドルに対する表現としてはどうかと思うけど、エサに食いつくワンちゃんみたいだ。

やっぱり女の子だから、シンプルだろうがなんだろうが、装飾品に惹かれるのかもしれないな。

正直ボクとしてはちっとも興味がわかなかったから、きらきらした王冠とか、メチャクチャ高価そうなネックレスを見ても『ふーん綺麗だね』くらいの感想だったけど。

女の子ってやっぱりそういうの好きなんだなあ。

もちろんもらったプレゼントを誰かに贈るというのも、ちよつとどうかなと思ったりもするけど、ドラえもんの寝床で腐らせとくよりはいいだろうという判断です。

「じゃあ、これを”証”にするね」

信者のみなさんはなんかざわついていた。

「これって……教祖様」「ヒロちゃんの……」「えっと、教祖様がやっぱリネコなんですかね」「王権神授説！」「いまわれわれはあの空母よりも歴史的瞬間にたちあつてるのではないか」

歴史的瞬間ってなんだろう。

まあ、信者の人たちにしてみれば、自分の信仰が認められたようなものだろうから、うれしいのかな。

「ハアハア……ヒロちゃん。はやくクダサーイ」

乙葉ちゃんは鼻息荒く、辛抱たまらんという感じでした。

そして、すつと差し出される左手。

えっと——これって。

じつと見つめるフアンのみんな。

傍らには神父さん。なんだかおもむろに頷いている。

優しい気な父親のまなざしになつてるんですけど。

そして、ボクを熱い視線で見つめる乙葉ちゃん。

えーっと。

と、とりあえず中指あたりでどうかな。

ボクは右手で乙葉ちゃんの綺麗な指先に触れ、高度な政治的判断を持つて中指という妥協点に差し入れようと試みた。

が、ダメ！

ものすごい斥力が中指の関節あたりから生まれていて、差しこめようとすると力に対して反抗している。磁力の反作用のようなすさまじい力だ。なにかものすごい執念を感じる。

「あ、あの。乙葉ちゃん？」

ボクは乙葉ちゃんの顔を確認してみた。

鬼のような形相だったのは一瞬、すぐに仏の顔になる。

にっこり笑えばやはりアイドル。すさまじくかわいらしい。

「だめみたいデース。サイズがちよつと指にあわないデスね」

「じゃあ、人差し指で」

同じように差し入れようした。

これにも反発。

「無理デース」

「小指なら入るよね？」

「今度はガバガバで落してしまいそうデース」

試しにやってみたら、今度は指輪が反発力でぶつとんでいった。

いや、落とすとかそういうんじゃないよね……。

部屋の反対側までぶつとんだところで、念動力によって補足。

手元に引き寄せる。

「……」

「……」

独特の間。

緊張とも弛緩ともつかない奇妙な空間が生じた。

一歩も引かない決意の瞳。

「わかったよ……」

いろんな言葉や言い訳がうずまいたけど、それを言ってみたところで意味はないだろう。

観念して、薬指に近づけたら、今度はブラックホールみたいな勢いで吸いこまれた。

ぴたりと吸いつくように指輪ははまり、まるで呪いの装備のようにガツチリ固定されている。

「うむ。これでふたりは永遠の絆で結ばれたわけですな」

神父さんがにこやかに言い、乙葉ちゃんは顔を赤らめる。

「ゆ、友情だよね」

「友愛デース」

指輪にキスする乙葉ちゃん。

年齢に似合わない魔性な視線で、うつとりと指輪を眺めすがめつしている。

みんなのざわつきがひどくなった。

「教祖様が花嫁になられた」「緋色の花嫁」「ああ素晴らしい。信仰心があふれる!」「天使様あ。尊い。尊すぎますっ!」「美少女の友愛はふつくしい」「我々もこれで救われる……」

「えっと」証です。会長の証! 他意はありません!」

ボクは絶叫に近い勢いでみんなに言い聞かせる。

でも——、ダメでした。

「我々の教義にも新たな1ページが必要なのでは?」「新約聖書……」「百合の章を作ろう」「おお素晴らしい」「教祖様があんなにうれしそうに笑ってらっしゃる」「お幸せに教祖様」

宗教って本当に恐ろしい。

ボクは心の底からそう思ったのでした。

しかし、ボクがそのあとに感じた恐怖に比べれば……。

いや、これ以上はやめておこう。

深淵を覗きこむ者はまた、深淵にのぞきこまれるうんぬん。

☆Ⅱ

それは本当の恐怖でした。

出来の良いホラー映画は、実は昼の明るさをコントラストとして利用する。

夜が悪いわけではない。夜の暗がりには人であれば確かに怖いし、ある意味安パイといえる。

しかし、そういつたところで幽霊や異形を見たところで、昏さに怖がっているのか、見てはいけないものに怖がっているのかわからない。安パイゆえに面白みがない。

一流のホラー映画を見ると、わかる。

見てはいけないものはお昼に出現したりすることも多い。

お昼は人間的な時間。そして日常的な空間。

そこに突如あらわれる異形。

それが痛烈に——徹底的なまでに——ボクたちの恐怖を惹起する

んだ。

——閑話休題。

ボクが乙葉ちゃんたちのところから抜け出して、町長にも説明を終えて、探索班のみんなにも軽く話終えたところで、アパートに帰ってきたのは、ちょうど太陽が天頂近くにかかるお昼の二時ごろだった。春とはいえ、日が長くなってきたこの時分。

峻烈なまでの陽光がゾンビ荘の壁面にあたっている。

ボクのお部屋に通じるドアにもちようど光線がさしこんでいた。

「ただいまー」

違和。

なぜか、お部屋の中がとても昏く感じた。

いやそれは変なことじゃない。なぜならボクの部屋つてわりとカーテンを閉め切ってることも多くて、部屋の中に足を一步でも踏み入れれば、夜目が効くとはいえ、暗順応自体を感じないわけではないからだ。

けれど、なぜか心臓がドクドクと急ぎ足になっている。

これ以上進んではいけないというプレッシャーを感じる。

けれど、このまま突っ立っていてもしょうがない。

部屋の中に足を進めた。

それで——ボクは本能的に身を凍らせた。

命ちゃんがいた。

命ちゃんがボクの部屋にいるのは普通だ。でも普通ってなんだ。

なぜかボクが恐ろしさを感じている理由は、見てはいけないものを見ている感覚なのは——。

姿勢。

姿勢か。

命ちゃんは正座していた。

命ちゃんは、不自然なほど気配を殺して、居間にあたる場所で正座をして待っていた。

座布団も何も敷いてない床の上での正座。

リラックスのりの字もない完全な戦闘態勢。

鞘から抜き放たれた日本刀みたいなカタチ。

もし本当の刀でも持っていたら、居合抜きでもしそうな冷徹なオーラを身にまとっていた。

「おかえりなさい。緋色先輩」

「ひ、ひえ。み、命ちゃん。どうしてボクの部屋にいるの」

「わたしがいてはダメなんですか？」

「そんなことないけど、ただいまって言ったのに無言だったからさ」

「わたしが無言でいちゃダメなんですか」

「ダメじゃないけど……」

「ところで、どうしてそんなところでつたつたってるんですか」

「う、うん。いま座ろうかかって思ってたよ」

ボクはソファの上に、座る。

命ちゃんが床の上に座ってる関係上、ボクのほうが視線が高い。

突き上げるような視線に、背中に汗がすべりおちる。

「あの……み、命ちゃん。なんか怒ってる？」

「なにかですか？ 先輩はなにか怒られることをしたと思ってるんですか？」

「い、いやべつに」

「では、怒られないことをしたと思ってるわけですね」

「あ、あの、もしかして乙葉ちゃんとぶよつてたことかな？」

絶対零度の視線。

ゴミを睥睨するような無慈悲な視線だ。

「それぐらいならべつにいいですよ。今となっては」

今を強調する命ちゃん。

さすがにボクも気づいた。気づいてしまった。

命ちゃんが手に持っていたスマホをボクに差し出す。

「動画のアーカイブ……」

そこには先ほどの乙葉ちゃんとのやりとりがバッチリ放送されていた。

投稿時間を見ると、誰かがリアルタイムで配信していたようだ。気

づかなかったけど、歴史的瞬間とか言ってるくらいだ、撮影してても不思議じゃない。

ボクが撮影対象になることは、ずいぶん前から包括的に許可してしまってるし——信者さんたちに罪はないだろう。

むしろ、罪があるのはボク!?

『てえてえ』『ヒロちゃんの花嫁?』『後輩ちゃんガチギレ案件じゃね?』『一時間後、そこには後輩ちゃんに必死に謝ってるヒロちゃんか?』『言い訳できないよな』『もういつそ逆ハーレムというかハーレムというか、よくわからんが両方ゲットすればいいじゃん』『百合△』

流れるコメントが、ボクの今の状況を言い表していた。

「ご説明していただけますでしょうか」

「あのね。これは乙葉ちゃんの権威づけであって、べつに他意はないんだよ」

「わたしに対しては待つてと言っておきながら、他の女にはホイホイ指輪を渡しちゃうんですね」

「だからそういう意味じゃないって!」

「ならどんな意味なんですか?」

「ただの——証」だよ」

「自分の所有物だっという証ですか?」

「違うよ。友情の証だよ。乙葉ちゃんにはボクのファンクラブから脱宗教化してもらってるし、感謝の気持ちをあらわしただけ。さっき言ったみたいにファンのみんなが乙葉ちゃんの言うことをより聞いてもらえるように権威づけしただけなんだよ」

「先輩は自分勝手です」

「乙葉ちゃんを利用したという意味ではそうかもしれないね。でも乙葉ちゃんも求めたから」

「そうじゃなくて、わたしに対して先輩は扱いが雑だと思えます」

目をあわせると、命ちゃんはぽろぽろと泣いていた。

研ぎ澄まされた刃と想っていた。

けれど、本当は張り詰めた弓の弦だったんだ。

罪悪感に押しつぶされそう。

ボクだって、あれがそういう意味を持つことぐらいはわかっていた。

自分の中では、そんな意図はなかったとしても、命ちゃんを傷つける可能性は考えないわけではなかった。

つまり、ボクが悪い。

「命ちゃん泣かないで」

「先輩が泣かせたくせに」

「ごめん。ボクが悪かったから。えっと。えと」

押し入れの中から、段ボールに詰めこんだ宝石類をあさる。

ネックレス。どうでもいい。

儀仗も洗濯もの干しにしか使つてない。

ちくしよう。指輪の類がないぞ。みんな小物な指輪はあまり贈つてこなかったから、もしかしたらアレだけだったかもしれない。

やむなくボクが一番それっぽい王冠を、そつと命ちゃんの頭に乗せた。

「ご、ごめんこれしかなくて……」

「先輩の馬鹿。甲斐性なし。ただの美少女くくく！」

ぎゃん泣きだった。

いつもはクールな命ちゃんの幼女のような全力の泣きっぷり。

ボクはもうおろおろすることしかできない。

どうやらボクは命ちゃんのお兄ちゃん失格のようです。

いや、それ以前に男として失格なのでは？

薄暗い部屋の中で、女の子が泣いている。

ボクの後輩で、幼馴染で、大事な女の子が泣いている。

控え目に言つて最低な気分。

最大級に言つて死んだほうがいいレベル。

これじゃあ雄大にも叱られちゃうな……。

あわせる顔がない。

「ボクにとって命ちゃんは大事な子だよ」

「先輩は、アイドルのほうがいいんでしょう」

「そんなことないよ。乙葉ちゃんはあくまでアイドルの関係で一番仲

が良いってだけで、命ちゃんはボクの幼馴染でしょ。比べられないよ」

「でも、アイドルには、証をあげて……わたしにはこんなハリボテみたいな王冠です」

王冠をガシつとつかみ、そこらに投げ捨てる命ちゃん。

光のない部屋では王冠もネックレスも、まったく輝きがない。

命ちゃんの顔も曇っている。

証——か。

困ったときのなんとやらだけど、結局ボクはなにげなく得たチートに頼るしか能がない。

自分のことは自分が一番よく知ってる。

ただの平凡以下の意気地なしなんだよな。

でも、ボクは。

それでもボクは。

チートだろうがなんだろうが、持ちえた全力で命ちゃんを守るって決めてるんだ。

ずーっと、ずーっと前から。それほど昔でもない昔から。

「命ちゃん。証明するよ」

緋色の翼を出現させ、プラチナブロンドの髪の毛を一本引き抜いた。

念動力操作。リング状に。物質変換。精製。原始固定。

既存の原子番号を百番ほど飛び越えて、超重元素どうしを無理やり結合させる。

つまりこれは、ファンタジーでよくある、

「錬金」

というやつだ。

髪の毛を媒体にしたのは、なんとなくそうしたほうが錬金成功率が高まると思ったから。

実際にうまくいったらしい。

ボクの言語にしたがって、手元には暗闇の中でも薄く黄金色に光る謎の金属体があった。

たぶん地球上には今まで存在しなかった物質。

いや、もしかすると伝説上では存在したかもしれない金属。

ボク由来のものだから当然――。

ヒシイロカネ日緋色金あたりが妥当な名称だろう。

なにやら揺らめいているような存在感があるんだけど、正直なところ、どんな効用があるかわからない。もしかしたら刃物を作ったら、めっちゃ切れ味がよくなるかもしれないけど試すわけにもいかないしね。

「先輩これは……？」

当惑が半分ほど混ざったような声だった。

既存のものとはまったく違う金属のカタマリに、吸いつけられるように視線を向けている。

命ちゃんも女の子――。

とはいえ、本来ならあまり興味を向けない子のはずだ。

だからこれはボクが創ったというところに興味をひかれていると思いたい。

「ボクの気持ちなんだけど受け取ってもらえるかな」

「はいっ」

雲間からお日様が顔を出すような笑顔だった。

恥ずかしいことに、命ちゃんが泣き止んでボクはほつとしてました。

モノで釣るみたいで申し訳ない気持ちを抱きながら、ボクは命ちゃんの手をとる。

「あの、先輩……。モノで釣るみたいで申しわけないか思ってますよね」

「なんでわかるの？」

「先輩らしい考えだからです。でも、それってわたしがモノで釣られる女ってことですよね」

「そ、そんなことないよ」

「いいんですよ。わたしはモノで釣られる女でいいです。だからください」

「うん……」

恐る恐るといった感じに、ボクは指輪を命ちゃんに装着させました。

どこの指にかは——まあ空気を読んだとだけ。

☆Ⅱ

その後の命ちゃんは、一転してウキウキ顔でした。

クールないつもの表情はどこへやら、スキップでもして、お花さんに語り掛けそうなくらい。

「なんだか先輩に守られてる感じがします。先輩の髪の毛から作られてるからでしょうか」

祈るように手と手を重ねる命ちゃん。

なんだか聖女のような動作だ。

でもなんだかその言い方だと、ボクが自分の髪の毛をストーカーみたく命ちゃんに巻き付けた感じがして、そこはかとなく変態臭がする。

原子レベルで変換してるからボク由来の成分だけど、まったく違う物質のはずだ。

指輪にキスの嵐をふらせて、ちらちらしてくる命ちゃん。

幸せの絶頂にいるようで、その笑顔を見るのは悪くない気分だったけど。

「命ちゃん。はつきり言っておくけど——」

「わかってます。これもまだ”答え”ではないのですよね」

「……ごめんね」

結局——。

ボクは三人だったあの時から、一步も動いていないのかもしれない。

乙葉ちゃんもピンクちゃんも町のみんなもボクの友達だけ。

振り返れば、ボクたちが三人で遊んでいたあの頃に立ち返ってしまう。

ボクにとっては5億のヒロ友に匹敵するほど大事なふたり。

「だいたいわかりましたよ。先輩がどうして答えてくれないのか。雄兄いに会うまでかたくなに拒む理由。でも先輩がそこから一步も動かないでも、わたしのほうから近づきますから」

命ちゃんは宣言通りボクに近づいてきた。

そして宣戦布告するようにすれ違いざまにキスをして、自分の部屋に帰って行った。

「真珠湾より強烈かも」

と、ボクは意味不明なことを言った。

ハザードレベル142

サロメって知ってるかな？

オスカー・ワイルドって人が書いた戯曲なんだけど。

ボクは当然知っています。なんにせよ『なろう小説』やら『ハーメルン』やらを読んでいる文明人たるボクからしてみれば、多かれ少なかれ文字フェチなところがあると思うから。

楽しさを効率的に摂取するなら、アニメや漫画のほうが刺激的に決まってるのに、あえての文字媒体というのには理由がある。

どんなに凄惨な状況を描写したところで、ゾンビ映画のモグモグゴアシーンの刺激以上にはなりえないし、えちえちなシーンも、単純にえちえちな動画を見たほうが早い。

なのに文字を選ぶのは文字が好きだからだ。

要は低刺激を長時間にわたって摂取することに無上の喜びを覚えるのが文字フェチ。

ボクの趣味がそういうマイナー方向に向いているってことだと思
う。

例えばゲームの知識だったり、ゾンビ映画の知識だったり。

それと、よくわからん人類文化の精箔部分。

ボクの偏りが、そちらに向いていたってだけの話。

ボクがサロメを知っていたのもそういうフェチ的な理由が大きい。

それでサロメっていうのは実に官能的な御話で、サロメちゃんは今
でいうところの悪役令嬢なんだ。具体的に言えば、惚れた男の首を
ゲットして、その生首にキスするぐらいの悪女です。

——ゾンビよりずっとコワイ！

サロメちゃんはお姫様だけど、最期に弾劾されて殺されてしまうと
ころも悪役令嬢そのものだと思います。まあ弾劾つつーよりは単純
にヤンデレ具合が怖すぎて王様に殺されちゃった感あるけどね。い
ろんな人を誘惑しまくってる小悪魔度数の高さも悪女ポイントに貢
献してしまったのかもしれない。

なんでこんな話をしているかっていうと、当然ボクの文化的素養の

高さでイキり倒すのが目的ではない。

単純で端的な事実——。

ボクが手にしているのは生首ゾンビさんだからだ。

ボクと目があつて、彼女はぱちくりしている。それでサロメを思い出した。それだけの理由だ。

ボクがサロメのような悪女つてわけじゃないのであしからず。

生首さんも惚れた男つてわけじゃなくて、たぶん高校生くらいの女の子。日本人だと思うけど、さすがに首だけじゃわからん。

髪の毛は肩口くらいまではありそうなくらい長い。肩ないけどね。

ゾンビだらけの世界だから、生首ゾンビさんもないわけじゃないけど、閑静な高級マンションの一室で、なぜ首だけになつてるのか。

ついでに——冷蔵庫には彼女の身体だったもの。

その身体はなぜかえぐられるようにして内臓がなく損壊している。

ほとんど物的な攻撃ではダメージを受けない身体になつたボクだけれども、その異常性にはさすがに戦慄をしていた。

この異常な情景に、サロメの戯曲のような、あの生首がお皿に乗つたドラマ性を見出したせいもあるかもしれない。

なぜ——こんなことになつたのか、少しばかり回想してみよう。

☆Ⅱ

命ちゃんに指輪を渡したあと。

あれからひと悶着ありました。

乙葉ちゃんと命ちゃんに指輪をプレゼントしたという情報は、それはまあ秒速で広がりまくり、周知の事実となるどころだった。

その日の夜。たった数時間後。

乙葉ちゃんが照れつ照れになりながら、ボクの指輪を見せびらかし配信をすれば、命ちゃんが対抗するように謎の金属でできた指輪を、これ見よがしに配信する。

乙葉ちゃんが『初めて』を主張すれば、命ちゃんは『特別』を主張する。

配信しながらお互いの配信を視聴している。

とはいえ、相手の枠にまで入っていくことはしない。

ゆえに、空中戦。

さりげなさがさりげなさになっていない対抗心むき出しのほぼ同時配信だった。

ボクは二人の仲を取り持ったために、仲裁的な動画配信をした。

必然的に——というべきなのか。

正直、なんといつていいのかわからないけど、ピンクちゃんと恵美ちゃんが『ズルい』と言い出した。そのあとは『ピンクにも／わたしにも』と続いた。

いたいけな顔がたこやきのように膨らんでいく様をボクは見せられ続けることになりました。

ヒロ友のみんなは当然誰も助けてはくれない。むしろ煽りまくる。

おいこら百合ハーレム連呼すんな。

まあ女の子のほうが好きだけどさあ……。

といったあれこれがあり。

で——、まずは同じゾンビ荘に住んでいる恵美ちゃんのリアル襲来だ。

「ヒロちゃん」

ドアを開けるや否や、ボクの腕にからみついてくる恵美ちゃん。

空色の髪の毛がボクのプラチナ髪と混ざり合ったり。

「ひえ。なにかな。ちよつとくつつきすぎだと思っただけ。それにもう夜の十時だよ」

経験上、オナモミのようにくつついてくる小学生女兒は危険だ。

「またまたうれしくせいにい。えへへ」

「うれしくないわけじゃないけどね。それで？」

「わたしもほしいなあ」

恵美ちゃんの小悪魔度がいつのまにかあがってました。

「残念ながら指輪は売り切れなんだけど……、えつとこういうのならあるよ」

数メートルくらいの距離なら、シュツとして手元にワープさせるこ

とができる。

ボクが取り出したのは、いつぞやの王冠だ。ティアラとかそういうんじゃないで、でかくてごつくて黄金色が光るすぐ高そうなんだ。残念ながら命ちゃんには不評だったけど、客観的に見れば、たぶん指輪よりも価値は高そう。ボクの創り出した謎金属の学術的価値は別として。

「うわあすごくきれい。なにそれなにそれなにそれえ」

祈るように指を合わせて、歓喜の声をあげる恵美ちゃん。

この子、もろう気まんまんだよね。

「どこかの国の——王冠かな」

ボクは比較的淡々と事実を告げる。

「じー」

と、いいながらボクを見つめてくる恵美ちゃん。

とてもわかりやすいおねだりの視線。

「これでよかったらあげるけど……。でも、これ一個だけだよ」

「え、くれるの。ありがとうヒロちゃん」

食い気味な答えだった。

間髪入れず、

す、と——、白くていたいけなうなじを見せる恵美ちゃん。

輝くような肌に、空色の髪の毛がさらさらと落ちる。

これくらいなら命ちゃんにも怒られないよね。

恐る恐るボクは王冠を授与しました。

王権神授説というワードがひそかに脳内をかすめたが、まあ大丈夫でしょ。

後日、王冠をかぶった恵美ちゃんが豚さんたちをブヒブヒ言わせる姿が——。

あつたりなかつたりするかもしれないけど、ボクのせいじゃないと思います。

それから数時間後に現れたのはピンクちゃん。

さすがに海の向こうにいるピンクちゃんが来るはずもないと思っていたら甘かった。ボクが明日福岡に旅立つことを知っていたピン

クちゃんは、この機会を逃すとボクが帰ってきたあとになると思い、すかさずゾンビ荘にやってきたんだ。

具体的には、音のないヘリからボクの窓辺に直接降下。

空を浮けるピンクちゃんにとつては造作もないことだけど、若干特殊部隊に強襲される気分を味わいました。

もう真夜中の零時を越えている。

ピンクちゃんはおねむの時間なのに、気合と根性と精神力は眠気さえも凌駕するものだったらしい。

恵美ちゃんが王冠を見せびらかして、豚さんたちに女王様宣言を出していたのが悪かったのかもしれない。

コツコツと窓を叩くピンクちゃんを迎え入れると、ちよっぴりすねたような感じだ。

「ピンクも」

「え？」

「ピンクもほしいぞ」

「あっはい」

ボクはほとんど間を置かずに応えた。

それにしてもピンクちゃんも宝石類とかには興味がなさそうだったけど、幼いながらに女の子なんだなと思います。それが、人類が共通に持つ性質——嫉妬のせいかもしれないけど。

自分だけもらえないっていうのは、八歳児だって悔しいだろうし、むしろ八歳児なのにピンクちゃんはよく我慢しているほうだと思います。

「えっと、ピンクちゃん。なにかほしいのある？」

「ピンクはヒロちゃんしてくれるならなんでもいい」

ちよっぴりすねちゃってるピンクちゃんがいらしい。

一瞬考えたのは、あの一番高そうな黄色いダイヤモンドがはまったネックレスだけど、いくらなんでも幼女なピンクちゃんにあのキラキラした重い宝石は似合わない。恵美ちゃんの王冠もたいがいだけど、あれはあれでかなり似合ってるんだよな。女王様だしな……。

それで、ボクがシュツとして手元に引き寄せたのは、ボクがああ空

母で装備していた髪飾りです。

かんざしのように髪の毛にズブシュとさしこむタイプ。薄紅色の花のような形をしていて、ピンクちゃんの髪の毛と若干迷彩色になっ
てしまうけど……。

「ヒロちゃんがつけていたやつか？」

ピンクちゃんは星がまたたくような瞳をして、身をのりだしてき
た。

頭の大きな幼女体型なので、実際にはもう頭ごとすりすりするよう
なカタチだ。

「ボクのつけていたやつです」

「ピンクもヒロちゃんにつけてほしい」

そう言つて、いつも着ているふんわり帽子を脱ぎ、ピンクブロンド
の髪の毛をさしだしてくる。

うまく装備させることができるか不安だったけど、案外髪の毛の量が多
いピンクちゃん。スツとさしいれば固定できた。

「はい。できたよ」

「ピンクはうれしいー！」

ボクの仮説なんだけど――。

女の子Ⅱサメ説を提唱したい。命ちゃんも乙葉ちゃんもついでに
女の子と言つていいかわからないけどマナさんも、みんなみんなボク
に悪質タツクルをかましてくる。

しかしまあピンクちゃんのスキンシップは単純にかわいいんだよ
な。お兄ちゃん力を試されているというか、もはやこれは父性なので
はと思ってしまうほどに。

☆Ⅱ

ん。いまのは回想としては巻き戻りすぎたな。

後顧の憂いを断つという意味では、良い振り返りだったけど。

あのあと――。

さすがにピンクちゃんの後には誰も来ず、ようやくボクは眠りにつ

くことができた。

そして、旅立ちの時。

ゾンビ荘のみんなに見送られながら、ボクは命ちゃんといっしょにソロリと空に浮かび上がる。

春の陽気があるとはいえ、まだ高度が高いところは若干寒い。

まあこれはシールドを展開すればついに寒くもなんともないけど。空を飛ぶとなると、下から下着が見えちゃうかもしれない。これが本命。

ボクとしてはズボンか、あるいはせめてインナーっていうのか見せパンっていうか、あるいはスパッツみたいなのを履きたかったけど、全部マナさんに却下された。

「幼女たるもの、生足ミニスカートは基本です。わたしが毎日一ミリずつご主人様のスカートを短くしていった努力がわかりますか？」知らねーよ。っていうか、ボクそのうちサザエさんちのわかめちゃんみたいに、常時パンもろのわいせつ女兒になってたの？

という抗議の声がでかかったけど……。

いつもマナさんにお洋服を用意してもらってる身としては、このときだけ逆らうのも気が引けた。

それで、結局は用意されたスカートで出発するボクでした。

かわいい恰好をするのに抵抗感はないからね。

のっけから、ボクかわいいヤッターしてたのを思い出してください。

「じゃあ、いってきまーす」

最終目的地は門司港って決まってるけど、それ以外は案外自由な旅路だ。

なんとなく、博多のほうに向かって、あわよくばラーメンおじさんをゲットしたいとか考えてるけど、我が町とは異なり、他県の情勢はわからない。

ボクが住んでる町からちょうど真北が福岡県福岡市。

電車とかを使うなら、いったん東の鳥栖方面に向かって、それから北上するというルートになるだろうけど、空を飛べるボクらには関係

がない。

ていうか――。

「山だねえ……」

「山ですね」

上空から眺める風景は代わり映えのしない緑一色って感じで、たいして面白みもない感じだった。

「下って、山道あるのかな」

「細い道ならもう少し北上すればあるかもしれませぬね」

しばらく進んでいくと、ダムがあつた。

四方を山に囲まれた、静かで神聖な場所って感じで、かすかに霧がかっている。

「先輩。福岡に到着しましたよ」

「え、もう？ ていうか速すぎない？」

旅の風情がまったく感じられないんだけど。

「あのダムは確か福岡県だったはずですよ」

「そっかあ……。なんか新幹線よりはやくない？ まだ15分くらいしか経ってないよ」

「わたしたちのスピードは時速でいったら40キロくらいは出てますからね。つまり10キロ程度しか離れていないというわけです」

「んー。なるほど」

瞬間的に暗算できる命ちゃんすごいなくらいしか思い浮かばない。

でも、案外佐賀と福岡って近いところにあるんだな。

「障害物を飛び越えているからそのように感じるだけですよ」

「んう。そうか」

「もう少し高度を落としてみますか？」

「そうしようかなー」

山道らしきものを見つけ、ゆるゆると高度を落としていく。

アスファルトの道路に着地すると、ザ・山道という感じだ。両側にはガードレールがあつて、杉の木かなんかがずらりと立ち並び、森の奥は暗くてよく見えない。

当然のことながら、人の気配はなかった。

それどころか車の気配もない。

「ゾンビから逃れるために車で来てたりするパターンもあるかなって思ったけど」

「山道に入るところがふさがってるのかもしれないね」

「ボクの町みたいにコミュニティを作ってる人たちがいるかな」

「いるかもしれませんね」

「もしかしてボクたちのような存在がいることに気づいてなかったりして」

「そういうこともあるかもしれないね。情報には非等方性——偏りがあるものですから」

「ボクたち襲われちゃうかな」

一般人程度では傷すらつけられないとは思うけど。

「可能性はありますね。ただこのあたりではそういう可能性も低いと思います」

「どうして?」

「人間が生存するエリアでは、ゾンビを避けるための障壁を作っているところが多いですからね」

確かにこのあたりにはそういった人工の壁にあたるものがない。

まだ未開拓エリアということなんだろう。

「都市部から解放していつてるってこと?」

「そうなるでしょうね。だいたい都市があるのは平野部です。たくさんの人間が住むのに適しているのはどうしても平らな地面なんですよ」

ふうむ。

さっつきから気になってたけど、命ちゃんがなんか楽しそうだ。

「先輩とふたりつきりですし」

「えー、ちよくちよくお部屋でふたりつきりだったけど」

「しよっちゆう、他の人が来るじゃないですか」

「まあそうだけど」

「いまはふたりつきりですよ」

「そうだね」

「これはもう結婚ですよね」

「結論が一足飛びすぎる！」

「……デートだという認識はしててもいいですか」

「否定はしないけど」

「わたしは昔みたい在先輩を独占できてうれしいです」

「雄大もいたでしょ」

「そうですね。雄兄いはわたしの中では家族なんです。先輩が家族より外側に置いてるってことじゃないですよ。雄兄いは恋愛対象にはならないって意味で——、なんていうか、いつしよに住んでもおかしくないというか」

「ボクが命ちゃんに答えを返しても、雄大を避けるわけじゃないって言いたいのか？」

「そうです」

それは命ちゃんなりの妥協なのかもしれない。

ボクが命ちゃんを選んだとしても、雄大がいてもいいというか、三人の関係を続けていくことに反対はしないという表明だ。

けど、それは雄大の気持ちを考えてない気がするんだよな。

いうまでもないけど、命ちゃんは自分の目的のためならなんでも犠牲にできるタイプだ。

何かを選ぶことは何かを選ばないこと。

リバーシブルに、裏と表がはつきりしていて、両取りなんて考えない。

ボクを手に入れるために、ボクにとって都合のいい女にだってなるという思想は、正直ちよつとどうかなって思う。

それだけボクに甘いつてことでもあるし、想われてるなって思わないではないんだけどね。

「いま先輩、わたしのこと重い女だと思いました？」

「ひ、ひえっ。そんなことないよ」

命ちゃんのテレパス能力が極まってきた感じがすごい。

あいもかわらず山道を歩き続けるのはさすがに飽きたので、再び浮上。

それから三十分もしないうちに、ようやく都会っぽい雰囲気が出てきた。

「このあたりには人住んでるかな」

「人の支配領域という意味なら微妙でしょうね。このあたりも”壁”がありません」

「ヒロゾンビによってゾンビさんたちをどっかに集めてるパターンは？」

「その可能性もありますが、政府主導の受け渡しは主要都市ほど速やかに行われたはずですよ。ここは福岡県内でいえば、いまだ郊外ですからゾンビの完全除去まで行われてはいないと思われれます」

命ちゃんの言葉どおり、すぐに道すがらゆらゆらと歩いているゾンビさんの姿を見かけた。

あてどなくさまよってる姿がまばらにいる。

アスファルトの道は、車が乱雑に止まってあり、動いている状態ならウルトラ大渋滞という感じ。もちろん、人の姿は見えず、動いている車もない。

ゾンビのうなり声だけが遠く響いていて町そのものが廃墟のようだ。

「ヒロゾンビが増えて、ゾンビは相対的に少なくなると思ったけど」
「少なくなってると思いますよ。というか——”壁”で囲うということとは、当然のことながら内側から外側にゾンビを追い出すことになるわけですから、外側のゾンビは増えるわけです。ここはまだ内側ではないということなんでしょう」

「日本からゾンビがいなくなる日はまだ遠いのかな」

「壁でのセーフティエリアの確保から、積極的にゾンビをどこかで閉じ込めておくスタイルに切り替われば、野良ゾンビはすぐにいなくなりますよ」

食料の問題があつて、ノーマルゾンビから人間に治す数は少ない。

ただ、そうやって封じ込めが完了すれば、あとは物流を復活させて、緩やかに調整しながら人間に戻していけばいい。

ゾンビによる人類絶滅の危機は回避されたといえる。

「あとは時間の問題か」

「そうですね。あと数か月もすればほとんど元に戻るんじゃないですか。山とかに入って偶発的に野良ゾンビに襲われるぐらいのレベルになるでしょう。熊といっしょですよ」

「ゾンビが熊さんといっしょのレベルか」

ある日森の中、ゾンビさんに出会った。そういう世界になるわけね。

全員がヒイロゾンビにならない限りは、人間は死ねばゾンビになっちゃうわけだし、野良ゾンビはどうしてもでてくるだろう。

人間が全員ヒイロウイルスに感染するかはわからない。

ボクの印象だと、今のところわりと抑制的かなとも思うし、ボクのヒイロゾンビソナーだと、まだまだ数万人レベルだ。

もちろん、感染という性質を持つヒイロウイルスは爆発的に数を増やす可能性は存在するけれど。

いまはまだ人間のほうが優勢だ。

「ところで命ちゃん」

「はい、なんででしょうか」

「人間の支配領域に行くんだったら、当然、その長にご挨拶しないといけないよね」

「そうですね。したほうがいいでしょうね」

「市長さんなり町長さんなりに挨拶して、適当な泊まる場所を確保するって流れになるよね」

「そうなるでしょうね」

「じゃあ。今日は——、ひとまず人間の支配領域には踏み込まないで、自分たちだけで好き勝手に泊まる場所探さない？」

「先輩。それって結婚しようって意味ですか」

「違います！」

ただ、命ちゃんと雄大の三人でキャンプ地について、お泊りしたこ

とを思い出しただけ。

監督役の大人もいたけど、ロτζジにはボクたち子どもだけだった。そんな昔が懐かしくて、もう一度同じことをしたかっただけだ。

「先輩がなんだかかわいい気がします」

「命ちゃんに言われると、なんだかむずがゆいな」

どうせならいい場所に寝床をしたいということになって周辺を探ったところ、佐賀にはありえへん高層マンションを見つけた。

前にも言ったとおり、佐賀イズナツト高層住宅だ。

土地が柔らかくて高い建物を建てられない。

福岡はいいよね。高い建物たてられてさあ。

空を飛べるから、結構慣れてきた高高度な風景だけど、やはり高層住宅に住めるというステータスになにかしら憧れのようなものを感じる。

だから、寝泊りするなら上層階一択。

マンションの屋上から、中に入る。鍵がかかっていたけどゾンビパワーでこじ開けた。

ただ、さすがに中に住んでいたゾンビさんを追い出すのはやめといったほうがいいだろう。

上層階に行くほど部屋の大きくなって最上階はたった四部屋しかないみたいだ。

「誰かいるかな」

「中に誰もいませんよ？」

命ちゃんがなんでもないように言った。

ゾンビソナーを働かせてみる限り、四部屋ともゾンビの気配はなさげだ。

とりあえず各部屋のドアノブをまわしてみると、四部屋中三部屋は閉まっていた。

唯一鍵のかかかっていない部屋。

べつにどこだろうといいんだらうけど——、ここは放棄しているのかなって感覚が強かった。つまり、なんとなく不法侵入じゃないよって自分の中で言い訳するみたいに、ボクは開いている部屋へ足を進め

た。

靴を脱ぎ中に入る。廊下は暗かった。電気がきてないから高層階はいろいろ辛い。特にトイレとか水をくみ上げることができないから、必然的に——どこかにためるか、落とすかすることになる。

籠城するなら電気が必須だね。

ただこの部屋は——そこまで臭くなかった。最初から放棄されていたのかもしれない。

ゾンビハザードが始まって、最初から引きこもることを択ばず、避難場所へ向かうルートも存在する。ここに住んでいた人たちも、そんなのかもしれない。

そう思っていたのは、命ちゃんが首を傾げ、疑問を口にした時までだった。

「先輩。なんかゾンビの気配がするようないような変な感じですよ」

「んー」

確かに微弱ながらゾンビの気配を感じる。

その微弱ながらってというのが、けっこう珍しくて、ボクたちはゾンビを完全に捉えきれなかったらしい。

ゾンビソナーによって、感覚的にゾンビのいる方向に近づいていくと、異世界にでも旅立ってそうな壁と一体型のクローゼットがあった。恐る恐る中を覗いてみると——、黒い布のようなもので覆われているボウリングの玉と同じぐらいの大きさの物体があった。

丁寧な包みを取り払ってみると、いました生首ゾンビさん。

おめめぱちくり。

目と目が合う瞬間。

かくして、ボクは戯曲サロメを想起したのです。

ハザードレベル143

「えっと、生首ゾンビ？」

ボクが旅先で出会ったのは、生首だけになった女の子ゾンビだった。

さつきから「あーうー」と声にならぬ声をあげているが、首だけの状態なんで弱々しい感じ。

わりと髪の毛が長くて、首より下まで伸びている。髪の毛の色も日本人然とした黒色。ぼんやりとした白濁した眼は人間のものとは違い、思考そのものが感じられない。陶器のような色白い肌はゾンビ化のせいかもしれない、要するに普通のどこにでもいるゾンビさんだった。

しかし、謎であるのはそういった生首状態の彼女がクローゼットの奥に大事にしまわれていたことだろう。それは明らかに人為的な操作。

「これってどういうことかな」

部屋の中は電気が来てないせいか、いまいち薄暗い状態だったけれども、マンションの高層階の窓から入りこむ光は、それなりに明るい。

ボクは彼女を抱えこむと、命ちゃんに問いかけた。

「そうですね。わかりやすいのは誰かに殺されたとかでしょうか」

「それはボクも思った」

首。

それは言うまでもないけれども、人間の急所だ。

首なしで活動するといえ、デユラハンとかいうモンスターがいるけれども、人間はそういうわけにはいかないからね。急所を切断する。それはおそらくきつとほとんどの場合は他殺であり、誰かに殺されたと考えるのが自然だ。

ボクが大々的にデビューする前は、たぶん殺伐とした世界だったのだから、そういうことも起こってもおかしくはないだろう。

でも——。だからこそ変だ。

「なんで大事にしまわれたのかな。この子」

「インテリアだったのでは？」

「インテリアって……」

つまり、戯曲サロメみたいに、この子の顔だけが好きだった人がいて、インテリアのように時々飾っては「楽しんでいた」ってこと？

「危険じゃないかな」

ボクのゾンビも、もちろん首だけの状態だとほとんどなにもできない。でも、ゾンビは首だけでも動かないわけじゃない。ゾンビウイルスの受容体は人間の脳みそだと考えられるからだ。

鳥インフルエンザが鳥にしか感染しないように、ゾンビウイルスは人間の脳みそを受容体とする。

いまさらながらのおさらいだけど、ゾンビは脳みそを破壊されない限り活動を停止しない。

で、生首状態でも口はあるわけだから、噛まれたりする危険もある。ゾンビ映画でも生首ゾンビにやられちゃった例もあるしね。

|||||

新・死霊のはらわた

新とついているのは、名作映画と誤認させる当時の手法だったの
で、サム・ライミ監督の死霊のはらわたとはまったく関係がない。そ
れを知らずに見ちゃうとがっかりしちゃうかもしれない。内容とし
ては死ぬほど油断しまくりのキャラクター達が次々と不注意に噛ま
れたりするところが、もはやシニールなギャグになっている。けれ
ど、案外スプラッター描写はよくできていて、とくに生首ゾンビ
さんにかみちぎられた指が首のあたりからニユルンって出るシー
ンは好き。

|||||

まあ要するに、生首だからって油断はできないわけで、人間からし
てみれば、爆発物と同じ。

できるだけ遠ざけておきたいはずだろう。

「だったら、窓の外に放り投げておけばいいはずですよ。ここにしまわ
れていたということは、なんらかの固執があったのでは？」

「命ちゃんの言うとおりかもしれないね。じゃあ身体は？」

「身体ごと保存するのは大変だったんでしよう。ゾンビになったあとに切断したのか、ゾンビになる前に切断したのかはわかりませんが」「身体も保存してたりして」

「なくはないでしょうね」

命ちゃんはあまり興味がなさげだ。

しかし、チラリと視線を寝室の外にやった。

なんとなく——命ちゃんの意図を理解する。

導かれた結論は、果たしてキッチンのあたりに鎮座する結構大きめの冷蔵庫だ。一人暮らしといったらこのサイズは必要ないだろうっていうくらいでかい。ボクの身長142センチメートルの1.5倍くらいはありそうだ。

このマンションの一室は、大きな間取りだけど、なんとなく雰囲気的には金持ちの一人暮らしだったんじゃないかなと思わせるものだった。

冷蔵庫だけに限らず家具家電類は、おそらくほとんど何も考えず、でかくて最新式をとりあえずぶちこんでみましたって感じた。

それで、ボクは生首さんを小脇に抱えて、そつと冷蔵庫を開けてみた。

「腐ってやがる……」

早すぎたというより遅すぎたって感じか。

冷蔵庫の中ほどには”彼女だったもの”らしき残骸が残っていて、下のあたりのスペースには、電気がなくなつて腐り落ちた肉がどろどろのスープみたいになっていた。

でも、容量からすると明らかに少ないかなーって感じがして、臭いもそんなにない。

他の食料とかはなんにも入っておらず、残っているのはわずかな毛と骨だけだ。

「人肉モグモグ系ですか」

「その可能性もありますね」

突然、命ちゃんがボクの肩に手を置いた。

にわかには生じた温かみにボクは少しだけ驚いて振り返る。

「あの先輩」

「なにかな」

「どうでもいいじゃありませんか」

「ん？」

「この生首がどうであろうと終わったことですし、わたしたちには関係がないことです。先輩が強いからって油断して危険に首をつっこむのはやめたほうがいいと思います」

油断しているのはボクでしたか……。

「でもさ。ボクたちはこの子の家にいわばお邪魔しているわけですよ。このままボクしーらないってあんまりじゃないかな。ボクはこの子を見つけてしまったわけだし」

「ヒーロゾンビにでもするつもりですか？」

「それしかないよね。たぶん回復魔法じゃ追いつかないレベルだよ」
擦傷とかのレベルだったら回復できるんだらうけど、さすがに生首からうのようによ再生させるには、ヒーロゾンビにするしかない。この子かもしボク以外の誰かに見つかったとして、最終的に再生させられるかはよくわからない。

いやそれ以前に。

それ以上に。

めちやくちや重要なことがある。

それはゾンビから人間に戻したときに、仮に殺人なんかをされていた場合に戻された側はどういう行動をとるだらうってことだ。もしかしたら復讐に走るのかもしれないし、ゾンビにされていた人が実は凶悪犯だったりするかもしれない。

ゾンビから人間への復活。思考しない存在から思考する存在への回帰は、そういったリスクも孕んでいる。

社会のことは社会に任せておけばいいとは思うものの、ボクなりの責任感から、どうなっていくかを予想したくはあった。

油断して危険に頭をつっこんでいるのは、確かにそのとおりだな。

でも、無関係でもいられないんだよ。ボクは人間が好きだから。

「せっかく、先輩とふたりきりだったのに……」

命ちゃんはしょんぼりしていた。

「ごめんね。場合によっては町に戻るなりすればいいと思うからさ」

「しかたないですね。キスしてくれたら許してあげます」

「えー」

ムードもへったくれもないんだけど。

ボク、生首抱えてるし。

「冗談ですよ」

命ちゃんも冗談を言うようになっただね。

幼稚園の頃に素数が無限にある証明を、当時小学一年生だったボクに開陳してくれていた命ちゃんはもういないんだ。あの頃の命ちゃんはあまり感情を感じさせない女の子って感じだったからな。

ボクが昔をなつかしんでいると、

「先輩が果てしなく失礼なことを考えているような気がします」

「み、命ちゃんはかわいいなって思っただけ」

「え？　かわいいですか」

「うん。かわいいよ」

「ありがとうございます……」

ほっぺたを赤く染める命ちゃん。

サイドテイルをいじいじしている。

やっぱり、命ちゃんはかわいい。

そして、変わらないなって思っていた命ちゃんも、よくよく考えてみれば、成長しているなって思います。少し寂しさを感じちやうけど、幼女じゃなくなつちやうのを悲しむマナさんと同じ心境なのだろうか……。哲学です。

☆Ⅱ

指先を少しばかり自分で引き裂いて、出した血液をなめさせる。

それから生じた光景は、まるでショットガンか何かでぶちまけられた肉塊を巻き戻すような、ある意味グロなシーンでした。

規制されたゲームみたいに、光か影のエフェクトでも出ていればよかったんだろうけど、現実はそのうわけにはいかない。ピンク色をしたブヨブヨしたお肉が、すごい勢いで増殖していく。どういう原理かはわからないけど培養液か何かで細胞分裂させたらこうなりますって感じ。

映画AKIRAのピンク色した細胞が増殖していくような絵図だった。

けれど四散するような広がりかと思っただのは一瞬、身体の輪郭と思わしきところで増殖は止まり、一転して収斂していく。

ピンク色だったソレが、ようやく人間のカタチを取り戻してきたとき、女の子らしい柔らかかな稜線と、白く輝くような肌膚があらわになってきた。若くて瑞々しい身体が、再生という儀式を経て、運動したあとみたいに汗ばんでいる。華奢な手足。それなりに膨らみのあるおっぱい。

「うにゃ」

裸と思つた瞬間。

後ろから掌で目隠しされた。

当然、命ちゃんしかありえない。

「見ちゃダメです。先輩」

「わかりました」

ううーん。何も見えない。

いつまでこうしていればいいんだろう。

と、思っていたら、

その場で、くると回転させられてようやく手ははずしてくれた。後ろから気配を感じるんだけど、どうなっているかはわからない。

「命ちゃん?」

「服を探してきます。先輩はこのままで」

「わかりました」

命ちゃんが遠ざかって部屋をでていく足音がする。

ドアがちょうどボクの背後にあったせいで、命ちゃんの姿も見えない。

ボク——窓を見つめます。

やあ、いい天気だなあ。快晴快晴。

「ん……う……」

後ろから何か声が聞こえます。

でも、ボクは風景を鑑賞するだけのただの小学生女兒だ。

ああ、雲のカタチがお魚さんみたい。

「え、なんで裸でありますか？」

覚醒の声色。

命ちゃんもまだ来ない。

や、やべえ。どうしたらいいんだ。

「だ、誰でありますか？」

「あ……ごほん。ボクは夜月緋色です」

ボクは窓の外を望みながら言う。

「な、なぜ、顔を見せないでありますか。わたし、謎の組織に連れ去られて、えつちな同人誌みたいなことをされるのでありますか？」

「違うよ!? ていうか覚えてないの?」

「覚えて……はっ。わたし、なにも覚えてないであります!」

「覚えてないの? 名前は?」

「謎の少女に名前を尋ねられる展開。これはきつと名前を教えたらよくないことが起こるのであります。絶対に言わないであります!」

なんか変な子だな。

まあ、ボクの周りは一風変わった人たちばかりだけどね。

「先輩。服みつかりました。あ……」

「また女の子であります! これはもしや百合の展開なのでありますか。わたし、これから百合百合されちゃうのでありますか」

「……服、着てください」

命ちゃんのうんざりした声が響いた。

五分後——。

ようやく対面で話せるような状態になる。命ちゃんに「いいですよ」とお許しの言葉をもらい、ふりかえって見てみると、生首の彼女は紺色のセーラー服を着ていた。こうしてみると、やっぱり女子高生

くらいかなって思っていたボクの見立ては正しかったようだ。

「うお、恐ろしいほどに美少女であります！　これだけ美少女だと、悪の首魁といわれても実は宇宙人といわれても驚かないであります！　アニメの世界から飛び出してきたのでありますか？」

「それはいいから、とりあえず座ろうか」

大きめなベッドの上に腰掛け、隣に座るように促す。

いつまでも床に座らせておくのもどうかと思ったんだよね。

お尻が冷えるし、埃っぽい。

ベッドは見た目綺麗に見えました。

女の子は警戒しているのかなと思っただけど、実際にはそんなことはなく、ホイホイと導かれるままに座った。

ボクに対する視線は、どちらかといえば好奇心よりのようだ。

「えっと、さっきも言ったと思うけど、ボクは夜月緋色です。こっちは命ちゃん」

「命です」

これ以上なくシンプルな返しをする命ちゃん。

あとは沈黙。ぶれない子。

とりあえず、いつものように質問役はボクらしい。

「で、君の名は？」

「かすがいかほ春日居嘉穂であります」

「年はいくつ？」

「16であります」

「その口調って何か理由あるの？」

「戦車とアニメが好きでして」

「あー、ガルパンとか？」

「おお、緋色殿はガルパンを知っているのですか？」

「まあそれなりには知っておりますよ」

なんせ引きこもりにとって、アニメはマストだからね。

ちなみに、ガルパンというのは、正確にはガールズ&パンツァーというアニメで、戦車に乗って戦う競技に興じる女子高生たちの姿を描いた青春熱血系の萌えアニメだ。

「ご当地アニメとしても有名で、市役所の中にはガルパンコーナーがあつたりします。」

そのアニメのなかのキャラクターのひとりが、ちょうどこんな口調だった。

「家族の記憶とかは残ってる?」

「残っておりますよ。両親とも早世しておりますが姉がひとりおりますね」

「そうなんだ……」

ボクと同じ境遇だ。

なんとも言えない表情になつてる気がする。

もちろん共感というのものもあるんだろうけど、それ以上にさみしさを思い出す感じ。

「ほかに覚えていることはある?」

「わたしは近所の高校に通う、何の変哲もない学生ですが……：そういうえばここはどこでありますか? こんな高級マンション見たことないであります」

「お姉ちゃんとここで住んでたりとかはしてなかったわけね」

「こんな金持ちの匂い知らないであります!」

「ここはお家じゃないのか? ということはどこからか避難してきたのかな。」

いや、それ以前の問題として――。

「ゾンビのこととか覚えてたりする?」

「ゾンビでありますか?」

首をかしげる嘉穂ちゃん。

「どうやら死体損壊による記憶の消去は、べつに頭にダメージがいつているからではないらしい。」

飯田さんが撃たれたことを覚えてなかったときみたいに、死体にダメージが入っていると、記憶も消える。どういう仕組みかはわからないが、頭部だけになつちやつた嘉穂ちゃんの記憶の損壊は相当程度大きい。

ゾンビのことも知らないとなると、これはかなり遡って説明しない

といけないな。

「えつとね。世界はゾンビ禍に見舞われました」

「映画の話でありますか？」

「映画じゃなくて現実だけどね」

立ち上がるように促し、ベランダに向かう。

階下を見下ろせば、何人かのゾンビさんの姿が見える。

高層マンションだからゾンビの姿は豆粒のようにしか見えないけど、公道に車が乱雑に置かれていることくらいはわかるだろう。

一目でわかる異常事態だ。

「え、エキストラでありますよね？」

ボクは首を振る。

「いまだに理由はわからないけど、去年の8月にゾンビが地にあふれたんだ。彗星のせいかなともいわれているけど」

「去年でありますか？」

「そう去年」

「彗星の話は聞いた覚えがあります」

「ゾンビのこと思い出した？」

「あ、いえ。彗星が降ってくるというニュースがあつたような」

「そのあたりまでは覚えてるんだね」

「しかし、ゾンビとはいったいなんですか」

「ボクにもわからないよ。外形的に見れば、意識レベルは最低。そのへんを意味もなくうろろうして、うなってるだけの存在かな」

「ニートでありますか」

「いや、ニートとは違うと思うけど……」

「わかってるでありますよ」

嘉穂ちゃんの顔は蒼白になっていた。

どうやら冗談を言うことで、ストレスを無理やり軽減させていただけらしい。

ゾンビに対する恐怖がジワジワと忍び寄ってきてる感覚。

久しく忘れていたけど——、人間にとってゾンビは怖い存在だ。

噛まれれば死が確定するし、生命にとって少なく見積もっても死は

最悪の結果だから。

いや、もしかしたら死体の中に自分の魂的な何がしが封じ込められると考えれば。

指先からつま先まで自分の意思で自由にならないとしたら――。

それは死よりも恐ろしいことになりえる。

「ここは安全でありますか？」

「実をいうと嘉穂ちゃんはもう安全側なだけだね」

ボクは狼狽しつつあった嘉穂ちゃんに優しく語りかけた。

「え、どういう――」

浮遊する。

ボクのような存在を一発で信じさせるには、やっぱり直接見せたほうが手っ取り早い。

百聞は一見にしかずというやつだ。

嘉穂ちゃんは見事に固まり、パクパクとお魚さんみたいに口を開けていた。

「やっぱり何かの撮影でありますか？ どこかにカメラが」

再始動した嘉穂ちゃんは、きよろきよろと周りを見渡した。

「違うよ。なんといいばいいか。ボクはゾンビの上位存在らしくて、ゾンビに襲われず、超常の力が使えたりするんだ。こんなふうだね」「うわわっ」

今度は、嘉穂ちゃんの身体をそつと浮かせた。

自分の身体だったら、ワイヤーアクションとかそういうんじゃないかってわかるだろう。

「す……す……いであります」

超能力って――、ボクの場合、じわーっと画面越しに見せたのが始まりだから、なんとというかみんな集団免疫みたいな感じで、驚きが緩和されていたけれども、普通は「畏れ」られる可能性もあるんだよね。ゾンビをどうにかできるという希望が化け物と同視することを許さなかったというか。

みんながみんなして自己暗示をかけてたんじゃないかって思う。ゾンビをどうにかできるヒロちゃん。

だから、ヒロちゃんを化け物扱いするのは異端で、そういうやつはゾンビになれって考え。

多数派がゾンビみたいにモノを考えられなくなったのも、結局それが理由なんじゃないかな。

そういう世間的な知識のフィルターを取り払ったところで、ボクはどういうふうに思われるんだろう。

そんなことを考えなかったわけじゃない。

だから——、こんな説明の仕方になってしまった。

我ながらこころが弱いなと思います。

嘉穂ちゃんに怖がられるならそれかもしれないと思ってたけど、結果としては恐れよりも好奇心が勝っているように思う。

「緋色殿は魔法少女でありますか」

「魔法少女か」。その発想はなかったな」

天使とかはよく言われたけど、みんなには配信を通じて超能力少女を標榜してしまっているから、魔法少女というコメントはなかったよな気がする。

そんな世間知とのズレに、ちよつとだけうれしさを感じてしまった。

ハザードレベル144

生首少女あらため春日居嘉穂ちゃん。

彼女は記憶のあらかたを失ってしまったていた。

頭部だけの状態になってから長かったせいなのか、理由はよくわからない。

飯田さんが銃弾を受けていたせいか、ゾンビになったあたりの経緯が曖昧になっていたのと同様に、嘉穂ちゃんも身体にダメージを受けたせいか、記憶を損壊したのだろう。

「ヒイロゾンビでありますか?」

それで、いまヒイロゾンビの説明を終えたところだ。

「そう。ゾンビに襲われずゾンビを操れる。ボクと同じような能力持ちの存在だよ」

「わたしもヒイロゾンビでありますか?」

「うん。だから、最低保証で嘉穂ちゃんはゾンビに襲われることはなくなりました」

そう……ゾンビにはね。

「緋色殿と同じ存在になったということは、さっき見たような魔法も使えるのでありますか?」

「魔法とは違うかもしれないけど使えるよ」

「わたし、実は魔法少女にあこがれていたであります!」

掌を突き出して、むうううと力をこめる嘉穂ちゃん。

ものすごく真剣な表情だ。

しかし、なにもおこらなかつた!

「ピヤド。ケアル。ホスピ! かめはめ波ああ! 水の呼

吸ううう」

なにもおこらなかつた!

「なんでできないでありますか……」

「アニメ好きって言ってたもんね。プリキュアとか好きな感じかな」

なんのきなしに言ったら、

「違うであります」

と、冷たい声が返ってきた。

「え？」

「違うであります」

唐突な否定にボクは面食らう。

「プリキュアは魔法少女の類型とは違うと考えるであります」

「ああ……ふうん。そうなんだ？」

にわかなのでよくわからないです。

「わかつておられないようですね。そもそも、プリキュアとは女の子も戦ってみたいというコンセプトであり、ある意味では格闘系魔法少女ともいえるのでありますが、そもそもの成り立ちからして女の子が近所の平和を守るという魔法少女とは異なるのであります。魔法少女の魔法は世界を救ったりはせず、身の回りのこまごまとしたものに向けられるもの。つまり、わたしはご近所さんのおつきあいの中で空を飛んだり、子猫さんが車に轢かれそうになるのを助けたりしたいだけであって、大規模な世界を救う使命を果たしたいわけではないのであります」

「うん？ うん」

ものすごい早口だった。嘉穂ちゃんりのこだわりがあるのだろう。

ボクは所詮、日曜の朝にたまたまた早起したときぐらいしか見ないし、魔法少女の歴史を語られてもよくわからないからな。

「でも」と、ボクは思い出す。「そういや魔法を使うプリキュアもいたよね」

「そこなんですなあ」

腕を組み、しみじみと語る嘉穂ちゃん。

あれ、なんか変なスイッチを押しちゃった？

やべって思った時には遅かった。

嘉穂ちゃんは腕を組み、ひと呼吸で一気に話し出す。

「プリキュアは基本的には女の子も戦いたいというスーパー戦隊シリーズや仮面ライダーのような系譜をとり入れた作品だったわけですが、世の中の幼女さんたちからしてみれば、まだ未分化な受

け入れ方しかできないであります。世の中のパパさんたちは幼女さんたちに言われるがままオモチャなどを買い与えるわけでありすが、正直なところコンセプトなんかどうでもいいんでありますな。そもそもプリキュアの初代の変身服は黒と白だったわけありますが、これも最終的には主人公はピンク色におちついてしまったのであります。幼女さんたちは圧倒的にピンク色が好きだというアンケート結果がありますからな。同じように魔法的な力に対するあこがれも世の中のニーズにこたえた結果でありまして当初のコンセプトを置き去りにして、魔法少女的な欲望を果たしたのであります。要するに魔法を使うプリキュアとは妥協の産物であって、プリキュアの中で異端。それが魔法使いプリキュアということになるであります。な。これではプリキュアの尊厳が穢され、逆に魔法少女という概念もクリシユと化してしまう。両者は異なるがゆえに並び立てるのに、混ぜて同一化してしまつては称賛すべき他者ではなくなつてしまつてであります。嘆かわしいのであります」

なげえよ。

まあともかくそれはいい。

「あのね。嘉穂ちゃんが言うところの魔法を使うには“人気”が必要なんだ」

「人気、でありますか？」

「そう、人気」

「たくさんの人から好かれていふという意味の人気でありますか？」

「うん。その人気だね。ボクはみんなの人気を集める存在だからちよつと違うんだけど、普通のヒイロゾンビは“人気”によつて力が左右されるみたい」

「緋色殿は普通のヒイロゾンビとは違ふでありますか？」

「たぶんね。誤解を与えるかもしれないけど、みんなはボクというインフラを通して力を行使しているみたいな感じというか」

「緋色殿がご主人様でありますか？」

「ひえ。その言い方はちよつと怖い気がするからやめて」

「緋色殿に支配されているような感覚はないでありますか」

「支配してないもん」

「信じるであります」

まあボクが洗脳系の能力を常時使っていたとしたら、もはや気づきようもないんだけどね。

ボク自身の視点で考えても、他人がどう考えているかなんて外形的な行動から類推するしかないんだから、他者のこころや魂を信じるしかない。

独我論の解法は、信じることです。

「ヒロゾンビは世界にどれくらいいるのでありますか？」

「どれくらいだろう。命ちゃん」

ボクは離れて、じつと座っていた命ちゃんに聞いた。

「50万人から数100万人くらいでしょうか」

「え、そんなにいるの？」

思ったよりも多いな。ボクのヒロゾンビソナーだと、1、2、いっぱいって感じで、もう追いきれなくなってたけど、考えてみれば一國2000人が基本とか言ってたから、そんなもんか。

2000人×2000国で40万人はいるわけだし。

多いのか少ないのかよくわからないな。

「わたしも人気者になれば魔法が使えるのでありますね」

嘉穂ちゃんは納得した様子。

「そういうことだね」

「かわいい道な気がするであります。わたしはこんなでありますから、クラスのみんなには腫物を触るかのように対応されていたであります。正直、ぼっちだったであります」

ずうんと落ちこむ嘉穂ちゃん。

ここにもぼっちさんがいたよ。

「いまは個性の時代だから大丈夫だよ」

「そうでありますか？」

すがってくるような視線だ。

小動物系でかわいらしい顔立ちをしているんだけどな。

ちよつと濃いけど……。

「配信者になったら人気でるんじゃない？ アイドルは個性が命っていうし」

「個性でありますか。確かに自分はちよつと個性的かなあと思ったことはあるであります」

めつちや個性的だと思っけどね。

アニメ口調は、わざとだとしても。

「ちなみに人気者だったヒロゾンビが炎上とか起こしたらどうなるでありますか？」

「うーん……。命ちゃんどうなるの？」

「力を失うのではないかと思いますが、人気が急落した例がないのでわかりません」

確かにね。

ヒロチューバーの皆さん方を見る限り、やっぱり先行組が強い。

あの空母に乗っていた子どもたちは、尊貴な方々のご息ご息女なので、それはそれは炎上などしないように周りも気を配ってるに違いない。

あとは、町の何人かが人気が出てるみたい。

でも、超能力を使うほどにはいたっていない。そもそも急落するほどの人気の絶対量が足りない。

一気にヒロチューバーが増えすぎたせいで、人気が分散してしまつてるような印象。

数名のヒロチューバーだけに人気が集まってしまうと、その他がほとんど人気を得られなくなってしまう。世の中ではよくあることだ。

「ところで、ゾンビハザードが起こったのが去年というのはどういうことですか」

「嘉穂ちゃんがヒロゾンビになったということにも関係するんだけどね。本題はそこなんだ」

「本題でありますか」

「うん。言葉にすれば簡単なことなんだけどね。嘉穂ちゃんはゾンビになっていったんだよね」

「記憶にないのでなんとも。ただ、話を聞く限りではそうなのであり

ましような。感謝の言葉しかないのであります」

「うん。それはいいんだけど――、嘉穂ちゃんはちよつと特殊な状態でゾンビになっていたんだ」

「特殊な状態でありますか？」

「うん……」

「それはいったい？」

得体のしれない緊張感が高まっていく。

ずもももも。

ぷは。限界。

「生首です」

「生首でありますか？」

「うん。嘉穂ちゃんは生首状態で発見されました」

「そんなバカな！ で、あります……」

驚いて大きな声を出す嘉穂ちゃんだけど、徐々に声のトーンが下がってきた。

「本当だよ。ゾンビになった後かなる前かなった後かはわからないけど、嘉穂ちゃんは誰かに首を切断されたんだと思う」

「わたし誰かに殺されたのでありますか？」

「可能性は高いかな。いまのうちにびっくりするかもしれないから言っておくけど、冷蔵庫の中に嘉穂ちゃんっぽいものが少し残ってるよ」

大きな肉の固まりは浅黒く腐っていても、ちよつとは残っていた。

腐って落ちた肉は液体化して下にたまっていた。

もう男か女かもわからないほどよくない状態だったけど、状況的にはたぶん嘉穂ちゃんだろう。

他人の身体との入れ替えトリックとか考えられなくもないけど、そうする意味がわからないしね。

「みてもいいでありますか」

「どうぞお好きに。でもグロ注意です」

「緋色殿の言葉を信じないわけではないのでありますが、どうにもわたしの意識では、ついこの間まで夏休みにどんなアニメを視聴しよう

とか、聖地巡礼をどうしようか考えていたワクワク感しか残ってないのであります」

「うーん。記憶が残ってないのは困るね」

記憶というのはパーソナリティの大きな部分を占めるからな。

嘉穂ちゃんと連れ立ってキッチンに向かい、例のお肉を見せる。

「うわあ……うわあ……ダメでしょこれ……」

素っぼい言い方になってるのは、さすがに衝撃的だったからだろう。

ハエとかの虫がたかつてないのがせめてもの救いだ。

「わたし、殺されるようなことをしたのでありましようか」

「それはわからないな。何か覚えてない？」

「いえ、なにも……」

息詰まる捜査。行き詰る捜査。

とりあえず、ボクは探偵役にはなりえないので、命ちゃんをじっと見る。

命ちゃんはそつとため息をついた。

「パンタ・レイですね」

「パンダ？ なにそれ」

パンダが光線を撃つイメージが脳内で展開された。

「万物は流転するという意味です。聞いたことありますよね。先輩」

「おお、確かに聞いたことがあるよー」

ギリシヤかどこかの哲学者がそんなことを言ってた気がする。

万物流転か。

変わらないものはないって思想だよな。

世の中のあらゆるものは移り変わっていく。ボクらもそうだ。

変わらないのはノーマルゾンビくらいかもしれない。

しかし、命ちゃんの思考はあいかわらず速いな。

つまり、どういうことだっばよ。

「つまり、春日居さんが殺されたのは、この家の住人がいないことから考えて、ゾンビハザード後だと考えられます。そうすると人間の日常的思考も変わっていたと考えられるわけです」

「万物って人間の常識とかそういうのも含むってことか」

「そうです。春日居嘉穂さんが誰かに殺されたという前提を飲みこむとして、ふたつの仮説が成り立ちます。犯人が殺すような性格に変わった。あるいは嘉穂さんが殺されるような性格に変わった。ホームセンターでの出来事を経験している先輩ならおわかりですよね」

普通の人っぽい人が、ゾンビハザードの恐怖にタガがはずれて、凶行に及ぶさまをボクは何度か見てきた。わかりやすい暴力が幅を利かせ、殺人をしても自分が生き残る道を探る。

例えばの話、ゾンビに追いかけられるときに友人を転ばしてでも自分が逃げるなんて選択もありえるかもしれない。

非日常の中でどんな選択をするかはそのときになってみないとわからないんだ。

「命殿は頭がいいのでありますな。さしつかえなければ、わたしのことは嘉穂と呼んでももらえれば幸いです」

「わたしはあなたがゾンビ禍のあと狂人になった可能性を提示してるんですよ?」

命ちゃん、超クール。

でも、その可能性もあるかもしれない。

いまは天真爛漫って感じで、妙に人懐っこい嘉穂ちゃんも、ゾンビハザードが起こったあとに、ヒトが変わったようになって——、それで誰かに反撃されて殺されたなんてことも考えられる。

「ん。そうでありますな。記憶がないからなんとも言えないですが、人間いざとなったらどうなるかわからないというのは確かにそのとおりだと思うであります。だから命殿の考えはまちがってるとは思わないであります」

当たり前のように嘉穂ちゃんは頷き応えた。

「……まあ、嘉穂さんの場合は、狂人になった線は薄いと考えられます」

おう。てえてえな。

さりげに嘉穂ちゃん呼びになってるよ。

命ちゃんはクールだけど、敵認定しない子には基本やさしい。

「どうしてそう思うのでありますか？」

少し不安げに嘉穂ちゃんが聞いた。

「やはり綺麗に嘉穂さんが包まれていたからですね。嘉穂さんが狂人化して人を襲い、反撃されて殺されたのなら、綺麗にしまわれているということはあまりないように思います。もちろん、愛憎相半ばという線もなくはないですけどね」

「なるほど……、つまり犯人のほうが狂っていた線が強いと考えられるわけですね」

「冷蔵庫に入っていたことから考えても、食人された可能性は強い。相手を食べるというのは執着の最たるもの。つまり所有欲の極限であるから——、嘉穂さんは誰かに偏執的な愛情を向けられていたのではないかと考えられます」

「執着でありますか」

嘉穂ちゃんがアワアワしている。

殺された恐怖を今になって実感してきたんだろう。

いや、正確には殺されて食べられるほどの執着に恐怖したんだ。

それはさながらストーカー被害にあったものの何倍も怖いだろう。

「その嘉穂ちゃんを食べちゃった人がいるとして、どうしたらいいかな、命ちゃん」

「これもまた万物流転といえるのですが、今の世の中は先輩のおかげで秩序を取り戻しつつあります。このまま宛てどころなくさまよっても、いつかは元の日本のように本人確認がされる時代に戻るでしょう。長くて数年短くて数か月といったところでしょうか」

「ふむふむ。どこかのコミュニティにヒイロゾンビですって言って登録しなおしてもらったほうがいいってことだね」

「そうですね。ただ——、秩序が回復してきているとはいえ、嘉穂さんが殺された理由はわかりません。例えば歪んだ食欲のようなものが理由だとすれば、こちらは犯人がわからないのに、犯人は嘉穂さんをおかわり”できる可能性がでてくるわけです」

「ひええええ、であります」

嘉穂ちゃんがふるえてる。当たり前だ。

「命ちゃん言い方」

「すみません。適切な言い方がわかりませんでした」

「でも、命ちゃんの言うとおりに。単に人間のコミュニケーションに戻るだけだと、嘉穂ちゃんが危ないかもしれないってことだね」

嘉穂ちゃんのこれからを考えると、このままだと危険だ。

警察機能もいずれは回復するだろうけど、ゾンビハザードから時間が経過した後のことだ。

当然、証拠も散逸してしまっているだろうし――。

このマンションをあらかじめ保全しておくぐらいが関の山か。

「ボクたち、このマンションをでたほうがいいかな」

「指紋とか残ってる可能性はありますね。元の住民のものどわたしたちのものを差し引けば、おそらく犯人の可能性が高いでしょう。犯人が複数犯という可能性もありますが」

「いろいろ考えると難しいな……」

「わたしとしてはお姉ちゃんが生きているかが気にかかるであります」

「もともとお姉さんといっしょに暮っていたの？」

「そうであります。お姉ちゃんとわたしは年が離れておりました、親がいなくなつてからは、お姉ちゃんは仕事をしながらわたしを育ててくれたであります。生きているなら会いたいであります」

「それは危険かもしれませんよ」と命ちゃん。

「どうして？」とボク。

命ちゃんが、ボクを見つめ口を開きかける前に、嘉穂ちゃんがニコリとほほ笑んだ。

「命殿は、姉が犯人である可能性もあっておられるのですな。ですが、それはないと思うであります。それにお姉ちゃんに食べられるのなら、それでもいいと考えるであります」

な、なるほど……。

冷静に考えれば、いっしょに暮っていたお姉さんが犯人である可能性もあるのか。

でも、その可能性を嘉穂ちゃんは一顧だにしなかった。
姉妹愛でえてえ……つてやつなのか。

家族なんだよな。家族愛を信じる子は強い。

「じゃあ、お姉さんを探しに、ここの場所から近くのコミュニティに行くってことでいいかな」

「そうですねあ……」

嘉穂ちゃんは立ち上がり遠く眼下を望む。

嘉穂ちゃんとしてはお姉さんが犯人ではないという確信はあるけれども、それ以外の誰かに殺されたということになるわけだから、姉を探しに行くのは犯人に見つかる危険な行為なわけだ。

お姉さんがすでにこの世にいない可能性もある。

そんな恐れから、嘉穂ちゃんは疲れたような表情になっていた。

ボクには探偵役は向いてない。

それどころか、せいぜい小学生配信者くらいが限界という悲しみ。宗教とか政治とか探偵とかについては、正直なところクソ雑魚なめくじだった感は否めない。

ただ配信だけはそれなりにレベルアップしてきたと自信があります。

配信、だけなら——。

「あ」

「どうしたでありますか」

「いい手があったよ。嘉穂ちゃんも配信すればいいんじゃない？」

「でありますか？」

「そうだよ。いまの時代、てつとりばやく人気をとる方法は配信だからね。嘉穂ちゃんが人気者になれば、魔法みたいな力も使えるようになるし、並みの人間では勝てなくなるから」

「しかし、それでは人気者になる前に犯人にみつかってしまう可能性があるのでは？」

「ふっふっふ。バーチャルな存在になればバレないよ」

ボクの配信は最初バーチャルなほうで始まっている。

アニメ風に投影されたアバターはもともとの容姿を隠してしまう。

「声はどうするでありますか？」

「アニメ声を出せばいいと思うよ。なんならボイスチェンジャーを使うという手もあるし。ただ、ボイスチェンジャーはどうしても音質が悪くなるからお勧めできません」

なんてすばらしい考えなんだろう。

天才の命ちゃんを凌駕した優越感。

そんな視線を飛ばしてみると――。

「でも先輩。バーチャルな存在で身バレしましたよね」

「でありますか？」

あ、嘉穂ちゃんの口調が移っちゃった。

「バーチャルな存在で、ある程度シールドできるのは確かですが、絶対ではありません」

「そうだね。でも、このままだと嘉穂ちゃんが危ないし」

「そうですね。バーチャルヒロチューバーになるのは、悪くない手だと思います。ただ、隣で先輩が嘉穂さんをご紹介するわけですよ？」

「うん。ボクが紹介すれば、とりあえず見てみようかなってなる人多いと思うし」

「わずかばかり公平性に不満を感じる人がでてくるかもしれません」

「いいよ。それでボクがちよつと嫌われるくらい」

「嘉穂さんにも嫉妬する輩がでてくるかもしれないよ」

「敵を作る可能性はあるにしろ――、ボクが庇護すれば大丈夫」

「わたしも嫉妬で気が狂いそうです」

「そっちなよ！」

命ちゃんが言わなかったのって、もしかしてそれが理由なの？

「先輩が考えてるとおりです」

人の命がかかってるんだだけ。

「正直なところ、先輩とイチヤイチャするほうが何倍も大事です」

ボクの脳内と会話するのやめてほしい。

「命殿は緋色殿のことが好きなんでありますな」

嘉穂ちゃんのほうが年下だけど、余裕があるみたいだ。

クスッと笑ってる。

見た目、女の子どうしで、ボクは小学生みたいだから、オママゴトみたいに思われてるのかもしれない。

「心配しないでも、命殿から緋色殿をとったりはしないでありますよ」

「その言葉、信じますよ」

「命殿はかわいいでありますなあ」

まあ確かに。

拗ねて目を伏せながら髪をいじりじりしてる様子はかわいらしい。

いつだって命ちゃんがかわいくなかったときなんてないけどね。

「で、嘉穂ちゃんとしてもそれでいい？」

「もちろん、わたしとしては否は 아닙니다。しかし、わたしはさつきも言ったとおり、クラスの人気者とはいいがたい存在だったのであります。うまく配信できるか自信がありません」

「それは大丈夫。さつきも言った通りボクが守るからね」

「おお。見た目小学生の美少女に守られるとか、役得でありますな」
「守るって言っても、たいしたことじゃないけどね」

つまり、ボクは初のプロデューサーになるのだ。

Pになって、嘉穂ちゃんを人気ヒロチューバーに育てあげるのだ。

配信にはすっかり慣れ切ってしまったボクだけど、他人をプロデューズするのは初めてだ。

どんなふうになればいいかわからないけど――。

犯人とかそっちのけで、オラ、ワクワクしてきた。

よーし、がんばるぞ。

ハザードレベル145

マンションから場所を移して、ここは福岡の郊外だけどちよっぴり中心地寄り。

ぎりぎり電気が通っていて、ぎりぎりネットが通じるそんな絶妙な位置に存在するあるところ。数百メートル先には鉄骨か何かで組まれた壁が存在していて、たぶん、近々こちらのほうまで領域を伸ばしてくるのだろうなと思われるところでした。

ゾンビさんが大量にたむろっていて、うろろしているのが見えます。

ここが境界域。

そしてなんと、ここでは電気が使えるみたいです。

電気は、別に断線しているわけではないからある程度おおざっぱになってもやむを得ないところなのだろう。ネットもしかり。

適当なゾンビさんがいるお家に入りこみ、Wi-Fiとかで接続すればネットは使えた。

まあ、ボクの町に帰るという方法もなくはなかったけれど、これから嘉穂ちゃんをみんなの前でデビューさせたら、おそろくたぶん——いや、絶対まちががなく——恵美ちゃんとかピンクちゃんとか乙葉ちゃんとかが、ボクのアパートにやってきそうな気がする。

佐賀に犯人がいなくても限らないわけだし帰るのは却下だ。

嘉穂ちゃんにヒイロちからを身に着けさせるためには、こっそりやるほうがいい。

恵美ちゃんだって一日でファンが50万人以上ついたんだから余裕余裕。

雄大に会う前に一人前のヒロチューバーにしてみせる！

「というわけで、嘉穂ちゃん。ボクはいまから君の師匠だ」

「師匠でありますか？」

「そのとおり。ボクのごことは師匠と呼ぶように」

「わかりましたであります師匠」

「もつとだ」

「師匠！ 師匠！ 師匠！」

「もつと！」

「師匠うウ~~~~~っ！」

この娘ってノリいいな。

師匠呼びを強制させるボクも相当アレな感じだけど……。

最近のラノベでチートキャラが師匠ポジを目指す意味がわかった。

これは気持ちいい。

マウントをとりつつも、相手は未熟者なのでマウントはしようがないという感じを演出できる。

「よろしい弟子よ。まずは命ちゃんにアバターを作ってもらえるようお願いするのだ」

「わかったであります」

素直なことはよいことだ。

嘉穂ちゃんはボクの言を疑うこともなく、離れてスマホをポチポチしていた命ちゃんに近づいた。

「命殿。わたしのアバターを作ってほしいであります」

「作る必要はありませんよ」と、クールな声。

「え、そうなのでありますか」

「もともと先輩用に使っていたアバターですが、何種類かはパターンを変えて作成済みですからね。高校生になったらこんな感じかなというようなものも作っています」

リュックからノートパソコンを取り出し、作成済みアバターを見せてくれた。

「おお。なんか大人になったボクみたいな感じ」

ボクも初めて見たんで驚いた。

嘉穂ちゃんのリアル容姿は純正日本人らしく黒髪で黒目なんだけど、画面の中にいるアバターはボクをちようど少し大人にした感じだった。高校生くらいかな。

つまり、プラチナブロンドに赤いおめめ。濃い紺色のセーラーを着ていて白っぽい髪とあわさって目立つ感じの配色。ひとこと言えば、ぴちぴちギャル（死語）だ。

「かわいいでありますな」

「うむ。弟子よ。このアバターを使うがいい」

ボクは尊大に言った。

「わかったであります」

ビシッと敬礼する嘉穂ちゃん。

うむ、かわいいよ。ボクもビシッと答礼する。

「先輩、初めての師匠ポジで浮かれるのはいいですけど、本当にその立ち位置でいくんですか？」

「もちろん、そのつもりだけど、何か問題ある？」

「いえべつに。先輩みたいなちっちゃな子が、がんばって師匠面してるのも悪くないと思います」

「なんだか辛辣なように聞こえる……」

「気のせいです。後輩ポジと少し被る気がして、脅威に感じてるとかないです」

「大丈夫だよ。後輩ポジと弟子ポジはだいぶん違うよ」

弟子と恋愛関係になることは……まあほとんどないんじゃないかな。

そもそも嘉穂ちゃんとは出会ったばかりだし、いい子だんたのはわかるけど、恋愛感情なんて一ミリもない。それは命ちゃんもわかっているらしい。

とりあえずの納得を見たところで、いよいよ配信の時間だ。

お恥ずかしながらも事実として――、

今のところボクは世界で一番人気なヒロチューバーだろうと思われまます。

まあ、それはいろんな外的要因によるもので、必ずしもボク自身が好ましい性格をしているとかそういうんじゃないだろうけど、ともあれ、現時点での現実的な数値としても、ボクの登録数を超える人はいない。

数は数を呼び、力は力を呼ぶ。

勝ち馬効果っていうんだっけ。

したがって、嘉穂ちゃんの立ち位置だけど、ボクの友人としてコラ

ボ配信するというのがちよつと不自然な感覚なんだよね。突然降つてわいたような配信友達というよりも、我が弟子ということにしておいたほうが、インパクトが強くて逆にいいんじゃないかって思ったんだ。

必ずしも、女子高生を弟子にしてイキリムーブをしたかったわけではない。

「師匠どうすればいいのでありますか」

弟子の期待に満ちた目がここちよい。

「ふふん。……セツトアップは命ちゃんがしてくれる」

丸投げではない。これは采配なのだ。

「わたし、先輩のお弟子さんじゃないんですが」

「命ちゃんはかわいい後輩ちゃんだから、全部してくれる」

ちよつと焦つて言うと、

「しかたありませんね……」

やれやれという感じで、全部やってくれた。

ボクに甘い命ちゃんのが大好きです。

☆
＝

「ハロハロ。みんな元気してますか？」

ボクはいつものように軽い調子で声をかける。

『あ、今日はバーチャル』『バーチャルヒロちゃんきたああああああっ』『さつきツブライターに重大発表って書かれていたけどなんだろ』『福岡への旅行中だね。空撮とかしないのかな。ネットが無理か』『今日もいいゾンビ』『おいやめろ』

「今日からしばらくはバーチャルなボクでいこうと思います。それと重大発表です！」

ドラムロールの音を命ちゃんに流してもらおう。

ドララララララララララ、ジャン♪

「ボクの愛弟子を紹介します。カオリーヌ三世ちゃんです！」

画面外にいた嘉穂ちゃんを招き入れる。

嘉穂ちゃんはカメラの範囲に入ると、さきほどのアバターとして認

識された。

よくわからない謎技術だけど、顔のかたちで、ボクはボクのアバターとして、嘉穂ちゃんは嘉穂ちゃんのアバターとして認識されたい。

嘉穂ちゃんは若干緊張しながら、まずは丁寧に頭をさげた。

「師匠のご紹介にあずかりました。カオリー又三世であります。よろしく願います」

『でっかいヒロちゃんみたいな子きたー？』『ヒロちゃんと並ぶと姉妹みたいだな』『弟子ってなんなん？』『ヒロちゃんの弟子……師弟愛編』『後輩ちゃんはどこ？』『後輩の次は弟子とか、ヒロちゃんおててを出しすぎる件』『ていうか口調』

「さあ、弟子よ。もつと自己紹介をしてみるのだ」

「ええ!? 自己紹介はこれで終わりじゃないのでありますか?」

「ボクときは、かわいいポイントはどこか聞かれたり、猫さんの真似とかさせられたりしたんだからね。カオリー又ちゃんもやろうか。ボクもやっただからさ……」

『同調圧力』『あたふたするお姉さんなアバターかわいい』『カオリー又三世って呼びにくいからさっそくカオリー又になってるな』『カオリーちゃんていいんじゃない?』

「ん……。カオリーちゃんか。それでいいや。カオリー又三世ちゃんは正式名で、あだ名はカオリーちゃんていい」

「わかりましたであります。展開が早くてついていけないであります」

「配信はノリとライブ感が大事だからね」

無い胸を張り、ボクは答える。

「そうなのでありますか。高速で流れるコメントをよく追えるでありますなあ」

「こんなのよゆうだよ。よゆう! ふひひ」

『小学生イキる』『ヒロちゃんってすぐ調子に乗るタイプだから』『お姉さんみたいな女の子にマウントとって粋がる小学生がいるらしい』『まあヒロちゃんだから』『福岡でナンパしたの?』

「マウントじゃありませんよ！ これは師匠行為なのです。それとナンパとかじゃなくて、これはスカウト！ カオリちゃんの才能を見出したボクがスカウトしたのです！」

『ほおうん』『それと同じセリフを毒ピンとスカイちゃんにも言うことになりそう』『結局百合ハーレム作るってことでいいの？』『パンツはもはや置き去りにしている』『オレもまざりてー』『ガ……ガイアツツ！』『オレくんは男の園に混ざろうな』『アッー！』『師匠ど、どどど、どうすればいいでありますか』

嘉穂ちゃんが慌てたような声を出す。

荒波のような怒涛のコメントにどう対処すればいいのかわからないのだろう。

ボクもはじめてのころはわからなかった。

でもいまでは余裕で対処できる。ボクだって成長してるんです。

「落ち着いて、まだ慌てるような時間じゃない」

『そうだよ。カオリちゃん落ち着いて』『初心者だからね』『カオリちゃんは自分の枠つくるんかな』『慌てる初々しさがかわいい』『ヒロちゃんがちゃんと師匠ムーブしている！』

「枠つくるかだつてよ？ どうする」

「単独での配信は、まだ師匠がいないと難しいと思います」

「ふむ。それについてはおいおい考えることにしよう」

『時々思い出したかのように師匠口調w』『ヒロちゃんに師匠は似合わない』『師匠に支障が生ずる』『HHEM民がいるぞ処せ』『今日はカオリちゃんの顔見せだけ？』

顔見せだけ？

そんなの面白くないよ。

「ふふ。実はもうカオリちゃんの枠はとってるんだ。みんな登録してあげてね」

『師匠の優しみを感じる』『カオリちゃんもヒロゾンビ？』『多分ヒロゾンビ』『いきなりスーパーヒロゾンビを生み出すか』『これは毒ピンがすつとんでくるぞ』

ピンクちゃんとかへの説明は後であればいい。嘉穂ちゃんの顔見

せただけだと、爆発的人気は得られないだろうし、やらなきゃいけない理由もある。

当然、続行だ。

嘉穂ちゃんに目くばせをして、家の中にあつたノートパソコンで入ってもらう。今回は隣に物理的にいる状況だけど、スワイプ画面を出して、ボクの隣に配置。

「今日はちゃんとゲーム実況するよ。みんな知ってると思うけど、ボクはゾンビスキーでもありながら、サメスキーでもあるんだ」

『ざわざわ』『おいまさか』『ついにくるのか』『サメゲーはおやりにならないんですかと発言したのはオレ』『サメゲーおまえだったのか』『そう、サメに転生したボクが何も知らない観光客を襲いレベルアップしていく。そのうちハンターやらとも戦い、時に撃退し、時にやられちゃう。まるで映画のようなそんなサメシミュレーションゲーム。ヒロ友のひとりが教えてくれたよ。その名も”人喰い”です」

『英語よわわガールじゃなかった！』『ゾンゾンしてきた』『サメサメしてきただろ』『サメとゾンビは親戚だからな』『俺らとサメは親戚だった？』『カオリちゃんがサメやんの？』

「ボクはサメをやりませぬ。実はこのゲームには対戦モードがあつて、サメとハンターに分かれて対戦できたりするんだよね。サメは規定人数を食べたら勝ち。ハンターは罠とか張つて、それを防ぎつつ、サメを撃退したら勝ちなんだ」

サメ対ハンター。

実にそそる設定じゃありませんか。

『カオリちゃんがハンターすんの？』『今日、配信はじめた弟子に全力でマウントをとろうとする小学生がいるらしい』『実に小学生らしくてよいと思います』『うっそだろおまえwww』

「獅子は自分の子どもですら崖下へ突き落とすと言われています。これは試練なのです」

『ヒロちゃんは獅子っつーより子猫だろ』『自らをライオン扱いしていくスタイル』『正しくマウントじゃねーか』『イキイキしてるな』『初めての弟子にうれしみを隠せないらしい』

「あ、師匠。準備できましたであります」
隣にいる嘉穂ちゃんから声がかかった。

ヨシっ！

「じゃあ、始めようか」

にやりとボクは笑った。

☆
||

サメの威容。あるいはサメの異様。

青一色の海を泳ぐ姿は、その一言に尽きた。

なんとというか、サメは海の動く要塞とっていいだろう。

あふれ出てくる万能感。

まるでチートを突然得たような感覚だ。

サメの出現に気づいたサーファーが驚き逃げ惑う姿が見える。

「ふっふっふ。見る。人がゴミのようだ」

『ヒロちゃんが言ったら洒落にならない件』『ゾンビ操って人間につつませても同じセリフが適用されるからな』『ひえ。助けてヒロちゃん』『ヒロ友だけは助けてください』

「しないし！ ゲームの中だけの話！」

とは言いつつも、ボクはサメをサーファーに向けた。

海におけるサメのスピードは、人間とは比べ物にならない。

陸に向かって必死に逃走を図るサーファーが哀れに思えるほどだ。

『いやだー助けて死にたくない』『ヒロちゃんの人でなし』『とはいえ、対戦だとサメは早くレベルアップしないといけないからな』『ヒロちゃん人間食べたことないよね？』『おいやめろ』

「人間はリアルでは食べたことないよ。ただ、ゲームでは上手に食べますよっと。はい、カプカプカプカプ」

『ジョーズだけに』『やっぱりHHEM民じゃないか』『カプカプかわいいなおい』『クソデカレベルアップくん』『レベルアップするのはえーな』『対戦モードだと早い』

「対戦モードではハンターのほうが強いからね。レベルアップしない

と瞬殺されちゃう」

けれど――。

定点観測するものがない海では、ハンターとサメはお互いの位置がわかりにくい。

いまのところは目についた”餌”を食べることに専念するのがよい。

チラリと嘉穂ちゃんを見てみると、「あう」とか「うう」とか言いながら操作していた。

いまだ慣れぬか。

しかし、手は抜かぬ。

サメだけに手は退化しちゃってるけど。

陸のところまで逃げ切った観光客を、ぴちぴちと飛び跳ねながら陸を進み容赦なく食べる。

陸のままだとスリップダメージを受けるので、華麗に去るぜ。

ぼよんぼよんと跳ねながら陸地の結構奥深くまでいっちゃうサメの姿は結構シユールだ。

「カオリちゃん。もうそろそろボク勝っちゃうよ〜〜」

『いいドヤ顔してるな』『一方、カオリちゃんは……ふむ』『二窓で見るのはさすがに疲れますな』『ああ、でもこれはわりとカオリちゃんもうまくね?』『配信は初心者でもゲームは初心者じゃないんだろ』『あんまりカオリちゃんのことをヒロちゃんの枠で言うのは反則っぽいけどな』

まあ今回は隣に実物がいるし、別にいいんだけどね。

さて、宣言どおりボクは勝利条件である規定人数の捕食の半分ほどを終え、急速にレベルアップをしていた。このまま逃げ切れれば余裕の勝利だ!

「人、人、人、カプカプさせろ〜〜っ!」

リアルでは巨大な質量を持つ小型クルーザーを見つける。

でっぴり太ったおばさんが「ヘルプミー」とお決まりのセリフで叫んでいるのが聞こえた。

ボクは嗜虐心たっぷり突撃する。

と、爆発。

波しぶきが柱のように撃ちあがり、ボクのサメも跳ねるように浮き上がった。

ダメージ。赤。

「機雷なんて嫌い！ だいたい観光客がひっかかったらどうするんだよ！」

『ゲームだからそのあたりは考えたら負け』『最近の小学生っておつきんくさいのかな』『ヒロちゃんは最初から寒いギャグが個性だったよ』『個性ってなんだろうな』

なんだろうなじゃないよ！

ともかくダメージを受けたなら回復しなきゃ。

クルーザーまでは指間の距離。ダメージを受けてスピードが落ちてるけど、海の上の人間を屠ることなんてたやすい。

あっさり捕食。ヘルプミーおばさんは胃の中に納まった。

ダメージは回復し、ボクはひとごちつく。

でも――。

隣にいながらにして、ほとんどしゃべることの無かった嘉穂ちゃんが唐突に

「整ったであります」

と、澄んだ声をあげた。

整った？

なんだそれ。見つけたとか。師匠強すぎでありますとか、そういうんじゃないかって。

さながら、お題に対して解法が見つかったとかそういう類の答えのような。

足元がぐらつくような不安定感。いや不安感を覚えた。

海だし、サメだから足ないけど。

「なにが整ったのかな」

お行儀が悪いけど、リアルで隣にいる嘉穂ちゃんに聞いた。

「師匠を倒す方法であります」

「弟子のくせに生意気な」

「べつに勝つてもかまわないであります?」

「やれるもんならやってみるがいい」

ボクの弟子。反抗が速すぎる。

『ヒロちゃんの余裕のなさよ』『ヒロちゃんって師匠ポジ向いてないんじゃない』『エイム力だけでは師匠にはなれない』『幼女先輩に戦略を教えてもらえなかったのかな』

「幼女先輩は最近忙しそうなので遊んでももらえません」
しゅん。

『かわいそう』『かわいそうかわいい』『幼女先輩は泣きながら応援してくれてるさ』『先日、アメリカの大統領と楽しそうにFPS配信してたぞ』『マジかよ』

マジかよ!

あとで幼女先輩に連絡とろう。なんでボクとしてくれないのって抗議の電凸しよう。

ともかく、いまは目の前のことに集中だ。

ボクに高度な戦略なんて求められても困る。プロゲーマーじゃないんだからさ。

ただ、今日配信を始めたばかりで不安いっぱいであるはずの嘉穂ちゃんに負けるなんて、師匠としてのプライドが許さないよ。

ボクの戦略はただひとつ。

人を見つけて食べる。見敵必食。これだけだ。

あと残り数人食べたらボクの勝ちなんだから、もう勝利は目の前だ。

「師匠。もう逃げられないでありますよ」
ゾワつとした。

海の遥か向こう側から嘉穂ちゃんが操るハンターの船が見える。

その船は鋼鉄製のごついやつで、頭には銃座がついていた。
火線が伸びる。

「サメ防衛!」

サメの肌はレベルアップすると銃弾さえはじく。

そんなか細い攻撃じゃ百万年経っても倒せないぞ。

とはいえ……、ちよつぴりダメージを受けて痛い痛い。ちくちく痛い。

なのでここは転進する。いわゆる戦略的撤退というやつだ。

嘉穂ちゃんは。

その横顔は不敵に笑っていた。

ハンターの船が追ってくる。

槍のように突き出された船頭で突撃されたら大ダメージは必至。

逃げる。

火線をよけながら捕食対象を探す。

ハンターを倒すよりそっちのほうが手っ取り早い。

いた！

距離にして三百メートル。

サメならすぐに到着する距離にヨットに乗った人間が慌てふためいてる。

「もらったあああああ！ ああああああああああゝゝゝ」

最後のは、やつちまったという絶叫だ。

ドバああああん！

という爆裂音とともに、ボクはまた機雷につかまった。

空中遊泳をしようボク。

シャークネードのように空を泳げるわけもなく、打ちあげられてるときには操作が一切効かない。

つまりスタン状態になる。

まさか嘉穂ちゃんはこれを狙って――。

「ちよ、ちよつと待って。待って！」

「一度言ってみたかったであります……、パンツアーフオーでありますー！」

「ああゝゝゝゝゝゝゝゝゝつ!!!」

槍のように尖った船頭にぶっさされ、ボクはあえなくお陀仏となったのでした。

敗北。

敗北の二文字。

弟子に負けちゃった。

『悲報。弟子に敗れる師匠』『師匠襲名から引退まで秒でおこなうヒロちゃん』『ヒロちゃんは一試合目は遊ぶからな』『最初から最初まで遊んでるわけですが』『涙目なヒロちゃんがかわいそうかわい』『ほんとに勝つやつがあるか!』

「で、でも勝つてもいいって言ったであります」

「そうだけど。そうだけどお〜〜〜」

ボクにもプライドというやつがあるんだよ。

でも、ボクのこころの傷はどうであれ、嘉穂ちゃんはあっけなく百万人ほどの登録者数をその日のうちに獲得することになったのでした。

——下剋上ヒロチューバーとして。

当初の目的は達成できたわけだけど、なんか納得できない。

もうボクはゲームでも勝てなくなっちゃったかもしれない。

☆
☆

その日の夜。

ボクは雄大と電話していた。雄大と門司港で会う約束は五日後。忘れていたわけじゃない。

『カオリちゃんって誰?』

「ぼくの弟子だけだ」

『弟子とかいたか? おまえ』

「今日できたんだよ」

「また変なことに巻き込まれてないか?」

「巻き込まれてないと思う……」

『というか、自分から頭つつこんでってないよな。今日のサメ配信みたいだ』

「つつこんでないよ……たぶん」

『ほんとにかよ』

「ほんとだよ」

雄大のため息がかすかに聞こえてくる。

『おまえってチートを得てから、際限なく手を広げようとしてないか』
「そんなつもりはないけど」

『人類だって勝手にやってるんだから、お前もそんなに無理して助けたりする必要はないぞ』

「無理してるつもりはないよ」

『おまえはいつも無理してないって言いながら限界まで無理するタイプだからな』

「そうかな」

『そうだろ。それで、一気に気が抜けた炭酸みたいになって引きこもりになる』

「否定はできないかも」

『まあ今のおまえの力を考えたら、よっぽどのがない限り大丈夫だとは思うんだがな』

「そりゃあね」

ヒイロちからは累積されていく。

ボクは際限なくレベルアップしているし、たぶんもう核ミサイルが直撃しても死なない。

『でも、お前の周りはそうじゃないからな』

「そうだね」

『おまえのお弟子ちゃんのこと守ろうとしてんのか？』

「うん。今日のゲームじゃないけど、ちよつと”人喰い”されてたっほいからね」

『だからヒイロゾンビとして”人気”を手っ取り早く集めたかったわけか』

「そうだよ」

『なるほどな……』

しばらく考える間。

無言の時間だけど、親友である雄大との距離感是十分理解している。

焦ったりすることはない。
けれど。

次の言葉を聞いたとき、ボクはドキリとすることになった。
『福岡には“人喰い”の噂があるみたいだぞ』

ハザードレベル146

雄大から教えてもらった”人喰い”の噂。

ただの興味深い噂としておくにはあまりにもタイムリーな話題だ。もちろん現代人たるボクはソースを聞きました。

ソースといっても、とんかつとか醤油とかそういうものでないのはおわかりですね。

——情報ソース。

その情報の出どころを聞いたのだ。

雄大からの答えは、これもまた単純で、ある匿名掲示板とのことだった。

考えてみれば当然で、いま雄大は門司港に向けて山口県あたりをえつちらおつちら徒歩で近づいている途中で、福岡にすら近づいていない状況。

ただ、本州はネット関係はほぼそのまま残存しているわけで、今日のお天気予報よろしく、行く先々のゾンビ情報を調べながら近づいているらしい。

ゾンビ予報とかそんなの知らなかったんで、ボクは『へえ』と感心すらしした。

ヒイロゾンビでもない雄大としては当然の成り行きだ。

それで——。

その一環として掲示板の情報にたまたまぶち当たったというのが正確なところらしい。ボクも命ちゃんもゾンビに襲われないからか、そういう人間側の事情にはうといところがあるんだ。油断しているといわれればそれまでかもしれない。

ともかく、くだんの掲示板を覗いてみた。

【福岡いいとこ】 ヒロちゃんといっしょにバーチャルで旅しようスレ【一度はおいで】

おい、さりげなくボクの名前が入っているんだけど。

どうやらボクが福岡に行くことはかなり全世界規模で広まっているらしい。アイドルや宗教家や政治家が移動するだけで記事になっ

ちやう感じかも。

まあそれはいいとして、中身中身。

1 : ID : j2TdIVXG9

ヒロちゃん来たる！

福岡の諸々、良いところ悪いところを募集中！

当方、福岡在住の一般市民なり（ちな人間）

もしヒロちゃんに福岡の良いところを尋ねられたらと思うと心配なんだよ

ヒロちゃんの定住化を目指すために最強の福岡紹介テンプレートを作成したい！

2 : ID : BXj3I8S8v

乙

3 : ID : BDloYks2H

前の世界と違うから現福岡民じゃないと答えられんよな

4 : ID : Bp5wYxzzK

福岡の良いところ

飯が旨い

博多ラーメン

博多めんたいこ

もつ鍋

鳥刺

ヒロちゃんって食いしん坊なイメージあるからこのあたりで楽勝
ニコマ堕ち

5 : ID : BrT5uS99O

九州内ヒエラルキーでは一位なんじゃないか

6 : ID : mKAr9cXwJ

二位は熊本

7 : ID : YrF99Z055

は？二位は長崎なんだが

8 : ID : MsOfYCXlI

アホどもめ。二位の地位は佐賀に決まってるだろ
もはや佐賀が一位までである

9 : ID : OaGUUkKUG

ヒロちゃんがいるからって調子のんなよ佐賀民

10 : ID : 223FIV194

緋色様がいらっしやる時点で、世界の中心地は佐賀ですよ
そんなの常識でしょう。愚民どもが

11 : ID : nGLvNiK6T

また九州内のヒエラルキー論争かよ
暇人どもが

ストレッチはそれぐらいにして福岡のいいところを出せよ

12 : ID : aYIAhYaX8

福岡って秩序の回復はどうなん？

13 : ID : gI4HLB2DU

それなりに回復してる

ゾンビ○

ネット○

電気○

お金○

物流△

14 : ID : 9 c M Y 1 S 8 r 5

ゾンビ○てどういう意味だよw

15 : ID : W 9 B e X z g a O

知らんけど福岡民でないおまえには関係ないよ

16 : ID : Q 4 t z X c r 5 X

知らんけど童貞のおまえには関係ないよ

17 : ID : R k M 1 L u G Y m

福岡お金使えるのか

お肉券とかお魚券とかしかないうち(埼玉県) って・・・

18 : ID : h 0 O e R y K m u

>>>17

埼玉のどこ？

19 : ID : + R 0 x 2 I / Z 9

上里

20 : ID : M d Y T K k t 9 s

ああ実質群馬の……

☆
||

なんだ実質群馬って……。田舎ってことか。

久留米が実質佐賀と言われているのと似ているな。

そのあともどこの県がいいとか悪いとかの話がグダグダと続いて

いる。

ただこれはボクに余裕があるからそう思えるのであって、一般的な感覚だとまだまだ復興中って感じなのかもしれないな。

ええと、例の”人喰い”の噂はもう少し後らしい。

☆Ⅱ

103 : ID : z c Y C H m v L 6

そういや福岡には”人喰い”がいるって噂聞いたことあるな

129 : ID : n s C r B g Z h /

>>>103

ゾンビの話か？

133 : ID : z c Y C H m v L 6

ゾンビに食われたとかそういう話じゃないらしい
人が人のカタチをしたものを食べるという話

141 : ID : X C 6 V C g 2 A Z

いったいどこから聞いた話だよ w w w w
ゾンビじゃあるまいし

154 : ID : w z X a D J w S 4

カーニバルダヨ！

185 : ID : z c Y C H m v L 6

フツーに友人の友人から聞いた話だが

202 : ID : Y Q I N c Y 4 D O

ヒロちゃんが現れるまでの数か月は異常行動に走るやつも多かったからな

カニバルなやつがひとりやふたりいてもおかしくないが
いまの復興期に人肉モグモグする異常性愛者がいるのかって話
いても普通にゾンビ刑にするか刑務所っぽいところに閉じ込める
か

あるいは処分するかだな

231: ID: Oc4LCPBxF

友人の友人とか嘘松すぎる

zcYCHmvL6はNG推奨

255: ID: C0iqt+Vp2

人を喰ったような話だ

280: ID: ijBed6lnO

ヒロゾンビが人間食ったりした例ってあるのかな

いや食べた瞬間にそいつがヒロゾンビになって抵抗すれば厳し
いか?

昏睡させればワンチャン?

309: ID: 7a5jge7gB

ヒロゾンビが人間を食べたって話は聞かないが

刑務所っぽいところに入れられたって話ならあるぞ

336: ID: ijBed6lnO

ヒロゾンビを閉じこめておくとか無理くね?

352: ID: uWg2QSV9q

>>>336

わしヒロゾンビだが、クソ雑魚不人気ヒロチューバーなので、

鉄格子を曲げることすらできません

一部の人気者以外は普通の人間と大してかわりませんよ

362 : ID : 7qXN9163b

絵画的にはヒイロゾンビがヒイロゾンビを喰うっていうのも”人喰い”になるかもなー

ヒイロゾンビって再生力えぐいし、不人気でも再生力は普通のゾンビ以上だろ

370 : ID : KFXTSsAkS

>>362

無限に食べられるね

ヤバいですね☆

403 : ID : CIdVoiOJR

アメリカの大統領が普通にヒロちゃんに連絡とって

ヒイロゾンビの処遇をUSAの法律に基づいて裁いたとか言ってた

なんで日本の小学生に聞いてんのって思ったけど

428 : ID : Av0nV7NW5

なんでカーニバルすんだろ

普通に人肉よりうまいのあるだろ

440 : ID : ZJt8Ywayl

おまえ人肉食ったことあんのか？

禁忌の背徳感がいいんだろ

452 : ID : pBqGBKfmZ

喰われるのがいいって人もいるかもしれない

高校生の娘さんがいる熟れた人妻の家元が

抱きしめられて、おまえを食べたいと耳元でささやかれ堕ちていく
厳格な母として娘を育てた家元が、口元に笑みを浮かべ自嘲気味に

言うのだ

「ふしだらな母と笑いなさい」と

家元かわいいよ家元

473 : ID : bAJ0q74AT

おまえが家元好きなのはわかったから

☆
||

うーむ。関係ありそうなところを抜き出してはみたものの、正直これだけだとなんにもわからないな。カーニバルだよってことぐらいしかわからない。

それと家元ってなんだよ（哲学）。

ただ、ボクが出てくる前は異常事態だったから、食人行為も行われた可能性はあるだろう。

いまはボクがいるから、ゾンビ禍は収まるだろうという見込みが強い。

つまり、食人がそのまま殺人行為として同値であるならば、通常の刑法199条に基づき、殺人犯として裁かれる算段が強いだろう。

福岡ではお金すらも機能しているって話だし、さすがに裁判まではおこなわれていないかもしれないけど、略式のそれっぽいことはしているんじゃないかな。

もしも、カーニバルがしたくてしたくてたまらない変態さんがいたとしても、いまは我慢するというのが合理的な気がする。食人っていうサイコパスなことをする人って、自分の性欲が満たされることに対して計画的だから、たぶん不合理なことはそんなにしない。

だから——、”人喰い”の噂も過去のことなんじゃないかな。

いまのことって断言はされてなかったしね。

嘉穂ちゃんの件について言えば、登録者数が100万を優に越え、いまでも伸び続けている。ボクの弟子という立場と、あの特殊なキャ

ラがウケたんだろう。複雑な現代社会ではなにがウケるかは運次第などところがあるとはいえ、ボクと誼があるというのはそれだけ強いということだ。

嘉穂ちゃんをパワーレベリングしちやった。

多少の不公平感はあるだろうけど――。

ともあれ、これで嘉穂ちゃんはいわゆるスーパーヒーロゾンビになったわけで、さつきまで魔法が使えたといって浮かれていた。すごいでありますと連呼し、ふわふわと浮き上がって光線みたいなのをまき散らしていたからね。

人間の領域が近いから自重してほしいとは思ったけど、とりあえず一般市民に襲われたくらいでは死なない程度には強くなったと思う。究極的には嘉穂ちゃんを生首状態にした犯人について明らかになつたほうがスツキリはするけど、みつからなかったとしても犯人に害される可能性はほとんどないだろう。犯人が表では人気者のヒーロゾンビで、裏では人を食べているなんてことがない限りは、ヒーロゾンビのなかでも強い。

当初の目的である嘉穂ちゃんのお姉さんを探しにいつでも問題ないだろう。

月夜が照らす真夜中。

ボクは屋根にあがってこつそり”壁”を見ていた。

ゾンビの世界と人の世界を隔てる”壁”。

赤錆びた物々しい鉄骨で組まれた”壁”は物々しくゾンビを拒絶する。

明日は、向こう側に行つて、ヒトに会つて話をする。

陰キヤとしては、少々つまみもあるものの、お姉さんを探したい嘉穂ちゃんにつきあう形だ。

ボクといっしょにいると必然的に嘉穂ちゃんがカオリちゃんだと気づく人もいるだろうけど、ひとりで探しに行つて、誰かもわからない犯人に見つかる可能性も考えると、ボクが抑止力になったほうがいいと考えた。

「さーてボクも寝ようかな……」

と、そのとき。

ボクのスマホがプルプルつと震えた。

ピンクちゃんだった。

もうそろそろ寝る時間なのに、ピンクちゃんよく起きてるな。

「あ、もしかして？」

『ピンクは大変遺憾の思いが強い』

「え？」

『ピンクは残念だ』

「ごめん。言ってる意味がよくわからないんだけど」

『弟子の件』

「ああ、その件ですか」

ピンクちゃん、お怒りのようです。

とはいえ、理知的なピンクちゃんのこと、ボクが一連の出来事を話すと納得はしてもらえたようだ。八歳児なのにピンクちゃんって理性的だよな。ボクがピンクちゃんと同じころには、お空の雲っておいしそうだなあとか考えていたよ。

『ううむ。"人喰い"か。ピンクは心配だ。ヒロゾンビも無敵じゃない。食べられてしまったら死んでしまうぞ。死ぬとすごく痛いぞ。違うか。痛いとすごく死ぬぞ』

「それはそうだけど、再生する端から食べていくって相当難易度高いと思うけどね。食べるスピードが追いつかないと思うよ」

それに、ヒロちからの応用で、バリアを薄く常時張っていれば、刃物とか銃弾も通さないしな。

「佐賀に帰ってくるのが一番安全だ。誰だってそうする。ピンクだってそうする」

「嘉穂ちゃん——ボクの弟子のカオリちゃんなんだけど、彼女がお姉さんを探したいんだって」

「つまり、犯人に見つかるかもしれないし、サイアクその姉が犯人かもしれないのに捜そうとしているわけか。ヒロちゃんが付き合う必要はないと思うぞ」

「そりゃ……弟子ですしおすし」

「だから弟子にしたのか。自分からしがらみを作っていくスタイルと
いうやつだな」

「まあ、そんな感じ」

「ピンクとしてはヒロちゃんの行動を制限するつもりはないが、その
”人喰い”がジユデツカだという可能性はないのか？」

ジユデツカ。

ゾンビ禍が起こってから、ボクが出現した後。

ずーっと影のようにボクに粘着している、たぶんボクのアンチ。

そんな言い方をするとたいしたことない組織だと思うけど、あの空
母ではテロの手引きをしたりと大変厄介な方々のようです。

自衛隊を半分に割ったり。

その自衛隊を使って九州を停電させたり。

ネットが命な陰キャにはひどいことをしました。

ただ、幼女先輩を基点にして、最近、その自衛隊のにらみ合いは終
わった。

いつのまにか向こうのトップがいなくなっていたんだよな。

表の日本におけるジユデツカの影はなくなったように思う。

「自衛隊の半分は解散したし、ジユデツカの部隊みたいのはいないん
でしょ」

『そもそも組織というような固いものではないからな』

「ボクとしては”人喰い”っていうのはずいぶんと属人的なものだと
思うんだけど。そいつの趣味っていうかさ。そいつだからするって
側面が強くて、ジユデツカみたいな他者がかかわる領域ではないとい
うか、そんな感じがしない？」

『ジユデツカはヒトの心の隙間に入りこむバグのような存在だ。例え
ば”人喰い”が他人に言えない昏い趣味だとすれば、その隙間を埋め
るような甘言を使うかもしれない』

「あなたの趣味を肯定しますって？」

『そうだ』

「ジユデツカって何がしたいんだろう」

『ピンクにもわからない。やってることはテロだが、テロにしたって

新しいビジョンがあるはずだろうにな。例えば、世界を緑あふれるようにしたいとか。クジラを殺さないとか』

『ゾンビを殺せとかじゃないの。ヒロゾンビも含めて』

『だったらもう遅いな。ヒロゾンビを一人残らず殺すのはもはや無理だろう』

「あの船が最後の抵抗だったりして。どうしようもなくなっただけであきらめたんじゃない?」

『ピンクとしてはまだあきらめたという気はしない』

しかし――。

相手側の首魁がどこのだれかもわからない以上、どうしようもない。い。

誰かの悪意が充満していると思うと、この世界は怖い。

でも、ピンクちゃんみたいにボクのことを心配してくれる子もいる。

「おみあげ何かほしいものある?」

とボクは無理やりに話を転換した。

ピンクちゃんは敏い。すぐにボクの意図に気づいて答えを返してくれる。

『ピンクは博多ラーメンの本場が食べてみたいぞ!』

「ラーメンを出前するのはちよつと難しいかな。箱のやつでいい?」

『箱でいいぞ。あとは――、今回はヒロちゃんのわたくしごとだったから我慢したけど――、次は――、ピンクもいっしょに博多にいい?』

きゆうん。

思わず胸がしめつけられるような可愛さだった。

電話の向こう側でちっちゃなおてがスマホを握り締めている様が想像できる。

さすがピンクちゃん。幼女指数の高さは随一だ。

「いいよ」とボクは言った。

ほっこりするピンクちゃんとの電話も終わり。

とりあえず、恵美ちゃんや乙葉ちゃんからはまだかかってこない。ふう。弟子という存在にみんながイキイキ反応するから、もしかしたら全力でみんなから連絡くるのかと思ったけど、大丈夫みたいだな。

現代社会は連絡をとりやすいというのが良くも悪くもって感じだ。そういや、ボクの側からもできることがまだあったな。

せっかくの文明の利器。使わない手はない。

「あ、江戸原首相ですか。緋色ですけど。夜遅くにすみません」
そう、ボクはこう見えて、いろんな国のトップと連絡がとれたりする。

明日行くところの政治形態がどうなってるかくらいはわかっていたほうがいいだろう。

『ヒロちゃん。元気してるかな』

あいかかわらずダンディーなおじさまの声。

ボクのことをこころの底から慈しんでくれているのがわかるというか。

結構なヒロ友だよな。

いまではヒイロゾンビであるわけだし、なんだかんだいっても”人気”は結構ある。

「はい。元気です」

と無難にお返事。

『ヒロちゃんにお弟子さんがいたなんてビックリだよ』

「あ、実は今日できたばかりなんです。即席パワーレベリングしたのにも理由があつて……」

ボクは軽く経緯を説明する。

『なるほど、それで福岡がどうなっているか、日本が国としてどこまで把握しているかを知りたいわけか。ヒロちゃんが頼ってくれて、パパはうれしいよ』

さりげなくパパって……。

まあいいか。

「はいそういうことです。なにか気を付けないといけないことはありませんか?」

『うーん。特にはないな。今のところ各都道府県知事は既に実効支配しているものは問題がなければ追認、そうでないところは国が派遣する形をとっているわけだが、国に反抗するようないわゆるテロリストのような人物はいないよ』

「福岡県知事も問題ないってことですか」

『福岡は空席になっていたパターンだな。中真知事。45歳。若くて人当りの良い感じの男だ』

「ヒロゾンビですか」

『県知事クラスは全員そうだよ。いざというときにゾンビになっちゃいましたでは問題だからね。それにヒロゾンビはインフラ整備が急務なので、そういった地位にいたほうが望ましい』

「なるほど……」

人間に比べたらヒロゾンビのほうがコントロールしようと思えばできる。

しちやいけないことだけど、いざとなればできるカードがあるって安心感があるな。

「あ、あともう一ついいですか。首相」

「いくらでも頼ってくれていいんだよ」

そんなパパ活みたいない方やめろ。

一国の首相が言っていると考えると、ここはぐつとこらえてスマイルだ。

「ボクの弟子——、カオリちゃんにはお姉さんがいるんですが、お姉さんがどこで暮らしているかとかわかりますかね?」

『国の統合システムとして誰がどこにというところまでは把握していないよ。市町村の住基ネットも損壊しているところがあるだろうし、そもそも空き家にくっそり住んでるかもしれないしね』

「カオリちゃんのいたところの市役所はゾンビで埋まってると思います」

『だったら、やっぱり中真くんに会うのがいいだろうね。彼が独自に編纂しているかもしれない』

「わかりました。ボク、突然会いに行ってもいいんでしょうか」

『問題ないよ。わたしが連絡しておこうか』

「お願いします」

これだ。

これこそが大人の証拠。ボクは根回しができる大人なのです！

むふん。

『ところで、ヒロちゃん』

「ん？」

切ろうとしたところで、今度は江戸原首相から話しかけられた。

『わたしにもそのなんだ——ピンクちゃんや乙葉ちゃんみたいに、なにかそう指輪ではなくてもいいのだが何か欲しいのだが』

「……」

『なんでもいいんだ。なんでも。ヒロちゃんにプレゼントを贈られる。ヒロちゃんに信頼されてるといっただけでもものすごく違ってくるんだよ』

「配信中にパパって呼んだりするっていうのはどうですか？」

『キター————ん！』

「嘘ですよ」

『しよぼ————ん！』

この国、大丈夫か？

そんなことを思ってしまうボクでした。

☆
＝

今日は電話が多い日だった。

そろそろ午前零時を回る。

みんなとの連絡も終わり。

と、またスマホが震えた。

誰だろうと思ってみると、非通知設定。

とはいえ、ボクの電話番号を知ってる人は少ない。

200国の人たちにも教えてないからね。

陰キヤなめんな。

ネットリテラシーとかそういうんじゃないで、知ってる人そのものが少ないんだ。

つまり、ボクの知り合いがまちがって非通知でかけてきたのかなと思っただ。

違った。

「初めまして緋色様。わたしはジユテツカのトップ。イスカリオテのジユデイ」

敵の首魁さんからのお電話でした。

ハザードレベル147

「え？」

「ジュデツカの首魁を名乗る少女から電話がかかってきたとき。

ボクにできたのは間抜けな返答だけだった。

いや誰だつてそうなるって。普通、敵対関係にある人から電話はかかってこない。

暗躍というのがお似合いの謎の組織。

テロというド派手なことをしているけれど、どっちかというところは誰かをそそのかして、自分の意のままに操ってるって感じで、ジュデツカそのものは何もしない。

こそこそしているイメージがあつた。

表だった行動はするはずがないという思いこみがあつた。

それに――、なんて答えればいいのか。

答えに詰まる。

「やあやあこんにちわ。先日のテロはどうもでも答えればいいのか。」

「そんなわけねーだろ。人が死んでるんですよ!？」

「混乱の極みだったんだ。」

「ジュデイと名乗る少女は、一方的な宣言のような挨拶のあとは無言のままボクの返答を待っている。電話口からは不気味な沈黙しかない。」

「えつと……こんばんわ？」

「と、ボクは超無難な答えを返してみた。」

『「こんばんわ。今夜は月が綺麗ですね」』

「そーですね」

「見上げると、まんまるのお月さまが見える。」

「まさかどこかから監視されているのか？」

「文学的表現で言えば、夏目漱石がアイラブユーの代補的な位置づけとして「月が綺麗ですね」という言葉を使ったらしいけど。まさか敵の首魁にそういう意図があるとは考えにくい。」

『監視なんてしてイマセンヨ』

先回して答えられた。

声の調子はやわらかい少女のものだったが、どことなく平均的で、なんとなく違和感を覚える。

たとえとして正しいかはわからないけど、全人類の少女の声を集めて平均化したような、そんな完璧に調律された声だった。

『緋色様のお名前が夜の月。あなた様がお美しいからそう言ったのです』

「お褒めの言葉どうも。ジュディちゃんだっけ？ 女の子の声に聞こえるけど何歳？」

『13歳です』

若いというより幼いレベル。

謎の組織の首魁が13歳の少女って——。ファンタジーすぎない？

「いたずら電話ではないよね」

いちおうそういう可能性もなくはない。

例えば、ボクが電話番号を教えた人からなんかの手段を用いて電話番号を知り、ただ興味本位で連絡してきただけの少女という線も考えられる。

ジュテツカのことは散々、配信や掲示板で話題になっていることではあるし。実態こそ不明だが名前自体は有名だ。

『そうですね。少しばかりいたずらの要素はありますが——、わたしはただ純粹にあなた様とお話したいと思っただけです』

「ああそう。できれば、テロ行為は金輪際やめてほしいんだけど」

『善処いたしますわ』

どこかの政治家が言ってそうなセリフだよ。

しかし、ここで電話を切るという行為もとりにくい。

たぶん、ジュディは命ちゃんやピンクちゃんみたいな天才なのだろう。

どういうタイプの天才かはわからないけど、凡人のボクじや太刀打ちできないというのが肌感覚でわかる。ただそれでも、なにかしら情

報を得ておきたいと思った。

もしかしたら、その後の対処でプラスになるかもしれないし。

その程度の考えしか抱けないのが、凡人の哀しいところだけど。

「教えてほしい」とボクは考えをめぐらせながら言った。

『お答えできることはお答えしましょう』

『どうしてテロを起こしたの?』

『どうしてだと思えます?』

こいつ、質問を質問で返すなって教わらなかったのか。

しかし、慌てることはない。

会話のキャッチボールができないパターンは幼稚園の頃の命ちやんで学習済みだ。

「ボクのが嫌いだっただとか?」

『逆です』

「逆って?」

『わたしはあなたさまのことを好いているということですよ』

え、ええ?

好きってなんだよ。

普通、好きな子を襲ったりしないだろ。

もしかして、かわいさ余って憎さ百倍とかいうやつ?

あるいは、マナさんみたいな幼女スキ어가、かわいいものをついつい襲いたくなっちゃうとか言ってた。確か、キュートアグレッションとかいう。

もしかして、ボク、キュートアグレッションされちゃってるの?

人死んでるんですが、それは……。

『もちろん、あの久我とかいう元自衛隊の男が緋色様を憎んでいたというのとは事実でしょう』

「君自身は違うって? 部下が暴走したとかそんな感じ?」

『いいえ。あのテロも、自衛隊を割ったことも、まちがいなくわたしの意思でした』

「ますますわからないな。君はなにがしたいの?」

それには答えず――、しばらく沈黙が流れる。

普通に会話しているのに、どことなくズレているように感じるのは何故だろう。

それはボクが何をいうかあらかじめ予想しているかのような、会話の反応の速さによるもの。

天才だったら、そういうことはままあること。

それはわかるし、知ってる。でも、それだけじゃない。

会話のリズムが、微妙にズレている。

時々、ボクのような一般人が考えながら話すときのように、瞬間的に話すのが遅くなったりする。

そして——、続き。

『経済とは、愛だと思いませんか』

脈絡もなく。

因果関係もなく。

接続詞も関係ない。

「どういうことかな」

『経済とは交換価値を最大化させる営みです。そして人間にとって最大の価値とは己自身であるといえるでしょう。雇用関係を考えてください。雇われるほうは雇うほうに対して、自身の価値を高く見積もらせたい。つまり、自分を買ってもらいたいわけです』

「うん。まあそうかもしれないね」

『逆に他者に価値を感じ、何かと交換しようとする。それもまた愛でしょう』

「投げ銭とかスパチャのことを言っているのかな」

『そのとおりです。つけくわえさせていただければ、配信をただ見るという行為も消費という立派な経済活動ですけれども……。愛がなければそもそも見ないでしょう？』

「ふむ……」

『いずれにしても経済とは価値を交換することで成り立っています。物々交換のころから経済という概念は根本的には変わっていないのですよ』

配信が一方的供与ではないというのは確かだ。

ボクはみんなに『時間』を使ってもらってるし、ピンクちゃんもそんなことを言っていた。

「経済が愛だとして、それが？」

ジユデイの言い分は正直、ボクには迂遠すぎてわからない。

ただ、テロ行為の動機をおそらくは語っているのだろう。

『わたしには愛が見えないのです』とジユデイは平坦な声で言う。

「君にとっては、経済が愛とイコールなんだよね。つまり経済が見えないってこと？」

経済が見えないってなんだって話だけど。

『ヒトとヒトが価値を交換するという営みを実感として感じ取れないのです。つまり、わたしはゾンビのようなもの。あるいはわたしにとってヒトはゾンビのようなものなのです』

「独我論の話？」

おさらいだけど、独我論とは自分以外の存在に疑義を呈する思想です。

つまり、ジユデイにとって、他者はいない。だから、愛が見えないって話かな。

『そのとおりです』

「独我論は思考によっては解決できない問題だと思うよ。単純に、ふれあいっていうのかな。人と接触する回数を増やしてみたり、会話することによって信じる度合いを深めるくらいしか解法はないんじゃないかな」

なんで、敵の首魁にカウンセリングみたいなことしてるんだろう……。

『緋色様はお優しいんですね』

「優しいければいいってもんでもないけどね」

優しいって愚鈍って言いかえることもできるし。

マイルドに言えば、ポンコツってことじゃん。

『わたしは嫉妬したのです』

「何か嫉妬する要素あった？」

『緋色様が皆に好かれ、皆と価値を交換しあう。わたしにできないこ

とを大々的になされていらっしやるので、卑小なわたしは無様にも嫉妬したのですわ』

ジュデイの言葉は、シンプルにまとめるとそういうことらしいかった。

それが動機。

やっぱ、天才の考えてることはよくわからん！

夜空の下、ボクはため息をついた。

☆Ⅱ

次の日の朝10時。

関係各位の皆様には、敵の首魁からなんかよくわからない電話があったことを伝え、いろいろ聞かれたりしたけど、ボクは元気です。

なにげに一番シヨックを受けていたのは命ちゃんだったりする。

「わたしのセキュリティを突破するなんて……」

ということらしい。

確かにボクのネット関係は電話も含めて、命ちゃんにお願いしているからね。

どうしてかはわからないけど、ボクの電話番号を知っていたというのが脅威なのは確かだし、自分が構築したセキュリティが破られたのがシヨックだったのだろう。

ボク自身としては、案外、正体不明だった組織が、ジュデイと話したことによって急に等身大になったというか、言い方が悪いけど、少女のお悩み相談になったので、内心での脅威度は薄れてしまった。

——独我論を語ったりする13歳。

完全に中二病なんだもん。あるいは上品な言い方をすれば哲学系少女か。

いずれにしても、少女臭が半端ない。

もちろん、クツソ極悪なテロリスト集団なのは変わらないけどね。

彼女自身には殺意どころか人への関心すら薄そうだったけど、実際に彼女は教唆し——、あるいは共謀し——、人を害そうとしたのは事

実だ。

実際に人が死んでる。結果だけを見れば、テロリスト側の少女がひとり死んだだけでもいえるけれども、場合によってはもっと多くの人が死んでいたかもしれない。

少女らしい世俗から切り離された清廉さが、ある種の酷薄さにつながったという感じだろうか。

油断しちゃいけない……。とは思うものの、昨日の彼女はいささかも感情のブレが見受けられない声だったとはいえ、言ってる内容は切実だったようにも思うんだよな。

嫉妬が動機とは言ってたけれども——みんなと仲良くなりたいたいな自分も配信すればいいじゃんって思うんだけど、頭ん中ハッピーセツトになつてますかね。

うーん。考えすぎてもどうなるものでもないので、この件はいったん保留にしよう。

嘉穂ちゃんはそのあたりの事情はわからないので、特に伝えていない。

人喰いの噂についても同じく。

あの匿名掲示板の噂については本当に噂の域を出なかったからね。なんとなくそういうやつがいそうかもつくくらいで、都市伝説と同じレベルだ。伝えて不必要に怯えさせることもない。

弟子を守る師匠ごころです。

そのかいあつて、嘉穂ちゃんは今日も明るく元気な顔を見せてくれた。

「で、今日は県庁のほうに行くでありますか？ 師匠」

「そうだね」

ジユデツカの奇妙な動きもあるにはあるけど、だからといって逃げかえるわけにもいかない。

ボクには弟子の希望を叶える立場にある。

「いちおう江戸原首相のほうから中真っていう県知事さんに連絡をいれてもらおうようにしたよ」

「さすが師匠。首相とお話ができるなんてすごいですね」

素直な驚きと称賛が述べられる。

「まあそれほどでも」

ふ……笑うな。ドヤってしまつたら師匠としての威厳が崩れる。

「師匠のドヤ我慢顔、かわいいであります」

「む……」

バレてるだと。

それからボクたちはいつものように空を飛んで行くことにした。

人気度が急激に上がった嘉穂ちゃんも飛べるはずだけど、昨日の今日でいきなり飛ぶのはやはり怖いらしい。あたふたしている。

「嘉穂ちゃん。鳥のように羽ばたく必要はないんだよ」

「しかし、いままでの感覚とは勝手が違うので難しいであります」

嘉穂ちゃんはパタパタと腕を上下に必死に動かしている。

まあいままでの感覚とは異なる操作が必要だからね。

慣れるまではしかたない。

ボクが浮かせてあげてもいいけど、こういうのは自分でなんとかしたほうがいいんだ。

自転車の練習で、後ろを持ってもらうより、自分で漕ぎつづけたほうが上達が早いものといっしょ。

「先輩の教え方って、感覚派ですもんね」

「いやいやそんなことないよ」

「まあ飛び方を教えるなんて、人間に歩き方を教えるようなものですからね。言葉では説明しにくいところなんでしょうが……」

「そうだね。ボクも勉強とかだつたら教える自信あるよ」

命ちゃんには勉強を教えたことはないけどね。必要なかつたし！

☆
||

博多駅の周辺まで来たよ。

巨大な時計が駅の真正面に張りついていて、静かに時を刻んでいく。
ここはもう人間の領域なはずだけど、人の姿はまばらにしか見えない。

い。

本当は福岡の中心地だったらもっと人多くていいはずなんだけどな。

「そもそも経済自体がほぼ停止状態ですからね。このあたりは事務街のようですよ、そういったお仕事は全滅に近いのでは？」

「そうでありますな。もともと博多駅はどこかに行くときの出発点みたいなもので、ビジネスと食べ物を食べるお店が多いであります。文化的なところで言えば、天神のほうが強いでありますな」

で、ありますか。

「じゃあ住民のみなさんは何してんの？」

「端的に言えば、畑仕事などが多いのではないのでしょうか」

「いまさら一次産業？」

「お金が機能しているらしいので、完全に一次産業だけではないでしょうけどね。経済がある程度複雑でないと、三次産業は成り立ちませんし」

「経済は愛とか言ってる人もいたけど」

「先輩を経済的に養ったら、愛してるってことになるんでしょうか」

なんてことを言うんだ命ちゃん。

「それはいわゆるヒモというやつでありますな」

なんてことを言うんだ嘉穂ちゃん。

ボクはまだ経済的にはだれにも養われてないはずですよ。

「まあ養うのとは違うかもしれないですけど、今日、朝起きたあと、爆発していた髪の毛を丁寧に梳いてあげたりしたのは、まちがいに愛です」

「その節は助かりました」

「スーパーサイヤ人3みたいな髪の毛になっていたでありますからな」

苦笑じみた笑いを浮かべる嘉穂ちゃん。

あれはしかたないんだよ。

髪の毛の分量が多くて、コシがあるせいかどうかどうしてもそうなの。

最初、経済の話がなんで髪の毛の話になってるんだろう。女子高生のコミュ力の高さは恐ろしい。

それから、ゆつたりとしたペースでとりとめもなく会話しながら北に向かう。

何人かがボクたちの姿に気づいて、手を振ったりしてくれた。

ボクも笑顔で振り返す。いちおう配信者ですからね。

ファンサービスって大事。

県庁は博多駅から何駅か北上したところにあって、吉塚という駅から少し歩いたところにある。

そして、到着。

はつきり言つて、ボクの町との経済格差を見せつけられる感じ。

建物はご立派あ！の一言。

町役場とは比べるのもおこがましいほど巨大な建築物。

ただただ大きいってだけで、それは力を見せつける。例えば古代のピラミッドだって、大きくなければ力を示せないだろうし。

縦にも横にも大きいことはいいことだ。

窓の一枚一枚が磨き上げられてて綺麗だし。壁面にキズもない。

「うーん。お金持ってるね」

使いどころさんのだろうか。

そんな県庁の入り口のところ、めちやくちや目立つ恰好をした女の子が待っていた。

厳格な空間に合うといえは合う。

合わないといえは合わない。

ちようど、ロココ調というべきなのか、黒をベースに白いふりふりが使われたいわゆるメイド服だった。メイド喫茶のようなミニスカートではなく、ロングスカートなのもポイント高い。

古式ゆかしいメイド服だった。

なんで？ メイドさん。なんで？

着ている女性はたぶん若い。

20歳になるかならないかくらい。

肩口までかかるくらいの黒髪かな。上から見下ろすかたちなので

なんともいええないな。

少しきつそうな顔をしているけど、かつこいい系ともいえる。

スーツ姿で眼鏡でもかけていれば、完璧キャリアアウーマンだ。ただ古式ゆかしいタイプとはいえ、ファンシーさが香るメイド服なだけに、かわいらしい印象も感じた。

手を前のところで組み、静かにたたずんでいる姿はどこかの令嬢のようでもある。

——濃ゆいなあ。

いやまあ、着る服とかがなくてとかじやないだろうし、もしかしたら趣味なのかもしれないし、べつにいいんだけどね。

空にいるボクらに気づき、彼女が腰を折りたたむように一礼する。ボクらも上から見下ろすばかりでは失礼にあたると思え、急いで地面に降りた。

と、ほぼ同時に彼女の眼が大きく見開かれ

「嘉穂ー！」

嘉穂ちゃんも驚きの声をあげる。

「お姉ちゃん！ 生きていたでありますか！」

あつという間にお姉さんが見つかったらしい。

ハザードレベル148

荘厳なる佇まいと言つていい県庁の建物は、現代のお城といつてもいいかもしれない。

もちろん、そんなことを考えるのは田舎者だけ。

つまり、ボクも田舎者!?

なんとなくそんなことを思ったのも——、メイド服を見かけたからだ。

メイド喫茶のようなミニスカではなく、ちゃんとした時代ものの。わずかに末広がりしていく腕のあたりに、黒一色のベース。そして白いフリル。

わが愛弟子、嘉穂ちゃんのお姉さんは、メイドさんだった。

ここはコスプレ会場とかではなく、異世界でもないから、違和感半端ない。

そんな姿で県庁の目の前——ガラス張りの扉の前で、すつと静かにたたずんでいた。

いや、まあそれはそれとして、嘉穂ちゃんのお姉さんが見つかったのは喜ばしいことだ。

これつてもしかしなくても、ボクの連絡ミスだよな。

喜びあい、抱き合う姉妹の姿は美しく——そういう感動の裏側では、ボクが首相に『バーチャルキューチューバーのカオリちゃん』としてしか、話を通してなかったことに気づいた。春日居嘉穂ちゃんという本名を伝え損ねていたんだ。

確か、ピンクちゃんには本名を告げていたんで、なんとなく首相にも告げている気分になっていたというか。はい、凡ミスです。

もし、伝えてたら——、お姉さんも嘉穂ちゃんもここまでサプライズな展開にはならなかっただろうから。

ただ、これは考えようで、首相に本名を伝えなかったことは、ひいては県知事さんに名前が伝わらなかったことで、お姉さんも知らずに待っていたのだろうから、悪くないかもしれない。嘉穂ちゃんは生首状態で発見されたわけだけど、いっしょに暮していたらしいお姉さん

もアヤシイといえばアヤシイ。犯人はお姉さんかもしれないんだ。ただ——それはうがった考え方だろうか。

「おねえちやあん」

ぐりぐりと、若干控え目な胸に頭を押しつける嘉穂ちゃん。

そして、うるつと瞳が光っているお姉さん。

そつと抱きしめる手元は、喜びのせいか、わずかに震えている。

うーん。さすがにこの反応は、食べてませんよね？

心理的動揺があるなら、おそらく普通は戸惑いのほうが大きいはずだ。損傷の激しいゾンビがどこまで記憶を保持しているかは曖昧で、けつこう個体差が激しい。

つまり、犯人視点で嘉穂ちゃんが記憶を保持しているかは不明であり、当然、犯人としては記憶を保持しつづけている方向で考えるだろう。犯人であれば弾劾される恐怖こそが先んじる。

復讐しにきたのか、とか考えてもおかしくない。

そういう反応ではないということであれば、お姉さんは”白”ということで問題ないだろう。

「ところで、お姉ちゃん。眼鏡はどうしたでありますか？」
なに眼鏡だと。

確かにお姉さんの目元はちよつとキツめだから、眼鏡とかをかけたほうが似合うだろう。

眼鏡つこの美人なお姉さんとかうらやましすぎるぞ。弟子よ。

「ああ、眼鏡ね」

メイド服には謎のポケットがたくさんある。

どこからともなく、銀縁の眼鏡を装着するお姉さん。

やはり、目元が柔らかくなって似合ってるな。

「実をいうと、いまは伊達眼鏡なの。私もヒイロゾンビだから」

なるほど、ヒイロゾンビになると、身体的な状況はわりと”人気”がなくとも作り直せるからな。視力を回復させるくらいいたやすい。意思の力でとどめおくことも可能だろうけど、このあたりは自由だ。

「嘉穂ちゃん、よかったね。お姉さんが見つかった」

「はいでありますー！」

満面の笑みを浮かべる嘉穂ちゃんに対して、お姉さんのほうは薄く上品に笑んだ。

仲良し姉妹だったのかな。

性格はだいぶ異なるみたいだけど。

「名乗り遅れました。わたしの名前は、春日居野愛（かすがい・のあ）と申します。以後お見知りおきをくださいませ。妹のお師匠様」

さすがにカーテシーではなかった。

手を前に組んだまま、丁寧な礼をただけだ。ただそれだけなのにものすごくサマになっている。

本場のメイドさんを知らないボクだけど、本当にメイド業をしているんじゃないかって思えるくらい。挨拶ひとつとってもプロっぽい感じだ。

「夜月緋色です。嘉穂ちゃんのお師匠になったのは、なんかノリです……へへっ」

ボクは小学生ムーブで、いつもと同じです。

あまりに丁寧すぎても、びっくりするだろうから、これでよいと思います。

それにしても——どうしようかな。

江戸原首相にお願いして、中真さんというまだ見ぬ県知事につないでもらったのは、嘉穂ちゃんのお姉さんを見つけるためだった。

その目的が達成した以上、ほとんど会う意味はなくなったともいえるけど、昨日の夜遅くにあえて連絡をとってもらったことを考えると、いまさら会わないのも悪いな。

野愛さんをここに迎えさせてくれたのは、中真知事の指示だろうし。

それに——、犯人捜しという意味では、まだ調査は終わってない。

このあたり一帯の情報に詳しいだろう知事に会うのも悪くはない選択だ。

「ただ、それも知事が犯人でなければの話です」

ほそつと呟くように告げたのは命ちゃんだ。

どんな可能性だよって話だけど、まあなくはない。

それにお姉さんとちがって、もしもしがらみとか関係ないパターンだったら、さつきみたいに相手の反応パターンでは見分けがつかないかもしれない。

どういうことかというのと、人間を『お食事』としてとらえているということは、人間として見てないってことかもしれない。そんなサイコパスな人間がわざわざひとりひとりの人間の顔を覚えているのになってこと。

つまり、あの生首状態で打ち捨てられていた状況は——単純に”飽きた”とか、そんなくだらない可能性だってあるんだ。

だとしたら、嘉穂ちゃんが顔をだしたところで、まったく驚きもなく、感慨もなく、無感動に相對することだって考えられる。パンを食べる人間が、たまたま視界にパンを見かけたからって、驚きもしないのと同じだ。

「それでは、こちらへ」

「あ、ちよつと待つてください」

中に案内しはじめる野愛さんに、ボクは待ったをかけた。

「げんそうな表情になる野愛さん。」

「なにか問題がございましたでしょうか」

「確認なんですけど、嘉穂ちゃんと野愛さんっていつしよに住んでいたんですよね」

「そのとおりでございますが」

まさかいつしよのベッドで寝てましたかとまでは聞かないし、言えないけど、ゾンビハザードが起こったとき、日本では深夜近くだったことは間違いない。

しかも、夏休み。8月1日前後のことだったはず。

嘉穂ちゃんがグレてどこかに家出でもしていなければ、普通はいつしよにいたはずだ。

それに女子高生の一人旅というのも、若干考えにくい。まあこれについては嘉穂ちゃんの行動力次第ではあるけれども。

「ゾンビハザードが起こったとき、ふたりはどうしてはぐれたのかな」「そうですね。わたしと嘉穂は8月15日ごろまではいつしよにいま

した。最後の日に立てこもったコミュニティが崩壊して離れ離れになったんですが……。嘉穂はそのままです。どうしていたの？」

最後の言葉は、嘉穂ちゃんに投げかけるものだった。

嘉穂ちゃんは「お姉ちゃん」とだけ言って、口をつぐんだ。

野愛さんが犯人であるからというよりは、ボクがどう話をもってい
くかわからなくて待機したんだと思う。たいした弟子だよ。

「嘉穂ちゃんは生首状態で見つかったんです」

と、ボクは端的に事実を告げる。

「生首……とは？」

「そっくりそのまま字義どおり、首から上の状態で見つかったってこ
とです」

「嘉穂はゾンビになっていたということですか」

「そうです。しかも、誰かに殺された可能性が高いかな」

「だから、わたしが殺した可能性もあるという話ですか」

わずかに不快そうに顔をゆがめる野愛さん。

誰だって妹を殺した可能性を問われれば、ひどい侮辱に違いない。

「野愛さんが殺したと思っっているんだったら、そういう話はしないよ」

「それもそうですね。しかし、誰が殺したかはわかっていないと」

「そういうことです」

「中真様のもとへ行こうとしたのを止めたのは、犯人だと疑ってらっ
しやるからですか？」

そこが不快の源泉らしい。

野愛さんにとっては、中真さんはたぶんご主人様ポジションにいる
人。

おそらくは慕っているのだろう。

いや、これって下手すると自分のこと以上に、敬愛しまくってるパ
ターンじゃないか。

じつと見られると、にらまれてるようでツライ。

「中真さんとは会ったこともないし犯人かそうでないかはわかりませ
ん。ただ、嘉穂ちゃんの記憶はゾンビハザード以降のやつがほとんど
残ってないみたいです。だから、誰が犯人かわからないモヤモヤを抱

えたままになる可能性もあるかなーって。ゾンビハザード以降の嘉穂ちゃんの動きがわかれば、犯人のめぼしもつけることができるかなって思ったんです」

「なるほど……もう少しわたしと嘉穂が離れ離れになる直前の話をしたほうがよいようですね。こちらへどうぞ」

門の前は人の姿はほとんどなかったけれど、それでもやっぱり何人か行き交う姿がある。

ボクを見かけると、芸能人を見るみたいに、おそろおそろ覗き見る人たちがいたけれど、さすがに込み入った話を聞かせるわけにはいかないだろう。

野愛さんが案内してくれたのは、事務カウンスターの奥にある小さな会議室のようなどころだった。

ホワイトボード。隅においてある二重らせんを描いている観葉植物。長机。そしてパイプ椅子。

広さは8畳くらいかな。

「座らせていただきます」

「はい」

「お茶もお出しできず申しわけございません」

「タイミング的に難しかったと思うし大丈夫です」

ボクがかき乱してるしな。

「それで早速ですが——当時の状況を話してみたいと思います」

★
||

ゾンビハザードの起こる前。

当時、ふたりは絵にかいたような貧乏暮らしをしていた。その日の食べ物にも困るといふほどではなかったが、明らかに一人用といったアパートにふたりで暮らしていたのである。

壁は薄く、隣家の生活音が聞こえてくる。

いつのまにやら虫が這い寄ってくるような、ボロボロのアパートである。

そうなるのもやむをえない。

春日居野愛は、まだ若い。今年23になったばかり。

非正規雇用の賃金などたかが知れていた。

ツライと思ったことは正直あるものの、野愛にとって嘉穂は唯一の家族だ。

両親が早世してからは、野愛が母と父の代わりをしてきた。

なんとか、嘉穂だけには苦勞をさせまいと必死だったのである。

——その日。

世界が変わったその日も、隣家の呻き声から始まった。

いつも酒くさい声で、たまに深夜にカラオケ大会をひとりで開くあの独身男性。

顔をあわせると、時々じつとりとした視線で野愛や嘉穂をみてるあの未婚のおっさんの声である。こちらが見返すと、そそくさと部屋の中に入っていくような気弱なところもあるが、正直なところ、こちららほうら若い女性ふたりである。

男というだけで怖い。だから、表だつて抗議したことは一度としてない。

管理会社に連絡してみてもなしのつづて。

つまり、引つ越すしかないのだが、金がない。完全に隣人ガチャに失敗したのだった。

最初、気づいたのは野愛だった。

呂律のまわっていない歌声よりもひどい。

なにか獣のような、思考力のない間延びした声が隣家から聞こえてくる。

「またですか」

もしかすると、病気が何かで苦しんでいるのかもしれないと一瞬だけ思ったものの、通報しようという気は起きなかった。

死ねばよい。

そうすれば、隣家にもう少しマシな人が入ってくるかもしれない。

酷薄な思考であるが、野愛にとって他人は他人。

隣人であろうと潜在的なリスクにあたる人間は、死んでしまったほ

うがいい。

——ガンっ。

ビクリと身体が反応した。

うなり声が近くなった。薄い木製のドアをガンガンと叩く音がする。

隣に寝ている嘉穂は起きる様子がない。

野愛は身をふるわせながら、ドアのほうにむかった。

いつものようにチエーンがかかっていることを確認すると、そつと覗き穴から見てみた。

すると、そこには茫洋とした目でこちらを見てくる男の姿があった。

意思を感じない瞳。

血の通っていない死蟻を感じさせる肌合い。

そして、自分の腕の痛みなどおかまいなしに、ドアを叩きつけてくる動作。

——お酒に酔ってるってわけじゃなさそう。

野愛は音をたてないようにあとずさりし、隣ですやすやと寝ていた嘉穂を揺り起こした。

「んんー。どうしたでありますか」

「嘉穂起きなさい。何か大変なことが起こってるみたいなの」

「戦争でも起こったでありますか」

「いいえ。あれはむしろ……」

「さつきからすごい音がしてるであります。なにがいるんでありますか」

「わからない——。けど、あれは人間じゃない」

ドアからはあいかわらず猛烈な音がしてきている。

木のきしむような音がしてきているから、そのうち破壊されるかもしれない。

とりあえず、ふたりはパジャマ姿から着替えた。

——ガンっ！ ガンっ！ ベキ。

すさまじい音が玄関のほうからしてきている。

さすがにボロアパートとはいえ、素手で破壊できるようなものではない。

野愛は焦りながらもリュックの中に飲食類と着替えを無造作につっこんだ。

「なんかゾンビパニックが起こってるようでもあります！」

嘉穂はスマホで現状を検索していた。

匿名掲示板には『ゾンビ』の文字が大半を占めている。

「弱点とかないの？」

馬鹿なことを聞いてると思いつつも、野愛は聞いた。

「えつと、えと、わからないであります！」

「そう。逃げるわよ」

幸いなことに、ここは一階だ。

窓側には誰もいる気配がないから、そちら側から逃げられるだろう。

玄関口にさつと向かい、走りやすい靴を履く。

嘉穂の靴を適当に選び、靴を履いたまま部屋に戻ろうとしたときだった。

後ろ手をガシつとつかまれる感触がした。

薄白い手が、破碎した玄関ドアから伸び、野愛の手をつかんでいた。

「……………」

声にならない絶叫をあげ、野愛は必死にふりほどく、幸いなことにゾンビに知能はなく、空いた穴から鍵を開けるなんて器用なことにはできない。

まだ完全に穴が広がっていない状況なのが幸いして、なんとか野愛はゾンビの魔の手から逃れることができた。

「嘉穂。靴を履きなさい！」

怒号を飛ばすような言い方になってしまふ。

「わかったであります。これからどうするでありますか」

「避難所はどこかわかる？」

「ここから一番近いのは博多駅みたいであります」

実をいうと、この貧乏地区は駅から徒歩で10分程度の場所にあ

る。

周りには小学校もなく、住んでいるのは高齢者と貧困層だけだが、博多の中心的地方からさほど離れていないところに、現代のスラムともいえる場所があるのは、単純に昔からそうだったからとしか言いようがない。

よく言えば、下町の風情がある場所。

ぐねぐねと降り曲がった細い道が多い。

ふたりは窓を開けて、アパートの塀を乗り越えて外に出た。

深夜だというのに、人が何人も走っている。

一瞬、ゾンビではないかと身構えたが違う。

人だ。人がパニックを起こして逃げ惑っている。

「大丈夫であります。どうやらゾンビはオールドタイプ。走らないタイプであります。つかまれたらヤバいと思うのですが、よく見極めて走れば追いつかれないでありますよ」

「そうね」

野愛はさきほどつかまれた腕が、いまさらになってジンジンと痛み出すのを感じた。引っかかれたりしたわけではない。ギュつとつかまれただけなのに、骨を砕かれるかというほどに力が強かった。つかまれれば、噛まれるだろう。

「噛まれたら、やっぱりゾンビになるの？」

「そうみたいです」

嘉穂は、なぜかわからないがエヘラと笑った。

人はどうしようもないときに、もはや笑うしなくなるらしい。

嘉穂は両親が死んだときも、やはり笑っていた。

ハザードレベル149

両親が死んだとき——、野愛と嘉穂はふたりきりの姉妹になってしまった。

当時、野愛は18歳。嘉穂にいたっては11歳。

直葬といわれる葬式すらない火葬によって、まっしろい骨になってしまったふたりを見たとき、野愛は嘉穂とつないだ手を強く握った。炎はなにもかも焼き尽くし、取り出された骨はカサカサに乾燥していて軽い。

その存在感の軽さが、両親がいなくなったことを嫌でも認識させた。

嘉穂が涙をこらえて野愛を見ている。

——守らなくてはならない。

という想いと同時に、重さも感じた。

子育てすらししたことのない自分が、嘉穂を育てられるかと思ったからだ。

しかし、遠縁の親戚に引き取られる選択もあったものの、ふたりの人間を面倒みきれぬほどの縁もない。孤児が入る施設もあるにはあるが、野愛のほうはさつさと独立するように求められるだろう。

つまり、姉妹が——この世でふたりきりの姉妹が——離れ離れにならないためには、野愛が働いて育てるという選択しかなかった。

大学は辞めた。なんの支援もしてくれない名ばかりの後見人の代わりに働き口を求めた。

慣れない仕事に、自分なりの夢や未来を消費していく感覚。

それが妹と暮らすための代償だった。

嘉穂はもともと天真爛漫で明るい性格だったが、ますますよく笑うようになつた。

アニメを見たり、そのアニメのキャラの口調を真似ているのも、その一環。

つまりは、野愛に嫌われないための”媚び”なのだろう。

道化を演じているのである。もちろん生来の気質もあるだろうが。

今もそうだ。

ゾンビが溢れる極限の状況にあつてなお、嘉穂は死を恐れている様子はない。

「お姉ちゃん。ご近所のネコおばさんが食べられてるでありますよ！」

いつもと変わらない調子で言う嘉穂。それなりに焦っているような口調ではあるが、いつものアニメ声で、アニメキャラの調子で言われると、現実とのギャップが生じる。

見ると、近所の野良猫にエサをやっているネコおばさんが、道端でゾンビに食べられていた。

手にはエサやりのためのコンビニ袋が握られていて、あたりにネコのエサがちらばっている。

そこにどこからともなくエサを食べにきたネコが群がっていた。

しゃがれた声でしゃべり、枯れ木のような腕でネコをかわいがっていたネコおばさんからは、どこにそれだけためこんでいたのかというほどに、血があふれ、地面を赤く染めていた。

ネコはネコおばさんを見向きもせず、ゾンビもまたネコを見向きもしない。

ついでにいえば、野愛たちのことも今は見ていないようだ。

「いまのうちに通るでありますー！」

「ちよっと待ちなさいー！」

先行するように嘉穂が行く。横幅ほんの数メートルしかない細い道だったが、お食事に夢中なゾンビは気づかない。幸いなことにごく近くにエンカウントしたのはその一回だけだった。

駅に近づくにつれて、道幅は大きくなる。ここらはビジネス街だから深夜の人通りは通常少ない。しかし——、いまはどこに潜んでいたのかというほどに人が波のように押し寄せていた。きつと、ホテルにいた人たちが逃げ込んでいるのだろう。あるいは、野愛たちのように周辺の地域から逃げ惑っている人たちがいるのかもしれない。

問題は食料やそのほかの避難物資だろう。とりあえずゾンビに襲われない堅牢な建物なら、そこらのビジネスビルでもいい。しかし、

食料に乏しいそれらのビルでは、いつまで避難していいかわからない状況で籠城するのは好ましい選択とはいえない。

博多駅からすぐ近くにある公的施設は博多区役所だが、こちらのほうは建物自体が小さい。おそらく収容人数的に言っても、50名かそこらしか入れられないだろう。食料の問題もある。

よって、博多駅を——正確には博多駅に立ち並ぶ駅ビルを避難場所としたのは英断だった。

ただし、ゾンビハザードでなければ。

★
||

「人が多いでありますな。コミケのようであります」

野愛が見る限り、嘉穂はわずかばかり興奮しているように思えた。

本当だったらそこに行きたかったが、貧乏暮らしの自分たちにはいかんともしがたい状況。

だから——という接続詞が適切かわからないが。

疑似的にもコミケのような雰囲気、嘉穂はわずかばかり興奮しているのだろう。

台風のときに意味もなくはしゃぐ子どものような心持ちというベキか。

「はぐれないように手をつなぎましょう」

どこか行きそうな嘉穂の様子に、不安に思った野愛はそんな提案をしました。

「はいでありますー！」

昔のように、握った手が温かい。

思った以上に安心する自分に驚く。

きつと——、支えていると思っていた自分が、思った以上に嘉穂に支えられているからだ。

駅ビルは、正面からみて、左側にバスセンタービル、正面にふたつのビルが合体しているようなメイン。そして右にひとつある。いずれも、食料品も売っていたりするので、数百人を数日持たせる程度は

可能だろう。

ただし――、集まった人間は数千を越えていた。

完全なキャパシティオーバーだった。

ずっと向こう。ビル内に入るところでいざこざが起きている。

「だからもう入らねえって言ってるだろ！」

男が怒号を発していた。

「うるせえ。こっちはゾンビから死ぬ気で逃げてきたんだぞ。どこに行けっというんだよ！」

どうやら入った側が棒きれのようなものを持って数人でバリケードを作って、中に入らせないようにしているらしい。剣呑な雰囲気。体験したことはないが、まさしく戦争だ。

「なんかヤバげな雰囲気であります」

「そうね」

野愛たちは、人だかりのちょうど中間あたりにいる。

身動きがあまりとれる状況ではない。

「きやあああああ！」

突如、集団の中から、ひときわ甲高い声が響いた。

喧噪の中であっても死を賭した声は、妙に耳朶をうつもものだ。

ゾンビに噛まれていた男が発症し、ゾンビになって近くにいた女に噛みついたのだ。

パニックが広がり、人々はゾンビから距離をとるように逃げ惑う。

無秩序の軌道。どちらに逃げればよいかもわからず、唯一の逃げ道である駅ビルへと殺到した。

しかし、人のバリケードで完全にふさいでいるため中には入れない。

ハリネズミのように棒状のものを突き出している。

「嘉穂。地下にいったん逃げましょう」

「わかったであります」

ちょうど近くに地下街に入る階段があった。

嵐のように人が押し合いするなかを、にじり寄るようにしてふたりは進む。

そちらのほうにも人が逃げ込んでいるようで、なかなか進めない。地下からも駅ビル内には入れるが、この様子だと、同じく封鎖されているだろう。

地下へ入るか入らないかのところで、駅ビルの門のあたりが騒がしくなった。

「即席の火炎瓶だ。これ以上、入ろうとすれば燃やすぞ！」

「うるせえ。入れ入れ。はやくしないとゾンビが来るぞ！ 入れ！」

「やめろ押すな！」

そして、膨らみきつた緊張は、燃える人のカタチとなって結実した。

遠目から、踊り狂うような人影を嘉穂は見た。

それはちょうど紙に書いた○と棒線だけでできた棒人形のように、ひどく現実感の薄い情景のように思えた。



地下に入ると、それなりに広い空間に出る。

問題はどこに向かうかだ。ここからは駅ビルに向かう道と地上へ出る道、そして地下鉄がある。

もしかしたら緊急時なので、地下鉄や列車も深夜でも動かすのかもしれないが、逆に人がそちらのほうにも逃げ込んでいるため、動かせないということも考えられる。

人々は自分たちがどこへ向かうべきなのか考えてもおらず、なんとなくの人の流れにのって、どこぞへ向かっているだけの状態だった。

「うわあああ。ゾンビだ！」

誰かがそんなふうに叫んだ。

人といっしょにしていることで、安心感を得ていた者たちも一斉に飛び上がった。

まるでコントのようだ。

ゆっくりと近づいてくるゾンビたち。

押しつけて前に逃げようとする後列の人。

しかし、前からもゾンビがやってきてすぐに混乱に極みに陥った。

進むべきか戻るべきか。野愛は逡巡する。

「お姉ちゃん！ こっちであります」

いつもは付き従っているだけの嘉穂がこのときは主体的に動いた。そこは地下鉄の改札口横にある駅員室だった。

普段、駅員がいるときは見向きもしない駅員室。

ほとんどの人間は導かれるままに地下鉄のほうか、外に出て行くこうとしている。

本当にそちらに立てこもるのが正しい選択なのか考えた。

扉はしまっていないのか。逃げ遅れることにならないのか。

一瞬の迷いが死につながる。

「窓が開いているであります」

気づかなかった。よく見ると、窓がわずかに開いている。

中に人がいるのかもしれない。

人が燃えた情景を見たあとだと、判断に迷う。

ゾンビだけでなく人も恐ろしい怪物へとなり果ててるかもしれないのだ。

迷いは当然だった。

ただ——、いつもは唯々諾々と従っている嘉穂が野愛に意見したのだ。

野愛は覚悟を決め、駅員室の窓へと歩みを進め、するりと中へ侵入した。

後続の嘉穂がさりげに窓を閉める。

窓が開いてなければ後続の人間に窓を破壊される危険もあるが、ゾンビから逃げつつ窓を破壊するというのは、それもまた危険だ。外から丸見えなので、野愛はしゃがみ歩きで進む。

「泥棒さんになった気分でありますな」

のんきな声が後ろから聞こえた。

駅員室の中には、さらに奥まったところに一部屋ある。

そちらのドアを開けようとする。が、そちらは閉まっていた。

「中に人がおりますな。あけてくださるとうれいのでありますが」
ゾンビの群れが、駅員室のそばを通り過ぎている。

幸いにもかがんでいた野愛たちにはきづいていないが、時間の問題かもしれない。

「あけなさい。この部屋にゾンビがきたら、あなたたちも危険になるわ」

永遠とも思える時間の経過の後、しゅしゅドアは開かれた。

★
||

中は数人の人影が見えた。

小学校低学年くらいの男の子とその母親と思われる30代女性の二人組。

中年くらいのスーツを着たサラリーマン。

高校生くらいのスポーツ刈りの男子。

みな、疲れた顔をしている。

ドアを開けてくれたのは高校生の男の子のようだ。

中は事務机が四つほど置かれており、綺麗に整理されている。

「春日井……?」

「ん。那珂川氏でありますか」

どうやら、嘉穂の知り合いらしかった。

外の喧騒は続いており、自己紹介をするような場合じゃない。

「同じ高校に通ってるのであります」

「そう」

それだけ言って、ふたりは部屋の中にあつた椅子に腰かけた。

しばらくすると、喧騒が遠ざかり周りは静かになった。

閉めきった部屋の中では外の様子はわからない。奥まった部屋だから窓の類もついていない。

LED電球に照らされた、重苦しい沈黙だけが部屋の中に満ちている。

時計が天井近くに掲げられており、数時間は経過していた。

そろそろ夜明けの時間帯だ。

「なあ、誰か外の様子を見にいかないか」と中年の男性が言った。

誰も何も言わない。

無然とした表情になった中年男性が続ける。

「ここには食料もなければトイレすらないんだぞ。立てこもるにしろ環境が最悪だ」

「だったら、あんたが見てくればいいでしょ」と30代女性。

「わたしは足が悪いんだ」

「最初ここに来た時、普通に歩いていたらじゃない」

「膝が痛むんだよ」

「へえ。膝に矢でも受けたの？」

バカにしたような視線に、中年男性は怒りの表情になる。

「うっせえババア！」

「子どもがいるのよ。暴言吐かないで！」

「子どもがいたらなんなんだよ。それで全部が免罪符になるってんのか！」

「なるに決まってるじゃない。子どもは未来の希望なの。あんたどうせ子どもどころか彼女もできたことない中年童貞なんでしょう！ さっさと外行つて死になさいよ」

「うるせえー！」

ついに中年男性が手をあげようとする。

30代の女性と子どもは一瞬目を閉じて身を固くした。

「ちよ、ちよと待ってください。暴力はまずいですよ」

中年男性を止めたのは男子高校生だった。

「なんだよ。おまえら駅ビル前のアレみただろ。もう世界は変わっちゃまったんだよ！」

「ここで争っても誰も得しないじゃないですか」

「ビジネススマンらしく、得」という言葉に響くところがあつたのか、男の勢いは衰えた。

代わりに男の目に芽生えたのは自己保存欲求丸出しの交渉だ。

「じゃあ、あんたが探ってきてくれるのか」

という言葉に、男の怯懦があらわれている。

男子高校生は一瞬ひるんだものの、覚悟を決めたようにうなずい

た。

「わかりました」

狭い室内に、意思のこもった声が聞こえてきた。

索敵を任せる相手ができたことで、中年男性と親子は明らかにほつとしていたようだった。

それは野愛も変わらない。

妹を守るためには、誰かが危険を肩代わりしてくれるに越したことはない。

最悪な思考だが、最悪な事態には、甘いことは言っていられない。

しかし――。

「那珂川氏が行くなら、わたしもいつしよに様子を見てくるであります」

嘉穂が突然、そんなことを言い出した。

「なにを言ってるの。彼が行ってくれるのなら、おとなしく待っていなさい」

「お姉ちゃん。ここでは否と言わせていただくであります」

「どうして、お姉ちゃんの言うことを聞いてくれないの」

野愛は言いながら悲しくなってしまう。

そんなことを言うために、いままで嘉穂の親代わりになってきたわけではない。

悲しみが伝わったのか、嘉穂も一瞬悲しげな顔を見せた。

しかし、それも一瞬のことで、すぐに元のように笑顔を浮かべた。

「大丈夫であります」

「春日井……正直助かる。だけど、お姉さんが言う通りなんじゃないか」

「那珂川氏も人がいいでありますなあ」

「いや、オレは単に必要だと思ったから。避難路を確保するのは自分のためでもあるし」

「では、わたしも同じでありますな」

にっこりと笑えば、うら若き乙女の笑顔には違いない。

クラスでは浮いているといった嘉穂も、嫌われているわけでは

ないのだろう。

ただ、妹に危険なことをやらせて、自分はのうのうとこもっていることなんてできない。

「わたしも行く」

野愛はすぐにそう言つて、ふたりについていくことにした。

★
||

那珂川勇也はもともと陸上部に所属していたらしい。

体力と——特に脚力には自信があるようだ。スポーツ刈りで文字通りスポーツマンなのだが、いわゆる三白眼で上向きにツンツンした頭のせいか、不良のように見られることもあるという。

本人と話してみた限りは普通のようなうだ。

わずかな時間で自己紹介を終えたあと、さっそく勇也を先頭に三人は移動を開始する。

避難先として好ましいのはどこなのか。

食料や電気、トイレなどの生活環境を考えると、駅ビルの中に侵入できるなら、それが一番だが、人にとって人は敵にも味方にもなりうる。

今の状況で、無理に侵入しようとするれば、炎で踊り狂う羽目になりかねない。

「周りにはゾンビが数体いますが、こちらに気づいてはいないようです」

年長者の野愛に対して、丁寧語で伝える勇也。

対して、受け答えたのは嘉穂だ。

「ゲームとかだと、謎の感知能力で察したりするでありますか……」
「目と耳と鼻。どれがいいかは未知数ね。でも、今は実験していると
きではないわ」

と、野愛は冷静に分析した。

内心では、じりじりと焼けてくるような焦燥感があるが、いまは無理に押さえつけている。

ゾンビはまばらに存在するが、逃げ惑う人々の姿はいつのまにかいなくなっている。

ゾンビの仲間入りしたか、それとも博多駅周辺は危険と見て散ったかは謎だ。

いまならダツシユすれば簡単に駅員室から出られそうだな。

「ついてきてください」

勇也の声に従い、野愛たちは駅員室の窓からふたたび外に出た。

ゾンビたちがゆっくりと振り返り、こちらを視認する。

先ほどと同じように、歩くスピードは極めて遅い。

普通に人間が歩くスピードのほうが速いくらいだ。

けれど、じつくりと近づいてくる亡者の姿は、生者にとっては本能的な恐怖を呼び起こすものだった。足をつかまれたわけでもないのに、体中の筋肉が硬直する感じがする。背骨のあたりから力が抜けていき、足元がすくんでいいる。

野愛はごくりと生唾を飲んだ。

——この時点では、夜月緋色様のような超常の存在はおりませんでした——

なので、ゾンビの攻撃は即死に直結する。

噛まれば、いずれお仲間になるといいうのがゾンビのお約束だ。

「那珂川殿。武器は持たなくて大丈夫でありますか」

「できれば長い獲物がほしかったけど、あの部屋の中にはなかっただろ」

「確かにそうでありますな。今時モップもないとか困るであります」

プラスチック製のモップではなく紙のシートを使い捨てていくタイプのやつはあったのだが、中身がスカスカなので使いようがない。

「あそこがいいのがありますですよ」

嘉穂は周りをよく見ている。

少しリーチが足りないが、重さ的には十分な消火器が壁に設置されてあった。

「重そうだな」

陸上部所属。走るのが主体の勇也にとって、重いものを持つのは自

然を忌避された。

しかし、男の自分が持つべきと考え、やむなくそれを手にとった。「わりと重いな」

消火器の構造上、安全弁を抜かなければ噴霧されることはない。

ただし、握りの部分を持ったとしても、本体部分を振り回すことを想定していないから、ゾンビと相対したときは投げつけるとか、そういう使い方ができないかもしれない。

野愛たちがいまいるところは博多の地下街である。

電気がまだ通っていて、夜中であるが明るい。ゾンビは群れをなすほどにはおらず、しかしまったくくないわけではない。野愛たちの姿を見ると、ゾンビたちはゆっくりとではあるが、にじりよってくる。いったん、ダツシユしてそいつらを振り切り、地上へとつながる階段のところで一息ついた。

このまま階段を上がれば地上に行けるが、地上から駅ビルへの道はおそらく閉ざされているだろう。可能性があるとするれば最も小さなバスセンタービル。

正面にあるメインビルと違い、こちらは収容人数としては少ない。面積もメインビルの半分もないだろう。メインのビルは二つの建物が合体している感じだが、バスセンタービルは独立している。

一応博多駅にはテラスというか、二階部分でつながっているのだが、建物内部でつながっているわけではない。

バスセンタービルへの道は、一階と二階、そして地下から行ける。

「バスセンターはこっちでよかつたんだよな」

勇也が嘉穂に確認するように聞いた。

「まちがいないでありますよ」

嘉穂はまるで買い物をするような軽い口調で答える。

勇也との仲はさほど悪くなさそうだが、ゾンビの世界では嘉穂の口調はきわめて浮いている。

このような調子で、空気を読まずにしゃべっていたのでは、クラスの中でもさぞや浮いていただろうと、野愛は思った。そして姉として心配になった。

「エレベーターから行く方法もありますが、お勧めはしないであります」

「なんで？」と野愛は聞く。

「エレベーターを開けたさきにゾンビが大量にいてとかお約束にもほどがあるであります」

「そう」

映画知識がどの程度の精度を持っているかはわからない。

しかし、エレベーターでの移動は、嘉穂の言う通り危険だ。

いや、危険というのなら、それはどこでも変わりはない。

セーフティゾーンから抜け出して自由に動いている今は、裸身で宇宙を遊泳しているようなものだ。広い地下通路には、昼のときのような人々の喧噪はなく、さきほどまでの悲鳴もなく、ゾンビが静かにズリズリと歩く音しか聞こえない。

あるいは、あるいは——自分の心臓の音。呼吸の音すら聞こえそうだった。

「まずいな」

勇也が柱の陰からささやくように言った。

「どうしてでありますか」

嘉穂も小さく柱から顔を出した。野愛も同じく。

そこにはゾンビが数匹たむろしていた。バスセンタービルに侵入するための地下の入り口は、見ると、バリケードのようなもので覆われているらしい。

完全にふさがれているわけではなく、椅子や机といったオブジェクトで無理やりバリケードを作ったという感じで、板状のものを使って完全にふさいだわけではないようだ。

バスセンタービルへの侵入口は、縦長で5、6メートルほどはある。その上部まではバリケードでふさがれていないので、脚立か何かを使えば中に入れそうだ。

「しかし——問題があるな」

ひとつはゾンビたちをどうするか。

ひとつは中に無理やり入ると中の人間に響きを買う恐れがある。

ひとつは脚立をどこで仕入れるかだ。

「脚立でありましたら、駅員室にありましたでありますよ」

「そうか。いったん戻ろう」と勇也。

慎重な足取りで三人は戻った。いつもなら五分もかからない距離だが、無限の時間のように感じた。たいした距離でもないのに、息がきれる。精神的消耗が激しい。

駅員室の前には人だかりができていた。

野愛は目を見張った。もちろん、人だかりなどではなかった。

ゾンビの群れだ。

「あひゃひゃひゃひゃ」

三人の前を横切るのは、先ほどの中年男性だ。

狂気の声を出しつつ、膝の傷はなんだったのか、猛スピードで走り去っていく。

首のあたりは浅黒く血で染まっており、おそらく噛まれたのだろう。

「死んだ。死んだ。死んだ。死んだ。死。死。死。死。しいい〜〜〜
〜！」

救急車のドップラー効果のように走り去っていく姿を、三人は茫然と見送った。

窓から見える駅員室の中はゾンビだらけになっている。あの親子はどうしただろうか。

中で生きているのか死んでいるのか。それとも逃げ出したのか。いや、ゾンビは人間を襲う。あちらに集まっているということは、おそらく生きている。

「いずれにしろ手遅れだ」

勇也が重々しく言った。

「脚立がないと困るでありますな」

嘉穂はあつけらかなと言った。中の人間のことはあえて触れないのか。

妹はサイコパスではない。単純に死を忌避しているのだろう。両親が死んで、誰かが死ぬのが怖くなったのだ。だから道化を演じてい

る。

野愛はそんな嘉穂の心情が痛いほど理解できる。

「わたしか那珂川くんのいずれかが肩車してあとから引き揚げる手でいきましよう。あるいはエレベーターにいちかばちか乗りこんでみるか」

さきほど見たときは、エレベーターは幸いにも地下に降りてきていた。

おそらく人間が生きていて中にいるなら、エレベーターは上げておき、なにかモノを挟んで扉が閉まらないようにして上層に固定しておくだろう。

実際、エレベーターのところまで戻ってみると、すでに上層まで引き上げられていた。

これで、あとはもう無理やり侵入するか、あるいは他の避難場所を探すかしかない。

「ゾンビはどうするでありますか」

「何かでおびきだせれば……」

「わかったであります」

嘉穂が取り出したのはスマホだ。通信料を抑えるために日ごろから無料Wi-Fiにしか接続しない涙ぐましい努力の結晶体である。もちろん、中に入っているSIMは月額1500円の激安のもの。本体は中古品だ。

「それをどうする気」

「お姉ちゃん、このスマホに電話をかけるであります」

それだけで嘉穂がなにをしたいのかわかった。

スマホをおとりにする気だ。ゾンビは人の声と姿に敏感のようだ。音声を外部に出すようにすれば、おそらくゾンビをおびき寄せることができる。

「でもいいの？ スマホ……」

「どうせ、このあとスマホは使えなくなるでありますから、お姉ちゃんが万が一のためにもっていければそれでいいであります」

「そう」

作戦を迷ってる暇はなかった。

ゾンビはゆっくりな動きだが、視認した人間はしつこく追ってくる。

背後には近づいてくるゾンビがいるのだ。

嘉穂は柱の陰からすべらかな床にスマホを放った。

回転させて、カーリングのように床をすべっていくスマホ。

もちろん、すでに通話済み。

野愛はスマホを掌で覆いながら叫んだ。

「ごつちよ」

ゾンビどもは首を奇妙な角度に曲げて、スマホを追いかけるように散っていく。

「いまだ」

バリケードからゾンビがいなくなったのを見計らい。

勇也は消火器をそこらにおいてかがんだ。体重の軽い嘉穂が先でもよかったが、しかし嘉穂には引き上げる力もない。

事前に覚悟はしている。野愛は靴のまま——スニーカーを履いてきてよかった——勇也の肩に乗った。乱雑に積まれただけのバリケードの上に乗っているかたちになるので身体中が痛い。

今度は嘉穂の番だった。同じく勇也が土台となり、嘉穂が靴のまま乗る。

嘉穂はセーラー服だったので、少しばかり恥ずかしそうにしていた。

「スカートの中は覗かないでほしいであります」

「そんなこと言ってる場合じゃないだろ」

そのとおりだった。ゾンビはすぐにデコイに気づき、こちらの姿を視認して近づいてきている。

「嘉穂。手をのばしなさい」

なんとか引き上げることができた。

あとは勇也だけだ。

嘉穂に身体を押さえてもらい、野愛はせいっぱい身体を伸ばす。手が届きそうで届かないギリギリの距離。

迫るゾンビ。時間からして間に合いそうにない。

「クソっ」

勇也はいったん手を伸ばすのをやめて、地面に置いていた消火器を手にとった。安全ピンを引き抜き噴射する。

ゾンビどもは一瞬ひるんだ。というよりも、おそらく人間の姿が見えなくなり立ちすくんだのだろう。勇也はチャンスとばかりに手を伸ばした。

それでなんとか、バスセンタービルに入ることができたのだった。

ハザードレベル150

バスセンタービルは窓が広くとられていて、陽光をとりいれるようになっていいる。

地下から一階に上ると、ちょうど朝日が入りこみ野愛たちの顔を照らし出した。

「いつのまにか朝になっていたのでありますな」

嘉穂がまぶしそうにしている。

まだまだ元気そうで、さすが高校生の体力だ。

ただ、精神的疲労は蓄積されている。

ゾンビがはびこる世界を駆け抜けて疲れないはずがない。

おそらくは野愛たちを励まそうとしているのだろう。

——これからどうなっていくのか。

ビルの中は、外の喧噪とはべつに静穏だった。

時折、聞こえてくるゾンビのうなり声以外は、ほとんど何も聞こえない。

窓から下を覗いてみると、タクシー降り場あたりからゾンビがわらわらと群がっており、駅ビルは囲まれていた。野愛たちはほとんどなにも考えずに、ゾンビから逃れるようにして上へ登っていく。

電気は誰かが通したのか、いつのまにかエスカレーターが起動している。

自動出荷されるように上へ。

「二階から外に出るのは難しそうね」

駅ビルは二階部分にビル間をつなぐ巨大な通路がせりだしている。いわばテラスのような構造になっているのだが、テラスというにはいささか巨大だ。通路幅は7メートル程度はある。駅前の広場部分からエスカレーターを使って上るようになっていいるのだが、いまは大物の家具などで簡易的なバリケードを作って、ゾンビの侵入を防いでいるようだ。

野愛がふと不思議に思ったのは、そんな駅ビル間をつなぐテラスにも無造作にバリケードが作られていることだった。

——駅ビル間の連絡通路をふさいでいるのは何故？
繰り返すが、博多の駅ビルはおよそ三つの建造物が一つになってい
る。

そのいずれも巨大なテナントの複合体であるといえるのだが、あえ
てそれらを分断している意味がわからない。

そんな疑問もそこに、3、40代くらいだろうか。頭の中央部
分が禿げあがったサラリーマン風の男が5階に上がったところで近
づいてきた。後ろには2、3人の男がついてきている。

「おう。若いねーちゃんとにーちゃん、どこから入ってきたんや」

関西風の言葉をしゃべる男だった。

「地下からです」と野愛が代表して述べた。

わずかに恐怖があったことも確かだ。

女性としての自然な恐怖。

男たちは話しかけてきた禿げたおっさん以外、みんなおのおの武器
を持っていた。

顔つきは、ゾンビ禍であることもあつて悲壮のひとつこと。

声が震えそうになるのを必死に隠した。

「バリケードがあつたやろ」

「上のほうが開いていたので」

「なるほどな……。まあええやろ」

ざっと、野愛たちに視線を這わせる。

使えると思つたのか、それとも勇也がいたから、ここで暴力沙汰に
なると自分たちも不利益を被ると思つたのかもかもしれない。

勇也は高校生にしては鍛えているし、高身長である。

「まだ若いのに、あんたらえらいがんばつたな。わいは難波ちゅーも
んや。昨日、博多に大阪から出張してきてな。なんの因果か、いまこ
こを取り仕切らせてもらつとる」

取り仕切るという言い方にひっかかりを覚えた。

まだ、ゾンビ禍が起こって6時間かそこらしか経ってない。

それなのにここの駅ビルを取り仕切るというのはどういうことだ
ろうか。

「ああ、勘違いしたらあかんで、取り仕切る言うても、べつにあんたらをどうにかしてしまおうとか、そないなことは考えてへん。ゾンビどもから身を守るために、一致団結しようっちゅう腹や」

「警察の方はいらっしやらないのですか」

「おらへんなあ。駅前駐在所のおまわりさんなら、ゾンビに食われとったで」

「そうなのですか……」

野愛は聞いていて変な気分になった。ゾンビに警察。まったく意味のない組み合わせ。

ただ、緊急事態が起こったとき、ぼんやりと警官や行政の人間が取り仕切るものだと思っていた。目の前の難波という人間は、ただのサラリーマン。つまりは商売人にしか見えなかったのである。

「まあこんなところでつつたつとつてもあれや。そののコーヒーショップで休憩したらええやろ」

難波は男たちになにやら指示して解散させ、自分は野愛たちを連れ立って、コーヒーショップの中に入った。店内はコーヒーに似た茶色い光で淡く色づけされている。

「ブラックでええか。店員じゃないからわからへんねん」

「はい。ありがとうございます」

四人がけテーブルの片側に嘉穂と野愛が、反対側の奥に勇也が座った。

難波はコーヒーを入れてトレイに載せて持ってきた。

湯気たつコーヒーを一飲みすると、わずかだが精神が落ち着いた。

日常の香り。

もう二度と戻らないかもしれない日常というフレーズに、わずかに胸がしめつけられる。

センチメンタルすぎる郷愁の念。

「あんさんらは、このあとどうなると思うとる？」

互いに軽い自己紹介を終えたあと、難波が聞いてきた。

「どうなるとは？」

「簡単に言えば、ゾンビ禍が収まるかどうかや」

「わかりません」と野愛は正直に述べた。

わずか数時間前に始まったゾンビハザードのことなど、なにもわかっていないに等しい。

しかし、暗い予想はできる。

どこへと知れない逃避行。あてどない旅路。人間同士のいざこざ。いろんな言葉がひしめきあつたが、大方ろくな未来はないだろうという予想がなりたつ。

「わいが思うに、あいつらはたいしたことあらへん。足は遅いし、考える頭もない。力だけはごつつ強いがそれだけや。いつかは自衛隊あたりに駆逐されるやろ」

自信たっぷりに言う難波に、野愛はそういうものだろうかと疑問を抱く。

確かに、難波の言うとおりゾンビは足が遅く、考える頭もない。ただ、将来はどうなるかわからない。すでにゾンビという化け物が生まれてしまった。いままでそんなものは存在しなかったのだ。どうしてこれから先も同じように推移するなんて言えるのだろうか。

「まあ、あいつらがいきなり走り出したり、武器を使い始めたりするかもわからへん。ただ、そんなことを考えとつても無駄や。いまある現実から推測するのが人間の力やで」

「難波さんはどのようにお考えなのですか？」

「せやなあ。簡単に言えば、籠城するんが一番やろ」

「籠城？」

「せや。自衛隊に救助されるまで、引きこもり作戦でいくんや」

「ここには何人くらいの人がいるんですか」

「お、ねえーちゃん。頭いいな。食料とかのこと考えとつたら」

「ええまあ……」

食料や水、電気。情報をとりこぼさないためのネット環境。

いずれも引きこもるためには必要なもの。

しかし、人間の数が多くなれば、消費量も比例加算されていく。

「50人くらいやな。まあ切り詰めれば一か月くらいは持つやろ」

多いか少ないかと言えば、微妙なところだった。

「この駅ビル全体ですか？」

「ちやうで。このバスセンタービルに限つての話やな。あつちはあつちでコミュニティを作つてるはずや。詳細はわからへんが、たぶん2、300人くらいはおるやろ」

「なぜ——」

「なぜ合流しないかやろ？ まあ言うてみたら、陣取りゲームみたいなもんやからなあ。人間、引きこもるにしても、できるだけいい環境でいたいやろ。向こうは向こうでそう思つとるし、こっちはこっちでそう思つとる。それだけのことや」

連絡通路のバリケードの意味がわかった。

あれは陣をかけるための国境だったのだ。

「でも、ゾンビ禍が収まると思つていゝんなら、協力したほうがいいんじゃないですか」

勇也が聞いた。

「そのとおりやとは思ふんや。けど、あんさんらも見ただやろ。あいつら人間に火をかけよつたで。そんなやつらと協力したいかちゅー話や」

日がのぼりきらないうち。

駅ビル前の広場では何人も人間が黒ずんだ灰になった。

太陽のように明るい火がたち昇るさまは、駅ビルから容易に観察できただらう。

追い詰められた人間たちはなんでもするという証左だった。

「まあ……それは」と勇也は言葉をにぎした。

「幸いなことに、ここはメインビルから物理的に離れとる。地下と二階の連絡通路を塞げば容易には侵入できんはずやで」

「メインビルの連中とは付き合わないつてことですか？」と野愛。

「付き合わないとは言つてへん。べつに戦争してるわけではないんやから、なんらかの交渉はできるやろ。無理強いしてこない限りはこっちも争う必要はないしな」

「難波さんは交渉役になると？」

「まあ、これでも商売人しとるからな。交渉事は得意なつもりや」

「相手が暴力をふるってきたら？」

「無抵抗というわけにもいかんやろ。家族を守るためには戦うで」
「家族？」

「せや。こうして出会えたのもなにかの縁やろ。一時的にとはいえ、
わいらは運命を共有する仲間や。つまり、家族ちゅーことや」

「ゾンビ映画では、疑似的な家族が作られるでありますな」

と、嘉穂がここで初めて声を出した。

実のところ案外人見知りなところもある嘉穂が、なにかしらに共鳴
したのでらう。

たとえば家族という単語とか。

「せやで。嘉穂ちゃんの言うとおりや」

しかし、そうはならなかった。

★
＝

バスターミナルビルに避難して、10日ほど経過した。

その間、50人の人間たちとの交流はほとんどなかった。

まだ気分的には一時的に避難しているという感覚だったからだ。

もしも十分な時間と備蓄があれば、彼らとの間に仲間意識が芽生え
たかもしれない。

しかし、世の中の様相が少しずつ明らかに becoming つれて、皆の心
中に焦りが生まれていた。

『世界中の3割ぐらいはゾンビになったらしい』

『噛まれるだけではなく、死ねばゾンビになるらしい』

『自衛隊は関東に集結してるらしい』

『じゃあ九州は見捨てられたのかよ』

『どこかに美少女ゾンビがあらわれてさっそうとゾンビハザードを解
決してくれないかな』

『おまえ夢見すぎwww』

少しずつみんなの顔つきが暗くなっていく。

この頃、勇也は難波となにやら話していることが多い。

その勇也に、野愛たちは呼ばれた。

「食料調達班を結成することになりました」

「引きこもり作戦じゃなかったの？」

「難波さんの目論見はずれたということですよ」

勇也は眉にしわを寄せていた。

握った拳には力こもっている。

こめられた感情が恐怖なのか不安なのか、それとも怒りなのか。

あるいはどれでもないのか。

「食料、あまりなかったでありますからな」と嘉穂は言った。

確かに駅ビルの中でもひととき小さなバスターミナルビルは、食料という点で見れば、最も備蓄が少なかつた。

「ああ……、難波さんも頭を抱えていたよ。まさか自衛隊が関東圏だけ守ろうとするなんてな」

「あの噂、本当だったでありますか」

「本当らしいよ」

「九州には来ないのかしら」と野愛は聞く。

「首都を制圧し終わったら来るんじゃないですか。いつになるかわかりませんが」

「なにも外で食料を調達しなくても……」

野愛は少し口を開いて、また閉じた。

すぐ近くには、おそらく食料をたんまりためこんでいる駅のメインビルがある。

いまからでも50名の参入を申し込むというのはできないのだろうかと思っただ。

しかし、できるならとつきの昔にやっているだろう。

それをしないというのは、それなりの理由があるはずだ。

「メインビルに合流するのは難しそうです」

「なぜでありますか」と黙っている野愛の代わりに嘉穂が聞いた。

「あそこのメインビルだけど、いまは二派にわかれてるらしい。おあつらえ向きの名前だけど、西村と東ってやつがトップを張って、互いに自分こそがトップだといいい始めたみたいだ。ここが無理やり参入

されなかったのもそうやって争ってるからだってさ」

「内紛でありますか」

「ああ……」とうなずいて続ける。「自陣にここを引き込めれば強いんだろうけどさ。どっちが引き込んだかで、相手にとっては不利になるだろ。だから、お互いにらみあつてる状態なのさ」

「でありましたら、こちらを売り込むチャンスでもあります」

「まあそうなんだろうけど、売り込んだあとで、もしも売り込んだ先が負けてしまったらっていうのがあるんだろうな」

「いまのうちにどちらかに参入したほうがいいと思うのですが……、風見鶏は嫌われるであります。外様大名になってしまいうであります」

「まあ確かに今のうちに西でも東でもいいから仲間になつていたほうがいいかもな」

「長引きそうなのでありますか。その内紛」

「ああ、メインビルの中って、建物的には一つだけど、店舗的にはふたつに分かれてるだろ。そのメインシャッターを下ろして、互いに交流を断ってるらしい」

「へたしたら戦争でありますか」

「そうだな。そうなりそうだよ。だから、こっちはこっちで食料を調達しなきゃならない」

要するに、二派のどちらかが勝つにしろ負けるにしろ。

こちらの存在感を一定程度保ためには、自前で食料調達するのが望ましいということだ。

「食料を調達するにしろ、なにか安全な方法は考えているの？」と野愛は聞いた。

嘉穂がうずうずしていて、自分も食料調達班になると言い出しかねなかつたので、とつさに聞いたかたちだ。勇也は自嘲気味に笑った。「電気がきていなければ電線を伝つてとかも考えられたんですけどね。いちおう、ここ地下にあるバスを魔改造して、スーパーマーケットに突っ込むという作戦を考えています」

結局はゾンビの中に突貫するのと変わらない。

安全とはとてもいえない作戦だった。
沈黙が落ちた。

このような内部事情を教えてくださいるのは、勇也が野愛たちとの距離を他の人間より近くに感じてくれていたからだろう。勇也と嘉穂の中は、野愛が見る限りでは悪くなさそうだ。

恋愛感情といえるほど甘いものではない。

しかし、まったくの無縁というほどでもない。

やはり難波が言うような疑似的な家族関係なのかもしれない。

嘉穂がそういう関係を望んだからということもあるだろう。

「那珂川氏、気をつけるであります」

しかし、三日後に食料を調達しにいった面々は、勇也とごく少数の男たちを除き、ほとんど帰ってこなかった。

★
||

「せやから頼むで。ほんま。野愛ちゃん。このとおりや」

拝み倒してくる難波の姿に、野愛は静かな怒りを燃やしていた。

つい先ほど、難波に呼ばれ聞かされた話は、なんのことはない西村とかいう二派のうちの一派のトップのところ、先行して嘉穂とともに行つてくれないかというものだった。

意味がわからなかったのでよく聞くと、難波は驚くべきことを言いだした。

——手つけ金。

のようなものだというのだ。

バスターミナルビル内の戦力は先の食料調達の際に壊滅的ダメージを受けたといえる。

図らずも人数が減ったことにより食料の減少量も抑えられることになったが、根本的な解決にはいたっていない。

そして——、残るは年のいった50代、60代の男性、女性ばかり。老人ホームに入るほどではないが、サバイバルには向かない人間ばかりが残ってしまった。

メインビルの連中からすれば、価値のない人間たちとして切り捨てられてしまう可能性がある。

だから、見目麗しい若い女性であるふたり。

野愛と嘉穂を手つけとして、この集団全体の価値を認めさせる。

それが難波の考えた生き残る術だった。

「わたしたちを売るつもりですか」

どこまでも冷淡になっていく視線。

「売るとかそんなことやあらへん。聞くところによると、あつちの秩序も崩壊してるわけやない。協力してゾンビに対抗しようつてだけや」

「家族じゃなかったのですか？」

「家族や。いまでもそう思うとる。だから、家族の頼みやと思うて。頼むで」

「嘉穂はまだ高校生ですよ」

「いかがわしいことをさせるとか、そんなことにはならへんから」

難波の口先だけの言葉に、野愛はイライラしてきた。

調子のいい商売人らしい無責任な言葉。

リーダーとしての考えなのかもしれないが、野愛だけならまだしも高校生になったばかりの嘉穂もまとめて売るといふ考えに賛同できるはずもない。

「わたしたちを先んじて送るといふ考え方に納得できません」

「納得できるとかできないとか、そんな段階じゃあらへんのや」

「おことわりいたします」

野愛は立ち上がり踵を返す。

難波が焦ったような声を出した。

「待ってや。野愛ちゃん。もう向こうには打診してあるんや。いまさらはいやめましただと、相手も納得せえへん。へたすつと戦争が起ころで」

「それはあなたの責任でしょう」

「わいだけの責任やあらへん。みんなの責任や。食料調達班がきちんと食料を調達しとつたら、こんなこと考えんでもよかつたんや」

犠牲になった食料調達班へのあんまりと言えばあんまりな責任転嫁に、野愛は血圧が急激に上がり、めまいがおこりそうになった。直接的な暴力をふるうわけではなかったが、難波という男の評価は地の底まで下落した。

はつきりと邪悪と言い切ってもよかった。

出会ってから半月ほどで、野愛は難波と袂を分かった。

とはいえ――。

バスセンタービルを出ていくという選択には、野愛も相当な覚悟がいった。食料調達班が全滅に近い状況だったことからわかるとおり、ゾンビの群れを追い抜いて、セーフティゾーンを見つけるというのは困難を極める。

食料やインフラが整った施設を見つけるのも難しい。

できることなら、なんらかの算段が欲しいところだが――。

時間もまた足りない。

メインビルとバスセンタービルとのバリケードは少しずつ撤去され始めているようなので、このままだといずれ編入されるのはまちがいないだろう。

野愛と嘉穂が先にいこうが後にいこうが、いずれにしろ向こうの秩序と思想に飲みこまれてしまうのは、容易に想像できる。

野愛が最初に相談したのは当然のように嘉穂だ。

嘉穂はわかりやすく破顔した。

「お姉ちゃんについていくであります」

「メインビルに行くっていつても？」

「ついていくであります」

「ゾンビどもがうようよいる外に行くと言っても？」

「ついていくであります」

野愛は嘉穂を抱きしめた。

「バカな子。少しは自分のことを優先しなさいな」

「お姉ちゃん。わたしはダメな子であります。お姉ちゃんからちつとも自立できないであります。それでも、お姉ちゃんはわたしを見捨てないでくれるでありますか？」

「当たり前でしょう」

驚くべきことに——、そう驚くべきことでもないが、那珂川勇也もついてきた。

難波のやり方には、さすがについていけなくなったらしい。

密かに食料調達班が全滅したことに恨みをもっていたのかもしれない。

ともあれ——。

当初、バスセンタービルに入ったときと同様に、三人でまた抜け出した。

「比較的安全なのは、おそらく線路のほうです。この線路を伝って博多南まで歩きます」

「駅ビル以外のどこかの建物じゃダメなの？」

「人口密集地ですからね。博多から離れたほうが安全でしょう。できれば佐賀あたりまで行きたいですが、今度は距離が離れすぎています。徒歩で行ける距離としては博多南駅あたりが限界でしょう」

勇也は食料調達班にいた経験から、安全な脱出路を知っていた。

博多南線はわずか10分程度とはいえ、れっきとした新幹線が通る線路なのである。

新幹線が通る線路は道路よりはるか天空を駆ける。

つまり、ゾンビがないものと思われた。

「駅ビルからは行けないわよね」

「幸い、連絡通路がギリギリ人が通れるくらいバリケードが撤去されていますんで、そこから駅構内をつつきます」

「ゾンビがいるんじゃない？」

駅構内はメインビルとバスセンタービルのちょうど中間地点あたりに位置する。

二派にわかれる前は、駅構内は捨て置かれたため、ゾンビが多少なりとも跋扈しているはずだ。

「そうかもしれません……けど、メインビルの連中が素直に通してくれるかはわかりません。もし、メインビル方面から抜け出すとなると賭けになります」

「つまり、是非もなしってことね」

野愛の言葉に、勇也は静かにうなずいた。

人としての尊厳か、身の安全か。選べるものではないけれど、しかし三人は選んだのだ。

★
||

博多駅の構内は何度も訪れたことがある。

普段なら雑踏といっても差し支えないほどの人の密度。

しかし、いまはまばらな姿。もちろん、ゾンビたち。

ゾンビのほとんどは駅ビルへの侵入口にひしめきあっており、わぎわぎ人の気配のない駅構内にいるものはよほど、駅構内への行き来が習慣づけられた者たちだけだろう。

「これなら問題なさそうだな」

勇也はほとんど一人ごとのように言った。

リュックだけ背負った野愛たちと違い、勇也だけはバールのようなものを装備している。

ゾンビものでは定番の武器なだけに、手にはしつくりと馴染んでいくようだ。

今も、近づいてきたゾンビを一撃し、永久に黙らせた。

三人は駅構内を駆け抜け、改札を通り、二階の新幹線口へ。

二階はさらにゾンビが少なくなった。

だから——といえるほどのことでもないかもしれない。

ほんの少しの気のゆるみ。

新幹線改札口の横にある小さな、本当に小さな駅員室。

そこに丸まるようにして座っていたゾンビに気づかなかった。

あるいは、そのゾンビが、あの恐慌に染まり走り去った、あの中年男性でなければ、あるいは簡単に避けることができたかもしれない。

つかまれたのは嘉穂。

手をつしりとつかまれ、驚愕に動くことができない。

噛まれると思った一瞬、野愛は自らの腕を差し込んだ。

肉の裂ける音が聞こえた。

嘉穂が狂乱する。

勇也がアニメのように「うおお」と叫ぶ。

振り下ろされるボールのようなもの。

数秒ののちに、沈黙。

しかし、野愛は未来を失った。

噛まれた腕からは血がにじんでいる。

噛まれたものがどうなるかは、もはや知らない者はいない。

例外なく――、ゾンビになる。

だから。

「行きなさい」

厳しく言うほかなかった。

「お姉ちゃん……」

嘉穂は絶望にうちひしがれた顔になっていた。

くりくりとした人好きのする顔は、いま涙をめいっぱい浮かべて、

年齢以上に幼く見えた。

「ちよつと予定より早いけど、自立するときが来たのよ」

腕を押さえながら野愛は言った。

幸いにも、勇也がいる。後を任せるものがあるというのは悪くな

い。

「そういうわけで、あとのこと頼むわね」

「お姉ちゃんも一緒に来るであります」

「無理にきまつてるでしょ。あと数時間もしないうちに、わたしはあ

いつらの仲間入りするわ。最後までらいひとりでいさせて」

「いやであります」

「いきなさいー」

半ばしかりつけるようにして、嘉穂を行かせた。

そうして、わたしはできれば誰の迷惑にもならないように、駅員室

の中に入り内鍵を閉めた。

そして、意識は闇へ落ちた。

☆
||

「お姉ちゃん。ごめんです……。ぜんぜん覚えてないであります」

ぎゅうぎゅうと抱き合う姿はてえてえです。

はい、ボクは緋色です。

どうやら野愛さんの話を聞く限り、創作ってわけではないと思う。これだけ真に迫った話を即興でできるなら、神のごとき天才だよ。

だから、野愛さんは犯人じゃない。

嘉穂ちゃんを食べちゃったのは、この話を聞く限りでは一番アヤシイのは那珂川勇也って子？

うーん、しかし――。

野愛さんの話を聞く限り、8月15日以降は絶賛ゾンビ中だったわけだよ。

正直、間があきすぎていて、誰が犯人かってさっぱりわからないままかな。

「あのー、そのあとはどういう経緯で復活したの？」

「それがその……」

野愛さん、クールビューティなのに顔を赤らめる。

「ん？」

「実は、中真様から見染められました」

「見染める？」

「お恥ずかしながら」

と、野愛さんが続ける。

★
||

野愛が次に意識を取り戻したとき。

白髪まじりの男性が、自分の手を取っていた。

野愛は小さな丸椅子に座り、男性は軽く膝をついている。まるで中世の騎士のようだ。

「起こしてしまいましたかな」

「ええと……」

頭が回らない。

実際に、これまでの間数か月。

頭をまわしていなかったのだ。ゾンビであつたので。

それが急に回転しはじめるにいたり、自分がゾンビになったこと、思考力を停止させていたことを思い出した。なぜ、思考で来ているのかわからない。

そのわけを知るのは、それから三分後のことだ。

「お恥ずかしながら——」

男性は述べる。

「この年にもなりまして、ひとめ見た瞬間、あなたに恋をしたのです」

真正面からの言葉だった。

野愛はこの年になるまで恋愛らしい恋愛をしたことはない。

嘉穂を育てるといふ使命が重く、それどころではなかったからだ。

その優しい瞳と言葉に、一瞬で撃ちぬかれた。

「はうっ」

かくして、ご主人様に恋する従順なメイドさんがひとり誕生したのである。

ハザードレベル151

嘉穂ちゃんのお姉さん——野愛さんが話し終えた。

聞く限りでは、博多駅ビル内で微妙なあれこれが起こり、野愛さんたちは最終的に脱出。

その際、野愛さんだけゾンビに噛まれて、その後に中真知事によって回復したらしい。知事クラスともなれば、ヒロゾンビであるのが普通らしいので、これはおかしなことではない。

野愛さんがノーマルゾンビではなくヒロゾンビになっているのには、わずかばかり特別な意味があるだろうけれども。つまり、それは中真知事が野愛さんに一目ぼれをしたらしいってこと。

ヒロゾンビにはいろいろ特典がついているし、ヒロゾンビは簡単に感染する。

添い遂げたいなら、相手もヒロゾンビにしたほうが手っ取り早
いってことかもしれない。

いや、知事がいい人ならそのあたりの説明はしたあとに、ヒロゾンビにしたのかな。

申し込みと承諾があったのかな。

意思の合致というか。

なんだかプロポーズっぽいなと思うと、少し顔が熱くなってくる。
いずれにしろ——。他人の恋愛事情につっこんで聞くのも野暮だし……。

中真知事の熱烈なアタックに野愛さんもまんざらではなさそう。

野愛さんをチラ見するボク。

相談室のソファにふんわりとしたスカートを広げて座る野愛さんは、メイド服を着た20代半ばのシユツとしたクール美人。大人な雰囲気があるし、実際に大人なだけ。

確か知事のほうは40代半ばらしいから、かなりの年の差があるなあ、とは思う。

べつにそのあたりはどうでもいいんだけど、野愛さんはボクの愛弟子の姉。嘉穂ちゃんのお姉さんだから、多少は気になる。

ボクの隣に座っている嘉穂ちゃんは、少々驚いているみたい。

結構、ドラマティックだったしな。ボクがいないゾンビの世界は、わりと普通にハードモードだから。つまり、噛まれたらおしまい。噛まれたらいずれ死ぬ。

そんな世界で、妹のために身を差し出す姉。

その姉である野愛さん自らが語ったことだから信憑性という意味ではやや疑問点もあるだろうけど、語り口に淀みはなかったし、実際に経験したことじゃないとここまで語れないだろう。

ボクたちがここに来た理由を野愛さんは今日まで知らなかったんだし、即興で作れるような話ではない。野愛さんが犯人である確率はぐっと低くなった。

「駅ビルの人たちはどうなったんです？」とボクは聞いた。

「存じません」

「存じませんって……」

「気づいたら全滅していたんですよ。彼らがどういう未来をたどったのか。興味ありませんし。ただ、あのコミュニケーションは私たちをイケニエに差し出そうとしたときに既に崩壊していたのです」

崩壊、ね。

倫理観という意味ではそうかもしれない。

ボクがいない世界での、刹那的な世界観。

嘉穂ちゃんと野愛さんが差し出された意味なんて、ほとんど決まっている。

難波さんとかいう大阪のおっちゃんは、そこまで考えていたのかどうかは知りようもないけれど。

いずれにしろ、8月の時点で始まったゾンビハザードが、ヒイロウイルスによつて緩和されるまでの4か月から8か月の間に、駅ビルのコミュニケーションはことごとく全滅しちゃったということらしい。

薄く笑う野愛さんの顔を見ると、自業自得だと言ってるようだった。

確かに———そうかもしれないけどね。

ゾンビハザードにおけるコミュニケーションの崩壊はほとんどの場合、人

間側のエゴによって生じる。

コミュニティ側の話はそれで終わったとして、問題なのは嘉穂ちゃんのほうが。

「えっと、野愛さんの話をまとめると……」

ボクはじつと野愛さんを見つめる。

野愛さんは薄く微笑んで待ちの姿勢。

「犯人是那珂川勇也くんってこと？」

「いえ、私は私の知りうる限りをお伝えしたのみです」

最後に嘉穂ちゃんといっしょにいたという同級生の男子。

那珂川勇也くんは、話を聞く限りではわりと好青年っぽかった。

けど、野愛さんが脱落したのはわずかゾンビハザードが起こってから半月程度のこと。

それから後のことはわからない。

人の気持ち——精神——心のありようが変わるには十分な時間があったように思う。

野愛さんの語り口はわりと公平で客観的っぽかったけど、それでも主観が混じっているのは否定できないだろう。那珂川勇也くんがどういふ人物なのかボクは知らない。嘉穂ちゃんはクラスメイトだから多少は知っているだろうけど、ゾンビハザード前の記憶しか残っていないから知りようがない。

「あ、それと言い忘れていたんだけど」

ボクは続けた。

「嘉穂ちゃんは誰かに食べられちゃってました」

「えっ？」

きよとんという顔。

それはそうだろう。

こういう異常事態をすんなりと飲みこめる人はそんなにいない。ボクという超下級の異常事態があっても、じんわりとしか染みこんでいかなかったしね。

「お姉ちゃん。私、誰かさんに食べられちゃってたであります」

嘉穂ちゃんがいつもの調子で言うものだからコメディ色が強い。

だけど、言ってる内容は激烈だ。

「誰かに？ 嘉穂が」

「そうでありますよ。冷蔵庫の中を見てみると、私のボディがまるーんしてたのであります！」

まるーんってなんだ？

ともかく、嘉穂ちゃんの必死の説明に、いよいよ野愛さんの顔がすつと青くなった。

血の気が引いたのだろうか。

「そうそれで……緋色様に助けていただいたというわけね」

「それだけじゃないであります。今のわたしは“魔法少女”みたいな不思議パワーも使えるのでありますよ！」

立ち上がり興奮した様子で話しかける嘉穂ちゃん。

もともと魔法少女になりたかった系の女子だからな。

ヒロゾンビになって、一定の人気を得た嘉穂ちゃんは、魔法のような力を得たといえる。

「落ち着きなさい。嘉穂」

「はい。であります」

ストンと椅子に座る嘉穂ちゃん。

「なるほど話はわかりました。嘉穂が誰かに食べられていたと……」

遠くを見るように何かを考えている野愛さん。

なにか重苦しい雰囲気や部屋の中に満ちる。

「それにしても、お姉ちゃんに好きな人ができたんでありますなあ」

と、暗い雰囲気や消し飛ばすような弾んだ声を上げたのは嘉穂ちゃんだった。

野愛さんの話を聞く限り、嘉穂ちゃんはけっこう空気の読める子だ。

わざと明るくふるまっているのかもしれない。

実の妹が食人されたと聞いて、お姉さんのほうも冷静ではいられないだろうから。

ただ殺されたというだけじゃない。

明らかに猟奇的な。あるいは変態的な。

「配慮ですか」

「忖度ともいいいます」

「政治的なあれこれもあるんだろうけど……」

「むしろ個人的なあれこれです」

野愛さんは中真知事を信じているということか。

「その……どうして、食人的なことを？」

ボクはうまく言葉をつむげない。

というか、いままでにそんなことを質問した人がいるのだろうか。

猟奇殺人犯にレポートするマスコミな人とかだつたらわかるけど。

「それは、直接お聞きしたほうがよいのではありませんか？」

「まあ確かに」

まあ確かにだ。

そこまで特殊な趣味だとすると、本人に聞いたほうが早い。

だけど、確認しておかなければならないことがひとつ。

「あの……。食人って言っても、殺してるわけではないんだよね？」

食人っていうと、基本的にそんなイメージあるけどさあ。

「もちろんです。わたしは中真様をお慕いしていると申し上げまし

た。わたしがそのような殺人犯をお慕いするような輩に見えますか」

「嘉穂ちゃんのお姉さんってこともあるけど、そうは見えないかな」

「ありがとうございます」

頭を下げる野愛さんに、ボクは微妙な気持ちになる。

「もしかして、食べられているのって……」

「ええ、わたしです」

それが何かと言いたげに、伊達眼鏡をクイっとするメイドさん。

んー。それって、つまりそういうことなのか。

ヒロゾンビは再生能力が強い。

例えば、腕一本を切り落としてもすぐに再生してしまう。

通常ならば、この再生っていうのもエネルギーを喰うところなんだろうけれども、ヒロウイルスの謎パワーで駆動しているので、無限に食人が可能だ。飯田さんが絶食していた時期があつて、さすがにヒロゾンビも食べないと餓えるのは証明されたので、どこまで可能か

はわからない。

けれど、例えばふたりでお互いを食しあえば……。

——究極の生産性。

といえるかもしれない。

本人たちが申し込みと承諾を繰り返す限り、つまり意思の合致がある限り、ひとまずのところ誰にも迷惑はかけないと思う。

嘉穂ちゃんを食べてなければ……ね。

嘉穂ちゃんの顔を見ると、なんとも言えない表情になっている。

一番当てはまる言葉をあえてあげるとするならば「困惑」かな。

いや、そりや実のお姉さんがわたしを食人されていますとかいわれたら、そりやそうなるよね。

しかも、自分も誰かさんに食べられているという状況なわけだし。

「命ちゃんはどう思う?」

「ご本人たちの意思次第でしょうが、個人的にはあまり好ましいとは言えませんね」

「どうして?」

「例えば、今の時期は公権力が非常に強くなっています。緊急時には民間の力が衰えますからね。そうすると、知事という公権力の強い地位の方が一方的になにかしらの融通を利かせるから、おまえを食べさせてくれるって言うわけです。もちろん、野愛さんの場合は違うのはわかりますが……」

「んんーなるほど」

命ちゃんとしては無理強いしている可能性がないのかって点が気になるのか。

そりやそうだよな。

例えばの話、金と地位をあげるから少女にその身を差し出させてことになったら、援助交際あるいは今風に言うところのパパ活っぽいかな。

「さて、では中真知事にお会いしにいかれますか?」

少しばかり精神的に疲れていたけれど、もともとそのつもりだったんだから、いまさら拒否する理由はない。それと、もうひとつだけ理

由をつけるとしたら、どうして食人しているのか聞いたほうがいいだろう。

ここに至っては、姉を探してという理由のみを伝えていたのが功を奏した。

知事は嘉穂ちゃんが食べられていたということまでは知らない。

☆Ⅱ

ボクたちは野愛さんの案内で県知事室までおもむく。

しかし、びつくりしたのは、この巨大な県庁という建物で贅沢に電気を使っていることかな。ボクの町は例によって物資的には結構めぐまれているほうだと思うんだけど、さすがにずっと発電機を回し続けるというほどのものではない。時間を決めたり量をきめたり、ともかく節約人生だ。

つまり何が言いたいかというと、最上階までエレベーターでいけるというのが素晴らしい。

高いところにある知事室というと、ほらあれだ。権力者がよくやる窓から街を見下ろす構図。

行き交う人たちの顔もなんだかスタイリッシュで洗練されている。

ボクを見ると、みんなにこやかなに一礼して去っていく。

福岡民ってやっぱ都会人なんじゃないかなんて思いつつ、いよいよ知事室の前まで来た。

知らない人に会うことに少しだけ緊張する。

しかも、相手はカーニバルが趣味のお方らしいし。

緊張しないほうが嘘だろう。

知事室の前の扉はボクの町の町長室より一段と格式高く、分厚そうな扉に守られている。

「よろしいですか」

野愛さんが振り返りボクに聞いた。入室してもよいか聞いているのだろう。

はい、とボクは応える。

野愛さんがドアをノックした。

中からは渋めの声で「どうぞ」と聞こえた。

開かれたドアからは、スーツ姿の男性の姿が見えた。

年齢は聞いていたとおり45歳なのかな。この年代って個人差が激しいのかよくわからない。すごく若々しく見えるし、40代と言われれば40代の顔つきだし。

んー。

さて——。どうしようか。

いろいろ考えてるうちに、知事は立ち上がりボクの方に近づいてくる。

「ようこそ福岡へお越しくださいました。夜月緋色さん。わたしは知事をやっております。中真です。どうかお見知りおきください」

物腰は丁寧。

差し出された手をボクは握る。はい握手。

「夜月緋色です。今日はありがとうございます」

それからは定型的に話は進んだ。

要するに、ソファに座って、野愛さんがお茶を出して、つまようじのつきの水ようかんが出されたり。パクもぐもぐしたり。おかわりはしなかったけど、なくなっちゃったって顔をするとおかわりがだされたり。

水ようかんは、知事には出されていない。

普通、歓談するときほだいたいお客さんと主人がいつしよのものを食べたりすることが多い。

やっぱり、食人以外しないから——とか。

「しかし、驚きました」知事が楽しげに話す。「野愛さんが探していたお姉さんだったとは」

「わ、わたしも驚いたであります——驚きました」嘉穂ちゃんが言いなおす。

いつもの口調じゃないのが少し違和。

「配信の時とは違う口調ですね。楽しんでもらって結構ですよ」
「で、ありますか」

「ええ、格式や様式も大事ですが、いまはプライベートな時間だと考えていますから」

プライベートな時間。

それは逆に言えば、公的な時間じゃないってことだ。

ある程度の個人的な質問も許される。

ボクはおかわりしたことになってしまった水ようかんにつまようじを刺す。

「あの、中眞知事にプライベートな質問があるんですけど」

おずおずと切り出す。

「なんででしょうか」

「食人しているってお聞きしました」

「ああ、野愛さんに聞いたんですね」

「すみません。変なこと聞いちやって」

なんだかイケナイ趣味を持ってますよねって聞いてるみたいで、かなり躊躇する。

しかし、知事はたいして気にしたふうもなかった。

「私としては公言しているくらいですから特に問題ありませんよ」

公言。

公に言うこと。

自分の食人趣味をおおっぴらに公開しているのか。

——ゾンヴァーガン。

知事はそう呼称した。

「ヴァーガンをご存じですか」

「えっと、肉食しない人ですよ」

「わたしはもともとヴァーガンだったのです」

どうにもベジタリアンとの違いがよくわからなかったけど、最近はそのような人も増えていたらしい。ゾンビハザードが起こってからは知らない。普通に考えて、缶詰とかの食料品でヴァーガンが生きられないとも思えないし、ボクがいなかった数か月はどうしていたんだろう。

そう聞くと、知事は哀しげに顔を歪ませた。

「緋色さんがいなかった間、わたしは自分の主張を曲げざるをえませんでした」

「主張？」

「ヴィーガンにもいろいろな主張を持つ方がいると思います。例えば肉食自体が嫌いだったり、野菜が健康にいいと信じて野菜しか食べなかったり。しかし、多くの場合に共通するのは、命は平等に尊いということですよ。できれば霞を喰らって生きていたい。しかし、そういうわけにもいきません。だから、ダメージが少ないであろう植物の命をわけていただきます」

豚や牛の殺される際の痛みにも共感してしまうんだろうな。

まあボクも少しはわかるよ。豚骨ラーメンを食べたいって思ったときに中学生たちに言われたことだけど、自分で豚を殺せるかって聞かれても難しいって思ったもん。

生き物を殺すのは厳しいことではある。

いつもはきれいにパッケージングされていて、死をほとんど感じないからおいしく食べられるわけだけど、ハムみたいなペラペラのお肉から、死まで連想してしまうほど共感性が強い人がヴィーガンになるんだろうな。

「知事は、ボクがいない間、えっと——人間を食べてたりはしない、よね？」

「そこまではしておりません。しかし、肉食はしてしまいました」

「生きるためだし、しょうがないのでは」

「そうですね。しょうがない……。現実はいつもそういう言葉で理想を覆い隠してしまいます。しかし、今は緋色さん。あなたがおります。わたしの理想は現実のものとなったのです」

ボクがいるから？

ヒイロゾンビのことか。

「理想が、つまりゾンヴィーガンなの？」

「そうですね。わたしの理想とは、要するに食することによるダメージの総和を減らすことです。食べられること、傷つけられることによるダメージ、不安、恐怖、そういったものをできる限り少なくすること

です。豚も牛も鳥も植物も、痛いとは言ってくれません。しかし、ヒイロゾンビは違います」

「ヒイロゾンビは痛いといわないからいいって？」

「ええ。ヒイロゾンビは身体のコントロールができますから、痛覚をカットすることもできるんですよ」

「まあ、それぐらいはできるだろうけど。それって同意がとれてるから傷つけてもいいってこと？ それとも再生するからなににしてもオーケーってこと？」

「両方ですね。例えば仮にヒイロゾンビ豚なるものが可能になったとしても、わたしとしては肉を切断される恐怖を考えると豚を食べるのはよくないことだと考えます。また、いくら同意がとれていても再生しない身体を傷つけるのはやはりダメージだと考えます。両方あわさって初めて、わたしの理想となるのです」

「同意って本当にとれているのかな」

「わたしは野愛さんの言葉を信じているんですよ」

うーむ。難しい。

ハザードレベル152

中真知事はゾンヴァイガンだった。

ヒイロゾンビを人間の一種だと捉えれば、それもまた食人だよ。字面にするとたいしたことない感じだけど、実際には食べられている側の人間がいる。

つまり、この場合の食べられる側は野愛さん。

野愛さんは傍らに控えるように立っている。

ボクの意識では野愛さんはちよつとだけお姉さんって感じだけど、中真知事の年齢からすれば娘といってもいいぐらい年齢が離れている。

いかがわしい関係ではないと思うんだけど、いままでにない新しい関係だ。

だってヒイロゾンビという存在がいなければ、そもそも成り立たない関係。

やっぱり少し戸惑いがあるかなあ。少しばかり常識が破壊されるというか。倫理観や道徳感情的に混乱が生じるというか。だって、食人だよ。もぐもぐしてるんだよ。いいのかって思っちゃう。

想起されるのは生首状態になった嘉穂ちゃん。アレには意思の合致も愛もなかったと思う。

けれど、具体的な行為としてはほとんど同じだ。

ちらつと視線を上げてみると、野愛さんは静かに笑んだ。

「中真様の言葉は真実ですよ。わたしはいささかも痛みを感じておりませんし。むしろその身をささげることがうれしくもあるのです」

「お姉ちゃんは本当にいいんですか？」

嘉穂ちゃんが素朴な疑問を発する。

もうすでに何回かしている疑問。

同意。承諾。あるいは——意志の合致。

「いいのよ。嘉穂。なんといえればいいかしら。私は尽くすことが好きなタイプなんだと思うわ。いままでわたしはあなたのことを親代わりで育ててきたけれど、私にとって救われた部分も大きいと思うの

よ。わたしはあなたに救われてきたの。ありがとう嘉穂」

「お姉ちゃん……」

「もちろん……。もちろん、あなたがいなくなって、その代わりに中眞様に尽くしてきたことも否定できないかもしれないけれど、わたしは心の底から中眞様をお慕い申し上げているの」

クール眼鏡美人が顔を赤らめる。

いままでにならないタイプだったから、なんかこう男心にグッと来るな。

「野愛さん。ありがとう」

中眞知事は野愛さんの指先を軽くとり、ふたりはうるうるで見つめあい。

そのままキスでもしそうな雰囲気だったけど、さすがに妹と見た目小学生なボクの前では自重したようだ。でもまあ、これで意思の合致がないなんて言えないね。

ただし、これだけは確認しておこう。

「ちなみなんですけど、具体的にどういうふうにかニバってるんですか？」

ふたりはギョっとしたように止まった。

「緋色様、それはこの場で実演して見せろということですか」

「できれば後学のために」

一応、なんというかこの後、将来的にゾンヴァーガンが増えるかもしれないし、そうなったらどうという情景が展開されるのか知りたくもある。

世の中にグロ注意な食事風景が展開されるのであれば、やっぱりそれは規制対象になるのかな。その昔、セックスと食事の価値観があべこべになったマンガとかあった気がするけど、食事もきわめてクロードズな関係になるかもしれない。

わりと失礼なことを言ってる自覚はあるけど……。正直なところ最後の検分でもあるんだ。

嘉穂ちゃんを食べたのは、本当に中眞知事じゃないのか。

少しでも情報を収集しておきたい。このファーストコンタクト時

くらいしか、そういった機会はないだろう。わりと名探偵ムーブしてませんか。ふふん。

「かしこまりました。そこまでおっしゃるのでしたら。よろしいですか中真様」

「もちろんかまいませんよ。ゾンヴィーガンが世界的に認められるチャンスですからね」

「中真知事はゾンヴィーガンを増やしたいんですか？」とボク。

「そうですね。私は理想主義者なので、できれば誰もが痛みを覚えず……、殺される恐怖を覚えることのない世界が到来してほしいと思っております」

「でも隠してたってことは、やっぱりどう思われるか心配もあつたってことですよ」

「そうですね。理解されにくいとは思いますが。豚や牛が殺される恐怖を覚えていると、わたしは信じていますが、豚や牛のところがわかるのかと反論されるでしょうし、植物にも痛みを感じるころはないかと、ヴィーガン時代によく言われたものです。その延長上にあるゾンヴィーガンもおそらくおいそれとは受け入れられないでしょう」

「野菜はおいしいよ」

「私の考えでは、野菜のほうがダメージが少ない。野菜には全能性がありますから、一部を切り取ってもまた生えてくるでしょう。だから、ダメージの総和が少なくなるので、そちらのほうが正しいという思想だったわけです」

「豚や牛も増えるから、ダメージの総和は植物と変わらないように思えるけど」

「ですが、不安や恐怖はどうでしょうか。植物と違い、豚や牛は殺される前に自分の死を悟り、泣き叫びます。わたしには彼らが恐怖と不安を抱いていると思うのです」

「んー……、ヴィーガンの主張はよくわからないけど、ともかく植物にも痛みがあるって仮定したから、痛みがゼロのヒーロゾンビを食するほうがいいって考えになったわけだよ」

「そうですね。究極的にはすべての人類がヒーロゾンビになり、互い

を食しあう世界がよいと考えております。それは痛みのないクリーンな世界です。人類はようやく長らく目をそむけてきた残酷な行為から解放されるのですよ」

終始おだやかな調子で語る中真知事。

言いたいこともわからないでもないけど、どうなんだろうな。

ボクは単純に豚骨ラーメンも好きだし、すまんが豚には死んでくれって考えただけど。

残酷なんだろうか。

「ご用意してまいりますね。いつもはご用意してからこの部屋に持ってくるのですが——緋色様は、現場を見たいのでしょうか？」

怪しく笑って野愛さんが知事室を出て行った。

しばらく、無言タイム。

「あの、ふと思っただけどき……」

問いかけたのは対面に座る知事ではなくて、ボクの両隣に座る命ちゃんと嘉穂ちゃんに対してだ。

「ボクたちみたいにいわゆる”人気者”になったら、人気だけで食べていけるのかな」

人気を得ると、なんだか知らないけど超能力が身につくヒロゾンビ。

百万人クラスになると普通に宙を浮けたりするわけだけど、そのエネルギー的な何かを摂取してるとって考えれば食事しなくても済むような気がする。

「理論的にはそうでしょうが、水ようかんをお代わりするような先輩が食べないで暮らすなんてできるはずがないですよね」

み、命ちゃん。そのご指摘は……。

「師匠は食べることが大好きでありますからな。ちっちゃい子が一生懸命食べてる姿はかわいいであります」

嘉穂ちゃんまで……。

ボクはいつのまにやら食いしん坊ガールと化していた!?

坊なのにガールとはいったい。

「お待ちせしました」

って、鉋あああ！

野愛さんが持ってきたのは女性が持つにはあまりにも規格外なサ
イズ。

マチエツトといってもいい、巨大な鉋で、先端がわずかに尖がっ
ている。

わずかに内側に曲面を描いているソレは、なにかを切断するために
生まれた凶器に見えた。

「いつもは調理場でおこないますが——、緋色様に実演するためにこ
こで行うことにしました」

ひ、ひえ。ボクのせいですか。

よく使いこまれてるようで、血糊とかがついてるわけではないけれ
ど、鈍い光を放っている。

わずかに持ち上げてニタア（ねっちより音）と笑う姿はちよつとし
たホラーだ。

野愛さんは鉋をその場に立てかけるようにして置き、その場でビ
ニールシートのようなものを広げ始めた。

あーね。

このままだと、殺人現場みたいに血が飛び散るからね。

もちろん、作業台になるようなところは、つまりちようどいい高さ
なのはソファアーのところのローテーブルではなく、知事の座っている
デスクのほう。

中真知事は大事な書類とかをどかしていた。

まるで息のあった夫婦のようだ。

青いビニールシートが敷かれた机は、やっぱりどこか異様な雰囲気
で、わずかばかり物怖じしてしまう。この風景が世界中で展開される
ようになるのかと考えると、やっぱり少しは抑制したほうがいいん
じやないだろうか。

ボクは自由を第一とする、本当の意味での自由主義者ではあるけれ

ども、さすがにこの光景は——、お子様とかに見せてよいものなのか。

しかし、イメージを除けば、その残酷で、拷問めいた光景を除けば、やっていることはまるきり優しさのカタマリともいえる。

誰も傷つく人がいない。過程としては傷つくけれども結果としては誰も何も損しないという仕組。

「さて、調理を始めますが本当によろしいのですね」

「うん……」

いまさら後にはひけないし。

嘉穂ちゃんを見ると、若干だけ顔色が悪い。

まあそりやそうだよね。

「嘉穂ちゃん。やっぱりやめとく?」

「いえ、ここは師匠の言葉に従うであります」

ふむん。

「ではお願いします」

野愛さんは「かしこまりました」と言い、メイド服の袖ボタンを丁寧にはずしていく。

そして、左手をすつとまくり上げた。

黒を基調としたメイド服に透明な白い肌が露わになる。

なんとなく、えっちだなと思いました。

「痛みはありません。正直申し上げますと、最初はやはり恐怖や痛みもあったのですが、意志の力でコントロールできます」

「愛の力なのでありますな」嘉穂ちゃんが言う。

野愛さんは満足そうに頷く。

正しい評価なのだろう。

実際、ボクも痛みはほとんどシャットアウトしている感じ。

薄いバリアみたいなのも無意識に張ってるんだけど、それだけだと衝撃による痛みは殺しきれないはずだからな。あの空母で地面に叩きつけられたこともあったけど、ぜんぜん痛くなかったのは、まさしくダメージコントロールの結果だ。

……集中したように目を細める野愛さん。

左手を軽く知事の机に横たえ、もう片方の腕を振りかぶる。
そして、ダンっ！

人間は——ヒロゾンビは究極的には炭素のカタマリにすぎないことを思い出させてくれる。

ゾンビ映画でよくあるような局部破壊。

野愛さんの腕はちょうど肘から十センチほど手のほうに上ったところあたりで切断された。

血が飛び散るかなと思っただけどそんなことはない。

粘土の高いスライムのように、ややゼリー状といったらいいか、血が液体ではない状態で固定されている。ヒロゾンビがそうなのでなく、この瞬間に野愛さんがそういうふうに変質させたのだろう。

残された腕はかわいらしいピンク色と白色のコントラスト。

はい。そんなわけありません。普通にグロい絵面です。

「痛くないのでありますか？」

「まったく痛くないのよ。慣れば蚊に刺された程度」

「でありますか」

「ええ……それに、再生力を高めることも可能なの。意識すれば——ほら」

うへっ。

まさしくそれは腕が生えるという表現が妥当だった。

野愛さんの腕はドラゴンボールのナメック星人よろしく、一気に根本から生えたんだ。

普通にしても数十秒くらいで再生してしまう瑕ではあるけれども、意識すれば本当に数秒で回復するんだな。初めて知ったよ。

そして残されたのは、新鮮なお肉……。

というか、普通血がドバドバでるかと思っただらそんなことはなかったの、マネキンの腕が置かれているような感じだ。

グロはグロだけど、微グロかな。瑕ひとつない白い腕がそっと置かれているので、ある種の芸術品めいた感じもしなくもない。

「さて、これで素材ができました。少し早めですが、お夕飯をございっしよなさりますか？」

つまり、中真知事の食事風景も見るかってことだ。

「……生で食べるの？」

今は銀色のお盆のうえに置かれた腕を見て、ボクは質問する。それに答えたのは、中真知事。

「究極的にはそのほうがよいのでしようが、わたしはまだ精進しきれないのです」

「焼いたり、塩を振ったりはするんですよ」

野愛さんがうれしそうに言う。

ゾンヴィーガンとしては、調味料に植物も使われてる場合があるだろうから、それも一種の主張の緩和にあたるのかな。

それに人肉焼いたら、やっぱり独特のニオイがするんじゃないだろうか。

いやそもそも人の腕焼いていたらビックリするよね。

「そのあたりの事情は調理場を使う方には説明しております。それと意志の力である程度ですが味のほうもコントロールできるんですよ」

なるほど……。

なんだかすごいのかすごくないのかよくわからないな。

今日は甘いわたしを食べさせたいのみたいな？

「おぞましい行為に見えるかもしれないかもしれませんが」中真知事が愛おしそうに“素材”を見つめる。「わたしのようなゾンヴィーガンは将来的にはスタンダードになっていくでしょう」

「なっていくのかなあ」

「世界的には人口爆発によって虫を食べたりする研究もあつたのですよ。コオロギのせんべいとかご存じありませんか」

「知りませんでした」

そんなのあるんだ。

「虫は一般的には忌避対象でしょう。しかし、これもまた今後は食べられるようになるといわれておりました。そもそも日本でもイナゴを食べたりする地域もありましたしね。要するに幼いころから訓練すればさほど忌避感を抱くことなくなんでも食べられるようになるのですよ」

「同じようにゾンビーフも食べられるようになるってことですか？」
「そのとおりです」

うーん。ボクの中になんだかモヤつとしたものを感じるのは、単に幼いころからゾンビーフを食べる訓練をしていなかったせいなのかな。

人肉についていえば、プリオン異常とかが出るとかで、やめといったほうがいいって話だけど、ヒロゾンビ肉についていえばそういうことではないだろうし。

理性的に考えれば、完全食という感じもしなくもない。

「それで——」野愛さんがニコリと笑う。「食べていけますか。わたしを」

「ひ、ひえ」

いまのボクには理解できないのでした。

☆
＝

一番の目標である嘉穂ちゃんのお姉さんが見つかったので、とりあえずのところ中真知事との歓談が終わったあとは、いったん県庁内のお部屋をあてがってもらった。

部屋の広さは十畳くらい。おそらくもともと避難所として機能していたのか、会議室か何かのような何もない四角い部屋の中にツインベッドが置かれている。

もう一度言う。ツインベッドが置かれている！

ボクと命ちゃんと嘉穂ちゃん。三人なのにツイン。

ともあれ——、ボクたちは荷物をベッドの傍らに置いた。

靴脱いでポイ、靴下脱いでポイ。

考えてもしかたない。ベッドにダイブ！

ふう。お日様の匂いがするな。なんだか眠くなってくる。

だけど。

明日からどうするか、ボクの弟子である嘉穂ちゃんとも決めなくてはならない。

ボクはニユつと上半身を起こし、対面のベッドに座る嘉穂ちゃんを見つめる。

命ちゃんは当然の権利のようにボクの隣でした。

まあ散々つばら同衾してるので、べつに気にはなりません。

嘉穂ちゃんは空気が読める子だしね。

「さて明日からどうしようか」

「福岡の復興状況を確認するのでは？」と嘉穂ちゃん。

さっきの知事との話ではそういうことになった。

まるでボクを政府のお偉いさんのように思っている節がある。

「まあそうなんだけどね。まずボクたちの目的は嘉穂ちゃんのお姉さんを見つけることだったでしょ。それは達成されたわけだけど、次の目的は、嘉穂ちゃんをモグモグした犯人を見つけることになるよね」
「そうでありますな」

「ただ——、行為としては同じように見えるけど、知事は犯人っぽくないよね」

「そうでありますなあ。どう考えてもおお姉ちゃんとラブラブでありますし。あんなにべらべらと自分の主義主張を話す人が嘘をついていとも思えないであります。知事の主張は痛みのない世界でありますから、誰かを殺すというのは考えにくいでありますな」

ふむ。ボクと同じ考えだな。

知事はゾンヴィーガンだけど、穏やかな人なんだろうと思う。

その考えを誰かに強いたりしない限りはね。

「ここで、今後どうするかだけどさ。例えば犯人捜しをやめるってことも考えられる」

「で……ありますか」

「嘉穂ちゃんがお姉さんの言うとおりに脱出したあと、誰かに殺されて食べられたとして、ほとんどその誰かにもう一度殺されることはないよ」

すでにボクの弟子として——100万人クラスの“人気”を集めている嘉穂ちゃん。

誰かに害されるってことはそうそうありえない。

「そうでもありますな。改めてヒイロゾンビが規格外の存在だと思いつたであります」

「まあ一応継続的に犯人捜しはしてもいいと思うけどね。駅ビル脱出時にいっしょにいたっていう那珂川勇也くんだっけ。その子が犯人かもしれないしね。どんな子だったか覚えてる？」

「うーん……。正直なところ同じクラスのほとんど話したこともない男子という感じでありますな。わたしの記憶がないなかで仲良くなってる可能性はありますが」

「つまり犯人かどうかはわからない？」

「わからないでありますな。お姉ちゃんの話聞く限りでは、暴力的というわけではなさそうですが、それこそ師匠が現れる前は、人間の本性がじわじわと露わになってきたでありますし」

「那珂川勇也くんが見つかれば問いただしてみるのはいいかもしれないね」

でもまあ、博多の駅ビルにいた連中がどこにいったかもわからないように、正直なところ膨大な数の人がゾンビの波にのまれてしまっている。

今後見つかるかどうかはわからないだろう。

「それでさ。嘉穂ちゃんは今後どうする？」

「どうするとは？」

「お姉さんが見つかったわけだけど、いっしょに暮らしていくの？」

「いえ……」ぼそりと言う。「お姉ちゃんはお姉ちゃんの幸せを見つけたのであります」

「邪魔したらいけないって？」

「そう思うであります。全然記憶にありませんが、駅ビル内で言われたとおり、わたしはそろそろ独り立ちをすべき時なのかもしれません」

嘉穂ちゃんの瞳の中には、不安が揺れていた。

「ボクの住んでるところに来る？」

「師匠のでありますか」

「うん。愛弟子よ。いまだ一人暮らしをするにはレベルが足りんぞ」

腕を組み、師匠ムーブを決めるボク。

「師匠くくくくくつ」

対面からダイブしてくる嘉穂ちゃん。

愛弟子を見捨てるわけにはいかないからね。

命ちゃんが微妙な表情になっていたけど、これは師弟愛です。
ノーカンです。

ハザードレベル153

県庁の一室には来賓用のお風呂が用意されていて、ボクはすっかりホカホカ状態になっていた。

もちろん、覗きとかそういうのには気をつけないといけないだろうけど、今のところ大丈夫。

福岡県民はやはり都会人だねえ。

いや、佐賀だから覗かれたってわけじゃないけどさ。

あ、ちなみに覗きというのは、ボクの小学生並みの貧層な身体が見たいということではないよ。

ヒロちゃん汁……高く売れたりするだろうからね。本当はお風呂に入った出汗程度では、ヒロウイルスは染みこまないんだけど、なぜか売れちゃったりするんだよねこれが。

お風呂の水はもつたないけど、全部捨ててもらいました。

で、いまは夜の七時くらい。

そろそろお腹すいてきたし、何か食べようかな。でも動くのが億劫だ。

着ている普段着も脱いじやって、いまはマナさんから用意してもらったスケスケ下着というかフリルタイプのワンピースパジャマになってるから、さすがにこの格好のまま外には出たくない。

痴女ならぬ痴少女になってしまふ。でもまた服を着替えるの面倒だし、このまま寝ちやおうかな。

ベッドにころんと横になってたら、命ちゃんから後ろに抱えられた状態になった。

首筋あたりに空気を感じ、なんだかくすぐつたい。

嘉穂ちゃんは目の前のベッドからこちらを見ていて、少し生暖かい視線だ。

「仲良しさんですな」

「命ちゃんが甘えん坊なんです」

「先輩がかわいすぎるのがよくないんです」

ボクが悪いのか。

それにしても、いろんな人からクンクンされてるボクだけど、そんなにいい匂いがするんですかね。甘い匂いがするとか、練乳っぽいとか、果ては女兒の匂いとか、いろいろ言われてるけど。

男のときとは違うのかな。

まあ嫌な臭いじゃなきゃいいんだけどさ。

ゾンビ世界的には、お風呂に入るのも一苦労だったりするわけだけど、いまは結構みんな身ぎれいになっている。もともと日本は水量的には豊かだ。その水を配送する仕組み——つまり、電気があればお風呂には入れる。

福岡のインフラは結構回復しているんだなという印象。

そうこうしているうちに、命ちゃんの手つきに遠慮がなくなってきた。

ボクの銀系のような髪の毛を、さわさわと触っている。さつきドレイヤーで丁寧に乾かしているから、つやつやに光っていて、見た目的にもきれいだ。

堪能されていますか？

「先輩が近くにいるとヒロゾンビ的に安心するのかもしれない」

命ちゃんがしみじみと言った。

ピンクちゃんがボクのことインフラって言ってたしな。

ボクの中の濃密なヒロウイルスがヒロゾンビには安心感を与えるとか。

「ゾンビの世界は危険と隣り合わせでありますから、師匠のポジションは救いの天使とか、救世主とか、そういう安心を与える存在だったのでありますかね？」

嘉穂ちゃんは純粹な疑問を口にしたようだ。

「匿名掲示板とかではそんな感じだったかな」

「解剖とか実験対象になることは考えなかったでありますか？」

「考えなかったわけじゃないよ」

「ゾンビ映画ではわりとポピュラーな展開でもありますからな」

「そうだね」

「ではどうして？」

「どうしてみんなの前に現れたのかって？」

「はい。であります」

「んー。特に考えがあったわけじゃないけどさ。ボクも親が早くに亡くなってるね。誰かによりどころになってほしかったのかもしれない」

「配信の”みんな”が家族でありますか？」

「家族とは違うかもしれないけどさ。なんとなくつながりを求めているっていうか」

「ゾンビ映画では定番でありますからな」

「ん。ゾンビ映画がどうしてここででてくるの」

「あ、いや。ゾンビ映画だどこかにたてこもったりするでありますから、そういったところで、なんとなく共同体っぽい何かができるであります。家族みたいだなと思ったのであります」

「なるほどね……。そうかもしれない」

ゾンビ映画スキーとしては盲点だったけど。

たしかに――。

無縁なボクが何かしらのよしみを求めて。

そういった疑似的な家族関係ができるゾンビ映画が好きだった説。

あるかもしれないなあ。

「師匠は、わたしも家族みたいになってくれるでありますか」

「もう身内って感じだけど」

会ってまだ二日しか経ってない。

でも、よしみってそういうもんだよね。

なんかもうかなり馴染んでる気がするんだよね。

嘉穂ちゃんはうるうると瞳を濡れさせている。

彼女もまた両親が早世したらしい。家族に対する郷愁の念はわかるよ。

「しかたないですね」命ちゃんが唐突に言った。「おすそ分けしてあげます」

「おすそわけ？」

「先輩をおすそわけしてあげます」

もぞもぞと動いてボクごと後退する命ちゃん。
前衛のスペースが開いた。

嘉穂ちゃんがうれしそうに靴を脱ぎ、ベッドにもぐりこんでくる。
顔、ちかいよ。

弟子という感覚からすると、JKの顔が近いということに興奮した
りはしない。

というか、家族が恋しいという感覚はわかるからね。

ボクとしても何も言えなくなってしまうのです。

「んー。確かに師匠を近くに感じると安心するでありますな」

「そうでしょうそうでしょう」

命ちゃんが大仰に頷く。

「それになんか甘くていい匂いがするでありますな」

「そうでしょうそうでしょう」

「今日はこのまま眠りたいくらいであります」

「そ……それはダメです。おすそわけした食べ物全部食べちゃうぐ
らい行儀が悪いです」

命ちゃんのたとえば必死すぎる件。

本質的には命ちゃんはボクとふたりきりでいたいって気持ちも強
いかもしれない。

配信の”みんな”とのつながりや疑似家族的な関係も、ボクがそう
望んでいるから、我慢しているだけで、本当はいやなのかもしれない
な。

それは命ちゃんの愛が排他的だから。

誰かを愛することは誰かを愛さないことだから。

「それにしても——」

少し間をあけて、嘉穂ちゃんが透明な口調で話しました。

「お姉ちゃんに好きな人ができてよかったです」

「さみしくないの？」

「さみしいではありますが、家族が増えるのなら悪くないと思うであ
ります。中真知事は悪い人ではなさそうですし、少々特殊な考え
をお持ちではありますが……」

「ゾンヴァーガンね」

ヒロゾンビの無限の再生能力に依拠した、ヒロゾンビを食べるヒロゾンビ。

ここ数か月の間にでてきた新興の信仰（激うまギャグ）。

いや、思想か。

「正直なところ、お姉ちゃんの腕を見たあとだと、本当にいいのかって思ったりはするのでありますが、それもお姉ちゃんの問題でありますからな」

「まあ本人たちからしてみれば納得づくだからね」

むしろ、本人たちにとってみれば、イチヤイチャの部類なんじゃないか。

なんか凄惨な光景だったけどさ。

「先輩としては、ゾンヴァーガンをどう思いましたか？」

命ちゃんが聞いた。寝返りうってそっちを向く。

「本人たちに合意があるんじゃないんじゃない？」

「本人たちに本当の合意があるかはわかりませんよ」

「どういうこと？」

「例えば、ゾンヴァーガンな権力者がいて、お金を出すから君の臍臓を食べたいと言ったとする。お金のために臍臓をえぐりだして食べさせる。合意はあるかもしれませんが、社会的な圧力で意思が捻じ曲げられてると思いませんか」

「うーん。そういうこともあるかもしれないね」

「中真知事は比較的穏当でしたが、なかには踊り食いたいと考える輩もいるかもしれません。ゾンヴァーガンたちが何人かで集まって“会食”を行うということもあるかもしれないわけです」

「考えだすとキリがないよ」

「で、先輩としてはこの思想を周知させますか。させませんか。それとも封じこめますか」

「配信でアンケートとったりするかってこと？」

「そうです」

「自由にさせればいいんじゃない。ボクが聞くことでもないでしょ」

「いずれ周知度が高まってくれば、先輩の考えを聞きたいって言うてくると思いますよ」

「それはそうかもね」

ただどうなんだろうな。

例えば、八歳児のピンクちゃんに、ゾンヴィーガンどう思うって聞いてみる。

なんだかそつちのほうが犯罪的だと思う。

☆
＝

こんこん。

突然にドアがノックされた。

「はい」

ボクは寝つ転がった状態から起き上がる。

みんなはボクと違って、普段着のままだからべつに開けられても恥ずかしくない。

ボクは小学生的なので、まあいいかという感じ。

「野愛です。開けてもよろしいでしょうか」

「どうぞー」

果たして野愛さんだった。あいもかわらずメイド服で手には配膳するためのカートのようなものがある。当然、なかにはトレイがたくさん入っているのだろう。

つまり、野愛さんがしてくれるのは給仕だ。

メイドさんがその職務を忠実にこなして給仕してくれるなんて、ボクの人生ではメイド喫茶くらいしかないだろうと思っていたよ。行ったことないけどね。

「かわいらしいお姿ですね」

「え?」

突然、そんなことを言われたんで面食らう。

「変かな?」

「いえ、幾人かに食事のご用意を手伝ってもらおうかと思ひまして――

「要は机の配置ですね。そのときに私以外の者に緋色様のお姿を見られてしまうのですがかまいませんか？ もちろん女性ですけれども」

「ぜんぜん問題ないです」

「そもそも小学生女兒がパジャマ着てたからって、たいしてセンチティブじゃないと思う。」

「先輩を瓶に閉じこめたいとか考えるマナさんみたいな人がいるかもしれないよ」

「いるのか……そんな人」

「実例が一名いるので、なんとも言えないけど、マナさんは例外だと思いたい。」

「そんなわけで、幾人かの女性職員が部屋の中に折りたたみ式の机を持ちこみ、カートの中のトレイを配置していった。けっこうな量だね。ビュツフエ方式というべきなのか。」

「ウインナー。ハムみたいな定番から、分厚いサーロインステーキ。お刺身。ポウルいっぱいいくら。焼き鳥とかハンバーグ。お魚の煮つけ。お魚を焼いたもの。白いご飯。かしわめし。お寿司。カレーライス。デザートも豊富。プリン。杏仁豆腐。ゼリー。変わったところではたいやきなんかもある。」

「てか量多いよ！」

「これ全部は食べられないと思うんですけど」

「もちろん、好きなものを好きな量だけお召し上がりください」

「知事のお思想と真逆な気がするんだけど」

「中真様はご自身の思想を誰かにおしつけているわけではございませんので」

「それならいいんだけど。すごく残るよ？」

「ゾンビの世界だと、お残しは罪深い気がする。」

「ゾンヴィーガンほど極端じゃないにしろ、これだけ大量に残すのはちよつとね。」

「佐賀では、みんな結構粗食だったからなあ。」

「まあヒロゾンビは、人間よりは食べないで済むっぽいから、無理」

して我慢してたつてわけでもないんだらうけど、物流的にゾンビハザード前のようにとまではいかないから、自然と食べる量を減らしていたつてのはあるかもしれない。

「そもそも、緋色様が現れてくださらなければ、このような食事も用意できなかったわけですから、どうぞ気兼ねなく」

「無理してないかなって思つて」

「お優しいのですね。大丈夫ですよ。福岡の物流はかなりのところ回復しております。新鮮ないくらは北の海でとれたものです。福岡までは当然、船を使っています。港もですね。なのでご心配なされることはありません」

つやつやの宝石のようないくら。

ふむ。北海道産なのかロシア産なのかはわからないけれど、冷凍していたものを解凍していただいたわけじゃないのか。福岡はやっぱり本州とつながつてる分、復興も早いのもかもしれないな。

「でもお高いんでしょう?」

ボクはノリでそんなことを言つてみる。

確か、福岡はお金が復活しているという話だったからだ。

いまの金銭的価値に換算すると、この料理がどれくらいの重みをもつのか知りたかつた。

「緋色様がお与えになつたのは命です。命よりも価値のあるものはそうじゃないでしょう」

野愛さんはゾンビから復活している。

ボクがいなければ、ゾンビのままだったわけだから、ボクが命を与えたといえればそうなのかもしれない。命とは、考えることだから。思考を停止させているゾンビはやっぱり死んでいるのと同じだ。ただ、熱を帯びたまつすぐな視線を感じると――。

「ちよつと恥ずかしいんだけど」

「お食事はほかの命をいただくもの。緋色様が与えた分が巡り巡つて帰ってきただけのことです。いっぱい食べても誰も責めませんよ。むしろ、緋色様にいっぱい食べさせたいという欲求が湧いてきます」
食べさせたい欲求か。

母性の一種なのかな。それとも被食欲求的なものだったりして。野愛さんって、ゾンヴィーガンの食べられるほうだしな。

こっそり”自分”を入れたりしてないよね？

——ピコーン。ピコーン。

ゾンビソナー的には大丈夫。ヒロウイルスは付着していない。

じーっと見つめていると、食材たちが食べて食べてと言ってるような気がしてきた。

「じゅるり」

「ふふっ」

はっ。いかんいかん。野愛さんの甘言に危うく操られるところだった。

でも、せつかく用意してくれたものだし、食べないって選択はないよね。

「たくさん作ってくれてありがとうございます。でも全部食べられないのはもったいないから、今度もしお料理作ってくれるなら定食みたいな様式がいいな」

「かしこまりました」

薄く笑う野愛さんはやはり美人な印象だ。

見た目はクールだけど、結構あったかい人って感じ。

「この料理でありますか、お姉ちゃんが作ったでありますか？」

嘉穂ちゃんは前のめりになっている。

「ええそうよ」

「お姉ちゃん。こんな高級食材で料理できたのでありますな」

「嘉穂には粗食を強いてきたわね……」

「貧乏でありましたからな」

あつけらかなと言いつつ嘉穂ちゃん。

悲壮的な感じはしないけど、なんだかそれなりに苦労はしてそう
だ。

さっきの野愛さんの話を聞く限り、野愛さんがひとり家計を支えていたらしいし、大変だったんだろう。いまは——、言い方は悪いけど、権力の中枢に近いから、それなりに裕福になったんだろうな。

「いっぱい食べるのだ。弟子よ」

「わかりましたであります！」

ビシ。

敬礼する嘉穂ちゃんの顔は底抜けに明るかった。

☆Ⅱ

限界いっぱいまで食べると、すぐ眠たくなって、ふわふわする。このまま眠ってもいいんだけど、気になったのはやっぱりさっきの命ちゃんの話。

ボクはゾンヴィーガンについてみんなに問いかけるべきかな。うん。

たぶんだけど、突然だとみんな驚いちゃうと思うんだよね。

いろいろ考えたけど、やっぱり聞いてみることにしました。

あくまで思考実験のひとつとしてならどうだろう。

そんな感じでー。

もちろん、命ちゃんや嘉穂ちゃんにもアドバイスはもらって、それもありかって話になった。嘉穂ちゃんは今回はおやすみ。お姉さんのことでもあるしね。やっぱり意識しちゃうと難しいだろうからというのが、その理由です。

さて——、つまりお久しぶりの単独配信です。後ろには命ちゃんも嘉穂ちゃんも控えているけれども、ボクのみが登場人物となっている配信。

今日は絶賛スケスケ下着だけど恥ずかしくない。

そう、バーチャルならね！

「はろはろ。今日もバーチャルなボクでやっていくよ」

『バーチャル！』『ヒロちゃん！』『ちよつとまつてスケスケ下着やん』『えつつつ！』『バーチャルでもエロい』『妖精さんみたい』『小学生がそんな恰好で配信しちゃうダメれすう！』『生姿見せて生姿！』

そんなにえちいかな。

命ちゃんの謎技術で、着ている物や持つてる物は即座にデータとし

て置換される。

たぶん、世界でも唯一の技術。

ボクのいま着ているシースルー気味なワンピースパジャマもみんなにお披露目することになるけど、どうせバーチャルやし、ままえやろの精神だった。

というか、バーチャルなボクはやっぱ薄皮一枚でリアルなボクじゃないので、そんなに恥ずかしくない感じ。ボクもわりと女の子状態に慣れてしまったのかもしれない。

——ヒロちゃん。ピンクも入れてくれ。

ん。ピンクちゃんだ。ボクの配信を待っていてくれたのかな。

「もちろん。いいよ」

後方支援の命ちゃんがピンクちゃんをボクの枠に入れてくれた。

そう——バーチャルなピンクちゃんを。

おそらく人類最高峰の科学者集団『ホミニス』。その叡智を結集させて作られた、バーチャルヒロチューバーピンクちゃん誕生の瞬間だった。

たぶん、バーチャルなピンクちゃんは初めてだ。

ほどよくアニメ顔で、ストロベリーブロンドの髪の毛も、薄い金色のおめめも、幼げなかんばせも、チートクラスにかわいらしい。

というか、生の状態で普通に美少女だしな。

それをアニメ顔にアレンジしてもやっぱり美少女って感じ。

『バーチャルなピンク！』『毒ピンおまえだったのか』『かわヨ』『興奮しすぎてF5押しちまった』『これからVRイチャイチャするのかわ』『おまえら毒ピンがバーチャルになったくらいで騒ぎすぎ。ただの神回程度に興奮すんなよ』『ただの神回www』

「ピンクもおそろいになってみた」

「うん。かわいいかわいい」

バーチャルなピンクちゃんは、スワイプ画面上に映し出されている。

そんなピンクちゃんがそつとボクに重なる感じで、頭を傾かせてる。

すりすりしたいの？

「バーチャルだとすりすりできないのが、少し寂しいぞ」

ピンクちゃんを瓶詰して飼ってもいいかな。

あ、いかん。どこかの変態お姉さんみたいな考えがよぎってしまった。

それにしてもピンクちゃん。このごろは可愛さもいや増すばかり。今日、ピンクちゃんが配信につながってくれたのは僥倖かもしれない。

思考実験という意味ではピンクちゃんは随一。

科学者だからね。

「今日はみんなにヒロゾンビについて考えてもらいたいことがあります」

「ん。ヒロゾンビについてなら、ピンクも答えられることは答えるぞ」

『ヒロちゃんが知らないこと？』『考えてもらいたいことっていうと政治的なことかな』『我が国はヒロゾンビの人権には一層の配慮をしている』『赤い国さんが人権って言葉を使ってる……』『民主主義はどうでもいいが、ヒロゾンビをないがしろにして一斉にいなくなっちゃったら国終わるからね』

「あー、そんなに難しい話じゃないです。ヒロゾンビって無限に再生するよね」

『するみたいだね』『無限の証明はできないけどな』『まあ素粒子とかいう話だしな』『観察する限りでは再生するよな』

「ピンクもいろいろ実験してみたが、脳が無事なら脳につながった部分の欠損は再生するな」

「例えば、ボクがいま腕を切ったら、切った腕は残るし、また生えてくるよね。つまり腕が二本ある状態になるわけだよね」

『まあそうなるな』『まって、ヒロちゃんを頭部だけの状態にしたらヒロちゃんの身体もらえるの？』『先着何名様なの？』『すげえ変態がいやがる』『顔は——まあそうねえ』『ていうかヒロウイルスもゾンビウイルスと同じで脳と切り離されたら散逸するんじゃないか』『つま

り普通に腐るか』

「えーっと……この地球の資源は有限だからさ。毎日の食べるものにも苦労している人たちがいるよね」

「ん。ピンクもそう思う。ただ物理的に食料が足りていないのが餓えている原因ではなくて、貧困が原因だという論文がつい先日に表示されたな」

「貧困っていうのは物流の問題かもしれないけどさ。例えば無限の食料があれば世に溢れるわけだから誰も餓えなくなるよね」

「あー」ピンクちゃんが察した。

『あつ（察し）』『カーニバルだよ？』『ヒロちゃんがすごいこと言ってる』『だいたいわかった』『ひえええ』『考えたら当たり前のことだよな。なぜこんな簡単なことに気づかなかったのか』『おまえらなんのこと言ってるの？』

コメントのみんなもだいたいはわかったかな。

「この切った”腕”を食べたら食料問題って解決するよね」

『ゾンビーフっておいしいの？』『おいしいかおいしくないかが大事』『食糧問題は解決するかもしれないが、倫理的にヤバいだろww』『ヒロちゃん。カニバリズムを勧めるの巻』『栄養素とかの問題は大丈夫？』『いろいろ病気になったりしない？』

「あー、誤解しないでほしいのは、ボク自身はそんなこともできるよねって、ふと思いついちゃっただけです。今後、地球に優しい人とかが出てきたら、そんなことをする人もでてくるかなって」

『でてくるかなって、でてくるの？』『どう考えても少数派でしょ』『ピンク悩まし気な顔になる』『そろそろよ』『毒ピンとヒロちゃんが甘噛みしあうシーンを妄想した』

「ピンクとしては」ピンクちゃんが重々しく口を開く。「理論上は可能だろうと思う。おそらく人間が人肉を食べたときに生ずるようなプリオン異常も起こらない。ただ——人間の姿をしたものを食べるというのはちよつとだけ嫌な感じがするな」

「見た目の問題はあるかな。遺伝子レベルの忌避感とか」

『人肉はさすがにくだくねえ』『ソイレントなグリーンですな』『共喰

はいはいけないと思います（素直）』『オレは、ヒロちゃんのお肉ならちよつと食べてみたいかも』『オレくんにはオレのニクを喰わせてやろうなっ!』『アッー!』

「ちなみに、ヒロゾンビのみんななら知ってると思うけど、ある程度時間が経てば——訓練を積んでもいいけれど——痛みは意識的に除去できます」

「ふうむ。つまり、痛み of 総和を減らすべきだという話か。ヴィーガンという生き方がアナロジーとして展開できるな。彼らは動物より植物が痛みを感じるに足る証拠はないとかんがえているし、仮に植物も痛みを感じるにしろ、動物の程度よりは低いと考えている。そうなる、ヒロちゃんの言うヒロゾンビを食べる人たちは、さしづめゾンヴィーガンか」

うーむ。ピンクちゃんが天才すぎて怖い。

中真知事の造語をいともたやすく言い当ててしまった。

「そうだね。ゾンヴィーガンな人たちも増えるかなーって」

「動物も含めて、他者が苦しむかを考えられるのは人間特有の共感という能力だと思うが——、共感というのは時に傲慢な人間主義でもあるからな。ピンクは神様に懺悔して仔羊を食べるかな」

「神様に懺悔して?」

「人間がどうして食べなければならぬかは全宇宙を眺めてみても答えは出ないかもしれない。科学者は不可知の領域についてはわからないって答えるのが正しいって思うから」

『ピンクって、時々宗教的よな』『某宗教なんやなって』『わからないことにはわからないって答える素直なところがかわいいと思います』

ピンクちゃんは科学者として誠実だからな。

他者の『痛み』を分かるっていうのは他者のところがわかるということと同義だから、こころは見えない以上、そんなの勝手にわかったような口を利く時点で論外ってことなんだろう。

例えばヒロゾンビも、なかにはメチャクチャ痛がりな人がいるかもしれないわけだし。

「まあ、そういうわけで——ボクもね。たまにはアンケートでもとつ

てみようかなって」

そんなわけで、ちよつとばかり作為的だけど、アンケートをとります。

あなたはゾンヴィーガンをどう思いますか？

1、推進していくべき。

2、推進すべきではない。

3、そんなことよりおうどん食べたい！

ハザードレベル154

その結果は意外——。

いや、意外でもなんでもないけど。

アンケートの結果は、おうどん食べたいの圧勝だった。

ゾンヴァーガンは浸透しそうにないね。

やっぱり、どうしてもヒト型のを食べるという悪趣味さが第一に来るらしい。

共食いのイメージが先行しちやって、それだけでダメって人が多いのだろう。

いや、それよりも……。

中真知事はそんなことなかったけど、ゾンヴァーガンの思想の根底にあるのは理想論だ。

要するに誰も傷つかない世界を達成したい。そのために『あなた』にも優しくなれと強要している部分がある。その強要に対しての拒絶が『そんなことより』という気持ちになったんだろうな。

つまるところ——。

とどのつまり。

ボクもそう思っていたというわけです。

アンケートの選択肢は結果にすごく影響するからね。

ボクのなかのモヤッと感を表現すると、うどんが食べたくなくなってしまった！

とはいえ。

ボクが配信で言ったことはさっそく波紋を広げている。

匿名掲示板で、議論スレまでできているみたいだ。

ちよつと怖いけど、覗いてみよう。

【無限の】ヒロちゃんが提唱するゾンヴァーガンについて語ろう【食料？】

1：名もなきゾンビ

今日ヒロちゃんの配信で、ヒーロゾンビを利用した無限の食料調達方法が提示されたわけだけど

正直なところどう思う？ アンケート結果はぶっちぎりでおうどん食べたい派だったわけだけど。

15：名もなきゾンビ

そんなことよりおうどん食べたい！

19：名もなきゾンビ

うどんは食べたい。食べたいが……、うどんが無ければどうするでござるか。

ヒロちゃんがいなかったとき、拙者は虫を喰つてたでござる。

最初はつらかったでござるし、まずかったでござるが餓えるよりはマシでござった。

28：名もなきゾンビ

武士がいて草。

なに食つてたの？

33：名もなきゾンビ

メインは芋虫でござるな。一番食べかさがあるでござる。

コオロギとかバッタも炒めるといい感じでござる。

34：名もなきゾンビ

養殖すんの？

37：名もなきゾンビ

養殖するでござる。芋虫はミカン科の葉を食べるのでござるが、ちよūdいところ葉っぱがあつてござつてな。最初はてふてふになつてしまつたりと、食べごろがわからなかったでござるが案外に

うまくいっただでござる。

39：名もなきゾンビ

いまもしてるの？

55：名もなきゾンビ

実を言うと、普通の食事ができるようになった後も、芋虫は食べるようになってしまったでござる。ゾンヴィーガンも訓練次第で忌避感が薄れていくのではと思うのでござる。

65：名もなきゾンビ

オレはカラス食ってたけど、スズメはマジでお勧めできない

小さいと生物濃縮が起こりやすい

食中毒になりやすいし寄生虫の心配もあるから注意

カラスはいける

ハトもまあありだがカラスのほうが身がしまつててうまかったな

76：名もなきゾンビ

カラス推し兄貴は今でも狩猟してんの？

86：名もなきゾンビ

いやしてない

普通に鶏のほうがうまいし

金出して買えるならそっちのほうが圧倒的に楽

99：名もなきゾンビ

人間を喰うとかありえんだろ

山で遭難してソレしか食うもんじゃないとかだったらわかるけど

101：名もなきゾンビ

ヒロちゃんを食べる……もぐもぐペロペロごくくん

114：名もなきゾンビ

みんな野菜くえ野菜。

適当に畑を囲つとけば、ゾンビいても案外いけただろう。

120：名もなきゾンビ

野菜は場所にもよるな

都会のビルの屋上とかで菜園開いていたやつもいるっぽい

枯れたら終了だし怖すぎるしな

大規模なやつは郊外しか無理

おまえどこに住んでんの？

133：名もなきゾンビ

茨城ですが何か？

138：名もなきゾンビ

関東圏の佐賀ポジだからこそできること

149：名もなきゾンビ

おまえらが何喰ってるかとかどうでもいいからゾンヴィーガンについて語れよ

ヒーロゾンビが謎の力で無限に再生するなら、食料問題は一気に解決だろ。

ついでに言えば、ヒーロゾンビが適当にタービン回せばエネルギー問題も解決。

最高じゃないか。何を迷うことがある。

163：名もなきゾンビ

あー、食料問題だけでなく、例えばヒーロゾンビがゾンビーフ食べながら北斗の拳の発電機みたいなやつグルグル回せば、無限のエネルギーが得られるわけか。エコだな。

177：名もなきゾンビ

超能力使える人気者なら、ひとりでタービン回せるんじゃない？

185：名もなきゾンビ

人肉ポリポリしながら発電するヒロゾンビか

というか別に発電だけならノーマルゾンビを操ってもできるよな

どっちが効率いいかはわからんけど

190：名もなきゾンビ

どこかの事業者がそれ始めたら、ヒロゾンビの奴隷化が始まりそう

196：名もなきゾンビ

エネルギー問題とか食料問題はべつにして

食べることはプライベートな領域に属していると思うんだよな

そのプライベートな行為を強制されるのはいやだな

206：名もなきゾンビ

そんなことよりおうどん食べたい！

222：名もなきゾンビ

環境問題とかエネルギー問題とかより

うまいもん食べたいし、オレの食うもんに口出してくんなよって思うな

228：名もなきゾンビ

貧乏なやつはいままでもスーパーの半額惣菜とか買ってただろ

それと同じく、ゾンビーフがめっちゃくちや安い値段になったら買うやつもでてくるんじゃない

234：名もなきゾンビ

ゾンビーフの値段は安くなるだろうけど

政府のお偉いさんが、ゾンビーフを喰うように仕向けるのが怖いな
スーパーのレジ袋が有料化したみたいだに、錦の旗印かかてき

245：名もなきゾンビ

ヒロちゃんはたぶんそれを許さないとと思うけどな

253：名もなきゾンビ

ヒロちゃんは政治不介入だろ！

小学生だぞ

いい加減にしろ！

☆
||

ボクは政治不介入です。

なんか言われたらボクなりに答えるけどさ。

ゾンビ発電については、たぶんだけど、人気なヒロゾンビによる
タービンを回すほうがゾンビを操るより効率的だろうと思う。

ただ——ずっと、電気を作り続けるだけの仕事ってつらくない？

回り続ける巨大タービンをじっと観察しつづける仕事。

ハムスターじゃん。短時間だったらいいけど、何十年も続けるとか
絶対持たない。

ボクだったら半日で飽きる。

ただ人によっては、めっちゃくちゃ対価が高ければありって考える人
もいるかもしれない。

結局はお金の問題かな。

昨日は聞きそびれてしまったけど、福岡のお金事情はどうなってる
んだろう。

復活しているという話もあったし、昨日の料理を見る限りでは、流

通もそれなりに回復してそうではあった。もちろん、ボクに対してよくしてくれてる可能性はある。

いずれにしろ――。

ゾンビハザード前の世界であつてもゾンビハザード後の世界であつても。

搾取る側される側はでてくる。

客観的にはそうでなくても、主観的にそう考える人はでてくる。

完全に平等で公平な世界なんて無理だろうし、貧困を根絶できるのはわからない。ヒロゾンビが変なふうに扱われるとしても、できる限りそうならないように気をつけたいとは思うけれど、全てを引き受けることはできない。

つまり、放っておくしかない。

ボクは一石を投じるしかない。

とりあえず、ベッドの中で横ピースしながらスマホのカメラでパシャリ。

掲示板に張りつける。

333：夜月緋色

うどんいいよね！

実をいうと、博多ではラーメンだけじゃなくてうどんも有名みたいだよ。

かまかけて言って、ぶっかけうどんの汁なしみたいなのもあるみたい。

ともかく、みんなが何を食べようと自由だと思うし、ボク自身は誰かに強制することはしたくありません。

すぐに反応は返ってきた。

337：名もなきゾンビ

スケスケ下着スケベ

338：名もなきゾンビ

ヒロちゃんのシースルー姿キター！

339：名もなきゾンビ

え、うどんよりヒロちゃん食べたい

340：名もなきゾンビ

ちよつと待って、後ろにかすかに映ってるのって後輩ちゃんじゃね？

341：名もなきゾンビ

同衾キター！
百合の波動を感じる

342：名もなきゾンビ

うどんとかよりもそっちのほうが気になるんやなって
やっぱりみんなロリコンなんやなって

ううむ。みんながはしゃいでいるから少し恥ずかしくなってきたぞ。

布団にもぐりながら撮ってるから、上半身しか映ってないし、そんなにセンチティブでもないと思っただけど、ミスったかな。

「先輩。朝にスマホをポチポチするのはお勧めできませんよ」

ベッドの中で、命ちゃんがささやくように言う。

いつのまにか起きていたみたいだ。さっきまで気配なかったのに。
「昨日のことが気になってさ」

「ゾンヴァーガンですか」

「そう。ボクが提言しちやっただからね。みんなもいろいろ考えると
思っ」

「ヒロちゃんが言うっただけで、影響力はすさまじいと思います。い

ずれ聞かれたでしょうけど。スレッドで人喰いの話が出ていた以上、最終的に中真知事は自分の考えを開陳するつもりだったのでしょう」

雄大が教えてくれた人喰いの噂。

たぶんそれは中真知事のことだったのだろう。

野愛さんがそこまで徹底的に隠している様子もなかったから、そこには中真知事の考えも混ざってるのかもしれない。

いずれは——、結局は——。

ボクにも意見が求められるかな。たぶん、そうなっただろう。

命ちゃんが配信でゾンヴィーガンに対する意見を求めるのを、特に反対しなかったのは、ヒーロゾンビの総元締めであるボクに意見が投げかけられるからだ。先んじて問いかけていたほうが、柔らかく着地できる。そんな考えもあつたからだと思う。

「人間にとって食べるって行為は重要だからなあ」

「それもあるでしょうし、人類にとっては新しいことですからね」

「新しく経験する世界か。まあ悪いことばかりじゃないと思うけど」

「将来的には、ゾンヴィーガンが席捲するとしてもですか」

「アンケートの結果だとそうはならないと思うけどな」

「わかりませんよ。例えば千年も昔は食べなかつた食材をいまは食べているという例もあります」

「まあそうだね」

ただ千年も後になれば、ボクはいないだろうし——。

そのときのことはそのときの人たちが考えればいい。

パンタレイ。万物は流転するのだから。

ボクはしばらくベッドの中で遠い未来を夢想した。

いつのまにか眠くなって……うとうとと。

二度寝……。

と、そのときだった。

ボクのスマホが突然鳴った。

ちよつとびっくりしたけど、もう9時だ。そろそろ起きてもいい時間だ。

誰だろうと思ってみてみると、ぼっちさんだった。
ぼっちさん。

ボクの町の探索班のひとりで、20歳くらいの大学生。
縁あって探索班の人たちとは仲良くなってるから、電話番号くらいは交わしあっている。

ボクとしては身近な男友達って感じで気安くつきあえる感じ。
向こうとしてはボクが異性の女の子だって感じだろうから、イリーガルなあれこれを考えているかもしれないけどね。

「はい。緋色です」

『ヒロちゃん。助けて!』

「前にもこういうことがあったような……。いったいどうしたの?」

『僕は食べられてしまうかもしれない。このままじゃ……。』

食べられてしまうってタイムリーな話題だな。

とはいえ、ぼっちさんの場合、文字通りの意味ではないだろう。

「もしかして未宇ちゃんのこと?」

ぼっちさん絡みといったら未宇ちゃんのことくらいしか思い浮かばない。

杵島未宇ちゃん。10歳。

前は耳が聞こえないおとなしい子だったけど、なんやかんやあって、ヒイロゾンビになり今は耳が聞こえている。耳が聞こえないときに唯一手話ができただぼっちさんとなんやかんやあったらしく、要するにぼっちさんを慕っている。

つまり、ぼっちさんはボクの敵。リア充だった。

『もともとグイグイくる隠れ肉食系だとは思ってたんだけどね。最近
は特にひどいんだよ。いつのまにか僕のベッドにもぐりこんでくる
わ。ヒロちゃんの指輪の件とかあったよね。あれ見て、わたしも結婚
するとか言い出したりね』

やべえ。

なんだか聞いててイライラしてきたぞ。

「えっと、ボクにそれを言うてどうしようって言うの? ボクいま福岡だよ。というかまだ福岡来てから一日しか経ってないよ。せめて

出発する前に相談してくれたらよかったじゃん」

『覚醒したんだ』

「は？ 覚醒？ なに覚醒って」

『事の起こりは、未宇ちゃんが結婚したいって昨日言ってきたことがあるんだと思う』

「はあ。リア充自慢ですか」

『怒らないで聞いてよ。それでまあ、そのこと自体はうれしいことなだけでござ。ただ未宇ちゃんも小学生だし傷つけちゃいけないって思ってるね。僕には甲斐性がないから断つたんだよ』

うーむ。 甲斐性ね。

正直なところ今の経済状態で、甲斐性もないよねって思う。

我が町の経済事情はようやく物々交換ができるかなーっていうのと配食券が金銭と同じ価値を持ってきつつある段階だ。

それに、ぼっちさんってなんだかんだ言ってるあの町の英雄的側面がある探索班だしな。べつに甲斐性がないってわけではないだろう。

ただ、ぼっちさんの言わんとしていることもわかる。

未宇ちゃんの恋撃を躲すためにわざと自分が悪者になったのだろう。

『そしたら未宇ちゃんがね。ぼっちに甲斐性がなくてもわたしのヒモになればいいって……。わたしが食べさせてあげるからって言いだしたんだよ』

「小学生のヒモとか……」

『さげすんだ声出すのやめて』

「まあいいんじゃないですか。ぼっちさんを養うって言っても、しよせんは小学生だよ。むりむりのかたつむりってやつで」

『僕も最初はそう思っていたんだ。でもこの世界は“人気”を得れば、それが経済的にも社会的にも力になる。実をいうと今の段階でも、未宇ちゃんのほうが僕より力が強かったりしたんだけどね。もし、未宇ちゃんが人気ものになれば、その差が絶望的になる。もう身体的能力だと絶対に勝てなくなる。経済的にも社会的にも小学生の女の子に負けちゃうんだよ。いや負けるのはいいんだ。負けるのは。

男としてのプライドとかそういうことも考えないわけじゃないけどね。ただ——食べられそうで怖いってだけで』

めっちゃ早口でした。

まるでホラー映画で追い立てられる被害者みたいな感じで。

「配信か。まあそれもありませんじゃやないかな。スカイちゃんのような例もあるし、ピンクちゃんだって小学生だし。いまどき珍しくもないよ」

『そうだね。ただの小学生ヒロチューバーだったらそうかもしれない。でもそうじゃないんだよ。未宇ちゃんは覚醒してしまったんだ』

声の調子は肉食獣に追い立てられる草食動物みたいだった。

さすがにリア充でも、困ってるのは本当みたい。

「さつきからよく出てくる覚醒って何?」

電話の向こう側で、しばし沈黙が満ちる。

『ネコミミだよ』

「は?」

『だからネコミミだよ。わかるよね。ヒロちゃん』

「ネコミミってラノベとかでよくあるような頭頂部についているアレ!？」

『そうだよ』

なんだそりゃ。

自分の身体的特徴をいじれるヒロゾンビたちだけど、まさかネコミミモードになっているのは世界初じゃない? ていうか絶対人気でるわ。一日で100万人クラスのファンができて不思議じゃない。

おそろべし未宇ちゃん。

「ぼっちさん教えてくれてありがとう。恋人がネコミミになってよかったね」

『じゃなくて! 止めてくれないの?』

「配信して人気者になって、未宇ちゃんが離れていくようできみしいの?」

『ま、まあそういう感情もなくなはないけど』

「人気者になっても、未宇ちゃんはぼっちさんから離れていくことはないと思うけどね。それに人気のちからは今の世界だと経済的社会的なちからそのものなんですよ。それを例えばボクが言ってきたせいで奪っちゃったりしたらダメだと思う」

『それはわかるんだけど……』

「未宇ちゃんは無理やりって感じのタイプじゃないと思うけどな。ぼっちさんがダメって強く言わないからグイグイいつてるんじゃない？」

『そうかもしれないけど……』

『襲ってほしいんじゃないの。未宇ちゃんに』

『そ、そんなことないよ！ そんなことあるわけないじゃないか。小學生にそんな邪なところを抱くなんて。それに、ヒロちゃんに助けを求めるでしょ』

「ボクに助けをもとめるのが免罪符になってたりして」

『ヒロちゃん助けてよほんと』

「だったら、ぼっちさんも配信して人気者を目指してみるとか？ 未宇ちゃんと同じくらいの人気ものになれば力で拮抗するからいいんじゃない？」

『僕って陰キヤだからさ。たぶん配信で人気者になるのは難しいと思う』

「バーチャルなほうとかいろいろやりようはあると思うよ」

そもそもの話。ボクは未宇ちゃんをスポイルしたくない。

好きな人のために何かしたいって気持ちを踏みつけにするなんてできないからな。

ぼっちさんが怖がってるのはわかるけど、それはもうよく話をしろとしか言いようがない。

『バーチャルか……まあそれなら多少は可能性あるかな』

「バーチャルは生身じゃない分、恥ずかしさがまぎれたりもするね」

『わかったよ。ごめんね。こんなことで電話してきて』

「いいよ。ところで、未宇ちゃんのネコミミ配信っていつになりそう？」

正直なところ、あわてふためくぼっちさんより、そっちのほうが10倍くらい重要だった。

☆
||

というか、ボクは未宇ちゃんと電話を代わってもらい、その場でいまずぐ配信しようと促した。

もともと未宇ちゃんに否はなく、ボクの言葉が最後の一押しになったみたいで、それから一時間もしないうちに、記念すべき第一回かつ世界初のネコミミ配信が始まったのである。

「ミウです」

未宇ちゃんだった。

配信名はカタカナでミウ。なんとなくネコな感じの名前なのでマツチングしている。

そして、なんといっても生ネコミミはやはり素晴らしいものだった。

つややかな黒髪の上、頭頂部のあたりからわずかに白い毛の混じるネコミミ。

いやそれだけじゃない。

ぼっちさんは言わなかったけど、座位の状態で上半身を映した未宇ちゃんの背後のあたりにふりふりとネコしっぱまで映っていた。

コメントは狂喜乱舞の一言。

『キタキタきてんだろ！』『日本始まつてる』『古参を名乗れるように光の速さで登録した』『長い黒髪が綺麗だね。人間耳あるのかな？』

人間耳があると、いわゆる四つ耳状態になってしまう。

四つ耳については宗派がわかれていて、絶対ダメな人から、むしろそれがいい派までいろいろだ。

ボクはどちらかというところ容認派。それでもいいかなというタイプだ。

「えつと耳は大事。だから四つあるの。ダメ？」

『ダメじゃないテイジン』『むしろそれがいい』『人間耳あってもいいけ

どないほうが好きだな』『はっ？ 戦争かよ』『初配信でいきなり喧嘩するのやめろ』『しっぽもあるとか神かよ』

「配信をはじめたのは人気者になって金持ちになりたいからです」
『ストレートすぎるwwwwww50000』『50000だよ。受け取り』『うおおおお。久しぶりのスパチャ』『パパ活してるみたいで若干きがひけるなwww』『ネコミミの魔力』

うーん。すごいな。

未宇ちゃんってなんだか眠たげな感じで話すのが、舌つたらずふうでかわいらしいんだよな。

それとファンシーなネコミミモードがあわさり最強に見える。

あ、お金が入ってうれしそうに揺れるしっぽ。

そして、しっぽでハートマーク。

加速する欲望はついに危険な領域に突入する。

『おじさんがたくさんお金をいれてあげるからね』『金ってでも意味あるのかな？ まあ予算はたくさんあるけどさ』『徐々に物流回復してきてるからお金の価値も復権するだろ』『そんなことよりミウちゃんってこれからなにしていくのかな』

「ミウは音楽を聞くのが好きです。ラジオのDJさんがしてるみたいなことしたいです」

控え目に言ってかわいさが天元突破しているんだよな。

いつのまにか小悪魔化してリスナーをお豚様扱いしていた恵美ちゃん（スカイちゃん）とはちがって、君はこのまま純粋なままできてほしい。

とりあえず——ボクは『かわいい』と一言だけ述べて、50000円を投げた。

『ヒロちゃんも推しとるやんけ』『世界初のネコミミヒロチューバーだろうしな』『あつという間に登録数が増えていつてる』『この子も知り合いなのかな』

「ヒロちゃんは友達」

未宇ちゃんがうれしいことを言ってくれた。

そんなこんなでお昼ごろまで楽しみました。